異界の魔術士

ヘロー天気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界の魔術士

【Ｎコード】
Ｎ３５４３Ｅ

【作者名】
ヘロー天気

【あらすじ】
友達に誘われたキャンプに向う途中、バス停を一つ降り間違えた朔耶は、目的地まで歩いて行こうと山を登り始めたが、気が付くと知らない森の中に立っていた。

序話（前書き）

異世界召喚モノです。

序話

赤いジャケットを羽織った黒髪の小柄な少女が、傍らに置いた大荷物に背を預けながらポツンと立っている。

「まいったなぁ……」

朔耶（さくや）は人気の無い寂（さび）れたバス停留所でどうしたものかと独り立ち尽くしていた。ここまで乗ってきたバスは既に行ってしまった。停留所の錆びの浮いた時刻表を見ると、次の便は明日の朝８：００からになっている。

連休も明けようかという週末、友人に誘われた河原（かわら）でのキャンプに偶にはそういうのも良いかと大荷物を背負ってやって来たのだが、降りるバス停を一つ間違えてしまい、今の状況に至っている。

「連絡のしようも無いし……」

携帯は圏外なのでリュックの中。地図を取り出して現在地を割り出し、本来の目的地であるキャンプ場の方角を眺めると、見た目なだらかな小山がぐるりと周囲を囲んでいた。位置的には小山の向こう側にキャンプ場の河原がある。

日はあまり高くは無いものの、夕暮れにはまだ余裕がありそうに思えた。

「この山を越えれば、向こうに合流出来るかな？」

都合よくキャンプ場行きの車が通るとも思えず、幸い目の前の山は高さも丘のような程度で、大して険しくもなさそうだ。徒歩で山を越えて皆と合流した方が良いと判断した朔耶は、荷物を背負い直して歩き出した。

山の入り口にはハイキングコースらしき絵が描かれた看板が立っており、コースの一つは山を越えた向こう側のキャンプ場に繋がっている。ルートは簡単、ただ道なりに登って行けば良い。

「良かった、思った通りだった」

これで少なくとも夜までには到着出来る筈。降りるバス停を間違えた事は笑われそうだが、逆に話のネタにすればいい。朔耶はそんな事を思いながら、舗装（ほそう）されていないハイキングコースの山道を登り始める。

そうして二十分くらいは経過したかという頃。まだ余裕があると思っていた日暮れは予想より早く訪れ、木々の合間から見える空はすっかり茜色に染まっていた。

太陽はこの山の向こう側に沈んでいるので、完全に日が暮れる前に頂上まで登りきれば沈む夕日を二度見られるかもしれない。それはそれで面白そうだとペースを速める朔耶。急がなければ日が沈むと街灯もない山道は比喩（ひゆ）無しに真っ暗になる。

「？」

その時、ふわりとした気配が一瞬、朔耶の身体を包み込んだ。

暖かい空気の塊りにぶつかったような奇妙な感覚。ふと気付がつくと、目の前には草の壁。腰嵩(こしかさ)ほどもある蔓草(つるくさ)が行く手を阻み、立ち並ぶ木々の間には薄暗い闇が続いている。

元々雑草も多く、殆ど獣道(けものみち)のような細い道だったので余所見をした隙に道から外れてしまったのかと、引き返す為に振り返る。

「あれ……？」

何故かそこにも嵩高(かさたか)い草が茂っていた。

ハイキングコースの道が無い。自分が立っている場所を、ぐるりと背の高い草で囲まれている。奇妙な事に、自身が歩いて来たであろう筈の痕跡(こんせき)が何処にも無かった。

「……なに、これ」

朔耶はしばし呆然とし、状況を整理しようとするにつれて得体の知れない恐怖感が湧き上がる。自分は何処に居るのか？　ここは何処なのか？　何時の間にか遭難(そうなん)してしまったのだろうか？

「待て待て、落ち着け……まずは状況確認でしょ」

ゆっくり深く息を吐き、不安と驚きで悲鳴を上げ掛けている心を落ち着かせる。ざわざわと締め付けるような胸の感覚を解きほぐしながら、周囲の様子をゆっくり観察した。

呼吸は意識して深く、強張った肩の力を抜き、軽く膝を曲げて震えを吸収させる。

「……？」

何処からか水の流れる音が聞こえる。近くに沢でもあるのかもしれない。とりあえず川でも見つかれば、川沿いを辿って麓（ふもと）まで降りる事が出来る。突然知らない場所に立っていたという現象は不可解だが、町に降りられれば何とかなる。

そう判断した朔耶は水音のする方向を目指して歩き出した。

頭上を覆う枝葉（えだは）の間から差し込む陽光は、茜色（あかねいろ）から蒼暗（あおぐら）い夕闇（ゆうやみ）の色に変わり始めていた。

01話：精霊術士

身の丈程もある草を掻き分けて必死に走る。背後から迫リ来る追手への恐怖が竦み掛ける足に力を与える。防具の金具が擦れ合う音だろうか、複数の金属音が追跡者の存在を知らしめていた。

隣国ティルファの式典に出席した帰り道、国境の森の半ば辺りで突然現れた武装集団。安全な筈の自国フレグンス領内での襲撃。御者に内通者が居たらしく、馬車を護っていた近衛騎士団とは早々に引き離されてしまった。

森の奥深くまで馬車ごと連れ去られる最中、方向転換の為か馬車が速度を落とした隙に思い切って飛び降り、助けを求めて走り出した。

「ハァ……ハァ……ハァ……――精霊よ、風の加護を我が身に――」

効果の消えかかっていた『風の加護』を補強して身体を軽くすると、息をつく暇も無く再び走り出す。装飾が控えめとはいえ、裾の膨らんだドレスは森の中を移動する上で動き難い事この上ない。

腰まで伸びる軽いウェーブの掛かった金髪が時折小枝に絡まり、痛くて泣きそうになる。

彼女の名は『レティレスティア・フィリス・フォルティシス・フレグンス』精霊の国と呼ばれる列強四国一豊かな国、フレグンス王

国の第一王女である。
フレグンスでは魔法自体が余り盛んでは無いが、王族は代々高位の精霊術士の血筋を担(にな)っていた。

魔力を糧(かて)に特定の決められた手順を経て諸現象(しょげんしょう)を起こす『魔術』と異なり、精霊の力を借りる『精霊術』を扱うには、精霊と心を通わせる交感能力が必要不可欠であり、フレグンスの王族は総じてこの能力に優れていた。

レティレスティアも六才の頃から才能を発揮し始め、十六才にして準導師の称号を得る程の術士だった。知の都と称される隣国ティルファの式典に招待されたのも、優れた精霊術士としての論説(ろんせつ)を依頼されての、外交も兼ねた訪問だった。

ただ、今この時期に国外を訪問する事には父王や宰相も難色を示していた。ティルファを挟んで一つ隣にある国、グラントゥルモス帝国が不穏な動きを見せているという報告が各国の間諜からもたらされていたからだ。

『最近代替わりした若き皇帝は大陸の覇権(はけん)を狙っている』

そんな報告を裏付けるように、グラントゥルモスには連日多くの傭兵が集められ、商人国家キトから買い付けた大量の武器が城に搬入されていると噂されていた。

大小様々な国が存在するこのオルドリア大陸には、その中でも列強と呼ばれる国が四つ。他の殆どの国はその四つの国の衛星国家で、中立国としても規模は列強国の四分の一もあれば大きい方と言える。

そんな勢力情勢の中で、列強四国の内の一角であるグラントゥルモス帝国にとって大陸制覇に乗り出すのならばまず、軍事力的にも抑えておかなければならない相手が精霊の国フレグンスであった。

それというのも、列強四国の残り二国とは条件付きで戦う必要が無かったからだ。

『知の都ティルファ』はあらゆる学問や知識を集め、研究し、発表する事のみに固執（こしつ）した者が集まる学者国家である。

彼等は研究と学問さえ続けられれば誰が支配者になろうと興味は無いという者達ばかりの集団で、彼等の研究の成果は殆ど秘匿（ひとく）される事もなく、大抵の内容は直ぐに世界に向けて発表される。

その中には新たな兵器として武力に繋がるモノもあり、新兵器が考案された場合も直ぐに詳細が発表されるので、自国で開発したい国はそれをそのまま参考にする事が出来るなどの利があった。

民衆も学者気質で気難しさから扱い難い者が多く、無理に支配して統治下におくよりも現状のまま好きに研究をさせ、有用な研究を行う者が居れば投資して支援し、その成果を収穫していった方が有益であるからだ。

『商人国家キト』の方はもっと簡単で、世界中の商人が集まる貿易都市であり、この大陸の流通の中心であり、決して商売相手を選ばない事を理念に成り立つ商業国である。

穀物から武具、動物、珍品、植物、人材等、あらゆるモノが公平に取引される大陸の百貨店とも言える国。例え大陸全てが一国の領土となっても、商人たちは公平な取引さえ保障されればあらゆる物を取り揃える。

つまりは無理に支配せずとも、大陸の覇者となればキトは一地方の商業都市として自然に自国領として組み込めるのだ。

日の落ちた暗い森の中、執拗（しつよう）な追跡を振り切ろうと木々の間を右に左にと駆け抜けながら、レティレスティアは襲撃者の正体について考えていた。

『やはり、グラントゥルモスの手の者かしら……？』

かの国が近々大陸制覇に乗り出すという話しは既に近隣諸国も知る所となっており、各国とも兵力の増強に乗り出し、フレグンスも戦に備えて騎士団の整備を行っていた。だがまだ戦を開ける程の準備は自国も含めてどの国も整ってはいない。

『私を、暗殺ではなく態々攫って行こうとするのは……』

そこまで考えた時だった。

「っ！」

突然目の前が真っ白に染まり、視界を奪われて思わず立ち竦（すく）む。数瞬の後、それが何者かが向ける光である事に気付いた。

『回り込まれた！？』

咄嗟に身構えるが、攻撃用の精霊術は未だ実戦でなど使った事が無い。実戦自体これが始めてだった。緊張して息が上がる。

訓練の時は予め守護の結界を張り、怪我の無いよう万全の準備を整えてから炎の精霊と交感を始めていたのだが、森の中を散々走り回り、何度も『風の加護』を使って精神的にも肉体的にも疲労している今の状態で果たしてまともに闘えるのか。

レティレスティアは不安に押し潰されそうな心を鼓舞(こぶ)するように、優しくも厳しい精霊術の教師でもある母の教えを思い出す。

『精霊術は精霊と心で語り合う術、どんな時でも心を穏かに保ち、精霊に語りかけるのです。そうすれば必ず応えてくれますよ』

息を吐き、呼吸を整えて心を落ち着けると、レティレスティアは炎の精霊の力を発現する言葉を紡(つむ)ごうと息を吸った。

その時……。

「＊、＊＊＊～？」

「え？」

おずおずと、自分に光を向ける相手が聞き覚えの無い言葉で何かを話しかけて来た。まったく敵意の感じられない、寧(むし)ろ困惑の色を持ったその声に、吸い込んでいた息は疑問系の声で吐き出された。

０２話：光の魔術士

朔耶は驚きと戸惑いに一瞬呆けてその人物を見た。

すっかり日も暮れ、周囲は文字通り真っ暗になってしまい、荷物の中から取り出したＬＥＤライト式の懐中電灯で確保した僅かな視界の中。ようやく見つけた川岸（かわぎし）に添ってイザ歩き出そうとしたその時、ガサガサという物音に振り返ると木々の奥から物凄い勢いで飛び出してきた一人の少女。

外国人らしきその少女は、何故かドレスを纏っていた。

裾（すそ）の広がったスカートには彼方此方（あちこち）擦り切れた跡があり、所々破れていたが、高級品を感じさせるような金糸（きんし）の細かい刺繍（ししゅう）と控えめな装飾がＬＥＤライトの光を反射して少女の腰の辺りまでふわりと伸びる少し乱れた金髪と同じようにキラキラと輝く。

何故こんな場所でドレスの金髪少女？　と思考が固まったが、相手も此方を見て驚いたように固まっていた。まるで何処かのお姫様のような少女はしかし、直ぐにその表情が此方を警戒するように鋭くなった。

『ああ！　もしかして何時の間にか誰かの私有地に入り込んじゃってたとか……それもなんだかロイヤル～な外人さんのっ。でもって実は近くに城みたいな家が建っててココはその家の庭の一角だとか

！　げっ　あたし不法侵入者じゃん！？』

少女が此方を睨みながら何かを言おうと口を開き掛けた所で、これは急いで誤解を解かねばと考える。

『不可抗力、不思議現象、迷子……　うん、迷子が一番今の自分を現してる　……迷子だし』

「あ、あのぉ……」

「〇ｘ？」

ふっと少女の顔から警戒が薄れた。

「えっと、実は迷子になっちゃって……　決して怪しい者では無いですハイ」

「△＆〇ｘ＃@。？」

『う、言葉分からん……　どうしよう』

聞いた事の無い響きの言葉に、朔耶はどうしたものかと迷っていると、少女はすっと手を伸ばして朔耶おでこの辺りに指を添えた。

「え？　な、なに？」

「＜＋〇@△……――△＊〇＊◇＊――」

何事かを囁き掛け、言葉とも音とも付かないような声で何かを呟く。途端、朔耶の頭の中に水が流れ込んでくるような不思議な感覚が走った。

「わっ　うわっ　……何これ！？」

「『疎通の加護』を使いました、これを……」

少女はそう言って自分の指に填めていた指輪の一つを外すと、事態に付いて行けずアワアワしている朔耶の手をとって指に填める。

「私はフレグンス王国の第一王女、レティレスティア・フィリス・フォルティシス・フレグンスと申します。何処の国から参られた方かは存じませんが、魔術士殿、どうか私に力を御貸しください、賊に追われているのです」

「へ？　王女……？　魔術士……？　賊……？　って、この指輪」

「それは水の精霊の加護を永続させる指輪です、それを報酬として貴方に差し上げます。不躾な方法とは思いますが、何分緊急事態ですので……　どうかそれを持って魔術士殿のお力を！」

そこへレティレスティアを追ってきた集団が姿を現した。帷子を着込んで短剣を装備した男達が次々と木々の間から飛び出し、川岸に立ち竦む朔耶とレティレスティアを取り囲む。

その内の一人が、ターゲットであるフレグンスの姫の隣に立つ人物を見て一瞬怯んだ表情を見せた。

見慣れない服装と大荷物を背負っている姿から旅の者と推察出来るが、その人物の右手から白く眩しい光が放たれている。只の明かりにしては強すぎる光、眼も眩む様な強力なあの光は明らかに戦闘用のものだろうと警戒する。

「気をつけろ、魔術士がいるぞ」

男達は手にした短剣を構えて臨戦態勢を取った。魔術士が相手となると、程度の差はあれ通常の戦士の力では魔力によって具現化する力には及ばない。

随分と歳若い魔術士のようだが、これほど強力な光を保ち続けている事から、見た目と実力は比例しないと考える。

見た感じでは姫の家臣というわけでは無さそうだし、旅の魔術士が偶然この場に出くわしただけかもしれない。そう判断したこの集団のリーダーは、交渉を試みる。

「我々は無用な争いを好まない、魔術士殿、その女性を此方に渡して貰おう」

突然刃物を持った集団に取り囲まれてそんな事を言われた朔耶は、現状に理解が追いついていなかった。頭の中は既にパニック状態である。

「あんた達……　一体、なんなの？」

混乱する意識の中、ようやくそれだけ口にする。それは殆ど独り言を呟いたようなモノだったのだが、集団の男達はこれを誰何（すいか）と取り、律儀にも自分達の任務で与えられた権限の赦（ゆる）される範囲内でそれに応えた。

「我々はバルティア帝より直々に任を賜った者だ、所属と階級は言えない」

「バルティア帝！　ではやはり、貴方達はグラントゥルモスの手の者ですか」

「如何にも。レティレスティア姫、既に退路はありません。我々と共に来て頂こう」

王族に対する敬意を込めた命令口調でレティレスティアに投降を

促す集団のリーダーは、同時に彼女の隣で沈黙を続ける魔術士の動向に最大限の注意を払う。

魔術士には皆変わり者が多く、独善家で気難しいと聞く。この件に関与しないつもりならその方が有り難い。駄目押しとばかりに、如何に此方が有利な状態にあるかを説いてみた。

「いくら魔術士といえど、我等を相手に力を振るうには聊(いささ)か距離を詰められ過ぎている」

「……」

「少数とは言え我等もグラントゥルモスの精鋭、当然、対魔術戦闘の心得もある。そちらの魔術士殿は偶々この事態に巻き込まれたとお見受けするが、無益な争いは好まない様子」

未だ沈黙する朔耶に縋るような眼を向けるレティレスティアだったが、確かにこのまま巻き込めば国家間の争いに引きずり込む事になり兼ねないと思いなおす。

追っ手に追われ、森の中を独り彷徨った心細さからつい、目の前に現れた異国の魔術士に縋ってしまったが、よく見るとまだ歳若く、恐らくは見習いの身であろう見ず知らずの旅人を、これ以上危険な事態に巻き込む事は躊躇(ためら)われた。

「……分かりました、この方は私とは無関係です。害を加えない事を約束して下されば、大人しく投降しましょう」

「承知した。元より我々も事を荒立てるつもりは無かった、貴方の身柄を確保する事が目的ゆえ」

男が仲間の一人に合図すると、部下らしき者が鎖の付いた革の輪のようなモノを取り出してレティレスティアに近付く。その拘束具

を見たレティレスティアは一瞬、ビクリと肩を震わせて身を引くが、気丈に踏みとどまった。

「失礼かとは思いますが、貴方の逃亡と精霊術を封じる為の処置です、危害は加えません」

　枷を填められる事への不安と怒りと羞恥で顔を赤くするレティレスティアだったが、現状ではどうする事も出来ない。大人しく従おうと自ら一歩踏み出したその時。

「なんか……　ムカつく」

　低い呟きと共に、この辺り一帯を照らし出していた白い光が突然消えうせた。今まで眩しい程の光に眼が慣れていた為、一瞬にして視界が暗闇に閉ざされる。

　全員がぎょっとして呟きの主、先程から沈黙していた若い魔術士の方を振り返るが、その瞬間、眼も眩むような鋭い閃光が瞬いた。
　２００ルーメンのストロボフラッシュライトが激しく明滅する。さっきまでの光とは比べ物にならない光量は、文字通りそれを見た者の眼を眩ました。

「しまった！」『今まで沈黙していたように見えたのは詠唱を行っていたのか！』

　集団のリーダーは慌てて防御体制を取った。魔術士を前に視界を奪われて無防備になるなど致命的に過ぎる。少しでも魔術による攻撃の被害を抑えようと後ろに跳び退(すさ)って地に伏せた。

「こっち！」

「え！？」

その隙を逃さず、朔耶はレティレスティィアの腕を引いて走り出した。

０３話：逃走の果て

レティレスティアは、先程の光を直視していなかったので直ぐに視界が回復していた。自分の腕を引いて駆ける若き魔術士に自力で走れる事を告げ様と声を掛ける。

「あ、あのっ　魔術士殿！」

「あたしは朔耶、只の女子高生、魔術士とかそんなんじゃないよ」

ジョシコーセイとはなんだろう？　と、首を傾げるレティレスティアに、朔耶は何処か達観（たっかん）めいた微笑を向けながら尋ねた。

「ねえ、これって映画の撮影とかドッキリとかじゃないよねぇ？」

「？　あの……？　仰ってる意味がよく理解出来ないのですが……？」

途惑うレティレスティアに、朔耶は軽く手を振って曖昧（あいまい）な笑みを浮かべた。

朔耶は今し方まで頭の中に響いていた別の意識が語りかけるような声の事を思い出していた。

あの、頭の中に水が流れ込んで来るような感覚の後、突然言葉が理解できるようになり、さらに指輪を填められてから自分の意識に語り掛けられるような不思議な声に気が付いた。

タスケテ　タスケテ　コノコヲ　タスケテ

その声に意識を傾け、自分の身に何が起きたのか断片的に理解する事が出来た。明確に何があったと分かったのではなく『何と無く』な感じで意味が通じたような分かり方。

あらゆる場所、世界、時間にあらゆる姿で遍在する精霊。その精霊が『コノ子』、レティレスティアを危険から守りたがった。

精霊は付近の植物や動物の意識に語りかけて助けを求めたが、動物達は殺気だった人間を恐れて人の気配から逃げていった。精霊の語り掛けそのものには、対象を操れるような強制力は無いのだ。

植物達は彼女の行く手を遮らないよう道を開け、逆に彼女を追う者の行く手を阻んだが、遮る枝は断ち落とされ、絡みつく草は引き千切られ、若干の足止め程度にしかならなかった。

精霊は精霊の声に意識を向けられる存在で人間に対抗出来る存在を探した。そうして偶々近くの別世界に居た朔耶を感じ、彼女を『喚んだ』のだ。

朔耶にとってはいい迷惑な事この上ないだが。

そんな経緯（けいい）を意識の声から感じ取り、「何と無く」な感じて理解に及んでいる傍らで先程のレティレスティアと武装集団のやりとりがなされていたのだった。

こんな森の中でうら若き乙女を集団で追い回し、取り囲んでは武器で脅し、更にはなんだか鎖の付いた如何わしい首輪のような手枷

足枷を装着させようとした変態コスプレ集団。

朔耶には彼等の姿はそんな風に映った。

ついでに自分の事を『魔術士』等と呼んで警戒して見せつつも侮るような事を言われたような気がして、何と無くムっとなった。

少々負けん気は強かったりすると自覚している朔耶は、電車で痴漢にあったりすると、ウェルカムでエルボー&ニー＋ストンピングを漏れなくプレゼントするような気性持ちだ。

幼馴染からは『お前は負けん気が強いんじゃなくて凶暴なだけだ』と揶揄(やゆ)されたりしていたが……。

「なんだか知らないけど、あなたの事助けてって頼まれたし、ここ何処だか分かんないし、さっきの連中変態だし……とりあえず逃げよう？　きっと町まで行けば大丈夫だよ」

「は、はい……あの、頼まれたと仰いましたが……サクヤ殿は私の警護の依頼を？」

「ううん、分かんない。さっきの頭の中に水が入ってくるようなアレの後、誰かの声があなたを助けてーってずっと頭の中に響いてたの」

それを聞いてレティレスティアはハッとした表情になった。

「もしや、貴方は精霊の声を聞けるのですか？」

「精霊？」

あの意識の声の主は『精霊』というモノなのだろうかと、朔耶は『何と無く』理解した事柄にそんなような概念があったような気もするなぁと、かなり曖昧な肯定を返した。

その時、背後から金属の擦れる音と土を蹴る複数の足音が迫って来るのを感じて肩越しに振り返ると、さっきの集団が追いかけて来ている。

「うわ～まっずいなぁ……」

朔耶はキャンプ用に大荷物を背負っているので余りスピードが出せない。レティレスティアもドレスなどいう走る事には向かない格好だ。これでは直ぐに追いつかれてしまう。

何か護身用の道具は無かったかと、荷物の中身を思い浮かべていると、レティレスティアが会話の時のそれとは違った響きを持つ口調で言葉を紡いだ。

「――精霊よ、風の加護を我等に――」

途端、ふっと身体が軽くなる。

朔耶はレティレスティアが何かこの世界のファンタジ～な力を使ったのだろうと納得し、受け入れて深く考えない事にした。

「おお～身体が軽い軽い　裸で走ってるみたい！」

「え！　サクヤ殿は裸で外を御走りに……？」

「御走りになるわけないでしょっ　ものの例えよ例え」

そんな何処か余裕のある会話をしながら、森の中に比べればまだ走り易い川岸を直走る。元々アウトドア派な朔耶は運動神経も良い方で、体力も平均以上だし足もかなり速い。

『風の加護』で身体が軽くなり、荷物の重さも感じなくなった朔耶は、この開放感にも似た感覚に、この不可思議な現象に遭遇して

からの不安と恐怖と不快感で積り積もった鬱憤を開放するように全力で走った。

そんな朔耶に手を引かれたレティレスティアも、今まで経験した事の無いような速度に驚きながら走った。飛ぶような勢いで駆ける二人に、軽装とはいえ武具を装備した武装集団はどんどん引き離されていく。

「くそ……このままで逃げられるぞ」

「隊長っ　フレグンスの近衛騎士団です！」

「！っ　時間を掛けすぎたか……仕方が無い、任務は失敗だっ　戻るぞ！」

馬の蹄の音が近付いて来るのを聞いて姫の確保を断念した彼等は、号令に踵を返すと次々に森の中へ姿を消して行った。

追って来ていた集団が森の中に飛び込み、姿が見えなくなっても朔耶とレティレスティアはしばらく走り続けた。やがて岩場のような場所に出ると、そこでようやく一息ついて足を止めた。二人ともすっかり息が上がっている。

足元は落ち葉や枯れ木の積もっていた土の代わりに、ゴツゴツとした岩肌が続いている。森の中ではゆったりとした流れだった川も、渓谷のようなこの場所に来ると川幅が狭まった分、勢いも増しているようだ。

まだまだ森を抜けたわけではないが、流石に岩場の上までは木々も生えない。約五メートル四方程の開けた場所だった。

「ふぅ～～もう……フゥフゥ……追って……フゥフゥ……来ないかな？　ふぅ……」
「ハァハァ……私……ハァハァ……こんなに……ハァハァ……走ったのは……ハァハァ……初めてで……ハァハァ……」
息も絶え絶えといったお互いの様子に、思わず二人顔を見合わせて笑ってしまった。
朔耶は息継ぎと笑いに四苦八苦しながらどっかと座り込むと、背中のリュックからペットボトルを二本取り出し、上品にペタリと座り込んでいるレティレスティアに一本を渡した。
「これは？」
「水。　こうやって開ける」
蓋を捻って開ける所を見せると、中身のミネラルウォーターを一気に呷る。レティレスティアも初めて見る不思議な容器に眼を奪われながらも、回して開くという面白い蓋を開けて喉を潤した。
「それにしても、先程の閃光の魔術は見事でした。サクヤ殿の流派は光を操る術に長けているのですね」
「だから、魔法とかじゃないってば　コレはこういう道具なの、あとあたしの事は”朔耶”でいいよ」
「分かりましたサクヤ、では私の事もレティとお呼び下さい……助けて頂き、本当に有難う御座いました」
「いいよいいよ、一緒に逃げただけだしさ。なんかアイツ等ムカついたんだもん」
一休みして呼吸も落ち着き、さてこれからどうしようかと、朔耶はレティレスティアと話し合う。

「とりあえず森を抜けましょう、このまま川沿いを下って行けば途中で街道に出る筈ですので、そこから近くの村に向いましょう」
「村かぁ……やっぱり中世っぽいゲームみたいな雰囲気なのかなぁ」
「はい？」
「ううん、こっちの話しだから気にしないで」

パタパタと手を振って誤魔化しながら、朔耶は『何時帰れるのかなぁ～』等と考えていた。

レティレスティアを助ける為に精霊達は藁にも縋る想いで自分を『喚んだ』のならば、彼女を無事悪漢？　から逃がしたのだから早々に『還し』て欲しいモノだ、と。
どっか其処等中にいるらしい精霊達に『還せ～戻せ～』と念じて見たが、返答は無かった。

と、その時、森の中を移動する複数の明かりが木々間に見え、同時に馬の蹄の音が響いてきた。さっきの連中かと朔耶は慌てたが、レティレスティアが立ち上がってそれを制す。

「あれは近衛騎士団です！　大丈夫、味方です。　私の護衛をしていた者達です……良かった」

心底ほっとしたように顔を綻ばせるレティレスティアに、朔耶も胸を撫で下ろして荷物に凭れ掛かった。それからよっこらしょと立ち上がり、懐中電灯の光を向けて此方に気付くよう明滅させる。

さっきの眼眩ましに使ったような強烈な光では無いものの、８００メートル離れた場所からでも見える明るい光だ。直ぐに気付いたらしく、明かりの一つが列から離れて此方に向かって来るのが分か

った。他の明かりもその後ろに続く。

やがて一頭の馬が茂みから飛び出し、その背から白っぽい甲冑を着けた騎士らしき人物がマントを翻(ひるがえ)しながら飛び降りた。身長程もある銀色の槍を肩に乗せた精悍(せいかん)な顔立ちのその人物は、赤み掛かった金髪を靡かせながら此方に向かって走って来る。

「イーリス！」

レティレスティアがその騎士の名を呼んで駆け寄った。その声には安堵と喜びと憧れのような響きが混じっていた。朔耶は『おーおーなかなか格好いいじゃん、イケメンじゃん』とか思いながらその様子を眺めていたが――

「姫、御下がりを！」

その騎士は何故かレティレスティアの横を走り抜け、槍を構えて朔耶の方へと向かって来た。

突然の事で咄嗟に反応出来ず、呆然とそれを見送るレティレスティアは、イーリスがサクヤをあの集団の一味だと間違えている事に気付き、慌てて制止に入る。

「イーリス駄目！　その方はっ！　――精霊よ風の戒めを彼に――」

レティレスティアの放った『風の戒め』がイーリスを捕らえるのと、イーリスが朔耶に槍を突き出すのは同時だった。

「！？」

鋭く突き出された槍の穂先は朔耶の心臓を貫こうとしたが、『風の戒め』で急制動を掛けられた為に勢いを削がれて狙いが外れた。結果、槍は朔耶の肩を突き刺してその身体を弾き飛ばした。

「嘘ーーー！」

そのまま川の中へと落下した朔耶は、あっという間に流されて見えなくなった。

それを確認した騎士イーリスは、急所は外したものの危険は排除出来たと安堵する。攻撃の瞬間、自分の身体を急停止させた力はあの魔術士の防御魔法の類だろうと推測した。

「姫、ご無事でしたか」

「……なんと……いう事を……」

レティレスティアは呆然としてその場に立ち尽くしていた。その様子を訝しむようにイーリスは声を掛ける。

「姫？　何処か、お怪我でも……」

「貴方は、なんという事を！　あの方は……サクヤは私を助けてくれた恩人でしたのに！」

「……は？」

やがて後続の騎士たちが次々と現場に到着し、彼等がそこで見た光景は。大きな荷物に縋り付いて泣き崩れるレティレスティア姫と、川岸を見詰めながら立ち尽くす近衛騎士団長の姿。

姫とその婚約者候補でもある団長の奇妙な様子に、他の騎士達はただ首を傾げるのだった。

『ぎゃーー溺れる溺れる！　肩痛い！　水冷たい！　精霊ーーなんとかしろーー！』

真っ暗な川底を流されていた朔耶は、左肩の焼けるような痛みに遠くなりそうな意識を大騒ぎして繋ぎ止めていた。

その内自然と身体が水面に浮いて呼吸を確保する事が出来た。今着ているジャケットにはフロートが付いていたのを思い出す。とりあえず、これで溺れる心配は無くなった。

「……あ～荷物、置きっ放しだなぁ……肩、刺されたのかな……痛いし……水冷たいし……このまま死んじゃうのはやだなぁ……」

雨音のような川の流れる音に包まれ、夜空に瞬く沢山の星が流れていくのをぼんやり眺めながら、朔耶はゆっくりと意識を手放した。

『目が覚めたら夢オチでもいいから帰れてますように……』

「……あのイケメン……今度会ったら殴る……ムニャ……」

割と余裕があった。

０４話：アマガの村

ゆっくりと意識が浮上する。
暖かい陽射しが風と共に頬を撫で、心地良いまどろみの中でシーツの肌触りを全身で感じながら……

「……ん？　全身？」

はたと目を覚ます朔耶。　首を動かして自分の現状を確認する。
お日様の匂いがするシーツに包まり、ベッドに横たわっているようだ。　全裸で。
『もしかして本当に夢オチか』と思ったのも束の間、知らない天井と壁と窓とベッドと床と机と椅子と……要するに知らない部屋で目覚めたという事だ。　全裸で。

とりあえずムクリと身体を起こすと左肩にチクリと痛みが走った。
見ると包帯が巻いてある。誰かが手当てしてくれたらしい。

「そっか……　あたし刺されて川に落ちたんだっけ……」

あの時は色々あって気も昂っていた為、兎に角ビックリしたのと『あのイケメン殴る！』とか思っていたが。今更ながら、槍で刺されるなどという非日常的な体験に背筋が冷たくなった。下手をしたら死んでいたかもしれない。

「非日常的なのは未だに続いてるんだけどね……」

包帯の巻かれた肩をそっと擦りながら部屋を見渡して見る。木の匂いに満ちた素朴な感じの、山小屋のような雰囲気の部屋。窓の部分にはガラス等も無く、木の蓋をつっかえ棒で支えている。

そこから見える景色をぼ～っと眺めながら心地良い風と暖かい陽射しを浴びていると。扉の開くような木の軋む音がして、木製の床を歩く足音が近付いてきた。

そしてこの部屋の扉が開くと、そこには手に籠を持った青年が立っていた。栗色の髪に純朴な雰囲気の顔立ちで、布と毛皮を組み合わせて巻きつけたような格好をしている彼は、ベッドで身を起こしている朔耶に気付いて、驚いたように動きを止めた。

「……」
「……」

見詰め合う事しばらく。

「や、やぁ」
「ど……どうも」

青年は軽く手を上げて挨拶をし、朔耶は首を窄めるように会釈して応えた。はらりと朔耶の黒髪が揺れる。

「あーえっと……、気が付いたんだね　大丈夫？　どっか痛いとことか無い？」
「あ、はい、大丈夫です。　肩がちょっと痛いだけで……」

「そっか、良かった……。そのくらいの傷なら直ぐに治るよ、綺麗な傷口だったから痕も残らないと思う」

青年はそう言って笑うと、手に持っていた籠をテーブルの上に置いた。中にはパンらしき物体と果物にみえる実のようなモノが入っている。

「俺はクィス、この村で猟師をやってる　君は？」
「あたしは朔耶……。　ね、クィスが助けてくれたの？」
「う、うん　驚いたよ、水汲みに行ったら川岸に君が倒れててさ最初死んでるのかと思ったよ」

朔耶に名前で呼ばれたクィスは少し頬を赤らめながら答えた。

「そっか　ありがとね」

素っ裸でシーツ一枚に包まりながら、見ず知らずの男と一つ屋根の下で会話するという状況に、朔耶は実は内心かなりハラハラしていた。人の良さそうな青年とはいえ、こっちはケガを負ったか弱い乙女で身一つ。

最初の見詰め合いの時など『貞操の危機ですか？』等と、誰にともなしに心の中で呟いていた。しかし、少し話してみてクィスの人となりを感じとった朔耶は肩の力を抜いた。　彼は信頼出来る、と。

「……所で、あたしの服は？　……なんで、裸にされてるの？」

シーツを口元まで上げて顔を隠すような仕草をしながら、そうすると上に引っ張られた分、素足がシーツから出てしまい、うるうる

した瞳で上目遣いに睨むが、ちっとも怖くないばかりか寧ろ可愛いと思ってしまえる拗ねたような仕草……

というのを試してみた。

以前、萌えとやらを追求し始めた上の兄がちょっとやってみてくれと具体的に事細かく指示したポーズだったりする。

「あ、いやその！　ずぶ濡れだったし、それに怪我してたから！　運んだのは俺だけど脱がしたのはデイジーだからっ！　あっと、デイジーってのは幼馴染の女の子で……。　だ、だから大丈夫だよっ！　えっと君の服は、い、今は外に干してあるよ」

面白いくらいうろたえてくれたので朔耶は思わず噴き出してしまった。

キョトンとするクィスにからかった事を謝りながらこの場所について話を聞きくと、ここはフレグンス王国の王都から二つ程小国を跨いだ街外れにある狩猟村の一つで、アマガという村だそうだ。村の近くを流れる川をもう少し下れば海に出るらしい。

『どんだけ流されたんだ、あたしは……』

クィスが用意してくれた食事を済ませた頃、乾いた服を持ってきてくれたので早速下着とシャツだけでも身につける。上着のポケットの中身は入れておいたハンカチとか飴がそのままになっていた。

「他の荷物は……落ちて無かったよね？」

「俺がサクヤを見つけた時は回りには何もなかったよ？」

「そっか」『やっぱあのままかなぁ　レティが預かってくれてれば

いいけど』

流石にまだ身体がだるくてベッドから降りられそうになかったので、クィスに勧められるまま休ませて貰う事にした。

「怪我が治って元気になるまでゆっくり身体を休めると良いよ」

「有難うクィス、暫らくお世話になるね」

０５話：魔力石と石寄せ

翌日、朔耶はコトコトというクィスが廊下を歩く足音で目が覚めた。桶を鳴らす水の音も聞こえたので、水を汲みに出掛けていたのかもしれない。

「ん～～～～～……っっっ　はふぅ……」

朔耶はベッドの上で仰向けに転がったまま伸びをして徐に起き上がると、思いのほか身体が軽く感じられた。左肩の包帯はまだ外せないものの、少し歩き回れる程には回復したようだ。

素足にスニーカーを履いて部屋を出ると、そこは広いリビングになっていた。中央に長方形の大きな木のテーブルが置かれ、周りには背凭れの無い丸い木の椅子が三脚程並んでいる。

左側の壁には二階に昇る階段があって、反対側の右の壁には色々補強した跡のある丈夫そうな扉があった。恐らく玄関だろう。

そして正面には少し奥まった空間があって、そこにクィスの背中を見つけた。

近付いてみると、小部屋のような空間に調理用具らしい器具が並べられているパンや肉の切れ端が乗った台があり、嵩のある大きなお鍋に竈（かまど）のような石の台があった。どうやらキッチンのようだ。

「おはようクィス」

「やあ、おはようサクヤ。身体の方は大丈夫かい？」

クィスは何やら作業をしていて、鍋の下をごそごそしながら挨拶を返した。

「うん、大分回復したみたい。それ、何してるの？」

「石寄せだよ、毎度の事だけど新しい石を混ぜると調節が大変だよね」

「石寄せ？　……って何？」

「え？　石寄せは石寄せだけど……ああ、そうか、サクヤはこんな石竈とか分からないよね」

首を傾げる朔耶に、クィスは石竈の中から手の平サイズの石を一つ取り出して見せると朔耶の掌に乗せた。

「あ、ちょっと温かい」

魔力石というこの石には自然の魔力が含まれていて、一度火で炙ったり、水に浸けたりする事で特定の性質を属性という形で付与する事が出来る。

これを釜の入る部分に沢山敷き詰める事で湯を沸かしたり、或いは水属性の石で冷たい水を作ったりという使い方をするのだ。庶民の間ではかなり一般的なモノらしい。

ただ、暫らく使っていると魔力が無くなって普通の石に戻ってしまうので、定期的に入れ替えを行う必要がある。石の並べ方次第で効果にムラが出てしまう為、火属性の石の場合、最も効率的に熱を得られる位置に調整しなくてならない。

それが『石寄せ』と言われる庶民の家では何処でも当たり前に行われる生活作業だった。

「やっぱり貴族の家ともなると魔術式の竈を使ってるんだろうなぁ……あ、サクヤは厨房とかには入らないかな？」
「あたしだって偶には料理とかするわよ？　流石に竈とかは家に無いから使った事ないけど」
「へぇ、それは意外だなぁ。でも竈が無いなんて、最近の貴族の家の厨房は一体どんな風になってるんだろう？」

朔耶は『ん？』と首を傾げる。何か会話が噛み合っていない部分があるような違和感。

「ねえ、その貴族って……」

そうしてよくよく問い質してみると、クィスは朔耶の事を何処かの貴族の令嬢だと思っていたらしい。クィスだけではなく、この村の住人は皆そういう認識だと聞かされた朔耶はリアクションに困りながら理由を尋ねると――

「だって、サクヤの手とか肌とか全然荒れてなくて綺麗だし……髪もさらさらだし」

クィスの言葉に不覚にも赤くなる朔耶。

「それにその指輪、精霊石の付いた指輪なんて余程身分の高い人じゃなきゃ身に付けられないからね」

そう言われて自分の指に填まるレティレスティアの指輪を見た。
『水の精霊の加護を永続させる指輪』と彼女が言っていたのを思い出す。

「ああ～そっかぁ……レティって王女さまだもんなぁ」

そしてふと、思い至る事があって、恐る恐る尋ねてみる。

「ねぇ、あたしに親切にしてくれるのって……もしかしてそのせい？」

「それは、その……」

言い淀んだクィスを見て、朔耶は何故だか少しだけ哀しい気分になった。彼の親切の裏には、何かしら打算的なモノがあったのかもしれないと。

とはいえ、川岸に倒れていたらしい何処の誰とも知らない自分を助けて怪我の手当てや寝床や食事の世話までしてくれているのは紛れも無い事実。そこに感謝こそすれ不満を言える道理は無い。

「そっかぁ。ん～でもどうしよう、あたし別に貴族とかじゃなくて普通の庶民だし、大したお礼も出来そうに無いしなぁ」

「！っ　い、いいんだよそんな事気にしなくてもっ　第一サクヤの身分の事を色々言ってるのって村長の馬鹿息子だけだし、俺やディジー達はサクヤが何者かとか考えてないし、ただ……なんか訳ありなのかと思って……でも、あんまり聞いちゃ悪いし……」

「……ううん、ありがとねクィス。確かに訳ありといえば訳ありなんだけど、これは話しても仕方が無いからね」

自分はこの世界の人間ではなく、別の世界から精霊に喚ばれて来ました。

なんて『事実の訳』を話した所で、突拍子も無い話で誤魔化さなくてはならない程の事情があるとか誤解されそうだし、実際その話を事実として信じて貰えたとしても、どちらにしても気を使わせて

しまうだけになりそうな問題だ。

その後は、少し気まずい雰囲気が漂いながらも朝食を済ませ、クィスは猟に出掛ける為に夜まで家を空ける事を伝えた。

「こっちの戸棚に干し肉と果物があるから、お腹が空いたら適当に齧っててよ。水はこっちの瓶に溜めてあるからね。夕飯はデイジーが持って来てくれる手筈になってるから……デイジーもサクヤの事、何処かの令嬢だと思ってるからさ、アイツ遠慮して遊びに来ないんだ……だからサクヤさえ良ければ、話し相手になってくれないかな？」

「うん、その子も傷の手当てしてくれたんでしょ？　お礼も言わなくちゃね」

気まずげだった空気も普通に接する事で自然に流れ去り、弓を背負って出掛けるクィスを見送る。彼が戻るまでお留守番の間、朔耶はこの世界に来て初めて一人でゆっくり考える時間を得た。

「ふぅ……」

静かな空間、閑散とした広いリビングで丸椅子にぽつんと座る朔耶は、此方に来てからの事、これからの事等を考えながら、手の中で先程の魔力石を玩ぶ。あの時聞こえた精霊の声は、今は聞こえない。

勝手に喚ぶだけ喚んでおいて、その後はほったらかしとかどうよ？　ってな事を思いつつ、本当に自分はこれからどうすれば良いのだろうかと考える。怪我が治って、元気になっても行く宛てが無い。

何時までもクィスの温情に甘えるわけにも行かないだろう。レティレスティアの事を思い浮かべるが、相手は王女様だ。流石に面倒見てくれとか言って押し掛ける勇気は無かった。

「あ、でも事情を話せば住む所とか仕事とか工面してくれるかも……」

そのくらいはいいよね？　と誰にとも無く同意を求める。

この村を出た後はフレグンスの王都に向かい、そこでレティレスティアにちょこっと生活支援を頼む。と、当面の目標を定めた所で一つ重要な事に気づいた。

「先立つモノが無い……」

王都に行くにしても旅費が無い。何せ荷物の大半は大型リュックの中に仕舞ったままで、着の身着のまま流されて来た身だ。この世界の通貨の事も分からないし、旅の仕方にもあまり自信が無かった。

「野盗とか出そうだしなぁ……魔法とか精霊とかが居るんだから、魔物とかも居たりして……」

考えれば考えるほど自分の無事な姿が想像できない。思った以上にこの世界で非力な自分に愕然とした。旅をするにも生活をするにも、まずはこの世界の知識が必要だ。そしてお金。

自分の持ち物で売れそうなモノといえば、ポケットに入っていたハンカチくらいしかない。レティレスティアに貰った指輪は高価そうだが、これを外せば恐らく言葉が通じなくなる。それは恐怖だ。

「何か稼ぐ手立てを考えないとね、後はとにかく色々知る事からかな」

よし！　と椅子から立ち上がり、まずは厨房に入って石竈を覗き込んだ。朝方クィスと話した時に話題にした『石寄せ』の事を調べようと思いついたのだ。

何処かで働くにしても、女の身の自分に出来る真っ当な仕事といえば、飲食店のアルバイトとかその辺りになる。どの道、厨房に立つくらいは出来なければ、食事すら満足に作れない状態では話にならない。

石竈の中に敷き詰められた火属性の魔力石を観察すると、釜の入る隙間を空けて重なっている沢山の石の表面がぼんやりと赤く発光しているのが分かる。火でも焚いてるような熱を感じ、ストーブを眺めてる気分になった。

手に持っている石を見詰める。これ一つでは自分の体温が移ったかと思うくらいの、ちょっと温かい程度だが、沢山集めて並べる事で、それなりの熱を持つ仕組みになっているようだ。

厨房の隅の方に予備のモノらしき石が板で仕切られて積んである。属性の付いた石を直接重ねると属性の効果が高まるので、火属性の魔力石を保管する時は石同士が触れ合わないように仕切って保管しなくてはならない。

石はどれもそこら辺りに普通に落ちている石ころと見た目も形も変わりなく、川原によく落ちているような表面の滑らかな丸っこい石から、岩が砕けたようなゴツゴツしたモノまで色々だ。

「これは全部火属性の石かぁ……」

積んである石を幾つか手にとって、くっつけたり離したりしてみると確かに、なんとなく温度が変化したような気がする程度の感覚はあった。

「あっ」

と、うっかり手を滑らせて一つ床に落としてしまった。平べったい感じのガサガサした石が、真ん中辺りから砕けて割れた。

「あちゃ～」

やってしまった……と砕けた石を拾い上げようとして、脳裏に閃くモノがあった。

三つに割れたその石は、細長い二等辺三角形のような鋭利な形になっており、それを見て何と無くダイヤ等の宝石のカッティングを思い出したのだ。宝石の性質に合わせてその石が最も美しく映えるように削り出す技術。

『石寄せ』は並べ方次第で魔力石の効果にムラが出るからこその調整技術。何故並べ方で効果にムラが出るのか、その部分がボンヤリと引っかかる。

この世界の人間ならば特に疑問にも思わない、思ってもそれを追求する理由が無いので深く調べようとも思わない。『人は何故二本足で歩くのか?』と同じくらい、それは当たり前の事なので、精々『良い並べ方』を経験で覚える程度だ。

だが、朔耶はこの世界の人々とは文字通り次元の違う情報が氾濫する世界の現代人である。

ついでに幼馴染や兄弟の影響で機械弄りや物造りは好きな方で、どちらかと言えば理系タイプだ。

運動が得意で学業の成績は並み以下だが兄の趣味に付き合って廃品のテレビやラジオを分解したり、弟と一緒に自転車や電動スクーターを改造したり、幼馴染が趣味で集めてるエアガンを弄ったりと、およそ同年代の女の子達とは少々毛色の違った遊びをしていた。

その為か『魔力石の組み合わせ』という未知なるシステムへの知的好奇心と改造魂と創作意欲が刺激される。

朔耶は砕けた石の破片と予備の石を幾つか手に抱えると、テーブルに運んで割ったり削ったりしながら、何をどんな風にどうすればどうなるのかと、細かく分類しながら効果の検証を始めた。

夢中になって調べている内に、気が付くと外はすっかり夕焼け色に染まり、明かりの無い部屋の中は作業をしていたテーブル付近以外は薄暗くなっていた。

「おっとと、すっかり夢中になってたよ」

朔耶は天井から吊るされたランプに火を灯す為、作ったばかりの試作魔力石ライターを使ってみた。尖った石の先端に小さな火が生まれ、それを種火にランプを灯す。予想通りの結果を得られて満足気な表情を浮かべながら、朔耶は研究成果を振り返った。

予備の石とは別に薪も積まれていたので、そこから木材を適当に拝借。

戸棚の中を漁って見つけた鑿の類の工具を使い、削り出した石を固定する型を作ったりと夢中になると行動がかなり大胆になってしまう悪癖？　を発露した朔耶だったが。その成果は中々のモノだった。

特定の形に削り出し、整然とした配列で組み合わせてやる事で、石に含まれる魔力の動きを比較的自由にコントロール出来る所まで解明出来ていた。そうしてまず作ってみたのがこの試作ライターだ。

薪を材料に型を作り、そこに削り出した石を嵌め込んで合わせただけのシンプルな構造だが、火打ち石を使うよりもずっと簡単で楽に火を灯せる道具である。と、そこまで考えてふと思い浮かんだ。

「う～ん、作ってから気が付いたけど……もしかしてこのくらいの事はみんな知ってる当たり前の事だったりして……」

自分の世界には無い『魔力石』という素材だが、この世界では特に珍しくも無い何処にでも転がってる石ころなわけで、夢中になって色々実験をしてみたものの、此方の世界にも研究者くらいは当然居る事だろう。

もしや自分の世界でいう所の小学生レベルとか、下手したら幼稚園レベルで常識になっているような事の解明に半日も費やして必死になっていたのでは？　と不安と恥ずかしさが込み上げて来た。

「……まあ、いいじゃん。あたしこっちの常識とか知らないし～」

等と自身の猜疑心に言い訳しつつ、とりあえず散らかったテーブルを片付けようとした所でコンコンッと、この家のごつい扉が控えめにノックされる。

『あ、クィスの言ってたデイジーって子かな？』

「はいは～い」

丁度お腹も空いていた朔耶は、軽く返事をしながら扉に向かった。

０６話：魔術と技術

薄皮に野菜と肉を挟んで串で留めた料理にパンとお茶を入れたバスケットを持ってクィスの家の前までやって来たデイジーは、僅かに緊張した面持ちで扉をノックする。

「はいは～い」

直ぐに軽快な返事があって扉が開かれると、黒髪に黒い瞳を持った異国の少女が出迎えてくれた。先日、クィスが川で見つけた恐らくはとても身分の高い人。

肩に刺傷と思われる怪我を負っていて、身体はすっかり冷え切っていたが彼女の纏っていた異国の衣服は水の中に浸かっていて尚、彼女の体温を維持していた。

傷の手当てをする為クィスを部屋から追い出し、脱がした服の下に身につけていた下着も一目で高貴な人達が身につける高級品だと分かる光沢があり、凄くすべすべした手触りの生地だった。

同性のデイジーから見ても信じられないくらい、とても綺麗な朔耶の肌には目を奪われた程だ。

「あ、あの……デイジーといいます。サクヤ様にお食事を……」

「様ぁっ！？」

「は、はいぃ！？」

素っ頓狂な声を上げる朔耶にデイジーは何か粗相をしてしまったかと怯えたが――

「あっはっはっ　様はやめようよ様は、朔耶でいいよ。あたしは別にエライ人とかじゃないんだから、ね？」

「あ、えと……はい」

デイジーの肩をぽんぽん叩きながら笑う朔耶に、早速呆然としていたデイジーは緊張が解けていくのを感じた。

くうぅぅ……

「……」

「……」

朔耶のお腹が鳴いた。

「あ、あはははは。お昼食べてなかったから……」

「クスクス……お腹空いてたんですね、直ぐ用意しますね」

完全にデイジーの緊張にトドメをさした朔耶の空腹を癒すため、さっそくバスケットの中身を取り出そうとして、彼女はテーブルの惨状に目を瞠る。何の作業をしていたのか、小石や木片が鑿などの道具と一緒に散乱していた。

「ちょっと待ってね、こっちに寄せるから」

と、朔耶がテーブルの端に細々した物を寄せて空けた隙間にデイジーは夕飯を並べて行った。

一緒に食べようと誘われたものの既に家で済ませて来ていたデイジーは申し訳無さそうにその事を伝えたが、それならお茶だけでもと昼間手を付けられなかった干し肉や果物を持ち出してお茶まで用意され、恐縮しながら夕飯に同席する事を受け入れるデイジー。

美味しい美味しいと料理を褒めながらパク付く朔耶に、デイジーは照れながら材料や作り方を教えたり、朔耶の傷の具合を尋ねて後日また薬と包帯の換えを持ってくる事を伝えたりという穏かなひとときの中、二人は自然に打ち解けていった。

「へぇ～デイジーのお父さんは大工さんなのかぁ～」
「といっても、ちゃんとした職人さんじゃないんですけどね」
「日曜大工みたいなもんか……」
「ニチヨウ？」
「ああ、えっと趣味とかの範囲で時間の空いた日にそういう作業をする人の事ね」

デイジーとお喋りをしながら、朔耶は意味の通じる言葉と通じない言葉の関係に或る程度の推論を立てていた。概念も含めてこちらに無いもので代用の効かないモノは言葉の響きのみが伝わり、同じ様な意味を持つ事柄ならその意味がきちんと伝わる。

先程の会話なら此方には『大工』は存在するが『日曜日』が存在しない。なので『日曜大工』というそれに似た概念はあっても、そのままには伝わらず、言葉が分割されて伝わる仕組みだ。

「ふ～～～む……」
「？　どうかしました？」

腕を組んで考え込む朔耶に小首を傾げるデイジー。その仕草が可

愛かったのか、表情を崩した朔耶はデイジーのフワフワした髪を撫でながら言った。

「ね、デイジーに頼みたい事があるんだけど、いい？」

「え、あ、あたしに出来る事なら……」

お姉さんのような雰囲気を持つ朔耶に頭を撫でられてドギマギしながら答えると、朔耶は一言礼を言って何か思案するように考え込み、それから沢山の色々な質問を重ねて来た。

それは子供でも知っているような事から、大人に聞かなければちょっと分からないような事まで様々な内容だった。

デイジーが不思議そうな顔を見せると、朔耶は『あたし世間知らずだから』と笑って答えた。

それを聞いたデイジーは、やっぱりサクヤは何処かの貴族のお嬢様かもしれないと思ったが、すっかり打ち解けていたのでそれで態度を変える事はなかった。

そうして質疑応答が繰り返される内に、質問の内容が魔術に関する事にまで至ったが、流石に魔法に関する事になるとそれを嗜んでいる人達以外の、一般の人々には理解の範疇を超える。

朔耶はその答えからもこの世界に関する『常識』を読み取って行く。そして、その一般の人々にも認知されている魔法に関する内容もある程度は把握出来た。

この世界の所謂『魔法』という存在は大まかに分けて二種類。

『精霊術』と『魔術』。

レティレスティアが使っていたような『精霊』に力を借りて諸現象を起こすのが『精霊術』で、これは精霊との交感能力という才能

がなければ修得する事は不可能とされている。
もう一つの『魔術』の方はもう少し敷居が低く、個人差による魔力の大小も関係するものの、習えば誰でも修得する事が出来る技術の一つとされている。

精霊術が精霊との交感という、諸現象を起こす為の工程が一つに絞られている事に対し、魔術の方は使い手其々が独自のやり方を持ってそれらを具現化する。
十人術士がいれば十通りのやり方があるというわけだ。ぶっちゃけた話、統一されていない。

そして、基本的に独自のやり方を持って一つの術を創り上げる事の出来た使い手は開祖として『魔術師』と呼ばれる。
『魔術師』として認められた者は自分の流派の魔術道場を開いたり、弟子を取る権限を申請した国や領主から与えられ、その流派が流行れば『魔術師』としての高名が上がり、優れた流派の魔術師は王宮に召抱えられる場合もある。
一つの流派の魔術士が一人前となり、各地にその流派を伝える為に『魔導師』となって諸国を旅する事も珍しく無い。

魔術の行使には主に詠唱型と触媒型があり、詠唱型は特定の言葉に魔力を篭めた『力或る言葉』の組み合わせで様々な現象を具現化させる。集中力とイメージの力が重要な要素となり、個人の才能がはっきり現れる方法だ。

触媒型は『力或る言葉』を文字に置き換えたモノで、木簡や羊皮紙、武具などに刻んで効果を得る方法。詠唱型と比べると予め用意しておいたモノを使って長くその効果を得られるという使い勝手が良い一方、それ以外は詠唱型に効力の高さでも柔軟性でも劣る。

詠唱型は攻撃魔法等の戦闘用に優れた魔術で、触媒型は主にランプや暖炉や竈（かまど）の火に使う等、生活密着型の魔術と言える。ただし、魔術式のランプや暖炉、竈（かまど）などは相応の高い身分の人々や、お金持ちの豪商でもなければ手にする事も出来ない。

「あたし達一般の庶民が知ってるのはこのくらいです」

「なるほど～よく分かったわ、ありがとねデイジー」

他にもまだまだ聞きたい事は山程あったのだが、外もすっかり暗くなっていて随分遅くまで引き止めてしまっている。今の所、特に聞きたかった部分を思いの他しっかりした情報で聞けたので概ね満足出来る収穫だった。

夕飯の後片付けを始めたデイジーを手伝いながら情報を反芻しつつ、頭の中でそれらを纏めて行く。

「そうすると……魔力石を使った道具は触媒型の魔術って事になるのかな？」

「え？　魔力石ですか？　それは無いですよ」

朔耶が呟くと、キョトンとしたデイジーがそれを否定した。あれは只の石の性質による自然な反応を利用しただけの道具で『魔力石の現象を魔術だなんてとんでも無い』と言う。

「魔術ってもっと凄いんですよ～？　街で見た事ありますけど、こ～んな小さなランプに油も火打ちも使わずに火が付くんですよ」

そう言ってデイジーは両手でその時見たランプの大きさを形作り、魔術式の道具の凄さを説明した。

「う～ん、でも魔力石でもお鍋掛けて料理作ったりは出来るじゃな

い？」

「そりゃあ沢山集めればお湯を沸かしたりは出来ますけど、魔力石だと熱は起こせても火は起こせないですからね」

「え？　……そうなの？」

「はい、そうですよ？　あ、でも……」

僅かに神妙な顔付きになった朔耶に気付かず、デイジーは思い出し笑いをしながら、以前街で見た面白い見世物の事を話して聞かせた。

「お金の持ちの好事家の人とかが魔力石で魔術と同じ効果を得られる発明とか言って、大きな馬車の荷台に鉄の箱を載せて、そこに一杯に詰め込んだ魔力石から細い鉄の芯を何本も伸ばして、その先を束ねてそこに小さな火を灯すって仕掛けでした」

赤く焼けた鉄芯が焼き切れる直前に、ちらっと火が灯って歓声と笑いが巻き起こったのだと言う。

「魔力石で火を起こそうと思ったらそれこそ小屋一杯に火属性の石を集めないと無理ですし、そんなに沢山の石を集めたら火を起こす前に熱で小屋が燃えちゃいますしね」

ただ単に大量に集めても石寄せで調整しないと熱の集まりが分散してしまうし、石寄せで調整出来るのも石竈の中のような狭い範囲内が精々なので、最も温度が高くなる塊りを組んで、それを幾つも並べて近くに燃え易い物があれば火が付く事もあるという具合。

つまり火は起こせなくは無いが、それは火を起こすというより起きてしまうのであって、魔術式のように任意で火を灯せるような繊細なコントロールが出来る訳ではないという事だった。

そこまでを説明で理解した朔耶はじっと黙って考えた後、徐に口を開く。

「……デイジー、ちょっとコレを見てもらえる？」

「なんですか？」

朔耶は先程の試作魔力石ライターを取り出し、火を灯した。

「え、えええええ！　これって魔術式のランプですか！　凄い……こんな小さいの初めて見ました」

「ううん、これは魔力石を使った道具だよ。昼間あたしが作ったんだけど……」

「……へ？　サクヤさんが、作ったんですか？」

「うん」

デイジーは信じられないという表情で朔耶の顔と小さな火を灯すライターを交互に見詰めると、朔耶が半ば予想していた通りの言葉を呟いた。

「サクヤさんは、魔術士さんだったんですか……？」

07話：クィスの選択

折角打ち解けたのにまた恐縮し始めるデイジーを宥めながら自分は魔術士なんて大層なモノでは無いと説明する朔耶は、この世界の技術とそれを扱う者、技術によって引き起こされる現象とそれに対する常識感との関係を朧気ながら掴み始めていた。

「つまり、魔力石をこんな風に使う人は居ないって事？」

「はい、普通は詠唱を行うか、触媒型なら中に『力或る言葉』が刻まれた何かが入ってますから」

「それって魔力石には刻まないの？」

「よく分かりませんけど、無理なんだそうです……。石の持つ魔力が『力或る言葉』の力を変質させてしまうとか」

触媒型の魔術は大抵のモノになら呪文を刻み込む事が出来るので、武器や防具等に刻んで硬度を高めたり、丈夫にしたりするのだが、魔力石に刻むと石に含まれる魔力が刻まれた呪文によって変質してしまい、その影響で呪文に篭められた効果を現す為の工程が乱れてしまう。

その結果、なんの効果も得られずに呪文は効力を失って消えるか、出鱈目な工程によって暴走した魔力が石を破壊してしまうか、どちらにしても魔力石はその性質上、魔術と相性が良いように見えて実は最も魔術の触媒としては使えないのだそうだ。

「そっか……じゃあもしかして、これって凄く珍しいのかなぁ」
「……本当に、そのランプは魔力石で点いてるんですか？」

本当は自分はからかわれているのではないかと、訝しげに、だが珍しそうに朔耶の手元に視線を向けるデイジーに『これはランプじゃなくてライターだよ』と道具の名前を教えつつ、朔耶はライターの中を開いて見せてやる。

デイジーには知るよしも無かったが、細かく削り出された様々な形の魔力石を整然と並べて魔力の流れを制御するソレは、朔耶の世界の電気製品の中にある基板、電気回路そのものだった。

デイジーを送り出し、テーブルの上の散らかった道具を片付けながら、朔耶は彼女から聞いた話に期待を膨らませていた。

「売れる！　これなら売れるじゃんっ　やって行けそうだよあたし！」

この世界ではまだ確立されていない魔力石を使った技術による道具の発明。魔術式の道具に聞くような高価な品とまでは行かなくとも、材料はそこらに落ちてる石と適当な材木、原価はゼロに等しい。

『適当に生活に便利な道具を作って安価で売れば儲かるじゃん』

と、朔耶は割と軽い気持ちで考えていた。

狩猟を終えたクィスは日も暮れようかという頃に街に立ち寄り、獲った獲物の半分を売りに出して換金を済ませ、残りを肉塊に処理して袋に詰めると、帰宅の準備を整えた。換金して手に入れたお金は日用品や調味料等の購入に充てるのだ。

客寄せの声が飛び交う賑やかな露店市場を歩いていたクィスは、露店の一つに目をとめた。女性が身を飾る小物を売っている店で、蝶を模った髪飾りに魔力石の結晶が填め込んである手作りの品だ。

貴族達が身につける装飾品には同じ魔力石でも宝石と呼ばれて非常に高値で取引される輝石や精霊石のような希少石が使われる。

一介の狩人であるクィスには縁の無い煌びやかな世界だが、その代わり庶民には庶民の飾り方があって、そこらに転がっている魔力石の中に偶に混じっている結晶化した部分を削り出し、これを宝石代わりに使うのだ。

本物の宝石と比べると幾分くすんだ色合いは、ともすれば安っぽくも感じられるが、上手く透明度の高い部分を組み合わせて工夫する事で、見事な装飾を作り出す職人達もいる。

そういう腕のある職人は貴族達に召抱えられて本物の宝石を使った装飾品作りを依頼されたりするのだ。

「兄さん、気に入ったのがあったら彼女に一つどうだい？」

露店の主、妙齢の女性がシナをつくりながら切れ長の瞳で視線を流し向けて来る。クィスは苦笑しながら首を振って答えた。

「はは、残念ながら彼女とか居ないんだ　女の子が飾り立てるような裕福な村でも無いしね」
「そうかい？　その割りには熱心に見てたじゃないか、誰か思い浮かべてたんじゃないのかい？」

露店の主は特に食い下がるという雰囲気でも無く、若いクィスをからかうように紅の映える口の端を上げて見せた。

「どうだかね」

笑いながら答えたクィスは、内心に浮んだサクヤの姿に心の中でかぶりを振った。考えてみれば年頃の女の子と同居している状態なのだ、それなりに意識する事もあるだろう。しかしそれはサクヤに対する恋慕のような感情とは違う筈だ、と。

それに、本人は否定していたが彼女は相当に身分の高い、もしかしたら王族と所縁のある者かもしれないのだ。
朝の会話の中で、サクヤはぽろっと『レティって王女さまだもんなぁ』等と呟いていたが『レティ』という名と『王女様』といえば、この国の人なら誰もが知っている若き精霊術士の姫君、王女レティレスティィア様を思い浮かべる。
王族の姫君を愛称らしき名で呼べる人物。そんな御仁と、貧しい村の猟師である自分、推して知るべしである。

露店主との会話を切り上げ、市場の通りを抜けて街の門が見える大通りに出ると、今日街に寄ったもう一つの目的を果たしに門の傍に建つ騎士の詰め所に向かった。サクヤの身元について調べる目的。

昨日、サクヤの意識が戻った事を村長に報告に行った時、あの馬鹿息子の進言でもあったのか、サクヤの身元や立場を調べてその内

容如何で村の安全と繁栄の為に処遇を決めよう等と言ってきた。

どうも村長の息子は小さい頃、王都のとある貴族が優秀な人材を育成する目的で設立したという平民学校に通っていた影響からか、やたら貴族ぶった態度で策士を気取る所があり、何かといえば『ここは策を弄しておこう』とか『既に手は打ってある』とか言いたがる。

大抵『既に打ってある』手は事後承諾だし『弄した策』は的外れも良いとこな結果に導く。そんな場合も『流れ移ろい行く世は中々侭ならぬものなのだよ』等と訳の分からない事を言って誤魔化す。

見栄を張りたがるあの馬鹿息子が、精霊石の指輪なんてモノを身につけた高貴な御仁であろうサクヤの身柄を村長宅で引き受けなかったのは、何か問題があった際に責任を負わされないよう逃げたのだ。

朝の報告で王族所縁の者かもしれない事を伝えておいたので下手に近付くような真似はしないと思うが、サクヤの親しみ易い美しさと人当たりの良さを知れば、村の娘に片端から色目を使うあの馬鹿息子の事、間違いなくサクヤに言い寄って取り入ろうとするに違いない。

そんな事をつらつらと考えながら騎士の詰め所に近付いた時、中から話し声が聞こえて来た。

「黒髪に黒い瞳で歳の頃は十五、六か……外大陸辺りから来たのかな？　異国の装いってのはどんな感じなんだ？」

「なんでも舞踏会とかでお偉方が着るコートみたいな造りで、鮮やかな光沢のある赤い服を纏ってるらしい」

「コート？　女じゃないのか？」

「女で合ってるぞ、一人旅なら男装をしててもおかしくは無いだろう？　聊か目立つ格好だったらしいがな」

黒髪に黒い瞳に光沢のある赤い異国の服、クィスは騎士達がサクヤの話をしているのだと直ぐに分かった。思わず足を止めて聞き耳を立てる。

「しかし、こんな辺鄙な所にまで手配書廻されてもなぁ……ティルファとの国境の森だろ？　どんだけ距離があると思ってんだ」
「魔術士だって話だからな、王都や隣街で見つからないんだ、下流の方まで捜索の手を伸ばそうって事なんだろ」
「でもなぁ……近衛隊の槍を受けて川に落ちたんだろ？　途中の川で見つからないんじゃあ、もう死んでんじゃないのか？」
「死体でも必ず探し出せってお達しだ、それも姫様直々の勅令だとさ」

『近衛隊の槍を受けて川に落ちた』というくだりで、クィスは眉を顰めた。騎士達の言う近衛隊とは姫様を専属に守る近衛騎士団を指している事は分かる。だが何故、サクヤがその近衛騎士団に怪我を負わされなくてはならなかったのか。

「たく……近衛隊の尻拭いとはねー。地方の下級騎士は辛ぇこって」
「まあ、姫様を危うく攫われる所だったらしいからな、領土内での襲撃に御者の内通者がいて……実際かなりヤバかったらしい」
「姫様御用達の馬車の御者に内通者ってのも、ちょっと考えられねぇな？」
「ああ、王都にゃかなりの間者が入り込んでるだろうからな、あっちの騎士団連中はそういうのの洗い出しに忙しいのさ」
「ハッ！　それで俺達に御鉢が回って来た訳か、こっちも暇じゃねえんだがなぁ」

騎士達が巡回に出ようとする気配を察知したクィスは、素早くその場を離れて通行人を装い、そのまま門を潜って街を出た。黙々と村への帰路を急ぐクィスの意識は、今し方聞いた話に少し混乱していた。

先程の騎士達の話を反芻すると、サクヤの怪我は姫様を守る近衛騎士団によるモノだった。その姫様は最近何者かの襲撃を受けて危うく攫われる所だったという。そして近衛騎士団が姫様の勅令の下、サクヤの捜索をしている。

「どういう、ことだ……まさかサクヤが……？」

街からかなり離れた所まで来てようやく我に帰ったクィスは、サクヤの身元を確かめていない事を思い出したが、さっきの詰め所の騎士達にサクヤの事を話すのは何故だか躊躇われた。

しかし、このまま村に戻っても村長に報告をしなければならない。いずれ村にも捜索の手が伸びる事を思えば、先程の話を黙っていても意味が無い。

万が一サクヤが姫様を狙った罪人だった場合、村は王家に弓引く犯人を隠匿した罪で全員が咎を受ける事になりかねないのだ。

「……まだ、そうと決まった分けじゃない」

何かの間違いか、一般庶民の想像など及びもつかないような深い事情があるのかもしれない。村の灯りが見え始めた頃、クィスはどうすれば良いかと考えを巡らせて——先送りする事を選んだ。

『今日は街の騎士達は皆忙しく、話を聞けなかったので後日また調

べに行く』

これで通そうと決めた。

「ただいま」

灯りの消えた家に帰宅したクィスは、サクヤに宛がった部屋の扉をゆっくり開いて中を窺った。微かな月明かりが差し込むベッドの上に、滑らかな膨らみが浮かび上がる。

モゾモゾと寝返りをうった拍子にシーツが肌蹴てしまうのを見て、クィスは苦笑しながらそっと近付くと、むにゃむにゃ言ってるサクヤに掛けなおしてやる。淡く青白い光が端整ながらも幼げな雰囲気を持つサクヤのあどけない寝顔を照らし出す。

僅かに開かれた唇から零れる規則正しい小さな吐息を聴くうち、クィスは居た堪れなくなって部屋を出た。厨房に入り、水瓶の水で顔を洗って頭を振る。どうもサクヤの寝顔に中てられたようだ。

「……サクヤが、罪人なわけがない」

あんな無防備な寝顔を晒す少女が、王族を狙うような大罪を犯すとは考えられなかった。もう一度街で、今度はきちんと情報を集めて話を聞いて来ようとクィスは改めて決心した。

08話：お風呂計画

「お風呂入りたい」

昨日獲って来た肉を使って朝食の準備をしているクィスに、朔耶はもじもじしながらそう言った。

元々泊り掛けのキャンプに出掛けたので一日くらいは身体を拭く程度で済ませるつもりだったものの、一昨日ここで目覚めてから包帯を代える際に寝汗を拭いたりした程度の身嗜みしか出来ていない。

昨日は石弄りの作業もして多少汗も掻いているし、毎日シャワーを浴びる事が習慣になっていた朔耶にとって二日以上も髪も身体も洗えないのは苦痛で、尚且つ恥ずかしい。

「オフロって、湯浴みの事かい？　ああ……そうか、困ったな」

通常、庶民は夏場には川に出掛けて身体を洗い、冬場は家の中で桶に満たしたお湯に布を浸してそれで身体を擦り洗う。湯浴みの習慣はあるが、貴族の邸宅にあるような香油を混ぜた湯を満たして身体を浸す事の出来るような浴場はこの村には無い。

今はまだ水が冷たいので川に行かせる訳にはいかないし、村長宅になら湯浴み用の大きな桶くらいはありそうだが、あの馬鹿息子が居る屋内でサクヤに湯浴みをさせるなどトンデモない。

「うちには湯浴み用の桶は無いけど、身体を洗いたいならお湯を用意するよ」

「ごめんね、わがまま言って……」

「そ、そんな事無いって！　サクヤは令……女の子なんだから湯浴みしたいのは当然なんだし……こっちこそ気が付かなくてごめん」

申し訳なさそうにする朔耶に、クィスは慌てて手を振りながら言った。令嬢と言い掛けてやめたのはご愛嬌だ。

クィスは壁に立てかけてあった大きめの桶と衝立を引っ張り出すと、部屋の隅の方に置いて衝立で仕切った。

そうして石釜の横に積んである煉瓦のように切り出された四角い石を桶の傍で組み立てて上に鉄鍋を置き、水を注いでその下に火属性の魔力石を手際よく重ねて行く。直ぐに魔力石が熱を放って赤く発光し始める。

「多分これで丁度いい湯加減になると思うから、これで身体を擦るといいよ。水が足りなくなったらこっちから移せばいいから」

そう言って硬く捩じって棒状にした布を二つに折り曲げて結んだ様な垢すり布を手渡し、水の入った別の桶も用意する。お湯が沸いたら大桶に移して、そこに手や足を浸けながら擦るという洗い方をするスタイルだ。大桶の深さはおよそ３０センチ程。

朔耶はここまで用意してくれたクィスに感謝の念を懐きながらも『これだと髪は洗えないなぁ』と複雑な気持ちになった。せめてシャワーを浴びるくらいはしたい。

「……無ければ作っちゃえばいいのよね」

朔耶の決意の篭った呟きに、厨房に戻ったクィスは何事かと振り返ったが、衝立の向こうでシャツを脱ぎ始めたサクヤの白い肩を見て慌てて顔を戻した。

衝立一枚で隔てた向こう側ではクィスが朝食の準備をしている事を考えると、リビングの隅で素っ裸になっている状況は無茶苦茶恥ずかしい事この上ないのだが、身体を清潔に保てない方が我慢ならないので、朔耶はとっとと洗ってしまう事にした。

左肩の包帯には血も滲んで無く、ちらっと傷を覗いた時は既に塞がっていたが、結構深く刺されていたような気もしていたので不思議に感じていた。何せ身体ごと吹き飛ばされる程の勢いで突き刺された筈なのだ。

『まあ、早く治るならいいや』と包帯に触れないように左半身を洗い、右半身は胸から下までは右手で洗えたが、上半身は左肩の痛みと相談しながらゆっくり洗い進めていった。

「あ痛たたた……やっぱりシャワーで流せるようにしないとキツイなぁこれ……」

ようやく首から下まで洗い終えて服を身につける。桶に溜まった水はどう処理すれば良いのか悩んでいるとクィスが声を掛けてきた。

「終わったかい、サクヤ？」
「あ、うん、ありがとう。ねえ、この水どうすればいいの？」
「ああ、後で俺が捨てておくから。おいで、朝ご飯にしよう」

昨日のデイジーとの話し等を話題しながら食事を済ませると、クィスは大桶の水を捨てに行くついでに水汲みに出ると言うので朔耶も付いて行く事にした。

タライのような大桶を水が入ったまま持ち上げるクィスの腕力に驚きながら、朔耶は水汲み用の桶を持つとクィスの後に付いて外に出る。

三日目にして窓越しではないアマガ村の風景を見た朔耶は、長閑（のどか）な……というより、閑散とした雰囲気の村の様子に『貧しい村』という印象を持った。

村人達はクィスの後ろに付いて歩く朔耶を見て、最初驚いたような表情になり、次に所在無さな気に視線を彷徨わせ、愛想笑いを浮かべる人と硬直して立ち尽くす人とに分かれた。

朔耶も目が合った人には軽く頭を下げて挨拶しながら足早にクィスの後を追う。

『なんか……腫れ物に触るような感じ？』

もしかして自分はこの村の負担になっているのでは？　と不安になった朔耶に、それを見透かしたようなクィスの声が掛かった。

「前にも言ったけど、村の連中はサクヤの事を何処かの貴族の令嬢だと思ってるから、皆どう接していいのか分からないだけなんだ、どうか気を悪くしないでくれ」

「う、ううん、大丈夫だよ。ただ、あたし迷惑になってないかな～なんて……」

「サクヤの面倒見てる俺自身が、迷惑だなんて思ってないから、安心しなよ」

不安げに呟く朔耶を励ますつもりで、からかい気味に言ったクィスだったのだが。

「クィス……ありがとう」

ふんわりとした微笑みでお礼を返されて、クィスは一気に体温が上昇するのを自覚した。初めて太陽の光の下で見るサクヤは本当に健康的で綺麗な肌をしていて、艶のある黒髪と黒い瞳には惹き込まれそうだ。

『か、可愛いなサクヤは……いや、美人なのは分かってたんだけど……ヤ、ヤバイよな』

何がヤバイのかよく分からないまま眼の奥に張り付いたサクヤの微笑みに動悸が激しくなるのを感じていた。

村を囲む木の杭を組み合わせたバリケードのような柵を出て直ぐ、少し岩場を下った場所にゆったりと流れる川があった。川原では洗濯をしている村人の姿が三人程見える。

クィスは洗濯中の村人の下流側に大桶の水を捨てると、朔耶から水汲み用の桶を受け取って上流側の水を汲みながら、ここに朔耶が流れ着いていた事を話した。

朔耶は感嘆とも溜め息とも付かない複雑な感情の入り混じった息

を吐いて一度上流の先を見詰めると。竦めた肩を擦りながら川の流れに目を戻す。洗濯をしている村人がそわそわしているが、敢えて気にしない。

「この川……村からそんなに離れて無いんだね」

「まあね、この辺りは嵐で水嵩が増えても氾濫しないくらい支流が多い場所なんだ」

この川を生活の拠点としてアマガ村と同じ様に沢山の小さな村が、支流沿いに点在しているそうだ。ゆったりとした流れを眺めながら顎に手を当てて『う～～ん』と唸っている朔耶に気が付いたクィスは、何か考え事かなと静かに様子を見守る。

「ここから水車とか使って水を引けないかなぁ……」

シャワーのように大量に水を使うなら水源である川から直接水を引いた方が効率がいい。

湯沸かし器代わりのタンクを魔力石で作るのにも自信はある。デイジーの話がヒントになった。流石にポンプの動力用にモーターを作るのは、情報不足で目処が立たないが……。

「足踏み式にすればいいのよね……水道橋を給水用と排水用の二段式にして……」

「……サクヤ？」

何やらぶつぶつと呟いているサクヤに、クィスは遠慮がちに声を掛ける。

「ねえクィス、ここから村に水を引き込めないのかな？」

「え？　水を引き込むって……水路でも作るのかい？　ここの岩は

硬いし村より結構低い位置だから無理だと思うけどな」
「ううん水路じゃなくて、給水塔と水道橋を建てて水車で汲み上げればイケると思うんだけど」
「水車……は分かるけど『キュウスイトウ』とか『スイドウキョウ』って何だい？」

こちらにはまだそういうのが無いのか、或いはクィスが知らないだけなのかと朔耶は小首を傾げたが、水道橋と給水塔について、その役割を分かり易く説明すると、クィスは感心した様子で驚いた表情を見せた。

「凄いな、サクヤは……確かにそれなら村に水を引く事が出来るし、上の畑にも水を通せる」
「どうかな？」
「うん、良い案だと思うし、村長に話してみるよ」
「村長に？　ん～そっか、そうだよね、うん」

朔耶はシャワー欲しさの簡単な水道施設を提案したつもりだったのでちょいちょいっと作ってしまえばと思っていたのだが、やはり村の中に何かを作ったりするには村長に届出が必要なのかなと、この時は解釈していた。

エライ勘違いだった。

村の中央の開けた場所に村人達が集まり、村長が皆の前に立って

声を上げる。

「あ～皆も知っていると思うが、現在クィスの家に滞在なさっているサクヤ殿から、この度アマガ村に素晴らしい技術が提供される事となった。村の皆の生活を向上させる『水道』という新技術じゃ」

おおー……という感嘆が広がり、村人達の視線がクィスと並んで立つ朔耶に向けられる。朔耶はこの予想外の展開に目を白黒させながら狼狽えていた。

ちょっと川から水を引いてシャワーを浴びたいな～とか思っていたら、何時の間にか村を上げての一大事業になってしまっていたのだ。土木工事や建築作業の経験がある者達が集められ、朔耶の指揮の下、村に水道施設を作る事になった。

設計図も無く、専門家も居ない。朔耶の大まかな知識とアイデアのみで工事が進められる事になる。

自分で試行錯誤しながらささやかな小物や道具を作る程度ならば工夫と創作意欲で色々な物造りに挑めるものの、流石に大勢の人を動かして工事を行うような規模となると勝手が違い過ぎるし、そんな状況は想定すらしていなかったので、はっきり言って尻込みしてしまう。

「な、なんか……大変な事になっちゃった……」

少し顔色を無くした朔耶が呟くと、クィスが安心させるように声を掛けた。

「大丈夫だよサクヤ、きっと上手く行くよ」

「でもあたし、こんな大事になるなんて……それに指揮とか全然…

…、何をしたらいいのか分かんないよ」

集まっている村人達を前に、オロオロと不安げな表情を浮かべる朔耶。クィスは自分が間に入って指示を出すようにすれば、サクヤの緊張を解せるだろうと考える。

「とりあえず、どんな物を作ればいいのか教えてくれれば俺がそれを皆に伝えるから、それを元に作業に入る。サクヤは出来るだけ詳しくその説明をしてくれれば、後は皆でなんとかするよ」

「う、うん……分かった、やってみる」

そうして始まった水道施設の建設工事。まずは材料となる木材の伐り出しに何人かと近くの森に出掛けて行き、その道中で造る物の大きさや形、機能等を説明してこれから行う作業の全容を理解して貰う。

本来なら切り出した石を積んで丈夫な水道橋を造りたい所だが、そこまでの規模の工事をするには材料となる煉瓦のような石が大量に必要となる。現状、アマガ村の労働力と財政では不可能なので、木製の簡易式なモノを造る方向で定めた。

水車と橋と塔、水を汲み上げる為の桶とロープ、給水タンクとなる大きな水槽、其々の製造に最適な材料を集める為、そのモノの特徴と役割を説明して行く。

水車に塔を併設して、水車を動力とした滑車と歯車とロープと桶による水の汲み上げ機構で汲み上げられた水が塔の上から流れ落ちた時は、村人達が歓声を上げた。

これにより、水道橋と水車と給水塔の関係を具体的に思い描く事が出来た作業員達の作業効率が上がり、同時制作していた水槽も橋と一緒に完成した。

「水槽の中は真ん中で仕切って下の方で繋げて、奥の方から水を入れるように。うん、その辺りに穴を空けて排水の方に繋いで」

施設が形になるに従って朔耶も指揮に慣れ始め、直接作業を指示するようになっていた。朝から始めた工事は、日が暮れる頃にはそれなりの所まで仕上がっている。

「凄いね、一日でここまで出来ちゃうもんなんだぁ」
「村人みんなで進めたし、遣り甲斐のある作業だったからね」
「皆さんお疲れさまです。サクヤさんも、お茶どうぞ」
「わぁ、ありがとうデイジー」

村人達が集まったの村の中央には幾つかのテーブルが並べられ、女達がバーベキューのような料理の準備を進めており、男達は持ち寄った地酒で酒盛りを始めている。一日作業をこなしたこの日は村人全員での食事会を開く事になった。

薪をキャンプファイヤーのように重ねた井桁に、火を入れようとしている村人が火打ちに梃子摺っている様子を見かねて朔耶が試作魔力石ライターで火を付けると、皆が口々に『魔術士サクヤ』と称え始める。

朔耶はお酒の入った人達に一々訂正しても仕方が無いと、好きに呼ばしておく事にした。

それよりも運ばれてきた料理に興味が移る。狩猟村なだけあって全体的に肉料理が多くサイズも大きい。香ばしく焼けた肉をはふは

ふ言いながら食べるとちょっと幸せな気分になった。

『キャンプファイヤーにバーベキューかぁ……』

この世界に喚ばれたあの日、朔耶はキャンプ場へ向かっていた事を思うと何だか感慨深い気持ちになる。今頃元の世界では家族や友人達が心配しているかもしれない、それを思うと溜め息が零れてしまうのだが。

「サクヤ、疲れたのかい？」
「ううん、大丈夫だよ」

クィスは常に朔耶の隣に立ち、朔耶と村人達との交流が円滑に行えるよう助けていた。
同時に、クィスには村長の馬鹿息子からサクヤを守るという使命感にも似た気持ちがあったのだが、朝の召集の時も、昼間の作業の間も、そして今も、その馬鹿息子『ドーソン』は姿を現さなかった。

「何処行ったんだろう？　アイツ……作業をサボるのは分かるけどこんな食事会でも顔見せ無いなんて」
「ん？　誰の事？」
「いや、ドーソンっていう、村長とこの馬鹿息子がいるんだけど……朝から見掛けなくてさ」
「馬鹿息子って……」

朔耶はクィスの言い様に噴き出しそうになりながら、クィスにそう言わせる人物を想像した。

『村長の息子っていうくらいだから、ちょっと傲慢入ってるとか？』

もし嫌な感じの相手なら居なくて良かったかな？　等と不謹慎かと思いつつも素直な気持ちを考えてしまう。

「ドーソンさんなら朝から馬に乗って何処かに出掛けてましたよ？」

飲み物を持って配膳に回っているデイジーが偶々近くを通り、朔耶とクィスの話を聞きつけてそう教えてくれた。

「朝から馬で？　……一体何処へ何しに」

「馬、居たんだ～」

「一頭だけですけどね」

呑気にデイジーと雑談を始めた朔耶を余所に、クィスは何か胸騒ぎを覚えていた。

09話：一石三鳥？

料理も殆ど平らげられ、そろそろお開きにしようかという頃、それはやってきた。

複数の馬の蹄の音が近づいてきたかと思うと、馬に乗って甲冑に身を包んだ集団が広場に集まる村人達を取り囲むように飛び込んで来た。突然の事に右往左往しながら騒ぐ村人達に、集団の代表らしき人が声を張り上げる。

「静まれぇー！　我等はクルストス駐在のフレグンス辺境騎士団だ！　姫様の勅令により　ある人物の捜索に参った！」

襲撃の類では無いと分かり、次第に落ち着きを取り戻した村人達は皆　不安げに身を寄せ合った。馬上からぐるりと一望し、騒ぎが収まった事を確認した集団の代表が一つ頷いて仲間に合図を送る。

すると包囲の一角が解かれてそこから一頭の馬がゆっくり輪の中に歩み出た。　その馬に乗っている人物を見てクィスが叫ぶ。

「ドーソン！」

朔耶はクィスの隣でデイジーの震える肩を抱いて宥めながら、辺りの様子を窺っていた。その姿を見つけたドーソンは、ニヤリと笑みを浮かべてクィスの方に向き直る。

「やあ、クィス　それに皆も、なんだか楽しい事をしていたようだね」
「ドーソン！　これは何事だ！」
「クィス、使えな奴だな君は……昨日街でちゃんと騎士達に話を聞いていれば、僕がこんな苦労をしなくて済んだってのに……」
やれやれと気障っぽく前髪をかき上げながら首を振って見せるドーソンの姿に、朔耶は内心でギャグキャラに認定した。　2秒で。
クィスは騎士達と共にドーソンが現れた時点で、昨日立ち聞きした騎士達の話しが彼に伝わったのだと確信していた。
騎士達がサクヤを捕らえに来た事は明白だ。その騎士達の隊長は勿体ぶったドーソンの態度に痺れを切らし、会話に割り込む。
「ドーソン殿、娘は何処か？」
「ふふふ、ご心配なく中隊長殿　あそこに居る黒髪の娘がお探しの娘ですよ」
皆の視線を受けて肩を竦める朔耶。視線から守るように朔耶の前に立って庇うクィスは、この状況をどうすれば切り抜けられるのか必死で考えた。
包囲の向こう側に遅れて到着した馬車が停まり、御車台に乗っている二人の騎士のうち一人が降り立った。さらに荷台から四人の騎士が降りて包囲の方にやって来ると、馬上の中隊長に敬礼する。中隊長は頷いて応え、朔耶の方を眼で指して指示を出した。
「あの娘だ」
「はっ！」

対象は魔術士であると聞いている騎士達は慎重に油断無く朔耶の元に歩み寄る。甲冑を着けた体格の良い騎士が四人も並んで警戒を滲ませながら近付く様は、見る者に威圧感を感じさせた。

朔耶は彼等が飛び込んで来た時に驚きはしたが、口上を聞いて大体の事情を察していた。レティレスティアが自分を探している、と。しかし迎えにしては随分と物々しいこの雰囲気は――

『また何か、誤解されてるような……？』

「あのー」

口を開いた朔耶に騎士達がピタリと動きを止める。緊張の面持ちで見ていた周囲の人々も、何事が起きるのかと息を殺して見守っている。そんな重苦しい空気に居心地の悪さを覚えながら、朔耶は一つ提案した。

「王都に行くんですよね？　それには応じますから、明日まで待って貰えません？」

その言葉に、中隊長は訝しむような表情を向けた。四人の騎士達も途惑うように隊長に指示を窺う素振を見せている。

「まだ村の皆さんにお世話になったお礼も言って無いし、アレももう少しで完成するから」

そう言って振り返り、見上げる朔耶の視線の先には　完成間近の水道橋と繋がる給水塔があった。もう九割方完成していて、後は各戸への支水管と水量の微調整だけだった。

シャワーは間に合わなかったが、湯沸かし器の造り方は教えておけば村人達だけでも造れそうな程シンプルな構造だ。

中隊長は村の隅に立つ櫓のような木造の塔と、それに連なる高く組まれた柵上の建造物を見上げる。『あれは一体なんだ？』騎士達全員が浮かべた疑問だった。

近く囁かれている帝国との戦に備えて防壁を造っているにしては幅が無く、位置もおかしい。櫓の上半分に組まれた箱状の部分も見張りが入るには深過ぎるし、内側から登るようには出来ていない造りなので、やはりアレは箱なのだろう。

しかし何の為に櫓の上部に縦長の大きい木箱が付けられているのかサッパリだ。視線を娘に戻すと、黒髪に黒い瞳の小柄な少女は、成る程、顔立ちの造型が少し違っていて異国人の雰囲気を持っている。

朔耶の今の格好はデイジーから母のお古を貰って、普通に庶民の女性が着る衣服を纏っていたので、この場にいる他の村人達と変わりない身形をしていたが、朔耶自身の持つ異質な雰囲気はやはり目立つ。

中隊長から指示が出ない為、騎士の一人が娘の申し出を黙殺したと解釈して朔耶の身柄確保に動く。朔耶を庇うように立つクィスを押し退けようとしたが、クィスはその場に踏ん張って動かなかった。

クィスにはこの事態をどうする事も出来ない、これは無力感に対して意地によるせめてもの抵抗だ。頑としてその場を動かないクィスに怪訝な視線を向けた騎士だったが――

「ふん……」

鼻で笑って少し特殊な押し退け方をした。見た目はさっきと同じ様に手で脇に払っただけに見えるが。多少なりとも武道を嗜んでいた朔耶にはその動きの意味が手に取るように分かった。

『あ……、崩し技だ……』

踏ん張っていた身体の軸を押し上げられてずらされ、体勢を崩されたクィスはあっさり尻餅をついた。

「クィス！」

朔耶は隣で震えているデイジーから離れるのを一瞬躊躇ったが、クィスを助け起こそうと一歩前に踏み出した所で左肩を騎士に掴まれ、思わず苦痛の悲鳴をこぼした。身を退こうとしたが、がっちり掴まれていて余計に痛い。

『痛たたた！　痛いってばっ』

身を捩って逃れようとする朔耶に、騎士は逃亡の意思を感じたのか拘束を強める。

「ちょ……ッ　肩……痛っ　放して……！」
「娘！　抵抗するな、逃げられはせん」

激痛でまともに声が出せない朔耶に苦悶の表情を見たクィスが弾かれたように立ち上がり、激晃して騎士に飛び掛ろうとする寸前。

「やめて下さい！　サクヤさんは怪我をしてるんです！」

デイジーがその騎士の腕に飛びついた。騒然とする村人達。クィスの激晃に触発された若い衆が威嚇するように身構える。周囲の不穏な空気を感じ取った騎士達が一斉に剣に手を掛けた所で、中隊長の怒声が響いた。

「やめんか馬鹿者っ！　ヴィンス、手を離してやれ。　村の者は代表者を残して家に戻れ！　ブラタ、野営の準備だ」

「明日まで待つのですか？」

「こんな夜更けに動くより朝を待って出た方が良い、ニーケスとケイリスは先に戻って報告をしておけ」

「はっ！」

「ハッ！」

一触即発だった場を即座に収めて素早く指示を出し、命令を受けた部下達がきびきびと動く。気勢を削がれた若い衆も拳を下ろし、他の村人達も戸惑いを残しつつ其々自分達の家に戻って行った。

肩を押さえて座り込んだ朔耶の傍にデイジーが寄り添い、二人を護るように未だ警戒を解かないクィスが仁王立ちしていた。

「この焚き火は使えるな、ここで夜を明かすぞ。娘の見張りにはアンバッスとレイスが付け」

呼ばれて馬車の御車台に居た二人の騎士が朔耶達の前に歩み出る。年配の寡黙な印象を受ける強面の騎士と、優男ふうに見える若い騎士の二人を、クィスはじっと睨みつけていたが

「やあ、僕はレイス。そんなに睨まないで欲しいなぁ、僕はヴィンスと違って女性の扱いは心得てるからさ」

「レイス、余計な事は言うな」

見た目から対照的な二人は、性格も対照的なようだった。

「なんか、急なお別れになっちゃったな～」

部屋に戻り、傷口が開いていないかデイジーに診て貰った後、問題無しという事で一息ついた。夜も遅いのでデイジーは家に帰らせ、朔耶は明日に備えて自分の荷物を纏めていた。

荷物といっても、朔耶が着ていた服とデイジーに貰った服、それに試作魔力石ライターくらいなのだが。

部屋を出ると、リビングには仏頂面をしたクィスが二人の騎士とテーブルを挟んで向かい合っていた。

というか睨み合っているような感じだった。　尤も、睨んでいるのはクィスだけで年配の騎士は腕を組んで眼を閉じているし、レイスと名乗った優男ふうの騎士はニコニコと微笑を浮かべてクィスの『ガン飛ばし』を涼しげに流している。

朔耶は苦笑を浮かべながら間に入った。

「も～クィスってば、そんな睨まないの」

「サクヤ……」

「さっきはありがとね、庇ってくれて」

「いや……俺は……」

言外に何も出来なかったと悔やむ様子を感じ取り、朔耶はその先を言わせないように言葉を被せる。

「ほんとに、危ない事しないでね？　クィスに何かあったら、あたし……」

「ご、ごめん……」

誤解を招きかねない朔耶の『あたしあなたの事が心配なの』攻撃（朔耶兄による具体的な指導有り）に顔を赤らめるクィス。そんな二人の様子を、レイスは表情を変えずニコニコ眺めていた。朔耶はその微笑に『観察の意』を感じ取っていたが……。

「さて、それじゃあ寝る前に水道施設の最終調整の事を話しておくね、あと湯沸かし器の造り方も」

テーブルの上に広げた布の上に図解で描かれた簡易湯沸かし器の仕組みと、給水塔からの支水管の張り方を説明する。クィスは言葉の一句を聞き漏らすまいと真剣に記憶し、二人の騎士はその内容に興味を引かれたのか、黙って図解を見詰めていた。

湯沸かし器の仕組みは発想の逆転という、クィス達にとっては青天の霹靂とも言えるようなアイデアだった。

鉄鍋に水を入れるのでは無く、鉄鍋に火属性の魔力石を入れて、それを常に水が流れ込む小水槽に並べて入れる事で短時間で湯を沸かし続ける事が出来る、常時大量のお湯が使えるという装置だった。

コレも水道があってこその装置だが。

一通り説明もし終えて、クィスも質問する事が無くなり、部屋に沈黙が降りた。

「さーて、それじゃあ明日に備えて寝よっか」
「サクヤ……」
「うん？」
「その……俺……」

しばらく逡巡するように何かを言いたげだったクィスは、結局『なんでもない』と寂しげな微笑を浮かべた。小首を傾げる朔耶だったが、『ん、そっか』と軽く頷いて返した。

「おやすみクィス」
「おやすみ、サクヤ」

クィスが自分の部屋に戻るのを見届け、朔耶はテーブルに向かっている二人の騎士に声を掛ける。

「お二人は？」

「僕らは見張りですから、朝まで徹夜なんですよ　交代で仮眠してますけどね」
「レイス、余計な事は言わんでいい」

アンバッスの煩わしそうな突込みに肩を竦めて見せるレイス。朔耶は分かったと頷き返して部屋に戻った。

『ふぅ～、しっかし……絶対あたし何か誤解されてるよね』

レティレスティアが自分の事を探させているのは分かったが、この扱いはまるで犯罪者だ。

この世界の伝達技術如何ではレティレスティアから発せられた命令が末端の部下に届くまでに色々抜け落ちたり余計なモノがくっ付いたりして変質して伝わっている可能性も否定できない。

『勅令とか言ってたけど、命令書とかは無いのかなぁ』

文面に記されているなら正確に命令が伝わる筈だが、あのレティレスティアが自分を犯罪者のように扱うとはどうしても思えなかった。それにこの辺りは王都からは随分離れているようだし、遠ければ遠いほど、情報は正しく伝わり難い。

自分が発見された事はレティレスティアにも伝わるだろうし、とにかく王都に行って彼女に会えばまた精霊の声も聞けるかもしれない。そこから元の世界に戻る手立ても分かるかも知れない。

騎士団が連れて行ってくれるのだから旅費の心配も無く、道中の安全は保障されてるようなモノだ。

「なんだ、ラッキーじゃん」

旅費を稼ぐ必要も護衛を雇う必要も、旅の知識を身に付ける手間も省けて一石三鳥じゃん、ちょっと痛かったけど。と、急角度で前向きになった朔耶は短い期間とはいえ、この村で過ごした時間を思い浮かべながら眠りに付いた。

１０話：旅の始まり

翌早朝――

まだ薄暗い朝靄の中、朔耶は騎士達に連れられてアマガの村を後にした。

出発前に混乱を招きたくないという騎士達の意向により、村人達が起き出して来る前に出る事になったのだ。結局まともにお別れの挨拶も出来なかったなぁとボヤく朔耶を荷台に押し込み、馬車は一先ずクルストスの街に入る。

木や藁の混じった石造りの建物が並ぶクルストスの街は、フレグンスの衛星国家である小国の一つに属する国境の街だ。

ここから出発して王都に辿り着くまでには、この国の首都を抜けて王都と隣り合う隣国の国境の街に入り、その国の首都を通ってまた王都との国境の街に入り、そこを越えればようやく王都に入る事が出来る。

途中で馬車の交換や補給も必要となるので、主要な四つの街以外にも集落や村に立ち寄る事も想定している。

初めてこの世界の街を目にする事になった朔耶は、物珍しそうに周囲の建物や露店に視線を向けていた。

この世界に来た時の赤い光沢のあるジャケットにズボンという格

好は目立つので、今はデイジーに貰った服を纏っている。その為、遠目には田舎から出てきた娘が『おのぼりさん』をやってるようにしか見えなかった。

騎士の詰め所に到着すると、荷台に一緒に乗り込んでいた騎士達はさっさと降りて詰め所の中に入ってしまい。朔耶はこのまま馬車に残るように言われたので大人しく街の風景を眺めている。

暫らくすると御車台に乗っていた昨日の二人の騎士、朔耶の見張り役を任されていたアンバッスとレイスが馬車の荷台に取り付ける幌を担いでやって来た。長旅に備えて幌を張るらしく、二人で手際よく取り付けていく。

朔耶は手伝おうかとも思ったが、アンバッスに『じっとしているように』と言われて仕方なくポケ～っと作業を眺めていた。

「アンバッス・クルト小隊長、並びに、レイス・チル・アクレイアの両名にこの者を王都まで護送する任務を与える」

「ハッ！」

「了解です」

中隊長から任務を言い渡され、アンバッスはかっちりとした敬礼をし、レイスは優雅に崩した敬礼を返して任を賜った。

『強面のおじさんは小隊長さんかぁ～叩上げのベテランって感じだね。レイスは何と無くキャリアって感じするんだけどなぁ』

馬車の幌の後ろから顔を覗かせて様子を見ていた朔耶は、これからお世話になるであろう二人を観察していた。

荷物が積み込まれ、さあ出発かという時に何やら難しい顔をしたアンバッスが荷台の荷物の間に身体を押し込んでいる朔耶に近付いて来た。

「？　何ですか？」

「……捕虜の護送には枷を付ける決まりがある」

そう言って手に下げていた鎖付きの輪っかを持ち上げた。以前森の中で見た事のある、レティレスティアが填められそうになったモノとよく似ている。

「捕虜っ！　あたし捕虜なの？」

「先日の、帝国の襲撃者に関連した人物だと伝え聞いているが……、詳しい事は知らん」

「え～、じゃあ別に捕虜じゃないじゃん。あたし嫌だかんね、そんなの付けられるの」

「そうもいかん、護送する人間の立場をはっきりさせておかねば、各関所で面倒な事になる」

そう言いつつも、アンバッスの表情からはあまり気が進まなさそうな胸の内を読み取れる。強面な顔だけに感情が表れ易いのかもしれない。

「詳しい事が分からないって言ってるのにハッキリさせておくって、おかしくない？」

「屁理屈を言うな、お前を護送する為に他にどんな立場がある」

「要人警護とか？」

「そんな怪しい要人が居るか」

いくら襲撃に加担した疑いのある魔術士とはいえ、アンバッスか

らすれば朔耶はまだ子供にしか見えない。そんな少女に罪人の枷と変わりない術封じの枷を填める事に躊躇いがあり、その為こうしてぐずる朔耶の抵抗に付き合っている。

魔術士相手に油断は禁物だが、力尽くを行使するにはアンバッスの良心が赦さない相手なので説得を試みているのだ。

「まあまあ、いいじゃないですか隊長。街に入る時に格好だけでも付けて貰えば」

「簡単に言うなレイス、道中で問題が起きてからでは遅い」

二人のやりとりを、微妙にレイスを応援しながら眺めていた朔耶は、ふと、詰め所前に停まっている別の馬車に気付いた。荷馬車な此方の馬車と比べて、如何にも人を運ぶ為の馬車という感じのする黒塗りの豪華な馬車。その馬車に乗り込んでいたのは――

「あれ？　ギャグキャラのドーソンだ」

「ん？」

「ギャグキャラ？」

朔耶の不思議な言葉に首を傾げ、小さく指差した先にいるアマガ村の村長の子息を見て『ああ』と呟いたレイスが答える。

「彼は今回の功績で王都の大学院に推挙される事になったんですよ」

「今回って、あたしの事？　あの人何かした？」

「貴女の居場所を我々に知らせてくれました」

「レイス、余計な事を言うな」

二人の掛け合いを聞きながら『向こうの馬車の方が乗り心地良さそうだなぁ』等と思って見ているうちに、ドーソンを乗せた黒塗りの馬車はゆっくりと動き出し、街の大通りを抜けて走り去った。

「所でサクヤ、『ギャグキャラ』とはなんです？」
「ん～？　何をやっても最後は人に笑われる運命にある喜劇の人みたいな？」

朔耶の説明にレイスは『ほうほう』と頷いて一見すると穏かな、しかし何を思っているのか分からない何時もの微笑を浮かべた。
結局、朔耶に枷を付けるのは騎士達が駐在する大きな街に入る時だけという条件で、道中は比較的自由に振舞えるよう取り計らって貰える事に決まった。

「ありがと～～レイス」
「いえいえ、レディを大事に扱うのは騎士の務めですから」

アンバッスはそんな会話を交わす二人を横目に、最早何も言うまいと大きな溜め息と共に御車台に上がった。

クルストスの街を出発し、街道に沿って一路この国の中央都市に向う。ガタゴトと揺れる荷物を押し分け、御車台の後ろに陣取った朔耶は、二人の騎士の間から街道の風景を眺めていた。
『おや？』と呟いたレイスが身体を横にずらし、ある方向指差した。

「サクヤ、ほら」
「ん？　……あっ！」

レイスの指差す方向を見ると、そこには――

「サクヤーー！」
「サクヤさーーん！」

弓を背負った狩人姿のクィスが、街道脇の土手の上に立っていた。隣にはデイジーの姿も見える。

「クィスーー！　デイジーー！」

身を乗り出して二人に手を振る朔耶。二人も朔耶に手を振り返している。狭い御車台に身を乗り出されて隣で煩わしそうな顔をしているアンバッスはしかし、少し馬車の速度を緩めていた。レイスが意味ありげな視線を送るが、アンバッスは無視した。

「二人とも元気でねーーーっ　行ってきまーーーす！」

朔耶とクィス、デイジーの三人は互いの姿が見えなくなるまで、手を振り続けていた。

11話：護送事情

荷物の中の毛布を一箇所に纏めてそこに埋まり込むようにしながら眠る朔耶。これなら馬車の揺れも電車やバスの揺れの如く心地良い刺激となって良い眠りを満喫出来る。

「起きろ、休憩だ」
「ふにゃあ？」

無粋な声に起こされて、朔耶は気の抜けたような威嚇するような奇妙な声を出した。盛大に顔を顰めるアンバッスを見たレイスが肩を震わせて笑っている。

「そろそろお昼になりますから、この辺りで休憩するんですよ」
「……ん～、ここ何処？」
「エバンス街道の中継地だ。ここからエバンスまではそう遠くは無い」

まだボンヤリした眼でキョロキョロしている朔耶。

「エバンス……？」
「この国の首都の名ですよ、ちなみにこの国はサムズといいます」

朔耶はなんとなく親指を立てて小首を傾げてみた。

「なんの手信号だそれは」

意味が分からないというアンバッスの表情を見て、サムズアップは関係ないのかと朔耶は一人納得した。まだ思考が正常に働いていないようだ。そうしてモソモソと毛布の山から這い出て来ると、ぐぐっっと伸びをしながら愚痴る。

「ふぁ～～――休憩なら寝かしておいてくれればいいのに……」
「お前な……自分の立場を弁えろ。枷も付けずに自由に振舞わせてやってるんだ、相応の働きをしろ」

そう言って空の桶を手渡すアンバッス。軍用の丈夫な桶は朔耶の細腕には空でもずっしり重い。ふと見ると、レイスは馬車の脇で石と薪を重ねて食事の準備を進めている。

「水でも汲んで来いって事ね」
「川は向こうだ、流されるなよ」
「何それ、嫌味？」

言葉の意図は兎も角、今の会話のやりとりで少し気持ちが軽くなった朔耶はアンバッスに対する印象を上方修正した。

『この人、良い人かもしれない。』

「いいからさっさと行ってこい」
「あ～ハイハイ　働かざる者、喰うべからずってね」
「ほう……！　良い格言だな、お前の国の言葉か？　込められた戒めの幅広さは中々に興味深い」
「うん？　まあ、そんなとこ」

なんだか急に饒舌になったアンバッスを訝しむ朔耶だったが、とりあえず水を汲んでこようと重い桶を持って川へと向かう。

「隊長は『賢者の言葉』を集めるのが趣味なんですよ」

水汲みから帰って来て何気なくアンバッスの事を口にした朔耶に、レイスがそんな事を教えてくれた。元の世界でいう所の『諺』が、此方の世界の『賢者の言葉』と呼ばれる格言にあたるようだ。

短い言葉の中に深い意味を込める、知的な言葉遊びとして貴族の紳士達が好んで嗜むらしい。

「格言マニアか……」

何か他に知っている諺でもあれば教えてあげようかと、朔耶は覚えている諺を記憶から掘り出しに掛かったが、美味しそうな匂いが漂って来たので諺発掘はあっさり放棄された。

「ところで、肩は大丈夫ですか？」

シャブシャブのように煮た薄肉を頬張っていた朔耶は、レイスに問われてはっと気付く。言われてみれば既に痛みも無く、肩に違和感もない。先程水を汲んで来た時も平気だった。

「もう治っちゃったみたい」

「そうですか、それは良かった」

「……昨日あれ程痛がっていたのは、演技か？」

「んな訳無いじゃないっ　アレ無茶苦茶痛かったんだから、声も出

なかったわよ」

怪我の程度に不審を向けるアンバッスに憤慨して見せながらも、朔耶は内心自分でも傷の治りが早すぎるような気はしていた。

実際、あの森の出来事からまだ五日程しか経っていない筈だ。いくら綺麗な傷口だからといっても、一週間も経たずに刺傷が完治するのは不自然だと思った。

「まあ、治ったんだからいいっか」

不自然だが別段困るわけではないので問題なし、と朔耶は片付ける事にした。順応性が高く無ければ濃い兄弟に挟まれた家庭環境ではやっていけないのだ。

中継地というだけあって、他にもここで休憩をとっている人達が何組か見受けられる。

水汲み場で挨拶をして来た朔耶に、最初は警戒の態度を見せていた商隊のグループは、フレグンスの騎士と一緒に行動している姿を見て彼女は騎士達の従者なのだろうと認識した。

この辺りは比較的安全な地域だとはいえ、盗賊が出る事も決して珍しくは無い。傭兵の護衛を雇えばそれなりの安全を図る事が出来るものの、相応に結構な金が掛かる。だが、騎士ならいわば公僕なのでタダで済む。

居るだけで盗賊達に襲撃を躊躇わせる存在。正規の騎士と道中を共に出来るなら正に願ったり適ったりなのだ。

そんなわけで、ここは商人根性の出し所とばかりに『エバンスまでの道中を共にしましょう』と、先ほど朔耶が美味しそうに食べていた薄肉をお近付きの印にと分けてくれた商隊の人達は、朔耶達の出発に合わせて中継地を後にする。

「まったく、お前は人身掌握の術でも使っているのか？」
「んな訳ないじゃん、大体あの人達はアンバッスさん達を当てにしてるんでしょ？」

後ろにゾロゾロと続く商隊の馬車を、顰め面で眺めながらこぼすアンバッスに朔耶が返す。朔耶の護送が任務とはいえ、彼等がもし襲撃などを受ければ守る為に剣を振るわなくてはならない。
領民を危険から守るのは騎士としての基本的な在り方なので、余程の他を切り捨てても優先すべき任務に就いてでもなければ捨て置くわけには行かない。
とは言え、それを行う騎士達の内心が皆勤勉で正義と奉仕の精神に燃えているかと言えばそんな訳もなく、こんな場合は体よく利用される事に対する面倒事への不満タラタラなのだ。

「まあ、いいじゃない。お肉も貰ったし」
「喰ったのはお前だ」
「二人とも食べないんだもん～」
「我々は予め用意した食材以外を無闇に口にしたりはせんのだ」

こんな調子で会話を続ける朔耶とアンバッスを、レイスはニコニコと微笑を浮かべて眺めていた。

道中何事も無く、夕暮れ頃にはサムズの首都エバンスに到着した。この街の騎士団本部で一泊した後、次は隣国の国境の街バーリッカムに向う事になる。

「……サクヤ」
「はいはい、分かってるわよ～」

ほいっと両手を出した朔耶の華奢な手首に鎖の付いた術封じの枷が填められる。本来は首と足首にも輪が付くのだが、そこまでは必要ないだろうとアンバッスが金具から外して手首のみの手枷となっていた。

エバンスの辺境騎士団本部はクルストスのものより大きく、中々立派な造りの建物だった。クルストスの支部がプレハブ二階建て駐在所だとすると、此方は鉄筋三階建ての警察署という感じだ。

勿論この世界に『警察』という職種や『プレハブ』や『鉄筋構造』等は存在しないので、目の前に建つ建物は石造りのエバンス駐在フレグンス辺境騎士団サムズ方面本部である。

「結構大きいね」
「クルストスの支部はまだ仮舎ですからね、ここは本部なので施設も一通り揃ってます」
「レイス……」

余計な事は言うなとまではもう面倒になったのか省略したアンバッスが詰め所前に馬車を停めて、出迎えの騎士と敬礼を交わす。

「クルストスのアンバッス小隊長とレイスだ、王都までの護送の任務で立ち寄った」
「窺っております。ようこそエバンスへ、こちらへどうぞ」

御車台を降り、荷台に回って朔耶を降ろすと、前をアンバッス、後ろにレイスが付いて建物内に入って行く。
この本部にはフレグンスから派遣されている辺境騎士団だけでなく、サムズ在住の傭兵からなる自警団も詰めていた。建物の中には宿舎の他に訓練場や遊戯施設、独房等も完備されている。

本来であれば、アンバッスとレイスは宿舎に案内され、護送の対象である朔耶はエバンスの騎士に拘禁を任されるのだが、まず朔耶の処遇を見届けてからだと主張するアンバッス達に促されて、怪訝な様子を見せながらも案内を言い遣った騎士が三人を通した先は地下の独房だった。

「え〜〜あたしココで寝るのぉ〜〜？」

嫌っそうに言う朔耶に、ありったけ毛布を用意してやるからと宥めるアンバッス達を、エバンスの騎士は『囚人相手に何故？』と不可解に思いながらも、要求された毛布を集めに走った。
案内人が戻って来るまでの間、朔耶が入れられた独房の前でアンバッスとレイスはどちらが先に番をするかと相談していた。

「？　ねえ、なんの相談？」
「ここの見張りに立つ順番ですよ」
「へ？　見張りって……何？　脱走でもすると思ってんの？」
「……んな事が出来るなら、とっくに俺達から逃げ出してるだろう」

そりゃそうだ、と合いの手を打ちながら首を傾げる朔耶。アンバ

ッスは言い難そうに顔を顰めながらしぶしぶ理由を口にする。
王都の騎士団本部のような規律のしっかり通っている場所なら兎も角、地方の支部やここのように混合体制の組織内では必ずしも規律が守られているわけではなく、度々罪人への虐待が問題になるという。
まして朔耶のような年端の行かない娘が独房に居るとなると……。と、いう事らしい。その意味を理解した朔耶は赤くなるやら青くなるやらで、自らの肩を抱いて隅っこで小さくなってしまった。

「ら、乱暴されるかもって事？　シャレになんないよそれは～……」
「だから我々が交代で見張るのだ」
「大丈夫ですよ、そういう不埒な輩は僕等が追い払いますから。サクヤには指一本触れさせません」
「よ、よろしくね？」

不安を滲ませた表情で素直に警護を頼る朔耶。その腕に填められた枷が余計に痛々しく見えて、アンバッスは視線を逸らせた。

「はぁ～……レティもどんな命令で捜索出したんだろう？　丁重に～とか強調しておいてくれたら良かったのに……」

朔耶の独り言のような愚痴に、アンバッスは以前から感じていた違和感を無視できなくなって来ていた。
ここまでの道中、割と口達者な朔耶のお喋りに付き合わされているうち、なんどか彼女の口から『レティ』という言葉が出ていたが、それがレティレスティア王女を指している事はもはや疑いない。
あまり気安く呼ぶなと注意すると、『だってレティがそう呼べって言ったんだも～ん』と躱された。

本当にこの娘は襲撃事件に加担した者なのか？　という疑問が膨

れ上がる。
　クルストスに回ってきた手配書の内容は娘の特徴（顔立ちや格好等）と推測される状況（怪我の有無等）に、見つけ次第王都へ連れて来る事、例え死んでいても王都に運ぶ事、だ。
　そこに襲撃事件の話が絡んで来ていたので、事件の関係者らしいという憶測も混ざってはいたが。

「サクヤ、前から気になっていたのだが……お前は姫様とはどういう関係なのだ？　事件と係わり合いはあるのか」
「今更それを聞くかなぁ～」

　確かに今更だったが、以前までなら容疑者の、ましてや魔術士と称される者の言など、惑わしの言として耳を貸す事は無かっただろう。しかし、ここまで疑問が膨れ上がった状態ではこの先、任務を遂行する上で迷いが生じかねない。
　一度きちんと聞いておいた方が良い、アンバッスはそう判断した。

「ん～、ちょっと色々あって、レティが攫われそうになってた所を成り行き上、助けたって所かな？」
「……なんだと？」

　困惑の表情を浮かべるアンバッスに、朔耶は『ホントに成り行きでだけどね』と肩を竦めて見せながら付け加えた。

「……レイス、少し頼む」
「ええ、良いですよ」
「何処か行くの？」

　踵を返して出口に向うアンバッスの背中に声を掛ける朔耶。アンバッスは肩越しに首を向けると

「少し……確かめてくる」

そう言って独房から出て行った。

12話：王女の客人

「神殿の水鏡を使用したいのだが」

一階の受付カウンターにやって来たアンバッスは、書類の積まれた机に向かっている神経質そうな男に用件を伝えた。

フレグンスに属する国の首都には王室の寄付金で建てられた精霊神殿があり、遠方の神殿と連絡を取る事の出来る水鏡が設置されている。

精霊の力を使ったこの伝送具は、精霊との交感能力のある神官にしか扱えない為、定期連絡以外の使用には前もって許可が必要だった。

「この時間にですか？」

「そうだ、大至急確かめたい事がある。王都に繋いで欲しい」

「しかし……今からですと定期連絡の報告とかち合いますが？」

「構わんっ　大至急だ！」

アンバッスの剣幕に押され、渋々という感じで定期連絡の合間に使用する予定を組み込んだ書類を作ると、サインを入れてアンバッスに渡す。

「報告の合間ですから、あまり時間は取らないでくださいよー？」

受付の男の声を背中に受けながら、アンバッスは早速本部を出て

神殿に足を向けた。

「今日も行かれるのですか？」

彼は本日の事務仕事を終えて神殿に寄せられる定期連絡を受け取りに向う途中、同じく神殿に向う見慣れた後姿に声を掛けた。

「ええ」

彼女は振り返らずに短く答えた。本当は振り返って声を掛けた彼の顔を見たい、彼と話をしたい、胸の内を聞いて欲しいと思っているのだが、彼女自身が自分に課した戒めとして『サクヤ』が見つかるまでは、無事に再会出来るまでは、恋人と語らう事を自らに禁じていた。

今日も神殿に向かい、各街の神殿から届く周辺国に駐在する騎士団からの報告に耳を傾ける。記録を取るのも、その報告を受けて活かすのも、彼女の仕事ではないけれど。

彼女、レティレスティアは『サクヤ』が見つかったという報告が届くのを、毎日神殿に通って待ち続けていた。

神殿に入ると、既に各担当の騎士や官僚達が配置に付き、精霊神官によって水鏡が開かれるのを待っている。レティレスティアは定位置となった神官席の隅に腰を降ろし、イーリスは騎士達が座る席の中央にある団長席に座った。

そして神官の祈りによって開かれた水鏡から各街の騎士団による報告が始まる。報告内容は各街の住人の様子、帝国の動向に関するモノから農作物の収穫量、犯罪数等で、地域によっては魔物の目撃件数や被害件数なども上がってくる。

一通り王都周辺の領地と隣国からの報告が終わり、辺境国の報告に入った。

今日もサクヤに関する情報はないのかと、レティレスティアは落胆する。サクヤと出会ったあの森はティルファとの国境に近い森で、その周辺国やティルファの大使にも協力を呼び掛けておいたが、今の所そちらからの連絡は無かった。

辺境国方面にも手を廻しておいたものの、あちらは街の官僚にも余り良い噂を聞かない。

『父様に無理を言って出して貰った私名義の勅令も、何処まで効果を果たせているか――』

報告がなされて行く様子をボンヤリと見詰めながら、レティレスティアはサクヤと出会った夜に想いを馳せる。暗い森の中に現れた光の魔術士、流れる川のほとりを風のように駆けた開放感。彼女から伝わってくる不思議な広がりを持つ心の波動。

『もう一度会いたい……』

その陶酔しそうな心地良さを想っていたその時。不意に起きた周囲のざわつく声に、意識が引き戻された。水鏡には獰猛な熊を思わせる顔の武張った印象を持つ一人の騎士が映っていた。サムズ国の定期報告中に割り込んだとかで揉めているようだ。

「クルストスの報告はエバンスの後に定めてあるだろう！」
「この通り許可はとってあります。大至急確認したい事がございます」
「そんな辺境国の端街の者が、一体何の確認を取りたいと言うかね？」
「姫様の勅令について、サクヤという娘の事で確認したい事があるのです」

ガタンッと音を立ててレティレスティアが立ち上がった。議場に詰めていた官僚達が何事かとそちらに視線を向ける。イーリスもハッとした表情で一度王女を見やり、水鏡に視線を戻す。

隣で迷惑そうにしているエバンスの騎士を無視して水鏡の前に立ち、鏡の向こうに映る王都の官僚達と、騎士達の中央に座る近衛騎士団長に向かって勅令の内容とサクヤについて質問を繰り出そうとした時、鏡の奥から声が上がった。
聞き覚えのある透き通るような高いソプラノ。鏡の向こう側で、官僚達が慌てている。

「サクヤが見つかったのですか！？」

その声の主が鏡に映り、アンバッスは驚愕で思わず声を上げそうになった。いや、アンバッスだけでなく、この水鏡の間にいる騎士や官僚達全員が驚きに眼を瞠った。

王女自らが水鏡に姿を現して一介の騎士と直接言葉を交えるなど、前代未聞の事態だ。鏡の向こうでは近衛騎士団長が慌てて王女の隣

に駆け寄り、自重を促している。

アンバッスはこのまま答えて良いものか大いに迷ったが、向こうもこちらも混乱状態にある。収集がついてからではまた時間が掛かってしまうだろう。この際、多少の不敬には眼を瞑って貰おうと言葉を続けた。

「か、彼女は現在、我々が王都に護送中であります」
「無事なのですか？」
「ハッ　怪我も完治しており、健康に異常は見受けられません」
「そう……よかった、サクヤ……」

心底安堵した表情を見せる王女の麗しき姿に、水鏡の間にいるエバンスの若い騎士や官僚達が恍惚の表情で見惚れているが、アンバッスはそれ所ではなかった。

王女はサクヤの身を案じ、無事を喜んでいる。その意味する所を考え、冷や汗が湧いてきて背筋に冷たいモノが走った。だがまだ話は終わっていない。確認しておくべき事が残っている。

「その……、姫様の出された勅令の内容と、サクヤは何者であるのかを御聞かせ頂きたく……」

恐れ多くも自分から王女に質問を投げ掛けるアンバッスに周りから非難の視線を浴びせられるが、レティレスティアは驚いた表情で答える。

「伝わっていないのですか？　サクヤは私の命の恩人です。私が帝国の手の者達に連れ去られそうになった時、その御力で助けて頂いたのです。サクヤが居なければ、私は今頃、帝国の手に落ちていた

事でしょう」

アンバッスは今度こそ倒れそうになった、しかし気を遠くしている場合ではない。しっかり踏ん張って王女の語るサクヤの話を頭に叩き込む。

「……不幸な意思の行き違いにより、サクヤは近衛の槍を受けて川に流されてしまいました……私はどうしても、もう一度サクヤに会いたいのです。会って謝罪とお礼をしなくては」

予想以上の返答に、アンバッスは冷や汗が止まらないでいた。

「勅令の内容は、私、レティレスティア・フィリス・フォルティシス・フレグンスの名において、サクヤと名乗る黒髪に黒い瞳の、年の頃は十五～十七にみられる異国の装いをした少女を見つけ次第丁重に保護し、負傷その他病気等を患っている場合は無条件でこれに治療を施し、十分な回復を持って王都にお連れするように。尚、発見した場合は直ちに王都へ連絡すべし。また、以上の人物と思わしき遺体を発見した場合も、直ちに連絡し、確認次第王都に移送すべし、異国の装いについては光沢のある赤い……――」

アンバッスは勅令内容を直接本人から口頭で聞かされるという異例のオンパレードを経験しながら、深く頭を垂れて騎士の礼を取った。取りながら内心で騎士団上層部に悪態を付き捲っていた。

『まったく正確に伝わっておらん！　団の上層は何をやっていたのだ！』

「姫様……そろそろ……」

「……わかりました。　クルストスの騎士殿」

「ハッ！」
「サクヤを宜しく頼みます」
「ハッ！　必ずや王都にお連れします」

近衛騎士団長に促された王女は、最後にサクヤの事をこの報を届けた騎士に託すると、鏡の前から退いた。

礼を解き、ゆらりと立ち上がったアンバッスは一先ず、定期報告を続けるこの間を後にして報告を済ませた騎士や官僚の控え室となる礼拝堂に出た。

そこに集まっていた者達から一斉に視線を向けられる。皆、先程までの水鏡の間でのやり取りを聞いていたので『王女と直接話した騎士』を何者ぞ？　と訝しむ者と、アンバッスの事情を知っているが故に彼と同じ様に青い顔をしている騎士もいる。

そして、居並ぶ騎士、官僚の面々に向けてアンバッスは言葉を紡ぐ。

「宿だ……」

シン……と静まり返った礼拝堂に、謎の呟きが響いて皆が注目した。次の瞬間、アンバッスの野太い怒声が響き渡った。

「宿だ！　この街で一番良い部屋の宿を用意しろ！！　サムズの代表を呼べ！　団長に連絡を付けろ！！　さっきの話をクルストスとバーリッカムにも伝えろ！！　至急だっ！　クリューゲルにも確認を取れ！！」

クルストス駐在騎士団の小隊長でしかないアンバッスにはこの街での指揮権など無いのだが、皆この時ばかりは彼の指示に従った。神殿の重厚な扉を叩き割らんばかりの勢いで押し開き、外に飛び出

したアンバッスは、本部に向かって全速力で駆け出した。

「何かご用ですか？」

朔耶が入っている独房の前に立つレイスは、何時もの微笑を浮かべたまま抑揚の無い声で来訪者に声を掛けた。

不揃いの革鎧を身につけた二人組みの男、恐らくはここの自警団に所属する傭兵だろう。鉄格子越しに朔耶の姿を見つけると、下卑た笑いを浮かべて近付いて来る。

二人の傭兵は如何にも御貴族様な容姿と雰囲気を纏った優男風で丸腰の若い騎士など眼中に入れず、鉄格子の向こうで不安気に身を縮めている黒髪の少女を観察した。

まだ幼げな容姿だが出る所は出ているし少し細ぎすな気もするが引っ込む所は引っ込んでいる。術封じの枷が填められていることから魔術士の見習い辺りかもしれないと当たりを付ける。

舐るような不躾な視線を浴びせられて身を竦ませる姿がまたそそる。と気分を高揚させていると、優男の騎士が遮るように立ちはだかった。

「あん？　何の真似だ？　騎士様よお」

「用が無いのでしたらお引取りを」

傭兵の挑発的な物言いを無視して、相変わらず微笑を浮かべたまま抑揚の無い声で言い放つレイス。その態度を傭兵風情への侮りと感じたのか、男は革鎧の隙間から素早く抜き出したナイフを突きつける。

「！っ」

と、朔耶が息を呑んだ。

この本部内では一部施設を除いて基本的に武器の携帯は禁じられている為、帯剣して歩いている者はいない。

が、やはり規律を守らない者は何処にでもいるわけで、特に傭兵業をやっている彼等は様々な武器の扱いにも長け、常に暗器を忍ばせている者は普通に居る。

「なぁ騎士さんよぉ、俺たちゃ別に囚人殺しに来たわけじゃねぇんだよ……」

「ちょっと楽しみに来ただけだろぉ？　おめぇ等だって道中楽しんで来たんだろうが」

まるで聞き分けの無い子供を諭すような口調で囁き掛けながらナイフで脅す、あくまで同意させようとする辺り、手馴れた感がある。

「仰ってる意味が分かりませんね、重ねて言いますが、お引取りを。それから訓練所以外での武器の携帯は禁じられていますので、入り口の者に預けて下さい」

レイスは傭兵達の戯言を無視して、やはり微笑を浮かべたまま抑揚の無い声で言い放った。二人の傭兵の空気が変わる。互いに目配せをすると、スッと身を退いて一定の距離を取り、もう片方の男もリストバンドの中から細い長針を取り出した。

「何処に捨てる？」

「二番通りのスラムでいいだろう、娼館の裏にでも放り出しとこう」

そんな言葉を交わして殺気を放つ。死体の遺棄場所を決める相談から入る所などは、こういった事は一度や二度では無い事を感じさせる。

これから何が起きようとしているのか、素人にも分かる程の空気の冷たさに朔耶は後退って震えた。レイスは丸腰だ、殺されてしまうかもしれない。いや、彼等は殺す事を前提にしたような会話をしていた。もしそんな事になれば、次は――

『あたし……どうなっちゃうわけ……？』

じり……、と暗器を構えた二人組みが間合いを詰めようとしたその時。

「レイス！」

入り口の階段を転げ落ちるように飛び込んで来たアンバッスが怒鳴る。朔耶は思わず叫んでいた。

「アンバッスさん！」

「レイス！　房を開けろ！」

しかしアンバッスは独房前の状況にまるで気付いていないかのように、レイスに指示を出しながら走り寄って来た。

「今すぐここを開けろ！」

「どうしたんです？　そんなに慌てて」

「話は後だ！　とにかくここを開けろ！」

「それは構いませんが……」

ちらりと二人の傭兵に視線を向けるレイス。それにつられて振り向き、アンバッスはようやく二人組みに気付いた。彼等は既に武器を仕舞い込み、突然の乱入者に対して不遜な態度を向けている。

「こいつらは？」

「サクヤを狙って来……」

ゴシャッという鈍い音が響いて、二人組みの片方が身体を床と水平にしながら吹っ飛んだ。

「……たようです。せめて最後まで聞いてから殴りませんか？」

「時間の無駄だ。おい貴様っ　片付けておけ。レイス、早くここを開けろ」

呆然と立ち尽した二人組みの片割れに壁際の後始末を言いつけたアンバッスは、そう言ってレイスを急かした。朔耶は『アンバッスさんつえー』とか思いながら、ぽかんとその様子を眺めていたが。

「そういえば、急にどうしたの？」

独房の扉が開けられると、狭い出入り口に滑り込むように巨体を潜らせたアンバッスが入って来た。その鬼気迫る雰囲気に、朔耶は思わず一歩下がる。

「な、なんか怖いよ？　アンバッスさん……」

「手を……」

腰の退けている朔耶に向き直ったアンバッスは膝を付いて手を伸ばし、呟いた。

「手を……」

もう一度繰り返す。朔耶は恐る恐る枷が填められている両手を差し出すと、枷は手早く丁寧に外された。

そうして、『なんで？』という顔をしている朔耶から膝立ちのまま数歩下がったアンバッスは両手を付き、額を石畳に押し付けるようにして言った。

「申し訳ありませんでした！　サクヤ様」

「……は？」

「おやおや……」

成り行きを見ていたレイスも土下座の姿勢で動かないアンバッスの隣で膝を付き、騎士の礼を取った。

「え……ちょっと、何？　……何かの罰ゲーム？」

突然の事に混乱する朔耶を余所に、アンバッスはその姿勢のまま謝罪の意を述べる。

「この度は、我々騎士団の怠慢により大変無礼且つ愚劣な行いで御身御心に多大な不快と御迷惑をお掛け致しました事を深く心よりお詫び申し上げる」

その後は目まぐるしい勢いで朔耶の周囲は変化していった。

まず、独房を出るとそのまま宿舎の部屋で『ドレスの用意が出来ていないから』と朔耶の持ってきた向こうの服、所謂ジャケットにズボン姿に着替えさせられた。

そして騎士達数人に周囲を護られた状態で豪華な要人用の客車に乗せられ、何処かの豪華ででっかい屋敷に案内される。

客車を降りると正装らしいマントを着けた騎士達がズラーっと整列していて、その向こうにはメイドさんな格好をした人達がやっぱりズラーっと並んでいて、彼等の前を道なりに進むとドミノ倒しのような礼で迎えられた。

やっと建物の中に入ると、何処の高級ホテルかと思うくらいの広々とした赤絨毯のロビーに、外に居た騎士達より一段と豪華な甲冑に勲章をつけた熟年の騎士と並んで、少々小太りの派手で素材の良さそうな、でもセンスは悪そうな服を纏った中年の男が待っており、汗を拭き拭き何やら口上を述べ始めた。

「ご、ご機嫌麗しゅうサクヤ様。私、サムズの統治者代表をしておりますエイブムと申します、以後お見知りおきを……。その……此度の件に付きましては、レティレスティア様の勅令書を管理していた部署の者が……」

要するに『勅令内容が正しく伝わらなかったのは秘書のせい』というアレだった。

ここに至ってようやく朔耶の置いて行かれていた精神も状況に追い付き、落ち着いて周りが見られるようになっていた。

連れて来られた場所はエバンスで一番の高級宿で、目の前で口上

を述べている小太りのおじさんがこの国の統治者代表の人、豪華な甲冑に勲章を一杯つけたロマンスグレーなおじさんは辺境騎士団の団長さんだった。

「……ようするに自分は悪くないから責任問わないでねって事ね？」

「！！っ――――っ」

エイブムは硬直してしまった。朔耶は内容は只管同じで長いだけの話に少しうんざりしながら内容確認で要約したダケだったのだが、エイブムには『そんな言い訳が通用すると思うなよ？』に聞こえて震え上がってしまったのだった。

サムズの代表が沈黙したので、次に朔耶の前に立ったのはロマンスグレーな団長さん。

「フレグンス辺境騎士団長クレイギンス・ノーツ・バーアルトと申します。伝達不備により我が団員が大変失礼を致しました。アマガ村で貴女に暴行を振るった者に対しましては此方で処分を検討しています故、何卒お怒りを静められますよう」

「うん？　別に怒ってませんよ？」

朔耶が答えると、クレイギンス団長は深々とお辞儀をして次にこう続けた。

「サクヤ殿のご慈悲に感謝します。では、団に示しをつける意味でも、サクヤ殿から何らかの罰を与えて頂ければ幸いかと……」

『んん？』と勘に引っかかるモノを感じ、朔耶は首を捻る。さっきの人と違って、この人は非を詫び責任を取ろうとしている、が……何かが引っかかる。

何が引っかかるんだろうと考えていると、沈黙するサクヤにもう

一押しと思ったのか、クレイギンス団長の本音の部分が混じって言葉に出ていた。

「サクヤ殿より直接咎を頂ければ、あの者もかの地で猛省し、一層職務に勤める事が出来るかと……」

その言葉でピンと来た。

「もしかして、レティにバレたら首になるからあたしが決着つけた事にしておきたいって所？」

思わず眼を瞠るクレイギンス団長。まさか見抜かれるとは思っていなかった為うっかり表情に出してしまい、それが肯定を示していた。詰まる所、この謝罪と咎を求める申し出は、粗相をやらかした部下を守る為の策なのだ。

相手を小娘と侮った事を大いに悔やみながら、只々深く頭を垂れるクレイギンス団長だったが――

「いいよ、じゃああの人にはアマガ村の水道施設建設の手伝いをするように言いつけといて？」

そんな朔耶の返答にはっと顔を上げ、そして今度は恭しく騎士の礼を取った。

お偉いさん二人との謁見が終わり、今日はお疲れでしょうという

事で部屋に案内される事になった。湯浴みの準備も出来ていると聞き、朔耶は『お風呂に入れる～』と喜んで湯浴み場に案内して貰う。

ここでも一騒動起きて、大きな浴場にウキウキとしながら服を脱ごうとしたら四人ほどのメイドさんが現れて脱衣を手伝おうとするので、人に脱がせて貰うとか洗って貰うとか等の行為には全く慣れて居ない朔耶は断ろうとしたが、王族所縁の要人をお世話するという使命に燃えるメイドさん達にあれよあれよという間に脱がされてしまった。

そのまま今度は浴場で洗われかねない状況に羞恥と危機感を覚えた朔耶は、少し強めに――

「あたしの国では無闇に他人に肌を見せたり触らせたりしないの！」

と、文化の違い攻撃で躱そうとしたのだが、それを聞いたメイドさん達が蒼白になって泣きながら謝罪を始めてしまい。知らせを聞いて飛んで来たメイド長が謝罪と懇願を始めた。

「此度は無知なる行いにてご無礼を働き大変申し訳なく、この上は如何なる裁きもお受け致します故、どうかこの娘たちのお命ばかりは……」

「何処の暴君だあたしはーー！」

風習風土、宗教等による文化の違いという問題は、実は結構大きな問題事だったりする。民族間や国家間で争いが起きる時は、この風習や宗教観の違いが原因になる事が多い。

その為、フレグンスは領内でもこの辺りの問題に対する民衆の対立には常に眼を光らせているのだ。結局『お咎め無しにするから御風呂は一人で入らせてね』で決着をつけて、無駄に増えた疲れを癒すため長風呂をする朔耶だった。

「わ～～、ふかふか～～～～」

三人ぐらい並んで寝られる程の広い天蓋付きのベッドにボフッと埋まり込み、やたら手触りの良い寝衣の感触を全身で感じる。ほんの数刻前までのじめっとした石畳の独房とはエライ違いだ。

この宿までの道中でアンバッスに説明された内容や統治者代表の話から、どうもお役人の怠慢で勅令内容が正確に伝わって居なかったらしい事が分かったが、何処の世界でもそういうのはあるんだなぁと、しみじみ思う。

「でも……」

罪人扱いは嫌だったけど、道中は割と楽しかったと今日の馬車の旅を思い出す。

「明日からは……今日みたいな気楽な旅は出来なくなるのかなぁ？」

アンバッスの態度があんな風になってしまうと、少し寂しい。憎まれ口の応酬や掛け合いが出来ないのは残念だった。

「あの人、頑固そうだもんなぁ……」

仕事と立場に忠実に振舞い、何か問い掛けても話し掛けても、すんごい軍隊調でキビキビ返ってきそうだ。

「……いや、それはそれで面白い……かも？」

レイスの態度は最初から丁重だったからあまり変わらないけれど、彼とはあまり馴染まない。悪い人ではない事は感じ取っているのだが、勘が告げているのだ。『気をつけろ』と。

「……はて？」

なんだか自分の心に別の存在が勘という形で語りかけているような、僅かな違和感を感じながら、朔耶はゆっくりと眠りに付いたのだった。

13話：力の形

一夜明けて、朝から豪華なモーニングティーに豪華な朝食に豪華なデザートに豪華な――

「あ～～もうっ　肩凝る！」

普通の（というには少々濃い家族に囲まれていたが）一般人だった朔耶にとってこのＶＩＰ待遇は窮屈に感じてしまい、次の街に向けてすぐに出発すると聞いた時は内心ホッとしていた。

沢山のメイドさんや整列した騎士達に見送られ、宿の正面に着けてあった大きな馬車に乗り込む朔耶。今日からはこの要人専用の大型馬車で移動する事になる。

周囲を護衛の騎士が固め、身の回りの世話をする侍女達も別の馬車で付いて来る。

朔耶は『待遇良過ぎ、というか大げさ過ぎ』と言って遠慮したかったのだが、王女の恩人でもある客人に護衛も侍女も付かないなど有り得ない事であるし、国の威信に懸けても有ってはならない事だと諫められ、渋々承諾した。

要人専用大型馬車というだけあって馬車の中は結構広く、テーブルやソファー、寝台まで完備されてあり、ちょっとした個室並みの設備があった。この中で会談や執務も行えるように造られている。

「うわ～すっごいね、バネ付きだから殆ど揺れないし、なんだか部屋ごと移動してるみたい」
「最新式の要人馬車ですからね、この型でバネを使用しているのはこれと王都にある国王専用車ぐらいですよ」

サスペンションの機構はまだ実用化されて間もないらしく、揺れない車室を実現したバネ付きの馬車というのは画期的な乗り物として、実の伴う高貴な人々しか乗れない代物のようだった。同じ貴族でもお金が無い貧乏貴族には手が出せない。

「アンバッスさんもこっちに乗ればいいのに」
「ふふ……流石に勘弁してあげて下さい、隊長はあの通り真面目な人ですから」

朔耶が乗っているこの馬車にはレイスと他に護衛の騎士が一名が同室し、侍女一名が隣の部屋に控えている。アンバッスは先頭を行く護衛隊馬車の御車台に乗っていた。

平民一兵卒からの叩上げである彼はあまり高貴な身分の人物と行動を共にする機会がなく、本人も社交場などで有力貴族にコネを作るといった『売り込み』に興味が無かった為、ひたすら寡黙に職務に励む経験豊富な古強者の騎士であるにも拘らず、未だに辺境騎士団の小隊長の身分に甘んじていた。

そんな彼だからこそ、昨夜の精霊神殿で水鏡越しとはいえ王女相手に自分から質問を投げ掛けるような、他の騎士や貴族なら絶対にやらないであろう事をやってのけたと言える。

故に、朔耶のような今や身分は雲の上に在りながら、やたら下々の者とでも親しく接しようとする相手とは不敬をやらかす危険が有

り過ぎてとても同席など出来ない、という本人の希望での配置異動だった。

アンバッスと交代したエバンスからの騎士は、緊張した面持ちで扉前の定位置に立ち、出発の時から微動だにしない。よって、朔耶の話し相手はレイスしか居ないのだ。

「な～んか、前以上に息が詰まるような……」
「僕が相手では、不服でしたか？」
「いや、そうは言わないけどさぁ」

『退屈だぁ』と行儀悪くテーブルの上に腕を投げ出して伸びている朔耶を、レイスは微笑ましく眺めながら『困りましたねぇ』等と相槌を打っている。そんな調子で隣国クリューゲルの国境の街、バーリッカムに向う街道を進んでいた。

座り心地の良いソファーでウトウトとし始めた頃、馬車がゆっくりと停まる気配がしたので、朔耶は眠りに落ちかけていた意識を引っ張り上げて窓を覗き込んだ。

少し開けた更地にエバンス街道の中継地で見た商隊の馬車とよく似た型の馬車や、幌馬車等が数台停まっていて、其々の馬車の近くでは焚き木を囲って食事をしたり、談笑している人達の姿が見える。

「もしかしてここも中継地？　休憩にはいるの？」
「ええ、ここはバーリ街道の第二中継地です。エバンス街道と比べると旅人の数も多いですから、店を出している商隊もいますね」

やがて先頭の護衛隊馬車が停まると、並ぶように朔耶の乗った大型馬車も停止した。中継地に居た人々はエバンス方面からやってきた騎士の護衛の付き大型馬車が珍しいのか、皆、好奇の視線を向けている。

一体何処の大貴族が乗っているのやらと噂話を始める者や、『あの型式の馬車はこの近辺の国には二台しか無い筈だ』と博識ぶったりする者もいた。

そんな中、後ろに続いていた馬車からティーセットや日除けの天蓋やテーブルや椅子を持った侍女達がぞろぞろ降りてきて、瞬く間に憩いの空間を作り上げる。

「うわ～……プロフェッショナルだなぁ」
「さあ、行きましょうサクヤ様」
「様はやめてよ……ていうか、あそこに行くの？　あたしが？」
「貴女の為に用意された舞台ですよ？」

と、優雅に礼をしながら中継地の人々から注目の視線を集めている憩いの空間に誘うレイスに、朔耶はゲンナリしながら『う”ぇ～～……』と麗しき乙女にあるまじき呻き声を上げるのだった。

大型馬車から御付きの者らしき若い騎士に手を引かれて降りてきたのは、光沢のある赤いコートを羽織ったズボン姿の、まだ顔立ちに幼さを残した黒髪の少女だった。

侍女達が控える日除けの天蓋の下に入ると、護衛の騎士が素早く周囲の壁となって人々の視線から隠す。

「どうしました？　サクヤ様」
「……落ち着かない――全っ然！　落ち着かないって、コレ」

貴族のお嬢様方はこんなので優雅な気分になれるのだろうかと、別の意味で畏敬の念を懐いてみたりする。

これではかえって疲れてしまうからと、侍女さん達には申し訳なく思いながらも早々に片付けて貰い、馬車に戻った朔耶は護衛の騎士にも『暫らく入ってこないで』と念を押して、車室から追い出した。

そうして馬車の中でデイジーに貰った服に着替えて村娘になると、侍女さんが出入りする別の出入り口からこそっと出して貰った。

一応、お忍び扱いでとレイスに頼んで、護衛の騎士達には其々休憩を装って中継地に散らばり、こっそり見守るという護衛の仕方をして貰う事にした。

騎士達はそういう特殊な要人警護の経験は無かったものの、対象にぴったり張りついての鯱張った護衛に比べて適度に緊張感を持ちながら息抜も兼ねたこの方法は好評だった。

常に傍で守る騎士はレイス一人なので、傍から見れば休憩する騎士が従者の少女に付き合って歩き回っているようにも見える。

遠目にチラッと見ただけの、この世界ではかなり目立つ格好だった『赤いコートを着た黒髪の令嬢』と『村娘風の黒髪の少女』が同一人物と気付く者は居なかった。

「アンバッスさ～ん」
「！っ」

ギクリと肩を震わせ、のろのろと振り返ったアンバッスの視線の

先には、何故か村娘の格好をした朔耶がニコニコ顔で立っていた。
彼女の背後に控えるレイスに視線で問い質すも、何時もの微笑を浮かべているだけだ。

「やほ」
「……なにを、す……していらっしゃるので？」
「あ、今噛んだ」
「……」

盛大に顔を顰めたアンバッスは、大きく溜め息を吐く。

「……何をやっとるんだ、お前は」
「アハ！　元に戻ったね、やっぱりそっちの方がホッとするよ」

呆れた様に吐き出された呟きに、朔耶は嬉しそうに笑って言った。

「で……？」
「ん？」
「用があって来たんじゃないのか？」
「うん、からかいに来ました」
「かえれ」

昨日の荷馬車の御車台で交わしていたような掛け合いを始める二人を、レイスはやはり何時もの微笑で眺めていた。

ひとしきりアンバッスで遊んで気が済んだのか、朔耶は更地の外側に転がる石を弄り始めた。

「何かお探しですか？」
「ん～、馬車の中で暇だから何か作ろうかな～って思ったんだけど……」
平べったい石をそ～っと持ち上げ、裏を覗き込んでそ～っと伏せた。
「なんか一杯居た……」
「害はありませんが、女性が好んで見るモノではありませんからねぇ」
苦笑を浮かべながら『見た目は不気味ですがあれでも益虫なんですよ』と教えてくれるレイス。裏にびっしり張り付いていた虫にぞぞっと肩を震わしながら、朔耶は一つ困った事に直面していた。
「ねえ、レイス。魔力石ってこの辺りにも落ちてるのかな？」
「魔力石、ですか？」
クィスの家には集められた魔力石があったし、そこら辺りに落ちていると聞いていたので深く考えていなかったが、朔耶にはどれが魔力石でどれが普通の石なのか見分けが付かない。
火属性の石も、持ってみて何と無く温かいと分かる程度の差異だったので、この辺りに落ちている石を手に取ってみても特に変わった感じは無く、判別のしようが無い事に気付いたのだ。
「これは魔力石ですよ、そっちの白いのは既に魔力を失ってますね、こっちのは只の石です」
「分かるの！？」
「ええ、少しは見分けられますよ」

「やったぁっ　じゃあちょっと集めるの手伝って？」

レイスは朔耶が魔力石で何をするつもりなのかは分からなかったが、彼女がご所望なら気の済むまで集めるまでだと思った。アマガ村の狩人の青年の家で見た『湯沸かし器』のような、好事家が喜びそうなモノでも作るつもりなのかもしれない、と。

「ん～～～～」

休憩が終わり、バーリ街道第二中継地を後にした朔耶達は、一路バーリッカムに向けて馬車を走らせていた。次の停車予定地は第一中継地だ。

揺れない事に定評のある新式大型馬車の車室の中、備え付けのテーブルの上に侍女さんの馬車や護衛隊の馬車に積んであったものから借りてきた工具を並べ、様々な形に削り出した魔力石の欠片を弄りながら唸っている朔耶。

その真剣な様子に、レイスも定位置で動かない騎士も声を掛けることが憚（はばか）れて静かに見守っていたが、朔耶が何をしているのかはサッパリ分からないでいた。

時折、石と一緒に持ち込んだ薪を『ちょっとここ削って』とか『ここ押さえといて』と言って手伝わされていたが、何かの『前衛芸術の工芸品だろうか？』と首を傾げるばかりであった。

「う～ん、やっぱり摩擦が……ベアリングとか無いし……方位磁石

の軸でいいかな……」

と、意味の理解出来ない言葉や、知っている道具の名前やらをぶつぶつと呟いている。

そんな調子でゴトゴトと響く馬車の車輪の音と、石を削ったり道具を持ち替えるカタン、コトン、という音に混じって朔耶の呟く独り言だけが、広い車室に響いていた。

「出来た！」

日も暮れ始め、各馬車のランタンに火が灯される頃、朔耶の感慨の混じった声が車室内に響く。車室の中も薄暗くなり始めていたので、控えている侍女が室内のランプを灯して回っていた所だった。

「お疲れ様でした。それで、何が出来上がったんです？」

「えっへっへ～　魔力測定器ー！」

じゃ～んという謎の掛け声と共に掲げられたのは、両手分程の大きさの長方形をした木の箱で、片方の狭い面から二本の突起が出ている。広い面の片方は丸く削り取られた穴があり、真ん中に小さな丸い皿を返したような部分があって、その皿の部分に細く削った木の針が一本乗っている。

ゆらゆら揺れている事から、この皿の部分は丸く削り取った面の内側にある突起に乗せている事が分かった。最近ティルファで開発されて出回り始めた無水式の方位磁石のようにも見えるが、針が木製なので方位を示す事はないだろう。

「魔力……、測定器？」
「うん、あたし魔力石の見分けつけられないからさ、だったら見分けを付けられる道具から作ればイイやって思って」

言いながら並べた魔力石にその道具の突起が出ている部分を近づけると、不安定に揺れる針がスッと動いて一定の方向を指した。見た事も無い道具と、よく分からない現象を訝しむレイス。

「ねえレイス、この石、魔力の強い順に並べられる？」
「え、ええ」

拾ってきた魔力石は雨に晒されるなどして水属性が付き、すぐ隣で同じ属性が付いた石との共鳴効果により魔力の自然放出をして枯渇しかかっている物から、まだ無属性で十分に溜め込んでいる物など様々だ。

多少なりとも魔術の修学をした者なら石の発する魔力を正確に感じ取る事が出来る。レイスは枯渇しかかっている物から順に、魔力が最も強く残っている物までを並べた。

「こんな感じですね、こちらの石が殆ど空で　そちらの石は一杯に詰まってます」
「ん、ありがと」

礼を言って並べられた石に道具を順番に当てて行く。
すると、枯渇しかかった石では左端を指していた針が僅かに揺れただけだったが、一杯に詰まっている石では明らかに最初の位置からは針一本分程右側を指していた。

「これは一体……」
「ん～～、魔力石のガス欠と満タンの差ってこんなもんなのか～」

ふむふむとその道具の針の指した部分に印を入れながら、ふいに朔耶は質問を口にした。

「そういえば、レイスは魔術に詳しいの？」

「え、ええまあ……僕は元々魔術士の修学を受けていましたから」

「へぇ～そうなんだ、じゃあ何か魔法とか使える？」

「一応使えますよ？　僕の場合、騎士の任務も剣より魔術でこなす方が多いくらいですから」

『あまり例の無いスタイルなんですけどね』と付け加える。

「成る程、だから選ばれてたわけね」

何がです？　と問おうとしてその意味に気付き、ハッとする。正統派の剣騎士であるアンバッスと魔術に精通する騎士である自分が朔耶の護送（今は護衛だが）に選ばれた理由は、朔耶が魔術士であるとされていたからだ。

今となっては取り越し苦労もいい所な適材人選だったわけだが、そんな人選の意図にこんな些細な会話から辿り着く朔耶の洞察力に驚いた。

「という事は～」

と、朔耶が測定器をレイスに向ける。

「わっ　凄っ」

測定器の針が真ん中より少し前辺りまで振れていた。『魔力石七十個分くらいあるね～』とまた印を付けて、その上に見た事の無い

文字らしき模様を書いていく。

「つまり、それが僕の魔力を表していると……いう事ですか？」

「うん、そんな感じ？」

朔耶はあくまで軽かった。レイスは『この子は自分が一体何を作ったのか理解しているのだろうか』と、普段の微笑を忘れる程愕然としていた。

魔力の強さを示す術は存在する。しかし、それは特定の魔術を行使し、その効果の強さや結果を見て測られるモノだ。当然、自身の実力を隠して過ごす者や、貴重な古代魔法文明の発掘品等を使って力の水増しをする者も居る。

実力を隠す者は大抵、内諜が監査の為に組織下層群に送り込んだ査察官だったり、或いは敵国の間諜にも言える事だ。剣や知識と同様、魔術も己の意思によってその力を隠蔽する事が出来る。

がしかし、朔耶が作りだしたこの『魔力測定器』という道具を使えば、向けられた相手は自分の持つ魔力の強さを簡単に見破られてしまう。ごく普通の街人として振舞っている人間が正規の魔術士クラスの魔力を持っていたら、誰もが疑うだろう。

そんな事を考えていた為、レイスは隣の部屋に控えていた侍女がお茶を淹れて部屋に入って来た事に気付くのが遅れた。しまったと思った時はもう遅かった。

「あれ？　侍女さんって魔術士さんなの？」

「えっ！？」

侍女に測定器を向けている朔耶が意外そうに問う。測定器の針は

真ん中を少し超えた場所を指している。侍女は動揺を抑えようとしつつも、顔色を失ってレイスの方を見た。

「彼女は侍女に扮した護衛の魔術士なんですよ、隠し玉なので誰にも言っちゃ駄目ですよ？」

レイスは咄嗟にそう言って執り成し、ウィンクしてみせる。

「あ、そうだったんだ？　へぇ～なんか格好いいね」

「お、恐れ入ります……」

定位置の騎士も初耳だと言わんばかりの顔で見詰めていたが、レイスの説明に納得したのか黙って頷いた。ちなみに、定位置の騎士の魔力は魔力石五個分くらいだった。

「後でアンバッスさんのも測りに行こうっと」

「それはいいですねぇ」

普段の微笑を浮かべたレイスは朔耶の案に同調しながら、退室する侍女に目配せをし、侍女は誰にも気づかれないタイミングで微かに頷いた。

１４話：バーリ街道第一中継地

バーリ街道第一中継地に到着したのは完全に日も暮れて夜の帳が降りようとする頃だった。第二中継地より街に近い分、多くの旅人の姿が見受けられる。

ここで商売をする為に態々街から訪れている商人達もいる程で、その殆どは露店馬車を並べた旅商人達だが、ぽつぽつと店舗を構えて中継地に住み着く者も居て、もう数年も経てばこの辺りも宿場街になるのではと見られている。

街灯など無いこの世界、沢山の馬車と露店のカンテラや、所々に組まれた焚き木の炎が灯りとなって中継地近辺を照らしている。この灯りの届く範囲から一歩外に出れば、そこには暗闇の大地が何処までも広がっていた。

朔耶は『夜は護衛の観点から目立った方が返って安全』というレイスの忠告に従い、赤いジャケット姿でアンバッスの居る護衛隊馬車の焚き木の前に来ていた。ここに来る前に侍女達の馬車にも立ち寄り、全員の魔力測定を済ませてある。

アンバッス他、護衛の騎士達の魔力も測定して一般人の魔力の平均を割り出して測定器の針の淵にメモリを書き足していく。アンバッスの魔力は魔力石七個分位はあった。

「やっぱり魔術士の人と普通の人の差って大きいんだねぇ……」

結局、レイスや侍女に扮した護衛の魔術士のように魔力石七十個分近い魔力を表す騎士や侍女はいなかった。

朔耶が人に道具を向けては針の指した部分に印を付けていたのを見ていたアンバッスは、左端の方に偏った印群が一般人の持つ魔力を指している事は読み取れた。そうすると二つ、やけに離れた場所に付けられた印が気になる。

「その上の印は？」

「これ？　こっちはレイスので、その隣が魔術士さんの」

「レイスは分かるが……魔術士だと？」

この隊に魔術士など居ない筈だが？　と疑問を口にすると、朔耶は少し首を傾げてから答えた。

「さっきこっちに来る途中で如何にもそれっぽい人が居たからこっそり測ったの」

「ああ……、魔術士連中は分かり易い格好しているからな」

特に不審に思わなかったアンバッスはそれで納得した。そのうち食事の準備が出来たのでと呼びに来た侍女と共に朔耶は馬車に戻る事にする。

「また後で来るね～」

「来んでいい、馬車で大人しくしていろ」

そんなアンバッスの返答にあかんべ～をして去って行く朔耶を、アンバッスは厳つい顔を崩して苦笑しながら見送った。周りの他の騎士達は、王女の客人である朔耶とそんなじゃれあいを見せる彼を不敬者と誹る者もいれば尊敬と憧憬を向ける者もいた。

「そういえば、侍女さんの名前は？」
「フレイと申します、サクヤ様」

『様はやめようよぉ～』と相変わらず慣れない朔耶は測定器を弄りながら自分達の馬車までの道程をフレイと並んで歩いて行く。
朔耶の持つ測定器にちらちらと視線を向けていたフレイは、突然背後から声を掛けられて驚いた。測定器に気を取られ過ぎて周囲の気配に対する注意力が散漫になっていたようだ。自身を叱責しながら警戒しつつ朔耶を庇うように振り返る。

「今晩はお嬢さん、こんな夜中に女性二人で歩くのは危険ですよ？僕が送って行って差し上げましょう」

そこに立っていたのは紳士を振舞うには聊か垢抜けない、身に纏っているパリッとした雰囲気の王都大学院の制服も服に着られている感じがする若い一人の青年。

「あ、ギャグキャラのドーソン！」

と、朔耶に指を差されるアマガ村の村長の馬鹿息子こと、ドーソンだった。

「んん！　な、何故君がここに居る！？」
「あんたこそ途中で全然見なかったのに、街についてたんじゃない

の？」

「ぼ、僕は急いで王都に行こうと飛ばし過ぎたらここに来て馬車が……って違う！　何故君がこんな所を歩き回っている！」

「そりゃあ今日はあたしもここで一泊するんだもん」

ドーソンはクルストスの騎士団に朔耶を引渡した後、直ぐに王都行きの馬車を手配させて旅支度もそこそこに出発したので、朔耶が王都に護送される話は聞いていなかった。当然その後の騒ぎなど知る由もない。

王都の大学院には学生寮があり、そこに入れば大抵の生活用品は支給される。辺境騎士団の推挙で入る事になるドーソンは学費も一部免除されるので、金が掛かるのは王都までの旅費と寮に入るまでの滞在費だった。

コツコツ貯めて来たとはいえ辺境の片田舎と王都では物価も違うし、貯金など直ぐに底をつく、その為とにかく一刻も早く王都入りして寮に入れてもらう必要があったのだ。

「あんたの乗ってた馬車って割と豪華だったけど、あの中で寝るのは窮屈そうだね」

「そうなんだ、オマケに車輪が壊れてここで足止めに……いや、そうじゃなくて！」

「はっは～ん――あんたさては、侍女さんなフレイに親切を装って近付いて、お礼に泊めて貰おうとか考えてたわね？」

「ぐっ！　そ……それはっ」

侍女を連れた貴族が旅をしているなら使用人用の馬車と貴族用の馬車に別れているか、或いは同じ馬車に同乗している場合は中型から大型の馬車になる。その場合主人は馬車の中で、使用人達は外にテントを張って見張りもこなしながら休む。

ドーソンはつい先刻、護衛隊を連れた大型馬車が中継地に入ってくるのを見ていたので、あれならば後ろに続いていた使用人の乗る馬車の一隅にでも泊めて貰えるかもしれないと、声を掛ける機会を窺っていたのだ。

「あっはっはっ　流石ギャグキャラ！　いい落とし方するわ～」
「む……言葉の意味はわからんが、なんだか凄く馬鹿にされた気分だ……」
「あの……サクヤ様？　この者を……」
「ああ、大丈夫だよ。知ってる人だから」
「……そう、ですか」

朔耶とフレイのやりとり見て、ドーソンはようやく違和感に気付いた。

「も、もしかして、彼女は君の侍女なのかね……？」
「うん、一応～そんな感じ？」
「一応ではなく、サクヤ様の侍女で御座います」
「な、何故……？」

クルストスで騎士団に身柄を拘束されている筈の朔耶が何故、侍女まで連れてあんな超高級大型馬車に乗っているのか、ドーソンは混乱していた。

「まあ、それは措いといてさ、泊めて欲しいんでしょ？」
「む？　……そ、そうなのだが」

素直に白状するドーソンに、朔耶は吹き出しそうになった。朔耶はドーソンを根本的には悪人ではないと認識した。そして此方の世

界ではまだ見付けていない弄られ役の気配を感じ取り、少し意地悪を言ってからかって見る。

「そうねぇ……犬の真似でもして頼むなら泊めてあげても良くってよ？」

ふふんっ　と見下ろすように腕を組み、つんと斜めに構えた値踏みるような視線を向ける。まるで高慢な貴族の令嬢が下男を挑発するかのような色香を放っていたと、この時の事をフレイは後に語った。

「泊めてくださいワン」

「プライド無いんかあんたーー！」

思わずスパコーンと突っ込みを入れる朔耶。素直にしてもストレート過ぎだろうと憤慨したが、叩かれたドーソンにすれば理不尽以外の何ものでも無い。

「き、君がやれと言ったんじゃないか！」

「ホントにやるとは思わないわよっ　恥ずかしいでしょうが！」

周りには何時の間にか野次馬の人垣が出来ていた。何せ人の多い第一中継地である。

「ああもう！　お腹空いたから早く戻るわよっ　フレイ、彼にどっか寝床貸してあげて？」

「畏まりました」

まだ疑問が解消されていないのだがと首を傾げながらも、彼女等の後に付いていくドーソンだった。

夜更け――

中継地の整地された区画より少し離れた岩場の影に、人目を忍ぶように身を潜める女の姿があった。やがて待ち人の接近を察知したのか、岩陰から身を晒し、その名を呼ぶ。

「レイスさま」
「待たせたね、サクヤは？」
「他の侍女に任せてきました、よく御眠りのようです」
「そうか」

レイスは侍女姿に扮したフレイの傍まで歩み寄ると、そっと彼女の身体を抱き寄せた。頬を赤らめて身を預けるフレイは身体中の力が抜けていくに任せて吐息を漏らした。

「もうすぐだ、フレイ……あの娘の立場を上手く利用すれば、我がアクレイア家の再興もそう遠くは無い」
「……はい」
「フレイ……？」

レイスの腕に抱かれて恍惚としながらも、フレイはサクヤを利用する事に良心の呵責を感じていた。

「そんな顔をするな、別に彼女に危害が及ぶわけではない」
「そうですが……あの方は、優しすぎます」

確かにな、とレイスは思う。夕食に戻って来た時、あの村の村長の息子を連れ帰って来たのを見た時は流石に言葉を失った。村で結果的に暴行を働いた同僚のヴィンスに対する処分も、随分甘いものだったと聞いている。

あれでは王女と謁見した後は王権に取り入る事しか能の無い私欲の権化共が、蜜に群がる蟻の如く押し寄せるのが目に見えている。そうなれば没落したアクレイア家ではどうやっても彼女の獲り込みに競り負けてしまうだろう。

王都に辿り着くまでの直接護衛の任務に就いていられる今が最もアドバンテージの高い状況だ。今の内に彼女の信頼を得ておく必要があった。

「サクヤから王女に、王女から王に口添えを通して貰えれば、我々の派閥にいた他の門閥家も再び戻って来よう」
「ですが……、彼等は信用なりません」
「信用などいらぬ。奴等が我々に付く、その事実だけで良い」

レイスは自分達と対立する派閥に日和見で擦り寄って行った貴族達を鼻で笑いながら、元より仲間意識など持つつもりの無い事を仄めかした。

魔術が盛んではないフレグンスにおいて、魔術士の家系であるアクレイア家は戦功によってその地位を伸し上げていた。平和が続き、武勲を上げる機会を失うに従って戦闘魔術に特化したアクレイア家の力は衰退していった。

対立していた門閥家に宮廷魔術士長の座を奪われるとその求心力は一気に失われ、日和見の貴族達が派閥を抜けた事から遂には没落するに至った。

「フィレイヤ……僕は辺鄙な地に追いやられたまま一生を終えるつもりは無い」

「レイス、さま……」

レイスはフレイのファーストネームを囁き、彼女の唇に口付けを落とした。

15話：アンバッスさんの拳骨

「思い立ったら即、行動！　うちの家訓なのよね」

車室に備わっている寝台で横になっていた朔耶は浮かんだアイデアを具現化する為に起き出すと、テーブルの端に纏めてある魔力石と工具を手に取った。

思い浮かんだのはついさっき夢の中に出てきたオタ兄が『フタエノキワミアー！』とか叫びながらサンドバックを叩いているシーンと、理屈弟が浸透勁（しんとうけい）がどうのこうの語っている所。それにミリタリーオタの幼馴染が自慢気に見せびらかしていた軍採用品のごつい防刃グローブ。

計測器を作る過程で特定の周波数のように魔力の高さを複合させた流し方をすると反発し合ったり引き合ったりする効果が高まる事を見つけ、何かに使えないかと考えていたのだが、暗い車室の窓から見える焚き木の光を眺めていてレティレスティアと出会ったあの森での出来事を思い出し、一つ身を守る道具でも考案してみようかと思い至ったのだ。

「サクヤ様……どうかなさいましたか？」

「あ、起こしちゃった？　ごめんね五月蝿くしちゃって」

材料が足りないので何かないかとゴソゴソしていると、物音に気

付いた侍女が起き出してきた。朔耶の気遣う言葉に恐縮しながら一緒に材料を探し、作業を再開する朔耶にお茶を淹れてくれる。
休んでても良いという朔耶に、主が起きているのに仕えている自分が休んでいる訳にはいきませんと仕事人の気概を見せる侍女さん。朔耶は『悪いなぁ』と思いつつも、イメージが消えないうちに基礎を組上げる作業を続行する事にした。

「そういえば、フレイは？」
「彼女は私と交代で休んでいるようですよ？」

アイデアを捻り出しながらの没頭状態で無い場合は割と思考が暇になるので、雑談しながらの作業に勤しむ。この侍女さんは結構お喋り好きらしく、話に乗ってくれるので朔耶は作業を進めながら会話を楽しんだ。

そのうち話題が騎士達の事に移ると、侍女さんは目を輝かせて朔耶が親しげに話すアンバッスの事を尋ねたり、レイスの魔力を測った時の事を話したりした。

「レイス様は魔術士の家系の方ですし、元々は魔術士として修学なさってましたからね」
「へぇ～詳しいんだね？」
「王都では高名なアクレイア家の方ですから、知らない方のほうが少ないと思いますよ？」
「あ、レイスってやっぱり良いトコの坊っちゃんなんだ？」

その言い様がおかしかったのか、侍女さんはクスクス笑いながらレイスの家の事について語ってくれた。
フレグンスがまだ近隣国と刃を交えていた戦乱の時代、その末期頃からアクレイア家は卓越した戦闘魔術でフレグンスに勝利をもた

らす常勝の将として武勲を打ちたて、一介の魔術士から大貴族の仲間入りを果たした所謂(いわゆる)成り上がりの家系だった。

戦乱の時代が終わりをつげ、各国々が戦争の傷跡を残しながら復興していく最中もアクレイア家の威光は近隣国への牽制となり、敢えて矛を向けようとする者の存在を抑え込む事で国の復興を助けていた。

情勢が安定し、平和が訪れると、アクレイア家と共に武勲で伸し上がった仲間の家々も他の貴族達と交流を図り、門閥貴族の仲間入りを果たして行くが、アクレイア家は魔術士の家系という性質上、魔術が盛んではないフレグンスにおいて中々血縁関係を結べる相手が居なかった為、時代の流れに置いて行かれるように衰退していく。

「ふ～む、じゃあレイスの家って没落貴族って事かぁ」
「そ、そんなズバリと……」

侍女さんは朔耶の歯に衣着せぬ言いっぷりに思わず周囲を気にした。

「大丈夫、誰も聞いてないって」
「……サクヤ様は、レイス様とは余り親しくなさらないのですね？」
「あ、やっぱそう見える？」

肩を竦めながら問う侍女さんの言葉に、自覚がある事を口にしながらついでに質問を加える。

「レイスってさ、女の人には誰にでも優しいの？」
「う～ん……、特にそんな事はないと思いますけど……普通に紳士的だとは思いますよ？」

「ふむ……例えばさぁ、相手が女の子だって理由だけで他の騎士の人達が厳しく接してる罪人の子にも優しく丁寧に扱うとか」
「それは無いと思いますよ？　レイス様も頼りなげに見えて騎士としての矜持はしっかり持ってらっしゃいますから」

『やっぱ頼りなくみえるんだ？』と苦笑する朔耶に『今のは内緒で！』と焦って懇願する侍女さんに微笑ましい気分を感じながら、朔耶は自分の勘が告げていたレイスへの警戒感が輪郭を成して行くのを自覚した。

「じゃあさ、レイスが王都じゃなくて辺境の騎士団にいるのって没落したからなのかな？」
「ああ～それは……」

ここだけの話ですよ？と声を潜めて念押ししてから王都で噂されている代々宮廷魔術士を勤めていたアクレイア家が対立する家にその座を奪われた逸話と、その後の顛末を聞かせてくれた。

宮廷魔術士長を決めるのは四年に一度くらいの周期で、最も魔術の才覚が高い者が選ばれる。
その選考方法は分かり易く、特定の魔術のみを使った試合の勝敗によって決定されるのだが、今から四年前に行われた選考試合でアクレイア家代表だったレイスの父『ルィバンス・チル・アクレイア』は、対立するコースティン家の『フエルト・バルト・コースティン』に敗れ、戦乱時代以後続いていたアクレイア家の宮廷魔術士長という地位を明け渡す事になった。

しかし試合が行われた直後、ルィバンスはこの試合にコースティン家の不正を叫んだ。対立する両家なだけに、ルィバンスはこれまでに何度も手合わせをしてきた相手であるフエルトの実力を正確に

把握していた。

にも拘らず、この試合ではフエルトの放つ魔術の威力や持続力が異常に高く感じられ、しかも魔術を放っている本人もそれに翻弄されている様相があったと主張した。

だが証拠は見つからず、結局不正の証明は出来なかった為、この件はアクレイア家がコースティン家に不義の糾弾を行った事に謝罪する形で決着がなされた。

「当時十六歳だったレイス様はルィバンス様の師でもあられた魔術士エイディルト・バーン様の元で魔術の修行をしてらっしゃったのですが、そのまま魔術士の道を歩むという事は宮廷魔術士長となったフエルト様に仕える事になるからと……魔術士の修学をやめて騎士団に入られたのですわ」

「わ～……な～んか複雑だね～……」

「しかも、それだけでは終わらなかったんです！」

侍女さん達にとってはこういう貴族達の裏話噂話が、深く関わる事は危険でありながらも最大の娯楽でもある為、彼等の身の回りの世話をする彼女等の情報網と伝達速度、正確さには侮り難いものがある。

そうして溜め込んだ情報は普段仲間内で囁きあって想像に耽るくらいで吐き出す機会が無い為、朔耶のように何も知らない上に聞き上手な相手を前にすると止め処も無く溢れてしまうのだ。

「王都の騎士団候補生の中にはコースティン家の派閥に属する方が沢山在籍していらっしゃってて……」

「あー、なんか先が読めた……その派閥関係で辺境に飛ばされたっ

てとこね？」
「ええ、それも一番の成績を残しながら。対立派閥の御子息の方々を片っ端から叩きのめしたとかで、半ば懲罰的に辺境騎士団送りにされたとか」
「へぇ～……そこはちょっと意外かも」
『クールに見えて案外熱い人なのかもしれないなぁ』などと呟きながら、朔耶は削った石の組み込みに入った。
「あの……ところで、それは何をしていらっしゃるのですか？」
「これはねぇ～、ん～……なんて言おうか」
作業の手は止めず、少し考えてから朔耶はいいこと思いついたと言わんばかりの顔で言った。
「アンバッスさんの拳骨！」
「……はい？」
まるでそこに空気の膜でも出来ているかのような反発力を生む配置に組み合わせた複数の魔力石の固まりを一個のユニットとし、これを護衛隊の馬車からくすねて来た辺境騎士団の甲冑の篭手を分解して中に組み込んだ即興の道具。
反発力ユニットが生み出す魔力の反発力を向かい合わせて圧縮させ、一気に放出する『殴り系』の武器だ。
「まあ、思いつきで作っただけだから実際に使えるかどうか分かんないんだけどね、ちょっと実験」
「はあ……、一体どんな効果があるんですか？」

侍女を伴って馬車の裏口から降り、手頃な的は無いかと辺りを見渡す。周囲の人々は皆寝静まっているのであまり大きな音は立てられない。

それなら水汲み場の川原はどうですかと言う侍女の助言で川原に向う事にした。

乱れた侍女服を整える前に身体の火照りを治めなければと、フレイは川原で水浴びに勤しんでいた。

まだ風も冷たい季節なうえに深夜であるからして、川の水はそれこそ刺す様な冷たさだったが、炎を操る魔術を得意とする彼女は掬った水を温かくして身体に流した。

それでも直ぐに冷めてしまうので手早く済ませて馬車に戻ろうと浅瀬に足首まで浸かって身体を洗う。

「こりゃあ良いもんが見られたなぁ」

「な？　言った通りだろ？」

「へぇ～、貴族の使用人も中々のもんだなぁ」

唐突に響いた男の声に驚いて振り返ったフレイは、岩の近くに三人の男の姿を見つけて慌てて水の中に身体を沈ませた。水の冷たさよりも知らない男達に裸を見られた事に対する羞恥で耳まで赤くする。

三人の男は酔っ払っているらしく、酒瓶を回し飲みしながらフレイが岩陰に脱ぎ置いていた侍女服を摘み上げては眺めている。その

うち腰巻を見つけて馬鹿笑いを始めた。

「おう～コレを巻いてるんだなぁ？」

「うっはっはっ！」

「ちょっと俺にも貸せよ」

魔術で追い払おうにも距離のある相手に使える自分の魔術は何れも強力な攻撃用なので、下手に当てれば三人とも消し炭にしてしまうし、服も燃えてしまう。近接戦闘用の術もあるが、素っ裸で彼等の前に立つ勇気は無い。

川から出るに出られず、『どうしようどうしよう』と焦っているフレイの耳に、聞き覚えのある声が聞こえた。

「き、君たち！　レディが困ってるじゃないか、服を置いて直ぐに去りたまえへ！」

先刻、朔耶が馬車への帰り道で拾ったドーソンだった。

夜中に喉が渇いて起き出したドーソンは、敷居の向こうで寝ている侍女達に茶を淹れて貰うわけにもいかず、水を飲みに川まで降りて来た所で馬鹿騒ぎしている酔っ払いの男達と、川の中に裸でしゃがみ込んでいるフレイの姿を見つけ、男達が侍女の服を玩んでいるのをみて状況を理解した。

『既に弄した策』は事後承諾。『打った手』は見当違いに導かれる。貴族被れの馬鹿息子と誹られるドーソンだが、被れているのは貴族ばった気取る部分ばかりでは無い。

か弱き女性は守らねばならぬという騎士道精神にも一応は被れている。いい格好しぃな所も普通に持っているのだ。

「ああん？　ガキはお寝んねの時間だぜ～？」

「レディだとよっ　ククッ　レディだとよ！　おい聞いたか」
「おい、その腰巻俺にも貸せよー」

舐められている、当然だ、相手は三人で年も自分より上だろう、しかし酔っ払いだ、なんとかなるかもしれない、そうすればあの麗しき侍女殿が僕にお礼を……。

そんな事を頭の中でぐるぐるさせながら、ドーソンは何か武器になるものは無いかと足元を見渡し、見つけた棒切れを構えて近付いて行った。

「さ、さあ！　立ち去るなら今の内だぞ！」

腰が退けながらも棒切れを構えてにじり寄るドーソンを、三人は急に黙ってじーっと見詰め始めた。沈黙と静寂が怖い。怖いので何かを叫ぼうとドーソンが口を開きかけた瞬間。唐突に男の一人が酒瓶をぶん投げた。

「うわあ！」

顔面目掛けて飛んで来た酒瓶を、咄嗟に棒切れで打ち払ったので直撃は免れたが割れたビンから飛び散った酒がドーソンの視界を奪う。慌てて服の袖で拭おうとした所で蹴り飛ばされて川原の上に転がった。

「ガキがナニ粋がってんだ！　あぁ？こらぁ！」
「レディってか！？　レディってか！？　ぎゃっはっは！」
「……」

罵り哂い、或いは無言で三人は無様に転がるドーソンを蹴りまく

った。

「おいっ　何とか言ってみろガキ！」
「犬の真似しろ犬のっ　ワンつってたろ？お前　ぷっくくく」
「……っ」

転がって蹴りの包囲網を何とか抜け出し、フラフラと立ち上がったドーソンは握り締めた拳を突き出した。が、あっさり避けられると横から蹴られて再び転がる。
堪らず制止の声を上げるフレイ。

「やめて下さい！　もうヤメテ！」

フレイは助けを呼びたかったがこの姿では人を呼ぶ事は憚られる、服は男達が掴んだままだったのでやはり川から上がる事が出来ず、ドーソンを蹴り続ける男達に懇願の声を上げるしか出来なかった。
強力な魔術を使えるフレイだが、その強力さ故に迂闊に行使出来ないという部分でまだ未熟でもあるのだ。

その時、中継地の方から現れた小さい人影が素早く駆け寄って来ると、三人のうち無言でいる男の脇腹に腕を押し付けた。
次の瞬間。ドムッ　という硬い棒で肉の詰まった袋を強打したような鈍い音が響き、無言の男は身体をくの字にして横に跳んだ。そして着地出来ずゴロゴロと転がると、嘔吐(えづ)きながら胃の中身をぶちまけた。

突然の事にこの場の空気が固まり、跳んで行った場所で吐いている仲間をポカンと見ていた哂う男の下腹に篭手のようなモノが押し当てられる。
なんだろう？　と視線を降ろした瞬間、男は身体をくの字に曲げ

て吹っ飛び、背中から川原に叩きつけられながら腹を押さえて悶絶した。

「な……っ！　へ……？　……あ？」

「う～ん結構使えるかも、でもちょっと反動がキツイかな～」

混乱する残った一人を尻目に、朔耶は篭手の使い心地について一人呟く。急に攻撃が無くなり、聞き覚えのある声が聞こえてドーソンは傷だらけの顔を上げる。

「……サ……ク……ヤ……？」

「ちょっと見直したよ、ドーソン」

月影を背に黒髪を靡かせる少女。にっこり微笑む朔耶が、騎士の甲冑の腕部分を右手に装備して見下ろしていた。

16話：緊張感

護衛隊の人達を呼んで来るように朔耶から言い付かった侍女の連絡を受け、アンバッス達が川原に到着すると、小柄な黒髪の少女が倍程もありそうな大柄の男を投げ飛ばしている所だった。

思い付きとあり合せの材料で作った『アンバッスさんの拳骨』こと『寸勁の篭手』は衝撃の反動で中の機構にゆがみが出て圧縮反発力が上手く発生しなくなったので、最後の一人は柔道技の一本背負いでぶん投げたのだ。

エバンスの本部で独房に入れられた時に見た戦いを生業にしているプロの傭兵のような相手ならともかく、身体が大きいだけの酔っ払いなどは軽くあしらえる程度の体術は身につけていたりする朔耶なのであった。

「何をやっとるんだっ　お前は！」
「あ！　アンバッスさん遅いよっ　すっごく怖かった！」
「うそつけ」
「てへっ」

離れた場所で腹部を押さえて悶絶している二人と、背中から叩き落されて自重の威力で息が詰まっている男を護衛隊の騎士達が拘束していき、侍女たちがドーソンの手当てに回った。

フレイはレイスに保護されて彼のマントで身体を覆っている。

「大丈夫か？」

アンバッスが声を掛けると、彼女は小さく頷いた。

「僕は彼女を馬車まで送ってきます」

「ああ」

「……」

レイスに促されて中継地に戻る途中、フレイは治療を受けているドーソンと目が合った。

「やは、無事で何よりですレディ……ってあいたたたたっ　そこ痛い痛い！」

思ったより元気そうな様子にホッしながらお礼の言葉を口にする。

「すみません……ありがとう御座いました」

「いやなあに、女性を守るのは男として当然の……痛い！痛い！君達ぃっワザとやってるんじゃないのかね！？」

クスッと笑みを溢したフレイは、会釈してこの場を後にした。

フレイの肩を抱くようにして歩くレイスは、徐に口を開く。

「少し、冷えているな」
「川の水は、まだ冷たいですから」

馬車に戻る道程を歩きながら、二人は囁き合うように会話を交わす。それは決して甘い響きを持つ語らいなどではなく、上司と部下のような壁を感じさせるモノだった。

「しかし……サクヤの作る道具には驚かされる」
「ええ、私も驚きました……まるで衝撃の魔術のような力を発現していました」
「魔力計測器もそうだが、アレは……奴に仕掛ける時に使えるな」
「そうですね……、正確な個人の魔力を示す事が証明出来れば、『発掘品』の使用を暴けるかもしれません」

将来の計画に備えての打ち合わせを兼ねたような会話は、今後の活動方針と事件の処理についてに及ぶ。

「レイスさま、彼には新しい制服を支給してあげて下さい」
「そうだな……それくらいは報いてやってもいいだろう。サクヤにもそうした方がアピール出来る」

そうして必要事項を確認し終えると、自分達に関する仕事の会話は終了する。

「……それはそうとフレイ、こんな夜更けに何の用で川原などに？」
「え！　そ、それはその……」

突然動揺し始めるフレイに、レイスは表情を硬くする。何か疚しい事でもあるのか、僕に隠し事でもあるのか、と。

「なんだ？　僕に言えない事か？」
「そ、その……レイスさまが……あんな所で、あの……なさるから……その」

真っ赤になって俯くフレイのしどろもどろな言葉に、レイスも顔が熱くなって来る事を自覚した。なんの事は無い、自分の甘い自制心が原因だったのだ。

「す、すまない……」
「いえ……」

そんな調子で微妙に顔を赤らめた二人は誰にも見られる事なく馬車に着くと、フレイはそそくさと中に入り、レイスは現場に戻る道を急いだ。

件の三人を口頭の厳重注意で解放した後、アンバッスは護衛隊の馬車の中を漁っている朔耶を見つけて声を掛けた。

「こら、勝手に備品を持ち出すんじゃない」
「え～いいじゃん、あたしが許可するからさ」
「許可するなっ　つうかお前、自分の立場を躊躇無く利用する気だな」
「権力は行使する為にあるのよ！」

アンバッスの『賢者の言葉マニア』な琴線に触れるような事を言

いながら何時もの掛け合いをしつつ道具作りの材料をせしめた朔耶は、足取り軽く自分の馬車に戻っていく。
持ち出したのは護衛隊の馬車の中に置いてあった見栄えのいい盾だった。明日の出発から街に着くまでの間に弄って暇を潰すのだ。改造した篭手はとりあえずの威力は分かったので、後日機会があればきちんとした物を作る予定で放置した。

――翌朝

第一中継地を出発した一行は次の目的地、バーリッカムに向けて移動を開始した。

出発前にありったけの魔力石を拾い集めておいた朔耶は、馬車の中で朝食を済ませた後はずっとテーブルに向かって石を削り、道具作りに没頭していた。
アンバッスは相変わらず護衛隊の馬車の御車台に座っており、レイスは定位置の騎士共々大型馬車の車室で朔耶の作業を見守っている。ちなみにドーソンは侍女たちの馬車に同乗して王都まで連れて行って貰える事になった。
色々と雑用を任されているようだが、女性ばかりの侍女の馬車内で働くのは満更でもないようだ。

護衛隊の馬車内で若い騎士が首を傾げながら荷物を引っくり返している。

「おっかしぃな～、ここに置いといたのに……何処に片付けたんだ

ろう？」
「何を探している？」
「あ、隊長。自分の盾知りませんか？　キャリゴルの銘入りのやつですけど」
「ああ、あれならサクヤがかっぱらっていった」
目を丸くしている若い騎士に同情の視線を向けながら、アンバッスは慰めの言葉を与える『諦めろ』と。

『キャリゴル』というのは武具の製造工房を運営している技師の略称で『キャリゴル・フリッペ・スティンス・ジストー』という長い名前の高名な武具制作技師だ。

武器にも防具にも其々ランク付けがなされていて、無名の技師や鍛冶屋が作った一般の店に売りに出されている武具は大体が『星一つ』から『星二つ』のランクとなっている。
高名な技師は『星三つ』から『星五つ』まであり、『星三つ』から上のランクの武具には其々一人の銘しか入らない。

『星三つ』には『キャリゴル・フリッペ・スティンス・ジストー』の『キャリゴル』
『星四つ』には『オールグレン・プルセイ・ゲリ・バウアー』の『オールグレン』
『星五つ』には『シュベルコー・スティップ・ラップ・ラルゴー』の『シュベルコー』

キャリゴルクラスの武具なら一介の騎士にもどうにか手が届く程度の高級装備だが、シュベルコークラスの武具になると、剣一本でも王都に屋敷が一軒買える程の値段が付く。

「えええ！　かっぱらったって……あの盾、魔術士に呪文刻んで貰おうと思ってやっと買ったんですよ！？」

装備を強化する為に魔術士に呪文を刻んで貰うには、最低でも星三つクラスの武具からになる。

これは別に武具の性能が星三つクラス以上でなければ呪文を刻めないという訳ではなく、単に魔術士達が魔術を侮られたく無い事と、自分の力を高く売る為に安い武具には刻んでくれないのだ。

また、安い武具を強化する事で高い武具が売れ難くなるからという市場の思惑もあると裏では囁かれている。

「そんな大事なら見せびらかすような場所に置いておくな、まあ上手くすれば呪文強化より強力な盾になるかもしれんぞ？」

「……サクヤ様の、アレですか？」

「そう、アレだ」

護衛隊馬車の中に放置されている奇妙な改造が施された篭手。今は壊れていて使えないようだが、小柄な少女が大の男を片手で軽々吹き飛ばせる程の衝撃を生む機能が備わっている。

「アンバッスさんの拳骨ですか……」

「……その名前はやめろ」

なんでそんな名前をつけたんだ、よりによって拳骨か、なんで俺なんだ、と理不尽な思いに苛まれているアンバッスを余所に、なけなしの貯金で買った盾を持っていかれた若い騎士は、無事に手元に戻って来ますようにと祈っていた。

昼頃になって、一行は街道の宿場街（といっても規模は小さい集落だが）に立ち寄り、昼食と休憩に入った。
朔耶は作業に没頭しているので近くに食べ易く纏めたサンドイッチのようなパンに肉を挟んだ食べ物を置くと、作業を続けながらひょいぱくと食べていく。
行儀は悪いがそれを指摘するような人物はここには居ない。朔耶は快適な環境で制作を楽しんでいた。

出発までまだ暫らく時間があったので、盾の状態が気になった若い騎士は朔耶が詰める大型馬車の車室を尋ねた。護衛の騎士が私用で王女の客人を訪ねるなど、通常なら不敬の誹りを受ける行為だが、既にそんな事を気にする者はこの隊にはいない。
何せその客人本人が初日から休憩時間になる度に護衛隊の馬車にやって来ては入り浸って遊んで行くものだから、皆いいかげん慣れてしまったのだ。

「あの～……」
「うん？　何か用かい？」
「いえその……自分の盾の事なんですけど」
「ああ、アレかな……」

と、レイスが視線を向けた先には、……分解されてバラバラになった盾の残骸がテーブルの上に散らばっていた。

『～～～～～～！』

声に出せない悲鳴を上げながらムンクな顔になっている若い騎士

に、レイスは気遣うような言葉を掛けた『ご愁傷様』と。

朔耶は地味ながら手は抜けない反発力ユニットを作る作業をようやく終えて、分解した盾の中身の部分、半円形の鉄型の上に並べていく作業に入っていた。

結構大き目の盾なので、全面を覆う為には三百個以上のユニットが必要だった。朝からずっとそれを制作し続けて今はそれ並べている状態。

「フレイ～、手伝って～」

「あ、はい」

フレイはちらりとレイスに視線を向けてからテーブルに向かうと、中身が剥き出しになっている嘗て『キャリゴルの盾』だったモノの上に朔耶が作った反発力ユニットを朔耶が並べるのを見ながら同じ様に並べて行く。

単純作業に入って思考が暇になったのか、朔耶は雑談調でレイスに声を掛けた。

「レイスってさ～、実家は王都にあるんだって？　ご両親は？」

「僕の家ですか？　父が健在ですよ、屋敷はもう随分古くなってしまいましたが」

「ふ～ん、ちゃんとお父さんと連絡取ってる？　親って子供が幾つになっても心配するんだよね」

何気無い会話、朔耶も兄弟と両親がいるが、今は遠く離れていて連絡も出来ないからきっと色々心配しているんだろうなぁと、距離どころか世界レベルで離れてしまっている朔耶はその事は口にせずとも、遠い異国の地に来て家族と会えない寂しさを感じさせるよう

な雰囲気を纏って言った。

「ふふ、ご心配なく。ちゃんと二日に一度は手紙のやりとりで近況の報告はしてますよ」

「そうなんだ～。じゃあ、王都で何かあっても直ぐ分かるね」

『ええ、そうですね』と答えようとして、声が出なかった。レイスの背中に冷たいものが走る。朔耶は作業をしている盾から目を離す事なく、淡々としていた。

「ん？　フレイ、香水付けてるんだ？」

「え？　あ、す、すみません」

「別に謝る事じゃないと思うけど……」

『いい匂いだねー』と苦笑しながら、朔耶は香水の香る条件を何気無く口にする。

「香水って体温上がったり発汗作用があると急に香るよね、フレイ今体温上がった？」

「い、いえ……私は……」

「あ、そこ向き逆ね」

「はっ　す、すいません！」

急に空気が重くなったような違和感を感じ、若い騎士は首を傾げる。定位置の騎士の方を見ると、彼もなんだか奇妙な雰囲気を感じているようだ。

その後は暫らく静かに地味な作業の音が続いていたが、最後の一個を並べ終えた朔耶は立ち上がって伸びをした。

「んだあああああっ　やっと並べ終えた～～～！　さて、後は蓋し

て組み立てよう」

麗しき乙女にあるまじき雄叫びを伸びに乗せ、身体が解れた朔耶は分解した盾の組み立てに入るのだった。

17話：魔法の盾

「ねぇ、まだ時間ある？」

組みあがった盾を裏返したり傾けたりして出来栄えを確かめていた朔耶は、先程から考え込むようにして沈黙しているレイスに声を掛けた。一瞬だけ狼狽する表情を浮かべたレイスは、今日の残りの行程を思い浮かべながら答える。

「ええ、まだ少しは余裕がありますよ？」

「そっか、じゃあちょっと実験に付き合って？」

ぞろぞろと朔耶の後ろに続く騎士二人と侍女一人は、途中で他の騎士とも合流して街道脇の開けた場所までやって来た。定位置の騎士は留守番である。

かっぱらった盾が若い騎士の物だった事を聞かされた朔耶は、盾をその騎士に渡すと構えるように指示、アンバッスにその辺りに落ちてる棒切れで叩いてどの程度強度が上がっているか確かめる実験を提案した。

「だ、大丈夫ですかね……？」

盾を構えている若い騎士は不安げに呟く。アンバッスは転がっていた適当な丸木を拾い上げて、ブンッと一振りし、これなら手頃だ

と盾を構える騎士の前に立っていた。

「まあ、元の性能が失われていなければ、この程度の打撃で壊れる事はないだろう」

星三つクラスのキャリゴルの盾は、基礎となる盾型の中に薄く鞣した革と柔らかい厚みのある革、鉄糸を編みこんだ丈夫な布、それに薄く延ばした青銅の板を何重にも重ねて強度と軽量化を図りつつも刃を通さない粘り強さに衝撃を吸収する工夫が施された高級装備だ。

今回朔耶が弄ったこの盾は中身の大部分が抜き取られていて、反発力ユニットの隙間を埋める為に穴を空けた革が何枚か戻されているが、青銅の板には穴を空けるのが『面倒』だったのでそれらは殆ど外されたままだった。

テーブルの隅に放置された青銅の板を哀しげに撫でる若い騎士の哀愁漂う姿が、先程までの車室に見られていた。

「鞣した革となんだかよく分からない粒々を沢山並べてたみたいですが……型枠と革だけじゃ簡単に拉げちゃいますよ……」

「まあ、どんな仕掛けがあるのか試してみようじゃないか。行くぞ？」

丸木を振りかぶったアンバッスに、若い騎士は覚悟を決めると腰を落として衝撃に備える防御の体勢を取った。そして盾に向かって薙ぎ払うように丸木を叩き付けたアンバッスは、そのままゴルフスイングのような体勢になりながら天高く丸木を掲げた。

「……」

「あの……隊長？」

「……なんだ今のは」

「はい？」

腰を痛そうに手で抑えながら、アンバッスは朔耶の方を振り返ると『今のはなんだ』と問い掛ける。見ていた他の者達にはその問い掛けの意味が分からなかった。

「あっはっはっ　いや～跳ね返すか受け止めるかになるかなって思ってたんだけど、受け流しになったみたいだね～」

反発力ユニットによる空気の膜のようなモノが盾の表面をコーティングしていて、丸木がぶつかる直前にその膜に弾かれ、盾の曲面にそって軌道を逸らされたのだと朔耶は説明した。

どれ？　とアンバッスが盾に手を触れようとすると、確かに何か空気の膜のような力に押し戻される。表面に触れる事が出来ないのだ。

「あんまり細いモノとか、点の衝撃は上手く弾けないかもね」

と、この盾の機能の特徴を上げる。若い騎士は俄かに歓喜していた。今のような攻撃を受け流せるなどという現象は、強化の呪文を刻んで貰っても起こり得ないモノだ。

呪文の強化で得られる効果といえば、代表的な所で軽量化か硬度の増加、少し値を張れば多少の対魔術効果が付与される。

対魔術と言っても、正規の魔術士が放つ攻撃魔法を防げるような効果は無いが、何の防御対策も無しに直撃を受けるのに比べたらマシなぐらいの効果はある。

元々魔術相手に剣と盾で正面から挑むという状況事態がまず有り得ないので、盾が防ぐのは相手の武器による物理的な破壊力だが、この盾は魔法の障壁のようにその物理的な攻撃を受け流せてしまえるのだ。

先程のアンバッスのように、打ち付けたと思ったら滑って体制を崩される。近接戦闘において相手の攻撃を防ぐと同時に隙を奪える盾、正に魔法の盾、これほど優秀な盾は無い。

「じゃあ次、レイスにやって貰おう～。なんか魔法撃ってみて？」
「え？」

盾が思いもよらず強化されて戻って来た事に感動していた若い騎士は、朔耶のその言葉に固まった。レイスは騎士の中でも魔術を主体とする珍しいタイプの騎士だという事が知られている。
しかも、戦闘魔術に関してはフレグンスで並ぶ者無しと言われたあのアクレイア家の子息である。色々事情があって魔術士の道から騎士に転向したと聞く。つまり、魔術の腕は正規の魔術士と変わり無い。

「サクヤ、それは無茶だ」
「サクヤ様、僕の魔術は攻撃用が殆どなので、当てれば彼が無事で済みませんよ」

諫めようとするアンバッスとレイスに内心応援を送りつつ、若い騎士もうんうん頷く。

「ん～？　そんな無茶苦茶強力なヤツじゃなくて、普通のでいいよ？」
「普通のって……お前、攻撃魔術の威力を見たことが無いのか？」
「うん、ない」

キッパリ答える朔耶。ああ……と脱力しながら額を手で覆うアンバッス達。

「そんなに危ないんなら……あの岩の辺りに盾だけ置いて当ててみれば良いんじゃない？」

あくまでも魔術を使わせようとする朔耶に理由を尋ねてみると。

「実際にどの位まで耐えてどの位で壊れるか、しっかり検証したいのよ」

「何故だ？　魔術の威力を知らんのはまあいいとして、何故そこまで拘る？」

アンバッスは朔耶の作る道具の威力とその意味について、多少の推測を立てていた。帝国との開戦が現実のモノとなりつつある今の情勢、準備も足並みも今ひとつ揃わない近隣国。

傭兵や魔術士をどんどん雇って囲い込んでいるとされる帝国に対し、此方には有効な対抗の手立てが殆ど無い。騎士団の士気や錬度に問題は無いが、魔術士や攻城戦の大型兵器の技師に関しては完全に出遅れている。

そんな中に現れた奇抜な技と発想で驚異的な力を秘めた道具を創り出す不思議な少女。『サクヤはこの国で何をしようとしている？』そんな想いを篭めて尋ねたアンバッスに、朔耶は答えた。

「あたしの知的好奇心を満たす為よ！」

盛大に顔を顰めたアンバッスが無言で合図を送ると、がっくりと項垂れる若い騎士がノロノロと盾を指定された岩に立てかける。

『考え過ぎか』というアンバッスの呟きは誰の耳にも届かなかった。レイスは、至高の一品となって戻った盾との再会も束の間、喜びから一転絶望の別れへと突き落とされた若い騎士に哀れみの視線を送りつつ構えた。

「では、いきます。――風よ水よ集いて凍て付く刃となり――」

詠唱によってレイスの掲げた両手の間に氷の塊のようなモノが出現し、見る見る大きくなっていく。

「わっ　凄い……氷が出てきたよ？」

「ふ……あれは、本当に氷があるわけじゃない、レイスの魔力があいう現象を具現化させている一種のまやかしのようなモノだ」

『威力は本物だがな』と、見慣れているアンバッスが、隣でポカンと口をあけて見惚れている朔耶に説明してやる。

朔耶はナルホド～などと呟いて懐から魔力測定器を取り出すと、狙いを定めているレイスの横からそーっと手を伸ばして氷の塊に向け、攻撃魔術の魔力測定を行った。

「魔力石三十個分くらい」

そう言ってひょいっと引っ込む。『危ないことすんな』とアンバッスに叱られているそんな朔耶に、クスリと笑みを浮かべるレイス。自身の攻撃魔術の威力を具体的な数値で告げられるなど、思いも寄らない事だった。

実際、個人の魔力の高さや魔術の威力を計測されたのはレイスがこの世界では初めての被験者である。朔耶はレイスが使う魔術は凍結系が多いと聞いて、独房で感じたあの時の空気の冷たさは、レイスが臨戦態勢に入っていた為だったのかもとか考えていた。

狙いを定め、具現化した力を一気に放つ。哀れな若い騎士には悪いが、せめて未練が残らないよう一撃で粉々に粉砕してみせようと。

パアァァンと乾いた音が周囲に響く。白い冷気の軌跡を残しながら一直線に飛んでいった氷の塊は、盾にぶつかった瞬間、弾け跳ん

で四散した。盾は無傷な様子でそこに立て掛けられたままだ。

「!?　ばかな!」

幾らなんでもそれは無い、とレイスは思わず声を上げた。アンバッスや他の騎士達も信じられないモノを見たと目を瞠っている。そして一斉に朔耶の方へ視線を向けた。朔耶はキョトンとして『どうしたの?』という顔をしている。

「あ、あのなサクヤ……あの盾は、一体どういう仕組みになってるんだ?」

「どうって、魔力石を使った魔力の反発力を内側から放射して表面に膜を被せてるような感じだけど」

「魔力の反発力……あの空気の膜は、まさか魔力そのものだったのですか?」

「?　だからそう言ってたじゃん、最初から」

てっきり魔力の作用で空気の膜を生み出していると思っていた面々、特に魔術に詳しいレイスやフレイは、それがどれ程とんでもない事かを理解しており、故に言葉を失った。

魔力そのものを膜として展開する、それは防御魔法の魔法障壁そのものだ。物理攻撃は勿論の事、魔法攻撃を防ぐには同じ魔力で作った壁を要いるしか方法は無い。そして魔力の壁を維持するには常に詠唱を続ける必要がある。

「ちょっと待ってね、状態調べるから」

驚愕に打ちひしがれている彼等を尻目に、朔耶は盾を拾い上げて表面を押さえながら測定器で調べると、ふむふむ言いながら今の一撃で反発力の殆どが失われた事を告げた。

「すると、もうその盾は普通の盾なのか？」
「ん～このままだと多分、元の盾より弱いと思うよ」

朔耶はしゃがみ歩きをしながら測定器を足元で動かして反応のある石を探し、それを手に取る。

「てい！」

平べったい少し大きめのその石を地面に投げ落として砕くと、そこから反応の高い欠片を拾い集めた。そうして盾の裏側を弄って取り付けていた蓋を開け、中から薄い幅広の木箱を取り出す。

「それは？」
「魔力石のカートリッジ、魔力を溜めておく為の入れ物だとでも考えて」

そう言って木箱を開いて引っくり返す。すると中から小さい石の欠片がバラバラと零れ落ちた。そして今さっき拾った欠片を新たに詰め込み、箱を閉じて盾の裏側に戻す。

「これでよし」
「！　あ、表面の膜が……」

盾の魔力が充填されて反発力が戻った。

「カートリッジは今の所これ一つしかないけど、同じものを幾つか作って持っておけば直ぐに交換して反発力の回復もできると思うのよね」

『はいこれ』と盾を若い騎士に返す。攻撃魔術を防ぐなどという、シュベルコークラスでも有り得ないそれこそ神話に出てくる宝具のような性能を持った盾を渡され、若い騎士はオタオタしながら周りを見渡す。

「え……あの……これ……」

「大事に使ってね」

哀愁から歓喜、そこからまた絶望に落とされた若い騎士は、最後に歓天喜地の喜悦に卒倒しそうな勢いで感謝の言葉を紡いでいた。

出発の時、護衛隊の馬車の中では改造された予備の甲冑の篭手の持ち主を誰にするかで少し揉めた。

「俺のに決まってるだろ」

「隊長それはズルい！」

「あんなに嫌がってた癖に！」

「……」

レイスは馬車の窓から流れる景色を眺めつつ、先程の出来事を思い出していた。任務の時にも使う事のある十分に威力の乗った氷撃だったにも拘らず、あの盾には傷一つ付いていなかった。

あれ以上の威力の魔術を放とうと思えば、実戦レベルでは使えな

い程の詠唱と集中の時間が必要になる。それは戦争のような大規模な戦闘で仲間に守られながら後方からの一撃という使い方をする大魔術だ。

小競り合いや少数、或いは個人レベルでの戦闘で使えるモノではない。そして魔術の攻撃はその性質上そうそう連発出来るモノではない。つまりあの盾は魔術士と正面からやりあえるような武具なのだ。

『しかもその材料が在り合わせの……』

「レイス？」

「！っ　……どうか、しましたか？」

朔耶に声を掛けられ、一瞬肩を震わせながらも普段どおりに振舞おうとするレイスだったが、流石に無理があった。

「いや、それこっちの台詞だから」

「はは……、そうですね。ちょっとさっきの事で驚いてしまいまして」

「そういや皆凄く驚いてたね」

「……貴女は……何者なんです？」

あくまでも軽く答える朔耶に、レイスはついぞ耐え切れなくなって疑問の言葉を口にした。満足の行く返答が貰える事は期待していないが、どうしても気になってしまう。

魔術の事も知らないのに魔術のような道具を作り出し、見た目相応の子供っぽい面を見せたかと思えば、貴族の社交場で交わされる腹の探り合いのような問答を自然な動作で仕掛けて来る。

独房で見せた無頼漢に怯える無力な少女、川原で暴漢を果敢に打

ちのめす勇猛な少女、護衛隊の騎士達とじゃれる無邪気な少女、謀略の糸を掴みながら、それを玩ぶように突付いて見せる少女。『この娘は一体何者だ?』

「あたしは朔耶、ただの女子高生……としか言い様がないなぁ」
「貴女が作る道具は、何れも常軌を逸しているとしか思えない……
……何処でそれ程の技と知識を……?」

朔耶の返答が聞こえていないのか、独り言のようにレイスは続ける。朔耶も返答への反応は気にせず、その呟きの質問にただ答えた。

「あたしの世界の常識をちょこっとこの世界に持ち込んだだけ」
「?」
「あたし、この世界の人間じゃないんだわ……だからこっちの人があたしの道具に驚く理由もよく理解出来ないし実感も湧かない」
「……」
「とりあえず何か自分に出来る事で自分を表現出来る事をやってないとさ、押しつぶされちゃいそうなんだよね」

口調は何時もの軽いまま、だがその表情はとても寂しさを感じさせる憂いを帯びていた。それを見てレイスは、ようやくボンヤリしていた意識が覚醒した。そっと近付いて朔耶の顔を覗き込む。朔耶はそんなレイスをじっと黙って見上げていた。

「貴女は……」

艶のある滑らかな黒髪が揺れ、憂いを含んだ黒い瞳が儚げな光を宿して見つめている。異国人を感じさせる特徴のある彫りの浅い顔立ちは幼げな雰囲気を醸し出す。
何かが違う、この少女の持つ異質さはその言動故に神秘的とも捉

えさせ、活発な普段の印象故に寂しげに向けられた瞳を見つめていると惹き込まれてしまいそうになる。
華奢な両肩に手を掛けると、両手に感じる体温と共にその細さを実感して改めて小さな女の子なのだなと認識し――

「何するつもりかな？」
「！っ」

普段の口調で問われてレイスはハッと正気に返った。

「す、すみません……つい」
「ほっほう～、レイスは『つい』でキスしようとするのかね？　ん？」

おどけたようにそんな事をいう朔耶に、レイスも動揺を収めて普段の調子を取り戻す。

「いやぁ～、サクヤ様があんまり魅力的だったので、惹き込まれてしまいました」
「あたしを引き込みたかったわけね」

唐突に真実を突かれてレイスは絶句する。

「意味はわかんなくてもさ、あたしは自分の本当の事を言ったよ？」
「……」
「だから聞くけどさ、レイスは初めて村で会った時、レティの勅令内容知ってたでしょ？」
「……ええ」

やっぱりね！　と人差し指を立てながらウィンクしてみせる朔耶。

「で、あたしを……どうしたいわけ？」
「それは……」
少し逡巡した後、諦めたように微笑みながら言った。
「僕の家の復興の為に、力になって欲しいと思ってます」
「いいよ」
目を瞠るレイス。予め用意していたかのような僅かな躊躇の素振も無い即答に、逆に途惑った。
「なぜ……？」
「ん～別に、深い理由は無いけど。あたしが話聞いた限りじゃあレイスはそんなに悪い人じゃ無いと思ったから、かな」
「そんなに……ですか？」
「うん、少しは警戒してるよ？　いきなりキスしようとしたりするし～」
ここまでサバサバとした態度に出られると、レイスもどう対応して良いものやら困ってしまった。もうこの少女に演技や謀は通用しそうに無いとすら思えてくる。
「ま、王都に着いてレティに会って、色々ごそごそして落ち着いてからね、ゆっくり話しよう」
「ふふ……分かりました、そうさせてもらいます」
お互いに微笑みあって意思の疎通を果たすと、朔耶は扉の方を振り返り、さっきから必死で彫像になりきろうとしている定位置の騎士に釘を刺しておく。

「他言無用、ね？」
「ハッ！」

この車室で初めて声を発した定位置の騎士だった。

「レイスさま……」
「いや、違うんだフレイっ　さっきのは……」
「ニヤニヤニヤ」
「……」

数刻後、こんな光景が車室で繰り広げられた。

18話：異界の発明家（前書き）

今回はちょっと雰囲気を変えてみました。

18話：異界の発明家

フレグンスとあって無いような国境を接する隣国クリューゲル、その更に隣国であるサムズとの国境に位置する街バーリッカム。

街のいたる所から蒸気が吹き出す温泉の街でもあるここは、大陸中から年中絶える事なく観光客が集まっている。キトに次いで春売りの多い街でもあった。

「すっごい蒸気……遠くが見えないじゃん」

「この街は温泉が沢山ありますからね、サクヤの好きな湯浴みも存分に楽しめますよ？」

「うん、それは楽しみ。でもなんだか蒸し暑〜い」

レイスと一定の距離まで打ち解けあった朔耶は、『様付け禁止』を突きつけて今は普通に呼ばせている。フレイは侍女という立場上、どうしても譲れないとの事だったので妥協した。

夕刻過ぎに到着した一行は予め連絡を通しておいた騎士団にバーリッカムで一番大きい温泉宿へと先導された。

湿気の多い環境の為か、この街の建物の窓は大きく幅をとってあり、風通しの穴も壁の天井際などに空けられている。常に温泉水が流れる水路が街中に通っている特徴的な街並みだ。

「ようこそいらっしゃいました」

宿の支配人らしき人物を中心に涼しげなデザインの薄布な服を纏

った使用人達がずらりと並んで朔耶達を出迎える。
長々とした挨拶を嫌った朔耶は支配人の社交辞令を早々に聞き流し、返しの挨拶では『朔耶です、よろしく！　以下略』で終わらせて狼狽させたりしながら今晩泊まる事になる部屋に案内して貰った。
二階の部屋を確認して早速一階ホールの憩いの場に下りてくると、護衛隊の皆と何故か侍女さんたちも揃っている。

きりきりきり……パタコンッ　　きりきりきり……パタコンッ

「あれ？　みんな揃ってどうしたの？」
「やあ、君も降りてきたのかい？　やはり皆、温泉には興味があるようだねぇ」
「あ、ドーソン居たの？　馬車で寝るのかと思った」
「！っ」

すっかり隊の一員として馴染んでいるドーソンをいぢめつつ、朔耶は皆の顔ぶれを見渡す。

きりきりきり……パタコンッ　　きりきりきり……パタコンッ

「今は一般客用に開放されていてな、団体客も多くて入れないんだ」
「もう少ししたら要人の客層専用に開放されるので、皆で待っているんですよ」
「サクヤ様の部屋には個人用の温泉があったと思いますが……」
「うん、あったけど……どうせなら大きい方がいいかなって。みんなと入るほうが楽しいし」

きりきりきり……パタコンッ　　きりきりきり……パタコンッ

温泉の順番待ちみたいな雰囲気に、朔耶は庶民的な旅行気分を感

じられて少し楽しい気分になっていた。
道中の中継地や集落のような場所での一泊は気楽だが、街に入ってこういうキチンとした場所の宿泊となると、何かと堅苦しい扱いを受けるので、折角の温泉街でも息苦しくなってしまう。やはり皆でわいわいしている方がいいと思える朔耶だった。

きりきりきり……パタコンッ　　きりきりきり……パタコンッ

「ねえ……さっきから気になってたんだけど、あれ何？」

朔耶は先程から気の抜ける音を立てる壁際の奇妙な機械を指して尋ねた。
高さ一・五メートル、幅一メートル、奥行き四十センチ位の木箱が壁に張り付くように置かれ、箱の両脇添いに空いた縦長の溝から腕のように伸びた棒の先に、丸い布を張った大きな団扇のようなモノが一対。
きりきりきり……と持ち上がり、パタコンッと降りるを繰り返している。

「ああ、『ルッテン式扇ぎ機』だな、発明家の『ルッテン・バッス・エリチェルスー』の名が刻んであったぞ」
「キトの好事家大貴族『アリテリス・コールディン・フランバッハ』お抱えの発明家、でしたね確か」

アンバッスとレイスが説明してくれた。結構有名な発明家で、彼方此方の街に色んな発明品を残しているそうだ。朔耶は眩暈にも似た感覚を伴いながらその『ルッテン式扇ぎ機』を観察した。

きりきりきり……パタコンッ　　きりきりきり……パタコンッ

「ダサい……というか、ちゃちい……。そもそも全然風来ないし……もうちょいマシなモノ作れなかったの！」
「な、何で怒ってるんだお前は」
「発明家舐めんなーー！」

朔耶はその『ルッテン式扇ぎ機』のあまりのちゃちさに何だか無性に腹が立った。有名な発明家という部分で何故だか馬鹿にされてる気分になったのだ。

「おいおい嬢ちゃん、ルッテン式を馬鹿にしちゃあいけないよ」
「彼は稀代の発明家で色んな発明品を残してるんだ」

憩いの場にいた客らしき二人組みが朔耶の雄叫びを聞きつけて声を掛けて来た。護衛隊の騎士達は一瞬警戒の目を向けるが、只の客だと分かると警戒を解いてリラックスする。

「コレの何処に稀代の発明家を感じろというのよ……」
「分かって無いなぁ、いいかい嬢ちゃん？　このルッテン式扇ぎ機は一切の魔術を使わずに風を起こす機械なんだ」
「魔術と相性の悪い魔力石を使うって所も痺れるねぇ」
「魔力石使ってるの？　何処に？」

と、興味を持った朔耶はルッテン式扇ぎ機の木箱部分を弄ると蓋の開閉部分を見つけたので開いてみる。中に水の入った桶が二つ並べてあり、その中に魔力石らしきものが沈んでいた。ひんやりした空気を感じたのでこの水桶が箱の中の空気を冷やし、団扇の腕部分の溝穴からその空気を垂れ流しながら扇ぐという仕組みなのだろう。

「ああっ！　下手に弄っちゃ駄目だよ嬢ちゃん！　複雑な構造してるんだから」

「この扇ぎ機はまだ簡単な方だけどね、水車船や馬無し馬車の仕掛けは素人には理解できない世界さ」

『これの何処か複雑な構造かーー！』と再び怒れる文明人モードに入る朔耶。

ルッテン式扇ぎ機は壁の向こう側を流れる水路に設置した水車を動力にしている。水車の軸の先に横棒が取り付けられ、両脇に支点を前後にずらした止め具に団扇に繋がる棒が伸びている。

水車が回って軸が回転する事で軸の先に付けられた横棒が両脇の団扇に延びる棒の先に掛かり、片方は支点の内側、片方は外側を其々押し下げ、押し上げる事で団扇がきりきりきり……と持ち上がり、掛かっていた軸の横棒が団扇に繋がる棒から外れる事で持ち上がった団扇がパタコンッと降りて風を起こす、という構造になっていた。

ちなみに水属性の魔力石が入った水桶だが、水属性の魔力石をそのまま並べても湿気が増えるだけで冷たい空気が得られるわけではない。水の中に入れて石寄せで効果を上げる事で石の温度が下がって行き、水を冷たくする事が出来る。

余程寒い環境でもなければ凍り付くような事は無い。床に縦横の溝を引いて水を流し込み、そこに水属性の魔力石を詰める事で常に部屋の温度を低く保つなどの使い方もあるが、何れも庶民が暑い季節に涼む時などに使われたりする程度で、食料などの保管庫として使える程の冷却効果は得られず、そういった事には触媒型の魔術が使われる。

「発想に腕が着いて行ってないのか、目指したモノに発想が追いつかなかったのか……」

これなら軸に直接風車でも付けた方がまだマシな風量を得られるだろうにと、朔耶があえて扇ぐ機構にしたルッテンの意図を測り兼ねていると――

「フウシャ……とはなんだ？」

「え？　風車は風車だけど……もしかして無いの？　風車（かざぐるま）とかも？　こう、羽が付いてて風を受けて回るやつ」

身振り手振りの説明と問いに首を傾げるアンバッス達、件の二人組みも『はて？』という顔をしているのを見て、『水車があるのに風車はないんかいっ』と世界に突っ込みを入れる朔耶。

実際にはパドル式の風車のようなモノはあるものの、これは単に『風を受けてくるくる回ってる物体』として認識されており、観察して風の強さを確認する程度にしか使われていない。

水が人々の生きて行く上で欠かせない要素であるが故に、水を御する為の知恵が水の引き込みに足踏み式の水車等を生み出し、身近なモノになる事でそこからさらなる便利な使い方という工夫と改良が成されて行ったのに対し、風はそこまで生活に重要視される要素でもなかった。

自然の風の力を利用して何かを成すという概念は帆走船を動かすというものが普通で、『風車』に風を受けてその力で何かを成すという機構はまだ確立されていないのだ。故に、『風車』という呼び名は一般的には普及していない。

精霊術、魔術の基本中の基本がまず風を起こすというモノであった事も、自然の風を利用するという発想が遠ざけられた原因かもしれない。

そんな感じで騒ぎながら温泉の開放待ちをしていた憩いの場に、温泉から上がった一般の団体客が涼みにやって来た。壁に三機程並べて設置されているルッテン式扇ぎ機の前に座って、あるのかないのか分からない風を受けている。

お子様達にはこのパタコンッが割と人気のようだ。

「ふ……次の構想が決まったわ……」

「おや、また何か作るんですか？」

「あんなヘッポコ発明品に憩いの場を独占させておくのが我慢ならないのよ！」

――朔耶、異界の発明家に挑む！――てな感じに負けず嫌いな気性を発揮して道具集めと人員確保に動き出した。

一つの事に夢中になり、没頭すると行動が大胆になる朔耶の特性が遺憾なく発揮され、既に一度アマガの村で水道施設建設という大規模工事（実際は大した規模でも無かったが）を指揮した経験で慣れたのか、集まった宿の使用人達に指示を出して必要な材料と道具を集めさせると、作業場を確保する為ロビーの一角を敷居で囲って場所を作らせた。

「う～む、見事な指揮ぶりだな……」

「活き活きしてますねぇ」

「サクヤ様は人の上に御立ちになる方だったのですね……」

約一名、炎の使い手に誤解が生じていたが、使用人達を使って何やら大掛かりなモノを造り始めた朔耶に、護衛の騎士達は交代で温

泉に入りながら作業を見守った。

「ドーソン！　それこっちに取り付けて！」

「ぼ、僕は何時温泉に入れるのかね？」

何故かドーソンも扱き使われていた。

朔耶はまず風を送り出す為のファンの制作から入った。直径二十センチ程の円柱を輪切りにして表面に斜めの切り込みを入れ、十五センチ程の薄い板を羽部分として取り付けて行く。

この辺りの作業は使用人達の腕では難しいと判断した支配人が急遽街の大工職人や土産物を作る彫り師など、工芸の腕を持つ職人達を呼んで参加させた。

突然呼び出されて王都要人とやらの作業に駆り出された彼等は、最初この作業を指揮する朔耶を見て、小娘の遊びに付き合っていられるかと憤慨していたが、朔耶が発明家ルッテンに挑む若き天才発明家であると聞かされ（某熟年騎士による流言）、ルッテン式扇ぎ機を越えるモノを作る作業だと説明されると（某優男騎士による流言）、そんな大事ならと渋々承諾した。

そうして作業に従事していく内、朔耶から要求される道具や部品部分の洗練された内容に職人魂が刺激され、求めに応じた非常に精度の高い部品を作り出して行った。

職人たちが最高の仕事して出来の良い細かい部品を作り、使用人達が朔耶の指示の下、それらを組上げて行く。夕食の時間になっても作業は続けられた為、温泉から上がった侍女たちも作業員に食事の配膳を行ったりして作業を手伝った。

「できた……」

夜も更けようかという頃、それは遂に完成した。高さ二メートル、幅一・五メートル、奥行き四十五センチ程の木箱の中に、滑車を組み合わせた機構で三段に並べた九枚のファンを回転させて風を生む。動力はルッテンの水車をそのまま拝借し、三機あるルッテン式の一機を外してそこに設置した。

歯車を使わなかったのは騒音対策で、なるべく静かな駆動音に抑える為だ。径の大きい滑車と小さい滑車を丈夫な革紐で繋ぎ、大きい滑車が一回転する間に小さい滑車が十数回転する。

そこに取り付けられたプロペラ式風車の仕組みは、説明されれば成る程と理解できるものの、羽を斜めに取り付けた円形の物体にそんな効果があるとは、見ただけで理解出来る者は居なかったので、最初に朔耶が軽く回して風を発生させると『魔術じゃないか』と疑われたりした。

木箱の下部には簡単に開けられる扉を付け、ここから魔力石入りの水桶を出し入れ出来るようにしてある。機械の前面部分は格子状にして風通しを良くし、ついでに格子の間につけた羽も左右に振って風を満遍なく送れるよう凝った作りにしてあった。

この部分にはクランクを使っているのだが、このクランクシャフトを使った回転運動を往復運動に変換する機構で風を送る方向を自動的に変える仕掛けは職人達を唸らせた。

「こ、これは……！」

「凄い！　冷たい風がこれほどにっ　まるで詠唱魔術で起こす風のようじゃないか！」

驚き、称賛の声を上げるルッテンマニアの二人組みに、朔耶は返って空しい気分になった。

何せ夜も遅いので温泉客達は皆寝静まっているか帰宅しており、憩いの場に居るのは護衛隊の面々と侍女さんズ、おまけのドーソンだ。宿の使用人達は仕事に戻ったし、職人さん達も『良い仕事が出来た』と満足気に帰っていった。

「ふ……勝者はいつも空しいものね」

と、一仕事終えて冷静になってみると何を剥きになっていたのかと恥ずかしくなって来たので誤魔化すように呟いて温泉に向う朔耶。

「サクヤ様……お供します」

完全なる勝利への喜びより、戦いの空しさを憂う朔耶の姿に（盛大な勘違い）感動したフレイが従者として付き従うのだった。

「や、やっと温泉に入れるのかね……」

ドーソンもふらふらと深夜の温泉に向かったが、お約束の温泉トラブルは起きなかったそうだ。

19話：サクヤ式

朝食を部屋で済ませた朔耶は『さあ今日も出発だぁ』とフレイと並んでロビーに下りると、朝から憩いの場に人だかりが出来ていた。

「あ！　『サクヤ式送風機』の発明者だ！」

と、昨日のルッテンマニアの片割れが朔耶を見つけて叫ぶ。

「何よ、サクヤ式ってのは……」

「いやぁ～嬢ちゃん凄げぇ発明家だな！　もしかしてルッテン所縁の者だったりするのかい？」

「いや、欠片も関わりないから」

パタコンッパタコンッと大団扇を上下させている二機のルッテン式扇ぎ機に挟まれた位置で、ゴーーッと景気良く冷たい風を吐き出している送風機の前には、朝の一般客が集まって温泉上がりの火照った身体を翳している。

中の石を火属性に変えれば熱風も出せるかもしれないなぁと、なんとなく冷暖房機の構想など練りながら朔耶は他の仲間達と合流して馬車に向かった。

「いってらっしゃいませー」

支配人他宿の使用人一同からお見送りを受けて、一行はバーリッカムの宿を後にする。

見送りの挨拶の言葉に、家族旅行で訪れた事のある有名な温泉ホテルの事を思い出した朔耶は、次にここを訪れる事があれば『お帰りなさいませ』で出迎えられるのかな？　などと考えて笑みが零れた。

『温泉街って異世界でも帰郷の町なんだなぁ』

ちなみに朔耶が残した送風機はルッテンマニアの二人が『サクヤ式』を連呼して広めた為、以後『サクヤ式送風機』が正式名称となり、朔耶の作った道具を現在の所二つほど所有している護衛隊も、この時の出来事が切っ掛けで改造された盾と篭手にそれぞれ『サクヤ式』をつけて呼ぶようになった。

バーリッカムを出発した朔耶達一行は途中一度の休憩を挟み、現在クリューゲルの首都カースティアに向けて『風の街道』を進んでいた。カースティアとバーリッカムを繋ぐこの街道は、地平線まで広がる草原が延々と続く平原地帯だ。

時折岩が鎮座している事で風景の変化が見られるというくらいに、何処までも草原が続いている。

「『サクヤ式アンバッススさんの拳骨』の調整の事だけどさぁ」

「……そっちを正式名称にするんですか？」

笑いを堪えながらレイスが問う。朔耶の作った道具に『サクヤ式』

を付ける事が護衛隊内で定着したのはアンバッスが率先してそう呼び始めたからだ。なので意趣返しのつもりも兼ねて『寸勁の篭手』は又の名であった『アンバッスさんの拳骨』を正式な名前に定めた。

「あれはやっぱりちゃんとした筒が無いと中が直ぐ歪んじゃってダメだわ」

「そうですか、では向こうに着いてから技師に型を作らせてみるのはどうです？」

「そだね、盾の方は元々の使い方に添ってたから上手く出来たしね」

そんな話をしながら、テーブルの上では石を削って木を削ってという作業が行われている。既に見慣れた光景、この要人専用大型馬車の車室はすっかり朔耶の工房になっていた。

「今度はどんな物を？」

「うん……試作したライターをね、ちょっと量産しようかなって」

「ライター……とは？」

「お手軽火付け石だとでも考えて」

折角ブランド名が付いたんだからついでに銘も入れてヤレなどと言いながら小さく削った石を整然と並べては計測器で測定するという作業を繰り返している朔耶の傍らで、削った木の型にそれらを組み込んでいくフレイの姿、こちらもすっかり助手役が定着していた。

「そういえば、今日は何処で一泊するの？　次の街も遠いんでしょ？」

「ええ、今日は途中で野宿になりますね」

「やったぁ！　そっちの方が気楽で嬉しい」

「ふふ……サクヤは堅苦しいのは苦手なんですねぇ」

『庶民ですから』と答えながら護衛隊と侍女さん達とオマケのドーソンも含めて人数分を組上げた朔耶は、早速ライターの表面に銘を彫り込む。

「これってさ、その人の家の紋章とか刻んで送ったら喜ばれるかな？」

「それは面白いかもしれませんね、サクヤの道具は只でさえ希少価値がありますから」

軽く言ってみた朔耶に、レイスも軽く答える。二人ともこの時は『ちょっとしたプレゼントにはなるだろう』くらいにしか考えていなかった。

「はいこれ、使い方はこうやってここを開けて、この部分をぐっと押し上げるとこんな風に火が付くから」

日暮れと共に街道から少し脇に逸れた場所に馬車を停め、野宿の準備が進められる傍らで朔耶は量産したライターを皆に配っていた。ここまでの二日間で見た朔耶の作った他の道具と比べると聊か地味な道具ではあったが、それでも送られた彼等には十分に驚嘆物の道具であった。

魔術式のランプには幾つか種類があって、火を灯す従来の物から光そのものを発現させる物などがあるが、何れも触媒型の魔術を使った道具であり、通常、魔術式ランプの中には呪文の刻まれた光源の元になる触媒が仕込まれている。

あまり小さな触媒ではランプとしての十分な光度を得られないので、それなりの大きさのモノが使われている。

この触媒には寿命があり、魔力を失って呪文が消えると新しく呪文を刻み直すか交換しなくてはならない。寿命の長さは触媒になるモノの質や呪文を刻む魔術士の腕によって変わってくる。当然ランプの光度にも差がでる事になる。

一方、朔耶の魔力石ライターは魔術式のランプよりも遥かに小さく、それでいてしっかりとした火を灯し、火が小さくなったら火属性の魔力石の上に暫らく乗せておくだけで魔力が回復して何度でも使えるのだ。

「しかしこれは便利だな、色々使い道がありそうだ」
「凄いですよね、帰ったら隊の皆に自慢できますよ」
「お前は盾も貰ってるしな」

アンバッスと若い騎士は朔耶に貰ったライターをしげしげ眺めながら食事をとっていた。

クルストスから朔耶を運ぶ任務を受けているアンバッスとレイスの他に、エバンスから護衛についた四人を合わせて総勢六人の騎士で編成されている護衛隊も、二人一組の交代で見張りと食事を行っている。レイスと定位置の騎士は常に朔耶の側に付いている役だ。

「王都まであと街二つですね、それまでにまたどんなモノを作ってくれるのか楽しみですよ」
「……王都までか……どうだかな」

ふいに難しい顔をして声のトーンを落としたアンバッスに、若い騎士は訝しげに首を傾げる。

「なんです？」

「うむ。果たして王都まで我々が護衛を務めるのか否か、だな」
「え？　どういう事です？　だって……」
「まあ、王都まで同行はする事になるかもしれんが……恐らく護衛の役はカースティアで交代って所だろう」

エバンスでの異例の一幕により朔耶の身元が明らかになった時は色々と場も混乱していたし、サムズは辺境国でもあったのでそのまま辺境騎士団に所属する自分達がここまで護送と護衛を通してきたが、クリューゲルの首都カースティアは比較的フレグンスの王都に近い街だ。

もうそろそろ、王権に取り入る為に色々と画策する輩の手の届く範囲内に入ったと考えられる。対帝国政策で近隣国と足並みが揃わないのも、実はそういった連中の足の引っ張り合いが関係している事も少なくないと、アンバッスは渋面で語った。

「え、じゃあ……王国騎士団辺りが出張ってくるかもって事ですか？」
「場合によっちゃ近衛かもな、王国騎士団の連中は国内の間諜洗い出しに忙しいだろうし、こんな時期に態々出張って来れる奴なんかロクなもんじゃない。が、それでも出張って来る奴は普通にいるさ」
「……それってやっぱ、上（王宮）周りでやり合ってる偉いさんの息が掛かってるような奴等ですかね？」
「だと思うぞ？　近衛が来りゃあそうとも言えないが、良家の次男やら三男やらが混じってたら間違いなく俺達は外されるな」

げ～～と、そういう連中が来た場合の事を想像した若い騎士が呻き声をあげる。
彼等にとっても権力闘争というものは人事では無いのだが、王宮に入るの入らないのという雲の上の闘争とは殆ど無縁な下級貴族出

の辺境騎士である彼にとって、そういう所に居る御仁達と行動を共にする事になるかも知れないと思うと気が滅入って来るのである。
雲の上の御仁という事であれば朔耶も今やその範疇にあるのだが……。

食事を終え、見張りの交代に馬車の隣を横切った時、中から朔耶の笑い声が聞こえて来た。楽しそうにお喋りをしている最中のようだ。相手はレイスか、この前の川原での一件辺りから随分と仲の良くなった赤毛の侍女かと推察する。

「まったく、気楽なもんだ」
「そこがサクヤ様の良い所じゃないですか」

『ふん……』と肯定とも否定とも付かない返答を鼻で返し、アンバッスは見張りの位置に就いた。

――深夜

「アンバッスさ～ん　起きてる？」
「見張り中だ、寝ろ」
「つれないねぇ～　相変わらず」

朔耶は馬車の間に立つアンバッスの隣によいしょと腰を下ろす。

丁度反対側に居る若い騎士が、朔耶を気にしてかチラチラ視線を向けていたが、朔耶がニコ～と笑って小さく手を振ると、赤くなって会釈した。

「任務に集中しろ」
「は、はいっ」

アンバッスの怒声に慌てて背を向ける若い騎士。『怒んなくてもいいのに～』と非難の目を向けていた朔耶は、徐に息を吐くと普段の調子で話しかけた。

「次は『カースティア』？　だっけ？」
「ああ、クリューゲルの首都だ。中々大きい街だぞ」
「その次は？」
「カンタクル、国境の街だ。そこからはフレグンス国内になる」

『そっか～』とあまり興味なさ気に答えると、膝を抱えて座りながら爪先で遊ぶ。口調は普段通りだが、何かが違うような雰囲気を纏った朔耶に、アンバッスは怪訝な顔を向けた。
少し俯いた朔耶の横顔は漆黒の髪がカーテンの様に遮り、その表情を窺う事は出来ない。

「どうした？」
「うん……ちょっとね……」

急に影が差したように元気を無くした様子の朔耶に、アンバッスは心配になって腰を下ろすと優しい口調で問いかけた。

「なにか悩み事か？」
「……」

「俺に出来る事なら、言ってみろ」

俯き加減だった朔耶は、ちらっと顔を上げてアンバッスの顔を覗き込むと、再び俯いてしまう。そして僅かな沈黙後――

「ちょっと、甘えさせて」

そう言ってアンバッスの身体にその身を預けるようにもたれ掛かった。ふわりと浮いた黒髪がアンバッスの頬を撫で、香水のような甘い香りが鼻腔を擽る。

突然の事に一瞬硬直したアンバッスだったが、そこは年の功というべきか、すぐさま動揺から立ち直って朔耶の様子を窺った。

『酔ってるわけでもないし、ふざけてる訳でもない、か……』

「なんだ？　寂しくなったのか？」

「うん……」

思いのほか素直な返事が返ってきて驚く。

「……レイスにでも甘えればいいだろうに」

「あの人はダメ、甘えたらそれだけで済まなくなっちゃうから」

「俺はいいのか？」

「お父さんみたいな人じゃなきゃダメなの……」

『お父さんと来たか』と、アンバッスは苦笑する。レイスの評し方にも笑ってしまったが、父親代わりにされる自分が一番笑えるなぁと。

物怖じしないし妙に勘が鋭いし、中途半端にガサツな所もあるし、魔術士顔負けのとんでもない道具を作る何処か不思議な空気を纏う

異国の少女。

『何処から来たのか分からんが、この年頃の娘が異国の地に一人でいるのは……やはり寂しいものなんだろうな』

俺で代わりになるなら父親くらいやってやるさと、アンバッスは自分の胸にもたれ掛かっている小柄な少女の黒髪を、優しく撫でてやるのだった。

「……え～と、ありがとねっ　おやすみ！」

暫らくアンバッスの腕の中で過ごしていたが、気が済んだのか身体を起こした朔耶は照れたようにそう言うと、馬車に戻って行った。やれやれと、緩んだ表情でそれを見送って立ち上がり、見張りの任に就くアンバッスだった。

「た～～い～～ちょ～～～～～」
「な、何だっ！？」
「ぬ～～け～～が～～け～～だ～～～～」
「違うっ　何を言っとる！　あれはサクヤが甘えて来ただけだ」

幽鬼のようなオーラを纏わせた若い騎士に責め立てられるアンバッスの姿という光景がしばし繰り広げられるのだった。

「ぬ～～け～～が～～け～～」
「ええいっ　やめんか、鬱陶しい！」

20話：ガリウス小隊

――出発前

昨夜の事もあってか、アンバッスは護衛交代の可能性がありうる事を話しておいた良いと考えて朔耶を探していた。大型馬車の車室に居なかったので侍女たちの馬車を探すと、朝食の準備を手伝っている朔耶を見つけた。

普通、要人として護衛される対象がその侍女たちの仕事を手伝ったりはしないものだが、朔耶に関してはもうその辺りの区別については考えない事にしていた。

最初のうちは侍女たちも『仕えている主人に手伝わせるなどとんでもない』と手を出させなかったのだが、隙を見ては手伝おうとする朔耶に根負けしたようだった。一度など侍女の服を着て変装してまで作業場に潜り込んだ事がある。直ぐにバレてたが（当然だ）。

「サクヤ」

「あれ、アンバッスさんどうしたの？　ご飯まだだよ？」

「話しておきたい事がある、少しいいか」

キョトンとした表情で野菜を刻む手を止めた朔耶は、気まずそうな顔をして少し俯き加減に頬を染めつつ、上目遣いからスッと目を逸らしてボソッと呟いた。

「ゆうべの事は……忘れて……」

途端、周りから作業の音が消え、侍女たちの視線がギンッという金属音でも聞こえそうな勢いでアンバッスに突き刺さる。

「……なんなら昨夜のことを事細かく話してやろうか？」

「あっあっ　うそ！　嘘！　やっぱオジサマにはこういうの通用しないね～」

パタパタと手を振り、慌ててアンバッスの背を押しながらこの場から離れていく朔耶だった。『オジサマ……オジサマか……』という熟年小隊長の呟きはとりあえず無視した。

「それで、どうしたの？」

「うむ……、次の街に着いてからの事なんだがな、もしかしたら我々と交代の護衛が来ているかもしれん」

「交代？　皆途中で帰っちゃうの？」

「それは分からん、王都までは一緒に行くかもしれんし、そもそも交代が来るかどうかも推測でしかないからな」

護衛の交代がなければ王都まで今まで通りだが、もし交代があった場合について注意しておきたい事があるとアンバッスは語った。

「王国騎士団は一応実力主義を採ってはいるんだが、基本的に王都の門閥貴族出の奴が多い。我々よりも身分もプライドも高い連中だから、俺たちのような付き合い方は難しいと考えてくれ。寧ろ親しげに接してくる奴には何らかの裏心があると思った方がいい」

ふと、レイスの事が浮かんで内心苦笑する朔耶。

「やっぱりレティ絡み？」
「王女にあそこまでさせる人物なのだからな、お前は。自覚があるなら良い、十分気をつけておいてくれ」
「は～い」

朔耶の子供っぽい返事に、むぅと顔を顰めるアンバッス。

「あははっ　あたしアンバッスさんのその顔、好きだよ」

そう言って侍女たちの馬車に戻る朔耶を、虚を突かれたようにポカンとして見送ったアンバッスは『ふん……』と鼻を鳴らして護衛隊の馬車に戻っていった。護衛隊の馬車の前では若い騎士が何やら黒いオーラを背中に纏っていた。

相も変わらず草原が続く風景の中、街道を進む一行はそろそろ昼食の休憩を取ろうかと街道脇に馬車を停めた。

「あ～～～～何処までも草原！　何時までも草原！　寝ても覚めても草原～～！」
「なんの歌だそれは」
「草原の歌、『永遠の草原』」

適当な歌詞とタイトルをでっち上げながら朔耶は退屈音頭を踊っていた。何か作ろうにももう材料の魔力石が底をついてしまい、この草原には手頃な石が落ちていないので移動中ずっと手持ち無沙汰

なのだ。

「あ～あ退屈だ～退屈だ～」

「わわっ　あ、あのっ　さ、サクヤ様……」

「今度は退屈の歌か？　つーか放せ、部下で遊ぶな」

そんな調子で賑やかなれど穏かな時を過ごしていた朔耶達だったが、真面目に見張りをしていた騎士の『何者か騎馬にて接近せり』の報で俄かに緊張が走った。護衛隊は朔耶と侍女たちを馬車内に避難させると、接近する騎馬に対する警戒態勢を取る。

やがて四騎の騎馬が護衛隊の前に現れた。

「王国騎士団？」

彼等の装備と紋章をみた若い騎士が呟く。その呟きに答えるように、馬から降りた騎士が顔全体を覆う兜を脱ぐと口上を述べる。

「道中ご苦労！　我等は王都より派遣されたクリューゲル方面カースティア駐在派遣騎士団ガリウス小隊である！　私は隊長のガリウス・ツィット・ジャバールだ」

そう名乗ったガリウスは三人の部下を紹介して身分を明らかにした後、軽薄な笑みを浮かべて言った。

「で、サクヤちゃんは何処だい？」

大型馬車の車室の中で昼食を摂り終えた朔耶はテーブルを挟んで

向かい合った騎士達の甘ったるい熱視線に辟易していた。
　正面に座るガリウス小隊長は端整な顔立ちはレイスとも似ているが体躯はしっかり鍛えられている感があり、目元がやや垂れ気味な所が長身の威圧感を緩和している。
　その後ろに並び立つ三人は面長、ぽっちゃり、童顔といった感じで、何れも血筋が良いのかモデルさんや俳優さんのような顔立ちをしていた。
　面長がクールな感じで、ぽっちゃりが癒し系な感じで、童顔が無邪気な感じで、そうして隊長は誑(たら)しな笑顔で其々朔耶に熱視線を浴びせているという状況だ。

『何処のビジュアル系アイドルグループですか？』

「え～と？　それで、皆さんは追加の護衛をして下さると？」
「まあね、王都まであと少し、万が一があってもイケないからな」
「王都に近いんなら寧ろ今までより安全なのでは？」
「所がそうでもないんだなコレが、王都周辺の方が金持ちも多いから、それを狙った盗賊団も結構多いんだ」

　このガリウスという騎士は口上の時のような厳格さを欠片も感じさせない軽さで朔耶と相対していた。
　アンバッスに聞いていた話と随分違うというよりも、全員親しげに接して来るというのはどうよ？　と流石に困惑を隠せない朔耶はレイスに視線を向けて助けを求めた。その視線の意味を正しく理解したレイスが口を開く。

「そろそろ出発したいと思いますので、皆さん護衛の配置に就いて貰えますか」
「おっと、もうそんな頃合か。じゃあな～サクヤちゃん、また後で」

素直に車室を後にするガリウスと部下の面々、三人の部下達もきっちりアピールを忘れない。クールに口の端を上げるだけの微笑と朗らかな笑みと愛くるしい笑顔が車室に余韻を残していった。

「だあぁぁ～～」
「ああいう手合いは苦手ですか？」

四人が外に出た途端、テーブルに突っ伏してぐた～っとなっている朔耶にレイスが気遣うように声を掛ける。隣室に控えていたフレイがお茶を持って来てくれた。

「苦手というか……疲れるというか……」

ズズズーーっと適温のお茶を啜って気力を回復した朔耶は、椅子の背凭れに身体を預けながら天井を見詰めるように言った。

「見極めが大切よね」

はっと目を瞠るレイス。朔耶の言動に目を瞠る思いをするのは何度目だろうか。この娘（こ）は今の応接の席でも只彼等の雰囲気に飲まれて圧倒されていただけでは無く、しっかり見定めようとしていたようだ。

ガリウスを初めとする四人は派遣騎士団に席を措いているが、王都では何れも劣らぬ門閥貴族の家系の者だ。其々次男や三男といった位置にいる。彼等の兄弟で家督を継ぐ者は王都の王国騎士団に所属している者が多い。

「信用出来そうな者は居ましたか？」
「ん～今の時点だと何とも」

「そうですか……」
「心配しなくても先約のレイスを優先してあげるわよ」
思わず目を丸くするレイスに、朔耶はいたずらっぽく微笑んで見せた。

「どう見る？」
「ガキだな、俺の好みじゃねー」
馬車を退出したガリウス隊は護衛隊に預けてある自分達の愛馬に向かいながら王女の客人について評しあっていた。
面長騎士の質問につまらなそうに答えたのは訝し顔の騎士、ガリウス隊長である。そんなガリウスの返答に童顔の騎士が子犬のような笑顔を向けながら言った。

「でも食べちゃうんでしょ？」
「まあ、ガキでも女だしな。レスティア姫と懇意っつー旨味は捨て難い」
特に親しい間柄でも無いのに略称で王族の名を口にする辺りに、彼等の品性と王家に対する忠誠の度合いが表れている。

「お前らも遠慮しなくていいぞ？　フラン、お前がいってみるか？」
「え～僕は仲良くなれればそれで良いかなぁ、あのコ可愛い感じす

るし」
「フランはああいう娘が好みなんだねぇ」
ガリウスの嗾(けしか)けに肩を竦めて遠慮するフランと呼ばれた童顔騎士と、細い目を更に細めてそれを冷やかす癒し系ぽっちゃり。彼等のやり取りを無視して面長の騎士が戒心を促がすように口を開く。
「一緒に居た騎士、奴は確かアクレイア家の後継ぎだ」
「問題ねえよ、没落した魔術士の家系なんぞ気にする事ぁねぇさ」
「向こうも色々手を打ってそうだがな」
真面目な話しに童顔もぽっちゃりも表情を改めて先程の応接で感じた私見を述べた。
「さっきの様子でも結構仲良さそうだったよね」
「ここまでの道中でそれなりに動いてると思うなぁ」
それは十分に考えられる事だとガリウスも念頭に置いている。アクレイア家とコースティン家の確執と宮廷魔術士選考の顛末についてはフレグンスの騎士なら誰もが知っている事だ。
アクレイア家の跡取りが家格の復興にあの娘と王女の懇意を利用しようと画策する事を、想定しない方がおかしい。
「なんにせよ、街に着いてからだ。行軍中は大した事も出来ねえだろ」
そう言って愛馬に跨る。ガリウスの部下に対する呟きを耳にした護衛隊の熟年騎士が怪訝な表情を見せたが、ガリウスはニヤリと笑みを返して護衛の位置に就いた。
先頭を行く護衛隊馬車の後ろに続く大型馬車と更にその後ろを行

く侍女たちの馬車の左右に其々二騎ずつが就き、次の街に向けて出発した。

フレグンスの隣国クリューゲル。その首都であるカースティアの街に到着したのは、日が暮れて少し経った頃だった。

日が暮れると月の明るい夜でもない限り、地平線まで伸びる草原は空との境目まで闇が広がる大地となって夜間に進む事を躊躇わせるが、一行はその先に見えるカースティアの灯りを認めながら走り続ける事で、日を跨がずに街に入る事が出来た。

ガリウス隊に先導されて街で一番大きな高級宿に案内されると、これまで同様に宿の支配人と使用人一同が整列して出迎えた。

「はぁ～～やっと休める……」

流石にエバンスの時のように偉いさんが挨拶に来たりはしなかったのでホッとしながら、朔耶は夕食もそこそこに宛がわれた部屋で一息ついていた。ベッドに転がって今日の事を振り返ってみる。

アンバッスが懸念していた護衛の交代要員は用意されなかったようだが、ここからはガリウス隊が付き添う事になる。宿に入る時もやたらフレンドリーに接してくるガリウス隊に、護衛隊の面々も侍女さん達も少し戸惑いの色が見えていた。

護衛隊の人たちはガリウス隊の彼等が只の護衛目的だけで来たわけでは無い事を、やはり騎士という国の機関に属する立場上分かってしまうし、侍女さん達にとってもその辺りの事情は分からない事

ではない。

ただ、余りにもあからさま過ぎて途惑ってしまうという感じだった。ドーソンが唯一ふむふむ言いながら何かの参考にしていたようだが。

「隠しても仕方のない事だから、ぶっちゃけちゃったのかもしれないなぁ……」

どうせ下心バレバレなのだから、下手に隠して紳士を気取らず、気楽に正面から『彼女に取り入る心算？　だからどうした！』というノリなのかも知れないと朔耶は考える。

「まあ、それならそれで、根は正直でイイ人って事にもなるけど……」

『さてさて、どう対応しましょうかね～』と適当に悩みつつ、朔耶は湯浴みに行く為ベッドから降りた。やはり街に着いたならお風呂に入りたい。

バーリッカムの温泉のような場所は例外だが、通常、貴族の湯浴み用の浴槽は深さが膝くらいまでしかなく、基本的に湯に浸かるという習慣は無いようで、普通は足首くらいまで浸かって身体を洗う程度だとフレイから教わった。

エバンスの宿で湯浴みをした時も浴場は広かったが、座っても腰の辺りまでしか浸かれず、お湯が湧き出ている場所だけ深くなっていたので態々そこに身体を押し込んで温まったくらいだ。

「横になるってみるのもいいかも」

広さは十二分にあるので、どうせ誰も見ていないなら縁（ふち）部分を枕

に寝そべっちゃえと、そのまま眠てしまわないように気をつけつつ朔耶は横になった。

「ふんふ～ん」

思いのほか心地良かった『寝そべり風呂』を満喫した朔耶は、ご機嫌な調子で鼻歌など歌いながら部屋に戻って来た。寝衣に着替えてベッドの上に放り出しておいた小物入れと、草原で退屈音頭を踊った後暇つぶしに弄っていた道具をベッド脇に除ける。

さあ、後は寝るだけだと枕をぽふぽふしたその時、ふいにベッドが軋んで柔らかいマットが沈み込み、その拍子にバランスを崩して沈み込んだ方向に倒れ込む。

「うひゃっ」
「おおっと」

朔耶を背中から抱きとめたのは甲冑を脱いでラフな格好になったガリウスだった。

「へっ？　え！　ガリウスさん!?　なんでっ？」

慌ててガリウスから離れようと身体を起こした瞬間、そのまま押し倒されてしまった。『一体何事ーー！』と焦って真っ赤になりながら暴れる朔耶の振り回される手足を手馴れたように捌くと、両手を頭上で交差させて拘束する。

必死にもがく朔耶だったが片手でかるく抑え込まれてしまう。ラフな格好をしているガリウスは袖無しの薄手のシャツから見える二の腕の太さや胸板の厚さなど、その鍛え上げられた体躯がよく分かる。

「ちょ、ちょっと！　なんのつもりよ！」

「おや？　中々気丈だなぁ。心配しなくても優しくしてやるって」

「ふ　ざ　け　ん　な　っ　！！」

「おおう～ガラ悪りぃ」

『はーーなーーせーー』と尚も暴れる朔耶に、ガリウスはこういうじゃじゃ馬を馴らすのも面白いと笑みを浮かべると、自然な動作で朔耶の寝衣に手を掛けた。ビクリと肩を震わせる様子を満足げに観察しながら寝衣の胸元の結び紐を解いていく。

「……あんた、本気？」

「ん？　俺は何時だって本気だぜ？」

軽薄な笑みを浮かべながら解いた紐を伸ばしてみせるガリウス。三段に結ばれていたリボン状の胸元の結び紐は全て解かれてしまった。後は少し寝衣をずらしてやれば胸元が露わになる、という所まできて急に大人しくなった朔耶の顔を覗き込むと――

「……明かり、消してよ……」

観念したように眼を逸らしながらそう言った。

「いいぜ、ちょっと待ってな」

結構あっさり観念したようだがこの位の歳の娘ならまあこんな所だろうと、ガリウスは拘束していた手を離し、天井から下がるシャンデリアのような照明に向かって手を拍つと明かりが消えた。

こういう高級宿に使われている明かりは魔術式を使っているのが殆どで、特定のキーワードで点灯、消灯を行える高価なモノだ。実際には消えているというより限りなく出力が抑えられている状態に入る。

真っ暗とまではいかない薄暗くなった部屋で、ベッドに横たわる朔耶に馬乗りになっているガリウスは『最後の抵抗を見せるか？』と朔耶の様子を窺ったが、顔を背けたまま大人しくしている少女に少々拍子抜けした。

しかしまあやる事は変わらないとばかりに、紐の解けた寝衣の胸元を開けようと手を伸ばした瞬間、朔耶はその腕を取って引き寄せた。結果、ガリウスは朔耶に覆いかぶさるような状態になった。

「おいおい、急に積極的だな」

「うん、こうした方が確実だから」

なにがだ？　と疑問の声を上げようとしたガリウスの脇腹に、何かが押し当てられる。

「発動しなかったら、あたしの負けだね」

「ん？　なんのこ……――」

ドムッ　という肉の詰まった袋を棒で力一杯叩いたような音がして、ガリウスの身体が真横に吹き飛んだ。そして床に叩きつけられたガリウスは、脇腹を押さえて苦痛に悶絶する。

「！っ……ガ…ハァ……ハァ……いっ……たい……な、……なに…

…を……」

一体何が起きたのかと、ガリウスは訳も分からず脇腹の重い激痛と床に叩きつけられたショックで朦朧とする意識が飛びそうになるのを抑え込んでいた。朔耶はむくりと身を起こすと天井に向かって手を柏ち、明かりを灯す。

ベッドには拉げてバラバラになった辺境騎士団の篭手の残骸が散らばっていた。きょろきょろと部屋の中を見渡し、ベッド脇に立っていたライトスタンドのヘッド部分を外した朔耶は、徐にスタンド部分を両手で握って振り上げる。

「お……い……ま、まじ……かよ……」

未だ激痛で動けないガリウスに向かって、朔耶は目に涙を浮かべながら振り下ろした。

「この……、オンナのてきぃーーーーー!!」

――少し前

アンバッスは明日以降の護衛の打ち合わせをする為にガリウスの姿を探していた。護衛が増えると言う事は必要な食料の量も増えるし、緊急時の連携等も考えておかねばならない。

ガリウス隊が宿泊している部屋に向おうとする途中、その部下達

の姿を廊下の奥に見つけたので後を追う。

「あれ？　隊長、護衛の打ち合わせに行ったのでは？」

「レイスか、その肝心のガリウス隊長が捕まらなくてな、丁度部下を見つけたんで追いかける所だ」

そう言って廊下の奥を指すと、レイスが怪訝な表情をした。

「向こうは要人専用棟で、今日はサクヤしか泊まっていない筈ですが……」

「……連中がサクヤに用向きか？」

昼間からの事があるだけに、不安が募る。とにかく行ってみようと、アンバッスはレイスを連れて彼等の去った廊下の奥へと向かった。

廊下の奥の角を曲がると、この先は要人専用の客室で数部屋分の扉しか無い。一番奥の部屋が朔耶に宛がわれた部屋だが、その部屋に向う廊下の前に件の三人が何をするでもなく立っていた。

そしてアンバッスとレイスの姿を認めると、壁に凭れていた面長が童顔とぽっちゃりに目配せして廊下を塞ぐように立つ。そんな彼等にアンバッスが声を掛けた。

「お前達ここで何をしてる、ガリウス隊長を見掛けなかったか？」

「……見ての通り、俺達は自主的にサクヤ様の警護をしている。ガリウスは……どっかその辺りをぶらついてるんじゃないか？」

「隊長は風来坊だもんね」

「時々ふらっといなくなるんだよねぇ」

アンバッスは三人の表情を注意深く探った。面長は特に変化は無く、昼間見た無表情なままだ。ぽっちゃりは表情の変化が読み難い、目が細過ぎるせいかもしれない。

童顔は一見変わり無い様に見えるが、これは多少の興奮状態、緊張状態が見られる。所謂『きょどっている』状態だ。

「そうか、じゃあ後にするか」

そう言うと、あからさまにホッとする変化が表情に見られた。なのでアンバッスはこう続けた。

「サクヤの用事を先に済ませるとしよう」

途端に頬を引き攣らせる。ここまで来るとこれ以上の探りを入れる必要もない。サクヤに直接声を掛けて不審な事は無いか尋ねれば良いのだ。

「まて、こんな夜更けに女性の部屋を尋ねるなぞ、失礼だとは思わないのか」

「お、王女様の客人だもんね」

「変な噂が立っても不味いしねぇ」

三人が顔色を変えて引きとめようとするので、アンバッスは確信を深めた。ガリウスはサクヤの部屋に居る、と。

「どけ、扉越しに声を掛ければ済む話だ」

「分からん奴だな、不敬な騎士だとは聞いていたがこの程度の分別すらつかないとは」

面長の挑発を無視し、彼等の制止を振り切ろうと揉み合いになっ

たその時、部屋から朔耶の叫び声が響いた。

「……オンナのてきぃーーーーー！！」

一瞬、この場の全員の動きが固まる。直ぐに硬直から回復したのはアンバッスだった。

「サクヤ！　どうしたっ！」

「あ、アンバッスさん！　たすけてぇーーー！！」

瞬間、ドゴッ　という音がして面長の身体が廊下の壁に叩きつけられた。アンバッスに強烈なボディブローを叩き込まれた彼はそのままズルズルと崩れ落ち、膝を付く。アンバッスはそれに見向きもせず扉に突進していった。

「うわわっ　クランドルが一発で！」

「ああっ　あの人部屋に行っちゃうよ、隊長に怒られる」

捨て置かれた二人はアンバッスを追うかこの場から逃げ出すかという選択肢を選ぼうとして、冷たい空気に囚われた。

「……何処へ行くおつもりで？」

抑揚の無い声で尋ねるレイスの周囲から発生する冷気が、辺り一体を包み込んで壁や床に霜を降らせている。パキンッと音がしてレイスの翳した手の表面に氷粒が現れ、それらは渦を巻きながら集まって行き、やがて氷塊となって慌てる二人を威嚇した。

「ちょ、ちょっと君！　こんな場所で魔術使う気!?」
「あ、危ないよおっ　落ち着こうよう！」

廊下の三人をレイスに任せて朔耶の部屋に踏み込んだアンバッスは。寝衣を乱し、顔を涙でくしゃくしゃにした朔耶がライトスタンドの棒を握り締めて、床に沈んでいるガリウスを叩きのめしている光景に再び固まった。

「ふぇえええっ　アンバッスさ～ん！　襲われたーーー！」
「……で、返り討ちにして叩きのめしたのか」

胸に飛び込んで来た朔耶を優しく抱き止めながらも、完全に伸びているガリウスのボロボロな姿に思わず溜め息をこぼすアンバッスだった。

その後、騒ぎに駆けつけたフレイが朔耶を宥め、今夜は彼女が付きっきりで過ごす事になり、宿の支配人に新しい部屋を用意させて二人をその部屋で休ませた。
アンバッスはボロボロになったガリウスを部屋から引き摺り出すと、そのまま氷浸けにされ掛かっていた三人共々派遣騎士団本部に引っ張って行き、派遣騎士団長に厳重抗議を申し出て宿に戻った。
派遣騎士団長は護衛任務は彼等の独断であり、今回の不祥事は派遣騎士団では無く彼等個人にあると抗議に反論していたが、それに対してはレイスが――

「……では、レティレスティア様にそのように御注進なさる事です」

と言って切り捨てた。

「大丈夫ですか？　サクヤ様」

「うん……なんとか」

今頃になって襲われた恐怖が込み上げ、震えが止まらない朔耶を包み込むようにフレイが労わる。

「はぁ～～……、ほんとに危なかったよ……アンバッスさんの拳骨が作動しなかったら、あたし……」

「サクヤ様、今後は私が常にお傍で御守りします。サクヤ様に害を成す者は、私が焼き尽くしてご覧に入れましょう」

本当に憤慨している様子のフレイに、朔耶はなんだか吹き出しそうになりながら安心した。

この日はフレイに抱きすくめられたまま眠りに就く朔耶だった。

21話：稲妻ビンタ

翌日からフレイは朔耶の専属警護を任せられる事になった。レイスが護衛隊の皆にフレイの事を話し、常に朔耶の警護に就いていられるよう取計らったのだ。

フレイが実は魔術士でレイスの個人的な部下にあたる者だったという事に、護衛隊の皆はアンバッスと定位置の騎士を除いて一様に驚いた様子を見せていたが、侍女たちは薄々察していた様子だった。

「そりゃあ……ちょくちょく二人でねぇ」
「夜中にこっそりとねぇ……」

と、色々しっかり目撃されていたようで、当のレイスはバツが悪そうに目を逸らし、フレイは真っ赤になって俯いていた。

アンバッスに『程々にしておけよ？』などと肩を叩かれたレイスが流石に赤面すると、朔耶は『珍しいもん見た！』と感嘆してみせるなど、昨夜の出来事を感じさせない賑やかな様子は、朔耶を心配していた護衛隊と侍女たちの心に幾許かの安堵を与えた。

もう一泊していっても構わないぞ？　と朔耶を気遣うアンバッスに、早くレティレスティアの所に着いた方が良さそうだと判断した朔耶は予定通り直ぐに出発する事を選んだ。

一行は次の目的地であるフレグンス国内にある国境の街、カンタ

クルを目指してカースティアを出発した。

「どうしたもんかな～……」

「仕方ありません、時間が癒してくれるまで無理なさらない方が良いと思います」

相も変わらず工具と魔力石と木材が散乱し、すっかり作業台の様相を呈している車室備え付けのテーブルの上に置かれた上品なティーカップを取りながら、朔耶はフレイの助言に憂鬱な溜め息を吐いた。

出発前、若い騎士が昨日の内に街の石売りから買い集めた魔力石の詰まった袋を朔耶にプレゼントして、周りから冷やかされるという一幕があったのだが、『ありがとう』と受け取ろうとした朔耶は自分が一定距離から男性に近付けなくなっている事に気が付き、フレイにその事を相談していたのだ。

「アンバッスさんは平気なのになぁ」

「精神的なものだろうからな、大丈夫な相手と駄目な相手の対象は絞れるだろう。フレイの言う通り、時間が解決してくれるのを待つ以外あるまい」

そんな訳で、車室の中に詰める護衛役にはレイスに代わってアンバッスが就いていた。定位置の騎士は半ば彫像と化していたし、微動だにしない為か朔耶も怖いと感じなかったのでそのままだ。彼は最後までそのポジションをキープするつもりのようだ。

「やっぱり護身用の防犯グッズでも作っといた方がいいかも……フレイも手伝ってね？」
「勿論です」

若い騎士に貰った袋の中には手頃な大きさの魔力石が沢山入っていた。アマガの村近辺のような田舎ではその辺りを探せば簡単に手に入る魔力石だが、大きな街のように人口の集中するような場所では石の需要も高まり、道端を探しても生活に必要な量を揃えるのは難しくなってくる。そうすると需要には供給をと、そこに商売が成り立つ。

山間部や街外れまで出掛けて行って採取した石を街で売りさばく石売り業者が誕生する。元手が殆ど掛からず売れる商品となれば真似る者が当然現れ、価格競争や品質が問われるようになって来るのだ。袋に詰められていた石は何れも質の良い魔力石だった。

「形とか大きさも石寄せに合わせて大体統一されてるね～、これは削り易いかも」
「そういえば、サクヤ様は石を削る時はどのようにされてるのですか？」
「うん？　普通にこうガリガリと」
「いえ、その……削る時に使っている術の事です。あ、もし秘伝の術なのでしたら無理にとは……」

『ん？』と朔耶は以前アマガの村でクィスとの会話に感じたものと同じような会話の噛み合わない違和感を感じ、一つ一つ確かめるようにフレイに質問を重ねてみた。

その結果――

「なんで？　どういうこと……？」

朔耶は石を削ってみたら割と簡単に削れたのでそういうモノだと思い込んでいたが、魔力石は特別加工し易い石という訳では無い。そこら辺りにある普通の石と同様、脆いモノもあれば硬いモノもあり、大半は鑿（ノミ）のような工具でそう簡単に削れる程軟くは無いのだ。

それが何故か朔耶には簡単に削れてしまう。テーブルに広げられた工具を使って同じ石を削ってみたが、サクヤが十秒程で削った溝と同じモノをフレイやアンバッスが削ろうとすると、表面に傷が入る程度の削れ具合からして半日近くは掛かってしまうかもしれない。

「無意識に魔術を行使していたという事か？」
「ううん、そうじゃなくて……あたしホントに魔術とか使えないんだってば、そんなの習っても無いし」
「それと知らずに修学されていた、と言う事では？」
「ないない、それ根本的な所で違ってるって」

元々朔耶は『魔術士』であるという触れ込みだったので、石を簡単に削っている姿を見ても『そういう術を行使している』のだと認識されていた。

魔術に無知な所も、こういった特殊な技術に活かす術を専門に修学したのなら一般的な魔術に関する知識が無くとも別段おかしいとは思われなかったのだ。

結局この現象が朔耶に限った事なのか、他にも朔耶と同じ様な事が出来る人が居るのかは後々調べてみようという事になった。

『そういえば、木を削る時も思ったよりサクサク削れてるような気もするなぁ』

現状、石の加工は朔耶にしか出来ないのでフレイには木の型を削る手伝いと削った石の組み込みを任せる事にして、朔耶は一先ず自分の身体に起きている色々と不可思議な現象を思考の脇に追いやると、護身用具のアイデア捻り出しに没頭した。

最初は魔力石ライターの出力と機構を弄ってスタンガンのようなモノを作ろうかと考えたが、雷属性の石が手に入らないので却下した。魔力石の属性は上書きが可能で、例えば火属性の石を長く水に浸けておくと水属性になる。

雨季の時期などには自然の魔力石の殆どが水属性になってしまうのだ。自然石で雷属性の石を手に入れようと思えば、雷が落ちた場所に魔力石がある事が前提で、さらに雨が降る前に回収しなくてはならない。

魔術による属性付与も可能だが、雷属性の魔力石などという希少性はあっても使い道の無い石を態々作ろうとする術士はいないのが普通だ。精々がルッテンのような発明家を囲う好事家が『健康にイイ！』などと言って作らせる事があるくらいだ。

「フレイは火が専門でレイスは水系？だったよね～」
「はい、レイス様は風と水を修学されていますが雷（かみなり）の具現化までは難しいと思いますし、私は火を専攻してましたから……申し訳ありません」
「ああんもうっ　そんな気にしなくていいから！　こっちが悪い気になっちゃうよ」
「す、すみません」

恐縮スパイラルに入ってしまったフレイを宥めつつ、何か他に手

頃なモノは無いものかと知恵を働かせていると、ふいにフレイが提案を申し出る。

「あの、魔術を習ってみるというのは如何ですか？」

「魔術か～……」

「はい、サクヤ様は護身の体術も身に付けていらっしゃるようですし、初歩の魔術でも十分な力になると思いますが」

「ん～～、興味はあるんだけど……」

魔術を扱うにはやはり相応の魔力を必要とするわけで、朔耶は魔力測定器を自分に向けた時の事を思い出しながらフレイの提案に難色を示した。

「サクヤ様の魔力はどのくらいあるのですか？」

「いや～それが……なんか測定器が誤作動起こしちゃってまともに測れないのよね」

腕を組んだまま苦笑を浮かべる朔耶に、アンバッスはテーブルの端に置いてあった測定器を手に取ると『どれ？』と徐に朔耶に向けてみる。すると針は右端にぴったり張り付いたままピクリとも動かなかった。

疑問に思ってフレイに向けてみると、真ん中付近で二つ並んだ印の右側を指した。左側はレイスの魔力を記したモノだ。ついでに自分に向けると左端の付近で大まかに付けられた印群の中を指した。もう一度朔耶に向けてみる。

「これは……どういう事だ？」

「だから誤作動だってば、多分……」

「どうして誤作動なのです？　これを見る限りサクヤ様の魔力は…

…えっと、百三十石以上ですか？」

魔力石何個分という言い方だと長ったらしいので単位を石で略して一石二石で言い表す事にした朔耶に倣って、針の指す計測値を石単位で口にするフレイ。

朔耶に向けられた測定器が指し示す数値は、フレグンスでも有数の力を持つ術士の類に入るレイスやフレイを遙かに上回っている。計測器の針の様子からして右端に指す空間があれば、まだまだ右の先を指し示していそうだ。

「だってあたし、魔力とかそんなのある訳ないんだもん」
「何故そう言い切れる？」
「サクヤ様、ご自身の持つ力に気付かず過ごしていらっしゃる方の存在は、決して珍しい例ではありませんよ？」
「う～～ん何ていうか、そういうんじゃなくて。前にレイスにもちらっと話したんだけど……」

朔耶はここは説明をしておかないと有耶無耶に出来そうになく、話した所で今は特に問題は無いだろうと判断して自分がいま世界（ここ）にいる理由を順序立てて話す事にした。

山を登っていた事、突然しらない場所にいた事、レティレスティアに出会った事、疎通の加護を受けた事、それによって精霊に『喚ばれ』たと理解した事。

「別の世界か……よく分からんが、余所の国とか大陸という意味じゃあ無いんだな？」

「うん、あたしの世界にフレグンスなんて国は無いし、魔術は手品かインチキか架空のモノだし、とにかくここことは全然違うの」

あまり事細かに元の世界との文明の差異について話しても上手く説明できる自信が無く、イメージ通り伝わるかも怪しい。

理解して貰えるかも分からないので、最低限の部分だけ伝えて自分がこの世界にとって異質な存在である事を説明する。そうして、それが測定器の誤作動や石の加工が容易な理由に関係しているかもしれないと朔耶は自分の推測も交えて話した。

「サクヤ様の世界には魔術の代わりにサクヤ様がお作りになるような道具が普通に使われていると、いうわけですか？」

「ん～厳密にはちょっと違うんだけど、概ねそんな感じかな」

元の世界に戻れるのかどうかも含めて今はレティレスティアと再会し、精霊について彼女に聞いてみるしか無いと話を締め括る。

左手の草原の遠くに山脈、右手の草原の遠くに湖が見える街道脇で一行は昼の休憩を取っていた。朔耶は相変わらず侍女たちに混じって食事の準備を手伝っている。

「こういう時って中々いいアイデアが浮ばないモノよね～」

「すみません、私がサクヤ様にお話ばかりさせて邪魔をしてしまいました……」

「またフレイはそういう事を言うし～～割と内罰的な性格？」

「う……以前、レイス様にも言われました……」

『やっぱりね～』と笑って流す朔耶は、また恐縮スパイラルに入りかけてるフレイを引き戻して強制談笑に持っていく。そして、どうせなら何かの参考になるかもしれないという事で初歩の魔術の扱い方について少し聞いてみる事にした。

「出来るかどうかわかんないけど、まあ駄目元で。出来たら出来たで儲けモノだし」

「分かりました、殆どはイメージと魔力の流れを感じ取ってそれを具現化する為に融合させるような感じで、詠唱はその工程の道標として補助のように考えてください」

「適当でいいの？」

「一応定石はありますが、それは大多数の人がイメージし易いように練られたものですから、自分にとってイメージし易い言葉であれば何でも」

朔耶は『ふむ』と、野菜を鍋に落としながら適当なイメージとそれを一番連想しやすい言葉を思い浮かべる。やはり最初に作ろうと思ったスタンガンのイメージで電撃。その電撃を一番イメージし易い言葉はないか、せっせと料理を作りながら考える。

料理をしながら魔術のイメージと詠唱を考えるというのもまた、この世界の魔術の修学態度としてはどうかと思われるような行為なのだが、それを指摘する者はココには居ない。そして――

「……稲妻ビンタ」

「はい？」

「アーアーアー！　何でもないっ何でもない！」

朔耶は思い付いたというよりも、うっかり思い出してしまったというべき忌まわしい技の名前を呟いてしまい、慌ててそれを打ち消した。確かにアレなら魔術で無くとも強力だとは思うが、中学まで

はマトモだった兄をオタの道に目覚めさせる切っ掛けになったとも言える曰く付きの技だ。あんまり思い出したくないし、そんなモンを護身用魔術のベースにしたくない。

『あー……でもあの呼吸法と気を集中する感覚ってのは、そのまま魔力の集中とかに使えないかな……』

朔耶の現『萌えオタ兄』は中学最後の年まではバリバリの硬派で、今なら格闘オタと揶揄出来る程強さに拘る格闘好き少年だった。

理屈屋な弟はそんな兄に対抗心持ってはいたが力の差は体格からして歴然とし過ぎていた為、小学生当時から理屈っぽかった弟は理論から入って『小柄な体格でも大柄な相手に勝てる技』とか『僅かな動作で相手を倒す技』とか、そっち系で対抗しようとしていた。

実力がその理論に追いついた例は無かったが。

二人の間にいる朔耶は、兄からは実戦型の格闘技を教えられ、弟の提唱する匠の技に魅せられという環境で当時すくすく育っていた。そんな三人と親しく付き合っていた近所の男の子、朔耶の幼馴染だが、彼はミリタリーオタになる前身の頃は護身用グッズを趣味で集めていて、よく特殊警棒やフラッシュライト等を持って来ては自慢していたのだが、ある時彼がスタンガンを持ってやって来た。

そして兄はその彼が持ってくる護身用グッズを尽く自分で試してみるというのが定着していて、スタンガンの威力を自分に試して前のめりに倒れながら『こりゃ凄い！』とのたまっていた。

弟の兄に対する対抗心は、兄に自分に対して関心を持って貰いたいという気持ちがあった。兄が幼馴染のスタンガンの威力を褒め称えている事に『嫉妬』するかのように、朔耶に教えた『気を纏わせた掌底』というのを試すよう促した。

また兄もそういう『新必殺技』を聞くと『よっしゃ来ーい！』の

人なので朔耶に『その技カモーン』を促し、朔耶もサンドバッグ相手にはいい感じに叩けたので試してみたかった。

そして試した。兄は失神した。そのあまりの威力に、兄は朔耶の『気を纏わせた掌底』をまるでスタンガンのようなビンタと評し、『稲妻ビンタ』と名付けた。

『それにしても、女子のビンタは……なんか良いな』

その時の兄の台詞である。高校に入ってからは学校の友人にパソコンのゲームを勧められたのを切っ掛けにして、急激にそっち方向へ猛進して行った兄。

朔耶が一見したところ格闘技オタの兄とはまったく接点を持ちそうにない雰囲気のその友人と知り合ったのが、『美少女にびんたされてぇ』とかいう彼の呟きが兄の耳に入ったのが切っ掛けだと聞き、朔耶は『稲妻ビンタ』を封印した。そんな曰く付きの技である。

『呼吸法の感覚は忘れてないし、無意識にしてる事もあるくらいだしね……』

一度深く息を吐き、吐ききってから自然に吸い込む時に足の踵から背中を通して頭の天辺まで気を吸い上げ、額から鼻筋、顎、喉、鳩尾を通して丹田に収める。関節は緩め、腰を軽く落とし、丹田に溜めた気を捻じりながら肩、腕、肘を通して掌に集める……。

と、気を纏うイメージを膨らませていた朔耶は突然に背後から声を掛けられた。料理をしながらイメージに集中などとやっていた為、人の接近する気配に対して散漫になっていたようだ。

「護衛隊に持って行く分は出来たかい？」

ドーソンだった。彼は何時も通り侍女たちの仕事の手伝いで、仕上がった料理を運ぶ為に調理場へとやって来たのだが、位置が朔耶に近過ぎた。振り向いた朔耶は『目の前に居る男』に恐怖を感じ、一瞬で恐慌状態に陥った。

気付いたフレイが慌てて朔耶に駆け寄ろうとした、その時。

「いやあああああああああああああ！！」

それは、『バチーン』とか『びたーん』とかいう可愛い音ではなく――

パカアアァァン！！

「ぶげらぁっ！！」

乾いた音と共に青白い閃光が瞬き、ドーソンの身体が一瞬浮いて錐揉み状に半回転し、どさっと倒れて動かなくなった。

「……はっ！　ああっ！！　ドーソンごめん！！　大丈夫！？」

一瞬の静寂の後、我に返った朔耶の慌てた声が響く。

「おいっどうした！　さっきの悲鳴はなんだ！」

何事かと護衛隊の面々もやって来たが、朔耶の男性恐怖症の事があるので調理場の外から声を掛けた。

「あ、アンバッスさんっ　ごめん！　ドーソン伸しちゃったのっ

誰か手当てしてあげて！」

「凄いですサクヤ様！　詠唱も無しに雷を纏う事が出来るなんて、やっぱり才能がお有りなんですよ！」

「いや、そんな事よりドーソン診てあげないと……あたしもびっくりしたけどさ」

「そんな事だなんてっ　本当に凄い事ですよ！」

泡を吹きながら失神したドーソン、白目を向いているドーソンに慌てる朔耶、朔耶の才能に感嘆して周りの状況が見えてないフレイ、調理場はまさに阿鼻叫喚といった空間に陥り、救急具を持った護衛隊が調理場に突入するまで騒ぎは続いた。

朔耶の男性恐怖症はこの一発で諸共吹き飛んだようだった。『雷』が発生した理由は『きっとそういう世界だからだろう』という、深く考えない方針で棚上げした。

「も、申し訳ありません……私ったら、本当に……」

「あ～もう、そんなに落ち込まないの」

「いやぁ彼には感謝しなくてはいけませんね、御蔭でまたこうしてサクヤと一緒に居られます」

「だからフレイが誤解するような言い方するんじゃない！」

そんな感じでワイワイ言いながら出発した一行は、夕暮れ頃にはフレグンスの国境の街カンタクルに入るのだった。

一方、朔耶の『稲妻ビンタ』をその封印と共に男性恐怖症諸共受け止めたドーソンは、使用人の馬車で介抱されながら同情した侍女

たちが何時もより優しく接してくれるので嬉しそうにしていたという。

22話：王都フレグンス

薄手のカーテンに濾されて柔らかい光となった朝の陽射しが頬を照らし、瞼の向こうから染み込む……染み込む……――

「……染み込む光？　って、詩の才能ないな、あたし」

慣れなければ返って背中が痛くなりそうなくらい柔らかいベッドの中で伸びをしながら寝惚けた意識を覚醒させると、朔耶はふわわと欠伸をして起き上がった。

ここはカンタクルの大宿の一室だ。昨日の夕刻過ぎに到着した一行は、フレグンス国内に入った事を王都に知らせるべく街の駐在騎士団に伝書を飛ばして貰い、案内された宿に入った。

「今日はいよいよ王都に入る日か～」

レイスの話では、ここから王都までは割と距離が近く、昼過ぎか夕方前には王都入り出来るだろうとの事だった。ここまでの約一週間近い旅路に感慨を覚える。

「あたし一人だったら、ここまで辿り着くのにどのくらい掛かってた事やら……」

着替えを済ませ、朝食をとりに部屋を出る。朔耶は部屋に持って来て貰うよりも広い食堂で皆と一緒に食べる方を好んでいた。

「おはよう御座います、サクヤ様」
「おはよフレイ」

部屋を出ると直ぐ控えていたフレイが現れて挨拶を交わす。何処に控えていたのかは謎で、何時の間にかふいっと現れる事が多い。食堂に着くと護衛隊の面々が既に食事をとっていた。フレイは侍女たちとテーブルに着き、朔耶は護衛隊の着くテーブルに向かった。

「みんなオハヨ～」

各々と挨拶を交わし、端っこの二人の隣に座る。

「おう」
「おはようございますサクヤ、良く眠れましたか？」

彼等との旅も、今日を無事に越えればもう終わりなのかと思うと、少し寂しい気分になる朔耶だった。

「今更だけど、王都ってどんな所？」

何時も通りに朝食を終えて直ぐ出発した一行は、フレグンスまでの広い街道を順調に進んでいた。これまでの街道と比べると道の状態も良く、行き交う馬車や徒歩の人々の姿も多く見受けられた。

「そうですねぇ、大きい割りに落ち着いた古い街という感じですか」
「活気が無いってこと？」
「ふふ……サクヤは容赦ありませんねぇ、まあ確かに活気が無いと言えばそうとも言えますね」
「やっぱり戦争が近いからなのかなぁ」

道中ちょくちょく耳にしていた帝国グラントゥルモスの侵攻が近いという話。朔耶が此方の世界に喚ばれてレティレスティアと出会った時、彼女を捕らえようとしていた変態コスプレ集団（当時の朔耶視点）もその帝国の手の者だった。

「それもありますが、停滞感や閉塞感……とでも言いましょうか、長い歴史を持つ故に古い仕来りに縛られて変化が無い。支配階級の在り方や政治体制も今の王の提言で徐々に変わってはいますが、全体的にみれば今までと殆ど変わりありませんからね……と、サクヤにこんな話をしても仕方ありませんでしたね」
「む？　それってあたしに政治の話しても分からないって意味？　良く分かってるじゃん」

家の問題がある為、まだ少しレイスとは線を引いた接し方をしている朔耶は、それでも以前よりは打ち解けたように感じていた。
レイスが政治的な話をする時、フレイが何処と無く緊張する様子にも気が付いてたが、事情は大体察しているのでそこは見ぬ振りで流している。

「王都に着いたら、どうしようかなぁ……」
「レティレスティア様との謁見が済んだら、僕の家に招待しますよ」
「引っ張り込む、の間違いじゃないのぉ？」
「いやぁ、手厳しいですね」

ちらっとフレイが二人に視線を向けたが、特に何を言うでも無くお茶の準備をしに隣室へ向かった。何時もならそろそろ昼食の休憩に入る頃だ。

「サクヤの為に工房を用意しましょう、専門の技師にも心当たりがありますし」

「そこまでしてくれるのは嬉しいけどさ、あたしの道具を独り占めしてるとか他の人に言われたりしない？」

「……成る程、確かにそれは有り得ますね」

失念していたと苦笑するレイスに、朔耶は更なる忠告の言葉を浴びせてレイスの表情から微笑を奪った。

「そういう所から足引っ張られたりするモノなんじゃないの？　隙と弱みは見せない方がいいと思うなぁ」

レイスには朔耶の事に関しては他人に知られると致命的な程に不味い事がある。

朔耶の捜索に関する勅令内容の隠蔽など、レティレスティアの耳に入れば家の復興どころの話ではないし、アマガの村からエバンスまでの一連のトラブルなど本来は起こり得なかった事なのだ。

辺境騎士団を始めとし、エバンスの統治者代表からも責任追及の声は上がるだろう。復興と巻き返し、対立貴族への雪辱に目を奪われすぎて足元が疎かになっていた、という訳ではない。

朔耶の、自らを利用しようとする謀を知っても尚自然体で接してくる度量の広さに安心してしまっていたのだろうと、レイスは自身を分析する。要は油断と甘えだ。朔耶の寛容さはドーソンを連れ帰って来た夜に思い知らされている。

「貴女と接していると、牙が抜けそうになる……なのに爪を隠しておけと忠告をくれる」
「レイス？　また目が危ない感じになってるよ？」
「大丈夫ですよ、今はフレイが傍にいます」
「……『今は』って所に身の危険を感じるわ」

お茶の準備を整えて戻って来たフレイは、自分の名前が出た事に話の流れを掴めずキョトンとしていた。
珍しく散らかっていないテーブルの上にティーカップを並べていく。何時もなら削った石やら工具やらが散乱しているのだが、今日は昼の休憩を挟まずに一気に王都まで進む予定なので、朔耶も石弄りは控えていた。
『久しぶりにこの車室の中で動く定位置の騎士が見られた』とか先程までのレイスとの突っ込んだ会話と全く関係の無い事を思いながらお茶を楽しむ朔耶であった。あるいみ、寛容さの正体でもある。

「あれが、王都……」

昼を過ぎて暫らく、朔耶が退屈で眠くなって来た頃、一行は遂に王都フレグンスに到着した。
なだらかに広がる小高い丘に造られた王都は、一番高い所に見える王城、王宮区画を中心に巨大な五重の城壁が波紋のように囲う城塞都市だ。一番外側の城壁の周りにも行商の露店が張り付いていて、殆ど小屋のような造りの店もちらほら見える辺り、今も少しずつ街の規模を広げているようだ。

各区画は街の中をぐるっと回り込むように大門が一箇所ずつ設けられ、最初の区画から街の中を半周すると一つ上の区画に入れる門がある、という造りになっていた。ちなみに王城は門に対して横向きに建っている。

「ふわ～、流石に大きいね……」

門の前には騎乗した王国騎士団の出迎えが十騎程、整列して待っていた。エバンスの時程ではないものの、やはりこういうのに慣れない朔耶は俄かに緊張してしまう。

前後を二騎ずつの四騎、左右に三騎ずつの六騎という陣形で王国騎士団の騎馬隊に護られた一行は、城下街にあたる一般住民区画の街並みを城壁に沿って進み、丁度裏側に位置する門を抜けて一般開放区画に入った。

この区画には各種学校や高名な職人の工房などが集まっている。ドーソンはここで馬車から降りる事を申し出た。

「世話になったね、ここまで乗せて貰った事、感謝するよ」

「どうあってもそのスタイルは貫くのね……」

髪を掻き揚げ、胸を張りつつ腰に手をあてて、斜めに構えながら口の端だけ上げて見せるドーソンに脱力気味に応える朔耶、その仕草を何処で覚えたかは聞かないでおく。道中色々あったが、変わらないドーソンの口調や身振りに朔耶は笑って見送った。

ドーソンと別れた一行は、再び城壁に添って街の中を半周し、反対側にある門を抜けて貴族街の区画に入った。ここには中流から上流階級とされる一般的な貴族の身分に属する人々が住んでいる。

『商人国家キト』や『知の都ティルファ』と違ってフレグンスでは身分の区別が厳格な為、この区画には例え金持ちの豪商であって

も高名な技師であっても、貴族の身分に無いものが居を構える事は許されない。

「閑静な高級住宅街って感じだね～、住宅って言うには屋敷クラスばっかりだけど……レイスの家もここにあるの？」

「いえ、僕の家はもう一つ上の区画にあります、一応フレグンス有数の大貴族の家ですからね……とは言っても、いつこの区画に落とされても不思議はない状態ですけどね」

「難儀だね～」

人事（ひとごと）のように、実際人事なのだが軽く流す朔耶に、レイスは苦笑で応えるしかなかった。何せその落ち目のアクレイア家を再びフレグンスの大貴族魔術士筆頭の栄光へ帰り咲かせる鍵となる人物だ。

朔耶の道具はレイスの父、ルィバンスを不義なる手段で退けて宮廷魔術士長となったコースティン家の、不正を暴く手掛かりを掴めるかもしれないのだ。

「レイスさま……」

その雰囲気から何かを感じ取ったのか、フレイが諫めるようにレイスをじっと見詰めると、レイスは『分かっている』とでも言うようにふっと軽く微笑んで見せた。安心したように笑みを返すフレイ。

「ふ～た～りで～見つ～め合う～」

「さ、サクヤ様？」

「まぁ～ったくこの二人は、イチャ付くなら見てない所でやってもらえますぅ～？」

「……急にやさぐれないで下さいよ」

しっかり朔耶にからかわれる二人であった。

貴族街の区画を半周し、次の区画に入る門を潜ると、いきなり物々しい雰囲気を醸し出す無骨な壁が正面に見えた。
壁としか表現のしようが無いそれは、何やらトゲトゲしたモノが表面に幾つも突き出ていて、細い覗き窓から見える向こう側の光の具合からかなりの厚みを感じさせる。

「強化防壁ですよ、有事の際にはこれで門を塞ぐ事になります」
「壁を壊されたり乗り越えられたら意味無くない？」
「門を潜る時にお分かりかと思いましたが、ここの城壁の厚みは相当なモノですからね。破壊は勿論乗り越えるのも容易ではありませんよ」

自信と誇りを言外に感じさせながら苦笑気味に語るレイスに、朔耶はぽつりと呟くように言った。

「そういうモノ程破る手立てが見つかった時は脆いんだけどね」

上流階級の中でも門閥貴族達しか住む事の許されない、通常はフレグンスの騎士であっても容易に立ち入る事の出来ないこの区画には、何れも歴史を感じさせる古い大きな屋敷が点々と建っているのが見える。

増改築で新しい壁や屋根を持った屋敷も見える。どの家も大きな敷地を持っている為、閑静度合いが一つ下の区画とはまるで違う。見ようによっては閑散としているようにも感じられる。それだけ、この区画に住める人間が少ないという事でもあった。

「僕の家はあの青い屋根の屋敷ですよ、もう大分古くなってるのでそろそろ修繕しないと不味いんですけどね」

レイスの指し示す方向に朔耶が視線を向けると、城壁に近い場所に石造りで褪せた色合いの屋根を持つ大きな屋敷が建っていた。他の屋敷同様、高い塀で囲まれているので殆ど屋根しか見えないが、なるほどかなり痛んでいる様子だった。

「修繕より建て替えた方が良くない？」

「それは出来ないんですよ」

「なんで？　あ、伝統ある屋敷だから駄目とか？」

「いえ、もっと切実で現実的な理由です……建て替える為の費用が無いんですよ」

アクレイア家の初代が建てた屋敷には伝統もあり、レイスも生まれ育った屋敷には愛着もあるが、没落してからは使用人の数も減らして尚厳しい財政事情が続いていて、修繕どころか維持の為の手入れすら事欠く状態なのだという。

「せ、切実過ぎる……」

「没落するという事は、そういう事なんですよ」

思わず『苦労してるんだねぇ』と哀れみの眼を向ける朔耶に、『その眼はやめて下さい』と本気で落ち込み掛けたレイスだった。

そんな超高級住宅街（朔耶談）を抜けて最後の門、城門を抜けると城の横壁が左右に延びていた。ここにも強化防壁が幾つか置いてあったが、今日の為に少し奥に除けてあるそうだ。

普段は城の壁にズラッと並べてあって、中々壮観だがかなりの威圧感があるらしい。城は正面と裏側のどちらからでも入城出来る造りになっている。

正面に回った朔耶達一行は整列した王国騎士団と、この王宮区画にある上流階級専用の精霊神殿に勤める聖騎士団、それに城のテラスに繋がる向い合わせの階段の所に整列している近衛騎士団達に迎えられた。

テラスにはレティレスティアが、今や遅しとそわそわしている姿が見える。護衛隊馬車と侍女たちの馬車が前後左右の騎馬隊と共にまず離れた場所に停まり、朔耶の乗る大型馬車がテラスの見える正面に停車した。

「さ、着きましたよ」
「ううう……緊張するんだけど」
「大丈夫です、私がお傍に控えていますから」

何時の間にか侍女服から魔術士の服装に着替えていたフレイがサクヤの手を握る。フレイは首元から足首付近まで流した幅のある布を腰の辺りで縛ったノースリーブのワンピース風な格好だった。

執事のような服装をした案内人が馬車の前に歩み寄り、徐に扉を開けると脇に控えて礼を取った。

レイスが朔耶の手を取ってエスコートすると、その後ろにフレイが続く。朔耶は馬車を降りる時、車室の扉脇に最後まで立ち続けた定位置の騎士にお礼を言った。

「ここまでありがとね、ゲーリンさん」

名前を呼ばれて目を丸くした定位置の騎士、ゲーリン・クロッス（２３・独身）は感激に打ち震えながら最後の敬礼をした。彼がこ

の任務を全うした瞬間だった。

レイスにエスコートされながら馬車を降りた朔耶はまず、整列する王国騎士団と遠巻きに見ている貴族の集団から様々な意の篭った視線が集中するのを感じた。

訝しむモノ、好奇のモノ、値踏みるモノ、品定めのようなモノ……何れにしても探りを入れるような視線が多く、好意的な印象はあまり感じられない。

『うわ～……コレ、あたし一人で来ても絶対レティに会わせて貰えなかったかもしんない……』

レティレスティアの勅令が出されていた時点でそんな事は無いのだが、庶民である朔耶にとってはこの場に居る事が酷く場違いな気分にさせられる雰囲気だった。

そんな視線の中を両脇に並ぶ騎士団の迫力に圧倒されながらテラスに繋がる向い合わせの階段の近くまで来た時、上からレティレスティアの声が響く。

「サクヤ！」

見上げると、テラスの縁を掴んで身を乗り出すようにしたレティレスティアが喜びともどかしさを混ぜ合わせたような何とも言えない表情で見詰めている。

朔耶にとって明るい日の下でレティレスティアを見るのはこれが初めてとなるが、ふわっとした金髪に人形のような均衡のとれた端

整な顔立ちはやはり綺麗だった。そして森では気が付かなかったが、その瞳は金色をしていた。

「やほ」

朔耶はニコッと微笑んで取り合えず片手をふりふり軽く挨拶をしてみる。周りの人々は『やほ』とは何だろう？　と疑問を浮かべていた。あの少女の国の民族的な挨拶だろうか？　などなど。

身分に厳格なこの国において多くの騎士、貴族達が見守る中で、王族に対してこれほどフランクな挨拶をしたのは朔耶が初めてであろう。しかし『やほ』の意味を図りかねている彼等は更に驚くべき光景を目にする事になった。

感極まったレティレスティアは仕来りに添った挨拶の段取りなど待っていられなくなり、階段を駆け下りて朔耶の傍まで走った。面食らったのは近衛騎士団である。

こういう場での挨拶には暗黙の決まった段取りがあり、まずテラス越しに王族が声を掛け、謁見者はそれに深く礼をして応える。

次に謁見者は王族に対して今日お顔を拝見出来た喜びと感謝の口上を述べる。

それを受けた王族が謁見者に労いの言葉を掛ける。

労いの言葉を賜った謁見者はそれを勿体無くも有難く受け取り、王族と国の繁栄を謳う。

殆どの謁見はここで終わりだが、特に親しみを見せる場合、王族が謁見者を呼び寄せる。

傍に寄る事を許された謁見者は喜びと感謝の言葉を述べてから階段を上り、王族の傍らに膝を付き忠誠を示す。
王族が謁見者に手を許す。

謁見者は許された手に接吻を落とし、王族に手を引かれて立ち上がる。ここでようやく普通の会話というか、本題に入る事が出来るのだ。

「サクヤ！」

それら全てをすっ飛ばしたレティレスティアは朔耶の傍まで駆け寄ると、飛び付くように抱き締めた。
王女の突然の行動に慌てて後を追ってきた近衛騎士団と、いきなり王女が下りて来た為、どうすればいいのかと困惑していた王国騎士団、それに周囲の貴族達の全員が固まった。

その中にレイスやフレイ、離れた場所で見守っていた護衛隊、侍女たちの面々も含まれている。レティレスティア姫と懇意らしいとは聞いていたが、これは完全に予想外だったのだ。

『あの娘は一体何者なんだ？』

朔耶とレティレスティアを除く、全員の心の声だった。

23話：交感

「ごめんなさい、私ったらつい……」
「いや～あははははっ　ちょっとびっくりしただけだから」

城の正面口での騒ぎの後、城内の一室に場所を移したレティレスティアはしゅんとなって朔耶に非礼を詫びた。
朔耶の事に関しては久しく行使されていなかった王家の勅令を王女個人の私的な理由で発令したり、神殿の水鏡では定期報告の席で下級騎士と直接言葉を交わすなどの異例事が続き、只でさえ王都の貴族達は王女が御執心の相手は如何なる者ぞ？と神経を尖らせていた所にアレである。朔耶はあらゆる方面から注目を集める重要人物として認識されてしまった。

今この部屋にいるのは朔耶とレティレスティアの他に直接朔耶を護衛する任務を賜っていたアンバッスと部下のレイス、朔耶の専属警護という事で同室を許されたフレイと後は城の使用人である侍女たちだ。
部屋の外では近衛騎士団長イーリス他、部下の近衛騎士達が警備に就いている。

レティレスティアは脇に控えているアンバッスとレイスに向き直ると、労いの言葉を掛けた。

「貴方は水鏡で話したあの時の騎士ですね、よくぞここまでサクヤ

を送り届けてくれました、礼を言います」
「ハッ　勿体ないお言葉で」

騎士の礼を取って畏まるアンバッスとレイス、その後ろに膝を付いて控えるフレイの三人。朔耶は畏まっているアンバッスをからかおうと視界に入るようにレティレスティアの後ろをうろちょろしていたが、侍女さん達に怪訝な目を向けられたので自重した。

レティレスティアから褒賞が与えられる事になった時、アンバッスはクルストス支部への活動支援を要請し、レイスはやはり王都への転属を願い出た。

「分かりました、クルストス支部への特別報酬予算と騎士アンバッス・クルト小隊長の昇進を要請しておきましょう。騎士レイス・チル・アクレイアには昇進と王都への転属に伴い、王国騎士団小隊長の枠を用意させます。これでよろしいですね？」
「ハッ」
「ありがたき幸せ」

「アンバッスさんもこっちに残ればいいのになぁ……」

侍女さんが淹れてくれたお茶を啜りながら朔耶がポツリと呟くと、アンバッスは何か言い掛けたが王女の御前である事を気にして口を噤んだ。

そんな様子を見たレティレスティアは、今は無礼講で構わないからと促す。朔耶が不満そうにしているのが気になるらしい。アンバッスは少し逡巡しながらも、それならばと口を開いた。

「あ～、畏まった喋り方は苦手なもんで、口調は勘弁願いますよ？」
「うふふ、構いませんわ」

「畏まったアンバッスさんも見てて面白いんだけどね～」

混ぜっ返そうとする朔耶を無視してアンバッスは話を進める。

「簡単に言えば、王家と縁の出来た人間が一人くらい向こうに居た方が都合が良いって事だな」

「それは……　サムズへの牽制という意味でしょうか？」

「まあ、それもありますがね」

殆ど有って無いような状態の国境を接するクリューゲルと違い、サムズはフレグンスの衛星国家として在りつつもまだ明確に国境を誇示している。クリューゲルの要請に従って駐在する派遣騎士団と違って、サムズに駐在する辺境騎士団は言わば駐留軍のような位置付けにある。

平和が続いているからこその、豊かなフレグンスからの恩恵もあって衛星国家として従ってはいるが、イザ有事の際にはどう動くか未だ油断ならない相手なのだ。

フレグンス王家の勅令が疎かに扱われた事実を鑑みれば、国家としての忠誠度合いが測れるというモノだ。

「俺はクルストスの出身なもんで、向こうの治安を守りたいってのも理由にありますな」

成る程と、頷いて理解を示すレティレスティア。

「アンバッスさんが向こうで偉くなったら、きっといい国になりそうだね」

「今でもそう悪くはないぞ？」

「そう？　だって騎士団本部の独房で……」

「うおっほんっ！！」

いきなり不自然な咳払いをかますアンバッスに、朔耶は慌てて口を噤んだ。レティレスティアの前でこれを言っちゃあいけないと。

「……本当に御免なさい、私……サクヤになんて事を……」

少し遅かった。　決して彼女に責任がある訳ではないのだが、もっとしっかり確認を取るべきだったと盛大に落ち込むレティレスティアを宥め賺して落ち着かせつつ、朔耶はレティレスティアに会ったら訊こうと思っていた質問で話題の転換を図ろうとして……

「姫様、祈りの儀式の準備が出来ております」

そっと寄って来た侍女がそう言って促すと、扉の所で待っていた初老の神官が丁寧にお辞儀をする。

「まあ、もうそんな時間？　ごめんなさいサクヤ、私　これから儀式に出なければならないの」

レティレスティアは申し訳無さそうにそう言って後の事を案内役に任せると、御付の神官と近衛の護衛をぞろぞろ連れて慌しく午後の祈りの儀式に出向いて行った。

この王城の敷地内には定期報告にも使われる貴族専用の神殿が建てられているが、それとは別に王族だけが入る事の許された精霊神殿が城内に存在する。

精霊術士である王族は代々その神殿で祈りの儀式を行い、精霊との交感能力を高める修練を積む事を義務付けられていた。レティレスティアも精霊術に目覚めた歳から毎日のように、朝と夕方に神殿に入り、祈りの儀式を行っている。

「あああ……　聞きたい事とか、話したい事とか、殆ど話せなかったよー……」
「仕方あるまい、そう急く事はないさ」
「あまりノンビリもしていられませんけどね」

案内を仰せ付かった執事っぽい服装の初老の男性が一つ礼をして朔耶を部屋へと案内する。

アンバッスはこれからクルストスに帰還する旅の準備に入るし、レイスも一度実家に戻って報告をしたりと色々準備があって、朔耶の招待はまた後日という事になった。どの道レティレスティアの意向で今日は城に泊まる事になっていたのだ。

朔耶がレティレスティアから聞いた話では　明日、正式に客人として『王の間』で迎える事になるらしい。今日は顔合わせだ。

「それではサクヤ様、私も一度レイスさまの所に戻りますので、また明日」
「うん、お疲れ～」

部活動の帰りのような軽い挨拶をしてフレイと別れた朔耶は、案内人に連れられて一つ下の階にやって来た。この階には沢山の部屋があって、殆どの部屋が客間として使われている。外国からの来賓などもここに宿泊する。

長屋のように連なった部屋と違い、一部屋ずつ廊下で区切られているので、ちょっとした迷路のようなフロアになっている。扉の形や色も様々だ。朔耶はその内の上部がアーチ上になった扉の部屋に案内された。

扉を開けると、部屋の中は薄い若草色の壁に淡い光を灯す魔術式ランプが据え付けられ、壁際に小さな机があり、奥にはでんっと天蓋付きベッドが鎮座している。窓は無い。

カースティアの高級宿に比べると若干落ち着いた雰囲気の部屋だが、高級感は此方の方が感じられた。案内人は後で侍女を寄越すので湯浴みの際には申し付けて下さいと言って礼をした後、通路の奥へ消えた。

「あっ　あたしの荷物！」

朔耶はベッド脇に見覚えのあるでかいリュックを見つけて駆け寄った。

「あ～なんか懐かしい……　ちゃんと預かってくれてたんだ～」

早速どりゃどりゃ？と中身を確認すると、あの川岸で最後に中を漁った時のままだった。中に仕舞われていたフラッシュライトはスイッチが入ったままになっていて、電池が切れていたので予備の電池に入れ替えておく。

お弁当はもう駄目だ。『開けちゃ駄目だ、開けちゃ駄目だ』と呟きながらブルーのゴミ袋に入れてグルグル巻きにしてガムテープで補強して、『何処かに埋めようか、それとも燃やそうか』と処分方法を検討する朔耶だった。

「懐中電灯の代わりとか作れないかな～、光属性の魔力石とか……は、ある訳ないか」

そんなモノがあれば昼の内に魔力石が全て光属性になって、夜になると大地の彼方此方で光が見えるなんて状態になる。朔耶は自分がまだまだ此方の常識に疎い事を実感しながら、レティレスティアに訊いておきたい事を今の内に纏める事にした。

身体の事。傷の治りが異常に早かった事に関して、疎通の加護や精霊石の指輪に副次的な効果があったりするのかどうか。それに関連して魔力石を簡単に加工出来てしまう現象の事。

朔耶自身の魔力については質問すべき部分も良く分からないので保留。そして一番重要な事が、『元の世界に帰る事が出来るのか否か』。これ如何によって、この世界での生き方を考えなくてはならない。

いずれ帰る事が出来るのなら、或いはもう帰る事が出来ないのなら、それ相応の生活の仕方を考える必要がある。

「……あたし、帰れるのかな……」

精霊の声が応える事はなかった。

城の地下に設けられた湯浴み場で身体を清めたレティレスティアは、儀式用の薄いベールのような衣を纏って更に地下にある精霊神殿にやって来た。何時もの交感による祈りの儀式だが、今日は少し神殿の空気が違っているような気配を感じていた。

『きっとサクヤに会えて私の気分が高揚しているのね』

レティレスティアは神殿に感じる何時もと違う気配は自らの高揚した気分が原因だろうと判断した。交感の深度を上げる為に気持ち

を落ち着かせて精霊の声に意識を向け、心を開く事に集中する。

「……？」

交感に何か引っかかる存在を感じたレティレスティアは、その存在に意識を向けて呼び掛けた。精霊の声というものをまだハッキリとは認識した事のない彼女は、精霊の意思を感覚で感じ取る事に集中する。

……レティ？

「えっ？」

ふいに、レティレスティアは自らの心の中に響いた問い掛けるような意識に驚き、声を漏らした。深い交感状態が解け、眠りから覚めるように意識が浮上する。傍で精霊術の指導をしてくれている母、王妃アルサレナが『集中するように』と眼で叱責する。

『今のは精霊の声なのでは？』と、レティレスティアは高揚する気持ちを落ち着かせると、再び深い交感状態に入っていく。

『精霊よ……私の声に応えてください……』

……わっ　やっぱりレティだぁ！　びっくりしたぁ

「ええっ！　さ、サクヤ！？」

レティレスティアの精霊術を指導する師でもある王妃アルサレナは、娘が驚きの声を上げる姿を怪訝な表情で観察した。精霊との交感が進む事で様々な現象を意識で体験したり、精霊の見るモノを感

じ取ったりする事は間々ある事だが、この反応はおかしい。
今日のレティレスティアは朝から妙に落ち着かなかったり儀式に遅れて来たりと、気を散らしている原因の元は分かっていたが、交感の最中に何故その人物の名が出てくるのか。

「レスティア？　あなたのお友達がどうかしましたか？」
「あ、か、母様っ　サクヤが……　交感でサクヤと繋がってしまいました！」
「？　……何を言っているのです？」

娘の言動を訝しく思いながらも、レティレスティアの『状態』を『視る』為、アルサレナは精霊術を行使した。

「――精霊よこの者の有り様を正しく我に示し給え――」

精霊の力が働いてレティレスティアの状態が視得て来ると、レティレスティアは確かに精霊との交感状態にあるのが分かった。
彼女の胸の辺りを中心に魂の枠が広がり、肉体の外側まで溢れて世界と溶け合っている。この状態で世界のあらゆる場所、時間に遍在する精霊を感じ、特定の個を成した精霊と交流を図ったり、特に親しみを持った個の精霊とは契約を交わしたりといった事が出来るのだが――

『レスティアが交感している精霊は個であって個ではない？　個を維持しつつも全てとの繋がりが垣間見えている……　少し、危険かもしれない』

アルサレナはレティレスティアの状態を見極めながら、自身が契約して使役している六体の精霊に結界を張る準備を伝えると、レティレスティアに交感解除を呼びかけた。

「レスティア、交感を解きなさい」
「え？　は、はい母様……　サクヤ、また後で」

レティレスティアの魂の枠が肉体の内側まで戻ったのを確認して、アルサレナは神殿内に結界を張った。これでアルサレナの許しを得ていない者は人であっても精霊であってもここには近寄れない。筈であった。

……あれぇ？　レティ～？　お～い

「あ、サクヤの声が……」
「っ！？」

その『声』は神殿の空間に染み込むようにアルサレナの結界を越えてきた。精霊の結界を越えられる存在があるとすれば、『個の精霊』を超越した『精霊という存在そのモノ』に他ならない。

精霊の結界自体が個の精霊自身で作られた言わば精霊の身体の壁なので、個の精霊を構成する精霊の元のような世界を余す事無く満たす『精霊という存在そのモノ』ならば世界の何処にだって存在する事が出来る（している）故に、そこに結界があろうと無かろうと関係なく『在る』事が出来る。

しかし、その存在は個のような特定の意識など持たない。ましてや人格など持つ筈が無い。そんな事が起きれば世界はその意思が想った瞬間に姿を変えるなどして、とても人や動物が生きていられるような状態に留まらないだろう。

アルサレナが得体の知れない存在に畏怖を感じながらもその正体を見極めようとしていた時、レティレスティアに異変が起きた。アルサレナが沈黙していた為、指示を待たずに『声』に対して交感を

働きかけたのだ。

「あっ……　くぅ……　サ、サク……ヤ　……少し……きつい、です……　んぁああ……」

「レスティア！　いけませんっ　交感を解きなさい！」

ガクガクと震えながら身を捩るレティレスティアの意識を呼び戻しながら、アルサレナは意を決してレティレスティアがサクヤと呼ぶ存在に交感を仕掛けた。

『私はアルサレナ・クラヴァルト・フィリス・フレグンス。この地の精霊と契約せし血の一族の者です。サクヤと名乗る存在よ、レスティアとの繋がりを緩めては頂けませんか？　このままでは娘の精神が持ちません』

……え！　レティのお母さん!?　ど、どうすればいいの？

余りにも人間味あふれる反応を返すその存在に面食らいながらも、アルサレナは手順のイメージを送る。レティレスティアの意識を捉えるように絡まっていた気配が緩んで行き、レティレスティアの状態も安定した。

「はぁ……はぁ……　サクヤ……」

……ご、ごめんね　大丈夫？

「はい……　私は……大丈夫……です」

レティレスティアに対する敵意や害意は無いと確認したアルサレ

ナは一つ安堵の息を吐くと、もはや意味を成していない結界を解いてサクヤと名乗る存在に向かいあった。

『貴方はレスティアの語っていたサクヤという娘なのですか？』

……えと、はいそうです

なんだか畏まった気配が伝わって来たので、アルサレナは可笑しくなってしまった。先程はその得体の知れなさに畏怖さえ感じていた相手の筈なのに、交感から伝わってくる気配は少し変わった普通の年頃の娘だった。

『サクヤ、貴方はまだ交感という手段に不慣れのようですので、直接お話を窺いたいのですが、宜しいですか？』

……はい是非、あたしも色々聞きたい事ありますし

『分かりました、今は部屋に居るのですか？』

……はい、部屋の中です

『では其方に迎えの者を遣りましょう』

交感を解いたアルサレナはレティレスティアの体調を調べて問題無しと判断すると、神殿の入り口を護っている近衛に朔耶を案内して来るように申し付けた。

「レスティア、先程の交感のような危険には十分気を付けなさい」

「ご、御免なさい母様……」

交感は精霊と心を触れ合わせる行為でもある為、精霊のように自己意識が希薄で人格も個の維持に必要な程度しか持たない存在なら、余程深く繋がったりしなければそれほどの危険は無い。
しかし人間の意識並に自己を持った相手となると、相手の意識に囚われて飲み込まれてしまう危険性が高まる。

先程のレティレスティアの状態は、レティレスティアの意識を探して近付いて来た朔耶の意識が、触れて来たレティレスティアの意識を掴んで引き寄せた為、レティレスティアの意識が心ごと持って行かれ掛けた状態だ。
サクヤ本人にその意図が無くとも、例えば人間が小さな虫を指でそっと摘んだつもりなのに潰してしまうような事故が起きかねない。

「例え貴方が信頼を寄せる相手だとしても、意図せず貴方を傷付ける場合もあります。そうなれば結果的に相手も傷付ける事になるのですよ？」
「はい……以後気をつけます」

しゅんとなったレティレスティアを優しく抱きしめて慰めたアルサレナは、休憩所で一休みするよう促して神殿を後にし、その足で湯浴み場に向かった。
神殿に入るには湯浴み場で身体を清める必要があるので、まずそこで一度サクヤと名乗る娘に会っておこうと考えたのだ。
湯浴み場には数人の侍女が入り口で所在無さ気に集まっていた。

「貴方たち、何をしているのです？」
「ア、アルサレナ様！」
「あの……サクヤ様が一人で入るからと……それで」
「追い出されてしまいまして……」

成る程、とアルサレナは理解を示した。他人に肌を晒さない風習のある国の者かもしれない。

「貴方たちは休憩所に控えていなさい、サクヤの清めは私が行います」

「アルサレナ様自らですか！？」

「わ、分かりました……失礼します」

侍女たちを下がらせ、アルサレナは湯浴み場に足を踏み入れた。儀式用の衣を脱ぐと自然の洞窟のような造りになっている湯浴み場の岩肌の上を歩いて行く。

壁に埋め込まれた淡い光を放つ魔術式ランプの灯りがボンヤリとした光で湯気を浮かび上がらせ、アルサレナの歩みで巻き起こった空気の揺れにうねりを見せる。

「だれ？」

湯気の向こうに、華奢な身体付きで黒髪に黒い瞳を持った少女の姿が浮かび上がる。アルサレナはその姿を見て眼を見張った。

『精霊と、重なっている……？』

２４話：異界の魔術士（前書き）

今回はちょっとややこしい説明が大部分を占めてます。

２４話：異界の魔術士

「な、なんかエロくない？　この格好……」

地下の精霊神殿に案内された朔耶は、身体が薄っすらと透けて見えるベールのように薄い儀式用の衣を気にした。

湯浴み場でいきなり王妃アルサレナと対面した事に慌てた朔耶だったが、粛々と清めを勧めるアルサレナに手取り足取り裸の付き合いでお清めの仕方を教わり、『では、参りましょう』と渡された儀式用の衣を纏った頃にはすっかり落ち着きを取り戻していた。

「私はもう慣れましたわ」

神殿の儀式で朔耶と一緒に居られる事が嬉しいらしいレティレスティアは、可憐に綻ばせた顔を見せながら朔耶の手を取って神殿の奥へ誘った。

「じー……」

「？　サクヤ？　どうかしましたか？」

「いやぁ、結構大きいんだなぁと思って」

「え？　あ……、きゃあっ」

朔耶の視線から言葉の意味を理解したレティレスティアは慌てて胸元を隠しながら頬を染めた。

今までこの場所で儀式をする際、傍に居たのは常に母アルサレナ

だけだったので、薄い儀式用の衣も透けて見える身体も慣れてしまえば特に何も思う所は無かったのだが、こうも分かり易く他者の視線を浴びると羞恥の念が蘇える。

「レスティア、サクヤ、神聖な場ですよ。　戯れは余所でなさい」
「す、すみません……」
「ご、ごめんなさい……」

神殿の奥にある儀式の間は広い円形のホールになっていて、中央に一段高くなった精霊石の祭壇があり、周りは膝辺りまでの地下水で満たされている。
アルサレナに促されて祭壇の中央までやって来た三人は車座に向かいあって座った。そしてレティレスティアと朔耶の顔を見渡したアルサレナは徐に口を開いた。

「さて、サクヤ……貴方は自分が今どのような状態に在るか、分かっていますか？」
「いえ……　精霊が重なってるって、どういう事ですか？」

朔耶の答えに一つ頷いたアルサレナは、すっと手を振り何かを唱えた。すると周囲を満たしている水の一部が盛り上がり、一個の水球を形作って空中に浮ぶ。
水球は車座に座る朔耶達の間にふわふわ移動して来ると、そこに留まった。朔耶は『おお～』と珍しそうにそれを観察している。

「まず、この水球を世界を満たす『精霊という存在そのもの』と仮定しましょう」

精霊はあらゆる場所、あらゆる物に宿り、それは一瞬の雷鳴や雨

粒の一粒にまで及び、世界は『精霊という存在そのもの』の中に在ると言っても過言ではない。

世界を満たす『精霊という存在そのもの』は只、存在しているのみで、そこに特定の意思は無いとされている。しかし大きな一定の方向性があり、それが世界の姿を大きく変容させる事無く維持させている。それを『大いなる意思』と呼ぶ。

「私達が交感する精霊とは、この『精霊という存在そのもの』と同質で在りながら個の意識を持ち、『精霊という存在そのもの』の中に在りながら別の存在として在る精霊を指します」

アルサレナは指をすいっと動かし、水球の中に氷の粒を作って見せた。水球が『精霊という存在そのもの』で氷粒が『個の精霊』を表している。

「先程、精霊はあらゆるモノに宿ると言いましたが、実際には『宿っている』と言った方が正しいでしょう。あらゆるモノがそこに存在を始める前から、既にそこは精霊に満たされている訳ですから」

そう言ってまた指を動かすと、祭壇の脇の水の底に沈んでいた砂粒がまるで時間を逆回ししたように空中を上って来て水球の中に流れ込むと、その中で街を形作った。朔耶はそれらの現象に感嘆しながら見惚れている。

「簡単ではありますが、世界と精霊の関係はこのような状態であるとまずは理解して下さい」

こくりと頷く朔耶を見て『よろしい』と満足げに微笑んだアルサレナは、水球の中に作った無数の氷粒をぐるぐると動かしながら次の説明にはいる。

「このように個の精霊は『精霊という存在そのもの』の中で個別の存在となって、ある者は水を司り、ある者は風を司り、交感者と意思を交わす事で様々な恩恵を与えてくれます。彼等は只、求められた事を与えてくれる存在とも言えます。精霊は人の善悪など超越した所にいる存在なので、交感者が善人であろうと悪人であろうと、訳隔てなく恩恵を与えてくれます」

水球の中でくるくると動き回り、現れては消えるを繰り返す氷粒の中に、幾つかじっとその場から動かない氷粒があり、それは徐々に他の氷粒よりも大きくなっていった。

「そして長く世界に留まった精霊の中には、他の精霊達よりも若干意思の育った状態の者も居ます。彼等とはより明確な意思の疎通が可能となり、また僅かながら感情の類が見られるようにもなります。そういった古い精霊とは契約を交す事で繋がりを持ち、常に共に在る事が出来るようにもなります」

砂が集まって人を形作り、その周りに大きめの氷粒が集まる。そして氷粒から糸のような細い氷の線が砂人形に繋がった。

「個の精霊の力はその精霊の意思によって働くと考えられます。その力の源は『精霊という存在そのもの』にあります。個の精霊の意思が強ければ強い程、『精霊という存在そのもの』から引き出せる力も強くなると考えれば分かり易いでしょう」

個の精霊の意思は人のそれと比べると遙かに薄弱で希薄なモノだ。なので交感者の求めに応じて発現させる現象もその精霊の意思の強さに比例する。交感者の交感能力が高ければ、より広範囲に、より意思の強い精霊に求めを乞う事が出来るようになる。

「さて、そこでサクヤの今の状態ですが、どういう理由でなのかは分かりませんが、サクヤには個の精霊が交感状態で結びついています」

人を模った砂の塊に氷粒が融ける様に入り込み、半分凍ったまま一体化した。

「それって……あたしの身体の中に個の精霊が居るって事ですか？」

「そうです、もっと正確に言えば、貴方の魂と絡み合っている状態ですね」

通常、交感状態に入るという事は精霊と心を通わせる為に自ら心を開いて精霊と触れ合う行為である為、その状態を維持するには少なからず集中を続ける必要がある。

精霊との交感を深める修練を積む事で、その感覚を覚え、磨き、通常時に僅かな祈りで精霊に呼びかけて力をかして貰えるようになる。それが精霊術の基本でもある。今の朔耶は心の奥で精霊と深く繋がったまま普通に過ごしている状態にあるという。

「さらに、これは……　素晴らしい事、とも言えますが……　寧ろ危険な状態でもあるのです。何しろ貴方と深く繋がっている事で貴方の意思がそのまま貴方の中の精霊を通して『精霊という存在そのもの』の力を発現させている状態でもあるのですから」

アルサレナが視た朔耶の状態は、朔耶の意思がそのまま精霊の意思として発現している状態。

朔耶の中にいる精霊の意思も確認は出来るが、やはりより強い意志として在る朔耶の意思に牽(ひ)かれる様に、朔耶の意思を精霊の力に乗せて発現させている。つまり、朔耶自身が自らの意思で精霊の加

護などの力を発現させる事が出来るのだ。

「あ……　じゃあ、もしかして石が簡単に削れるのも　稲妻ビンタで電撃が出たのも……」

「イナズマビンタ？」

朔耶は魔力石の加工の事や『稲妻ビンタ』で発生した電撃の事など、自身の身に起きている不可思議な現象について話した。

他にも傷の回復が異常に早かったり、意識の奥に聞こえる謎の声の事、そして自分がこの世界とは違う別の世界から精霊によって喚ばれたという事も説明した。

「そう、だったのですか……」

「成る程、興味深い話ですね……」

レティレスティアは自分を助ける為に、自分の声に応えた精霊によって朔耶が喚ばれたという事に少なからずショックを受け、その後の顛末を想うと申し訳なさが込み上げて来て朔耶の顔をまともに見られなくなり、俯いてしまった。

アルサレナは異界から喚ばれたという部分に着目し、何故朔耶と精霊が重なるに至ったのか、アルサレナ成りの推論を立てた。

「恐らく、レスティアを助けようとした精霊はサクヤを此方の世界に渡す為に、サクヤの世界に遍在する自らの精霊自身を重ねたのでしょう」

精霊術の中にも高等な術として転移術があり、精霊に包まれて精霊の中に溶け込み、遠く離れた場所で再び身体を構成して遠方へ僅かな時で移動する事が出来る。

通常の補正術や移動術を行える精霊とは比べ物にならない程の強

い力を持つ精霊との契約が必須で、力の足りない精霊ではそもそも術の行使から不可能だが、中途半端に力のある精霊や契約で繋がっていない精霊に求めたりすると、身体の一部だけが転移したり、転移の途中で別の交感者に呼ばれるなどして術者の命に関わる事故が発生する事も起きうる危険な術でもある。

「げっ！　それじゃあ、あたし下手したら身体バラバラでこっちの世界に放り出されてたかもしれないって事？」

思わず青くなる朔耶。レティレスティアも想像したのか蒼白な顔をして自らの肩を抱く。しかしアルサレナは首を振ると、その可能性を否定した。

「精霊が人を……いえ、人に限らず世界に生きる者を精霊自らの意思で死に至らしめるような行為を行う事はありません。求められない限りは……。サクヤを喚んだ精霊は喚ぶ事に危険は無いと判断したのでしょう」

朔耶からすれば事前の承諾も選択の余地も無しに喚ばれたのはかなり強引なやり方と捉えられるが、精霊にとっては『ちょっと世界の位置を合わせただけ』で、その後の行動は朔耶の意思に従っている。

最初に協力を求めた森の動物たちや木々、植物たちへの対応と大差無い事なのだ。何故重なったままなのかは世界を移動した弊害なのか、川の中で叫んだ朔耶の呼びかけに従って朔耶の身体を保護し続けた結果なのかは不明だ。

「レスティアが疎通の加護を使った時にサクヤが聞こえたという声が、サクヤに重なっている精霊の声でしょう」

精霊の意思もちゃんと自己の形態は保っているので、朔耶の意識に語りかける謎の声もその精霊のモノだろうとアルサレナは推測し、朔耶もそれには納得した。

石の加工が容易なのは、朔耶の『石を削ろう』という意思が精霊を通して石に伝わり、石自体が自らを削り易くしているのだろうとの事だった。

それに関しては朔耶も心当りがあって、石に限らず木材も思ったより削り易かったし、硬いだろうと思った石は硬かったが、削ろうと思えば削れていたのだ。細かい部分を整える時など、爪でかりかり削っていたのだから。

「しかし……魔力測定器とはまた非常に興味深い道具ですね、サクヤの魔力が異常に高く示されたというのはある種当然の事と言えます。魔力もまた『精霊という存在そのもの』から精製されている力と言えるからです」

精霊術は精霊に求めて精霊の力で『精霊という存在そのもの』から様々な現象を発現させる。魔術は人が現象をイメージし、呪文の詠唱と魔力によってそれを具現化する。

その魔力の源は人が体内に、正確には魂に取り込んだ世界を満たす『精霊という存在そのもの』が原料と言える。結局発現方法が違うだけで、精霊術も魔術も素は同じモノなのだ。

「魂と繋がった精霊を通して『精霊という存在そのもの』に触れているサクヤは、言わば魔力の原液の出口と化している訳ですから」

百三十石以上どころの話では無いという事だ。魔術として行使するならほぼ無限に精製される魔力、精霊術として行使するなら精霊に求めなくとも自分の意思が直ちに発現される。

但し工程や手順というモノはある訳で、魔法の無い世界から来た朔耶は魔術の使い方も精霊の力の事も知らないが故に、無意識下での欲求に対して繋がっている精霊が応える形で『稲妻ビンタ』に電撃を発現させたり、傷の回復を早めたりしていたのだ。

「では……その力を使えば、サクヤは元の世界に還る事が出来るという事ですか？」

「精霊の力を使いこなせる事が出来れば、或いは可能性もあるでしょう」

「うん？　あたしの中の精霊に頼んで還して貰う訳にはいかないの？」

「サクヤの世界に還すよう、精霊に呼び掛けてみた事は？」

朔耶は森でレティと出会い、帝国の手の者から逃れた時から呼び掛けていたが、特に返答らしきモノは無かった事を伝える。アルサレナは少し考え込み、何度か視線を彷徨わせた後『もしかしたら……』と徐に自分の考えを口にした。

「これも私の推測でしか無いのですが、もしかしたらサクヤの世界に遍在していた精霊がサクヤと重なる事で此方に来てしまっているのかも知れませんね……」

朔耶と重なったままの状態でいるのは、朔耶という存在がこの世界においては異界そのものであり、元々朔耶の居た世界に遍在していた精霊はその異界に存在する精霊なので、異界そのものである朔耶の中から出られないか、此方の世界では個の精霊として在る事が出来ないのかもしれない、朔耶の中でしか存在出来ないのかもしれない、と。

そして此方の世界に遍在していた精霊を再構成の座標として転移した為、此方の世界の精霊もその場から動く事が出来ない。

つまり、朔耶の中には此方の世界の精霊と同質の朔耶の世界の精霊とが、朔耶という存在を触媒として遍在している。朔耶という存在に縛られているという見方も出来る。

「え、え～と……　なんか、こんがらがって来たんですけど……」

「つまり、サクヤはサクヤの世界の精霊ごと此方に来ているので、サクヤの世界には召還の目標となる精霊が居ない為、精霊も還すに還せない状態にあるのでは？という事です」

「……つまり、もう帰れないって、事ですか？」

「可能性としては、サクヤを此方に喚び寄せた精霊と同格の力を持つ別の精霊の遍在に手伝って貰う事で還るという方法が考えられますね」

この場合、元の世界に戻れば朔耶の世界に居た精霊は朔耶から離れる事が出来るようになり、座標となった精霊も元々その世界の精霊なので転移後も自由に動く事が出来る。

此方の世界の精霊は転移の起点として移動する事無くその場に居られるので、朔耶を此方に運んだ精霊のように世界を移動してしまう事もない。

「その、あたしの中の精霊と同格の精霊って、直ぐ見付かると思います？」

「……難しいでしょうね」

「あ、やっぱり……」

「サクヤ……」

レティレスティアが心配そうに朔耶の顔を窺うと、朔耶はニコッと微笑んで返し、空中に浮ぶ水球に目をやった。

「でも、どっかに居るには居るんですよね」
「そうですね、世界には古くから沢山の精霊達が存在してますし、今も新たな個の精霊が生まれている事でしょう」

水球の中には氷粒が次々と生まれては消え、幾つかは大きく成長して行く。

「……うん、それなら　元の世界に帰るのを手伝ってくれる精霊が見付かるまで、こっちで頑張って生きて行かなくちゃね」
「私にも手伝わせて下さい！　サクヤがこの世界で生きて行く為に、私に出来る事なら何でもします」
「ん、ありがと　レティ」

そんな二人を見て優しい微笑を浮かべたアルサレナは、サクヤの前向きな姿勢を好ましく思った。しかし直ぐに表情を引き締めると、もう一つ言っておかなくてはならない大事な事を伝えるべく口を開いた。

「最後に一つ、これは非常に重要な事ですが……　先も言ったとおり、サクヤの状態はかなり危険な状態でもあるのです」

それは主に朔耶が危険に晒されているというよりも、朔耶自身が危険な存在である状態という意味だとアルサレナは説明する。何やら不穏な話の雰囲気に朔耶もレティレスティアも姿勢を正して真剣に耳を傾けた。

「先程サクヤの異常魔力について、魔力の原液の出口になっていると表現しましたが、これは言うなればサクヤ自身が魔力そのものになっているようなモノなのです」

世界を満たす『精霊という存在そのもの』の力と直結している状態であり、これは世界を丸ごとその手に収めているような状態だとアルサレナは語った。

余りに話が大げさ過ぎて朔耶もレティレスティアも今一つピンと来ていない様子だったが、アルサレナもそれは想定済みだったので水球を使って解説する。

「通常はこのように人と精霊と世界が別れています」

水球を世界として、砂人形を人、氷粒を個の精霊と表し、水球の中には石の欠片が新たに組み込まれて街を形作っていた。小石の街の中を砂人形がひょこひょこ歩き、その周囲を氷粒が飛び交っている。

そして砂人形が腕を振るうと、氷粒からさらに小さい粒が飛び出し、小石の街の一角にぶつかってそこが崩れ落ちた。まるで街の中で人が術を行使し、建物の一部を破壊したような光景。

「今の一連の表現では砂人形は精霊術を使った事になりますが、あれを魔術と表現しても同じ意味になります。個の精霊が『精霊という存在そのもの』から様々な現象を発現させる工程を解明し、人が自らの力で精霊と同じような現象を起こせるように編み出した術が魔術だと言われていますから。……ここまではいいですね？」

こくこくと頷いて理解した事を示す朔耶とレティレスティア。

「よろしい、ではこの砂人形の持つ力の大きさを氷粒と考えましょう」

砂人形がぶんぶんと手を振ると、氷粒がそれに合わせて上下する。

砂人形が氷粒という力を振り回しているように見える。そうすると、近くにあった小石の建物や他の氷粒が弾き飛ばされたり、巻き起こった水流に煽られてゆらゆらと揺れはじめた。

「これが、通常の術を使える人を表しています。　何かの拍子に力を暴走させると、こんな風に周囲に被害が及びますね」

個人の扱える力と、その力の危険度を現してると説明されると、朔耶も朧気ながらアルサレナの言わんとする事が分かってきた。水球の中の砂人形の力は氷粒だ。それが普通の人の状態である。

朔耶の状態は『精霊という存在そのもの』の力と直結している。つまりこの水球で繰り広げられる解説でいうなれば、朔耶の力はこの水球そのものだ。その意味に気付いたレティレスティアも思わず両手で口元を覆う。

万が一、朔耶がこの砂人形のように力を暴走させるような事が起きれば――

「こうなります」

砂人形が手を振った。その瞬間、水球が上下に揺れて水球の中は滅茶苦茶になった。

『成る程、それは危険だ』と朔耶は納得した。実感は今一湧かなかったが、そういう危険が起こり得る可能性を否定できない状態であるというアルサレナの伝えたい事は理解出来た。

「とはいえ、余程の無茶をしない限り力の暴走といった事故も早々起きるモノではありません。心に留めておく程度で十分ですので、注意はしておいて下さい」

「分かりました。　うーん、やっぱ魔術とかは使わない方がいいの

かなぁ……」

「そんなっ　サクヤならきっと上手く扱えますわ」

どの道、朔耶が元の世界に還る為には強い力を持つ精霊と契約を交さなくてはならないので、精霊術は学んでおく必要があった。

朔耶の場合は精霊と同じ力を発現させる工程を自身と重なる精霊から学ぶ方法もあるので、交感の仕方さえしっかり教われば、他は大部分省く事が出来るのだが。

そして魔術は精霊の力の発現を人が自らの意思で行えるように編み出したモノならば、精霊と同じ力を振るえる朔耶は魔術の源流とも言える力を扱える事になる。

「ふ～む、精霊の力のメカニズムを理解するって意味では魔術の工程から逆アプローチを仕掛けて覚えるって手もありかもね」

レティレスティアは朔耶の言葉の意味は半分も理解出来なかったが、朔耶がやる気になった事だけは分かったので嬉しくなった。

『サクヤから感じる何処までも広がっていくような不思議な感覚は……この世界と繋がっている感覚だったのね』

神殿から出た朔耶達は湯浴み場で汗を流すと、アルサレナは王族の自室へと戻り、朔耶とレティレスティアは連れ立って朔耶の通された部屋にやって来た。

「荷物ちゃんと受け取ったよ、預かっててくれてありがとね」
「いえ、当然の事ですわ。　あ、そういえばあの光を放つ道具ですが……」

レティレスティアは朔耶が落としていった強烈な閃光を放つ魔術式らしきランプを大きな袋に収める時、光の抑え方が分からずそのまま袋に収めた為、城に戻る最中も袋の中から光を放ち続ける道具の魔力が切れてしまわないかと心配だったという。

「ああ、あれね。　電池は切れてたけど予備があるから、ほら」
「まぁ！」

朔耶がフラッシュライトを取り出してスイッチを入れて見せると、白い強烈な光が部屋の壁を照らし出す。
そのまま光度や照射角を変えて見せたりしてレティレスティアを感嘆させた。そうして暫らく光で遊んでいたが、ふいに神妙な顔付きになったレティレスティアがゆっくりと息を吐くようにきり出した。

「イーリスの、事なのですが……」
「あー……　うん」

レティレスティアの雰囲気から凡その察しを付けていた朔耶は『あの事か～』と、槍に突かれて川に流された時の事を思い出し、無意識に肩に手をやりそうになってそれを止(とど)める。

「彼の事、赦してあげて下さい」
「いいよ」

空気が止まる。何処と無く悲壮感を漂わせていたレティレスティ

アはそのまま数秒間口をパクパクさせた状態で固まり、我に返ってシドロモドロになりながら朔耶の答えを確認した。

「え、あの……　ええと……　よ、よろしいのですか……？」

「駄目って言われたらどうしてたの？」

レティレスティアの慌てる姿が面白かった朔耶は、クスリと笑いつつ何時ものノリでいじわるな質問を投げ掛けてみた。

「それは……　サクヤの望む事を、何でもして差し上げてでも……」

「あたしの望む事って？」

朔耶はちょっといじわる過ぎかな～などと思いながらも、レティレスティアが何と答えるのか興味が沸いたのでそのまま質問を続けてみる。

レティレスティアはおどおどと困ったように視線を彷徨わせていたが、はっと何かに気付いたように顔を上げると、少し逡巡しながら徐に立ち上がった。

「わ、私を……差し上げてでも……」

顔を真っ赤にしながら服を脱ぎ始めるレティレスティア。

「まていっ！」

「きゃんっ」

思わず突っ込みを入れてしまい、『王女様の頭叩(はた)いちゃった！』と慌てた朔耶だったが、両手で頭を抑えながら涙目で見上げてくるレティレスティアの可愛さに思わず抱き締めてしまい、有耶無耶にする事に成功した。

「さ、サクヤっ　あの、出来れば優しく！　乱暴にされるのはあまり……」
「……もう一発突っ込むべきか」
とりあえずレティレスティアを落ち着かせて、自分も落ち着かせた朔耶はレティレスティアの行動について『何故そういう結論に至ったか』と話を聞くと。
「あの……、神殿でサクヤが私の身体に興味を示していたようでしたので……　私、何か間違えましたか？」
「いや、その……なんというか」
しゅんとなっているレティレスティアに『もっと自分を大事にして！』というのも変な話だなぁと、何処から突っ込んでいいのやら困り果てた朔耶は――
「とりあえず、アレはそういう意味じゃないから」
と、無難な説明から入る事にした。
齢十六歳となるレティレスティアは、これまで王族の精霊術士として王城で育てられて来た為、歳の近い友達といった存在が殆ど居なかった。
身分の厳格なフレグンスでは王女の遊び相手になれるのも相応の家の子供でなくてはならず、またそういう子供達との遊戯もまったく子供らしからぬ貴族然としたモノだった為、ぶっちゃけた話『世間知らずの箱入り王女様』なのだ。
ただ、それでも噂好きな侍女たちから色々と話を聞く機会はある

訳で、彼女達の間で囁かれる噂といえば、大概は男女関係の話に終始する。

「これは……色々と教育が必要なようね」

「き、教育ですか」

ビクリと肩を竦ませるレティレスティアは、なんというか無闇矢鱈と加虐心を煽る。朔耶は『自分を見失ってはいけない！』と自己叱責しながらレティレスティアに世間一般の付き合い方を教える心算を整えていた。

同時に、自分自身もこの世界の一般教養が必要である事も思い出し、魔術の指導を受ける傍らレティレスティアも一緒にフレイと交流出来れば、色々と上手く行きそうな気がしていた。

『レイスの家の事もあるね……』

「では、イーリスの罪を赦して下さるのですか？」

「一発殴らせてくれればそれでいいよ」

軽く笑いながら言う漢気溢れる朔耶の条件に、レティレスティアも笑みを返して『わかりました』と頷いた。

「彼にそう伝えておきます。　それでは明日、王の間で」

「うん、おやすみー」

こうして王都に着いた朔耶の初日は、濃く、慌しい一日として過ぎていった。

25話：迎えの儀

王の間は謁見の間より一つ上の階にあり、ここに入れる者は王族と王族に許された極一部の関係者のみである。

謁見の間より上の階は王族が住まう為の家のような位置付けになっており、ここは言わば王族の家の広間のような場所で、差し詰め謁見の間は玄関口と言える。

この王の間に招かれた朔耶を客人として迎える式に立ち会っている人物は朔耶本人の他、王の一族と宰相、王家と血縁的な所縁もある門閥貴族の当主数名、宮廷魔術士、それに近衛騎士団長イーリスと副団長以下数名。

朔耶は赤い光沢のあるコートとしてお馴染みのジャケットにズボン姿という、凡そ国王の御前に相応しくないハイキングＧＯＧＯな格好だったのだが、遠方の異国より参った魔術士であるとの王妃アルサレナによる事前説明もあってか、目立つ上に此方の世界には馴染みの無いデザインのジャケットは魔術士のイメージをよく表している様にも捉えられ、朔耶の外見的容姿とも相まって寧ろ民族衣装的な崇高さを醸し出し、貴族の礼服と遜色ない出で立ちとして認識された。

朔耶本人だけが内心で自分の場違いっぷりに眩暈を起こす気分でいるのだった。

そんな中、式は粛々と進められ……といっても朔耶を客人として迎えるようレティレスティアが王に進言し、王が如何なる理由を持

ってかを問い、レティレスティアがそれに応え、王は王妃に相談、王妃は賛成、王は宰相に相談……という形式に則った手順を消化していくだけのモノで、朔耶は時折「はい」とか「有難う御座います」とか式の進行に従って合いの手ばりの言葉を口にするだけだった。

朔耶が客人として迎えられる事は既に決定事項であり、これも仕来たり。王の間という舞台で決められた役をこなして行くだけの儀式なのだ。今のフレグンスの王はこういった形骸的な儀式も廃止して行きたい方向で考えているのだが、王家を支える古い門閥貴族の重鎮達は中々それに賛成出来ない立場をとっていた。

「では、異国より参った魔術士サクヤをフレグンスの客人として迎えよう」

式は王の言葉で締め括られ、『やれやれ、やっと終わったか』と肩の力を抜いていた朔耶に、宰相が一つ質問を投げ掛けた。

「所で……貴女はこの国でどのように過される御つもりですかな？」

衣食住は王室によって保障されているので、朔耶のすべき事は精霊術を学んで元の世界に還る為に強い力を持つ精霊を探し出し、契約する事。だが朔耶の事情については伏せられているので、朔耶の今の状態を知る者は王族でも王と王妃、第一王女（レティレスティア）のみ（アルサレナ）に限られている。他にはレイスやフレイ、アンバッスといった護衛隊の一部の人間も朔耶が異界の人間だと知る者もいるが、彼等は朔耶が精霊と重なっている事までは知らない。

「あたしは……　なにか人の役に立つ道具でも作りながら、後は適当に過そうかなと思ってます」

朔耶は『適当に過します』と答えようとして、それではあんまりにも格好が付かないと思い直し、尤もらしい過し方（面倒でない方向で）は無いかと考えた結果、道具作りがあったと思い付いてそう答えた。

その答えを聞いた貴族のエライさん達が何やらぼそぼそと囁きあう。宰相の朔耶に対する質問は単なる興味本位や気紛れの類ではなく、本人に直接質問する事が憚られる彼等門閥家の面々の為に向けられた質疑応答のようなモノだ。

王家の客人にどの様に接していくか、どのような立場をとるのか、彼等の判断をある程度補佐する為にこうして朔耶の情報を提供する。

「ほう……　工房をお開きになると？　サクヤ殿は如何なる技師の技をお持ちで？」

そんな大袈裟なものじゃないんだけどなぁと、朔耶は内心の苦笑を隠しながら何と答えるか逡巡し、そのまま答えるしかないという結論に至って答えた。

「魔力石を加工する技術です」

宰相は『さぞ珍しい民芸品をお作りになるのでしょうなぁ』と社交辞令も交えて質問の終了を言外に示し、門閥家のエライさん達も頷き合って了承した。

彼等は皆、一様に朔耶は異国の手工芸職人だろうと考えた。魔術士であるとも聞いていたが魔術自体は習えば誰でも修得出来るモノであるし、宰相の質問に対して魔術の修学に関する言も無かった事から、魔術士としての面には特に見るべきモノもあるまいと判断した。

第一王女（レティレスティア）の詳言にある光の魔術で助けられたという話も、偶々上手く立ち回った結果であろうと推察する。大なり小なり、魔術には

それを可能にするだけの力があるからだ。

ちなみに、バーリッカムの庶民の間で噂されるサクヤ式送風機の事などは彼等門閥家のエライさん達にまで伝わっていない。身分の厳格さは噂の出所に対する印象や信用度にも根深く影響している為、下賤の者の噂などを当主の耳に入れるような真似をすれば、自分の首が飛ぶ諜報役の者達が報告を上げていなかった。

「それでは、これにて迎えの式を閉じるとしようか」
「父様、少しお待ちを」

式を締めようとした王に、レティレスティアが待ったを掛けた。僅かに怪訝な表情を見せる王や宰相、門閥家の面々。朔耶も『なんだろう?』という表情をしていたが、王妃(アルサレナ)はレティレスティアの意図に気付いたのか、困ったような呆れた表情を浮かべていた。そんな中、レティレスティアは近衛騎士団の控える一角に声を掛ける。

「イーリス」
「ハッ」

レティレスティアに呼ばれた若き近衛騎士団長が、その表情に若干の緊張と戸惑いの色を滲ませながら歩み出て来る。周囲の人々は一体何事が始まるのかと困惑気味の者もいれば、詳しい経緯を知っている者がそれを囁き合い、小さなざわめきの中に『正式な婚約発表では無かったか』とか『では、断罪か?』などの声が混じっている。

朔耶もここに至ってレティレスティアの意図を理解したが、困惑と猜疑心と納得が心中で渦を巻いていた。

『何で態々こんな公の場で？　もしかして態と？　それともやっぱり天然？』

レティレスティアの前まで歩み出たイーリスが膝を付いて礼を取る。

「イーリス、サクヤは貴方の罪を赦して下さるそうです。　条件は昨日お話した通り、異存はありませんね？」

「はい」

また一つ小さなざわめきが起きる中、イーリスが立ち上がって朔耶の前に立った。

「近衛騎士団長イーリス・エルグランディです。　あの時、浅はかにも確認を怠り、貴女を傷付けた事を深く御詫びします」

「さあサクヤ、約束です。　遠慮なくどうぞ」

やっちゃって下さいと言わんばかりのレティレスティアに、朔耶は『やっぱり天然だったか』と乾いた笑みを浮かべた。一発殴って赦すというような蛮行とも言える取引はこんな公式の場で交わされて良い類のモノでは無い筈なのだが、イーリスが赦される事と朔耶との約束を果たす事で頭が一杯のレティレスティアは、式が終わってから自分達だけでという方法に考えが至らなかったようだ。

大勢の人の前で男性を殴るという行為を躊躇わせ、有耶無耶の内にイーリスを赦した事実を多くの証人と共に勝ち取る。といった策を仕掛けて来たのならレティレスティアに対する見方を変える必要があるのだが、『ありえないわね』と朔耶は画策説を一蹴した。王妃やイーリス当人の様子からしても、そういった意図を隠してレティレスティアに口添えをした様子も無い。

『やっぱり教育の必要があるわね……』

何処と無く黒いオーラを漂わせた雰囲気の朔耶に視線を向けられたレティレスティアは、ビクッと肩を震わせながらも自分が今何に脅威を感じたのか分からずキョトンとしていた。その仕草が可愛かったので『よし赦そう』と、レティレスティアの天然については流す事にした朔耶は、改めてイーリスに向き直った。

「あ～……　レティの天然はおいとくとして、一応約束だから」
「ええ、分かっています」

イーリスも朔耶と同じような結論を導き出したのか表情から戸惑いと緊張の色は消え、寧ろリラックスしているようにも感じられた。

「言っとくケド、手は抜かないから　本気で行くわよ？」
「ええ、どうぞ。例え手を傷めても直ぐにレスティア様が癒してくれますから、安心して思いっきり殴って結構ですよ」

このやり取りでこれから何が始まるのかを理解した周囲の人々は、呆れ半分、微笑ましさ半分という面持ちで事の成り行きを見守った。呆れ組みは宰相を始めとする門閥家のエライさん組、中には好意的に見る武闘派の者も居たが……。微笑ましい視線を向けているのは王や近衛騎士団の騎士達だった。

遠い何処かの地からやって来たという黒髪に黒い瞳、見た目も小柄で華奢な身体つきをした異国の少女。近衛の甲冑を着込んだイーリスと向かい合えば頭一つ分以上の身長差があり、体躯からして大人と子供が向き合っているように見える。そんな団長を相手に勇ましく凛と見上げる朔耶の姿に微笑ましさを感じてしまうのも致し方

ない事だった。

のだが……　呆れる視線も、微笑ましさを感じさせる視線も、イーリスの朔耶を労わる言葉も、『侮(あなど)られてる？』と感じた朔耶の負けん気を刺激する燃料として、その闘志に火を点けてしまった。

スッと腰を落として半身の姿勢をとり、左手をヘソの下辺りに水平に降ろして右手は斜め横に流しながら水面を滑らせるようにゆっくりと円を描き、息を吐ききり自然に吸い込む所で、大樹の根が養分を吸い上げるように踵から大地の気を身体中に吸い上げるというイメージの呼吸法を使って右手に力を収束させていく。

そんな朔耶の様子に『何か体術の心得があるようだ』と、小柄な少女の放つ異国の体術に興味を示す微笑まし組の面々。やっぱり微笑ましい視線は変わらない。何せ相手はあの近衛騎士団長イーリスである。

十九歳という若さで近衛騎士団長に任命されたのは、家格による序列で巡って来ただけではない。卓越した槍捌きの技は他の団員の追随を許さず、王国騎士団長や辺境騎士団長にも試合で打ち勝った事がある。若さゆえの判断に甘い部分もあるが、その実力は折り紙つきだ。

あの小柄な少女の渾身の一撃を受けて涼しい微笑みを返し、少女がその黒い瞳を瞠って唖然とする様が思い浮かんで自然と頬が緩む。団長の事だからあの少女の手を傷めない様に上手く衝撃を吸収する体術を使うのだろうなぁと、近衛騎士団副団長以下この場に控える騎士達は団長の体裁きの技を見逃すまいとその瞬間に注目した。

「い　な　ず　ま　――――」

朔耶の右手が青白く発光し始め、周囲のざわめきがどよめきに変わる。

やがて光は強い白色の閃光を瞬かせながら青白い軌跡が弧を描いて――――

「びんたーーーー！！」

パカアアァァン！！

閃光が落雷のような轟音を響かせながらイーリスの左頬に突き刺さった。

朔耶はビンタを振りぬいた体勢で残心中。

一瞬にして静まり返った王の間で、頬から白い煙をゆらゆらと燻らせたイーリスの身体がゆっくりと傾いて行き、そのまま倒れ込み掛けた所で朔耶に支えられてガシャリと膝を付いた。イーリスは目の焦点が合っておらず、『稲妻ビンタ』の衝撃で脳が揺さぶられて脳震盪を起こしていた。

「レティ！レティ！　早く治療してあげて」

「あ……　は、はい！」

自分でやっておきながらも心配そうにイーリスの身体を支えている朔耶の姿に、近衛騎士達は『団長に膝を付かせた！』と驚嘆し、エライさん組は目を丸くしながら『やはり魔術士が本分なのか』と朔耶に対する認識を修正するに至った。

こうして朔耶を客人として迎える式は、最後に朔耶の強烈な印象

を植えつける余興を持って幕を閉じた。

式を終えた朔耶は一旦与えられている部屋に戻ると、荷物を纏めて何時でも移動出来る準備を整えていた。

王室による衣食住の保障で朔耶の住む家が一般開放区画に建てられる事になっており、家が建つまでは城内に生活の部屋を用意してくれるとの事だったので、部屋の準備が整い次第、そちらに移る。

本来なら家が建つまでの間は街で宿を取らせるなどするのが普通で、貴族の身分に無い朔耶が一時とはいえ城に住まう事を許されるというのは前例の無い余りに異例の待遇だったのだが、第一王女（レティレスティア）だけではなく、王妃（アルサレナ）とも懇意になっているらしいという話を聞いた門閥家の面々も『それならば致し方あるまい』と不満の矛を下げた。

そこまで王家との関わりを深くしている人物を現段階で城の外に置く事の方に問題がある。あの娘はまだ何れの家とも交流を持っていない、唯一クルストスから護衛の任に就いて来たアクレイア家が引き込みに動きそうだが、没落しているとは言えアクレイア家は由緒あるフレグンスの大貴族なので、これを機に家の復興を目指すのも良い。

だが上流貴族入りを狙っている血筋も浅い中流の成り上がり貴族達が、あの娘を通じて王家に取り入ろうとするのは面白くない。街に置けば門閥家の自分達より中流貴族達の方が手を出し易いし動きも早いだろう。

そんな思惑も働き、朔耶が城に住まう間の生活支援を申し出る家もあった。今の内に自分達との繋がりを見せておけば、一般開放区に下りた後も下手に手出し出来ないよう釘を刺す事が出来る、と。

元々少ない荷物は直ぐに纏まり、部屋で手持ち無沙汰になった朔耶はベッドに腰掛けて足をぶらぶらさせながら王の間での事を思い出していた。国王様と王妃様、宰相や門閥貴族のオジサマ達、レティレスティアとイーリス、近衛騎士団の騎士達、そして……

「宮廷魔術士……　あの人がコースティン家のフエルトさんか」

朔耶が思い出した印象では、見た感じ三十台半ばのひょろっとした痩せ型で　のっぺり顔、生え際の後退かおでこが広い。神経質そうな雰囲気を纏っていて、式の間も殆ど喋っていなかった。旅の途中で侍女さんから聞いたアクレイア家とコースティン家の確執の話では、コースティン家の代表がインチキをしたという話だった。

「魔力測定器、持って行っとけばよかったかな？」

ごろりとベッドに転がり、朔耶はベッドの天蓋の裏に描かれている宗教画っぽい絵を眺めながら、これからの事を想って眼を閉じた。

『レイスと話して、手伝えそうなら家の復興に協力する……。レティや王妃様が味方についててくれるから、そんなに危険は無いと思うし、難しい所はアドバイスを求めて……　あたしはあたしの出来る事をする。　後はレイスの頑張り次第だよね』

ふいに、レティレスティアの気配を感じて身体を起こした朔耶は、静かに扉の前に立った。　コンコン、と控えめなノックがされる。

「いらっしゃい」
「きゃっ」

ノックした瞬間に扉を開けると、ノックした体勢のまま小さく悲鳴を上げて飛び上がるレティレスティア。古典的な驚かし方に理想的な引っかかり方をしてくれる。レティレスティアの気配を感じ取れたのは昨夜の交感が原因だろうと、朔耶は意識の奥から湧き出して来る別の意識を感じ取り、それを理解できた。

「あははは　もう、レティは可愛いなぁ」
「さ、サクヤ……　酷いです」

『サクヤって実はいじわるなんですか?』と拗ねるレティレスティアを宥めながら部屋に招きいれる。

「イーリスは大丈夫だった?」
「はい、特に外傷もありませんでしたし、丈夫な人ですから」
「そっか」
「近衛の人達が皆驚いてましたよ?」

コロコロと笑いながら楽しそうに話すレティレスティアの様子に、朔耶は本当に問題無さそうだと安心した。

「実は、サクヤに相談がありまして……」

レティレスティアは部屋に尋ねてきた理由を話す。それによると

――

「晩餐会ねぇ」

「はい、サクヤにも是非出席をとの事でしたので、こうして伺いに来たのですけれど」

王族に課せられた責務の中で、レティレスティアの日課の一つに晩餐会の招待に断りを入れる務めがある。

毎日、門閥家から送られて来る晩餐会への招待状に断りの返事を書くという、王家を支える其々の家とバランスよく距離を保つ為の、これも一種の仕来たりのようなモノだ。

招待を受ける場合は予め順番が決まっており、最も勢力のある家から順に受ける事になる。また状況に応じてその家が何らかの功績を果たした場合や、逆に何らかの失態を犯した場合等にも、王家からのその家に対する信頼を示したり、寛大に処理するというサインを示す為に招待に応じる事がある。

招待状を送れる家は上流貴族区に住む極一部の大貴族だけで、中流貴族達は彼等の派閥に属する事で晩餐に招いて貰い、他の家と交流を深めたり、王家への売り込みに勤しむのだ。

そして今日は招待を受ける日で、その相手はコースティン家だった。

「態々あたしを呼ぶって事は、やっぱり政治的な駆引きでって意味なんだろうねぇ」

「ええ、そうだと思います……　サクヤの同伴は断りましょうか？」

「……相手はコースティン家なんだよね？」

「はい、この国の宮廷魔術士を務めている家ですわ」

朔耶は考える。レイスのアクレイア家と相対するコースティン家からのお誘い。恐らく……というか十中八九、アクレイア家に対する牽制の意味もあるのだろう。

「敵情視察ってのもいいかもね……」

「はい？」

『別に敵じゃないけど』と思いつつ、首を傾げているレティレスティアに参加する事を告げた。

「よろしいのですか？」

「うん、あーでも　あたしテーブルマナーとか全然駄目だわ、ダンスとかも踊れないし」

「ふふっ　立食パーティーですから大丈夫ですわ。　あ、そうだわ！　サクヤのドレスを準備させないと」

「ドレスかぁ……」

ぽんっと胸の前で手を合わせて『どんなのがいいかしら』と朔耶に似合いそうなドレスを頭の中でコーディネイトするレティレスティアの傍らで、朔耶は自分のドレス姿を想像しようとして何故か少女戦隊モノの衣装が思い浮かび、だめだこりゃとレティレスティアに丸投げするのだった。

その後、レティレスティアが大量のドレスを持った侍女たちを引き連れて朔耶の元にやって来たのは、昼食を終えて晩餐会への迎えが来るまでの暇つぶしに魔力石ライターの制作をしている時だった。

「さあ！　試着してみましょう！」

「それ、全部試すの……？」

26話：コースティン家の晩餐会【前】

上流貴族区の一角に建つ豪邸、所々増改築された跡があり、比較的新しい建物部分に晩餐会の会場が設けられていた。

広い敷地内には沢山の高級感溢れる馬車が並び、今日の晩餐会に参加する者の多さと質を表している。その中でも一際豪華で目立つ大きな白塗りの馬車から降り立った第一王女レティレスティアと、同伴者の朔耶。レティレスティアは白を基調とした金の刺繍入りという何時もの雰囲気を保ったドレス。朔耶は赤を基調とした装飾の少ないワンピース風のドレスという出で立ちだった。

「あ～やっぱ緊張するなぁ」

「大丈夫ですサクヤ、気を楽にして付いてきて下さい」

流石に堂々とした、それでいて気品溢れる王女の立ち振る舞いでズンズン進んでいくレティレスティアの後を、内心おどおどしながら付いて行く朔耶。動き易さを重視したドレスにして貰ったので蹴躓いてズッコケるような事態にはならないでいた。

「レティレスティア第一王女様、並びに、サクヤ様、ご入場！」

会場に入ると大きな丸テーブルの上に豪華な料理が盛り付けられた皿がひっきり無しに給仕達の手によって上げられ下げられ循環を繰り返し、見上げれば高い天井から巨大なシャンデリアが会場を照らし、華やかなドレスで着飾った令嬢たちと談笑する貴公子たちが会場を埋め尽くしていた。　最初に料理に目が行く所が朔耶らしいと言えばらしい。

そんな会場の様子に、やっぱ止めときゃよかったかと早くも後悔の念を浮かべ掛けた朔耶だったが、レティレスティア様御来場の報を受けた会場の視線が一斉に此方を向いた事で思考が真っ白になった。

――サクヤ、サクヤ　落ち着いて、大丈夫よ……――

『レティ？』

レティレスティアが交感で話し掛けてきて朔耶の意識に触れる。レティレスティアと交感で繋がる事によって、不安の感情を拡散させて緊張を和らげる効果を狙ったのだ。

『ありがとうレティ、楽になったよ』

互いににこりと微笑を交し、出迎える紳士淑女達に向き直る。親密な様子で微笑みを交わす二人を見た会場の人々は、『サクヤという娘と王女の親密ぶり』を直に確認した事でますます朔耶の存在に意識を向ける事になった。

「ようこそ　おいで下さいました、レティレスティア様、サクヤ様」

主催者であるコースティン家の当主、フエルト卿が人々の輪から

出て来て歓迎の意を表する。

「お招き感謝いたしますわ、フエルト伯爵」

「こんばんはー」

普段の調子を取り戻した朔耶は何時も通りの軽い挨拶をした。

それに気を害した様子も無く、フエルト卿は何処か造りモノめいた笑顔で二人を歓迎した。

「今宵はごゆるりとお楽しみ下さい」

レティレスティアには早々に貴族のエライさん達が群がっている状態なので、朔耶は一人で会場の料理を物色していた。暫らくうろついていると、よく知った声に呼び止められる。

「よう」

「え、あ、アンバッスさん？」

朔耶の見慣れた辺境騎士団の甲冑姿ではなく、貴族の礼服を少し窮屈そうにきっちり着込んだアンバッスがワイングラスのボウルの所を掴み、軽く持ち上げて挨拶を寄越す。

「アンバッスさんも来てたんだぁ？」

「レイスが急用で遅れるからとかの代理でな、奴が来れば帰るし来なければもう少し飲んで帰るつもりだ」

「わー、そういう格好するとなんか渋く感じるねー」

「ふん……」

「……ていうか、ワイングラスそんな持ち方したら味が変わるとかして駄目なんじゃなかった？」

「飲めりゃいい」

アンバッスは明日にもクルストスに帰還する為に王都を発つ予定だと話し、『風にあたって来る』と言ってベランダに出て行った。

朔耶はドレスの事を何も言われなかったのがちょっぴり寂しかったりするのだった。

通常こういった社交的な晩餐の場には主催する家の派閥に組する者だけが招かれるモノなのだが、王族が出席する場合はその限りではなく、出来るだけ大勢の貴族を招待するのが習わしであり、その家の発言力の誇示にも繋がる力の象徴でもある。当然、普段対立する立場の相手も招待する事で家格を示すのだ。

早速テーブルに並ぶ料理を『喰って』いた朔耶に、如何にして話しかけようかと声を掛けるタイミングを計っては同じ隙を狙って互いに牽制しあう、中流貴族の貴公子達が繰り広げる優雅かつ陰湿で静かな闘いを軽く無視して朔耶に気軽に声を掛ける紳士が一人。

「今晩はお嬢さん、楽しんでますか？」

「はい？」

金髪碧眼長身に端整な顔立ちの大売出し会場にあっても、一際（ひときわ）存在感を感じさせる雰囲気を纏ったその紳士は自然に朔耶の隣に立つと、騎士の礼に似た挨拶を向けた。

「初めまして、私はアウサレス・ツィット・ジャバールと申します。

王都までの道中、愚弟が大変な失礼を働いたと聞き、兄として御詫び申し上げます」

「え、あ……　ガリウスのお兄さん、ですか」

そういえば目元とか似てるかなぁとマジマジと見詰める朔耶に、アウサレスは爽やか微笑みを返す。周囲で様子を窺っていた令嬢たちが頬を染めて見惚れていた。

ジャバール家は門閥貴族の中でも特に交流関係の広い家で、中流層の貴族ともよく婚姻を結んで血縁者を広げている。その為、上流層と交流を持ちたい家々はまずジャバール家をその入り口として、懇意にして貰おうと娘の居る家は積極的に奉公に差し出す。　そんな関係が何代も続いているので、ジャバール家には常に大勢の中流貴族家の令嬢が集まり、家督を継ぐ子息達の御眼がねに適おうと女を磨き、同じ境遇の令嬢達と鎬（しのぎ）を削っているのだ。

格式を重んじるフレグンスの古い門閥家からはあまり良く思われていないが、ジャバール家で開かれる晩餐会などは、集まった貴公子たちの婚約者探しの場と化す。

「しかし……失礼ながら、ガリウスが血迷うのも分かる気がします。貴女は実に不思議な魅力に満ちていらっしゃる」

そんな台詞を囁くように口にしながら、アウサレスは身を屈めるようにして朔耶の瞳を覗き込み、熱っぽい眼差しを向けた。顔が近い。

思わず頬を染める朔耶に、割り込まれた中流貴族の貴公子たちは一様に肩を落とした。ジャバール家の子息が堕としに掛かったのだ、自分達が束になっても勝てる見込みが無い上に、家柄上それを邪魔立てする事も適わない。

朔耶とジャバール家の子息の様子を離れた所から観察していたフエルト卿は、内心で満足気にほくそ笑んだ。朔耶の同伴を求めたのはこの晩餐の席で自分の派閥に組する家の者から朔耶の伴侶を出させるという策があったからだ。レティレスティア王女は配下の貴族達に相手をさせて朔耶から引き離してあるので、意図に気付いても後の祭りだ。アクレイア家への招待状には屋敷の修繕費を安く見積もってくれる建築技師を紹介しておいたので今頃は交渉を終えて此方に向かっている最中かもしれない。

アクレイア家の当主がコースティン主催の晩餐の席に出る事は考えられないので、出席するのは後継ぎのレイスであろう。門閥家の当主が建築技師と修繕費の交渉に出向くなどという事は有り得ないので、そちらもレイスが行う事になる。結果、レイスは遅れて会場にやって来るであろうが、その時は全て手遅れというわけだ。

密かに会場中から注目を集めているテーブルにはアウサレスに薦められたデザートを四苦八苦しながらも楽しそうに食べている朔耶の姿。

どうやらあの異国の娘を手中にするのはジャバール家のようだと、中流貴族の貴公子、令嬢方も含めて諦めムード半分に　然もありなんという納得じみた溜め息が吐かれる中、新たに会場入りした門閥貴族の名が呼ばれた。

「レイス・チル・アクレイア様、並びに、フィレイヤ・バーン様、ご入場！」

一瞬、ざわりと会場がざわめき、視線が入り口に集中する。晩餐用の控えめな礼服に身を包んだレイスは向けられる視線を意に返さ

ず普段の微笑で入場し、その後ろに魔術士の出で立ちをしたフレイが続く。

会場内は直ぐに喧騒を取り戻す。が、先程までと比べてやはり何処か余所余所しい空気が流れ、皆がアクレイア家子息の動向を気にしている事が窺えた。

レイスは会場を見渡して朔耶の姿を探す。例の赤いジャケット姿で無くとも朔耶の黒髪は目立つので直ぐに見つかった。朔耶は果物類の盛られたテーブルで複雑な形に分けられたデザートと格闘している。その朔耶の傍に寄り添うように立つジャバール家の長男が軽くグラスを上げて挨拶の笑みを向ける。人当たりの良さそうな笑みだが、その眼は敗者を見るような嘲りを含んでいるのが分かった。

軽く礼を返したレイスは相変わらずの微笑を崩さず、真っ直ぐにそのテーブルに向う。控えめだった喧騒が更に静まってざわめきに変わり始めた。俄かに緊張感が高まり始めたその時――

「あれー？　レイスじゃん、何時来たの？」

まるで緊張感の無い声で、ついでに気品や優雅さの欠片も何処かに放置して来たかのように食べ掛けのデザートから顔を上げた朔耶は、何時の間にかそこに居たレイスに目を丸くした。

「つい今し方ですよ」

「サクヤ様、ほっぺに粒が……」

フレイに指摘されて頬からデザートの粒を駆逐しながら『全然気付かなかったよー』と笑って誤魔化した朔耶は、二人にアウサレスを紹介した。

「この人、ガリウスのお兄さんだって」

「ええ、存じてますよ」
「あ、そうだったんだ？　そういえばガリウスの事も知ってたよね」

『そっかそっか』と納得した朔耶はナプキンで口周りを拭き取り、スプーンを置く。美味しい料理やデザートを十分に食べられたので大満足だ。そして、あまりに親しく話す朔耶とレイスの様子に途惑っていたアウサレスに向き直ると

「デザート美味しかったです。　ありがとね、アウサレスさん」

と礼を言ってあっさり傍らから離れていった。それを呆然と見送るアウサレスに、レイスは相変わらずの微笑を変える事無く軽く礼をすると、朔耶を連れてテーブルを後にした。

朔耶はこの晩餐会場に入った時からレティレスティアと交感での繋がりを維持したままだったので、離れていても会話は続いていたのだ。レティレスティアからジャバール家の内情については聞いていたし、朔耶の中の精霊がアウサレスに対する警戒を呼びかけていたので頃合を見計らって距離を取るつもりでいた。

デザートに夢中になってレイスの入場に気付かなかったのは演技『ではない』のだが、そこは無理に明かす必要も無い。

朔耶が精霊を通じて感じたアウサレスという人物像は、『あれは相当数の女の子泣かしてるな』であった。ガリウスはまだ分かり易かったが、アウサレスは意図しなければ表面に一切の悪意を感じさせない、ガリウスよりも有能で性質が悪い。

思わぬ展開に会場では『アウサレス様がお振られになった！』とか『やはりアクレイア家が取り込んで……』などの囁きがざわめきと喧騒の中に交わされる。

「それにしても、随分来るの遅かったね？　何してたの？」
「ええ、ちょっと急用が入りまして……」

何と無く言い渋るような気配を読んだ朔耶は、勘に引っかかるモノを感じたので、その感覚を信じて追求してみる事にした。

「フレイ、急用ってなんだったの？」
「え！　あ、あの……」
「なにかな～？　あたしに言えないコトかな～？」
「い、いえそんなっ　屋敷の修繕費の交渉で……」

小さい針で刺されたように頬を引き攣らせるレイスに、フレイはあわあわと両手で口を塞いで慌てたがもう遅い。周囲から失笑に似た気配が上がる。普通、門閥家と並び称される大貴族が屋敷の修繕費を『交渉』するなどはあり得ない。恥とさえ考えられる。職人に要求された費用を服に付いた糸屑を掃うが如くポンと払えるのが門閥貴族としての敬われる姿だ。

事ここに至ってアクレイア家の没落振りが明確に晒された形となった。しかし朔耶は尚も追求の手を緩めない。

「へぇー何処か安い所見つかった？」

レイスは朔耶の意図を測りかねて途惑った。プライベートな空間での会話ならこういう話にも問題は無いが、コレだけの貴族が集まった公衆の面前で話す内容ではない。この話題はアクレイアの家名に傷を付けるモノだ、朔耶にもそれは分かる筈だ、と。

抗議と自重を促す気持ちを込めて朔耶の眼を見たレイスは、その黒い瞳に宿る『気配』を纏った光に息を呑んだ。

『何か、策があるのか……？』

「ええ……、実は招待状の中に良い建築技師の紹介状がありまして」
「そうだったんだぁ？　じゃあそれってフエルトさんが紹介してくれたって事？」

そう言って振り返り、離れた場所から此方の様子を観察していたフエルト卿に視線を向ける。視界の外に居た筈なのに迷い無く自分の方を向いた朔耶に、フエルト卿は一瞬たじろいだが、取り繕うように愛想笑いを浮かべてお辞儀して見せた。

「ええ、そのようです」
「そっかぁ、良かったじゃん」

会話に聞き耳を立てていた……というか、会場にいるほぼ全員が朔耶とレイスの会話に耳を傾けていたのだが、今の話ではフエルト卿がアクレイア家を支援したような意味になり、それはアクレイア家がコースティン家の門に下った事を感じさせた。レイスもそういう意味に取られるであろう事を危惧して黙っているつもりだったのだが、朔耶のやけに押しの強い追求に乗って話してしまった。

『さっきの貴女の瞳……、僕の単なる思い違いなのか、或いはどんな策でこの状況からアクレイア家を立てる事が出来るのか』

「でもさ、そんな状況で大丈夫なの？　あたしの工房作ってくれるって言ったけど」
「いやあ……それは、なんとかしますよ」

もうここまで来るとレイスに会話の内容をコントロールする事は出来ない。出来ても今更、取り繕うには手遅れだ。なので朔耶に問われるがまま答える事にした。

「あたしとしては、家が建つまでには欲しい所なんだけどね～工房、流石に衣食住頼っちゃってるレティにこれ以上は甘えられないし」

そんな事を言いながら、飲み物を取りに近くのテーブルに歩いて行く。数人の貴公子と令嬢が思わず道を開けると、朔耶はにっこり笑って礼を言った。そして気楽に話しかける。

「これ、お酒とかじゃないですよね？　あたし飲んで大丈夫かな……？」

「え……あ、あの、それは一応お酒ですから……飲み物でしたらこちらの果物を搾ったモノとか如何でしょう」

「これ？」

勧められたグラスを取って口を付けると、果物の甘酸っぱい味が広がる。

「ん……おいし」

王家と関わり深い異国の客人、何処か異質な雰囲気を纏う少女に中々声を掛け難かった中流貴族の貴公子達から、緊張と近寄り難さを感じていた意識の壁が取り払われ、遂に彼等の方から接触が試みられる。

「サクヤ様は工房をお開きになりたいと先程聞き及びましたが」

「うん、でもねー肝心のレイスがねー」

じと目で視線を向ける朔耶に、向けられたレイスはもはや恐々とするしか無く肩を竦めて見せる。そうして何も言い返せない、没落した大貴族からの自分達への牽制や睨みが無いと分かった彼等は一

気に攻勢に出た。ここで朔耶の信頼を得る事が出来れば、王女を通じて王家への心象も上がるというモノだ。

「で、でしたら我が家が支援致しましょう。家は職人を雇った工房を開いているので、直ぐにでもご用意できますよ」

「サクヤ様は民芸品をお作りになるとか、私の家は一般区に店を幾つか持っていますのでサクヤ様の作品を棚に置く事も出来ますよ」

「工房をお開きになるのでしたら材料の仕入れ先を探さねばならないでしょう、家はキトの業者にコネがあります、是非家を頼って下さい」

次々と売り込みを掛ける中流貴族の貴公子達、同じ中流貴族でも彼等のように工房関係や自前の店など、商売に関する事業を手掛けていない家の者達は売り込めるモノが無い為、指を咥えて見ている事しか出来ずに歯噛みする。この状況で談笑にて親睦を深めようなどというアウサレスの二の舞を踏む行いを選択出来る程の愚か者はいなかった。

「本当？　うわー助かるなぁ、でもあたし通商の事とかこの国の工房事情とかよく分からないから……レイス、任せてもいい？」

はっとしたレイスは、剥がれそうになった微笑を維持したまま頷き、それを承諾した。

「ん、それじゃあ……あたしの工房はちょっと特殊なものになると思うので、詳しい事は全部レイスに任せます、彼を通じて支援を宜しくお願いしますね」

そう言って軽く頭を下げた。しばしポカンとしていた売り込み組みの貴公子達は、我に返ると一斉に青褪めた。『やられた！』と。

これでは結局サクヤの工房造りはアクレイア家主導で行われ、アクレイア家は朔耶の工房関連を名目に彼等の家に資金を要求する事が出来る。断れば『自分から持ちかけておいて金を出さない信用に値しない者』として、レイスから朔耶へ、朔耶から王女へと伝わる事で王家からの心象は最悪なモノになる。財布の紐をアクレイア家に握られてしまったのだ。

出せばその資金でアクレイア家の復興を助ける事になり、そうするとコースティン家から目を付けられる事に。派閥からは弾かれる事になるだろう。『終わった……』と、将来の展望が閉ざされた事に絶望を感じていた彼等の耳に、朔耶とレイスの会話が入る。

「レイスの家が全部取り仕切ってれば『あたし』の作った道具を『独占』出来たのに、惜しかったねー」

「いやあ、ままならないものです」

『サクヤ』の『独占』、絶望の淵に立たされていた彼等はそこから希望の光を見た。『そうだ、これはアクレイア家の独占を防いだ事になるじゃないか！』そう考え、改めて自分達の立ち位置を冷静に考える。

アクレイア家は第一王女（レティレスティア）に王妃（アルサレナ）とも懇意の関係にあるサクヤとかなり親密である事は、先程のやり取りでも明らかだ。そうなると経済的な問題さえ乗り越えればアクレイア家の復興は約束されているも同然。いくらコースティン家が宮廷魔術士長の座に就いていようと、第一王女と王妃による王への口添え効果に比べれば一介の魔術士長に出来る事など知れている。

アクレイア家が彼女を独占するという事は、第一王女と王妃への進言権を常に独占的な形で有するという事だ。それは王室の権威にすら触れていると言っても良い。そこに自分達は割り込んだのだ。サクヤ本人から宜しくお願いされているのだから、それに応える限り第一王女と王妃の心象も良くなる筈。そして自分達も彼女を通じ

ての進言が行えるのだ。

アクレイア家によるサクヤ独占を阻止したという名目でコースティン家にも面目が立つし、経済支援でアクレイア家へに恩を売る事も出来る。そのままアクレイア家が復興を果たせば、それを助けた自分達に対するサクヤの覚えも良くなるだろう。どちらに転んでも損は無い。

そこまで思い至って、支援の約束をした中流貴族の貴公子達はようやく引いた血の気を取り戻した。

「あ、侍女さーん。ちょっとあたしの袋持ってきて」

朔耶は城からこの屋敷まで一緒にやって来た侍女さんが会場の入り口の隅っこに控えていたので声を掛け、馬車の中に置いてきた荷物を持ってきて貰う。袋の中身は城でレティレスティアがドレスを持って部屋に来るまで暇つぶしで作っていた魔力石ライターだ。石が簡単に削れる理由が分かってからは、以前よりも更に自在な削り出しが出来るようになったので、粘土をこねるが如くの勢いで十数個は組上げた。品質チェックも済んでいる。それを持って支援の約束を取り付けた貴公子達の所に行くと――

「これ、お近付きの印にどうぞ」

そう言ってサクヤ印の魔力石ライターを渡した。魔術式ランプに慣れ親しんでいる貴族にとっても、これほど小型で色々と使い道がありそうな珍しい道具は有難い贈り物だ。貴公子達は喜んで受け取った。

「それにしても良く出来た魔術式ですな、ここまで小型でこれだけの火を灯せるとなると、触媒は一体何を使っているのやら……」

魔術式の日用品を扱う店を持っている家の貴公子が物珍しげに魔力石ライターの触媒を推測していると、彼等にとっては思いも寄らない答えが朔耶によって告げられる。

「それ、魔術式じゃなくて魔力石を使ってるんですよ　ほら」

袋の中のライターの一つをパカっと開いて中を見せる。そこには細かく色々な形に削り出された石が整然と並んでいて、朔耶が其々の箇所を指しながら丸く削り出された魔力を溜めて置く部分や、同じ形の細く短く削られた楔型の石が何段も重なり、その部分で火属性の効果がどの位まで引き上げられているかなどの説明をすると、この道具が如何に希少性の高いモノかを理解し、そんな希少品を渡される事への意味を考えて緊張で再び血の気が引いて行く貴公子達。まさか暇潰しで作られたとは思わない。

「あ、あの　コレを与えられるという事は……もしやレイス殿にもコレを？」

「我々の他にも、与えられている者が？」

「うん？　護衛隊のみんなとか侍女さん達とか、勿論レイスも持ってるよね？」

「ええ、ちゃんと持ってますよ」

懐からライターを出し、火を灯して見せるレイス。そして……

「一応、信頼できる人とかに渡してあるから」

それは特に深い意味があった訳でも無く、単に言葉そのままの意味で言った『だけ』だったのだが。朔耶の言葉にライターを貰った

貴公子を初め、周囲の人々の視線は小さな火を灯すライターに釘付けになった。

――信頼する者だけに与えられる――

つまり、アレを与えられた者は王家から異例の待遇を受け続ける程に第一王女、王妃と懇意の者から信頼出来ると認定された者。

アレを与えられるという事は、第一王女、王妃からも信頼を得る、王家からの『信頼の証』だ。……と、言われたも同然の効果があった。

『しまった、手土産くらい用意すべきだった』『なんて事だ、何の準備もしてこなかったぞ』『まだあの道具は用意されているようだし、枠は残ってる筈だ……』

会場の喧騒は三度、空気の違ったざわめきに包まれていた。最初はサクヤを手中に収める家は何処か、次はアクレイア家の子息の動向。そして三度目、残りの『信頼の証』を与えられる者は居るのか、それは誰になるのか。……ぶっちゃけ、大誤解である。

そんな探り合いにも似た空気を漂わせたまま、晩餐会は夜の部へと移っていく――

27話：コースティン家の晩餐会【後】

職務の都合上、夜の部に入ってから到着する務めに忙しい貴族達も居るようで、これから帰途に付く人達と入れ替わりに会場入りした貴族達が、親しい相手から色々と情報を聞き出している光景が会場の彼方此方に見られた。

レティレスティアは今日のような晩餐では中心的役割にいるので、夜の部に参加する招待された貴族達のうち、少なくとも門閥家の者が全員揃うまでは会場に留まる事になる。朔耶も自分だけ先に帰るのは気が進まないという事で残っていた。

「さっきの交渉は見事だったな」

少し疲れた朔耶がベランダで一息ついている所に、アンバッスも慣れない空気から逃れてやって来た。レイスが来た時点で退場するつもりだったアンバッスだが、先程の朔耶と貴公子達のやり取りやその後の会場の空気に思う所があり、居残っている。

ベランダの出入り口には朔耶の様子を窺っている貴公子達がさり気無く集まっており、抜け駆けで朔耶に近付く者に対する無言の牽制を仕掛けていたのだが、アンバッスは何処吹く風で彼等の正面を歩いて突破して来たのだ。

それでもまだ恨みがましい視線を向けている者が何人か居たので、アンバッスは懐から朔耶の銘入りライターを取り出して火を付け、徐に振り返って反応を見ると全員の視線がライターに釘付け、それ

からアンバッスを見上げ、そして引き攣った愛想笑いを浮かべた。
『ふん……』と鼻の奥で溜め息を付いてライターを懐に仕舞い、ベランダの手すりに凭れるようにして朔耶の隣に立つ。ベランダから星を見上げている朔耶は何処かボンヤリした雰囲気でアンバッスの言葉に軽く肩を揺らして応えた。何と無く、朔耶が甘えてきた夜の事を思い出したアンバッスは持ってきたワイングラスの中身を少し含む。

「しかし、レイスは随分恥を掻かされたようだったが」

門閥家の名誉も気にしてやれよ?という意味も言外に滲ませて軽い調子でアンバッスが言うと、朔耶は見上げていた夜空から視線を下ろしてコースティン家の庭園を見下ろし、呟いた。

「あたしは庶民で、素人よ」
「そんな博識な庶民がいるか」

沢山の馬車が並ぶ庭園を見下ろしながら、何時かのようなやり取りを苦笑雑じりで交わす。

「富も名声も欲しい、栄光を取り戻したいし、プライドも名誉も守りたい、でも泥は被りたくありません。……甘えんなってね」
「ふ……厳しいな、サクヤは」
「別に、あたしは足掻こうとする人を見て　それを見苦しいとは思わないだけだよ」
「ふん……なるほどな」

装飾の少ないシンプルなドレスを身に纏い、屋敷のベランダから憂いを帯びた表情で外を眺める朔耶の姿をこうして見ると、その容姿も相まって深窓の令嬢にも見えなくも無い。アンバッスはそんな

風に思った。だからだろうか、普段の彼なら絶対口にしないであろう女性を称えるような言葉を口にした。

「そのドレス、中々似合っているな。結構見違えたぞ」

「おそっ！　そう言う事はもっと最初の方に言ってよぉ！　もう慣れちゃったから全っ然っドキドキしないじゃない！」

先程の一幕以降、朔耶はこのベランダで一息付きに出るまでにイケメン貴公子達から散々称える言葉を浴びていたのだ。もうお腹一杯で胸焼け状態になっていた。

折角ムードを演出したのに素気無く踏み潰す朔耶に、アンバッスは盛大な顰めっ面を披露し、『あ～やっぱりアンバッスさんはそうでなくちゃ』と笑顔を贈られて顰め面で苦笑するという複雑な心境を見事に表現してみせた。

「アンバッスさんはきっとフラグブレイカーなんだね」

「なんだそれは？」

意味を説明され、思い当たる節があるのか今度は苦い顰め面を披露するアンバッス・クルト（４６歳独身）なのであった。

「ランバルト・クルツトフ・ブラフニール様、並びに、エルディネイア・クルツトフ・ブラフニール様、ご入場！」

新たに会場に現れたのはどっしりとした存在感に威厳と貫禄を湛えた初老の紳士と、まだあどけなさが残るも少しキツイ感じのする

顔立ちの麗しき令嬢。彼等が入場すると談笑を切り上げて慌しく駆け寄ったフエルト卿が恭しく挨拶をして迎えた。他の門閥貴族達も態々挨拶に向かっている事から、かなりの身分に立つ人物である事が窺える。

――公爵家の方が来られたようですわ、もう少ししたら城に帰りましょう？――

『うん、あたしも流石にそろそろ疲れて来たよ』

レティレスティアとの交感による会話にもすっかり慣れた朔耶は『携帯より便利じゃん』と、この能力を気に入っていた。誰かと繋がっているという感覚が、常に心の奥で感じている寂しさを紛らわせてくれている。

――あ、それからサクヤ……彼女には気をつけて下さいね――

『ん？　彼女って、さっき入って来た人？　なんか危ない人？』

――いえ、心根は良い方なんですが……なんと言いいましょうか、とても気位の高い方なので――

『あ～何と無く伝わって来た。うん大丈夫、分かったよ』

朔耶はレティレスティアから伝わってくる途惑うような困ったような、そんな『彼女に対する印象』を感じ取り『所謂タカピ～お嬢様』ね、と理解した。

「ここに居ましたか、サクヤ」

「サクヤ様、お疲れではありませんか？」

レイスとフレイが連れ立ってやって来ると、アンバッスと一緒にいる朔耶を労った。朔耶の工房を支援する約束を取り付けた中流貴族の貴公子達との交渉を終えた二人も、そろそろ帰宅の途に付くらしい。『じゃあ俺も帰るか』とアンバッスは欠伸をしながら会場内に戻っていく。

「あたしも、もう少ししたらレティと帰るよ。　交渉、どうだった？」

「上手く行きましたよ、無茶な要求さえ出さなければ彼等は中立を保つ事になるでしょう」

「サクヤ様は交渉術にも精通してらっしゃるのですね」

尊敬の眼差しを向けてくるフレイに、朔耶は偶々勘に引っかかる部分があったからやってみただけだと言って手を振った。

「ああ……そこでまた謙遜なさるサクヤ様の奥ゆかしさ……」

「お～い、フレイ～～」

何処かに旅立っているフレイを呼び戻しながら『フレイも疲れてるみたいだねー』と彼女の赤毛を筆にして頬をこちょこちょやっている朔耶に、レイスは苦笑を返すしかなかった。

「幾ら公爵家の令嬢でも、口にして良い事と悪い事がありますぞ！」

「あら、公爵家かどうかなんて関係ありませんわ。私は事実を述べたまでのこと」

ベランダで談笑していた朔耶達は会場から響いてきた男女の言い

争う声に何事かと目をやると、先程の公爵家令嬢が若い貴公子の一人と口論になっていた。周りでは二人を宥めようとする者と只の野次馬になっている者達が、言い争う二人を中心に輪を作っている。

『うわ～……さっそく問題起こしてるよ、あのお嬢様』

「エルディネイア様ですね……あの方は魔術士を目の敵にしているので、魔術士の家系の者とよく諍いを起こすのですよ」

「もしかして、レイスも？」

「ええ、僕もフレイも何度か絡まれましたよ、最初は驚きましたが慣れれば挨拶のようなモノだと気になりませんが」

「私は未だに慣れません……」

レイスは涼しい顔をして余裕の態度を見せているが、フレイはこそこそっとレイスの陰に隠れようとしている。二人はまだ王都にいた頃にレイスの父ルィバンスに連れられて門閥家の晩餐会にもよく同席していたのだが、そういった席でエルディネイアと顔を合わせると必ずといって良いほど絡まれていた。

曰く、魔術など精霊術を冒涜する邪術だ。

曰く、相手の呼吸を感じる事もなく卑怯な術で打ち倒そうとする魔術士は傭兵風情にも劣る。

曰く、魔術の戦いは潔さや勇ましさという高貴の欠片も無い陰湿な殺し合い。

などなど――

「よっぽど嫌いなんだねー、何か嫌な事でもあったのかな」

「どうなんでしょうねぇ、彼女の父君ランバルト公はかつてカイゼル王と共に周辺国の武装勢力を討伐して治めたフレグンスの双璧と並び称されていた武人の方で、彼女はそんなお父君を随分と尊敬し

てらっしゃるようでして、ただ令嬢は一人娘なので……」

ブラフニール家の家督もランバルト公の騎士としての象徴も継ぐことが出来ず、婚約者として挙がる相手は何故か尽く魔術士の家系の者である事に反撥しているのでは、とレイスは自分の分析を話した。そこにフレイも自身の聞いた話を付け加える。

「私の聞いた話では、大学院の模擬戦などで魔術士に正面から挑んでは敗れるというのを繰り返して……その都度、魔術士に対する対抗心を強めていらしゃるとか」

「……それって、どっちも八つ当たりの類じゃないの？」

何せ相手は公爵家令嬢、絡まれる方はあまり強く出る事が出来ないし、エルディネイアは直接相手や相手の家を批判している訳ではないので、彼女の家に対しての抗議も出来ない。本人に至っては『事実を口にする事の何がいけないのかしら？』と終始この調子なので、皆エルディネイアの魔術士嫌いにはホトホト手を焼いているのだった。

口論はエルディネイアの気が済んだのか、絡まれた貴公子が宥められたのか、どうやら収束に向かっているらしく二人を中心に広がっていた人の輪もばらけ始めている。

レイスとフレイは今の内にとっとと退散しようと、人々の流れに紛れて会場の出口に向かった。朔耶もレティレスティアが出口付近に移動を始めたので一緒に向う。

――お待たせしましたサクヤ、そろそろ城に戻りましょう――

『そだね、早く帰ってお風呂入りたいよ』

「あら？　そこにいらっしゃるのはアクレイア家のレイス様ではありませんの？」

ビクリッとレイスの陰に隠れていたフレイが肩を震わせて硬直する。声を掛けられたレイスは無視する訳には行かないので振り向いて声の主に挨拶を送った。

「お久しぶりです。エルディネイア様」
「本当、暫らく王都では見なかったけれど元気そうね」

無難な挨拶が交わされたにも拘らず、周囲の人々はアクレイア家の子息に同情的な視線を向けた。『次のターゲットは彼か』と。そして大方の予想通り、エルディネイアはフレグンスの魔術士の家系では筆頭とも言えるアクレイア家の子息に絡み始める。

「剣を使わない騎士なんて詐欺のようなお話を良く聞いていましたわ。辺境の片田舎での任務では随分とご活躍のようですわね」
「いやあ、意外と平和な街でしたよ」

慣れたと言うだけあってレイスは表情一つ変えず流して見せる。さり気なくフレイを庇うような位置取りに立ってエルディネイアの矛先が向かないよう、視界から隠している辺りに余裕が見て取れた。エルディネイアもまた、レイス相手には一筋縄で行かない事を分かっており、先程入手した情報を痛烈なカードとして早々に切ってみせた。

「聞きましてよ？　屋敷の修繕に目処が御立ちになったとか」

うわぁ……という空気が辺りに広がった。あの話を聞いていた他の貴族達は、失笑を向ける事は出来てもそれを話題にして話す事ま

では流石に憚られる。ましてや本人相手にあからさまにその話を向けるなど言語道断。
門閥家の名誉に関わる問題なだけに、喧嘩を売ってるも同然なのだ。

「ええ、良い建築技師の紹介を受けまして」

しかしレイスも既に開き直っているのか、周囲が予想していたような動揺も怒りも見せず、淡々と受け流していく。それが気に入らなかったのか、エルディネイアにしては珍しく相手を直接貶めるような言葉を口にした。

「それは何よりでしたわね、ようやくあの見窄(みすぼ)らしい屋敷がまともになると聞いて私もホッと致しましたわ、上流区の景観を著しく損ねていましたもの。でも御無理は為さらないで、いっそ貴族街に手頃な御邸でも御買いになられてはいかが？」

朔耶はエルディネイアの言い様を聞いて『すっげぇ毒舌だぁ』と噴出しそうになっていた。レイスにとっては笑い事では無いのだが、金髪縦巻ロールで目元がつり気味な為かキツそうな印象を持つ顔立ちの御嬢様キャラとしては余りにもハマリ過ぎていて笑ってしまいそうになる。

肩を微妙にぷるぷるさせている朔耶に気付いたフレイが、そっと朔耶の手を握る。フレイのその瞳からは『大丈夫ですサクヤ様っレイスさまは、大丈夫ですから……！』と訴えているのが読み取れて申し訳無い気持ちに駆られながらも、更なる笑いの種に堪えて思わず俯く。

『ごめん、フレイ……違うんだよ……あたし怒ってるんじゃなくて

噴出しそうなんだよっ！』

そんな笑いの衝動と内面で闘っていた朔耶は更に続いたエルディネイアの――

「まあ、魔術を為さる方は何彼につけて後手に回る方が多いですからね、貴方も騎士になったのでしたら『騎弓剣盾（ききゅうけんじゅん）』の精神に則った行動が出来るよう期待したい所ですわ」

――久しく聞いていなかった四文字熟語のような響きを持つ言葉に反応して顔を上げる。

「ききゅうけんじゅん？」

うっかり声に出してしまった朔耶の呟きは、思い掛けず大きく響いてレイスと対峙するエルディネイアや周囲で輪になって成り行きを見守っていた人達の耳に届いた。

「あら？　其方の方はどなたかしら？」

エルディネイアの翠色の瞳が朔耶の黒い瞳を捉える。エルディネイアの朔耶に向ける目は、少なくとも見ず知らずの相手を見る目ではない。

門閥家は勿論、中流貴族達でも殆どの者が王女に勅令を発令させてまで探し出すに至らせた朔耶の事は知っている。王家に最も近い一族でもある公爵家の者が知らない筈はないのだ。

これは相手に先に名乗らせる事で、自らの立場と存在を誇示しようとする公爵家令嬢からの『私を敬いなさい』というサインのようなモノだ。朔耶に直接問い掛けていない所にも身分の差を明確に示そ

うとする態度が見て取れる。
　周囲の貴族達はエルディネイア嬢が朔耶に眼を向けた事に恐々としていたが、この対応についてはある種当然の接し方として納得出来るモノだったので朔耶にまで絡むつもりは無い様だと胸を撫で下ろした。
　門閥家や中流以下の貴族達にとって、王女と懇意の客人である朔耶は王家に取り入る為の恰好の存在と言えるが、公爵家は元より王家に対する発言権を持っているので太鼓持ちになる必要もない。ましてや朔耶は貴族の身分に無く、更には魔術士と称される相手だ。魔術士嫌いのエルディネイアが公爵家の威光に朔耶を傅(かしず)かせようとするのは当然の帰結といえようという。

「ねえねえ、『ききゅうけんじゅん』って何？」

　しかしエルディネイアから『傅けサイン』を送られている当の本人である朔耶は、自分が話し掛けられた訳では無いのをいい事にまるっきり緊張感の無い調子でレイスの陰に隠れているフレイに言葉の意味を尋ねていた。
　途端、ギリッという音を幻聴しそうなエルディネイアの鋭い視線が朔耶を射抜く。安堵の息を吐いたばかりの周囲の貴族達はそのまま今度は緊張に息を呑む。今日はやたらと強制深呼吸の多い晩餐会だった。

「あ、あの……『騎弓剣盾』とは賢者の言葉でいう所の……」
「戦(いくさ)の心得を表した言葉ですわ」

　しどろもどろになりつつも朔耶の問いに答えようするフレイの回答に被せるように、エルディネイアが言い放った。幾分声のトーンが低い辺りに不機嫌さが表れている。

「ほうほう、それってどんな意味なの？」

あっけらかんと返してくる朔耶に、エルディネイアは面食らって目を丸くした。幾ら王女と懇意にあるからといって、貴族でも無い身分にある者が公爵家令嬢である自分に対して何の物怖じもしていない。単なる度が付くほどの世間知らずや愚か者の類とも思えない。先程耳にした話では中流貴族の貴公子達のみならず、門閥ジャバール家の子息をも手玉に取る賢しい娘だと聞いていた。

ならば、その賢しさでこの私を相手取るつもりかと、エルディネイアはふつふつとした闘志を滾らせる。しかし、あからさまにそれを表に出す訳にはいかない。格の違いを見せ付ける為には此方はあくまでも優雅に気品を忘れず、余裕を持って対処して見せなくてはならない。

エルディネイアはまず何処から攻めるべきかと、朔耶のウィークポイントを探すべく問いに応じて対話を続ける事にした。相手の事を正確に知るには直接話すのが一番なのだ。

「騎弓剣盾とは、騎馬のように速く駆け、弓のように静かに射抜き、剣のように果敢に攻め、盾のように味方を守る、騎士の精神を謳った賢者の言葉の教えですわ。魔術士には真似の出来ない教えですわね」

「なるほど～、確かにそれっぽいね。でも戦の心得とはちょっと違う気がするなぁ」

「……どういう意味かしら？」

「騎士の精神ってのは分かるけど、戦の心得っていうにはちょっと狭いかな」

最後のワンポイント牽制をあっさり躱して、あまつさえエルディネイア嬢の賢者の言葉の用法にケチまで付ける朔耶に、周囲で成り行きを見守る貴族達は内心ハラハラしていたが、同時に朔耶が何を

言い出すのかにも興味があった。特にフエルト卿の派閥に属する家は少なからず魔術士を輩出している家系でもある為、フエルト卿が主催する晩餐会では比較的魔術士も多くなる。彼等にとっては普段から嫌味と難癖ばかりつけて来るブラフニール家令嬢に一矢を報いてくれるならばという期待もあった。

「ついでに言うと、譬えが武器の類ばっかりで精霊の国って呼ばれてるフレグンスにはしっくり来ない気がする」

国に相応しく無いとはまた大きく出たものだと、異国の少女と公爵家令嬢を囲む貴族達の輪からは少し離れた場所で余興を楽しむように眺めていた門閥家のエライさん達がほくそ笑み、同じ様にして離れた場所から愛娘と王女の客人の動向を目を細めて眺めていたランバルト公に視線を向ける。

ランバルト公は娘エルディネイアのような魔術士嫌いという訳ではなく、寧ろフレグンス国内で魔術を盛んにしようとする勢力の急進派でもある。娘の婚約相手に魔術士の家系ばかり選ぶのも、魔術士の血を迎えたい思惑もあっての事だ。困った事に娘は騎士に憧れてか女だてらに剣を振るおうとする。大学院の学生の身にある内はまだいいが、家に戻って婿を取る頃には慎ましく在って欲しいモノだと思っていた。

『しかしあの娘……、近衛のイーリスに膝を付かせる程の技を放つ少々毛色の違った魔術士と見ていたが……はたしてネイアを何処まで言い包める事が出来ようか』

ランバルト公は先日の王の間で行われた迎えの儀にも出席していて、そこで『一発殴って赦す』という異国の少女の漢気溢れる裁断を好意的に捉えていた。愛娘にも似た勇ましい気概に、あの娘ならばネイアとも良い友人になれるのではという期待感が湧いたのだ。

この晩餐の席での邂逅は吉と出るか凶と出るか、そんな事を思いながら愛娘が睨みつけるように対峙する黒髪に黒い瞳を持つ異国の少女を見守った。

「相応しくないと仰いましたわね、でしたら貴女が相応しいと思う賢者の言葉を是非、御聞かせ願いたいですわ」

エルディネイアは朔耶の切り返しには内心驚いていた。今までは反論される事はあっても遠慮がちに『貴女の世評に関わりますよ』というような、風評を気にさせての自重を促すモノばかりで、ここまで明確に自分の意見として物言いを付けて来た相手は居ない。

それ程までに賢者の言葉の語録知識に自信があるのだろうかと、エルディネイアは少し警戒した。しかし――

「うーん、そう言われても……あたしこの国の賢者の言葉とかって知らないし」

思いっきり肩透かしを食らってエルディネイアのみならず、周囲で輪になっている貴族達もがっくりと肩を落とした。失望混じりの溜め息も聞こえる。同時に、貴族の身分にない者がそう賢者の言葉を嗜んでいる筈もないかと納得気味に頷いている者もいた。

だが、朔耶が次に続けた言葉には大いに反応を見せる者が多かった。

「実際の戦争を知りもしない人が戦(いくさ)の心得を語るのも、戦場に出て戦う人に失礼だしね」

それはつまり、騎士でもない者が騎士の精神を語る事への諫言(かんげん)で

もあり、魔術士でもない者が魔術士を嘲る事の愚かしさを指摘してると捉えられた。さっとエルディネイアの頬に朱が差す。

実に根本的で単純明快な指摘であるが故に正論過ぎて今まで誰も口にしなかった事だ。似たような内容であれば今までの口論で度々諌める程度に言われた事もあるエルディネイアだが、何れも遠回しに暈(ぼか)しながらの指摘だった為、幾らでも反撃のしようがあったのだ。

こうもキッパリ、はっきり『失礼だ』と言われたのは彼女にとって初めての事だった。

「し、質問の答えになっていませんわね。私の示した賢者の言葉が相応しく無いとおっしゃったのに賢者の言葉を知らない貴女も失礼に中るのではなくて？」

何とか反論の言葉を紡いだエルディネイアだったが、その言葉にはかなりの動揺が感じ取れた。だが一応言わんとする意味は伝わる。自分の示した賢者の言葉を否定するならそれに代わる言葉を示すべきだという反論。しかし朔耶は賢者の言葉を知らないと言う。

これは引き分けに終わりそうだなと、場を収める為に周囲の貴族達が双方のフォローに動こうとした時、朔耶がエルディネイアの問い掛けに応えた。

「あたしの国のそういう言葉なら知ってるけど、聞く？」

「貴女の国の言葉……？」

怪訝そうに反芻したエルディネイアは、朔耶がかなりの遠方にある異国から来たらしいという事を思い出し、少なくともオルドリア大陸では万国共通の賢者の言葉も、他大陸の国までは伝わっていないのかもしれないと認識した。

「聞かせて頂けるかしら」

「ん、『風林火山』って言うんだけどね……」

――疾きこと風の如し――
――静かなること林の如し――
――攻めること火の如し――
――動かざること山の如し――

巫女の祝詞のような響きを持った言葉が、晩餐会場に紡がれて行く。

「風のように疾く動き、林のように静かに佇み、火のように激しく攻め、山のように動じない――若干違う所もあるけど概ねこんな感じかな」

朔耶の国の賢者の言葉を聞いた貴族達は一様にその言葉の完成度の高さに感嘆の唸りを上げた。一句一句に情景が浮び、自然物を譬えに使っているので精霊の国と謳われるフレグンスにも相応しい。戦に限らず、あらゆる方面の心得に使えるほど応用範囲が広く規模も違う。正に賢者の言葉だった。

「中々素晴らしい言葉をお持ちのようだ」
「！っ　お、お父様」

朔耶の言葉を認めざるを得ない所まで追い込まれたエルディネイアは、何時の間にか背後に立っていた父に驚きの声を上げた。これには周囲の貴族達も遠巻きに眺めていた門閥家のエライさん達も驚いていた。

ランバルト公は今までエルディネイアが何処の誰と口論を始めても遠くから見守るばかりで、特に諫めるでもなければ口論相手に睨

みを利かせるでもでもなく、寧ろエルディネイアに積極的に反論する者が居れば好意的とも感じる眼差しを向けている事が殆どだった。流石に掴み合いにまで発展しそうになれば割って入る事もあったが、理性的な会話が成り立っている最中に自ら干渉する事は無かったのだ。

娘の旗色悪しと見て首を突っ込むような無粋をする人物では無い事を誰もが知っていたので、この段階で声を掛けて来る事の意図を誰もが図りかねていた。朔耶とランバルト公に皆の注目が集まる。

「娘が失礼をしたね、血気盛んな気性故に中々手を焼かされているが、これでも根は素直な子なのだよ。ここは一つ、儂に免じて赦してやってくれんかね」

その言葉に絶句したエルディネイアは眼を見開いて父を見上げた。周囲の貴族達にも驚きと動揺が広がっていく。『ランバルト公爵が侘びを入れた！』と、そして公爵家当主がそんな行動に出た事で、門閥家を含む貴族達の間であらゆる憶測が瞬く間に飛び交い始めた。

王家に近しい、特にカイゼル王とは親友の関係にあるランバルト公の事だ、一般（この場合貴族間）には出回っていない朔耶に関する重要な極秘事項が有り、それを知っているが故の行動では？　と。朔耶に関しては特に異例尽くめで事が進んでいただけに、やはりただ王女が御執心の客人というだけの存在では無いのではないか。

そしてそれらの憶測はつい数刻前の『信頼の証』配布の事にも波及して、朔耶は『王家直属の特命官』で我々は彼女を通して篩いに掛けられているのではないかという所にまで至った辺りで、朔耶がランバルト公に答えた。

「うん？　赦すとか赦さないとかの話じゃないと思いますけど？　別に喧嘩してた訳じゃないですしね」

「ふむ、そうかね」

飄々と話す朔耶と穏かな笑みのランバルト公。二人のやり取りに複雑な表情を浮かべて沈黙しているエルディネイア嬢。会場中の人々が見守る中、朔耶を迎えに来たレティレスティアの登場でこの舞台はお開きとなった。

「これはこれはレティレスティア様、挨拶にも行けませんで申し訳ありませんな」

「いいえ、ランバルト公爵もお忙しいようですわ」

王女と公爵の軽い挨拶が交わされ、エルディネイアも王女への礼を取る。

「時にサクヤ殿、先程のライターという道具だが……もし余っているならば一つ譲って貰えないだろうか？」

「いいですよ」

ざわり、とざわめきが広がる。お開きになった筈の舞台上で最後にとんでも無い展開が待っていた。公爵自ら『信頼の証』を所望し、それを了承されたという事に、またしても憶測が飛び交い始める。

何よりも、王家に近しい公爵家であるランバルト公が『証』を与えられていなかったという事実が、最近の王都に漂う帝国の間者洗い出しという物々しい雰囲気と深刻さを思い起こさせ、フレグンスの貴族内部に帝国と通じる勢力が在るらしいという貴族間で真(まこと)しやかに囁かれている噂の信憑性を高める事となった。

焦ったのは他の門閥家のエライさん達だ。何せ自分達も『証』を与えられていないのだから、これは早急に王室へ問い合わせなくてはと従者を呼んでごにょごにょと耳打ちする姿が会場内の彼方此方で展開された。

「ではサクヤ、城に帰りましょうか」
「そだね、それじゃあまたね、ランバルトさんに……エル？」
「わ、私の愛称はルディかネイアですわ！　それに、その愛称は……いえ、何でもありませんわ」

会って間もない相手からいきなり『エル』などという愛称で呼ばれて狼狽したエルディネイアは、しかし愛称で呼ばれる事自体には拒絶感は感じさせなかった。なので朔耶はエルディネイアもレティレスティアと同じく愛称で呼ぶ事に決めた。
親睦を深める為にというよりも『名前長いと舌噛みそうだし』というのが本音だ。

「んじゃ『ルディ』で、またね～ルディ」
「……そっちは婚約者が使う愛称なのですけど……まあ、いいですわ。また何処かでお会いする事があれば、賢者の言葉についてお話しましょう」

貰ったライターをふむふむと手の中で玩ぶランバルト公と、朔耶の飄々ぶりに毒気を抜かれて棘を潜めたエルディネイアに別れの挨拶をして出口に向おうとした朔耶は、慌てたように小走りで近付いて来たフエルト卿からも挨拶を向けられた。

「レティレスティア様もサクヤ様も御帰りですか、今宵は楽しんで頂けましたかな？」
「良い晩餐会でしたわ、フエルト伯爵」
「料理美味しかったですよー」

社交辞令と本音の二重奏で答えるレティレスティアと朔耶。フエルト卿は『それはよかった』と揉み手ばりの微笑みで返しつつ、遠慮がちに言葉を続けた。

「それであの～、大変恐縮ながら……宜しければ私にも是非、あの道具を頂ければと……」
「あ、ごめん。ランバルトさんにあげたのが最後だったの、今日はもう残ってないんだわ」

ざわり……。やはりまたざわめきが起きた。『フエルト卿は王家から信頼されていないと言う事なのか……』『いや、本当に偶々証が手元に無いだけかもしれないし』『しかしアクレイア家の子息は持っていた……派閥の脱退を考えるべきか』

「ごめんね～」
「あ、いえ……そ、それでは仕方ありませんな、ははは。では、また次の機会にでも……」

両手を合わせて済まなそうにしている朔耶に、フエルト卿は引き攣った笑みを返しながら汗を拭う。朔耶達の後に続くように出口に向かったレイスは、そんなフエルト卿に一瞥を向けて会場を後にした。

朔耶達が退場した会場では、『証』についての話題で持ちきりになり、今日、朔耶の工房関係でアクレイア家への支援を約束して『証』を貰った中流貴族達は、心の底から安堵していたりするのだった。

レイス達とも屋敷の玄関前で別れた朔耶とレティレスティアは、城に帰る馬車の中で今日の晩餐での事を話し合っていた。

「ふう～、やれやれだったね」
「お疲れ様サクヤ、彼女を相手にあそこまで堂々と話せるなんて、驚きました」
「そう？　結構面白い子だと思うけどなぁルディって。それにレティと繋がってたから、私一人じゃないって思うと凄く心強かったよ」
「あ……サクヤ……」

ぽぉっと上気した表情で潤んだ瞳を向けてくるレティレスティアに、とりあえず席一つ分距離を取る朔耶。

『そこで頬を染める所がレティがレティたる天然の証なんだよなぁ……』

屋敷の玄関口でレイス達と別れた時もフレイが似たような症状を見せていたのを思い出し、何か自分が間違った方向に向かっているような気がしてならない朔耶だった。

「所でサクヤ、その道具はまだ残っているようでしたのに、どうしてフエルト伯爵にはあげなかったのですか？」
「うん……ちょっと思う所があってね」

袋の中から余ったライターを持ち出してごそごそしていた朔耶にレティレスティアが尋ねた。朔耶はまだ数個のライターをあの場では所持していたのだ。

「ねえ、レティ……今日の晩餐会に来てた人達はさぁ、あたしのライターに凄く注目してたのに気付いた？」
「ええ、皆さんとても興味が御有りのようでしたわね」
「なんかさあ、すっごい誤解されてる感じが伝わって来たのよ。ラ

イターを渡す事が何か大事な意味になるみたいな」
「え？　そうだったのですか？　皆さんとても羨ましそうにしている様には見えましたが……」

最初に工房の支援を約束してくれた貴公子達にあげた時は、普通に喜んでくれていたようだったのに、中の機構を説明していくにつれて段々と真剣な顔付きになって行き、他にも持っている人が居るという話になった時は随分と緊張した様子になった。
魔力石を使った道具がこの世界では珍しいという事は朔耶もアマガの村での生活と王都までの旅路で分かってはいたが、どうもそれとはまた違う驚きを彼等の様子からは感じた。

「なんかね、信頼の証がどうのこうのって聞えたから、こういう道具を渡すのって何か深い意味でもあるのかな～って思ってね」

ランバルト公に渡した時の周囲の反応で更にその確信を深め、流石にこれ以上軽々しくぽんぽん渡すのは不味いかもしれないと思い、その後のフエルト卿の所望には渡す事を自重したのだ。
レイスの敵になる人とはいえ、折角欲しがっているのにあげられなくて悪い事したなぁと朔耶はちょっぴり気に病むのだった。

城に戻った朔耶とレティレスティアは地下の洞窟風湯浴み場で汗を流し、朔耶がレティレスティアに湯に浸かる心地良さを懇々と教えている所に、少し急いだ様子でアルサレナが入ってきた。

「二人とも、湯浴みが済み次第、王の間に上がって来なさい」

それだけ言うとまた急いだ様子で湯浴み場を出て行った。朔耶とレティレスティアは二人して『なんだろう?』と顔を見合わせ、とりあえず行ってみようと湯浴み場を後にした。

王の間に上がると、カイゼル王とアルサレナ王妃、それに宰相の三人が待っていて、他の者は室内の護衛も含めて人払いがされていた。何処かピリっとした空気に朔耶もレティレスティアも緊張感が込み上げてくる。

「おお、来たか」
「父様、母様も如何なさいました?」

まずは掛けなさいとソファーに座るよう言われ、レティレスティアと並んで腰掛ける朔耶。それを見届けてアルサレナは徐に頷き、カイゼルが口を開いた。

「うむ、実は先程の事なのだが……各門閥家の従者が妙な問い合わせをして来てな」

王から説明を聞くにつれ、冷や汗を流しながら顔を引き攣らせる朔耶。レティレスティアも同じ様に蒼い顔をしていた。

――親愛なるカイゼル国王様におかれましてはサクヤ殿を通じての『信頼の証』を我〇〇家にも賜れますれば……――

そんな感じで『信頼の証』を家にも是非与えてくれとの要請が来ていると聞き、詳しい説明を求められたので朔耶は順を追って話した。

「わっはっはっ」

「笑い事ではありません」

朔耶の話を聞いて思わず笑い出すカイゼル王を困ったように叱責するアルサレナ王妃。結構重大な問題の筈なのだが、王は終始機嫌が良さそうだった。

「良いではないか、どうせまだそれ程出回っていないのであろう？　いっそ特別な装飾でも施したその道具を『信頼の証』……くっくっくっくっ　として、本当に信頼出来る相手に配ってみてはどうか？」

「まじめに考えて下さい」

「何を言う、私は何時でも真面目に考えているぞ？」

「笑いながら言っても説得力ありません。　せめて威厳の欠片くらいは見せて下さい」

国王と王妃による夫婦漫才という非常にレアなモノをライブで見られて朔耶もようやく気持ちが落ち着いてきた。そうして王の提案した『特別な装飾』という部分に着目し、以前レイスと話した相手の家の紋章などを彫り込んで渡す事を考えてそれを話してみる。

「サクヤ……貴女まで」

「おお、良い考えだなそれは！　よし、各家の紋章を記した記帳の閲覧を許可しよう」

「……はあ、もう好きになさって下さい」

一応、渡す相手は一端王室に報告を入れ、王、王妃、宰相、それに何故か朔耶も交えて吟味してから渡すか否かを決めようという事になり、正式な『信頼の証』は王家の紋章と相手の家の紋章をそれぞれ裏と表に彫り込んだモノとし、朔耶の銘が入っただけのモノは『仮証』として扱う事にしようという方向で話が纏まった。

連絡を入れる方法は朔耶がレティレスティアに交感で伝え、レティレスティアが口頭でアルサレナに伝える。そしてアルサレナから王と宰相に伝えられ、時間の調整をした後、協議の時間をレティレスティアを通じて朔耶に伝える。朔耶の到着を待って協議を始め、吟味した後決定するという仕組みだ。

朔耶を選定に加えるのは朔耶の中の精霊によって相手の情報をある程度正確に把握出来るらしいという事に、ジャバール家の子息との逸話を聞いて思い至ったアルサレナの提案だった。

「サクヤならば、相手が王国に仇なす者かどうかを見抜く事が出来るでしょう」

こうして、王家直属『信頼の証』選定官に任命された朔耶には、後日相応しい身分を与えられる事が約束されてこの日の説明会は解散となった。

「これって出世？」

ワタワタしている間にバタバタ決まった自分の役職らしき立場に、湧かない実感を求めるように呟く朔耶だった。

――閑話

「君、何処から来たの？」

平民の服を着た見窄らしい男の子が尋ねた。声を掛けられた女の子は零れそうだった涙を隠して精一杯の虚勢を張りながら答える。

「クルストスの街よ、家は王都にお屋敷があるけどね」

「クルストスだって？　随分遠くから来たんだね、まさか一人で？」

そうよ、と答えようとして詰まる女の子。確かにここへは一人で来た。いや、連れて来られた。正確にはここに着いてしまったのだ。

ちょっとした好奇心だった。御者の目を盗んで馬車を抜け出し、近くに停めてあったボロっちい平民の幌馬車に隠れた。質の悪そうな布やボサボサの大きなロープが積まれ、奥には藁束が積んであった。その藁に隠れていたのだが、なんだかとても温かくて、気が付くと眠ってしまっていた。

目を覚ますと馬車は動いていて何処かを走っていた。街の建物は何処にも見えず、でこぼこの道がずっと遠くまで続いていた。こっそり馬車の御車台を覗き込むと、とても人相の悪い男が手綱を引いていた。怖くなって藁の中で丸くなった。やがて馬車が止まり、御車台の男が桶を持って馬車を離れたので、その隙に馬車を飛び降り、逃げ出した。

何処をどう走ったのか、疲れに立ち止まって辺りを見渡すと、木と草と乾いた土に転がる石ころ以外何も無い場所に居た。街がどっ

ちにあるのかも分からない。もう、帰れないと思うと哀しくて泣き出しそうになった時、男の子に声を掛けられたのだ。

「貴方、地元の子？」
「うん、この先を下った所にある川沿いの村に住んでるんだ」
「街はどっち？」
「ん？　向こうだよ」

男の子の指した方角は鬱蒼とした森が広がっていた。女の子は男の子に礼を言って歩き出す。

「何処行くの？」
「街に決まってるでしょ」
「え、ここから？　歩いて？　馬車は？」
「馬車は……そ、そう！　さきに帰らせたのよ、だから歩いて帰るの」

男の子は驚いた。こんな場所から女の子が一人で歩いて街まで行くなんて無茶だと。

「だって仕方ないじゃない！　もう馬車は来ないんだもの」
「……もしかして、置いていかれたの？」
「！っ　し、失礼な事いわないでっ！」
「ご、ごめんよ」

『まったくこれだから平民の子は……』と、女の子はぶつぶつ言いながら森に向かって歩き出す。男の子は暫らく女の子の歩き去る姿を見送っていたが、ふと空を見上げて太陽の位置を確認すると、女の子の後を追って走り出した。

森の中は薄暗く、奇妙な動物の鳴き声が彼方此方から響き渡り、

背丈程もある草が時折揺れたり、木々の隙間を何かの影が横切ったりする。

「こ、怖くなんか無いわっ　イザとなったら王子様とかお父様みたいな立派な騎士が助けてくれるんですもの！」

女の子は物語に出て来るお姫様の役を演じているのだと自分を鼓舞しながら、薄暗い森の中を進んでいく。その時、頭上から聞こえるシューーっという音に顔を上げると、緑色に紫の斑模様、黄色と黒のラインも鮮やかな一匹の大蛇が、木の枝から女の子を見下ろして威嚇音を立てていた。

「ひっ！」

爬虫類の冷たい眼に囚われ、身体を硬直させる女の子。蛇はその鎌首を持ち上げると、細長い身体をバネのように縮めて女の子の白く細い首筋に狙いを付ける。そうして自慢の毒牙を穿たんと飛び掛ろうとした瞬間、バシッと音がして枝の上から弾き飛ばされた。硬直したままの女の子の手が掴まれる。

「こっちだ！　アイツは結構しつこいから、急いで離れるんだ！毒があるから咬まれたらしんじゃうぞ！」

「あ、貴方……っ」

男の子に手を引かれて森の中を駆け抜ける。　歪に曲がった不気味な木の根を迂回し、カーテンのように下がる蔦を小枝で打ち払いながら進んで行く。

森を抜け、巨石の隙間を潜り、急な斜面を登り、今まで外での遊びといえば屋敷の庭か広くてもお城の庭園でしか遊んだ事の無い女の子にとって、それは大冒険だった。やがて風鳴りのする洞窟を抜

けると、遠くにクルストスの街並みが見え始めた。夕日に照らされる街は王都の上流区の街並みよりも綺麗に思えた。

街に到着すると、女の子の覚えている建物の概観を頼りに、男の子が心当たりの場所を探して案内する。そしてようやく、女の子の泊まっている宿を見つける事が出来た。宿の前には女の子の父親の部下の騎士と、馬車の御者、それに道中の護衛に雇われた魔術士が立っていた。女の子の姿を見つけると、騎士と御者は驚いたような顔をして慌てて駆けて来る。そして――

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」

「えっ！」

魔術士が放った風の塊が男の子を吹き飛ばした。男の子が転がった所に、走ってきた御者が馬用の鞭で打ちつけようとする。

「この汚いガキめ！　御嬢様になにしてやがった！」

「やめなさい！！　何するのっ！！」

女の子は慌てて男の子に覆い被さるようにして庇う。

「へ？　御嬢様、そんなガキに触れては服が汚れちまいやすぜ」

「黙りなさいっ　この子は道に迷った私をここまで送ってくれたのよ」

キッと睨んで御者を狼狽させると、男の子を助け起こす。幸い怪我はしてないらしく、服が破れた程度で済んでいた。

女の子は魔術士に向き直ると、子供ながらに大貴族のオーラを感じさせる堂々とした風格を漂わせて言い放った。

「貴方、この子に謝って」

「はあ？　何を言ってるのです？」

しかし魔術士は子供の戯言を嘲るように鼻で笑って見せた。

「貴方、この子を傷付けたじゃない！　謝って！」

「お嬢様、貴方の軽率な行いがこの事態を招いたのですよ、私は自分の義務を果たしたまで。　さて、コレで私の仕事は終わりですな……御機嫌よう皆さん」

報酬も貰い終えていた魔術士はそう言ってさっさと立ち去ってしまった。激晃した女の子が掴みかかろうとしたが、御付きの騎士に宥められた。

「御嬢様、あの者の言う事も正論です」

――ふざけないで！

「！っ」

夢の中の自分の叫び声で目が覚めると、朝の日差しが薄手のカーテンに濾されて柔らかくベッドを撫でている。息を吐いて夢の余韻を感じるように眼を閉じる。森を抜けた所で名乗りあった、あの日の冒険の始まり。

『君の名前は？』

『……エルディネイア・クルツトフ・ブラフニールよ』

『長くてむずかしいなぁ……”エル”って呼んでいいかい？』

『と、特別に許してあげるわ』

『はは、ありがとう』
『貴方の名前は？』
『僕は――――』
そこまで思い出した所で、エルディネイアはベッドから起き上がった。もう随分昔の、子供の頃の夢。戦乱の時代も終わり、世界に平和が訪れようとしていた頃。
エルディネイアの父ランバルトがサムズの地方での反乱を鎮める為に派遣されていた時期、王女の遊び相手として宛がわれていたエルディネイアはその王女と掴み合い引っ張り合いの大喧嘩をしてしまい、遊び相手を外された。
屋敷に残った使用人や稽古事の教師達ではエルディネイアの気性の激しさや我侭を御し得ないとした留守役のお付の騎士がランバルトに泣き付き、それならこっちに連れて来いという事でサムズのクルストスに行く事になった。そこで出会った辺境の街の果ての、小さな村に住む男の子。
クルストスに滞在した数日の間にエルディネイアがその男の子ともう一度会うことは出来なかったが、父ランバルトに頼んで彼を王都の学校に通えるよう手配して貰った。
王都に戻ればまた会えると思った。しかし、エルディネイアは王都で彼と会う事は無かった。後になって分かった事だが、当時エルディネイアが通っていた王都の学校は貴族学校で、男の子が通っていたのは平民学校。
エルディネイアは学校が終わると馬車で家まで送られ、その後は家で稽古事か上流区の散歩。会える筈も無かったのだ。

「今日も晴れそうね」

窓から空を見上げて独り呟くと、エルディネイアは机の上に置いてあった『サクヤ式魔力石ライター』を指で弾く。

三日前のコースティン家での晩餐会でランバルト公がサクヤという王女の客人、今は『王室特別査察官』という役職に就いている異国の少女に貰ったモノだ。

昨日、ランバルト公は『正式な証』として王室とブラフニール家の紋章入りライターを改めて賜り、『仮証』となるこのライターは娘に譲られた。

侍女達がやって来て朝のお茶を嗜んだ後、王都大学院の制服に着替えたエルディネイアは、サクヤ式ライターを懐に仕舞って部屋を出た。

28話：黒い霧

朔耶が王都に来て五日目、コースティン家主催の晩餐会から三日目の朝。レイスから工房の下見に行く言伝を預かって来たフレイの誘いに乗って、朔耶は自分の工房の下見に一般開放区まで下りて来ていた。

城からこの区画までの距離は門の位置的にも結構長いので馬車を使ってやって来たのだが、前を行く馬車に見覚えのある紋章が見えたので御者さんに言って寄せて貰う。

その紋章は一昨日、正式な『信頼の証』として王家の紋章と共にライターに彫り込んだ公爵家の紋章、ブラフニール家のモノだった。

ちなみに正式なライターの本体には今までのような適当な木材ではなく、高級家具に使われるような独特の味わいのある艶を持った良質の木を使っている。

「やほールディ、おはよう」
「んなっ！　何をしているのですか貴女は！！」

公爵家の馬車に横付けしてくるなどという不敬をやからすのは一体何処の不埒な輩が！　と思っていたら、王室直属に新設された機関に先日就任したばかりの『王室特別査察官殿』だった。

仮にも査察官と謳われる要職に就いている者が朝っぱらから何をやっているのかと立場を忘れて叱責を飛ばすエルディネイアだったが。

「だ、だから止めましょうとあれ程……」

「あははは っ　まあまあ、いいじゃん。ルディはこれから学校なんだねー」

傍らでオロオロしているフレイを余所に、朔耶はエルディネイアの怒鳴り声も何処吹く風で呑気に雑談を持ちかけた。

公爵家の馬車と並走する王室要人馬車の窓から半分身を乗り出してひらひら手を振っている朔耶を見ていると、エルディネイアは真面目に怒っているのが馬鹿馬鹿しくなって来た。

「貴女という人は……はあ……、これから学院ですわ。今日は模擬戦があるので見学に来れば暇を潰せましてよ」

「へぇ～面白そうだね、行けたら見に行くよ。こっちの学校にも興味あるし」

しっかり『貴女暇なんでしょう』という牽制を忘れないエルディネイアに、朔耶は笑って答えた。

大学院へ向うエルディネイアの馬車と分かれた朔耶達は工房が立ち並ぶ一角に入って行き、レイスの家の馬車が停まっている改装中の館の前で馬車を停車させた。

二階建ての石造りの館は長く人が住んでいなかったらしく、窓には全て木の板が打ちつけてある。伸び放題の雑草が一階の窓を覆い隠す程まで茂っていた。

「うわ～まさに廃屋、幽霊屋敷みたい……」
「二年ほど買い手が付かず放置されていた館のようです。造りはしっかりしてますので、良い工房になると思いますよ」

入り口の扉は開いていた、というよりも、傾いた扉が壁に立てかけてあった。開いた時に外れたらしく、錆でボロボロになった蝶板部分がもげている。中は真っ暗だ。

朔耶は持ってきたフラッシュライトのスイッチを入れて館の中に踏み込んだ。フレイがフラッシュライトを見てぎょっとなっていたが、朔耶の国で売っている道具だと説明すると『サクヤ様の国はとても技術が進んでいるのですね』と感心していた。

『こういう場所で使う事もあるだろうし、やっぱり懐中電灯とかの照明も何とか出来るならしとかないとなぁ』

何と無く、このライトの電池は切らしたく無いと思ったので早急に照明関係の道具の製作を考えようと、今後の活動方針を決める朔耶だった。

「あ、レイス発見」

館の奥の広くなっている場所に魔術式ランプを並べて作業の準備を始めている建築技師の人達と日雇い労働者の平民達、それに彼等の視察を行っているレイスが異様に明るい光を向けられて朔耶の方を振り向いた。

「また随分と明るい光を放つ道具ですね、それも魔力石で？」

「ううん、これは向こうから持ってきたの」

成る程と、詳細は尋ねずレイスは頷いた。持ち込まれた作業台の上にはこの館の間取りと、なにやら細かく印やら線が引かれている図面の描かれた布が広げてある。

「これからどんな風に改装するか話し合っていた所です、何か希望はありますか？」

「んーとねぇ……」

朔耶は部屋の位置や大きさ、作業場の規模と範囲など、自分のイメージする作業場風景を伝え、それが図面に次々と書き込まれていく。

「客間は分かりますが厨房や食料庫まで……まさかここに住む気ですか？」

「その方がてっとり早い気もするんだけどねー」

立場上、流石にそれは出来ないという事は朔耶も理解しているので、作業に没頭できる快適な環境の為だと説明する。

新設された『王室特別査察官』などという名前だけなら重役と言える、実質『気になる人が居たら知らせる』程度の閑職に就いた朔耶の、身辺警護の護衛や使用人も住み込みで置かなくてはならないので、どうしてもキチンとした家に住む必要があるのだ。

工房（ここ）に詰める時は護衛役や使用人達と数日は一緒に快適な仕事をこなせるだけの設備は整えておきたいという朔耶の発想に、作業を受注した技師達は『そんな考えを持つエライさんは初めてだ』と珍しげに感心していた。

二十日もあれば立派な工房に仕上げてみせるという建築技師の人達に『よろしくお願いします』と頭を下げて彼等を狼狽させつつ、今はまだ廃屋の姿を晒している館を後にする。

「さーーて、それじゃあ王都大学院まで行って見ようかー」
「や、やっぱり行くんですか……？」

エルディネイアが苦手なフレイは気が進まなそうにしていたが、朔耶に急かされて渋々頷いた。

「大～丈夫だよぉ、あたしがちゃんと守ってあげるからっ」
「ううう……私、サクヤ様の護衛なのに……」

王都大学院は総生徒数五百人とも言われるフレグンス最大の人材育成施設でもある。貴族や商人達の出資で運営され、貴族と平民が同じ教育を受ける事が出来るという点において身分に厳しいフレグンスではかなり開かれた学校と言える。この辺りの方針は現フレグンス国王の意向によるものだ。

学生寮や職員の宿舎などがある中央の塔を中心に、それぞれ武術の塔、魔術の塔、教養の塔、技師の塔があり、学生は修学したい種目の塔で勉学に励む事が出来る。

武術と魔術の塔は無料で受講出来るが、教養と技師の塔は有料だ。学生は学院内施設で働く事で学費を稼ぐ事も出来る。

「おおっ　でっかい！」

「フレグンス一の育成施設で、ティルファやキトからも修学に来ている生徒や、講師に呼ばれている方達も居るんですよ」

門を潜ると正面左右に二つの塔、武術の塔と魔術の塔がそびえ立ち、二つの塔を繋ぐような巨大な壁の真ん中辺りにデカデカと描かれている校章。

壁には窓が点々と並び、中は塔と塔を繋ぐ通路になっていて、正面の壁の下部分には大きなアーチ上の入り口が開いている。反対側まで通り抜けられるようになっている造りはフレグンス城と同じ設計だ。

建物の周囲には各塔の修学内容に沿った色々な施設が並び、訓練場や学院の工房などもある。一般開放されている図書館もあれば、教養授業で身につけた貴族の振る舞いを披露しあう為の庭園広場などなど、中々に立派な規模の学校だった。

「模擬戦って何処でやってるのかな？」

「今日は個人戦と団体戦の日ですから、武術の塔の二階だと思いますよ」

馬車を降り、学院内に入ると中央塔の一階は各塔への入り口になっていて、時折移動している職員や生徒の姿が見える他、学院の従業員達が資材の搬入などを行っていた。

ちなみに学院内の照明には大学院工房で生徒達が造った魔術式や油式のランプが使われているので形も光度も様々だが、やはり魔術の塔が一番明るかったりする。

「武術の塔はこっちです」

朔耶は学院内をキョロキョロ観察しながらフレイに連れられて武術の塔の二階、実戦形式の訓練場にやって来た。
学生以外の見学の申し出は塔の入り口での手続きが必要なのだが、ここで講師をした事もあるフレイと王室特別査察官の朔耶は顔パスで通された。そんな部分でちょっぴりリッチな気分に浸れる庶民な朔耶だったりする。

「……ん」

ぼんやりした意識で辺りを見渡そうとして身体が動かせない事に気付き、意識を失う寸前の事を思い出したエルディネイアは一気に目を覚ました。

「んん……っ」

薄暗い倉庫のような場所に両手を後ろ手に縛られ、足も揃えて縛られている上に猿轡まで噛まされて埃っぽい床に転がされている。
エルディネイアは学院内から自分を誘拐するような相手が思い浮かばず、犯人の狙いも目星も付けられない事に苛立つ事で不安な気持ちを抑え付けようとしていた。

『まったく……今日は厄日だわっ』

朝から別の意味で度肝を抜くような行動をする特別査察官殿に疲

れさせられたかと思えば、模擬戦前にその査察官殿の事で内密な話があるという呼び出しの手紙を自分の道具箱の中に見つけ、人気の無い指定の場所に行ってみると、そこで眠りの香と風の魔術に包まれて意識を失った。

手紙の内容には――自分は王宮に勤める官僚で最近王家に取り入っているサクヤという異国の少女に付いて、彼女が影で不穏な動きをしている事に気付いたが自分を含めて王宮に居る者は皆、彼女の魔術で監視されている為迂闊に動く事が出来ない。詳細を伝えたいので是非、御嬢様からランバルト公に伝えて欲しい――と、そんな事が書かれていた。

内容が内容なだけに冗談では済まされないという事もあって、エルディネイアはつい警戒を怠ってしまった。父の助けになれるかもしれない期待感と、疑う相手が魔術士であるという事も気持ちを逸らせた原因かもしれない。

結果、魔術に絡み取られてこの様だと思うと悔しくて涙が出そうになる。

――と、その時……近付いて来る何者かの足音に気付いてエルディネイアは身体を硬直させた。ギィッという木の軋む音がして薄暗い部屋にランプの揺れる明かりが差し込み、一般民風の服装を纏った二人の男が入ってきた。

「お？　起きてるぜ」

「香が足りなかったみてぇだな、まあいいや」

一人が背後に回ってエルディネイアを引き起こすと、もう一人が彼女の身体を弄り始める。

「っ！　んーー！」

「はいはい、暴れない暴れない」
「別になんもしやしねぇよお嬢さん……と、あったあった」

恐怖よりも羞恥と怒りで真っ赤になって暴れようとするエルディネイアの懐からサクヤ印のライターを見つけ出した男は、それを奪うとエルディネイアを再び床に転がす。

「ま、夜になったら相手してやるよ」
「けははは……公爵家の御嬢様かぁ、楽しみだなおいっ」

そんな事を話しながら部屋を出て行く二人の男を、エルディネイアは転がされた時に打ち付けた肘の痛みも忘れたように睨み付けていた。

模擬戦が行われている会場の一角で、眉を顰めて話し合っている数人の男女の姿があった。彼等は団体戦に出場する予定のメンバーなのだが、リーダーである女生徒の一人が未だ姿を現さない為、一体どうすれば良いのかと意見を出し合っていた。

「ネイアが来ないなんて、今まで一度も無かったのに……」
「誰も何も連絡を受けていないのか？」
「うん……朝、控え室に居たのは見たけど、その後ふらっと出て行ったまま戻って来ないのよ」
「困りましたわね……」

今日は棄権になるかもしれないという暗い雰囲気の彼等に、一般の見学者らしき人物が声を掛けて来た。

「あの～ルディ……、エルディネイアさんは何処にいるか知りませんかー？」

「周りの人に聞くと、皆さんを紹介されたのですが」

彼等が振り返ると、そこには光沢のある赤いコートにズボン姿で黒髪に黒い瞳を持った異国風の少女と、赤毛の魔術士の装いをした若い女性の二人連れが立っていた。

最近の噂で聞いた事がある王女の客人という人物像を彷彿させる姿だったが、まさかそんな御仁がこんな場所に現れる筈も無いと思った彼等は極普通に二人に応対した。

「それが、朝から居ないんですよ」

「私達も探してたんですが……」

「模擬戦に遅れて来るなんて事は今まで無かったんですけどね」

「一体何処へ行ってしまわれたのやら……」

朔耶とフレイは顔を見合わせる。今朝エルディネイアと挨拶を交わした時は特に変わった様子も感じられなかったし、彼等の話では学院には来ていたと言う。

「……ん～」

「サクヤ様？」

「なんだろう？　……なんか、嫌な感じがする」

漠然としたモノだが、黒っぽい塊のような粒が一筋、ざらざらと蛇行しながら流れているようなイメージが思い浮かび、朔耶はその

意味を掴みかねて嫌な予感を感じていた。
そうこうしている内にも模擬戦は進んで行き、実戦さながらの魔術が飛び交い、剣を打ち合う学生達の激しい戦いは観客を沸かせている。エルディネイアのチームメンバー達は誰か代役を立てられないかと模索していた。

派手な模擬戦にも興味のあった朔耶だったが、勘に引っかかる嫌な感じが気になって一端塔の外に出ると、自分の意識の奥に居る精霊に語りかけてみる。精霊からの信号を手繰り寄せて、嫌な感じが何を訴えているのかを探った。
黒い筋が城に向かって流れ、靄となってフレグンスの国を包んでいく。靄の発生源ははっきりとはイメージ出来ないが、学院と、それに城の近く、上流区に点々と浮かんでいるようなイメージが浮んだ。

「……これは……人の悪意……？　……黒いナイフ……待ち受ける破滅……罠……」

黒い瞳が虚ろ気に、この世ならざるモノを視ているような深い光を携え、神託のように紡ぎ出される言葉の断片。何処か神懸かった空気を纏った朔耶をフレイは固唾を呑んで見守った。
やがてゆっくりと息を吐きながらぎゅっと目を閉じ、そしてゆっくりとその目が開かれた時には、もう普段の朔耶に戻っていた。

「ふぅ～～～……くらくらする」
「だ、大丈夫ですかサクヤ様。今のは一体？」
「よく分かんない……けど、なんか良くない事が起きてるっぽい。……フレイ」

朔耶はフレイに一度レイスと合流して城で何か変わった事が起き

ていないか調べて貰うよう頼んだ。

「サクヤ様は？」

「あたしはもうちょっと学院にいるよ、なんだかここにも何かありそうな感じがするし」

「でも、それではサクヤ様の警護が……」

「大～丈夫だって、電撃も意識して気合で出せるようになったんだから」

渋るフレイを『とにかく急いで行動するように』と送り出した朔耶は、学院の建物内に戻る前にレティレスティアに交感を繋いだ。

『やほーレティ？』

――サクヤ？　どうしました？――

『ちょっと頼みがあるんだけど、フレイとレイスが城に行くと思うんで、あたしの用事で来たって事にして自由に動けるようにして貰えるかな？』

――アクレイア家の方ですか？　それは構いませんが……何かあったのですか？――

『うん、まだちょっとよく分かんないんだけど……なにか良くない事が起きてる感じがしたの』

――！っ　分かりました、神殿の聖騎士と近衛も動かしましょうか？――

世界と繋がっているとも言える朔耶が不穏な空気を感じたとなれば、それは只事ではないと理解しているレティレスティアは、朔耶の求めに応じる為に自分の動かせる最大限の戦力を提示したが、あまり大事（おおごと）にせず水面下で動いた方がよいという朔耶の言に従い、間

もなく城にやって来るであろうアクレイア家の者に城内で比較的自由な行動が出来るよう手配する事を約束した。

――気をつけて下さいね、サクヤ――

『うん、じゃあそっちは宜しくね～』

レティレスティアとの交感を解いた朔耶は、試しにエルディネイアの意識を探してみたが、意識の糸がそれらしき相手に触れる事は無かった。

『やっぱ相手にも交感能力とかが無いと駄目か～』

勘に引っかかる嫌な感じは残っているものの、別の流れがそれを押し返そうとするような感覚も被さるように感じたので、良くない事もきっと何とかなる方向に動いてると信じて、朔耶は学院の塔に入って行った。

「まいったなぁ……何処だろうここは」

妙な壁の仕掛けから迷い込んでしまった地下通路を学院生の制服を来た青年が当所も無く、ぼやきながら歩いている。学生寮に住む学生の中には学院内の施設で働いて収入を得ている者も多い。

殆どは学費の足しにした小遣い稼ぎ程度のモノで、彼のように学費のみならずその他丸々生活費を稼いで日々を過ごしているような

学生は少数だ。

王都に実家がある者や、ティルファやキトからの留学生ならば親からの仕送りも期待できるが、彼のように辺境の片田舎から身一つでやって来た者には親の仕送り等ある筈も無く、寧ろ王都で稼いだ一部を親の住む田舎の村に送金するような立場にある。

そんな訳で彼、サムズ国の辺境アマガ村から王都に出てきたドーソンは入学初日から中央塔施設で一番給金の良い仕事を斡旋して貰い、地下倉庫への穀物の搬入という誰もが『しんどい』と言って避ける仕事をこなしていたのだが。

「大体なんであんな場所にあんな仕掛けがあるんだ……」

昼食前の搬入で奥に袋を詰めて行き、さて一息つこうかと思った所で、壁の隅に何か光るモノを見つけた。

倉庫の中は薄暗くてよく見えなかったので、懐に仕舞っておいた朔耶の銘が入ったライターを灯して壁の隅を照らそうとした瞬間、ゴトッと音がしてドーソンの立っている場所が横に動き、壁の一部が開いてその中に滑り込んだ。

細い通路のような場所に出ると、倉庫と繋がっていた穴は再び壁が動いて閉じてしまった。どうやら倉庫の壁の一部に光で反応する仕掛けがあったらしく、この通路に繋がる抜け穴を起動させてしまったらしい。

倉庫の床の一部と一緒に移動して来た石畳の上には、女物のブローチが落ちていた。それが倉庫の隅で見つけた光るモノの正体だった。

そしてこの場所は一方通行らしく、倉庫に戻る為の仕掛けは見付

からなかったので、外に出るべくこの細くて古ぼけた感じの通路をライターの灯りを頼りに歩き進んでいたのだ。

「おや？　随分と古い扉だなぁ」

木製の表面がささくれてボロボロになっている扉が、壁に埋め込まれるような形でポツンと閉じているのを見つけたドーソンは。出口の階段でも現れる事を期待しながら扉を開いた。

どの位の時間が過ぎたのか、拘束を自力で解く事を諦めて体力の温存に務めていたエルディネイアは近付いて来る足音に耳を欹てる。今度は一人のようだ。

あの二人組みの片方だろうか、それともまた別の者だろうかと考えを巡らせていた彼女は、空腹と精神的な疲労からかなりの時間が経過しているように感じられ、あの二人組みの言葉を思い出して肩を震わせた。『夜になったら相手してやる』

「！っ」

ギィっと軋む音をたてて扉が開き、灯りを翳して入って来た人物を見上げるエルディネイア。あの二人組みでは無さそうだったが、手に持っているのは例のライターだ。

自分から奪ったライターを持っているという事は、あの二人の仲間という事だ。という結論に至ったエルディネイアは這う様にして

身を起こすと部屋の隅に逃れようと身を捩った。

その人物はそんな彼女を観て楽しんでいるのか、黙ってその様をじっと見つめていたかと思うと、足早に近付いて来てその細い肩に手を掛けた。

「っ！！　んーー！！　んんーーっ！！」

「し、静かに……今、解いてあげるからっ」

猿轡でくぐもった悲鳴を上げていたエルディネイアは、思い掛けない言葉にピクリと顔を上げると、震えながら相手の姿を確認した。

大学院の制服を着た若い男、学院の生徒のようだったが、顔は知らないので貴族ではないのだろう。よく見ると彼が持っているライターは自分の持ってたモノと少し違っていた。

口を覆っていた布とその下の猿轡を外され、ようやくまともな呼吸が出来るようになったエルディネイアだったが、長時間こんなモノを噛まされていたのだ。

布にも猿轡にも唾液がベッタリと付着しており、頬や顎にも光を照り変えす筋が出来てしまっていて、それを拭おうにも両手は後ろ手で縛られている。

誰だかは知らないが助けに来てくれたのなら礼を言わなければと思うものの、エルディネイアはこんな姿を見ず知らずの男性に見られる事が恥ずかしくて顔を上げられないでいた。

そんな気持ちを知ってか知らずか、彼は学生服のポケットからハンカチを取り出して頬と顎を優しく拭いてくれる。

「あ、ありがとう……」

エルディネイアはそこでようやく礼を言う事が出来た。呟くような小さな声だったが、彼はにっこり笑って頷いた。

「いやあ、女性には優しくするのが当然。それにしても……なんでまたこんな所でこんな姿に？」

「わ、私……私にもよく分かりませんわ……」

今度は手際よく腕と足の拘束を解いて行く。エルディネイアは本当に助けが来たんだと実感して内心ホッとしていた。

「あー……別にこういう遊戯をしていた、って訳じゃない、よね？」

「！っ　し、失礼な事言わないでっ！」

「ご、ごめんよ」

怒りと羞恥で顔を真っ赤にして怒鳴るエルディネイア。彼女も貴族達の中には聊か変わった嗜好を持つ人が居るという事は知識では知っている。そんなモノと確認とはいえ並べ見られるなど、失礼極まりない！　と怒り心頭、羞恥半分で立ち上がる。

「所で、ここは何処？」

「中央塔の地下だと思うんだけど、随分歩いたからねぇ」

「学院の地下なの！？　出口は何処？」

「僕にもさっぱり、通路は一本道だったからここを出て右に進めば何処かに出られるんじゃないかなぁ」

はっきりしない言葉にエルディネイアはムッと男子生徒を睨みつける。

「何よそれっ　貴方何処から入って来たのよ」

「地下の倉庫からだよ、変な仕掛けがあってさあ……あ、これを見

つけた時にね」
「あ……私のブローチ」
「ありゃ、君のだったのかい？　それじゃあはい、返すよ」

ブローチを受け取りながらエルディネイアは考える。地下の倉庫に落ちていたと男子生徒は言った。
という事は、自分は気を失った後、地下の倉庫に運ばれてその仕掛けを通って此処に連れて来られたという事になるが、あの時間なら地下の入り口付近には作業をする搬入業者が居た筈。

『つまり、搬入業者の中に私を運んだ者が居る？』

部屋の中を見渡し、積まれている古い机や椅子から手頃なモノをひっぱり出したエルディネイアは、それを床に叩きつけて砕くと椅子の足部分を拾って木刀代わりにする。

「貴方も何か武装なさい、奴等が戻って来る前にここを出るわよ」
「奴等って？」
「私を攫ってここに監禁した連中よ」
「ええ！　君は、攫われていたのかい！？」

何を今更という表情でジト目を向けるエルディネイア。男子生徒は『そいつは事件だ』等と言いながら砕けた椅子からエルディネイアと同じ様に足部分を拾い上げた。

「首尾は？」
「手紙は届いたのを確認しました。そろそろランバルト公にも渡ったかと」
それを聞いて頷いた彼は、術の掛かった触媒の片割れを懐に仕舞って立ち上がる。
「よし……では、行って来る。後の処理は任せたぞ」
「お任せを……」
魔力を増幅する『発掘品』を装備し、屋敷を後にした彼は城に向かうよう御者に告げて馬車に乗り込んだ。この謀が上手く行けば、フレグンス国内では王に次ぐ権力を手にする事が出来るだろう。
カイゼル王の片腕として信頼を賜り、今尚強い影響力を持つランバルト公は祖国の裏切り者として討たれる。それにより公を支持したあの異国の娘も、あの娘を国に招いた王女や娘を信用した王妃共々信用を失墜し、政務への発言力は失われる筈だ。
異国の娘に組していた貴族達もそれを機に根こそぎ封じ込める事で邪魔者は一掃出来る。特に没落アクレイア家にはトドメになるだろう。門閥家の枠が空くので後釜も考えておかねばならない。
「さて、何処の家が良かったかな……」
城に向う馬車の中で、近い将来の栄光に思いを馳せながら、彼は一人ほくそ笑んだ。

「……ふむ」
「旦那様……」

ランバルト公は自室の机の上に広げられた手紙と、同封されていた黒いナイフ、それに愛娘に譲った魔力石ライターに眼を落とし、腕組みをしてくぐもった呻きを一つ漏らした。
ナイフは帝国の紋章の入った暗殺用のモノで、手紙にはある人物をこれで殺害するようにと綴られている。娘の命と引き換えに――という脅迫状だった。

――令嬢は我々が預かっている。期限は明後日以内とする。暗殺が実行されない場合、一日起きに令嬢の一部をお返ししよう。
――最初は足の指を一本ずつ、次は手の指を一本ずつ、次は耳を片方ずつ、その次は眼を片方ずつ、その次は乳房を片方ずつ。
――鼻を削ぎ落とし、舌を切り取って尚実行されなかった場合、公の忠誠を称え、四肢を頂いて世継ぎと共にお返ししよう。

悪魔のような内容の手紙に、ランバルト公に仕える執事は怒りに身を震わせながらも主を気遣い、如何に対処なさいますかと静かに問う。
ランバルト公は徐に黒いナイフを手に取り、じっと見詰める。毒や呪いの類は付与されていない普通の、黒塗りの刃を持ったナイフだった。

「期限までに捜索の手は尽くす、信頼出来る者にネイアの足取りを追わせよ」
「畏まりました」

執事は礼をして部屋を後にし、ランバルト公は黒いナイフを一瞥して懐に仕舞うと、侍女を呼んで城に向う準備を始めた。

「それで、サクヤは何と？」
「サクヤ様は城で何か変わった事はないか調べて欲しいと」
「ふむ……悪意に黒いナイフ、待ち受ける破滅と罠か……」
「サクヤ様には、予知の才もあるのでしょうか？」

レイスは城に向う馬車の中でフレイの話を聞きながら考えていた。サクヤの勘の鋭さは確かに予知の類の域だと言えたが、恐らくは人の悪意にかなり鋭敏な感覚を持っているのかもしれないと。

「いや……悪意に限らずか、大きな流れを感じ取る慧眼の持ち主……」
「レイスさま？」

フレイの問いには応えず、レイスは防壁に囲まれた城を見上げて眼を細めた。つい数日前、大型馬車の中で言った朔耶の言葉が思い出される。『そういうモノ程破る手立てが見つかった時は脆いんだけどね』

『それは、何も防壁や城壁に限ったモノではないという事か……』

魔術によって常勝を誇ったアクレイア家が魔術によって敗北し、

没落へ至らしめられた事実。
証拠は掴め無くとも確信しているコースティン家の不正。派閥という身内を切り崩されての衰退と考えるならば、由緒正しきアクレイア家に強固な団結有りと侮った事が隙に付け入られる原因だった。
内側からの崩壊はどんな強国であっても集団であっても、確実に破滅に向う滅びの序曲だ。

「待ち受ける破滅、罠、か……」

レイスは何時もの微笑の下に隠した表情を引き締めると、フレイを伴って馬車を降りた。

「何かあったんですか？」

朔耶は中央塔の階段付近で困ったような表情で話し込む学院の職員らしき数人に話し掛けた。
彼等は最初、学院生でもなく模擬戦の一般見学者にしては目立つ格好をした朔耶に怪訝な顔を向けたが、王室特別査察官の印を見せると態度が豹変した。が、想定していた事なので朔耶は気に留めず話を促した。

「いやあ大した事じゃありませんよ、へぇ。仕事を頼んだ生徒が途中で居なくなっちゃったもんで、困ったなぁって話していた所でして、へぇ」
「つい先日に田舎から出てきたらしい青年でしてね、中々働き者で

仕事も手を抜くような事は無かったんですが……やっぱり流石にこの仕事はキツかったのかなぁ」

「ただねぇ、確かに倉庫に居た筈なんだけど、忽然と居なくなっちまったんだよねぇ」

勘に、というよりも思い当たるキーワードが有りまくった朔耶はその生徒の名前を尋ねて見ると――

「へぇ、ドーソンっていう子なんですわ」

「またドーソンかっ！」

「え、あの、……彼は何か査察官様に不敬でも？」

「ううん、ちょっと言ってみただけ。　知り合いだから安心して」

ドーソンが作業をしていたという倉庫に案内して貰った朔耶は、天井近くまで積まれた穀物の袋や、魔力石の入った袋らしきモノを見て回る。結構広い地下倉庫は壁に呪文が刻まれていて、倉庫内の温度を一定に保っているそうだ。

何時もここで搬入の作業を終えた後、入り口で待っている職員と一緒に学院食堂で昼食を摂るのが日課になっていたのだが、何時まで経っても上がって来ないドーソンを呼びに職員が倉庫に下りてみると、何時の間にか居なくなってしまっていたとの事。

「ドーソンが作業してたのは？」

「へぇ、あそこの袋でさぁ、ちゃんと積み上げられてるみたいでして、へぇ」

朔耶はその周囲を見渡し、しゃがんで床を眺めると、床に這わすようにフラッシュライトを点灯する。案内の職員が驚いて感嘆の声を上げたが、気にせず朔耶は零れた粉や埃が積もった床を注意深く観察した。

強烈なライトを当てられ浮かんで来たのは複数の足跡やモノを引き摺った跡などだ。ここで作業をした人達のモノらしく、足跡の上に埃が積もり、さらに別の足跡がその上に付くなどの多重化した痕跡が見受けられた。

ちょっと掃除した方がいいんじゃないかと思いつつも、比較的新しい足跡を追ってみると、壁の隅辺りで不自然に痕跡の途切れている箇所があった。その周辺を照らした瞬間――

「！っ」
「ひぇ！？」

ゴトッと音がして壁が開き、床の一部が横に動いて開いた壁の向こうに吸い込まれていった。

そして入れ替わるように別の床が滑り出して来ると、開いていた壁は元通りになった。滑り出して来た床には不自然に途切れていた痕跡とぴったり一致する足跡が残されていた。

「な、なんですかこれは！　こんな仕掛けが倉庫にあったなんて！」
「……職員さん、この倉庫、暫らく立ち入り禁止にして貰えます？　それから腕の立つ護衛を二人ほど貸して下さい、あとランプと水と携帯食も出来れば用意して下さい」
「え、は、はいっ　直ぐに手配します」

慌てて倉庫から飛び出して行く職員を見送りながら、朔耶はレティレスティアに再び交感で繋ぐ。

――サクヤ、何かありましたか？――
『なんか学院の倉庫に仕掛けがあったよ、隠し通路みたいなのが。

あと、生徒二人が行方不明、片方は行方不明なのかどうか分かんないけど、ルディなんだけどね』

――ネイアさんが？――

『うん、朝から急に居なくなったって話。もう片方はあたしの知り合いで、こっちは多分見つけた仕掛けが関係してると思うけど』

――先程の、サクヤが感じた良くない事に関係する事ですか？――

『どうだろうね、まだ分かんないけど何か引っかかる感じはしてるんだわ』

革鎧と尺の長い棒で軽く武装した護衛役の職員がやって来て挨拶を向けて来たので朔耶は頷いて応えた。彼等を呼んで来た先程の職員から魔術式のランプと水筒や携帯食の入った袋を受け取り、仕掛けのある壁の近くに移動する。

――サクヤが引っかかりを感じるのなら、恐らく関連している事だと思いますわ――

『かもね、今からちょっとこの仕掛けの先を探索してこようと思って、一応報告入れとくよ』

――無理はなさらないで下さいね？　危険があるようでしたら、やはり近衛を送りましょうか？――

『んーそうだね、但し内密にこっそりね。二人かそこらで、学院に来ても変に思われない感じで』

――分かりました、では臨時講師という名目で送りましょう――

『うん、宜しくねー』

交感を解き、ランプを灯して護衛の二人を振り返る。

「え～、初めまして　王室特別査察官の朔耶です。お二人にはこれから、この壁の仕掛けの向こう側の探索に付いて来て貰います。目的は倉庫から居なくなった生徒の捜索、単なる迷子探しで終われば それに越した事はありませんが、何らかの事件に巻き込まれている可能性もあるので十分注意して下さい。では、護衛の方　宜しくお願いします」

丁寧な挨拶と目的の詳細を告げられ、王室直属の官僚に頭を下げられての護衛依頼に、護衛役の二人は思わず恐縮して同じ様に頭を下げる。

「んじゃ、行ってみようー」

一転して軽い調子になった朔耶に目を白黒させられつつ、護衛役の二人は指定された場所に立った。

朔耶も二人の間に密着するように立つと、三人固まった状態でフラッシュライトを点灯して壁の一部を照らす。ゴトッと音がして仕掛けが作動した。

転ばないように踏ん張りながら開いた壁の中に運ばれて行くと、古ぼけた感じの細長い通路に出た。ゴトンゴトンと壁が閉じて倉庫と繋がった穴は跡形もなく閉じる。

「これは……随分と古いようですな」

「何かの抜け道、でしょうか……」

「後で学院関係者に詳しい話でも聞いてみましょ。多分、元々あった古い建物の上に学院を建てたとかそんな所じゃないかな」

あり得る事だと頷く二人の護衛と共に、ランプを片手に通路を進

む。通路は倉庫の壁から出て右側は少し行くと行き止まりになっていた。出てきた時も左側を正面に見て出てきたので、進む方向は此方であっているのだろう。

「ていうか、一本道なんだよね」

「僅かに円を描く角度が付いていますな、巨大な円形の通路なのかもしれません」

「勾配は感じられませんので、何処かに地上と繋がる階段か縦穴があるかと思われます」

ふむふむと、中々為になる情報を上げてくれる二人の護衛の話に耳を傾けながら狭い通路の前後を守られて進む朔耶は、倉庫の時と同じく通路の足跡に注意を払っていた。ここにも複数の比較的新しい足跡が残っている。

「……みた感じ三人なんだよね。一人はドーソンとして、後二人分の足跡、どっちも男物よね～これ」

29話：霧を裂く光

「んん～～？」
「どうなさいました？　査察官殿」
「足跡が一つ増えてるね」

只管続く通路を進んでいた朔耶と護衛の二人は、右側の壁に埋め込まれたような古い扉がポツンと閉じてるのを発見し、護衛の片方が中の様子を窺おうとした時、朔耶が通路の足跡が増えている事に気付いたのだ。

「査察官殿、これを！」

扉の中を探っていた護衛に呼ばれて部屋に入ると、ベルト付きの縄に短い棒状の何かの器具と布切れ、壊れた家具等が散乱していた。
壊れた家具はかなり古いもののようだが、床に叩きつけられたように転がっている椅子の残骸は、その折れた木片の断面からみて極最近、もしかしたらほんの数刻前に破壊されたもののように内側のささくれ立って剥き出しになった部分には僅かに木の瑞々しさが残っていた。

「なんだろうね、これは」
「うーむ……見た所、拘束具のようですな……ん？　こっちの布と猿轡には若干の湿り気があります。それに香水のような匂いもしますな」

椅子の残骸を弄っていた朔耶は、椅子の足が二本足りない事に気付いた。更にライトでくまなく床を調べた結果、金髪らしき髪の毛を何本か発見した。その髪は縦巻きにカールしている。

「この髪……まさかルディ？」

「しかし、一体何処まで続いてるんだろうねぇ　この通路は」

「しっ　静かになさい！　奴等に気付かれたらどうするの」

「え、でも灯りをつけてる時点で……」

じろりっと睨まれて口を噤むドーソン。ライターの灯りを翳して前を行くドーソンの背に隠れるようにして歩くエルディネイアは、椅子の足を構えて緊張した様子で通路の先を見詰めていた。

「そんなに力んでたら疲れるよ？」

「貴方は緊張感が無さ過ぎるのよっ」

……オォーィ

「っ！　い、今何か聞こえませんでした？」

「風鳴りじゃないかなぁ、多分。　こういう狭い通路じゃあよくある事だよ」

「……」

なんでこんなに飄々としてられるのかしらと、エルディネイアは内心でぶつぶつと文句を垂れていた。

そもそも何故この男は公爵家令嬢である自分と対等に話しているのか、学院の生徒で自分の事を知らない者はいない筈。授業中の講師でさえ自分には敬意を払っていると言うのに――

そんな事を思いながら、エルディネイアは男子生徒を観察した。

『なんだか冴えない感じですわね……特に凛々しくも無ければ知的でもない、妙に貴族張った態度をとる割りに平民丸出しの歩き方……優雅さの欠片もありませんわ』

倉庫での作業中にこの地下通路への隠し扉をみつけたと聞いていたエルディネイアは、彼は平民学生の中でもかなり貧しい勤労学生なのだろうと当りをつけた。

何れにせよ、彼のお蔭で拘束から解かれたのだ、無事に此処を脱出したなら褒美の一つでもとらせてあげようと思うのだった。

「おや？　終点かな？」

「え？」

男子生徒の声にエルディネイアが視線を戻すと、確かに通路の先は壁になっていた。そして突き当たりの右側の壁に階段らしき段差が見える。

古ぼけた階段の先を見上げると、かなり高い場所から微かに光が射し込んでいるのが見えた。

「外だわ！」

「ちょっと待った」

喜び勇んで階段を駆け上がろうとするエルディネイアを制止する

ドーソン。一瞬『なによ』という視線を向けるエルディネイアだったが、直ぐに自身の失態に気付いて気まずそうに顔を背ける。
道中油断するなと言っていたのは自分だ、無思慮に外に飛び出してそこに連中がいたらどうするのか、と。

「ちょっと目を瞑ってくれるかな？」

ドーソンはそんな自己嫌悪に駆られているエルディネイアをきょとんとさせるような事を言って自らも目を閉じている。何をするつもりだろう？と不思議に思ったものの、今の気まずさもあってエルディネイアは素直に目を閉じた。

「閉じましてよ」
「ん、もういいよ」

言われて目を開ければ、ライターを懐に仕舞いこんでいる男子生徒の姿。一体何？という表情を向けるエルディネイアに、彼は笑いながら言った。

「急に灯を消したら目が慣れるのに時間が掛かるからね、今ならほら、暗いけどあの光でも十分見えるだろう？」

階段の先の光に目を向ける男子生徒。確かに、ライターの灯りとは比べるまでも無く薄暗いが、僅かに差し込む光でも階段がしっかり見えている。エルディネイアは少し感心した気持ちで彼を見た。
男子生徒は階段の先を見詰めながら木刀代わりの椅子の足を構えると、さっきまでの緊張感の無さが嘘のように真剣な表情で、ゆっくりと階段上り始めた。
その意外に広い肩越しに見える冴えない筈の男の顔に、エルディネイアは少し鼓動が早くなる気がしたのだった。

「それでは、イーリスと共に行動して下さい」
「分かりました、暫らく宜しくお願いします」

城に着いたレイスは待ち構えていたように現れたレティレスティアと事情を話し合い、近衛騎士団長のイーリスと行動を共にする事で城の中を自由に動き回れるよう取計らって貰っていた。
ついでにもう一つ、城内に特殊な魔術の撒布許可を申請するレイス。

「許可します。他に必要な事はありますか？」
「いえ、後は僕の方で何とかします」

そう言って一礼をし、フレイを伴って城の中の散策に出るレイス。
イーリスもレティレスティアに礼をしてその後に続いた。
レイスは城の廊下を歩きながら周囲に人が居ない事を確認すると、短く詠唱を唱えて各部屋や廊下の隅などの至る所に『仕掛け』を施して行く。

「それは？」
「音を届ける術ですよ、仕掛けた場所で誰かが会話をしたり、何か音を立てれば離れた場所からそれを察知する事が出来ます」

イーリスの問いに答えながら、めぼしい場所を探しては術を仕掛けるレイス。効果は数刻も持てば良い方なので術の掛け直しをしな

がら城内を回っていれば、常に城全体の情報を把握する事が出来る。

「中々便利な術だな……歩哨でも使えそうだ」

「実際そういう使い方をしてましたからね」

城内を粗方回り終えたレイス達は術の補強と巡回を兼ねて最初の地点に移動を始めた。

その間、レイスは術を仕掛けた各地点から送られてくる音に意識を集中する。そうして階を移動しようと階段の近くまで来た所で、ランバルト公と出くわした。

「こんにちは公爵殿、今から御勤めですか？」

「おおう、アクレイアの子息殿か。　今日は城に用事かね？」

ランバルト公は貫禄ある体躯に温和な表情で、一線を退いた初老の身ながら衰えを感じさせない眼光を携えてレイス達の挨拶に答えた。

「ええ、少し所用がありまして」

「そうかね、今度またルィバンス殿とも酒でも酌み交わしたいものだ」

「父も喜びますよ」

二言三言軽く言葉を交わし、うむうむと目を細めて頷くランバルト公は何処か懐かしそうな感慨と憂いを帯びた表情を浮かべていた。かつては戦場でレイスの父ルィバンス伯とも肩を並べて互いに助け助けられ戦った仲でもあるのだ。ランバルト公が魔術に対して理解があるのはルィバンス伯あっての事とも言える。

『それではまた』と礼をして立ち去ろうとしたレイス達に、ランバルト公は思い出したように尋ねた。

「おおそうだ、所で娘を見なかったかね？」
「エルディネイア様ですか？　今の時間であれば大学院の方に行かれているのでは？」
「いや、それが学院には行っていないようでな……さてはて、何処をほっつき歩いているのやら」

困ったように苦笑するランバルト公だったが、レイスはその眼の奥に探るような光を感じ取った。

「……フレイ、朝はサクヤと共に学院に行ったのだったな？」
「はい、エルディネイア様のご友人の方々の話では確かに学院には来ていたと……その後、姿を見なくなったと聞きました」

ランバルト公の探りに対し、レイスは此方の持つ情報を示して反応を窺った。細められたランバルト公の瞳は何らかの結論を出そうとしている様子が窺える。やがてその瞳から探る色が消え、温かい微笑みに変わる。

「ふむ、そうか」

ランバルト公が去った後、レイスはイーリスを交えてフレイに学院での事を訊き直し、ランバルト公がエルディネイア嬢の行方不明を知っていたらしき事について話し合った。

現時点で学院の一部の者以外にエルディネイア嬢の行方不明を知る者は、学院に行った朔耶とフレイ、フレイから知らせを受けたレイス、朔耶から直接知らされたレティレスティアと、事情を話されたイーリスの五人だけの筈。

事件性も明らかになっていない今の時点で学院の誰かがランバル

ト公に伝えたとも考え難い。しかもランバルト公は令嬢が学院に行っていないという間違った情報を口にした。そこから得られる答えは――

「エルディネイア様の行方不明に関係のある人物からの情報、という所か」

「もしや、誘拐の類なのでは？　サクヤ様も不穏なモノ感じていらっしゃったようですし」

「大学院の中からか？　考え難いな……」

王都大学院は貴族の子息達も通う学院であるだけに警備もしっかりしている。女生徒一人とはいえ、誰にも気取られずに連れ出すのは決して簡単な事ではない。

「しかし、公爵殿が探りを入れて来た事が気になる。動向に注意した方がいいな」

レイスはランバルト公の去った方角に仕掛けた術からの『音』に、特に注意を傾ける事にした。

「これはこれは公爵殿、ご機嫌如何ですかな」

各官僚の執務室が並ぶ城の五階まで上がって来たランバルト公は、そこでフエルト卿に出くわした。今、最も顔を合わせたく無い相手と出会ってしまい、ランバルト公は若干気まずそうに舌打ちした。

脅迫状にあった暗殺の相手――フエルト伯爵を殺害せよ――。確かに、宮廷魔術士長を務めるフエルト卿が暗殺されれば帝国の魔術士部隊に対抗する術が著しく後退する。

それを狙っての事なのか、或いはフレグンス内部の権力闘争で帝国の名をダシに使ったのか。ランバルト公はその見極めも熟さなければならなかった。

「近頃は帝国の動向を探るのに手一杯ですな、厄介な事だ」
「そうですなぁ、帝国の間者はこの王都にどのくらい潜り込んでいるやら……成果が上がらないのにも参りますなぁ」

ある意味不景気な話題だと思いつつ、これも切実な問題であるなぁとランバルト公は溜め息混じりにフエルト卿に同意した。

「所で、御令嬢はお元気ですかな？」
「ん、うむ……まあ何時もと変わらんですな」
「あー……魔術士嫌いは相変わらずですか、いやはや手厳しい方ですからなぁ」

うちに息子がいれば是非懇意にして頂きたかった所ですのにと苦笑交じり冗談交じりに話すフエルト卿に、ランバルト公は『はやりフエルト卿は帝国に狙われている側か』とフレグンス内部の権力闘争説を下げた。

フエルト卿には息子や娘が居ない為、コースティン家は家督を継げる養子を迎えるか、フエルト卿が何処かの令嬢と婚姻を結び、世継ぎを儲けるかしなくては潰えてしまう。

家格は申し分無いので売り込むには絶好の門閥家でもあるのだから、内部の権力闘争で潰すよりも取り入る側が多い筈だ、と。

『となると、やはりネイアは王都に潜む帝国間者の手に落ちていると考えるべきか』

「それでは公爵殿、また後ほど」

「うむ」

フエルト卿は一礼をして自分の執務室に歩いて行った。それを見送り、溜め息を付くランバルト公。

『明後日まで、か……』

娘の無残な姿など想像もしたくない。だがフエルト卿を暗殺すれば、それで娘が無事に帰ってくる保障も無い。

第一、宮廷魔術士に就く要人を殺害して只で済む筈も無い。そして何より、こんな事件が王都で起きる事自体フレグンスの窮境を現しているようで暗澹とした気持ちになるランバルト公だった。

「どう？」

「誰もいないみたいだね……」

微かに光が射し込む隙間の開いた出口の『蓋』をそっと押し上げて周囲の様子を窺っていたドーソンがエルディネイアの囁くような問いに答える。

彼等が上って来た階段の先は井戸のような穴になっていて、古い木の蓋が乗せられているだけだった。蓋を除けて這い上がり、エルディネイアに手を貸して引っ張り上げると、ドーソンは改めて周囲を見渡した。

伸び放題の雑草、元は綺麗な花が咲き乱れていたであろう花壇の跡、今はモサモサした草が占領している。所々壁の崩れた廃館がぐるりと回りを囲んでいた。ここは何処かの古い館の中庭らしい。

「うーん、ここからじゃあ城も見えないし、何処に出たのか分からないねぇ」

「あそこから館の中に入れるようですわ、とにかく急いで外に出ましょう」

崩れた壁を指しながら言ったエルディネイアは、徐にしゃがみ込んだ男子生徒の姿に眉を顰めた。

「何をしてますの？」

「いや、ちょっと足跡をね……」

低い姿勢でじーっと館に続く雑草が伸び放題の庭を見ているドーソンは、獣道や動物の足跡を追う要領で人の歩いた痕跡を辿った。すると、足跡は崩れた壁との間を頻繁に往復しているのが分かった。エルディネイアの指した崩落部分だ。

「君を攫った連中と鉢合わせるかもしれない。別の入り口を探そう」

「え、あ、ちょっと……ま、待ちなさいよ！」

踏み均らされていない伸び放題の雑草の中に分け入って行く男子生徒を追い、少し躊躇しながらも彼の後ろに付いていくエルディネ

イア。
彼女は自分でもこの『冴えない風貌』の男に頼っている事を自覚して心中複雑な気分になりながらも、何故だか無性に懐かしい気持ちになるのを感じていた。

「それじゃあ、宜しくお願いしますね」
「お任せください、サクヤ殿」

拘束具を見つけた部屋から一端引き換えした朔耶は、最初の地点、壁を隔てて倉庫のある場所に戻って来ると、壁に向かって『おぉーい！』と大声で叫んで倉庫に居た人に合図を送り、仕掛けを起動して貰って倉庫内に戻った。
それから学院にやって来ていた近衛騎士団の騎士二人を呼んで、今度は彼等にも通路の探索に参加して貰ったのだ。前方を近衛の二人、後方を学院警備の二人に護られ、朔耶は早足に通路を進んでいた。

『レティ、近衛の人達二人と合流したよ』
――サクヤ、此方もアクレイア家の二人と事情を話し合いました、今はイーリスと共に城内を見回っているようです――
『そっか、何かあったら知らせてね』
――はい、ですが……私の力ではサクヤに呼び掛けが届かないかもしれません――

精霊と重なっている朔耶だからこそ、交感の深度や熟練度による

距離といった制約を無視して繋げる事が出来ているが、本来なら余程深く交感状態に入らなければ意識の糸を遠くまで伸ばす事は難しい。

『あ、そっか……じゃあ定期的にこっちから連絡入れるよ』

――はい、お願いしますね――

「交感をなさってたのですか？」

近衛騎士の一人が朔耶の様子を見てそう尋ねて来た。王族を専門に護っている近衛なだけにアルサレナ王妃やレティレスティア王女が精霊術を使う所も良く目にしており、交感状態にある事の見分けが付くようだ。

「よく分かったね、さすが近衛騎士っ」

ぽんぽんと肩を叩いてスキンシップを図る朔耶に、近衛騎士の二人は幾分狼狽して見せたが、直ぐに堅苦しい調子を崩してフレンドリーな対応になった。

「いやあ、噂通りの気さくな方ですねぇ」

「自分らは何時も王宮に詰めてますから、こういう任務は気が楽っすよ」

王宮勤めは息が詰まるからと、任務に呼び出された事を感謝してみせる二人に、朔耶はムッとした表情になって叱責する。

「バカモーーーン！　遊びじゃないんだっ　任務中に気を抜く奴があるかぁ！」

「！っ　も、申し訳ありません！」

「！っ　す、すみませんでしたぁっ！」

「……なーんてね」

思わず硬直する二人に悪戯っぽい笑みを向けながら片目を瞑って見せる朔耶は、叱責は冗談である事を告げて言葉を続ける。

「でも、ホントに気は抜かないでね？　正直、何が起きるか分かんないから」

「ハッ　気をつけます」

「にしても……サクヤ様、迫力あるっすね」

そんな調子で暗い通路を進む一行。近衛騎士の二人を顎で使う朔耶の姿に、学院警備兵の二人はフランクな雰囲気にも拘らず、エライ御仁の警護に付いたと緊張を隠せなかった。

雑草に覆われた館の一階の窓から建物内に侵入した二人は、内装もボロボロに朽ちた薄暗い部屋の中で息を殺して館内の様子を窺っていた。この部屋に侵入を果たした時、部屋の外で物音がしたので扉から館の中を覗くと、そこに五～六人の男が屯しているのを見つけたのだ。

内二人はエルディネイアが地下で見た二人である事を確認し、他に魔術士らしきローブを纏った男二人に、後は声だけしか確認出来なかった者が一人か二人居る。一人は甘ったるい声の女だった。

もう一度館の外に出る事も考えたが窓枠も石の部分がかなりボロ

ボロになっていて、窓からの侵入の際に大きく亀裂が入ってしまい、下手に触ると崩れてしまう。出るに出られなくなってしまったのだ。

「いや～素直にあの穴から入っとけば良かったかな？」

「もうっ　今更何仰ってますの！」

部屋の隅で寄り添い、二人は声を潜めて対策を話し合っていた。

この部屋は男達の屯する広間の真正面に位置し、扉の枠が歪んでいる為に少し開いた状態で固定されていて、それ故彼等も放置している部屋のようだ。彼等はこの廃屋に寝泊りしているらしく、時折、隣の部屋から『夜まで寝る』とか『そろそろ交替だ』とか聞こえていた。

「貴方の判断も強ち間違っていませんわ、あの穴から入れば気付かずに広間まで来て、連中に見つかっていたかもしれませんもの」

「そ、そうかな……ははは、僕の判断は良く見当違いだって言われてたから」

自信なさ気に笑って見せる男子生徒に、エルディネイアは何故だか哀しくなった。彼にはもっと自信を持って毅然としていて欲しい気がする。

「……もっと自信をお持ちなさいな、貴方は私を助け出した英雄ですのよ」

「英雄かぁ……」

鼓舞する励ましと知りつつも、ドーソンは彼女の心遣いが嬉しかった。同時に昔の、まだ小さな子供だった頃の事を思い出す。

「……英雄や勇者は大抵平民から出るモノ、か」

「えっ！」
「あああ、何でもないよ」

エルディネイアは思わず励ましてしまった男子生徒の口から零れた言葉に、心臓がドキリと跳ねるのを感じた。まだ小さな子供だった頃の事、遠い辺境の地で出会った男の子の言葉。他愛無い約束。

――だって、お話の英雄や勇者は大抵平民から出るじゃないか――
――貴方が英雄？　勇者ですって？　クスクスッ　いいわ、もしそうなれたら貴方のお嫁さんになってあげるわ――
――ほんとに？　じゃあ頑張って迎えにいくよ――

克明に思い出してしまい、エルディネイアは動揺に視線を彷徨わせる。

『ど、どうして急にあんな昔の事……こ、子供の頃の話ですわっ　今朝あんな夢を見たのがイケないのよっ　相手は平民よ平民！　第一この男は関係ありませんわっ！』

プルプルと首を振っておかしな考えを振り払う。きっとこんな非常事態に見舞われて気弱になっているせいだと、俯いてぶつぶつと自分を励ましているエルディネイアに、ドーソンは気分でも悪くなったのだろうかと心配して顔を覗き込んだ。

「どうしたんだい？　何処か具合でも？」
「っ！」

エルディネイアを気遣うように覗き込む男子生徒の心配気な表情が、あの日の男の子と重なる。『顔が近い！　顔が近いですわ、無礼者！』と心の中で叫びながらも顔が上気していくのを止められな

いでいた。

「気配が多いと思ったら、こんな所にネズミが居たのか」

「！？」

「！っ」

突然部屋の中に響いたネットリ絡みつくような声。冷や水を浴びせらたように飛び上がって振り返った二人の視線の先には、半開きの扉の隙間から黒いローブを纏った魔術士らしき男の顔がにぃっと哂って覗き込んでいた。

「み、見つかったわっ」

「窓から外へ！」

慌てて立ち上がった二人はボロボロの窓枠が崩れるままに外へと飛び出した。先に飛び降りたドーソンがエルディネイアに手を貸し、背丈程の草叢（くさむら）の中を掻き分けて館の壁沿いに移動する。

屯していた男達が別の窓や崩れた壁の穴から中庭に飛び出してくるのを横目に、草叢を隠れ蓑にしながら何処かに出口は無いかと館の壁を叩いてみるが、隠し扉のような仕掛けは見付からなかった。

「おーい、大人しく出てこーい」

「どうせ逃げられねーぞー」

ガサガサと、草叢を剣で突付きながら包囲を狭めて来る男達。エルディネイアとドーソンは息を潜めてじりじりと退がって行き、とうとう壁の隅にまで追い詰められた。

エルディネイアを庇うように彼女の前に立つドーソンの直ぐ目の

前で背高い草が揺れ、キラリと光を反射しながら飛び出して来る剣の切先にエルディネイアは思わず息を飲んだ。

ガツッという打撃音がして目の前の剣が弾かれる。ハッとなったエルディネイアの見たものは、椅子の足で剣の横面を打ち払った自分を守る男子生徒と、その衝撃で思わず剣を取り落す地下で見た二人組みの片割れの男。

「てっ　……このガキ！」

落ちた剣を拾おうと地面に手を伸ばすドーソン、その頭部に鉄槌を落とさんと組んだ両手を振り上げる男。エルディネイアは咄嗟に椅子の足を握り締めると、得意の『突撃の構え』から突きを繰り出した。

確かな手応えと共に、下顎を突き上げられた男が仰け反って後退る。剣を拾ったドーソンは起き上がり様に一閃、薙ぎ払ってみせた。

「ぎゃっ」

腹部を斬られた男は顎と脇腹を押さえてヨロヨロと草叢の向こうに逃げて行く。

「こっちだ！」

ドーソンはエルディネイアの手を引いて館の壁の崩れている方向へ走り出した。屯していた男達が中庭に出ている今なら館の中を通って外に出られるかもしれないと判断したのだ。

生い茂る草叢を飛び出すと、斬られた男の周りに集まっていた三人の男が一斉に振り向く。あの位置なら早々追い付けまいと、ドーソンは最初に見た崩れた壁の穴に向けて走った。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」
「!?」
「きゃあっ」

独り壁の穴近くに潜んでいた黒いローブの魔術士が風の魔法を放ち、ドーソンとエルディネイアは弾き飛ばされて地面に転がった。
すぐさま起き上がってエルディネイアを庇いつつ剣を構えるドーソンだったが、中庭に出ていた男達のうちの二人が既に背後から剣を向けていた。正面には黒いローブの魔術士、もう一人の魔術士は後方で負傷した男の治療に当たっている。
ゆっくりと壁際に下がり、背中にエルディネイアを庇うドーソン。弾き飛ばされて転がった時に切ったらしく、額からは血が一筋　流れていた。

いきなり仲間を一人斬られた事で警戒していた男達だったが、ドーソンの構えが素人そのものである事を見抜くと『素人のまぐれ当りか』と肩の力を抜いてじりじりと間合いを詰めて来る。
魔法を撃ち込めば直ぐに決着が付くのだが、彼等は暗黙の了解でそれをしなかった。

「さて、御令嬢は後で楽しむとして……コイツは何もんだ？　何処から迷い込んだんだ？」
「さぁーな、大方倉庫の仕掛けが誤作動でもしたんじゃないか？」

余裕の会話を交しながらさらに間合いを詰める。堪えきれなくなって飛び出して来た所を屑るのだ。何処まで詰められるか、何処まで堪えられるか、これは命を賭けたチキンレースだ。
尤も、彼等は素人相手に負ける気など更々無い。絶対的な狩る立場にあってこその『遊び』だ。勝負相手は獲物ではなく、肩を並べ

て獲物を追い詰める仲間である。賞品は公爵家令嬢で最初に遊ぶ権利という所であろうか。

そして、そんな余裕と遊び心は得てして身の破滅を招き易いモノでもある。

「奥の怪我人とローブの人は無視して近衛の二人は剣の二人組を！警備の二人はドーソンとルディを守って！」

突然響いた少女の声に全員が振り返ると、井戸の蓋を跳ね上げた体勢で淵に立ち、突撃を敢行する近衛騎士と学院警備兵に指示を出しながらエルディネイアとドーソンを追い詰めている二人組みを指差す黒髪に黒い瞳の異国の少女、朔耶の姿がそこにあった。

30話：多重構造

突然の乱入者に慌てた剣を持つ二人組みは、咄嗟にドーソンとエルディネイアを人質にしようと一歩踏み込んだ瞬間、唸りを上げて横切る剣の一閃に思わずたじろいだ。

どう見ても素人にしか見えず実際、剣に関しては素人のドーソンだが、この薙ぎ払いだけは矢鱈（やたら）と鋭い一撃を放つ。

そうして躊躇した僅かな間は、突撃する近衛騎士が接敵するのに十分な隙となった。剣の二人組みは近衛の剣に合わせる間も無く一瞬で叩き伏せられ、近衛騎士はそのまま二人組みを昏倒させて無力化すると、黒いローブの魔術士と対峙する。

学院警備兵はドーソンとエルディネイアを保護すると、長尺棒を構えて近衛騎士の後ろに下がった。そして朔耶は――

「うりゃうりゃー」

負傷した男の治癒を終えて乱入者に対峙しようとしていたもう片方の魔術士にその辺の石を投げ巻くって足止めしていた。

次々と放物線を描いて飛んで来る石に気を取られていると足元、脛や足の指辺りを正確に狙った石が時速１１５キロ程の勢いで投げつけられるので詠唱を行う暇も無く、魔術士は石飛礫を避けるのに精一杯だった。

「おのれ小娘がっ　調子に乗りおって！　――風よ集……のわあっ」

投げる石が無くなったのか、背中を見せた朔耶に『勝機！』とばかりに詠唱を始めた魔術士だったが、井戸に被せてあった木の蓋がぶっ飛んで来たので思わず仰け反って身を躱す。木の蓋は治療を終えたばかりの男に直撃して、男は失神した。

なんて物を投げつけて来るんだと振り返った魔術士の目前に、一気に距離を詰めて来た朔耶が飛び込んで来る。遠心力を使って井戸の蓋をぶん投げた朔耶はそれを追う様にダッシュを掛けていたのだ。紅い光沢のあるコートが翻り、黒髪が舞う。

「っ！　――か、風よ集いて……」

「い　な　ず　ま――」

魔術士の翳した手の表面に空気の渦が発生し、それが凝縮された風の塊となって撃ち出される前に。真っ白い閃光を纏った朔耶の右手が青白い軌跡を引いて弧を描いた。

「ビンターーーー！！」

パカァアン！！

「へぶぇ！！」

打ち下ろしの稲妻ビンタを叩き込まれた魔術士は身体を半回転させながら地面に沈んだ。

「うわぁ……あれは痛いというか、暫らく後を引くんだよなぁ……」

被験者ドーソンの呟きに、王の間で見た事のある近衛騎士の二人は『やっぱり凄い威力だ』と感嘆し、学院警備兵の二人は殆ど無詠唱で雷を発生させた朔耶の術に唖然として目を瞠っていた。

雷を具現化する術は幾つかあるが、何れも複数の属性を織り交ぜるか、一つの属性でもかなり長い詠唱で魔力を捏ね繰り回す工程が必要な程難しい術なのだ。

ただ一人、エルディネイアだけが別の事に気を取られてドーソンの横顔をポーーっと見上げていた。

「ちぃ……――風は集い土は舞う砂塵の壁となりて――」

黒いローブの魔術士は素早い詠唱で土煙の煙幕を張ると館の中に逃げ込んだ。警戒している近衛騎士の傍に朔耶がやって来る。

「追いますか？」

「んー……今は止めとこうかな。先にルディ達の無事を知らせるから、あの人達をお願いね」

朔耶は逃げた黒いローブの魔術士を追うのは止め、その存在と仲間の確保、此処で起きた出来事の報告を優先する選択をした。

「イーリス」

城内を巡回していたレイスとフレイ、イーリスの所に、急ぎ足で

やって来たレティレスティアが声を掛ける。

「レスティア姫、どうかされましたか？」

「サクヤから連絡がありました。　ネイアさんが見つかったそうです」

その急報に、レイスも術に集中させていた意識を引き戻す。

「何者かが組織的に行った犯行だったようです。現場に複数の一味を捕らえてあるそうですから、近衛の団員数名を向わせました」

レティレスティアの報告に、頷いて答えるイーリス。レイスは話を聞きながらも城内に仕掛けた術からの『音』にも耳を傾けていたので、受け答えは全てイーリスに任せる。

「令嬢にお怪我などは？」

「特に無いそうですわ。一緒にいた学院生が掠り傷を負ったそうですが、そちらも問題ないと聞きました」

「それは良かった。　首謀者は分かりますか？」

「現段階ではまだ何も。帝国の手の者なのか、内部の者なのか……」

表情に影が差すレティレスティアを気遣うように、そっと肩に触れるイーリス。レティレスティア自身も十数日前に御者の裏切りで攫われ掛けたのだ。朔耶が現れなければ帝国に連れ去られていた。

「そうですか……一応、ランバルト公にもお伝えしておきましょう」

レティレスティアは頷くと、朔耶からの報告の続きを語る。

「後、風と土を使う黒いローブの魔術士が一人逃走したそうです」

「分かりました、そちらは魔術士隊に動いて貰いましょう」

幸い今日はフエルト卿が執務室に詰めていると話すイーリスに同意を返しつつ、レティレスティアは黙って術に集中するレイスの様子を窺った。その視線の意味に気付いたレイスは

「大丈夫ですよ、公私は弁えています」

そう言って微笑んで見せた。

「お務めご苦労様です」

駆け付けて来た近衛騎士達を労いの言葉で迎える朔耶。廃屋の門の前には数珠繋ぎに縛られた四人の男達が座らされている。その内の一人である魔術士には直ちに術封じの枷が填められた。

朔耶と共に地下通路を通って来た近衛の二人は仲間の騎士に詳細を報告し、学院生のドーソンとエルディネイアは学院警備兵に護られながら学院から迎えの馬車が来るのを待っていた。

「ねえ～、あたしはどうーなんのよお？」

もう一人、扇情的な薄い衣を纏った妙齢の女が退屈そうに声を掛ける。彼女はエルディネイアを誘拐した者達の一味ではなく、偶々彼等に買われた春売り、所謂娼婦との事だった。

「あ～っと、ヴィヴィアンさんだっけ？　あなたにもあの連中の事で聞きたい事があるんで、騎士の人達と一緒に行って貰えるかな？」
「面倒ねぇ……あんた随分若いけど、何処かの令嬢？」

朔耶に対する不遜な態度を注意しようとする近衛騎士を『いいからいいから』と下がらせた朔耶は、護送用の馬車が来るまでヴィヴィアンの話し相手をする事にした。

「あたしは別に貴族じゃないから令嬢ってのも変かな～、役職上身分はそれっぽいけど」
「へ？　貴族でも無い人間がどうして騎士達を指揮してんのさ？　役職っつっても、此処じゃあキトの豪商だって只の平民扱いだよ？」
「一応、『王室特別査察官』って事になってます。　えっへん」

何と無く胸を張ってみた朔耶に、『王室！　査察官！？』と素っ頓狂な声を上げて驚くヴィヴィアン。彼女は改めてマジマジと朔耶を観察する。

「……こんなお子様が城の官僚……しかも貴族でも無いだなんて、いったい如何したんだろうねこの国は」
「こらそこっ　お子様言うな！」
「どう見たって子供じゃないのさ」
「そりゃまだ大人とは言えないけど……あたしだってもう十八になるんだから、子供じゃないっしょ」

『えええええー！！』という驚きの声が多重奏で響き渡った。ヴィヴィアンを始め居並ぶ近衛騎士に学院警備兵、ドーソンとエルディネイア、ついでに拘束されている男達まで混ざっていた。皆の驚き方に思わず引いてしまう朔耶。

「な、何よ……」

「十八ですって!?」

「き、君は僕より年上だったのかね?」

「てっきり十五~六だとばかり……」

「一体何食ってりゃそんな若さを保てるんだい!?」

口々に見た目と実年齢が合わないと言う皆の指摘に、朔耶は『東洋人が若く見られるのは異世界でも通じるんだぁ~』と変な感心の仕方をしていた。約一名、お肌の曲がり角が気になる女性の真剣な追求があったが……。

やがて護送用の馬車と学院の馬車がやって来たので其々分かれて乗り込むと、近衛騎士は城の兵舎に、学院の馬車は王都大学院に向かって出発する。

朔耶は護送用の馬車に乗るつもりだったのだが、騎士達に『王女の大事な客人かつ王室特別査察官殿を罪人と一緒の檻に押し込める訳には行かないからと』、近衛騎士の馬に乗るよう勧められた。

確かに、王都内で使われる罪人護送用の馬車は荷台に檻を乗せたような造りになっていたので、その中に入るのは憚られるとして朔耶は勧めに従った。

「でも馬とか乗った事無いんだよね……」

「大丈夫っすよ、俺が支えてあげますから」

そう言って学院から一緒に来た近衛騎士の若い方が、仲間に引いて来て貰った自分の愛馬を撫でながら手を差し伸べる。足を掛ける

場所や順番を教わりながら何とか馬に跨った朔耶の後ろに若い近衛騎士も騎乗した。

「これって間違えて後ろ向きに乗ったら恥ずかしいね」

「ははは、偶にいるっすよ？　そういう人も」

朔耶は『目線たかっ』などと言いながら、初めての乗馬に恐々としつつも興味津々な様子で鞍の金具等を弄っていた。

先を行く護送馬車とその周りを固める近衛の騎馬を追って朔耶を乗せた馬も走り出す。最初は揺れに身を硬くしていた朔耶だったが、コツを掴むとリラックスして後ろから支える騎士と話す余裕も出てきた。

「どうです？サクヤ様、風を切って駆ける馬の背も中々良いモノでしょう？」

朔耶の気さくさを知って気楽に話し掛ける若い騎士に、まだ朔耶とコミュニケーションを取った事の無い他の騎士達は『分を弁えろ』という視線を送るが、若い騎士は気付かない振りをして寧ろ朔耶との親密さをアピールするかのように振舞った。

王の間での一件以来、朔耶は『イーリス団長に膝を付かせた少女』として近衛騎士団の中でも噂で持ちきりだったりする。

近衛という王族直衛の任に就く彼等は特に人間関係にも気を使う立場にあり、団員には既婚者が多く、未婚の者も間諜に付け入られないように街での女遊び等も硬く禁じられている。

その為、王家に身元を保障をされた接触を許される年頃の女性という存在は未婚の騎士達にはとても貴重で、誰もがお近付きになりたいという想いを持っていたりするのだ。

密着している為か、そんな近衛騎士達の胸の内を『なんとなく』で気配に感じた朔耶は、何時ものからかい癖を発揮した。

「……う、うん。　風も気持ちいいんだけど、その……こんな風に男の人に抱かれてるのは、恥ずかしくて」

もじもじと、背後から支える騎士に凭れ掛かるようにしながら俯き加減で言い淀む。

地下通路での迫力ある叱責や不逞魔術士を張り倒す勇ましい場面を見ているだけに、この乙女モード朔耶のギャップは騎士の男心を直撃した。若い騎士の頬がかぁ～と赤くなる。

周囲から向けられていた『分を弁えろ』視線は、『何抜け駆けしてんだこら』視線に変わっていた。

学院に戻る馬車の中で、ドーソンは頬杖を付いて窓から一般区の景色を眺め、エルディネイアはそんなドーソンにちらちらと視線を向けては内心で不安や焦燥に駆られていた。

『やっぱり別人かしら……でも、サクヤはアマガ村って言っていたし』

廃屋での騒ぎが収束した頃、エルディネイアは治療を受けるドーソンを横目にこっそり朔耶から色々聞き出していた。

眉を顰めるような話もあったが、『アマガ村の村長の息子なんだってさ』そう聞いた時は、今朝の夢やあの日の約束を思い出した事が全て繋がったようで気分が高揚したのだが。

『どうして何も言わないの……？　それとも、もう忘れてしまっているのかしら……』

自分自身、あの夢を見るまでは殆ど思い出す事も無くなっていた遠い過去の出来事。

子供時代の思い出だと諦めていた部分もあったのだから。そんな風に思っては哀しいような切ないような気持ちになって俯くエルディネイアだった。

「僕はね……」

「え！」

唐突に話し掛けられ、エルディネイアは思わず声を上擦らせた。ドーソンは相変わらず頬杖を付いて窓の外を向いたまま、独り言を呟くように続ける。

「僕は、貴族になりたかったんだ」

子供の頃、突然家に紹介状が届き、王都の平民学校に通える事になったドーソンは村長である父の勧めもあって、当時クルストスまで遠征して来ていたフレングンス騎士団の馬車に同乗させて貰い、王都にやって来た。

平民学校の寮に住み込みで通っていたドーソンは、やがて卒業を迎えて村へ帰る日が来る。

学校は卒業式の為半日で終わり、村へのお土産等を買いに街に下りようと寮を出た。そこで偶然、一般開放区を行く豪華な馬車の中に見知った女の子の姿を見つけた。

村の近くで出会い、クルストスの街まで一緒に歩いた貴族の女の子。魔術士に魔術で吹き飛ばされた時、庇ってくれた女の子。また会おうと約束した女の子。

その馬車を追って走るドーソンだったが、馬車が門を潜るとそこから先は追うことが出来なかった。門番が通してくれなかったのだ。

『ここから先は貴族の身分に無い者が入る事は出来ん』

『どうすれば貴族になれるの？』

門番は笑うだけで教えてくれなかった。

「どうすれば貴族になれるのか分からなかった。だから、平民学校で見た貴族の子達の真似をするようにしたんだ」

ドーソンは頬杖を付いたまま、窓から空を見上げる。

「そうしていれば、いつか貴族になれるかもって思ったんだ」

そして貴族になれば、あの門の向こう側に行けるようになる。そうすれば、もう一度あの子に会える。子供心にそう決心したドーソンは、以後、村で誰に何と言われようと『貴族かぶれ』を止める事はなかった。

朔耶達の馬車に乗せて貰って再び王都に訪れた日、一緒に門の向こうへ行かなかったのは、ドーソンなりの意地だった。

「もう一度、エルに会いたかったんだ……」

ドーソンが頬杖から顔を上げてエルディネイアの方を向いた。エルディネイアは心臓の鼓動が激しくなって行くのを自覚しつつも、

心の中で大騒ぎしていた。

『エルって呼びましたわっ！　今、私の事エルって！　やっぱり、やっぱりあの時の男の子だったんだわ！』

そうして沈みかけていた気持ちが一気に高揚していくエルディネイア。そこへ憂いを帯びた表情から一転、軽い雰囲気に戻ったドーソンから会心の一撃が飛ぶ。

「いやぁ名前を聞くまで気付かなかったよ。　あの時も凄く可愛い女の子だなぁって思ったけど、こんなに綺麗になってるんだもんなぁ」

冴えない筈の男の爽やかスマイルは、エルディネイアの心を鷲掴みにした。これもある意味、冴えない田舎者男だと思っていたら意外に知恵が働いて勇敢で頼れて健気に一途で、オマケに美しい思い出まで付与されて、というかなり落差の激しいギャップ効果であった。

『あああっ　でも、駄目よ！　彼は平民、公爵家の私とじゃ釣り合いが取れなさ過ぎるわっ　きっと不幸な結果しか招かないわ……せめて最下層でも良いから貴族なら……貴族……貴族じゃ無いなら、貴族にしちゃえばいいのよ……』

誰かと良く似た思考的結論を導き出すエルディネイアだった。

「それじゃ、あたしレティのとこ行くねー」

兵舎に向う護送馬車と近衛騎士達に、城門を潜った所で降ろして貰った朔耶は手を振って城の玄関口に走って行った。

朔耶を乗せて来た騎士はポーー……とした様子で手を振り返していたが、仲間に小突かれて我に返ると取り繕うように咳払いして護送馬車の後に続いた。

城に入った朔耶は階段を上りながらレティレスティアに交感を繋げようとして、レティレスティアの方から意識の糸を寄せて来たのを感じ取った。

――サクヤ、戻りましたか？――

『レティ、うん　今二階に向かってるとこ……ん、二階に着いた』

レティレスティアはレイス達と皆で五階に居る事を告げ、朔耶は直ぐに行くと答えて階段をひょいひょい上っていく。そして五階に付くと、フレイが迎えに立っていた。

「サクヤ様っ　よくご無事で」

「えっへへー　何か悪っぽいの一人張っ倒して来たよ」

危ない事は控えて下さいと心配するフレイを宥めながら、朔耶は皆の待つ部屋に案内された。

「お帰りなさい　サクヤ」

「やほー　ただいま、レティ」

幾つか並ぶ応接室の一室にはレティレスティアの他レイスとイーリス、それにランバルト公が其々広いソファーで寛いでいた。
ランバルト公は朔耶を認めると立ち上がって歩み寄り、手を取って口付けを落とした。手の甲に口付けされるなどの経験の無い朔耶は思わず赤くなる。

「まずは礼を言わせて欲しいサクヤ殿。　娘を助けて頂き、感謝の言葉もない」
「あわわ……あ、あたしは偶々だから、その……あたし達が駆け付けるまでルディを護ってたのはドーソンって人ですから、彼も労ってあげて下さい」

慣れない宮廷流な挨拶にドキドキしながら、朔耶は自分の見て来た事件の詳細を皆に話して聞かせた。既にレティレスティアから大体の話を聞いていたので、細かい部分の説明も交えてかなりスムーズに伝わった。

「なるほど……、では拘束した連中については近衛からの報告が上がるのを待つとして、逃げた魔術士の方だが」
「フエルト卿の選出した魔術士が既に王都の各地へ向かっていますが、確保は困難かもしれませんね……」

ランバルト公の問いにイーリスが答えるも、内容は余り芳しくないモノだった。
王国騎士団による帝国間者の洗い出しも成果が上がらず、今回などは公爵家令嬢の誘拐にランバルト公への暗殺命令という脅迫状まで送り付けられる始末。これがフレグンスの現状かと気の滅入る様子が窺える。

「お城の偉い人の中に帝国と通じてる人でも居るんじゃないの？」

「サクヤ様、滅多な事を言うものではありませんよ」

不穏な発言を諫めるイーリスに、朔耶は肩を竦めて見せる。しかし、この場の誰もがその可能性を考えていた。

事件のあらましを纏める為、ランバルト公に送りつけられた脅迫状とナイフに付いての話に及ぶと、ランバルト公は懐に仕舞っていた黒い帝国の紋章入りナイフをテーブルに置いて見せる。

「おおう、黒いナイフだぁ　ドンピシャじゃん」

朔耶は『あたしスゲー』とかいいながらナイフを手にとって弄っている。怪我をしやしないかとフレイがハラハラしていたが、朔耶は割と手馴れた感じで扱っていた。

朔耶の幼馴染にはこういうモノを集める趣味の持ち主がいるので、手入れや切れ味の試し斬り等を手伝う事もあって扱いには慣れているのだ。

「毒や呪いの類は掛かっていなかったと？」

「うむ、普通の暗殺用ナイフのようだ」

「敵は……公の腕を持ってすれば、とでも考えたのでしょうか」

ナイフを弄っている朔耶の姿を横目に、ランバルト公はレイスとイーリスを交えて敵の狙いについての考察を行った。

そうして宮廷魔術士であるフエルト卿の暗殺に只のナイフで挑ませる事自体、双方への暗殺の意味があるのではないかという話に纏まって行った。

「どちらにしてもフレグンスの上層は手痛い打撃を受ける事になるし、各指揮系統にも支障を来たす事になっていただろう」

「やはりそういう狙いだったと考えるのが妥当でしょうか」

今後も同様の謀を仕掛けられる事が考えられるだけに他の貴族達にも注意を呼びかけ、とにかく王都内の警備強化と間諜の洗い出しに力を注ぐしかないという結論に達しようとした時、ナイフを弄っていた朔耶が声を掛けてきた。

「ねえ、これって呪文か何か？」

そう言って朔耶が見せたナイフは、どうやったのか柄の部分が縦に割られて二つに分割されていた。

ちょっと目を離した隙に分解しようとしていたらしく、幾つかの部品がテーブルの上に転がっている。その縦に割れた柄の内側に文字のような記号が刻まれている。それを見たレイスは眼を細めた。

「これは……確かに呪文のようですが、内容が途中で切れていますね……発現部分が無い」

「どういう事？」

「分かり易く言えば、弓と矢はあるのに弦が無いような状態です。呪文自体はしっかりしたモノですが、これでは術は発現しません」

「呪文の内容は？」

レイスの説明と朔耶の質問に、皆が耳を傾ける。そして――

「束縛の術……足止め等の罠に使われる触媒魔術ですよ、このナイフの場合なら持つ者の動きを暫らく止める効果がありますね」

術の効果を聞いて怪訝な表情を浮かべる応接室の面々。術を発現させる部分を刻み忘れたとも考え難く、刻まれていた場合もナイフを握った時点で術が発現するのでランバルト公は自宅で束縛の術を

受け、そして暫らく後に術が解けて終わりだ。

その間に公を狙うという計画にも無理がある。束縛の術という罠付きのナイフを作ろうとして途中で放棄したモノを暗殺に使わせる為に用意したというのも何だか奇妙な話だが、偶々帝国製のナイフがこれしか無かった等という理由も考えられなくは無い。

どうにも腑に落ちないという空気に包まれた応接室に、朔耶の飄々とした声が響く。

「それって、後で付け足して発現は出来ないの？」

朔耶の質問にレイスは少し考え、色々な可能性を思い浮かべる。もし、このナイフの柄の中に仕込まれていた呪文に意味があるとするならば、その意味に辿り着く為に朔耶の予言染みた直感に頼ってみるのも悪くないと考えた。

「一応、特殊なやり方でなら出来なくもないですよ。一つの呪文を刻んだ触媒を二つに分けて、合わせる事で発現させたり。詠唱魔術で擬似的に二つの触媒を繋いで発現させたり……」

「ソレなんじゃないの？」

「ソレ……とは？」

「だからぁ、例えば――」

朔耶が思いついた可能性では、ランバルト公がフエルト卿の暗殺にナイフを取り出した時、近くでナイフに仕込まれた術を発現させる触媒を持った人間が術を発現させ、束縛状態になったランバルト公を『フエルト卿を暗殺しようとした！』として殺害する、というモノだった。

それを聞いた面々はハッとした表情になり、レイスは何時もの微笑を消して冷たい空気を纏い始めた。

「……なるほど、それなら暗殺の標的に選ばれたフエルト卿は真っ先に疑いの矛先から逸らされますね……それが狙いというわけか」
「え？　それって？」
「この事件、フエルト卿が怪しいかもしれない、という事ですよ」
「ちょっと待ちたまえレイス殿、それは幾ら何でも短絡的じゃないか？」

レイスの推理にイーリスが待ったを掛けた。アクレイア家とコースティン家の対立は知っているが、今この問題に両家の確執を持ち込まれては困ると。しかし、その言に対しては朔耶が口を挟んだ。

「レイスはそんなに単純じゃないと思う。　なんか理由があるんでしょ？」

そう問い質す朔耶に、レイスは何時もの微笑を浮かべて頷いた。

「サクヤは、僕の家とコースティン家が何故　対立しているか、知っていますか？」
「ん～……見解の相違とか？」

中々鋭い所を突いて来ますねとレイスは苦笑し、アクレイア家とコースティン家が対立する理由を話し始めた。

31話：其々の事情

アクレイア家がフレグンスの大貴族としての地位を築き上げたのは戦乱の時代、その類稀なる攻撃魔術の力によって常勝をもたらした武勲によるモノだ。

一方コースティン家が台頭し始めたのは戦乱の時代が終わり、各国が復興に向けて進み始めた頃、各地で頻発する反乱等を治めた功績によるモノである。

「僕の父は反乱の気配がある地域や決起しそうな集団と会談を設けて話し合い、反乱や暴動を未然に防ぐ方法を取って治安の維持に努めていました」

だが、コースティン家は反乱が起きそうな地域でそれを煽るような流言を行い、暴動を起こさせてから反乱分子やその予備軍とされる人物を根こそぎ討伐するという方法を取っていた。その為、平穏な暮らしを求める善良な民にも少なからず犠牲者を出していたのだ。

コースティン家のやり方はフレグンスに反撥を持つ人間を増やし、それがまた反乱の種となる悪循環を生むとして、レイスの父ルィバンスは自らの宮廷魔術士長の権威を持ってコースティン家の討伐法に自重を促していたのだが、実際に武装決起した者を放置するわけにも行かない為、ルィバンスの目の届かない所で行われた工作によって火種を抱えた地域では反乱が頻発していた。

それを尽く討伐して回り、その功績によって地位を伸し上げて行

ったのが今のコースティン家である。

「なるほど、マッチポンプってやつね」

「マッチポンプとは？」

「自分で火ぃ付けて火が出たーって騒いで、自分で消して頑張って自分が消しましたって誇ろうとする行為？」

「ああ……まさにその通りです。『マッチポンプ』ですよ」

ある種の自作自演とも言える反乱とその討伐。コースティン家はこの手の謀がお家芸なのだ。

「ふむ……、それで今回の事件はフエルト卿が怪しいと……？」

「ええ、例えばランバルト公がフエルト卿暗殺の為にナイフを向けたとします。もし、フエルト卿がナイフに仕込まれた術を発現させる触媒を持っていたなら？」

皆がその後の展開に思い至って息を呑む。自分に暗殺用ナイフを向けた相手に、フエルト卿は正当防衛として躊躇無く攻撃魔術を撃ち込む事が出来る。束縛の術で動けない相手に、だ。

「ランバルト公を殺害した後、公には帝国と繋がりあったと適当な証拠をでっち上げれば……」

ランバルト公と繋がりのある門閥家は全て疑われる事になり、フレグンス上層は大混乱に陥る。さらにそのランバルト公に『信頼の証』を与えた朔耶や、朔耶繋がりでレティレスティア王女、アルサレナ王妃までもが信頼までは失くさずとも政務に対する発言力や権威がかなり損なわれる事になるだろう。

代わりにコースティン家の派閥に属する門閥家が上層を独占する為、フエルト卿の発言力は強大なモノとなり、権威は王に次ぐ程ま

でに補強される。
　レイスの順序立てた策略の説明と推理を理解した皆は、その予想以上の被害の大きさと影響力に愕然とする。

「……もしさ、そうなってたら　ルディはどうなってたのかな？」
「公の暗殺が成功した時点で、帝国の間諜との連絡係だった……という証拠を捏造し、自害に見せかけて殺害されるか、もしくは……」

　今回のように救出が間に合った場合、濡れ衣は着せられなくとも家は取り潰しになるので何処かの家の侍女に迎えられるか、街の娼館に高級娼婦として身を堕とすか。

「或いは、公爵家の血筋を迎えるという意味でフエルト卿が娶るか……まあ、そうした場合は寛容さもアピール出来るでしょうしね」
「なんか……ムカつくね、それ」

　あくまでも可能性、まだフエルト卿が事件の黒幕と決まった訳でもなく、それを示す証拠がある訳でもないので、短慮な思い込みは危険だとしてこの話は此処までに留められた。この事件の裏には帝国が絡んでいないとも限らないのだ。

　暫らくして近衛騎士から捕らえた者達についての取り調べ結果が報告として上がってきた。

「四人とも食い詰めた傭兵崩れで、街の酒場に屯している所を黒いローブの魔術士に誘われて身代金目的で犯行に加担したとの事です。帝国との繋がりは不明ですが、関係は無いと見て間違い無いと思われます」
「つまり、手掛かり無し……という事か」

イーリスが眉間に皺を寄せて溜め息混じりに呟いた。

『まったく、一体なんだと言うのだ』

王女を帝国に拉致させる手引きを引き受け、成功間違い無しだった筈の計画が失敗してからがケチの付き始めか、ここ最近は工作も謀も失敗続きだ。その事に苛立つように彼は書き損じた書類を乱暴に丸めると屑籠に放り込んだ。今回の計画の破綻もあの異国の娘が係わっている。

『本当に……何だというのだ、あの娘は』

あの娘が現れてからというモノ、細かい工作から今回のような大きな計画まで尽く邪魔が入ったり不測の事態で破綻したりと、兎に角ロクな事にならない。先日の『信頼の証』の一件でも此方の地盤を揺るがしかねない出来事があった。

しかもあの道具のせいで各中流貴族の取り込みや門閥家の袖を引く交渉がやり辛くなったのだ。折角翳りを帯びて来ていた王家の威光も、あの道具一つで盛り返してしまった。今までの苦労が水の泡だ。

『下手に手を出すと薮蛇かと放って措いたが、やはり早めに処分したほうが良いか……』

意図せず立ち塞がる存在というモノは時代の流れの中に必ず一人や二人は現れるモノだ。ここまで順調に来ていただけに、反動として現れたのかもしれない。もしくはこの地に住まうという古の精霊による加護の成せる業か。

『ふん……所詮精霊も魔術の触媒、この国の滅亡に贖う事は出来んさ』

今頃はまんまと令嬢を取り返された間抜けな部下が屋敷に逃げ帰っている頃だろう。丁度良いので帝国の密偵への伝令をさせようと、彼は懐の『発掘品』を取り出して起動させる。

この『発掘品』は二対の薄い板の片方に何かを書き込むと、もう片方の板に同じモノが描き出される伝送具の一種で、帝国に忠誠を誓い、尽力する証に与えられた幾つかの『発掘品』の一つだ。

古代魔法文明の遺跡は帝国領に多く点在し、これもそこで発掘されたモノである。

『発掘品』の伝送具に異国の娘に関する報告と今後の対応について書き綴り、部下からの返事を待つ。やがて板の上に密偵に伝える趣の返事が浮かび上がった。

『この触媒は処分せなばならんな……』

束縛のナイフと対になった発現の鍵である呪文が刻まれた触媒。もはやあのナイフが使われる事は無いのだから、この触媒は邪魔なだけだ。

『やれやれ、あの娘のお蔭で要らん出費ばかりが嵩む』

内心で悪態を付きながら不要になった触媒を砕き、人知れず処分

するのだった。

「おまたせ～、とりあえずこれだけ作ってきたよ」

近衛からの報告があった後、『ちょっと手伝って』とフレイを伴って応接室を出て行った朔耶が長方形の箱型のモノを両手に抱えて戻って来た。外は既に日が沈み、夕闇に差し掛かろうとする頃で応接室の中もランプが灯されている。

レティレスティアは午後の祈りの儀式に出ていて不在、ランバルト公は娘の無事を確かめに帰途に付き、レイスも屋敷の修繕関係の用事で帰宅している。

応接室に残っているのはイーリスと部下の近衛騎士だけだったが、用件は果たせるので問題ないと朔耶は荷物を並べた。

「それは？」

「魔力測定器、これを使えば街の中に紛れ込んでる魔術士も探し出せると思うよ」

「おお……これが、噂に聞く魔力測定器ですか」

テーブルの上に並べられた長方形の木箱。片側にある二本の突起を対象に向けると、丸く切り取られた蓋部分でゆらゆら揺れている木針が動いて対象の魔力の強さを指し示す。

「八つあるから、門の所と後は街中の巡回で使えば良いと思うよ」

「助かります、早速使わせて貰います」

「間諜に就く者は少なからず魔術も修学するものですからね、これなら怪しい人物を炙り出せるでしょう」

測定器を受け取ったイーリスと部下の近衛騎士は、朔耶に礼を言うと足早に応接室を後にした。応接室に残された朔耶とフレイは『一仕事やり終えた』と一息ついた。

「ふぅ～～やれやれ……　フレイお疲れ～」
「サクヤ様もお疲れ様でした」

朔耶は首を回しながらソファーに寝そべると、『ぬが～～～』という雄叫びを上げながら伸びをした。既に見慣れたフレイは驚くでもなく、はしたないと諫めるでもなく、朔耶が伸びをする時は大抵雄叫びを上げるモノなのだと認識してしまっている。

「はふぅ……」
「今日はもう御休みになられますか？」
「ん～……もうちょっと何かしてから寝るー」
「分かりました、ではお茶の用意をしておきますね」

フレイは応接室を出て朔耶にあてがわれている部屋に向かった。朔耶は暫らくソファーの上でごろごろと寛いでいたが、身体が解れたので起き上がり、自分の部屋に戻ろうとして応接室の魔術式ランプに目を止めた。

「ふーむ……」

そのランプは火を灯すタイプではなく、光を発現させるタイプのモノで、呪文の刻まれた触媒の上に浮かんだ光の玉が光源となっている。

「むむ？」

朔耶は魔力石ライターの原理と反発力ユニットによる魔力の膜の性質と、目の前のランプの中に浮かぶ光の玉に、懐中電灯代わりの照明に関するアイデアが浮かんだ。

「手っ取り早く光を出すのに……火属性だと熱が……雷属性なら作れるわけだし……分散させてフラッシュライト並に……」

顎に手を当て、ぶつぶつと創作アイデアに没頭しながら部屋に戻って来た朔耶は、そのままフレイの淹れてくれたお茶を飲み干すと、ぶつぶつ言いながら新しい魔力石をテーブルの上に取り出し、ぶつぶつ言いながら加工を始め、ぶつぶつ言いながら測定器を作る時に余った木材を削っていった。

「ふう……」

「お疲れ様です、今回はまた随分と入れ込んでましたね？」

「うん、結構良い感じに浮かんだからね……ごめんね？　こんな遅くまで付き合せちゃって」

「いいえ、私はサクヤ様の専属警護ですから」

外はすっかり暗くなっており、夜空には星が瞬き、欠けた月が王都の街並みを照らし出している。やはり路上には街灯のようなモノは無く、各家の窓や門の所に備え付けられたランプの灯りが街の灯りとして夜景を演出している。

「レイスが寂しがってるかもよ～？」

「……い、一日くらいは　我慢して頂きますから」

赤くなりながらそんな事をのたまうフレイに、『なにをだ！』と突っ込みをいれるべきか、『なにをかな～？』と突っ込みを入れるべきか、どちらにしても突っ込みを入れるべきかと迷う程、いい感じに疲労が溜まってきている朔耶だった。

「と、所で　今回は何を御作りに？」

「むぅ……なんか誤魔化された気がするけど。一応、懐中電灯をね、朝方見せたフラッシュライトみたいな感じで光ればいいかな～って」

テーブルの上には筒状の物体。片方に穴が空き、其処から反発力ユニットが内側を向いて並んでいるのが見える。反対側には電池代わりの雷属性の魔力石を詰めてある。稲妻ビンタの気合で電撃を発現出来るようになったので、自力で雷属性の石を作って手っ取り早く光源にしてしまおうと考えたのだ。

朔耶の計算では反発力ユニットによって圧縮された魔力の膜を作りだし、そこにライターの要領で具現化させた雷属性の『芯』を入れる事で筒の中に雷球を作り出してフラッシュライト並の明るさを確保出来る筈となっていた。

構造的には魔力石ライターの属性を雷にしたモノを、反発力ユニットを向かい合わせて圧縮反発力を発生させる機構にくっ付けたような感じだ。

「火だと燃えそうだし、雷でもチカチカするかもしれないけど、一定量の放電状態を維持できればイケると思うのよね～」

反発力ユニットを敷いた盾はレイスの魔術で生み出された魔力の塊である氷塊を自らの反発力と共に四散させた。朔耶はそこに目を付け、反発力ユニットの生み出す魔力の膜は魔力の塊を分解分散させる効果があると読んだ。

向かい合わせに張られた魔力の膜の中に魔力石から生み出した電気を放電して分解分散する過程で、石の先に生まれる小さな放電の光を魔力の膜一杯にまで広げるという仕組み。圧縮反発力になったのは反発力ユニットの仕様上の問題で、偶々である。

「木製だから、もしかしたら中が焦げるかもしれないけどね」

朔耶は試作魔力石ライトを手に取ると、テーブルの下の暗い部分に向けてスイッチを入れた。ジジッという放電の音と共に筒から光が伸び、テーブルの淵を削り取るように焼き斬って床の絨毯に丸い焦げ跡を作った。

「！　な、なんじゃあこりゃあーーーー！！」

「ひ、光の剣……」

うら若き乙女としてはどうかと思うような驚愕の叫びを上げる朔耶の手の先を、フレイは呆然とした表情で見詰める。光は五秒ほどで魔力切れになって消えた。

しん……と静まり返る部屋、そして我に返った朔耶は思わず頭を抱えて悶絶する。

「魔力石ライト作ろうとしたのに魔力石ライトセ○バー作っちゃってどうすんのよあたし！」

「す、凄いですサクヤ様！　光の剣ですよ、光の剣！　私、あんなの初めて見ました！」

『なにヤバイ物作ってんだーー』と騒ぐ朔耶に『凄いです！』を連発する尊敬モードに入ったフレイ。テーブルの淵とか絨毯の焦げ跡とかどうしよう？と焦る朔耶は『換えさせましょう』と使用人を呼ぼうとするフレイと微妙に意思疎通のズレたやり取りを行うなど、

暫らく二人で大騒ぎしていたが――

「とにかくこれは失敗作！　破棄よ破棄」

「えええ！　勿体無いですよぉ」

その後もやはり大騒ぎしていた。

「こんな危ないもん使えるかぁーー！！」

「では、そのようにお伝えください」

何の変哲もない安宿の一室に宿泊する男の下に、フレグンス王都での諜報活動を支援している貴族の部下がその主（あるじ）の伝言を伝えて帰っていく。最近の工作や謀の失敗を何処か遠方の異国から来たらしき少女が原因として、早々に始末して欲しいとの内容に、帝国の密偵である男は鼻白んだ。

自分を暗殺者か何かと間違えているようだと、男は件の少女についての資料を取り出す。男の他にも、部下として数人の密偵がフレグンス王都内に潜伏しており、彼らは其々全く関連性を持たない生活を送りながら諜報活動に勤しみ、不定期的に収集した情報を男の元に届けている。

『名前はサクヤ以外は不明、出身国も不明……？　王女の身柄確保の際これを魔術にて妨害、経緯不明……以後、数日間消息不明……魔術属性不明……なんだこれは』

いくら何でもここまで正体不明が続くと、流石にフレグンス貴族からの依頼を戯言と軽視する事は憚られる。最新の情報を漁って部下から届いた伝管を開いて行く。

『ん……年齢十八、王室特別査察官に就いているも貴族にあらず……？　ほぼ無詠唱にて雷を纏う術を行使……魔術の腕はかなりのモノか……。ん？　見た目も肌も若過ぎる、秘訣を探るもはぐらかされた……って、何を書いとるんだアイツは……』

腕は確かだが任務中直ぐに脱線しようとする困った悪癖を持つ部下からの伝管だった。

その後は『髪はサラサラで手触りが良い』とか、『中々男心を擽る仕草を身につけている』とか、どうでもいい様な事が綴られており、最後に『隊長～あたし達いつ帰れるの～？』とか書いてある。

『俺が知るかっ』

部下の報告に突っ込みを入れながら他の伝管にも目を通し、めぼしい情報を纏めて頭の中の叩き込みつつ『発掘品』の本に収める。この本は特定のキーワードを書き込む事で中に書かれた内容を閲覧する事が出来、別のキーワードを書き込むと全く違う内容が表れる。表向きは日記帳として、裏には集めたフレグンス内部の情報が満載だ。

『さて、しかし……　どうしたモノかな』

男はサクヤという少女の暗殺を引き受けた場合のメリットとそれに伴うリスクを計算しようとしたが、件の少女に関する情報が少な過ぎて結論は出せない、という結論に到ってしまった。協力者の貴

族も気運に見放されている感があり、今回のような勘違いをした依頼を向けて来るようではそろそろ見切りを付ける必要性も出て来る。

『一度本国に問い合わせてみるか』

――事件から三日後

「そこには、元気に走り回るエルディネイアの姿が！」
「いきなり何（なん）ですの？」
「いや別に、ちょっと言ってみただけ」

朔耶は模擬戦の見学に改めて学院を訪れていた。ほぼ三日おきに行われるという個人戦と団体戦、さらにその三日後には数十人からなる大規模な対抗戦がある。

「にしても、ボロボロだね」
「ぜぃ……ぜぃ……やは……ぜぃ……サクヤ……ぜぃ……じゃないか……ぜぃ……」
「あーあー喋んなくて良いから、休んでなさいよ」
「す、凄い根性ですね……」

息も絶え絶えに打ち身に擦り傷、もみくちゃにされて髪の毛も鳥の巣状態にありながら斜めに構えて腰に手を当て、口の端だけで笑いながら髪を掻き揚げようとするドーソンに、朔耶は肩を押して座らせ、フレイはある意味で感心していた。

「しっかし、ルディも容赦ないねぇ？」
「私のパートナーになるのですから、相応の腕を身につけて貰いませんと」

殆ど息も上がらず、ふふんと澄まして見せるエルディネイア。彼女は団体戦の自分のチームメンバーにドーソンを加える為、朝から屋外訓練所の片隅で剣の猛特訓を行っていた。模擬戦用の武器庫から持ち出されたありとあらゆる武器類がズラッと並べられてあり、身長程もありそうな大剣やメイスのような鈍器類、戦斧や杖まで揃っている。

「でも、困りましたわ……剣に関しては本当に素人なんですもの。このままではメンバーが納得しませんし……」
「無理に参加させなくても良いんじゃないの？　ほら、ドーソンって勤労学生だし」
「今はもう勤労学生じゃ無くてよ？」

三日前の事件の後、二人は一端其々の家と寮に戻って休み、翌日学院で再会した。その時にエルディネイアは一つの提案をドーソンに持ち掛けた。選択、と言っても良い。

『私の従者として家に仕えれば、学費は全て負担、卒業後はブラフニール家が後見となって貴方を貴族に推挙してさし上げますわ』

ドーソンはその提案を受けた。従者と言ってもエルディネイアの家に住み込みで働くには貴族の屋敷での振る舞い方などを学ばなくてはならない身なので、今はまだ学生寮に住んでいる。
朝、エルディネイアが学院入りした時から帰途につくまでの間、ずっと傍に居つづける事になる。

「まあ、最初は相手も警戒して様子を見て来るでしょうから、私の傍に居れば狙われる事も無いでしょうけど」
「バレたらドーソン狙い捲りだね」
「そうですの……団体戦は人数を合わせて行いますから、此方は常に一人欠けた状態で戦う事になりますわ」

今までの人数での連携にも乱れが出るので、ドーソンは戦力として頭数に入れられないが、それだとドーソンをメンバーに入れる事に意味が無く、仲間が納得しない。

「いっそ似非ワイルドカードにしちゃえば？」
「？　なんですの？　それは」

使い所が無いのならば無理に使わず、使えるように見せかけて他の使えるメンバーを補佐させる。要するに、後方で如何にも目を離すと何か仕掛けてくるかのように振舞わせ、他のメンバーへの注意を引き付けるハッタリ役だ。

「一回バレたらアウトだけど。　まあ道化師だね」
「う～ん……不本意ですがそれしかありませんわね……」
「き、君たち、言いたい放題だね……」

やっと回復したドーソンが大汗を垂らしながら頬を引き攣らせていた。

特訓を再開したエルディネイアとドーソンを眺めていた朔耶は、フレイに以前の川原での出来事について話を聞いていた。王都までの旅の途中、バーリ街道第一中継地での小さな事件。あの時もドー

ソンが文字通り身体を張って頑張った。
結果はどうあれ、あの事件で朔耶はドーソンの事を少し見直したのだ。その時の詳しい状況を聞くにつれ、朔耶は三日前の事件の光景を思い出して頭の中で情報の整理を始めた。そして一つのイメージが思い浮かぶ。

「ドーソン　ドーソン」
「ん？　なんだい？」
「ちょっとこっち来て」
「？　……ちょっと、何ですの？」

特訓を中断させ、おいでおいでをしている朔耶にドーソンは戸惑いつつも、エルディネイアの了承を得て歩み寄る。そうして地面に何か描きながら、時折何かの動きを指南するようにドーソンに身振り手振り、手取り足取り教えている朔耶にエルディネイアはヤキモキした視線を向ける。
フレイはエルディネイアの矛先が自分に向かないよう祈りながら気配を静めていた。

「じゃあ、やってみて」
「う、うむ」

朔耶から一通りの指導を受けたドーソンは、腰に手を当てて苛々とした様子で待つエルディネイアの所に戻った。

「随分親しそうに話してらしたわね」
「そうかい？　彼女は誰にでもあんな感じだよ」
「ふんっ　どうだか。　続き、始めますわよ」

フェンシングのような構えを取るエルディネイア。彼女は細身の片手剣での突きを主体とした技が得意だった。一方ドーソンは朔耶が選んで手渡した剣の鞘を握ると、柄に手をあてて半身に構えた。エルディネイアはドーソンの行動に怪訝な表情を浮かべる。

「何をしてますの？　早く剣を構えなさいな」

「あ、いやその……こういう構えなんだよ、サクヤの話だと」

エルディネイアは何と無くムッとなる気持ちを抑え込む。朔耶の国の『賢者の言葉』のように、この奇妙な構えも朔耶の国の剣技なのかもしれないと思いなおした。

「じゃあ、行きますわよ」

賢者の言葉では完敗だったが、剣技では魔術士に負けるつもりは無いとばかりに、朔耶に教わった構えを取るドーソンに向けて鋭い突きを繰り出した。

その瞬間、バキンッ　という破壊音と共にエルディネイアの模擬剣が圧し折れて弾き飛ばされた。目を瞠るエルディネイア。

「なっ……！」

ドーソンはエルディネイアが打ち込んで来た瞬間、模擬剣の横面を目掛けて踏み込みながら抜刀した剣を振りぬいたのだ。

朔耶が眼を付けた点は二つ、川原での事件でドーソンは殆ど暗闇に近い状態で飛んできた酒瓶を正確に打ち払い、しかも砕いている。そのせいで中身の酒が目潰しとなって不覚を取った訳だが、かなり動体視力に優れている事が窺える。

二つ目は打ち払いの威力、飛んで来た酒瓶を棒切れで砕くなど、

薙ぎ払いの威力は三日前の事件でも傭兵崩れ二人を怯ませる程の鋭さを持っている。

「まあ、もう一つ付け加えるなら結構根性あるってとこかな」

以上の点から、付け焼刃になるが『抜刀術』を使えばハッタリをかますにしても相手の虚を付く事は出来そうだというのが朔耶のアドバイスだった。大量に並べられた武器の中から日本刀に良く似た形の剣を選んでドーソンに使わせてみたのだが、結果は予想以上に馴染んでいるようだ。

その後の模擬戦では後方に立つドーソンの奇妙な構えに警戒した相手チームが連携を乱した隙にエルディネイアが突っ込んで二人を倒し、仲間二人が相手の孤立した一人を倒した所で、魔術士が優秀な相手チームの反撃で味方の二人が倒された。

そこで何時もの悪い癖を出したエルディネイアが魔術士に突撃を仕掛け、味方の魔術士が無防備になった所を相手の魔術士と剣士の連携に討ち取られて援護の無くなったエルディネイアが孤立してしまい――

「くっ　しまった！」

「ふふっ　相変わらずネイアは勇ましいね」

相手チームのリーダーである剣と盾を使う騎士スタイルの青年と剣士に挟み込まれて万事休すとなった。

「あら～～ネイアさんたら、またやってしまいましたのね～」

「何時ものパターンか……」

既に倒されて陣の外に出た仲間が達観にも似た呟きで敗北が告げられるのを待っていた。その時、エルディネイアの援護に駆け寄る影が一人。剣を鞘に収めたままのドーソンが突っ込んで行く。状況は三対三、相手は攻撃型の魔術士と騎士スタイルに剣士スタイル、味方は細剣のエルディネイアと支援型魔術士、それに抜刀術のドーソンだ。

今まで後方で動かなかった初見の相手が突っ込んで来た為、ここは様子見も兼ねて実力を見極めようと、相手チームはエルディネイアを騎士と剣士で牽制して足止めし、魔術士に攻撃を任せた。風の塊がドーソンを襲う。

が、味方の支援魔法がドーソンの前方に風の壁を作って攻撃を中和した。一気に距離を詰めて剣士に突っ込んで行くドーソン。相手剣士はドーソンが剣を収めたままなので攻撃のスタイルが読めず、何処から攻撃が来ても対応出きるよう正眼に構えて迎え撃った。それが裏目に出た。

エルディネイアと模擬戦までの特訓で集中的に練習を重ねた結果、相手の武器を弾き飛ばすのはドーソンの十八番になっていたのだ。

バキッという破壊音がして、しっかり握っていた筈の剣を弾き飛ばされた剣士は、自分の模擬剣が半ばから圧し折れている様に目を瞠る。返す刀で一撃を入れられて討ち取り確定、その剣技のとんでも無い威力に気を奪われた騎士の僅かな隙を突き、エルディネイアは騎士をすり抜けて相手チームの魔術士に再突撃を掛けた。そして遂に念願の魔術士打倒を果たしたのだった。

「いやー中々白熱した試合だったねぇ」
「サクヤ様の授けた剣技の存在が大きかったですわ」

帰りの馬車の中で、朔耶とフレイは今日観戦した模擬戦を評し合っていた。試合後エルディネイアのチームを労いに行くと、既に朔耶の事を聞いていたメンバーは三日前のような自然な応対も出来ず緊張しまくっていた。

エルディネイアとドーソンだけが普通に話しているのを見たメンバー達は、ドーソンを特別な身分に在る人物と認識した。あながち、間違いでもない。

「今度は大規模戦ってのも見てみたいなぁ」
「対抗戦は屋外ですからね、迫力ありますよ」

次はレイスも解説役に連れて行こうなどと話しながら、朔耶は王都での楽しみが一つ増えたとご満悦だった。そして、ふと呟く。

「学生かぁ……いいなぁ」
「サクヤ様？」

「あたしもホントは高校生なんだよね、卒業式までに還れるのかなぁ～って」
「サクヤ様……」

若干憂いを帯びた朔耶の寂しげな横顔に、フレイは胸が締め付けられる想いがした。朔耶が別の世界から精霊に喚ばれて来たという

話は以前聞いている。今は元の世界に還る為に精霊術を学んでいるという話しも聞かされていた。何時かこの世界から居なくなってしまうのだろうかと考えると、とても寂しい気がするのだった。

「あーあーもう、フレイが落ち込んでどうするよ」
「あ、す、すみません」

久しぶりに恐縮スパイラルに入り掛けたフレイに、朔耶はうりゃっと抱きつくとその身体をぎゅーっと抱き締める。フレイは直ぐに意味を理解したので慌てなかった。そのまま優しく抱き返すと、ゆっくり髪を撫でてやる。
アンバッスのように甘えられる相手が居ないので、フレイに甘えているのだ。

「はぁ～～落ち着く……ごめんね、ヌイグルミ代わりにしちゃって」
「いいえ、私はサクヤ様の専属警護……心も身体も御守りしますわ」

二人を乗せた馬車は静かに城への帰路を進んで行った。

「で、レイスには心も身体も捧げちゃってるわけね？」
「はうああ～～」

回復すると同時にからかいモードに入る困ったちゃんな朔耶だった。

32話：平穏な日々

完成した工房で朔耶が最初に作ったのは『魔力石コンロ』だった。魔力石ライターの機構を基本にレイスを通じて鍛冶職人に作って貰った火力調節用のハンドル式稼動台や五徳（鍋などを乗せる金具部分）を組み合わせて完成。

ハンドルを回すと中の台がせり上がって十六個の突起に魔力石の火が灯り、火力の調整もこのハンドルで行える。あまりの使い易さにフレイが半日厨房に篭る程好評だった。

通常、石竈は火力の調節などは殆ど効かず、魔術式の竈にもここまで細かく調節出来るモノは余り出回って無い。

「これを売ろうと思うんだけど、どうかな？」

やたら豪華な料理が並ぶ昼食の席で、朔耶は工房に御呼ばれしているレイスに商談を持ち掛けた。以前の晩餐会で支援の約束を得た中流貴族達の中には店を経営している人達も居た筈だからと、一般民への売り出しを考えている朔耶に、レイスは難色を示した。

「いきなり一般区の市場には出さず、先ずは特定の貴族に売り込みましょう」

「え～～なんで～～？　あたしこの手の道具は政争とかに使いたくないんだけどー」

唇を尖らせる朔耶に、レイスは朔耶の作る道具の希少性と性能の良過ぎる問題を挙げて説明した。所謂オーバークオリティによる弊害、消費する魔力石の量が極端に減る事になるので石売り業者は石が売れなくなって生活が成り立たなくなり、竈を作る職人にも同じ事が言えるのだと。

「むう……　そっか、それは困るね」

「それに、中流や下層の貴族には下手をすると一般民の商人よりも貧しい状況の家もありますから」

彼ら下層貴族達の面目も保ちつつ味方に獲り込む事も出来る上に、僅かとはいえ貴族社会にも石売りが利用される事になれば、さらに品質の高い石を求められるなどの需要が出来て石売り達の生活も潤うだろうとレイスは展望を話した。

そんな訳で『サクヤ式魔力石コンロ』はレイスを通じて一部の貴族達に『特別に』販売される事になり、アクレイア家の潜在的派閥を増やすと同時に中流層の貴族達の間でサクヤ式を持つ事が一種のステータスにもなり始めた。

それというのも、ランバルト公のような魔術普及の急進派が居て尚フレグンス内での魔術士は少数派であり、それ故に魔術式の道具はその触媒の需要に供給が追いつかない為、キトから私的に買い付けたり　ティルファなどから高値で輸入したりと、とにかく金が掛かる。

フレグンスでは只でさえ敬遠されがちな魔術式は、それでも『身分の高い者が使う高級品』としての価値がある為、貴族達は挙って魔術式を使っていたのだが、サクヤ式は製作者が既にフレグンス内でも特別な位置にいる人間であり、尚且つその道具には魔術式以上

の希少価値があり、さらに性能も良いとなれば皆がそれを所持したがるのだ。

一般販売されていない特別限定品という部分でも所有者の優越感を刺激し、満悦させる要因になっている。魔術士達に頭を下げなくても済む事も地味に好評だ。

「徐々に浸透させて貴族用の贅沢な造りの物と平民用の素朴な造りの物を作り分ければ、価値を維持したまま影響も最小限に抑えながら普及して行けると思いますよ」

「そだね、急激な変化って色々歪みを出したりするもんね」

そこは朔耶も納得し、平民用のシンプルなデザインの物も幾つか考案しつつ、如何にも貴族用！というようなゴージャスなコンロも考えてみるが、庶民な朔耶の発想では金ぴかで装飾がごてごて付いたデザインが浮かび、これじゃ只の成金趣味だろうと自ら却下してレイスやフレイに丸投げした。

ちなみに『サクヤ式魔力石コンロ』は城の厨房でも三台程が稼動している。最初は胡散臭げにしていた料理長だったが、火力の微妙な調節機能や長時間の調理も火属性の魔力石をコンロ下部に付いている入れ替え口からトレイに乗せて入れ替えるだけで火を落さずに続けられるなど、今までの魔術式では難しかった調理法を楽々こなせる事に、感激して秘蔵のワインをプレゼントする程の気に入りようだった。

この事から、一般に販売する時はまず高級宿や料理店などから売り込む事にしようと、朔耶はレイスと相談して決めている。

次に朔耶が取り組んだのは照明器具だった。工房に使われている照明は火を灯すタイプの魔力石ランプで、失敗ライト〇イバーの教訓から素直にライターの機構をランプ用に改良した物を作って使用している。朔耶はこれを使った街灯を王都内に普及させようと考えた。

以前のエルディネイア誘拐事件以後、急造した魔力測定器によってそれまで成果が上がらなかった帝国間諜の洗い出しに僅かながら効果があり、一般民に扮していた間諜を魔力の高さで見抜いて捕らえる事が出来たのだが、翌日にはアッサリ牢から逃げられていた。

これもまた、以前に朔耶が示唆した『突破口を見つけられた防壁の脆弱さ』が露呈した形になり、夜の闇に乗じて防壁を越えてしまえば貴族街や上流区は閑静であるだけに死角となる闇が多く、簡単に王宮区と一般区の間を行き来されていた事が分かったのだ。

見張りや巡回を増やしても焼け石に水で、侵入者を見つける所か、朝になってから辛うじて侵入の形跡を発見出来るという有り様だった。帝国の間諜が優秀なのか、フレグンスの騎士がボンクラなのかは意見の分かれる所である。

フレグンスの貴族内部に帝国の協力者がいるという噂も信憑性が高まる一方で、騎士団が自らの不甲斐無さを責任転嫁する為のデマではないかという意見も聞かれ始め、騎士や貴族達の間で疑心暗鬼を招く要因にもなって来ている。

城に配布用魔力石ライターを献上しに来た朔耶にその事を愚痴るカイゼル王に対し、朔耶は灯りのある場所では犯罪が起き難いとい

う事例を話して街灯の設置を提案したのだ。

「暗いと不平を言うよりも、すすんで灯りを付けましょう」

という某伝道番組のスローガンを言ってみたら『素晴らしい賢者の言葉だ！』と感心する側近達に押されて殆ど済し崩し的に『王都全域街灯設置事業』が決まってしまった。中には『夜は暗いのが自然だ』などの反対意見もあったが、『闇夜が明けて慌てるは闇に身を隠す者なり』というカイゼル王の賢者の言葉で沈黙した。

これに反対する者は暗闇が無くなると困ると言ってるようなモノであり、疑いの眼を向けられる事になりかねないからだ。そうして朔耶は出来るだけ長持ちして尚且つ明るいランプの製作に取り掛かった。

魔力の長時間維持は魔力タンクに当る部分を増やして連結すれば事足りたが、光度の増加に火を灯す突起部分を増やせば意味が無いという事でライターの機構を見直してより光度の高い火を灯せるように弄くった。その結果出来上がったモノが今の工房の照明にも使われている魔力石ランプだ。

「先ずは王宮区から順に設置していってさ、一般区の設置は作業員とか募集すれば街の人にも仕事をあげられるよね？」

「そうですね、王宮区と上流区の作業で経験を積ませた職人と騎士を監督に付かせれば効率もあがるし、間諜が紛れ込む事も防げますしね」

「どうせなら貴族の人にもやらせて見ない？　現場監督」

人を指揮、指導する良い経験になるんじゃないかという朔耶の提

案に、レイスは『中々面白い試みですね』と肯定的に捉えて使えそうな人材に話を通してみる方向で纏まった。それから数日間、朔耶は工房でランプの製作に没頭し、イーリスの陣頭指揮の下、先ずは騎士達の手によって王宮区画で街灯の設置作業が行われた。

城門から城と神殿を等を繋ぐ道、離れの宮殿や兵舎、訓練場にも其々順路にそって等間隔に配置された街灯の明かりは夜間の見回りを容易にさせ、特に城と周囲の建物を行き来する侍女たちは今まで夜になるとランタン一つで真っ暗な中を移動しなければならなかった為、街灯の明かりは歓迎された。

庭園にも景観を損ねないように配置されて今までは見られなかった夜の景色という一面を得た王宮区では、これまで漂っていた閉塞感が破られ、街灯の明かりが王国の繁栄を示しているかのような希望を抱かせて、区内に勤める者の士気を高揚させていた。

そうして上流区にも防壁の門から順に設置が始まると、一周する頃には間諜らしき者の侵入した形跡が殆ど見られなくなり、侵入しようとした形跡や怪しい影を見つけて追跡したという巡回の警備兵から報告が上がるなどの効果が現れ始めた。

この頃になると朔耶のランプ造りも一番複雑な部分、削り出しが困難な部分を朔耶が専門で削り出し、他の簡単な部分や組み立ては専属の職人達に任せられるようになって製作の効率を上げていた。流石に朔耶の作る道具をそのまま再現する事はまだまだ難しそうではあったが、細かい削り出しの出来る工作機械でも完成すれば、後は職人の腕次第で同じモノが作られるようにもなるだろうという所までは来ていた。

「この所、ティルファでも魔力石を加工する研究がされているようですよ」

貴族街と一般開放区用の街灯ランプ製作に勤しむ朔耶の元に、ちょくちょく朔耶邸建設の打ち合わせに来るレイスが近隣国の時事ネタを持ってきた。

「へぇ～そうなんだぁ？　じゃあそのうち、魔力石を使った道具とか普通に売り出されそうだね」
「サクヤが作る程のモノが出来るとは思えませんけどね」
「おだてたってなんも出ませんよ～」
「それは残念」

魔力石の研究に限らず、バーリッカムの温泉宿に残してきたサクヤ式送風機などは製作を手伝った職人達が簡易型の送風機を量産してバーリッカム中の店や一般家庭にも普及させており、それを買い取ったティルファの学者が自国に持ち帰って構造を研究し、ベルト式の歯車や風車の有用性が認知されると瞬く間にそれらを使った機械の研究が広まった。今やティルファで盛んな研究といえば『魔術』『発掘品』に次いで『魔力石』『サクヤ式』が台頭している。

『サクヤ式』の考案者についての問い合わせも頻繁に寄せられているのだが、アルサレナの進言によってカイゼル王が『国家機密』として朔耶の情報を保護している為、直接朔耶の元に研究者達が押し寄せて来る事は無いが、偶にキトの豪商の従者と名乗る者がこっそり面会を求めて来たりする事もある。全てフレイに熱いお灸を据えられて退散しているが……

「そういえば、レイスのお屋敷も修繕終わったんだって？」
「ええ、ついこの間に。　この前から父がそろそろサクヤを招待し

ろと責っ付いてますよ」
「あ、もしかして今日はそれで？」
「お忙しくなければ」
普段の微笑に二割増し位で優雅に手を差し伸べるレイス。
「お忙しいです」
「それは残念」
素気無くぺしっと手を叩き落とされたレイスは、面白そうに苦笑しながら手を引っ込めた。
「で？　ほんとは何？」
「……顔に出てましたか？」
朔耶の本題に入れという追求に、レイスは普段の微笑では無く本物の、若干翳りを帯びた微笑でそう尋ねた。
「勘」
「勘、ですか……　相変わらずとんでもなく鋭い勘ですねぇ」
はぐらかすように言ったレイスだったが、何時の間にか作業の手を止めて二人分のお茶を淹れて、お茶菓子まで用意している朔耶に肩の力を抜いた。
「実は……、フエルト卿の事で少し」
「そういえば、あれから何も聞かないね」
エルディネイア誘拐事件で暗殺対象に指定されていたフエルト卿

だが、レイスは『フエルト卿の自演的陰謀説』を唱えて彼を怪しいと見ていた。事件の主犯と思わしき黒いローブの魔術士は結局その後も見つかっておらず、事件はやや未解決気味に終わっている。

「近く、宮廷魔術士の選定の儀があります」

レイスの父ルィバンス伯を退けたフエルト卿が宮廷魔術士に就いてから四年余り、そろそろ次の選定の儀が行われる趣の通達が各門閥家の魔術士にもたらされている。ルィバンス伯は高齢で体力の低下も著しく、選定の儀による魔術戦を行うには酷だろうという事で家督を継ぐ立場にあるレイスに選定を受ける資格が巡って来ていた。

「受けるんでしょ？」

「当然です。　僕はその為にクルストスで騎士の任についても、魔術を使い続けて来たのですからね」

いつも少し斜めに構えて飄々としているレイスには珍しく、真剣で真っ直ぐな感情の篭った返答に朔耶は目を丸くした。

「レイスのそんなやる気満々なとこってあんま見た事ないねぇ」

「ふふ……　何時ものように余裕ぶっていたい所なんですけどね、今度ばかりはそうも言ってられませんから」

そう言ってカップに口を付けると、レイスは本題に入った。

「選定の儀では精霊石の付いた特別な腕輪を装着して魔術の腕を競います」

「精霊石の腕輪？」

「ええ、王家の秘宝ともいえる腕輪でして、行使される魔術が全て光弾に変換されるモノです」

詠唱で水を使おうが風を使おうが火を使おうが、また攻撃魔術であろうが支援魔術であろうが全て光弾となって飛び出し、これをぶつけ合う事で勝敗を決める。選定の儀は勝ち抜き戦式で行われ、純粋に魔力の大きい者と、魔術の運用に優れた者が勝ち上がれる仕組みだという。

「ですが前回、父と戦ったフエルト卿は自らの放つ光弾の威力に翻弄されていました。　父の魔力や戦闘術がフエルト卿よりも優れているのは普段の模擬戦の結果からして明らかです」
「うん、その話は前に聞いた事あるよ。普段は実力を隠してたって事にするには、ちょっと不自然な所があるよね」
「ええ……　ですので今回は、サクヤに不正の監視をお願いしたいのですよ」
「どうやって？」

レイスの計画では、当日までに選定の儀に参加する者の定期的な魔力測定を行い、戦いの直前と直後にも行って魔力に大きな変化がないかを監視するというモノだった。

「ドーピング検査みたいだね……」
「やってくれますか？」
「ん～それはいいけど、それくらいだったら別にあたしじゃなくても測定器があれば誰でもいいんじゃないの？」

珍しく積極姿勢なレイスに素朴な疑問をあげる朔耶。

「そこは勿論、サクヤの勘を頼っての事ですよ」
「勘、ねぇ……　なんか便利に使われてる気がするなぁ」

実際色々便利ですからねぇなどとのたまうレイスに『くらっ』と稲妻デコピンをかます朔耶なのであった。

「さーて、それじゃあ今日も抜き打ちで検査に行ってきますかね」

選定の儀が十日後に迫ろうかというこの日、朔耶はランプ造りを一段落させて王宮区の兵舎に向かっていた。兵舎の一角には数日前から選定の儀に参加する各門閥家から選ばれた魔術士達が集まり、儀の本番に向けて修練に励んでいる。朔耶は時折ここを訪れては抜き打ちで魔力測定を行い、全員の魔力量を観測して回っていた。

不正者を取り締まる為の魔力測定なのだが、それを不敬だと怒る者は無く寧ろ自らの魔力の成長具合を定期的に確かめられるので、皆朔耶が測定に来るのを楽しみにしていたりするのだ。

測定器の扱いについては、以前急造したモノは近衛騎士団預かりとして滅多な事では貸し出し等は許されず、朔耶の使う測定器も王家の秘宝に類するモノとして慎重に扱われる事になった。なにせ相手が誰であろうとお構いなく魔力を暴いてしまうので、街に潜伏する味方の諜報機関員までも暴き出してしまうからだ。

丁度夕方になろうかという頃、何時もより早めに到着した朔耶が兵舎に入ると、訓練で汗だくになった王国騎士団の若い衆が汗を拭

こうと脱いでいる最中だった。男の園と表現するのは何分誤解を招きそうで憚られるが、鍛え上げられた体躯に光る汗、火照った筋肉達がこの場に現れた場違いとも言える小柄な少女へと一斉に振り返る。

「あれ？　サクヤ様じゃないか？」
「ほんとだ、どうしたんすか？　こんな所にサクヤ様一人で」

入り口で硬直しているサクヤに顔見知りの騎士達が声を掛ける。その内の一人が、サクヤの様子がオカシイ事に気付いて不用意に近付いた。その瞬間

バチ　バチ　バチ

朔耶の右手が白く発光して青白い放電現象が起き、騎士達は一斉にスザザザッと反対側の壁に後退った。そこでようやく朔耶も我に返って放電が抑まる。

「あ……　ご、ごめんね！」

間が悪かったと走り去る朔耶。男兄弟の間で育った朔耶は男の裸にはある程度の免疫を持ってはいたが、流石にこれだけ大勢のムキムキを前にすると乙女の羞恥が勝ってしまったらしく、真っ赤になった顔を両手で覆いながら『きゃーー』などと珍しく少女らしい悲鳴を上げて逃げていく朔耶の姿に、多くの騎士達が心奪われたのは無理からぬ事だった。

「あーびっくりした」

「いや～それは……　いきなり電を纏われた騎士達の方も驚いたでしょうねぇ」

兵舎の一角で魔術士たちの魔力測定を行いながらレイスと件の出来事で雑談する朔耶は、照かる筋肉の群れを思い出して身震いした。

「大体なんで皆あんな汗だくで兵舎に居るのよ……　ちゃんと汗くらい流して来いっての」

「うん？　その場合の汗を流すというのは……もしや湯浴みの事ですか？」

「湯浴みつーか、まあそんなトコかなー？」

「まあ、普通は帰宅した時くらいしか湯浴みなどはしませんからねぇ」

兵舎にも一応共用の身体を洗う場所はあるが、余程砂泥に塗れた時など以外は使われる事は無く、湯浴みのような身嗜みは任務が非番で自分の家に帰った時などにする程度だと、風習について講義するレイスに、朔耶は目を丸くして声を上げた。

「え！　それじゃ何時も身体洗って無いの？！　レイスも！？」

「大体は汗を拭き取るくらいですねぇ、洗い場も水捌けを良くした屋内に井戸があるだけの、湯浴みが出来るような施設ではありませんし」

僕は家が近いですから毎日湯浴みはしてますよと、さり気無く別の理由は隠しつつ付け加えるレイス。

「不潔！　不潔過ぎる！　病気になるわよそんなんじゃあ！！」

ちょっと洗い場に案内して！と息巻く朔耶に、こうなると誰にも

止められない事を良く分かっているレイスは魔力測定を速やかに終わらせて朔耶を兵舎の洗い場に案内した。

そこは敷き詰めた床石に溝が掘られて水捌けを良くした造りの、本当に井戸があるだけの少し広めの空間だった。利用者が滅多に居ない為、床石は乾ききっていたし、井戸の蓋も長く閉じられたままで、蓋の上に乗っている桶に付いたロープなどボロボロで半分切れ掛かっていた。

朔耶はこの閑散とした洗い場を見渡すと、ぶつぶつモードに入って井戸の状態や壁や天井、床石などを入念に調べて周り、レイスの伝手で鍛冶職人に部品の注文を出来るよう頼んだ。部品の詳しい内容は後で書簡にて知らせるからと、製作のアイデアを練りながら工房への帰途を急ぐ朔耶に、レイスも快く引き受けた。

「また何をやってくれるのか、楽しみですよ」

「それはそっちに繋いで、ここの柱はしっかりね。　あ、それはまだそのままにしといて」

三日後、兵舎の洗い場では朔耶の指揮の元、数人の騎士達が作業に駆り出されて洗い場のリフォームを手伝わされていた。壁際に穴の空いた棚状のモノを柱と共に設置して戸棚を並べたような状態にし、何やら粒々状に無数の穴の空いたよく分からない馬の足のような形の鉄と革で作られた器具が取り付けられて行く。

井戸の周りでも鉄と革で作ったらしき大蛇のような管が井戸の中に垂らされ、鉄製の棒が一本飛び出た機械が傍らに設置されている。

他にも横幅のある箱状のモノが壁の脇と天井付近にも取り付けられ、それらは革の管で繋がれている。

それに何故か『魔力石コンロ』らしきモノも運び込まれていて、作業をしている騎士達も見ている騎士達も、朔耶が此処で何をするつもりなのか検討もつかなかった。

「よし……　水槽も設置完了、後は実際に使ってみて具合を確かめないとね」

朔耶は手押しポンプで井戸の水を汲み上げる作業を隣に立っていた騎士に任せると、水槽の水量を確かめながら魔力石コンロに火を入れた。水槽には魔力石コンロを使った湯沸かし器ともう一機の手押しポンプが備え付けられていて、適温まで温まったお湯をポンプで各シャワー用の水槽に汲み移せるようになっている。

シャワー用の水槽はシャワーヘッドに通じる穴が弁で塞がれており、各シャワーヘッドの下に垂らされた紐を引くことで弁を開いてお湯をシャワーヘッドから放出する事が出来る。構造的には朔耶の世界でいう所の、一昔前の天井付近に水槽を持つ水洗便所だ。

丁度良い湯加減になった所で火を止め、井戸からの汲み上げも停止させて水槽のポンプでシャワー用水槽にお湯を移す。井戸のポンプを使った騎士は鉄の棒を上下するだけで水を大量に汲み上げられるポンプが珍しかったのか、水槽側のポンプ作業も引き受けた。湯沸かし器付き水槽のお湯が半分程になった辺りでシャワー用水槽から零れ始めたのでそこで汲み上げ停止。

「んじゃあ、誰か脱いでシャワー使ってみて」

いきなり脱げと言われて戸惑う騎士達だったが、作業に駆り出されて割と楽しんでいたノリの良い若い騎士達は『じゃあまず自分が』と徐に脱ぐと簡単に仕切られたシャワールームに入り、朔耶の指示に従って天井付近に備え付けられた水槽から伸びる紐を引く。

「おおう、湯の雨だ！」

「これは……中々気持ちいいかも」

ザァーという雨音にも似た音を立てて降り注ぐ湯を浴びて作業の汗を洗い流した騎士達は、これは訓練の後にでも浴びればかなり心地良いかも知れないぞと称賛し合った。

シャワーは水槽一回分で約一分程お湯を吐き出し続けたので、さっと洗い流すくらいには丁度良いだろうと、朔耶は水槽の予備や各種交換用部品もこの仕様で決定して今回の作業の終了を次げた。後は使い方や『空焚き注意』などの注意事項を書いた案内札でも掛けておけばよい。

「みんなお疲れ様～、汗掻いたらちゃんと身体洗ってね」

「お疲れ様でした、鍛冶職には僕の方から伝えておきますよ」

「うん、よろしくねー。　レイスもお疲れ～」

荷物を纏めて帰宅の準備を始めた朔耶に、シャワーを浴びていた若い騎士達が声を掛ける。

「サクヤ様は浴びて行かないんですか～」

「脱ぐの手伝いますよ～」

「セクハラ禁止」
「ふぎゃ！」
「ぐはっ！」

床石の溝を流れてくるシャワールームのお湯に指を浸けて謎の呪文と共に電撃を喰らわせる朔耶。洗い場改め、シャワールームに騎士達の笑い声が巻き起こった。

帝国の動向や不安定な国内の窮境をほんの一時（ひととき）忘れさせてくれるような、穏かな空気に包まれていた。

33話：急転

『なんとか測定器を入手出来ないものか……』

選定の儀を目前に控え、彼は焦りを隠し切れない様子で自室の中をウロウロと歩き回っていた。

自身の魔力を魔力石五十八個分だと測定されて以来、抜き打ちの測定に現れる朔耶を警戒して『発掘品』の使用は控えてはいるが、このまま選定の儀に挑めば間違いなく他の魔術士達に敗北する。どうにか修練にて六十二石までは伸ばしたものの、アクレイアの子息は七十一石から七十六石まで力を伸ばしている。

彼、フエルト・バルト・コースティン伯爵は、最近連絡が取り辛くなった帝国の密偵に測定器の奪取を依頼しようと考えていた。あの道具の有用性は帝国も興味を示す筈で、上手く測定を誤魔化せる方法が見つかれば今度の選定の儀でも自分が勝利出来る筈。そうすればこの先しばらくは宮廷魔術士の地位を維持しつつ、フレグンス国内での工作で帝国密偵に対する協力を継続して帝国の偉業に貢献出来る。利害は一致している筈だ、と。

この四年の間にフエルト卿が派閥に引き込んだ門閥家や中流貴族達は、宮廷魔術士の権威あっての人事と口利きで交渉して得たモノだ。この権威を失えばアッサリ鞍替えする連中である事は卿自身が一番よく分かっている。只でさえ朔耶の存在と活動によって水面下ではじりじりとアクレイア家に押し返されている現状、ここで宮廷

魔術士の地位を取り返されるような事態になれば、今度はコースティン家が没落する番だ。そうなれば帝国からもそっぽを向かれる事は必至である。

『なんとかせねば……なんとか……』

「フエルト様」

「おお、戻ったか！　して、密偵とは連絡が付いたか？」

帝国の密偵との連絡係りに向わせた部下が戻り、早速首尾を尋ねるフエルト卿に対して部下の魔術士は若干言い難そうに声を潜めると、密偵からの伝言を伝える。

「……それは……いや、しかし……」

「既に帝国側ではその方向で決定しているそうで……、あとはフエルト様の決断のみかと」

街灯設置事業により以前よりも活動を制限され始めた密偵達は、フエルト卿の依頼に次いでこの問題に対する指示も本国に問い合わせた結果、本国から一つの指令が下された。王都では選定の儀が行われる時期なのでフレグンス内の感心は皆其方に向いている。その隙を狙って実行せよという指令で、密偵はこの指令の実行にフエルト卿の協力を要請した。

彼らが集めた情報から推測しても、コースティン家は今度の選定の儀を過ぎればフレグンス内で力を失う事は明白だった。それ故の協力要請、捨て身で帝国に仕える忠誠を示すか、フレグンスで静かに没落して消えるか、選択を突きつけたのだ。

「……そうだな……もはや、この国に未練は無い」

これから帝国との間に戦が始まれば、帝国の保有する正規軍と集めに集めた傭兵部隊の大戦力でフレグンスは瞬く間に陥落するだろう。なにせ背後からもサムズがクリューゲルに侵攻する計画が進んでいるのだ。フレグンス一国で帝国の大戦力と向き合いながらクリューゲルの防衛にも戦力を割かれる事になる。

フレグンスが帝国領になった暁には、コースティン家は帝国貴族として迎えられる手筈になってはいたが、それが少しばかり前後するだけだとフエルト卿は覚悟を決めた。

「よし、ではその件の了承を伝えておいてくれ」

「わかりました……」

部下は一礼して退室すると　密偵の協力要請に了承を伝える為、再び屋敷を後にした。

『決行は選定の儀の前日か……』

選定の儀　当日は多くの騎士や貴族が集まり警備も強化される為、その前日が最も計画実行に適している。

「二度に渡って大きな計画を阻んだ貴女ですが……御自身がその対象となった場合はどうですかな？」

フエルト卿は尽く計画を邪魔してくれた朔耶の黒髪と黒い瞳を思い浮かべながら、眠りの香を取り出して量を確かめた。

「だあああああ！　やっと終わったあああああ！！」

一般区に設置する分の部品を造り終え、王都全域に設置する為に必要なランプを揃える段階まで漕ぎ着ける事が出来た朔耶は、何時もの如く雄叫び伸びをして作業終了の合図を出した。直ぐにフレイが適温のお茶を持って来てくれる。

「お疲れ様でしたサクヤ様、これで暫らくはゆっくり出来そうですね」

「だね～～、ここんトコずーーっと部品作りだったから　久しぶりに学院の模擬戦見物にでも行きたいな～」

ズズーとお茶を啜りながら椅子の背凭れにだらしなくふやけている朔耶に、専属の職人たちが挨拶をして帰って行った。もう夕刻を過ぎている。

「残りの作業は職人さん達に任せておけば大丈夫だよね」

「そうですね、後はもう組み立てるだけですから」

二人でお茶菓子をポリポリ齧りながら暫らく雑談に興じ、話題は明後日に控えた選定の儀に移った。当日はレイスの世話係としてフレイが付き人をする事になっている。選定の儀は一般公開はされていない為、城で要職に就く官僚の関係者しか観戦する事は出来ないが、それでもかなりの人数が集まると予想される。今回は特に、前

回からのアクレイア家とコースティン家の確執も然ることながら、そのアクレイア家の子息がフエルト卿に挑むとあっては中々見逃せない対決であるというモノだ。

水面下での中流貴族の取り込みや王家所縁の者との蜜月といい、近頃復興著しいアクレイア家だが、その立役者であるレイスが宮廷魔術士の座に就く事になれば、門閥家の派閥による力関係が引っ繰り返り、貴族内部の勢力図が一気に書き換わる。

「レイスが宮廷魔術士になったら、忙しくてフレイも寂しいんじゃないの？」

「それは……でも、レイスさまは絶対に宮廷魔術士の地位に就くと仰ってますから」

大丈夫ですとレイスに対する信頼と期待を滲ませるフレイに、朔耶は久しく感じてなかった『何か』が勘に引っかかった。なので今回も感じるがままに口にして見る。

「レイスってなんで宮廷魔術士になりたいのかな？」

「え？　それは……家の復興とか……コースティン家への雪辱とか……」

「それだけ？　本当に？　まだ何かあるんじゃない？　何か隠してない？　ねえ？　どうなのよ？」

「あ、う、そ、その……わ、私は……あの……」

何故か急に慌て始めるフレイ。その反応からやはり何か他にも理由があると見た朔耶はさらに追求を試みる。逃げられないように腰に手を回してがっしり密着すると、頬を撫で上げながら『ほ～ら言ってごらん』ってなノリで白状を迫る。

「はうあう～で、でもこれは……こ、公私混同になるので……内密

に……」
「ほうほう？　公私混同とな？」
『これ以上は許してください～』ともがくフレイに、『もっと言え～』と迫るサクヤ。
「そ、その……レイスさまが、宮廷魔術士になれば……」
「なれば？」
「き、宮廷魔術士の任命権で……」
「ふむふむ」
「……何をしているんです？」
突然響いたレイスの声にはっとなった二人が顔を向けると、工房の入り口の所に扉を開けて入って来たレイスがそのままの体勢で怪訝な表情を向けていた。その視線に改めて自分達の状態を確認する朔耶とフレイ。
並べた椅子の上に横たわるような体勢でもがくフレイの腰を抱き、伸し掛かるようにしながらフレイの頬を撫で顔を寄せている朔耶。傍から見れば朔耶が仕事場でフレイを押し倒しているようにも見える。思わず二人して顔を赤らめると、慌てて離れた。
「はあ……遂に手を出してきましたか……」
「ちっがーーーう！！」
「ご、誤解ですレイスさま！！」
暫らくぎゃーぎゃーと大騒ぎした後、テーブル代わりの作業台に

着いて並べられた夕食をつつく三人の姿。レイスのおでこには赤い痣が出来ていた。いつも朔耶にからかわれるので意趣返しにからかったと冗談めかして微笑みかけた所、褒美に稲妻デコピンスペシャルを賜ったという証である。

「で？　任命権で何をするつもりなの？」

「フレイを魔術士隊に組み込もうと思いまして」

朔耶の執拗な追求に諦めたように話すレイス。

「うん？　それの何処が公私混同なの？　フレイってかなり優秀な魔術士なんでしょ？」

選定の儀に選ばれた魔術士達の魔力計測により、正規の魔術士が持つ魔力は平均で六十石程だと分かった。フレイの持つ魔力は九十石以上、かなり突出した魔力の持ち主だと言える。実力が裏打ちされているならば、近しい者を召抱えても身内贔屓という事にもならないのでは？と問う朔耶に、レイスは少しバツが悪そうに説明する。

「魔術士隊に組み込む事で、フレイを貴族の身分に推し上げる事が出来るんですよ」

フレイはアクレイア家に仕える使用人という身分にある。彼女の義父である故エイディルト・バーン氏はアクレイア家で魔術の指導を行っていた際、フレイも同伴させていた。フレイはエイディルトに魔術の才を見出され、後継者として孤児院から引き取り育てられていたのだ。

エイディルトが老衰で亡くなった後、残されたフレイはアクレイア家が引き取る事にしたのだが、この当時既にアクレイア家は没落していた為、下手に娘養子として家に迎えれば『高名な魔術士の娘

であり且つ由緒ある門閥家の令嬢』という事で圧力と共に縁談が持ちかけられるのは目に見えていた。

「家とフレイを護る為に、使用人として雇う形で家に迎えて今に至る訳です」

「ふーむ、じゃあ今なら養子に迎えても大丈夫って事？」

「いえいえ、養子に迎えれば僕と結婚出来ないじゃないですか」

「れ、レイスさま……」

つまり、門閥家の子息として貴族の身分に無い者を娶るような事は身分に厳しいフレグンスではありえない事なので、その問題を解消する為にフレイを宮廷魔術士の権限で持って魔術士隊に任命し、貴族の身分に推し上げる。それが一応公私混同に当るという事らしい。職場を同じにする事で一緒にいられる時間も確保しているとも言えるので言い過ぎという訳でもない。

「つまりそれって……レイスが今までやって来たあたしの獲り込みの謀とか、家の復興で動き回ってる事とか、宮廷魔術士になりたい事とかの理由は全部、フレイと結婚したかったからって事？」

「まあ、そうなりますね」

ポリポリと照れるように頭を掻くレイスに、頬を染めて俯くフレイ。何というかご馳走様な気分にさせられる朔耶だった。

「ドーソンといいレイスといい、この国の男は一途なのが多いね～」

――翌日――

フレイは明日の選定の儀に備えてレイスの傍に付く事になり、朔耶は一人で工房の作業を見回りながら職人達にお茶を淹れて恐縮させた後、昼食を摂りに城に向かった。今日はレティレスティアに御呼ばれしているのだ。選定の儀が終わるまでの間、フレイの代わりに警護に付く騎士とも顔合わせがある。

「城までよろしくねー」

工房脇に停めてある馬車に乗り込み、御者さんに声を掛ける。馬車が走り出して直ぐ、朔耶は奇妙な感覚に眉を寄せた。その感覚は以前エルディネイアが学院で行方不明になったと聞いた時に感じたモノに似ていた。

「なんだろう……？」

あの時は自分の中の精霊に語り掛けて誘拐事件の断片を掴んだのだが、今回も何か掴めるかもしれないと思いつつも揺れる馬車の中では集中し辛いので、城に付くまで待つ事にする。そうしてふと窓の外の景色を見て違和感を感じた。

「あれ？　何時もと違う道じゃない？」
「ううん、こっちで合ってるわよ？　子猫ちゃん」

朔耶の問いに答えたのは御者台で振り返った妙齢の女性。御者の格好をして帽子を被っているがその顔立ちには見覚えがあった。

「え!?　ヴィヴィアンさん?　なんで?」

ヴィヴィアンは赤い唇に妖しげな笑みを浮かべるとスイッと腕を振るい、御者台から糸のようなモノを使って馬車の扉を開けた。途端、琥珀色の煙が生き物のように車内に飛び込んで来て朔耶に纏わり付く。

「わっ!　何これっ　けほっ　息が……」

煙を吸い込んだ朔耶は高い所から落下するような感覚を味わいながら急速に意識が遠退いて行くのを感じ、やがて深い眠りに落ちた。煙は四散して跡形も無く消え失せ、馬車の扉が閉じられる。

「さってと、これから帝国へご招待ね」

馬車は一般開放区の外れにある古い工房跡地が並ぶ廃墟に入って行くと、既に出立の準備を整えて待っていたヴィヴィアンの仲間達が手際よく馬車から朔耶を運び出して布切れや葉の付いた小枝でカモフラージュされた敷地一杯に鎮座している巨大な『籠』の中に運び込む。少し遅れてやってきたフエルト卿とその従者が揃った所で全員が『籠』に乗り込み、彼らを率いる隊長が竜笛を吹いた。

周囲の廃墟の地下に其々身を隠して世話を受けていた四頭の飛竜が竜笛に応えて空に舞う。竜たちは『籠』の傍に降り立って籠から伸びる鎖の金具を自身の身体に装着してあるベルトに繋ぐと、四頭の息を合わせて飛び上がった。竜が多く生息する帝国でよく見受けられる『竜籠』その中でも四頭立ての竜が引く高さ三メートル、幅五メートル、全長十二メートルにも及ぶ『超大型竜籠』である。

一般開放区から飛び上がった四頭の竜が引く大型竜籠の姿は一般区からも数人が目撃していた。竜籠はどんどん上昇を続けながら北西の空へと消えていった。

「イーリス、サクヤを見掛けませんでしたか？」

約束していた昼食に現れず、交感による連絡も無い事に心配したレティレスティアは、朔耶を探しているうちに明日の警備に関して城内を回っているイーリスを見つけ、声を掛けた。

「いえ、今日はまだ見ておりませんが……工房に詰めているのでは？」

「それが、工房から戻った侍女たちはお昼前には工房を出たと」

イーリスも朔耶の人となりを理解している為、連絡も寄越さず寄り道をしているとは考え難いと判断し、外回りの騎士に尋ねてみると言って兵舎の方に向かった。王女であるレティレスティアは軽々しく兵舎に顔を出すような事は出来ない為、こういう時は婚約者候補の立場にあるイーリスを頼るしか無い。

例え相手が近衛であっても他の騎士とはあまり親しく接する事は憚れる。朔耶との接し方に慣れると窮屈に感じられる関係だが、それがフレグンスの王族としてのけじめというモノだった。

イーリスを見送った後、レティレスティアは交感を試みて意識の

糸を城全体にまで伸ばしてみるが、やはり朔耶は見つからなかった。

四頭の竜が引く巨大な竜籠が飛び立って行く所を目撃したと言う街の住人達の証言により、付近を捜索した騎士達から朔耶が工房と城を行き来する為に与えられている馬車が見つかったという報告が届いたのは、夕刻が過ぎて連絡を受けたレイスやフレイも捜索に加わった頃だった。

「竜籠は帝国でよく利用される乗り物ですが……四頭立てという程のモノとなると」

「まさか！　サクヤはバルティア帝に……」

レティレスティアが顔色を失う。　其処に更なる急報が入った。

「申し上げます！　コースティン家の使用人がサクヤ様の馬車の御者と名乗る者を保護しているとの連絡が入りました！」

「御者の話ではサクヤ様の工房前で待機していた所を何者かに拉致されたとの事ですが、コースティン家の地下に拘束されている所を使用人が発見した様です」

王国騎士団からの報告にレイスの眼が厳しくなり、フレイも表情を硬くしている。そして魔術士隊の執務からフエルト卿と連絡が付かない為、業務が滞っているとの苦情が寄せられ、朝方からフエルト卿の行方が分からなくなっている事が判明した事でレティレスティアは王女の権限を使って近衛にコースティン家の捜索を命じた。

コースティン家から帝国との繋がりを示す証拠の品や書類が見つかった事は、フレグンスの貴族層に大きな衝撃を与えた。そして、それと知りながらコースティン家に組していたと思わしき貴族の名も見つかった書類に記されていたが、これはフエルト卿がフレグンスを混乱に陥れる為に態と残したのだろうというレイスの進言により、慎重に検証される事になった。

朔耶が帝国に連れ去られた事で特に心労を心配されたレティレスティアは。

「必ず取り戻します」

そう一言だけ告げると、祈りの儀式に出向いて行った。気丈に振舞っている事は一目瞭然だったが、朔耶との触れ合いで芯の強さが表に出るようになったのだろうと受け止められた。

選定の儀は予定通り行われる事になり、レイスは普段の微笑を消して鬼気迫る雰囲気を纏いながら儀に挑む事を父ルィバンスに報告した。

「近く帝国から何らかの動きがあるかも知れませんからね……サクヤを取り返す算段を付けて措かねばなりませんから」

フレイは自分が警護を外れた隙を付かれた事を気に病み、レイスの世話係をする所か逆にレイスから気を使われる程落ち込んでいた為、暫らく屋敷で休ませる事にしていた。実力的に見てもレイスならば一人で選定の儀を勝ち抜けるだけの経験も力もある。朔耶を取り返す為にも、フレイには早く立ち直って貰う必要があった。

コースティン家の裏切りによる帝国の朔耶誘拐の報は、朔耶を個人的に知る者やサクヤ式を通じてその恩恵に与っていた多くの民の心を動かし、揃わなかった近隣国との対帝国政策の足並みを揃える切っ掛けとなった。　尤も、それを邪魔していた人物であるフエルト卿がいなくなった事も結束を早めた結果に繋がっている。

――少し前

近衛騎士団がコースティン家の捜索に出動した刻、雲の上を行く四頭の飛竜に引かれた超大型竜籠の貨物室。

「さむっ」

朔耶は全身を覆う寒さと急激に肌を襲った冷たい空気に目を覚ました。薄暗い天井を覆うように立つ目の前の人影が、朔耶のジャケットの前を開いてシャツを捲り上げようとしていた。冷たい空気を感じたのはこのせいだ。

「ナニやってんのよ！」

「ぐっ……」

咄嗟に蹴りを放つと、グニャリとした嫌な感触が靴底の裏から感

じ取れた。変なもん蹴っちゃったと足を引っ込め、半分捲り上げられたシャツを直す朔耶。その時、自分の腕に鎖の付いた枷が填められている事に気付いた。以前王都までの旅路でエバンスの街に着いた時に見た術封じの枷と良く似ている。

くぐもった声を漏らして蹲っていた人影は、睨みつけるような眼で顔を上げた。

「あ！　黒いローブの人！」

エルディネイアの事件で取り逃がした黒いローブの魔術士。今は普通の服を纏っているが、痩けた頬や窪んだ眼の陰鬱とした雰囲気は黒いローブ姿の時と変わらない不気味さを醸し出している。

「ていうか、ここ何処よ」

キョロキョロと周囲を見渡して現状を確認する。薄暗いガランとした物置のような木張りの部屋で、隅に木箱や毛布らしきモノが積んであり、天井には申し訳程度の明かりを放つランプが一つ揺れている。そしてやけに寒い。

「クク……ここは既にティルファの上空辺りだろう、お前に逃げ場は無いぞ？　異国の娘」

そう言って手を翳した魔術士に、立ち上がった朔耶は身構えて警戒した。朔耶は自分が誘拐された事は最後の記憶からして明らかだと理解していたが、ティルファの上空という意味が分からないでいた。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」

「！」

魔術士の詠唱により巻き起こった突風が朔耶の身体を吹き飛ばし、背後の壁に叩きつける。しかし魔術士も自身が放った魔術の反動でよろめいていた。

「ク……　流石は『発掘品』、凄まじい増幅力だ」

「……は、発掘品？」

ケホッと咳き込みながら身体を起こした朔耶は聞き覚えのあるキーワードに言葉を返す。魔術士はニヤリと口の端を上げると、袖を巻くって二の腕に装着された腕輪のようなモノを見せた。

「古代魔法文明の遺跡より発掘された増幅器、コレがあれば私にもこれ程の力が振るえるのだ」

「それが無きゃショボイって事じゃない」

朔耶の挑発に再び手を翳す魔術士。詠唱に入ると同時に斜めに走りこんだ朔耶は突風を躱して懐に飛び込み、一撃入れようと振りかぶる。

「増幅器の便利な所は増幅した魔力と素の魔力とで別々に術を行使出来る所にあってな」

素の魔力で別に発現させていた風の塊が朔耶の身体を弾き飛ばした。転がった朔耶はそのまま反動を利用して起き上がった瞬間、横から襲い掛かった突風に軽々と吹き飛ばされて再び壁に叩きつけられた。

「くは……っ」

増幅器を使った魔術の運用には素の魔力に増幅した分の魔力を上乗せした魔術の行使と、増幅した分の魔力と素の魔力を別途で交互に扱う点にある。これによって魔術の連続行使が可能になり、詠唱の隙を埋める事が出来る。

よろめきながらも足を踏ん張って耐えた朔耶の背後に風の塊がぶつけられ、押し出されて体勢を崩した所に上から襲って来た突風によって床に叩きつけられる。

「んん？　もう終わりか？」

倒れたまま動かなくなった朔耶に風の塊をぶつけて様子を見る。無防備に横たわる朔耶の身体が風の塊を受けて跳ねた。魔術士は人形のようにぐったりとして反応を返さない朔耶を確認すると、念の為に風の塊を発現させてからゆっくり近付いて行く。

艶のある黒髪が床に広がり、苦しげに閉じられた眼がゆっくりと開かれた。その黒い瞳が自身を覗き込む魔術士の姿を捉えると、恐怖の色を浮かべて見開かれる。

「い、嫌！」

自らの肩を抱いて身を縮めながら這う様に後退り、壁に背をつけて震える姿は、もはや只の無力な少女でしかなかった。

「どうした？　私にはまだまだ余力が残っているぞ？　んん？」
「いや……酷い事……しないで」

魔術士はニヤリと笑みを浮かべると壁際で震える朔耶の姿に満足と興奮を覚えた。『この娘の心は折れた、もはや抵抗はすまい』と

邪魔になった風の塊を四散させる。

「こ……や……と……ね」

「んん？　なんだ？　よく聞こえんぞ？」

ボソボソと呟く朔耶に顔を寄せる魔術士。幼げな顔立ちの怯えた表情が非常に加虐心をそそられる。魔術士は朔耶の両腕を拘束する枷の鎖を掴んで引き寄せた。

「あっ……」

「なんだ？　はっきり言ってみよ」

ジャラっと鎖の擦れる重い音が鳴り、魔術士の腕の中に引き寄せられた朔耶は小さく、しかしはっきりと通る声で言った。

「こうやって怯えて見せると、小さい奴程よく引っかかるのよね」

ゴンッ　と鈍い音が響き、魔術士が顔を仰け反らせた。至近距離からの頭突きという『無力な少女の反撃』と呼ぶには聊か無理のある奇襲攻撃、だが威力は絶大だ。そして今度はしっかり狙って『変なもん』を蹴り上げる。

魔術士が手を翳す動きを見せた瞬間、朔耶はすかさずその腕を蹴って方向を逸らせた。元々曖昧な狙いのまま放たれようとしていた突風は魔術士の身体を反動で押し返し、意図せず朔耶から距離を取る事になった。そこに走り込みながら両腕を振り被る朔耶。

「い　な　ず　ま　――」

「馬鹿め！　術封じの枷を忘れたか！！　――風よ集いて……――」

朔耶の右手が白い閃光を放つ。術封じの枷に刻まれた呪文はその

効果を発現している証として仄かな光を放っている、にも拘らず雷を纏う朔耶に魔術士は一瞬狼狽して詠唱が止まった。次の瞬間、魔術士の中断された詠唱は頬から突き抜ける衝撃に消し飛ばされる。

「ショートレンジびんたーーーー！！」

スパアアァン！！

「往復稲妻ーーーー！！」

カパアアァン！！

威力控えめな稲妻ビンタの連撃で朦朧となって膝を付いた魔術士に、朔耶は両手を組んで振り上げ、トドメの一撃を見舞った。

「トールハンマーーーー！！」

ゴシャッ

「たく……変態め～」

「中々やるじゃな～い」

床に沈んだ魔術士を見下ろし、息を切らしながら『どうしてくれようか』と考えていた朔耶に軽い調子の声が掛けられる。

「それにしても、男を乗せるの上手いわねぇ～」

奥の扉から四人の知らない男と一人の見知った女性、ヴィヴィア

ンが現れる。もう一人知っている顔、フエルト卿が扉の向こうに居るのが見えた。

「見てたんなら助けてよ！」

「あなたがどうするのか確かめたかったのよ、これも任務なのよね」

自分達の姿を見ても　さして慌てた様子を見せない朔耶に内心若干の戸惑いを覚えながらも、表面には一切それを出さずに会話を続けるヴィヴィアン。まずは今の出来事について確かめておく事が一つ。

「所で、サクヤちゃんさぁ――今、電撃使ってたけど、それ魔術じゃないでしょ？　何か特別な道具？」

術封じの枷は魔術を行使する者が呼吸のように循環させている魔力の放出を結界にて塞ぐ事で術の行使を封じている。精霊術士相手でも結界で精霊との交感を封じる事は可能だ。朔耶はほぼ無詠唱で雷を纏う事や、朔耶が作る高度な道具から推測して、密偵達はあれも発掘品のような道具を使った力なのではと睨んでいた。

「あれは気合よ」

「……う～ん、あたしとしては穏便に本当の事教えて欲しいんだけどな～」

言外に『力尽くで聞き出す事も出来るのよ～』と含ませた尋問に、朔耶は溜め息を付いて何処まで話すべきかと考える。

そしてふと、朔耶は自分の能力について物にお願いして言う事を聞いてもらえる事を思い出し、枷に意識の糸を絡めるようにして――

『枷さん枷さん……えーと、……壊れて？（はーと）』

朔耶が両手で鎖を握ってピンと引っ張ると、バラバラバラ……と粉々に崩れ落ちる術封じの枷。それを見たヴィヴィンアンを始め密偵達は一斉に顔を引き攣らせる。『今何をした？』そんな疑問が空気の凍りついた貨物室に渦巻いた。

術封じの枷を破るには枷の持つ結界以上の魔力を持って術を行使する方法がある。枷の結界が耐え切れなくなって触媒である枷に刻まれた呪文が消し飛ぶか、枷そのものが砕ける場合もあるが、まったく無詠唱で鎖ごと粉々にというのは在り得ない。

密偵達の隊長は威圧効果も狙って全員で観察と尋問に出向いたのだが、姿を晒したのは軽率だったかと、この得体の知れない力を使う少女に畏怖の念を懐いた。そんな密偵達に振り返った朔耶は、自由になった両手をプラプラさせながら

「とりあえず、お腹空いた」

と、ご飯を要求するのだった。

３４話：グラントゥルモス

フレングンスに長期潜入、諜報工作任務を経てフレグンスの要人一名を拉致し、亡命者二名を連れて帰国の途に着いている帝国密偵部隊ガルブレック・フォルソン隊長は、目の前に展開する理解の範疇を超える光景に頭を悩ませていた。

「ソース取って」
「ソースってコレ？」
「そう、それそれ」
「ちゃんと調味料もあるんだねー」

他の部下たちも軒並み戸惑いを纏ったままだというのに、一人だけこの状況に馴染んでいる女性隊員のアネット・ヴィヤンドには呆れを通り越して寧ろ尊敬の念さえ懐いていた。

術封じの枷を詠唱も無しに鎖ごと粉々にするような得体の知れない捕虜の娘と皿を並べて普通に食事をしているこの現状。一体どういう状況なのか誰か説明してくれという気分で件の少女、フレグンスの要人『王室特別査察官』のサクヤを覗き見る。

ちらり。

間諜として培った自然な動作で視線を向けたというのに、何故そんなにあっさり気付いて此方に眼を合わせて来るのか。慌てて視線を戻したガルブレックは内心で悩んでいた。

『本当にこのまま連れ帰っていいのか……』

結局、サクヤの力については詳しい事は聞けなかったのだが、道具の類ではなく精霊術の系統である事だけは分かった。本人にもよく分かっていないような素振がみられたが、どうにもこの娘は演技が上手そうだからと判断には慎重を期している。

帝国に連れて行く事に関しては『まあ、仕方ない』と言って特に逃亡や抵抗を見せる様子も無かった。

空の上なので逃亡のしようも無く、竜を操れなければ例え籠内部を制圧しても結局は帝国領まで運ばれる事になるのだから、それを見越した上での判断なのかもしれないが。

「な、何をしている！」

その時、ようやく目を覚ました魔術士、フエルト卿の従者が食堂にいる朔耶を見て声を上げる。

「飯食ってんのよ」

見りゃ分かるでしょとジト目で一瞥して食事に戻る朔耶。呆然としている従者に、声を聞きつけたフエルト卿が奥の部屋から呼びつけた。

「まったくいらん恥を掻かせおって！　よくも勝手に私の発掘品を持ち出してくれたな！」

「ヒィッ　申し訳ありません……！」

従者を詰り始めるフエルト卿を、朔耶は半目で流し見ながら『あ

の人カイゼル王の前に突き出したら従者の人と同じ反応しそうだよねー？』等と呟き、ヴィヴィアンが苦笑しながら相槌を打った。

食事も終わり、明け方には帝国領に入って昼には帝国の首都、『帝都クラティシカ』に到着するので休んでおく様に言われた朔耶は、この部屋で休むからと毛布を要求する。

「貴女は一応我々の捕虜なのだから、貨物室で休んで貰いたいのだが」

「寒いからヤ」

狼狽しながら朔耶の立場を説明するガルブレック隊長は部下に協力しろという視線を向けるが、頼みの綱のヴィヴィアンことアネットもお手上げポーズを返すだけだった。

食堂で休む事を押し通した朔耶は毛布に包まりながら帝国領に近付くにつれて自分の中にいる精霊が疼き始めるのを感じていた。そして先程から引っ切り無しに精霊らしき存在が寄って来ては精霊の加護の使い方を教えて行く。

直接言葉で説明する訳ではなく、精霊が自身に何が出来るのかを伝えてくるような感覚。まるで視(み)える人に気付いた浮遊霊達がワラワラ集まって来ては『私の話を聞いてくれ～』とやっているかの如く、朔耶の周りには沢山の精霊達が寄ってきては意識に力を伝えて行く。

お蔭でレティレスティアに交感を繋ごうとしても意識の糸を伸ば

すと他の精霊がそれに引っかかって上手く伸ばせないのだ。

『はぁ～～レティ達心配してるだろうなぁ……選定の儀に影響出なきゃいいけど』

とりあえず朔耶は今ここで交感をしようとすれば精霊達が群がってくるので落ち着いた場所に着いてからにしようと、レティレスティアに繋ぐのを諦めた。

もうすぐ帝国の首都に着くと言う。帝国に着いたら自分はどうなるのかと考えるが、不思議と不安は無かった。

『もしかして、これだけ沢山の精霊に囲まれたから安心してるのかな……？』

現れては消えて行くが何処か遠くに在っても直ぐ傍にいる事が分かる存在。自分の中にいる精霊の疼きが徐々に大きくなって行くのを感じながら、朔耶は束の間の眠りについた。

交代で朔耶の監視をしている密偵達はしばらくモゾモゾしていた朔耶から寝息が聞こえ始めると肩の力を抜く。

「ふぅ……しっかし驚いたわね。あの子、何か違うとは思ってたけど……」

「ああ、アレは道具の力とも考え難い。かと言って魔術とも違う感じがする」

「雷纏うのはまだ分かるけどね、精霊術は殆ど詠唱がないから……にしたってあの枷の破壊は不可解だわね」

「俺は正直、このまま帝都に連れ帰っても大丈夫なのか心配だよ」

隊長ガルブレックの不安を聞きながらアネットはサクヤの行く末

を考えた。帝都に到着してからの予定はまだ聞いていないが、恐らく直ぐに謁見の間で皇帝バルティアに接見される事になる。

朔耶の作る道具の評判は今やオルドリア大陸全土に響き渡り、間諜の報告を受けるまでもなく帝都にも知れ渡っていた。当然、帝国に協力する製作活動を要求される筈だ。其処での返答結果如何では直ちに処刑なんて事も起こり得る。

『まあ、あの子がそう簡単に処刑されたり懐柔されるとも思えないけどねぇ』

――帝都クラティシカ――

オルドリア大陸北西に広がる山岳地帯の僅かな平地を中心に、険しい山を開拓して建てられた自然の要塞都市。多くの戦士や魔術師が道場を開き修練場に集う剣の国であり、飛竜の産地としても知られる。

帝都の城は二重の防壁が六角形を象った巨大な城塞で、二重防壁の外側の防壁には巨大な投石器や大型弓が並び、内側の防壁は乗用犬や馬車を走らせる為の通路になっている。兵舎と共に兵達の家族も住めるよう居住区も併設されてあり、城の下層は城下街がそのまま組み込まれているような巨大さと人口を誇っていた。

城の裏側は切り立った崖になっており、立地上常に風が吹き上げる此方側の壁面に竜籠の発着場が設けられている。

朔耶を乗せた超大型竜籠は城の裏側の竜籠発着場に降下すると、

ズシンという重い音を立てて着地した。直ぐに係りの兵が竜と竜籠の鎖を外し、竜達は翼を休めに厩舎へとノシノシ歩いて行く。
連絡を受けていた衛兵達が集まり、帰還した密偵部隊を迎える為に竜籠の扉から発着場の出入り口まで整列した。

「うわ……あたしこういう雰囲気苦手」
「あら意外ね？　お偉いさんを前にしてもいつも平気そうなのに？」
「式典みたいなのは何か緊張するのよ」
「あっはっはっ　まあ、只のお出迎えだから気楽にね」

『その後の皇帝陛下との謁見はどうだか分からないけど』とアネットは内心で付け加えると、朔耶を伴って扉を開く隊長の後ろに付いた。

「帝国密偵部隊ガルブレック・フォルソン以下、部下四名、フレグンスより亡命者二名、フレグンス要人捕虜一名を連れ、只今帰還致しました！」
「長期の任務、ご苦労であった」

出迎えの衛兵が整列する中、上官と敬礼を交し合い、任務完了の報告をするガルブレック隊長。朔耶は『おおー軍隊調だ～』などと呑気な感想を抱きながら周囲をキョロキョロと観察していた。厩舎に向う四頭の飛竜が尻尾を振りながらひょこひょこ歩く姿は中々愛嬌があって思わず顔を綻ばせている朔耶に、衛兵達は奇妙なモノを見る視線を向けていた。
事前に知らされていた話では、フレグンスの要人捕虜一名とはこの少女の筈なのだが、枷も付けていなければ怯えている様子も無い。亡命者の間違いなのでは？と疑問に思う者もいた。密偵部隊の上官も捕虜に枷が付けられていない事をガルブレック隊長に問い質していたが、どうにも要領を得ない説明に首を傾げていた。

「ふむ……まあ、その事も問われるであろうが、とにかく今は謁見の間に急ごう。　陛下も御待ちだ」

上官の後に続いてぞろぞろと発着場の出入り口へと向う一行。朔耶は一度振り返り、高く連なる山脈の向こうと青白くくすんだ空を眺めると皆の後に続いた。

朔耶は自分の中の精霊の疼きが大きな波のうねりのようになっている事に、若干の戸惑いを感じていた。

『なんだろう……何か精霊を騒がせるようなモノが此処にあるのかな……？』

謁見の間は発着場と同じ階にある。朔耶を連れた一行は複雑に入り組んだ廊下を進んで行き、やがて大きな扉の前に出た。扉の前に立つ衛兵に密偵部隊の到着を知らせると内側から扉が開かれる。

中に進むと床にはふかふかの赤絨毯が広がり、向かい側の壁にも同じ様な扉があって扉番が立っていた。

部屋の中央辺りから右に曲がって正面に玉座のある壇上を仰ぐ造りになっていて、壇上までの両側に帝国騎士団と帝国魔術団が整列し、壇上では精鋭騎士団が玉座の周囲を固めるように配置されている。

身分に厳しいフレグンスにおいても、どちらかと言えばアットホームさを感じさせていたフレグンスの謁見の間や王の間に比べると、此方は何処か粛然とした雰囲気で緊張感に包まれていた。

そして玉座には黒い帝衣を纏ったグラントゥルモスの若き皇帝、第十四代皇帝バルティア・トラディアス・グランが目尻に掛かる銀髪を流しながら頬杖をついて退屈そうに鎮座している。

一行は壇の階段手前まで来ると上官と部隊長が一歩前に進み出た位置で片膝を付いて頭を垂れ、続く密偵部隊の部下達や亡命者のフエルト卿と従者もそれに倣う。

ざわり、という周囲のざわめきに、密偵部隊の上官と部隊長ガルブレックは何事かと畏まった体勢のまま振り返って絶句した。皆が皇帝の御前に片膝を付いて畏まる中、一人だけ突っ立っている者が居た。

紅い光沢のあるコートを纏って凛と立つ小柄な黒髪の少女は、その黒い瞳を真っ直ぐに皇帝へと向けている。

隣でアネットが慌てながら『膝ついてっ、膝！』と声を潜めてコートの端を引っ張っていたが、朔耶はそれを無視して皇帝を見詰めていた。

「その者は何故膝を付かぬ！　陛下の御前であるぞ！」

「エリスリング諜報官、その者はフレグンスより連行した捕虜ではないのか？　何故枷を付けておらん」

ガルブレック隊長の上官であるエリスリング諜報官は、側近達の問いに答えられず部下のガルブレック隊長に視線を向ける。向けられたガルブレック隊長は仕方が無いとばかりに恐る恐る側近達に答

えた。

「えー……それは、付けても意味が無いからであります」
「ああん？　何を言っておるのだ貴様は――」

「まあ、待て」

側近が厳しい叱責を飛ばそうとした時、黙って事の成り行きを眺めていた皇帝が口を開いた。相変わらず頬杖を付いて退屈そうに首を傾けたまま、皇帝は壇上の前に畏まる兵達の中で一人突っ立ったまま自分を見詰めている異国の少女に眼を向けた。

「娘、名は？」
「朔耶」
「ふむ、サクヤか。　噂では大層特殊な道具を作るそうだな」
「それほどでも」

皇帝に対して全く敬意を払わない朔耶の態度に居並ぶ騎士や魔術士達は目を瞠って色めき立ち、側近達は口をパクパクさせた後、慌てて皇帝と朔耶の間に割り込むと皇帝に自重を促し、朔耶に不敬者と罵りを浴びせた。

「何たる無礼な振る舞い！　我等が陛下に対する侮辱は許さんぞ！」
「普通に返事しただけじゃん」

顔を真っ赤にして怒鳴る側近に朔耶は飄々とした態度で返し、それがまた側近達の怒りに火を注いだ。

「それが無礼だと言うのだ！　陛下に敬意を払わぬは侮辱と知れ！」
「お前達！　早くその者を跪(ひざまず)かせぬか！　これ以上の不敬は許さぬ

ぞ！」

とばっちりを恐れて身を縮めていたフエルト卿と従者は皇帝への挨拶どころでは無くなり、さらに小さくなって静かに畏まっている中、同じ様に畏まって居た密偵部隊の面々は側近達に朔耶を跪かせるよう言われてどうしようかと途惑った。

竜籠の貨物室で見た術封じの枷を粉々にする力を畏れている部分もあるが、それよりも帝都に近付くに連れて朔耶の纏う気配が何か神憑ったモノになって行くのを感じていたからだ。

話せば普通に応対するので少し気になる程度ではあったが、ここに来てさらにその気配が強くなっている。人の纏う気配に敏感な彼ら密偵部隊の精鋭だからこそ、特に強くそれを感知出来ているが、頭に血が上っている側近達は気付いていないようだった。

「ね、ねぇサクヤちゃんてば、ここはホラ、偉い人の御前なんだから、一応礼儀としてね？　陛下に膝付いて頭下げて欲しいなぁ～って」

ガルブレック隊長の頼れる部下、アネット隊員のとても捕虜に対する対応とは思えないような宥め賺した諭し方に、側近達も周りの騎士団、魔術団の面々も怪訝な表情を浮かべる。が、それに答えた朔耶の言葉に謁見の間にいる者全てが言葉を失った。

「い　や　よ　　大体、なんで今あたしがここに居ると思ってんの？」

「え……それは～」

「あたしは、あんた達に攫われて、今此処に居るの。　誘拐されて来たの。　だからあそこでやる気無さそうに座ってる優男は誘拐犯の親玉なわけ。　な～んで自分を誘拐した連中の親玉に敬意を払わ

なくちゃならないわけ？　ひざまずけ？　ふざけんなって話、寝言は寝てから言ってよね」

フンッと腰に手を当てて踏ん反り返る朔耶。呆気に取られて静まり返った謁見の間に、我に返った側近の怒号が響く。

「ぶ、無礼者ーー！！　衛兵っ　其奴を引っ捕えよ！！」

あちゃーと顔を手で覆って天を仰ぐアネットと同じように眉間の皺を摘むガルブレック。慌てて衛兵が駆け寄ろうとした時、魔術団の列に並ぶ一人の団員が叫んだ。

「お待ち下さい！　その者、何か仕掛けております！」
「あ、精霊術使う人居たんだ？」

精霊神官の警告にそれを肯定するような言葉を発す朔耶、思わず動きを止める衛兵と警戒する騎士団に魔術団、それに精鋭騎士団も皇帝の周りに集まって護りを固める。静まり返っていた謁見の間は一転物々しい空気に包まれた。

密偵部隊の面々はもはや自分達の手に負えない事態となったこの状況、騎士団達の捕り物騒ぎに巻き込まれないよう朔耶から距離を取った。慌ててそれにくっ付いて行くフエルト卿と従者。朔耶はそれを見て肩を竦めると、周りをぐるりと取り囲む騎士団を見渡した。

朔耶は謁見の間に入った時から意識の糸を伸ばしてこの部屋にいる全員の位置を確認していた。竜籠の中で移動している最中に次々と寄ってきた精霊達に教わり、生物の位置を確認する交感の使い方、放射状に伸ばした意識の糸によって周囲の状況を正確に読み取るレーダーのような使い方を覚えていたのだ。

通常、交感を索敵などに使う場合は深い交感で長く伸ばした意識

の糸を探りたい方向に振るか、自身を中心にぐるりと回転させて糸に感じた建物や動植物などの自然物を感じ取る方法が使われるが、朔耶には交感の深度という制約が無い為　全方位に意識の糸を伸ばす事が出来た。

そうして意識の糸の一部を特定の場所に絡めたまま、別の場所にも新たに意識の糸を絡める事が出来る。意識の糸を絡めた場所には、そこに精霊の力を発現させる事が出来るのだ。うねりを帯びて自己主張をする朔耶の中の精霊の影響か、朔耶は身体の奥から力が漲って来るのを感じていた。

「少し待て、異国の娘よ」

退屈そうにしていた皇帝は頬杖をやめて玉座に座り直すと、兵達に取り囲まれている朔耶に声を掛ける。

「お前の言う事、至極尤もだが、立場を理解出来ぬ程愚かでもあるまい？　何故死に急ぐ」

「んん？　あたし別に死ぬつもりなんて無いよ？」

「これだけの兵を相手にか？　どう生きる？」

「別に相手にしなくても逃げればいいじゃん」

朔耶のその言葉に反応したのはやはり精霊神官だった。

「っ！　もしや転移術を使う気か！」

「いかん！　騎士は距離を取れっ　下手に巻き込まれれば身体の一部を持っていかれるぞ！」

「魔術士を前へ！」

「んな便利なもんが使えるんならとっくに使って帰ってるわよ……」

素早く陣形を組み直す帝国騎士団と魔術団の動きに感嘆を抱きつつも呆れたように呟いた朔耶は、皇帝に向き直るとウィンク一つ。

「じゃ、寝言の続きは夢の中で」

瞬間、カカァァンという乾いた音と共に青白い閃光が謁見の間を包み込んだ。続いてドサドサガチャガチャという物音が一斉に鳴り響くと、何かが転がる金属音を最後にシン……と静まり返る。先程まで聞こえていたざわめきも、衣擦れや鎧の軋む音も、場に満ちていた殺気に近い緊張感と共々に全て消え去っていた。そして扉を開く音と共に走り去る小さな足音が遠ざかり、再び静寂が訪れた。

最初に意識が戻ったのは特殊な任務に就いているだけに、魔術や意識の喪失に耐性を持つ密偵部隊の面々だった。小さく呻きながら身体を起こしたアネットは先に気が付いていたガルブレック隊長の呆然としている様を見上げると、周囲を見渡して同じ様に呆然として固まった。

謁見の間には衛兵、帝国騎士団、帝国魔術団、精鋭騎士団、側近達、全員がその場に倒れ付していた。玉座のバルティア皇帝陛下も座ったまま気を失っているようだ。

「ちょっと……なによこれ」

「まったく、信じられんな……」

あの瞬間、朔耶は謁見の間にいる全員に電撃を浴びせて気を失わせた後、そのまま逃亡したのだ。扉の外に居た衛兵も同じ様に電撃を浴びたらしく、慌てて駆け込んで来た彼らは謁見の間の惨状に絶句している。

次々と目を覚ましては起き上がる騎士団や魔術団の姿を見て、どうやら死傷者は出なかったようだとホッと一息つくアネットだった。

「おのれ小癪な真似を！　貴様達っ何時まで呆けておるか！」
「何としてもあの小娘を捕らえよ！　此処まで愚弄されてよもや取り逃がすような事は断じて……」

「まあ、待て」

怒り心頭で激を飛ばす側近達の言葉を遮ったのは、首を振りながら立ち上がるバルティア皇帝だった。彼は普段滅多に見せる事の無い笑みを口元に浮かべながら、謁見の間を見渡して言い放った。

「我が名においてサクヤの捜索と身柄の確保を命ずる。但し、何人（なんぴと）もこれを傷付けることは許さぬ」
「陛下……？」
「くく……　アレは余のものだ」

怪訝な表情をしていた側近は皇帝の言葉の意図に気付くと、慌てて反対した。

「まさか！　なりませんぬぞ陛下！　あのような下賤の輩を！」
「何を言う、我が精鋭達を前にしてアレ程の啖呵を切る胆力、余を含めお前達を一瞬で昏倒させる程の実力、そして民の生活を潤すであろう発明品に見る聡明な知性、これ程の逸材はそうは居まい？　余の妻に相応しい」

騒然とする謁見の間。皇帝が自ら朔耶を妻に迎えると明言したのだ。余りに予想外の展開に密偵部隊も唖然としたまま、アネットの『サクヤちゃんすげー玉の輿じゃない……』という呟きに頷くばかりだった。

「陛下！　あの者は陛下を愚弄したばかりか、陛下の御身にまで無礼を働いたのですぞ！」
「尊き皇帝陛下の血筋にはもっと相応しき高貴な御婦人を迎えられるべきです！」

尚も食い下がって反対意見を陳べる側近達に、バルティア帝は欠伸をしながら手を払って退室の意を示すと――

「ならば早く余の眼鏡に適う娘を連れて来る事だな、精霊術士として名高いフレグンスの王女も未だ我が元に届かぬではないか？」

そう言って精鋭騎士団の団長に視線をやり、バツが悪そうに俯く姿を笑うと、さっさと謁見の間から出て行ってしまった。騒然としていた一同はとにかく朔耶を捜索せねばと、各々で小隊を組んでは城内に繰り出して行った。

密偵部隊も事務処理が残っているガルブレック隊長とエリスリング諜報官を残して其々単独で捜索に出て行き、謁見の間に残された側近達は今後の対策についてぼそぼそと密談を始めていた。そんな彼らに遠慮がちな声を掛ける者が居た。

「あ、あのぅ　我々はどうすれば……？」

すっかり忘れ去られていたフエルト卿とその従者だった。

「ん？　ああ、亡命者か。　下の階で手続きを済ませて後は係りの者に従うがよい、おいっ衛兵！　この者達を案内してやれ」

声を掛けられた側近はそれだけいうと、密談に戻った。帝国にとって敵対する事になるであろうフレグンスからの亡命者とはいえ、フエルト卿の場合は祖国と主義主張を違えての已むを得ない亡命で

は無く只の背信行為であるだけに、皇帝への忠義に厚い衛兵からのフエルト卿に対する視線は冷たいモノだった。

「や～っちゃった～やっちゃった～と」

小声で鼻歌などを歌いながらも内心ドキドキしている朔耶は意識の糸を伸ばして人の気配を探りつつ、城内の入り組んだ廊下や部屋を転々としながら逃亡を続けていた。無限の魔力を持つとはいえ、それを扱う精神力は朔耶個人のモノなのでやはり無茶をすればそれだけ疲れる。

「ああ……眠い……」

何処か休める所は無いかと安全な隠し部屋のような場所を探していた朔耶は、壁の間に小さな空間があるのを見つけてその空間と隣り合っている部屋に潜り込んだ。長テーブルに椅子がズラッと並べられた会議室のようなその部屋は、灯りも無く窓に掛けられた分厚いカーテンに日の光も遮られて、薄暗く静まり返っている。

空間のある側の壁に隠し扉らしき仕掛けを見つけたので、朔耶は精霊に頼んで鍵を開けて貰い、中に入った。

「五つも鍵が付いてるなんて、なんつー面倒な隠し扉……」

ライターで明かりを確保すると、この空間の隠し部屋らしき様相が浮かび上がった。ランプがあったのでそっちの明かりを付けてラ

イターを仕舞い、部屋を見渡す。三畳一間程の空間に質素だが柔らかそうな少し広いベッドが一つ、キャビネットと小さい机、椅子。それだけしか無かった。

埃っぽくは無い事から、人の気配は感じられるものの生活臭までは感じない。偶に使う人が居るのかもしれないなぁと、朔耶はボンヤリし始めた頭で考えながらベッドを調べる。

「うう……そろそろ限界かも」

ジャケットを脱いで壁に掛けると、柔らかいベッドに寝そべった。途端、身体中の力が抜けていく心地良さにそのまま眠りに付きたくなったが、睡眠直前の気力でレティレスティアへの交感を試みる。

距離の制約も受けない朔耶は本来であれば『意識の糸を伸ばす』という工程も省略出来るのだが、朔耶自身の持つ常識感が『距離の概念』を持って交感を行っている為、遠くに伸ばすという工程を経て離れた相手に繋いでいる。それが精神力を疲弊させる原因になっているのだが、人の持つ既成概念という枷は中々簡単には外せないモノなのだ。

――サクヤ？　サクヤなのですか！？――

『あーやっと繋がった、やほーレティ』

――ああ！　サクヤ！　サクヤ、今何処に居るのです！？　無事なのですか！？――

『今ねぇ、帝国のお城のどっか隠し部屋みたいなところ』

――帝国！　やはり帝国に攫われていたのですね……それにしても帝国の城から交感を繋ぐなんて――

『ん～途中で繋ごうと思ったんだけど、なんか精霊がわらわら寄って来ちゃってさー』

交感を繋いだ直後はかなり興奮した様子だったレティレスティア

は、朔耶が何時もの調子で話す事に安心してか落ち着きを取り戻した。朔耶は道中の出来事と城に着いてからの顛末を話してレティレスティアを憤慨させたり心配させたりすると、一つ頼み事を持ち掛けた。

『な～んか精霊を騒がせるようなモノがあるみたいなのよ、王妃様辺りに聞いて調べて貰えないかな？』

――分かりました、精霊が寄り集まってくる理由や帝国についてですね――

『うん、よろしくねー。……あ、そうだ　選定の儀はどうなったの？』

――選定の儀は予定通り行われています。　アクレイア家の御子息も勝ち残っていますわ――

最終的に勝ち残った勝者が一人になるまで続く選定の儀だが、レイスは辺境騎士団での任務で培った実戦経験を如何なく発揮して次々と対戦相手を下して行き、その余りに苛烈な勢いに恐れをなして棄権する者まで現れていた。ただ今回の儀は予め参加者の持つ力が具体的な数値で示されていた為、自身の力では勝ち目なしと判断して早々に辞退する者も出ており、例年より早く終わりそうではあった。

『そっか、レイスも頑張ってるんだね。　フレイは大丈夫だった？』

――彼女は随分と落ち込んでいる様子でした……でも、サクヤの無事を伝えればきっと元気になると思います――

『そかそか、二人に伝えるかどうかはレティの判断に任せるよ』

――え？　と、言いますと？――

朔耶は選定の儀で今は気が張っているであろうレイスに伝えた場合、気が抜けてそれが思わぬ油断に繋がる場合もあれば、逆にリラ

ックスしてさらに良い効果を生み出す場合もあるが、その見極めを実際近くで二人の様子を見ているであろうレティレスティアに判断させる趣を伝えた。

『あたしからの課題で～す』

――まあ！　サクヤったら……分かりました、しっかり見極めて判断しますわ――

完全に悲壮感の払拭を果たした朔耶とレティレスティアは互いに笑い合い、また時折連絡する事を約束して交感を解いた。

「ふぅ～……これで向こうは心配ないかな」

最後の気力も使い果たした朔耶はこの隠し部屋の扉の鍵を適当に掛けると、ランプを消して今度こそベッドに身を投げ出し、ついで意識も投げ出した。　真っ暗な隠し部屋に朔耶の囁くような寝息が溶けていった。

城の最上階にある展望台から夜の帳が下りた山間部に垣間見える村々の小さな灯りを眺めていたバルティア帝は、帝衣のマントを翻して展望台のテラスを後にした。一つ下の階にある皇帝の寝室を素通りして階下の執務室で目立たない服に着替えると、隠し通路からまた下の階に下りて竜籠発着場の厩舎脇を通り抜け、外壁部分からさらに二つ分下の階に下りる。

厨房とパーティー会場、士官食堂のある階まで下りて来ればここからは一気に城内が広くなる。もう一つ下の階からは城下街がそのまま納まっているかの如く巨大な空間に沢山の兵士とその家族達が暮らしている。ここで人込みに紛れて追跡者を完全に撒くのだ。彼が皇帝に即位してからの、いやそれ以前に城に上がってからの日課である。

彼、バルティア帝が正式に帝位につく前、顔も知らない彼の三人の兄が次々に即位しては暗殺されて消えていった。彼の背負う第十四代皇帝の名には公式に記されていない三人の皇帝が居たのだ。何れも独裁的な野心家であったり、行き過ぎた浪費家であったり、帝国の伝統を崩しかねない平和主義者であったりしたのだが、何れの皇帝にも共通していたのは自己主張が強かった事だ。

あまり勝手に動く人形は飾って置けない、その事を見抜いていたバルティアは裏で帝国を支配する者達に都合の良い、やる気の無い無気力な皇帝を演じていた。それでも常に監視が張り付き、彼の命を握っておこうとする支配者から身を潜める為に、自分の寝床だけは掴ませないよう下層の雑踏に紛れて安眠を得ていた。

彼が皇帝の寝室を使う時は、この世に疲れて涅槃に旅立ちたくなった時である。

ここ最近ではお気に入りの寝座（ねぐら）に帰って来た彼は、暗い会議室の中でピタリと足を止めた。扉の鍵が開いている。せっかくお気に入りだったのにまた場所を変えねばらないかと残念に思いながらも、この場を離れようとして寝座の中に人の気配を感じ取った。

もしや自分の監視者がまだ中に居るのかとバルティアは少し興味を惹かれた。何時も微かに感じる気配だけを頼りに追跡を撒いていたので相手がどんな輩なのか確認した事は無い。一度しっかり顔を見てやるのも面白いと思ったバルティアは、懐のナイフを抜くとそっと鍵を開けて真っ暗な隠し部屋に滑り込んだ。

『ん？　余の監視者ではないのか……？』

規則正しい寝息が聞こえる。訝しく思ったバルティアはランプに火を灯し、ベッドで寝息を立てている少女を見つけてポカンと口を開けたまましばらく呆けていた。昼間、謁見の間で一騒動起こして行方を晦ましていた異国の少女が隠し部屋の自分の寝床で呑気に寝ているのだ。よくここを見つけられたモノだと変な所に感心する。

「おい」

ナイフを仕舞い、バルティアが朔耶の肩を揺すると、横向きに寝ていた朔耶はごろんと仰向けになる。無防備で穏かな寝顔は幼さを残してあどけなく、ランプの光で琥珀色の艶を帯びた黒髪はこの国の女性には見られない独特の妖しさを纏う美しさと魅力を醸し出していた。

『やはり、良いな』

そっと髪に触れて梳かすと、前髪を掻いた指で頬を撫で降ろす。親指で唇に触れて柔らかな表面を擦り、そのまま顎を優しく持ち上げて顔を近づけて行く。

「んん……」

鼻先が触れる所まで顔を寄せた所で、朔耶の黒い瞳がボンヤリ開かれた。その瞳に映るバルティアのブラウンの瞳をぼーっと見つめた後、朔耶はボンヤリした表情のまま徐にバルティアの首に抱きつくように手を回す。

寝惚けているのか？と苦笑気味に思ったバルティアは、それなら

このまま頂いてしまおうと朔耶の唇に自分の唇を重ねようとして――

「！」

直感が危険信号を発し、咄嗟に腕を振り払って飛び退いた。その瞬間、朔耶の手から放電が起きる。　普段から暗殺の危険に晒されているからこその培われた危機回避能力だった。

「寝た振りか？」

「ちっ」

『外したか』と徐に起き上がった朔耶は『にゅおおおお』という謎の呻き声と共に伸びをする。危うく難を逃れたバルティアは内心冷や汗を掻きながらも、やはり一筋縄では行かない相手だと改めて朔耶を認識した。

「何故お前が此処に居る？」

「なんであんたが此処に居んのよ？」

二人して同じ質問を投げ掛ける朔耶とバルティア。

「此処は余の寝室だ」

「疲れたから寝てた……はい？　あんたの寝室ぅ？」

バルティアの思わぬ答えに朔耶は手櫛で梳いていた髪を指に絡めたまま素っ頓狂な声を上げる。この物置のような隠し部屋を皇帝の寝室と言うにはかなり無理があるのではないかという朔耶の疑問に、バルティアは暗殺者から逃れる為の処置だと説明した。

「余は常に狙われているからな」

「狙われるような事しなきゃいいじゃん……」
「この場合、何かをするしないと言うのはあまり問題では無い。余が皇帝である、それが狙われる理由なのだ」
「……難儀ねぇ」

朔耶はフレグンスにいた頃に懐いていた帝国の皇帝に対する独裁者というイメージが根底から覆された事に、少なからず衝撃を受けていた。

「まさに『事実は小説より奇なり』ねー」
「ほう、それはお前の国の言葉か。確か賢者の言葉も嗜むのだったな」
「別に……、そんな大層なもんじゃないよ」

よいしょとベッドから降りて立ち上がった朔耶は壁に掛けて置いたジャケットを羽織ると、振り返ってバルティアと対峙する。

「それで？　あたしを捕まえる？」
「ああ、その事だが　余はお前を娶る事にした」

半身に構えて　やるか！という体勢でいた朔耶は、たっぷり五秒ほど掛けてバルティアの放った言葉の意味を咀嚼し、聞き返しの言葉を零す。

「……は？」
「余の妻になれ、サクヤ」

バルティアは小さな机に重ねてあった紙にサラサラとなにやら書き込むと朔耶に渡した。

「それは余にしか書けぬ余の署名が入った許可書だ、この城の施設を自由に使って構わぬ」
「へ？　え？　ちょっ　いきなり何言ってんのよ！　受け取らないわよそんな、なんで急にプロポーズ！？」
慌てて書類を突っ返す朔耶に、バルティアは只の許可書で身分証明書になるから持っておけと押し付けた。
「どうせ直ぐにと言う訳にもいかんよ、側近共が反対しているからな」
「そりゃそうでしょうよ……　これ、本当に只の許可書なんでしょうね？」
「誓って騙して契約などせん」
「……んじゃあ、信じとく。どういう風の吹き回しかしんないけど」
結婚はともかく、身の安全を確保出来るなら貰っておこうと朔耶は皇帝の許可書をジャケットのポケットに仕舞う。バルティアは上着を脱いで椅子に掛けるとベッドに潜り込んだ。本当にここで寝るのか～と朔耶は溜め息を付いた。
「ふむ、偶には温かいベッドも良いな。それにこれは香水とは違う甘い匂い、サクヤの汗の匂いか」
部屋を出ようと扉に手を掛けていた朔耶は回れ右するとつかつかとベッドに歩み寄りシーツを引っ掴んだ。そのまま引っぺがそうとしたが、バルティアがしっかと掴んでそれを阻む。顔を真っ赤にした朔耶が叫んだ。
「シーツ換えろーーーー！！」
「断る、余は眠いのだ」

バルティアはぐるぐるとシーツを巻き込んで芋虫のようになると、そのまま丸くなってしまう。朔耶はしばらく枕でぼふぼふ叩いていたが、効果が無いので諦めた。余計な汗を掻いてしまった事もあり、せっかく許可証があるのだからこの城のお風呂にでも入ろうと気を取り直す。

「鍵は掛けて行ってくれよ？」

扉を閉じる時に見たベッドの上では、朔耶が放り出した枕をちゃっかり頭の下に敷いて芋虫状態のまま横になっている第十四代バルティア皇帝陛下の姿。

『変なやつ』

朔耶は隠し部屋の扉を閉じ、精霊に頼んで全ての鍵を掛けて貰った。ガチャガチャガチャガチャガチャと一斉に鍵が掛かる様子は傍から見ると、まるでポルターガイスト現象のようだ。朔耶は意識の糸を放射状に伸ばし、ここに気付いている者が居ないか確かめた後、大丈夫そうだと判断して湯浴み場を探しに会議室の部屋を出た。

『一斉に鍵が掛かる様は中々壮観だったな』

バルティアは一度起き上がってランプの灯を落とすと、再びシーツに包まってベッドに横たわった。いつもは冷たいベッドの中、ほんのり温かい朔耶の残り香に包まれながら、バルティアは久しぶりに安らぎを覚える眠りにつくのだった。

「あ」
「あら」

廊下でばったりヴィヴィアンに出くわした朔耶は、丁度良いので道案内を頼む事にした。さっそく許可書をじゃじゃーんと見せてみる。

「へぇ～陛下に会ったんだ？」
「なんかイメージ違っててビックリしたよ……いきなり妻になれとか言うしさぁ」

『この時間は混んでいるので先に食事でも済ませてからにした方が良い』というヴィヴィアンの勧めに従い、朔耶は彼女と連れ立って食堂に向かっていた。途中、小隊を組んだ騎士団や魔術団と何度か遭遇し、その都度許可書を見せて解散させていく。

「あーもう、もしかしてこの国の軍隊って命令の伝達網整ってないの？」
「いや～あははは、何しろ突然の事だったからねぇ～　しっかし、矢鱈貫禄あるわねぇサクヤちゃん……　あ、后妃様って呼んだ方がいいかしら？」
「やめてよ、あたしあの人と結婚なんかする気ないよ」

連日多くの利用者で賑わい、家族連れの姿も見られる城内の士官食堂。一つ下の階にある一般兵食堂よりも上品な所が、朔耶の世界のファミリーレストランのような雰囲気を醸し出していて、朔耶は

ここをとても気に入った。

この日から時折、食堂の一角でトレイを並べて食事を摂る妙齢の女性と異国の少女の姿が見られるようになるのだった。

35話：決断（前書き）

今回ちょっと重いです。

35話：決断

「なんだ、ここで寝ていたのか」

バルディアが隠し部屋の一つを訪れると、朔耶がベッドの上でごろごろしていた。

「なによ、ここもあんたの寝室？」

「城の隠し部屋は殆ど余の寝室だな、まだ見つけていない部屋もあるだろうが」

「隠し部屋だらけなのね、この城って……なんか嫌な感じのする部屋もあったけど」

朔耶は意識の糸を使って普通に歩きながら壁の向こうや天井、床下などの状態を探る事が出来るので、隠し部屋らしき空間があれば直ぐに見つける事が出来る。

偶に余り近付きたくない様な空気を漂わせた部屋もあり、そういう部屋は隠し部屋というよりも通常の部屋を塗りこめて閉鎖したような場所だった。

「余の状況を考えれば判るとは思うが、色々表に出せないモノも多いのだ、この城は」

部屋ごと封印してしまうような陰惨な事件なども多くあったと説明され、朔耶は若干眉を顰める。

『まさか精霊が騒いでるのって、そういうのの自縛霊とかがいっぱい居るとかのせいじゃないでしょうね……』

「まあ、幽霊の類の噂も多いからな、精霊術を使うなら何か感じぬか？」

「うそ！　マジで？」

ぞぞぞっと肩を震わせる朔耶をみたバルティアは、ニヤリと笑みを浮かべると徐に歩み寄り、さりげなく朔耶の肩に手を回す。

「精霊と通じる者が霊を恐れるのか？」

「だって全然別物でしょーが、精霊と幽霊って」

朔耶はバルティアの手をぺいっと払い落としてベッドから降りると、ジャケットを羽織って隠し部屋の出口に向かった。

「何処へ行く」

「朝ご飯食べにいくの」

「ならば丁度良い、余の朝食に付き合うがよい」

これから朝食だと言うバルティアの誘いに、朔耶は怪訝な表情を向けた。それなら一体何をしに隠し部屋までやって来たのかと。

「寝座の巡回だ」

「あ、そ」

バルティアとの隠し部屋縄張り争いに突入しそうで、ますます皇帝のイメージが崩れていく朔耶だった。

朔耶も与えられた寝室は使わず隠し部屋を寝床にしている。それというのも、部屋が広すぎて落ち着かないという事もあるが、部屋への隠し通路に常に監視する者の気配を感じていたからだ。

壁の向こうや天井裏、床下など色んな場所に隠し通路があって、分かり易い場所と分かり難そうな場所に四人ほど潜んでいるのを見つけていた。

朔耶を監視する者達は朔耶を精霊術の使い手であると認識し、交感による索敵対策として判り易い場所に一人配置する事で其方に気を向けさせ、本命の監視を意識の糸を向け難い場所に潜ませていた。

通常は高層の階から足元への索敵は階下に居る者を誤認し易い為、意識の糸を向けられる事が少ない。家具や机の床下などという場所も、そんな出入りの困難な場所に潜むとは普通は考えない。

しかし、交感に制約の無い朔耶の索敵は全方位索敵なのでそういった心理的、技術的な死角を突いても全く意味がないのだ。その事を知る人間は帝国には居ない。

皇帝の部屋のある階は全て皇帝の為の施設になっていて、寝室を始め湯浴み場、遊戯室、修練の間などが揃っている。幾つか厳重に鍵の掛けられた部屋があったが、朔耶に尋ねられたバルティアは先代や先々代皇帝達による負の遺産の名残だと説明した。

「余は拷問や薬女遊びに享楽は感じぬのでな、いらん部屋は全て閉じている」

「あー……」

朔耶はそれ以上深く尋ねるのを止めた。やがて皇帝の食堂に到着

すると、だだっ広いダイニングを予想していた朔耶は意外にこじんまりした部屋に拍子抜けした。それでも個人が食事を摂る為だけの部屋としては十分に広い。

バルティアの後に付いて入って来た朔耶に、給仕達は一様に目を丸くして驚いた様子だったが、バルティア帝から后候補としての指名を受けている話は皆既に聞き及んでいたので、直ぐに納得した。

「む……今なにか間違った納得をされた気がする」

「気にするな」

くくっと笑いながら朔耶に席を進めたバルティアは、給仕に朔耶の分も用意するよう申し付けて席に着く。

『サクヤちゃんは食べ物で釣るのが一番効果的かと……』テーブル上の籠に盛られている果実に早速手を伸ばしている朔耶を楽しそうに眺めながら、バルティアは密偵部隊の女性隊員に内心で感謝した。

『サクヤは本当に、良いな……次はキトから美味い菓子でも取り寄せるか』

朝から食事を待つ席で朔耶のハートゲット作戦を練っている暇人な皇帝は、計画の補強に余念が無かった。

ガラガラと食事を乗せた台車を押して来た若い給仕の娘が手際よくお皿を並べ、熟練した動作でスープを注ぐ。壁際に並んでいる二人の給仕達はお皿を下げる役で、料理を運んできて卓上に盛り付けるのはこの給仕の役だった。

「これ、後から後から出てきたりしない？」
「朝食だからな、精々五皿程度だ」
何処まで食うべきかと悩む朔耶に苦笑しながらバルティアはスープを一口含むと、同じようにスープを口に運ぼうとしていた朔耶にスプーンを投げて摂取を阻止した。
かなり即効性のモノらしく、その動きだけで視界がボヤけて身体のバランスが取れなくなり、椅子から崩れ落ちる。今までの様に身体が痺れる程度の毒では無い。
『毒で来るのは久しぶりだな、しかも完全に殺す気らしい、やはりサクヤ絡みか……？』
朔耶を妻にすると言う宣言は、影の支配者達にとって随分都合が悪かったらしい。
考えられるのはフレングンスの王女を后に迎える事を推していた一派だが、やはりあの国の王族の血に何かあるのかもしれないな等と、薄れ行く意識の中でバルティアは割と冷静に思考を巡らせていた。
「これで終わりかと思うと、意外に落ち着いていられるモノだな……」
「馬鹿言ってんじゃないわよ！」
朔耶の怒鳴る声に、バルティアは遠退いていた意識が急速に引き戻されて鮮明になって行くのを感じた。体内から毒が浄化される清流のような感覚に身を委ねる。朔耶の手がバルティアの胸に当てられ、仄かに発光していた。

「……まさかこれ程の毒を浄化出来るとはな、命拾いしたようだ」
「あたしもビックリだよ……」

バルティアが倒れたのを見て直ぐに毒が盛られた事に気付いた朔耶は、毒も物なら何とかならないかとバルティアの身体に意識の糸を送り込み、体内を蝕む毒に分解を呼びかけた。
次いで精霊達に治癒を頼んで回復させたのだ。毒の中和ではなく分解、体内の解毒ではなく浄化という熟練した精霊術士でも二人掛りで行うような治癒をやって見せた。

毒が抜けて回復しただけでなく身体の調子までよくなったバルティアが自然な動作で立ち上がる。
朔耶の高度な治癒を見て呆けていた出入り口に立つ衛兵は我に返ると、さっと表情を引き締め、サーベルを抜いて給仕の娘に歩み寄った。顔を青褪めて後退る給仕の娘。

「ちょっと……っ　何する気よ！」
「皇帝の暗殺を企てた者はその場で処刑される決まりだ」

只事では無い雰囲気に声を上げる朔耶に、バルティアは簡素に説明した。皇帝に出す食事は専用の厨房で作られた予め毒見を済ませたモノが台車で運ばれる。
厨房から食堂までは専用の廊下が使われ、この廊下には一切の隠し通路等の仕掛けは無い。つまり毒を入れるならこの廊下の移動中しかなく、そこを通るのは台車を押す給仕一人に限られる。
これは毒殺対策の一環として、毒を盛った者が即刻明らかになるような構成に人員を配置する事で暗殺をやり難くしているのだ。死なば諸共の捨て身の覚悟がなければ毒を使う事は出来ない。

「厨房で盛られてたって事は？」

「毒見は厨房の全員で同時に行なわれるからそれは無いな、全員がグルなら別だが……」
「ん～……確かにそれはー　ってちょっと待って待って待って！！」

衛兵がサーベルを構えて給仕の胸を貫こうとするのを、朔耶が慌てて止めた。そして壁際でぎゅっと目を閉じて震えている給仕に近寄ると『ちょいと失礼』と両手で頬を包み込んでオデコを合わせる。
バルティアは途惑う衛兵に待てと合図して朔耶の行動を窺った。食堂内に居る他の給仕二人も、同僚が仕出かした暗殺騒ぎに信じられない想いを抱きながら成り行きを見守る。

恐怖と不安に包まれている給仕の心に意識の糸を絡ませ、表層意識から情報を読み取っていく――

「……リーファ・クルネス、十七歳、給仕歴五年、肉親は妹が一人だけ……」

ビクリと給仕の肩が跳ねた。青褪めていた表情が益々青白くなって行く。

「……シーファ・クルネス、十四歳、一般兵食堂の手伝い、行方不明、脅迫状、毒薬、血の付いたリボン、妹の衣服……」
「あ……ああ……」

ガクガクと膝が震え、呻くような声を漏らす給仕の見開かれた眼から涙が零れ始める。
バルティアを始め他の給仕二人や駆けつけた衛兵達が固唾を呑んで見守る中、朔耶から紡がれるリーファという給仕の身に起きたのであろう災厄に耳を傾ける。

「……ふう、ちょっと待ってね」

朔耶は一旦リーファから意識の糸を解いて合わせていたオデコを離すと、食堂の隅にある戸棚に向かって指をさしながら言った。

「そこ！　どっちの味方？　バルの味方なら出て来なさい」
「『バル』というのは余の事か？」
「そ、何時までも『あんた』じゃ具合悪いしね」

そんな軽い掛け合いをしながらも戸棚からは目を離さない。皆が注目する戸棚には暫しの経過後も何ら変化は無く、朔耶はすーっと目を細めると――

「あっそ」

そう言って伸ばした意識の糸の先に電撃を発現させた。カカアァンという乾いた音が響き、戸棚の床下から閃光が漏れる。顔を見合わせる衛兵達に、調べてみよと指示を出すバルティア。

「おお？　こんな所に穴が」
「陛下！　曲者が潜んでおりました！」

戸棚を動かすと床板が張られており、その下に隠されていた穴の中に電撃で気絶した男が蹲っていた。バルティアは隠し穴から引き摺り出される男を見ながら、笑い出しそうになるのを堪えていた。

強力な治癒で暗殺を食い止め、その裏に潜む陰謀を見抜き、こんなにもあっさり監視者を燻り出してしまう朔耶の力には畏怖や感嘆よりも痛快さを覚える。

今すぐにでも抱き締めて自分のモノにしたくなるが、唇の一つも奪えず返り討ちが関の山だろう。

直ぐ目の前に居るのに決して手が届く事は無い、高嶺の花を見詰めるかの如く、モノ欲しそうな感情の籠もった瞳を向けるバルティアの視線の先では、朔耶が再び給仕の娘にオデコを合わせていた。

「気持ちを落ち着けて、妹さん……シーファの事を強く想って」

朔耶はこの広大な城全域にまで意識の糸を広げると、リーファの意識に浮かぶイメージを頼りにシーファの捜索を行った。流石にこれだけの規模で交感索敵を行うと精神的にもキツく、自然と呼吸も乱れて荒くなる。

そしてそれ程の交感に表層だけとはいえ触れているリーファの精神にも負荷が掛かり、身体が崩れ落ちそうになるのを朔耶にしがみ付いて堪えていた。

傍から見ている分には、うら若き乙女の少女二人が呼吸も荒く上気した顔をくっ付けて抱き合っているようにも見えるので、同僚の給仕二人は頬を染めながらも興味深々な様子で、衛兵達も妖しげな雰囲気に赤くなりながら彼方此方(あちらこちら)に視線を散らしている。バルティアは『良いな……』などと呟きながらじっくり眺めていた。

城の防壁地下にある牢のさらに地下、土牢と呼ばれる特別な牢獄で、通常の牢が石造りの小部屋に鉄格子を填めたまともな造りの部屋なのに対して、土牢は剥き出しになった段状の地面に横穴を掘り、そこに手足を縛った囚人を放り込んで入り口を土で塗り固めた半分生き埋めのような拷問牢である。

特に大罪を犯して死刑すら生温いとされる大罪人や疫病に掛かった囚人を隔離するような意味合いで使われるが、政治的な闘争の果

てに閉じ込められる権力者も多く居た。

「三段目の奥から二つ目、ちょっと灯り出すから掘り出すモノ持ってきて」

シーファが閉じ込められている場所を見つけ出した朔耶はバルティアから場所の詳しい位置を聞き出すと、衛兵を向わせると言うバルティアに自分も行くと言って食堂を後にした。

『ならば余も付き合おう』と皇帝まで付いてくる事になって緊張する衛兵達を余所に、朔耶は途中二人の給仕を厨房や医者の所に向わせてお湯と清潔なシーツなどを準備させると、リーファをそこで待機させた。

妹さんを見つけたら直ぐに合わせてやりたかったが、場所が場所だけに酷い状態にあるかも知れない事を考慮した。

一寸先も見えない程の闇に包まれた土牢の間が、朔耶の要請に応えた精霊の放つ光に照らし出される。何度か掘り返された跡の残る段状になった剥き出しの地面が陰鬱とした空間の奥まで続いていた。

バルティアもここに降りるのは初めてで、牢の番をしている者もこれ程はっきり照らし出された土牢の間を見るのは初めてだったらしく、間に漂う寒々しい空気に鼻白んでいる様子だった。

牢番によれば、もう随分長い間ここの扉が開かれた事は無いとの話だったが、やたら隠し部屋や隠し通路の多いこの城のこと、秘密の入り口の一つや二つあってもおかしくは無い。

長く務める牢番自身が牢の密閉性に疑問を持っていると語る。実際、何時の間にか囚人が増えていたり減っていたりはよくある事らしい。

朔耶自ら先頭に立ち、スコップを振るって僅かな空気穴の開く塗

り固められた土を掘り崩して行く。
やがて異臭と共に狭い横穴が現れ、中から手足を縛られ目隠しに猿轡を噛まされた少女を発見した。身体中の彼方此方に痣と膿んだ傷があり、ほぼ全裸の姿でぐったりしていた彼女は脱水症状と極度の疲労で衰弱していた。

「水を！」

朔耶は灯りを少し落として薄暗くしてから拘束を解いて持参したシーツに包むと、水筒から少量ずつ水を口に落とす。朦朧としていた少女の意識が少し回復したらしく、水を求め始めたので咳き込まないよう飲ませながら名前を尋ねて本人の確認した。

「あなたは、シーファ？」
「ん……こふっ　ゆるして　ください……ゆるしてください……」

「シーファ？　もう大丈夫だから、大丈夫だからね？」
「ゆるして……おねえちゃん……たすけて　ひぐ……」

『大丈夫、大丈夫よ』と宥めながら、朔耶はリーファの待つ部屋のカーテンを閉じて薄暗くしておくよう衛兵に指示を出すと、すかさず許可を出したバルティアによって直ちに実行される。
朔耶には衛兵を動かす権利までは与えられていないので、バルティアが付いて来ていたのは正解だった。

「外傷は大体治せたと思うけど、体力の消耗とか後は内面ね……」

シーファを運びながら朔耶は精霊の治癒を使って彼女の傷を癒していた。

だが、精霊の治癒も心に負った傷にまでは及ばない。終始震えていたシーファは姉リーファの姿を確認すると、安心したのか気を失うように眠りに付いた。

リーファは朔耶に妹を助けてくれた事を涙ながらに感謝しつつ、皇帝に毒を盛った事を詫びた。

「処刑するなんて言わないでしょうね？」

「余は不問でも構わんが、側近共は何というかな」

「黙らせなさいよ、あんた皇帝でしょうが」

「お飾りのな」

リーファからある程度まで事情を聞き終え、後日シーファが回復してから彼女からも話を聞く事にした朔耶達は、姉妹に護衛を残して一旦引き上げる事にした。

「あんたを狙う連中の事を探れるいい機会だからって言えば無下に出来ないっしょ」

「ふむ、その線で通すか」

それでも彼女を罰せよと処刑を訴える者が居るなら、それはその者が怪しいと言う事になる。

もし、側近の中にバルティアの命を握っておこうとする勢力に組する者が居たとして、それを疑われるような言動を行う愚か者が居るとも思えない。

不問に反対出来る者は居ないだろうという朔耶の考えに、バルティアも同意した。

「所で食堂で捕らえた者だが、給仕に使った術で奴から情報は引き出せんのか？」
「う～ん、相手が心を開いてくれないと難しいっぽい」
確かに、諜報をやっているような人間がそう簡単に自分の雇い主を晒すようなヘマはしないだろうなと肩を竦めるバルティア。
「では薬で催眠状態にして探るというのはどうだ？」
「そんな非人道的なやり方には協力できませ～ん」
ぷいっと顔を背ける朔耶に、バルティアは何処か違和感を感じて訝しんだ。そして徐に朔耶の手を取る。
「……震えているのか？」
「……」
小刻みに震える自分の手を見た朔耶は、一瞬バツの悪そうな顔をして俯いたが直ぐにバルティアから手を振り解くと、普段よりも若干低い調子の声で言った。
「当然でしょ！　あんな酷い事……」
「！　サクヤッ」
突然、朔耶の身体がぐらりと傾く。咄嗟に支えたバルティアは何処か具合でも悪くしたかと朔耶の顔を覗き込んだ。顔色が悪いのは疲労のせいか、精神的なモノのせいか、よもや土牢で何か悪い病気でも拾ったかと考えを巡らせる。
「ごめん……流石にちょっと疲れたみたい」

「……少し休め、この近くにも良い隠し部屋がある」

人気の少ない狭い廊下を曲がり、少し進んだ先にある部屋に入ると、執務用の机を傾けて背後の壁の隠し扉を開く。

「あんたの寝座？」
「バルだ」
「？」
「余の愛称なのであろう？」

ニヤリと笑みを浮かべるバルティア。きょとんと眼を丸くした朔耶はついで吹き出すように軽く笑った。『あんたなんかアンタで十分よ』などと意地悪を言いながら隠し部屋に入った朔耶は、閉じ際に声を掛けた。

「ありがとね、バル」
「……ふっ」

一人ニヤニヤ笑いをしながら食堂まで戻って来たバルティアは、何処か騒然としている様子を訝しみながら近くの衛兵に声を掛ける。

「どうした、何があったのだ」
「ハッ！　捕らえておいた曲者が自害したようであります！」

衛兵達の尋問中、朔耶の力を使えば直ぐにでも背後の人間を洗い出せると諭された男は歯に仕込んでいたらしい毒を飲んで自害した。事実、男は朔耶が給仕の娘から情報を引き出している様を見てい

たのだから、可能だと判断したのだろう。

「……この事、他言無用である。特に、サクヤの耳には入れるな」

「ハッ！」

自害した男の遺体は直ぐに処分される事になった。

バルティアに案内された隠し部屋で横になった朔耶は、寝る直前の気合再び！とばかりにレティレスティアに向けて交感を繋いだ。今の時間帯なら晩餐会の招待にお断りの返事を書く作業をしている頃だ。

――サクヤ？――

『やほー……レティー……』

――ど、どうしました？　なんだかとても元気が無いように感じますが……――

『んー、ちょっとねー』

朔耶は今朝の一連の出来事を掻い摘んで話す。

帝国の内部事情がダダ漏れだが、朔耶には諜報などというつもりは無く、レティレスティアに至っては朔耶の近況の方が重要なので帝国の中枢に関する情報は辛うじて護られていた。

尤も朔耶の話がレティレスティアからアルサレナの耳に入った時点でアウトだが。

――それは……大変でしたね……でも、サクヤが無事で良かったです――

『うん、あたしも毒飲んでたらどうなってたか分かんないしね……』
――サクヤ、その治癒の力の事も含めてこの前の頼まれ事の話ですが――
『なにか分かった？』
レティレスティアがアルサレナに相談してみた所、直ぐに凡その見当は付いたという。
――恐らく、サクヤが精霊術に目覚めた事が原因ではないかという事です――
『精霊術に目覚めた……？』
アルサレナの推測では、それまでに朔耶が使っていた力は朔耶に重なる精霊の影響で引き出した魔力を使ってはいたものの『稲妻ビンタ』などは魔術でもなければ精霊術でもなく、朔耶自身が言った通り気合による技であり、朔耶の世界の武術に此方の世界の力が上乗せされた結果発現した力であった事。
交感は朔耶の状態が特殊である為、交感の深度や熟練という制約を無視している時点で使い慣れていてもそれは交感を深めた事にはなっていない事。
それらを考慮すると、朔耶は能力や力こそ桁外れな状態にありながら魔術は勿論、精霊術に関しても全くの素人であったが、術封じの枷に意識の糸を絡めて破壊するという行為によって初めて『交感を深めた』状態になった。
――私にも経験があるのですが、交感を深めてより多くの精霊の力を借りられるようになると、その瞬間から新たに力を借りられる精霊を感じられるようになるのです。――
『つまりＲＰＧ風に言えば能力ＭＡＸでＬｖ０の精霊術士というキャラクターが枷を破壊した経験値でＬｖ３０位にレベルアップして、

Ｌｖと能力に合わせてあらゆる精霊術を覚え捲った、って所ね』
――え？　あーるぴーじー？――
『ああ、こっちの言葉だから気にしないで』

枷の破壊が切っ掛けで精霊術を使う者としての交感力を身に付けた朔耶に、『交感する者』として認識した精霊達が朔耶の交感力に合わせて寄って来たというのが、アルサレナの推測によって出された結論だった。
そして事実、朔耶はその時から精霊を感知し、色々と力を借りられるようになっている。

『じゃあ、あたしの中の精霊が騒いだのもそのせい？』
――いえ、残念ながら其方に関してはまだ詳しい事は分からないそうです。母様が直接視れば何か分かるかもしれませんが……――
『ふーむ、そかそか。　ありがとね、色々分かってホッとしたよ』
――いいえ、サクヤの助けになるのでしたら何でも言ってください――

それからレティレスティアの近況やレイス、フレイ達の話を聞いた朔耶は、『それじゃあまたね』と交感を解いた。選定の儀も無事終了し、レイスは宮廷魔術士の座に就任したとの事だ。
未だ王都に潜んでいるであろう帝国間諜の洗い出しも、妨害が無くなったのでかなりの効果が見込めるらしい。

「順調だねぇ～、後はこれで帝国が戦争とか吹っ掛けなきゃいいのよねー」

朔耶はコレまで見た限り、バルティアからはフレグンスで噂されていたような覇権主義などは感じられず、寧ろ平和主義者の色さえ感じていた。

自身をお飾りと自嘲し、常に暗殺の危険に晒されているヤル気の無さを装った皇帝バルティア。

「帝国の黒幕かー……」

シーファの無惨な姿を思い出し、眉を顰める朔耶。

「正義無き力は暴力なり。力無き正義は戯言なり、か……。今のあたしには、力がある……じゃあ正義は……？」

ぼんやりした意識の中でそんな自問をしながら、朔耶は疲れた精神を癒す為の眠りについた。

昼の内に届いた食料品や衣類を搬入し、訓練で疲れた兵士達の腹を満たすために料理人達が厨房で腕を振るう。

城内の下層エリアは夕刻前からが最も賑やかになる。今のグラントゥルモスには大勢の傭兵達が雇われているので、城内に入りきれない彼らは外にテントを張って寝泊りしていた。

彼らの中には兵力を集めるだけ集めて未だに具体的な行動を起こさない帝国にやきもきしている者もいて、フレグンスとの戦を待ち望む声も上がっている。

「こら」

「ぐむ」

目を覚ました朔耶は隣で寝ている皇帝に肘鉄を入れた。

「あんたはっ！　何をっ！　当たり前なっ！　顔してっ！　横にっ！　寝てんのよっ！」

ゲシゲシとベッドから蹴落とした朔耶はトドメに踵を落としてやろうかと足を振り上げたが、すかさず距離を取られたのでそのまま下ろす。

「……寝起き早々皇帝を足蹴にするとは」

「やかまし　ったく、油断も隙もない……」

朔耶はベッドから降りると何時ものジャケットを羽織ろうとしたが、土などが付いて随分汚れてしまっている事に気付いた。下着などはお風呂に入る際に洗っていたが、服は替えが無いのでそのままだった。

「お前の服だ」

「え……？」

どうしようかと悩んでいる朔耶に、バルティアが包みを渡す。中には布質の良さそうな黒い服が入っていた。

「お前の事だ、どうせドレスになど袖を通すまいと思ってな」

「あ～、街服かぁ……あんたとお揃いなのは気に入らないけど、一応ありがと」

バルティアを隠し部屋から追い出して早速その服に着替えた朔耶は、姿見が無い事に今更ながら気付く。鏡が無ければ身嗜みも出来ないじゃないかと、鏡を探して隠し部屋を出た。

外で待っていたバルティアが『ほう』と感嘆の声をあげる。

「なによ」

「いや、中々良いな」

黒髪に黒い瞳の朔耶が黒いヒラヒラの付いたゆったりした服を着流すと、一層独特の雰囲気が強まる。長袖膝丈のワンピースに黒いタイツのようなズボン、ついでに靴も数足用意されていたので足に合うものを履いている。

「全身黒尽くめ……」

「神秘的で良いではないか、気に入ったぞ」

「それぱっかり……つか、あんたが気に入ってどうすんのよ！」

少し早まったかとも思う朔耶だったが、着心地は悪くないのであ良いかと適当に鏡のありそうな部屋を探すのだった。

「ねえ、バル……」

「どうした？」

「今までにも今朝みたいな事ってあったんだよね？」

「うむ」

「……その人達は？」

「何れもその場で処刑だったな」

侍女や若い衛兵、ベテランのメイド長が暗殺を仕掛けて来た事もあったという。何れも詳しい動機を聴取される事もなくその場で処分されたと、バルティアは淡々と語った。

「そう……」

適当な空き部屋を見つけて中に入る。この階には客間が多いので姿見の大きな鏡も置いてあった。

鏡の前に立った黒い少女は、背後に立つ黒い男に語りかける。

「バルの環境は理解するし、今までのそういう処置もあたしがどうこう責められる立場じゃないから何も言わない。でも……バルのこと、同情も出来ない」

「……分かっている」

バルティアは朔耶の言葉を受け入れた。バルティアは自身が常に何もしなかった事を理解していた。あるいみ何もしない事で生き延びて来たのだ。

『だが、これからは今までのようにはいかんだろうな……』

朔耶の事を気に入り　求めた結果、皇帝として生かされないのであれば、朔耶を諦めるか、人生を諦めるか、平穏を諦めるか、バルティアにはそんな選択肢が突きつけられていた。

生かさず殺さず、弱者の命が消費されていた今までの暗殺ごっこは裏の支配者からの警告だった。今朝、それは遂に本物の暗殺となってバルティアの役目を終わらせようとした。覚悟を決めなくてはならない。

「サクヤ」

「なに？」

「余に、力を貸してくれ」

36話：帝都の日常

暗殺未遂事件から数日が経ち、朔耶に協力を取り付けたバルティアは皇帝として帝国の掌握に動き出した。

朔耶には皇帝の発言と同等の権限を有する許可書を与えられ、城内を自由に動き回って暗躍する者達を牽制する事で反応を窺いながら、敵と味方の判別を付ける。

事件以後、皇帝が朔耶を娶る事に反対していた側近達は一転して賛成の立場を表明し、朔耶は城内で『皇帝の黒后』と囁かれるようになっていた。

その朔耶を昼食に誘おうと士官食堂のある階を歩いていたバルティアの背後からシャーカラカラカラ……という奇妙な音が近付き、両脇を疾風のように駆け抜けていく黒い影と形の良いお尻。

「待て」

「ん？　バル？」

「あわっ　皇帝陛下！」

先日バルティアが贈った黒い服を纏う朔耶と密偵部隊の女性隊員が少し通り過ぎた廊下の先から振り返る。

ちなみに先程の『黒い影』は朔耶で『形の良いお尻』は女性隊員だ。二人は細長い板の前後に小さな車輪が付いた奇妙な乗り物に乗っていた。前の車輪から伸びた棒状の部分を掴んで板に片足を掛け

ている。

「どうしたの？」

「いや……昼食に誘おうと思ったのだが、それはなんだ？」

「これはキックボード、このお城広くて移動が大変だからちょっと作ったの。あたしお昼はヴィヴィンアンさんと食べるからお誘いはパスね」

「ちょっと、いいの？　陛下のお誘いなのに……」

皇帝の誘いを無下にする朔耶に戸惑うヴィヴィアンことアネット。朔耶は『いいのいいの』と軽く答えながらキックボードのブレーキを調節している。

「むぅ……まあ、それは仕方あるまい。　所でその乗り物だが、サクヤが作ったと？」

「うん、欲しい？」

「うむ」

落ち着いた返事を返すバルティアだが、まるで子供のようにキラキラした目はキックボードに釘付けだ。

「じゃあバルの分も作ったげるから、後で取りに来て」

「よかろう」

上機嫌で皇帝の間に戻っていくバルティアを見送りながら、アネットはポツリと呟いた。

「あたし、サクヤちゃんは絶対敵に回したくないわ……」

「ほぇ？」

この日の昼下がり、廊下をサクヤ式二輪車で疾走する皇帝陛下の姿が目撃されたとか。キックボードによる機動力の向上は監視者の追跡を困難にさせ、地味に嫌がらせになっていた。

夕刻過ぎ、ある程度回復したシーファが一般病室に移ったという知らせを聞いた朔耶は、お見舞いも兼ねて様子を見に病院のある一角にやって来た。

ここには連日沢山の一般民や訓練で怪我をした兵士達が訪れ、魔術と医術による治療を受けている。

尤も、魔術による治癒が受けられるのは金持ちや身分の高い者が殆どで、一般民や雑兵クラスの兵士は薬草などを使った平民医療を処方される。

病室も個室が並ぶ上階層病室と、広い部屋に簡易ベッドが並ぶ下階層病室があり、一般病室は下階層の方だ。

シーファが療養していたのは彼女達姉妹の住んでいる部屋である。聴取と護衛の関係で病院には置けなかった事と、シーファの状態を考慮しての処置だった。

聴取も終え、シーファの体力も回復して来た事でリーファも仕事に戻って生活費を稼がなくてはならない為、シーファを部屋に一人で残して置くよりは大勢の患者がいる病院に預けた方が安心出来るという事で一般病室に入れて貰ったのだ。

「空気悪っ！」

病室に入った途端、絡みつくような空気に朔耶が叫ぶ。広々とし

た空間に沢山のベッドが整然と並び、所々シーツの衝立で仕切られている病室。

ランプは薄暗く、彼方此方から呻き声が聞こえ、看護婦のような白い神官服を来た世話役が数人ベッドの合間を行き来して、見るからに重症っぽい包帯ぐるぐる巻きの患者の包帯を換えたりしている。

ただ兎に角空気が悪い。薬草の匂いと血の臭いが混じリ合い、換気が為されていないのか淀んでいる感じの空気はかなり健康に悪そうだった。

「あ、サクヤ様」

「シーファ、元気そう……でもないね？」

「あはは……」

シーファもこの淀んだ空気と呻き声には参っているらしく、小さな少女が独りで過ごすにはあまり良い環境とは言えない。彼女のベッドの周囲には同じくらいの歳の子や子供達も居た。

皆臥せっているのか、シーツに潜り込んだまま動かない。朔耶とシーファの会話を聞きつけて顔を出した子も、朔耶の姿を見ると慌ててシーツの中に潜り込む。

「むう、黒いのがいけなかったか」

「いえ……みんな、人見知りする子達みたいで」

朔耶には光が迸(ほとばし)る様な活発なイメージがある為、人見知りする子供達にとっては只でさえ近付き難い人というイメージに加えて、髪も瞳も装いも黒一色なので純粋に『怖い』と思われていた。

「それにしてもこの空気の悪さは異常だわ、これじゃ返って病気になっちゃうよ」

ここの医者は何してんだーという朔耶に、白い神官服の見習い精霊術士が申し訳なさそうに答えた。

「すみません……先生は上層の患者さんを診るのに手一杯で、こちらは殆ど私達だけでやっているもので……」

「病室の環境改善については何度も訴えているのですが、中々忙しいらしくて」

特に返答も無いままこの状態が続いているという。彼女達が許可無く勝手に病室を弄るわけにも行かないので、どうする事も出来ないのだと嘆く見習い達。

しかし、彼女達の朔耶を見る目には期待が込められていた。当然のようにその意味を読み取る朔耶。

「やってやろうじゃないの」

病室の環境改善に乗り出した朔耶は、ロープを使って病室の寸法を測り、それらを書き記したノート（朔耶が紙を綴じ合わせて作った）を持って最寄の隠し部屋に籠もった。

そして夜更けまで改善案を練り上げる作業に没頭する。バルティアに貰った許可書の権限を使えば、城内施設の改築も可能だ。

「この油なら滑りが違いまさぁ、ただ摩擦で溶け出すと車輪まで滑るようになりますぜ」

「うむ、角を曲がる時に気を付ければ問題あるまい」

「何やってんのよアンタは」

翌朝、朔耶が必要な部品を作って貰いに技師の元に訪れると、バルティアがキックボードのチューンナップを交渉していた。昨日一日中乗り回していたバルティアは磨耗した車輪と車軸の交換に自ら技師の下を訪れ、一緒に交換しながら構造を把握して操縦技術も磨いていた。

廊下の角をドリフトしながら曲がる感覚が気に入ってるようだ。朔耶は『皇帝も男の子よね～』と、ある種納得気味に脱力しながら技師に部品を発注した。

「それは？」

「一般病室の環境改善に部屋を弄ろうと思って、お城の外壁にちょっと穴開けるけどいいよね？」

「城を壊さんでくれよ？」

「大丈夫よ、あと人手も要るから何人か使うからね？」

城の外壁に穴を開けるような工事をそんなに簡単に決めて良いのかと、部品の発注を受けた技師は朔耶と皇帝陛下の会話に目を丸くしていた。

その後何軒かの職人の下を回って必要なモノを発注した朔耶は建築技師と作業員を連れて一般病室に一番近い城の裏側に当る外壁沿いの空き部屋を確保すると、この部屋の外壁に穴を開ける工事から始めた。

昼過ぎには次々と出来上がった部品が運び込まれ、それらを作業員に指示を出して組上げて行く。

「これは……サクヤ式送風機の中に組み込まれている風車ですか？」

「まあね、但しこっちは風を受ける方のね」

外壁に穴を開けた部屋に設置されたのは直径一・五メートル程度の風車。

これを開いた壁から外に張り出し、常に吹き上げている風を受けて回転させる事で動力に使う。次に天井付近から革製の排気管を通すと、病室の天井で分岐させて適当な穴を設けた管を張り巡らせる。

風車の部屋には外に張り出した風を受ける風車を動力にしてベルト式と組み合わせた歯車により回転を高めた直径六十センチ程度の風車が排気用に開けた壁の穴に取り付けられた。

この排気口に革の管が繋がれて病室の淀んだ空気が城外に吸い出されていく。

動力用の風車は部屋の中に引き込んで補修が出来るよう台座部分は稼動式にしてあり、開いた壁には木製の板戸がこの場で職人の手によって作られた。

「一番磨耗が早そうな歯車の軸は予備を多目に作っておいた方がいいかな、部品の交換を行う時は必ず風車を止めてから行うようにね」

ここの担当に就く者に注意事項を説明した朔耶は引き上げる作業員達を労うと、一旦病室の様子を見に訪れた。淀んでいた空気は入れ替えられたようにスッキリしていて、血と薬草の混じった臭いも随分軽減されていた。

『後は灯りかな』と呟いてそのまま厨房に向かった朔耶は幾つか魔力石を分けて貰い、倉庫から持ち出した通常の油ランプをベースに簡易魔力石ランプを作って病室の暗いランプと交換していく。

朔耶の魔力石ランプは改良に改良を重ねて完成したフレグンスの街灯にも使われるランプなので、簡易式でも明るさは魔術式に引けを取らない。

「凄いです！　病室が見違えました！」

「流石は黒后のサクヤ様ですね！」

「何よその二つ名は……」

見習い精霊術士達の称賛に照れつつ、城内で定着しつつある微妙な通り名に眉を顰めながら、朔耶はシーファに軽く手を振って病室を後にした。

「それで、何か掴めた？」

皇帝の食堂で夕食を摂りながら、朔耶は徐に尋ねた。今日こそはと夕食に誘って来たバルティアに、朔耶も今日は一働きしたので豪勢なご馳走が食べたいなと思い、誘いを受けたのだ。

「今の所は特に無いな、サクヤの方は相変わらずか？」
「まあね、でも何と無く怪しいのは見えたよ？」

あの一件以来、朔耶の周囲からは監視者の姿が消えている。恐らくは朔耶に発見されれば、その能力で背後に関係する人物の情報を読み取られてしまう危険を恐れての処置なのだろうという推察で、朔耶とバルティアの意見は一致していた。

そこで気になる事がもう一つ、朔耶は側近達の変り身の中に一つの違和感を感じ取っていた。些細な事ではあるが、もしかしたら重要な手掛かりになるかもしれない違和感があると言う。

「ほう？　それは？」
「ここじゃ言えないよ、何処か人目の付かない耳の無い所で、ね」
「うむ、サクヤと共にいれば監視者共の気配も無いからな、余としては常に傍にいて欲しいのだが」
「はいはい、口説き文句口説き文句」

隙あらば口説こうとするバルティアを朔耶は手をヒラヒラさせながらあしらうと、何時かの晩餐会の時に食べた事のあるフルーツに齧り付いた。さり気無くその品目をチェックしておくバルティアだった。

「サクヤ」
「ん？」
「お前が来てくれて良かった」

真面目な顔に微笑を湛えてじっと見つめながらそんな言葉を囁くバルティアに、一瞬キョトンとした朔耶は眉を寄せながら言った。

「あたし、攫われて来たんだけど」
「そうだったな」

くっくと笑うバルティアに、朔耶はフルーツの種を飛ばして攻撃した。

「おお陛下、ここに居られましたか。サクヤ殿もご一緒ですな」

内密な話の出来る隠し部屋に向おうと食堂を出た所で、側近の一人が声を掛けてきた。朔耶には『謁見の間でも見たよく叫ぶ爺さん』として記憶されている。

「ダンクルか、どうした？」
「ハ、実は最近陛下がお使いになられている二輪車について、城内

の伝令に使わせて頂けないものかと下々の者から嘆願が上がっておりまして」

バルティアは朔耶を振り返ると、どうする？という意味の視線を送る。

「いいんじゃないの？　もうこの城の技師さん達だけでも作れると思うし」

「だそうだ、余は別に構わんぞ」

「ハハッ　では早速そのように……あ～……所で陛下、お顔に何か付いておりますぞ？」

そう言ってダンクルは自らの顎の辺りを擦って見せる。バルティアが自分の顎を擦ると、何か白っぽい粒が指に引っかかった。　横でニヤニヤしている朔耶を余所に、バルティアはそれを摘むと徐に口に含んだ。

「！っ　タネ食うなーー！」

ニヤニヤ笑いから一転、顔を真っ赤にした朔耶が叫ぶ。

「ふっふっふ、お前の口にしたモノなら何でも食ってやろう」

「やかまし変態皇帝め！」

「陛下に変態とは何事か！」

「変態でしょうが！あんた教育係ならちゃんと教育しときなさいよ」

しばらく廊下で騒いだ後、バルティアに宥められたダンクルはブツブツ言いながら公務に戻り、朔耶とバルティアは最寄の隠し部屋に向かった。

途中、離れた場所の壁の裏に何者かが潜んでいる事を意識の糸レ

ーダーで見つけた朔耶が、じぃーっとその壁を見詰めていると、慌てたように物音を立てて其処から立ち去って行く足音。

「かなり警戒してるね」

「くく……サクヤの索敵にはまだ対抗出来ないようだな」

朔耶は若干ゲンナリした様に呟き、バルティアは面白そうに言った。

「さて、それでサクヤが感じた違和感とは？」

「うん……さっきのダンクルさんだっけ？　あの人は信用出来るかもしれない」

ほう？　と首を傾けながら先を促すバルティアに、朔耶は初めてこの城に来た日の謁見の間での出来事から話し始めた。

「他の側近の人達とあの人の言う事って、少しだけ違いがあるのよ」

初日の掛け合いでダンクルは常に『陛下』を尊重する言い方で朔耶と対峙し、毒殺未遂事件以後の側近達の朔耶を娶る事に対する賛成の理由でも、ダンクルは『陛下の御為』というニュアンスが強かった事に対し、他の側近達からは『朔耶の力』を評価する言葉が多かった。

「ふむ……確かに些細な事だな、それだけでは相手の信疑は測れまい？」

「まあね、でも何かそこが引っかかるのよ……」

まるで他の側近達は、皇帝よりも皇帝の相手が重要であるような雰囲気を感じるという。

「……そういえば、サクヤを娶る事に反対していた者は皆、フレグンスの王女を后にと推していた者達だな」

「レティとあたしの共通する点って言えば、やっぱ精霊術よね？」

朔耶は自身の詳しい事情は伏せながら自分の中の精霊が騒いでいる事をそれとなく話しに混ぜてこの城か、この地に何か精霊を騒がせる要素が無いかを探った。

朔耶の中の精霊の状態について、レティレスティアとは毎日のように交換を繋いで連絡を取り合っているが、精霊が騒ぐ理由は未だにはっきりしていない。

以前のエルディネイア誘拐事件の時のように直接精霊に尋ねようともしたが、波で荒れた水面の如くノイズだらけで声が届かないのだ。

「精霊か……サクヤが精霊術の使い手として優れている事が、裏の支配者にとって都合が良いという事か？」

「ん～……どうなんだろう？　でも、あれから危ない事って起きてないよね？」

「ああ、まだ数日しか経っていないから分からんが……狙われる気配はないな」

「それってつまり、皇帝の相手はあたしでＯＫって事になったから暗殺やめたって事にならない？」

『ではこのまま結婚すれば安泰だな』などと口走る皇帝にヘッドロックを掛けながら、朔耶は集めに集めた兵力について質問する。

「余にもよく分からんが、フレグンスに対する圧力になると聞いている」

十分に圧力を掛けた後、外交交渉によってフレグンスの王女を皇帝の妻に迎える事で両国の和平と同盟を目指す、その実、内部崩壊したフレグンスに融和政策を行って取り込むという話だったと語るバルティア。

帝国の重要機密ダダ漏れである。

「じゃあ、本来はそれでレティを手に入れる手筈だったわけだ？国境の森でレティを攫おうとしたのはアンタの指図？」

「うむ……無駄に兵を雇っても……国の財政を……圧迫するだけだからな……民の生活にも……影響は少なからず……」

ほうほうとジワジワ締める力を増しながら、朔耶はバルティアが自国民の事をちゃんと考えていた事に少し感心した。

「ああ……このままサクヤの腕の中で果てるのも悪くない」

「ばか」

ぽいっと皇帝を投げ出した朔耶は隠し部屋の出口に向かった。

「何処へ行く？」

「下の訓練場。　傭兵の人達の様子も見ておこうと思って」

「ふむ、では余も……」

「あんたは仕事があるでしょうが」

バルティアにも皇帝の権限でしか決められない事項を扱う書類にサインを入れるという事務仕事があった。朔耶に与えた許可書のよ

うに、皇帝にしか書く事の出来ない発掘品のペンを使って延々サインを書き続ける仕事。
詳しい判断を下すのは殆ど書類を持ってくる側近の仕事なので、バルティアには本当に只管サインを書くだけの退屈極まりない仕事だ。
とぼとぼと皇帝の執務室に向かうバルティアに『サボるなよー』と励ましの言葉を掛けて送り出した朔耶はそのまま一階の中庭訓練場に向かった。

「この頃はみんなダレて来てるみたいよ～？」
「真面目に訓練してる人もちらほら見えるね」

途中で出くわしたアネットと連れ立って、夜の帳が下り始めた中庭訓練場を歩く朔耶。
帝国の正規軍は城に近い位置の訓練場、傭兵達は防壁に近い訓練場で其々気の合う者同士で固まって訓練に励んだり、独り離れた所で黙々と修練を行う者も居る。

この城の中庭には中心に円形の闘技場があり、その周囲は観戦用の空き地を挟んで訓練場がズラッと並んでいる。
森の中での戦闘や足場の悪い場所での戦闘を想定してか木に見立てた高い杭が打ち込まれていたり、デコボコや斜面になった地面が区画ごとに分かれていた。

「なんというか『庭園？何それ？』って感じだね～」
「あはは　剣の国なんて言われてる修行大好き人間が集まる国だからね、そういう情緒は必要ないでしょ」

「密偵部隊の人達は何処で訓練してるの？」
「あたしらは戦闘技術よりも潜入技術優先だからホラ、あそこのごちゃごちゃした所さね」

そう言ってアネットが指した場所は建物の一部を切り取ったような屋根と窓の付いた壁に、少し隙間を開けて塀が立っている映画のセットを思わせる造りの訓練場だった。

「おおー本格的」
「王都の貴族街じゃここでの訓練が随分役に立ったよ、あの土台もよくある貴族の屋敷を参考にしてるからね」
「ほうほう、貴族街で暗躍してました、と」
「あ”　ちょっとサクヤちゃん、今のはホラ……ねぇ？」

思いっきり口を滑らせたアネットが慌てて『内緒ね？』のサインを送るが、朔耶にしてみれば『何を今更』な話である。適当な微笑み返しでアネットを混乱させて遊んでいた朔耶は、ふと思いついた質問を投げ掛けた。

「ねえ、ヴィヴィアンさん達はレティの誘拐とか指示されなかった？」
「王女様かい？　どうだろうねぇ……隊長からは特に聞いて無いけど」
「俺がどうかしたか？」

そこに気配を消して現れたのはアネットが所属する密偵部隊の隊長、ガルブレックだった。

アネットは声を掛けられる直前に気付いていたので特に驚いた様子も見せなかったが、朔耶は数メートル先から近付いて来ているの

を交感レーダーで察知していたのでやはり平然としたまま同じ質問を投げ掛ける。

「ん……いや、特にそういう指令は無かったな。常に動向は探るようには言われていたが」

「ふむふむ、という事は……帝国のシナリオはフレグンスに圧力を掛けながら工作による内部崩壊を待ち、然る後、政治的な取引でレティを手に入れて、グダグダになったフレグンスも自国領に取り込んで行くってのがメインな訳ね。レティの誘拐未遂はバルのアホタレの独断か……」

脅かすつもりで気配を消して背後に現れたというのに期待した反応を得られず少々残念そうに肩を落とす割とおちゃめなガルブレックは、その後の朔耶の独り言のような呟きに目を瞠った。

一体この少女は帝国の何処まで入り込んでいるのか、と。幾ら皇帝に見初められたからと言っても、帝都に来てまだ数日しか経っていない筈なのだ。

「それじゃあ、あたしの誘拐は誰の指図？」

「え？　あ、それは……普通に上司からの指令だが……」

「つまりバルじゃないと……ま、後で聞けばいっか」

ふーむと腕を組んで考え込む朔耶を、ガルブレックは複雑な心境で眺める。竜籠の中でも考えていた事、朔耶を帝都に連れて来た事は果たして帝国にとって良い事だったのか、悪い事だったのか。

最近の皇帝陛下は以前のような無気力と違い、精力的に活動している。

それはもう城内の廊下を二輪車で爆走する程に。それが必ずしも良い事とは限らない。皇帝が実質お飾りのような扱いだった事は、

裏事に精通する者なら直ぐに気付く。そんな事をつらつらと考えていると――

「おお？　見ろよ、『皇帝の黒后』様だぞ」
「ほんとだ、ちっせえなぁ　皇帝が子供趣味ってのは本当らしいな」
「いやあでも、あの細い身体に黒一色ってのは……なんかそそらねえか？」
「黒髪かぁ……悪くねぇなぁ」

近くの訓練場で酒盛りをしていた傭兵達が朔耶の姿を見つけて口々に囃し立てる。朔耶は『子供趣味』という部分で頬ピクリとさせたが、無視して考え事に没頭しようとしていた。

しかし彼らは本来の仕事場である戦場に出る機会が一向に訪れず、城の中庭訓練場で過す毎日に辟易している為かすっかり悪酔いをしており、下賤な噂話や下の話を始めてしまった。

周囲の訓練場にいる他の傭兵達もこれといった娯楽も無い為、楽しい事には便乗する。

「何でも謁見の間で全員とヤって腰砕けにしちまったって話だぜ」
「側近のジジイ共も含めてかよ？　かぁーっ　そりゃサキュバスって奴だな」
「うははっ　サクヤだけにサキュバスってか！」
「俺もご相伴に預かりてぇ～」

ぷち。

「さ、サクヤちゃん……？」
「あ、ああいう連中の言う事は気にしても切りが無いぞ？」

ゆらりと振り返った朔耶に何か危険な気配を感じ取ったアネット

とガルブレックは慌ててフォローに動くが、朔耶は無言で傭兵達の訓練場に手を翳す。

ちびっこい皇帝の黒后様がどんな反応を返すのか楽しげに様子を窺っていた傭兵達は、首筋に悪寒が走るのを感じて笑うのを止めた。

「……誰が……」

ぶわっと朔耶の黒髪が広がり、身体が青白い光に包まれたかと思うと――

「色情悪魔かーーーー！！」

カカアアァン！カカカカアアァァアン！

閃光と稲妻が訓練場を駆け抜け、酒盛りをしていた傭兵達を含め囃し立てに参加していた周囲の傭兵も纏めて電撃を撃ち込まれてその場に崩れ落ちた。

彼らの馬鹿騒ぎに無関心だった傭兵達や正規軍の兵達も唖然とした表情でその惨状を見遣り、ついで朔耶に目を向ける。噂には聞いていた。

謁見の間で皇帝に対して堂々とした啖呵を切り、並み居る衛兵や騎士団、魔術団、精鋭騎士団のみならず、側近や皇帝陛下まで含め全員を気絶させて逃亡したという逸話。

フレグンスの光の魔術士、ルッテンを超える稀代の発明家、皇帝の黒后。強力な精霊術を操り、高度な技術で発明品を生み出し、得体の知れない魔術を行使する異国の魔術士サクヤ。

「たく……お下品なんだから」

剣の国に集う者は力を求め、力持つ者に憧れ、嫉妬し、尊敬する。
畏怖と尊敬の眼差しを浮かべる戦士達の視線を浴びながら、朔耶は赤らめた顔を俯かせてのしのしと城への道を歩いていった。
朔耶の後姿を見送りながら、ガルブレックはふと思い出す。

「そういえば……フレグンスの城まで潜り込んだ別の隊の奴がサクヤの事で妙な事を言っていたな」
「妙な事……？」
「ああ、サクヤは『異界の魔術士』なんだそうだ」
「異界？」

怪訝な表情で返すアネットに、ガルブレックは一つ息を付いて答える。

「意味は俺にも分からん、そいつも城の地下でそんな話をしている女の声を聞いただけらしいからな」

まさか本当にこの世ならざる者な訳は無いだろうとガルブレックは首を竦め、アネットも朔耶は魔物や魔族の類には見えないと頷いた。

「まあ、得体が知れないのは確かだけどね……」

37話：闇の皇帝

「素晴らしい……」

深い深い地下の闇の中で、彼は感嘆の声を漏らした。

「よもや……このような状態を持つ者が……存在していたとは……」

狂喜にも似た歓喜の笑みを浮かべた彼は、発掘品の鏡に映る黒髪に黒い瞳を持つ異国の少女に手を伸ばす。

「この存在こそ、余が求め焦がれた存在よ……もはやアルサレナもその娘も要らぬ」

鏡に少女の姿が大写しになる。

「この異国の娘さえ在ればよい……この娘を、早く余の下へ……」

「畏まりまして御座います」

彼の忠実な部下達が一斉に頭を垂れると、その気配が消えて行く。

地上より彼の所望する存在を連れ帰る為、部下達は若き傀儡の皇帝の下へ向かった。

シャーーカラカラカラ……シャーーーーーーカラカラカラカラ……

「……」

シャシャーーーーガガガガガリッ　ガシャーーーン

「あーー！　やかましい！」

深夜、適当な隠し部屋で横になっていた朔耶は、廊下を疾走して曲がり損ねて転倒したであろう馬鹿皇帝を叱りに隠し部屋を飛び出し、音が響いていた廊下を見渡した。

すると案の定、廊下の角の所で壁に突っ込んでいる黒塗りのキックボードと、廊下で大の字になっているバルティアの姿。

「な　に　を　やってんのよ、アンタは」

「おお、サクヤか　スマンが肘と膝を擦り剥いたようだ、治癒してくれ」

ぺしっと傷口を引っ叩く朔耶。

「～～～～～っっ！！」

「こんな夜中に何遊んでるわけ！？　五月蝿くて寝られないでしょうがっ」

「いや、昼間は人が多いのでな　深夜の下階層は空いていて走り易いのだ」

「何走り屋みたいな事いってんの！」

人気の無い深夜の廊下で一頻り説教した後、朔耶はぶつぶつ言いながらもバルティアの傷に精霊の治癒を使った。バルティアのキックボードは軽量化のし過ぎで後輪がコーナーの負荷に耐え切れず割れてしまったらしい。

「まったく、子供みたい」
「うむ、面目ない」

その時、廊下の奥から何かが聞こえて来た気がした朔耶は、思わず其方に顔を向ける。しかし特に変わった様子は見られない。

「ねえ、今何か聞こえなかった？」
「ん？　特に何も聞こえんが？」

耳を澄ませてみるも、深夜の廊下はしんと静まり返っていた。首を傾げながら部屋に戻ろうとする朔耶に、バルティアはやけに低い声色でボソっと囁く。

「城を彷徨う霊の声かもしれんな……」
「っ！」
「さて、では余も部屋に戻るとするか」

壊れたキックボードを回収して自分の寝座に戻ろうとするバルティアは、ふいに服を引っ張られて足を止めた。朔耶がバルティアの服の裾を摘んでいる。

「どうした？」
「あ、あんたね……ワザとでしょ」
「んん？　何の事かな？」
「く……こんにゃろ～」

バルティアは面白そうに振り返ると、壊れたキックボードを置いて徐に朔耶の身体を抱き寄せた。

「あっ　ちょっと……！」

「くく……前にも言ったが、精霊と通じるのに何故霊を恐れるのだ？」

「ううう～　だってしょうがないのよ、そういう環境で育ったんだから……」

朔耶は子供の頃から幽霊関連は苦手だった。毎年夏になると、夏休みで夜更かししては、深夜の心霊番組を見る兄弟達に付き合っている内に『幽霊は怖いもの』という概念が刷り込まれてしまったのだ。

家でテレビの前に居る時は、その兄弟達に両脇を固められているので安心して怖がっていられたが、ここには両脇を護る近しい者は居ない。

「不本意だけど、こうされてると落ち着く……」

「……そうか」

「だけど勘違いしないでよねっ　あくまでもこれはお兄ちゃんの代わり！」

照れと羞恥で頬を染めた朔耶は目を逸らしながら大人しくバルティアの腕の中に納まっている。

現在勇気回復中のツンデレな朔耶なのだが、バルティアはこの柔らかさと体温を手放したくない気持ちに駆られていた。無意識に朔耶の温もりを求めて抱き締める腕に力を込める。じろりっと見上げる朔耶の怒った顔も、どうしようも無く愛しい。

「どうやら、余は本気らしいぞ」
「？　なにが？」

すっと髪を撫でた手で抱き込むようにして朔耶の顎を持ち上げるバルティア。その真剣な表情に気圧されて朔耶は一瞬硬直する。湿った吐息が唇に掛かり、何事かを呟こうと開き掛けた朔耶の唇がバルティアの唇に塞がれようとした瞬間。

カカアアァン！

閃光と放電によってバルティアの身体が弾き飛ばされた。

「あ、危なかった……」
「……惜しいな、絶対に離すまいと思ったのだが」

再び廊下で大の字になるバルティアは、身体の痺れや倒れた時の痛みよりも寸前で味わい損なった朔耶の甘そうな唇への未練で一杯だった。怒りからか羞恥からか、顔を赤くしたままの朔耶はバルティアに追い討ちで文句の一つも言ってやろうとして――

――余の下へ……――
「！っ」

意識の糸に触れられ、ビクリと肩を震わせた朔耶は思わずバルティアを凝視した。　突然色を失くした表情で凝視する朔耶に、異変を感じ取ったバルティアは怪訝な表情を向けながら起き上がる。

「……違う、バルじゃない……今の誰？」
「どうした？　また何か聞こえたのか？」
「誰かがあたしに交感を……あっ！　くぅ……っ」

頭と胸を押さえて苦しそうに傾いだ朔耶の身体を咄嗟に支えたバルティアは、精霊術の交感による攻撃かと焦りを覚える。
精霊術士同士の戦いでは、しばしば交感による相手の意識への直接干渉という攻撃法が使われる。その状態に入ると、外部の者には手出しが出来ない。

「！っ　何か来る……バル離れてっ！」

意識に絡みついてくる黒いイメージの糸から何か力を発現させようとする気配を感じ取った朔耶は、咄嗟にバルティア突き飛ばす。その瞬間、何処からとも無く発生した黒い霧が包み込むように球体を形作り、朔耶を中に閉じ込めた。

「サクヤ！　く、何だこれは……」

バルティアは朔耶に手を伸ばそうとするが、霧の球体は表面に弾力を持っていて押し返されてしまう。捕縛か、或いは保護の加護だろうかと当りをつけ、バルティアは何処かに近くに術者が居るはずだと周囲の気配を探った。

『これ程の術を使うには　かなり近くに居なければ難しい筈だ……』

「おや、一緒におられましたか」
「随分とサクヤ殿に執心ですなぁ」

ふいに響いた声にバルティアが振り返ると、廊下の奥から歩いて来る側近達の姿。しかし普段の見慣れた彼らとは纏っている雰囲気が違っていた。まるでよく似た他人を見るような違和感。

「？……お前達、何者だ」

「これは異な事を」

「我等は皇帝陛下の忠実なる家臣ですぞ」

「ああ、勿論貴殿のような傀儡の事ではありませんぞ？」

蔑むような眼を向ける側近達に、バルティアは『よもやほぼ全員か』と朔耶の言っていた気になる違和感を思い出し、彼らの中にダンクルの姿が見えない事で朔耶の勘の異常さを思い知る。

「余以外の何処にグラントゥルモスの皇帝が居ると？」

懐のナイフを抜いたバルティアは側近達を牽制しながら時間稼ぎを試みた。態々こうして姿を晒したのは自分を始末して次の皇帝に祭り上げる贄の準備でも出来たのだろうと推測する。

「傀儡が知る必要は無いですな」

「ふん、次の皇帝も傀儡には違いあるまい？」

側近の嘲笑に嘲りで返すバルティア。しかし側近はバルティアの言葉に怪訝な表情をして返す。

「次……？　はっ　何か勘違いしておるようだ」

「我等の皇帝陛下は今も昔も只一人、エイディアス陛下しかおらん」

「……エイディアス……だと？」

その名前にバルティアが気を取られた一瞬の隙を突いて、朔耶を捕らえている黒い霧の球体が側近の一人の手によって彼らの方へ引き寄せられる。風の魔術を使ったらしいその側近は宙に浮かぶ黒い球体を引いて廊下の奥へと消えていく。

「サクヤ……っ　　貴様、待て！」

追い掛けようと踏み出すバルティアの行く手を阻むように残った側近が廊下を塞ぐと、一人が短剣で牽制し、もう一人が詠唱に入った。構わず短剣の側近に斬りかかるバルティア。

「どけっ！」

「貴殿の役目は今日で終わりだ、まったく……大人しく我等に従っておれば良かったモノを」

嵩張った衣装を身に付けているにも拘らず、短剣の側近は卓越した動きでバルティアのナイフを往なして翻弄すると、仲間の詠唱が終わるタイミングに合わせてバルティアの身体を弾き飛ばす。

「っ……！」

体勢を崩された所に無数の氷塊が飛来し、バルティアは吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。短剣の側近がトドメを刺しに突進する。バルティアの心臓目掛けて突き出された短剣は、それを握る手を貫いたボルトによって叩き落された。

「ぐあっ！　な、何者！」

「陛下！」

続け様に放たれたボルトが二人の側近の身体に撃ち込まれて行く。そしてバルティアと倒れた側近達との間に降り立つ人影。四連装の携帯式小型ボウガンを両手に天井の隠し通路から降りて来たのは密偵部隊の女性隊員、アネットだった。

アネットは昼間見つけたこの隠し通路の調査をしていて偶然この現場に出くわした。キックボードで疾走する皇帝を追跡しようとした監視者が昼の喧騒に音を潜めて移動する事を怠り、偶々下を歩いていたアネットがこの通路の存在に気付いたのだ。

「御無事ですか！」

「お前は……確かアネットといったな、助かったぞ。ゆっくり礼を言いたい所だが、奴等にサクヤを攫われた」

「サクヤが！？」

「この城には先代の亡霊が棲んでいるようだ」

先程バルティアが側近達から聞いた彼等の主たる者の名。『エイディアス陛下』とは『第十三代皇帝エイディアス・スルート・グラン』の事に他ならない。戦乱の時代を過ぎ、復興で戦の爪痕も癒えようかという頃に忽然と民の前から姿を消した先代皇帝。

その崩御は謎とされたまま、第十四代皇帝の即位が発表されて今に至っている。

「先代皇帝……まさか、あの噂……」

「噂？」

「はい……、あたし達みたいな特殊部隊の中でも潜入専門の部隊で噂されている事で――」

この城の地下には強力な結界が張ってあり、誰もその奥がどうなっているのか知らない謎の空間があると言われている。

数十日に一度、僅かな間だけ結界が解かれる時があり、その時を狙って地下の奥深くまで侵入を試みた潜入員がいたらしく、彼はそこで先代の皇帝を見たのだそうだ。

その話をした潜入員はその後すぐ訓練中の事故で死亡しており、彼のもたらした話の内容や不自然な事故死から先代皇帝の呪いかと

噂されるようになった。

「その地下へはどうすれば下りられる？」
「行かれるのですか？」
「当然だ、亡霊如きにサクヤを拐かされてなるものか」

バルティアは服に付いた氷の粒を払い落とすと、アネットに向き合い、皇帝として指令を出す。

「直ちに手勢を集めて準備を整えるよう皆に伝えよ、サクヤの奪還と亡霊退治だ」
「ハッ」

「ううう……気持ち悪い……」

黒い意識の糸に絡み取られたまま地下の奥深くにある祭壇の間に運ばれて来た朔耶は、自身を包んでいた黒い霧の膜から解放されてようやく人心地ついていた。膜に包まれている間、身体中を貪られるような貪欲な気配に嫌悪感で精神を疲弊していた。

朔耶を運んで来た側近の魔術士は、自らの主に一礼をすると速やかに祭壇の間から下がる。

「良くぞ来た……異国の娘よ……」
「連れて来られたんだっつーの……ここ、何処よ」
「ふ　ふ　ふ……まこと気概のある娘よの……」

ガランとした薄暗い円形の広間の奥に高い壇になった部分があり、その壇上の玉座に鎮座する人影。

その姿を見た朔耶は目を瞠った。玉座に座っているのは頬が痩けた骸骨のような顔に、窪んだ眼は真っ黒、手足は骨と皮だけのような老人だったが、驚いたのはその老人の身体から何本もの柱が突き出ている事だ。

細かい溝や管の走る円柱形のソレは、扇状に七本突き出ていた。

「ふ　ふ　ふ……これか……？　これこそは……余の願いを叶える……究極の発掘品よ……」

「永遠に生きられる生命維持装置とか言うんじゃ無いでしょうね？」

絡みつく黒い意識の糸に抵抗しながら気丈に振舞う朔耶の言葉に、老人は口を弓形に歪めて笑う。

「ふ　ふ　ふ　賢しい……賢しいのぉ……流石は重なる者……」

「えっ？」

『重なる者』という自身の秘密に纏わるキーワードが出た事に、朔耶は驚いて声を漏らした。その隙を突くように、黒い意識の糸が朔耶の意識を侵蝕しようと締め付ける。

まるで心を引き抜かれそうな感覚に恐怖を覚えながらも、朔耶は初めてレティレスティアと交感を繋いだ時の事を思い出した。

「う……くぅ……こ、こうやれば良い訳ね！」

「……む」

初めてレティレスティアと交感を繋いだ時は、彼女の意識を強く掴み過ぎて精神的な負荷を与えてしまった。その後のアルサレナの

講義で力の加減を覚えてからは殆ど無意識に力をセーブして使っていたのだ。
朔耶は意識してその力を強く使う事で黒い意識の糸の侵蝕に対抗し、なんとか押し返す事が出来た。

「ふ　ふ　この力……まさに重なる者よ……」
「……あんた、誰？　一体何者なわけ？」

自分の意識の領域を取り戻し、精神的な余裕を得た朔耶はそのまま油断無く老人を観察した。何か老人の持つ気配とは別の、大きな気配を老人から感じとる。

「余は……栄光なるグラントゥルモス……第十三代皇帝……エイディアス・スルート・グラン成り……そして……」

エイディアスの窪んだ眼が朔耶を捉えると、ずしりっと空間の重みが増したように空気が淀む。

「お前と同じ……精霊と重なる者である……」
「！っ　な……」

朔耶は自分の中の精霊のうねりがさらに大きくなっている事を感じた。自分と同じ『精霊と重なる者』だというエイディアス皇帝はカクカクと首を震わせて笑う。

『じゃあ、まさかこの人も別の世界から……？』

そう思った朔耶の考えは、エイディアスの言葉によって否定された。

「この……究極の発掘品により……余は無限の魔力を……欲しいままに出来た……だが……完全なる融合には……至らなかった……」

『？　融合？　……発掘品で無限の魔力？』

「お前のような……精霊との……自然な融合体を……目指していたのだ……」

エイディアスは不老不死と無限の魔力を求め、城の地下に眠る古代魔法文明の遺跡から発掘した装置、精霊を引き寄せ封じ込めておく事の出来る柱状の装置の実験を繰り返していた。

そして自らの身体を装置と一体化する事で装置に封じられた精霊と融合し、精霊の行使出来る力を際限なく引き出せる段階にまで漕ぎ着けたのだ。この装置と融合している限り、精霊の力を使って生命を維持し続ける事が出来る。

但し、装置が大掛かりな為ここから一歩も動く事が出来ない。

「精霊との……完全なる融合……それを果たすには……交感力の強い……血が必要だった……」

地下に籠もり、傀儡の皇帝を立てて帝国を裏から動かすようになったエイディアスは、フレグンスの王族の血に活路を求めた。六体もの精霊を使役する王妃アルサレナと若くしてその才能の片鱗を見せる第一王女レティレスティア。

この二人の血と身体を徹底的に分析し、血が交感力を高めるならばその血を自身に取り込み、身体に秘密があるなら身体を取り込んで我が物とする。

「まさか……、それが理由で戦争の準備してたって言うの？」

「ふ　ふ　ふ　　だが……もう、それも……必要無い……ここに……最高の素材が……在るのだからな」

「言っとくけど、あたし協力なんかしないわよ？」
「ふ　ふ　　協力など……求めぬ……ただ……」

徐に、エイディアスは玉座から立ち上がる。思わず身構えた朔耶は何時でも電撃で攻撃出来るようにしようとして、違和感を覚えた。精霊術に目覚めて以来、常に近くに感じていた無数の精霊の存在が感じられない。

「ただ……その血も……肉も……余のモノとなれば良い！」

その瞬間、エイディアスの纏う帝衣が千切れ飛び、無数の細長い紐状のモノがその体躯から溢れ出ると、朔耶に向かって殺到するように伸びて来た。それは肥大化した神経繊維や血管だった。
歪な形に捻じ曲がりながら朔耶の身体に絡みつくそれは、確かに脈動し、体温らしき熱を持った生き物である事を窺わせた。

「余は……！　精霊と一つとなり……！　人を超えるのだ……！」
「ぎゃーーーっ！　アンタもう人辞めてるじゃないの！！」

全身に悪寒を走らせた朔耶は『触手プレイか！！』などと叫びながら電撃で振り払おうとしたが、意識の糸を広げて精霊に頼んでも電撃は発現しなかった。
焦って身を捩りながら藻掻くも、手足に絡み付くように巻き付いた神経と血管の触手は、朔耶の身体を持ち上げ、次々とその数を増やしながらエイディアスの方へと引き寄せる。

「さあ……余と一つになるが良い……」
「いーーーやーーーー！」

擬似的に精霊と融合しているエイディアスは局地的ながらも『精

霊という存在そのもの』としての力を使える為、この空間をその力で閉鎖する事で朔耶の『精霊という存在そのもの』の力と相殺させていた。

今この空間は一種の結界状態にあり、精霊術に限らず詠唱魔術もその力を発現する事は出来ない。力の源となる魔力の元栓をエイディアスが握っているようなモノだからだ。

「ふ　ふ　　お前の精霊は……余の精霊で……中和されておる……この空間で……術は使えぬぞ……」

ザワザワと朔耶の身体に巻き付いた神経と血管が弄る様に服の中にまで侵入を始める。　かぁっと赤くなった朔耶は沸騰する意識を爆発させた。

「こんな変態怪物じじぃに穢されてたまるかぁーーー！！」

カカカカカアアァァアン！！

瞬間、閃光が瞬き、巻き付いていた神経や血管が纏めて焼き切れた。　エイディアスの絶叫が響く。

「ぎゅおおあぁあぁあぁあぁ！！！！」

ボトッと床に落とされた朔耶はすぐさま立ち上がると、おぞましい絶叫を上げているエイディアスに恐怖を怒りで抑え込みながら肉薄する。朔耶の中にいる精霊のうねりが大きく揺れる。

朔耶と重なる『この世界の精霊』の力は、確かにエイディアスの精霊と相殺された状態にあった。しかし、朔耶の精霊との重なり方は朔耶の世界に『遍在する精霊』が朔耶の中に入った状態で此方の世界の精霊と重なっている。謂わば二重に重なっているのだ。

従って、精霊術に目覚めてからの意識の糸を使った電撃と、朔耶自身が纏う電撃は力の出所が違っていた。

「い　な　ず　ま　――」

「な、なぜだぁ……！　精霊は……！　沈黙している筈……！」

エイディアスの体躯から新たな神経線維と血管が噴出して来る。その現実離れした恐ろしい光景に身を震わせながら朔耶は決断した。

『こんな不自然な存在がいちゃいけない』

「びんたぁあーーーー！！」

ぶちぶちと血管と神経を焼き切りながら、雷を纏った朔耶の右掌がエイディアスの顔面を捉えた。

届いた時にはもう纏っていた雷は消え去っていたが、もはや肉も殆ど削げ落ちているエイディアスは、一切緩和される事の無く打ち込まれたその衝撃に意識を飛ばす。エイディアスの融合する精霊の結界が解かれ、空間に無数の精霊の気配が満ちた。

『そしてあたしも』

朔耶は気絶しているエイディアスの玉座に上ると、柱状の装置とエイディアスの身体の接合部を調べた。装置を埋め込むように穴の空いた皮膚と装置の間に無数の神経と血管が通っているのが見える。

深呼吸して気合を入れた朔耶は、エイディアスの身体を装置から引き剥がしに掛かった。ぶちぶちと装置と繋がる神経や血管が千切れて行く。背中の一番太い神経で繋がっていた装置から切り離すと、装置は稼動を停止したように色を失った。

次は前に回って両手を引っ張り、残りの装置から引き剥がす。

「！……な、何を……何をしている……余の……余の精霊が……」

意識を取り戻したエイディアスが狼狽したように呻くが、もはや自力で動ける身体ではない為、朔耶に引っ張られるがまま装置から引き剥がされていく。

「やへろ……よの……ひから……よ……よの……へいれい……」

見る見る色を失い、呂律も回らなくなって行くエイディアスの姿に朔耶は相手が化け物だと分かっていても心が軋んだ。

朔耶は自分の意志と手で、この哀れな老人に引導を渡そうとしている。その事をとても恐ろしいと思いながらも、何故か人に任せてはいけない気がしていた。

そして、最後の装置から色が消えた。

「……」

エイディアスはもう言葉も発さず、その骨と皮だけの腕からも体温が抜けていく。朔耶は指が痛くなるほど握り締めていたその腕から自分の手を引き剥がすと、自らの肩を抱きながら後退り、その場にへたり込んだ。身体が震えている。

「……殺し、ちゃった」

口にした途端、その事実が重く圧し掛かる。相手は怪物、既に人間を辞めていた。そう思っても気持ちの重さは少しも軽減されなかった。

「陛下……エイディアス陛下ーー！」

様子を見に来たのか、朔耶をココまで運んで来た魔術士の側近が床でうつ伏せに倒れているエイディアスだったモノを見つけて叫びながら駆け寄って来た。

手を触れようとして触れられず、しかし確かめるまでも無くそれはエイディアスの遺体である事に嘆く魔術士の側近。そしてふと、座り込んでいる朔耶の姿を見つける。

「あ……」

「っ！　ひいいいいいい！」

朔耶が何か声を掛けようとかと口を開き掛けた瞬間、魔術士の側近は悲鳴を上げて怖ろしいモノから逃れるように尻餅を付きながら後退りすると、バタバタと逃げていった。

『そんなに怖がらなくてもいいじゃん……』

傷ついたように拗ねる朔耶は、自分の手を見てあの側近があれ程怯えた理由を悟った。

「そりゃ、あれだけ血管が千切れりゃこうなるか……」

両手のみならず、朔耶は全身を血で真っ赤に染めていた。今更ながら、辺り一面千切れた神経線維と血管の散らばる血の海である事に気付く。こんな惨状に気付かない程気持ちが切迫していたのかと、朔耶は一人溜め息を吐いた。

ここでこうしていても仕方が無いので、とりあえずお風呂に入れる所まで行こうと立ち上がった朔耶は、エイディアスから感じてい

たエイディアスでは無い大きな気配を感じ取った。交感で調べると、それはエイディアスが融合していた精霊だった。

「……どうしたの？　もう、好きな所に行っていいんだよ？」

精霊は朔耶の周りをぐるぐる回る。長い年月装置によって繋がれていたらしく、またエイディアスによる力の行使を行う内に大きな力を持つ精霊に育っていた。朔耶はアルサレナに教わった精霊との契約を思い出した。

力の強い精霊と契約し、精霊術を学んでその精霊の力を借りる事で元の世界に還る事が出来る可能性。

「あたしと、契約してくれるの？」

精霊との契約は自分の意識の糸を精霊の意識の糸と結ぶ事で成される。そうして使役した精霊とは常に繋がった状態になるのだが、未熟な精霊術士が契約をした場合、交感力の殆どをその精霊との繋がりに費やす事になるので、無闇な契約は推奨されない。

肯定の意思を返す精霊。朔耶は少し逡巡したが、これで元の世界に還れる可能性を掴めるのだ。そう思えば迷う理由は無かった。

「これから宜しくね？」

朔耶は地下の精霊と契約を果たした。

38話：帰還

「とりあえず戻ろう……」

そう呟いて歩き出そうとした朔耶の頭の奥に声が響く。

カエス　カエス　サクヤノ　ネガイ

「えっ？」

それは、朔耶がこの世界に来てレティレスティアから疎通の加護を受けた時に聞いた朔耶の中の精霊の声だった。朔耶の中の精霊はアルサレナが推察した通り朔耶を連れて一緒にこちら側に来てしまっていた為、朔耶の『還せ～戻せ～』という要求に応えられず、それが可能になる時が来るのを待っていたのだ。

朔耶が地下の精霊と契約を交した事で、朔耶と重なる精霊が精霊を使役するという非常に稀な状態が可能となり、朔耶の中の精霊は朔耶の使役した精霊に転移の補佐を依頼した。朔耶の世界に偏在する地下の精霊を朔耶の中の精霊が朔耶を召喚させた最初の座標に移動させ、其処に此方の世界から朔耶を召還させる。

転移の力は朔耶と重なっている朔耶の世界に偏在していた精霊の力を使うので、此方の世界の朔耶と重なる精霊と地下の精霊が朔耶の世界に移動してしまう事は無い。

要するに、朔耶を自身と共に此方の世界へ転移させた精霊が、地下の精霊の偏在を目印に、自身と共に朔耶を元の世界へ転移させる、という事だ。

「ええ!?　今?　そんなちょっと、ま……」
「サクヤ!!」

祭壇の間に響いたバルティアの叫ぶ声に振り返る瞬間、朔耶はふわっとした温かい空気に包まれた。武装した騎士団や魔術団を率いて此方に走って来るバルティアの姿が霞む。そして気が付くと、朔耶は暗い山道に一人で立っていた。

蒸し暑く湿気を纏った生温い風、小道の両側に生い茂る草木、沢山の虫と蝉の鳴く声。細い木々の合間にポツポツとした町の明かりが見える。

「……還って、来ちゃった」

朔耶はあの日の夕刻、キャンプ場を目指して登っていたハイキングコースの山道に居た。

祭壇の間で、バルティアは呆然と佇んでいた。たった今まで朔耶が立っていた場所には赤い血溜まりがあるのみ。
血濡れた朔耶の姿を見つけ、叫んで駆けつけた目の前で忽然と消えてしまった。

「サクヤ……」
「陛下……御指示を」

バルティアの隣で臨時に指揮を補佐するアネットが控えめに声を掛ける。彼女も朔耶が消える瞬間は目撃していた。振り返った血塗れの朔耶は、何かを語りかけようとしていたようにも見えた。

『精霊術で何処かへ転移したのかしら、だとしたら一体何処へ？フレグンス？』

何れにせよ、バルティアを前にして姿を消した事実はバルティアに深い動揺と失意を与えていた。

「余は……サクヤに見限られたのであろうか……？」
「陛下、そんな弱気では得るモノも得られませんよ？」

帝国を影で支配していた先代皇帝が朔耶によって討たれた事で、先代が取り仕切っていた全ての事項を今後バルティアが行わなくてはならない。帝国の未来は彼の手腕に掛かってくる。

「……そうだな……まずはダンクルを呼べ、抜けた側近共の穴を埋めねばならん」

バルティアは一先ず気を取り直し、帝国の内部を立て直す事から始めた。自身がお飾りとして傀儡の玉座で退屈を玩んでいた間も、帝国は着実に力を蓄え、オルドリア大陸の列強四国の一角として君臨していた。それは先代皇帝の指示とそれに従う側近達の力在ってこそである事は認める所だ。

その先代と側近が消えてしまった今、自分達で帝国を支えていかなければならない。外交交渉はほぼゼロからのスタートとなり、国内の反乱分子に対する処置や抱え込んだ大量の傭兵部隊の使い所など、問題は山積みだ。

「アネット、お前は今後　正式に余の補佐となれ」
「え！　あ、アタシがですか！？」
「使える人材は率先して使う。　使えない人材は使えない成りに使う。　優秀な者が居れば引き込め、選定はお前に任せる」
「は、ハッ！」

バルティアは『先ずはフレグンスに親書を出す』と言ってこの場を部下達に任せると皇帝の執務室に上がった。

『サクヤ……余は必ずお前を見つけ出す』

「暑いなぁ～もしかして、もう夏？」

朔耶は取り合えず町を目指して下山していた。街灯の無い夜の山道は比喩無しに真っ暗なのだが、月明かりと町の灯りでどうにか足元を見る事が出来た事と、ハイキングコースとしての僅かばかりの踏み均された道が歩き易さを助けていた。
当面の問題は血の臭気が酷くて吐きそうな事だった。

「うう～……スプラッタを自分で体験するとは……」

朔耶は『今の姿を人に見られたら絶対通報されるな』などと思いながら、視界と足場の悪いハイキングコースを下って行く。麓に近付くに連れて水銀灯のような灯りが幾つか並んでいるのが見え、現代日本の明るい夜を実感する。

ここを登る時にはガランとしていた山の入り口にある駐車場らしき開けた場所には、数台の車と白いマーキーテントが並んでいるのが見えた。

「んん？　○○警察？」

テントの脇には大きな立て看板があり、『都築朔耶失踪事件特別捜査本部』と書かれてある。朔耶は『あたしのことかーー！』と自分の捜索が行われていた事に少し驚きながらも、そりゃそうだと納得し、自分を探してくれていたであろう家族の事を想って萎縮していた心が少し解れた気がした。

「あと、ビラはどうします？」

「この辺り一帯は貼り終わってるからな、また朝にでも駅で配る方に回そう」

失踪した少女を捜索する捜査本部が設置されて二ヵ月、成果の上がらないまま大規模な捜索は今日で打ち切り、今後は規模を縮小した上で捜査を続ける事になった彼らはここを引き払う為に機材やテントの撤収準備に追われていた。

既にキャンプ場周辺やバスの乗客から聞き込みで得た情報に添ってこの付近の捜索も虱潰しに行われたが、遺留品の一つも見つからないままの捜査縮小に、関係者の表情は暗い。

『この人を探しています』のビラを箱詰めしていた若い青年捜査員が突然机にぶつかって箱を落とし、ビラがぶちまけられた。

「おい～、何やってんだ……」

「……あ……ああ……」

青年捜査員は青褪めた顔で山の方を指差しながら口をパクパクさせている。男性捜査員が何事かと彼の指差す方向に視線を向けると。薄暗い山の入り口にあるハイキングコースの看板の前。街灯の下に、黒髪に黒い服を纏った血塗れの少女が立っていた。

「！っ」

思わず声にならない悲鳴が出そうになり、身体中の体温が一気に下がるような気配が背中を撫でる。所謂冷や汗というモノだ。少女はゆっくりと彼らの居るテントに向かって歩いて来る。

「せ、せせ……先輩っ　ゆゆ、ゆ……」

「い、いや待て、落ち着け……」

「でででも、でもっ」

どんどん近付いて来る血塗れの少女。青年捜査官は遂に念仏を唱え始めた。少女の輪郭がはっきりと分かるようになると、男性捜査員はその顔に見覚えがある事に気付いた。ぶちまけられたビラに写る笑顔の少女と同じ顔。

「つ、都築　朔耶ちゃんか……？」

「あ、ハイそうです」

失踪した少女の幽霊かと思われた血濡れの黒い少女は、実に平凡な返事を返した。

「あ～、今が深夜で良かった」

近くの病院のシャワー室で身体を洗い流している朔耶は、ここに辿り着くまでの騒ぎを思い出して冷や汗を浮かべる思いでいた。テント前で朔耶が本人である事を確認した捜査員は無線機を引っ掴んで『発見！　発見！』と既に引き上げている本部にいた捜査官達に失踪者発見の報を入れ、取り合えず身体を洗いたいという朔耶をパトカーで近くの病院まで運んだ。

深夜だというのに、そこそこ大きい病院のロビーには見舞い客や夜更かしで抜け出して来た患者、救急にやって来た人達が居て、朔耶の姿を見た人々は一様に後退るか悲鳴を上げるか硬直するかした。昼間の混雑にこの姿で現れたなら大騒ぎになっていただろう。

シャワーを浴びながら、朔耶は覚えた交感の要領で意識の糸を確かめてみたが、向こうに居た時のような感覚は感じなかった。身体から精霊が抜けた為に、当然力も無くなったのだろうと納得する。ただ、微かに地下の精霊との繋がりを示す感覚は残っていた。

「朔耶！」
「むぎゅ」

シャワーの後、簡単な検査を済ませた朔耶の下に連絡を受けた家族が駆け付け、診察室でノンビリ寛いでいた朔耶は有無を言わせず抱き締められた。朔耶が向こうの世界に召喚されてから約二ヵ月半、七十七日間が経過していた。

朔耶は行方不明になっていた間の事は『覚えてない』で通そうと思っていたが、流石に大量の返り血の事があって少しは話す必要が出て来た。しかし事情聴取を行った警察の反応は概ね予想していた通りのモノだったので、潔白さえ証明されていれば後はなるようになると開き直った。予想の反応、薬物使用に関する血液検査などの再検査だ。

精霊に喚ばれて異世界に行ってました、色々あって、あの血は人間辞めてた皇帝のモノです。

これを言葉通り受け取る者はまず居ない。ちょっと特殊な一般人の中には居たとしても、警察関係者に居てはいけないレベルの話だ。朔耶の家族の反応も微妙だったが、家族は朔耶の言葉に嘘や偽りの含みがあればそれに気付く。

朔耶の言葉に、隠し事の含みは感じられても嘘偽りの気配を感じなかった家族達は結論を棚上げした。

「朔耶がそういう経験をしたと言うのだから、そうなのだろう」

例え真実がそうでなかったとしても、朔耶自身がそれに付いて言及しない限り追求しないという事だ。朔耶は家族の心遣いを嬉しく思った。聴取と検査入院を済ませて家に帰宅出来たのは、それから

三日後の事だった。

「ただいま」

懐かしの我が家の玄関に立った朔耶は、本当に帰って来たんだという実感に包まれて暫し立ち尽くす。朔耶は入院中家から持ってきて貰った自分の服を着ている。

バルティアに貰った黒い街服は警察が証拠物件として預かるという申し出を断り、洗濯して持って帰って来た。どうせ調べても何も分かりはしないのだ。

自分の部屋に入ると、ほぼ家を出た時のまま綺麗に掃除がされていた。向こうの世界に行っている間も家族が部屋の状態を整えてくれていたようだ。

「はぁ……」

ベッドに腰を下ろして息を付く。既に家族との再会の喜びや友人達への連絡はこの三日間で済ませてあり、今は夏休みで学校もお休みだが、登校が始まれば全て以前と変わらない日常が始まる。

ほんの一時、神隠しにあっていたという少し珍しい経歴が付くだけの、平凡な毎日を送るただの学生に戻るのだ。朔耶はそれが良い事なのか悪い事なのか判断し兼ねていた。家に帰って来られた事や家族と再会出来た事はやはり嬉しい。

しかし、あの世界の人々との出会いや触れ合いを無かった事には出来ない。このまま彼らとの永遠の別れを受け入れる事に納得していない気持ちもあった。

「とは言うものの……」

微かに意識出来る程度にしか感じられなくなった精霊との繋がりを思うと、もはや如何する事も出来ないのだと実感する。もどかしい無力感にも似た気持ちを感じながら、朔耶はごろんと自分のベッドに転がった。

『みんな、どうしてるかな……』

朔耶は夢をみる――――

「クィスー、ヴィンスさーん　お昼ご飯出来ましたよー」
「ああ、いま行くよ」
「何時もすまないな」

アマガ村の水道橋はクルストスの街でも話題になり、街にも水道橋を建設して生活環境や作業効率を向上させようという動きがあった。サムズの統治者代表エイブムは首都エバンスに先駆けてクルストスの街で試験的に水道施設の普及を行い、問題点などの改善を持ってエバンスにも水道施設の建設事業を行う計画を立てた。

当初はサムズから派遣される職人や技師団でアマガ村の水道橋を含む施設を分析し、その後の現場を取り仕切らせる予定であったが、水道施設自体がフレグンスの王室特別査察官である朔耶によってもたらされた技術である事を理由に、フレグンスの官僚がその計画に辺境騎士団の騎士を組み込む事を要請した。

丁度、アマガ村の水道施設建設には辺境騎士団の騎士、ヴィンス・フロッソが朔耶からの指名により作業に参加していたので、その経験を買われて彼が派遣される事になり、作業指揮の補佐役としてアマガ村で直接朔耶から施設の技術指導を受けたとされるクィス青年が選ばれた。

アマガ村から毎日通うには距離があるという事で、クィスは辺境騎士団の宿舎に泊めて貰っている。そしてクィスに付いて来たデイジーは騎士団の宿舎で給仕として働いていた。

「もう少しすれば水を通せますね」
「だな、……ところで、王都から何か連絡はあったか？」
「駄目です……、特に新しい情報は無いみたいです」

デイジーは表情に影を落として首を振る。

「そうか……サクヤ殿、無事であれば良いが」
「大丈夫ですよ、きっと……サクヤは強い人だから」

朔耶が王都から帝国の手の者に連れ去られたという報が届いて以来、彼等は作業の合間にもその事を話し合い、王都からの新たな情報に常に気を配っていた。

「帝国の動向も気になるが……どうにもサムズの動きが気に掛かる」

「ヴィンスさんもですか、俺も最近やけに街で傭兵の姿が目に付くように思うんですよね」
「エバンスから自警団の分隊が来ているそうですよ？」
「ああ、この時期に来る意味が分からんと、アンバッス中隊長も気にしてたな」
サムズ国内に漂う不穏な空気に、彼らは不吉なモノを感じていた。
「あ～あ、しっかしあのイケ好かねぇ兄貴がサクヤに振られる所は見てみたかったぜ」
「隊長～またその話ぃ～？」
「ガリウスはアウサレス様にコンプレックスを持ってるからな」
「うっせー」
カースティア駐在派遣騎士団の問題児集団ことガリウス小隊の面々は、今日もカースティアの街を適当に巡回しながら娼館を冷やかして回ったり。裏路地の怪しげな店の主人に賄賂を貰ったりして一日を過していた。
「ん……？　おい、ガリウス見ろよ」
「……またかよ　これで何度目だ？」
「ここ十日のうちに、四回目だねぇ」
「あの人達もサムズに向かうのかな？」
最近よく見かける傭兵団の馬車隊の列。個別に雇われるフリーの

傭兵と違い、彼等傭兵団は一国の正規軍とも渡り合える程の錬度と統制を持った職業軍人的な戦闘集団だ。

「サムズの連中、反乱でも起こす気じゃねぇだろうな？」
「帝国と睨み合ってる今の時期にか？　考え難いな……」
「実は帝国と繋がってたりして？」

走り去る傭兵団の重厚な馬車隊を眺めながら、眼を細めたガリウスはぽつりと呟く。

「……ありえねぇ話じゃねぇな……」
「隊長？」
「お前ら、本部に戻るぞ」
「ええっ　来たばっかりなのにー！　隊長待ってよーー！」

問題児集団ではあるが決して無能という訳ではないガリウス小隊は、最近の傭兵団に関する動きの裏を探る為、何時ものように単独行動を開始した。

「それで、親書にはどのような？」

急遽対策会議に呼び出されたレイスは補佐である部下のフレイを伴って王の間を訪れていた。先日届いた帝国からの親書、その内容が現状の対帝国政策に影響を及ぼしかねないモノであった為、一部の者を除いてまだ公表はされていない。

「端的に言えば、和平と同盟を求める内容と提案だ」

近衛騎士団長のイーリスがこの場を代表してレイスの問いに答える。バルティア帝の署名が入った親書には、列強四国の代表が集い、交流と対話を通じて今の平和を維持して行こうという内容が記されていた。レイスの眉がピクリと上がる。

「サクヤの事に付いては何も？」

「それが……サクヤは此方に戻っては居ないかという問いの走り書きがされていたのです」

レティレスティアが困惑気味に答える。毎日のように行われていた交感での近況報告が数日前を最後にぱったりと止まってしまい、朔耶の身に何かあったのではと気が気でない想いをしている所へこの和平を呼び掛ける親書と走り書きである。

「……これが策だとすれば、随分と舐められたモノですね」

「うむ……、対帝国政策への牽制とサクヤの拉致を有耶無耶にする意図とも考えられなくはないが……」

「この走り書きとサクヤからの交感が止まった事が気に掛かる所です」

レイスの言葉にカイゼル王が頷き、アルサレナ王妃が気になる部分を指摘する。帝国の内情は朔耶からレティレスティア経由である程度把握しているアルサレナは、バルティア帝が帝国内部の掌握を成功させた可能性も考える。しかし、それならば朔耶からの連絡が途絶えた事とこの走り書きが気に掛かる。

「帝国のような密偵部隊の設立をしてこなかった事が悔やまれます

ね」
「うむ、やはり我が国にも専門の諜報部隊は必要だな……古株の重鎮達を説得するのは骨が折れる所だが」
親書は列強四国和平会談の場所や日時は各国の返答を待ち、追って知らせるとの内容で締め括られていた。
「直ぐに側近に上げられそうなのはこれだけか……」
「はい、今は先代派の洗い出しと並行して行ってますので、選定出来る段階まで陛下への忠誠を証明出来る人材があまり」
先代皇帝の指示とそれを的確に伝える側近が居なくなった事で、帝国は中枢の機能不全による国家崩壊の危機に直面していた。バルティア派の側近ダンクルと急遽その補佐に就かせた密偵部隊や、エリスリング諜報官を側近の仕事に臨時任命する事でどうにか運営を間に合わせていた。
「サムズの動きはどうなっている？」
「先代との契約は健在らしく、傭兵団のサムズ入りは始まっているそうです。サムズは此方が動かなくてもクリューゲルに侵攻するつもりのようですね」
「ふむ……まずはソレをどうにかしないと、会談所では無いか」
「そうですね、変なタイミングで仕掛けられたらアタシ達の策かと疑われちゃ……疑われかねません」

うっかり地が出てしまい、言い直すアネットにバルティアは思わず噴出しそうになる。

「くっくっ　別に口調は普段のままでよいぞ？」

「いえ、公私は使い分けなくてはイケませんから」

職業柄、情報処理と分析力に優れた才を持つアネットはバルティアの補佐としてその能力を遺憾無く発揮していた。密偵の訓練と任務で培われた身軽で柔軟性のある対処力は皇帝の警護としても最適で、さらにやろうと思えば夜のお相手もこなせる万能秘書である。

「やはりサムズへの牽制も考えるならクリューゲルのカースティア辺りが妥当か」

「ですが……あまりフレグンス領の奥に設定しますと、此方側の手勢がかなり限られてしまいませんか？」

「そこは仕方あるまい、少数精鋭と竜籠を上手く使って道中の安全を確保するしかないな」

「此方側の誠意と捉えて貰えれば楽なんですけどね……サクヤちゃんの事がありますからねぇ」

当面の問題として帝国の中枢が安定するまでの間に各国との、特にフレグンスとの関係を良好にしておく必要がある。

しかし、何れの国からも直接的では無いにせよ朔耶の拉致に関する抗議が打診されていた事を考えれば、朔耶が行方を眩ませてしまっている現状はかなり厳しい。

「サクヤ……今、何処に居る」

砂浜の広がる海水浴場と違い、岩場の多いここは人の姿も無く静かで、海を見ながら考え事をするには良い所だった。

「なんだか海って久しぶり……」

「砂浜がある所じゃなくて良かったのか？」

兄の車（ちなみに中古のランドクルーザーである）で海まで連れて来て貰った朔耶は、夏の陽射しの中、海からの風を浴びながらキラキラと反射する波の光を眺めていた。

精霊との微かな繋がりが見せる向こうの世界の出来事。精霊は何処にでも存在する。朔耶が気に掛ける人々の姿を、使役した精霊が夢の中で見せているのだろうと、朔耶はなんとなくで理解していた。

お昼寝をしていると彼等の昼間の活動を垣間見る事が出来る。夜寝ている時は眠っている彼らの姿や、夜遅くまで仕事をしている姿が見られる。意識して自由に見られる訳ではないが、朔耶自身が彼等の姿を見せない事を精霊に望まない限り、時間と共に忘れるなどという事はなさそうだった。

「……あたしね」

朔耶は兄の質問には答えず、語り始める。兄は無糖ブラックの缶コーヒーに口を付けながら、ただ黙って朔耶の言葉に耳を傾けた。

「あたし……、向こうで人を殺したの」

ブフーー。

「げへごほっ　なんですとーー!?　ブハァッ」
「ちょっ　口っ　口からだらだら零れてる!　噴くか咽るか驚くか纏めなさいよ!」

『真剣な話を始めた途端にこれだ』と朔耶は呆れながらも、兄が態とやっている事を知っている。落ち込んでいる時など何時も馬鹿をやって慰めてくれるのだ。

「これから話す事は、嘘偽り誇張無しのあたしが体験した本当の話。聞いてくれる?」
「うむ、話すがよい」

何時もと変わらない兄に苦笑させられて幾分心が軽くなった朔耶は、あの日の夕方、精霊に喚ばれた時の事から話し始めた。

「オレンジでいいか?」
「うん、ありがと」

海沿いの道脇に停めた車の中で、朔耶は兄から受け取ったジュースに口を付ける。全てを話し終えた頃にはすっかり日が暮れてしまっていた。突拍子も無い話、荒唐無稽と思われても仕方が無いような体験談を、兄は最後までしっかり聞いてくれた。
エアコンを効かせた車内で夜の海を窓に見ながら、兄妹は静かに

シートに凭れている。徐に、兄が口を開いた。

「朔耶は、またその世界に行きたいのか？」

「……んー、分かんないの」

向こうの皆の事は確かに気になる。しかし、先代皇帝を手に掛けた事で自分の力に疑問を抱くようにもなっていた。向こうで自分は常に異質だった。皆は自分の作る道具に感心し、褒め称え、振るう精霊の力に畏怖や尊敬の眼差しを向けて来た。その事に不満など無かったし、驕る気持ちも無いつもりだった。

「よく考えたら傲慢だよね、『存在しちゃいけない』なんて……」

向こうの世界で此方の文明の知識を使い、力を振り翳す内に、何時しか人の生殺与奪にまで考えを至らせるようになっていたと朔耶は自己批判する。

「どんなに化け物染みていても、あの人は『人』だった。　顔に悪戯書きでもして逃げちゃえば良かったのよ」

「でもそれじゃあ何も解決しなかったんだろ？」

「……だけど、殺すことは無かったと思う。　バル達、今すっごく苦労してるみたいだし……」

「ふむ……その世界に行ったら、また同じ事をやってしまうかもしれないのが怖いと？」

少し逡巡を見せた後、朔耶は兄の言葉に頷いた。

「うむ、そりゃ結局覚悟の問題だな」

「覚悟？」

「その世界のお前は人々を導く女神にもなれれば、世界を破滅させ

る悪魔にもなれる」
「んな大袈裟な……」
肩を竦めて見せる朔耶だったが、兄は真剣な表情で言葉を続ける。
「話を聞いた限り、世界と繋がってるお前の選択一つ一つが、その世界に大きな影響を与えている。皆との平穏な日々を守りたいなら、その反対を望む者を切り捨てなきゃならん」
「……」
「万人が意見を一致させるなんて事はまあ有り得ん。『全てを救う』なんて考えの方がよっぽど傲慢だからな、命の生き死にに限らず何かを行えば必ず喜ぶ者と哀しむ者が出る。善悪も関係無くな。だから自分が良いと思った事を選んで、その結果の責任を背負う覚悟を持てるかどうかだ」
兄は朔耶に向き直ると、肩に手を置いて朔耶の眼を覗き込む。
「経緯はどうあれ、お前はそうすべきだと判断してその先代皇帝とやらを討った。もう一度その世界に行くなら、その選択をした結果を背負わなくちゃならない。その覚悟があるなら、大丈夫だ。無いならその世界の事はもう忘れるべきだな」
「……忘れるなんて、出来ないよ」
俯いてしまった朔耶はポツリと呟く。兄は朔耶の頭を撫でながら『焦らずゆっくり考えるといい』と言ってそっと抱き締めた。
「つーか、ドサクサに紛れて抱き締めんな！」

「はうおっ」

妹に密着状態からのアッパーカットを貰ってサンルーフ越しに星空を見上げる妹萌えなオタ兄なのであった。

数日後の昼下がり、朔耶は自分の部屋で昼寝をしていた。眠っている間に見る向こうの世界の夢は意識を集中させる事で割と自由に視点を動かせる事が分かり、最初の内は意識を集中させると睡眠から覚めてしまって睡眠不足に悩まされたが、一週間もすれば慣れてコツを覚えた。

夢の中で向こうの世界を自由に動き回っている内に、自分の中にある精霊との繋がりを示す糸の存在が以前よりもはっきりと感じられるようになっていた。

『さーて、今日は何処を見に行こうかな～』

朔耶はこの夢内異世界観光を結構楽しんでいた。特定の人物を思い浮かべるとその人物の傍に跳べるので、懐かしい顔にも合えたし、例え向こうが此方に気付かなくとも頑張っている姿を見るだけで気持ちが和んだ。

一度夜中にフレイの所に跳んだ時などは、物凄いモノを目撃してしまい、動悸で目が覚めてしまった事もある。以後、夜はフレイとレイスの所には跳ばないよう気をつけている。

時折、彼等が朔耶の事を話題にして心配している様子などを見ると、朔耶はこうやって見ているだけで満足している事が申し訳なく思えて来るが、現状ではどうする事も出来ないのだから仕方がないと自分に言い聞かせていた。

『暫らく皆の顔見てないし、レティの様子でも見に行こうかな』

レティレスティアの事を思い浮かべると、さーっと視界が流れて斜め上方から見下ろすような位置にレティレスティアの姿が現れた。何処かの広い会議室のような場所にいるようだ。

隣にはアルサレナ王妃のと宮廷魔術士の衣装を纏ったレイスの姿も見える。レイスの背後にはフレイが怖い顔で立ち、彼等を護るように近衛騎士団長のイーリスを始めとした近衛騎士団がズラッと後ろを固めている。

同じ部屋の中には神官服のような裾を流した服を纏った気難しそうな若い男性と、両脇に従者らしき魔術士風の男二人、その背後に御揃いの魔術士っぽい服を纏った一団がずらり。彼等の対面にはやたら横幅の広い変な髭を持つ初老の男。

金ぴかの装飾を纏い、如何にも金持ちですと言わんばかりの格好で或る意味とても分かり易い。彼の背後にも豪華な衣装を纏い、高そうなオールグレンの銘入り剣（星四つクラス）を下げた一団がずらりと並ぶ。但し全て女性。

そしてレティレスティア達の正面には黒い帝衣を纏ったバルティアと、傍らに側近服を纏ったアネットの姿。背後には精鋭騎士団が並んでいるが、この部屋の中では一番人数が少ない。

『あれ？　これって……もしかして和平会談？　もうそんな時期なんだー』

朔耶は一度視点を上空に移動させて場所の確認をする。どうやらクリューゲルの首都カースティアにある大図書館の一室を議場に設定したようだ。図書館の広場には見覚えのある超大型竜籠と四頭の飛竜の姿が見えた。

間隔を開けて各国の大型馬車も並んでいる。視点を議場に戻すと、何やら話し合いが始まっていた。

バルティアは先代の契約による傭兵団のサムズ入りを止められないのであれば、サムズが事を起こす前に和平会談を実現させる事でサムズへの牽制を図ろうと考えた。侵攻の時期は準備期間を考慮する事で大体の予測はつく。

早急な会談実現の為、各国の気を引く最大限の土産をちらつかせて今回の会談に漕ぎ着けたのだ。

『っていうかフレイ、無茶苦茶ヴィヴィアンさんの事睨んでるし……』

アネットはしれっとした態度で視線を躱しているが、フレイは視線だけで焼き尽くさんばかりの勢いで睨みつけている。

『フレイってこんな顔もするんだぁ』などと戦闘モード状態のレアなフレイを眺めていた朔耶は、ふいに覚えの有る感覚に触れて其方に意識を向けた。

『……なんだろ？　これって、あの時みたいな嫌な感じ』

黒い霧が広がって行くような、何処か遠くからこの場に向けられ

る悪意の波動が伝わってくる。視点を空に飛ばし、波動の出所を探ろうとした朔耶は、カースティアの街に広がる黒い染みのような霧に気付いた。

霧の出所に近付くと、見た目は何の変哲もない街人の格好をした男達が数人。しかし精霊の視点から見ている朔耶には、彼らが只の街人で無い事は直ぐに分かった。全員服の下やマントの中などに帯剣して武装している。

そんな集団が街の至る所から徐々に会談の行われている大図書館の方へ移動していた。

さらに街の外から伝わってくる波動を辿っていくと、バーリッカムとカースティアの間に広がる大草原を進軍してくる大部隊の姿が見えた。武装が区々で騎士団のような統一性は無いが、彼等の動きは洗練された軍隊のようにしっかり統率がされている。

『これって……バル達が言ってたサムズのクリューゲル侵攻!?大変だぁ……!』

「では、帝国とは決まった時期に交流を兼ねた視察団を互いに送り合うという事ですか？」

「そうです、この場合民間人を起用するのも良しとします」

「竜籠と飛竜の譲渡はどのくらいまで？」

「竜籠は兎も角として、飛竜の育成には時間と経験が必要ですので、先に研修生を送って貰う事になりますね」

会議の話題は各国が互いの人材交流を円滑にする為、帝国から竜籠と飛竜の譲渡が提案され、それらの規模や時期の調整についての言及が為されていた。

帝国の竜籠についてはティルファもキトも、そしてフレグンスも貰えるなら是非とも手に入れたい魅力的な移動手段だ。この提案には何れの国も乗り気だった。会談実現の為に各国の気を引いた土産である。

ただ、『竜籠』という言葉が出る度に、フレグンスの宮廷魔術士長付き補佐官が灼熱のような視線を帝国皇帝の補佐官に向ける為、会議場はぴりぴりとした空気に包まれっぱなしだ。

「フレイ、少し自重しろ」
「はっ　……す、すみません」

レイスに窘められて我に返り、暫らくは大人しくなるのだが、少し経つとまたじわりじわりと視線に熱を帯び始めるという事を繰り返している。フレイにとっては目の前にいるアネットこそ朔耶を攫った張本人、自分が警護を抜けた僅かな隙を突かれた事に落ち込んでいた分、犯人を目の前にしたフレイの怒りは収まらない。

しかも、うっかりレティレスティアが朔耶から聞いた竜籠の中で起きた事件の事を話してしまったものだから、フレイの怒りは半端なモノではない。もし今、フエルト卿の部下が視界に入ろうモノなら問答無用で消し炭にする勢いだ。

フレイがそんな状態であった為か、レティレスティアは返って冷静になる事が出来ていた。

「……？」

ふいに、何かに反応するようにレティレスティアが会議場を見渡した。そして訝しげに首を傾げる。

「レスティア？　どうかしましたか？」

「母様、いえ……今何か、不吉な予感を感じたと思ったのですが」

精霊術士の母娘の会話に会議場が少しざわつく。精霊術士は時折、精霊から得た情報を予言のように告げる事がある。あらゆる場所に存在する精霊からの警告は大規模災害であったり、疫病の発生を知らせたり、時には魔物の大量発生を知らせる事もある。

不吉な事が起きる前触れには精霊術士達が一番にそれを感じるのだ。

「……？　何か、力の強い精霊が来ていますね」

アルサレナが席を立つと、意識を集中させてその精霊に交感を繋ごうと試みる。そして――

「サクヤ……？」

「え？　サクヤ？」

「サクヤですか？」

「サクヤ様ですか？」

「サクヤだと？」

「サクヤちゃんですって？」

アルサレナの呟いた名を口々に問い質すフレグンス側と帝国側の面々。ティルファとキトの代表もサクヤの噂は気に掛けて居たので

耳を欹てている。

「サクヤがいるのか……？　此処に」

身を乗り出すバルティアに、フレイの視線が突き刺さる。まるでサクヤの名を口にする事を許さないと言わんばかりの眼光だが、バルティアもサクヤの事に関して一歩も退く気は無く、フレイの睨みを軽々流して見せる。

「フレイ、控えろ。　申し訳ありません、バルティア陛下」

一国の皇帝に対する礼儀としては不敬に当る行為に直ぐ様レイスがフレイを窘め、バルティアに謝罪の意を示した。

「構わぬ、元々非は此方にあるのだ」

レイスはバルティアの振る舞いに皇帝の器を感じ取り、フレイは国の代表として居る自分の立場を忘れた行為を羞じると自己嫌悪で恐縮スパイラルに入ってしまった。そんな一幕に苦笑しつつ、レティレスティアが尋ねる。

「それで、サクヤは今何処に？」

「……この世には居ないようですね」

アルサレナの答えに表情を無くして硬直するレティレスティア、真っ青になるフレイ、バルティアも絶句して固まっている。静まり返る会議場。

「言い方が悪かったですね、別に死んでいるわけではありませんから、慌てないように」

ガタガタッと力が抜けて座り込む一同、所謂ズッコケが発生した。

「母さま……」

「アルサレナ様……」

コホンと咳払いをしたアルサレナは精霊を通して朔耶の視点だけが来ている事を説明する。

「どうやらサクヤは強い精霊を使役出来たようですね、あの子は自分の世界に還ったようです」

「自分の、世界？」

バルティアは『サクヤの国の事か？』と怪訝な表情を浮かべた。事情を知るフレグンス側の代表は何処か寂しげに納得した表情で頷きあっている。

「そうですね……今ならお話しても良いでしょう」

アルサレナは朔耶が自分の世界に還った今なら朔耶の特殊な事情を話しても問題は無いと判断し、各国の代表団一同を前に朔耶が異世界からの来訪者であった事を明かした。やはり一番興味深そうにしていたのは学者集団の国ティルファの代表だった。

「成る程……それで『異界の魔術士』だったわけね」

アネットはガルブレック隊長から聞いた話が繋がった事に感嘆の

呟きを洩らす。耳聡くそれを聞きつけたアルサレナは、『城の警備を見直した方が良いですね』などと聞こえるように呟き、ポカをやらかした事に気付いたアネットに冷や汗を掻かせた。

『あ～～どうしよう！　こっちからの声は伝わらないのかな～～』

朔耶は彼等のやり取りを見て和んでいられる状況ではない事に焦っていた。草原を行く大部隊は街に到着するまでに最低でも三日は掛かりそうな位置に居たが、この会議場のある図書館の周囲にも怪しげな集団が迫っている。

『アルサレナさ～～ん！　レティ～～！　フレイ～～！　気付いて～～！』

「……？　サクヤが精霊を通じて何か伝えようとしているようですね？」

「母様、サクヤと交感は繋げられないのですか？」

「それは難しいでしょう、今こうしてサクヤの気配を感じられるのも、この精霊とサクヤが契約しているからこそ、サクヤの世界に居るこの精霊の偏在から辛うじて此方の世界と繋がっているような状態ですからね」

「そうですか……　サクヤは、何を伝えようとしているのでしょう？」

その時、会議室に飛び込んで来たフレグンスの騎士が急報を告げる。

「申し上げます！　武装した何者かの集団に建物を取り囲まれています！」

ざわめき立つ会議室に、負傷した衛兵から更なる緊急事態が告げられた。

「申し上げます！　サムズ独立派武装集団による襲撃です！　既に建物一階は占拠され、現在各所通路にて衛兵部隊と交戦中！」

「周辺の警備をしていた派遣騎士団はどうしました？」

嘗てはランバルト公爵やカイゼル王と共に戦場に立った事もある王妃アルサレナは、貫禄に満ちた落ち着いた様子で現状報告を促す。

「ハッ　それが……武装集団による建物への襲撃と同時に、周辺に居た街人が護衛の騎士に襲い掛かり……ほぼ壊滅状態であります」

一般の街人が武装集団の襲撃騒ぎから逃げて来たかのように見せかけて、襲撃に気を取られた護衛の騎士を背後から襲うという方法で隙を突かれたらしい。俄かに騒がしくなる会議場では、帝国の陰謀ではないかとキトの代表がバルティアに詰め寄るなどの騒ぎが起きていた。

窓の外を大きな影が横切る。それは巨大な竜籠を引いた飛竜だった。各国代表の大型馬車を押さえに動いた武装集団の別働隊も流石に竜には手出しが出来なかったらしく、四頭の竜は自ら竜籠を繋ぐと建物の屋上へと舞い上がった。

「何人運べる？」

「十六人……、荷物を捨てて詰めれば二十人位かと」

「全員は無理か……」

「と、当然我々は乗せて貰えるんだろうね！」

バルティアとアネットの会話に、顔を青褪めさせたキトの代表が食って掛かる。ティルファの代表は二人の部下らしき魔術士とぼそぼそ言葉を交し、レティレスティア達フレグンスの面々は『サクヤはこれを伝えたかったのでは？』と話し合う。興奮するキトの代表に対し淡々と答えるアネット。

「当然、各国の代表の方には護衛数名と共に我々の竜籠に乗って脱出して頂きます、残りの護衛の方はここに残って貰う事になりますが」

「数名だと！　儂の警護は全員連れて行くぞっ　こんな所に残せるモノか！」

「人数に制限がありますので、無理です」

尚も食い下がるキトの代表に、アネットは反論し辛い事実を突きつけて黙らせようと試みた。

「他の国の護衛の方が全員残るなどしない限り無理です」

「で、ではそうすればいいんだ！　儂の警護は素人なのだ！　戦闘なぞ出来んのだ！」

これには流石にアネットも目を丸くし、何処か嘲るような視線で傍観していたティルファの代表も褪めたように肩を竦めた。

各国の騎士や魔術士達も軒並み呆れた顔を見せ、キトの警護の女性達は恥ずかしそうに俯いていた。彼女達はちょっと剣の扱いを学んだだけの、綺麗所を集めて豪華な衣装と武器で着飾らせた集団に過ぎない。

「戦う術を持たない婦人達をここに留める訳にも行くまい、元より

我等は残って戦う所存だ。レイス殿とフレイ殿は姫とアルサレナ様を頼む」

フレグンス近衛騎士団長イーリスはそう言って槍の鞘を払うと会議場の出口に向かう。部下の近衛騎士もアルサレナ達に敬礼してイーリスの後に続いた。

「補佐官殿には陛下をしっかり御守り頂きたい」

帝国精鋭騎士団の団長はそう短く伝えると、バルティアに敬礼をして少数の部下と共に会議場を後にする。

「これだけ精鋭の騎士が揃っていればなんとかなるでしょう、研究の成果を試す良い機会ですな」

ティルファ魔術団の魔術士達は飄々とした足取りでがやがやと会議場を出て行った。

会議場に残されたのはフレグンスの代表団、アルサレナ王妃、レティレスティア王女、レイス宮廷魔術士長、フィレイヤ魔術士長補佐。

ティルファ代表団、ブラハミルト・オードリン研究塔所長と従者の魔術士二名。

キトの代表団、ヨールテス・デリガン・ブローフリ伯と綺麗所親衛隊若干名。

そしてグラントゥルモスの代表団、バルティア皇帝とアネット皇帝補佐官。

「それでは建物の屋上に向かいましょう、侵入者の襲撃も予想され

ますので私が先導します」

そう言って先頭に立とうとしたアネットは既に議場から駆け出しているヨールテスの後姿に肩を落として溜め息を付いた。綺麗所親衛隊の女性達が物凄く恥ずかしそうに申し訳なさそうな顔で頭を下げていた。

アネットに促されて会議場を出ようとしていたバルティアは、ふとフレグンス代表団の様子を目にする。アルサレナとレティレスティアが祈りを捧げるような姿勢で向かい合い、それが精霊術士の交感状態である事が分かったバルティアは暫し足を止めて彼女達の声に耳を欹てた。

「ありがとうサクヤ、私達に危険を知らせに来てくれて」

「私達は大丈夫。サクヤに会えないのは寂しいけれど、貴方が無事に元の世界に帰還出来た事を祝福します」

「……もう、サクヤには会えぬのか……」

二人の王族の祈りは、バルティアに逸らし様の無い現実を突き付けるのだった。

「！っ」

がばっとベッドから飛び起きる。エアコンの効いた自室で目を覚

ました朔耶は、どうしようもなく落ち着かない焦燥感に駆られていた。

『皆が危ない……サムズから侵攻って事は、アンバッスさんやクィス達はどうなったんだろう……？』

うろうろと部屋の中を徘徊し、うーうー唸る。しかしそれで何が変わるでもなく、安全で快適な温度に保たれた部屋の中で朔耶は向こうの世界に焦がれた。

「あーーーー落ち着かない！」

クローゼットを開き、箪笥を引き出して出掛ける準備を始める。クローゼットの中に吊るしてあった黒い街服を一度手に取り、逡巡の後元に戻す。そして別のワンピースを取り出した。

「お兄ちゃん！」
「ぬおっ　どうした妹よ！」
「車出して！」
「何故に！」

変なノリにしようとするオタ兄を取り合えず張り倒して満足させると、とにかく何処でも良いから連れてってと言うドライブに誘うような文句で中古のランドクルーザーを走らせた。そしてアッチへコッチへと分かれ道に差し掛かる度に指示を出していると、何時の間にかあの山の麓まで来ていた。

「ここに、来たかったのか？」
「……違う」

胸の奥に焦燥感を燻らせたまま、朔耶は車のシートで膝を抱える。ここへ来てどうなる訳でもない事は分かっていた。あの時も朔耶を運んだ精霊は偶々近くの別世界から召喚しただけなので、この地にあの精霊が住んでいる訳ではない。

「皆が大変なの……あたし、此処に居たんじゃ何にも出来ないよ」
「……何か、する必要があるのか？」

兄の突き放すような言葉に、朔耶はキッと顔を上げる。しかし、反論する言葉も浮かばず俯いて膝にオデコを乗せると、息を吐いた。

「……何とかしたい……」
「精霊の力ってヤツを得た者の傲慢から来る気持ちかも知れなくてもか？」
「そんなの、どうでもいいよもう……皆を助けられる力があって、それを使えるから使うだけ」
「うむ、吹っ切ったな」

ほへ？　と再び顔を上げた朔耶は、兄の言葉の意味を咀嚼して飲み込んだ。そうしてシートに凭れると力なく笑う。

「はは……馬鹿だね、あたし……吹っ切ったからって、向こうに行ける訳でもないのに」
「まあ物は試しだ、しっかり掴まってろよ」

兄は泣き出しそうだった朔耶を慰めるようにそう言うと、車のサイドブレーキを落として車を発進させた。２．４Ｌ直列四気筒ディ

ーゼルターボエンジンが唸りを上げて駐車場の軽い角度が付いた段差に乗り上げると、そのままハイキングコースに侵入する。

「ちょ、ちょっとっ　お兄ちゃん！　何してんの！？」
「このまま山の天辺まで運んでやる、お前はその精霊とやらに呼びかけて見ろ」
「え……でも、そんな事してもっ」
「やるだけやって、それで駄目なら諦めも付くだろ？　で、やるなら派手にやってやるよ」

ゴオオォォという普段の舗装された街中を走る時とはまるで毛色の違ったエンジン音を響かせたランドクルーザーは、ハイキングコースの急な斜面を物ともせずに力強い足回りで突き進んで行く。

「お兄ちゃん……ん、分かった」

朔耶は激しく揺れる車内で地下の精霊と繋がる糸を通じて、レティレスティアを守ろうとしたあの精霊に呼びかける。

『お願い、応えて……レティも皆も大変なの……　あなたの力でなら助けられるかもしれないの』

草を掻き分け、木立ちを蹴散らし、朔耶が数十分掛けて登った距離を数分で駆け登る。そして――

サクヤ　ナカ　ハイル　アタタカイ　ハイル　イッショニ　イク
「え？」
「ん？　どうした？」

兄妹の呟きと共に、ハイキングコースを疾走していたランドクル

ーザーはこの世界から消えた。

ズシンッという音と共に縦の衝撃でシートに身体が押し付けられる。そのまま惰性で少し走った所で慌ててブレーキ。僅かに土を削ったタイヤ痕を残してスピン気味に停車するランドクルーザーの中で、朔耶は頭を振りながら悪態を付いた。

「たく、あのエロ精霊め……お兄ちゃん、大丈夫？」

「……うむ。　これは誤算だったな、というか、ここでの反応の仕方によっては我が妹を傷付ける事になったりならなかったり」

「ちょ、ちょっと！　お兄ちゃん？」

「うむ。　問題無い、と思う……多分」

かなり問題のありそうな反応を返す兄を心配しつつ、朔耶は内心喜びと戸惑いに満ちていた。またこの世界に来られた事は嬉しいのだが、まさか兄と車ごと召喚されるとは予想外だったのだ。朔耶は自分の中の精霊の状態を確かめてみる。

「うーん……ここでどういう反応をするかによっては、お兄ちゃんを落ち込ませる事になったりならなかったり」

「うぉい、朔耶よ」

「うん、大丈夫。　何とかなるわよ、きっと……多分」

「無茶苦茶不安になって来たのだが」

例の精霊は前回の時と同様、朔耶の中に入った精霊の偏在が此方

の精霊を目印にして精霊ごと移動、ただ今回は地下の精霊の助けもあった為、車を含む広範囲に渡ってゴッソリ転移して来たのだ。
周囲には向こうの世界から切り取られて来た木々や地面の一部が散らばっている。

「うわー……これ、あっちで穴開いてるよ」
「エライこっちゃな」

朔耶は意識の糸を探ってみた。すると此方で覚えた交感の感覚がちゃんと感じられた。使役した地下の精霊も傍に居るのが分かる。元の世界に居た時も、地下の精霊の偏在が常に傍に居てくれていたようだった。右手を持ち上げ、意識を集中させる。

カカァン

「うおっ　なんじゃそりゃ！　いや、それがお前の言ってた電撃か……」
「うん、イケるみたい。　お兄ちゃんと車も精霊と重なってるから、多分あたしと精霊の力で戻せるよ」
「ほほう」

前回、朔耶を喚んだ時は朔耶の中に入った精霊一体のみだった為、朔耶の中に入った精霊の偏在が此方側に居る自らの身体を目指して運ぶ以外に方法が無かったが、今回は地下の精霊の助けがあったので、朔耶の世界に居る地下の精霊の偏在を出発点とし、此方側の地下の精霊を目標地点として空間ごと精霊の中に溶かし込み、こちらの世界で再構成して転移を完成させた。

「んん？　じゃあ俺も愛車もその辺りに散ばってる木とか地面の一部も、朔耶と同じ精霊と重なってるって事か？　精霊ってそんな伸

縮自在なのか？」
「さあ……その辺りは王妃様に聞いてみないとどうにも。　それじゃあ、とにかく精霊に頼んでみるね」
「ちょっと待てい」
「うん？」

車から降りようとする朔耶を引きとめた兄は、徐に車のエンジンを掛ける。

「どうせ直ぐ戻れるんだったら、こっちに居る間やれるだけの事はやらないとな」
「え、でも……」
「まあ、俺も明日仕事だから夜までには還して貰うとして、こんなだだっ広い荒野にお前一人置いて還れるわけないだろ？」
「あ……お兄ちゃん……」

朔耶の頭を撫でながら笑い掛ける元硬派なオタ兄。朔耶は久しく感じていなかった兄への無条件の信頼感と憧れの気持ちを思い出していた。

「さて、どっちへ行けば良いんだ？　女神様」
「ぷっ　何ソレ」

どれだけ練習しても上達しなかった下手っぴなウィンクなど飛ばしながら、すかした台詞を口にする兄を笑いつつ、朔耶は湧き出すような勇気を与えられた気持ちで意識の糸を周囲に飛ばした。

「！っ　あっち！」
「よし来た！」

アクセルを踏み込み、エンジンが唸りを上げる。朔耶と兄を乗せたランドクルーザーがオルドリア大陸の荒野を疾走する。朔耶が意識の糸で探った凡その現在地は、フレグンスとクリューゲルの国境沿い、カンタクルの街の東の外れ付近だった。

整地されていない荒野を時速八十キロで走る車の中では、意識の糸レーダーで常に地面の状態と周囲の状況に気を配り、兄のナビゲーションをする必要があった為、朔耶はレティレスティアを探して交感を繋ぐ暇が無かった。

なので彼女らが竜籠で脱出してまず訪れそうな場所はフレグンス領の国境の街カンタクルだろうと当りを付け、其処を目指して車を走らせる。援軍を送る為にも、まずは街に立ち寄らなくてはならないからだ。

「あ、しまった！」
「え？　なに？」
「カメラ持ってくりゃ良かった」
「……お兄ちゃん」

朔耶の久しく感じていなかった兄への無条件の信頼感と憧れの気持ちは、モノの十分も持たなかったという。

39話：精霊の力

カースティア大図書館の屋上から各国の代表達を乗せて飛び立った竜籠は、一路フレグンスの国境の街カンタクルを目指していた。寝室や食堂の広間を代表達とその側近に割り当て、キトのご婦人方には貨物室で休んで貰っている。

「いやぁ流石は帝国一の竜籠、快適な乗り心地ですなぁ」

空の上なら追っ手も無いと安心したのか、キトの代表ヨールテスは今が緊急事態にある事も忘れたかように、竜籠の乗り心地にはしゃいでいた。ティルファの代表とフレグンスの代表は奥の寝室で休んでおり、窓のある食堂広間にはヨールテスの他にバルティアとアネット、ティルファ代表の従者二人にレイスとフレイという顔触れがあった。

アネットはキトの代表にジト目の視線を向けてから壁を背に立つバルティアに寄り立ち、声を掛ける。

「陛下、今回の襲撃騒ぎですが……」

「ん？　アネットか……なんだ？」

声を掛けられてからふいに気付いたような反応を返すバルティアに、アネットは溜め息を付いて促す。

「陛下ー、今は現状の事を第一に考えて下さい」

「む、すまぬ」

朔耶の事を考えていたバルティアは諫められて気を取り直すと、アネットの話に耳を傾けた。アネットは今回の襲撃とサムズのクリューゲル侵攻計画との関連性について、偶然にしては時期と襲撃者の動きの迅速さが気に掛かると言う。

「只の武装集団の決起にしては手際が良過ぎますし、予め和平会談を襲撃する予定だったとしても、アレだけの統率を持って動けるだけの手勢を普段から潜ませておくには、カースティアの街はフレグンス勢の力が強過ぎます」

会談の場所と日時が決まったのは僅か十日前、即日それを聞きつけて直ぐに動いたとしても、サムズ国のエバンスからでは急いでも六日程掛かる道程（みちのり）にアレだけの人数が一度に移動すれば噂くらいは立つ。カンタクルやバーリッカムなどに潜んでいるサムズ独立派が居たとして、彼等が足並みを揃えて行動するには発掘品のような伝送具でも無ければ難しい。必ず情報の伝達時期にズレが生じるからだ。

頭数の確認から襲撃場所の下見や仲間との連携の打ち合わせ、短期間で準備を済ませて実行するには無理がある。

「クリューゲル侵攻を計画しているであろう今の時期のサムズに、フレグンスを警戒させる事になる今回のような襲撃騒ぎを起こす利点も無いな」

「はい、ですが……もし、我々が推測した時期よりサムズの動くタイミングが早ければその限りではありません」

「……サムズは既に動いていると？」

会談の時期を早急に決めたのは傭兵団の戦力を蓄えたサムズに対

して『下手に動くとフレグンスだけでなく帝国やティルファ、キトまで敵に回す事になるぞ』という牽制の意味合いもある。会談の実現と成功を持ってサムズの行動抑制に繋げる狙いだったのだが、会談前にサムズが動いていた場合は少々事情が違って来る。何せサムズの戦力として動く傭兵団は帝国の先代皇帝との契約によって働いているのだから、会談を持ち掛けた帝国自身が和平会談の内容を破ったと取られ兼ねないのだ。

「勘ですけどね……会談への出発の際、飛竜の頭数を数えたのですが……」

アネットが声を潜めて話そうとした時、キトの代表が声を上げた。

「おおっ　二頭立ての竜籠！　あれは帝国からの護衛ですかな？　あのように武装した兵士を運べる利点は大きいですなぁ」

「っ！」

それを聞いたアネットは弾かれるように窓から覗き込み、目を瞠る。二頭立ての戦闘用竜籠が二台、武装した傭兵らしき兵を乗せて左右から挟み込むように並行して飛んでいる。籠にはサムズ国の紋章が描かれていた。別の窓からその様子を確認したレイスとフレイ、ティルファの従者二人も顔色を変えている。

「なんてこと……」

「……そうか、足りなくなった飛竜はサムズに流出していたという事か」

竜籠そのものは帝国でなくとも造る事が出来る。一番重要な飛竜が帝国領以外では早々手に入らない希少品である事が、帝国における竜籠の発展と普及の要になっていた。これをサムズが早い段階で

手に入れていた場合、今回のような襲撃に必要な人数を街道も使わずに人知れず迅速に送り込む事が出来る。

「竜を扱えるとなると、それなりの身分にあった者という事になるが」

「やっぱり先代派の側近周りでしょうかねぇ……」

ガツンッという音が響き、安定性に定評のある超大型竜籠が揺れた。天井の上では竜達がギャースギャースと喚いているのが聞こえる。どうやら此方の竜籠に乗り移って来ようとしているらしい。二台の二頭立て竜籠の内、一台はこのバルティア達の乗る竜籠を威嚇先導するように正面を飛び、もう一台が天井に着けて来た。

「な、なんだ！　ぶつかったぞ！　お、落ちたりしないだろうね！」

「……やっかいな事になったな」

「嫌な勘が当っちゃいました」

慌てふためくヨールテスを余所に、バルティアとアネットは天井を見上げて渋い表情を浮かべた。

「あたしはフレグンス王室特別査察官の朔耶です。至急ここに駐在している騎士団の方と連絡を取りたいのですが」

「っ！　し、失礼しましたサクヤ様！　直ぐに呼んで参ります！」

カンタクルの街へ乗り込んだランドクルーザーを見て魔獣が街に

入り込んで来たと大騒ぎしていたカンタクルの衛兵達は、中から現れた黒髪に黒い瞳を持つ『王都で噂の異国の魔術士サクヤ』の姿を認めると、慌てて騎士団支部にすっ飛んで行った。

「おーおー、随分貫禄身につけたなぁ」
「えへへ～　格好いいでしょー」

小一時間程でこの街に到着した朔耶達はここへ向かっているであろう各国代表を乗せた竜籠を待ちながら、カースティアに向けての援軍要請とサムズのクリューゲル侵攻を知らせるべく、カンタクルに駐在する王国騎士団に取り次いで貰う事にしたのだ。

「お兄ちゃんはまだこっちに居る？　それとも直ぐ戻る？」
「う～んそうだな、この時間ならまだ二～三時間は大丈夫だ」

兄の腕時計は午後三時過ぎを指している。遠巻きに見詰める街の人々を見渡しながら『カメラがあればなぁ～』などと呟いている全く物怖じしない兄を、朔耶は何処と無く楽しげに眺めていた。
朔耶は今の内にレティレスティアに交換を繋いでおこうとカースティアのある方角に意識の糸を飛ばした。

「……あれ～？　……う～～ん、繋がらないなぁ」
「どした？」

レティレスティアの存在は感じられるのに交感が繋がらないと、朔耶は首を傾げる。

「寝てるとかじゃないのか？」
「そうなのかなぁ……アルサレナさんにも繋がらないし」
「どの辺りに居るか分かるのか？」

「うん、あの辺」

そう言って空を指差す朔耶。小さな雲が浮かび、地平線の彼方まで広がる空は辛うじて青空を保っているが、あと数刻もすれば茜色に染まる兆しを見せている。四頭の飛竜が引く竜籠の話を聞いた兄は、『リアルドラゴンが見られる』とウキウキした様子だ。

「あれ？」

ふいに、朔耶は空を見上げて怪訝に呟く。此方に向かっていたレティレスティア達の気配が、方向を変えて遠ざかって行くのを感じたのだ。方角は南東、ほぼ反転してカースティアに戻るコースだった。訝しんでいる所へカンタクルに駐在する王国騎士団がやってきた。

「御待たせしました、サクヤ様！ぉおぉ良くぞ御無事で。帝国に連れ去られたという話を聞いた時はもう……」

「ごめん、挨拶は後。クリューゲルのカースティアで反乱があって、他の国の人達や近衛の人達が大図書館に立て籠もって戦ってるの、直ぐに援軍を出せない？　それからバーリッカムとカースティアの間の草原にサムズからの大部隊が迫ってるわ」

「反乱ですと！？　しかもサムズからの大部隊！？　サムズの侵攻ですか？」

「そうみたい、直ぐに部隊を送れる？」

カンタクルの中隊長は難しそうに唸った。現状カンタクルには予備の兵力が無く、此処（カンタクル）を守る部隊が王都から派遣されれば入れ替わりに出撃する事は出来るが、直ぐにというのは厳しいとの話だ。カンタクルからカースティアまでは馬を飛ばせば約半日で到着出来る。カンタクルから王都までなら、さらにその半分。

これは魔術や精霊術で馬の負担を減らしながら休憩する事無く走らせた場合で、部隊規模での移動となると丸一日は費やしてしまう。王都に伝令を出して直ぐに部隊を送って貰ったとして、報を受けてから派遣された部隊がカンタクルに到着するまでに一日、カンタクルを出撃した部隊がカースティアに到着するにも一日。

つまり、カースティアにフレグンスの援軍が到着するには二日は掛かる。その翌日にはサムズからの大部隊がカースティアに到着する。

「とにかく急いで援軍送って貰うしかないか……王都の方にもそう伝えて」

「分かりました、直ぐに伝令を出します。では、我々は準備がありますのでこれで」

中隊長の騎士は表情を引き締めると敬礼をして去って行った。兄が興味深そうに騎士や衛兵の装備を見ているのを余所に、朔耶は気になっていたレティレスティア達の方に意識の糸を飛ばして探る。微かに、意識の糸が触れた。

『レティ？』

――……サ……クヤ？……――

『繋がった？　どうしたのレティ、寝てた？』

――……え？　サクヤ？　サクヤなのですか！？――

『うん、あたしだよー』

途端、弱々しかった意識の糸がしっかりと結ばれる。

――ああ、サクヤ……私、もう会えないのかと――

『ごめんね、心配掛けちゃって……』

――私達、てっきりサクヤは元の世界に還ったモノだと思い込んで

ましたわ――
『あはは、実は還ってました』

糸を通して『ええっ！』というようなレティレスティアの驚きの感情が朔耶の心に伝わって来る。元の世界でレティレスティア達の危機を知り、何とか力になりたくてもう一度この世界に来た事を話すと、レティレスティアからは嬉しさ半分、申し訳なさ半分の複雑な感情が伝わって来た。

『あ、所であたし今カンタクルに居るんだけど、皆こっちに向かってたんじゃないの？』
――あ……それが、少し不味い事になりまして――

レティレスティア達の竜籠はカンタクルに向かう途中でサムズの竜籠隊に追撃され、乗り移って来たサムズの傭兵に制圧されてしまったという。戦える手勢が少なかった事もあるが、竜の頭を抑えられた事とキトの代表団関係者を人質を取られてしまった事でほぼ無抵抗の降伏だった。　意識の糸が繋がり難かったのは術封じの枷を填められていたからだ。

――このままカースティアに戻れば……私達を逃がすために残って戦っているイーリス達も……――
『……それは、不味いわね』
――もし、私達の身に何かあった場合は、サクヤ……その時は迷わず元の世界に還って下さい――
『レティ……』

朔耶は予想以上に悪い状況に頭を抱える。戻って来られた事に浮かれている場合では無くなった。　深刻な表情になって黙り込んだ朔耶に、兄が声を掛ける。

「どうした？　なんか不味い事でも起きたか？」
「うん……」

朔耶は兄に現状を話す。カースティアへの援軍がとても間に合いそうに無い事。各国の代表が乗った竜籠がサムズの傭兵に制圧され、カースティアに引き返している事。そしてそのカースティアに迫るサムズの大部隊。

竜籠がカースティアに戻れば各国の代表を人質にされ、大図書館に立て篭もっている護衛達は武装解除されるだろう。

「どうしよう……お兄ちゃん」
「あ～　そりゃどうしょうも無いな、詰んでるじゃないか」
「……」
「まあ、普通ならどうにもならんだろうな」

何やら持って回った言い方に、朔耶はムッとなって兄を見上げる。緊急事態なのだから良い案があるならさっさと言えとばかりに睨み付けた。兄はそんな朔耶の肩に手を乗せると『焦るな』と言ってポンポンと叩く。

朔耶は胸中を渦巻いていた焦燥感がポトリと落ちた気がした。

「まずは、『如何すれば良いか』じゃなく、『如何なれば良いか』から考えよう」

現状を打開する策では無く、現状を打開した結果から考えようという兄の言葉に、朔耶は首を傾げる。

「いいか？　前にも言ったが、お前はこの世界では　人々を導く女神にもなれれば、世界を破滅させる悪魔にもなれる」

精霊と重なる事で世界と繋がっているならば、基本的に精霊に出来る事なら何でも出来る筈なんだと兄は説明した。魔術や精霊術という枠に納まらず、精霊の持つ力そのモノを使いこなす事が出来れば大抵の事は出来る筈だ、と。

「お前の電撃とかが、多分その類の力だと思う。　でだ、まずは現状を打開した状況を考えてみよう」

カースティアに援軍が到着するには二日、それまで立て篭もっている護衛達が持てば解決。その翌日辺りに到着するであろう大部隊との交戦に備えて援軍の数も予め相当数を送っていれば問題ない。サムズの大部隊に備える為の部隊と、立て篭もっている護衛達への援軍の部隊に分けて送り込めばカースティア陥落という事態は避けられる。

「そんでもって、立て篭もり組が二日間　耐え抜くには制圧された竜籠を取り返せば良い訳だ、ついでに敵さんの竜籠奪って仲間の援軍を運べばダブル役満ドラ四だ」

「ダブル役満はともかく、どうやってその竜籠を取り戻して、しかも相手の竜籠を奪えるわけ？」

「簡単だ、お前が乗り込んで逆制圧、竜も操って言う事聞かせば良い」

「いや、だからっ　どうやってよ！？」

竜も知能のある生き物なら絶対的な力を持つ相手の事は分かる筈だと言って手順を説明する兄。

『一、無限の魔力を感じさせて畏怖させる。二、ガンを飛ばす。三、従える』

「以上だ」
「なによそれ！」
「自分を信じろ！　お前なら出来る」
「……便利な言葉よね、それって」

しかし、竜を従わせる方法はともかく竜籠の逆制圧は出来ない事も無いと思い直す。朔耶には狙った対象全てに意識の糸を絡めて電撃を浴びせ、一斉に昏倒させるという裏技がある。既に帝国の謁見の間と訓練場で実証済みだ。

「問題は、どうやって竜籠に乗り込むかよね……」
「空飛ぶ術とか無いのか？」
「うん、空を飛ぶ魔術ってのは無いみたい。ちょっとモノを浮かすくらいまでなら出来るらしいけど」
「よし、飛べ！　お前なら出来る」

『またそれか！』と突っ込みつつも、朔耶は飛ぶ方法を考える。レティレスティア達の竜籠がカースティアに着く前に乗り込んで取り返さなくてはならない。ちなみに転移は危ないので却下した。

「そういえば……反発力ユニットの反発力みたいに魔力の壁を作り続けながら風の加護で軽くすれば……」
「お、何か思いついたか？」

朔耶は道具作りのアイデアを思い浮かべる要領で、魔力を材料にした『効果』のアイデアを考えた。魔法障壁は物理的な力も防ぐ事が出来る。それを身体に張りながら上へ上へと発現させれば、魔法障壁という袋に入れてぶら下げるような感じで宙に浮く事が出来ないだろうか、と。

「ん、ちょっとやってみる」

意識を集中させ、身体の表面に魔力の壁を作るイメージを送る。電撃を発現させている内に力の使い方の要領は覚えたので、比較的楽に膜を発現させる事が出来た。身体に纏った魔法障壁を上方向へと持ち上げる。

「おお！　浮いた」

朔耶の身体が吹き上げるような白いオーラに包まれながら空中に浮かぶ。周囲の野次馬達からどよめきが上がった。魔術で空を飛ぶ方法はティルファでも長く研究がされているが、滞空時間の長いジャンプまでなら身体を軽くする術や風の塊で浮かせるという方法でどうにか可能というレベルに留まっている。

何せ攻撃魔術で自身を吹き飛ばすというような方法なので、安定性に欠ける上に着地に失敗して大怪我をし易い事から、湖などの落下しても大丈夫という安全な環境での実験でしか使われる事はないのだ。それほど『飛ぶ』事は難しいとされている。

「お兄ちゃん……」
「ん？　どうした」
「これ、浮くだけで殆ど動けない」
「大丈夫だ、お前なら何とか出来る」

『根拠？　何ソレ』な兄の励ましに溜め息を付きつつも、朔耶はあと一つ何かの要素を追加すれば自在に飛べるのではという期待感もあった。そんな朔耶に兄のオタ的言動がヒントを与える。

「う～ん、しかしそれじゃあまるで人魂みたいに見えるよなぁ、武○術っぽい様にも見えるけど、オーラの部分がもっとこう……光の

羽みたいにパァ～～と広がる感じの方が魔法少女っぽくて……」
「……羽？　羽かぁ……対の羽」

羽は二枚で対になっているモノ、そのイメージで朔耶は閃いた。身体を浮かせる程の魔法障壁を作り出し続ける『羽』を重なる精霊に、浮いた身体を自在に運ぶ『羽』を使役した地下の精霊に任せてみようと考える。

『お願い、あたしをイメージ通りに運んでみて』

朔耶は帝国の城で黒い霧の球体に包まれた所を風の魔術で地下に運ばれた時の事を思い出す。今回朔耶を包んでいるのは自身に重なる精霊を通じた力、運ぶのは地下の精霊による風の力だ。

「おおお！」

兄の感嘆する声が響く。朔耶を包み込む魔法障壁に地下の精霊の力が加わり、上方へ吹き上がっていた白いオーラが左側寄りに噴出すると、反対側からは黒いオーラが噴出した。地下の精霊は長くエイディアスの支配を受けている内にその色が染み付いたのか、力の発現に黒い光を放つようになっていた。

「白い羽と黒い羽か……なんだかお兄ちゃんの言ってた事を現してるみたい……」
「うおおお！　ええもん見れたぁああ　ああ～～～カメラーッ　カメラは無いのかー！」
「……人が折角　感動してるのに……」

朔耶はとっとと還してしまおうと決意した。一旦着地する。

「ああ、ちょっと待て」

その気配を感じ取ったのか、兄は素早く乗車してシートベルトを着けると、運転席から朔耶に頷いた。頷き返した朔耶は自身の中の精霊に語りかける。

『お兄ちゃんと車を向こうに還してあげて』

「皆への説明は俺に任せておけ、お前は怪我しないように気をつけて、目的を果たしたらちゃんと家に還って来ること」

「お兄ちゃん……うん、約束する」

「よし、じゃーな。俺は一足先にかえ――――」

兄を乗せたランドクルーザーが霞むように姿を消した。台詞の途中で還ってしまった兄に、『締まらないなぁ』と苦笑する朔耶。遠巻きに見ていた街の野次馬達は朔耶が精霊術の転移術を使ったのだと認識した。

『あの方はフレグンスを護る精霊の使者なのではないか』などの言葉が囁かれたが、それが朔耶の耳に届く事は無かった。

『さあ、急がないと!』

先程の要領で魔法障壁を展開して重なる精霊と地下の精霊に包まれ、噴き出す白と黒のオーラが光の羽となって朔耶の身体を宙に舞い上げた。

『レティ？　まだカースティアには着いてないよね？』

――サクヤ……はい、ですがもう……――

『ＯＫ分かった、今から直ぐそっちに行くから』

――え？　サクヤ……？――

朔耶は飛行に集中する為、交感を解くと、自分の中から湧き出す精霊の力、魔力の原液とも言える世界の力を意識した。そうして使役する地下の精霊にもその力を分け与える。　精霊が力を発現させる時、精霊自身が世界から抽出する力の源を朔耶が大量に放出している状態。力の弱い精霊に大量の燃料を与えても出来る事は限られるが、力の強い精霊ならば湯水のように与えられる燃料をやはり湯水のように使って相応の効果を発揮出来るのだ。

「超特急でヨロシク！」

言葉の意味は分からなくとも心でそのイメージは伝わる。地下の精霊は与えられた力を突風に変えて、朔耶の身体を南東の空へと運んだ。白と黒の光の軌跡を残しながら風のように飛び去る朔耶の姿を、カンタクルの大勢の住人が目撃していた。

『何とかしたいと思って、何とか出来る力があるから、何とかする……』

「それでイイじゃない！」

吹っ切れた朔耶は存分にその力を振るう事を決意していた。

40話：異端

「どうしました？　レスティア」
「母様……」

サムズの傭兵部隊に制圧された竜籠の中で、各国の代表は其々寝室に軟禁されて居る状態にあった。寝室ブロックの入り口と食堂、貨物室への通路、そして貨物室にも二人ずつの見張りが立ち、捕虜には術士問わず全員に術封じの枷が填められている。

その寝室ブロックの一室でアルサレナと共に軟禁されていたレティレスティアは、術封じの枷を通り抜けて来た朔耶との交感を終え、複雑な表情でアルサレナと向き合う。

アルサレナはレティレスティアが交感状態に入っていた事に、術封じの枷に刻まれた呪文が発動している事を示す光で気が付いていた。

「実は……サクヤと交感を繋いでいました」
「やはりそうでしたか、あの子はこちらの世界に？」
「ハイ、精霊の視点を通して私達の危機を知り、世界を渡ったのだと……」
「そうですか……それで、サクヤは何と？」

『直ぐにこちらへ向かう』と言って交感を解いた事をレティレス

ティアが話すと、アルサレナは少し考え込む。

「サクヤもカースティアに向かっているという事でしょうか？」

「どうでしょうね、案外言葉通り私達の所へ向かっているのかもしれませんよ？」

朔耶が自らの意思で世界を渡ったと聞き、アルサレナは朔耶の気持ちに何か大きな変化があったのではと感じていた。

「あの……ヨールテス様にお薬を届けたいのですが……」

貨物室を見張る傭兵にキトの代表団綺麗所親衛隊の女性剣士の一人が声を掛ける。持病を患うヨールテスは毎日決まった時間、特別に処方された薬を飲まなくてはならないのだと言う。

傭兵達にとっても代表団は大事な人質、体調を崩されても困るという事で軟禁してある部屋へ行くことを許可した。

女性が通路の見張りに連れられて食堂に入ると、壁際に並べられた椅子に枷で括りつけられて座っているフレグンスとティルファ、それに帝国の代表団補佐官達の姿があった。

その食堂を通り抜けて寝室ブロックに入り、ヨールテスの軟禁されている部屋の前で扉越しに声を掛ける。

「ヨールテス様、お薬の時間です」

「おお、キルトか　入りたまえ」

『失礼します』と部屋に入る。ヨールテスはベッドに腰掛けて寛いでいた。扉を閉め、外で見張りが聞き耳を立てていない事を気配で確認すると、キルトは徐にヨールテスの膝の上に跨る。

「どんな様子だ？」

「今の所は皆さん大人しくしてますね」

「そうか、やれやれ……愚者を演じるのも疲れるな」

「そうですか？　ヨールテス様、ノリノリだったじゃありませんか」

ガラリと口調の変わったヨールテスの首に腕を回し、耳元に唇を寄せたキルトは可笑しそうにクスクスと笑う。彼女はヨールテスの側近の一人で、綺麗所親衛隊八名の中に潜ませている本物の腕を持つ密偵剣士だ。

「まあ、他の代表団の護衛が軒並み正義感の強い紳士であってくれたお蔭で楽だったがな」

「うっふふ……皆さん、勇敢な騎士様達でしたね」

「長生きは出来なさそうだがな」

ヨールテスは彼女の腰を抱いて引き寄せると、首筋に舌を這わせた。キルトの喉からくぐもった嬌声が零れる。

「ふむ、また随分と溜め込んだモノだな」

「はい……魔術士の相手が多かったモノで……んぁあ……っ」

キルトの首筋に赤い血が一筋、鎖骨の窪みから胸元の谷間へと流れ落ちる。ヨールテスは鋭い牙で穿つようにキルトの首筋から魔力を吸い出し、自らの体内に吸収していった。

「サムズの指導者は小物だが、背後に付いた帝国の元側近だったか？　奴からは同類の気配を感じる」
「ん……はい……、エイディアス帝から……んぅ……精霊体化実験を……受けた形跡が……はぁ……」
溜め込んだ魔力を貪るように吸い出される快感に身を捩るキルトをしっかり抱き込みながら、ヨールテスは今回のサムズによるクリューゲル侵攻の黒幕とも言える帝国からの亡命者の事を思い出していた。

魔族と称される自分達と同じ異端な存在としての気配を持つグラントゥルモス先代皇帝の側近。体内に呪文を施すヨールテス達と違って、体内に発掘品を埋め込む手法がエイディアス帝の実験による『魔族化』だった。

一般にこの世界の『魔族』とは邪業とされる異形化の研究や不死の研究を率先して行う者達の総称である。
不老不死の研究過程で実験に使われた動物の野生化したモノが魔物の祖であると謂われている。そうした実験により、特異な状態に身を措く様になった者を『魔族化』した者と呼ぶ。

ヨールテスも元はティルファで不老不死の研究をしていた学者術士で、体内に呪文を刻む事で身体の老化を抑えて寿命を伸ばそうとした一派の生き残りであった。彼の場合は外部から定期的に魔力の補給をする事で体内の呪文を維持しているのだ。

キルトは嘗てキトで暗躍していた闇ギルドから彼に差し向けられた暗殺者であったが、色々あって今は彼の魔力補給の為の触媒となっている。ちなみにこの『吸血鬼スタイル』による魔力吸収は彼の

趣味であり、別に噛む必要は無い。
恍惚とした表情を浮かべて撓垂れるキルトをベッドに横たえたヨールテスは、体内の呪文の状態を検査して自らの力を確かめた。

『さて、カースティアの陥落は必至という所だが……さっきの精霊術らしき意識の糸が気になるな』

食堂で拘束されているレイス達は、見張りの傭兵を観察しながら彼等の力量の推察などを行い、来るべき一戦に備える気概を内に秘めていた。ここに囚われている者は帝国とキトの代表団以外は全員が術者である。
誰か一人だけでも術封じの枷を外す事が出来れば、傭兵達にはかなりの脅威になるだろう。

「大丈夫か？　フレイ」
「はい、私は平気です」

気遣う言葉に微笑み返すフレイは、レイスの眼の奥に『やれるな？』という確認の意図を読み取り、頷いた。
先程、キトの代表団の女性が食堂を通る際、見張りの視線が逸れた隙を付いて帝国の皇帝補佐官アネットが合図を送って来たのだ。
彼女は既に外してある自分の枷を見せると、指の間に先の曲がった針のようなモノをちらつかせていた。

通路の見張りと食堂の見張りは交代する間隔を短くする事で常に

警戒し、不測の事態に備えている。その為、交代した通路の見張りが食堂を出た直後の隙を狙うしかない。アネットの開錠の腕と仕掛けるタイミングに賭ける。

食堂の見張りの一人が寝室ブロックの方へ行き、交代した二人の見張りが其々左右の通路へ別れて食堂を出て行く。この時も同時にではなくタイミングをずらしながら移動する為、殆ど見張りの視線に空白というモノが生じない。

一人目が右の通路へ出て行き、二人目が左の通路に出て行き、寝室ブロックから一人が戻って来て、食堂に居た見張りが寝室ブロックへ移動する。足を投げ出してだらしなく体勢を崩した格好で座っていたアネットがそれらをぼ～と眺めていたが、ふいに寝室ブロックに向かう見張りの後姿をギョッと引き攣った顔で凝視する。

その気配を敏感に感じ取った見張りの傭兵はアネットの様子を窺い、ついで彼女の視線の先を見る。そこには寝室ブロックに向かって歩く仲間の後姿。特に不審な点は見られない。訝しんでアネットに視線を戻そうとした瞬間、彼の意識は暗転した。

見張りの傭兵が視線を部屋の奥に向けたほんの一瞬の隙に、音も無く近付いたアネットは彼の首筋に指を押し込んで意識を奪ったのだ。寝室ブロックに向かった見張りはそのまま突き当たりで左右に伸びる通路を左、右と確認して食堂の見張りと交代すべく振り返ろうとした瞬間、意識を失って昏倒した。物音一つ立てず素早く食堂に戻って来たアネットは、まずレイスの枷を外しに掛かる。

通路から見張りの足音が迫り、枷が外れるのと見張りが食堂に入って来たのは殆ど同時だった。

仲間の傭兵が倒れていて捕虜の一人が魔術士の枷を外しに掛かっている光景に眼を瞠った傭兵は、声を上げて他の仲間に知らせようとしたが喉を突かれて声にならずに咽る。すかさずトドメの一撃で昏倒させるアネット。

間を措かず反対側の通路からも見張りが入って来たが、既に詠唱を行っていたレイスの魔術で一瞬の内に顔を氷付けにされ、次いで手足も氷で固められてもがく内に気を失ったらしく静かになった。アネットはそれを見て『えげつなー』などと呟きながら、すぐさまフレイの枷も外しに掛かった。

フレイはアネットに対する猜疑はまだ拭えないものの、流石は密偵部隊の精鋭と認めざるを得ない事を感じていた。

「陛下！」

「アネットか、早かったな」

バルティアはこうなる事が当然であるかのようにアネットを向かえた。信頼されているのか、不遜なのか判断に困るなぁと苦笑しながらバルティアの枷を外しに掛かるアネットだった。

「アルサレナ様、レティレスティア様、御二人とも御無事ですか」

レイスとフレイが其々二人の枷を外しに掛かる。枷の鍵は三人目に倒された見張りの傭兵が持っていたのでそれを使った。ティルファの代表補佐官たちも自分達の主を解放すると、皆で寝室ブロックの廊下に出て来て顔を合わせた。

外した枷で見張りの傭兵達を拘束し、後は貨物室にいる二人を何とかすればこの竜籠は取り戻せる。問題は先導しているサムズの竜

籠にこちらの竜の頭を抑えられている事だった。
　ティルファの代表ブラハミルトが廊下にいる面々を見渡し、顔が足りない事に気付いて口にする。

「キトの髭オヤジはどうした？」
「いや～あの人面倒だから事が済むまで放置しちゃおうかな～なんて」

　アネットが愛想笑いしながらそんな事を答えていると、件の代表が居る部屋の扉が開いて先程アネット達も食堂で見掛けたキトの代表団、綺麗所親衛隊の女性が現れた。

「あら？　みなさん何故ここに……？」
「ん？　どうしたキルト　何かあったのかね？」

　バレてしまっては仕方が無いとばかりに、アネットはレイス達から鍵を受け取ってヨールテスの枷も外しに部屋へと踏み込んだ。

「いや～流石は皆さん列強国の側近の方々ですなぁ　これなら無事に帰国出来そうですな！」

　拘束された傭兵達を前に踏ん反り返ってはしゃいでいるヨールテスを捨て置き、アネット達は貨物室に居る二人の傭兵とキトの綺麗所親衛隊の婦人方をどうするか話し合っていた。

　彼女等を人質にされれば元の木阿弥、サムズの傭兵はこちらの竜籠を先導する竜籠に乗っている八人と、乗り移ってきた竜籠に残る

二人も含め依然として戦力で勝っている。

「まずはこちらの竜籠を完全に制圧し、敵竜籠は魔術で追い払うしかないでしょうね」

「問題は貨物室の二人だな、侵入口の上部扉付近にいる。二人同時に抑えねば直ぐに連中の仲間が乗り込んで来るぞ」

「人質さえ取られないようにすれば、片方を仕留めて後はどうにかなると思うんだけど」

レイスとブラハミルトが行動方針とそれを進める為に障害となる問題を挙げて行く。

そしてアネットがそれらの打開策を提案する。こういった特殊な事態に的確な対応ができる者は、密偵叩上げのアネットを始め、騎士団任務の経験を持つレイス、戦略面に知識を持つブラハミルトの三人だけだ。

アルサレナは戦場での戦闘経験があるので制圧後の戦力の一端を担って貰うとして、バルティアは戦闘訓練も基礎しか受けておらず、レティレスティアにも実戦経験が無いので戦力にはならない。

ブラハミルトは触媒型の魔術士なので触媒が無ければ戦えない。

現状で戦えるのはアネット、レイス、フレイ、ティルファ代表の補佐官二人。

「おお！　それなら儂に良い案がありますぞ！」

話の輪の中に入ってくるヨールテスに胡散臭げな視線を向けるアネットを余所に、ヨールテスは隅っこに立っていたキルトを呼んで説明する。

「この娘を使って連中の気を逸らせばいいんだ！　食堂からの差し入れだとか言って茶菓子でも持って近付き、そっちに気を取られている隙に魔術でドカンと！　あ、なんだったら茶に眠り薬を入れるというのはどうだ？」

これは妙案だと自画自賛しているヨールテスを一先ず放っておき、キルトを囮に使った場合を想定して意見を交すアネットとブラハミルト。

「うーん……連中の錬度からしてまず手を付けないと思うし、もしかしたらその子が近付く事にさえ警戒するかもね」
「しかし、気を引く事は出来るな……幸い通路は二つある」

そろそろ通路の見張りが居ない事を貨物室の二人に気付かれるかもしれない。アネット達はその作戦で行く事にした。
左の通路からキルトとアネットが貨物室に進み、アネットは通路の死角で待機。キルトがお茶持って見張りに近付き声を掛け、右の通路からはレイスとティルファの代表補佐官二人がタイミングを図って魔術を打ち込む。

制圧後は上部扉からフレイの魔術でサムズの竜籠を追い散らす。上部扉は一人分の幅しか無い為、最も火力の高いフレイがその役に充てられた。その際、フレイとこちらの竜籠にはアルサレナの使役精霊による結界を張り、弓等による攻撃を防ぐ。

「――精霊よ風の加護をこの者に――」
「わおっ　いいわねコレ」

レティレスティアによる風の加護を受けてアネットの身体が軽くなる。

「よし、では行こう　キルトといったね、宜しく頼むよ」
「はい」

お茶を載せたトレイを持ち、左の通路を行くキルトの背後から気配を消して続くアネット。それを見送って右の通路を進むレイスとティルファの代表補佐官二人。少し間を開けながらレイス達の後ろに付くフレイとアルサレナ。

居残り組みはレティレスティアとバルティア、ブラハミルト、それにヨールテスの四人だ。ヨールテスは少し休むと言って寝室ブロックの方へ引っ込んでしまい、食堂にはレティレスティアとブラハミルト、バルティアが残された。

「式典以来ですな、レティレスティア様。　貴女も何かとトラブルに見舞われるようで」
「ブラハミルト様も、此度は災難でしたわね」

ブラハミルトとレティレスティアは以前ティルファの式典に参加した時にも顔を合わせている。レティレスティアはその式典の帰りに帝国の特殊部隊に追われ、森で朔耶と出会った。

「こんな時に無節操かと思いますが、サクヤ殿の事についてもう少し詳しいお話を御聞かせ頂きたい」
「サクヤの事ですか……」

レティレスティアは少し迷ったが、既に朔耶が異世界人である事は母アルサレナから知らされている。サクヤの発想や性格程度なら構わないかと話に応じる事にした。一応、サクヤが精霊と重なっていた事や、こちらの世界に戻って来ている事は伏せておく。

「サクヤは、不思議な方です」

壁際で腕組みをして立っているバルティアもしっかり聞き耳を立てていた。

貨物室の一角に身を寄せ合っているキトの綺麗所親衛隊の女性達は、離れた所に立つ見張りの傭兵に近付いていく仲間の一人、キルトの姿をハラハラしながら見守っていた。

ヨールテス伯のお気に入りである彼女は何かとそそっかしい所があり、よく色んな男に誑かされては朝帰りをしている危なっかしい娘なのだ。

「あの……お茶の差し入れに」

「ん？　なんだお前は」

「通路の見張りはどうしたんだ、こんな予定は聞いていないぞ」

訝しむ傭兵達を前にオドオドした様子を見せていたキルトは、ピクリと何かに気付くように顔を上げると、突然お茶の盆を放り出して胸元から何かを取り出し足元に叩き付けた。其処から煙が噴出して一気に貨物室の視界を奪う。

『な、何やってんのあの子！　こんなの聞いてないわよ！？』

狼狽するアネットは飛び出すべきか否かを測りかねていた。その時、突然背中に走る悪寒を感じて咄嗟に後ろに飛ぶ。

数瞬前まで立っていた場所を何かが一閃した。一瞬煙が裂かれ、其処にナイフを持ったキルトの姿を認める。顔付きがまるで別人のようになったキルトはさらに突っ込んで来ると続け様にナイフを繰り出す。

アネットはそれを捌きながら風の加護で軽くなった身体を利用して壁に飛び、その壁を蹴ってさらに反対側の壁に飛ぶと、背後に周りこむように見せかけて天井を蹴った。

背後から急襲されると読んだキルトが身体を反転させながら薙ぎ払ったナイフは何も無い空間を切り、そこへ真上から降って来たアネットが一撃を入れてナイフを弾いた。

「ちっ」

キルトは直ぐさま打たれた手を引っ込めると、着地した体勢のアネットに蹴りを放つ。着地の体勢に余裕を持たせてあったアネットは其処からさらに身を伏せて蹴りを躱す。僅かに掠った服の背中が裂けた。キルトの靴に仕込まれていた暗器が爪先から突き出ている。

ギリギリまで伏せていたアネットは全身のバネを使って飛び出すと、空振りした蹴りの軌道を反して逆蹴りを合わせてくるキルトに突進。

返って来た蹴りの腿裏を肘で突き返しながらキルトの腕を取り、手首を掴んで背中に捻り上げようと密着するアネットにキルトは身体を浴びせて壁に打ち付けた。

キルトの腕を極め損ねて壁に押し付けられたアネットの足を目掛

け、キルトの爪先の刃が狙うがアネットは足を絡めてこれを阻止した。アネットに半分腕を極められて動けないキルトと、キルトの暗器攻撃を防ぐ為に足を絡めて動きの取れないアネットの接近戦は完全に膠着した。

「中々上手く化けるじゃない」
「流石は帝国の精鋭密偵部隊ね」

互いに一瞬の気の緩みも見せないまま軽口を叩き合う。そんな中でアネットは内心舌打ちしていた。キルトが敵方だったという事は、ヨールテスもサムズ側の人間かもしれない。あの或る意味分かり易い愚者ぶりは、まさか演技ではなかろうかと懸念するが――

「うっふふ……ヨールテス様の事を疑っているのね？　ア・タ・リ」
「……」

肯定を返されてアネットは心の中で項垂れる。『一杯食わされた』と。そして何と無く朔耶の事を思い出していた。

「よもや貴方がサムズに組していたとは」
「意外だったかね？　まあ、儂的にはサムズなぞどうでも良いのだがね」

貨物室の煙が上部扉から吸い出されて視界が戻る。そこにはヨールテスによって解放された傭兵が、レティレスティアとブラハミルト、それにバルティアを人質にレイス達を捕らえようとしている光

景があった。外では竜籠から噴出した煙に何事かと寄せて来たサムズの竜籠に乗る傭兵達が、上部扉に弓を構えて威嚇している。

「キルト、こちらは片付いたぞ」

ヨールテスが声を掛けると、左側の通路から連れ立って出て来るキルトとアネット。二人とも衣服の彼方此方が擦り切れ、所々肌が露出している。アネットは降参ポーズで肩を竦めながらバルティアの隣に立った。ヨールテスは二人の様子を見て面白そうに問う。

「随分と梃子摺ったようなだな？」

「ええ、思いのほか手強かったです」

「キトの代表である貴方がこの様な行いに出るという事は、キトはサムズと共謀してフレグンス、ティルファ、グラントゥルモスと刃を交えるという事ですか？」

アルサレナの問いにヨールテスは不遜気に笑うと、さて何処まで話しておこうかと考え込む。そして謎掛けをするように言った。

「此度の戦、サムズが勝てば帝国も王国も都も滅びる。商人はただ武器と糧と媚を売り、大陸全土を買うだろう」

「すると、サムズが負ければキトも滅亡か？」

「キトは群体の国だからな、表の支配者が暫らく裏に回るだけさ。誰も責任は取らんよ」

ブラハミルトの言葉に、ヨールテスは首を振って笑う。

「まあ、お喋りはこの辺にして　皆さん部屋に戻って頂こうか」

傭兵達を促して全員を食堂へ移動させるヨールテス。キトの裏切りによるまさかの結末に皆口惜しそうな様子で歩き出そうとして、突然竜籠が大きく傾いだ。

「あああ　行き過ぎた！」

茜色に染まり始めたオルドリアの空を突風の勢いで飛んできた朔耶は、前方に見つけた八体の竜と三台の竜籠に向かって直進、そのまま竜達の間を通り過ぎて前に出てしまった。慌てて反転する朔耶。

一方、竜達は突然現れた尋常ではない魔力を発散しながら飛来する物体に驚き、急制動を掛けた。その為、籠がブランコのように傾く。四頭立ての超大型竜籠は一度揺れて直ぐに収まったが、サムズの二頭立て竜籠は主に兵士や物資を迅速に運搬する為に造られた屋根の無い大きな箱をぶら下げただけのシンプルな造りになっているので、乗っている傭兵達は揺れる籠の中で振り落とされないよう縁にしがみ付いていた。

朔耶は彼等に意識の糸を伸ばして絡めておくと、竜達の正面に浮く。帝国の城に居た頃、時々厩舎に立ち寄っては見物していたのでゴツイ蜥蜴顔にも慣れたものだ。

『うーん……とりあえず、やって見ようか』

兄のアドバイスに従い、朔耶は自分の中の精霊を通じて湧き出す力の流れに意識を向けると、蛇口を捻るように魔力の放出を行った。朔耶を包む白と黒の噴出するオーラが巨大な羽を思わせる形に伸びて行き、まるで『ここから先は通さない』と示しているかのように竜達の前に立ち塞がる。

竜達は飛行の際、自然に魔力を使って風を発生させ揚力を得ているので、魔力の流れを風のように感じ取る事が出来る。それ故に、朔耶が発する魔力の異常さを正確に認識出来るのだ。本能で悟る『逆らってはイケナイ』。

じろり。　びくり。

そんな感じで睨みを効かせた朔耶に首を引いて後退る飛竜。ようやく揺れの収まったサムズの竜籠に乗る傭兵達が、朔耶の姿を見て騒ぎ始めた。巨大な白と黒の光の羽を広げて行く手を塞ぐ人らしき存在にどう対処すれば良いか分からず、狭い籠の上で右往左往している。勇敢にも矢を射掛けようとした者も居たが、仲間に慌てて止められていた。

朔耶は竜達に意識の糸を伸ばし、意思疎通を試みる。意識の糸を絡めただけも竜達は首を捩ってキューキュー鳴いていたので、糸の存在も感知出来るようだ。

『この場で待て、いいわね？』

こくこくと頷く八頭の竜。『竜って頷くんだぁ』と妙な所に感心しながら、朔耶は竜達から意識の糸を解くと傭兵達を眠らせる事にした。カメラのフラッシュが一斉に焚かれたかの如く、青白い閃光が連続して朔耶の身を照らし出す。

サムズの竜籠に乗っていた傭兵達は狭い籠の中で折り重なるようにして昏倒していた。

取り合えず、サムズの竜籠の竜達には一度地上に下りて傭兵達を降ろして来るように『捨てて来て』と朔耶が指示を出すと、気絶した傭兵で満員の竜籠が地上へ下りて行く。

もう一台の二頭立てはこの場で待機させ、レティレスティア達の乗る竜籠を制圧しているであろう傭兵を追い出しに、朔耶は一度乗った事のある四頭立て超大型竜籠に乗り込んだ。

レティレスティア達の乗る竜籠の中では状況が把握しきれず少し混乱していた。

突然大きく揺れたかと思うと何か濃密な気配を唐突に感じ、外で傭兵達が騒いでいる声が聞こえた後、連続する乾いた音と青白い閃光、そして静寂。貨物室に居た面々はこの異常事態に其々感ずるモノがあった。

レティレスティアとアルサレナ、レイスとフレイは濃密な『気配』に覚えがあった。バルティアとアネットは連続する『乾いた音と閃光』に覚えがあった。ブラハミルトはこの濃密な気配が『巨大な魔力』である事を感じ取った。

そしてヨールテスとキルトはその『巨大な魔力』がそんな表現で済まされるレベルでは無い事に戦慄していた。

二人は体内の呪文維持に魔力を繋ぎ、吸い、溜め込み、吸収消化する身体を持っているが故に、魔力そのものを従来の人が感知するよりも正確に感じ取る事が出来る。

一体何が現れたのかと警戒している所に、貨物室の開いていた上部扉から小さな影が巨大な気配と共に下りてきた。

噴出するオーラに白い衣を靡かせ、黒髪に黒い瞳を持つ白と黒の光る翼を広げた少女。

そのあまりに非現実的な気配と姿に、彼女をよく知る近しい者達も声を発する事が出来ないでいた。貨物室の中を見渡した光の翼を持つ少女は、レティレスティアの姿を見つけると片手を上げて微笑みながら言った。

「やほ、レティ　久しぶり」

何処までも軽い、朔耶の挨拶。レティレスティアの中に歓喜が広がる。

「！……っ　サクヤ！」

「サクヤ様！」

「フレイも久しぶり～　二人とも心配掛けてごめんね？」

感極まったレティレスティアとフレイが朔耶の元に駆け寄ろうとするが、咄嗟に腕を掴んだ傭兵達に引き戻された。こんな尋常ではない気配を持つ存在に易々と人質を持っていかれては、任務の遂行所か自分達の命さえ危ないと判断したのだ。

彼女達の様子からあの存在と親しい間柄である事は考えるまでもなく、この二人を抑えている内はまだ有利に事を運べる、と。乱暴に引き戻されて小さく悲鳴を上げたレティレスティアを見た朔耶は、

ムッと不機嫌な顔になるとスタスタと無造作に歩み寄る。

「う、動くな！　この娘がどう……」

「邪魔」

カカァアン

薄暗い貨物室が一瞬青白い閃光に包まれ、誰もが目を眩ませた。

視力が戻ると、そこには床に倒れ付した傭兵達の姿。

『相変わらず反則よねぇ』というアネットの感嘆する呟きが響く。

今度こそレティレスティア達と再会の抱擁を、と思っていた朔耶に横から声を掛ける者がいた。

「いやぁ素晴らしいですな！　その魔力、その術！　意識の糸をそこまで自在に操るとは驚きです」

横に長い変な髭を持つ初老の男性と所々破れているが豪華な衣装を纏った女性に、朔耶は精霊の視点で見たキトの代表と警護の女性剣士である事を思い出した。『この髭は特徴的だなぁ』などと思っている朔耶に、アネットが慌てて警告を発する。

アネットはこの二人が倒れていない事に、朔耶が彼等の裏切りを知らないのだと気付いたのだ。

「サクヤちゃん！　その二人も敵――」

「え？」

アネットが言い終わる前に、キルトが素早く抜き放った短剣で朔耶の喉を突いていた。

「ぐ……こふ……」

微かな呻きを上げて床に倒れ付したのはキルトだった。彼女は相手の魔力を吸い取り、体内に溜めて置く体質を持っている。
その為、魔力を噴出し続けている朔耶を短剣で突くと同時に魔力を吸い取る器官から意図せず大量の魔力が流れ込み、そのあまりに膨大な量に一瞬で許容量を超えてしまった。所謂『溺れた』のだ。

これにはヨールテスも一瞬呆けて動きが止まり、我に返って『しまった』と振り向いた先では朔耶がキョトンとした表情で突っ立っていた。

てっきり反撃が来ると思っていたヨールテスは、ぽけっとしている朔耶の姿にキルトの一撃が傷を負わせたのかとも思ったが、朔耶の喉には傷一つ付いていない。
朔耶は全身に強力な魔法障壁を張っているので衝撃も届かず、たとえ魔術を打ち込まれも平然としていられる状態にある。

プロの暗殺者に比べれば素人である朔耶には、キルトの動きは全く見えなかった。朔耶にしてみれば、いきなり目の前に居たと思ったら突然倒れたようにしか見えなかったのだ。

その力も反応も現象も、何もかも理解し難い朔耶という存在に、ヨールテスは完全な手詰まりに陥った。朔耶から伸びる意識の糸が自分の首に絡まるのを、ヨールテスは呆然と見詰めていた。

カカァアン

41話：カースティアの夜

朔耶は念の為、状況に付いて行けず端っこで固まっている綺麗所親衛隊の残り七人にも意識の糸を通して表面上だが心を読み取ると、彼女達が危険な存在では無い事を確かめた。

「サクヤ！」

全ての危険を排除した事を確認して魔力のオーラを解いた朔耶に真っ先に駆け寄り、その身を抱き締めようとしたのはバルティアだった。

「――精霊よ風の戒めをあの者に――」

「っ！」

細い紐で合わせただけの肩口も露わに仄かな色気を漂わせる露出の高い異国の白い服を纏う心から焦がれる少女を胸に抱こうとした直前で、バルティアの身体に急制動が掛かる。ふわりと舞う金髪を靡かせてバルティアの脇を通り抜けたレティレスティアは朔耶に飛び付く様に抱きついた。苦笑しながら迎える朔耶。

「……そこで精霊術は無いのではないか？　フレグンスの王女」

「貴方にサクヤは渡しませんから」

ぎゅっとサクヤを抱き締めながら森でも見せた王女の風格で言い

放つレティレスティアに、複雑な表情を向けるバルティア。　アルサレナは溜め息を付き、レイスとフレイは然もありなんと、ブラハミルトは興味深そうな視線で眺め、アネットは通路に隠れて笑っていた。

「あははは……まあ、とりあえず　あの人達を降ろしちゃってカンタクルに急ごうよ、竜籠が二台もあれば援軍も早く送れるでしょ？」

「サムズの大部隊がそんな近くに迫っていると……？」

「うん、あたしが見た感じたと三日位でカースティアに着くと思う」

貨物室の後部扉から気絶した傭兵とヨールテス、キルトも一緒にサムズの竜籠に積み込み、地上に降ろして来るよう竜達に言いつけた朔耶は、各国代表の皆に精霊の視点で見たサムズ方面から向かって来る傭兵団の大部隊の事を詳しく話した。

「やはり、我々の推測より早く動いていたという訳か」

「少し早すぎる気もしますね」

バルティアとアネットはサムズに入ったであろう傭兵団の規模から自分達が推測していたサムズの動きと、今回の会談にはそれらに対抗する意味合いも含ませていた事も打ち明けた。凡その事情を知っていたアルサレナは悪く無い判断であったと一定の評価を下し、ブラハミルトはこれでティルファの付くべき陣営も決まったとフレグンス、グラントゥルモスの味方に付く事を明言した。

彼はフレグンスとグラントゥルモスの戦いやフレグンスの内戦であれば関せず中立の立場をとるつもりだったが、『サムズの勝利が三国の滅亡に繋がる』というヨールテスの謎めいた言葉もこの判断を後押しした。

「キトの動きは如何見ます？」

「ふむ……ヨールテスが言っていた言葉だが、キトは群体国家とも言える多数が寄り集まった頭も尻尾もはっきりしない不定形な国だからな、奴が言っていた通り当面の支配者が代わるだけで今まで通り何も変わらんのだろう」

レイスの問いに答えたブラハミルトは、キトの政治体制は未だに表立って確立されておらず、統治機関が何処にあるのかさっぱり分からない事を上げてそう説明した。多くの商人と資産家が寄り集まり、何時誰によってそれら群体の方針が決められているのか、一説にはキトに多数存在する各種ギルドの総元締めが中心的役割を果たしているとも言われている。

「そうなると、ヨールテスはあのまま逃がして良かったのでしょうか？」

「奴がキトの代表として送り込まれたのは恐らく我々の確保が目的だったのだろう、つまりは奴も『手先』の一つだ」

「何時でも切れる『尻尾の手先』という事ですか。　しかし……尻尾だと思っていたら実は頭だった、なんて事は？」

「無いとは言い切れん。　だが、ここで身柄を確保して置いたとして、それでキトをどうにか出来ると思うか？」

確かに、とレイスは納得した。先程話した通り、当面の支配者が代わるだけだ。代わった支配者が方針をぐるりと変えて自分達に付

く政策を行う可能性も無くは無いが、それは楽観的過ぎる。

そこまで話した所で、地上に傭兵達を捨てに行っていたサムズの竜籠が戻って来た。

「それじゃあ、竜達にはこっちの竜籠に付いて行くように言っておいたから」

「本当にカースティアに行かれるのですか？」

「うん、やれる事はやっとかないと　後悔はしたくないしね」

カースティアに残ったイーリス達を始めとする各国代表団の護衛の人達を助けに行くという朔耶に、レティレスティアは心配そうな表情を向けていた。　徐に歩み寄ったバルティアが朔耶に話しかける。

「あまり無理はするなよ、余はお前ともっと話したい」

「バル……ちゃんと頑張ってる所見てたよ、急に消えちゃってごめんね？」

「いや、余の不甲斐無さが招いた事だ……」

何やら親密な会話を交す朔耶と帝国皇帝。二人を交互に見たレティレスティアの表情に別の不安の色が浮かぶ。そこにレイスが割り込むように声を掛けた。

「サクヤ、少し待って貰えますか　ほら、フレイ」

「……は、はい　あの……」

おずおずと歩み出たフレイは、俯き加減でに申し訳なさそうな顔を朔耶に向けている。フレイとは再会の挨拶から言葉を交していない。朔耶はフレイの性格とアネットに対する態度から考えて、自分

が攫われた事を未だ気に病んでいるのかもしれないと思い至った。

フレイは朔耶が光の翼を纏って現れた時こそ、感極まってレティレスティア王女と同様に駆け出そうとしたものの、圧倒的な力を振るって敵勢を排除し、各国の代表や王女、王妃達と対等に話し合う実力に裏打ちされた姿を見ているうち、そのあまりに大きな存在となってしまった朔耶を前に萎縮してしまったのだ。

なにか話すでもなくもじもじしているフレイに、朔耶は『これはこっちから動いてあげないと駄目かもしれんね』と歩み寄ると、何時かの馬車の中でのようにヌイグルミ抱っこを敢行した。

「さ、サクヤ様……！」
「うーん、相変わらずイイ抱き心地」

「フレイ？　あんま深く考えちゃ駄目だよ？」
「でも……私は……」

「フレイが余所他所しいと、あたしは寂しいなぁ」
「サクヤ様……分かりました。サクヤ様とは、今まで通りのお付き合いをさせて頂きます」

若干気になる表現もあったが、朔耶はうむうむと満足して身を離した。
朔耶を見、レティレスティアを見、フレイを見、アネットを見、そしてまた朔耶に視線を戻したバルティアが呟く。

「そうか、サクヤが余に靡かぬは同性嗜好であったが為か……しかし困った、性別ばかりはどうにも……」

イナズマ　デコピーン

「……何をする」

「やかましっ　この妄想おばか皇帝！」

ちょっと涙目でオデコを擦っているバルティアに『あたしはノーマルだ！』と力強く宣言しながら開かれた後部扉の前に立つ朔耶。

「あーもう！　バルのせいでシリアスな出撃シーンがドタバタコメディになっちゃったじゃないの！」

「ふむ、何だかよく分からんが　リラックス出来てよかったな？」

「むぅ……」

バシュッと朔耶の身体から白と黒のオーラが吹き出て光の翼が広がる。

「んじゃ、行って来ます」

開かれた後部扉から見えるオルドリアの空には既に星が瞬き始めている。ふわりと身体を浮かせた朔耶は黒い翼が起こす突風を纏って一気に飛び出していった。

カースティアの大図書館では通路と階段の一部を魔術で崩壊させて塞ぎ、残った通路をフレグンス近衛騎士団、帝国精鋭騎士団、ティルファ魔術団が交代で組みながら襲撃者達と相対していた。

「一階は完全に占拠されたか」
「連中、ここを拠点に街中から集まって来ているようだ」
「最初に仕掛けて来たのは傭兵団のようだな、サムズの自警団とは別の奴等だろう」
「サムズの独立派って連中は只の頭数を揃えるのに集められただけだな」

襲撃者による何度目かの突入を退け、団の代表達が敵戦力の分析を行い話し合う。傭兵団の攻撃は脅威だが相手には魔術士が居ない為、ティルファ魔術団の援護と近衛騎士団、精鋭騎士団が交互に護りを固める事で危なげ無く撃退に成功していた。
しかし、昼の会談から続く連戦には数で劣る味方の体力的にも精神的にも消耗が続き、徐々にだが押され始めている。塞いだ通路も瓦礫の撤去作業を行う音が聞こえている為、そちらにも気を張らなくてはならない。

「派遣騎士団の生き残りが態勢を立て直してくれれば、援軍が来るまでは持たせられると思うのだが……」
「さて……、聊か厳しい状況ですな」

「敵襲！」
「く……またか！　だが向こうも消耗しているようだな、間隔が長くなって来ている」

一本の通路上で行われる攻防。イーリス達が何度撃退しても直ぐに部隊を編成し突入を仕掛けてくる襲撃者達。殆どは大した腕も無い雑兵程度の相手だが、時折傭兵のような手錬が雪崩れ込んで来るので一時も気を抜く事が出来ない。

「とにかく、ここは耐え抜くしかあるまい」

イーリスは刃の欠け始めた槍を握り直すと、回収され損なった敵兵の遺体が転がる防衛ラインの廊下に踏み出した。

「竜籠はまだ戻らんのか」
「未だ連絡はありません」
「まさか落とされたのではあるまいな……」

大図書館の一階を占拠する武装集団の中で司令塔の役割をこなしている傭兵団の団長は、脱出した各国代表を追わせた部下の分隊が戻らない事に苛立ちを募らせていた。現状では集まる予定だった戦力の半分も集まっておらず、未だ図書館の制圧に至っていない。

クリューゲルに進撃中である仲間の傭兵団を竜籠で輸送する予定も、肝心の竜籠が戻って来ないので大幅に遅れている。このままでは彼等の到着に三日は要してしまう事になる。

「サムズ独立派の連中は何故予定通り集まらん。　奴等でも数さえ揃えれば其れなりの戦力になるというのに」
「斥候からの報告にここへ向かう途中で襲撃を受けたらしき独立派集団の死体を見たとありますが……」
「……ふむ。派遣騎士団の別働隊でもいたか……？　しかし、フレグンスの騎士団にそんな戦い方が出来るとも思えんが……」

フレグンスの騎士団は良く言えば正々堂々真っ向勝負を挑む正統

派騎士。戦いの専門家からすれば実に扱い易いカモなのだが、姿を現さず、集結中の司令塔を持たない集団を各個撃破して回るような遊撃隊スタイルの部隊が居るとなれば、ここでノンビリ構えている訳にも行かなくなる。

図書館制圧にサムズから派遣されてきた自警団を時折混ぜてはいるが、近衛騎士団、精鋭騎士団の名は伊達ではなく手強いうえに、ティルファ魔術団の援護がかなり厄介だった。

「仕方あるまい、サムズの自警団には街周辺を巡回させて独立派集団の集結を急がせろ。通路制圧には我々が出る、斥候が戻り次第臨時の指揮を取らせろ」

「ハッ」

傭兵団の団長はこの建物の制圧が遅れる事で作戦全体に影響が出る事を懸念し、若干の焦りもあって自分達で制圧に乗り出す事を決断した。

「次の攻撃で独立派の連中を一端突撃させて直ぐに下がらせろ、入れ替わり我々が突入する。退路を間違わせるなよ？　団子になったら魔術の餌食だからな」

クリューゲルの中心地でもある繁華街には夜の盛り場に普段の賑わいも無く、街中がひっそりと静まり返っていた。街の治安を担っていた派遣騎士団が昼間の襲撃騒ぎで壊滅状態にある為、危険を恐れて外を出歩く住人も居ない。それ以前に、大図書館周辺に集まる

武装集団が時折徒党を組んでは街中の武具屋や飲食店などを襲撃しているので、皆家に閉じ篭って息を潜めている。

「静かだな、同志達は上手くやってるようだ」

「既に街の制圧も終わっているようです、我々も武器を調達して早く本体に合流しましょう！」

「お、あの店なんてどうだ？　看板にキャリゴルの紋章がある。良い武器が手に入るかもしれんぞ」

彼等はサムズ決起の報を受けて集まったサムズ独立派集団であった。普段は個別にクリューゲルの郊外に潜み、時折情報収集と生活費稼ぎを兼ねた『石売り』をしに街へ出向くという生活を送っていた者達だ。十日程前に、近く『サムズによるフレグンス侵攻の前哨戦にクリューゲルの首都カースティアを攻略する』という大規模な軍事作戦が起こされると聞き、密かに仲間と連絡を取り合い、郊外に構えたアジトに潜んで居たのだ。

仲間の一人が早速その店に押し入ろうと武器代わりに持ってきた丸太で扉を叩き始めると、他の仲間も付近に落ちている石や木材を拾って来てはソレに加勢する。リーダー格の男は部下の働きを眺めるかのように腕を組んで扉が蹴破られるのを待っていた。

やがて扉が砕かれ、集団数人が店に押し入ると中から店の住人等の怒号や悲鳴が上がり始める。モノが倒れる音や陶器が割れる音が続き、命乞いの叫び等も聞こえてくる。そんな中、集団のメンバー二人が寝着姿の少女を店から引き摺り出して来た。店の奥からは主人らしき男の懇願する声が響く。

「いやぁ！　お父さんっ　お父さん助けてぇ！」

「頼む！　武器は持っていって構わない、娘は返してくれ！」

殴られたのか額から血を流しながら足に縋りつく店の主を邪魔そうに蹴り飛ばした男達は、泣き叫ぶ少女の髪を乱暴に掴み上げると頬を張って黙らせる。

「リーダー、コイツを本体への土産にしましょう」
「土産だぁ？　お前等が食いたいダケだろうが」
「相変わらず子供趣味な奴なんだなぁ」

店の主人の懇願を無視し、商品の剣や槍、斧などを両手一杯に担いだメンバーとリーダー格の男が笑い合う。他のメンバーは持ち出された武器を物色しては気に入ったモノを装備して武装を整えていく。

「あ、おいっ　ソレは俺が使おうと思った剣なのに」
「お前にキャリゴルは勿体ねぇよ、こういう武器は人を選ぶんだ」

「まぁな、てめぇみてぇな小悪党が扱える代物じゃねえわな」

そんな言葉を吐き付けられ、キャリゴルの銘入り剣を得意気に構えていた男は『なにを！』と振り返った瞬間、視点が回って地面に落ちた。何時の間に転んだのかと身体を起そうとしながら、男の意識は薄れていった。

「あ……あわぁ！　ガフッ……」

狙っていた剣を持っていかれて愚痴を垂れていた男は、仲間の身に起きた悲惨な出来事に恐怖の声を上げると同時に声ごと裂かれてその仲間の後を追った。

「隊長～エグイよぉ」
「文句言ってねぇでさっさと済ませるぞ」
「そろそろ図書館から手錬が来そうだしねぇ」

「な、何だお前等！」

いきなり仲間二人を葬られた集団のリーダー格の男が叫ぶ。屑った男は飄々とした様子で剣を払って血糊を飛ばすと、鼻で笑いながら答えた。

「何って、見りゃ分かるだろう？　おーこく派遣騎士団だよ。　俺は隊長のガリウス、短い間だがヨロシクな」

それを合図に派遣騎士団の鎧で身を固めたガリウスの部下二人が武装集団に飛び掛る。小柄な見掛けの割りに身長程もある大剣を全身で操る童顔の騎士が、慌てて剣を構えようとした男を文字通り薙倒し、槍の先に斧頭が付いた斧槍を振るう細目のぽっちゃりした温厚そうな騎士は、薙倒された男の隣に立つ男の頭を兜ごと叩き砕く。

「ひっ……おい！　その娘を人質に……」

リーダー格の男は顔を引き攣らせながら振り返り、店の少女を捕らえていた仲間に声を掛けるが――

「ん？　人質をとらせるつもりだったのか……それはすまなかったな」

面長で冷たい目をした長身の騎士が、息絶えた二人の男から血塗れの長剣を引き抜きながら言った。ほんの僅かな間に仲間全てを失って壊滅したこの集団のリーダーは錯乱したように雄叫びを上げる

と、集合場所に向かって走り出す。
が、そんな逃亡を彼等が許す筈も無く、斧槍で足首を払って転がした所を大剣で地面に縫い付けるように貫いてトドメを刺した。

「おいっ　なんだ今の声は！　こっちから聞こえたぞ！」

少し離れた街角に傭兵部隊の姿を確認したガリウスは舌打ちする。

「ちっ　傭兵共が出てきやがったか……おい、あんた等は早く家ん中入って戸締りしてな」

荒らされた店の前でへたり込んでいる少女と店の主人に声を掛けると、ガリウス小隊は傭兵達を巧みに挑発して誘導しながら路地裏に消えていった。

「よし、手筈通りに行くぞ」

部下達と作戦を確認し合った傭兵団の団長は、突入開始の合図を出した。騎士団の気を引き付ける為だけに組まれた武装集団の部隊が突撃を敢行し、魔術団と騎士団の迎撃を受けて即座に撤退を始める。
それに引き摺られるように反撃で前に出始める騎士達を止めるイーリスの指揮が飛ぶ。

「深追いするな！　固まって防衛に徹しろ！」

「！っ　団長、新手です！」
「あれは……傭兵団か！」

隊列を乱した隙を喰い破るように急襲して来た傭兵団に、イーリスは後方に控える騎士達にも参戦の援護を呼びかけた。
恐らくは相手の最大戦力が出て来たのだ。此方も相応の戦力で応戦せねば押し潰されると判断した。事実、彼等傭兵団の錬度は高く、戦闘力も武装集団や時折混じっていた傭兵などと比べて相当に手強かった。

連戦による疲労は身体だけに留まらず、彼の振るう槍にも蓄積されており、何度目かの剣戟を裁いて鋭い突きで傭兵の一人を吹き飛ばすと同時に、圧し折れてしまう。

「くっ　武器が限界か」
「団長！　自分のを使ってください！」

若い近衛騎士が自身の槍をイーリスに渡すと、予備の剣を抜いて応戦に戻る。受け取ったイーリスは槍が折れた事で突っ込んで来ていた傭兵二人の頭を素早く打ちつけ、反した石突きで吹き飛ばし、さらに翻して穂先の刃で切り裂く。雷鳴の如く凄まじい槍捌きに、然しもの傭兵達も怯みを見せる。

「流石は噂に名高いフレグンス近衛騎士団長の槍捌き、是非とも差しで手合わせ願いたい！」

傭兵団の団長は部下を三歩分下がらせると、オールグレンの長剣を構えてイーリスの前に立った。一騎打ちを申し込まれたならば受け無い訳には行かないのがフレグンスの騎士である。　イーリスの部下達も三歩下がって決闘の舞台を整える。

「イザ」
「参る」

先手のイーリスが鋭い突きから叩き下ろしに変化する薙ぎ払いを放つと、傭兵団長は合わせるように剣を振り下ろして軌道を逸らし、柄の上を剣の腹で滑らせて腕を狙う。イーリスはそれを一動作で槍の柄から弾き上げ、巻き込むように剣を絡め取ろうとするが、傭兵団長は身体ごと反転させて往なすと打ち込んで来た。

こういった戦闘中に背中を見せるような攻撃法は傭兵ならではのトリッキーな動きで、正統派の騎士にはやり辛い反面、正面から打ち合うように隙を潰していけば癖のある傭兵は手数が限られて来る。

疲労と使い慣れた本来の槍では無い事で実力を発揮しきれないイーリスと、生き残る剣を極めて来た傭兵団長の一騎打ちは拮抗していた。しかし、この拮抗こそが傭兵団長の狙いでもある。一騎打ちなど花形の騎士達同士でやっていれば良いという認識の傭兵団長には時間稼ぎと相手の注目を引き付けて置く別の狙いがあった。

そろそろ正面から打ち合うのもキツくなって来たかと傭兵団長が少しずつ後退を始めた時、それは起こった。

「今だ！　突撃しろ！」
「先に魔術士を狙え！」

崩して塞いでいた通路の瓦礫が撤去され、其方側の通路から武装集団の部隊が雪崩れ込んで来たのだ。それに合わせて一気に攻勢に出る傭兵団。イーリス達は背後からの急襲に浮き足立ち、魔術団の援護にも回れず突撃を仕掛けて来た傭兵団を抑えるのに精一杯だっ

た。どうにか反応した精鋭騎士団が魔術団の盾となって防いでいるが、如何せん数が違い過ぎる。

「このままでは……っ！」

「頃合だ！　アレを使え！」

傭兵団長とその部下の攻撃をギリギリで捌いていたイーリスが焦りを募らせる中、傭兵団長が新たな指示を出すと彼等の背後から新型ボウガンを構えた部隊が現れた。人の腕力ではボルトを番える事さえ出来ない程の強力な弦を張ったボウガン。一度発射するともう一度発射するまでに弦を引き絞るだけでかなりの時間を要してしまう代物だが、それだけに一発の破壊力は凄まじい。

ガスンッという機械音と共に発射された鋼鉄のボルトは、騎士達の鎧と中に着込んでいる帷子を易々と貫通して身体に突き刺さった。致命傷は避けられても鎧を通して突き刺さったボルトは、身体を動かすだけで鎧と身体のズレで肉を抉り、激痛をもたらす。

撃たれた騎士達は何れも動けなくなり、剣を構えて立っているだけで精一杯な状況に追い込まれた。

「騎士共の動きは封じたぞ！　全員で討ち取れ！」

「おおおおぉぉぉ」

「く……ここまでか……レスティア……」

肩と脇腹に二発のボルトを撃ち込まれたイーリスは、もはや槍を振るう事が出来ず、討ち取られるのを待つばかりの身となってしまいながら、仕事の忙しさを理由に婚約者候補として在りながらレティレスティアにあまり構ってやれなかった事を悔やむ。

通路の中央、会議室の前まで押し込まれた近衛騎士団、精鋭騎士

団、ティルファ魔術団が傭兵団と武装集団に飲み込まれようとしたその時、会議室の窓から何かが飛び込んで来た。

「わきゃあああああぁーーーーーー！」

ソレは凄まじい勢いで窓をぶち破ると同時に会議室の椅子や机を巻き込んで盛大に床を転がり、通路まで飛び出して壁に激突した所で止まった。通路の壁には大きく皹が入ってへこんでいる。

あまりに突然の出来事にその場の全員の動きが止まった。煙を噴出しているソレは積もった瓦礫をパラパラ落としながらムックリと起き上がる。黒髪に黒い瞳、薄い白色の衣を纏った小柄な少女がそこにいた。

「さ、サクヤ……殿？」

朔耶は周囲をキョロキョロと見渡してイーリスを認めるとパッを顔を綻ばせた。

「あ、イーリス無事だった？」

「いや、それは此方の台詞なような気がするのだが……」

面食らったイーリスは傷の痛みも忘れて呆然と突っ込みを入れる。しかし、あれ程の勢いで窓を突き破り床を転がって壁に激突したにも拘らず、朔耶には傷一つ付いていないばかりか衣服にも破れ跡一つ無い。

時速約１５０キロ近い速度で突っ込んで来た朔耶だったが、飛ぶ為に纏った強力な魔法障壁はあらゆる物理的衝撃から身を守る。壁に激突した衝撃は『あいたっ』で済む程度まで軽減されていた。

「うわっ　なんか刺さってるし！　大丈夫？」

騎士達は近衛騎士、精鋭騎士の何れもボウガンのボルトに射抜かれて身動き出来ず、満身創痍になっていた。ようやく硬直から立ち直った傭兵団が動き出して油断無く剣を構えると、武装集団も我に返って攻撃を再開しようとした。

半身を起してペタリと座り込んでいた朔耶はそれを察して勢い良く立ち上がり、身体から立ち昇る煙のようにふんわりしていた魔力のオーラを派手に噴出させる。

「とりあえず、あたし　参　上　！」

白と黒の光の翼が現れ、騎士団にも魔術団にも傭兵団にも武装集団にも動揺とどよめきが広がった。突然乱入して来た得体の知れない少女を警戒して武装集団は動くに動けない状態に陥ったが、傭兵団はどんな状況下でも攻め時を逃さない。

この少女の姿をした存在は確かに得体が知れず、人間離れした気配には畏怖にも似た脅威すら感じるが、今は当面の障害である騎士団を葬り去る事がこの建物を制圧する条件だと優先事項を遂行する。傭兵団長が攻撃命令を口にしようとしたその時――

「そして傭兵団と武装集団の皆さん」

朔耶が彼等に話し掛けた。武装集団も傭兵達も少女が何を語るのか気に掛かり、傭兵団長も思わず声を発し損ねて朔耶に注目してしまう。その一瞬の迷いや発令の遅れが致命的な結果に繋がる。

「オヤスミ」

カカァアアン！　カカカカカカカアアァアアアン！

眼も眩むような閃光と鳴り響く乾いた炸裂音は、通路に居た皆の目を眩ませて視界を奪った。やがて視界の戻った騎士団達が見たモノは、通路に倒れ伏す傭兵団と武装集団の一群。一体何が起きたのかと状況に混乱する彼等を優しい光が包み込む。

「ここに居る怪我をしてる人全員に治癒を――」

朔耶が放つ精霊の治癒の光は騎士団のみならず傭兵団や武装集団の傷まで無差別に癒し始める。

騎士達は鎧を通して突き刺さったボルトを抜き取る最中も抉られた傷が片端から癒され、痛みも退いて行く強烈な治癒力に眼を瞠り、魔術団はこの異常な治癒の力に膨大な量の魔力が使われている事を感じ取っていた。

「これでよしっ　下の階も片付けて来るから、ちょっと待っててね？」

そう言って光の翼を広げたまま階段をひょいひょい降りていく朔耶の姿を、騎士団の面々は呆けた表情のまま見送った。畏怖と驚愕を早々に通過して好奇心を刺激され捲った魔術団の面々は、一階の様子の見物に階段付近まで我先にと詰め掛ける。

どよめき、閃光、静寂。　それで終わった。　本当に『ちょっと』待たせるだけで戻って来た朔耶に、騎士達はどう接すれば良いのか分からず動揺を隠せない様子で迎えた。

「あ、あの……本当に、朔耶殿……なのか？」

「うん、あー……やっぱり怖い？」

「あ、イヤそのっ　我々は決してそんな！」

「あ～いいよいいよ、レティ達も最初は何か恐いモノ見る眼で見て

たもの」

然もありなん然もありなんと手をヒラヒラさせて笑う朔耶に、イーリスは急に恥ずかしくなって頭を下げた。

「申し訳ない。　騎士の身に在りながら命の恩人を恐れるなど……」

「だ～からいいってばぁ、しょうがないよコレばっかりは。あたし自身これは異常だと思うもん」

『みんな助かったんだから良かった良かったで良いじゃん』と軽く流す朔耶に、朔耶の事を知る他の近衛騎士も『ああ、やはりサクヤ様だ』と自分達の知っている朔耶がそこに居る事を実感した。

「ああ、それより大変な事。サムズから大部隊がこっちに向かってるの」

朔耶は大勢の気絶した捕虜を拘束する作業を手伝いながら、サムズの大部隊に付いて語るのだった。

42話：クルストスの夜明け【前】

街へ略奪に出ていた武装集団が戻ってくるなり電撃で昏倒させられ次々と拘束されて行く中、サムズの自警団を片付けたガリウス小隊が解放された図書館にやって来た。

「おいおい、どうなってんだこりゃ」
「まさか護衛の騎士団だけで制圧しちゃったの？」
「いや……ありえないだろ、それは」
「あれぇ？　隊長、あそこに居るのって……」

大勢の捕虜で埋め尽くされた図書館前広場を見渡しているガリウスに、部下のぽっちゃり騎士が指し示した先には近衛騎士団長と並んで見覚えのある小柄な少女が殺伐とした現場には場違いな格好で立っていた。

「おい、ありゃあ　サクヤじゃねえか」
「そのようだな……」
「わぁー可愛いなぁ！　女の子らしい格好のサクヤちゃんは初めてみたよ」
「やっぱりフランの好みだったんだねぇ」

とにかく現状の把握を優先させようという事で騎士達が集まっている一角へと足を運ぶガリウス小隊。彼等に気付いた朔耶が指を差しながら声を上げた。

「あーーーー！　女の敵！」
「いきなりソレかよ」

苦笑するガリウスをあからさまに警戒するようにイーリスの背中に隠れる朔耶。その様子を見て何かを悟ったのか、他の近衛騎士達が睨みを利かせる。ガリウスはそんな彼等を気にした様子もなく、軽薄な笑みを浮かべながら言った。

「そんなに邪険になるなよぉ、ベッドじゃあんなに素直だったじゃないか」
「んなっ！」
「いやーあそこまで激しい相手は俺も初めてだったけどな、暫らく足腰立たなかったし」

はっはっはっと笑って見せるガリウスに朔耶は顔を真っ赤にすると、唐突に魔力のオーラを纏って光の翼を広げた。これにはガリウス達も驚いて後退る。朔耶はつかつかとガリウスの前に歩み寄り――

「沈め！」

パカァアアン！

稲妻を纏った平手打ちの一撃でガリウスを叩き伏せると、ゲシゲシ踏み始める。

「あんたに！　襲われたせいで！　あの後！　どんだけ！　大変だったと！」

「あー……隊長踏まれてるよ」

「踏まれてるねぇ」
「踏まれてるな……」

そんな騒ぎの中、若い近衛の一人がショックを受けたような表情で朔耶に声を掛けた。

「さ、サクヤ様は　既にこの男に捧げられてしまったのですかー！」
「捧げて無いわよ！　ふざけんじゃないってのよ！　あたしはまだ処……」

叫び掛けてハッと我に返った朔耶は周り中から注目を浴びている事に気付いた。思わず両手で口を塞ぐ。

「い……」
「え？」
「イヤーーーーーーーーーッ！！」

恥ずかしさのあまり耳まで紅くした朔耶は突風を巻き起こして色々巻き込みながら二階へ『翔け』て行った。　それから暫らく。
ガリウスに関する事情を聞かされていたイーリスが近衛達に説明し終えた頃に、やっと気持ちを落ち着かせた朔耶が下りて来た。

「え～……、お騒がせしました……」
「あ、いや……不躾な事を聞いてスイマセンでした」

朔耶の恥じらいに吹き飛ばされた椅子やら机やら本やら捕虜やらを片付けている所にモジモジとやって来て謝る朔耶に、若い近衛も慌てて頭を下げた。

「つーかよぉ、ここまで戦闘でも無傷で来たのに負傷理由がサクヤ

の恥じらいってどうなんだ？」
「アンタは自業自得！」

一番至近距離から突風に吹き飛ばされたガリウスは彼方此方擦り傷だらけで、腕を何処かにぶつけたらしく　しきりに具合を気にしていた。患部が青くなって腫れている。流石に痛そうなので放っておけないと思った朔耶は適当に精霊の治癒を使った。

「このモノにてきとーな治癒を――」
「すげーヤル気のねぇ詠唱だな……」

ぞんざいな治癒にも拘らず癒しの光に包まれたガリウスは擦り傷も腕の腫れも癒え、此処へ来るまでの戦闘で蓄積した疲労まで回復していた。

「おぉっスゲェ！　疲れまで癒せるのか、これなら朝までタップリ遊んでも任務に支障はでねぇな！」
「……精霊の力で不能の呪いとか掛けられるかしら……」
「いやまて、俺が悪かったから早まるな　マジで」

黒いオーラを纏いつつ不穏な言葉を口にする朔耶からスザザッと距離を取って部下の背後に隠れるガリウス。弱点を見つけてニヤリと笑う朔耶の姿は、その小柄で華奢な肢体に艶やかな黒髪、あどけなさを残す顔立ちに黒い瞳という神秘的な容姿に露出の高い異邦の装い、何処か神懸かった雰囲気を醸し出す人間離れした魔力による気配とが相俟って、とても小悪魔的に見えたとか。

図書館の屋上からカースティアの街を見下ろす。街灯を設置している王都に比べると、夜の街並みは深夜の田舎町並に暗い。当然、元の世界のソレとは比べるべくも無い。細く欠けた月の微かな明かりに照らされながら南西の空を見上げた朔耶は、精霊の光に包まれ、次いで白と黒の翼を広げてふわりと宙に浮きあがった。

「もう行かれるのですか？」

「うん、アンバッスさん達も心配だしね」

見送りにイーリスと何故かガリウス隊も屋上に来ていた。ガリウスは真面目な騎士の顔で朔耶にアドバイスを与える。

「サムズに行くんならエバンスは素通りしてクルストスから回った方がいいぞ」

「なんで？」

「公式には発表されてないがな、エバンスの辺境騎士団がクルストスの方に脱出してるらしい」

「今エバンスに行っても多分、味方は殆ど居ないんじゃないかなぁ」

ガリウスの情報を部下の童顔騎士が補足する。ガリウス隊はここ数日で集めた情報を元に、集結しようとしていた武装集団を遊撃しながら彼等からも情報を聞き出してサムズ国内の動きを或る程度は掴んでいた。

エバンスにある神殿の水鏡による王都への定期報告を誤魔化す為、サムズは早い段階で神殿と辺境騎士団本部の制圧に乗り出しており、その際の戦闘で辺境騎士団はエバンスから撤退してクルストスに脱

出したという。クリューゲル方面には侵攻する傭兵団が展開していたので、街道を第二中継地前まで進んで川を渡り、対岸を通ってエバンスを迂回しながらクルストスに向かったらしい。
　イーリスはエバンスからの定期報告に感じていた違和感の理由が分かって得心したように呟いた。

「そうか……前回の定期報告の時にエバンスからの報告で妙に違和感があったのは、そういう事か」
「まあ、本来ならこっちの戦力を分断されたって所だがな、俺達にもサムズにも予想外の事態になっちまった今なら返って好都合だ」

　ガリウスは朔耶という規格外の要素が加わった事でサムズの目論みはクリューゲル侵攻までで頓挫したと言い切る。

「お前ぇはクルストスからあの強面のおっさん騎士連中とエバンスを突付いてやれよ、傭兵団はフレグンスの本隊がカースティアで迎撃するだろうしな」
「僕達は別働隊でエバンスを直接叩く事になると思うよ」

　情報ではエバンスを防衛する傭兵団は一個連隊と後は自警団だけなので、上手く挟撃出来れば落とすのは容易いと話す。

「ガリウスってさ……」
「あん？」
「実はエリートなの？」

　不良騎士のイメージが強かった分、情報収集力や分析力、他の隊を出し抜く行動力と実力、理路整然とした戦略を伝える堂々とした様、朔耶は彼等に意外な一面を見た思いだ。

「惚れたか？」
「ばーか」
「僕は？　僕は？」

『ふふん』と相変わらずの軽薄な笑みを浮かべて軽口を叩くガリウスと、積極的にアピールしようとする童顔の騎士ことフランに朔耶は軽く笑みを返した。光の翼が振るえて風が巻き起こる。

「それじゃね」

白と黒の軌跡を描いて南西の空へと飛び去る朔耶。それを見送ったイーリス達は表情を引き締めて建物内に戻った。まだ街中に潜む武装集団の残党を駆逐し、サムズからの大部隊に備えなくてはならない。壊滅した派遣騎士団の建て直しも急務だ。

「さーて、俺等は一度本部の様子を見て来るぜ」
「分かった。　人が必要ならば何人かつけるが？」
「いや、抜け道から行くからな　俺等だけの方が動き易い」

街の巡回と敵勢力の残党駆逐はガリウス達が派遣騎士団の建て直しを図りながら行い、治安の維持をイーリス達近衛が引き受ける。本来ならば来賓扱いである精鋭騎士団やティルファ魔術団も暫定的に協力を申し出てくれている。僅かな間とはいえ、共闘によって死線を掻い潜った事による仲間意識と結束が生まれていた。

「今何時頃かな……お兄ちゃん、ちゃんと説明してくれると良いんだけど」

真っ暗な地上を見下ろしながら精霊の突風に運ばれて飛ぶ朔耶は家族の事を考えていた。三ヶ月近くもの行方不明から帰った矢先にまた居なくなったとなれば家族の心配も一入だろう。

「あんまり心配を掛けないようにしなきゃね」

その辺りの事情も朔耶が急ぐ理由に含まれていた。出来るだけ早く近しい人達の無事を確かめ、問題を解決し、危険を排除する。今回は何日も此方にいる訳には行かないので二日か三日、学校が始まるまでには安心して還れる状況を作りたいと考えていた。

「何時でも直ぐにこっちに来られるんならいいけど……その辺りどうなのよ」

朔耶は飛びながら自分の中の精霊に訊いて見る。返事は期待してなかったのだが、精霊の声が心に感じるように頭に響いた。

チノメイヤク　カノチノイチゾク　マモル　イツモイッショ

「……それって、レティ達とフレグンスの事よね……前にアルサレナさんが言ってた」

初めてレティレスティアと交感を繋いだ時、アルサレナが朔耶に伝えた口上にもあった『この地の精霊と契約せし血の一族の者』。朔耶は自分と重なる精霊はフレグンスの地とその王族を護る精霊

なのだろうかと考える。精霊自ら動いてレティレスティアを助けたがったのも、精霊術に精通する王族の血と才を強く受け継いだレティレスティアを常に見守っていたのかもしれない。

何れレティレスティアの交感の力が深まり、アルサレナを超えるに至った暁には、この精霊とも交感で触れ合えるようになるのだろう。精霊にしてみれば、朔耶と重なる事は朔耶を通してレティレスティアと触れ合える上に、朔耶自身が精霊の力を使ってフレグンスやその王族を護ろうと動いてくれるので、朔耶の中は非常に居心地が良いようだ。

「う～ん、でも何かそれって……レティがあたしに懐いたのは、あたしじゃなくあたしの中の精霊に惹かれたせいっぽくて、ちょっと複雑」

アノコ　サクヤ　スキ

朔耶の心に精霊の気遣うような心が伝わって来る。感情の起伏が薄くとも、それ故に正確に対象の気持ちを観察して見通す事の出来る精霊のお墨付きを貰い、朔耶は少し罪悪感にも似た羞恥を覚えつつも安心する。

「ふふっ　ありがと。どの『スキ』なのかがちょっと気に掛かるけど」

トモダチノ　スキ

「うん、それなら問題ないよね」

コイビトノ　スキ　ヒトツニ　ナリタイノ　スキ　シマイノ　スキ　タクサンノ　スキ

思わずぐらリと飛行姿勢が崩れる朔耶。今夜の精霊はやけに饒舌だが、色々と問題のある発言をしてくれた。

「最後の好きはまだ良いんだけど、その間のはちょっと問題あるんじゃないの？」

ヒトハ　ミンナ　ソウ　　シンライノ　キモチ　スベテヲ　アズケル　　トリヒキノ　キモチ　クレルカラ　アゲル

「……」

スキノ　キモチ　スベテヲ　ササゲル

「……そっか、なるほどね。　精霊の視点だと凄く大まかに深い観方をするんだね」

取り合えず、三角関係になる危険は避けられたと安堵する朔耶だった。

「外の様子はどうだ？」

「今の所、特に変わりありませんね」

バリケードで固められた辺境騎士団クルストス支部の見張り台から周囲の様子を窺うクィスと彼に声を掛ける騎士ヴィンス。列強四国による和平会談が行われた日にサムズ自警団の分隊とこの辺りの傭兵を集めた武装集団に急襲を受けたクルストス支部は、事前に不穏な空気を感じ取っていたアンバッス中隊長の進言によって篭城と迎撃準備がなされていた為、迅速な対応で巡回中の騎士達を収容すると支部にバリケードを築き、要塞化して立て篭もった。

同日、会談の数日前に急襲を受けてエバンスから脱出して来た辺

境騎士団本隊がクルストスに現れた事もサムズ側の作戦に予想外の障害となった。

クルストス支部は通常三個小隊に二個中隊、一個大隊で構成された連隊クラスだが常時人手不足で八十人前後の騎士が詰めて居た。今はエバンス本部からの騎士も含めて４００人余り一個師団程の人数に膨れ上がっていた。が、実際に戦闘を行えるのはその半数程度である。

「サムズ自警団の分隊と傭兵はそこそこ手強いが、他は騒ぎに乗じたチンピラ程度で統率もあまり取れてない。　こっちもこの狭い支部に篭城するには人数が多過ぎるからな、夜明け前にでも打って出るか。良い案はあるか？」

辺境騎士団の団長クレイギンスは、この場で最も信頼のおける騎士と判断したアンバッス中隊長に意見を求めた。アンバッスは先の王女の客人護衛の功で中隊長に昇格したが、実力と経歴から言えば団長を任されていてもおかしくない戦乱時代を生き抜いた古参の騎士である。

実力はあるのに出世しない者は大抵、立ち回り下手で上への受けが悪いか、出世欲が無くコネも作ろうとしないか、実力を嫉妬されて故意に昇進に繋がる任務を与えられないか等の理由があるが、それら何れにも該当するアンバッスは信頼できる部下としては一番の存在だ。

平時にはその寡黙さが堅苦しさとなって適当に息を抜きたい昼行灯な御貴族騎士達に疎まれ易いが、非常時には途轍もなく頼りになるのである。

「そうですな……全軍を三隊に分け、一隊を支部の防衛に。二隊の内片方を斥候として敵の位置を確認し、適当に交戦しつつ燻り出し

て残りの一隊で背後か無理なら側面からでも挟撃に持ち込めれば行けるでしょう」

「ふむ、敵が分散していた場合は？」

「敵の兵力で問題なのはサムズ自警団の分隊とソレに加わった傭兵だけです。他は雑兵以下なので攻撃部隊が出ている隙に支部を襲撃してくれれば、防衛の隊で片付くでしょう。途中で遭遇したならその都度掃除していけば索敵と駆逐の手間も省けます。サムズ自警団の分隊と傭兵は元々クルストス支部の戦力を目安に集められた大隊規模に現地の傭兵が加わって精々百前後ですから、一隊の数が多少劣勢でも士気と錬度では此方が勝っているので問題ないでしょう」

万が一敵本隊が全軍で支部を襲った時の為に、一隊がまず斥候として出るのだと説明してアンバッスは自分の作戦を語り終えた。

「良いだろう、その作戦で行こう　斥候部隊の指揮は君が取りたまえ」

「ハッ」

直ちに隊が編成されると、アンバッスの率いる斥候部隊約六十人が静まり返った夜明け前のクルストスの街に出撃する。攻撃部隊の第二隊七十人はアンバッスの前上司であったクルストス支部の中隊長が務め、支部の防衛は辺境騎士団長が取り仕切る。迅速な行動が求められる為、攻撃部隊にはクルストスの地理に詳しい者が選ばれたのだ。

「さて……素直に討たれてくりゃあ楽なんだがな」

武張った強面の顔を顰めながら出撃の合図を出したアンバッスは、敵勢力の集まっていそうな宿場通りを目指した。

「クィス、お茶が入ったわよ」
「ああ、こんな時にまで済まないな」

ヴィンスはアンバッスと共に斥候部隊として出撃した為、見張り台のあるこの塔部屋にはクィス青年と他、非戦闘員の給仕や運び込まれた怪我人の一部が床に敷かれた毛布の上で休んでいた。

「みんな大丈夫かな……」
「大丈夫だよ、朝か昼頃にはきっと全部終わってるさ」

実際、支部に詰め込まれた人数が多過ぎて後一日もすれば食料などが尽きてしまう為、今日明日中には決着を付ける必要があった。篭城は支部に詰める人数が少ない事を逆手に取った手段だったので、状況が変わった今はあまり良い策とは言えない。

「あれ……？　攻撃部隊が出撃していったぞ？」
「アンバッスさん達の部隊が出たばかりなのに？」

攻撃部隊は斥候部隊が向かった宿場通りではなく、露店通りの方角へ進み、やがて路地の影に消えていった。何処かで敵を挟み撃ちにするのかもと、デイジーに淹れて貰ったお茶を啜りながら街の様子を監視していたクィスは攻撃部隊の消えた路地から飛び出してくる人影に気付き、目を凝らす。

「！っ」
「どうしたの？　クィス」

見張り台の椅子から身を乗り出すようして立ち上がったクィスに、不安気な表情を向けるデイジー。クィスは暫らく外の様子を食い入るように見詰めると、慌てて台から飛び降りる。

「きゃっ！」
「デイジー、ここから動くんじゃないぞ」

クィスは切羽詰った様子で言うと、横たわっている怪我人を飛び越えながら塔部屋から駆け出して行った。　クィスは見張り台から騎士が騎士に倒される所を目撃した。最初に飛び出してきた人影の他にも十数人近い騎士が、同じ鎧を纏った騎士とサムズの自警団、それに傭兵達の攻撃に次々と討ち取られて行く様を見て、攻撃部隊の半数近くが寝返った事を悟った。
クルストスの辺境騎士にはサムズ出身者が多い。サムズの侵攻に同調した者が居たとしてもおかしくは無いのだ。

クィスから一部騎士達の裏切りによる攻撃部隊壊滅と敵襲の報を受けた辺境騎士団長が防衛と迎撃準備に慌しく動く中、斥候部隊のアンバッスも同じ問題に直面して部下と剣を向け合っていた。

「ヴィンス……やめておけ、サムズの反乱は成功しない」
「隊長！　アンタだってサムズの人間なら分かる筈だ！　今のフレグンスなら傭兵団の大部隊で叩き潰せる」

「潰してどうする？　サムズにフレグンス程の国力は無い、フレグンスの援助がある今ですら辺境じゃ無法地帯が多い有り様だぞ？　誰が治安を護り、住人の生活を守るんだ？　あの村の若者とも折角良い関係になれたのに、自らそれを踏み躙るのか？」

「そういう問題じゃない！　サムズがフレグンスに代わって列強国になるんだ、そうすれば住人の生活だって今よりずっと良くなる！」

諭すように語るアンバッスに、ヴィンスは耳を貸す事無く意見を対立させた。彼と同じくサムズ出身者の騎士が何人かヴィンスと肩を並べ、アンバッスと並ぶ同僚の騎士達と剣を向け合っている。主義主張を違えて対峙する双方の騎士には其々迷いの瞳を持つ者が見受けられた。

「理想を語るのは良いし追うのも構わん、だがまず現実を見てからにしろ」

「見てるさ！　このサムズの貧しい現実を変える為にもフレグンスの支配から脱しなきゃならないんじゃないか！」

アンバッスは首を振る。

「分かってないな、ヴィンス。　サムズが貧しいのはフレグンスが支配してるからじゃあ無い、寧ろ逆だ。　今までサムズの人間はサムズの発展の為に働いた事が無かっただろう」

サムズは多数の民族が入り乱れる地域で、戦と略奪、民族による民族支配で辛うじて国という体裁を成り立たせていた国だった。支配する民族でも裕福なのはさらにその支配者階級の一部の者だけであり、多くの民衆は常に貧しく飢えていた。フレグンスに抑えらている政治形態だからこそ支配者絶対主義だった環境が改善され、全ての住人が人並みの生活を送れるようになっている。

「水道橋建設はサムズが初めて国と住人の為に始めた事業と言ってもいい、これの為にキトやティルファからも人が入って来ている。このまま順調に街を発展させれば、サムズは間違いなく豊かになる。フレグンスの衛星国家だろうとサムズはサムズとして成り立つ事が出来るんだ、それをムザムザ棒に振る事は無い」

「……もういい、アンタは王都でフレグンスに魂を売っちまったんだ」

「ヴィンス……」

もう話す事は無いと体勢を低く構え、剣を正眼に構えるヴィンス。戦乱の時代を生き抜いて来たアンバッスが戦場で身に付けた独自の構えで、アンバッスの指導を受けたクルストス支部の騎士は皆この構えを身につけている。そして――

「お前達もか……」

アンバッスと並んでいた騎士達が身を離すと一斉に剣を向ける。前後左右から鈍く光る剣がアンバッスの首元に当てられていた。斥候部隊六十人のうち二十八人が辺境騎士団に反旗を翻し、部隊長であるアンバッスに剣を向けた。残りの騎士達はこの事態に戸惑い、動揺し、隊長を人質に取られた事で身動きが取れなくなってしまった。

「俺を殺すか？」

「……いいや、このまま暫らく待てば支部は制圧される。アンタにはフレグンスを滅ぼした後でサムズの繁栄と栄光を見て貰う」

「どっちも無理だと思うがな」

ふん……と鼻をならすアンバッス。　ヴィンスは苛立つように一

瞥すると他の騎士達の武装解除を指示した。

「まぁ、自分の理想に命を懸けるのも悪くはない、か……」

アンバッスはそう呟いて肩の力を抜くと、一瞬の間を置いてストンッと身体を落とす。首に当てられていた剣の刃で顎や耳が多少削られるが、戦闘を行う分には問題無い。中腰の状態から腕を開くようにして左右の騎士の腹部を強打し、斜め前後の騎士の腕を掴んで引き寄せながら身体を反転させて其々対面に立つ相手にぶつけ合う。

殆ど密着状態な程接近していた為、剣を当てていた騎士達は仲間が壁になって咄嗟に剣を振るう事が出来なかった。包囲を突破したアンバッスはそのまま一人の騎士を斬り付けて剣をもぎ取り、二本の剣を振るって瞬く間に四人の騎士を斬り倒した。

「！っ」

「お前達にはまだ見せていなかったがな……良い機会だ、俺がどうやって戦乱の時代を生き抜いたのか見せてやろう」

アンバッス独自の低い構えに二本の長剣。それは一見すると傭兵スタイルの奇抜な構えにも見えるが、正統派スタイルをみっちり叩き込まれた上で乱戦の中を生き抜く為に編み出された戦場の剣だった。

「心して掛かる事だ……」

「くっ　隊長相手に一人で勝てるとは思わないさ！　同時に掛かれ！」

正面から二人が対峙し、左右に別の二人が周り込もうとした所を反復横跳びのように移動したアンバッスは片方の剣で相手の足首を突いて止め、もう片方の剣で喉を狙う。慌ててそれを払おうと剣を

合わせた所に、足首を突いた剣が跳ね上がって鎧の胸当てを掠め、反撃も回避も許さずに一突きにする。

そこに横合いから斬り掛かって来た剣を後ろに跳んで躱しながら相手の膝の裏を突き、体勢を崩して無防備になった首に一閃。崩れ落ちる身体を正面から来る相手に向かって蹴り飛ばす。思わず避けようとした相手に蹴り飛ばした身体を踏み台にして突撃し、片方の剣で初撃を誘うように合わせてすかさずもう片方の剣で押し込むように一突き。傾いだ身体が倒れる前に鎧を掴むと、彼と並んで斬り掛かろうとしていた相手に向かって浴びせ倒し、怯んだ所をまた一突きにした。剣を剣として槍のように使う、余程腕力が無ければ効果を発揮し得ない剣術だ。

「ニーケス」

「は、はいっ」

「部下を連れて支部の防衛に向かえ」

「え……、た、隊長は？」

普段のノッソリとしたイメージのあるアンバッスが振るうあまりに凄まじい剣技に双方の騎士が言葉を失い、硬直している隙に指示を出す。アンバッスはサムズ側に寝返らなかったこの場の騎士達を今向かわせれば、支部に襲撃を仕掛けているであろうサムズ自警団の背後を突けると計算する。ヴィンスの様子から攻撃部隊にも寝返りが出ている事は予想出来るが、壊滅にまでは至っていないだろうと考えていた。

「俺はこいつ等に最後の指導をしなきゃならん、急げ」

部隊を任されたニーケスは何とも形容し難い気持ちを籠めた敬礼をすると、三十人の騎士達を連れて支部へと引き返して行った。寝返った残りの騎士達二十人はアンバッスの威嚇に彼等の後を追う事

が出来ず、袂を分かった元同僚の背中を見送った。

「……アンタ一人でコレだけの人数を相手にするつもりか」

「高々二十人だろう、しかもヒヨッコ共ばかりと来たもんだ」

軽い調子で挑発するアンバッスに、ヴィンスを始めサムズ側に付いた騎士達は眼の色を変えた。既に八人倒されているのだ、目の前にいる歴戦の騎士は敵だ、倒さねば自分達に勝利は無い。彼等は今此処に至って辺境騎士団、延いてはフレグンスと完全に敵対する決意を固めた。

「あくまでも立ちはだかると言うなら、此処で果てて貰う」

「御託は良いから、さっさと来い　何時まで経っても口ばかり達者な奴だな」

欠伸をする仕草で手をヒラヒラさせるアンバッスの挑発に、遂に堪えきれなくなったヴィンスの顔が見る見る赤く染まっていく行く。

「アンバーーーッス！」

「〝隊長〟を付けろよ、ヒヨッコ野郎」

忽ち（たちま）の内にアンバッスを包囲した二十人の騎士が一斉に斬り掛かった。

クルストスの街より東に約八十キロ地点の上空を飛行する朔耶は、

突如背中に走った不吉な予感に身を震わせた。急に動悸が激しくなり、焦燥感に駆られる。

「今のなんだろう……」

遠くの地上に見つけた微かな街明かりを目指し、朔耶は嫌な予感を振り切るように突風を全開にして速度を上げていった。

43話：クルストスの夜明け【後】

戦場では何が起こるか分からない。アンバッスは師匠からもよくそう聞かされていた。そして自身も戦場に身を置き、血と屍で肥やされる大地を駆け抜けた中で何度もそれを実感する事態に遭遇した経験があった。

僅かな手勢で大部隊に壊滅的な打撃を与えた事や、思わぬ災害で両軍が被害を受け、その一時だけは敵味方入り乱れて災害に抗ったり。たった一本の流れ矢が戦況を変えた事もあった。

『歩く要塞』と謳われたフレグンスの現王妃アルサレナが敗色濃厚な戦場に現れ、供の魔術士による大規模魔術の連発で勝敗を引っくり返してしまった時などは彼女の姿が戦姫に見えたものだった。

「確か、『フラグ　ブレイカー』……だったな。　俺はお前の言う『死亡フラグ』というやつを圧し折れなかったのか？」

裂傷と刺傷、打撲、骨折している箇所も幾つかあり、後一撃繰り出せるかどうかという満身創痍。折れた剣を両手に自らの血溜まりの上に立ち、鎧は既にその役目を果たしていない。残り十四人、如何に退けようかと重くなって来た瞼と身体を鼓舞するアンバッスの見上げた闇空に、光の天使が舞っていた。

「なあ？　サクヤ……」

グラリと傾いだアンバッスの身体がゆっくりと倒れて行く。　今がトドメの時とばかりに群がる騎士達の無数の剣が、アンバッスの身体を貫いた。

「やった……倒したぞ！　俺達はサムズの騎士としてフレグンスを打倒するんだ！」

「「「おおおーーー！！！」」」

生き残った騎士達が剣を掲げて勝ち鬨を上げる。その内の一人が空から近付いて来る光に気が付き、警戒を呼びかけた。事前情報にあったサムズの竜籠かと空を見上げた騎士達は初め、怪訝な表情を浮かべていたが、次第に驚愕と動揺の表情に変わった。

彼等の見上げる先には、光の翼を広げた少女が空を飛んで来るという現実離れした光景があった。

「なんだ、あれは……」

「アンバッスさーーん！！」

街の一角で戦闘を行っている騎士達を見つけた朔耶は、彼等の鎧が見覚えのある辺境騎士団のモノだったので味方発見とばかりにそこを目指した。が、近付くにつれて様子がおかしい事に気付く。戦っている騎士も倒れている騎士も、同じ辺境騎士団の騎士だった。そして若い騎士達と一人剣を打ち合わせている血塗れの騎士がアンバッスだと分かった瞬間、彼は無数の剣に貫かれて倒れた。

朔耶は周りを取り囲む騎士達には目もくれず、血溜まりの中に沈むアンバッスの傍に降り立つと、癒しの光を注ぎ込むようにアンバ

ッスの身体に手を当てる。しかし光はアンバッスの身体を包み込む事無くすり抜けて行く。

「うそ……なんで……やだ、こんなの……アンバッスさん、生きてるよね……？」

生命活動を停止した状態の人間に精霊の癒しは余り効果が無い。癒しの力を取りこみ、それを循環させる事が出来ないからだ。

朔耶の放つ癒しの光は通常の治癒魔術や精霊術の癒しの加護に比べれば強力で、アンバッスの傷ついた身体も徐々にではあるが傷口が塞がり始めていた。それでも、死者を蘇えらせるような力は無い。

アンバッスはもう死んでいるのだ。

『なんで……どうしたらいいの……どうしたら……』

半分恐慌状態に陥った朔耶は混乱しそうな思考を必死で繋ぎ止めながら考える。アンバッスの身体はまだ温かい。ただ、生きている事を示す呼吸が無く、心臓の鼓動を感じられなかった。

『呼吸……心臓、そうだ！』

朔耶はボロボロになったアンバッスの鎧を剥がすと、そこに見える無数の刺傷に癒しの光を送り込み続けて身体を修復しつつ、顎を持ち上げて気道を確保。アンバッスの鼻を押さえながら息を吹き込み、厚い胸板に手を添えて心臓マッサージを行う。電撃は程度が分からないので自分の習った知識の通りに人口呼吸を施した。

「一体、何をしているのだ……？　あれは」

ヴィンスを始めとする離反した騎士達は、突然空から舞い降りた黒と白の光の翼を持つ少女に畏怖と警戒の念を懐いていた。
少女は最初、アンバッスの死体に縋るように光を放っていたが、やがて身を起すと死体の鎧を剥ぎ、その胸元に光を押し込むようにしながら接吻を繰り返す。何か儀式めいた事を始めた少女に訝しむ眼差しを向けながら遠巻きに見詰める騎士達。

「お願い、アンバッスさん……息をして」

何度目かの息を吹き込み、心臓マッサージを行いながら癒しの光を送り込むと、光がアンバッスの身体を包み込んだ。途端、咳き込むように息を吹き返すアンバッス。周りの騎士達から一斉に動揺のざわめきが起こったが、朔耶の耳には入らなかった。

「アンバッスさん！」
「……サクヤ？　なんだ……　てっきりお迎えの天使が来たのかと思ったのだが……」
「よかった……アンバッスさん……死んじゃったかと……」
「ふん……俺はフラグブレイカーだからな、簡単にはくたばらんよ」

涙ぐむ朔耶の頭を撫でながら見掛けによらずロマンチストな事を言うアンバッスに、朔耶はようやく安堵の気持ちを抱くことが出来た。　アンバッスは朔耶から放たれる光で身体に力が漲って来る事を感じながら、唇に残るやけにしっとりとした柔らかい感触に『はて？』と首を傾げていた。

「お、おいっ　どういう事だこれは！」

「一体、何が起きたんだ……」
「死者が蘇えるなんて……、フレグンスには神が味方についているのか？」
「俺達の選択は本当に正しかったのか……？」

確かに死んでいた筈のアンバッスが立ち上がった事で騎士達は取り乱し、アンバッスに命を吹き込んで蘇えらせた光の翼を持つ朔耶を神の使いかと恐れ戦いた。そんな中、朔耶の容姿に気付いたヴィンスが動揺を振り払うかの様に叫ぶ。

「うろたえるな！　よく見ろ、あれはサクヤ殿だ！　強力な魔術士だと聞いた、今のは彼女の使う異国の治癒魔術に違いない」
「し、しかし……死者を蘇えらせる魔術なんて聞いた事もないぞ、魔族にだってそんな術は……」
「きっとまだ息があったんだ……知っているだろう、彼女の作る発明品の数々を。我々の知らない様々な知識を持っているサクヤ殿の事だ、さっきの儀式も特殊な治癒魔術かもしれん。或いは何か特別な薬を飲ませていたのだろう、瀕死の人間すら癒せる薬を持っていてもおかしくない」

ヴィンスにそう説明されると、動揺していた騎士達は『成る程』という表情になって幾分落ち着きを取り戻した。あの光の翼で空を飛んで来たのも、そういう類の発明魔術品なのかもしれないと考えて納得する。
尤もそれは魔術に対する知識が少ない彼等だからこそ、納得出来た内容であった。　ともあれ、混乱から立ち直った騎士達は改めて剣を構えると、アンバッスと朔耶を取り囲む。

「ねえ、これどうなってんの……？」
「うむ……まあ平たく言えば身内の反乱だな」

朔耶は周りを囲む騎士達と、地面に倒れて既に事切れている騎士達を見渡して顔を曇らせる。戦闘が行われた場所で死体を見るのは初めてでは無かったが、ここまで生々しい現場は帝都の城で先代皇帝を討った時以来だ。カースティアの図書館では遺体を運ぶ手伝いも経験した朔耶だが、配慮されていたのか余り酷い状態の遺体を見る事は無かった。

『これ……アンバッスさんがやったんだよね……』

ちらりと、朔耶はアンバッスを見上げてみる。新たに傷跡も増えた強面の武張った顔を厳しく引き締めて鋭い眼光で騎士達を睨みつけ、両の手に倒れた騎士から奪った二本の剣を持ち、闘気とも形容出来る空気を纏っている。

「……うん、やっぱりアンバッスさんは怖くない」

「ん？」

「ごめんね、アンバッスさん……あたしがもっと早く来てれば、何とか出来たかもしれなかったのに」

朔耶をどうやって安全な場所に逃がそうかと考えていたアンバッスは不意にそんな言葉を掛けられ、意味を問い掛けようとしたその瞬間――

カカカカァアアアン！

「なっ！」

閃光と共に乾いた音が鳴り響き、二人を取り囲んでいた騎士達が一斉に崩れ落ちた。思わず目を瞠ったアンバッスが傍らの朔耶を振

り返る。

「死んで無いよ、気絶させただけ」
「サクヤ、お前……」

小隊長時代にはよくレイスと組んで任務の遂行に赴いていたアンバッスだけに、魔術の事にあまり詳しく無くとも今の現象がどれだけ出鱈目なモノかは理解出来た。

「……お前は本当に、つくづく変わった奴だな」
「むぅ、その言い方は何か酷いっ」

膨れてジト目を向けて来る朔耶を宥めながら、アンバッスはこのままヴィンス達を放置して行くか拘束だけでもしておくか迷った。トドメを刺して行く事は何と無く選択肢から外す。彼等を倒した朔耶がそれを望んでない気がしたからだ。

ちぇいちぇいとパンチを繰り出してくる朔耶を適当にあやしつつ『どうしたものか』と考え込むのも束の間。遠くで火の手が上がるのが見えた。街影の向こうにボンヤリと広がる灯りが、夜明け前の闇空に立ち昇る黒煙を照らし出す。

「あれって……」
「不味い！　アレは支部の方角だ」

アンバッスが手短に支部の現状を伝えると、朔耶は顔色を変えて光の翼を広げた。そのまま空中に浮かび上がり、倒れている騎士達に一瞥を向けてからアンバッスに声を掛ける。

「あたし、先に行くね」
「分かった、気を付けろよ？　恐らく向こうでも離反が起きている

筈だ」

頷いて空へ舞い上がった朔耶は光の軌跡を残しながら辺境騎士団支部に向かって飛んだ。

「非戦闘員の怪我人は宿舎に避難させろ！　動ける者は消火作業に回せ！」

「第二通路のバリケード、突破されました！」

「西地下通路から敵侵入！」

「第二通路は中程まで後退！　新たなバリケード構築まで死守！　西地下通路は土嚢で埋めて石でも積んでおけ！」

支部の中では次々ともたらされる報告に辺境騎士団長のクレイギンスが必死に対応をこなしている。まさか迎撃に出した斥候部隊と攻撃部隊の半数近くが離反してサムズに寝返るなど予想外にも甚だしい事態に困惑する暇も無く、生き残る為に死力を尽くしていた。

敵側に付いた元辺境騎士にはこの支部に勤めていた者が多く、抜け道や隠し通路を使っての襲撃に対応するだけで精一杯の状態が続いている。

「支部に残った騎士に寝返りが出なかったのが、せめてもの救いか……」

攻撃部隊が壊滅し、寝返った騎士と共にサムズ自警団と傭兵達が襲撃して来た時は敵の勢いに押し込まれそうになったが、斥候部隊

から三十人の騎士が駆けつけて敵の背後を急襲してくれたお蔭でどうにか持ち堪える事が出来ていた。

「スンマセン！　魔力石お願いします！」

第一通路の防衛を任されていた若い騎士が駆け込んで来る。彼の持つキャリゴルの盾は魔法障壁と同等の効果を生み出すサクヤ式と呼ばれる改造が施されており、敵の攻撃の殆どを彼一人が防ぐ事で仲間の援護を得て敵の侵入を妨げていた。防衛の要である彼が抜けると侵入を食い止めるのは厳しくなる。

給仕の少女が予め用意しておいた手頃な大きさの魔力石を持って来る間、若い騎士は盾の裏蓋を開いて中の木箱を取り出し、魔力が空になった魔力石を捨てる。そして新たに受け取った魔力石を木箱に詰めて盾に組み込むと、表面に魔力の膜が張られた事を確かめながら直ぐに防衛へと戻って行った。

「東館外壁崩壊！　侵入者多数！」
「東館は破棄！　出入り口を封鎖しろ！」

引っ切り無しに報告の伝令と怪我人が出入りする中、クレイギンスは現状に有効な打開策を見出せず焦りを募らせる。

『このままではジリ貧だな……』

援軍はまず期待出来ない処かエバンスとクルストスの状況がフレグンス本国に伝わっているかも怪しい上に脱出の目処も立たない以上、現在の戦力で今の事態に対処する外無い。しかし大勢の寝返りによってかなりの損害が出た事で士気も大幅に下がり、ほぼ無傷のサムズ自警団と傭兵に加えて離反した騎士とも対峙を重ねて行く内

に騎士団の戦力は相手よりも早いペースで確実に削られて行く。八方塞がりの窮状だった。

『なんとか非戦闘員だけでも脱出させる手立てを考えるか……？』

まだ統率の取れた騎士団として機能している内に、と決断を下そうとしたその時、伝令からの奇妙な報告が飛び込んで来た。

「正門、敵味方共に戦闘不能！　いや……戦闘は続行可能、但し効果を得られず！」

「第二通路、状況同じく戦闘の効果無し！」

「？　なんだその報告は！　意味が分からん、ちゃんと説明しろ！」

「それが、その……」

報告をもたらした伝令達も困惑した様子で今、戦闘現場に起きている不可思議な現象を説明した。

少し前――　アンバッスと別れてクルストス支部の上空までやって来た朔耶は、地上の乱戦ぶりに手を出しあぐねていた。意識の糸を絡めての電撃攻撃は敵味方がハッキリと分かれていれば効果的に狙って使えるが、対象がここまで入り乱れてオマケに寝返った騎士まで居るとなると、それを選別しながらというのはかなり難しい。

「ん～～……自警団と傭兵っぽい人だけ片っ端からってやっても……」

この状況で個別に気絶させてもその直後、敵対する相手に斬られ

るか、敵味方に踏み潰されるかして死んでしまう可能性が高く感じられて、朔耶は中々踏み切れないでいた。そうして迷っている間にも、双方の戦士達は戦闘で傷つき倒れていく。

「……どっちかを助ければ、どっちかが死ぬ……でも、出来るならどちらにも死んで欲しくない」

呟きに出して自分の気持ちを確かめ、その我侭を通す為にはどうすれば良いかを考える。　そして思いついた。

「思い立ったら即行動！」

朔耶は思いついたアイデアを実行すべく、魔力の蛇口を捻って大量の『力』を放出した。

見張り台から外の様子を探っていたクィスは、その光景から目を離すことが出来ないでいた。空に現れた不思議な光を纏う白と黒の翼。ゆっくりと降りて来るその翼の中心に見覚えのある少女の姿を見つける。

「サクヤ……？」

少女が祈りを捧げるように両手を組むと、光の翼が瞬く間に広がって行く。そして空を覆う程の巨大な翼の中心から放たれた光がこの辺り一帯を包み込み、塔部屋に収容されていた怪我人が次々と癒されていく。

クィスは呆然と、光の翼を広げて祈りを捧げている（ように見え

る）神の使いを思わせる朔耶の姿を見上げていた。

「お、おい！　何だあれは！」

光の翼を広げながら地上へと降りて来る朔耶に気付いて騒ぎ始める傭兵や騎士達。　朔耶は彼等に向かって癒しの光を放った。大量に放出される魔力の影響で光の翼は支部上空を覆わんばかりに巨大化して行き、放たれる癒しの光はこの一帯を包み込むように支部の全域にまで及んだ。

「な、なんだコレは！」
「どうなってんだ！　なんで死なねぇ！」

傭兵に首を斬られた筈の騎士は、斬られた端から傷が癒されて無傷のままそこに立ち、心臓を一突きにされた傭兵もまた、刺されている間も剣が引き抜かれてからも傷が癒され、無傷のまま。双方共に、相手に傷を負わせられないという『誰も死なない空間』が出来上がった。

初めの内は死な無い事に『好きなだけ戦闘を楽しめる！』などと言いながら嬉々として剣を振るう戦いに飲まれた者も居たが、次第に冷静さを取り戻し始めると殺す事も殺される事も無いこの空間の異常さに畏怖を感じ始めた。そうして皆が剣を振るう事を止めると、戦闘は自然に収まった。

「報告します！　『光』の影響で負傷者は全員完治、復帰可能です！」

「第一通路！　戦闘の効果が無い為、睨み合いになっています。陣地の確保に人数を寄越して欲しいとの要請です」

「第二通路！　敵を押し戻す為の援軍要請！」

戦闘が収まったとは言え、侵入した敵を建物の外へ追い出す為の人手が必要という事で各所から援軍要請が上がっていた。武器による攻撃に意味が無い為、得物を振るうよりも素手で相手を押し出す方が小回りが効く分効率が良い。その為、各所で押し合い圧し合いの殴り合いが起きていた。

「うむ……と、とにかく今は『光』の事は後回しだ。まずは敵を全て建物から叩き出すぞ！　動ける者は全員出せ！」

「ハッ！」

朔耶に『死』を奪われた一帯はまるで喧嘩祭りのような怒声と喧騒に包まれながら、侵入する者とそれを追い出しに掛かる者との激しいぶつかり合いの攻防が展開された。傷を付け合う事が出来ずとも拘束する事は可能なので、こうなると数で押し切る人海戦術が有利でもある。しかしここに錬度の高い騎士団と寄せ集めの傭兵集団との差が出た。

騎士達は非常に統制の取れた動きで連携して確実に相手を後退させて行き、孤立した者はすかさず拘束して無力化して行く。特に離反した騎士達は傭兵達との連携が取れず真っ先に拘束されて行った。

そうしてサムズの自警団と傭兵が全て支部の外に叩き出された時、辺りを包み込んでいた光が消えたかと思うと、眼も眩むような閃光と乾いた音が鳴り響く。

「なんだ！　何が起きた！」
「ほ、報告します！　敵勢力、完全に沈黙！」

支部の外では、気絶したサムズ自警団と傭兵達が折り重なるように倒れていた。　騎士達が一斉に空を見上げる。朝焼けの空に浮かぶ光の翼を広げた少女。その身に纏う白い衣を染めた赤い血は炎を象るように鮮烈で、黒髪を風に靡かせながら日の出の太陽に眼を細める姿は、無垢なるあどけなさと深遠なる神秘を感じさせた。

「こりゃあ、また……」
「あ、アンバッスさーーん！」

アンバッスが処置を終えて支部に戻って来た時、既に戦闘は終わっていた。ずらりと並んだ大勢の捕虜達。通常ならば支部の外に大勢の敵の屍が晒されているか、焼け落ちた支部の中に大勢の味方の屍が焼かれているかという決着が予想される規模の戦闘だった筈なのだが、サムズの自警団も傭兵も、離反した騎士達も、これ程の生存者を残して戦闘が終結した事に皆呆然としている。しかも生きている者は全員が無傷の状態だった。

「お前は、一体何をしたんだ?」
「んー?　ちょっと見分けが付かなかったから、取り合えず見分けつくまで時間稼ぎしたの」

「時間稼ぎ？」
「うん、癒しの光で癒し捲って誰も死なないようにしてみました」
「『してみました』て、んな無茶苦茶な事を軽く……お前いつ人間辞めたんだ」
「ひどっ！」

『そこは良くやったなとか頑張ったなとか言って頭撫でるなり抱き締めるなりする所でしょー！』とやけに具体的な例を挙げながらポカポカパンチを繰り出している朔耶を、支部の騎士達や捕虜達は何か悪い夢でも見ているかのような気分で眺めていた。とてもあんな『奇跡』を起した少女には見えない。

「あ……所で、ヴィンスさん達は……？」

少し影を落としたような表情になって問う朔耶に、アンバッスは『名前覚えていたのか……』と感心しながらも処置の事を話す。アンバッスは離反した彼等から辺境騎士団の鎧と剣を没収すると、僅かばかりの路銀を懐に忍ばせて放置した。騎士団に戻るなり、傭兵としてやって行くなり好きにしろと言う処置だ。

「そう……」

朔耶はホッとした表情を見せると、アンバッスに微笑み掛けた。

「ふん……そう言えば、クィス達にはもう会ったのか？　宿舎に居たと思うが」
「これから会いに行こうかな～って思って。　さっきまで凄く忙しかったし、ちょっと中に入れなくて」

てへへっと笑う朔耶の表情と雰囲気から事情を察したアンバッスは、徐に朔耶の手を引くと支部に向かって歩き出す。　いきなり手を握られて驚く朔耶をぐいぐい引っ張っていくアンバッス。

「え？　ちょっ　何？　あ、アンバッスさん？」
「どうせ『入れなかった』んじゃなくて、『入れて貰えなかった』んだろう？」
「あー……顔、出てた？」
「お前は意外に分かり易いからな」

『そうかなー』と首を傾げる朔耶は、アンバッスに手を引かれて支部の入り口までやって来た。門番の騎士が途惑った表情で朔耶とアンバッスに視線を向ける。つい先程、朔耶が尋ねて来た時は彼等によって『避難民が怖がるので』と追い返されたのだが、アンバッスに手を引かれながら門を潜る朔耶に制止の声を掛ける者はいなかった。位置的に朔耶は気付かなかったのだが、アンバッスが門番の騎士達にそれはもう『も　の　す　ご　い　コ　ワ　イ　顔』で睨みを効かせていたのだ。

支部の建物の中を注目の視線を浴びながら通り抜け、宿舎が見える通路に出た所で、朔耶は前方から並んで歩いて来る懐かしい顔を見つけた。

「クィスー！　デイジー！」
「え？」
「あっ　サクヤさん！」

思わず駆け出して行く朔耶を微笑ましく見送るアンバッスは、そのまま団長の所に顔を出そうと踵を返し掛けてふと、クィス青年の様子に違和感を覚えて足を止めた。

「サクヤさん、お久しぶりですー！」
「わぁーデイジーだぁー！　ホント久しぶりだねー」

きゃいきゃいと手を取り合って騒ぐ朔耶とデイジーの様子をボーっと見詰めているクィス。アンバッスは暫らくそれを観察していたが、『ああ』と納得すると支部の建物の方に歩いて行った。

「クィス！　また会えたねっ」

朔耶がそう言ってクィスの手を取ろうと近付くと、クィスはビクリと身を震わせて後ろに一歩下がった。　手を取り損ねてキョトンとした朔耶は、じっとクィスの目を見詰める。そして一瞬何かに気付いたように微笑むと、俯き加減に寂しげな笑みを湛えながら自らの肩を抱いて背を向ける。

「そう……そうだよね、クィスもあたしの事、怖いと思ったんだね……」
「！っ　ち、ちが……」
「え？　え？」

光の翼を広げた朔耶の姿を直接見ていないデイジーは何の事だか分からず、オロオロしながら様子のおかしい二人の間に視線を彷徨わせた。

「ち、違うんだサクヤ！　怖いなんて思ってない、俺はただ……」
「ホント？　あたしの事、嫌いになったりしてない？」

クィスが慌てて近付いて来た所を待ち構えていた朔耶は振り返り様に手を取って一気に距離を詰め、瞳キラキラ攻撃を放った。　カ

アァとクィスの頬が火照って行くのを確認すると、朔耶はスッと手を離して適度な距離を保ち、喜びの笑みを向ける。

「良かった！　あたし嫌われちゃったのかと思った」

「そ、そんな事……ある訳ないよ……」

あまりからかい過ぎるのも悪いのでこの辺りで辞めておこうと自重する朔耶。クィスの様子を見たデイジーは『そういえばそういう人だった』と朔耶のからかい癖を思い出してクィスに同情の念を向けつつ、苦笑を抑えきれないのだった。

４４話：精霊の事情

辺境騎士団クルストス支部にある宿舎。　その一室で眠る朔耶は、夢の中で精霊と向かい合っていた。

　此方の世界に再召喚されてから此処まで一気に駆け抜けて来た朔耶は、近しい人達の身に起こる当面の危険をほんの僅かな間とはいえ脱した事と、懐かしい顔にも会えた事で緊張の糸が切れたのか、精神力を使い果たして倒れるように眠り込んだのだ。

「これ、夢よね？」

ニクタイカラ　ヒトトキ　カイホウサレタ　ヒトの精神　それガ
今の　サクヤ

　人の形にも見える光の集合体がユラユラ揺れながら答える。精霊の声は徐々に鮮明に、明瞭になって行く。朔耶は不思議と驚きなどは感じず、極当たり前の事をしているような既視感にも似た落ち着いた気持ちを感じていた。

「ふーん……態々こうして話すって事は、何か伝えたい事でもあるの？」

「コノママ、かさなり、を、続けるコトで、血の盟約が解かれてしまう可能性がある」

　この精霊は遠い昔、フレグンスの地を治める王族を加護するという『個人』では無く『一族の血』と盟約を交していた。フレグンス

の王族が代々精霊術に長けているのは、新たに血統を継ぐ者が生まれる度に精霊が祝福を与える事で赤子のうちから交感能力に刺激を与え、成長する間も近くで見守るように傍に在り続けて来た事が影響している。王族に課せられた務めである地下神殿での祈りの儀式は、この精霊と交感を試みる儀式でもあったのだ。盟約を確かめ合い、繋がりを強める意味合いもある。

「レティ達の事だね……じゃあ、あたし向こうに戻ったらあんまりコッチに来ないほうがいいのかな？」

「サクヤがコノ世界に無くては、アノコが哀しむ」

『それはまた難儀ねぇ』と朔耶は精霊の言わんとする事を理解しつつも、それはもう仕方が無い事なのではないかと思っていた。精霊の話では朔耶と重なって行動を共にする内、朔耶の意識に引かれるように過去の盟約の効力が薄れて行くらしく、朔耶が精霊の力を使えば使うほどその傾向が強くなっているという。

精霊自身が意識しなくとも、重なっている朔耶の意識に引っ張られるような形で明確な意識を強く持った状態になり、それは本来精霊が持ち得ない程の強い自我のように、盟約の繋がりでもある拘束力に反撥してソレを抑え込んでしまう。今のままでは、重なっている精霊は何れ朔耶の心に飲み込まれるように融合してしまうかも知れないとの事だった。

「レティが寂しがるってのは分かるけど、それでレティ達からアンタを取っちゃったら本末転倒でしょ？」

「方法はある。アノコ、とも、重なる事で盟約は保護される」

「どうやってよ？　言っとくけど百合は勘弁だからね」

何と無く嫌な予感がした朔耶は予め釘を刺しておく。精霊は若干

の沈黙後、朔耶の知識から読み取った百合なる情報を認識すると話を続ける。

「アノコとサクヤの肉体的精神的な深い交わりも有効な方法　提案するのは別の方法」

「なんか薮蛇だった気がするわ……例えば？」

「一度、サクヤと一緒に行く。そして、一緒に戻る」

「……え？　それってレティをあたしの世界に連れて行くって事？」

それは地下の精霊を此方の世界で使役している朔耶とフレグンスの王族であるレティレスティアならばこそ可能な方法だった。血の盟約による繋がりという効果に加え、朔耶と交感で深く繋がる事の出来るレティレスティアならば、世界を跨いで力の強い精霊と繋がっている状態にある朔耶を世界間を移動する乗り物と位置付け、地下の精霊とその遍在を双方の世界の駅とする事で移動が可能だ。

「う～ん……それって本当に大丈夫なの？　レティと混ざったりとかしない？」

「肉体は固体として保たれる。精神は一部融合し、溶け合う」

「駄目じゃん！」

朔耶は速攻で却下した。そのツッコミの勢いで目が覚める。　薄暗い宿舎の部屋。外からは支部の修復を行う作業の音が聞こえて来る。朔耶が倒れるように眠ってから半日程が経過し、今はお昼過ぎ頃に差し掛かっていた。

「……精霊の価値観じゃ問題ないんだろうけどねー……」

ベッドに横たわったままの姿勢で天井を見上げながら呟いた朔耶

は、ふっと息を吐いた。

「取り合えず東館の外壁と通路の修繕を優先しておけ、食料の買い付けはどうなってる？」

「ハッ　現在三小隊が市場に出向いていますが、恐らく買い占めても二日分確保出来るかどうか……」

「ふむ……街の住人にも負担になるからな、何かトラブルがあったら直ぐに知らせるようにしろ」

支部の修復作業が行われている中、アンバッスを始め各隊長は其々役割を分担して騎士団の活動を再開していた。建物の修復作業、資材の搬入、怪我人の搬送、遺体の処理、捕虜の監視、街の巡回による治安維持、そして最も問題になっているのが食料の確保だった。エバンスからの脱出組や捕虜達から集めた貨財で資金は十分にあるが、クルストスの街自体に食料が足りないという現状。

「こりゃ早いことエバンスに引き取って貰わにゃならんな……」

アンバッスは地下に収容しきれず厩舎の裏で鈴生りに繋がれている捕虜のサムズ自警団を眺めて呟いた。

『てなわけなのよ』

――そう、なのですか……――

朔耶はベッドに寝そべったままレティレスティアに交感を繋ぐと、夢の中で精霊と話した内容を伝えていた。

『多分、こうやって話してる間もその盟約ってのに響いてると思うんだわ、だからあたしこのまま還ろうかなって思うの』

――そんな……でも……――

『どっちみち今回はあんまり長くコッチに居られないからね、途中退場で悪いけど』

――そんな事はありませんっ　サクヤは十分力を尽くしてくれました――

レティレスティアも代々王家を守護して来た精霊との盟約が切れてしまうとなれば、自分の我侭で朔耶に此方の世界に留まって貰う事を願う訳にも行かず、また、朔耶の世界に行って戻って来る事に異存は無かったものの、朔耶自身がその方法を却下しているので無理強いは出来ない。

――……そうですね、サクヤの事情もありますもの――

『ごめんねー、あたしももっとコッチには居たかったんだけど……』

レティレスティアと話し合った朔耶は、夕方までは此方に滞在してクルストスの情報を送る等の手伝いをした後、自分の世界に帰還する事になった。レティレスティアの残念がる思念を感じながら交感を解いた朔耶はベッドから起き上がる。

「さて……もう暫らくヨロシクね」

胸に手をあて、自分の中の精霊に声を掛けると宿舎の部屋を後にした。

「おう、起きたか」
「アンバッスさん、忙しそうだねー」

事後処理に追われるクルストス支部内。朔耶が建物に入ると、周りの空気で気付いたアンバッスが声を掛けた。朔耶はアンバッスが大きな身体を丸めるようにして机に向かいながら事務作業をしている姿を見て思わず笑ってしまう。

「な、なんか似合わないような似合うような」
「言うな、俺も外回りの方が性に合ってる事ぐらいわかっとる」

机の傍で書類と格闘しているアンバッスと談笑する朔耶を見た支部内の騎士達は多少なりとも緊張を緩める事が出来た。朔耶の事をよく知る者達でも光の翼を広げて魔力のオーラを纏った朔耶の姿には一瞬畏れを感じて立ち竦む程の神懸かった雰囲気がある。

朔耶の事を噂でしか知らない人々にとっては、空を覆うような巨大な翼を広げて舞い降り、『死』を奪うと謳われる程の強力な癒しの光で照らし、一瞬で敵全軍を沈める雷の閃光を放つ存在は神かソレに並ぶ者と映る。

朔耶が支部内に入る事を拒んだ門番も、ある種決死の覚悟で御引取り願ったのだ。まだ混乱の収まらない雑然とした支部の中で、誰かが粗相をやらかしてこの存在に怒りでも買おうモノならどうなる事か、という懸念による判断なのであった。

「あたしね、夕方には向こうに戻るから　何か王都に伝えたい事と

かあったら今の内に言ってね？」
「向こう、というのは……お前の世界の事か？　随分急だな」
「うん、ちょっと色々事情があってね、国のそんぼーに関わるような」
「ふん……大層な事情だな。　そうだな、取り合えず大至急食料を送って貰いたいと伝われば助かるが……」

アンバッスは言い掛けて呟きながら考え込む。王都からでは輸送に相当な時間が掛かる上にサムズと開戦するなら街道は使えない。キトに迂回するにしても、サムズの妨害を考えるならティルファ経由でかなりの遠回りをして早くとも三十日以上は掛かってしまう。

「あ、竜籠があるから荷物運ぶなら割と早く届くと思うよ？」
「竜籠？　帝国が協力でもしてくれるのか？」
「んー、元々サムズの傭兵の人達を運んでたやつを分捕ったの」
「……誰がどうやって分捕ったのかは聞かないでおこう」

今直ぐにでも王都に伝えられると聞いたアンバッスは書類に王都からの食料援助を申請する内容を記した。そして交感でレティレスティアに伝えた朔耶から『直ぐ送るってさ』と聞くと、申請書に受理を記す。

「一つ片付いた。　楽でいいな」
「一応、此処での事はあたしが見た限りの内容で王都には伝えてあるからね」
「そうか、助かる」

何となく会話が途切れて周囲の雑踏に耳を傾ける朔耶。忙しく行き来する騎士達に混じって給仕の格好をした少女やおばさん達の姿もちらほら見える。人の行き交う様子をぼーっと眺めていた朔耶に

声を掛ける者がいた。

「あ、あのーサクヤ様？」

「はい？　あ、サム君！」

「名前覚えていてくれたんですか！」

サクヤ式の改造が成されたキャリゴルの盾を持つ若い騎士、サム・クリッツ（十八歳、彼女募集中）が感激した様子で立っていた。以前、王都までの道中を共に旅した護衛隊メンバーの一人である。

彼はエバンス辺境騎士団本部に所属している騎士だが、エバンスから脱出する際もこの支部での攻防でも朔耶に改造して貰った盾が非常に役立った事で、一言お礼が言いたいと勇気を振り絞って声を掛けたのだ。

旅の最中でも既に雲の上の人だった朔耶が王都で『王室特別査察官』なる官職に就いたと知らされた時は、『もう話し掛ける所か視界に入る事すら出来ないのだろうなぁ』という諦めを胸中に持ちながらも、久方ぶりに見た朔耶は相変わらず度肝を抜く事をサラッとやって見せつつ自然体で人と接する変わらない在り方に、彼は以前にも増して朔耶に惹かれている事を自覚するのだった。

「他の人達は皆元気だった？」

「あ……護衛隊メンバーで脱出組みに居たのは自分だけでして、他は自分等を逃がす為に……」

「……そっか、みんな　無事だといいね」

暗くなり掛けた空気を、朔耶は皆の無事を願うように微笑んで見せる事で押し止めた。戦死が確認された訳ではないのなら、捕虜として生きている可能性も十分にあるのだからと。そんな朔耶になん

と返して良いのやら分からず、オタオタしているサムにアンバッスが書き損じて丸めた紙クズをぶつける。顔面直撃。

「アイタッ！」
「少しは気を回せ、未熟者」
「くすっ」

昼下がりの喧騒の中、暫しの談笑に興じる熟年の騎士と若い騎士と、異国の少女の姿が垣間見られた。

「なるほど……そういう事でしたか」

フレグンス城の地下神殿でレティレスティアから話を聞いたアルサレナは、朔耶と重なる精霊が古くからこの地を護る精霊であった事に関心を示していた。あれ程の強い力を持つ精霊が、才能はあるとはいえアルサレナからすれば未だ未熟であるレティレスティアの助けを求める声に応えて、異世界から朔耶を喚び寄せるような働きをした事の謎が解けたと納得している。

「サクヤは、もう此方には来ないのでしょうか？」
「あの子にも自分の世界での生活があるでしょうからね。　それに、この地を護る精霊との契約が切れるというのは問題です」
「はい……」
「精霊が示したという方法も、少し性格が変わる程度という訳ではなさそうですし」

一部とはいえ精神が混ざって溶け合うという事は記憶の共有や混

乱を招く恐れもある。個の意識が希薄で強い自我を持たない永遠の存在である精霊の感覚からすれば、多少混じった所で特に問題は無いのかもしれないが、自我の塊とも言える人間には深刻だ。

「しかし、それさえ解決する事が出来れば、貴方はこの地を護る精霊と重なる事が出来、フレグンスはサクヤという強大な存在を得る事が出来る」

「母さま！　私はそんな……っ」

アルサレナの言い様に朔耶を利用しようとするようなニュアンスを感じたレティレスティアは思わず反撥の声を上げるが、アルサレナにじっと見据えられて口を噤む。

「レスティア、貴方の純心は人として美徳に満ちた素晴らしいモノです。ですが、貴方は王族の娘、意味は分かりますね？」

「……はい」

「サクヤは確かに貴方を救い、この国に色々な技術をもたらして発展に貢献してくれています。ですがそれは、相応の厚遇に報いるモノとして私達王族は受け取らなければなりません。善意だけであの子を王室に近しい存在として扱う事は出来ないのです」

「……分かって、います」

不承不承なレティレスティアの様子に、アルサレナはこっそり苦笑する。元々レティレスティアにそんな考え方が出来るとは思っておらず、これも自身の立場に自覚を促す為の、王族としての教育の一環である。

「さて、それでは精神の融合を防ぐ手立てを考えるとしましょう。サクヤから交感があれば、もう一度此方に来て貰えるよう交渉なさい」

「……分かりました」

不貞腐れたような返事を返すレティレスティアに、珍しいモノを見る表情で目を丸くしたアルサレナはもう少しつついて反応を窺う。

「不満そうですね」

「不満です」

ムスッとした表情で拗ねるレティレスティアをアルサレナは堪らず抱き締める。いつもぽやーっとしていた娘がこんな反応を返す事が面白いやら嬉しいやらで思わず笑みが零れてしまうのだった。

儀式の間では何時も厳しいアルサレナの突然のスキンシップに、レティレスティアは只管わたわたしていた。

『そうねぇ～　日曜日前の土曜日なら来られると思うから、六日後くらいかな？』

――分かりました、ではまた六日後に此方の世界へ来られた時、連絡を下さい――

『うん！　アルサレナさん、いい方法を見つけてくれるといいね』

――はい……、そうですね――

レティレスティアから後ろめたさの感情ががひしひし伝わって来る事に何かあったらしき事は感じ取ったが、朔耶は自分からそれを尋ねる事はしなかった。

『レティ』

――は、はい？――

『また会おうね？』
――あ……はいっ！――

支部の敷地内でレティレスティアとの交感を終えた朔耶は、見送りに来てくれたクィスとデイジーを振り返ると少し照れながらハグをする。帝国の城の地下から還った時は行き成りの召還だったので感傷も何もあったモノではなかったが、今回は『これから還るんだなぁ』と思うとたった一日の強行軍で経験した出来事が走馬灯のように浮んでは消えて行く。中々に濃い体験をしたものだと、朔耶は感慨深く思った。

「それじゃあ、またね」

朔耶は『また明日』というくらいの軽い雰囲気で手を振ると、祈るように手を組んで精霊に呼びかける。クィスとデイジーが見守る中、朔耶の姿は唐突にそこから消えた。

「サクヤさん、消えちゃった……」
「うん……ホントに、他の世界の住人なんだね」

建物の影からこっそり見守っていた人々は朔耶が異世界から来た事に関して詳しく知る者が居なかったので、突然姿が消えた事に『やはり神の使いか！』とか『精霊の化身では！？』などの憶測が飛んでいた。

「うわっと！」

薄暗いハイキングコースに現れた朔耶は、一瞬バランスを崩して転びそうになった。　召喚された時は車の助手席に座っていたので、座標が地面より高い位置にあったようだ。辺りを見渡して一息つくと、虫の声を聞きながら山を下り始める。

白いワンピースは裾から腰、胸元まで血で染まっている。向こうに居た時は皆も似たり寄ったりの状態だったので余り気にならなかったが、流石に此方の世界で流血沙汰の痕跡は目立つ。夕刻に還って来たのは正解だったと自分の判断を褒めながら、朔耶はポケットから小銭とテレフォンカードの入った財布を取り出して人気の無い駐車場近くの電話ボックスに向かった。

「あ、お母さん？　お兄ちゃん居……ああ、ごめん！　うん、大丈夫だから……うん、お兄ちゃん迎えに寄越して？」

朔耶は親に心配を掛けてしまった事に若干の罪悪感を抱きつつも、次に向こうへ行く時はキチンと話をして親公認で行く事にしようと決心するのだった。

「レティを喚ぶかも知れない事も、話しておこうかな……」

４５話：学生生活

「それ、どうしたの？」
「親父の拳骨」

顔に痣をつけた兄は何でも無い事のように笑って答えた。朔耶は内心で謝りつつ、両親をどうやって説得しようかと頭を悩ませる。帰りの道中、兄と車の中で話し合い、取り合えず包み隠さず話しておいた方が良いだろうという結論に至った。

「朔耶！　……って、どうしたのそれ！」

帰宅した朔耶は、娘を叱ってやらねばと待ち構えていた母が朔耶の服にべったりと付着した血を見て慌てるのを落ち着かせ、落ち着いているように見えて救急車を呼ぼうとする父から１１０番がプッシュされている携帯を悪戯電話になる前に取り上げた。
思わぬ所からペースを掴んだ朔耶は此れ幸いと両親の説得に入るのだった。

「それじゃあ、本当に危険はないんだな？」
「うん、今回みたいな無茶はもうしないし、多分出来ないから」

俄かには信じ難い朔耶の異世界での話を最後まで聞き終え、朔耶の気持ちと覚悟を確かめた両親は絶対に無茶をしない事と学校をきちんと卒業する事を条件に今後の異世界行きに理解を示してくれた。

「今日はもう休みなさい」

「週明けには学校も始まるんでしょ？　ちゃんと準備しておかないと駄目よ？」

「はーい」

時刻は既に夜の十時を回っていた。朔耶は一度お風呂に入ってから部屋に戻ると、制服と鞄を用意してベッドに入る。血の付いたワンピースは何と無く捨てる事が躊躇われたので、他の洗濯物とは別に洗って干してある。

此方の世界での地下の精霊との繋がりはこの前よりもさらに強く感じられた。

「こっちで何か精霊術使えたりとか……」

朔耶は布団に入りながら初心者用の簡単な術は無かったかと記憶を検索すると、レティレスティアが使っていた『風の加護』の簡易版、『精霊の風』を思い出したので試してみた。

これは精霊の力で指定対象を包んで行動を補佐する『風の加護』と違い、ただ風を起すだけの精霊術で　風系の魔術の基礎と要領は変わらない。魔術の場合は風をイメージして補助の詠唱を行い、精霊術の場合は精霊に風を起すイメージを伝える。

「――風を――」

ブワッと布団が舞い上がって天井の照明に引っかかった。朔耶は

慌てて勉強机の椅子を梯子代わりに布団を引っ張り下ろすと、夜中に窓を開けて布団に付いた埃を掃いながら『室内で無闇に術を使ってはイケない』という教訓を胸に刻み込むのだった。

週明けの月曜日、朔耶は約三ヶ月ぶりの学校へと登校していた。オルドリア大陸ではサムズの大部隊がクリューゲルの首都、カースティアに迫る頃だったので其方の事も気になっていたのだが、此方の生活も疎かには出来ないと学生の本分を全うする事に決めた。

「こっちに居る間は、只の女子学生の朔耶だもんね」

ぞろぞろと登校する周りの学生達は日焼けしている者も居れば染めたてのような色をした髪を櫛で撫で付けている者、夏休み前から変化無さそうな者まで色々だ。二ヶ月近い失踪が噂になっていたりしないかと少し心配していた朔耶だったが、特にジロジロと視線を向けられるような事も無く休み明けに登校する学生の一人として集団の中に溶け込めていた。

学校の校舎や廊下に懐かしい想いを感じながら教室に入った朔耶は、自分の席だった筈の場所に既に別のクラスメイトが座っていたので『席替えでもあったかな？』と首を捻りつつ友人の姿を探して教室内を見渡す。流石にクラスの教室内になるとチラホラ好奇の視線を向けて来る者もいたが、向こうでの貴族達からの視線に比べれば全く気にならない程度のモノだった。

「朔ちゃん！」

愛称の名前で呼ばれて声のした方に振り返ると、教室の後ろの席から手を振る友人の姿。『ここ、ここ』と隣の机をペしペし叩いている。

「おはよー、また藍と隣になってたのね……」

「ふっふっふ、ちゃんと確保しておいたのよ」

「朔耶ちゃんの隣はずっと藍香ちゃんの席に決めてるもんね～」

「あ、実穂もおはよー」

朔耶と一年生の時からの親しい友人である藍香と実穂。朔耶をキャンプに誘ったのもこの二人だったりする。活発な性格の藍香はよく旅行の計画を立てる等しては割と活動的な朔耶を引っ張り回し、おっとり系の実穂はそれに引き摺られる形で付き合というパターンが出来ており、三人で一緒に行動する事が多い。

「ねぇねぇ朔耶ちゃん、あの噂って本当ー？」

「どの噂よ」

「え？　なになに？　朔ちゃんの噂ってなに？」

微妙に語尾が延びるおっとり系の実穂は、その見掛けや雰囲気とは裏腹にかなりの噂好きで、何処からか仕入れて来た噂をよく話のネタに持って来る。それも何故かトンデモ系が多かったりする。

直ぐに飛びついて来た藍香を宥めながら三人顔を寄せ合ってヒソヒソモードに入ると、『実は……』と話し始める実穂。

「朔耶ちゃんは歳の離れた男の人と不倫で駆け落ちしてて、追い掛けて来た奥さんが隠れ住んでた家に押しかけて男の人を滅多刺しに……」

「またんかいっ」

ペシンッと実穂のオデコに突っ込みを入れた朔耶は周囲に聞き耳を立てていた者が居なかったか確認すると、徐に実穂の首を絞めた。

「どっから、そんな、訳の分からん、噂を……つーか、ソレ誰にも話して無いでしょうねぇ～」

「話してない～　話してないよぉ～」

オデコを抑えて涙目になっていた実穂は朔耶にぶんぶん揺さぶられながら答えた。その傍らでは藍香がショックを隠しきれない様子で頭を抱えている。

「そ、そんな……　あたしの朔ちゃんがぁ……！」

「こらそこっ　信じるな！　って『あたしの』って何だ『あたしの』って」

他愛無い話をして三人で騒ぐ、朔耶は今までと同じ様に接してくれる友人に心の中で感謝していた。二人と以前のままの関係で居られる事に、微かに抱いていた不安から解放されて安堵を覚えるのだった。

「でもさ、みっちゃんが拾って来たって事は誰かが何処かで噂として流してるわけだよね？」

「そうよね……　ちょっと関係者じゃないと知らないような内容が混ざってたし」

『血塗れで夜の病院に現れた』、という部分がソレである。　噂の出所を調べるべく、実穂に『吐けー』と迫る朔耶。

「むぎゅー……　えーとねぇ、家がお医者さんやってるっていうクラブの子」
「みっちゃんトコのクラブだと折り紙クラブ？」
「織物クラブだよー」
「医者って事は病院関係者か……　やっぱりあの病院の人なのかなー」

一つ下の学年で何処のクラスかまでは分からないという。取り合えず変な噂を流さないよう一言注意しておこうと、放課後三人で実穂のクラブに顔を出す事にした。

「やっぱ授業についていけなかったぜ……」

何となくワイルドに決めながら机に突っ伏している朔耶の頭をイイ子イイ子しながら苦笑する藍香。そんな二人の席に椅子とお弁当を持った実穂がやって来て机をくっ付け始めた。今はお昼休みの時間である。

「はぁ～……　予想はしてたんだけどね～……」
「まぁまぁ、今度一緒に勉強会でもして取り替えそうよ」
「おおう、いいねぇ～　誰の家でする？　今度の休みにでも集まろっか？」
「あ、あたし今週の土日は予定があるから駄目だわ」

『ええ～～』と口を尖らせる藍香に『ごめんね～』と優しい笑み

を向ける朔耶を見ていた実穂がポツリと呟く。

「……なんだか朔耶ちゃん、大人っぽくなった感じするなぁ」

「え、そう？」

「あー、それあたしも感じてた。　なんか妙に丸くなったというか、落ち着いた感じがするというか……」

「うーむ……」

異世界でレティレスティア達と出会い、様々な出来事を通して経験を積んだ朔耶は心身共に成長を遂げていた。尤も本人には余り自覚は無かったのだが、それが返って自然体から滲み出るような不思議な魅力を醸し出していた。

失踪中の事は藍香が控えめに探りを入れて来る事はあるものの、基本的に問われて困るような事を聞かれる事も無く、噂好きの実穂も朔耶が言い難そうにすればそれ以上聞こうとはしなかった。

二人の配慮に改めて感謝の念を抱きながらお弁当をつつき合っていた朔耶に、クラスメイトの女子から声が掛かる。

「都築さーん」

「ふぁい？」

実穂のお弁当からトレードしたエビフライを咥えたまま朔耶が振り返ると、教室のドアの所に集まっている数人の女子の内の一人が手招きをしていた。

「なんだろ？」

「さぁー？」

「ちょっと行って来る」

もぐもぐと咀嚼しながらドアの所にやって来た朔耶は、集まっている女子達の何故か険呑な視線を背中に感じながら手招きした女子に促されて廊下に出る。すると其処には一人の男子生徒が立っていた。

「えーと？」

「あ、ごめんね都築さん、食事中に呼び出して。僕、二年の西崎葵（にしざきあおい）って言います」

誰だっけ？と首を傾げる朔耶に、男子生徒は呼び出した事を謝罪して自己紹介をした。『何処かで聞いた様な……』と記憶の引き出しを漁っていた朔耶に、西崎が言葉を続ける。

「ちょっと都築さんに話したいことがあって……　放課後空いてますか？」

「あー今日の放課後はちょっと――」

「空いてる空いてるー、大丈夫だよー」

「え、ちょっ　実穂？」

用事があるので、と続けようとした朔耶の横から実穂が割り込んでＯＫを出す。放課後の用事は自分と藍香でキチンと言い聞かせておくからと、普段おっとりしている彼女にしては珍しい押しの強さで朔耶に西崎との約束を取り付けてしまった。

「もー、しょうがないあなぁ実穂は」

「よかった！　じゃあ都築さん、放課後に屋上で。　川岸さんもありがとう！」

「いえいえー」

朔耶は何か事情を知っているような雰囲気の実穂に詳しい話を聞く事にして、呼び出された時と同じく女子達からの剣呑な視線を浴びながら席に戻ると、藍香が物凄い勢いで質問を浴びせ掛けて来た。

「ちょっとちょっとちょっと！何今の西崎君じゃないの何で何で何時の間に朔ちゃんそんなマジでうわーあたしどうしようー！」

「いいから落ち着け。　で？　どういう事？」

「西崎君の事ぉ？　彼はねぇ前から朔耶ちゃんの事気にしてたんだよー？」

学内ナンバー2のモテ男君と謳われる二年B組西崎葵。その女の子っぽい顔立ちに柔らかい物腰、其の癖クラブのサッカーではレギュラーでフォワードを担当する実力派という見た目とのギャップが男らしさも引き立てており、丁度学年の真ん中にあって同級生は勿論、下級生からも上級生からもアプローチが絶えない学校の有名人である。

「知らんかったぁ～……」

「いや、そういう所は如何にも朔ちゃんらしいわ」

「そんな有名人があたしに何の話だろう？」

「いやいやいや、朔ちゃんそれは無いわ」

幾らなんでもこの展開で惚けるのは無しよとばかりに脇腹を擽って来る藍香に反撃しながら、朔耶もこれだけ条件が揃えば『告白』のキーワードが浮んで来ない訳ではなかった。

「いやまぁ、あたしもそれは何となく分かるけど……　解せんわ」

何時から気に掛けて居たにせよ、西崎とは特に接点も無かった上に二ヶ月以上此方に居なかった朔耶は余計に不可解と感じていた。

「うーん、そこはホラ　ずっと前から朔ちゃんの事が気になってたケドその気持ちが何なのかよく分かっていなかったのが朔ちゃんが居なくなって初めてそれが恋だと気付いた西崎君は夏休み明け元気に登校してくる朔ちゃんの姿を見て想いを伝えるべくむぐぐ――もぐもぐ」

玉子焼きを突っ込んで藍香を黙らせた実穂は、少し声を潜めて朔耶に注意を促す。

「一応頼まれてたから朔耶ちゃんと約束を取り付ける協力はしたけどぉ、西崎君ってファンの子多いから気を付けてね？」

「え、なにそれ？」

今まで西崎に告白しようとした女生徒は皆、例外無くファンの子達からの嫌がらせに合っているのだと実穂は説明する。ただ今回は西崎の方からの告白になる為、彼女等がどう動くか分からないとの事だった。

「そんなんで嫌がらせされたら理不尽過ぎる……」

「まあねぇ……　でもさー、あの可愛い系のイケ面君に告白されるとかぁドキドキモノじゃない？」

「可愛い系ねぇ……」

異世界で散々何処のモデルかと思うような端整な顔立ちの貴公子達から裏表含めて親愛の言葉やら求愛の囁きを送られ捲っていた朔耶には、今ひとつピンと来なかった。

向こうでは『お付き合いを求める告白』という類の話ではなく、『結婚してくれ』というレベルでの求愛が日常茶飯事だったので、

恋愛事には割と疎い朔耶もそれなりに慣れっこになっている。

『バルとかストレートだったもんなぁ……』

縁談を持ち掛けるとか誘う等の段取りをすっ飛ばして『余の妻になれ』には流石に驚いた朔耶だったが、その後の淀みないバルティアの求愛行動ですっかりそういった事柄を受け流せるようになっていた。

「で？　で？　何て返事するの？」

「まだ告白って決まった訳でも無いでしょうに……　でもまあ、『ごめんなさい』だろうね」

「えー？　なんでー？　誰か他に好きな人が居るとか？」

「別に、特に誰かと付き合おうとか考えてないからねー」

『それどころじゃ無いし』と心の中で付け加える朔耶だった。

放課後、噂の元栓をしっかり締めて貰って来るよう二人を送り出した朔耶は学校の屋上に向かっていた。廊下を歩いていると彼方此方から視線を感じる。それも余り性質の良くないモノだった。

『嫉妬なのかなぁ』

内心溜め息を付きつつ屋上に通じる階段の所まで来ると、数人の屯する女生徒が段差に座り込むなどして階段を塞いでいた。

「ちょっと通して貰える？」

朔耶が声を掛けると、女生徒達は顔を見合わせ、次いでクスクスと笑ってその場を動こうとしなかった。以前の朔耶ならばココで手とか足とか出ていた所だが、人の生き死にを見てきた今の朔耶にとって彼女等の行為は子供の駄々と変わらない。

『ふむ……　ここは意表を付いて固まってる隙に突破かな』

ちらちらと朔耶の様子を窺いながらヒソヒソ話をしている女性徒達を前に、朔耶は大きく息を吸い込むと――

「にしざきくーんちょっと下りて来てー！」

大声で叫んだ。　面食らって朔耶を凝視する者と、慌てて屋上の扉を振り返る者とに行動が分かれる。半分腰を浮かして逃走体勢に入っている者も居る。キラーンと眼を光らせるようにニヤリ笑いをした朔耶は、陣形の崩れた女生徒の集団に突撃、慌てて身を引いた者を押し退けるように隙間を縫って階段を駆け上がった。

「ふっふっふ　甘い甘い」

騒いでいる女生徒達に振り返って指をふりふりウィンク一つ、朔耶は悠々と屋上の扉を開いて出て行った。

「おまたせ」
「あ、都築さん……　来てくれたんだね」

階段前の攻防を知る由も無いような雰囲気で嬉しそうに迎える西崎は爽やかに微笑んで見せた。彼の笑顔はファンの子達の間では『天使の微笑み』などと呼ばれ、盗撮写真の中でも人気の一品だったりする。

しかし、この手の可愛い系の男の子の微笑みならばガリウス小隊の子犬騎士、フラン・テイル・カルウットのアピール笑顔で慣れてしまっている朔耶には普通の人懐っこい笑顔程度くらいの印象しか与えなかった。

「それで、話って何？」

西崎は彼なりに自分の微笑みには女性を惹き付けるだけの魅力がある事を自覚していたので、素っ気無い朔耶の反応に一瞬戸惑いながらも真っ直ぐ朔耶の瞳を見つめて気持ちを伝える。

「二年に上がった時にグランドで見掛けた時から、ずっと都築さんの事が気になっていたんだ」
「ふむふむ」
「都築朔耶さん、僕と付き合ってくれませんか？」
「ごめんね」

打てば響くような素早い返答だった。考える素振も見せなかった朔耶に思わず固まる西崎。

「え……　そ、そう……　僕じゃ駄目だった……？」
「ううん、今はあたし誰かと付き合うとか考えられないから、多分

誰が相手でも断ってたよ」

端っから誰とも付き合う気が無かったと聞いた西崎は残念そうに肩を落とした。そしてトンデモ無い事を口にする。

「あの……　それじゃあ、やっぱりあの噂ってホントに……？」

「噂って、不倫の男云々ってヤツ？　あれ悪質なデマだから信じないようにね」

噂の出所に友人二人が注意しに行っている事を伝える。そして失踪中の事は聞いてくれるなと西崎の肩をぽんぽん叩いた。そんな何気無いスキンシップが、朔耶に対する西崎の恋心を刺激する。

好きな相手に触れられるという行為には、時に人を暴走させる程の効果がある。良くも悪くも女性慣れしていた西崎は、自然体で包み込むように穏かな雰囲気を纏った朔耶から香るシャンプーの匂いと両肩に乗せられた手の平の体温を感じた時、湧き上がる情念に任せて朔耶の身体を抱き寄せた。驚いて目を瞠る朔耶。

一つ年下とはいえ西崎の身長は小柄な朔耶よりも高く体格も良いので、朔耶は彼の胸の中にすっぽり納まった。意中の人を腕の中に捕まえた西崎は朔耶の髪を唇で掻き分けるように顔を寄せて行きながら耳元で『好きだ』と囁く。如何にも手馴れた感があった。ここで朔耶が顔を上げていれば、唇を奪われていただろう。

「都築さん……　僕、本当に都築さんが好きなんだ」

行き成り抱き締められて身を堅くしていた朔耶は耳元への囁きに肩の力を抜くと、西崎の背中に手を回す。そしてゆっくりと腰の辺りまで滑らせて手を組み合わせた。

「都築さん……」

ぎりぎりぎり……

「つ、都築さん……？」

所謂ベアハッグという技である。　朔耶の腕力は細腕とはいえ同年代の女子と比べると鍛えられている分、結構強い。それでも小柄な朔耶が身長も体格も上回る西崎に仕掛けた所で然程の効果は得られない。

締め上げる力ではダメージを与えられなくとも、全身を使えば僅かでも持ち上げてバランスを崩す事は出来る。身体が少し持ち上がり、慌てて踏ん張ろうとした西崎の足の間に膝を捩じ込んだ朔耶は持ち上げる力を緩めると、西崎の胸に頭を付けたまま低い声で言った。

「このまま膝を掲ち上げてあげようか？」

明らかに怒気を孕んだ朔耶の声と、それを実行された場合の地獄に思い至った西崎は震え上がって朔耶を解放した。

「ご、ごめん！　僕……」

「今度やったら稲妻ビンタだからね」

「い、稲妻……？」

『めっ』とオデコをつんっと突付いた朔耶は、それで赦すと言って屋上を後にした。残された西崎は全身に残る朔耶の感触と残り香に暫らくぼーっと突っ立っていたが、ふいにオデコを擦りながらふ

らふら歩き出す。

「都築さん……」

悪戯した子を叱るような最後の怒り笑顔が、西崎の脳裏に焼きついていた。

階段の周りでウロウロしていた女生徒達をしれっと無視してやり過ごした朔耶は、校舎の玄関で待っていた藍香と実穂を見つけて合流する。

「どうだった？　どうだった？」

「告白だったよ、断ったけどね」

「フンフンフン……　西崎君のコロンの匂いがする……」

「犬かアンタは……」

屋上へ上がる階段前からの一連の出来事を報告すると、藍香は満足げに笑い、実穂はナルホド～と納得していた。どうやら例の噂を流した女生徒は西崎ファンの同級生だったらしく、朔耶から興味を失わせる事が目的だったそうだ。

「なんだかなぁ」

「ああ～でもこれで　あたしの朔ちゃんの純潔は守られたわ！」

「だから『あたしの』ってのは何よ」

「実は朔耶ちゃんに告白したいって女の子、結構いるよー？」

思わず引き攣る朔耶だった。

46話：銀月の牙

告白騒動から二日後。妙な噂も鎮まり、朔耶は何事も無い平穏な学生生活を送っていた。

「雨、降りそうだなぁ」

中途半端に明るい曇り空を見上げて呟く。実穂はクラブに出席、藍香は『特番の録画セットしてなかったーー！』と携帯で番組欄を見た後すっ飛んで帰って行ったので朔耶は一人でノンビリと下校していた。

ゴロゴロと太鼓のような雷の音が響き、ぽつりと大粒の水滴が朔耶の頬を打った。

「ああっ降って来た！」

走ろうかと鞄を脇に抱えた朔耶は丁度神社の前に差し掛かっていた事に気付き、雨宿りをして行くかダッシュして帰るかと逡巡した後、パラパラと降り始めた雨粒の大きさに雨宿りを選んで神社の境内へ駆け込んだ。

境内に人が居ない事を確認してから『精霊の風』を使って頭上に風の膜を発現させ、傘代わりにしながら屋根のある御堂まで走る。そこそこの広さを持つこの神社の境内は夏祭りや縁日などで賑わう事もあり、昔から地域の住人に親しまれて来た場所だ。

朔耶も子供の頃にはよく家族とお祭りに来た事があり、実穂や藍香と縁日に出掛けたりした事もある。

砂利を敷き詰めた境内は周囲を大きな木々で囲まれており、街の喧騒からは隔離されたような静けさを保つ。サーーッというノイズのような雨音と、時折聞える雷鳴にボンヤリ耳を傾けていた朔耶は、ふいに何かに呼ばれているような気配を感じた。

「……？」

キョロキョロと辺りを見渡すも、ここには朔耶以外に誰も居ない。幽霊の類がどうにも苦手な朔耶は、肩を震わせるとずぶ濡れ覚悟で走ろうかと腰をあげた。

……ヲ……ヤメヨ……

「え？」

覚えのある感覚に動きを止めた朔耶は、頭に響いた声の主に向かって意識の糸を伸ばすイメージを行う。向こうの世界に居る時のようには行かなかったが、ラジオのチューニングを合わせるように交感を試みた。

クロノ　ミコヨ　チカラノ　コウシヲ　ヤメヨ

『精霊……？　黒の巫女ってあたしの事？』

朔耶は此方の世界で初めてこれ程明確な精霊の意思を感じた事に驚きながらも、精霊の声に意識を向ける。

ワレハ　ケイコクスル　チカラノ　コウシヲ　ヤメヨ

『精霊術を使うなって事？　どうして？』

ヒトハ　チカラヲ　オソレ　チカラヲ　ツムグ　ミコヲ　オソレ
イズレ　ソレヲ　ホロボソウトスル
『それって……』

何時からの言い伝えなのかはハッキリしないが、この神社には巫女に纏わる昔話がある。昔はお祭りの日などに紙芝居で演じられていた事もあるお話で、朔耶も子供の頃に観た覚えがあった。

この辺りが小さな村であった頃、何処からかやって来た巫女さんが村に住み着いた。その巫女さんは神通力を使って雨を降らせたり、川の氾濫を防いだり、人々の病気を治したりと奇跡を起して村の人々から尊敬と信仰を集めていた。

ある年、隣村で疫病が流行り、近隣の村や町は疫病と飢饉に襲われて人々は飢えていた。そんな中、この村だけは巫女さんの神通力に護られ、村人は平穏に暮らす事が出来ていた。

それを知った一帯の土地を治める奉行が近隣の村町から疫病を祓い、飢饉から救うよう要請したが、巫女さんは自分の力ではこの村だけで精一杯だからと断った。

その話を聞いたある村の衆が、自分達の村が疫病や飢饉に襲われたのはあの村の巫女が良い縁起を独り占めし、悪い縁起を余所に回したからだと叫ぶと、他の村々の衆達もそれに呼応し、巫女さんの住む村に焼き討ちを行おうとした。

しかし、巫女さんの神通力によって喚ばれた大火や突風などで返り討ちに合い、村に被害は及ばなかった。

だが、村の人々は大勢の武装した群集を一人で返り討ちにした巫女さんの力を恐れ、村を護ってくれたお礼にと贈った神酒に毒を入

れて巫女さんに勧めた。

巫女さんは毒入りと知りながら其れを呷り、命を落とした。巫女さんが死んだ直後から村は三日三晩、雲も無いのに雷鳴と嵐に打たれ、畑は荒れ、作物は押し流され、家々は突風で倒壊した。

村人達は巫女さんの祟りだと恐れおののいたが、御祓いに呼ばれたお坊さんに、今まで巫女さんが抑えていてくれた災厄がいっぺんに訪れたのだろうと窘められ、鎮魂の祠を建てて巫女さんを祭る事で再び災厄から護られるだろうと説いた。

そして、お坊さんが何処か虚空を見ながら、これで赦してやって欲しいと頼むと、一陣の風が吹いて雷鳴も嵐もピタリと収まったという。

朔耶はこの話を思い出すのと同時に、今　交感で触れている精霊の言葉にピンと来るものがあった。お話の中に出て来る巫女さんの力は何れも精霊術のソレだと考えられる。

精霊が怒りで暴れたような描写もあるが、それは単なる災害に巫女さんの祟りを結びつけたお話的演出なのか、或いはそういう行動に出る精霊も居るのかは判断が付かなかったが、朔耶はこの精霊がお話に出て来る巫女さんに使役されていた精霊なのでは？と感じていた。

『今は大丈夫だよ、それにほら――』

自身の記憶を見せるように、朔耶は向こうの世界のイメージを送り込む。

オオクノミコ　オオクノワレラ　ナンジハ　セカイヲ　ワタル　クロノミコ

『黒の巫女ってのは、あたしと契約してる精霊との事だよね？　黒は偶々なんだけどなぁ』

強く警告を訴えていた精霊からの圧迫感が消え、穏かな空気に包まれる。相当に力の強い古い精霊らしく、自我に近い意識を持った精霊がこんな近くに居た事に、朔耶は驚きと同時に期待感があった。それを感じ取ったのか、精霊の方から問い掛けて来る。

ワレヲ　シエキ　シタイカ？

『うん、出来ればそうしてくれると助かるんだけど……この地の守護の仕事があるんだよね？』

これ程の精霊を使役出来れば、フレグンスを守護する精霊の力を借りる事無く向こうの世界に渡る事が出来る。だがその為に、この精霊の此処での役割を奪うわけにもいかないと、朔耶は二律背反な気持ちに迷った。

コノチノ　シュゴナド　シテオラヌ

『え”　でもお話じゃあ……』

ヒトハ　ツミノイシキカラ　ノガレンガタメ　ジシンヲ　ナットクサセル　モノガタリヲ　オモイエガク

『じゃあ、あのお話は何処までホントなの？』

若干の沈黙後、精霊は朔耶の問いに答えた。

ミコハ　トモニアッタ　ヒトヲスクイ　ウラギラレ　シンダ

『そう……』

精霊の声は抑揚の無い響きで紡がれるが、朔耶はそこに哀しげな雰囲気を感じ取った。

ワレヲ　シエキセヨ
『いいの？』

肯定の意識を返す精霊に、それならばと朔耶は早速この精霊と契約を交した。途端に意識を引っ張られるような感覚に呻く。

「うわっ　きっつ……」

朔耶は自身が精霊術に関して本来はまだ初心者の域を出ない未熟者である事を初めて実感した。交感能力の未熟な者が力のある精霊と契約した場合のリスクというモノを思い知る。

シュギョウガ　タリヌ
『う……分かってるわよ、努力するわよ』

何とか楽な意識の保ち方を模索し、一番負担の少ない状態に置くことが出来た。

余り意識をハッキリ覚醒させるとグイグイ引っ張られるので、ボケーっとしている状態が実は一番楽だと分かり、レティレスティアの天然気質はもしや精霊術が原因なのでは？と疑う朔耶だった。

「ただいま」
「お帰り～マイシスタ～！」

兄のような物体が歌いながらスキップで出迎えるので鞄を投げ付けて退治する。

「ヘイユー！　教科書の詰まった鞄を全力投球とは酷いんじゃあーりませんかユーアンダスタントメーン！」
「ごめん、今日はちょっとしんどいから付き合ってらんない」

謎の言語を操る兄をスルーして部屋に戻ろうとする朔耶のオデコに、ぺたりと大きな手の平が当てられた。ふむふむと熱を測っているが、朔耶は別に熱がある訳では無いんだけどなぁと思いつつもされるがままになっていた。ひんやりした兄の手が気持ち良い。

「ふーむ、熱は無いようだが……身体には気をつけろよ？」
「うん……」
「体調不良で向こう行きが中止になったら、姫様ご招待が流れてしまうからな」
「そっちの心配かい！」

ぺいっと手を払い除けて部屋に戻った朔耶は、そのままベッドに倒れ込むようにして横になった。

「う～～……結構しんどいわ、これ……」
ウツワヲ　フカメヨ　ココロヲ　ヒロゲヨ
「へ～～い……」

朔耶は精霊のアドバイスにダルそうな返事を返してモソモソと起き上がると、精神統一の修行に入った。自分の意識に集中し、まず

身体一杯に広がり、身体を包むように巨大化して部屋一杯に広がり、さらに広がって家一杯に、町一杯に、と何処までも広がっていくイメージを展開する。

地球や宇宙といった具体的な大きさの概念を持っている此方の世界の人間は、まだその辺りが有耶無耶な向こうの世界の人間よりもイメージを広げ易い分、交感能力を伸ばす修行の効果も効率が良かった。

『そういえば、向こうへは渡れそう？』

モンダイナイ

『そっか、じゃあこの前みたいな力使っても大丈夫だよね……』

キオクニ　ミル　コウシサレタ　チカラ　ワレヲ　シタガエネバ

オモイノママトハ　イカヌ

フレグンスを守護する精霊は王族を護る事、王族の願いに添う事が大前提として在る。レティレスティアの願いに添う形で自ら朔耶に協力していた事もあり、尚且つ希薄な意識が朔耶の意識に引き摺られるように朔耶の意思で精霊の力が発現していた。

しかし、自我に近い強い意識を持つこの神社の精霊と重なった場合は、朔耶の意識に引き摺られる事無く精霊の裁量で力の行使が行われると指摘する。朔耶自身が気付かない危険にも精霊が反応する事が出来るので一長一短だと言える。

『えー、使役したってダケじゃ駄目なの？』

ワレトノ　ケイヤクハ　ユウコウ　ワレヲ　ツカウニハ　シュギョウガ　タリヌ

『そこは使役者に協力してくれるって事で……』

シュギョウニ　ダキョウハ　キンモツ

『けちー……』

中々厳しい精霊と契約してしまった事に、朔耶は『もう少し考えるべきだったか』などと考えていると、神社の精霊が励ましの言葉を掛けた。

ナンジヲ　リッパナ　ミコニ　ソダテテ　ミセヨウ

『あたし別に巫女さんじゃないんだけどなぁ……』

「でもまあ、ヨロシクお願いします」

朔耶はそう声に出して、古い神社の精霊を仰いだ。

クリューゲルの首都カースティアから南に数キロの地点に組まれた傭兵団の陣地では、各団長が集まり今後の戦略が話し合われていた。エバンスから脱出したフレグンス辺境騎士団がクルストスを制圧してエバンスへの反攻に動いており、カースティアからも傭兵団を迂回してエバンスを目指している隊が居ると聞く。

もはやサムズの反乱は失敗したと見られる中、カースティアに集結中のフレグンス軍本隊と戦う意味が無いのではないかという声が

上がる一方、戦う意味など考えるまでも無いと作戦の継続を促す声もあった。

「我々傭兵は契約に従って料金分の戦いをする、それだけだろう」
「サムズの反乱の成否はこの際関係あるまい。俺達はただ仕事をこなすだけだ」

傭兵団の中でも取り分け大所帯の大手な団は契約厳守を推し、他の団もそれらの意見に倣うように作戦の完遂を選んだ。

「では明朝、攻撃開始と行きますか」
「うむ、うちの団はそれで問題ない」

開戦のタイミングを話し合い、総指揮をどの団に任せるか等の細かい取り決めを終えた彼等は明日の戦に備えて控えめな酒盛りを始めた。他愛無い戦功話に花を咲かせているうち、団長の一人がフレグンスの戦女神の噂について口にする。

曰く、空を覆うばかりの光の翼を持ち、戦場を自由に翔けまわる。
曰く、翼から放たれる癒しの光は死者をも蘇えらせる。
曰く、大軍を一瞬で葬る死の閃光を放つ。

「わっはっはっ　何処の悪魔か神話の神だソレは」
「いや、眉唾も多分に混じってはいるだろうが、カースティアを攻めた部隊はソレに壊滅させられたらしいぞ」
「そう言えば、儂等を運ぶ予定だった竜籠がソイツに竜ごと分捕られたって話も聞いたな」
「クルストスから逃げて来た連中の話じゃあ、見掛けは黒い髪をした子供らしい」

具体的な容姿まで報告されているとなると単なる戦場の噂話で片付ける訳にも行かず、警戒はしておくに越したことは無いと真剣な話になった。

「現われると思うか？」

「どうかのう……竜籠の話もカースティアの話もクルストスの話も、僅か一日二日違いって所じゃしなぁ」

「つまり、ソイツは一日や二日でカースティアからクルストスまで移動出来ると？　転移術か何かか？」

「いや……元から何人か居るんだとしたらどうだ？　何せフレグンスは精霊の国だ、精鋭の精霊術使いとか」

そうして推測混じりの議論が進められ、戦女神の正体として最も現実的な『フレグンスの特殊精鋭精霊術部隊』が存在するのでは？、という結論に至っていた。部隊名はサクヤ。

「サクヤか……最近話題の多いサクヤ式と関係あるんかのう？」

「フレグンスのサクヤ式と言えば、異国の発明家が考案したモノだそうだな」

「んん？　俺は異国の魔術士だと聞いたぞ？」

「発明家の魔術士なんだろう？　何でも王族に上手く取り入って異例の出世をしたと聞くぞ」

団長達の話題は次第にズレて行ったが、内容はともかく何れもある一人の人物を指している事を知る者は居なかった。

「母様、そろそろお休みになられては？」
「……そうですね、部屋に戻りましょうか」

城の書庫に籠もり、連日　精霊術に関する文献を読み漁っていたアルサレナは娘に促されて席を立った。朔耶が三度此方の世界に現われるまで後僅か、レティレスティアと朔耶の精神融合を防ぎながら深く繋がって世界を渡る方法を探しているのだが、思うように成果は上がらなかった。

「やはり、例の無い事だけに無理がありましたか」

意図的に精霊と重なる方法があるならば、先人の術者達がとっくに試して後世に伝え記されている筈だ。朔耶の例は本当に偶然の奇跡が生んだ異例中の異例なのだろうと、アルサレナは娘を王族史上最高の精霊術士にする事に未練を残しながらも無理なモノは無理と諦めた。

そうなれば次に考えなくてはならないのは朔耶の事だ。朔耶と重なる精霊はフレグンスを守護する由緒ある精霊だった。朔耶が此方に居る間、朔耶自身の持つ異世界の知識と精霊の力を持って、フレグンスは類稀なる恩恵を受ける事が出来る。
朔耶が現れるまでは停滞感と閉塞感に衰退の色さえ浮んでいたフレグンスは、今では嘗て無い程の活気に満ちている。

「精霊との契約が切れない程度に、力を抑えて貰う……それが一番なのでしょうね」
「……私は、サクヤが居てくれるだけで十分です」

王族の住居となっている城の上層に向かいながらポツリポツリと

言葉を交す母と娘。母アルサレナは娘のそんな言葉に最近気になっていた事を尋ねてみる。

「ところで、この頃イーリスとはどうなのです？」

「えっ？　イーリスは……」

突然の話題の転換に言葉を詰まらせるレティレスティア。朔耶が帝国に連れ去られた後、レティレスティアは少しでも交感能力を高めようと祈りの儀式に集中していたし、イーリスも彼自身の忙しさもあって余り会話をしていなかった。

「その様子ではあまり進展はしていないようですね」

「はい……」

レティレスティアのイーリスに対する好意が褪せた訳ではなく、イーリスもレティレスティアに対する気持ちは以前と変わりない。ただ間が悪いのかタイミングが合わず、互いに擦れ違いが続いていた。

「貴女もそろそろ世継ぎの事を考えていい頃なのですがねぇ」

「ええっ　わ、私……まだ結婚もしていませんし……」

首元から赤く染まってシドロモドロになる娘に、少し箱入りにし過ぎたかと悩みの種を一つ増やすアルサレナだった。

「お兄ちゃんに残念なお知らせがあります」

朝食を終えて玄関を出た朔耶は、靴の爪先で地面をノックしている兄に唐突に切り出した。

「レティの訪問が無期限延期になりました」

「なにぃーーーー！」

頭を抱えて天を仰ぐ兄。朔耶は予想範囲内の反応だったので気にせず言葉を続ける。

「つきましては、写真だけでも撮影して来てあげましょう。良いカメラがあれば……」

「幾らだ！　機種はなんだ！　やっぱデジタルか！」

兄に新型カメラを買わせようと画策する朔耶を尻目に、未だ姉の言う異世界について半信半疑な理屈弟は黙って自転車を押し出した。それに気付いた朔耶は颯爽と荷台に乗る。

「ちょっ　朔姉、重いって」

朔耶は帰って来た日以来、弟とは余り会話をしていなかった。明日にはまたオルドリアの地へ渡るつもりだったので、弟とのぎこちない空気も早く払拭しておこうと行動に出たのだ。

「はいはい、お姉ちゃんのスキンシップを燃料にきりきり漕ごうねー」

「俺はシスコンじゃねぇ！　つか顎を撫でんな！」

「あたし、明日にはまた向こうに行く予定だから、何か御土産いる？」

ゆっくりペダルを漕ぎ出した弟の腰にしっかり手を回し、異世界の話をアピールする。家族に事情を話した時、一番多く質問し、一番納得していないのが弟だった。

「……じゃあ魔力石とそれを使った道具のサンプルと測定器」

「何か作る気？　いっとくけど精霊の力が無いと簡単には加工出来ないよ？」

「石の加工なんか工夫次第でどうとでもなるじゃんか、父ちゃんの工場にも鉄を加工する機械があるだろ？」

「あ、そっか」

朔耶は向こうにある物の事だったのでうっかり向こうの世界を基準に考えてしまい、石の加工も此方の世界の技術でなら大して難しく無い事に今更ながら気付いた。

「こんなに抜けてる朔姉が活躍出来る世界じゃあ、俺が行ったら即英雄だな」

「ああん？　何ソレ、もしかしてあたしとお兄ちゃんで向こうに行った事あるのが羨ましかったとか？」

「別にそんなんじゃねーよ！」

「そっか、そっか、タカ君も連れて行って欲しかったのか～～、ふーーん」

朝からギャーギャーと騒がしい姉弟を乗せた自転車が通学路を進む。昨晩遅くまで降り続いた雨のお蔭か、空気の澄み切った朝はとても清々しい風に包まれていた。

体育の時間、クラスメイト達がグラウンドでバレーのネットを組んでいる傍ら、朔耶は制服のまま校舎の影に座る。

「あれ？　朔ちゃん見学？」
「うん、ちょっとダルくてね」
「昨日もダルそうにしてたけど……アノ日？」
「違うわよ」

ボールを器用に指先でクルクルと回しながら声を掛ける藍香は朝からボンヤリしている様子だった朔耶を心配していたが、朔耶は少し調子が悪いだけだからと笑って手を振った。

朔耶は先日よりは幾分マシになったとはいえ、神社の精霊との契約に意識を引っ張られて注意力が散漫になっているので、あまり身体を動かしたくなかったのだ。

『油断するとうっかり精霊術使っちゃいそうになるんだもんなぁ』

向こうに行けば精霊と重なる事でこの状態は解消されると予想するが、朔耶の意識がそのまま精霊の力として発現されない事にどれ程の影響があるのか想像も付かない。

『魔力石の加工とかにも精霊の力使ってたしなぁ……意識が混ざって性格変わったりしないでしょうね？』

……ソレハ　ナイ

若干の『間』が気になったが、精霊が大丈夫と言うなら大丈夫なんだろうと朔耶はポジティブに流す事にする。バレーの授業では藍香が猛烈な天井サーブを打ち上げて隣のグラウンドで野球をやっている男子達の頭上に叩き込んでいた。

「ホームランサーブ！」

「藍香ちゃん、そのサーブじゃ勝てないよぉ」

何故かポーズを決めている藍香と実穂の掛け合いに、朔耶はクスリと笑みを浮かべた。

「？」

和んでいた朔耶の足元に何かが転がって来る。見るとそれは彼方此方汚れのついた軟式ボールだった。先程のホームランサーブの空爆で守備が乱れた為、取り損ねたボールが此処まで飛んで来たようだ。

「すまーーん！　投げてくれーー！」

センターを守っていた男子が叫んでいる。朔耶は和みモードでボンヤリした意識のままボールを拾うと、バックホームを叫びながら両手をぶんぶん振っているキャッチャーに向かって投げた。

うっかり精霊との交感中に『キャッチャーに届く』イメージを浮かべながら。

精霊の風に包まれるように運ばれた軟式ボールは二百メートル近

く離れたキャッチャーのミットに吸い込まれていった。

「……あ」

ワレデハ　ナイゾ

唖然とした表情を向けるクラスメイト達。

「あー……な、何か変な風吹いてるみたいだねー、藍のサーブも随分飛んだし」

「え？　ああ、ナルホド」

「びっくりしたぁ　朔耶ちゃんどんな肩してるのかと思ったよー」

そのやり取りで皆は納得し、暫し朔耶の大遠投についての雑談で賑わう。『やってしまった』と硬直していた朔耶は藍香のホームランサーブを引き合いに出す事でなんとか誤魔化す事に成功した。

『ふう、危ない危ない……流石にこっちで精霊術なんて使って見せたら大騒ぎになっちゃう』

シュギョウガ　タリヌ

「デジタルカメラとポラロイドカメラ、フィルムボックスにメモリーカードっと」

帰宅後、朔耶は明日に備えて持っていく荷物の整理をしていた。
フレグンスの城に置きっぱなしのリュックや帝国の城において来たジャケット等、回収して起きたい荷物もリストアップしておく。

「携帯も向こうのリュックに入れっぱなしなんだよねー」

今回は家族公認の異世界行き、前もって準備をしておけるので服装等も動き易くポケットの多い便利なモノを選んだ。あれば便利な道具も幾つか持って行こうかと考えたが、あまり此方の世界のモノを持ち込まない方がいいという弟の忠告に従い、最低限に控えておく。

「朔姉、ご飯」
「今行くー」

朔耶は何時もより少しだけ豪華な夕食を家族と楽しむと、まだ話していなかった神社の精霊の事を打ち明けた。

「ほう、あの神社にそんな精霊が居たのか」
「懐かしいわねぇ、あのお話ってお母さんが子供の頃にもよくお祭りで聞いてたわ」

契約したのは良いがまだ御しきれていない為、此方の世界にる間は暫らくぼーっとしてる事が多くなると説明しておく。

「そういう事はなんでもっと早く言わないかな、学校まで車で送迎してやったのに」
「んー、早く慣れなきゃイケないし、流石に車で送り迎えはねー」

身体や健康に害は無いのかと心配する両親に、それは大丈夫だからと言って安心させた朔耶はご飯とオカズを平らげた。ぼーっとしていてもお腹は空くのだ。　夕食を終えてお風呂を済ませた朔耶は早めにベッドで横になった。

『向こうじゃ戦争みたいになってるけど、明日からヨロシクね？』
アンズルナ　カナラズ　ナンジヲ　マモッテ　ミセヨウ

意識の繋がりを通して地下の精霊も同意の念を送って来た事に、朔耶は感謝の念を持って眠りに付いた。

明朝、五時――

「くれぐれも危ない事はしないようにな」
「姫様の写真！　期待してい……ぐほっ」
「無理すんなよ？」
「ちゃんと帰ってくるのよ？」

早い朝食を軽目に済ませ、家族の励ましを受けた朔耶は大きく頷いて荷物を身につける。　荷物といっても、カメラの入ったウェストポーチと他ポケットに入る小物だけだ。

「じゃ、行って来ます」

まだ夜が明けきらない朝、準備を整えて家の庭に出た朔耶は、家族に見守られながら精霊に呼び掛ける。

『向こうへ送って』

地下の精霊が世界を渡る道を開き、神社の精霊が彼の地へと朔耶を運ぶ。朔耶の中に入った神社の精霊は内側から包み込むようにしながら異世界に存在する自身の遍在へと転移した。

バサバサッバフンッ

「わきゃ！」

景色が変わった瞬間、突然の浮遊感から落下、何か堅い布のようなモノの上に落っこちた。

「ちょっと、何よこれー……」

スマヌ　スコシ　イチガ　チガッテイタ

灰色の大きな布の上に落ちた朔耶はその上をスルスルと滑って地面に着地、振り返って見るとその布は大きなテントだった。屋根部分に落下したらしい。周囲にも同じような形をした大小沢山のテントが並び、それぞれの出入り口付近には篝火が焚かれている。

一体何処に出たのかと薄暗い辺りを見渡していた朔耶の首筋に、

冷たい鉄の感触が押し当てられた。

「足を滑らせるとは随分と間抜けな間諜もいたモノだな、フレグンスの者か？」

背後から声を掛けられ、振り返る朔耶。そのあまりに無防備な行動に、剣を当てていた男は若干眉を顰めると剣の刃をずらして一歩退く。首筋に剣を当てられているのにそのまま振り返るなど自殺行為だ。

咄嗟に刃をずらしたお蔭か、朔耶の細い首には傷一つ付いていないが一歩間違えば動脈が切れていた。

「お前……素人か？　どっから忍び込んだ」

「え、えーと……」

来ていきなり剣を向けられた事で朔耶も面食らってしまい、状況の把握に梃子摺っていた。ただ、男の口から『フレグンス』の名前とそれに関連して紡がれた言葉から推測して、一つの可能性が浮ぶ。

『これって、もしかして……』

「団長！　どうしました！」

「その娘、何者です？」

「見た事の無い格好だが、間諜の装備に似ているな……」

わらわらと武装した厳つい面の猛者っぽい男達が集まって来た。

「分からん、それを尋問している所だ」

「フレグンスの間諜じゃねぇんですかい？」

「俺もそう思ったんだが、どうも素人らしい」

「素人が俺達の陣地に忍び込んだってんですかいっ？」

彼等の会話を聞きながら朔耶は半ば確信していた。朔耶が現われたここは――

「ああ、しかも俺のテントの屋根に登ってたようだぞ？」

「団長の？！」

「ハッ　大した娘だなっ　この『銀月の牙』パーシバル傭兵団の陣地に忍び込むたぁよ」

『……こら精霊』

……スマヌ

カースティアを攻める傭兵団陣地のど真ん中だった。

47話：動乱の収束と暗躍

「俺はブラット、”ブラット・パーシバル”だ。この銀月の牙という団を率いている」

そう言ってブラットは剣先を目の前の少女に向けると、軽い口調で尋ねた。

「で、お前の名は？」

「……都築」

神社の精霊と話して一通りの力は使える事を確認した朔耶は、取り合えず敵状視察の意味も兼ねて暫らく彼等の様子を探る事にした。危なくなれば直ぐに逃げられる事が分かっているので、剣を向けられていても先程よりは落ち着いて対応出来る。ついでに”朔耶”の名前は伏せて姓を名乗った。

「ほぅ、ツヅキか……随分と落ち着いているな、お前は何者で何の目的で此処へ来た？」

「あたしは学生でフレグンスの友達に会いに来たの、此処へは偶々というか不可抗力で着いちゃっただけよ」

スラスラと答える朔耶。一応、嘘では無い。ブラットは片眉をあげると朔耶の瞳を覗き込みながらその答えの内容を吟味した。嘘を言っている眼では無いと判断出来るが――

「学生が、夜に一人で、街道でも無い場所を進んで、偶々傭兵団の陣地のど真ん中に出てしまったと？」
「無理がある？」

てへっと笑う少女に、どうしたモノかと考えているブラットの周りでは部下の団員達がアレやコレやと朔耶の正体について議論を交している。

「団長、やっぱり間諜じゃねえんですか？」
「取り合えず縛っときますか」

辺りを警戒しながらそう進言した彼等は、朔耶の余裕の態度を『少女の仲間』が動く為の時間稼ぎなのではと睨んだ。歩哨に他の団の陣地で何か変化が無かったかを尋ねに行く者も居る。

『銀月の牙』は総勢二十人程で構成された小規模な傭兵団だが、その実力は高く、大手の傭兵団とも張り合える程の力を持つ少数精鋭志向の団だった。上からの指示無しでも其々が個々の判断である程度の行動を起こし、それで足並みが揃う所がこの団の強みでもある。

団員の一人が朔耶を拘束する為に細い縄を持って近付くと、朔耶はひょいっと後ろに下がって避けた。

「こら、避けるな」
「やーよ、縛られるなんて御免だわ」

クルリと身を翻した朔耶はテントの後ろに周り込むように走り出す。

「あっ　逃げた！」

縄を持った団員が慌てて追い掛けて行く。ブラットは周囲の様子を探りに出ていた部下に結果を尋ねた。

「どうだった？」

「特に異常はありませんでしたね、侵入された形跡すらありません」

「……転移術か？」

「その可能性もありますが、トンデモない博打になりますよ？」

転移術は精霊術の中でも高位の精霊との契約が必須で、転移先をしっかりイメージ出来なければ悲惨な事故に繋がる高等且つ危険な術だ。離れた場所から目視出来るこの陣地内のテントの屋根を目標に転移したとして、それがどれ程危険で意味の無い事かを考えると、益々『ツヅキ』と名乗ったあの少女の正体も目的も分からなくなってしまう。

「ええい待てと言うに！　大人しく縛られろ！」

「やだってば！　変態！」

「なにおう！」

テントの間を逃げ回っている黒髪の少女と縄を持った団員の追いかけっこを眺めながら、ブラットは敵方の陽動や攪乱を視野に入れつつ、もし諜報として忍び込んだのならば逆利用する手立てを思い描く。

手っ取り早く処分しようと考えないのは、少女が素人で堅気の世界の人間である事を見抜いたからだ。演技であの雰囲気を纏えるなら相当な腕利きとも考えられるが、少女からは血の臭いがしなかっ

た。

「素人の腕利き諜報員か？」

「なんですかそれは……？」

団長の矛盾に満ちた変な呟きに呆れた口調で突っ込みを入れる部下。『銀月の牙』はそんな雰囲気の傭兵団であった。

縄男から逃げ回っていた朔耶は、一際大きなテントの中に大勢の怪我人が横たわっている姿を見つけて足を止めた。追い掛けて来た男は少女が急に立ち止まった事を訝しんだが、少女の視線の先を見て納得する。団長の見立て通りこの少女が素人なら、この光景を見て足を竦ませるのも道理だと考えた。

野戦病院のような惨状、消毒用のアルコールと薬草の臭いに血の臭いも入り混じり、呻き声の絶えない陰鬱としたテント内の空気に、朔耶は帝都の城で見たやたらと空気の悪い病室を思い出した。

「なんで、こんなに怪我人がいるの？」

「んん？　そりゃあお前、この間の一戦でやられたに決まってるだろう」

彼等傭兵団の大部隊は先日、カースティアのフレグンス軍と既に一戦を交えていた。未明に行われた戦闘ではカースティアの街を防衛するフレグンスの王国騎士団とは別に、帝国に集められていた傭

兵部隊が迎撃部隊として打って出て来た為、大混戦となって双方にかなりの被害を出した。

フレグンス軍は帝国から派遣された傭兵部隊こそ三分の一程の戦力を失ったが、防衛に回っている騎士団は無傷で健在。

サムズ側の傭兵団は元々の契約が帝国と交されたモノで、『サムズの軍としてクリューゲルの首都を攻める』契約内容だった為に、カースティアの街を前に行われた戦闘は何れも帝国に雇われた傭兵同士がフレグンス軍とサムズ軍に分かれて戦うという、あるいみ不毛な戦いであった。

個人で雇われるフリーの傭兵達と違って名誉も求める傭兵団の彼等にしてみれば、同じ帝国に雇われている立場ながら相手はフレグンス王国とグラントゥルモス帝国という二大列強国の代表のような立場で戦い、此方は反乱国のサムズ代表。しかも敗戦濃厚。

カースティアで戦果を上げても追加報酬が支払われる訳でもなく、傭兵団として名は覚えられようものの、それで得られる名誉では得る為の代償としての働きに見合わ無さ過ぎる。

「ま、一言でいうなら『やってられっか！』ってトコだな」

戦いの意味など関係なく料金分の戦いをするだけだと嘯いていた彼等も流石にこの状況には戦闘意欲を無くし、カースティアから少し下がった所に陣地を築いて時間切れまで睨み合いを演じる、つまりエバンスが制圧されるまで待つ事を選んだ。

「それって、つまり　もう戦うつもりは無いって事だよね……？」

グルグルと縄で縛られながら朔耶は考える。ここに集まっている

傭兵団は既に戦う気が無く、エバンスが制圧されればそこで契約終了『お疲れ様～』と解散する事になる。それならば、自分がエバンスに飛んで制圧を手伝う事で手っ取り早くこの騒動を終わらせられるのではないかと。

「……？」

陣地内を連行されながら、朔耶は勘に何か引っ掛かるモノを感じた。何と無く『ここを動かない方が良い』という予感めいた感覚。

『ねぇ、何か変な予感がするんだけど……』

ウム　タタカイ　ノ　ケハイ　ゲンキョウ　ソレガ　チカヅイテオル

精霊のお墨付きで朔耶の予感は確信に変わった。本当は直ぐにでもエバンスに飛んで行きたかったが、一番戦力の集中しているココに居た方がイザという時に介入して戦闘を止め易いと考える。犠牲も少なく抑えられるかもしれない。

そうして『銀月の牙』の陣地まで連れ戻された朔耶はブラット団長に交渉を持ち掛けた。『自分はフレグンスに顔が利くので、時間切れまでココに置いて貰えればイザという時に停戦交渉を行える』と。

「……本気か？」

「悪い話じゃ無いと思うけど」

ブラット団長を始め団員達はこの”ツヅキ”と名乗る少女の提案に途惑った。このまま戦闘を続ければ無駄に消耗するダケの彼等にとって、提示された提案そのモノは確かに悪くない条件である。しかし、フレグンスに組する彼女が敵である傭兵団に利するような提

案をする意図を測りかねているのだ。

「別に、あたしは早くこの騒動が終わって欲しいだけだよ」
「信用出来るのか？」
「あたし、こう見えても王室に顔が利くよ？」

朔耶の言葉を聞いて色めき立つ団員達。身分に厳しいフレグンスにおいて王室に顔が利くという事は、少なくとも中流以上の大貴族であり、門閥家や公爵家に所縁のある者と考えられる。

「なあ、それならこの娘を人質にすりゃあ　カースティアの門も開けられるんじゃねえのか？」
「いやまて、そもそもそんな身分の娘が何でこんな所に居るんだ？」
「でまかせ言ってるんじゃないのか？　俺にはとてもあのお堅い王国貴族の娘のようには見えんぞ？」
「いやいや、確かに貴族っ気は無いがよく見てみろよ、この髪とか肌とか、普通の街娘や娼婦じゃあこうはいかねぇぜ」

口々に意見を出し合う団員達の言葉に耳を傾けていたブラット団長は、縄で縛られて拘束されていても尚、飄々とした様子でいる少女を注意深く観察した。僅かな緊張は見て取れるものの、怯えの欠片も感じられない。

「ふむ……　お前の言う事が本当だとして、俺達の団だけで決められる問題じゃ無いからな」
「なんで？　あたしを置く位はこの団の中だけで良いんじゃないの？」

ブラットは”ツヅキ”を試す意味で提案に乗り気で無い様な回答を向けてみたが、”ツヅキ”の表情に迷いや焦りの色は浮かばない。

相手にとって何がどうすれば都合が良く、また悪いのか、それが分からなければ交渉はやり難い。
　この少女にとって困る条件は何だろうかとブラットは思い付くまま並べてみるが、どれもこれも流されたり躱されたり逸らかされる。

「うちの団に置くからには、団長命令には絶対服従になるが……」
「あ、別に団に入るわけじゃないからパス　一緒に居るってだけだよ」

「団員達の世話をして貰う事になるが……」
「食事の手伝いと洗濯位は面倒みてあげるわよ？　それ以上はパス」

「……お前、自分の立場分かってるのか？」
「勿論、イザという時の安全保障人ね。　手荒に扱うと後々フレングスと帝国にも睨まれるよ～？」

　仕舞いには二大列強国を笠にした脅しまで掛けて来た。　帝国皇帝にも顔が利くと言う。

「お前は……　一体何者なんだ？」
「学生のツヅキです」

　こんな小娘がフレグンス王国の王室やグラントゥルモス帝国の皇帝にまで顔が利くなど俄かには信じられない話だが、”ツヅキ”の瞳は嘘偽り無い事を示すかのように真っ直ぐブラットの瞳に向けられている。

「……いいだろう」

　ツヅキの話が本当であろうと無かろうと、少女一人が屈強な猛者

の集まる傭兵団陣地の中で出来る事など知れている。そう判断したブラット団長は、ツヅキを作戦終了まで陣地内に置く提案を受け入れた。

『？　……サクヤ？』

――おはよーレティ――

寝室で朝のお茶を嗜んでいたレティレスティアは、朔耶からの交感にボンヤリしていた意識を覚醒させる。今日は朔耶が此方の世界にやって来る日だと楽しみにしていたレティレスティアだったが、朝一番で挨拶が来るとは予想していなかった。

『まぁ！　おはよう御座いますサクヤ、もう此方に来ていらしたのですね』

――うん、大分早く来てたんだけどね　ちょっと事情が出来たんで暫らく王都に行けないかも――

『え？　何か問題が……？』

朔耶は元の世界で力の強い精霊と契約出来たのでフレグンスを守護する精霊との問題が片付いた事と、その精霊のポカで此方に来て早々サムズに属する傭兵団の陣地に出てしまった事を伝えた。それを聞いたレティレスティアは青褪める。

『そんな！　無事なのですか！？　直ぐに近衛と聖騎士団の派遣を……っ』

――だーっ　落ち着きなさいって、無事じゃなかったらこんなノンビリ交感繋いでられないっしょ？――

『そ、そうですね……ごめんなさい』

――あたしの方は心配しなくても大丈夫だから、悪いけど皆によろしく言っといて？――

カースティア近郊に展開する傭兵団内部の情報を伝え、先日の一戦以後　彼等に戦闘を続ける意思が無い事、このまま刃を交えずに終わらせるつもりである事、その為にはエバンス制圧を急ぐ必要がある事などを説明した。

王女を伝言に使うという通常ならば不敬な行為と断じられる非常識なお願いをしている朔耶だったが、お願いされている当の本人がその辺りの事を気にしていないばかりか、朔耶と交感を繋げられる事に特権的な意識を持っているので何も問題にならなかったりする。

『では、サクヤは幾らでも此方に居られるのですね？』

――ん～　あたしも向こうで学校とかあるから、休みの日とかならこれからもコッチに来られるよ――

フレグンスを守護する精霊とフレグンス王族との契約状態によっては、朔耶はもう此方に来られなくなる可能性があっただけに、レティレスティアの喜びと安堵も一入だった。

――戦争とか面倒な事は早く終わらせてさ、また平和にマッタリお茶しようね？――

『はいっ　マッタリお茶しましょう』

第一王女に俗な言葉を吹き込んだりしながら、朔耶は『またねー』と交感を解くのだった。

「そうだわ、早く母様にお伝えしないと」

交感を終えた朔耶は大鍋の前で次々とお代わりを要求する団員達の容器に、鍋の中を掬っては移す作業に没頭していた。鍋の中身は肉と芋のような作物が入ったカレーである。

朔耶が持ってきた小物の中に何故かカレーのルーがあったのでそれを使って作ったのだ。

「すげーうめぇ！」

「ツヅキの国のシチューは最高だな！」

「カレーだってば」

すっかり団員達の餌付けをしている朔耶だった。

「おい、あの娘はなんだ？　お前等の所にあんな娘いたっけか？」

「ちょっと訳ありでな、うちの団で暫らく預かる事になったのさ」

傭兵の着る厚手の重い洗濯物を抱えてヨタヨタ歩いている黒髪の少女を見た隣の陣地の傭兵団員が尋ね、銀月の牙の団員がそれに答える。ブラット団長からはあまり公にするなと言われているので詳しい経緯などは伏せておく。

「へぇ……いいなぁ、うちは人数多い割りに女っ気ねぇからなぁ」

「まあ、女にゃ変わりねぇけど……　まだガキだぞ？」
「なーに言ってやがる、バーリッカムの街角じゃあの位の歳の春売りなんざザラに立ってるだろうが」

帝国との集団契約を経てサムズまでの長旅、計画前倒しでクリューゲル侵攻作戦、しかも輸送手段である竜籠が不測の事態で使えなくなって徒歩での移動、挙句名誉もへったくれも無い傭兵同士の代理戦闘で痛み分けという、ここ数十日間ほど続く殺伐とした環境。

大手の傭兵団と違って小規模から中規模の団では磨耗する団員達の心を慰める人材を雇い込むような資金的余裕は無く、この遠征の過酷な環境下で潤いと享楽に飢える気持ちは分からなくも無いと思いつつも、銀月の牙団員は話し相手の傭兵団員に釘を刺しておく。

「団長のお気に入りなんだから、手ぇ出してくれるなよ？」
「ハハッ　”銀月の牙”に喧嘩売るほど命知らずじゃねえよ」

自分の貞操に関わる会話がなされているとも知らず、朔耶は勝手の違いすぎるタライと洗濯板に四苦八苦しながら極厚の服と格闘していた。

「こういう時こそ精霊の力がモノを言うのよ」

地味に『精霊と重なる者』の力を発揮して汚れに落ちて貰う朔耶なのであった。

昼過ぎ――

団員の強い要望により、昼食も残ったルーを使ってのカレーを作った朔耶は怪我人のテントにも団員が居る事を聞き、大した怪我では無いとの事だったので　それならばと、容器にカレーを入れて怪我人を収容しているテントにやって来た。

血の臭気に呻き声は相変わらずだったが、臭いの方はカレーの香りが勝ったらしく、地の底から響くような『ううううー……』という呻き声が『ううううー？』と疑問系に語尾を上げる。

「銀月の牙の団員さんいますかー？」

端の方でキョトンとした表情を向けながら『俺だ』と声を上げた包帯の男にカレーを運ぶ。彼は見知らぬ朔耶の事を訝しんでいたが、朔耶がブラット団長と交渉して団に置いて貰っている事を話すと一応の納得を見せた。

そしてやたら食欲をそそる香りを漂わせる見た事の無いシチュー系の食べ物を勧められて一口啜ると『うめぇ！』と一言、ガツガツ食べ始めた。朔耶はそれを楽しそうに眺めてから周囲の怪我人の様子に目をやる。

イヤスノカ？
『そうしたいんだけど、出来る？　あんまり派手にじゃなくチョット治るくらいで』
ゾウサモナイ

ほんの一瞬、テントの中の空気が変わった。カレーの香りで気付

く者は居なかったが、テント内に居る怪我人の傷が二割程癒された。
容器を回収して陣地に戻る最中、神社の精霊が朔耶に語り掛ける。

『なに？』
チカラノ　コウシヲ　ヒカエルハ　ヨイ　ハンダンデアッタ
『そう？　ほんとはパーっと治しちゃいたいんだけどね』
ヒトハ　チカラヲ　オソレル　コレカラモ　コウシヲ　ヒカエルコトヲ　ノゾム

未だ力の行使を控えさせようとする嘗て主を失った神社の精霊に、朔耶は一度じっくり話し合う必要があると感じた。

『カースティアの攻略はどうなっている』
「さて……　傭兵共も小癪な策に出ているといった所でしょうか」
『ふんっ　忌々しい傀儡の小僧め！　要らぬ事をしてくれる』
「まぁこのまま戦が終わるのは聊か……」

エバンスの地下にいる帝国の元側近と発掘品の伝送具を使って含みだらけの会話を交す特徴的な髭の男。

『分かっている、取り合えずお前はカースティアに赴き、傭兵共を嗾けて来い』
「飾り言葉で動きますかねぇ？」

『街を丸ごとくれてやるとでも言ってやれ、クリューゲルの首都なら連中の気を引く物の一つや二つあるだろう』
「そうですなぁ　オールグレンの武具辺りでもちらつかせれば乗って来るかもしれませんなぁ」

伝送具の向こうで元側近は何やらブツブツと呟き、やがて返答を返す。

『いいだろう、オールグレンの武具一式を二百程用意させる事を伝えて動かせ』
「分かりました、ではまた後日」

薄い板状の伝送具を部下に渡すと、部下は受け取った伝送具を丈夫そうな革の鞄に仕舞い込んだ。そうして男の身体に纏わり付くように腕を絡める。

「まったく、気配は似ていても所詮は俄か魔族、エイディアス帝の実験動物には変わりなかったな」
「やはり、お見捨てに？」
「使えん者を飼って置いても仕方なかろう？」
「っ……ん」

纏わり付く部下、キルトを抱き寄せたヨールテスはその首筋に牙を立てると、体内に蓄積された魔力を吸い始める。七日程前、突如現われた光の翼を持つ朔耶によって傭兵達共々荒野に放り出されたヨールテスとキルトだったが、幸いにもキルトの体内には許容量限界まで魔力が詰め込まれた状態だった為、体内呪文の維持に必要な魔力は確保出来ていた。
サムズ独立派がカースティア郊外に残して行ったアジトを隠れ家に、彼等は数日前から潜んでいたのだ。

「ふぅ……それにしても上質な魔力だな、一度直接本人のモノを味わってみたいモノだ」
「ん……はぁ……下手をすれば……ヨールテス様でも……あの魔力の奔流には……んふぅ」
「対抗策はあるのだよ、知っているか？　あのサクヤという娘、三流魔術士による眠りの香で意識を奪われ、帝国に運ばれたのだそうだぞ？」
「まあ……眠っている隙に頂く御つもりですか？」

摂取が済み、乱れた服を整えるキルト。そろそろ朔耶に詰め込まれた体内の魔力も残り少なくなって来た。

「しかし、先日のカースティア戦にも姿を見せませんでしたが」
「うむ、クルストスに現われて以降行方が知れないのは気になる所だな」

ヨールテスとキルトは出掛ける準備を整えると、傭兵団が陣を張るカースティア近郊に向けて隠れ家を後にした。

夕暮れに建物の影が伸び始めるエバンスの宮殿。その地下にある一室で帝国の元側近がサムズの統治者代表に指令を与える。

「二百だ、オールグレンの武具一式を二百揃えよ」
「し、しかしそれでは戦後の事業に差し支えが……」

「馬鹿者！　そんなモノ勝ってしまえば敗戦国から幾らでもモギ取れるわ！」

サムズの統治者代表エイブムは十数日前に帝国からやって来て国の中枢に居座った帝国皇帝の側近だという魔術士に恐々としながら反論を試みたが、素気無く一蹴された。

そもそも帝国から借り受けた傭兵団で隣国クリューゲルを攻めるという裏で行われた経済支援の取り引きは、帝国の動きに合わせて侵攻を開始する手筈だったモノで、その帝国からも敵と見做されている現状にエイブムは『訳が分からない』と頭を悩ませていた。

「はぁ……水道事業も割と上手く行っていたのに……」

とぼとぼと宮殿の廊下を歩いていたエイブムは外の様子が騒がしい事に気付き、近くの窓から顔を覗かせた。その瞬間、『シュン』という風を切る音がして眉間に冷たいモノが突き刺さり、彼の悩みを終わらせた。

帝国の竜籠隊全面支援による奇襲作戦により、エバンス上空から降下した特殊部隊の攻撃でエバンス宮殿は蜂の巣を突付いたような大騒ぎになっていた。特殊部隊を率いるガルブレック側近代理は頭の中に叩き込んでおいた宮殿内部の図面を下に、地下最深部の指令中枢を目指す。

「表の掃討はフレグンスの辺境騎士団に任せろ、入り口に三人立て、二人俺と来い」
「ハッ」
「ハッ」

部下二人を連れて地下への階段を駆け下りるガルブレックは、途中で分岐する隠し通路から二人の部下を脱出路に先回りさせると、単身で最深部に乗り込んだ。気配も足音も立てず入り口に忍び寄り、見張りの兵士を一瞬で仕留めて司令室に飛び込む。

「！　貴様……っ　ガルブレック密偵隊長！」

「生憎、今は側近代理の任を賜ってまして」

元側近は慌てて立ち上がると、椅子の後ろに身を隠しながら素早い詠唱で風の刃を作り出す。

「――風は集い一刃の斬撃となりて――」

飛び込んで来るガルブレックに向けて風の刃が放たれる。ガルブレックは背中に抱えていたキャリゴルの盾を構えると、短剣を背にしてそのまま突っ込んだ。

「馬鹿め！　我が風刃の術をそんなモノで防げるものか」

元側近はガルブレックの身体が盾ごと真っ二つになる瞬間を幻想し、ほくそ笑んだ。しかし、彼の放った風の刃は盾に弾かれるように四散する。驚愕に眼を見開いた瞬間、盾で顔面を打たれて仰け反った所にガルブレックの短剣が突き刺さる。

心臓を狙った短剣は元側近の左足太腿に刺さっていた。元側近は発掘品の増幅器も装備していたので、自力で放った風の刃が四散した後、増幅器から放たれた刃がガルブレックの構える盾を直撃してバランスを崩させたのだ。

ガルブレックも流石に肝を冷やした瞬間だった。元よりこの盾が無ければ正面から短剣で挑めるような甘い相手では無い。サクヤ式の改造がなされたこのキャリゴルの盾は作戦前にフレグンスの若い騎士から借り受けたモノだ。

「ひっ　ひいいいいぃ！」

奇声を上げながら足を引き摺って脱出路の隠し通路へと逃げ込む元側近は、ガルブレックが追って来るのを警戒してもう一度詠唱を始める。

「――か、風は集い、一刃の、斬撃となー――……げふっ」

詠唱は最後まで紡がれる事無く、大量の吐血と共に防がれた。脱出路を先回りしていたガルブレックの二人の部下が、元側近を背後から細剣で一突きにしたのだ。

「目標殲滅」
「任務完了」

「了解、撤収する」

元側近の死亡を確認し、ガルブレックは二人の心強い部下と連れ立って地下司令室を後にした。階段を駆け上がりながら次の予定を口にする。

「次は神殿の水鏡からフレグンスに報告を入れんとな」

忙しい忙しいと呟きながらも、ここ最近慣れない事務作業に追われていたガルブレックは鬱憤を晴らすかの如く躍動的に飛び回って

任務を果たして行った。

48話：精霊の氷解

「ツヅキ、お前は団長のテントに居ろ」
「は～い」

夕食の後片付けを済ませた朔耶に夜は出歩かないよう注意した団員は、返ってきた軽い返事に鼻を鳴らして歩哨に戻った。今日の明け方この団の陣地に『落ちて来た』朔耶は夕暮れ過ぎにはすっかり馴染んで団に溶け込んでいた。

団員達からすれば戦地で拾った雑用係の子供に和んでいるような所もあったりする。尤も、朔耶がそんな人畜無害な子供だと思っている団員は一人もいない。朔耶を見た余所の団から『噂にある特殊精鋭精霊術部隊サクヤ』の関係者では？　という内容の問い合わせが引っ切り無しに入るのだ。

朔耶の育ちの良さを感じさせる艶肌に幼げだが整った顔立ち、光沢のある黒髪に黒い瞳という神秘的な容姿に眼福を覚え、あどけない奔放な行動に和みつつも警戒は怠らない。そんな関係だった。

「今日だけで余所の団から十三回も問い合わせが来た」

朔耶がテントに入るなりそう言って腕を引き寄せたブラットは、流れるようなダンスにも似た動作で抱えながら放り投げるとそのままベッドに押し倒す。ボフンッと意外に柔らかいベッドに抑え付け

られた朔耶はそれでも動じた様子を見せずにブラットと対峙した。

「いきなり狼さんですか」

「お前の返答次第では牙を剥く事になるな」

ブラットは朔耶の頬に掛かった黒髪の束を軽く梳き上げるように掴み、黒い瞳を覗き込みながら腕甲から抜き出した隠しナイフを喉元に突き付ける。

「単刀直入に聞く、お前は”サクヤ”か？」

「うん」

一瞬ブラットの動きが止まる。まさか素直に答えるとは思っていなかったので、口を割らせる為に考えていた尋問の工程が全部無駄になった。

「……えらく素直だな、それとも噂に聞くような力を持ってすれば……この程度は身の危険に入らんか？」

「どんな噂か知らないけど、乱暴されない限りは抵抗しないよ？」

若干の緊張と羞恥らしき感情は見て取れるが至って落ち着いている様子の朔耶に、ブラットはこれが此方の隙を誘うための演技である場合と本当に噂通りの力を持っていて余裕がある場合を考えた。

「分からんな……」

「？」

「まあいい、幾つか質問がある。逸らかすのは無しだ」

「いいけど……ちょっと顔が近いから、もう少し離れて」

ブラットは眉を曲げると、ナイフは突き付けたまま僅かに顔を引

く。

「まず、お前の目的だ。　何故俺の団に近付いた」
「だからそれは偶々だってば」
「それは他の団でもよかったという意味か？」
「じゃ無くて、傭兵団の陣地に出ちゃった事自体が想定外だったのよ」

意図せず陣地に『出た』という朔耶の言葉に、やはり転移術を使って入り込んだのかと判断したブラットは朔耶が団に取り入った理由、ココに留まる理由等を質問したが、全て朝の内に話した内容と変わらなかった。

「つまりナニか、お前は”サクヤ”という正体を隠していた以外は全て朝言った通りという事か？」
「そう言う事、サクヤの名前は知られるとちょっと拙いかなーって思って伏せてたの」

”サクヤ”の存在は今やフレグンスと対峙する勢力共通の脅威として傭兵団にも知れ渡っている。ブラットはその判断に一応の納得をみせた。

「確認するが、それはお前の個人の判断であってお前の他の仲間は感知していないんだな？」
「んー……、一応皆には知らせてあるんだけど……」
「……それは、お前の行動は容認されていると認識して良いんだろうな？」
「うん、別に反対はされてないし」

『そうか』と少し肩の力を抜くブラット。彼女（ツヅキ）の行動が容認され

ているなら、このまま作戦終了まで”サクヤ”の襲撃は無いと考えた。

ここまでの会話で、二人は互いの認識が微妙にズレている事に気付いていない。ブラットは”サクヤ”を『フレグンスの特殊部隊』だと思っている。よって朔耶が伏せていた名前は”サクヤ”という部隊名であり、朔耶の名前は”ツヅキ”と認識していた。

つまり、ブラットの認識では『ツヅキは”フレグンス特殊精鋭精霊術部隊サクヤ”の一員で学生の素人』となっている。

「エリート精霊術士という所か……ツヅキ、お前はカースティアの前哨戦には参加したのか？」

「前哨戦って、会談があった日の襲撃の事？　それなら途中で飛び込んでちょっと暴れたかな」

「……そうか」

精霊術の実力の高さ故に素人の学生でありながら戦場に立つ、ブラットは朔耶にそんな境遇をイメージした。フレグンスが精霊の国と呼ばれる所以、王族は代々精霊術に優れた血筋を持っている。

”サクヤ”の一員に選ばれるほど精霊術に優れ、王室に顔が利くとなれば王族の血縁者であると考えられる。空を自由に舞うという話が竜籠の利用を指していたなら、竜の扱いを学びに帝国へ留学した折に皇帝と面識を持つ機会があったかもしれない。

そんな調子で、ブラットの中に『間違いだらけの朔耶像』がどんどん組上げられて行くのだった。

「団長！」

その時、団員の一人が慌てた様子で呼び掛けながらテント入り口の布を跳ね上げ――

「！　お楽しみ中でしたか、失礼しました」

直ぐに入り口を閉めた。

「なっ　待て待て！　俺は子供に手ぇ出すほど落ちぶれちゃいないぞ！」

「ちょっ　誰が子供よ！」

未だ朔耶をベッドに押し倒したままの体勢でいたブラットは慌てて部下の誤解を解くべく立ち上がると、ベッドから飛び降りるようにテントの出入り口へ走る。ブラットの背中を睨み気味に見送る朔耶に、神社の精霊から警告が発せられた。

チュウイセヨ　タタカイノ　ケハイ　ゲンキョウ　ソレガ　チカイ

『！　朝に感じてた予感の事ね？』

先程の駆け込んで来た団員が慌てていた様子にカースティアからの攻撃だろうかとも考えたが、それなら『お楽しみ中』とやらで引き下がる訳も無い。交感を通じて傭兵団の事情はレティレスティアに伝えてあるので、精霊神殿の水鏡でカースティアにも伝わっている筈だ。

「ちょっとレティに確認とっておこうかな」

そう呟いて、朔耶は交感を繋ぐべくレティレスティアに向けて意識の糸を伸ばした。

「何事だ」

部下から各傭兵団の団長に召集が掛かっている事を聞いて大手の団が用意している大型テントにやって来たブラットは、居並ぶ各団の団長達に問いかける。

「おお、来たか銀月の」
「これで全員揃ったか？」

ブラットは車座に座る各団長達と並び座りながら、彼等が視線を向ける先、テントの奥に立つ人物に目を向けた。
傭兵団の陣地には似つかわしく無い派手な衣装を纏った男。横に長い特徴的な髭はその賑やかな衣装とも相俟って道化役者かとも思える印象だったが――

『……こいつ魔族か？　後ろに居る女も普通じゃないな』

髭の男とその背後に控える女が纏う気配に、歴戦の傭兵としての勘が警鐘を鳴らす。『こいつらは危険だ』と。ブラットの他にもここに集う傭兵団長達は皆、この一見ユーモラスにも見える形（なり）をした男に警戒の念を向けている。

ヨールテスと名乗った男は自分がサムズからの使者であり、攻撃を躊躇している傭兵団に契約厳守を言い渡しに来たと語った。カースティアを攻め落とせと。そんな彼に傭兵団長の一人が口を開く。

「しかしな、色々と話が違い過ぎやしないか？　なんで帝国に雇われてるのに帝国とやり合わなくちゃならねぇ？」

「これは異な事を！　傭兵の仕事は戦いが本分、相手が誰であれ何であれ契約に添って剣を振るうのが貴方方の在り方なのでは？」

そう言われてしまうと返す言葉が見つからないので黙ってしまう傭兵団長。彼等自身も分かってはいた事であり、時間切れを狙って待機しているのは契約違反ギリギリの行為に当る。しかし現状で戦うには余りにも割が合わない。

「しかしまぁ、貴方方の主張も分かります、事情が変わったのですからなぁ。ですので帝国との契約とは別に追加報酬を設けました」

「どういう事だ？」

ニヤリと口の端を上げたヨールテスは勿体付けた口調でサムズの指導者から取り付けた報酬を提示した。占領したカースティアからは好きなだけ略奪しても良い事、オールグレンの武具一式を二百セット用意する事。

その破格に過ぎる報酬内容に傭兵団長達は色めき立つ者と警戒の度合いを深める者とに分かれた。

「話がウマ過ぎる。カースティアの略奪権は兎も角、オールグレン一式二百なんて用意出来るのか？」

「第一、サムズはエバンスが制圧されるのも時間の問題だろう」

ヨールテスはその疑問の声に対して待っていたとばかりに頷くと、

サムズと帝国の内情について少し触れながら説明する。サムズは帝国からの経済支援を秘密裏に受けとる条件として、帝国が契約して送り込んで来る傭兵団を受け入れ、帝国のフレグンス侵攻に合わせてクリューゲルに侵攻させる手筈だった。

ところが帝国内部で政変が起きて帝国内の実権を握る者が代わってしまった。

帝国を脱出した嘗ての支配者派の中核に居た者がサムズの指導者の元に逃れ、新しい支配者の政治体制が安定する前にフレグンスを叩き、次いで帝国に攻め入ればサムズが大陸の覇者になれると煽ってサムズを動かし今の状況に至っている。

「まあ、つまりはサムズは帝国の前支配者の残党に利用された訳ですな」

「おいおい、それじゃあ益々サムズには後がねぇじゃねえか」

「ソコです！　サムズには後が無い、しかし帝国から受けた経済支援により金はある」

「……最後の足掻きに乗る、という訳か」

御名答！　と称えるように両手を広げて見せるヨールテス。カースティアが落とされたとなればフレグンスも此方に戦力を向けざるを得なくなり、少しでもサムズを延命させる事になる。

何れは制圧されるにしても、報酬を用意する時間くらいは得られるだろう。

その間カースティアからは略奪し放題、サムズが落ちればカースティアから引き上げてエバンスに向かい、用意されたオールグレン一式を正式な報酬として受け取る。

カースティアでの略奪行為もサムズからの正式な報酬として示されたモノなので責任は全て滅びたサムズに向かい、傭兵団は文句を

言われる筋合いも無く仕事を終える。元々の雇い主が帝国である事も有利な条件だ。

「いかがです？」

「うーむ……」

ヨールテスに示された条件と現状、契約と報酬に唸る傭兵団長達。やはり肯定的に見る者と否定的な見方をする者とに分かれて議論を交している。

「結論は早ければ早いほど良いですぞ？　こうしている間にもサムズの首都エバンスに迫るフレグンス軍が――」

「エバンスならもう制圧されたわよ？」

傭兵団長達を煽るヨールテスの言葉を遮るように響く少女の声。全員の視線が大型テントの入り口に立つ声の主に向けられる。黒髪に黒い瞳の小柄な少女が、不思議な威圧感を漂わせながらそこに居た。

「ツヅキ……？　お前、何を……」

「ほほぅ！　サクヤ殿ではありませんか！　このような場所で会うとは奇遇ですなぁ」

途惑った表情で呟いたブラットは、ヨールテスが芝居掛かった大袈裟な動作で”サクヤ”の名を口にした事に舌打ちする。テントの中がざわめいた。

「サクヤだと？！　どういう事だ！」

「やはりあの娘は”サクヤ”だったのか？！　銀月の牙は敵を匿っていたのではあるまいな！」

「いや、昨日までは確かに姿を見なかったぞ。今朝の騒動の時からだ」

「まてっ！　それよりもエバンスが落ちたという話だ！」

臨戦態勢を取りながら口々にブラットに対して説明を求めていた傭兵団長達は、その一言で得るべき情報の優先順位を定めた。エバンスが制圧されたという報が本当ならば、ヨールテスの持ってきた話は全て意味をなさない。

「ツヅキ、エバンスが制圧されたという話は本当か？　どうやって知った」

「本当だよ？　夕方過ぎにエバンスの宮殿が制圧されて、神殿の水鏡で知らせて来たんだって。あたしへの連絡方法は内緒」

「と言う事は……カースティアにも連絡は行ってる筈だな？」

「確認の使者を出すか？」

朔耶とブラットの会話を聞いた傭兵団長達が話し合う。エバンスの制圧が確認されればその時点で作戦終了、速やかに戦闘終了を告げて最寄の街に引き上げる事が出来る。

ここからならば少々の気まずさはあるが、目と鼻の先にあるカースティアに入って身体を休める事になるだろう。

彼等がそんな相談をしている間、ヨールテスはキルトから受け取った伝送具でエバンスの元側近に連絡を取ろうと試みたが、連絡先の伝送具が応える事は無かった。

最後に連絡を取り合ったのは夕方前、朔耶の話では夕方過ぎに制圧されたとの事なので、あの連絡の直後か連絡の最中に襲撃された事になる。

「やれやれ、無駄足を踏んでしまいましたか……」

ヨールテスは伝送具をキルトに渡すと溜め息を吐きながら首を振った。そして徐に朔耶に目を向ける。

朔耶はその視線に身構えたが、ヨールテスは肩を竦めて降参ポーズをとった。ヨールテスには朔耶が意識の糸を伸ばして来ているのが見えている。

しかも、ここにいるほぼ全員に糸を絡めているので例え一斉に襲い掛かっても例の雷と閃光によって一瞬で返り討ちになる事が分かっていた。

「今ここで貴女と事を構える気はありませんよ、意味が無いですからなぁ」

『儲け損ねてしまいましたよ』とキルトを伴って大型テントを退出するヨールテス。朔耶は油断なくその背を見送っていたが、二人の姿が夜の闇に消えるとブラットに向き直った。

「仕事、終わって良かったね？」

「あ、ああ……」

狐につままれたような様子で答えたブラットは、先程の二人の事を知っているのかを問う。朔耶からの不思議な威圧感は消えていた。

「キトの代表で会談に来た人だったんだけど、サムズに協力してたみたい」

「キトか……成る程、そういう事か」

「何が？」

「いや……奴が去り際に言った”儲け損ねた”の意味が分かったの

さ」

オールグレン一式を二百も揃えるともなれば莫大な金が掛かる。またそれだけのモノを短期間に集めるにはサムズ国内に余り流通していない為、キトにでも注文しない限り不可能だ。

「サムズが帝国から得た経済支援分でごっそり儲けようとしたって所だろう」

ついでにカースティアを攻めた傭兵団が壊滅してくれれば報酬に支払う予定だった武具も丸々手元に残る。代金だけ貰って納品前に注文した国が滅びれば商品は殆ど残るのだから、それはそれは大儲けだろう。

キトの商人は此れまで通り、ただ注文に応えただけなのでフレグンスも帝国も文句は言えない。

「……まさか、今回の騒動って、裏でキトが煽ってたなんて事はないよね？」

「さて、どうだかな……結構何でも有りの国だからな、あそこは」

肩の荷が下りたように首を回したブラットは自分の団の陣地に向かって歩き出した。朔耶もその後に続く。

”サクヤ”の事が気になっていた他の傭兵団長達も陣地を引き払う作業がある為、今は敵対している訳ではない”サクヤ”の事は一先ず置いておく事にしたようだ。

「……で、お前は何時まで俺達の団に居る気なんだ？」

「んー、みんな今日中にカースティアに入るんでしょ？　だったら一緒に行こうかなって」

『自分が居れば街入りで揉めた時便利だよー』とアピールする朔耶に、ブラットも『確かにな』と納得する。戦闘終了の意思を伝える仲介役をやってくれれば、これ以上の適任者は居ない。

既に話が伝わっているらしく周囲の陣地と同様に銀月の牙の陣地もテントから運び出された荷物が一箇所に集められ、テントを畳む作業に入っている。

「ようツヅキ、団長とヤってたって本当か？」

包帯を巻いた男、怪我人のテントにいた団員が荷物の上に座ってニヤニヤしながら声を掛けてきた。

腕を負傷している為、片付け作業に参加出来ないので荷物番をしているらしい。朔耶は彼の傍まで歩いて行くと、包帯を巻いている腕にデコピンを放った。

断末魔のような男の悲鳴が傭兵団の陣地に響き渡った。

カースティアの正門に立つ衛兵が街道から近付いて来る大集団を見つけたのは日も完全に沈みきり、夜空に瞬く星の光が月明かりと競い始める頃だった。

少し前に傭兵団からの使者がエバンス制圧の報を確認に来ていたので、門番は慌てる事無く傭兵団一向が到着した事を街の防衛に就いている騎士に告げた。

街の防衛を任されている王国騎士団の中隊長が街を囲む防壁の上から傭兵団の大集団を見下ろす。門の内側に帝国から派遣された傭兵部隊が待機しているのを確認すると、門の外側にいる傭兵団に告げる。

「その場で武装を解除し、降服の意を示されよ！」

それを聞いた傭兵団の間にザワザワとざわめきが起きる。総指揮を取っていた大手傭兵団の団長が代表で訴え掛けた。

「我々は契約の終了に基いて作戦行動を解除した！　戦闘は終了した筈だ！」

「降服の意思を示さぬ限り、我が国に敵対する勢力を街にいれる訳にはいかん！」

「戦闘は終了した！　我々傭兵団は現在いずれの国にも属していない！」

「直ちに武装を解除せよ！　降服の意思なくば敵対行動と見做し、排除する！」

代表で訴えかけていた大手傭兵団の団長は肩を竦めると、振り返って他の傭兵団長達に首を振った。

「話にならんな……」

「今回の戦い、騎士達は剣を交えておらんからな、何か功が欲しいんじゃろ」

困ったモノだと皆で話し合い、街から離れた場所にまた陣地を張り直して野営にするかと方針が纏まりかけていた所に、先程の騎士の声が響く。

「武装解除を行わず、降服の意も示さない諸君等を敵と見做し、これより迎撃する！」

「なにぃ！　ちょっと待てよ、そりゃあ横暴ってモンだろうが！」

「ふざけんじゃねーぞ！　この貴族野郎！」

口々に防壁上の騎士に向かって罵りを浴びせながら騒ぎ出す傭兵団員達を余所に、騎士の合図で街の門が開いていく。門の内側には臨戦態勢を整えた傭兵部隊が隊列を組んで待ち構えていた。いくら高い錬度を誇る傭兵団でも今の状態に仕掛けられれば奇襲を受けるのと同じだ。

こりゃヤバイと荷物を運ぶ団員達を下がらせ、比較的手の空いていた団員が前に出て迎え撃とうと武器に手を掛けたその時――

「待ちなさい！」

良く通る少女特有の高い声が一帯に響く。門の前に集まった傭兵団から歩み出る小さな影。門の両脇に焚かれる篝火がその姿を照らし出した時、隊列を組む傭兵部隊から驚きと戸惑いの声が上がった。

「お、おい”皇帝の黒后”じゃねえか！？」

「なんで傭兵団の連中と……」

一方、傭兵団側からも朔耶の姿を見て期待の眼差しと呟きが囁かれる。エバンス制圧の報を知らせてくれたのは彼女だったと。

「そういえば、こっちには”サクヤ”が居たんだったな」

「ああ、銀月の牙に潜り込んでたって話だったが……」

傭兵団と傭兵部隊が門を挟んで向かい合う間に立った朔耶は、防壁の上で指揮を執る騎士に向かって声を張り上げた。実は精霊に少し音量を増やして貰っている。

「私は王室特別査察官のサクヤです、エバンスが制圧されてサムズとの戦闘は終わっている筈よ？　速やかに皆を街に入れてあげて」

「娘！　何者かは知らんが身分を偽り、賊に属する者なれば子供といえど咎を受け粛清されるモノと知れ！」

「あれ？　あたしの事分からない？　ガリウスーー！　ガリウスそこに居ないのーー？」

朔耶は気は進まなかったが話の分かるであろうガリウスを通してこの場を収めようと考えた。しかし、ガリウス小隊は日頃から好き勝手やっているので騎士団の中でも発言力は低く、この防衛任務にも参加部隊からは外されて本部の留守番をしていた。もっとも、本人達はそれで楽が出来るのだから文句も無いようだが……。

あの軽薄な声が応える様子は無く、当てが外れた朔耶は仕方なく神社の精霊に力の解放を呼びかけた。『羽を見せて飛ぶだけで十分だと思うから』と説得する。

シカシ　チカラノイフデ　オサメルハ　ヒトトキノ　アンテイニスギヌガ……

『言っとくけど、ちゃんと始めからカースティアか王都に着いてたらこんな苦労は無かったんだよ？』

痛いところを突かれたような気まずげな意思が精霊から伝わる。

朔耶も傭兵団陣地に出てしまったからこそ、傭兵団の意図を知ってエバンス制圧を急がせる事が出来たので、これはこれで怪我の功名だったとも考えられるが、ここで力を使わず戦闘を止められないのであれば意味が無い。

『銀月の牙の人達とも親しくなっちゃったのに、ここで死なせたりしたら、あたし立ち直れないかも……そうしたいの？』

ソンナコトハ　ナイ！　シカシ　チカラヘノイフハ　サクヤヘノイフニ　ヤガテ　サクヤノ　シタシキモノサエモ……

精霊から伝わって来る意思には、嘗ての主が救った村人や親しくあった友人達からさえも恐れられ、毒を盛られた事への哀しみと、哀しみ故にその毒を呷った事への悲しみ、主を救えなかった事の無念さ等が感じ取れた。

朔耶は神社の精霊が此処まで強い自我にも似た意思を持つに至った理由を理解した。精霊と契約する事は精霊と心を繋ぐ行為、使役者の心はそのまま繋がっている精霊にも伝わる。

この精霊は何とか主を助けたくて、身体から抜け行く主の魂を引き戻そうとして、契約の糸が切れる寸前まで抗った結果その心の一部を取り込んでいる。神社の精霊の言葉は、嘗ての主である巫女の言葉でもあったのだ。

『そっか……うん、あんたの気持ちは分かったよ』

サクヤ……

『でもね、あたしは　あんたとは違う』

サクヤヨ　ソウデハナイ　チカラト　チカラヲオソレルモノハ　サクヤノアリカタトハ　ムカンケイニ――

『あたしは、自分から死んだりしない』

精霊は人が如何に恐怖や不安といった感情に左右され易いかを説こうとしたが、朔耶の強い意志の下に紡がれた一言に沈黙する。

『もしこっちで毒入りのお茶を出されたら、それは飲めないよって、笑って返して二度とこっちに来なければ済む話だしね』

……デハ　モシ　モトノ　セカイデ　ソウナレバ

『時代が違うってば。　それにあたしの家族はあたしを恐れたりしないし、友達も曲者揃いだからね』

第一、元の世界にある兵器類の方が精霊術よりもよっぽど怖ろしいモノだと、時代による人々の脅威に対する価値観の違いを諭した。

『だから大丈夫、あんたも話し相手になってくれるんだから相談も出来るし、あたしは自分から死んだりしない』

……ワガ　アルジヨ

アナタニ　シタガオウ

最初の呼び掛けから沈黙している朔耶の様子を窺っていた騎士団の中隊長は、門を挟んで黒髪の少女を中心に睨み合う傭兵団と傭兵部隊を見下ろし、このまま睨み合わせていても埒が明かないと判断して攻撃命令を下そうとした。

とその時、ざわりっと双方の集団からどよめきの声が上がる。朔耶の身体が仄かに発光を始めたのだ。一体何事が起こるのかと警戒していた防壁上の騎士団、門の内側の傭兵部隊、外側の傭兵団は、次の瞬間その光景に目を瞠り、驚愕の声を上げた。

青白い光に包まれた朔耶の身体が宙に浮かび、仄暗い光を纏った漆黒の翼が左右に広がって行く。

『あれ？　羽二枚とも黒？』

クロノセイレイノ　キオクニミル　イゼンノヤリカタデハ　コウリツガワルイ

朔耶の思い付きで行った以前の飛び方では無駄に魔力を消費していて効率が悪いらしく、神社の精霊は宙に浮く為の魔法障壁と移動する為の風を起す地下の精霊に流す部分とを完全に分けて最適化してくれていた。

細かい魔力の運用技術を身に付けていなかった朔耶は、バケツに水を入れるのに消火栓を開放して放水する程の魔力を放出していたのだ。ちなみに朔耶に近付いたキルトが魔力の過剰摂取で溺れたのはそのせいだったりする。

神社の精霊は更に威嚇効果も狙って翼の周りに放電現象を起し、閃光を放って見せた。

「眉唾じゃ……なかったのか？」

「……し、死の閃光か……？」

「お、おい銀月の、アレはお前等の所に居たんだろ？　こっち攻撃してこねぇよな？」

「さあな……ツヅキの判断次第だろう」

傭兵団の中に広まっていた『誇張はされているであろうが無視出来ない存在』の噂、その噂の主が誇張では無く噂通りの姿で現われた事に動揺を隠せない団員達。傭兵部隊の面々も帝都の城の訓練場

で朔耶の力の一端は見た事があるので、改めて噂通りの姿を目の当たりにすると、矛先が自分達の方に向いている分生きた心地がしない。

「く、黒后はフレグンスの人間なんだから、こっちが攻撃されるって事はないよな？」

「でも、開門を迫ってたぜ？」

「すげぇ……本物だ……」

「電撃か？　またあの、カァアンと来るやつか？」

防壁上の騎士団では逸早く我に返った騎士が中隊長の騎士に傭兵部隊を下げて傭兵団を街に入れるよう進言していた。

「し、しかしだな……あのような得体の知れない存在に……」

「何を言ってるんですか！　我々も聞いたじゃないですか、サクヤ殿の特徴を！」

「あれは、ガリウス小隊が悪ふざけのデマを……」

「自分は近衛騎士団長のイーリス殿からも聞きました！」

門の前に浮かぶ黒い翼を広げた存在を前に、傭兵団、傭兵部隊、王国騎士団が右往左往する中、朔耶は『まだかなー？』と傭兵部隊が引いて傭兵団が街に入るのを待っていた。

結局、騒ぎを聞いて駆けつけたガリウスが勝手に指示を出して傭兵部隊を引かせるまで門前のお見合いが続いていたのだった。

49話：和解と新たなる潮流

無事カースティアの街に入る事が出来た傭兵団は其々宿を借りたり適当な広場にテントを張るなどして身体を休め、疲れを癒していた。中には早速娼館に遊びに行くような猛者も居る。

「じゃあ、ここでお別れだね」
「そうだな……」

ほんの一日、僅かな付き合いだったが楽しかったと朔耶は笑って手を振り、『銀月の牙』傭兵団と別れた。黒髪を揺らして派遣騎士団本部の建物に消える朔耶を、ブラット達は静かに見送った。

「行ってしまいましたね」
「ああ……」
「それにしても、さっきのアレは驚きました……噂ではクルストスに現われた”サクヤ”は白と黒の翼を持っていたそうですが」
「……ツヅキは両翼とも黒だったな」

今回の出来事でフレグンスにはあのような力を持った精鋭精霊術士が少なくとも二人以上居ると、傭兵達には認識された。それが抑止力となってか、以後フレグンスと対峙する立場になるような仕事にはめっきりと引き受け手が居なくなるのだった。

「ようサクヤ、相変わらず人間辞めてんなぁ」
「あんた何気に酷い事言うわね……て、アンバッスさんにも言われたような……」

何故か入り口の受付カウンターに座っているガリウスが書類を片手に声を掛ける。朔耶の姿を認めた王国騎士団の騎士や本部職員達は顔を強張らせる者と憧憬の目で追う者とに分かれた。

派遣騎士団本部は本来詰めている筈の騎士達が和平会談の日に受けた奇襲で壊滅してから騎士の人員不足が深刻化していたが、ここ数日は防衛の為に派遣されて来た王国騎士団が入っている為、割と雑然とした状態であった。ちなみにガリウス達が立て直した派遣騎士団の生き残りはエバンス攻略の為に出払っている。

「なにしてんの？」
「意見書つーか嘆願書の纏めだ、街の住人からの要望だとかそんなんだな」

どれどれとカウンターの上に束で重ねられた書類を覗き込む朔耶。此方の文字も言葉同様疎通の加護で翻訳される為、書く事は出来ないが読む事は出来る。そこには色々な街の住人の声が綴られていた。

「ふんふん、カースティアにも王都のような街灯を設置して欲しい、か……」
「人も金もねーよ」

「ふーむ、東通りの○○団を取り締まれ？」
「ああ、そりゃ西通りの△△団だな、チンピラグループの縄張り争いだ」
「ううむ、孤児院の経営に援助をお願いします」
「予算がねぇ」

その後も記されている住人達の要望やら嘆願を朔耶が読み上げては、ガリウスが『無ぇ』で切り捨てる。

「……何も出来ないんじゃん」
「しょうがねぇだろ、実際本部の維持だけでいっぱいいっぱいなんだから」

カースティアは街の規模もそこそこなれば住人達の生活もそこそこ裕福で、良く言えば平凡で静かな街、その実これといって特筆すべき特徴の無い地味な街でもある。地理的にキトからは一番遠い場所にある為、商人達の足も遠退き、特産品も何も無いので観光客が訪れる事も殆ど無い。

「この街はほんとに何もねーからなぁ、昔は南部侵攻の入り口だったからデカくなっただけで、今はバーリッカムまでの中継街でしかねぇし」

街の収益がバーリッカムを目指す観光客の宿泊施設利用くらいしか無いので、街に何か新しいモノを設けようとしても絶対的に資金が足りない。現状を維持するだけで精一杯なのだとガリウスはぼやいた。

「住人の要望に応えるどころか、娯楽施設の一つも建てられやしね

ぇぜ」
「王都から資金援助とか受けられないの？」
「投資する理由がねぇから無理だな、俺等を派遣して食わせてるだけでも結構維持費掛かってるしな」
「うーん……」
唸る朔耶に『お前が悩む事じゃねぇよ』と言って宿舎で休むよう促したガリウスは、書類に何やら書き込みながら選り分ける作業に戻った。朔耶も疲れていたので素直に本部の宿舎に向かうのだった。

宛がわれた部屋に入った朔耶はベッドに横になると、早速レティレスティアに交感を繋ぐ。

『レティー？』
――サクヤ、待っていました。其方はどうなりました？――
『うん、上手く片付いたよ。あの髭の人が煽りに来てたけど、エバンスが早く制圧されてたんで平穏に終わったよ』

朔耶は今日の一連の出来事を掻い摘んで伝えていった。カースティアの防衛に来ている王国騎士団の行動については、やはり功を得ようと焦る中流貴族出の指揮官を就かせたのが裏目に出たのかもしれないと話し合う。

――やはり、サクヤの事はもっと宣伝しておいた方が問題も少なくて済むのかもしれません――
『うーん、それもどうかなぁ　結局偉い人の前でだけ立派に振舞うようじゃ困るっしょ？』

重要な任に就く騎士の誠実さ、というモノを少々過信しているきらいがあるレティレスティアに、朔耶は『騎士も人の子』と諭して厳しい目を向ける必要性を説いた。こういう所にレティレスティアの温室育ちな面が窺える。

『あ、そうだ　それとカースティアの事なんだけどね』

話のついでとばかりにカースティアの街について思う事を話した朔耶は、この街に何か観光の目玉になるようなモノを造る提案をした。街のすぐ北東に広がっている大きな湖を利用して遊覧船を経営する等の娯楽事業を取り入れるアイデアを話してみる。

――街の活性化、ですか……それは良い考えもしれません、父様にも話してみます――

『ん、宜しくねー　明日の朝か昼頃には一端そっちに飛ぶから、ちょっとレティに協力して欲しい事があるんだけど……いい？』

――勿論です！　私に出来る事であれば何なりと――

レティレスティアの写真撮影を予定に組み込んだ朔耶は明日、王都の城で会う約束をして交感を解いた。

「よし、寝よう　寝てる間の事は宜しくね～」

ココロエタ　ユックリ　ヤスムガヨイ

あのガリウスがいる本部内の宿舎である、大分打ち解けたとはいえ油断は出来ない。朔耶は就寝中の警護を神社の精霊に任せると、数日ぶりの此方の世界のベッドで眠りに就いた。

「……」

深夜、朔耶の眠る部屋にこっそり侵入しようとする影があった。扉の所からベッドの様子を窺う人影は、朔耶が眠っている事を確認すると素早い身のこなしで部屋の中に滑り込む。足音を立てずそっとベッドに近付く人物。

「ああ……やっぱり可愛いなぁ　サクヤちゃん……」

オレンジ掛かった金髪に割と小柄な体躯で女の子のような童顔を持つガリウス小隊の子犬騎士、フラン・テイル・カルウットだった。朔耶の力を目の当たりにして尚、夜這いを仕掛けようとする辺りにガリウス小隊の一員である事をうかがわせる。

「僕は隊長みたいに強引じゃないからね～」

シーツに零れるはなり広がった黒髪をそっと撫でながら唇で感触を確かめると、此方の世界には無いシャンプーの香りがふわりと鼻腔を擽る。そのソフトな花の香りは、貴婦人達の使う高級な香水や香油とはまるで違う不思議な優しさがあった。

「うう……隊長みたいに強引じゃないつもりだったんだけど……」

その香りにやられてしまったのか、フランは熱っぽい視線で朔耶の寝顔を眺めると、逡巡しながらも徐々に顔を寄せて行く。近付けば近付く程、今度はシャンプーの香りよりさらに甘く懐かしい気持

ちにさせる石鹸の香りに囚われ、益々離れられなくなってしまう。

これはもう我慢出来そうにないと朔耶の胸元に手を伸ばした途端、何かに阻まれるように身体を押し戻された。起してしまったかと焦るフランだったが、朔耶は熟睡中らしく規則正しい寝息が聞えている。

が、眠っている筈の朔耶の眼が開いてフランを睨みつけた。その瞳が蒼く輝く。

「！っ」

「武士（もののふ）にありながら此の様な下劣なる振る舞い恥と心得よ。この身に指一本触れること、叶わぬと知れ」

普段とはまるで違う別人のような雰囲気と口調で厳しく叱責する朔耶に、フランは一瞬相手が誰だか分からなくなる錯覚を覚えた。だが直ぐに気を取り直すと朔耶の様子を具（つぶさ）に観察する。

ベッドに横たわっている朔耶の身体は薄っすらと光を纏い、シーツが僅かにはためている。瞳の蒼い光は眼の奥に宿る灯火のように揺らめいていた。

「……君は、何者だい？　もしかしてサクヤちゃんに憑いてるの？」

「我は朔耶に使役されし精霊ぞ、我が主に粗相を働く者は何人なれど排除してくれよう」

使役した精霊が契約者の身体を使って話すなど聞いた事が無い。唖然としているフランを余所に、朔耶の瞳に宿る蒼い光が強まったかと思うと部屋の扉が開かれ、巻き起こった突風がフランを吹き飛ばして廊下に叩き出す。フランが部屋から強制排除されると扉はパ

タリと閉じられた。

「ガード固すぎるよ、サクヤちゃん……」

廊下でひっくり返った体勢のまま、フランは人知れず呟くのだった。

翌朝、朔耶は宿舎の食堂の広いテーブルで朝食を摂りながらカメラを弄っていた。還る前にレティレスティアの写真を撮らせて貰うのでフィルムと動作チェックを一通り済ませておく。そこへガリウス小隊の面々が朝食を持ってやって来た。

「よう、なんだそれ？」

「おはよー　あたしの世界の道具よ」

そう言ってパシャリと一枚、ポラロイドカメラで試し撮りをする。フラッシュに驚いて後退りするガリウス達、特にフランは『わぁ！ごめんなさい』と頭を抱えてしゃがみ込んでいる。朔耶は起床時に精霊から昨晩の報告を受けていたので苦笑で返した。

「ん、出てきた出てきた」

「なんだ？　電撃かと思ったじゃねえか、脅かしやがる」

朔耶がカメラから出てきた写真をひらひらさせていると、一体なんの紙切れかと覗き込んで今度は硬直するガリウス達。

「お、おいっ　なんだそりゃ！　呪術の類じゃねえだろうな！」
「朝から騒がしい人ねぇ　ただの絵だから大丈夫よ」
「随分と精巧な絵だな……」
「まるで鏡だねぇ」

食堂にいる他の騎士や職員達が遠巻きに朔耶から距離をとって座っている中、ガリウス小隊の四人だけは同じテーブルに着いてわいわいと騒ぎながら一緒に朝食を摂った。

朝食を済ませた朔耶が王都へ飛ぶ為に派遣騎士団本部の屋上にやって来ると、何故かガリウスが見送りに来ている。

「仕事しなくてイイの？」
「見送りの間くらい席を外したってどってコトねーよ……」

朔耶は肩を竦めてカメラのストラップを腕に通した。王都へ飛ぶついでに上空からカースティアの街を撮影して航空写真を撮っておこうと考えたのだ。　街に観光施設を作るなら正確な全景があった方がやり易い。

「……なあ、サクヤ　お前は今後もコッチの世界に通うのか？」
「うーん、どうなんだろう？　縁は大切にしたいけど、無理に来る必要もないんだよね～」

此方の世界で親しい人達の身に何かあれば、自身の精霊の力を振るうべく駆け付けるつもりでは居る朔耶だが、自分の生きる世界は家族の居る向こうであると考えていた。

「でも、どうして？」
「ん？　ん～……まあ、早いほうがいいか。正直スマンかったな、サクヤ」
「ほぇ？」

いきなり謝罪に出たガリウスに面食らった朔耶はどこぞの魔法少女のような声を漏らす。ばつが悪そうに頭を掻くガリウスは色々と誤解をしていた事を白状した。

王女に異例の待遇をさせる異国の少女という点で集めた情報から、森で近衛と逸れていた間にその少女と何があったのか？　王女が少女を優遇せざるを得ない理由が作られたか、でなければ王女側の理由で少女に執着しているか、という詮索をしていたという。

「昨日の指揮官を見て分かったと思うが、フレグンス貴族の名誉欲気質はこんな事態になってもまだ変わらねぇほど根深くて腐ってるからな、王女をやり込めた雌狐なら取り合えず首に縄でも付けて、王女に飼われる雌猫なら手懐けておこうって考えてたんだ」
「何気に言葉の柄悪いわね……、あたしが何処かの家の手先か何かみたいに考えてたって事？」
「まあ半分な、なんせどいつもこいつもテメェの出世しか頭にねぇ奴ばっか見て来たから、……俺も眼が曇ってたらしい」
「へぇ……」

朔耶は感心したように呟くとガリウスに向き直った。彼等は彼等なりにフレグンスを想って行動していた事が分かって少し楽しい気持ちになる。やり方は随分とイリーガルだが単に何も考えず好き放

題していた訳ではなかったのだ。

「前よりもうちょっと見直したよ。うん、赦してあげる」

「そうか」

ガリウスと和解の握手を交わして空へ舞い上がった朔耶は暫らく旋回しながらカースティアの街を撮影し、やがてフレグンス王都の方角へと飛び去った。派遣騎士団本部の屋上から黒い翼の少女が見えなくなるまで眺めていたガリウスは、扉の影で気配を消している部下に声を掛ける。

「夜這い掛けたんだって？　フラン」

「！！っ」

ガタタンッと物音を立てて逃げ去ろうするフランを捕まえたガリウスはフランの首に腕を回してニヤニヤと尋問する。結果は知っているのでこれは只の冷やかしだ。

「でぇ？　どうだったんだ？　良かったか？　キツかったか？　柔らかかったか？　いい匂いしたかぁ？」

「もぉ、酷いよ隊長っ　知ってて言ってるでしょ！」

不良小隊の隊長と部下はじゃれ合うようにしながら騎士団本部の建物の中に戻って行った。

「あ、カンタクルが見えてきた。此処までは結構飛んだけど、やっぱり王都に近い街なんだね」

昼間だと国境の街カンタクル上空からは遠くに王都の影を見る事が出来る。王都が丘の上にあるのも遠くから見通せる理由のようだった。時速二十キロ程度の馬車で八時間程の距離だが、今の朔耶なら普通に飛んで一時間程で到着する。ちなみにカースティアから此処までは二時間弱で飛んで来た。

「お昼前くらいに着きそうだから、丁度レティの自由時間と合うかな」

ついでにカンタクルの街の航空写真も撮った朔耶は写真をポシェットに仕舞いながらそのまま飛び去る。地上で朔耶に気付いた何人かの騎士や住人が空を仰ぎ見ていた。

それから約一時間後、王都上空に辿り着いた朔耶はレティレスティアに到着を知らせて真っ直ぐ城を目指した。

「とぉーちゃぁーく！　今っ　なんつって」

ちょっと拙いかなと思いつつも朔耶は直接フレグンスの城の上層テラスに舞い降りた。一々城の外に降りて門から入るのが面倒だったのだ。テラスから城内に入った朔耶は廊下をひょいひょいと進んでレティレスティアの待つ広間がある階に下りて行った。

「勝手知ったる城の中〜と。　やほーレティ、待った？」
「サクヤ！」

スカートの裾を両手で抓み、満面の笑顔を向けて駆けて来るレティレスティア。朔耶は内心で配役が違っているのではないか？　と腑に落ちない気持ちになりながらも、健気に腕の中へ飛び込んで来る姫君を抱きとめた。――やっぱり何か間違ってる気がした。

撮影に良さそうなサロンでカメラの事を説明し、珍しそうにレンズを覗き込んでいるレティレスティアを一枚撮ってみる。こちらはデジタルカメラの方だ。フラッシュとシャッター音にビクリと肩を震わせて目をぱちくりさせている姿は小動物のような可愛らしさがあった。

取り合えず、レティレスティアのドアップ画像でひとしきり笑って和んだ後、ポラロイドカメラを構える。

カシャッ　ジーー　カシャッ　ジーー　カシャッ　ジーー

「サクヤ様！　レティレスティア様も　何を、なさっているのですか？」
「あ、フレイも良い所に来た　並んで並んで」
「え？　え？」

宮廷魔術士の仕事で城に来ていたフレイは朔耶が城に居るという噂を聞きつけてサロンにやって来たのだが、有無を言わさずレティレスティアの隣に並べられると何やら黒塗りのランプのような道具に青白い閃光を浴びせられるという不可思議な儀式に参加させられ

た。テーブルの上には表面を黒く塗り潰された四角い光沢のある紙が散ばっている。

「おっと、最初の分が出てきたかな」
「まぁ！　私にも見せて下さいサクヤ」
「あの……これは一体何事なのでしょう？」

久し振りに会えたと思ったら謎の儀式に強制参加、しかも王女様と並んで色々と構えを取らされるという恐縮スパイラルに入る暇も無い勢いに押されつつも、フレイはテーブルに散ばっていた光沢のある紙を集めている朔耶とレティレスティアに伺ってみる。

「ふふふ～、これ」

そう言って朔耶が見せた紙にはまるで生き写しのようなレティレスティアの小さな姿があった。魔術の類かと驚いたフレイだったが、人の手では描けない精巧な絵だと説明され、精霊が描く絵なのかと感嘆するのだった。

「フレイのもあるよ～、ほら」
「わっ　凄い……私です」

フレイとレティレスティアが信じられない程精密に描かれた”写真”に眼を奪われている所に、また知った声が掛かる。

「あら、何をしてらっしゃるの？」

ギクリッと肩を震わせるフレイ。ランバルト公に用事があって城を訪ねていたエルディネイア嬢だった。エルディネイアがレティレスティアに優雅な礼で挨拶をすると、レティレスティアもそれに応

える。フレイはジリジリと朔耶の後ろに隠れようとしていたが――

「丁度良いからルディも入って入って」
「それは良い考えですわね」
「な、何ですの一体」
「（はぅあぅ～）」

そんな調子で朔耶も被写体に入ったり、一人ずつ交互に撮ったりしながらフィルムを使い切るまで撮影が続けられた。その内の何枚かは其々レティレスティアとエルディネイアとフレイにプレゼントされる。

「それにしても、サクヤの世界には凄い道具があるのですね」
「別の世界と聞いてもピンと来ませんでしたけど、これは確かに驚きましたわ」
「ふふ、あんまり向こうの道具はこっちに持って来ない方がいいって弟に忠告されたんだけどね」
「そういえばサクヤ様にはお兄様と弟御がいらしゃるんでしたね」

撮影を終えた四人はサロンでお茶を飲みながらお喋りに興じていた。揃っているメンバーが第一王女に公爵家令嬢に朔耶とあって只管縮こまっていたフレイも少しは打ち解けたようだ。

朔耶がエルディネイアにフレイを同等に扱うよう無言の圧力を掛けていたのが功を奏したらしい。エルディネイアもフレイの事情や本来の立場を少なからず知っているので、貴族の嗜みで身分云々を持ち出すつもりも無く、それ以前にもエルディネイア自身があまり身分についての拘りを意識しなくなっていた。　誰のせいかは言わずもがなである。

「すると今度はカースティアを活性化させるつもりですの？」
「んー別にそこまで突っ込んで考えてる訳じゃないけどね」

お菓子を齧りながらカースティアの観光施設について話す朔耶。
一応北東にある湖に遊覧船を走らせる等の案を出しているだけで、具体的な構想には至っていない。

「資金が無いらしいからね～……そういえば、あたしの工房から出た道具の売り上げってどうなってるの？」
「サクヤ様の工房資金で直ぐに動かせるのはパル金貨で約五千枚程ですね」

オルドリア大陸の通貨はフレグンスとキトの通貨が混ざってキトを基準にほぼ”パル”で統一されている。銅貨三百枚が銀貨十枚、金貨一枚分に相等し、旧帝国金貨が一枚でパル銀貨十五枚分程の価値になる。

朔耶の工房資金はサクヤ式コンロとサクヤ式ランプの売り上げから税を払った分に中流貴族家からの支援金を足した金額がフレイの提示した金額だった。工房の維持費や人件費等も引いてあり、街灯設置事業で儲けた分が大半を占めている。

「それってどの程度なの？」
「えーとですねぇ、サクヤ様の工房と同規模のお屋敷を必要な家具や人材を含めて一軒建てられるくらいですね」
「んー、そんなもんか～……」

ちなみに星四つクラスの武具オールグレンで一番安いモノを一式集めるとパル金貨五十三枚程になる。　王都の一般民で一日に必要

な生活費はパル銅貨十二枚もあれば腹一杯食べられるくらいとなっている。

「手出すならアイデア勝負かな、これは」
「サクヤならきっと良い案が浮かびますわ」
「私もそう思います」
「事業ねぇ～、私もドーソンに何かやらせてみようかしら……」

それは止めといた方がいいと朔耶はエルディネイアの肩に手を置いて無言で首を振った。

「まあ、来週またこっちに来るまでに何か考えておくよ」
「ライシュウ？」
「ああ、えーっと六日後くらいね」

そろそろ還る準備をするという朔耶を名残惜しそうに見送るレティレスティア達と別れ、工房に一っ飛びした朔耶は行き成り空から降りて来た工房主に驚く衛兵に『ご苦労様～』と工房の警備を労って恐縮させながら扉を開けて貰った。

工房内の少しカビっぽいような匂いに懐かしさを覚えながら、朔耶は魔力石と測定器、サクヤ式ランプ、サクヤ式ライター、反発力ユニット等を手早くリュックに詰めて持って還る準備を整えた。これで弟への土産もバッチリだ。

「よし、リュックと携帯も回収したし、ジャケットはまた今度バルの所に行った時にでも持って帰ろうかな」

ランプの火を落として工房を出た朔耶は、何時かのキャンプに出掛けた日のように大きなリュックを背負うと、衛兵に挨拶してまた

恐縮させながら精霊に帰還の要請をした。

『元の世界へ――』

ココロエタ

そろそろ夕方に入ろうかという時間、朔耶は自宅の庭へと帰還した。明日は学校である。

「あ”　宿題どうしよう」

50話：紅獅子の姫君

「おお！　戻ったか我が妹よ！」
「ただいま～　お母さーん、お風呂沸いてる？」

真っ先に朔耶の帰還に気付いて飛び出して来た兄の抱擁を躱して家に上がった朔耶は、庭にダイブするという変わった遊びをしている兄を生温かく見なかった事にして荷物を廊下に置くと、そのままお風呂場に向かった。
脱衣所でぱっぱっと服を脱いで籠に放り込んでいく。

「あーやっぱり毎日お風呂に入る生活に慣れちゃうと、一日入らなかったダケでも気になるなぁ」
「朔耶ーー！　姫様の写真は何処にぃーー！」
「ぎゃーーーー！」

ブラジャーに手を掛けていた所にリュックを持った兄が中をごそごそ漁りながら飛び込んで来た。

「馬鹿っ！　スケベ！　変態！　写真はポシェットの方よ！」
「なんだそうだったのか！」

リュックを放り出して荷物を置いてある廊下へと飛び出していく暴走兄の背中を見送る朔耶は、レティレスティアだけでなくフレイやエルディネイアの写真まで撮って来た事で兄の暴走が更に加速し

やしないかと心配になった。

「あれ？　そう言えば……　なんか前より楽なんだけど」

朔耶は精霊に意識を引っ張られる感覚がかなり軽減している事に気が付いて呟く。僅かな違和感が無ければその事自体を忘れていた程に馴染んでいる。

オソラク　ヒトツニ　ナルコトデ　ツナガリガ　ヨリナジンダノデアロウ

『ふーん……　そっちが歩み寄ったからってのは？』

……ナイトモ　イイキレヌ

『そっか』

何と無く機嫌が良くなった朔耶は鼻歌など歌いながらシャワーを浴びるのだった。

入浴から上がった朔耶が居間に行くと、弟がお土産の魔力石とサンプルの道具をテーブルに出して弄っていた。魔力石ライターと反発力ユニットの特性を調べながら何やらノートに書き込んでいる。

「何してんの？」

「んー、このユニットでモーターが作れないかと思ってさ」

「あー、それあたしも試した事あるけど、上手く回ってくれないんだよね」

「動力の元が出来れば色々応用が利くんだけどな」

弟が熱心に石の特性を調べている傍、朔耶は魔力石の一つを手に取ってカリカリと爪を立ててみるが、やはり精霊と重なっていない状態では普通の石と手触りも硬さも同じで、石には傷一つ付かなかった。

『ねえ、削れるようにあんたを意識してれば石に影響するのかな？』

ワレガ　ツネニ　サクヤノイシヲ　ハンエイシツヅケル　ソノタメニハ　ツネニ　セイカクナイシヲ　シラネバナラヌ

具体的にどう削ろうとしているのか、リアルタイムで行動とその為の力の行使に正確なイメージが必要となるので効率的な細かい作業はかなり厳しいだろうと精霊は説明した。少し形を整えるだけでも相当な精神力を消耗してしまう。

精霊と重なっていれば朔耶の意思は精霊の意思となり、ダイレクトに力が発現される。神社の精霊のように強い意思を持った精霊の場合でも精霊が朔耶の意思に全面的に応じる事で同じ状態を生み出せるのだ。

『こっちじゃ無理ってことね』

弟に後でノートを見せて貰う約束をして朔耶は自分の部屋に向かった。途中、兄の部屋の扉が半開きだったのでちらっと覗いてみるとそこには――

「な、何してるのお兄ちゃん！」

「うおっ　朔耶！」

壁に等身大レティレスティアポスターを貼り付けている兄の姿。

デジタルカメラからパソコンに取り込んだ画像をプリントアウトしたらしい。パソコンのモニターにはオリジナル抱き枕カバーの通販ショップサイトが開かれている。

「個人観賞用ポスターまでは許すけど抱き枕はＮＧ！　でなきゃ他の美人さんの写真も撮って来ないからね！」

「むう……　仕方あるまい。　所でこの御嬢様方のプロフィールを是非」

「言っとくけど、三人とも結婚前提にした彼氏持ちだからね？」

「！！っ（ガーン）」

なんだか打ちひしがれている兄を放置して自室に戻ろうとする朔耶に、重要事項を思い出して復活した兄が呼び止める。

「待て！　もう一人、この子の詳細プリズ！」

そう言って一枚の写真に写った騎士達の一人を指す。オレンジ掛かった金髪に碧眼の可愛らしい顔立ちをした騎士がキョトンとした表情を向けていた。

「ああ、食堂で試し撮りした時の写真だね。その子はフラン・テイル・カルウット、王国派遣騎士団のガリウス小隊に所属」

「フランちゃんかぁ～、この如何にも高貴な雰囲気の顔立ちに不意をつかれたような素朴な表情がイイ！」

「戦闘スタイルは大型の両手剣、小隊のマスコットって呼ぶには結構実力もあるみたいで子犬っぽい印象かな、一人称は僕」

「おおお！　僕っ子かぁー！　しかもこの小柄な身体に両手剣、これは萌える！」

フランの写った写真の引き伸ばしを検討して盛り上がっている兄

に、朔耶は無慈悲な一言を放った。

「フランは男の子だからね？」

部屋に戻って来た朔耶はラフな服装に着替えると手付かずの宿題対策として、友人に支援を頼もうと携帯を取りに部屋を出た。兄の部屋から『今は衆道が流行ってるし……いやしかし！』と真剣に悩んでいる独り言が聞えたが無視した。

……

『なによ？』

……イヤ　ベツニ

『なんか気になる沈黙な念ね』

何か言いたそうな精霊の念を感じながら、朔耶はリュックから携帯を取り出して電源を入れる。初めて向こうの世界に召喚されたあの日から電源は落としたままだったのでバッテリーも残っていたようだ。

若干ボタンを操作する親指の動きに鈍りを感じながら画面を開き、朔耶はそこに表示されたメール件数に驚いた。メールサーバに保管されている期間分最大件数のメールが受信される。友人や家族からのモノが殆どで、一番古いメールには『今何処にいる？』とか『無事で居るか？』などのタイトル。

最近のモノは『くらぁ返事ＹＯ・ＫＯ・ＳＥ』など軽い調子のタイトルだったりする辺り、失踪中のタイトルとのギャップで朔耶は胸に込み上げて来るモノを感じた。目頭が熱くなるのを自覚しながら最近のメールに返事を書く。

「やっぱ自力で頑張ってみよっと」

メールを送信しながら、朔耶は宿題と雌雄を決する覚悟を決めて部屋に戻った。兄の部屋から聞える独り言はやっぱり無視した。

……アニドノハ　ホウッテオイテモ　ヨイノカ？

『大丈夫よ　……多分』

六日後の早朝、朔耶は動き易い服装にウエストバッグを装着、軽めのリュックを背負って自宅の庭に居た。ウエストバッグにはカメラとフィルムと電池。リュックには弟が考案した魔力石を使う道具の、概要が記されたノートなどが入っている。

魔力石モーターの開発はもう少し石のサンプルが欲しいとの事だったので明日の帰還時に持てるだけ持って帰るつもりでいた。

「さて、忘れ物も無いし　それじゃあ行って来るね」

「気をつけてな」

「何かあったら直ぐに帰って来なさいね？」

三度目の異世界からの帰還で朔耶の身に危険は無いと分かると慣れたモノで、兄と弟はまだ寝ているが、父と母はやはり娘を異世界に送り出す事への心配が抜けないらしい。朔耶はしっかり異界転移に立ち会う両親の見送りを受けた。

「行って来ます」

自宅の庭から、テレビのチャンネルが変わる様に風景が遠い地の街角に変わった。その精霊の基点となる世界が違う事での弊害か、世界を渡る際、目標地点である遍在の位置が揺らいで安定しないので中々狙った場所に出るのは難しいらしい。その為、来る度に違う場所に出てしまう。

「っと……　今度は何処に出たの？」

サクヤヲ　ヨクシル　セイレイノ　ケハイヲオッタ

「てことは、王都の何処かかな？」

朔耶が意識の糸を伸ばして周囲を探ると、良く知った精霊の気配が近くに現れるのを感じた。朔耶を最初にこの世界に召喚した張本人？の、フレグンスの王族を護る精霊だ。

『やほー、元気にしてた？』

ヤホー　サクヤ　マタアエテ　ウレシイ　シカシ　サクヤトトモニアレズ　スコシザンネン

最後に夢の中で話した時よりも言葉の雰囲気が柔らかくなった印

象を受ける。朔耶はフレグンスの精霊と神社の精霊が何か意思のやり取りをしている思念の流れを感じたが、精霊同士の挨拶でもしているのだろうと、その間に街並みを見渡して凡その現在地を特定する。どうやら一般区の何処からしい。

「一般区かぁ～、取り合えずレティに挨拶してから工房にでも行こうかかな」

『レティ～　おはよー』

――ふにゃ……　おはようございます、サクヤ……――

『ふにゃて……、寝不足？」

――はい、実は少し……――

前回と同じく、朝のティータイム中だったレティレスティアに交感を繋いで挨拶を交わした朔耶は、今日は工房と街に居る予定を伝えて交感を解いた。カースティアの観光施設についてはカイゼル王にも話が通されたが、今はサムズ動乱の後始末に手一杯なので朔耶に何か案があるなら活動を許可するとの事だった。

その為の予算は出ないが、カースティアの派遣騎士団をニ個小隊程なら自由に使っても良いという許可書を発行するそうだ。

「後で受け取りに行かなきゃね」

背中のリュックを背負い直し、朝の喧騒が聞え始めた王都一般区の通りを一つ上の区画に通じる門に向かって歩きだす。一般民の住居が中心に建ち並ぶこの辺りは、各種店舗の犇めき合う市場周辺よりも静かで、建物も貴族街と比べて控えめな外装の家々が庶民である朔耶に親近感を持たせて気持ちを落ち着かせる。

「そういえば……　あたしの家、開放区に建てられてるんだっけ」

どうせ週二日くらいしか来られないのならこの辺りでよかったのにとも思う朔耶だったが、仮にも王室の側近的な官職に就いている者が一般区に住むのは問題がある。近所の住人達にとっても落ち着かないかもしれない。

「……将来こっちで就職して働くって選択も有り？」

此方で儲けたお金を元の世界で換金すると　どのくらいになるのか、今度調べておこうかなどと考えながら歩いている内に門の前に到着した。衛兵に挨拶して門を潜る。

「こ、こ、これはサクヤ様！　本日はこのような早朝からご機嫌麗しく――」

「あー堅苦しいのはいいから」

随分と若い衛兵が緊張しまくって声を裏返している姿に、朔耶は噴出しそうなのを堪えながら手をヒラヒラさせて通り抜けた。彼等下っ端の衛兵にしてみれば、朔耶は王室直属に在って王都繁栄の象徴とも言える存在であり、挨拶を交すだけでも途轍もないプレッシャーが掛かる。

それ以前に、普通は声を掛けられる事も無い。ましてや気軽な挨拶など、フレグンスの身分に厳しい常識では考えられないのだが、朔耶本人にそういった自分の立場に対する自覚が薄い事で、下っ端の衛兵達は何時うっかり失礼な対応を仕出かしやしないかと冷や冷やモノである。　偉い人はある程度、偉そうにしていてくれた方がやり易いのだ。

開放区に響く朝の喧騒はもっぱら馬車の走る音だったりする。朔耶は王都の街を一人で出歩いた事は今まであまり無かった。何時もフレイが一緒に居るか、他の護衛が付くかして馬車での移動が殆どだったので、王都の一人歩きは中々に新鮮だった。

「偶にはお昼も下街で食べてみようかな？」

両親や弟からは異世界にある未知の病原菌に触れて感染したり、その逆が起きる恐れもあるので不衛生な場所に近付いたり下街のような所での食事行為は控えた方がいいと心配はされていたが、朔耶は二ヶ月以上も此方で生活していたのだ。

特に病気を患った事も無く、朔耶の周囲の人間にも体調に異常を起こした者も居ないので問題は無い。例えそれが精霊の加護あってこその結果だったとして、それならば尚の事、精霊の力を使える今の朔耶には全く問題は無いのだ。

「そういえば、あたしもう護衛の必要も無いよね」

ワレガ　ツネニ　マモッテイル　カラナ　……モトイ　ワレラガ　ツネニ

黒の精霊（地下の精霊）からの抗議があったらしく、言い直す神社の精霊に思わず笑みをこぼす朔耶だった。

「ご苦労様～」

前回は空から降りて来て、今回は供も護衛も付けずに通りを歩いてやって来る朔耶に、工房を警備する衛兵は驚かされっぱなしだった。

工房に入って早速、朔耶は作業台の上に弟の考案が綴られたノートを開くと、魔力石の詰まった袋や型に使う角材などを棚から取り出して台の上に揃えた。

「さーて、まずはどれから行ってみようかな？」

ガランとした工房の作業台でコツコツと石を加工する朔耶は、偶にはこうして一人で作業をするのも悪くないなぁと、朝の陽射しが差し込む静寂の中で物作りに没頭した。

「ふーむ、流石タカ君……　こういう改造系に関してはあたしより発想力があるなぁ」

朔耶は弟のノートに綴られた内容を参考に反発力ユニットと魔力の集中機構の組み合わせを試しながら、以前失敗した魔力石ライト〇イバーモドキの改良を行っていた。破棄しようと思っていたモノだが、フレイが熱心に取っておこうと勧めるので保管しておいたのだ。

懐中電灯を作ろうとしたらライト〇イバーモドキが出来た話を家でした所、弟がかなり細かく構造と現象を訊いて来たので図解で説

明すると、それで凡その状態が分かったらしく図解に色々描き足していった。

結局これはライト〇イバーモドキなのだが、元の失敗作のように最大出力で伸びるだけ伸びて床まで焦がして五秒で魔力切れという欠陥品ではなく、或る程度の長さを保って剣の形を数分は維持出来る筈、なのだそうだ。弟命名は”エレメントブレード”

「どれどれ？」

朔耶は念の為、魔法障壁を張ってから”試作エレメントブレード”のスイッチを入れてみる。ヴゥンという音と共に圧縮反発力と反発力の多重構造になった魔力の膜が青白い電光を纏って八十センチ程伸びた状態で安定した。

軽く振り回してみてもぶれる事無く雷光の刃を維持している。試しに角材を作業台の上に置いてはみ出した部分に当ててみると、バチバチと放電現象を起こしながら焼き斬れた。

「おお～凄い」

今度は床に角材を立てた状態で斬り付けてみる。そうすると、素早く斬り付けた場合は角材が焼き斬れる前に光刃の部分が通過してしまう為、光刃が当った部分が少し焦げる程度に留まった。長く光刃を当てていれば眩しい放電を起こしながら対象を焼き斬る事が出来る。威力控えめな光の剣だ。

「危ないけど、一瞬斬るだけなら軽く電撃当てるのと同じ感じかな？」

九センチ角の角材を五回ほど焼き斬った所で魔力が尽きた。魔力石を交換してスイッチの安全装置を掛けてから作業台の端に置く。持ち歩くなら専用のホルスターを作らなくちゃなぁと、朔耶は幼馴染が持っていた特殊警棒のベルト付きホルスターを思い浮かべた。ちなみに安全装置の取り付けは弟の提案によるモノである。

「革の裁縫になるし、職人さんに注文しよっと」

そろそろレイスやフレイも宮廷魔術士の仕事で城に出向いている頃合かと、朔耶は作業台を片付けて工房を出た。エレメントブレードも途中の革裁縫職人の工房でホルスターを作って貰う為に持って行く。

「ん～　これは自転車か何か、手軽な乗り物が欲しいかな」

革裁縫の職人に形状や仕様を伝えてホルスターを注文した朔耶は、カースティアの派遣騎士団を動かせる許可書を受け取りに城へ向かっていた。王都での移動は大抵馬車を使っていたので、工房から城までの距離は歩くと結構掛かる。

ようやく貴族街入り口の門に辿り着いた所でブラフニール家の紋章が付いた馬車と擦れ違った。公爵家令嬢エルディネイアが乗った馬車、朔耶はちらっと見えた車室の中にドーソンの姿も見つけた。

御者台の使用人らしき人が朔耶に気付いて軽くお辞儀をする。車内のエルディネイアとドーソンはお喋りに夢中で馬車が門を過ぎても速度を上げない事に気付かない様子だった。朔耶は気を利かせている御者に苦笑しながら手をヒラヒラさせて合図を送ると、御者は申し訳無さそうに頭を下げながら馬車を走らせて行った。

「ルディ達は今から学校かな、また模擬戦の観戦にも行きたいなぁ」

公爵家の馬車を見送り、門を潜った朔耶はノンビリと貴族街の街並みを眺めながら防壁沿いに半周して上流区へ入る門に向かう。開放区より上は朝の喧騒というモノに縁が無いようで、この時間でも静かなモノである。

等間隔に設置された街灯は、もうすっかり通りにも馴染んでいるようで、貴族街の風景に溶け込んでいた。朔耶は自分が企画して作った街灯の並ぶ通りを見て、未だ街の一部しか知らないこの王都に愛着を持ち始めている事を実感した。

『卒業したら本気でこっちに就職しようかな？　あたし……』

スデニ　シゴトニ　ツイテイルノデハ　ナイカ？

『……そう言えばそうだったね』

”王室特別査察官”、朔耶が王都で自由に動ける為に与えられた官職であり閑職ではあるが。

「”信頼の証”作りにも精を出さなきゃねー」

城の入り口で馬から降ろされた朔耶は運んでくれた騎士に礼を言った。朔耶がてくてく歩いている所を見つけた騎士団の騎馬隊が、国の救世主とも囁かれている王女の客人を護衛も付けずに歩かせる

など言語道断とばかりに城まで運んでくれた。割と強引に。

「運んでくれてありがとね」

「いえ！　自分は当然の事をしたまでであります！」

朔耶の本音としては城までノンビリ街の風景を楽しみながら歩いて来たかったのだが、この真面目な若い騎士様は騎乗を断ると馬を降りて後ろに続きそうな勢いだったので、朔耶は仕方なく運んで貰う事にしたのだ。表面意識を読んだ限り、下心も無かった。

「では！　自分は任務に戻ります故！」

ぴっちり敬礼をして去っていく真面目な騎士を溜め息交じりで見送った朔耶は、とりあえず城内に入ると許可書を受け取りに宰相の執務室を目指すのだった。　城の中は何やら少し忙しない空気に包まれていた。

「やほーフレイ、元気？」

「あ、サクヤ様！　何時此方へ？」

各執務室のある階まで上がって来た朔耶は、廊下を歩いているフレイを見つけて声を掛けた。世界を渡るようになってから数日置きに一泊二日しか此方の世界に現われない為、以前のように一日中フレイと一緒に過ごすという事も無くなり、フレイも魔術士隊に配属されてからはそれまでのようなアクレイア家使用人兼朔耶の専属警護という立場には居られなくなった。

もとより此方の世界での朔耶は警護を殆ど必要としない存在とな

っている。

「今日の朝だよ、ちょっと工房で作業してたんだけど……　なんだか城内やけに忙しくない？　何かあったの？」

「はい、実はルティレイフィア様が昨夜お帰りになられまして、皆さん浮き足立ってるんですよ……」

「……って、誰？」

「あ、スミマセン！　ルティレイフィア様はレティレスティア様の妹御、第二王女様に有らせられる方ですわ」

レティレスティアの妹である第二王女ルティレイフィア・フィリス・フォルティシス・フレグンスは、度々お供を連れてはお忍びで諸国放浪の旅に出て暫らく帰ってこないという放浪癖のある少々困ったお姫様で、レティレスティアと違って精霊術の才は交感能力が辛うじてある程度。

その代わりに近衛を指南役に就けて剣術を修め、魔術の修得にも積極的に取り組んで実力を伸ばし、剣・魔・精のバランスが取れた非常に優秀な戦士としての力を身につけていた。

「あー、もしかしてレティが寝不足なのって」

「ああ……　昨夜は晩くまでお部屋で話してらしたようですから……」

「なるほどね　……しっかし放浪癖のあるお姫様かぁ」

「何でも今回は南東の未開地を旅していらしたそうですよ？」

オルドリア大陸南東には何処の国にも属していない街が点在し、その地域に住む人々は国同士の争いとは殆ど無縁な環境で細々と暮らしている。

大陸の中央部分が北から南までフレグンスの支配圏にある事で他の国々もその地域への介入が出来ず、フレグンスも南東の端まで支配圏を伸ばした所で得る物が無く、逆に未開地に多い魔物への対処や土地の開拓で無駄に金が掛かってしまう為、その地域には手を伸ばしていない。

「そんな危なそうな所をお忍びで？」

「はい、でもルティレイフィア様はとても御強い方ですから、アルサレナ様も国王様も余り心配なさらないみたいですよ？」

「へー」

朔耶とフレイが城の上層階廊下で第二王女様の噂話に花を咲かせている所に、凛とした覇気を感じさせる鋭い声が響いた。

「フィレイヤ！　そんな所で何の無駄話をしている！　仕事はどうした！」

「ひゃっ　す、スミマセン！」

飛び上がって驚きながら謝るフレイ。廊下の奥からカツカツとブーツの音を響かせて早足に歩いて来る人物、首の後ろに纏めた赤毛に近い色のストレートな金髪を靡かせ、少しツリ気味で強い意志を感じさせる薄い翠色の瞳が、フレイと並び立つ小柄な黒髪の少女を捉える。

「……お前は……」

「あ、初めまして朔耶と言いマス」

キリッとして厳しそうな印象のルティレイフィアに訝しむ視線を向けられ、朔耶は『お世話になってます～』と挨拶をした。

「そうか……　貴女が純真な姉上を誑かし、母上、父上に取り入ったという”黒髪の戦女神”か」

ルティレイフィアは口惜しそうに朔耶を睨みつけると、苦々しく呟き、スッと腰を落として剣の柄に手を掛けた。

「……あれ？」

またしても通り名が更新（どちらかといえば追加）された朔耶は、たらリと汗を浮かべた。

51話：戦女神と紅獅子

城の廊下で朔耶と対峙する第二王女ルティレイフィアは愛剣であるシュベルコーの剣を抜いた。控えめな装飾ながら高級感溢れる剣の刀身が廊下の窓から差し込む日の光に輝く。

「抜け！」

「って言われてもねぇ……」

剣の切っ先を向けるルティレイフィアに、朔耶は困った笑みを向けて頭を掻いた。隣ではフレイがあわあわしながら朔耶とルティレイフィアへ交互に視線を向けて慌てている。

『どうしようか？』

タダノ　サグリ　ツキアッテ　モンダイナカロウ

神社の精霊は少し相手をしてやれば良いのではと朔耶の相談に答えた。実の所、ルティレイフィアが朔耶に本気で敵意を持っていない事は、既に意識の糸で意思の表層に触れて確認済みだった。これはルティレイフィアの”試し”である。

旅先の未開地でサムズ反乱の急報を聞きつけたルティレイフィアは、急いで祖国に戻ってみれば大規模な傭兵団が動員されたにも拘らず僅か七日余りでサムズの首都エバンスは鎮圧され、その功績の

殆どが”サクヤ”と名乗る客人の手によるモノだと聞いて一体どんな知謀の策士か武の猛者かと、一番親しいという姉に一晩中問い質した。

しかし、レティレスティアの説明では今一(いまひとつ)サクヤの人物像が見えてこず、侍女や騎士達に聞いてみてもやはり凄い人物だという事がルティレイフィアには伝わってこなかった。寧ろ聞けば聞く程、人の良いちょっと変わった異邦人で発明家という然して珍しくも無い姿しか浮かんでこない。

唯一、姉の婚約者候補である近衛騎士団長イーリスが『あの方は途轍もない力を持つ方です』と語った事だけが印象に残った。傭兵達の間では神話の神か悪魔かという畏れられ方をしている辺り、それならば直々にその力を見定めてやろうとルティレイフィアは朔耶に剣を向けた。知謀の策士なれば巧みな言葉で収めるか、武の猛者であれば我が剣を圧倒してみせるか、と。

「どうした、臆したか？　腰の得物は飾りか？」

ルティレイフィアが挑発する。朔耶の腰に装着してあるウエストバックの端からはエレメントブレードの柄がはみ出していて、確かに短刀のようなモノを差しているようにも見える。

『飾りですつったら怒るかな？　偉い人には分からんのですとか言って』

……サクヤ

呆れるような念を向けてくる精霊に『冗談よ』と返して苦笑を浮かべながら、朔耶はエレメントブレードを手に取った。あわあわし

ていたフレイの表情が引き攣る。

ルティレイフィアは朔耶が困ったような笑みを浮かべながらも此方の挑発に腰の得物を抜いた、と思ったら、短刀の柄のように見えたソレにはあるべき刃が無く、ポカンとしてしまう。何の道具かは分からないが、短刀類の武器では無い事は分かった。

朔耶は最初、エレメントブレードを手に取って刃が無い事を見せ、『この通り武器ではないですよー』とやり過ごすつもりでいたのだが、ポカンとした後の『勘違いに気付いて気恥ずかしい』というような羞恥に染まるルティレイフィアの表情があまりにレティレスティアにそっくりなので可笑しくなってしまった。

『この子の”素(す)”をもっと見たい』そんな風に思った朔耶の、何時もの悪癖(からかくせ)が顔を出す。

「……いいけど、そんな剣であたしの剣を受けられるの？　……フレグンスのお姫様」

急に口調と雰囲気を変えて動揺を誘うと、勿体付けながらスイッチオン。

「っ！？」

「さ、サクヤ様！」

ヴォンッと音を立てて伸びるエレメントブレード。突然現われた光の剣にルティレイフィアは眼を瞠り、フレイが悲鳴のような声を上げる。朔耶は更に魔法障壁で身体を覆って宙に浮かぶと、漆黒の翼を廊下一杯に広げた。

噴き上がる魔力の奔流にカーテンは激しく揺れはためき、壁を打つ風が廊下の窓枠をガタガタと鳴らす。その神懸かった光景に思わず息を呑むルティレイフィア。ちなみに室内なので翼の放電現象は無し。ついでに朔耶の瞳も光らせる神社の精霊。

『……ノリノリじゃないの』

ワレハ　アルジニ　シタガッタマデ　ナリ

中々茶目っ気が出てきた神社の精霊に何と突っ込んでやろうかなどと考えていた朔耶は、フレイがルティレイフィアを庇うように立ち塞がり、『自重して下さい～！』と訴え掛ける涙目熱視線を送って来ているのを受けてちょっとやり過ぎたかと自省しながら翼を納めて廊下に下りた。そして一言。

「なんてね」

「……は？」

「……こういう方なんです」

呆然としているルティレイフィアに、フレイはハの字眉で達観した困り笑顔を浮かべて言った。

その後、城内に突如発生した巨大な魔力を感じ取って緊急出動してきた宮廷魔術士隊を率いるレイスが、朔耶と顔を合わせるなり何か納得したように脱力して部下達を持ち場へ戻らせたり、同じく魔力を感じて出向いて来たアルサレナ王妃にルティレイフィアがずるずる引っ張っていかれたりと、割とほのぼのした空気が続いた。

「今日も平和だねぇ」

「あはは……」

宰相の執務室で許可書を受け取った朔耶は昼食を摂りに城を出て街へ繰りだした。一般区入り口までは馬車で送って貰う。朔耶が馬車を降りると、御者がおずおずと声を掛けてくる。

「本当に街でお食べになるので……？」

「うん、庶民の生活を知っておくのも大切な事なのよ～？」

などと、朔耶は下々の者を知る為に敢えてそこに身を投じる高貴な身分の貴婦人を台詞で演出してみたりする。勿論冗談なのだが、真に受けた御者は『思慮深さと慧眼に感服致しました』と畏まった。朔耶としては『あんた庶民やがな』というノリの返しが欲しかった所だが、この世界では無理な相談だ。

レイスに貰ったお金を確かめながら、朔耶は適当な飲食店はないかと一般区の市場通りを見て回った。そのうち二階建ての宿を改造したカフェテリアのような店があったので其処に入る事にした。二階部分の壁と屋根を三分の二程取っ払ってガーデンテラスのようにした中々おしゃれな店である。

王都に住む貴族の間では割と顔も知られている朔耶だが、一般区には殆ど下りて来る事が無かったので住人達の反応は大人しいモノだった。噂に聞く王女の客人と外見的特長が似ていると思っても、何時かの大学院の学生達のように『まさかそんな御人がこんな所に居るはずも無い』という思い込みにより、誰も朔耶本人だとは思わないのだ。

「パル銅貨十枚で好きな料理を食べ放題かぁ、バイキングスタイルに近いのかな　……って」

朔耶がレイスから貰ったお金はパル金貨十五枚、銅貨に換算すると四千五百枚だ。金貨一枚で支払うとお釣りの銅貨が二百九十枚――まず間違いなく店内の客達に注目されるだろう。

「は、恥ずかし過ぎる……」

昼食を食べに来た客達が行き交う店の前でどうしようかと悩んでいる朔耶の背後に、そっと近付く人影。神社の精霊が警告を発する。

サキホドノ　ヒメドノダ　マウシロニイル

「アルサレナさん何か言ってた？　ルティちゃん」

「っ！」

振り返らず背後に立つ自分を言い当てた朔耶にルティレイフィアは一瞬驚くも、その台詞に聞き捨てならない言葉を聞いて即座に持ち直す。

「”ちゃん”はよせ、わたしは子供ではない。母上には……まあ、色々だ」

「じゃあルティって呼んでも良いんだね～、ルディと被りそうだけど微妙に発音違うから大丈夫よね」

振り返ってにっこり笑いながらそんな事をいう朔耶に、少し構えていたルティレイフィアは肩の力が抜けるのを自覚した。

「その……先程はすまなかった」

「いいよ、レティ達に聞いてもよく分からなかったから自分の眼で確かめようとしたんでしょ？」

「ああ、流石だな……全てお見通しだったわけか」

軽く溜め息を吐いて苦笑するルティレイフィアは、城の廊下で会った時と比べて随分と纏う雰囲気を柔らげていた。服装も剣こそ立派なモノを下げているが、傭兵か旅人のような風体に男装しており、髪も若干色をくすませてある。

「所で、サクヤ殿はこんな場所で何を？」

「んー実はご飯食べに来たんだけど、お金がちょっとね」

ルティレイフィアは朔耶が一般区の店に食事に来たと聞いて少し驚いた顔をしたが、お金の事で困っていると聞くと直ぐに納得して自分の財布袋から銅貨を分け与えた。朔耶が直面していた問題はルティレイフィア自身にも経験があったのだ。

「わたしも最初はお小遣いの金貨を持って街に出てな、随分とゴロツキのような連中にタカられたモノだ」

朔耶とルティレイフィアはテラスの端のテーブルに座り、二人で食事を摂っていた。此方の世界の飲食店に出される庶民料理の食べ方がよく分からず四苦八苦する朔耶に対してルティレイフィアは慣れたモノで、何をどうやって食すのか丁寧に教えながら食事を進めていった。

「これは先に小皿のソースで味付けをしてから、この炙った薄肉に巻いて食べるのだ」

「ほうほう、ハム巻きみたいな感じなんだね」

粗方平らげた朔耶達はスープのようなお茶を飲みながらノンビリ会話を楽しんだ。主にルティレイフィアの旅話やレティレスティアの天然エピソードが話題の中心になっている。アルサレナから朔耶の事情を詳しく聞かされたルティレイフィアは、朔耶個人に関する話題は場所を選んだ方が良いと判断していた。

「聞く所によると、カースティアを活性化させる事業を行うそうだが？」

「そんな大層な話じゃないよ、何か観光名所でも作れたら少しは街の人達の要望も叶えられるようになるかな～って」

カースティアは現状、街にも派遣騎士団にも余分な資金が無く、派遣騎士団は街の住人の要望に殆ど応えられない状態にある。

「ふむ、住人の不満が高まりそうだな」

「そこが一番の問題だって言ってたよ、幾ら意見書で街の改善案とか要望を出されても何も出来ないし」

殆ど名ばかりとはいえ、カースティアはクリューゲル国の首都なのだ、住人との溝が深まればサムズ独立派のような反乱分子を生み出しかねない。

「嘆願書も殆ど読むだけで何も手が打て無い事が多いから、せめて街の収益が増えればってガリウスも言ってたんだよね」

「そ、そうか……あの男は今カースティアに詰めているのだな、てっきりバーリッカムに居ると思っていたが」

ガリウスの名前が出た途端、急に眼が泳ぎ出したルティレイフィアに、朔耶はキョトンとして彼女の顔を覗き込む。

「な、なんだ？」
「……この前の反乱の時だけど、ガリウスが……左腕を……肘から」
「！っ　う、腕をどうしたのだ？　まさか、失うような怪我を……！？」
「ぶつけて怪我したから治したよ」
ちなみに負傷理由は”サクヤの恥じらい”である。

「……」
「……ニヤリ」

悪魔が玩具を見つけたかのようなニヤリ笑いを朔耶から向けられ、ルティレイフィアは思わず仰け反る。危機感を覚えて席を立とうとするが、肩を掴まれて座らされた。

「ルティ～ちゃ～ん」
「な、な、なんだ？」
「ガリウスとはどんな関係～～？」
「べ、別にどんな関係という事もないっ　あの男とはただの知り合いだ」

ガリウスとの関係を追及して来る朔耶に、ルティレイフィアは剣の稽古を務めさせた事があっただけだと言って口を噤んだ。しかし、顔を赤らめて俯き加減にモジモジしているその姿は実に説得力に欠ける。

取り合えず、皿に残っていた炙り薄肉が第二王女様の手で細切れにされた辺りで、朔耶はもう一押しネタを振ってみようと椅子ごとガタガタ移動してヒソヒソ話が出来る距離まで身を寄せる。ルティレイフィアは今度はなんだとばかりに身構えた。

「実はあたし、ガリウスに押し倒された事があります」（ひそひそ）
「なにっ」（ひそっ！）
「それで一時、男性恐怖症に陥りました」
「な……！　い、いったい何を……」

王都までの旅路でカースティアの大宿に泊まった夜、朔耶が湯浴みに行っている隙にガリウスは朔耶の部屋に忍び込んでいた。

「何も知らずに帰って来たあたしがベッドに入ろうとすると……」
「……（ごくり）」
「突然背後から襲われてベッドに組み敷かれたあたしは、抵抗も空しく、寝着の胸元を護る紐を一本一本解かれていき……」
「……ぅぅ」

”一本一本”という部分でルティレイフィアの胸元に指をちょんちょんと降ろしながら臨場感タップリに囁く朔耶。そうしてルティレイフィアが身を乗り出して来た所で、朔耶はひょいと身体を離して元の位置まで椅子ごとガタガタと移動する。

「へ？　え？　さ、サクヤ？」
「続きが聞きたかったらルティとガリウスの事を教えてね？」

ルティレイフィアは羞恥と怒りと期待と懇願と不安と安堵が入り混じったような、実に複雑な表情を浮かべた。そして逡巡しながらも聞きたい気持ちに勝てなかったらしく、おずおずと切り出す。

「さ、先に聞いておくが……その話はサクヤにとって話し辛い事では無いのだな？」
「うん、もう本人とも和解済みだしね」

「そうか……」

頷いて納得を見せたルティレイフィアは周囲を気にしながら声を潜めて語り出す。それは彼女が十三歳の頃、お忍びで初めて供を付けずに一人で街へ出た日の事。一般区の露店通りを歩いていたルティレイフィアは飲み物を買おうと茶屋に寄ったのだが、支払いに出した金貨にお釣りが払えないと、茶屋の店主が困っていた。

すると客の一人がルティレイフィアの分を支払ってその場を収め、ルティレイフィアに金貨を換金して貰える所に案内すると言って店を出た。ルティレイフィアは『それは助かる』と、その親切な男の後に着いて行き、貧民窟（スラム）に引き摺りこまれたのだ。

「え……その話、ルティにとって話し辛い事じゃないでしょうね？」

「いや、大丈夫だ　大事には至らなかった」

「そっか」

もしや聞いてはイケない事だったかと一瞬焦った朔耶は、その返答を聞いてホッと胸を撫で下ろす。朔耶自身も、あの時の事を話のネタに出来るのは当事者との和解が有り、遺恨を残していないからだ。

「わたしをスラムに引き込んだ男はその一帯を支配している組織の頭目だった。中流から下層の貴族とも繋がりのあった奴でな、そういう筋から来る裏の仕事を取り仕切っているやり手の盗賊と言った所か」

その組織は営利誘拐から人身売買も行っていて、貴族の子供なら身代金目的に、一般民の子供なら奴隷市に売る為に誘拐する。キトの裏組織を本体として繋がっているとも言われていた。

特に貴族の子供は身代金が払えない下級貴族出であっても、奴隷として売れば一般民よりも遥かに良い値が付くので、当時のルティレイフィアの様に世間知らずで身分のある子供が街をふらふらしていれば直ぐに狙われる。

「後で分かった事だが、一部の貴族間で奴等の存在は黙認されていたのだ。派閥闘争と裏工作の実行員として暗黙の了解でな」

高額な身代金を要求された中流から下層の貴族に金を融通する事で恩を売る、その仕込みとして組織に狙った家の者を誘拐させるのだ。忠実な裏の仕事人として働かせる為に、組織の商売にも目を瞑る。

「だが、ガリウスはジャバール家当主からも手を出すなと言われていたそんなスラムの組織を、自分達だけで調査して潰したんだ」

「へぇ～それは初耳、じゃあルティはその時ガリウスに助けられたの？」

「ん……どちらかと言うと利用されたのだが……」

ルティレイフィアが供も付けずにお忍びで城を抜け出せたのは、実はガリウスの手引きだった。ガリウスはルティレイフィアをこっそり尾行して囮に使ったのだ。

「なんという外道」

「ああ、まったくもって酷い男だ。だが、当時は貴族間での暗黙の了解は騎士団にも強く影響していたからな」

誰しも薮蛇は避けたい所。互いに牽制しあった状態でスラムの組織をどうにかしようと行動する者は居なかった。

「王様とか王妃様は何もしなかったの？」
「報告は全て途中で握りつぶされていたのだ、父上も母上も知れば放って置くような方達では無いからな」

自達の膝元で闇の組織が暗躍していると知れば、カイゼル王やアルサレナ王妃は自ら出向いて潰しに行くようなタイプだ。朔耶は話の時期的に考えて報告の握り潰しも貴族間の暗黙もフエルト卿が絡んでいたのではないかと睨んだ。

「まあ、それでわたしが捕らわれた場所を急襲したガリウスはわたしから父王に話を通せと進言してな」
「なるほど、それで正式に命令が下ったら一気にアジト殲滅って計画だったわけね」

『結構いい奴じゃん』と朔耶はガリウスの印象を上方に微増させた。微増なのは十三歳の女の子を危険な組織を追う囮に使うなど、やっぱり乱暴な所を差し引いてだ。

「父上の命令が発せられてスラムに騎士団が出動した時も、貴族間での暗黙が騎士達の動きを鈍らせて組織の幹部が逃げ出す時間を作っていたようだが、ガリウスと部下達は躊躇無く真っ先に突撃を仕掛けて脱出寸前だった頭目を捕らえたんだ」
「へ～やるじゃん」

人攫いの組織を潰して功績を上げたガリウスだったが、それまでに行ってきた組織の調査は命令違反や命令無視によって得たモノだけに、正当な評価が与えられる事は無かった。

さらにジャバール家当主の言い付けを破った形であった事が、ジ

ヤバール家が他の門閥家から孤立するのを辛うじて防ぐ理由となり、ガリウスは家の体裁を取り繕う意味で王国騎士団から派遣騎士団へと所属を移されたのだ。王都から地方への移動は降格といって良い。

「それでもあの男は鬱ぐ事も無く、あの軽薄な笑みを浮かべて任務を果たしていた。奴は強い男だ」

「ほほーう、そこに惹かれたわけですか」

朔耶の問いにルティレイフィアは一瞬言い淀んだが、頬を染めながら小さく俯いて否定はしなかった。

「そっか、片想いなのか～」

「ぅぅ……そ、それで、その、先程の話の続きだが」

照れ隠しで誤魔化すように話の続きを要求するルティレイフィアに、朔耶は苦笑しながらガタガタと椅子ごと移動してルティレイフィアと身を寄せ合った。ごにょごにょごにょ……

『腕を引かれてあたしの上に覆い被さったガリウスは――』の件（くだり）では肩を強張らせてぎゅっと唇を噛む様に身体を縮込めたルティレイフィアだったが、その後の顛末というオチを聞いて椅子からズリ落ちそうなほど脱力していた。

「阿呆か、あの男は！」

「あっはっはっ」

「長居してしまったな」
「だねー」

店を出た二人は腹熟(はらごな)しに当て所も無く一般区の街を歩いている。
朔耶は午後からカースティアに飛んで湖の様子などを調べるつもりだと話し、ルティレイフィアは暫らく王都で過ごした後、また未開地に旅へ出かける予定だと語った。

「未開地って危ない所だって聞いたけど」
「ああ、確かに危険な地域ではあるな」
「何か旅する理由でもあるの？」
「うむ……」

ルティレイフィアの話によると、未開地では魔物の被害が深刻化しているが、貧しい土地柄故に良い報酬も出せないので討伐に来る傭兵も少なく、戦える者が足りなくなってさらに被害が増えるという悪循環に陥っているらしい。

旅先で出会った未開地の街の友人に数十日ぶりに会いに行ってみれば、魔物との戦いで命を落としていたり、街そのものが無くなっていたりという事がここ最近で頻繁に起きるようになって来ている。

「わたしは彼等の街を転々としながら情報を伝えて回ったり、魔物の討伐を行ったりという事が未開地へ赴く旅の目的になっているな」
「騎士団とか動かせないの？」
「残念ながら、それだけの気概のある者が居ないのだ」

以前は未開地へ赴くルティレイフィアに同行を申し出る者も少な

からず居たが、何れもルティレイフィアが剣を振るう地域の危険さを甘く見ており、『第二王女様の勇者ごっこに付き合って覚えを良くしよう』程度の認識で同行した者は尽く大怪我をして帰国するか、怖気づいて帰国するか、或いは殉職した。

「自国領でも無く、何がある訳でもない危険な地域に赴き、その地に住む人々を守る、そんな気概を持った者は中々居ないものだ」

「ふーむ……その辺りまでフレグンスが領地にしちゃえば騎士団も派遣出来るのかな？」

「理屈ではな、だがあの地域を領地に組み込む理由が無い。組み込まない理由なら色々あるが……」

「んー　結局資金、お金オカネかぁ～」

朔耶は手を頭の後ろに組んで空を見上げながら、何処の世界でもその辺りの事情はあまり変わらないのかと溜め息を吐いた。そんな朔耶の隣を、ルティレイフィアはただ静かに歩いていた。

この日の昼下がり、漆黒の翼を広げた朔耶はルティレイフィアに何時かまたお話をしようと約束してカースティアの空へ飛び立ち、ルティレイフィアはそれを見送って城に戻った。

「もぉ、酷いわルティ！　私も誘って下されば良かったのに」

朔耶と食事をした事をレティレスティアに話すと頬っぺたを膨らませるほど羨ましがったので、精霊術の才に優れる姉にコンプレックスを感じていたルティレイフィアは少なからず優越感に浸ったりするのだった。

「サクヤか……確かに、姉上や騎士達の言う通りの人物だったな。カースティアの観光事業、上手く行けば良いが」

52話：カースティア観光事業

カースティア北東に広がる湖はかなり大きく、一周するのに馬で回っても三日は掛かるほどの広さだ。朔耶は湖の上空を旋回しながら湖面の様子を窺った。漁をしている船などが見える。

「琵琶湖みたいな感じなのかな～、大きな船を走らせるか……　それとも足漕ぎボートとか」

此方の気候は日本の四季ほど明確に移り変わる事は無くほぼ安定しているようなので、冬でも湖面が凍り付くような事はない。湖の周辺には小さな集落らしき建物群も幾つか確認出来た。　漁をしていたのは集落からの船だったようだ。

「漁船がいるなら魚も結構いるって事よね……　釣り船……　魚……！」

幾つかのキーワードを口にして閃く朔耶。お金と時間が余っていそうな人達に流行るかもしれない『釣り船』、釣ったその場で調理して食べる事も出来、カースティアの宿とも連動して持ち帰った魚を宿泊する宿で料理として出して貰える。

「ベテランの船乗りと料理人と、船もただの船じゃなく色々積み込める専用の船、あと釣具も調べなきゃね」

調理に必要な道具なら魔力石コンロを小型化して船に積み込める。ベテランの船乗りを確保する事で夜釣り船も出せるだろう。湖周辺の集落に住む漁師を雇う手もあるし、彼等から湖の魚について情報を得る事も出来る。

「人手は何とかなりそうだから、問題は船と釣具よね」

朔耶は思いついた構想を頭の中で纏めながら、カースティアの派遣騎士団本部へと翼を向けた。

「ほーう、中々面白ぇじゃねえか。それなら金持ちから一般人まで楽しめそうだしな」

「うん、まだ色々考えないといけない事はあるけど取り合えずそれは後回しにして、船とこっちの釣具ってどんな感じ？」

竿と糸と釣り針、魚を釣るスタイルは世界が違っても殆ど変わらないようだった。釣り船観光事業が上手く行けば魔力石集めの他に釣り用の餌を集める仕事が出来るのでルアーのような概念はまだ必要ないと、朔耶は元の世界から釣具の技術を持ち込む事は見送った。

「人件費は結構安く付くけど、問題は船とか設備の初期費用なのよね……　取りあえず今の時点で思いつく必要なモノを上げるから、費用の算出しといてくれる？」

「面倒くせぇなぁ」

「くらっ！　上官命令よ」

朔耶はそう言って王室発行の許可書を見せたが、ガリウスが目の前に突き出された許可書に齧り付こうとしたのでひょいと引っ込める。

「食うな！」

「やれやれ……　おーーい、フラン！　スラント！」

ガリウスに呼ばれたフランが朔耶におどおどしつつ、ぽっちゃり系の騎士スラントと並んでやって来る。

「サクヤの事業の手伝い、お前等に費用の算出とか任せる」

「え、僕らに？」

「それは、いいけど……　会計の職員がいるんじゃないのかい？」

仕事を任されたフランとスラントは特に不満を抱いた様子は無くも、何故本部に務める会計職に任せないのかと不思議そうに疑問を口にした。

「しょーがねーのよ、どいつもこいつもサクヤにびびっちまって、声も掛けられねーんだからよ！」

ガリウスは受付からこのフロアにいる職員や騎士達を見渡しながら、態と聞えるように大声で答えた。軽薄な笑みで挑発するような視線を向けられてムッとなる者もいたが、ガリウスの隣に立つサクヤの姿が視界に入ると慌てて目を逸らす。

この前の門前での一件と、和平会談襲撃事件からの暴れっぷりを見た者の証言などで朔耶に対する騎士達の畏怖は、王室が朔耶を特別扱いする意味とも相俟って相当なモノになっていた。

王国騎士団の中でも、王都の上流区や城内を警備する騎士達には朔耶と交流する機会が度々あったので、朔耶の人となりを理解しているが故に、そこまでの畏怖を抱くには至っていない。

「なんで態々喧嘩売るかな～　アンタは……」

呆れたように言いながらも、朔耶はルティレイフィアがガリウスに惹かれる理由を少しは理解出来る気がした。フレグンスの門閥貴族出にしては珍しい、身分を無視して”相手”を見る事が出来る人間なのだと。

『自然体なのよね、コイツは……』

案を細かく纏める為に、朔耶は一旦もとの世界に戻る事にした。兄や弟にも相談して自身の考えだけでは足りない部分を補って貰う。街で魔力石の袋詰めを買って本部の屋上に上がった朔耶は、まだ日の高い内に自宅の庭へと帰還する。

「うわっぷ」

帰還するなり洗濯物に顔を突っ込んでしまった。

「うおっ　どうした朔耶、随分早い帰りじゃないか。何かあったのか？」

「あ、お兄ちゃん丁度いい所に……」

今日は仕事が休みらしく、縁側でビールを飲んでいた兄が驚いたように声を掛けてきたので、朔耶は早速カースティア観光事業の話を切り出そうとしたが――

「まて、その前に今お前が頭に被っている洗濯物を何とかすべきだ」
「え？　これって……」
「俺のパンツだ」
「ぎゃーーーーー！」

朔耶は兄のパンツを投げ捨てた。

「で、釣り船で客を引こうと考えたとな？」
「うん、釣ったその場で調理して食べられたり、宿に持って帰って料理してもらえたりってのを考えてるんだけど」

船の規模や船員、運営するにあたって必要な人員などのアドバイスを聞く。朔耶の兄は特にそういう事に詳しいという訳ではないが、偶にそういった船を利用する事があるので参考までに聞いてみたのだ。

居間でノートに色々と書き込みながらカースティアの観光事業について纏めている朔耶と兄の所に、弟が円盤状の物体を持ってやって来た。

「朔姉、魔力石モーター出来たぞ！」
「嘘っ　ホントに！？」

直径三十センチ程の、映画のフィルム缶を重ねたような厚みのある円盤。弟が蓋を開けて見せると、内向きにぐるりと並べられた反発力ユニットの先端が真ん中に置かれた歯車状の円盤の爪部分に向いている。この爪を反発力が押す事で歯車状の円盤が回る。

「ああ、そっか。　やっぱりそれで回るんだ？」

「うん、流石にこの機構は手作りじゃ無理だったろ？　父ちゃんの工場で作ってみたんだ」

反発力ユニットの根元は可動式のソケットにしっかり取り付けられてあり、外側からつまみを弄る事で反発力ユニットの角度を一斉に変える事が出来る。ユニットに魔力を供給する為の穴も缶の外側から取り付けられるようになっていた。

歯車状の円盤は平らな面を両側から挟みこむように取り付けられているユニットの反発力で、缶の中では常に中心で浮いているような状態だった。この仕掛けの為に缶の厚みが十五センチ程に至っている。

「ベアリングが何とかなればもっと薄く出来ると思うけど」

「ううん、これで十分使えるよ。でも、向こうで作るのはちょっと大変かな」

大まかな形は作れてもソケットの部分や細かい機構は、専用の道具から用意しなければ難しそうだった。可動式にしなければ回転のピッチが変えられないので回りっぱなしになってしまうのだ。

「これ、もっと作れる？」

「材料さえあればね」

「ふむ、動力か……」

朔耶と弟のやり取りを聞いていた兄がポツリと呟くと、『ちょっと待ってろ』と言って席を外す。そして自分の部屋から何やら色褪せた箱を持ってきた。箱の表面には力強く波を切って走るクルーザーの絵が描かれている。

「これだ」

箱を開けると、中には古い電池やらプラモデルの枠やらチューブの捩れたセメダインやら１３０Ｒモーター等が雑然と放り込まれてあり、その中からプラモデルの船などに使う小さな脱着式の船外機を取り出した。

「これを作って釣り船の推進機にすれば良い客寄せになるんじゃないか？　向こうじゃ帆船か手漕ぎだろ？」

「なるほど……　確かに良い宣伝になるかも」

「うーん、向こうで作れる事が前提だよな？　動力部分はこっちで作るとして」

あまり干渉による急激な技術革新はその世界の自発的な発展と概念の成熟に良くないと主張する弟の言に、朔耶も兄も同意して動力以外は向こうで作る事を前提に、なるべく簡素にした新しい推進機関の仕組みについてアレやコレやとノートに書き記していく。

「実際の推進力とか魔力石の消費量とか、色々テストしなきゃだねー」

「ライフジャケットも用意しておいた方がいいぞ、意外に落ちる人は落ちるからな」

そんな調子でテーブルの上に広げたノートを囲う兄と妹と弟は、母から夕飯が告げられるまで事業会議を続けていた。

「こんな時間から行くのか？」
「うん、フラン達に頼んでおいた費用の算出とか早く聞きたいし、追加分も調べてもらわなきゃいけないからね」

夕飯を済ませてお風呂から上がった朔耶は、髪を乾かす間も惜しいとリュックにノートを詰めて庭に出た。フランの名を聞いて兄がピクリと反応した事については見なかった事にする。

魔力石モーターは燃料となる魔力石を積めておくタンクをまた別途に作らなくてはならないので、その辺りは弟に任せて今回は持っていかない。

「んじゃ、行ってきまーす」
「気ぃつけてな」

『向こうの世界へ――』
ウム

電気の明かりに照らし出された薄暗い自宅の庭から、更に薄暗い何処かの街角へと景色が切り替わる。熱気をはらんだ風が朔耶の頬を撫で髪を靡かせて吹き抜けていった。建物の壁が周囲を囲む路地のような場所。

『今度は何処の街に出たの？』
……ヒトノハナツ　カッキヲ　オッテミタノダガ……

何やら言い難そうな念を送って来る神社の精霊を訝しみながら、朔耶は明かりと人の行き交う影が多く見える通りに出た。五メートル程の道幅の両端に水路が通り、そこを流れるお湯が蒸気を纏わせながら建物の外壁に取り付けられた水車を回している。

大小様々な宿が軒を連ね、宿前や路地の入り口には露出の高いベールのような布を纏った女達が通りを行く男達を艶かしく誘う。香の漂う甘ったるい空気と薄暗いボンヤリしたランプや篝火の揺れる炎が通りの妖しげな雰囲気を一層引き立てていた。

『……ちょっと』
イヤ　ホントウニ　スマヌ

ここは温泉の街バーリッカムの一角にある盛り場、『春売り通り』であった。

『そりゃクリューゲル国内に出たのはいいけどさ……　またなんつー所に……　うわっ　あの人エロッ！』
……サクヤ

右を見ても左を見てもキワドイ格好をしたお姉さん方が自らの肢体を武器に道行く獲物達を扇情的な笑みで捕まえては腕を絡めて宿の中へと消えていく。

朔耶は暫らく『不本意ながら社会見学の一環』として通りの様子を眺めていたが、ふいに視線を感じて振り返ると――

「嬢ちゃん、幾らだい？」

ニッタリ顔のおじさんに声を掛けられた。　朔耶は慌てて手をぶんぶん振りながら『あたし違います！』を連呼して逃げ出した。

えっちぃ格好をしている訳でも無いのに春売りと間違われた事でノンビリ見物していられる場所ではないと、通りの出口に向かって走っていた朔耶は少し余所見をした瞬間、賑やかな音楽が奏でられている店から出て来た人影にぶつかってしまった。

「わぷっ」

「おおっとぉ～　へっへ、気が早いなぁ嬢ちゃん」

酔っ払い特有の呂律が伸びた口調でそう言った男は、酒場を出るなり自分の胸に飛び込んで来た少女を抱き締めた。

「うわわっ　ちょ、ちょっと！　違うっ　あたし違います！」

「んん～～　聞いた声だなぁ～　それにこの匂いも……」

「あっ　団長～～もう女決めちゃったんすかぁ～？」

「向こうにイイ店があるってのに～～」

酒場からどやどやと出て来る傭兵らしき集団は、店の前で黒髪の少女を腕に抱いている男を団長と呼んで集まってきた。ここに至って朔耶は自分を抱き締めている男の声に聞き覚えがある事に気付く。

「え？　ブラットさん！？」

「んん～～？　確かに俺はブラットだぜぇ？　銀月の牙っ　ブラット・パーシバルであります！」

酔いで若干軽い調子になっていたが、彼は『銀月の牙』パーシバル傭兵団の団長、ブラット・パーシバルだった。

「……しかし嬢ちゃんの黒髪、顔立ち、ツヅキに似てるなぁ」

「本人よ、ていうか酒臭っ！　ちょっと放してっ」

朔耶はぐいぐいとブラットの胸板を押して腕から逃れようとするが、流石に鍛え上げられた傭兵の体躯、多少酔いが入っているくらいではビクともしない。

「おおーツヅキか！　会いたかったぜえー？」

「ぎにゃーー！　擦り寄るなーー！」

ブラットは朔耶が”ツヅキ”本人だと分かると更に腰から抱き上げるようにして頬をぐりぐり摺り寄せて来た。身長差があるので朔耶の足が浮く。朔耶は真っ赤になりながらブラットの肩や頭をポカポカ叩いていたが、まるで効果がなかった。

「ん～～　それにしても……お前」

「？」

「本当に美味そうな匂いがすんな」

べろん。

「っ！！！！」

抱き寄せた朔耶のか細い首元に鼻を擦りつけるようにしていたブラットは、その白い喉仏の辺りから左耳の裏あたりまで舌を這わして文字通り味わった。

「ひやゃあああああああああああああああ！！」

カアアァン！

瞬間、悲鳴と共に閃光が走り、電撃がブラットの身体を弾き飛ばす。それでも倒れる事無く少し踉(よろ)けただけで踏ん張ったブラットに、雷を纏った朔耶の右手が唸りを上げる。伝家の宝刀、稲妻ビンタが炸裂した。

パカアァアアン！！

「へぶぅっ！」
「うははっ　団長が伸されたぞ」
「うへぇ　痛っそうだなアレ」

頬っぺたからプスプスと白煙を上げながら横倒しになっているブラットと、団長が張り倒されたのを見て大笑いしている団員達を余所に、朔耶はハンカチで舐められた所をごしごし拭きながら悪態を付いていた。

「もうっ　バカ！　なんてことすんのよっ　お風呂入ったばっかりだったのに！」
サイナンデ　アッタナ
『アンタも人事(ひとごと)みたいに言ってないでちゃんと守ってよ！』
イヤ　イマノハ　ヨソウガイデ　アッタ

ともかく、早く人気(ひとけ)の無い静かな場所を見つけてカースティアに飛ぼうと、朔耶は春売り通りの出口を目指して再び走り出した。こんな所で翼を出して態々騒ぎを起す必要も無いし、この通りにある適当な路地には妖しげな気配が満ちているので入って行く気にはな

らない。

「またなー　ツヅキー」
「またカレー作ってくれー」

団員達の呑気な声を背に受け、朔耶は少しだけ振り返って手を振った。

「あ～～いつつ……　ひでー目にあったぜ」

むっくり起き上がったブラットは頬を撫でながら訝し気な顔で口をもごもごさせている。

「どうしました団長？　歯でも折れましたか？」
「いんや、……毛だな」
「毛ですか」

舌の上から摘み上げた黒い糸のような艶のある髪の毛が一本。朔耶の首筋を舐めた時に入り込んだらしい。

「御守りにでもしとくか」

ブラットはそれを小さな布切れに巻き付けると、懐に仕舞い込んだ。

「そういうのって下の毛じゃないと効果ないんじゃないですか？」
「材質は同じだ」

「はぁ……　とんだ道草だったわ」

バーリッカムから飛び立った朔耶は一路カースティアを目指して只管（ひたすら）草原が続く街道の上空を飛んでいた。偶に馬車隊のランタンらしき明かりが街道を行くのが見える。

「ちょっと遅くなるかもしれないなぁ」

デハ　スコシ　イソグトシヨウ

飛ばしに飛ばしてカースティアに到着したのは、それから約三時間ほどが経過した頃だった。寝静まるにはまだ早く、一般の店は店を閉じる時間帯。朔耶は直接　派遣騎士団本部の屋上に着地すると、そのまま建物内に入って行った。

「あ、フラン君」

「わっ　さ、サクヤちゃん」

未だにきょどっているフランに内心苦笑しながら、朔耶は早速頼んでおいた観光事業の費用算出について訊ねた。

「うん、大まかな費用は出たけど……　これ、結構掛かるみたいだよ？」

「どれどれ……　あれ、こんなもん？　船が一艘で金貨九枚くらい掛かる他は大した事ないじゃん」

朔耶が提示した規模の船なら金貨八枚と銀貨三枚、銅貨十枚程で発注出来る。他、備品等は消耗品と追加分を全部合わせても金貨二から三枚分程度にしかならない。

「大した事ないって……、金貨だよ？　この追加分と合わせたら多分、初期費用は一艘に付き金貨十一枚近く必要になると思うけど」

ノートを片手に朔耶が口頭で追加分を上げていき、フランはそれを聞き取りながら書類に書き込みつつ費用の捻出をどうするのかと不安を口にする。

「大丈夫だよ、あたしの工房で貯めたお金が金貨で五千枚くらいあるもん」

「ご、五千……」

ちなみに王国騎士団に所属する騎士の給料は一番下っ端から小隊長までで一日銀貨二枚から三枚、中隊長以上で銀貨五枚から八枚、団長クラスで金貨二枚から五枚、他、課せられた任務の達成や特別な働きをした場合の報告によって追加報酬が支払われる。任務達成による報酬の方が給金よりも多い。

「ある所にはあるんだなぁ……」

「でも大半は街灯設置事業で儲けた分だからね」

サクヤ式コンロの売り上げだけなら金貨二十枚にも満たないのだ。

「ね、ねえサクヤちゃん。　そのお金で直接カースティアを支援するってのは……」

「駄目～。　それじゃあ只の施しだし、お金が尽きたら一気に潰れちゃうよ？」

カースティアの街が自力で稼いで豊かになれるようにしないと人も街も成長しないと説く朔耶を、フランは只々感嘆の念で見詰めた。一方の朔耶はといえば、父親の言葉を受け売りで言ってみただけだったのだが、物凄く感心した眼差しを向けられてちょっと居心地が悪かったりしている。

「ま、まあ取りあえずこの追加分の費用算出と湖についての調査をお願いね、何か危険なモノが居たりしないか地元の漁師さんとか当たってみて？　あたしは明日にでも王都に飛んで色々発注してくるから、船長さんとかの人員の目処もつけとくように」

「うん、分かったよ」

必要事項を話し終えた朔耶は今回も本部の宿舎を寝床に借りる事にした。前回と同じ部屋に案内された朔耶は、部屋に入る前にフランを振り返り、一応釘を刺しておく。

「フラン君……　また、あたしが寝てるところに忍び込んできたり……　しないでね？」

もじもじしながら肩を竦めて上目使いで微妙に目を泳がせつつ恥ずかしそうに言ってみる。

「あはは、流石にこの前ので懲りたからもうしないよ」

「ありゃ？　フラン君にこの手は通用しなかったか」

あまり反応が無かったので、さっさっと元の雰囲気に戻った朔耶は飄々とそんな事を言う。実直な騎士達ならともかく、フランも悪名？高いガリウス小隊の一員である。女の演技を看破られる程度には女遊びも経験済みだった。

それじゃあまた明日とオヤスミの挨拶を交わして部屋に入った朔耶は神社の精霊に警護を頼んでベッドに潜り込んだ。

「つ、通用しない訳ないじゃないか……」

演技と分かっていても可愛いものは可愛い、朔耶があのような冗談を向けて来た事から前回の夜這いの一件は赦して貰えたようだと、安心したからこそ落ち着いた対応で返せたものの、フランの動悸は暫らく治まりそうになかった。

53話：アクレイア家の晩餐

カースティア派遣騎士団本部の宿舎で目覚めた朔耶は遠くから響く騎士達の訓練の声を聞きながら食堂脇の井戸にやってきた。

「んー、ここにもポンプを取り付けたいね」

井戸の水を桶とロープで汲み上げて顔を洗い、食堂に入る。何人かの職員や騎士達が食事を摂りながら雑談に興じていたが、朔耶が現われたのを確認すると途端にしんと静まり返った。

『う……なんだか重い空気』

ゲニ　フガイナキ　モノドモヨ　ノ

朔耶はトレーを持って配給のカウンターに向かいながら、彼等から畏怖を払拭するには相応の交流を持つ必要がある事を実感した。何か良い交流イベントはないものかと軽く悩みつつ、朝食の芋っぽいスープに口をつけるのだった。

「さーてと、それじゃあ王都までひとっ飛びしましょうかね」

「おう、サクヤ　王都に行くならこいつを城まで届けてくれ」

屋上に上がって来た朔耶が翼を出そうとしている所に、何やら書類を抱えたガリウスが階段を駆け上がってきた。

「なにそれ？」

「各種申請書とか報告書だ、主に予算のな」

朔耶の観光事業が動き出して効果を発揮するまでに、街の住人からの声に応えるべく特に重要な案件を纏めたモノだとガリウスは言った。普通に正規のルートで申請するよりも、朔耶からの手渡しの方が通る可能性が高いと睨んでの事らしい。

「あたしのこと利用する気満々だねぇ、でもそういう事ならいいよ」

「おう、頼むぜ」

ガリウスから託された各種申請書を持って、朔耶はカースティアから王都フレグンスへと飛び立った。

「という訳で、やって来ましたフレグンス城」

「サクヤ……城のテラスから入るのは控えてくれませんか」

偶々開いていたテラスの窓からサロンに飛び込むと、レイスが一人でお茶を飲んでいた。どうやら休憩中だったようだ。

「いいじゃん、一々門から入るの面倒なんだもん。それよりこういう書類って誰に渡せばいいの？」

レイスの注意を軽く流した朔耶はガリウスから預かった申請書を見せる。事情を説明するとレイスは『ほぅ』と少し感心したような策士の顔になった。レイスの中でもガリウス達に対する評価が少し修正されたようだ。

「では僕の方から提出しておきますよ」
「ん、お願いねー」

書類の束をレイスに渡した朔耶はテラスに出て翼を広げた。それを見て肩を竦めながら苦笑するレイス。もう注意するだけ無駄だと悟ったらしい。そしてふと、思い出したように声を掛ける。

「サクヤ、宜しければ今日の夕方にでも家に来ませんか？」
「レイスの家？」
「ええ、招待の約束が随分と遅れてしまってますからね」
「そっか、うん　レイスのお父さんにも挨拶しなきゃね、行けるようなら行くよ」

レイスと晩餐の約束をした朔耶は観光事業で必要な品物を発注する為、開放区の工房に向かって飛び出した。

「えーと、次は何処だっけな」

船の推進器はサクヤ式コンロの五徳作りでお世話になった馴染みの工房に依頼して、後日近くの湖で推力テストを行う事になった。工房主はまた新しいサクヤ式の仕掛けを任されるとあって、とても

気合が入っていた。

エレメントブレードのホルスターを発注していた革裁縫の工房では、ホルスターを受け取ったついでにライフジャケットの発注をしておいた。上手く水に浮くかどうかの実験が必要だが、水に浮くための服という発想が斬新だったらしく、こちらの工房主も随分と張り切っていた。

新しい技術や発想は大抵ティルファが発祥の地となるのがこれまでオルドリア大陸では常識だったのが、今やフレグンスが最新の技術や発想を周辺国に先駆けて会得しているのだ。職人達のやる気も高まり、名誉欲気質なフレグンスの貴族達も惜しみなく金を出す。

思惑と結果が上手く繋がり、長く停滞していたフレグンスは今、大きく発展する兆しを見せていた。

「ふう……後は船かぁ」

お昼前、粗方工房を回った朔耶は貴族街の公園を散歩しながら物思いに耽っていた。王都の開放区にある造船工房では朔耶が指定する規模の船を作るのは無理らしく、発注するならティルファかキトの造船所を訪ねる必要があるそうだ。

――サクヤ……サクヤ……？――

『あれ？　レティ？』

――わあ！　繋がったわっ――

『え？　レティ今何処から交感してるの？』

交感が繋がった事に喜ぶレティレスティアは城の地下神殿から意識の糸を伸ばしているのだと興奮気味の感情を乗せて伝えてきた。

『へえ～　あたしが今居る所って貴族街の公園だよ、こんな所まで届くようになったんだね～』

――はい！　いっぱい練習しましたから。　あ、そうですわサクヤお昼をご一緒しませんか？――

『うん、いいよー　でも堅苦しいのは無しね？』

――ええ、ちゃんと個室を用意しますわ――

交感を解いた朔耶は城に飛ぶ為に翼を出す。もうすっかり普通の移動手段として使っている。

『これって向こうでうっかり翼出す感覚でやったらどうなるんだろう？』

クロノセイレイトノ　ツナガリシダイデハ　ハツゲンスルカノウセイモ　アルゾ

それは余り慣れると不味いかもしれないと思いつつも便利かつ楽なのでついつい使ってしまう朔耶なのであった。尤も、例え翼が発現しても元の世界では飛ぶ事は叶わないのだが。

「とうちゃ～く」

城壁を飛び越えて城の庭園に下りた朔耶はぎょっとしている衛兵に軽く挨拶して城内に入った。そのうち彼等にも見慣れた光景になるのだろう。

「サクヤではないか、カースティアに居たのではないのか？」
「あ、ルティ」

三階まで上がって来た所でルティレイフィアとばったり出くわしたので、レティレスティアとの昼食に呼ばれている事を話し、一緒にどうかと誘う。

「ふむ……そうだな、それならわたしも同席しよう。それにしても、サクヤは日帰りでカースティアと往復出来るのか……」

昼食の誘いを受けつつ、ルティレイフィアは朔耶の機動力の出鱈目っぷりに感心するやら呆れるやらな表情を見せた。

「ん～～美味い」
「それはそうだ」
「サクヤが好きな果物のデザートも用意させましたのよ」

四階にある客間の一室を使って昼食を摂る朔耶と王女姉妹は、普段の食事の席では出来ないお喋りをしながらの和やかな雰囲気で料理に舌鼓を打っていた。

ルティレイフィアがそろそろまた未開地に旅立つという事で、朔耶は餞別にエレメントブレードをプレゼントする。

「え！　よ、良いのか？　このような宝剣を……」
「そんな大層なモノじゃないよ。　でも割と中途半端に便利だと思うから、後で使い方教えるね」
「……なんだその微妙な言い回しは」

エレメントブレードが納まるホルスターを受け取ったルティレイフィアは、しばしそれに魅入っていた。実際に武器としての威力は微妙な所なのだが、レア度で言えばルティレイフィアが愛用している最高級クラスの剣であるシュベルコーの剣でも比較にならない。

使い方次第では非殺傷で相手を制する事も出来るし、普通の防具では受ける事も弾く事も不可能な攻撃を繰り出せる。威嚇効果も申し分ない。朔耶が簡単な説明をしている間、ルティレイフィアはなんだか目をキラキラさせていた。

その内、カースティア観光事業の進み具合について話題が移ったので、朔耶は船の入手経路に手間取っている事を話した。

「ティルファかキトの造船所じゃないと造れないんだってさ、そうすると運ぶのにまた時間も費用も掛かっちゃうのよねぇ」

「それでしたら、竜籠を使って運ぶのはどうでしょう？　以前サクヤが鹵獲した竜籠がありますわ」

帝国から正式に譲渡された竜籠とは別に、朔耶が分捕ったサムズの竜籠はそのままフレグンスの厩舎に入っている。本来なら叛徒によって持ち出された竜籠なので帝国に返却されるべきなのだが、朔耶に寛大で太っ腹な所を印象付けようとしたバルティアの一声でそのままフレグンスの所有になったとかならなかったとか。

今の今まで忘れ去られていた辺り、若き皇帝陛下の思惑は上手く行っていないようだ。

「そっか、あの竜達王都にいるんだね　後で様子見にいこっと」

そんな調子で朔耶と王女姉妹は楽しく昼食の時間を過ごした後、またカメラで少し撮影会を行い、長い旅に出るならばとルティレイフィアの為にカイゼル王やアルサレナ王妃まで巻き込んで家族の写真を撮り、それをプレゼントした。

王の一族が写った写真を見て一番喜んでいたのはカイゼル王だった。写真の事は先日レティレスティアから実物を見せられていたので興味があったらしく、ロケットに入れて持ち歩けるように今度焼き増しして加工してくる事を朔耶が提案すると、頬擦りして頬チューをくれるほど喜び、朔耶を慌てさせた。

「いやー、あんなに喜んでもらえるとは……」
「すまぬな、父上は昔からああいう所がある」

ルティレイフィアと話し歩きながら、朔耶は竜の様子を見に厩舎の近くにやって来た。ちなみにレティレスティアは晩餐会の招待にお断りの返事を書く作業という昼からのお務め中である。

馬のそれより二倍近い大きな建物が長屋のように延びている竜の厩舎、帝国から譲渡された二頭の他に朔耶が分捕った四頭も並んで厩舎の中に納まっていた。隣の竜とのスペースは壁板で仕切られていて大量の藁が敷き詰められている中で丸くなっている。

世話係のおじさんが第二王女と連れ立ってやって来た朔耶の姿に椅子から飛び上がるように立ち上がると、脱いだ帽子を胸にあてて挨拶する。律儀に挨拶を返す朔耶。ルティレイフィアは片手で抑えるように合図して『楽にしてよい』と伝える。

「餌とかやっぱりお肉？」
「へ、へい　流石によく喰いまさぁ」

六頭の飛竜達は奥の二頭は丸くなったまま鼾を掻いて寝ているが、手前の四頭はのっそり首を持ち上げて朔耶達の方を窺っている。朔耶にキューキュー鳴かされた竜達だ。

「やほー　元気ー？」
「キョー」

とてとてっと厩舎の中に入って朔耶が手を振ると、首を伸ばして鼻を摺り寄せて来た。その鼻頭を撫でてやる朔耶。頭部だけで朔耶の上半身程もありそうな竜が小柄な少女の腕にじゃれているような光景は、幻想的なのか悪い夢のようなのかよく分からなかった。

その内、寝ていた二頭も目を覚ましたのか大きな欠伸をして首をきょろきょろさせている。

「奥の二頭はバルから正式に贈られたんだね」
「バル？　とは？」

起きた二頭がじっと見つめているのでそちらに近付いていく朔耶の言葉に、ルティレイフィアが訊ねる。

「ああ、バルティアの略ね　愛称」
「え、さ、サクヤは帝国の皇帝を愛称で呼べる関係なのか？」
「あれ？　言ってなかったっけ？　関係って言われると何か誤解を招きそうだけど……」

バルティアとの関係を説明しようと朔耶がルティレイフィアに向

き直った時、世話係のおじさんが叫んだ。

「あ、危ねぇです嬢様方！」

「ほえ？」

「っ！？」

振り返ると、デカイ口。赤黒い波模様の奥から大蛇のような分厚い舌が伸び、三重に連なった大小の牙が淵に沿って生えている。その巨大な口ががぶりと朔耶に噛み付いた。

「サクヤ！」

ルティレイフィアは咄嗟に愛剣を抜き放つと竜の口目掛けて突きを放った。流石に竜と戦った経験は無くとも、危険な未開地では異形の獣と命を賭した戦いを何度も潜り抜けている身である。通常ならば騎士達でさえ竦んでしまうような光景を目の当たりにしても、彼女は鍛えられた胆力でそれを乗り越えて行動できる。

大型動物でも一撃で致命傷を負うかという程の鋭い突きはしかし、硬い鱗を数枚砕いただけだった。本体には殆どダメージは無く、竜は噛み位置が悪かったのか噛み直しにもう一度がぶりとやる。世話係のおじさんは只あわわあわわと慌てていた。

「おのれっ！」

ルティレイフィアはホルスターから朔耶に貰ったエレメントブレードを抜いた。教わった通りに安全装置を解除しスイッチを入れると、ヴォンッと音がして光の刃が伸びる。そしてそれを先程鱗を砕いた傷跡に向かって刺し込んだ。バリバリと閃光を放ちながら光が揺れて鱗の内側を焼き焦がす。

「ピギャーーーー」

流石に熱かったらしく、口の一部を火傷した竜は首を振って光の剣先から逃れた。

「サクヤ！　大丈夫かサクヤ！」

エレメントブレードで竜を威嚇しながら朔耶の元に駆けつけたルティレイフィアはどんな酷い傷を負ったかと青褪めながら朔耶の状態を確かめると――

「……無傷？」

「あー　びっくりした、いきなりガブッと来るんだもんなぁ」

「あわわわ　すみません！コイツはよく寝惚けて噛む癖があるんでさぁ！」

「ピ？　ピ？」

見ると朔耶に噛み付いた竜は顔の一部から白煙を漂わせながら一体何事？　という具合にキョロキョロしている。昼食後すぐに来た為、料理の匂いでも残っていたのかもしれない。

元々甘噛みであった事と朔耶自身には神社の精霊が咄嗟に魔法障壁を張って守っていたので掠り傷一つなかった。世話係りのおじさんも実はしょっちゅう噛まれるらしい。

「ルティ　ルティ、それ下ろしてあげて」

「む？　ああ……、そうか」

威嚇するように竜へ向けられていたエレメントブレードの光が消える。朔耶においでおいでと手招きされた竜がおずおずと顔を近づけると、顔の火傷が精霊の治癒で癒された。

「よしよし、熱かったね～　もう大丈夫だからね～」

「……なんだかわたしが悪いことをしたような気分になるのだが……」

「あははっ　そんな事ないよ、ルティ助けてくれてありがとね？」

「う、うむ……」

暫らく厩舎で竜達と戯れて城内に戻ると、朔耶はレイスの家に呼ばれる為レイスのいる宮廷魔術士長の執務室へ向かい、ルティレイフィアは旅支度を調えに自室へ上がっていった。

「こんちゃー――失礼しましたー――」

宮廷魔術士長の執務室の扉を開き、レイスに声を掛けた朔耶はそのまま後ろ歩きで部屋を出て扉を閉めた。執務用の大きな机の上に着衣を乱した赤毛の魔術士が”乗って”いるのが見えたので緊急退室したのだ。

そのまま廊下で待つことしばらく、静かに開かれた扉からこそっと顔を出したフレイが入室を促したので部屋に入る。

「いや～公私混同って中々本気だったんだねぇ」

「は、はうっ！」

「せめてノックはして欲しかったのですが……」

気まずそうな表情で書類の整理をしているレイスは気まずいながらも照れ隠しに抗議をするが、朔耶もこの二人のこういう場面には流石に慣れたのか、ささやかなれど筋違いの抗議にはきっちり反撃を返した。

「普通にしたよ？　”お仕事”に夢中で気が付かなかったんじゃないのぉ～？」
「ぐ……」

本当はノックもしていないのだが、こう言われると反論しきれない理由があるだけにレイスも沈黙せざるを得ない。フレイは既に退室している。

「少し、性格が悪くなりましたか」
「しっけいな」

書類の残りを仕上ているレイスの仕事が終わるのを待ちながら雑談に興じていた朔耶は、今日のアクレイア邸訪問の事はフレイに話しているのかを質問すると、その為に早めに帰宅させたという答えが返ってきた。フレイも朔耶御招待の準備に参加するのだそうだ。

「わ～……あんまり大袈裟にされるのもなぁ」
「ふふ、そういえばサクヤは式典のような雰囲気は苦手でしたね」

何か意趣返しを狙っているかのような気配をレイスの瞳に感じた朔耶は先手を打っておく。

「あたしさ、向こうにいる間は精霊の視点でよくこっちの様子を”視”てたんだよね」
「ほう」

「だから夜はなるべくレイス達に近付かないように注意してたんだけどね、実家のお屋敷じゃあんま意味無かったなぁ」
「……」
レイスは再び沈黙した。
「レイスって見かけ細いのに元気よねぇ……」
「サクヤ……」
「アンバッスさんの言葉じゃないけど、程々にしとかないとフレイが倒れちゃうよ？」
「……参りました」
トドメも刺しておく朔耶だった。

「お～、初めて見た時とは比べ物にならないくらい立派になってるね」
「ええ、お蔭様で。修繕も出来ましたし、資金にも余裕が出て来たので最近増築しましてね」
夕暮れの中、朔耶はアクレイア家の馬車に乗ってレイスの家に向かっていた。鮮やかな青に染められた屋根が特徴的な大きな屋敷が見えてくる。城に近い場所に建っているとはいえ敷地そのものが結構広いので、やはり移動に馬車は必須だ。
「さ、着きましたよ」

レイスにエスコートされて朔耶はアクレイア邸の玄関を潜る。玄関の前と扉を抜けて直ぐの所にはメイドさんが並んでレイスと朔耶を出迎えた。

「お帰りなさいませ、レイス坊ちゃま。　ようこそいらっしゃいました、サクヤ様」
「こんにちはー」

玄関ホールはここだけでも十数人規模のパーティーが出来そうな広い空間だった。王族や他の貴族を招くような晩餐会を開く時は一つ奥にある大ホールを使うらしい。今日は朔耶を招いた身内だけの晩餐なので二階の食堂を使う。

「僕は着替えてきますので、先に二階へ向かっていて下さい」

レイスはメイドの一人に朔耶の案内を任せると着替えをしに席を外し、朔耶は案内を仰せ付かったメイドさんに連れられて二階の食堂に向かった。メイドさんが随分緊張している様子だったので朔耶は気楽に話しかけてみる。

「ここに務めて長いの？」
「は、はい！　私はまだ日は浅く、至らない事も多々ありますがっよ、良くしていただいてマふ！」

余計に緊張させてしまったようなので朔耶は口を閉じた。朔耶にはあまりというか殆ど自覚は無いが、”サクヤ”はフレグンス国内において王族や公爵家と並ぶ身分の人物と認識されているので、互いによく知り合った近しい間柄の人間でもない限り緊張するなという方が”無茶”なのである。カースティアにいた王国騎士団の騎士

達とはまた違ったベクトルでの畏怖が働いていた。

正式にフレグンスの貴族としての身分を賜っている訳ではないがその権限は門閥級という、この世界では存在からして異例の塊である朔耶らしい立場にあった。

「こ、こちらです」
「ありがとー」

廊下沿いの大きな扉が開かれる。長方形の長い部屋に長いテーブルを予想していた朔耶は割とこじんまりとした食堂を意外に思いながらも、バルティアと食事をした時の部屋と同じく四～五人で食事を摂るには十分過ぎる広さだなぁと思いなおす。

『どうもあたしのイメージの感覚もおかしくなってきてるなぁ』
ヒトハ　ナレテ　ユクモノダ

貴族イコール無駄に豪華という単純なイメージはソレほど当て嵌まらない。朔耶は先に食堂にいたフレイに席まで案内されながら、他にもある自分の中の思い込みによるイメージを自省して追い出した。神社の精霊がウムウム頷いているような気配がした。

「いやあ、今宵、この晩餐の席にてようやくお会いすることが出来ましたな、サクヤ殿。貴女の事は息子や娘からもよく聞かされていたよ」
「初めましてー随分長い間、挨拶にも来られませんで」

白髪で長身の初老の男性、アクレイア家当主　ルィバンス・チル・アクレイア伯爵は、レイスに似た鋭い眼光の目尻に皺を作って朔耶を歓迎した。細身だが背筋をシャンと伸ばした立ち振る舞いが線の細さを感じさせない。

老獪と表現するにはまだ若く、熟年魔術士といった雰囲気を醸し出している。

「コースティン家との確執の事、貴女の尽力で大いに助けられたというのに、帝国暗躍の際には何も出来ずに申し訳なかった」

「いえいえ、滅相もないですよ」

暫らく頭の下げ合いを続けたあと、それでは食事にしようかと晩餐が始まった。

「ほうほう、カースティアの観光事業ですか」

「はい、割といい感じで進んでるんですけどね、計画の中心になる船の確保に手間取ってまして」

食事を進めながらやはり最近の話題としてカースティア観光事業の話に及んだので進めている計画の概要を話して説明する。もしかしたらルィバンス伯爵もお得意さんになるかもしれないのだ。

「船は何処でお造りに？」

「ん～まだ決まってないんですよ～、ティルファかキトじゃないと無理って言われて」

「ふむ、それなら私の知り合いに腕の良い船大工が経営する造船所がありますぞ、紹介状を書きましょう」

「ホントですか！　助かりますーっ」

魔術士は何らかの形で一度はティルファを訪れるという。ルィバンス伯も魔術の師であった故エイディルト・バーン氏と出会う前はティルファで魔術の研究をしていた時期がある。

国土の大半を森と水に覆われているティルファでは水の上に建築物を造る為に造船も盛んで、飲み仲間として船乗りや船大工達と交流を深める事もあったそうだ。

「腕は確かなのだが少々偏屈な所があってね、そこが気になるといえば気になるが」
「大丈夫ですよ父上、サクヤは相手がどんな人間であっても懐柔して虜にしてしまう力を持っていますから」
「ほほう！」
「ちょっと！　人を魔女みたいに言わないでくれる！？」

お気に入りのフルーツデザートを頬張りながら突っ込む朔耶だったが。

「レティレスティア王女を始めとしてアンバッス隊長に道中の商隊の人達、護衛隊の騎士達、同行した侍女達、近衛騎士団の騎士達、王都務めの若い騎士達、城務めの騎士達、フレイや僕、帝国第１４代皇帝バルティア陛下、後は傭兵団の……」
「わーーかった、わーかったからっ　大体バルはともかくレティのアレは天然だし、他は虜なんて言うほどじゃないでしょうに」
「おや？　帝国皇帝については否定しないんですね」
「バルは半分依存してただけだよ、多分。別に孤独好きとかでもないのにずっと独りだったから」

レイスと朔耶の会話を聞きながら、ルィバンスは息子から散々聞かされ噂にも聞いていた朔耶の在り方に感じ入るモノがあった。列強四国の中でも二大国家の支配者に近しく有りながらこの自然体はなんだろう。

異世界からの来訪者であるとも聞いていたが、朔耶の世界の人間は皆支配者という存在に対してこうなのだろうか、と。或いは、畏怖されるべき存在であり、畏怖する事のない存在。存在自体が支配者で在る人間。

『サクヤ殿は……』

望むと望まざるとに関わらず否応無く時代の覇者として闘争に巻き込まれる星の元に生まれる存在がある。朔耶がこの世界に現われてから関わった事件は何れも国の沽券に関わるような事件ばかりだ。聞く所によれば朔耶の働きで帝国内部でも政治的な革命に近い大異変があったとか。

『貴女はフレグンスの豊穣の女神なのか、オルドリアの乱世の戦女神なのか』

ルィバンスはこの一見無邪気であどけない異世界の少女が、世界に齎す大きな時代のうねりを見極めようと眼を細めた。

「あ、残った料理タッパーに入れて持って帰りたいんですけど」

何処までも庶民な朔耶なのであった。

『……考え過ぎかなぁ』

５４話：知の都ティルファ

「出来たぞー」
「うむうむ、いい出来」

ご馳走をタッパーに詰めて帰ってきた朔耶はさっそく家族に振舞い、丁度夕飯時だったので大いに好評だった。家族が夕飯を食べている間にシャワーを浴び終えた朔耶は、食事の済んだ兄に写真の加工を依頼した。ロケットは向こうの物を使うつもりでいた。
小さい写真立てに飾れそうなモノからプリクラサイズまで数枚を用意して保護フィルターで密封する。

「ルティにあげた写真は普通のポラロイド写真だから、今度またしっかり加工したのをあげないとね」
「うおおおルティ姫さいこおおおおお！　ツンデレイイ！！」

ベッドでごろごろ転がっている兄に『ルティは好きな人いるよー？』と諭してみるも――

「身分違いの片想い萌え～～～～～」

こんな調子であんまり効果は無かったが、朔耶はこれはこれでヤバイ方向から戻って来たのでいいかなと納得しておいた。

夜半過ぎ、朔耶が冷蔵庫から飲み物を取り出している所に弟がやって来た。

「朔姉、明日はあっち行くのか？」

「うーん、明日はゆっくり休もうかな～って思ってるんだけど」

明日は祝日で学校は休みだったので今日も向こうの世界に泊まってくる事も出来たのだが、ここ最近の朔耶は休日になると常に向こうの世界を飛び回っていたので、偶には此方の世界でノンビリ過ごしたいと考えていた。

「そっか、じゃあ丁度いいから魔力石モーターのタンク付けるの手伝ってくれよ」

「いや、ノンビリしたいんだってば」

「父ちゃんの工場で直接加工するからさ、朝７：００玄関集合な」

「おーーい、タカく～～ん　……もう～しょうがないなぁ」

弟に予定を捩じ込まれて休日に早起きする羽目になった朔耶は早めにベッドに潜り込んだ。

『あれ、久々に夢旅行？』

朔耶は夢の中でオルドリア大陸の空にいた。遠くに街明かりが見える。整然と並んだ街灯が見える事から、王都フレグンスである事がすぐに分かった。街以外の場所では地上は真っ暗だ。

『この時間だとレイスとフレイの所はダメとして……、そうだ！ティルファの下見に行こう』

ティルファの正確な位置は分からないので、以前、和平会談でティルファの代表団にいた人物を思い浮かべた。ティルファ中央研究塔所長、ブラハミルト・オードリン。

見た目も若い触媒型魔術士で気難しい印象があるものの、実はそうでもなく割りと気さくに話す。少し皮肉屋っぽい眼で対象を観察するが、それで思った事を口に出す事はあまりない。

『あ、やっぱ寝てたか……　髪長いなぁ、バルと同じ銀髪なんだよねぇ』

寝室らしき部屋の中に跳んだ朔耶はそのまま上昇して天井をすり抜け、建物を見下ろせる位置まで高度を上げる。最初城かと思われたその建物は、七つの塔が集まって水上に建つ大きな塔群だった。

湖の真ん中に『でん』と建っている中央の大きい五階建ての塔の回りに、六つの三階建ての塔がくっついている感じだ。湖の畔からこの建物までの橋は無く、周りに何艘かの船が横付けされている。

『湖の周辺に街があるわけね～……　森の中にもちらほら見えてるなぁ』

暫らく辺りを飛び回っていると、森を抜けた開けた場所に少し大きな街並みが見えた。森に囲まれた湖の周囲にあった建物は実は研究所や工房群で、朔耶が最初に飛び込んだ建物は中央研究塔と呼ばれるティルファの中枢施設だ。

ティルファに在籍する多くの研究者が詰める宿舎も兼ねた塔で、政治的な会議や決定も行われる。小さな実験などは塔内に細かく分けられた個室の研究室で行われているが、個室に入りきらないような大きなモノを扱う場合、湖の畔に並び立つ研究所や工房を使う仕組みである。

『街灯っぽいモノもちらほら見えるね、流石は発明国』

近頃発展著しいフレグンスから有用性のある”街灯”も早速取り入れている。街の至る所に設置された水車や風車が回り、遠くから見ると森に囲まれた静かな街に見えるが、近付くとなんだか変人発明家のラボのようなむさ苦しさがあった。

『うわあ……　なんというか、イメージ違うような』

よく分からない仕掛けの機械がギッチョンギッチョンと動き、蒸気を噴出しているモノやこれでもかという程の量のロープが張り巡らされた滑車で複雑な動きをしている大型機械。

『知の都』と称されるティルファには知的で静かな街のイメージがあっただけに、この混沌とした光景にはギャップを感じざるを得ない朔耶だった。

『なんとなく、魔力石モーターの開発も切っ掛けさえあれば出来ちゃいそうな感じだなぁ』

蒸気機関に似た機械がガショガショ動いているのを見て、朔耶はティルファの街にそんな印象を持った。

翌日――

「それじゃ行こうか」

早起きして朝食を済ませた朔耶は、既に準備を済ませている弟の自転車の荷台に乗った。自転車がゆっくりと走り出す。

「モーター、今日中に出来そう？」

「うん、後はタンク取り付けて回す実験だけだからな」

「あんまり大型化すると困るよ？」

「大丈夫だって」

朝の澄んだ冷たい空気の中、朔耶は弟の背中をカイロ代わりに雑談しながら父の町工場に向かった。

「ズレないようにしっかり固定してね」

「そっち抑えといてくれ」

工場の隅っこで姉弟は作業を進めていた。向こうの世界で作る船外機に組み込む動力だが、故障などした場合は向こうでの修理は難しい為、なるべくしっかりした丈夫な造りにしておきたい。

「でもこれ、構造が分かれば向こうの人でも作れるかもしんない」

「回すだけならそう難しくないよ、でも制御は簡単にはいかないと思うぞ？」

確かにね、と朔耶は昨夜（ゆうべ）の夢旅行で見たティルファの機械群を思い出す。おそらく最初はかなり大型化しそうな感じだった。大きくなればそれだけ回転させる為に必要な力も増えるわけで、その分反発力ユニットの数を増やせば魔力石の消費も多くなる。

「ユニットの力と数と回転板の大きさを考えたら、これ以上大きくすると使えないからな」

「そっか～……回るだけで力に変換出来なきゃ意味無いもんね」

現状では反発力ユニットのサイズや反発力に限界があるので、最適な大きさは自ずと決まって来ると弟は説明する。朔耶はその辺りの計算は難しそうなので弟に丸投げで任せていた。『使えりゃいいのよ』である。

「……これ、キックボードとかにも使えるかな？」

「電動キックボードみたいにか？　もう少し小型化すれば出来なくもないと思うけど、車輪と一体化した方がてっとり早いだろうなぁ」

「ふ～ん、今度作れたら作ってよ」

昨夜（ゆうべ）、朔耶はティルファの下見をした後、方角的に帝国領の山脈が見えたので何と無くバルティアの事を考えて近くに跳んだ。すると、人通りの少なくなった夜の下階層を黒塗りのキックボードで疾走する後姿が見えた。

その光景を見てなんだか切ない気持ちになった朔耶は、今度帝国にでも遊びに行こうかと思ったのだ。尤も、疾走するバルティアに書類を振り翳しながら『陛下ー！サインをー！』とキックボードで

追いかけているアネットを見て吹き出し、切ない気持ちは一瞬で吹っ飛んだのだが。

ブーンという駆動音で僅かな振動を立てながら軸を回転させる魔力石モーター。

「一応、これで完成だ」
「お〜〜　パチパチパチ」

昼過ぎ、冷房など入っていない工場の中が暑くなって来た頃に魔力石モーターは一応の完成を見た。弟の孝文が作ったので『タカフミ式』と言って使おうか？と問う朔耶に、『混乱を招くからサクヤ式でいい』と返す弟。

「じゃあ、持って帰るか」
「うん、お昼どうする？」
「家で食う、昨日の余りがあるだろ？」
「そっか、お兄ちゃんが全部食べてなきゃいいけど……」

朔耶は完成したモーターをリュックに入れて背負うと、弟の自転車に乗って帰宅の途に付いた。

「う〜〜ん、タカ君暑苦しい」
「なんだそれ」

朝はカイロ代わりになった弟の背中だったが、昼間の気温はまだ暖かい季節である。作業で体温の上がった弟の背中は普通に暑苦しいと不満を垂れる朔耶。弟は『朔姉は時々意味分からん』と困惑しながら家路を急ぐのだった。

家に着いて昼食を済ませた朔耶は宿題を片付けながら、この日の午後は部屋でノンビリ過ごした。

それから五日後――

「そんじゃあ、行ってきまーす」
「気ぃつけてね」

何時ものように、まだ薄暗い早朝から家の庭に出た朔耶は両親に見送られながらオルドリア大陸へと転移した。

『――向こうの世界へ――　……今度は変なトコに出さないでよ？』
マカセテオケ

景色が切り替わり、何処かの街角に降り立つ。　よく見知った街灯が視界に入った。今回は王都の開放区に出たようだ。

『おー　今回はバッチリじゃん』
ウム　マチヲネラッテ　イドウスル　コツヲオボエタ

王都は特にフレグンスの精霊の気配が強いので狙い易いとの事だった。

「さてと、まずはあたしの工房に寄って、それから船外機の出来で

も見に行こうかな」

カースティアの騎士団本部用にポンプも発注するか購入する予定で、朔耶は朝靄の漂う開放区に踏み出した。

「おっはよー」

工房警備の衛兵に挨拶しながら工房に入る。衛兵も朔耶の唐突な現われ方に慣れたらしく、普通に敬礼を返した。暫らく工房で手土産の魔力石ライターや船の備品用ランプの基礎を作り、街が目覚め始める頃合を見計らって工房を出た。

その後、テストの済んだライフジャケットの着心地を試したり、ポンプ用の管を新たに発注したりしながら順番に工房を回って船外機を発注していた工房にやって来た。工房主は朔耶が訪ねて来るのを心待ちにしていたらしく、朔耶が入り口に現われるとすっ飛んで来た。

「お待ちしておりましたよ！　さあさあ、見てくださいこの出来！」

作業台に案内された朔耶はそこに鎮座する船外機のフォルムに感嘆の声を漏らす。もっと角ばった形になるだろうと予想していたそれは見事な曲線の連続を描いており、参考図の隅に描いてあった流線型の船外機そのものを再現していた。

「わあ、凄いね……　ここまで再現出来るとは思わなかったよ」

「いやいやぁ、サクヤ様の持ってこられた参考図のデザインに魅了

されましてね。この魚のような滑らかな形が中々」

船に装着する為の台座部分も出来ているので、後は動力を組み込んでテストするだけだ。朔耶はリュックから魔力石モーターを取り出すと、工房主と一緒に組み込み作業を行った。そうして試しに少し回してみる。

「ん、もう少し油を注しといたほうがいいかなぁ」
「そうですな、思ったより回転が速いようだ」

工房主は一度バラして各歯車の軸や噛み合わせ部分に油を注し直すという。朔耶はその間に城へ立ち寄る事にして一旦工房を後にした。写真を渡しに行く用事があるのだ。

城に到着するとレティレスティアはアルサレナと共に地下神殿でお祈りの最中だったので、朔耶はカイゼル王の所に出向いた。通常、王に会う為には謁見を申し込むにも手続きに時間が掛かるのだが、朔耶はこの辺り特別扱いになっている。

「写真持ってきましたよ～」
「おおう！　出来たか！」
「ロケットは安っぽくなったらアレだったんで、其方で用意したのを使ってくださいね」
「ほほうー、こんなに小さい絵なのにこれほど鮮明に！」

この王様にカメラを渡したら一日中首から提げて激写し捲るのではないだろうかと、汗をたらりとさせる朔耶だった。その後、竜籠の使用許可を貰って竜の厩舎にやって来た朔耶は、貨物用の籠と竜を借りて開放区の工房を目指した。朔耶は籠に乗って移動する。

「自力で飛ぶのもいいけど、これも中々いいなぁ」

工房に着くと空から降りてきた二頭の竜に工房主と作業員達が驚いていたが、これで湖まで飛ぶと説明されると仕上がった船外機を持って籠に乗り込んだ。テスト用の船は湖に行けば王都所有の船が桟橋に沢山繋いであるので、適当な船を選んで使う事になっている。

朔耶と工房の職人、その弟子の作業員二人に船外機を乗せた竜籠は王都から少し離れた場所にある湖へと向かった。

王都の北東の外れにある湖。カースティアの湖に比べると五分の一程の広さだが、それでも馬で一周するのに一日は掛かりそうな程の大きさを持つ。対岸には小さな森も広がっており、此処から流れ出る川は帝国領と国境を分ける海の入り江に繋がっている。

馬車での移動なら王都から片道三時間という距離を三十分程で到着した一行は、適当な船を見つけて船外機装着用の台座を船尾に取りつけ、次いで船外機を装着した。

「想定する規模の船より随分小さいけど、最初はこんなもんかしらね」

「サクヤ様、儂等も同乗して構わんでしょうか？」

「勿論、みんな乗っていいよ。でもライフジャケットは持ってきてないから、落ちないように気をつけてね」

詰めれば六人は乗れそうな手漕ぎボートの船に四人が乗り込み、朔耶は早速船外機の推進力実験に動力のスイッチを入れた。スムー

ズな駆動音がしてスクリューが回転し、船が進みはじめる。

「おお……　動いた」

「オールも帆も無いのに動く機械船はティルファで何度か見た事はありますが……」

「うむ、これほどの速度で走る機械船は初めてだな」

試運転で出力の三分の一程しか回していない状態なのだが、意外に良い速度で船は走った。オールを使ってそこそこのピッチで漕いだ時くらいの速度だろうか、旋回もバランスを崩す事無くスムーズに行える。

湖の真ん中辺りまで来た所で、朔耶はモーターの回転を上げる事にした。ワイワイとはしゃぎ気味の同乗者達に警告を発する。

「ちょっと限界速度の実験するから、しっかり捉(つか)まっててね」

「え？」

十分な速度で船が走った事に実験の成功を喜んでいた同乗者達は最初、朔耶の言葉の意味が分からなかった。ぐぐっとスロットルレバーを押し込んでモーターのピッチを上げると、俄かに高まっていく駆動音と共に、船体の前端部分が持ち上がって加速を始める。

「おわああー速い速い！」

「ひえええ、船がっ船が引っ繰り返るー！」

悲鳴だか驚嘆だか分からないような声を上げて船にしがみ付く同乗者達。朔耶はバランスが崩れない程度に蛇行しながら岸を目指して船外機をフル回転させた。そうして岸まで十分な距離を残して一度回転を止め、逆回転で急制動を掛ける。

思わず前のめりになる同乗者を尻目に、朔耶は船外機の性能に問

題が無い事を確認してにっこり微笑んだ。

船外機の出来に満足した朔耶は、王都に戻る途中、同じものを後二機発注する予定である事を告げ、その前にカースティアで使う汲み上げポンプも発注しておいた。魔力石モーターの構造について質問されたが、これはまだ内緒にしておく。

工房に帰って来た一向は、朔耶がティルファに持っていく前に一度船外機のメンテナンスを済ませておこうと再び作業台に運んで分解し、中の機構に異常が出ていないか調べ始める。その間、朔耶は竜達に餌を与える為に一旦厩舎まで連れて帰る事にした。

「お昼までにはティルファへ飛ぶつもりだから、よろしくね」
「任せてくだせえ、ポンプもきっちり作っておきますよ」

二頭の竜と一緒に空を飛んで来た朔耶を見てまた椅子から跳び上がっている世話係りのおじさんに竜達を任せると、朔耶は城の裏手から聞える訓練らしき声を聞きつけて見物しに向かった。

「あ、近衛の訓練か～　……って、あそこに居るのレティ？」

テラスの影から訓練の様子を窺っているレティレスティアの姿。その視線の先にはイーリスが槍を振るって部下達を扱いている。朔耶はイーリスを見つめるレティレスティアの横顔が、なんだか寂し

げに見えた。

『そういえば、あの二人ってあんまりイチャイチャしてる所見たことないなぁ』

ソウホウ　マジメデアルカラナ

『レティは割と積極的だと思うけどなぁ、やっぱり身分とかでイーリスが遠慮しちゃってるのかな』

イツノジダイモ　イズコノセカイモ　オトコノアリカタハ　カワラヌナ

何やら意味深な事をいう精霊の言葉に巫女（かつてのあるじ）の心を感じながら、朔耶は暫らくイーリスの様子を隠れて見ているレティレスティアの様子を隠れて見ていた。

「……屋形船　……二人っきりのロマンス」

朔耶の頭にピコーンと閃くモノがあった。あの二人をレイス達ほどまでとはいかなくとも、もっと積極的に触れ合える状況に持っていく『誰も見てないからイチャイチャしちゃえ計画』。

しかし、この計画は直ぐに実行という訳にはいかない。まずは舞台を整える下地から作らなくてはと、朔耶はカースティア観光事業の成功にふつふつとした闘志を燃やし始めるのだった。

厩舎に戻り、餌を食べ終えた竜達と連れ立って竜籠の置いてある工房へと戻って来た朔耶は、既に積み込まれていた船外機と装着用台座などをチェックして頷く。燃料用の魔力石も念の為一袋程積み

こんで朔耶も籠に乗り込むと、竜達に出発の合図を出した。
見送りに手を振る工房主と作業員達に手を振り返しながら、朔耶は”知の都ティルファ”を目指して王都を飛び立った。

国境を隣り合わせるフレグンスとティルファは距離的には近い位置にあるのだが、山と森と川などの地形的な問題で馬車を使った移動ならば早くても三日は掛かってしまう道程だ。しかし地形に影響されない竜籠で空を行けば約三時間程で到着する。

高い山脈の奥に帝都を設ける帝国が列強四国の一国として君臨出来た理由に、竜籠の存在が大きな要素であった事は否めない事実である。和平会談後、その利便性がティルファにも齎されたお蔭で滞りがちだった流通も改善され、ティルファの発明研究の活性化にも貢献していた。

「えーと、街の方じゃなくて塔のある湖の近くだったよね、確か…」

朔耶はティルファの下見で見つけておいた竜の厩舎を探してその近くに着陸する。直ぐにティルファ衛士団の衛士達が集まって来たので身分証明書を見せてフレグンスの王室特別査察官である事を示す。

「か、確認しました！　ようこそティルファへ、サクヤ殿」

この世界では見た目15〜6歳の子供にしか見えない朔耶。竜籠

に乗ってやって来た異国風の少女を、最初は何処のお偉いさんの令嬢かという雰囲気で対応していた衛士達は、相手が”噂のサクヤ”本人である事が分かると皆一斉に緊張した顔つきになった。

「ドマック・ボルトンさんって人の造船所に行きたいんだけど」

「ハ！　我々が案内致します！」

「この荷物も一緒に運べるかな？」

「ハ！　直ぐに馬車を用意させます！」

「あー……　あたしが来た事、あんまり他の人に話さないでね？」

「ハ！　そのように手配致します！」

打てば響き過ぎるような衛士達の対応に、朔耶はこの街での自分に対するイメージがカースティアで感じた畏怖とは１８０度違うモノだと感じた。別の意味で目立たないように行動しようと決心する。

ごとごとと馬車に揺られてやって来た湖の畔に建つ沢山の工房や造船所の一つ、少しくすんだ色の佇まいに貫禄を感じさせる大きな建物。朔耶はルィバンス伯の紹介状に書かれたドマック・ボルトンの造船所にやって来た。

「すいませーーん、ドマックさんいますかーー」

湖に向かって大きく開かれた建物の裏手から声を掛ける朔耶に、若い作業員達がキョトンとした表情を向けている。『なんでこんな所に子供が』な顔である。

「んん？　儂に何か用かね、嬢ちゃん」

修理中の船の中からノッソリと顔を出す髭もじゃの熟年男性。もさっとした茶髪の間からギラリと覗くブラウンの瞳。何となくアンバッスを彷彿とさせる容姿に、朔耶は親しみを感じた。

「初めまして、朔耶といいます。ルィバンスさんの紹介状を持って来ました、船造ってください」

紹介状を出して単刀直入に言った朔耶に、ドマックはしばしポカンとした後、豪快に笑って紹介状を受け取った。

「ルィバンスか、久しい名じゃな。フレグンスで貴族なんぞやっとると聞いたが、以前落ちぶれたという噂じゃったがなぁ」

「最近は持ち直してますよ？」

ドマックの歯に衣着せない言いっぷりに苦笑しながらフォローを入れる朔耶。扉の無い休憩室のような部屋で紹介状をふんふん読んで懐に仕舞ったドマックはどっしり椅子に構えて目尻に皺を作る。

「それで？　どんな船が欲しいんじゃ？　小型艇から大型船まで何でも造ってやるぞ」

朔耶は予め描いておいた船のデザインの写しをリュックから取り出して見せた。テーブルの上に広げてそれを眺めるドマック。設計図というほど細かいモノではないが、大きさの対比として人の絵が描き込んであり、船の外観、規模、内部の大まかな構造は把握出来る。

屋根付きで色々な設備の整った八人乗りの船、朔耶の世界で言う

ところのクルーザーのような形をしている。ドマックが絵を指しながら質問し、朔耶がそれに答えるというやり取りが暫らく続いた。

「それで、最終的には三艘くらいで運営しようと思って」

「……」

暫らく観光事業の説明を聞いていたドマックは顎に手を当てて髭を弄ると、難しい顔をして徐に尋ねる。

「カースティアの湖で使うと言ったな？」

「うん、釣り船にしてお客さん乗せて観光に使うの」

朔耶が答えると、ドマックはフムと顔を起こして腕組みをしながら言った。

「すまんがこの話は無かった事にしてくれ」

「ええ！　なんで！？」

いきなりの交渉決裂に朔耶は思わず声を上げた。作業場にいる若い衆が何事かと覗き込んでいる。

「こいつは欠陥船だ、儂は乗り手を危険に晒すような船は造らん事にしとる」

ドマックはテーブルに広げた船の絵を見下ろしながら諭すように説明した。

「小さな池に浮かべる程度なら良いがね、カースティアの湖ともなると竿なぞ湖底に届きはせんだろう、だのにこの船には帆を張るマストもなければオールもパドルも無い。こんなんじゃあ、あのだだ

っ広い湖の真ん中で漂流しちまう」

「推進器なら作ってきてるんだけど……」

ドマックは首を振る。

「機械船はこの街にも昔からあるんで色々見てきたが、嬢ちゃんの求める規模の船を動かせるよう代物じゃねえ。嬢ちゃんがどんな発明家でどんな機械船用の推進器を作ったしらねぇが、そういうのは所詮好事家の道楽に過ぎん」

悪い事は言わないから帆走船か手漕ぎ船にしておいた方が良いと宥め賺すように言うドマックに、朔耶はムッとなって言葉を返した。

「確かめもしないでそういう事いうかな」

「はっはっは、嬢ちゃんとは年季が違うからな。儂はこの街に造船所を構えてから色んな船を見てきたが、機械船に玩具以上のモノなぞ一度もありゃあせんかったわい」

「ずっとそれが続くとは限らないじゃん」

「ふむ……　引かんのう、それならこうしよう」

ドマックは朔耶が持ってきたという推進器を取り付けた船と同規模の手漕ぎ船と競争し、勝つ事が出来れば注文の船を造ろうと提案した。注文の船が八人乗りという事で、勝負に使う船も八人乗りのモノを使う。

「やってやろうじゃないの」

「わっはっはっ、気概ある嬢ちゃんじゃな。よし、それでは明日の朝にでもそこの湖でやるとしよう。今日は此処に泊まるといい」

船と対戦相手は話を付けておくと言ってドマックは作業に戻った。朔耶はむぅ～と唸りながらその背を見送ると、馬車から荷物を降ろし始める。すかさず衛士が手伝ってくれたので礼を言って作業場の隅に運んで貰った。

対戦用の船の準備が出来るまではする事も無いので、朔耶はティルファの街を散歩する事にした。湖の周りをぶらぶら歩く。衛士が警護に付こうとしたが、必要ないからと断った。最初、『もしもの事があれば』と簡単には引き下がらない衛士だったが――

『もしもの事があって巻き込んじゃったら寝覚め悪いから……　消し炭になりたくないでしょう？』

と、ニヤリ咽いで見つめると震え上がって『失礼しましたー！』と引き下がった。この時、精霊がノリで眼を光らせたりしている。少々罪悪感を感じた朔耶だったが、一人で静かに過ごしたい時もあるのだ。

ドマックの『いい子だから言う事聞こうな？』的な態度にムカッ腹が立っていたというのが実際の理由だったりするのだが。

湖の真ん中に建つ中央研究塔の回りには小さな船が行ったり来たりしていた。造船所が並ぶこの辺りから少し離れた場所には工房らしき建物が建ち並び、湖の畔にも沢山の桟橋が浮かんでいて、その周辺には色んな形の船が繋いであった。

近付いてよく見ると、普通の船が二割に変な船が八割といった割合で、水車を付けた比較的まともな形の機械船から何本もの管が船の脇を通っているよく分からないモノまで様々だ。

『なんだかルッテンを思い出すわ……』

ヨキハツメイノ　カゲニハ　シッパイモ　ツキモノヨ

魚の鰭を参考にしたような形のオールを付けた船がゆっくり進んでいく。乗っている人は船の真ん中辺りに付けられたハンドルを必死にグルグル回しているが、運動量の割りに速度は出ていないようだ。

サクヤ式送風機の風車をそのまま水につけて推進力に使っている船もあり、スクリューの概念が出来ているのかと観察してみるが風車そのままでは水の抵抗もあり、回転力が足りないので大した推進力は得られていないようだ。

『うーん、これじゃあ玩具って思われても仕方ないかも』

コダワリノアル　ゴジンノヨウデアッタシナ

ここに居並ぶ奇妙な船の数々はティルファで研究する発明家達のアイデアの結晶、明日の成功への布石である事には違い無いであろうモノの、船の職人さんに言わせてみれば、珍しいだけで役に立たない船など好事家の道楽でしかないのだろう。

「明日の勝負、絶対勝つ！」

55話：サクヤ式機械船

夕方頃になって朔耶が一度造船所に戻ると、丁度ドマックが対戦に使う船を作業場前に付けている所だった。ティルファの水軍が訓練などに使う船で、これからオールを取り外して朔耶の持ってきた船外機を装着できるよう船尾を少し弄るのだそうだ。

「結構おっきい船だね」

「軍用の訓練艇だからのう、衛士共が八人でこいつを走らせると……そこい等の帆走船より速いぞぃ？」

ニヤリと笑みを向けながら作業員達と船を台車に乗せて作業場に引っぱり上げるドマックに、朔耶は挑戦的な笑みを返して目を丸くさせた。改修作業が進められる間、朔耶は皆の晩御飯を作ると言って厨房を借りると、持ってきたカレーのルーでカレーを作り始める。

明日の対戦後は発注する船を造って貰う事になるのだ、宿泊に部屋も借りる事になるので相応のお礼をという朔耶なりの気配りだったのだが、ドマックの挑発に随分ご立腹であったように見えた”サクヤ殿”に一体何を食わされるやらと、作業員達は内心恐々としていた。

「うめぇーー！」

「ヤバイ、何杯でもいける！」

「お前らまだ作業は残ってんだ、程々にしておけよ」
「親方も五杯目じゃないすか」
どこぞの精鋭傭兵団と同じ様な反応が見られた。
夜――改修作業と船外機装着用台座の取り付け作業、そして船外機の装着作業が終わり、朔耶は台車上の船に上がって最終チェックを行っていた。低速で船外機のスクリューを回し、異常音が無いか確かめる。キュルルルル――という独特の音が作業場に響いた。
「ふむ……変わった形の風車じゃな、水中専用というやつか」
「風車じゃないんだけど、まあそんなトコ」
チェックを終えてひょいっと船から飛び降りた朔耶を思わず受け止めるドマック。朔耶はキョトンとした表情を浮かべていたが、やおらにっこり笑うと礼を言った。ドマックはやれやれと溜め息を吐きながら朔耶を降ろすと『とんだ御転婆娘じゃ』とぶちぶちこぼす。
「しかし、お前さんの噂は聞いておるが、なんでまた機械船に拘るんじゃ？」
「ん～別に拘ってるというか、客引きが出来て運営効率が良くてって考えたらこうなったのよ」
もうすっかり砕けた口調で話している朔耶。ドマックの人となりが分かったので昼間の立腹も夕食のカレーの食いっぷりを見ていて気が治まった。朔耶が考える釣り船の運用は帆船や漕ぎ手のいる船では難しく、効率が悪い事を説明する。

「船長と料理人と補佐、この三人だけでお客さんの相手をしながら船も動かすし調理もするってやり方だからね」
「ふーむ、サクヤ式の考案者は事業のやり方もサクヤ式という事か」
朔耶の提唱する効率運用に懐疑的ながらも、それなりに斬新な発想であると感じ取れるドマックは髭を弄りながら唸るのだった。

ティルファ中央研究塔の一階部分は半円形の大ホールで、少し地下に掘り下げた擂り鉢状の窪みに客席がならび、その中央に研究発表や式典に使われるステージがある。半円形大ホールの反対側には厨房や使用人達の寝泊りする施設がごっそり入っている。

そのステージ裏の厨房につまみ食いをしに来たブラハミルトは、夕食を貰いに来た警備の衛士達が声を潜めて興奮気味に話している噂話に耳を傾けた。『サクヤ式の考案者がティルファに来ている』『新しい機械船推進器のお披露目がある』そんな内容だった。

「君達」
「っ！　ハッ　何でありましょうかっ　ブラハミルト所長！」
こんな下っ端の集まる場所に現れたティルファの最高指導者に、驚いた衛士達は慌てて立ち上がると敬礼で硬直する。
「今話していた内容は本当か？　サクヤ殿が来ていると」
「ハッ！　本当でありますっ」

「……何故、私の所に報告が来ない？」
「さ、サクヤ殿本人からっ　来訪は内密にしておいて欲しいとの要請がありました！」

ブラハミルトは決して気難しいというタイプではないのだが、表情を変えず笑いながら怒れる人間なので内面が読み辛い。衛士達は何か不味かったかと内心冷や冷やしながら質問に答えていた。

「ふむ、個人的な所用ということか……」

その後暫らく衛士達とのやりとりで明日のイベント内容の詳細を知ったブラハミルトは、ふんふんと何か考え込んだ後『諸君等も明日に備えておくように』と言って厨房を後にした。

そして翌朝――

「……なんてこった」

湖の周囲には大勢の人だかりが出来ていた。『見誤ったか』とドマックは朔耶の知名度を甘く見ていた事を悔やんだが、此処まで人が集まってしまっては後の祭り、今更中止するわけにもいかない。

それならば『対ティルファの機械船』に内容を変更してしまおう

と画策を考えるも、既に『サクヤ式機械船』対『ティルファ水軍高速艇』が知れ渡っていた。手の打ち様が無いとはこの事だ。

「うわー、何かいっぱい集まってるね～」

そんな中、身嗜みを整え終えた朔耶が借り部屋からノンビリ起き出して来た。湖のスタート位置では既に水軍衛士を乗せた高速艇がオールを合わせて漕ぎ出し準備に入っている。ちなみに水軍高速艇には舵手を入れて九人が乗っている。

「スマン、まさかこれ程の騒ぎになるとは……」
「ん？　別にいいんじゃない？」

申し訳無さそうにしているドマックに対し、朔耶はまるで気にしていない風に答えた。実際本人は何も問題に思っていない。

ドマックがこの事態に憂慮しているのは、これがフレグンスの高官に恥を掻かせることに繋がり、その事でフレグンスとティルファの外交問題になったりはしないかという点にあった。また、朔耶の”サクヤ式ブランド”に傷を付ける事にもなるかもしれない。

破竹の勢いで各国に浸透し、研究者達の心を鷲掴みにしているサクヤ式だが、その流れに反撥する勢力も少なからず存在する。

希少性の高さと考案者の情報が極端に少ない事から、サクヤ式のオリジナルには魔術が使われるインチキだと主張し、糾弾を訴えるような集団もいるのだ。今回の無茶な対戦はそういう輩にサクヤ式を貶める材料を与えて活気付かせる切っ掛けになりかねない。

そんなドマックの葛藤を余所に、朔耶は早速船に乗り込むと船外機のチェックをしながら湖に降ろすよう作業員達に指示を出した。

「こら、指示は儂に仰げ」

もうこうなったら後で上手くフォローを入れ捲るしかないと腹を決めたドマックは、作業員達に指示を出して台車を滑らせ朔耶の乗る船をゆっくり湖に降ろしていった。少なくともティルファの巷(ちまた)に溢れる有象無象の機械船よりは高性能な筈なのだ。

そこへ朔耶艇に同乗する水軍衛士七人もやって来る。ドマックが今まで見てきた機械船は大掛かりなモノでも四人乗せて動けば良い方だった。大体四人乗りの船でも仕掛けが場所をとって二人乗りになってしまうような場合が多い。

『八人乗った機械船が動けばそれだけでも快挙じゃろうて、”サクヤ式機械船研究の基礎”とでも言えばなんとかなるじゃろ』

無事湖に降りた水軍高速艇改サクヤ式機械船に乗り込む水軍衛士達。彼等も普段ならば発明研究家の玩具である機械船に同乗するような事はなかったのだが、相手は噂に名高いサクヤ式の考案者であり、フレグンスの戦女神と謳われる”サクヤ”である。

このイベントに参加出来て、朔耶の操る船に乗ったというだけでも周囲に自慢出来るというものだ。彼等から好意的な様子を見て取ったドマックはホッと一息付く。

しかし、その屈強な水軍衛士が七人も乗ったサクヤ式機械船に装着されている小さな推進器は、余りにも頼りなげに見えた。

「おお、出て来たぞ！」
「一番後ろに乗っているのが噂のサクヤ嬢か……本当に子供みたいに見えるな」
「あれって元は水軍の高速艇だよな、衛士が七人も乗ってるけど動けるのかなぁ？」
「いや、よく見ろよっ　動いてるじゃないか！　パドルも使ってないし、水中専用の風車を使っていると聞いたが凄い推力だな」

湖の畔に集まった人々は水軍高速艇の待つスタート位置に移動するサクヤ式機械船に注目し、口々に船尾に付けられているサクヤ式推進器の性能について議論を交わす。彼等は皆サクヤ式の研究者であったり、機械船の将来性を謳っている人達である。

実のところ、ドマックの憂慮は杞憂であった。彼等自身、機械船の可能性を信じてやまない人々ではあるが、それはもっと研究と技術の進んだずっと先の事であると認識しており、”対戦”の結果などには興味がなかった。

現時点で機械船が帆走船や手漕ぎ船、ましてや水軍衛士が漕ぐ高速艇と競えるなどとは誰も思っていなかったのだ。態々対戦のような形をとって水軍を出したのは、高名なサクヤ式の考案者でありフレグンスの高官でもある客人を迎える敬意、礼儀的演出と捉えていた。

「これよりー！　”ティルファ水軍高速艇”と”サクヤ式機械船”のー！　対戦を行いまーす！」

スタート地点の小船に乗った旗を持つ審判が声を張り上げ、集まった見物人達が沸く。ルールはこの場所からスタートして湖の中心に建つ中央研究塔を回って折り返し、この場所まで戻って来ること。

「両艇、問題ありませんねーー？　それではーー！　スタートーー！」

審判の合図と共に旗が振られ、二艘の船が走り出す。水軍高速艇に乗る衛士達は息のあった見事なオール捌きで船を加速させて飛び出していく。一方朔耶はじっくりスロットルレバーを押し込んで徐々に速度を上げていった。

流石にこの大きさの船に朔耶を含めて八人を乗せた状態では重くて、工房の人達と試運転をした時のようには行かない。水軍高速艇はスタートダッシュの力漕から速度に乗り、綺麗に動きの揃ったオールが絶え間なく湖面を漕いでぐんぐん進んでいく。

この時点で三艇から四艇身分程の差が出来ていた。しかし見物人やサクヤ艇に乗る衛士達は、サクヤ式機械船の性能に感心していた。既に通常の手漕ぎ船並の速度で走っているのだ。この人数を乗せてこれだけの速度が出せるなら十分『使える船』である。

大きく先行する水軍高速艇の衛士達も、水押しで波を切りながら進むサクヤ式機械船に関心を示していた。小型艇で狭い水路を行く場合などは中々有効なのではないかとオールを漕ぐ手は休めず意見を出し合う。

この時はまだ、水軍高速艇の衛士達にも、サクヤ艇に乗る衛士達にも、湖畔に集まった見物人達にも余裕があった。

「オッケー、スピードに乗ってきた……そろそろ勝負を掛けるわよ」

朔耶のその言葉に、サクヤ艇に乗る衛士達は一様にキョトンとした表情を見せた。水軍高速艇は既に八艇身分近く先を巡航速度で進んでいて、そろそろ折り返し地点の中央研究塔に差しかかろうとしている。

もしやフレグンスの流のジョークかと思い、何かリアクションを返さねばと慌てる者もいる中、朔耶は船外機の出力を４０％から６０％まで上げた。船外機の駆動音が高まり、サクヤ艇が加速していく。更に７０％まで上げて水軍高速艇を追い上げる。

「お、おい……何か追いついて来てないか？」

「んん？　ちょっと手を抜きすぎたか、おーい皆ちゃんと巡航速度を維持しろ」

「いや、何時ものペースの筈だぞ？」

「おいちょっと待て、変だぞ！　向こうの船の接近が速過ぎるっ」

船外機独特の駆動音と共にどんどん近付いてくるサクヤ艇に、水軍高速艇の衛士達は慌ててオールを漕ぐピッチを早めた。しかし、サクヤ艇は追い上げて来た勢いのまま水軍高速船と並び、そのまま追い抜いていった。

水軍高速艇に乗る衛士達は唖然とした表情で、同じ表情を向けているサクヤ艇に乗る衛士達と向かい合い、やがて離れていく。

湖畔の見物人達はどんどん加速しながら水軍高速艇に迫り、遂に

は抜き去ってしまったサクヤ艇を見て興奮気味に声援を送った。機械船が巡航速度で走っているとはいえ水軍衛士が操る高速艇を追い抜くなど、正に奇跡と言えるような光景を目にしたのだ。

「お、親方っ　抜いちまいましたよ！　水軍の高速艇をっ　追い抜いちまいましたよ！」

「スゲェ！」

「ああ……たまげたな」

興奮する作業員達を余所に、サクヤ艇の様子を見守るドマックは静かに呟いた。そうして十数年前、戦乱の中で見た時代が変わる瞬間を思い出していた。それまでの常識が覆され、新しい概念や存在が古い概念を駆逐していく。

剣と槍、弓と盾、騎馬による突撃が戦場の勝敗を左右していた前時代、攻撃魔術は強力だが術士の都合上あくまでも補助的な飛び道具という位置付けにあった。広範囲に影響を及ぼす大魔術も、使い勝手の悪さから攻城戦や工兵の補佐に使われるのが常識だった。

”フレグンスの歩く要塞”アルサレナが、新戦術を持って戦場に登場するまでは。

「また……時代が変わる瞬間を、見る事になるとはのぅ」

先に折り返し地点に入った朔耶は出力を若干落としながらゆっくり船を回頭させた。かなりの大回りになってしまうが、そもそも朔耶の操船技術など無いに等しい。『動かし方が分かるから何とかなる』のレベルなのだ。

「んー、もうちょっと切り込んでも大丈夫なのかなー」

我に返った水軍高速艇の衛士達はスタートダッシュの時のような勢いで漕ぎ始め、中央研究塔周りを大きく回頭するサクヤ艇を尻目に、訓練で培った操舵技術で最短距離を旋回していく。

ようやくサクヤ艇が中央研究塔周りを半周して折り返した時、水軍高速艇と再び横並びになっていた。

「漕げ！　ここからゴールまで全力漕行だ！」

「相手は普通の機械船じゃないぞ！　オールを合わせろ！　呼吸を揃えろ！　水軍衛士の力を見せてやれ！」

幾ら名高いサクヤ式が相手とはいえ、機械船に負けたとあってはティルファ水軍衛士の名が廃るとばかりに本気の全力漕行を見せる水軍高速艇。左右に四本ずつ伸びるオールが一分の無駄な動きもなく弧を描いて翻り、滑らかな推進力を得て高速艇を走らせる。

だがサクヤ艇の滑らかさはそれ以上だった。船外機が装着された船尾から泡立つような白い波を押し出し、湖面を滑るように疾走する。乗っている衛士達は只々大人しく座ったまま、必死でオールを漕ぐ同僚達を複雑な想いで見つめる。

そうして、徐々にではあるが水軍高速艇がじりじり前に出始めた。湖畔の見物人達は水軍衛士を本気にさせたサクヤ艇にやんやの喝采を送っている。中央研究塔から対戦の様子を眺めていた衛士や研究者の魔術士達は、やはり本気になった水軍は強いと頷いていた。

サクヤ艇に乗る衛士達は同僚達が走らせる高速艇がじりじり先行していく様子に、内心安堵しながら朔耶の様子を覗き見た。水軍高速艇相手にここまでやれたのだ、満足気に誇っているだろうか、やはり追い付けない事を悔しく想っているだろうか、と。

朔耶は満足気に誇るようでもなく、追い付けない事に悔しがるようでもなく、少し機嫌の良さを感じさせる落ち着いた雰囲気の表情でゴール地点を眺めていた。そして、注目する衛士達に悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「ぎりぎり勝てると思ってる所で突き放されたら力抜けるよね」

「え？」

困惑する衛士達を前に、朔耶は出力８０％で回している船外機のスロットルレバーを握り直すと――

「出力全開！」

高らかに宣言して残り２０％を開放した。

「よーしいいぞ！　この調子でゴールまでに引き離し……」

仲間を励まし、鼓舞しようと声を張り上げていた衛士は、ありえない速度で自分達の高速艇を抜き去っていくサクヤ式機械船に言葉を失う。見物人で賑わう湖畔では、それまで興奮した人々から上がっていた歓声が次第にざわめきに変わり、やがて静まり返っていく。

まるで嵐の暴風を受けて暴走する帆走船の如く速度で、舳先を軽く持ち上げながら湖面を駆けるサクヤ艇。後方には鍛え上げられた

腕や顔を真っ赤にしながら必死の力漕をするも、どんどん引き離されていく水軍高速艇。動揺した為かオールの動きに乱れが生じ、それがまた両艇の差を広げていく。

元々色々な設備を備えた八人乗りクルーザーのような船を動かす為に造った推進器である。同じ八人乗りでも元が高速艇ともなれば出せる速度もかなりのモノになる。

サクヤ艇に乗る水軍衛士達は今まで体験した事の無い速度で駆ける機械船の舷に必死に捉まりながら、どんどんおいて行かれる水軍高速艇を呆然と見つめていた。そしてゴール。水軍高速艇とは八艇身程の差が付いていた。

「さ、サクヤ艇の勝利ーー！　サクヤ式機械船が勝利しましたーー！　うひゃあっ」

ゴール地点にいた審判の小船はサクヤ艇が通過した余波で転覆しそうになった。

静まり返っていた湖畔の見物人達は、朔耶が全開航行を見せた時、『アレは自分達の考えている機械船とは違うモノだ』と認識した。その為、興奮が一気に冷めてその『違うモノ』の観察モードに入ったのだ。

サクヤ艇は桟橋に近付いた所で推進器を逆回転させて急制動、衛士達が一斉に前のめりになる。『だから言ったのに～』と苦笑している朔耶は船をその場で小さく旋回させると、後ろ向きに微速前進で桟橋に付けた。

あまりに突き抜けた性能に絶句していた見物人達は、『観察モード』から『知りたいモード』に入った。知的好奇心と発明家魂が毛穴から噴出しかねない程に感情が高まり、我先に朔耶の元へと駆け出した。

「うわあ押すな！」
「いててて、引っぱるなっ　引っぱるなって！」
「ぎゃー落ちる落ちる」

しかし湖畔に立っていた大勢の人間が一箇所を目指して同時に動き出せば色々と混乱も起きる訳で、押し合い圧し合いになりながら湖に落ちる者や服の紐や帯が絡まってぐちゃぐちゃになりながら互いを引き摺るように絡まりつつ前進するなど、大騒ぎになった。

まるで群集がスライムのように蠢きながら押し寄せて来る様に、思わず『ひぇっ』と後退る朔耶。しかし直ぐに出動してきた警備の衛士達が群集を組み分けて騒ぎの収拾に動き、朔耶の安全を図った。ブラハミルトが予め配置しておいた衛士達である。

「どうだった？」
「ぶったまげたわい」

船外機と台座の取り外しに作業場へと運び込む為、作業員を連れて船を引き上げに来たドマックは、朔耶の問いにそう答えた。むふふーと笑った朔耶は船の引き上げ作業を見守りながら、ドマックに造って貰う釣り船について話そうとしたが――

「その前に、連中になんぞ答えてやれ」
「え？」

ドマックが指した方向には、衛士達に抑えられて切なそうな表情で此方の様子を窺っている大勢の発明研究家の人々。

「な、なんか餌を前にしたワンコ達みたいな……」

少し引き気味になりながらも、朔耶は彼等に向かって手を振ってみた。

「うおおおーーサクヤ殿ーーーー是非あの推進器の仕組みをーー！」
「やはり魔力石の加工が鍵なのですか！　そこだけでもっ　出来れば加工法のヒントを！」
「推進力の秘密を欠片だけでも！　お願いしますーー！」
「宜しければ是非私を弟子に！」

物凄い反応に驚く朔耶。此方の世界では信望的な扱いを受けた事は何度かあったものの、大抵の場合は畏怖される事が多く、特にここ最近はそういう傾向が強かった為、ここまで熱狂的なのは初めての事だけに朔耶はどう接すればいいのかと途惑った。

『な、なんかお兄ちゃんみたいな人が居るけど……』
マア　ナントカハ　カミヒトエト　イウシナ

そういえば――　と、朔耶はカースティアで精霊の力を使った時の事を思い出す。イーリス達でさえ最初は怯えの態度を見せていたにも拘らず、ティルファ魔術団の面々は早い段階から朔耶の力に興味津々だった。

少し考えた朔耶は、とりあえず簡単な質問には幾つか答えて場を収める事に努めた。推進器の構造は教えられない事、弟子は取らない事、魔力石の加工は自分のランプを参考にして貰う事などを話す。軽く売り込みが入っている。

ティルファで見た機械船の中では風車を推力に使っている船が一番正解に近いと言われて、その研究で進めていた者がぱぁあああっと顔を綻ばせたり、回転速度と回転力、力を得るには歯車を沢山噛み合わせる方法がある事などを説明されて熱心にメモをとる者。

水の抵抗を考えた造りになっているスクリューを地面に描いて見せると、その形状を覚えて早速スクリュー製作に自分の工房へ駆け込む発明家達。サクヤ式推進器を売りに出す予定は無いと聞くと、皆一様に残念だと肩を落としていた。

そうこうしている内に船の引上げ作業も終わったので、朔耶はドマックの造船所に向かった。集まっていた研究者達も、いい話が聞けたと満足して自分の研究室や工房へと引き上げて行くのだった。

「はぁ～～ヤレヤレ」
「戻ったか、ご苦労じゃったな」

わっはっはっと笑いながら朔耶を休憩室に誘ったドマックは、労いにお茶を出してくれた。

「さて、それじゃあ約束じゃ。　納期は何時までがいい？」

「う〜ん、普通どのくらい掛かるモノなの？」
「ふむ……一度造った船なら早いが、コイツは特別製じゃからなぁ。最初は少し掛かるととして――」

約一ヶ月近くは掛かるという。朔耶は造りがしっかりしていれば中古船をベースにしても構わないので出来るだけ早く仕上げて欲しいという要望で発注した。

「しかし、本当に新造でなくていいのか？　お前さんにとって記念すべき船じゃろうに」
「カースティアの為の事業活動だもん、見栄より実よ。　船大工の腕が確かなら問題ないっしょ？」
「わっはっは、中々言いよるのう」

ティルファで手頃な機械船が製造されれば、それも観光事業に導入するつもりだと話す朔耶に、ドマックは『確かにこりゃあ新しい概念だな』と納得したように呟いた。小首を傾げる朔耶に、『こっちの話だ』と言ってドマックは静かに笑った。

「あ、そうだ　これ、遅れたけどお土産」

お茶を飲んで寛いでいた朔耶は、思い出したように取り出したライターをドマックに渡す。フレグンスでは信頼の証の仮証として知られるサクヤ印の魔力石ライターである。ティルファの船大工で且つルィバンス伯の友人なら、あげても問題ないだろうと判断した。

「ほう！　これが噂のライターか、こりゃええもん貰うたわい」

割と気に入った様子で、点けたり消したりしながらホウホウ唸るドマックだった。

船外機装着用台座と船外機はフレグンスで朔耶の工房に保管しておく為、取り外し作業が終わり次第、竜籠まで運んで貰う事になっている。朔耶はそれまでする事が無いので竜達の様子でも見に行こうと厩舎に向かって歩き出した。

「カースティアにポンプを持って行くのは今日は無理かな～、来週ポンプを設置して、後は船の備品造りかな」

今後の予定を思い浮かべながら、朔耶はレティレスティアとイーリスの『愛の屋形船作戦（今命名）』の計画も同時に練り始める。

「やっぱ普段から地道にそういう雰囲気に持って行かなきゃだよね……」

協力者の必要性を感じ、使えそうなシチュエーションをシミュレートする。

『イーリス、何故ここに？』
『姫が、逢引をしているという噂を耳にしまして……』
『まあ！　酷いわっ　私の事をそんな風に思っていましたのね！』
『いえ、私は姫を信じております。ですが、どうやら逢引は事実のようです』
『それは？　どういう、ことですの？』
『……こういう、ことです』

『あっ　イーリス……こんな所で、そんな』

「ん～～こんな感じか……」

サクヤヨ

『ん？　どうしたの？』

ヒジョウニ　イイニクイコトダガ……

『え……？　な、なに？』

アニドノニ　ニタクウキヲ　ハランデオルゾ

この日の午後、ティルファの厩舎前で竜達と戯れながら黄昏ている朔耶の姿が見られたとか。

56話：学生生活2

「それじゃあ、船が出来たらフレグンスに連絡お願いね」
「おう、気ぃつけて帰れよ」

船外機と台座の取り外し作業も昼過ぎには終わり、それらを竜籠に積み込んで貰った朔耶はドマックと作業員達に手を振ってティルファを後にした。

中央研究塔の近くを通る際、一番高い塔のテラスのような場所に立つブラハミルトと目が合ったので朔耶が会釈すると、ブラハミルトは目を細めて微笑みを返した。

『挨拶しに行っといた方がよかったかなぁ？』
ナカナカニ　リカイノ　フカソウナ　ゴジンノヨウダ

朔耶は機会があればブラハミルトにもライターをあげようか等と考えながら、王都への帰路を急いだ。

「ふう～ありがとう、助かったよー」
「いえ、お役に立てて何よりでした！」

まだ明るいうちに開放区の工房前に到着した朔耶は、警備の衛兵にも手伝って貰いながら船外機と台座を工房の奥に保管すると、一旦竜籠を戻しに城の厩舎へと飛んだ。

「昨日今日とご苦労様、ゆっくり休んでね」
「キョー」
「キュー」

ひょこひょこと尻尾をふりながら厩舎の中に入って行く二頭を見送り、再び開放区の工房巡りに出ようとした朔耶は、世話係りのおじさんと話しているイーリスの姿を見つけた。

「イーリス～」
「ああ、サクヤ殿か」

近衛騎士団も今後に備えて竜籠の扱い方を覚えなくてはならない為、団長のイーリスは仕事の合間を見つけては竜について訊ねに来ているのだそうだ。朔耶の場合は竜に直接意思が伝わるのでそのまま乗り回しているが、本来ならば竜籠の操縦には竜笛などを使って進路の指示などを行う。

イーリスから戦後処理に加えて覚えなくてはならない事が増えたなどの話を聞き、朔耶は『大変だねぇ』と労いつつも、ふとレティレスティアの事が頭を過ぎる。

「それはそうとイーリス、最近レティとお話してる？」
「姫様と、ですか？」

先日、イーリス達が訓練している様子をテラスの影から寂しそう

に眺めていた事を話し、もう少しレティレスティアに構ってあげないと可哀相だよと諭す。

「そうですか、姫がそのような……」
「あたしも二人の事は応援してるからね」

朔耶は何やら考え込んでしまったイーリスにそう声を掛けると厩舎前を後にした。漆黒の翼を広げて城壁の向こうへと飛び去る朔耶の姿を、イーリスは静かに見送るのだった。

開放区に戻って来た朔耶は、まず革裁縫職人の工房に立ち寄って発注しておいた革のホースを受け取り、次いで馴染みの工房に顔を出して同じく発注しておいたポンプを受け取る。

「ん～流石に日も暮れてきたし、やっぱり今日はもうカースティアに運ぶのは無理っぽいね」

来週まで自分の工房に保管しておこうかと考えていた朔耶だったが、ここの工房主も利用している荷物の配送業者がいると聞き、それは便利だと朔耶も便乗する事にした。持ってきたホースとポンプを梱包して貰うと、カースティア便の荷馬車に積み込む。

「私らの荷物と一緒に送っておきますよ」
「うん、ありがとう　宜しくねー」

空もすっかり薄暗くなり、各区画の門周辺から順に街灯の火が灯され始める。

『さて、これで今週のこっちでの活動も終了かな』

デハ　モドルトスルカ

「ただいまー」
「おかえりー、お風呂沸いてるわよー」

庭先に帰還した朔耶を母のノンビリした声が迎える。母もすっかり朔耶の異世界往来には慣れたようだ。朔耶は喜んでお風呂場に直行すると、ガラッと脱衣所の扉を開ける。

「……」
「……」

兄がクマ柄トランクスに手を掛けている所だった。暫らく見つめあい、何となく漢の背中を見せながらポージングを決めた兄を無言で脱衣所から追い出す朔耶。

「うおっ　待て待て！　先に入ろうとしてたのは俺だぞー！」

もうパンツしか残って無いぞと抗議する兄に、朔耶は反則技を使って譲らせた。

「ごめん、あたし……もう、我慢できないの。お兄ちゃんは……あたしが入った後に、ね……？」
「萌え～」

大人しくパンツ一丁で部屋に戻る兄。　ゆっくり入浴を済ませた朔耶はしっかり湯を張り直してから風呂場を後にした。　風呂場から『詐欺だ！』とか叫ぶ兄の声が聞えたが、朔耶は軽く無視した。

「という訳で、船外機のお披露目は大成功でした！」
「おお～」
「やったなっ」

居間で弟とアイデアノートを弄りつつ兄が風呂から上がるのを待ち、兄妹弟三人揃った所で朔耶はティルファでの顛末を話した。オレンジジュースとコーヒーとビールで乾杯して喜び合う。

「結果的に知名度は抜群、観光事業でかなり客寄せに使えるな」
「うん、タカ君のモーター、これからも期待してるからね」

残り二艘分の同規模モーターと後は小型化などで色々な用途に使えるよう考える。朔耶が見たティルファの研究者達の様子から、意外と早い段階でモーターも作り出せそうに感じた事を話すと、それならばモーターの仕組みの基礎までなら明かしても良いかと話し合った。

「多分、扇風機みたいな簡単なモノまでなら作れると思う。反発力ユニットが鍵だから、これをまず部品として売り出す事からだな」

高性能な専用の機械でもなければ魔力石の細かい加工は難しいので、ティルファの研究者が自前の反発力ユニットを製造するには相当な時間が掛かるだろうと弟は予測した。なので部品として反発力

ユニットを単品で売りに出す。

「乗り物に使えるレベルのモノは暫らくは朔姉の工房でしか作れないってとこで」

そのうち天才が現われるなり加工技術が進むなりして、そこそこの物が作られるようになるだろうという結論に至った。

一頻りティルファの技術力談義で語りあった後、朔耶は観光事業が軌道に乗った後の計画、『屋形船作戦』の事も話してみる。

「お姫様と護衛の騎士か～王道だな、そういう場合は切っ掛けさえあればダーーっと行きそうなんだけどな。例えば……」

『イーリス？　何故ここに……』

『レスティア様が、逢引をしているという噂を耳にしまして……』

『まあ！　酷いっ　私の事をそんな風に見ていましたのね！』

『いえ、私はレスティア様を信じております。ですが、逢引は事実のようです』

『どういう、意味ですの？』

『……それは、こういう事です！』

『ああっ　イーリス……いけません、こんな所で』

「ってな感じで――ん？　どうした朔耶」

何故か、がっつり落ち込んでいる朔耶に、首を傾げる兄殿であった。

「まあ、重兄（しげにい）の妄想シミュレートはともかく、仕事が忙しくて時間が取れないってのは仕事を任せられる部下が居ないせいだと思うぞ？」

若い騎士団長のようだから、自分に回って来る仕事を殆ど自分でこなしているのだろうと、弟は分析した。仕事を任せられるような信頼できる優秀な部下を養成する所から始めるよう進言するべきだとアドバイスする。

「なるほどー、流石タカ君」

復活した朔耶はついでにカースティアの騎士達との交流について良いアイデアが無いか訊ねてみる。

「ふつーに接してたらいいんじゃないかな」
「え～、だって怖がって近付いて来ないんだよ～～？」
「だからって無理に近付こうとすれば逆効果だよ、自然に振舞ってればそのうち慣れるって」
「そうなのかなぁ」

実質、カースティアの派遣騎士団本部に詰めている王国騎士団の騎士達や本部職員達とはほんの数日のうちの僅かな時間しか顔を合わせていない。朔耶は観光事業を進めていく内に慣れるという弟の言に従ってみる事にした。

翌日――学校の昼休み。

合わせた机の上で三人分の弁当をつつき合いながら、朔耶は実穂と藍香にも『友達の話なんだけど～』のパターンでレティレスティアとイーリスの事を『お互い好きあってるのに中々進展しない二人を後押しするには？』という話題で振ってみた。

「ええ！　朔ちゃんに想い人がっ！」
「ハイハイ、お約束お約束」
「う～ん、立場の違いとかの理由があると色々難しいと思うよー？」

と、おっとり系の皮を被ったパパラッチ実穂は中々鋭い所を突いてくる。

「でもさでもさ、そーいうのって切っ掛けさえあれば一気に行っちゃいそうじゃない？　例えばさ――『え？　どうしてここに……』」
「マテ」

朔耶は藍香の裏声妄想シミュレートに全力で待ったを掛けるのだった。

「恋愛話と言えば、朔耶ちゃんさー西崎君、最近何か言ってきた？」
「ほぇ？　別にあれから何もないけど、何かあるの？」

朔耶が学校の屋上で西崎に告白されたのは三週間ほど前の事である。少々のトラブルはあったものの、朔耶がコンマ何秒でゴメンナ

サイして終わった話だ。

「う～ん……最近どうもＦＣの子達に不穏な動きがねー」
「え、なにソレ？　なにソレ？　陰謀？　ファンクラブの陰謀ってやつ？　朔ちゃん狙われるヒロイン役ってこ……もぐもぐ」

タコさんウィンナーを突っ込んで藍香を黙らせた実穂は、西崎君ファンクラブの中でも幹部クラスの子達が集まって何か相談している中で、朔耶の名前が度々出てくるのを聞いたと話した。

「只の陰口なんじゃないの？」
「んー、にしてはちょっと雰囲気がおかしかったらしいんよー」

気にする事は無いんじゃないかという藍香に、実穂はあまり良い予感はしないので気を付けるに越したことは無いと忠告する。

「ま～たそんな面倒事が……」
「朔耶ちゃんも大変だねー」

元はといえば大勢の前で西崎の呼び出しに応じさせる協力をした実穂にも責任があるだろうと、こめかみにグリグリ攻撃で報復した朔耶は、神社の精霊に何かあった場合の対処を相談する。

『こっちで出来そうな事は？』
シバラクノアイダ　アイテノウゴキヲ　フウジルクライハ　ゾウサモナイ

やろうと思えば風の塊や炎の塊を飛ばす事も出来るが、流石にそれは危なくて派手すぎる為、地味な方法で身を守ろうと取り決めておく。此方にいる間の朔耶に扱える精霊術士としての能力はまだ初

心者の域を出ないのだが、護身に風を纏う程度ならば問題ない。

『風の加護はまだ無理なんだよね？』

ウム　ダガアンズルナ　ワレガチョウセイスルユエ　セイレイノカゼダケデモ　ジュウブンナチカラトナル

頼もしい限りだと、朔耶は神社の精霊に宜しくお願いしておいた。

「あ、所で朔ちゃん明日どうするの？」

お弁当を食べ終わる頃、パック緑茶を啜っていた藍香が思い出したように訊ねた。

「明日は休みだっけ、特にすることもないかなぁ」

「じゃあさ、じゃあさ、久々に三人で遊びに行こうーよ」

「最近の朔耶ちゃん、週末はいつも家にいないもんねー」

「うーん、そうだね……どっか行こっか」

偶には三人で一日遊ぶのも良いと、朔耶は明日の休日を友人と遊んで過ごす約束をした。街で待ち合わせをして適当にお店を見て回ろうと簡単な計画を立てる。

その後は特に何事もなく放課後を迎え、それじゃあ明日街で会おうねと通学路で実穂&藍香と別れた朔耶は、明日何を着ていこうか等と考えながらノンビリ帰り道を歩いた。

「朔耶」

自宅近くまで来た時、近所の家の前に立つよく見知った男の子に声を掛けられ、振り返る。

「あ、拓ちゃん」

幼馴染の男の子、鳥越拓朗（とりこしたくろう）。昔はよく兄と弟と朔耶と彼とでつるんで遊んでいた。小さい頃から家族ぐるみの付き合いがあるので殆ど兄弟と変わらない家族のような存在であった。

最近は少し疎遠になっているが、例えば一年以上顔を合わせていなくとも、会って話せば毎日普通に話していたかの如く自然に会話を行える。そんな関係である。

「どうしたの？」

「……お前、俺に何か言う事があるんじゃないのか？」

真剣な表情でじっと目を覗き込んで来る拓朗に、んん？　と小首を傾げて惚ける朔耶。

「ちょっと来い」

「え、あ、ちょっとっ」

むんずと朔耶の腕を掴んだ拓朗はそのままグイグイ自分の家へと引っ張り込む。玄関に入った所で居間にいた拓朗の母親が朔耶を見つけて声を掛けてきた。

「あらー　朔耶ちゃんー　久し振りねーー！」

「みよさん、ご無沙汰してますー　って、ちょっと拓ちゃん待って

よ」

拓朗の母と落ち着いて挨拶を交わす間もなく、それを煩わしそうにしながら朔耶を二階の自室へと引っ張っていく拓朗。この家の階段は急なので腕を取られたままではバランスが取れない朔耶は拓朗に抗議した。兄直伝のやり方で。

「やだ、痛いよ拓ちゃん……お願い、放して」

「ぶっ！　お、お前な！」

「んまー　ダメよ拓朗ちゃんー　朔耶ちゃんには優しくしなきゃあ！」

弱々しく懇願するような媚びた声色でしゃがみ込む朔耶の姿を見て『んまー！』と声を上げて立ち上がると、パタパタとスリッパを鳴らしながら駆けて来る母親に、拓朗は『うわちゃーっ』と天を仰いだ。

「みよさぁーん、拓ちゃんたら無理矢理あたしを部屋に連れ込もうとするんですぅー」

「んまーダメよねーイケナイわよねー無理矢理なのはよくないわぁー、でも男の子ならちょっと強引なくらいがいいわよねー？」

「あーもうっ　悪かったから！　俺が悪かったから母さんはすっこんでてくれ！」

「んまっ　酷いわ拓朗ちゃん……」

概ねこんな家族であった。

「で？　あたしに聞きたいことって？」
「シゲ君とタカ君に聞いた」
「ありゃま」

夕焼けの差し込む窓を背にベッドに腰掛け、『前より片付いてスッキリしてるねー』と部屋を見渡しながら話を促した朔耶に、拓朗は朔耶の異世界旅行について聞いた事を告げると、何故自分には一言も話さなかったのかと問い質す。

「ん～、だって軽々しく言いふらせる内容じゃないっしょ？」
「だからって、俺にまで黙ってる事はないじゃないか。俺だって話を聞いてれば色々協力出来たのに……」

最後の方はごにょごにょと聞き取りにくい小声になりながらも、家族のような仲なのに内緒にされた事が気に入らないということを態度に感じさせる拓朗だった。

「ごめんね、拓ちゃん……拓ちゃんに迷惑掛けたくなかったの」

朔耶はベッドのシーツを指で弄びながら目を逸らしつつ、俯き加減でそっと引き寄せた枕を胸に抱え込む。

「迷惑だなんて……」
「っていうのは建前で、あんま知ってる人増やしたら面倒だったからってのが本音です」
「……お前は……」

胸に抱えていた枕を頭に乗せながらそんな事をのたまう朔耶に、こういう奴だったと脱力する拓朗。

異世界の事を掻い摘んで話した朔耶は、石の事などは弟に詳しく聞いて貰うとして、拓朗の家族にまでは話さないように念を押した。荒唐無稽な話だとしても、約二ヶ月に亘る失踪は事実なので、話が広まれば色々と変な探りを入れてくる輩も出て来るかもしれない。

枕で巨大リーゼントとかやりながら真剣に話す朔耶に、拓朗も分かったと頷いて理解を示した。今後は幼馴染の拓朗にも魔力石を使った道具の開発や異世界への干渉相談メンバーに加わって貰う。

「それにしても、拓ちゃんの部屋に来るのも久し振りだねー、随分大人しい雰囲気になったじゃない」

改めて”幼馴染の男の子の部屋”の中を見渡す。以前はモデルガンやらコンバットナイフやらが壁に沢山飾ってあったのだが、今は服とかカレンダーが吊ってある程度で、とてもシンプルな雰囲気になっていた。

「まあな、俺も何時までもミリオタやってるわけじゃないさ」
「ふぅ〜ん、拓ちゃんも成長してるんだ？」

朔耶は悪戯っぽい笑みを向けながら、ゴロンと拓朗のベッドに横たわった。ちらりと制服のスカートの裾が上がり、健康的な太腿が露出する。拓朗は朔耶の影越しに窓から差し込むオレンジ色に染まった夕焼けの逆光に眼を細め、眩しそうに見つめながら言った。

「朔耶も可愛くなったな」
「うお、反撃来た」

ひょいっと起き上がった朔耶はスカートを直すと肩を竦めた。少しばかり疎遠になっていようと、一緒にお風呂に入っていた頃からの付き合いである。この程度の挑発でうろたえる拓朗ではなかった。さらに追撃も仕掛けてくる。

「朔耶が綺麗なのは本当だしな」

「て、照れるぜ」

ストレートに褒められれば相手が兄弟でも幼馴染でも少なからず胸に響くモノだ。朔耶は少し赤くなった顔を誤魔化すように頬を掻くと、やおら立ち上がって拓朗の前に立った。

そうして『えくぼー』などと言いながら意味も無く拓朗の両頬を指でつんっとやってから部屋を出る。意味が分からんと苦笑しながら玄関まで一緒に下りて来た拓朗は、明日にでもタカ君を訪ねると言って朔耶を見送った。

帰宅した朔耶は、とりあえず兄と弟にデコピンスペシャルを御見舞しておいた。

「俺等なんでデコピン喰らったんだ……？」

「うーむ……謎だ」

翌日――

「いってきまーす。　あ、拓ちゃんいらっしゃい　タカ君なら居間にいるよ」
「おう、出かけるのか。　こんちゃーー！」

昨日の宣言通りやって来た拓朗と入れ違いに、朔耶は友人との待ち合わせ場所に急ぐべく家を出た。

「あー来た来た、朔ちゃーん！」
「二人とも、もう来てたの？　早くない？」
「わたしは今さっき来たばっかりだよー」

藍香は白地に青い花柄キャミソールワンピースにストレッチデニムのクロップドパンツ、ショートソックスとスニーカーな出で立ち。実穂は薄いピンクのお嬢様系でバルーンハーフスリーブのエンパイヤワンピースにサンダル。レースの付いたリボンなど乗っけている。

朔耶は何となくバルティアに貰った帝都の街服、黒のフリルギャザーワンピースにニーソという組み合わせの上からダークレッドのロングカーディガンを羽織っていた。三人でワイワイとお喋りしながら街へ繰り出した朔耶達はウィンドウショッピング等を楽しんだ。

何故か工具屋で道具に魅入る朔耶に実穂と藍香が二人して苦笑したり、朔耶の服のブランドが分からないという実穂の追求を誤魔化したり。クレープを頬張りながら『これも使えるなぁ』と観光事業に美味しい手軽な食べ物の導入を閃くなど、楽しくて充実した時間が過ぎていく。

スーパーの電気売り場を歩いている時、実穂が二人の裾をちょいちょいと引っぱって店の外に出るよう促した。

「どうしたの、実穂？」

「ん～、何かつけられてるみたい」

「え」

人通りの多い出口から公園に向かって歩く最中、朔耶は神社の精霊に確認を取ってみる。

『分かる？』

ショウショウ　ヒトガオオスギルナ　シカシ　サキホドカラツネニコチラヲウカガウケハイヲ　イクツカカンジラレタ

精霊が感知した限り、どうやら常に朔耶達の様子を窺っている気配が複数人居るらしいと分かった。三人で少し緊張した面持ちになりながら公園に入った所で、バタバタと近付いて来る複数の足音。

『迎撃準備だけしておいて』

ココロエタ

三人が寄り添うように立ち止まると、八人ほどの集団に囲まれた。といっても周囲をグルリと囲んでいるのではなく、八人が一塊になって朔耶達の前に集まっている状態だ。

「ちょ……、何よこの子達」

「あ～、西崎君のＦＣの子達だねー」

見た感じでは何れも一学年から二学年下の後輩達のようで、全員

女の子だった。代表らしき女の子が口を開く。

「都築先輩、ちょっと顔貸してくれませんか」

「あたしに何か用？」

自然と二人を守るように半歩前に出ていた朔耶は静かにそう返す。朔耶から何か得体の知れない威圧感を感じ取った代表の女の子は一瞬言いよどむ。

「……ここじゃ話せないんで、ちょっと向こうまで来てください」

ふむ、と少し考えて見せた朔耶は『いいよ』と言って応じる事にした。

「朔ちゃん……」

「ちょっと行ってくるね」

朔耶は心配げに服の袖を抓んでくる藍香に大丈夫だよーと微笑み掛けると、ぞろぞろ公園の奥に向かって移動を始めた集団の後に付いていく。その間、実穂はボイスレコーダーとデジタルカメラで一部始終を記録し捲っていた。

その瞳には朔耶の身に何かあれば只では済まさないぞという光が宿っている。

公園の奥にある林に囲まれた開けた場所で、朔耶は彼女達と向かい合う。

「それで？」
「都築先輩、西崎君のことどう思ってますか」
朔耶の問いに、先程の代表の子が質問した。やはり西崎の事かと、朔耶は内心溜め息を吐きつつも思っているままを答える。
「別にどうだとも？　ちょっとおませな後輩の子、かな？」
その返答に女の子達はヒソヒソと何事かを相談しあい、やがて結論が出たのか全員が顔を上げて誰が中心ともなく自分達の想いと決断を朔耶に告げた。
「西崎君と付き合ってあげてください！」
「お願いします！」
「彼、本気なんです！」
「……はぃ？」
彼女達曰く、朔耶に告白した日から西崎は授業中もずっと上の空でボンヤリしていて、偶に切なげな瞳で一点を見つめていると思えば、視線の先には朔耶の姿。学校に居る間は朔耶の姿を目で追っているか、教室でボンヤリしているかという状態らしい。
「恋煩いってやつ？」
ファンクラブとしては何とか元の爽やか青年に戻って欲しくて色々と動いてはみたものの、西崎は彼女等の催しや誘いに殆ど興味を示さず、このまま今の姿を見ているのは忍びない。いっそ好きな人と付き合う事ができれば元の爽やか青年に戻るのではないか。そんな結論に至ったという。

「だから……これは、あたし達の最後の手段なんです」
「付き合う振りダケでいいんです」
「いや、あのねぇ……」
朔耶は困ったように頭を掻きながらそんな無慈悲な要求には応えられないと拒否すると、彼女達にもっと積極的に自分の為に動きなさいと助言する。
「そんなに彼の事を振り向かせたいならもっと女を磨いて自分の心でアタックしなさい。只のミーハーなら新しいアイドルでも見つけなさい。他人の人生に夢見るより自分の人生を優先なさい！」
がーっと捲くし立てて立ち去ろうとする朔耶に女の子達は回り込んで通せんぼすると、先程までの切実さや悲壮感を消し去って不穏な事を口にし始めた。
「卒業するまででいいんですよ、先輩も無事に卒業したいでしょう？」
「来年までそんなに長く無いんだし、ちょっとの間恋人のふりするだけじゃないですか」
「あたし等、知り合いにちょっとヤバイ男の子達もいるんですよ」
その瞬間、朔耶の手が不用意な事を口走った女の子の首に伸びた。
「もういっぺん言ってごらん？」
「！っ」
それは死の記憶とでもいおうか、朔耶が身に纏っている黒い服は

帝国の城の地下で第十三代皇帝エイディアスを葬った時に着ていた服であり、その時に浴びた血は洗い流したとはいえ、力と生に執着した命の残り香は魔力の原液レベルで深く染み付いているのだ。

こちらの世界で精霊を使役する朔耶は主を守ろうとする精霊の力によって、こちらでは馴染みの薄い魔力に包まれている。

朔耶の怒りによる行為に、迎撃準備をしていた精霊が集中する魔力を咄嗟に開放した結果、服に染み付いたソレが魔力に乗って周囲に溢れ出す。朔耶によって滅ぼされた命の断末魔が、死の気配となって彼女達を包み込んだ。

精霊によって一時的に動きを封じられていた為、本能で逃げ出す事も出来ず顔色を失ってただ硬直する。朔耶に首を掴まれている子は恐怖で失神寸前だった。

「あれ？　ちょっとあんた達、大丈夫？」

様子がおかしい事に気付いた朔耶はとりあえず怒りを治めて彼女達を案ずる。

「ひぅ……ご、ごめ……ごめんなさい」

「脅したのは　ほんきじゃなかったんです……」

「ゆ、ゆるしてくださいー……ほんとは……男の知り合いなんていませんー」

とうとう全員泣き出してしまった。朔耶は別の意味で頭を抱えたくなるのだった。

「あーあーあー……」

「朔耶ちゃん、何したの？」

「あたしは無実よ……」

結局、この後は公園のベンチで後輩の女の子達を宥めながら、西崎の事でも自分の気持ちとしっかり向き合うよう、藍香や実穂も交えて懇々と説教半分に話をして帰らせた。朔耶達が三人で公園を出る頃にはすっかり夕方になってしまっていた。

「今日はこれで解散かな～」
「そうだねー、ちょっとトラブルもあったけど面白かったねー」
「ちょっと所じゃないんだけどなぁ」

駅までの道程、最後にトラブルもあったが久し振りに三人で遊べた事を喜びあった朔耶達は――

「また三人で遊ぼうね」

手を振り合いながら約束をすると、其々帰宅の途に付くのだった。

57話：孤児院の娘

「今から行くのか？」
「うん」

まだ薄暗く肌寒い空気の漂う中、飲みかけの缶コーヒを一口含んで朔耶の後に続く拓朗。この日は幼馴染の拓朗も転移の瞬間に立ち会う為に、早朝から都築宅を訪れていた。

「それじゃ、いってきまーす」
「おうー気をつけてな」

友人二人と街で遊んだ日から四日後、何時もの動き易い格好で自宅の庭先に出た朔耶はオルドリア大陸に転移した。目の前で音もなくスッと消える朔耶に、拓朗は一瞬目を瞠る。

「ほんとに、エフェクトも何もなしに行き成り消えるんだな……」
「帰ってくる時もイキナリだからな、あの円の中には入るなよ？」

兄、重雄（しげお）の指し示す朔耶の立っていた場所には、転移場所の印として円が描かれていた。

「ここは何処かな～？」

まだ薄っすらと星が見える空。朝焼けに輝き始めた金色の雲が遠くに見える。立ち並ぶ街灯の先に白亜のテラスと大きな階段。

『って、お城じゃん！』

コンカイハトクニ　ケハイガツヨカッタ

前回と同じくフレグンスの精霊の気配を目指して転移したらしく、最も気配の強い場所が城周辺だったという。王族の血と盟約を結ぶフレグンスの精霊が城に近い場所にいる事に納得しつつ、朔耶はせっかく城に来たのだからと少し立ち寄って行く事にした。

珍しく城の入り口から現われた朔耶に、衛兵は別の意味で目を丸くするのだった。

『おっはよーレティ、起きてる？』

――サクヤ？　おはようございます、丁度お茶を頂いていたところです――

『そっか、これから祈りの儀式だっけ？』

――はい、最近になってようやくサクヤが重なっていた精霊を感じられるようになりました――

成る程それで城の近くにいたのかと、朔耶はフレグンスの精霊がレティレスティアと交感を繋ぐ日も近いのではと感じた。暫らく城内をぶらぶら歩いて過ごした朔耶は、儀式に向かうレティレスティアが降りてきたので地下神殿まで一緒に行く事にする。

朔耶が一緒という事でいつもゾロゾロ付いて来る護衛の騎士やら神官達には外して貰った。普段なら粛々と神殿に向かうだけの道程を、今日に限ってはお喋りをしながら楽しく歩いて行く。

途中、他愛無い話からイーリスの事が話題に上がり、ああいう真面目で奥手な男には積極的に行かないと進展しないのではという話の流れで『迫っちゃえ』と嗾ける朔耶に『母様にも同じ事を言われました』とレティレスティアは軽く溜め息をついた。

「じ～～」

「もぅ、サクヤったらまた……そんなに見つめないで下さい」

地下で儀式用の薄い衣に着替えたレティレスティアを『ええ身体しとるなぁ』とおっさん目線で見つめる朔耶。恥ずかしがるレティレスティアが抗議するも、その仕草が一々可愛らしい。一度視られる事への羞恥を覚えてしまった為か過剰に反応する。

「そういうとこイーリスに見せたら一発な気がするけどなぁ」

「そんなっ　こ、こんな格好で……無理です、恥ずかしいです」

「ふーむ、イーリスとレティにもレイスとフレイの十分の一でいいから積極性があればなぁ……」

あの二人は人の目がなければあっちでイチャイチャこっちでイチャイチャ、イチャイチャ三昧だと評する朔耶に、レティレスティアも赤くなりながら小さく頷いて同意した。　どうやら城内で二人のイチャイチャを目撃した事があるらしい。

そんな調子でからかい半分、可愛がり半分、楽しみながら地下神

殿までレティレスティアを送った朔耶は、そこで別れて地上に向う。今日もカースティア観光事業関連で色々と飛び回る予定であった。

「う～ん、なんか遣り甲斐があるというか、気持ちが充実してくるなぁ」

カースティアに飛ぶ前にしておかなくてはならない事を思い出し、朔耶は王宮区画にある兵舎に向かった。合同訓練中の近衛騎士団と聖騎士団の集団を見つけたので、彼等の中にイーリスの姿を探して訓練場の外から様子を窺う。

「あ、いたいた」

三人一組で模擬戦をしているグループの中に、団長、副団長クラスで構成された集団があり、その中で訓練用の槍を豪快且つ繊細に振り回しているイーリスの姿。回転運動から突きに変化すると、そこから相手の武器を絡め取るような繊細な槍捌きで攻め立てる。

対戦相手の聖騎士団長も盾を駆使して必死に捌いていた。そうして暫らく攻防が続いていたが、訓練終了を告げる鐘の音を合図に両者は動きを止めた。聖騎士団長が息をつきながらイーリスに声を掛ける。

「今日は何時ものキレがありませんでしたね」

「いや、そちらの腕も上がっているという事でしょう」

互いに息を整えながら聖騎士団長とそんな言葉を交わすイーリス。兜を脱いだ聖騎士団長は頬に張り付いた金髪を梳きながら額の汗を拭った。フューリ・テレシア聖騎士団長。聖騎士団の中では近衛騎

士団長イーリスと唯一まともに打ち合える腕を持つ女性騎士である。

「随分と腕を上げた事を実感しますよ、私もうかうかしていられません」

少し彫りの深い美しいというよりも凛々しい顔立ちをしたフューリ団長は、イーリス団長の言葉に敬意と喜びの念が籠もった澄んだ青い瞳を向けて微笑んだ。

「イーリス～」

そこへ小さく手を振りながらやって来る朔耶。甲冑を着けた大勢の騎士達が居並ぶ足場の悪い訓練場を、泥の塊を避けながらちょこまか歩いて来る小柄な姿は、まるで子犬のように見えた。

近衛騎士団は少なからず朔耶と行動を共にしたりと交流も盛んだったので『おーサクヤ様だ』とか『相変わらず小さいな』などの声が囁かれては和んでいたが、聖騎士団の騎士達は殆ど面識が無かった為、噂に聞く”黒髪の戦女神”の登場で緊張した空気に包まれた。

「サクヤ殿、どうなされました？」

「うん、ちょっとイーリスに進言する事があったの」

この場合、朔耶の方が立場的には上なので『進言』と表現するのは不適切なのだが、朔耶は心情的に自分にとってよく分からない騎士団のやり方に口出しする事になるので、そういう表現を使った。

訝しむイーリスに、朔耶は弟の言った『仕事を任せられる優秀な信頼のおける部下の養成』を伝える。

「イーリスが忙しすぎるのは何でもかんでも自分で背負い込んでるせいだと思うのよね」
「否定はしませんが、しかし重要な仕事ですので……」
「だから、その重要な仕事を任せられる部下を養成する事から始めましょうって話よ」
「……しかし、それは」

イーリスが考えているであろう事を先読みして『別にサボる為に部下を使えって言ってる訳じゃないよ』と差し込むと、一瞬ハッとした表情をみせる。朔耶は成る程これは真面目の塊だと、弟の読みの冴えに感心した。そうして決め手の口説き文句を告げる。

「もうちょっと、部下の事を信頼してあげたら？」
「っ！」

朔耶の一言に愕然とした表情で立ち尽くすイーリス。実際には部下を信頼していない、などということは無いのだが、真面目で責任感の強いイーリスだからこそ『私は部下を信頼していなかったのか！』と目から鱗が落ちたらしい衝撃を受けていた。

「そうですね……将来の事を考えれば、部下のそういう方面の能力を鍛える事も必要でした」

進言を真摯に受け止めるイーリスに、朔耶はこれはこれで今度は部下の養成にかまけてレティレスティアと会う時間が取れなくなるのではとの危惧を抱く。なのでレティレスティアの話題も少し振っておく事にした。

「レティって結構胸おっきいよね、肌も白くて綺麗だし」
「ぶふっ！　い、いきなり何を……！」

団長としての在り方に対する口添えに深く感銘を受けていた所へ唐突な話題転換、しかも王族をネタに性的な意味合いを含む身体的特徴についてなど、通常なら不敬の謗りを受けるようなあり得ない話題の振り方にイーリスは声を詰まらせた。

「ゴホンッ　サクヤ殿には、もう少し慎みを持って頂きたい」

「ふ～～ん」

ぐぐっと眼を覗き込むように顔を寄せる朔耶に、たじろいで身を引くイーリス。朔耶の黒い瞳に見つめられると胸の内を見透かされるような気分になって落ち着かないのだ。先程の朔耶の言葉に思わず想像してしまった事を見咎められるような気がして眼を逸らす。

そんなイーリスからひょいと視線をずらした朔耶は、後ろに立っていた女性騎士に声を掛けた。

「イーリスと打ち合えるなんて、凄いね」

「え……い、いえ！　勿体無いお言葉です」

フューリはまさか声を掛けて貰えるとは思っていなかったので、慌てて背筋を伸ばすと聖騎士団長として応対した。

精霊神殿に属する聖騎士団は王国騎士団と同格だが、近衛騎士団と同じく指揮系統が独立しており、精霊神殿の意向が尊重されるので王権も無理な介入は出来ない特殊な立場にある騎士団である。

精霊の力を精霊の如く振るう朔耶は精霊神殿にとっても崇め称えるに値する象徴的存在であり、精霊術を駆使して戦う聖騎士達からすれば、まさに憧れの対象でもあった。

ちなみにレティレスティアが個人的に聖騎士団を動かせるのも、レティレスティアの精霊術の才による神殿内の地位によるものだ。それ故にアルサレナも聖騎士団を割と自由に動かす事が出来るが、カイゼル王は思いのままにとはいかない仕組みになっている。

「さて……それじゃあ、あたしもう行くね」

二歩、三歩と下がってイーリス達から距離を取ると、魔力のオーラを纏いながら漆黒の翼を噴出する。どよめきが上がる訓練場に癒しの光が溢れた。合同訓練で酷使された騎士達の身体が癒されていく。

「以上、特別査察官からの特別サービスでした～」

そんな台詞を残して朔耶は王都の空へと舞い上がり、カースティアを目指して飛んでいった。近衛騎士達は相変わらず気さくで面白い方だなぁと談笑しあい、聖騎士達は噂に聞いていた癒しの光を受けられた事と、その強力な治癒力に感動していた。

「ポンプ、ちゃんと届いてるかなぁ」

三時間半程でカースティアに到着した朔耶は騎士団本部の屋上に着陸すると、一階の受付を目指して建物内をてくてく歩く。途中、

擦れ違う職員や騎士達が不意を突くように現われた朔耶に表情を凍らせて壁際に避けるなど、相も変わらずな畏怖っぷりを見せたが。

『なんか慣れたね～』

サクヤガ　サキニ　ナレテシマッタカ

騎士達が朔耶に慣れる前に、朔耶の方が騎士達の反応に慣れてしまった。　しかし、そのお蔭で朔耶はより自然体な在り方で周囲と接するようになり、騎士達の畏怖の払拭を早める事になるのだが、この時はそんな流れに気付く由もなかったのであった。

「ようサクヤ、相変わらず急に現われるな」

「ガリウス、まだ受付に座ってんの？」

「ああ、ここの担当が復帰するから俺は今日までだぜ。　そういや王都から荷物が届いてたぞ、なんだありゃ？」

そう言ってガリウスはフロアの隅に積んである荷物を指した。朔耶は荷物の中身を確認すると、早速ポンプの設置に取りかかろうと周囲を見渡す。

『ガリウスはどうせ面倒くさがって手伝わないだろうし、受付係りだから外せないよね』

半分木製とはいえ手押しポンプは結構な重さがある。一人で作業をするには少々辛いので誰か暇そうにしている者はいないかと、朔耶は作業の助手に引っぱっていけそうな人材を探し、適当に目を付けた騎士に声を掛けた。

「そこの人、ちょっと手伝って」

「！　じ、自分がで……ありますか？」
「そうだけど、忙しいの？」
「あ、いえっ　その、自分は別に、特にあの」

目をつけられてしまった事に狼狽しながらも拒否する事も出来ずオタオタしている騎士。ガリウスがニヤニヤと軽薄な笑みを向けると馬鹿にされたと思ったのか、覚悟を決めたように表情を引き締めて姿勢を正した。

「お、お手伝いさせて頂きます！」
「そう、よろしくねー」

設置したポンプで水を汲み上げ、具合を確かめる。おっかなびっくり作業を手伝った騎士は、最初こそやたらと緊張していたが、朔耶の気さくさに触れて作業が終わる頃にはすっかり打ち解けていた。

「いいですね、これ」
「便利でしょ？　他の人達にも使い方教えてあげてね」

本部内には湯浴み場もあるのでシャワーも設置させようかと検討しながら、朔耶は一階のロビーに戻った。出て行くときは緊張で顔色を失っていた騎士が朔耶と談笑しながら戻って来た事で、他の職員や騎士達は一様に目を丸くさせていた。

「終わったか？　観光事業の下準備報告が上がってんだが、……聞くか？」

「当然っ！　で、どんな感じ？」

ガリウスは朔耶が作業で出掛けている間に纏めた観光事業関連の書類を揃えて報告する。観光事業で必要な人員の手配や施設建設に向けた下準備の進行具合など、フランとスラントが集めて提出した書類を読み上げた。

「ふんふん……施設とかの建設は上手くいってるみたいだけど、人員の確保が不安定なわけね」

「まあ、儲かるかどうか分からねぇ内からほいほい協力してくれる奴も、そうはいねぇからな」

「そうだね、その辺りはあたしが直接回って話しつけてみるよ」

「ほぅ、特別査察官殿自ら足を運ぶってか。今更だがお前、本当に変わってんなぁ」

からかうような口調で面白そうにそんな事をいうガリウスに、朔耶はルティレイフィアがガリウスの働きぶりに関して評価していた事を思い出した。

「アンタもしっかり協力してよね、ルティも期待してたよ？」

「ルティ……？　って、まさか……」

書類をひらひらさせていた手を止めて怪訝な表情になるガリウス。

「ルティレイフィア第二王女様」

「げっ、姫さん帰国してんのか！」

あからさまに嫌そうな顔をするガリウスに、今度は朔耶が怪訝な表情になった。

ガリウス曰く、顔を合わせば手合わせを挑まれ、剣術も中々に達者な腕前でありながら魔術と精霊術も絡めてくる上に、実戦慣れした剣の軌道で来るから本気（マジ）で手強い。視界に入ると必ず絡まれるのだそうだ。

「絶対囮に使った事を根に持たれてるぜ……」

どうにも苦手なんだよなぁとガリウスは眉を顰めながら頭を掻いた。

「なんというツンデレ」
「なんだそりゃ？」
「こっちの話よ」

朔耶はガリウスがルティレイフィアに苦手意識を持っている事にも驚いたが、それよりもルティレイフィアの写真を見て特徴を伝えただけでツンデレを見抜いた実兄に驚いた。

ルティレイフィアに対する朔耶のイメージでは、ガリウスの前に出れば普段の勇ましさや凛々しさが影を潜めて”もじもじ乙女モード”になると思っていたからだ。別の意味でガンガン攻めていたとは思いも寄らない朔耶だった。

「屋形船作戦にも第二案が必要ね……」

昼からは釣り船観光事業に参加を表明してくれている、或いは保留している宿屋に挨拶をして回る。釣り船と連動して客の釣った魚を料理にして食事に出す、他の客達との作り分けや不測の事態に対応できる体制作りが必要になる為、コストも掛かる。

経営に余裕があり、貴族も利用できるそれなりに立派な宿でなくてはならないという条件もそこそこに厳しい。協力してくれる宿にはサクヤ式コンロの提供を予定している事を伝えると、交渉にもかなり前向きな姿勢を向けてくるようになった。

「お噂は予々（かねがね）聞き及んでおりました、実際にとある貴族邸にて拝見した事もありますが、あれは良いものです」

宿屋を回り終えると、次は湖周辺の集落に住む漁師達の中で協力してくれる人の家々を回って話を聞いておく。夜の操業も可能か、何日連続で仕事が出来るか等、給金の交渉なども行う。

「俺たちゃあ雨だろうが夜だろうが船は出せるけんどもよ、漁より儲からにゃあやってられんけんね」

船長、料理人、補佐の構成は大体家族の多い漁師の家で家族単位での契約となる。そうして漁師達にも協力を取り付けていった。

「ふう〜、これで宿と人員の確保は大体揃ったかなー」

夕方頃、交渉を終えて湖から街に戻って来た朔耶が本部に入ると、受け付け前で何やら問答が起きていた。

受け付けにガリウスの姿は無く、代わりに見知らぬ職員が詰めている。朔耶は昼前にガリウスから聞いた『ここの担当が復帰する』という言葉を思い出して納得した。

その担当職員は受け付けカウンターに縋りつく街の住人らしき人物に困った表情を向けながら何かを諭していた。一体何を揉めているのだろうかと、朔耶は受け付けに近付いて耳を傾ける。

「お願いします、もう明日の食べ物もないんです」
「ですから、こっちにも資金に余裕がないんですよ」

「ねえ、どうしたの？」

朔耶が声を掛けると、担当職員は声を掛けてきた相手に気付いて顔を引き攣らせた。助けを求めるように周囲の職員や騎士達へ視線を向けるも、皆忙しく動き回っており、誰もその視線に気付かない。その実、気付かない振りをしているのだが。

「ねえ……、ど・う・し・た・の？　って聞いてるんだけど」

もう一度ゆっくり訪ねる朔耶。一瞬ざわりとフロア内の喧騒が静まり返る。受け付け担当職員は復帰早々に見舞われたトラブルと災難に泣きそうな思いで説明を始めた。

「じ、実は此方の方が、騎士団に資金援助をもひっ……申し出られられれますして……」

舌が回ってないようだが内容は至ってシンプルだった為、問題なく伝わった。

見ると魔術士のローブを出来るところまで地味にした一見ボロを纏っているかのような装いの、年の頃は二十歳過ぎに見える灰色の髪に薄い翠眼の女性が、縋る勢いでカウンターにへばり付いていた。

「えーと、貴女のお名前は？」

「は、はい？　えと……」

「あたしは朔耶。　一応ここの関係者だから、あたしが話を聞くよ」

「はぁ……あの、わたしはこの街で孤児院を預かっているアマレストと言います」

彼女の話によると、彼女自身もその孤児院の出身者であり、院長先生の見よう見まねで覚えた拙い（つたな）魔術を駆使しながら孤児院の子達とも一緒に石売りなどで生計を立てていたが、院長が高齢で亡くなってからは孤児院の経営も上手く行かず資金は減る一方。

そして和平会談襲撃事件が起きた夜に押し入って来た武装集団によって院内を荒らされ、院長が残してくれた財産が略奪されてからは経営も完全に立ち行かなくなり、明日食べる食料にも事欠く有り様だという。

「あの襲撃事件の後、両親を失った孤児達が大勢うちへ預けられに来ました。　でも……」

孤児院への援助は殆どなく、このままではあの子達を飢え死にさせてしまうとアマレストは必死に窮状を訴えた。

「ふーむ、その孤児院の規模と状態は？」

朔耶が職員に訊ねる。以前、ガリウスが意見書の束を整理していた時にちらっと見かけた中で、孤児院の資金援助を乞う内容のモノがあった事を、朔耶はうっすら覚えていた。

職員は書類を片っ端から引っくり返しながら『記録の担当が～』とか『要望申請書の控えが～』と唸っている。どうやら把握出来ていないらしい。

「じゃあ直接見に行きましょうか。アマレストさん、案内してくれる？」

「あ……、はい」

何故かがっくりと落ち込んだ様子でとぼとぼと騎士団本部を出るアマレストに付いてカースティアの街に出る朔耶。すっかり日も沈み、建物の窓明かりや商店の入り口に付けられているランタンが街の通りを僅かに照らし出している。

繁華街となる通りは人通りも多く賑やかだが、アマレスト達の孤児院は裏通りの外れにある郊外ぎりぎりの静かな区画にある。朔耶は後で食料の買い出しに行く事になるかもしれないと、市場の位置を確認しておいた。実はあまり街中を歩き回った事がないのだ。

アマレストは心中、失意と悲嘆に暮れていた。何とか子供達を援けて貰おうと怖いのを我慢して騎士団本部に直接陳情に行き、受け付けの職員相手に粘ってみたモノの、これでは結局体よく追い返されたようなものだ。

職員の対応から見て、この異国風の少女は高い身分にあるフレグンス貴族の令嬢か、或いは騎士団本部の偉い人に関係する人物なの

だろう。この少女が孤児院の現状を見て何処まで口添えしてくれるかは分からないが、少しでも情けを掛けて貰えるよう精霊に祈る。

『みんな、ごめんね……』

暗い裏通りの外れにポツンと建つ、窓に明かりさえ灯っていない孤児院の外観が見えて来る。今日も子供達に食事をさせてやる事は出来そうにない。『いよいよとなれば、もうこの身を売るしかない』と、アマレストは悲壮な覚悟と向き合っていた。

「ここです……」
「え、ここっ？」

アマレストが立ち止まり、見上げる視線で示した建物。そこそこ大きな古い屋敷。だが入り口の扉は壊れ、明かりも灯されず真っ暗で静まり返っており、壁に開いた大きな穴が継ぎ接ぎの布で塞がれている。朔耶は只の廃屋かと思っていたので面食らった。

「な、なんか、人の気配がしないんだけど……」
「押し入ってきた人達に調度品やランプの類まで盗まれてしまって……、わたしや子供達は地下に隠れていたので無事でしたけど」

廃墟のような建物を哀しげに見詰めながら説明するアマレスト。朔耶は意識の糸を伸ばして建物内を探り、奥の方に固まっている十数人の存在を確認した。

『これは……建物の修繕費くらいまでなら支援しようと思ったけど、そんな状況じゃないね』
ナカノモノ　ミナ　ウエテオルナ

「ん？　サクヤじゃねえか、何やってんだこんな所で」

自分の工房から何処まで支援出来るかと考えていた朔耶によく知った声が掛かる。通りの向こうからカンテラをぶら下げたガリウスが部下の面長騎士、クランドルと連れ立って歩いて来た。

「ガリウスこそ、何してんのよ？」

「見回りだ見回り、今くらいが一番治安悪いんだ」

「最近、市場で盗みを働く者がこの辺りによく逃げ込むと聞いてな……」

クランドルの言葉に一瞬表情を青褪めさせたアマレストは、彼等の目が朔耶に向いていた事で内心安堵の溜め息を付いた。その朔耶はガリウス達に孤児院の窮状を話し、援助の申請について訊ねていた。

「申請はしてるんだがな、ホラ、この前サクヤに持たせた書類の束があったろ？」

「ああ、あの中にあったんだ？」

結果はこの現状を見たまま、予想通りだとばかりにガリウスは肩を竦めて見せる。そうして朔耶と騎士が話し込む様子を窺っていたアマレストに声を掛けた。

「つーわけだからよ、騎士団からの資金援助は無理なんだわ」

「あ、はい……そうでしたか……」

「まあ、俺んちが門閥なんで俺が個人的にって手もあるんだが……」

「えっ！　ほ、本当ですか」

ぱっと顔を上げて縋るような瞳を向けるアマレスト。ガリウスの実家は中流以下の貴族達が上流貴族への窓口として交流を持ちたがる門戸の広い事で有名な門閥ジャバール家である。

騎士としてのガリウス個人が稼ぐ資産など微々たるモノだが、ジャバール家の次男として実家に金の工面を要求すれば相当な金額が用意されるだろう。ガリウス自身は普段、思うところあって実家からの送金を拒否しているのだが。

「それなりの代償は、貰う事になるぜ……？」

そう言ってアマレストに近付いたガリウスは、彼女の顎を指でくいっと持ち上げる。思わず首を竦めたアマレストだったが、その言葉の意味を理解してゆっくり肩の力を抜くと、涙を浮かべながら覚悟を決めたように頷いた。

子供達の為だからと自分に言い聞かせ、震えながら眼を閉じる。既にそういう方面での覚悟とも向かい合っていた身だ、門閥貴族からの援助が受けられるなら孤児院も安泰。アマレストは二十三年間、貧しくとも清楚に守り抜いた貞操を捧げようとしていた。

「うわーー！　待て待て！　冗談だ冗談っ　冗談に決まってるだろーーが！」

突然、恐怖の叫びをあげながら後退っていくガリウスに、アマレストはキョトンとした表情を向けた。そして後方から放たれる威圧感と周囲を照らし出す青白い光に振り返ると、巨大な漆黒の翼に雷光を纏わせた悪魔が浮いていた。

カカカアァアアン！

「ぎゃーーーっ」
「……アホだな」

漆黒の翼から放たれた雷に打たれる不良騎士の悲鳴とその部下の呟きを聞きながら、アマレストはバッタリ倒れて意識を手放した。

「んん……」

孤児院の中庭にあるベンチに横たわっていたアマレストは、香ばしい匂いに空腹が刺激されて目を覚ました。子供達のキャッキャッとはしゃぐ嬉しそうな声に身体を起こして周囲を見渡す。

「あ！　お姉ちゃん先生が起きたよー！」
「姉ちゃん先生ーっ　先生もシチュー食べなよ！」
「すっごく美味しいんだよ！　一杯あるんだ！」

皆口々にそう言いながら肉や野菜の浮く白っぽいシチューが入った容器を持ってきてくれた。アマレストは現状を理解できず、まだボンヤリした意識のまま孤児院の食堂には置いてなかった筈の容器を受け取り、中のシチューを一口食べた。

「美味しい……」
「そりゃ良かったわ」

ふと顔を上げると、黒髪の少女がニコニコと微笑みながらそこに立っていた。その黒い瞳を見るうち、意識を失う直前の記憶が蘇え

ったアマレストは見る見る青褪めていく。

「あ……、あわわっ　悪魔が！　黒い悪魔が！」

「大丈夫、大丈夫だってば！　ごめんね、脅かして」

朔耶はアマレストを宥め賺して落ち着かせると、先程見たものはガリウスの性質の悪い冗談にお仕置きをしただけで（ヤキを入れたとも言う）危険は無いと説明する。さっきのアレが朔耶だと聞いてもピンと来ないアマレストは、曖昧な返事を返していた。そこへ――

「おーい、保存食の追加分買って来たぞーったく……騎士に買い物行かせるか？　フツー」

「魔力石と日用品はこれで十分だろう」

食料と日用品を大量に抱えたガリウスとクランドルが買い出しから帰って来た。わーっと群がってきた子供達が荷物を受け取っては院内に運び込んでいく。『ごくろうさまー』と二人を労った朔耶は改めてアマレストと向かい合った。

「一応、今回はあたしの方から支援しとくけど、あなた達も自力でどうにか出来るよう考えてみてね？」

「あの……サクヤさん、貴女は一体……」

訊い掛けようとするアマレストよりも先に、何かに気付いた朔耶は慌てて立ち上がると中庭中央へ駆けて行く。

「あーこらこらっ　そこに手掛けちゃダメ！　お鍋が引っ繰り返っちゃう！」

朔耶に追い回されながら楽しそうにはしゃぐ元気な子供達を見て

感謝の気持ちを抱きながらも、アマレストは朔耶がどういう立場の人間なのかよく分からないでいた。騎士達と親しく話し、彼等を従える事の出来る権力を持つ。

何か怖いモノも喚び出せるようだなどと思い出してはプルプル首をふるアマレストの所に首を回しながらやって来たガリウスは、ベンチに腰掛けて一息つくと朔耶がフレグンスの高官である事を話した。

「サクヤは王室特別査察官様だよ」
「王室……！」

「ふぅ～まったく子供の相手は疲れるわ……む？　ガリウスまた彼女にちょっかい出してないでしょうね」
「疲れててソレ所じゃねー」

追いかけっこから戻って来た朔耶はベンチに並んで座るアマレストとガリウスを見てジロリと睨みを利かせるが、ガリウスは裏通りの外れにある孤児院と街の中央通り市場とを何度も買い出し往復させられてへとへとになっていた。

ベンチから立ち上がったアマレストは、『計算通り！』とか言っている朔耶の元に歩み寄ると、膝を付いて感謝の意を表した。

「わっ　ちょっと、そんな事しなくていいから頭上げてよ」
「いえ、数々の御無礼を御赦し下さい。王室由縁の方からの孤児院への援助、感謝致します」
「だーから、そんな畏まらなくてもいいんだってばっ　大体この支援はあたしの自費だから王室云々関係ないし」

ゆっくり顔を上げるアマレストに、朔耶は一つだけ忠告しておく。

「アマレスト達が自力でやっていけるようあたしも協力するからさ、だからさっきみたいに簡単に諦めて身体許すような事はしないで」

「サクヤ、さま……」

「ね？」

じわっと涙を浮かべたアマレストはそっと朔耶に抱き締められて感情があふれた。

今までずっと苦労の連続で我慢して耐えて、こんな風に優しくされたのは前院長先生に以外では初めての経験だった。数年ぶりに心からの安堵を得たアマレストは、朔耶の胸に顔を埋めて子供のように泣いていた。

アマレストの灰色にくすんだ銀髪を優しく撫でてやる朔耶。ベンチに座って一部始終を見ていたガリウスは、徐に腕組みをすると難しい顔をして唸る。

「なによ？」

「お前……同性嗜好って本当だったのか？」

この日、騎士団本部の食堂では自分が如何にノーマルであるかを懇々と説き続ける朔耶と、もう勘弁してくれと泣きが入っているガリウスの姿が夜遅くまで見られたとか。

「聞きなさい、だからね？　あたしにそういうつもりが無くても相手の行動が誤解を招いた結果、それを見ていた人が――」

「……頼むから、マジでもう寝かせてくれー」

58話：準備完了

孤児院の一件以来、朔耶は度々アマレストの元を訪れては街の噂話に耳を傾けたり、相談事で話し合ったりしつつ親睦を深め、釣り船の備品を作る合間に孤児院で使うランプ等も作りながら、カースティアと王都の工房を行き来する日々が続いていた。

派遣騎士団本部に詰める騎士や職員達も、数日おきに現われる朔耶の出現パターンに慣れてきたらしく『ああ、今日はいらっしゃる日か』という具合に、朔耶のいる日は訓練や街の見回りに力が入る『特別強化日』となっていた。

怪我をしても強力な癒しの光で疲労ごと治してくれるので、少しばかり無理をしても大丈夫という訳である。朔耶が一般民のアマレストと親しく接している姿も、騎士達から過剰な畏怖を拭い去る一因になっていた。

そうして朔耶がカースティア観光事業の計画に着手してから約一ヶ月、三艘分の船外機や備品も整い、釣り船乗り場などの施設も完成し、従業員と料金設定、仕事内容の打ち合わせも終わったその日の昼頃、工房にやってきた朔耶にティルファから釣り船一号艇が完成したとの報が届いた。

「よしゃーー！　ティルファに飛ぶわよーー！」

朔耶はすぐさま一艘分の船外機や備品を工房の倉庫から引っ張り出すと、特別に用意して貰った四頭立ての貨物用竜籠に積み込んだ。荷物が多かったので王都の王国騎士団にも手伝って貰いながら必要な分を揃える。

「よしっと、これで全部かな。　忘れ物もなし！」
「いよいよサクヤ様が提唱なされたカースティアの事業が始まるんですね」
「うん、上手く行くよう祈っててね」
「勿論ですよ、サクヤ様ならきっと上手く行きますよ」

王国騎士団の若い騎士から激励を受けつつ、朔耶は竜籠に乗ってティルファに飛んだ。

「ドマックさーん！」
「来たか、早かったな……っておいおい！　ここに降りるのかっ」

夕方頃にはティルファ上空へ到着し、直接ドマックの造船所脇に竜籠を着陸させた朔耶は作業員達と一緒に荷物を降ろしながら船外機と備品の取り付けについて話し合った。

「全部取り付けて完成した状態で持っていこうと思ってるの」
「ふむ、それなら航行実験は今夜にでも行う事になるのう」

ドマックは船を竜籠に積み込む為のクレーンも手配するよう部下に言い付けると、早速船外機の取り付け作業に掛かり、朔耶も船に上がってランプや魔力石コンロなどの備品を設置していった。

釣り船に装着した船外機は推力実験の時のように手で直接動かすのではなく、船の中央部分で一段高くなった見張り台のような操舵室から操作する事になる。甲板下を通る操舵室と船外機を繋いだ機構の調整も必要だ。

「一応釣り道具も持ってきてるから、航行実験の時は使ってみてね」
「ふふん、新型機械船で夜釣りとは悪くない。　中々面白そうじゃ」

そんな話をしながら作業を進めていた所に、クレーンの手配に出かけていた作業員が声を掛けて来る。

「サクヤさーん、表の竜達がなんか鳴いてますよー？」
「あ！　いっけないっ　忘れてた！」

ひらりと船から飛び降りた朔耶は造船所脇に着陸した後ほったらかしにされていた竜達の所に走った。

「ごめんごめん！　厩舎に移すの忘れてたよ」

ぐでっと地面に伏せていた竜達から抗議の四重奏が響く。

「キューキュー」
「キョー……」
「ピー……」
「キュルー……」

お腹空いたーと鳴いている竜達を連れてティルファの厩舎に移動した朔耶は、厩舎の係りの人に竜達の餌を頼んだ。
早い段階から街灯を導入していたティルファだが、湖の畔にまで

は設置されていないので厩舎のある湖周辺は夜になるとかなり暗い。
その暗闇から四頭の竜を従えて現われた朔耶に厩舎の世話係りは飛び上がる勢いで驚いていたが、竜達がお腹を鳴らすのを聞いて直ぐに餌用の肉塊を用意してくれた。喉を鳴らして齧り付く竜達。

「明日はかなり長く飛んで貰う事になると思うから、今日はゆっくり休んでてね？」

朔耶の言葉に、四重奏で返事を返す竜達であった。

「戻ったか、お前さんに客が来とるぞ」
「え？」

朔耶が造船所に戻ると丁度、船を湖に降ろす所だった。作業員達と慎重にロープを引きながら来客を告げるドマックが顎鬚で指した場所に、見覚えのある魔術士姿の男が立っている。朔耶がその姿に気付くと、目を細めて微笑を向けてきた。

「こんばんは、フレグンスの精霊女神殿」
「ブラハミルトさん……。こんばんは、どうしたんですか？」

また通り名が更新されたかと密かに嘆きつつも挨拶を返した朔耶は、態々訪ねてきた用向きをたずねる。

「いやなに、私も貴女の船に興味があったのでね」
「そうなんですか？　じゃあこれから航行実験なので一緒に乗ります？」

「勿論ですよ」

朔耶はブラハミルトにもライフジャケットを身に着けるように言って渡すと、造船所内の湖面に下ろされた釣り船一号艇に乗り込んだ。メンバーは朔耶とドマック、ブラハミルトの他、作業員二人とブラハミルトの警護で付いてきた衛士二人である。

船のランプを灯して明かりを確保すると、朔耶は操舵室に上がって船外機を起動する。造船所の建物の陰から湖に出ると、何処で聞きつけたのか数十人の見物人が集まっていた。

衝撃のサクヤ式機械船推進器がお披露目された日以後、ドマックが朔耶発注の船を建造し始めた時から機械船前提のフォルムを持つこの船には皆が注目していたのだ。全長七メートル、幅三・五メートル程の船体がゆっくりと桟橋付近に近付いていく。

十二個もの魔力石ランプを使ったカンテラやランタンが煌々と船の周辺まで照らし出し、近くで見ようと集まって来た見物人達の姿を浮かび上がらせる。その彼等に向かって、朔耶は折畳んだライフジャケットの一着を投げ込んだ。

「うわっ！」
「な、なんだっ」

イキナリ何かモコモコした四角い塊を投げ付けられて思わず飛び退く見物人達、逃げ遅れた一人に直撃した。
ぶつけられた若い発明研究家らしき彼は思わずそれを受け止めた。
そして、なんじゃこりゃとその物体を広げて観察する。

「そこのあなた！　それを身に着けて。　こんな風に羽織って前を

結ぶだけだから、簡単でしょ？」

朔耶は自分達が着用しているライフジャケットを指して使い方を教えた。若い発明研究家はなんだかよく分からないが、サクヤ式の衣服らしいという事でとりあえず身に着けてみる。その間に朔耶は船を桟橋に寄せた。

「身に着けた？　じゃあ、船に乗って」

「えっ！」

驚愕した表情で固まる若い発明研究家。朔耶は八人乗りの船なので一人分枠が余っていたから、抽選で彼方が当たったのだと説明して乗船許可を出した。かなりの不意打ちで強引な抽選だが、お蔭で混乱が起きなかったとも言える。

言葉の意味を理解した彼は狂喜乱舞しながら喜んで釣り船一号艇に乗り込んだ。彼の近くにいて素早い身のこなしを見せた研究家達は、何故あの時ライフジャケットを避けてしまったのだぁ！　と頭を抱えて悔しがっていた。

「それじゃあ適当に真ん中辺りまで進めたらゆっくり流すから、釣りの具合も確かめてみてね」

独特の駆動音を響かせ、釣り船一号艇は湖の中央付近へと走り出す。適当な位置で船を止めると、想定している客の人数である五人でとりあえず釣り糸を垂れてみた。

作業員と衛士に混じってブラハミルトも釣りを楽しみ、ドマックは調理の準備を始めた。幸運な発明研究家は船に設置されている魔力石ランプや、フレグンスでも一部の者しか所持していない魔力石コンロの観察に夢中のようだ。

朔耶は舵の具合や操舵室からの視界を確かめ、安全性に問題は無いかとチェックしていた。

そうして一時間程の夜釣りを楽しむと、航行に問題無しという事で朔耶は船を岸へ向けた。ちなみに釣れた魚は小さいのが一匹、普段から非番の時によく釣りを嗜んでいる衛士が釣り上げた。他は軒並みボウズであった。

船に設置してある魔力石コンロの性能と使い勝手の良さに惚れ込んだドマックが是非売ってくれと頼み込んできたので、朔耶もこれから色々お世話になるドマックさんにならばと了承し、後日厨房用のコンロを届けるようレイスに話を通しておくと約束した。

岸に到着すると手配しておいた大型クレーンが運ばれて来ており、ドマック造船所の作業員とクレーンを動かすティルファの陸軍に当たる都軍兵が集まって船を竜籠に載せる作業に移った。都軍兵が協力してくれたのはブラハミルトの計らいである。

ティルファの大型クレーンは木製の門型で大人数が両側からロープを引いて対象物を吊り上げる造りになっていて、一方向のみだが吊り上げたまま移動する事も出来る。湖から台車に載せて引き上げ

た船をクレーンで吊り上げると、竜籠に載せてしっかり固定した。

「カースティアにも建築作業用のクレーンがある筈ですから、それを使うといいでしょう」

「うん、ありがとねブラハミルトさん」

作業を終えて一息ついた朔耶は、ブラハミルトから一緒に夕飯でもどうかと誘われて中央研究塔に招かれた。ドマック造船所の皆も招待され、一階中央のステージを会場にちょっとした立食パーティのような食事会になっていた。

皆でワイワイと食事を摂りながら、朔耶はブラハミルトと色々な話をした。帝国の事や王国の事、ヨールテスとキトの事。時折、朔耶の世界の話を聞こうと話題に混ぜてきたりもするが、朔耶が話さない以上は訊ねようとしないブラハミルトの紳士に徹している態度は、朔耶から『信用しても良い相手』という好感を得ていた。

「なるほど、帝国ではそんな動きがありましたか」

朔耶はエイディアス帝を討った事については暈かしながら、帝国内での政変について『裏で帝国を牛耳っていた者が討たれたから』と明かし、裏の支配者が”発掘品”による不老不死の研究をしていた事なども話す。

”発掘品”の調査、研究についてはティルファでも盛んに行われていた為、帝国に出向いてまで未だ取り憑かれる者の絶えない不老不死に関する研究に手を出していたティルファの研究者も少なから

ずいたのだろうと、ブラハミルトは表情を落として語った。

キトの動きについては帝国政変からサムズ動乱前も後も相変わらずだが、朔耶から傭兵団陣地での出来事を聞いたブラハミルトは、ヨールテスが暗躍している事について警戒は怠らない方が良いと自身へも含めて警告を口にした。

夕食が終わるとドマック造船所の面々は其々自分達の寝座へと帰り、朔耶は塔に部屋を用意されたので一晩お世話になる事にした。皆と造船所に戻るつもりでいた朔耶だったが、前回来訪時に我侭を聞いてもらった経緯があるので素直に泊まっていく事を選んだのだ。

案内された部屋で薄着になってベッドに転がった朔耶は、夕食の席で聞いたブラハミルトの警告について考える。

『ヨールテスかぁ……、今頃何処で何してるんだろうね』

タシカニ　アヤツカラハ　ヒトニアラザル　ケハイヲカンジタ

また何処かで色々『儲け話』でも企んでいるのかもしれないねーなどと、割と呑気な事を思いつつも『重なる者』としての勘が、何時か雌雄を決するような事になる時が来るかもしれないと告げている事に、朔耶は漠然とした不安を感じる。

ワレト　クロガ　イツデモソバニ　ツイテオル　シンパイハ　イラヌ

『うん……ありがとね。　でも”クロ”って略し方はどうかと思うわ』

犬じゃないんだからとツッコミを入れる朔耶だったが、当の本精霊は割と気に入ったらしい念を返していた。

翌早朝、まだ明け方とも言えない暗いうちから起き出した朔耶は、身嗜みを整えると竜の厩舎に向かう。

船を湖に降ろす作業を行える時間までにはカースティアに到着したいと考えた朔耶は、ドマックやブラハミルト達になるべく早く出発する事を昨日の内に伝えておいた。

朔耶が竜達を伴ってやって来ると、竜籠の周囲では篝火が焚かれてドマック造船所の皆が見送りに集まっていた。

「もう行くのか？」

「うん、今日中には向こうの湖に降ろしておきたいからね」

「そうか……まあ、あまり焦らないよう着実にな。　気をつけて行けよ？」

「は～い」

子供っぽい返事を笑顔で返され、ドマックは孫を見るかのように目尻に皺を作った。

竜籠が竜と繋がれて出発の準備が整うと朔耶も籠上の船に乗り込んだ。ティルファからカースティアまでの距離は王都フレグンスと帝都クラティシカ並に離れているので、今からぶっ通しで飛び続けても到着するのは夕方頃かと予測する。

「それじゃあドマックさん、残り二艘と例の船の事もよろしくね」

「おう、任せておけ」

手を振る作業員に朔耶も船上から手を振り返す。釣り船一号艇を積んだ四頭立ての竜籠は、未だ朝陽も見えない夜空に舞い上がると、一路カースティアを目指してティルファを飛び立った。

「ふわわ……もうちょっと寝ておこうかな」

朔耶は積み込んであった毛布に包まると、船室の椅子に凭れて目を閉じた。

カースティアに到着したのは朔耶の予測通り、街が夕日に染まる頃だった。派遣騎士団本部上空を一度旋回してから真新しい観光施設の建物近くに竜籠を着陸させる。

予めティルファからフレグンス、フレグンスからカースティアへと水鏡で連絡がなされており、王室特別査察官殿御到着で駆けつけた騎士達に向かって朔耶は開口一番――

「お腹空いた～～」

「キュー」

「キョー」

「ピ」

「キュル」

竜達と共に空腹コール五重奏を奏でたのだった。

厩舎に竜達を移して餌を与え、騎士達に街の人を雇っても構わないので船を湖に降ろす作業に備えておくようにと準備を指示した朔耶は『ちょっとご飯食べてくる』と言って唐突に消えた。

目の前で忽然と姿が消えた事に驚いた騎士達だったが、『サクヤ様だからなぁ』で納得して課せられた任務の準備作業を開始する。建設作業用のクレーンを用意すると、集まった野次馬から労働者を募った。

「ただいまーっ　ご飯ご飯ー！」
「お帰りを言う間もなくソレかよ」

庭に帰還するなりバタバタとキッチンに駆け込む朔耶に、今日も都築家に入り浸って魔力石の加工アイデアを朔耶の弟”孝文”と練りあっていた近所の幼馴染こと拓朗は呆れたように声を掛けた。

「ほあ？　はふひゃんひへはお？」
「まあな、石の特性も分かったからそろそろ俺も何か作るぜ」
「はひほほふひはん？」
「……とりあえず先にソレ食え」

冷蔵庫にあったソーセージを咥えながらもごもご喋る朔耶と普通に会話を試みた拓朗だったが、流石に翻訳不可能だったのでとっとと食えとばかりに指で押し込む。

「んぐっ！　けほっ……拓ちゃん酷い」
「あ、すまん」

涙目になって抗議するも、もぐもぐ食べながらなのでちっとも罪悪感が湧かない拓朗は苦笑を返した。

「銃みたいな飛び道具にしようかと思ったんだけど、タカ君が反対するんだよな」
「そりゃあね、そんな物持ち込む意味が無いし、争いの元になるだけだと思うよ？」

用意されていた夕飯を食べながら拓朗の作ろうとしている物を聞いた朔耶は、弟の意見に賛成した。銃のように強力で手軽な武器は今の所あの世界に必要ないと意見する。

「そうかなぁ、なんか怪物退治とかそういうのは無いのか？」
「いる所にはいるみたいだけど、魔術と剣でなんとかなってるみたいだし」

向こうの世界では朔耶に銃など必要ないし、誰しもが使えるように量産した場合、必ず悪人の手にも渡る。狩猟に使う弓だって人を射る事が出来るのだ、銃のような便利な武器をゴロツキが手にしたら何が起きるか……という話である。

「サクヤ式で治安悪化！　とか、あたし嫌だよ？」
「ああ、そうか……お前の名前が付くんだったよな」
「それもあるけど、街に住んでる一般の人達は荒事なんて望んでな

いの、平和に暮らしたい人達ばっかりなんだから」
「う……」

拓朗は自分の考えが浅はかだったと謝った。やはり異世界や精霊、剣と魔術などといった話を聞くと強力な現代兵器の持つ力で活躍する場面を思い描いてしまい、その世界で生活する人々の日常という本来なら最も尊く意識しなくてはならない部分への配慮を欠いてしまっていたと。

「まあ、夢見がちな男の子だもんね」
「ははは……」

朔耶のフォローなのか追い討ちなのかよく分からない慰めに曖昧な笑いを返すと、また何か別の物を考えると言って拓朗は自宅へと帰っていった。

夕食で腹ごしらえを終えた朔耶は、明日の祝日も向こうで一日過ごす事を予定しており、釣り船観光の総仕上げをする為に今日は夜中まで向こうで作業をすると言って庭に出た。そうして少し考え込むと、徐に兄を呼ぶ。

「ん？　どうした」
「うん……、ちょっと手伝ってくれる？」

カースティアの湖近くに立てられた観光施設、釣り船乗り場には騎士団に雇われた労働者が集まり、竜籠に積まれて固定されている変わった形をした船を湖に降ろす準備作業が進められていた。

既に日は沈み辺りも暗くなっており、篝火を焚いて明かりの確保をしているが真っ暗な湖面に沿っての作業は困難を予想させた。篝火船も用意しようかと騎士達が話し合っている所に、空から黒い翼を広げて舞い降りてくる黒髪の少女。

どよめきと混乱。騎士達は本部の屋上で何度も目撃するうちに慣れたモノで、うろたえる労働者達を落ち着かせると作業の指示を仰ぐべく朔耶の元に集まってくる。

「はーいっ　下がって下がってー、みんな下がってー」

朔耶は騎士達も含めて周囲の人間を下がらせると、地面に小枝で線を引き始める。なんだろうと覗き込む人々を余所に、長方形を描いた朔耶はその四隅に庭から持ってきた石を置いた。そして魔力のオーラを石に籠め始める。

「みんな絶対この中に入っちゃダメよ？　命に関わるからね」

発光し始めた石を見て頷いた朔耶は、絶対にこの四角に近付かないよう注意を呼びかけると、また忽然と姿を消した。そのまま暫らく、ボンヤリと発光する石の光が薄れていく様子を眺めていた人々は、突如四角の中に現われた物体に仰天した。

四つの車輪をつけたソレは傭兵団が使う装甲馬車のようにも見えたが、御者台が無く、全面が艶のある金属で覆われていて大きな窓があり、前に突き出た顔の様な部分はまるで、甲冑を着けて兜を被

った魔獣のようだった。

その金属車の扉が開いて朔耶が降りて来た事で、二度目の混乱は直ぐに収束した。騎士達は金属車の中にもう一人見える人影を気にしながら朔耶の回りに集まる。

「サクヤ様、これは一体……？」

「ああ、危なくないから大丈夫だよ。ちょっと作業の手伝いに呼んだの」

朔耶が振り返って兄に合図を送ると、ランドクルーザーのエンジンが掛かった。

聞いた事もないような嘶き（いなな）と共に一吠えしたソレは、生き物とは思えないが生き物としか思えないような低い唸り声を上げている。やはり魔獣の類かと、その唸り声と脈動する車体に思わず後退ってしまう騎士達。

さらにその魔獣の眼が強烈な光を放つと、労働者達は一斉に逃げ出しそうになった。至近距離にいた騎士達がその場から動かず、尚且つ光を浴びても無事だった様子を見てどうにか踏み止まったのだ。

「はいはい、噛み付きゃしないから大丈夫よ。　じゃあみんな、船を降ろす作業を始めるわよー！」

浮き足立っている騎士や労働者達に声を張り上げて、朔耶は作業開始を告げた。

此方に転移する前、朔耶はティルファでの作業が夜の暗さで結構

苦労した事を考慮し、何か強力な照明はない物かと考えた。広範囲を明るく照らし出せる工事現場で使うような照明は流石に家の倉庫には置いてなかったので、代わりに兄の車のヘッドライトを使おうと考えた。問題はあまりカースティアから離れた場所に転移してしまうと作業に間に合わなくなってしまう事。

神社の精霊とも相談した結果、正確な座標に転移する方法として特定の物質に強力な魔力を籠め、そこを目印に跳べば行けそうだという結論に至って実行したのだ。

湖に向かって少し地面が傾斜している為、ヘッドライトの光はいい感じに作業現場を照らし出している。まるで昼間のような明かりの下で行われた作業は、労働者達がこの珍しい環境で興奮状態にあった事も関係してか順調に進んでいた。

「おー？　なんだこりゃ、魔獣の類かあ？」
「凄い光だなぁ、これもサクヤちゃんの力なのかな？」

そこへ見回りに出ていたガリウスとフランが、街の人からの通報を受けて様子を見にやって来た。珍しそうにランドクルーザーを観察している。朔耶が関係しているという時点で何も心配はしていなかったようだ。

「あ、いい所に！」
「俺見回り中、用事ならフランが引き受けるぜ」
「えっ？」

朔耶の台詞を聞いてすかさずフランに押し付け、サボろうとするガリウス。朔耶はどのみち観光事業に関する詳しい人事内容を知っ

ている者にしか出来ない用事なので、そのままフランに頼んだ。

「フラン君、観光事業で契約してる船長さん達と宿の主人さん呼んで来てくれる？」

朔耶は今日中に調整を済ませて明日からでも営業を開始したいと思っていた。その為の構想も十四時間に及ぶティルファからの移動中に考えてある。”思い立ったら即、行動”の家訓に従い、練り上げた構想を消化していく。

強力なヘッドライトに照らされた湖の畔で歓声があがった。船が無事、湖に降ろされたのだ。ふわりと宙を舞って船に乗り込んだ朔耶は、船のランプを全て灯すと、操舵室に登って船外機を起動させた。

独特の駆動音を響かせながら帆もオールも無しに動き出す船に、またもどよめきと歓声があがった。朔耶の兄”重雄”も愛車のサンルーフから顔を出して釣り船乗り場の桟橋に向かうサクヤ式機械船、釣り船一号艇の雄姿を感慨深く眺めていた。

フランに連れられてやって来た釣り船観光事業で契約している船長と料理人と補佐、事業提携をする一般宿と貴族用宿の主が釣り船に乗り込み、朔耶の説明を受けながらライフジャケットを身に着ける。

船長には船外機の機能と操作の仕方をレクチャーしつつ、補佐役にも接岸時や航行中、客が釣りを楽しんでいる時の役割を伝える。料理人には魔力石コンロの使い方と、足りない調味料などがあれば申請するよう説明していった。

「あと二人乗れるんだけど、フラン君とガリウスも乗ってみる？あ、ガリウスは見回り中だっけ」
「乗る乗る！」
「見回りはさっき終わったぜ」

フランは興味津々で乗り込み、ガリウスは予想通りのしれっとした態度でフランの後に続いた。ライフジャケットは騎士の甲冑の上からでも何とか身に着ける事は出来たが、見た目が非常に斬新で奇抜な姿となった。ぶっちゃけ、凄く格好悪い。

「これはひどい」

朔耶は鎧の上から着てもそこそこ見られるデザインを考えようと計画するのだった。実際、フル装備の騎士を今の仕様で浮かせられるのかという部分に不安もあった。
車のサンルーフから上半身を出している兄に手を振り、ハイビームの返答を確認してから船長に船を出すよう指示を出す。

一帯を照らしている光が一段と増した時、集まっている人々からまたどよめきが上がったが、騎士達が問題ないと見做している姿を見て危険は無いようだと落ち着き、ちらちらと気にしながらもその光に照らし出されているサクヤ式機械船の見物を続けていた。

「素晴らしい船だ！」

船長は直ぐに船外機の動かし方を覚えてその性能を絶賛。このサ

クヤ式機械船で仕事が出来る事を喜び、釣り船観光事業の成功に向けて尽力する事を誓った。

宿の主人二人は明日にでも王都から届く事になっている魔力石コンロを料理人と一緒になって弄っており、火加減を摘みで調節しては唸るというのを繰り返していた。

補佐役は釣り客の世話をする予行演習として、ガリウスとフランの釣り具を用意し、餌をつけ、網を持って待機する。船周辺の状況や船内の様子に気を配る事も忘れない。

その内ガリウスが大物を釣り上げ、早速調理してみようと料理人がコンロで焼いている所にフランもそこそこの獲物を釣り上げた。

ティルファでは小魚一匹だけだったので煙も少なかったが、二台のコンロを使って焼いた魚の煙は船室に充満するような事も無く排出され、改めて問題なしと判断できた。

「これなら、いけそうだね」

船を乗り場に戻してしっかり係留（けいりゅう）した後、空になった竜籠が放置されている作業開始地点に戻って来た朔耶は見物人達を解散させて労働者に報酬を支払うよう騎士達に指示を出した。竜籠は明日回収する。

騎士達に促されて報酬の受け取りに派遣騎士団本部へとぞろぞろ移動を始める労働者達と街に戻り始める見物人達。彼等の視線の先では未だ強力な光で湖面を照らしている魔獣のような金属車に、召喚主である黒髪の少女が乗り込んでいる所だった。

「上手く行ったようだな」
「うん！　あ……お兄ちゃんも船、乗りたかった？」

船外機を使おうという最初の発案者は兄である。その船関連で態々また此方の世界に連れて来ておいて、照明係りをさせたダケという事を気に掛ける朔耶に、兄はまた次の機会で良いと答えて笑った。

回収した庭の石を足元に置いてシートに凭れた朔耶は、一息付きながら神社の精霊に帰還を呼びかける。

『帰ろ』
ウム

騎士や労働者達の視線の先で、朔耶と謎の人物を乗せた魔獣の金属車が忽然と消え失せたが、今度は混乱やザワメキが起きる事はなかった。

「サクヤ様だからなぁ」

一人の騎士の呟きが、全員の心を代弁した。

59話：商売繁盛？

ほぼ全ての準備が整ったカースティア観光事業の釣り船観光計画は、最終段階に入った。祝日を利用して今日も朝からオルドリア大陸に転移して来た朔耶は、騎士団本部の食堂で釣り船観光のビラを作っていた。

朔耶は此方の文字を書けないので、考えてきた宣伝文を口頭で読み上げてフランがそれをビラの原版となる紙の上に綴っていく。料金や注意事項などは乗り場に掲げる大きな看板に記し、このビラは街中に撒く予定のモノだ。

「うん、いい感じ。後はこれを増やして街中で配ればいい宣伝になるね」

「これ、結構字数が多いから複製するの大変だよ？」

「ちょっと反則するから大丈夫、フラン君は釣り船乗り場に行って営業開始の準備をしておいて。看板も忘れずにね？」

そう言って指示を出した朔耶は、出来上がったビラの原版を持って一旦元の世界へと帰還する。慣れたとはいえ、たった今までテーブル一つ挟んで会話を交していた相手が行き成り消え失せるのは心臓に悪い。

「せめて消える前に何か予兆があればなぁ」

若干高めの心拍数を意識しながら、フランは利用料金やその他の注意事項が詳しく記された看板を抱えて釣り船乗り場へと向かった。途中、ふと会話を振り返って呟く。

「反則ってなんだろう……？」

自宅庭に帰還した朔耶は待っていた兄の車で父親の工場に向かうと、事務所に置いてある印刷機を使ってビラを複製した。二百枚程度だがカースティアの街で撒くには十分な量だ。折り返し、自宅に戻って庭に出る。

「俺は今日はアッシー君か」

「うぁ……古」

妹のかいしんのいちげきに沈む兄を放置して朔耶はとっととオルドリア大陸へと転移した。

壁の穴や扉の修繕が済んですっかり見違えた孤児院。その中庭に舞い降りた朔耶は子供達を纏わり付かせながら、院内で内職をしていたアマレストを訪ねてビラ配りの仕事を依頼した。

騎士達に配らせるよりアマレストと子供達が配った方が威圧感もなくスムーズに浸透すると考えた。孤児院への収入にもなる。喜んで引き受けるアマレストにビラ百五十枚を渡して街中に配って貰うよう頼んだ朔耶は、残りを持って騎士団本部へと飛んだ。

騎士団本部内にも受け付け前の壁に掲示物として貼り出し、三十枚ほど受け付けカウンター脇に置いて行く。そして事業提携している宿を訪れると、宿内にも目立つ所に貼って貰った。

宿の従業員もある程度は事業内容を把握していたので、ビラについて客に訊ねられた場合に利用を勧めて貰えるよう頼んでおく。

そしてこの日の昼、遂に釣り船観光の営業が開始された。

釣り好きな人の興味と、機械船の珍しさで乗り場には十数人の見物客が集まっていたが、最初の客はこの日の為に態々ティルファから足を運んでいた研究者だった。彼等は釣りよりも機械船に乗る事を目的にしていたので、魚は一匹も釣れなかったようだ。

夕方までに二回営業し、二回目の客は釣り好きの老人と集まっていた見物客等が同船した。そのまま特に問題も無く、釣りや簡単な調理を楽しんだ老人と見物客は満足気な表情で戻って来た。これから夜の部まで船長以下乗組員は休憩に入る。

「どう、夜もやれそう？」

「勿論ですよ、まったく問題ありませんな」

朔耶に仕事の具合を訊ねられた船長達は、今までやってきた漁の仕事に比べればトンでもなく楽で、且つ誇りを持てる仕事だと言って、船外機の魔力石補給交換作業を行いながら笑って答えた。

夜の部は宿でビラを見て話を聞いたバーリッカムを目指す観光客が、珍しいサクヤ式機械船を記念に体験していこうと申し込みを入れていた。彼等のような旅行客から口コミ効果が狙える。

「うん、これなら大丈夫だよね」

順調に動き始めた釣り船観光事業。朔耶は乗り場の従業員達に声を掛けると、後を任せて帰還した。

「ただいまー」
「お帰り、朔姉ちょっとこっち来てくれ」

帰宅するなり弟からお呼びが掛かったので朔耶が居間に行ってみると、新聞紙が敷き詰められた畳の上で後輪の辺りに色々と改造を施されたキックボードが鎮座していた。

「これって？」
「モーターの小型化が出来たんで車輪一体型の魔力石モーター搭載キックボード試作を作って失敗」
「すごーって、失敗？」
「乗ってみ」

弟に促されて朔耶は居間から廊下に持ち出したキックボードに乗ってみる。起動スイッチはハンドルの所に付いた自転車の変速レバーを改造したモノだ。とりあえずスイッチオン。

コロ……コロ……コロ……

「遅っ！」
「パワー不足でそんな感じなんだよ、ちなみに俺とか重兄が乗ると

ピクリともしない」
「ダメじゃん」

全面的に見直す必要があると言って、弟は居間に転がった。今日は一日コレの製作をやっていたらしく、朔耶が帰ってくる前に失敗は確定していたのだが、折角だから如何に失敗かを実体験させてあげようと処分せずに待っていたそうだ。

「なんでまた態々そんな力抜けるような事するかな……」

燃え尽きて伸びている弟と、廊下を進んでいるのが気のせいに感じるほど遅い”車輪一体型魔力石モーター搭載キックボード試作”の『コロ……コロ……』という走行音で、朔耶も大いに脱力した。

それから数日、夢内異世界観光でカースティアの釣り船観光事業の様子を確かめたりしつつ学生生活を送っていた朔耶は、テレビで工作キットを紹介しているのを見て閃き、弟に相談を持ち掛けた。

「いいんじゃないか？　ユニット単品で売り出しても買う層が偏るだろうし、そういう所から色々発想が生まれるからな」

朔耶が考えたのは魔力石モーターとサクヤ式送風機のファンを使って簡単に組み立てられる小型扇風機のようなモノの商品化。『サクヤ式送風機組み立てキット』の売り出しだ。

予め簡単な仕組みの魔力石モーターで動く箱型送風機を作り、それを分解して部品単位で発注、一セット幾らで売る。弟は新しい魔力石モーターの開発を進める傍ら、朔耶のアイデアを半日で形にしてくれた。

『サクヤ式送風機組み立てキット』
反発力ユニットｘ４：朔耶手作り
サクヤ式風車ｘ１：発注
軸ｘ２：発注
固定式歯車（魔力石モーター部分）ｘ１：発注
ベルトｘ１：発注
ベルト式原動車（魔力石モーター部分）ｘ１：発注
ベルト式従動車（サクヤ式風車部分）ｘ１：発注
送風機ケースｘ１：発注
格子裏蓋Ｘｘ１：発注
可動式羽付き表蓋ｘ１：発注

銀貨八枚で販売。

「多分、儲けは朔姉の手作り分だけになると思うけど、ユニットの値段自体が大きいから十分じゃないかな」
「ありがと～、流石タカ君。　ところでコレ何？」

朔耶は弟が弄っている色んな部品の中にあった筒を覗き込みながら訊ねた。筒の中にも何か細かい線やら溝やらが走っている。

「筒型魔力石モーターの試作品、まだちゃんと回るか分からないんだけどな」
「へぇ～新型モーターって筒型なのかぁ」
「ちなみにその筒、拓君がレールガン作ろうとしてたやつな」
「拓ちゃんの武器が元ネタか」

拓朗が多重圧縮反発力を使ったレールガンの構想を持ち掛けたとき、既にユニット設置用の溝と金具の入った筒が出来上がっていた

のだが、弟の反対と朔耶の駄目押しでお流れになった。

弟が失敗に終わった魔力石モーター搭載型キックボード試作を解体しに工場へ足を運んだ時、放置してあったこの筒を見つけた事が切っ掛けになって筒型モーターを思いついた。

「要は回転軸に固定した歯車の径を縮めて縦に並べたようなもんなんだけど、面で回すからパワーが出易いんだ」

「ほうほう」

「これにギアボックスの組み合わせで市販の電動スクーター並のパワーは得られると思うね」

「へぇー」

朔耶の分かってるのやら分かってないのやらな相槌は気にせず、弟は得意気に新型モーターの特徴について説明を続けていた。実際の所、弟が理論で説明した部分を、朔耶はイメージで理解していた。相槌が適当な感じになるのは頭の中にホワホワッとイメージを浮かべているからなのだ。

「つーわけで、魔力石の追加分あと四袋くらい頼む」

「おっけー、明日にでも学校が終わったら送風機キットの部品発注に行くから、その時買ってくるよ」

翌日、学校から帰って来た朔耶は早速オルドリア大陸へ転移すると、王都で馴染みの工房に出向いてパーツの発注を行う。最初は二十セット分程で様子を見て、沢山売れそうなら大量注文もありえる。

反発力ユニット以外のパーツ生産は全て任せる旨を伝えて工房主を喜ばせた。

その後、街の一般区に下りて石売りから袋詰めの魔力石を買い込んだ朔耶は人目に付かない裏路地に入って帰還した。

「たっだいまー。タカ君、買ってきたよー」
「ああ、そこ置いといて」
「上手く行きそう？」

相変わらず新聞紙を敷いた居間で作業をしている弟に、膝立ちになった朔耶がずりずりと座布団で足場を作りながら這って行く。

「ほい」
「ん」

弟に筒の先を渡されたので受け取る朔耶。長さ四十センチ、直径二十センチ程の筒は中に三十個もの反発力ユニットと十枚の円盤が付いた軸が組み込まれているので、中々ずっしりとした重みがあった。弟が筒の外に突き出ている突起を操作すると、ブーンという音と共に振動が発生する。

「おおうっ　これ、中で回ってる？」
「かなりの高速でな、明日工場でギアボックスと組み合わせて具合みる予定」

構造上、この筒型魔力石モーター試作機は逆回転が出来ないそうだが、回転数をコントロールする反発力ユニットの可動式ソケットを改良するか、筒の直径を太くする事で解決できる問題らしい。

朔耶と弟は何処までなら此方で作ったモノを向こうに持ち込んでも問題無いかを話し合い、一般的な馬車よりも早く走れるような乗り物は自重する方向で纏めた。後はティルファの研究家たちに頑張

って貰う。

「そろそろ新しい写真たのむぞー」
「はいはい、行ってくるねー」

週末、朔耶は何時ものように自宅庭から世界を渡ると、朝からアクレイア家を訪ねてレイス達を驚かせた。レイスを待つ間、身支度の素早さに定評のあるフレイが応接間に通された朔耶のお相手を務め、写真撮影等を交えて暫し談笑に興じる。

「お待たせしました、今日はどうしました？」
「ごめんねー、朝から急に来ちゃって」

朔耶は以前コースティン家の晩餐会にて自身の売り込みに来た中流貴族の貴公子達数人から工房運営に援助の申し出を受け、それら全ての管理をレイスに任せている。

彼等の中から一般区に店を構えている者を選び出し、朔耶の工房から売り出す予定の商品を店に置いて貰う交渉がしたいのだと、レイスに説明した。

「成る程、商品の売り込みですか。しかし、サクヤの作る道具は希少価値が高過ぎますからね……」
「今度のはコンロみたいな実用品じゃなくて、趣味とか娯楽品とか

その辺りのモノだよ」

値段も魔力石コンロの高い方と安い方の中間で、庶民が手軽に買えるような代物ではないが、少し金持ちの商人や貴族になら十分手が届く範囲に設定している。実用性も、あれば面白くて便利だが無くても別に困らない程度のモノである。

ちょっと贅沢な玩具くらいの認識で丁度良いと、『サクヤ式送風機組み立てキット』の概要を説明されたレイスは、中々興味深い試みだと感心していた。

レイスには宮廷魔術士長としての仕事があるので交渉に同行は出来ないが、代わりにフレイを一日付かせると言って一旦席を立ったレイスは、朔耶の工房支援を約束した中流貴族の中から一般区に店舗を持つ家をリストアップしてフレイにメモを持たせた。

「ありがとね、レイス」
「いえいえ、上手く行く事を祈ってますよ」
「フレイも今日は久し振りに一日よろしくね？」
「はいっ　サクヤ様！」

クゥー……

腹の虫を鳴かせてしまったフレイが真っ赤になって俯き、それをみて和む朔耶。とりあえず朝食を済ませてから一日を始めましょうという事で、既に済ませてある朔耶も朝食に御呼ばれしてデザート等を楽しんだ。

「さて、まずはあの家からかな？」
「モラントン家ですね、工房と店を経営する事業家貴族ですが、日和見主義的であまり信用のおけない相手です」
金払いは良いのでちょくちょく資金を出させているという。
「な、なんか言葉に棘がない？」
「元はアクレイア家の派閥に居た家なんですよ。コースティン家の甘言に惑わされてあっさり寝返った挙句――」
当時アクレイア家の使用人だったフレイに目をつけ、フレイの身分が低いのをいい事に度々ちょっかいを掛けて来たらしい。
「あー……まあ、穏便にね」
「勿論です、サクヤ様の邪魔になるような事は致しません」
帝国による朔耶の拉致とフエルト卿亡命事件で混乱があった後、レイスが宮廷魔術士長に就いた事もあり、以前アクレイア家の派閥からコースティン家に組した貴族家は軒並みルィバンス伯に詫びを入れに来ており、モラントン家も例に漏れず頭を下げに来た経緯があった。
「旦那様、商談をしたいと仰られるお客様が見えておりますが」
予定に無い来客を告げる執事に、サーバンス・モラントンは眉を上げて考える。近頃は店の主力商品であった魔術式の触媒も売れ行

きが安定せず、全体的に業績が落ちている。

工房の視察以外特に予定も無かったので、良い儲け話でもあればと会う事にしたサーバンスは応接間に通すよう言い付けると、自身も適当に身嗜みを整えて部屋に向かった。そして客人の姿を見た瞬間硬直する。

「さ、さ、サクヤ様にフィレイヤ殿」
「アポ無しで急にゴメンナサイね？」
「ご無沙汰しておりました」
「いえいえいえっ　ようこそ御出でくださいました！」

サーバンスは慌てながら執事に最高級のお茶をと指示を出して朔耶達の対面に座る。執事は朔耶とフレイの来訪から既に最高級のお茶の準備をしていたので滞りなく客人と主人にお茶を用意した。

「そ、それで、今日はまたどのような？」
「えーとね……」

店の棚を貸して貰う交渉を始める朔耶は、最初から売り上げに対する店側の取り分を決定値で出した。示した金額は銅貨換算で二百四十枚の商品が一つ売れるごとに取り分銅貨四十枚。棚を貸して販売するだけなので店側に元手の費用は一切掛からない。

サーバンスは考える。サクヤ式の商品なら売り上げは期待出来る上に店の宣伝にもなるだろう、だが『二百枚と四十枚では些か儲けに差が有りすぎるのではないか？』と。何時もの商売人感覚で考えてしまった。

「そうですなぁ……私どもといたしましては、せめて七十枚は頂き

たいかと……」

「あら、ザンネン。　フレイ、次行きましょう」

朔耶に儲けようという意識は少なく、しかし赤字は困るというわけでかなり良心的な値段に設定している。よって、面倒な値段交渉など持ち掛けられれば『じゃあいいです』で帰るつもりだったのだ。

「はい、サクヤ様。次は――」

「え？　えええー！　ちょ、ちょっとお待ちを！」

さっさと席を立とうとする朔耶達を慌てて引きとめるサーバンス。よくよく考えてみればサクヤ式が商品として店に並ぶのはサクヤ式が世に知れ渡ってからコレが初めての事になる。

折角自分の所へ売り込みに来たサクヤ式考案者の機嫌を損ねて余所に持って行かれるような事になれば、モラントン家は貴族の間でも商人の間でもいい物笑いの種だ。儲けがどうの等と考えている場合ではなかった。

「その条件で結構です！　その条件でいいですから是非うちの店をご利用下さい！」

モラントン家が一般区に持つ店舗の数は四軒、それほど多くの店を必要としないのでそれで十分とした朔耶は『サクヤ式送風機組み立てキット』の肝となる反発力ユニットを大量生産する為に工房へと向かった。

途中、パーツを発注してある馴染みの工房から出来上がっている分を受け取り、フレイには組み立てキットを纏める作業を手伝って貰う。朔耶が作った反発力ユニットと其々のパーツを箱詰めしていくのだ。

全て手作業なので、将来生産数が増えるようであればこの作業専用の人員も雇う方向で考えていた。結局この日は夜まで工房に籠もって反発力ユニットの作製に勤しんだ。

「ふぅ～～コレだけ作れば暫らくは持つね」
「お疲れさまでした、サクヤ様」
「フレイもお疲れー」

朔耶がフレイの淹れてくれたお茶を飲みながら一息ついていた所に、レイスが工房を訪ねて来た。何時かのような絡み合いは無かったので入り口で固まる事もなく、朔耶もにこやかに迎える。

「やほーレイス、仕事終わったの？」
「ええ、最近は戦後処理も終わって仕事にも余裕が出てきましたよ」
「そかー」

そりゃ良い事だーと椅子の背凭れに首を預けてダラダラしている朔耶に、レイスはちょっとした朗報を持ってきたという。

「サクヤの屋敷がもう直ぐ完成しそうですよ」
「……そういやそんなのもあったっけなぁ」
「は、反応薄いですね」
「だーって、今あたし向こうに住んでるんだもん」

確かに、とレイスは苦笑した。此方の世界に朔耶の家が建っても、

朔耶が此方に来るのは数日起きに二日や三日程度、その間何時でも元の世界の自宅に戻る事が出来るのだ。

「んー、でも折角建てて貰ったのに悪いよねー……。　いっそ家族旅行とかで別荘にしちゃおうか、すっごい贅沢だけど」

屋敷の維持に最低限の使用人は住まわせておく必要があるので、殆ど主人の居ない屋敷に使用人と衛兵だけが住人として常駐する事になる。そしてある日突然、何処からともなく現われ、何時の間にか居なくなる女主人と家族達。

「どんな幽霊屋敷だ」

朔耶は自分でツッコミをいれた。

「じゃあ、あたし今日は帰るから。またねーフレイ」
「はい、また何かあった時はお手伝いしますね」

今日は帰還する事にした朔耶は、お土産に『サクヤ式送風機組み立てキット』を一つ持って自宅庭へと帰還した。レイスが家に部屋を用意すると言ってくれたが、お約束に遭遇しそうな気配をぎゅんぎゅん感じたので遠慮しておいた。

「たっだいまー」

ちなみに、お土産の『サクヤ式送風機組み立てキット』は拓朗にあげたのだった。

翌日――

朔耶は弟と共に父親の工場に向かい、”筒型魔力石モーター搭載スクーター”の試運転に参加した。

「うっわ、これ凄い！」

「中々のモンだろ？　無人でなら時速２３キロまでは確認したぞ」

予想以上の加速力とパワーで工場内を走り回る筒型搭載スクーター。自転車でも結構な速度で漕がなければ追い付けないかもしれない程の速度に、朔耶は暫しドライブを楽しんだ。

タイヤを木製の車輪に革と布を巻いて鉄輪で補強したモノに交換し、椅子も木製のフレームに布と革を巻きつけ、車体カバーも革と木製の複合型のモノを装着して色々と調節を行うと、重くなった部分で若干速度は落ちたものの十分な走りを保っていた。

「よし、こんなもんだろ……完成だ」

「やたー！　タカ君凄い！　偉い！」

「まーなー」

朔耶のヨイショに満更でもなく喜んでみせた弟は、ふと疑問顔になると今更思い出したように訊ねた。

「そういや、これ何に使うんだ？　朔姉は向こうで乗り物とか必要

ないんだろ？」
「うん、ちょっと頑張ってる寂しがり屋さんにプレゼントしようかなって」
「？」

流石に路上で乗って帰る訳にも行かなかったので、朔耶は弟の自転車を、弟は自転車カバーを掛けた筒型搭載スクーターを其々押しながら歩いて帰宅の途につき、家に着いた頃にはすっかり日も暮れていた。

「お兄ちゃん喚んだほうが早かったかなぁ」
「微妙に字が違ってる気がするんだが……」

朔耶は言葉のイントネーションから真意を読み取る弟に感心しつつ、スクーターを庭へと運ばせて自分はお風呂に入るのだった。

「んじゃ、ちょっくら行ってきます」
「今からか？」
「うん、昼間だと人が多いし忙しそうだからね」

転移の準備に入った朔耶は精霊に呼びかける。

『帝都のお城に狙って跳べる？』
ワカラヌガ　クロノケハイガ　ツヨクノコルバショナラバ　スデニカクニンシテイル

とりあえず帝国を狙って転移してみようという事で、朔耶はスクーターに跨った状態でオルドリア大陸に転移した。

「だわっ！　真っ暗？」
イマ　アカリヲダソウ

精霊の光が宙に現われて周囲を照らし出すと、朔耶は思わず息を呑んだ。ガランとした広い空間にひんやりと湿った空気。円形の広間の奥に崩れた壇が見える。嘗て巨大な発掘品と一体化したエイディアス帝が潜んでいた皇帝の間だった。

「ここかぁ～」

確かに、この場所にならば黒の精霊の気配が強く残っていても不思議は無いと、朔耶は少し冷えた気がする肩を擦りながら出口を探した。元の世界へ戻される直前にバルティアの呼ぶ声が聞えた方向を思い出し、其方へと向かう。

奥まった場所から広い廊下が伸びており、突き当たりの天井に巨大な穴が縦穴となって口を開いている。真下の床は一段高く、明らかに他の部分とは材質の違う造りになっていた。

「まさかエレベーターがあったとは……」

エレベーターと繋がる部屋もやはり隠し部屋で、半分地下に埋まっていた。朔耶がこの城に居た頃は二階や三階付近の隠し部屋を転々としていたので、意識の糸レーダーにも引っ掛からなかったようだ。

地下の広間から、恐らくは古代魔法文明とやらの遺産であろうエレベーターを使って帝都の城一階まで上がってきた朔耶は、意識の

糸を伸ばして周囲を探る。

「ん、居た居た」

二階の廊下にソレらしき反応があったので、朔耶はスクーターを押しながら階段に向かった。階段にはキックボード用なのか、段差を埋めたスロープが設けられていたのでそこを使って上階へ移動する。

今は城内の伝令も移動にキックボードを使っている筈なので、階段もその仕様に対応したのだろうなぁ等と分析しながら朔耶が廊下に出ようとすると。

シャーーーシャシャシャシャーーーーカラカラカラカラカラカラ

キックボードに乗った集団が走り抜けて行った。見ると、赤い光沢のあるジャケットを羽織って銀髪を靡かせながら黒塗りの特別仕様なキックボードを走らせる皇帝を先頭に、伝令らしき軽装の兵が数人ノーマルなキックボードで後に続いていた。

風を切って疾風のように廊下を駆ける。就寝前の一走りが日課となっているバルティアは、今日も走りの心を理解した伝令達を引き連れて下階層の廊下を疾走していた。

「ふ、まだまだ余の走りには追いつけんようだ」

最近はコーナーワークにも光るモノが見え始めた伝令達だったが、まだまだバルティアのドリフトには及ばない。直線でも軽量化と特殊な油で車輪の回転をよくしてあるバルティアのキックボードにはついて行くのがやっとなのだ。

キュルルルルルルルルルルル――

「ん？　何の音だ？」

背後から聞える奇妙な音を訝しむバルティアは、次いで伝令達から上がった驚愕の声に何事かと振り返った。

「何で着てんのよ！」

そんなツッコミをいれて抜き去っていく黒髪の少女。バルティアは一瞬、自分は夢でも見ているのかと呆けたように眼を瞠ったが、風に舞う甘い香りが鼻腔を擽った。覚えのあるシャンプーの香りに、コレは夢ではないと”覚醒”する。

「さ、サクヤ！」

待ち焦がれた少女が目の前に！　とばかりに廊下を蹴ってキックボードを加速させるバルティアだったが、独特の駆動音を響かせながら走る朔耶の二輪車は、廊下を蹴るでもなく、魔術を使うでもなく、朔耶を座らせたままどんどんバルティアから遠ざかっていく。

「うおおおサクヤーー！」

バルティアが叫ぶ。恥ずかしくなってきた朔耶は急ブレーキを掛

けた。

「お、おおおおおー！」

全力全開で床を蹴り、限界速度で走っていたバルティアは急停車を試みたがブレーキが甘く、朔耶の横を風のように駆け抜けた後、無理にターンしようとして後輪を滑らせながら車体の向きを変えたが前輪も滑って見事に転んだ。

「バル！」

「さ、サクヤ……」

「もう！　ジャケット破れたらどうしてくれんのよっ」

「……それは、あんまりだ」

一部始終を見ていた伝令達は切ない二人に涙した。

「サクヤちゃーん、久し振りー！」

「ヴィヴィアンさんも元気そうだね」

悲劇の事故現場で明るい挨拶を交わす朔耶とアネット。皇帝補佐官として日々バルティアに振り回されたり振り回したりしているアネットは城内に持つ情報網も広く、朔耶が城の一階に現われた時点で報告を受けて執務室から下りて来ていたのだ。

「にしても、あんなに楽しそうな陛下も久し振りだわ」

「つーか、何時まであたしのジャケット着てるんだか」

バルティアは朔耶に貰った筒型魔力石モーター搭載スクーターを早速乗り回している。キックボードより五月蝿いのでやはり近所迷惑かもしれない。

「まあ、何処にいるのか直ぐに分かって便利だわね」

そんな事を話している二人の所へバルティアが戻って来た。

「これは良いな。最高だ」

「そりゃ良うござんした。あたしのジャケット返してよ」

「うーむ、気に入っていたのだがな」

朔耶に返却を迫られてし致し方あるまいとジャケットを脱ぐバルティア。今回スクーターのプレゼントが大きかったのでゴネる事も出来ず、如何にもしぶしぶ感を漂わせていた。

「まったく、これ女物だよ？」

「サクヤの物なら何でもかまわぬ、常にお前を感じて居たいのだ」

「むぅ……」

相も変わらずな好意のストレートっぷりに、朔耶も久し振りだったせいか少しやり難そうに俯き加減で唸った。毎日コレを浴びていた頃は只の挨拶のように流せていたのだが、バルティアには何処か幼馴染みにも通ずる妙な親しみ易さがあった。

皇帝というグラントゥルモス帝国で最高位に在り、物腰も立ち振る舞いも確かに支配者のソレでありながら、何処か庶民的な空気を感じさせる。同じ目線で話せる相手だからこそ、その言葉は胸の奥

までスルリと入り込む事があるのだ。

「今度男物の上着でも見繕ってきてあげるわよ」

誤魔化すように言いながら返してもらったジャケットを羽織る朔耶。二ヶ月ぶりに袖を通したジャケットには先程まで着ていたバルティアの体温と、香油か何か香水のような匂いが染み付いていた。

『あ、バルの匂いだ……』

何となく落ち着かないような気恥ずかしい気分になってソワソワする朔耶に気付いたバルティアは、ニヤリと笑みを浮かべると意識する朔耶を煽るようにその隙を突付く。まるでベッドの中で囁くが如く、低く落ち着いた甘い声色を浴びせた。

「どうした？　余に包まれているような気分になったか？」

「っ……」

途端に赤面する朔耶。この反応は珍しいとアネットも目を丸くした。何処か追い詰められたようにオドオドと落ち着かない様子の朔耶を見て、これは遂に陛下も報われる時が来たかなと成り行きを見守るアネット。

赤くなって俯いていた朔耶は、何か決意を感じさせるように小さく気合を入れると、顔を上げて正面に立つバルティアに潤んだ瞳を向けた。そして震えるように見つめながら吐息と共に紡がれる短い要求。

「バル……ぎゅって、して」

一瞬硬直するバルティア。深呼吸並に呼吸が荒くなったかと思うと、要求に応えるべく両手を広げて一歩踏み出す。その眼は朔耶の唇と瞳と髪を行ったり来たりしている。そうしてこの小さな愛しい少女を腕に抱こうとした瞬間――

「百年後くらいにでも」

そう言い残して消えた。空気を抱くが如く空振りするバルティア。静まり返る廊下。張り詰めた空気に身動き出来ない伝令達。空振りした体勢のまま動かないバルティアに、アネットが気まずそうに声を掛ける。

「へ、陛下……？」

ぷるぷると肩を震わせて内心悶絶しているバルティアは、搾り出すような声で言った。

「アネットよ……この形容し難い猛った感情、どうしてくれようか」

「あー……お慰めしましょうか？」

気の毒そうに伺うアネットに、周囲の伝令達がギョッとした表情を向けた。

「いや、やめておこう」

ようやく空振りの型を解いたバルティアは、スクーターの椅子を撫でながら濃厚な気配を纏いつつ己が掴むべく未来を見据える。

「今は耐え忍び、いつかサクヤを手に入れた暁には……くくく」

『あ～あ～、これはもう……サクヤちゃん、きっと最初の日は大変ね』

必ずしもバルティアが朔耶をモノに出来るとは限らないのだが、アネットは一応皇帝の補佐官として贔屓目に見ておく事にした。

「今日はこのくらいにしといてあげるわっ！」

「えっ！　俺？」

偶々縁側を歩いていた所に赤面した朔耶からびしっと指差しで言い放たれ、萌えるがリアクションに困ってうろたえる兄であった。

60話：岐路

「ここは一時間以内に買い物して出れば、駐車代が只で済むからな」
「一時間か～」

バルティアにスクーターをプレゼントした日から数日、朔耶はその皇帝陛下に合いそうな上着を買う為にモデル代わりの兄を伴って街へ繰り出していた。主に黒いコートを探して売り場を物色する。

「んー、こんな感じかな～」
「本革トレンチコートか、八千もするぞ？」
「よろしくね？」
「何故！　妹を狙う男へのプレゼントに何故！」

ポケットから写真を取り出す朔耶。先日カースティアで撮影したモノで、子供達に囲まれて微笑む清貧少女な雰囲気を醸し出し捲っているアマレストの、孤児院での一枚だ。

「レジ行ってくる」
「いってらっしゃ～い」

兄は健気系の写真をゲットした。　八千円で。

「また何を作ってんのよ」
「いやぁ、何となく」

買い物を終える頃、携帯に弟から迎えに来て欲しいとの連絡が入ったので、弟と拓朗を拾いに工場まで兄と車で乗り付けた朔耶は、拓朗が持っている物体に微妙な視線を向けた。

長さ８０センチ位の金属棒、その先端部分２０センチ程が六角形で太くなっており、トゲ付きの鋼鉄で出来ている。反対側にはちゃんと握る部分があって、グリップも付いていた。

「メイスってやつか」
「筒型モーター弄っててさ、ギアボックスと筒型の一体化が出来ないかとかやってる内にノリで作ったんだ」

拓朗がメイスのグリップ部分に付いているスイッチを入れると、棘付きの柄頭が高速回転を始めた。回転する棘付き柄頭は四つの部分に分かれていて、其々が隣接する部分とは逆方向に回っている。爆笑する兄。

「わはははははっ　何じゃそりゃっ！　なんかドリルっぽいな！」
「いや、最初はドリルにしようか悩んだんだけどね」
「それって叩きつけて使う武器なんでしょ？　そんなので使えるの？」

鈍器の最も衝撃を受けるであろう部分に回転ヘッドのような仕掛けを施しても、直ぐに壊れてしまうんじゃないかと指摘する朔耶。

ノリで作ったという物に実用性を問うのは、素なのか意地悪なのかは朔耶にしか分からない。

しかし、弟も拓朗もその辺りは似たり寄ったりな所を持っており、朔耶の指摘にニヤリ笑いを見せると、工場の一角に置いてあるブロック塀を指す。

「柄部分は４００キロくらいまで堪えられるし、ヘッド部分は掘削機にも使われる鋼鉄製だからな」

拓朗はそう言ってメイスを振りかぶると、回転するヘッド部分をブロック塀に叩き付けた。ドコッという重い音がしてブロックの一部が砕ける。メイスのヘッドは異音も無くギリギリギリと回っていた。

「どうだ？」

「どうって言われても、よく中が壊れないわね」

魔力石の補給はグリップの底にある摘みを回してロックを外し、中身をスライドさせると石を詰められる部分が出て来る仕組みで、柄部分も二重構造の筒になっていた。形の揃わない石が中でバラけてしまわないように、バネで押し上げる作りになっている。

「このくらいなら大丈夫だろ？　どうせ向こうじゃ作れないだろうしな」

結局最初の作品が武器になってしまったが誰か信用出来る相手にでも渡してくれと、拓朗は回転ヘッドメイスを朔耶に渡した。

「ちょっ　重っ！」

「三キロくらいあるからな」

車の中でオルドリア大陸の現状や、朔耶の屋敷が建つ事などを話しているうち、弟と拓朗が現在共同で開発を進めているモノの話題になった。筒型モーターを複数搭載する事でさらにパワーアップさせた魔力石エンジンを作っているという。

「筒型を四つ並べる四気筒ならぬ四石筒モーターエンジンだな」

「そんなの作ってどーすんのよ」

先日の話し合いで向こうの世界に一般的な馬車より早く走れそうな乗り物を持ち込む事は、自重しようと決めたばかりなのだ。そんなに強力な原動機を作っても使い所が無い。

「速度は時速２５キロ程度までに抑えておけば良いんだよ、その分トルクに回して人や荷物を運べるような車にすればいい」

数が限られる上、技術的にも向こうの世界の人間が易々と手を加えられるような造りにはしないので、馬など従来の乗り物や技術の発展力に影響は少ないと弟は主張した。

「それにさ、朔姉が今後向こうの世界とどういう付き合い方するにしても、こういう切り札は多くあった方がいい」

「それって……どういう事？」

「朔耶は自由で、異質過ぎるって事だな」

朔耶の問いに兄が答え、弟もウンウン頷いた。意味が分からない朔耶は首を傾げていた。

帰宅した朔耶は本革のコートを持って庭に出る。車にガソリン補給をしようとカードを持って玄関に向かっていた兄が声を掛けた。

「今から行くのか？」

「うん、どうせ明日はまた一日工房に籠もる予定だからね」

服を渡すダケなので都合のいい時間に行ってさっさと済ませてくるのだと答える朔耶。

「まさか、『早く彼に会いたいの！』とか、『彼の喜ぶ顔がみたくて……』とかではあるまじろ？」

「日本語おかしいわよ？　そんなわけないっしょ」

適当に兄をあしらった朔耶は目印の円に入ると、オルドリア大陸の帝都城へと転移した。

「あれ？　明かりがある」

この前の夜に朔耶が訪れた際、帝都を目標に転移した場合は城の地下に現われるという事を聞いたバルティアが、地下にもランプを置くように指示したのだ。ご丁寧にエレベーターのある場所まで廊下の両端に点々と設置されている。

「気が利くというかマメというか……」

エレベーターで城の一階に上がってきた朔耶は隠し部屋から通路に出た。まだ遅い時間ではなかったので、人通りの多い通路では行き交う人々の姿が大勢見える。朔耶は取り合えず上階層を目指す。

「この時間だとまだ仕事かなー」

朔耶が三階の階段を上っている時、不意に声を掛ける者がいた。

「サクヤ様？」

「ん？　あ、シーファだぁ　リーファも久し振り」

「ご無沙汰しております、サクヤ様」

以前、バルティアの毒殺未遂事件に巻き込まれた姉妹、姉のリーファ・クルネスと妹のシーファ・クルネス。今は二人揃って同じ職場で給仕をしているという。朔耶がいなくなった後も、バルティアはこの姉妹の事をちゃんと気に掛けていてくれたらしい。

「陛下をお探しなんですか？」

「うん、まだ執務室かな？」

「いえ……多分、防壁の方じゃないかと」

帝都の城の二重防壁は内側が馬車や伝令の馬を走らせる造りになっている。ここ数日はスクーターで防壁を走っている皇帝陛下の姿がよく目撃されていた。やはり夜に城内で走らせるには少々騒音が酷かったようだ。

「防壁かぁ、一つ下の階だったね。行ってみるよ、ありがとねリーファ」

揃ってお辞儀を返すクルネス姉妹と別れた朔耶は、二階の端を目

指して廊下を歩く。途中、朔耶の姿を見た帝国士官やその家族達が驚いて足を止め、慌てて廊下の端に避けて頭を下げていく。『皇帝の黒后』という通り名と効果は未だ帝国内に健在だ。

朔耶は彼等に対してどう対処していいのか分からず、会釈したりすると矢鱈滅多ら恐縮されるので適当に頷いたり手を軽く上げたりして応対していった。

防壁と城内を繋ぐ出入り口から一歩外に踏み出すと、遠くまで伸びる防壁の通路は途中で暗闇に溶け込み、全貌を見通す事は出来ない。等間隔に配置された篝火が防壁の規模と形を浮かび上がらせていた。

そんな防壁の上をそこそこの速度で移動するランプの灯火。独特の駆動音を響かせながら走る筒型魔力石モーター搭載スクーターを駆るバルティアであった。ハンドル部分にランプが備え付けられている。

「サクヤ……！　サクヤでは無いか！」

「ちょっと、そのランプ病院から持ち出したでしょ！」

防壁を一周して城内に入ろうとした所で、思い掛けず朔耶の姿を認めたバルティアは歓喜して叫ぶ。が、朔耶は目ざとくスクーターに取り付けられたランプをその光度と形から以前、病室の環境改善の過程で作った魔力石ランプである事を見抜いてつっ込んだ。

「病院の備品持ち出しちゃダメでしょー？」

「許可は余が出してある。　ふふ……、相変わらず掴ませぬな」

朔耶と相対すれば色々仕掛けたくとも大抵の場合その奔放な行動で先にイニシアチブを取られてしまう。偶に見せる隙を突付いても先日のような報復が来るので、朔耶を落とすには隙を見せた瞬間から一気に畳み掛けるように行かなくてはならず、それは中々容易な事ではない。

「……なんか不穏な事考えてる気配がするんだけど」
「くくく……気にするな。　所でその包みはなんだ？」

ん、と包みを突き出す朔耶。受け取ったバルティアは中身を見て目を輝かせた。さっそく取り出して広げてみる。

「ほう、革製のコートか。　装飾は皆無だが、かなり良い作りをしているな」
「最初はカシミアのコートにしようかと思ったんだけどね、光沢のある本革の方がバルの銀髪に合いそうかなって思ったから」

バルティアは”カシミア”が何かは分からないが、朔耶がちゃんと自分に似合いそうなモノを選んで来てくれた事に喜んだ。ホクホク顔で帝衣の上からトレンチコートを着込む。

「どうだ？」
「って、襟が中に入ってるじゃないの」

急いで着たせいか首元の襟が中に折り込まれてしまっている。朔耶は苦笑しながらバルティアの襟首に手を伸ばすと、指を通してきちんと揃えてやった。その様子は傍から見れば、若き皇帝の身嗜みを整える后という二人の仲睦まじい光景に見えなくもない。

そんな状態であるが故に、朔耶に襟を整えられているバルティアも胸元にトントンと当たる朔耶の手の感触や目の前で揺れる艶やかな黒髪から目が離せず、距離の近さを実感して今が抱き締めるチャンス！　と思う一方、もう少しこの一時（ひととき）を味わっていたいと感じる心との葛藤に揺れていた。

「ん、これでよし」
「……あ」

整え終えた朔耶はひょいっと後ろに下がって適度な距離を取る。バルティアは何となく機を逃してしまった気がして追う事が出来なかった。あまりガツガツして見せるのも印象を悪くするだろう等と自分に言い訳しつつ、昂り掛けた気持ちを落ち着かせる。

「それじゃあね」
「もう、帰るのか？」
「服届けに来ただけだもん」

短い別れの挨拶で朔耶が世界を渡ろうとしている事を理解したバルティアは、声を掛けつつ引きとめる理由を探したが咄嗟には浮かんでこない。

「そうか……、また何時でも来るが良い」

笑みを返してもう一歩下がる朔耶。結局静かに見送る事にしたバルティアは、朔耶が消える瞬間までその姿を見詰めていた。

翌日――
何時ものように早朝から庭に出た朔耶は、回転ヘッドメイスを持って目印の円に入った。

「いってきまーす」
「いてらー、今度はクール系美人の写真よろしくなー」

兄に見送られてオルドリア大陸に転移した朔耶は、王宮区画の一角に出た事を確認すると城の訓練場を目指してまだ薄暗い城の敷地を歩き出す。

『こっちに来る時はもうお城の近くに出るのが確定かな』
サクヤヨ　アクイニ　チカシイケハイガ　コチラヲムイテオル　チュウイセヨ
『悪意に近い気配？』

訝しむ朔耶に、良く知った気配が触れる。王族を守護する精霊の接触に、朔耶は早速交感を繋いだ。

『ヤホー、久し振り。　何かあったの？』
ヤホーサクヤ　アノコガ　カナシンデイル　ソバニイテアゲテホシイ
『レティが？　一体どうしたってのよ？』
トリヒキノキモチ　ウラヤムキモチ　フアンナキモチガ　サクヤヲムイテイル　アノコハ　ソレヲカナシム

今ひとつ要領を得ない説明だったが、神社の精霊の警告もあり、

朔耶は何か起きているらしい事は理解した。交感を終えると、フレグンスの精霊は城の方へ移動する気配を残して消え去った。

『どう思う？』

ウム　オウジョガ　カナシムヨウナ　アクイヲ　サクヤニムケルモノガイル　トイウトコロカ

精霊と相談してレティレスティアとは会う前に予め交感で話をしておいた方が良さそうだと結論を出しながら、朔耶は聖騎士団が早朝の訓練に励む訓練場までやって来た。今日は近衛騎士団との合同訓練は行われていないようだ。

訓練場の入り口を潜ると、比較的手前で打ち込みをやっていた聖騎士が朔耶に気付いて手が止まる。朔耶は軽く手を振りながら聖騎士団長フューリの所へ向かった。

「おっはよう」

「え？　あ！　さ、サクヤ様……」

訓練に集中している所に声を掛けられて少し驚いた表情を見せるフューリだったが、朔耶はその反応の中に若干の気まずさを感じ取った。それが今レティレスティアの回りで起きているらしい何らかの出来事に関連しているモノかは分からない。

「あの、私に何か？」

じーっと観察する朔耶の視線に、居心地悪そうでいて何かもどかしそうな雰囲気を感じさせるフューリの対応に、朔耶は何か勘に引っ掛かるものがあった。だが敢えて今ここでそれを確かめる事はやめておく。

「これ、使える？」

朔耶はそう言ってメイスの包みを渡した。朔耶の持っていた包みが何となく気になっていたフューリは、自分に差し出された事を途惑いながらも受け取って包みを解く。

「こ、これは……」

包みを解いてフューリが手にしたモノはメイス。彼女達のような聖騎士団が使っているメイスと比べて随分大人しいデザインの、訓練用にも似たメイスだった。手頃な長さのソレを観察するフューリが片手で軽々扱う様には、朔耶も流石本職と感心する。

他の団員達は朔耶が団長に贈り物をしたのかと、少し緊張気味に様子を窺っている。朔耶はその気配にも先程の勘の引っ掛かりに通じるモノを感じながら、フューリにこのメイスの使い方を説明した。

「実際何処まで使えるか分からないけどね、先ずここを捻って引っぱると――」

柄に仕込まれた魔力石を装填する仕掛けに軽く驚き、グリップの上に付いた突起を押す事で柄頭が回転し始めると、フューリのみならず様子を窺っていた団員達も驚嘆の声を上げた。やっぱり珍しいようだ。

強度テストは済ませてあるが、所詮素人が行った検査なので本職が実際に使って試してみた方が良いという朔耶の勧めを受け、フューリは訓練場の案山子に試してみる事にした。

「っ――せぇい！」

部下達の注目を浴びつつ、回転ヘッドメイスを構えたフューリが革と襤褸（ぼろき）切れで鎧を模った案山子の肩口を打ち付けると。案山子の半身を粉砕して杭の部分にまでめり込むに至った。

通常、実戦用のメイスでも案山子の打ち付けられた部分が少し拉げる程度なので、この回転ヘッドメイスの破壊力がどれ程のモノか、遠巻きに見詰めていた団員達やそれを行った当のフィーリさえも驚愕して固まった。

「大丈夫そうだね」

「！……なぜ、私にこれを」

鋼鉄の柄頭がちゃんと回転しているのを確認した朔耶の言葉で我に返ったフューリは、何故自分にこれ程のモノを与えるのかを問う。

「あなたなら、間違えないかなって思って」

朔耶が答えると、フューリは何か衝撃を受けたように眼を瞠った。朔耶はそんなフューリの心中に、先程の勘に引っ掛かったモノとの関連を感じたが、特に言及する事はしなかった。ちょっと頬が上気しているようにも見えるが気にしない。

「それじゃまたね～」

軽く手を振って訓練場を後にする朔耶に、フューリは騎士の礼で見送った。他の団員達もそれに倣う。

『なーんか、変だよね。アレは絶対何かあったに違いないわ』
アノモノタチカラハ　ウシロメタサナル　カンジョウガ　カンジラレタ
『後ろめたさねぇ……、そういえば前にもレティからそういう感情が流れて来た事があったなぁ』

城と訓練場の中間辺りを歩いていた朔耶は、そろそろ起床する頃合かと意識の糸を伸ばす。

『おはようレティ～、起きてる～？』
――サクヤ？　今何処に居るのですか？――
『お　は　よ　う～、お城の敷地内のどっかだよ』
――お、おはよう御座います。　城に来ているのですね？――

何処か落ち着きの無い様子に、これは相当な事が起きているようだと判断した朔耶は、まずレティレスティアから詳しい事情を聞きだす事にした。近くにベンチがあったのでそこに腰掛ける。

『で、何があったの？　こっちに来るなりフレグンスの精霊からレティが哀しんでるって言われるし』
――っ！　そうですか、精霊が……　実は、サクヤの立場に関して少し困った事になっていまして――

レティレスティアから交感を通じて感じる焦りの感情と共に伝えられた内容は、フレグンスの国家運営を支える古株の重鎮達に朔耶を糾弾しようとする動きが出ていて、それに呼応する門閥家などから朔耶を査問会に掛けるよう上申書を提出されたという事だった。

それと言うのも、王室特別査察官という立場にありながら王に相談せず個人で帝国皇帝に贈り物をした事、それもかなりの希少品で

あるサクヤ式で、フレグンスにも出回っていないようなモノを贈った事が問題になっているという。

一部の過激な意見には、朔耶を軟禁してフレグンスの為に道具を作らせろという声も上がっているとか。何れも朔耶の働きや真なる立場を詳しく知らない者達である事は明白なのだが、詳しく知った上でフレグンスの中枢から排除しようと画策する者もいるらしい。

朔耶が客人として迎えられた時から、平民の異国人が王室に近付く事を快く思っていない古い体質を持つフレグンスの旧家からは、度々カイゼル王に朔耶の扱いに関して進言する勢力があったのだが、カイゼル王は尽くそれを躱して問題を先送りにして来た。

また、カイゼル王が問題を先送りにして来たのは身分に拘り過ぎるフレグンス旧来の貴族体質を改善しようと政策を行い、それによって何れは自然消滅する問題だと踏んでいたからだが、今回の事はその政策による弊害とも言える。

カイゼル王の政策とフエルト卿の暗躍によって王室の権威は一時期かなり軽んじられる所まで堕ち掛けていたのだが、朔耶の『信頼の証』の一件で持ち直して権威は保たれたモノの、王が一度決めた事に口出しするなど旧来のフレグンスではあり得なかった事が起きるようになったのだ。

重鎮達の中には王家の権威が傾いた時期に経験した、相対的な権力の上昇に味をしめた者も居る。王の力が弱まれば、それを支える者に多くの力が与えられる。

責任は王家に、実は我等にで大いに潤った懐にて贅沢の限りを尽くした享楽が忘れられないのだ。

『なるほどねー、さっき聖騎士団の人達の様子がおかしかったのって……』

――神殿に多くの寄付をしているのも、古くから深い所縁を持つ方達ですから……――

『ま、事情は大体分かったわ。面倒事はちゃっちゃと済ませましょ、出来るだけ穏便に』

――……ごめんなさい、サクヤ。貴方はこんなに私達を助けてくれているのに――

レティレスティアの嘆きが交感を通じて伝わって来る。なので朔耶も、励ます意味で交感を通して自分の気持ちを送り込んだ。

『あたしはレティ達の味方だから、安心して』

――サクヤ……サクヤ……――

『あーあー泣かない泣かない』

――うう……すみません――

訓練場と城を結ぶ順路脇のベンチで交感を続ける朔耶を、城壁を越えた朝日の光が照らし出す。そろそろレティレスティアもモーニングティーの後に祈りの儀式へ赴く時間だろうと、朔耶は交感を解いた。

「ううーーーん」

眩しい光に眼を細めながら、朔耶は『さーてどうすっべぇ？』等と思いながら伸びをした。そこに若草と石畳を踏む複数の足音が近付いて来る。朔耶が顔を上げると、近衛騎士団を率いたイーリスが難しい顔を向けて見詰めていた。彼等の後ろにはさらに王国騎士団も並んでいる。

「ん？　どうしたの？」
「……サクヤ殿、貴女を国家叛逆罪容疑で拘束します。我々と来て頂きたい」
そう言い放つイーリスの表情は苦渋に満ちていた。
「ふむ」
朔耶は静かにベンチから立ち上がった。

61話：査問会

「この部屋にてお待ち下さい」
「はいはーい」

騎士達に連れられて朔耶がやって来たのは城内にある一室。身分の高い者が査問を受ける際に通される控え室のような部屋だ。　普通の客間っぽく質素な調度品が飾られ、テーブルと椅子が置いてある。但し、閉じられたカーテンの向こう側には鉄格子入りの窓がある。

「……」
「どうしたの？」

他の騎士達が退出した中、イーリスが一人残って物言いたげな瞳を向けていたので、朔耶は声を掛けた。

「何故です？　貴女ほどの力があれば、我々の拘束など無きに等しかった筈」
「まあねぇ、でもそれじゃあ問題も解決しないっしょ」

その気になれば一人で王都を制圧しかねない程の力を持ちながら何故、今回のような理不尽な要請に応じたのかと訊ねるイーリスに、朔耶は力尽くで解決出来るならそうしていたと答えた。

「……彼等の狙いは王権への介入に貴女を利用する事です」
「イーリス？　近衛の人がそういう話題を口に出しちゃ不味いんじゃないの？」

椅子に腰掛けて自分でお茶を淹れながらテーブルに置いてあるお茶請けのお菓子に手を伸ばす朔耶は、珍しく規則を破ろうとしているイーリスを窘めた。

何処に目や耳があるか分からないのだ。盗み聞きしている人間が潜んでいる場合は意識の糸レーダーで見つけ出せるが、魔術を使って音を拾うというようなやり方で盗聴された場合、そう簡単には対処できない。イーリスも立場ある身、下手な事を口にすれば問題になる。

イーリスは騎士の礼をすると部屋から退出して行った。

『さてさて、とりあえずアルサレナさんにでも繋いでみましょうかね』

朔耶が地下の神殿にいるであろうアルサレナに向けて意識の糸を伸ばすと、程無く交感が繋がった。

『アルサレナさーん』
――サクヤ？　城にいるのですか？――
『はい、控え室みたいな部屋』
――……そうですか、では査問を受けるつもりなのですね？――

アルサレナもイーリス同様、朔耶が理不尽な要求に従うとは思っておらず、また強要する事も不可能だと考えていた。なので今、朔耶が城の控え室に居るのは、自らの判断によるモノなのかを確認す

る。

『ええ、どっちみちこういう問題って、放っておくと困るでしょ？』

――そうですね、では少しの間我慢していて下さいな。私とカイゼルで不問になるよう取り計らいましょう――

『王さまとアルサレナさんがあたしを庇う事は相手も折込済だと思うなぁ、だからパスしときます』

アルサレナの提案をあっさり蹴った朔耶は、自分でどうにかする事を告げた。この査問会は単なる糾弾や弾劾の類ではないと勘が告げている。朔耶は聖騎士団の騎士達が何か大きな選択を迫られていると感じ取っていた。そこがとても気に掛かるのだ。

――しかし……相手は貴女の事を快く思っていない者達です。　酷い事を言われるかもしれませんよ？――

『大丈夫です、イザとなったら黙らせるし』

――……非常に不安なのですが――

『無茶はしませんって、穏便に穏便に。　あ、それと芝居打ち捲るかもしれないんで、合わせて下さいね？』

何ら気負いの無い朔耶の言葉に、アルサレナはそこまで自信を持てる程の策があるのならばと了承した。

『さて、どうしましょうかねぇ』

ナニカサクガ　アルノデハ　ナイノカ？

交感を終えた朔耶はポリポリとお菓子を齧りながら対応策を考え

る。舌戦や頭脳戦で老獪な門閥貴族達を言い包められるとは思っていない。相手が朔耶を邪魔に思っているなら尚更だ。

『なんか良い案ある？』

イキアタリ　バッタリデ　アッタカ……

以前コースティン家の晩餐会に出席した時のような、朔耶を獲り込む事ばかり考えていた相手とは違う。ただ、相手が何をテーマにしてどんな事を言ってくるのかは予想が付いているので、そこを掬ってやれば良い。

『査問……糾弾……。　ふむ、糾弾かぁ……　むむっ？　閃いた！』

朔耶は思いついたアイデアを練り纏める為、神社の精霊と相談を始める。控え室の様子を監視している衛兵達には、ただ静かに座って時を待つ少女としか見えず、その姿が同情を誘っていたりもするのだが。

デハ　ソノヨウニ　スルトシヨウ

『うっふっふっ　精霊、おぬしも悪（ワル）よのぉ』

……アルジドノニハ　カナワヌヨ

『ノリ悪〜い』

当の本人は殆ど悪巧みのノリで密談を交していたのだった。

王妃と王女による祈りの儀式が終わる頃、城に集まった重鎮達が査問会の行われる『審判の間』に顔を揃え始めた。『審判の間』は同じ階にある『謁見の間』と丁度対面に位置し、身分の高い咎人を裁く場合等に使われる。

部屋の中央に鎖の付いた石の台座が置かれていて、その回りを囲むように並ぶ二列の席に審問する貴族達が着席していき、正面の一段高くなっている壇上の席に王族が座る。

審問席に座る貴族達は約三分の一が建国当初から王家に仕える門閥家の重鎮達で、残りはその配下とも言える分家や血縁に固められた中流以上、上流未満という家柄の貴族である。何れも重要な国政に携わる者達だ。

彼等の中には今回の審問に懐疑的な者や、あからさまに気が進まなそうにしている顔も見えるが、宗家に来いと言われれば逆らえない立場にある。そんな彼等を家格と権威で支配する各家系の当主達は、事前に集まって今日の審問について打ち合わせを行っていた。

まず責めどころは独断で帝国皇帝に贈り物をした問題。次いで朔耶の帝国内での地位に対する嫌疑、これは王都に潜んでいた帝国密偵によって拉致され、帝都に到着した当日から朔耶に対する待遇が捕虜のソレでは無く、まるで帝国貴族に対する扱いであった事。

それらの事実を元に、先のサムズ動乱に際する活躍や戦功に対する疑い。サムズの傭兵団が元々帝国によるフレグンスの内乱を狙った策略であった事に加え、その動きの察知が不自然なほど正確であった事や、カースティアからの報告で傭兵団に組していた事等を挙げる。

以上の事柄から、朔耶は元々帝国の密偵であり、ティルファとの国境で起きたレティレスティア第一王女の拉致未遂事件からフレグンスに起きた一連の事件は全て、朔耶をフレグンス中枢に潜り込ませてその発言力を高める為の、帝国による自作自演なのでは無いかという疑いを掛ける。

王と王妃が弁護に回っても、これらの事実に対する明確な潔白を示す事は出来ない。証拠として在る事実に対する”証拠の無い疑い”が事実ではない事を証明する事など出来ないのだから。

「ふむ……、そろそろ始まる頃ですな」
「ま、手筈通りで問題無いでしょう」

今回の査問を招集した中心的な門閥家当主達が囁きあう。こういった弾劾を兼ねる査問において物事の真相など問題ではなく、示された厳然たる事実をどのように受け取り、どう扱うか、そしてどのような結論に落とすかである。

その判断には私情、家柄、様々な思惑と目論見が絡み合い、其々の目的を押し通しながら互いに妥協点を見出していく。最終的に誰がどれくらいの取り分で得をし、させるか。得をした家はさせた家へ借りとして影響力を受けたり与えたりして関係を深めていくのだ。

「嫌」

ぷいっとソッポを向く朔耶。

「それが規則ですから」

「例外って知ってる？」

朔耶を控え室から審判の間へと連行する為、迎えに来たイーリスは規則に遵って枷を付けるよう求めるも『適当でいーじゃん』とゴネられて困っていた。

「規則は守る為にあるのです」

「さっきは破ろうとしてた癖に～」

「窘めたのは貴女でしょうに……」

見掛けは変化無いものの、その雰囲気からがっくり肩を落としている感じのするイーリスに、朔耶もあまり困らせるつもりは無かったので素直に枷を填められる事にした。

とりあえず意識の糸は巻いておこうと、朔耶は以前大型竜籠の中でやった時のように意識の糸を枷に巻き付け――

「あっ」

バラバラ……

「……サクヤ殿」

「あはは、ごめんごめん。　もう一個ある？」

うっかり破壊のイメージを持ったせいで壊してしまった。

「サクヤ殿、余裕っすね」
「何かやらかしそうなんだよな」
「もう枷が不自然に壊れたくらいじゃ驚かないけどな」

朔耶とイーリスのやり取りを見ていた若い近衛騎士達がそんな事を言い合って苦笑するのを、イーリスが窘める。

「気を抜くな、査問会の席で何かあった場合は我々が彼女を取り押さえる事になっている」
「団長……、冗談ですよね？」
「冗談ではない、それが査問会の警備で我々に与えられた任務だ」

ようやく控え室を出て審判の間に向かう廊下を歩きながら、近衛騎士達は顔を見合わせてイーリス団長に訊ねる。

「我々でサクヤ殿を取り押さえられると思いますか？」
「出来る訳ないだろう」

身も蓋も無い答えが返ってきた事と、それがイーリス団長の口から出た事で二重に驚きつつも納得する近衛騎士団員達だった。

審判の間に朔耶の入室が告げられて扉が開き、近衛騎士に囲まれた黒髪の少女が両手に枷を填められた姿で現われた。朔耶が王の間で客人として迎えられた時に同席していた門閥家貴族や、後の晩餐会の席でその姿を目にした事のある者は、改めて子供のような印象

を受ける朔耶に対し、とてもここ数十日の間に色々な活動を通じてフレグンスにあらゆる影響を与えてきた人物とは思えない微妙な気分にさせられる。

今まで噂でしか聞いた事が無く、今日初めて朔耶本人の姿を目の当たりした者達は、その見た目の幼さと噂の豪傑ぶりとのギャップで一様に驚いて目を瞠っていた。

扉の両脇に四人、王族の座る壇上の前に六人の近衛が立ち、審問席が並ぶ後ろの壁際に残りの近衛が配置に付いて審判の間の警備が固められる。そこへ、聖騎士団の一団が入室してきた。

「フューリ殿？」

「……」

怪訝な表情で戸惑いの声を掛けるイーリスに沈黙を返したフューリは、門閥家の重鎮達が座る審問席の周囲に部下の団員を配置させた。イーリスがアルサレナ王妃に視線をやると、王妃は静かに首を振る。

査問会に聖騎士団を動かすという話はアルサレナも聞いていない。恐らくは朔耶の力に対抗する意味で、精霊術を駆使して戦闘を行う彼女等を起用したのだろうと、アルサレナは分析した。無知の愚かさ、滑稽さを改めて認識するアルサレナだった。

朔耶が審判の間中央にある石の台座に繋がれると、進行役が口上を読み上げて貴族達による査問会が始まった。

幼げな少女が石の台座に枷と鎖で繋がれている様には、どうにも痛々しさを感じてやり難そうにしている進行役を仰せ付かったとあ

る家系の中流貴族がいる一方で、加虐性を刺激されてか血走った目で鼻息を荒くする者もいる。それが門閥家の者だったりするだけに、周りからは見て見ぬふりをされているが。

そうして彼等の予定通り、朔耶に関する帝国との癒着や繋がりを疑う事象が挙げられて行く。事前の打ち合わせで誰が何を話題にしてどのように話を持っていくか、という役割がある程度決まっているので、ただ相槌を打つだけの者もいれば特定の話題が出たときに『そういえば……』と補足を入れる者もいる。

この間、王や王妃が口を挟む事は出来ない。王の役割は最終的な判断を下す裁決役なので、『公平な審判』の名の下に審問役の議論や弁論を妨げてはいけない、という決まりになっているのだ。

審問役の一方的な論議を聞いているカイゼル王は、普段見せている温厚そうな表情が鳴りを潜め、顰め面に近い険しい表情で査問会の進行を静観している。

傍に控えるアルサレナはこの場に娘が居なかった事を幸いとしながら、重鎮達の狙いを考察しつつ朔耶の様子を窺った。カイゼル王には事前にアルサレナから朔耶の伝言を伝えてあるので、朔耶が何か仕掛けるなら即興でそれに合わせるだろう。

朔耶は台座に繋がれたまま静かに眼を閉じて大人しくしている。審問役の論議が聞えているのか、いないのか、暴論ともいえる糾弾的な意見に対しても特に反応を見せないでいた。

予定されていた大凡（おおよそ）の話題と意見を出し終えた審問役の貴族達は論議を結論へと持って行き、後は門閥家の重鎮達に任せる。

ここまで査問の対象である朔耶に反論や意見を試みる様子が見られなかったが、そもそも反論させるつもりも無かったので、此処からが本番とする重鎮達にとっては何ら問題もなく都合の良い展開だった。

結局、朔耶に対する査問の名を借りた一方的な論議によって導かれた結論とは。

サクヤは帝国と繋がりを持つ異界人で、異界人故に帝国とフレグンスの関係に深く考えが至らず。
皇帝の甘言に惑わされて第一王女拉致未遂事件でフレグンス中枢に入り込み。
異界の道具で貢献を果たしたり、帝国の策略によるサムズ動乱などで戦功を上げてフレグンス国内での影響力を強め。
やがてはフレグンス内部から帝国に都合の良い人物を官職に就かせるよう『信頼の証』で人事の画策を計っていた。

という様な内容になっていた。勿論この結論を信じる者は誰もいない。異を唱える者もいない。例え王が異を唱えようと、この結論を否定する根拠として証拠が示されない限り、覆される事はない。

この結論が正しいという根拠は、此処に揃う由緒在る家系の貴族達が審問役として『公平な論議を交した』という事実であり、またその論議の中で交された証言の中に見る『朔耶が傭兵団と共にいた』『帝都の城での待遇』という状況証拠である。

カイゼル王による政策の弊害と問題は、王が無効だと言えば直ちに無効になる従来の体制を変えたまでは良かったが、国家運営の柱として在る旧家の貴族達が、体制改革によって減退を余儀なくされ

た権威、権力にしがみ付く為、誇りよりも富を選んだ事にある。

そこに誇りを選んだ者も加わり、今回の査問会は身分と伝統に拘る旧来の貴族勢力がフレグンス貴族の在り方を固持する為の陰謀に近い形で行われたのだ。無論、誇りを選んだ貴族達は王の権威を失墜させるような事はしない。

誇りを選んだ者と富を選んだ者、双方が納得出来る形に収める案が具体的な処置として練られており、それを示して朔耶に飲ませる事でこの査問会の終結となる。朔耶は謂わば彼等の誇りと名誉を維持する為の生贄なのだ。

「さて……、結論が出ているようではあるが、王の裁定を頂く前にフレグンスに対する貢献も斟酌すべきだと思う」

「そこで我々から御主に条件を出そう、今のまま帝国に組するよりずっと良い条件だぞ？」

重鎮達が示した条件とは。

まず財産没収の上、王室特別査察官という職務を罷免し、王国に忠誠を誓った上でフレグンス貴族として迎える。

それにより宮廷発明家の地位が与えられ、王国に属する事でサクヤ式を扱う権利をフレグンスに限定させる。

「その後は王国の為に発明家としての腕を振るえばよい」

「罪人を貴族に取り立てるは異例の処置となるが、身分を与える事で己が立場に自覚を促す意味もある」

「さあ、後は御主がこの条件を飲めば、王に裁定を頂いて全ては丸く収まるぞ？」

此処まで大人しく聞いていたのだから、当然この条件を飲むだろう。重鎮達はそう確信していた。現在は異世界とオルドリア大陸とを行き来しているらしいが、異世界でも平民の娘だと聞いている。正式に王国貴族の身分を得られるとなれば、多少の不名誉にくらい目を瞑る賢しさは持っていよう、と。

スッと眼を開いた朔耶が顔を上げた。そして居並ぶ審問役の貴族達を見渡し――

「ばっかみたい」

ぷっと吹き出すように呟いた。

一瞬何を言われたのか分からず、ポカンとなる審問役の面々。

「それはどういう――」

我に返った審問役の一人が言いかけたその時、乾いた音が響いて審判の間に閃光が走る。次の瞬間、朔耶を拘束する枷と鎖が砕けて弾けとんだ。

「なっ！」

「か、枷が砕けたぞ！」

途端、審問役の貴族達は混乱に陥って騒ぎ始めた。朔耶の反抗を想定していた重鎮の一人が聖騎士団に叫ぶ。

「狼藉（ろうぜき）である！　取り押さえよ！」

しかし、フューリ団長は部下達に命令を出さず、聖騎士団は動かない。

「貴様達何をしておるか！　早くあの者を……ぬおっ」

叫んでいた門閥家の重鎮が奇声を上げて床にひっくり返った。彼だけではなく、他の審問席に座っていた貴族達は全員尻から落ちると床に転がる。朔耶の意識の糸を神社の精霊が微調整する事で、審問席だけを狙って破壊してしまったからだ。

壇上のカイゼル王とアルサレナ王妃の椅子は無事だが、朔耶の起こした派手な行動に『どう合わせよと？』といった具合に審判の間の惨状を呆然と眺めている。朔耶は意識の糸を石の台座に絡めると、魔力石の加工と同じ要領で力を振るった。

ゴリッと音がして、朔耶が繋がれていた石の台座の上半分程が削り取られる。素手で払い除けるようにして石の台座を削り取る朔耶の姿を見た貴族達は、床に転がったまま思わず身を引く。聖騎士団の団員達も、初めて目にする朔耶の非常識な力に目を瞠った。

石の台座を即興の椅子に仕上げた朔耶は、そこに腰掛けると足を組みつつ、不敵な笑みを浮かべながら高らかに宣言した。

「さあ、査問会を始めましょうか」

ようやく床から立ち上がった貴族達はまだ混乱から立ち直れない状態にあった。寧ろ朔耶の”査問会開始宣言”を受けて混乱に拍車が掛かったと言える。

「これは一体、どういう事だ！」
「王よ、このような行いを許してよいのですか！」
門閥家の一人が壇上のカイゼル王に事態の収拾を求めるが、王は首を傾げながら飄々と答える。
「ん？　まだ査問の途中であるからな、私は口を挟む事が出来んぞ？」
そういう決まりであるからなと言って椅子に座り直すカイゼル王。つまり、王公認でまだ”サクヤの査問会”は続いているという事だ。朔耶を査問に掛けていたつもりが、何時の間にか朔耶の査問に掛けられていた。
何が起こっているのか分からず、頭が変になりそうな審問役だった貴族達は『これは罠か！』と慌てふためいた。
「さーて？　何処の誰がこの茶番の黒幕なのかな～？」
そう言って立ち尽くしている貴族達を見渡す朔耶。実は査問の間、意識の糸でもって一人一人の心の表面に触れながら、彼等の感情の動きや表面的な気持ち、イメージを読み取って分析していたのだ。
一人を指差し、『あなたはあの人から誘われた』と別の一人を指す。そして、『この人はこっちの人に言われて仕方なく』と順に各家系の繋がりを指し示していく。
「その人はあなたが参加するかどうかを確認しに来た時、あなたは別の人から査問の話を聞いていて、乗り気じゃなかったんだけどその人が参加の確認に来た事を参加を促していると思って頷いたのよ

ね、だからその人も参加する事に決めた」

「な！　……では、貴殿はこの査問会に参加するつもりは無かったのか？」

「私はてっきり、卿が言外に参加を勧めているのかと……」

朔耶の指摘により、思わぬ誤解が生じていた事や、思い違いが明らかになって行くと、参加した貴族達の半数以上が乗り気でなかった事や、家柄上仕方なく付き従う事にしてみたらそれ自体が誤解で相手に参加を決意させていた事などが分かった。

そうして”言いだしっぺ”が絞られていく。王家を支え、権威と伝統を護るフレグンス門閥貴族の旧家。国家運営の要を担い、王国の柱とも謳われる重鎮のうちの四人が今回の査問会を画策した首謀者だった。彼等は誇りと権威よりも富と権力を選んだ者達である。

「んで、この人達ってフレグンスに居ないと困るんですか？」

陰謀の黒幕として暴き出された四人を前に、朔耶はカイゼル王に訊ねた。彼等の影響力は広い。国家運営のノウハウを熟知しており、彼等の一角が欠けると色々と困った事態が起きる可能性もある。

国の行政を担う彼等の指揮が無ければ、上で決まった命令が下部組織にきちんと伝わらなかったり、必要な人材が集まらなかったり、逆に集まり過ぎて収拾が付かなくなったり、何処かで問題が起きても報告が届かなかったりと、あらゆる業務に支障を生む。

そういった意味ではフレグンスに必要不可欠な人物だと、カイゼル王は説明した。王の説明に安堵の色を浮かべて自負を示すような

態度を表す四人であったが、朔耶はそんな彼等が思いも寄らない事を口にした。

「つまり、それって仕事が出来れば誰でもいいって事ですよね？　今まではそういう重要な仕事に就くのには家柄が大事だったけど、カイゼルさんはそういうのを無くそうとしてるんでしょう？　だったら思い切って変えちゃいませんか？」

ざわり、と貴族達の間にザワメキが走った。朔耶の指摘通り、カイゼル王は身分制度の廃止とまでは行かずとも、その壁をかなり低くしていこうとする政策を進めている。王の決定に物申す事が出来る現状も成果の一つといえよう。

その政策による貴族の権威減退にしか目が向いていなかった彼等は、朔耶の言によって一つの考え方に至る。

今まではどんなに優れた才能を持っていようと身分相応の役職に就くしかなく、例えば騎士として統率力に才があっても、下級貴族出の者が団を指揮する立場まで昇進する事は出来なかった。

そういう身分の壁が取り払われた場合、実力主義として能力のある者が重要な職務に就く事が出来るようになる。最近のフレグンスにおいて、朔耶の存在が最もそれを体現していたという事に気付く。

慌てたのは重鎮の四人だ。彼等は自分達が就いている仕事が如何に重要で、容易に交代できる職務では無い事をアピールする。

「補佐の人くらい居るんでしょ？　人材は育成すればいいじゃん、才能のある人見つけてさ」

イーリスが顔には出さずとも、胸を打たれたような反応をした。

「トップの一人が倒れると業務が滞るようなやり方じゃあダメでしょ。信頼の証持ってる人の中にも結構政治に詳しい人いるみたいだし、いっそこの四人から家格とか財産とか没収して中流貴族の優秀な人に継がせてみたら？」

「な、なんと言う暴論を！」

「由緒正しき血統をなんと心得ておるのか！」

トンデモ無い事を言い出す朔耶に目を剥いて抗議する重鎮四人、貴族の血筋全体に対する冒涜だと王に訴える。しかし他の門閥家を含む貴族達は朔耶の『信頼の証』を意識していた。

アレは朔耶の判断でまず仮証が与えられる。それこそ家柄も血筋も関係なく、信頼に足ると認められさえすれば一介の騎士から侍女にまで与えられた例があるのだ。そして正式な証を与えられる事は、王に認められるも同義。

例え身分が低くとも、信頼を受け、能力さえあれば、本来なら門閥家しか担う事が出来ないような役職にも就く事が出来る。その事に気付いてしまった彼等はもう、朔耶を敵に回し、間接的に王の権威を傷つけようとした重鎮達に味方する事は無かった。

「それじゃあ意見も出尽くした事だし、カイゼルさんに裁定を頂く？」

「ふむ、そうだなぁ」

カイゼル王が立ち上がり、裁決に入った事で顔を引き攣らせる四人の重鎮。朔耶の意見に殆ど有効な反論が出来ていない上に、他の門閥家や同輩の重鎮、各家系の貴族達は皆沈黙している。

『ま、まさか　我等を生贄にするつもりか！』

このまま王の裁定を頂けば、財産没収の上、没落。しかも只の没落ではなく、その家の血筋にはもう門閥家としての価値は無いという烙印付き。焦れば焦る程この状況から逃れる術が無い事を実感して、選び得た筈の富と権力を全て失う事に絶望する。

削り取られた石の台座に座る異世界の少女に視線を向けると、黒髪のあどけない顔をした少女は黒い瞳を細めてにっこり笑った。

四人の重鎮達には悪魔の笑みに映った。

「サクヤは如何すれば良いと思う？　確かに補佐役もいるであろうが、人材の育成には時間が掛かるぞ？」

「そうですね～」

朔耶は少し考える振りをすると、魂が抜けかかっている重鎮達を見回して心の中で呟く。

『ま、このくらいでいいかな』

ジュウブン　キモヲ　ヒヤシタデアロウ

結局、朔耶が提案し、王が採用して下された裁定は重鎮達を絶望の淵から救う内容だった。

後任の育成に心血を注ぎ、複数人を候補として鍛える事。

子息や分家から候補を選ぶ事を禁ずる。

後任が決まり次第、引退する事。
朔耶に対する不当な弾劾を画策した事は、朔耶本人の意思により不問とする。

「それで良いのか？」
「罪を憎んで人を憎まずよ」

王の問いに迷い無く答える朔耶。ほぉ……と、またしても奥の深さを感じさせる朔耶の国の”賢者の言葉”に感嘆が上がった。

「あ、でも一応罰として四人とも全財産の一部貰うからね？　三割くらい」
「なっ」
「ふ、不問にすると言ったではないか」
「三割は幾らなんでも暴利だ」

富を選んだ彼等にとって全財産から三割ともなれば膨大な金額に上る。財産の殆どが美術品や高価な嗜好品なので、通貨として財産の三割分を揃えるならばコレクションを幾つか処分しなくてはならない。金額が大きすぎて金貨の数が足りないのだ。

「いっぺんには無理だろうから、少しずつでいいよ？」
「し、しかし三割は……」

尚も”不問”と”罰金”についてゴネる重鎮達を、朔耶はニッコリ笑ってとっておきの賢者の言葉で黙らせた。

「ソレはそれ！　コレはこれ！」

その余りにも真っ直ぐで開き直りのような潔さと勢いを持ちなが

ら、狡猾な駆引きにも使える原理的な賢者の言葉は、この場に居合わせた者達から伝わって暫らく貴族達の間で流行るのだった。

「儲かっちゃった～」

62話：対策と勢力

「サクヤ様！」
「やほーフレイ」

審判の間を出た朔耶は部屋の外で待っていたフレイと連れ立ってレイスの執務室に移動すると、そこで一息ついた。

「ふぅ～、上手くいって良かった」
「お疲れ様でした。　災難でしたね」

まったくだよ～と然して疲れた様子も見せずに、朔耶はフレイの淹れてくれたお茶を啜りながらレイスの労いに答える。
レイスの話によれば、重鎮達は今回の事で朔耶の関係者に知られないよう、王に対して普段通りに朔耶の待遇への遠回しな進言で牽制して見せつつ、裏では貴族達への根回しが迅速に行われ、上申書が提出された時には既に査問会の準備が整えられていた。

その為、レイス達やランバルト公が上申書の情報を掴んだ時にはもう、横槍を入れる間も無かったという。
レイスは、例の重鎮四家が短い期間で同輩の重鎮や旧家の門閥貴族を掌握して動かせるだけの力を有している事に言及すると、朔耶に注意を促した。
気の進まない者が大半だったとして、その彼等の動員をやっての

けるだけの腕と影響力があるのだから油断は出来ない、と。

「今後は王都でも味方を増やす努力を怠らない方が良いと思いますね」

「ん～別に、こっちになるべく来ないようにするって手もあるんだけど」

面倒くさそうに椅子の背凭れに身体を預けてアヒル口を見せる朔耶に、レイスは普段の微笑を少し抑えながら諫めるように言った。

「望むと望むまいと、サクヤは既にフレグンスに対して強い影響力を持っていますからね」

「う～ん」

朔耶は腕を組んで考えた。確かに此処まで関わってしまった以上、途中で放り出すのは無責任かなと思いなおす。

「でも、卒業後にこっちで就職するのは考え直さないとね。レティやアルサレナさんの事は好きだけど、王国に忠誠は誓えないと思うし、王にも王国にも忠誠を誓ってない人が国の上層で幅を利かせるのは、いい気分しない人も多いだろうしね」

「その辺りのコトは、人それぞれあると思います。　私も決して王国に忠誠を誓っているとは言えませんし……」

「レイスが好きなだけだもんねー」

フレイが茶請けのお菓子を用意しながら答えると、早速お菓子に食いつきながらフレイにも食いつく朔耶だった。

宮廷魔術士長の執務室前で、レティレスティアは扉に手を伸ばしたままノックを躊躇っていた。審判の間を後にした朔耶が宮廷魔術士長の補佐官と共に歩き去ったと聞いてここまでやって来たのだが、中から響く楽しそうな話し声を聞くうち、居た堪れない気持ちになってくる。

『私は……』

結局、レティレスティアは扉をノックする事無く執務室の前から立ち去った。

「ん？」
「どうしました？」

ふと扉の方を振り返って沈黙する朔耶に、フレイが小首を傾げる。朔耶は口の中のクッキーをお茶で流し込むと、急用が出来たと言って席を立った。

「またね～、あたしが帰ったからってレイスと”オシゴト”に励んじゃダメよ～～？」
「も、もぅ！　サクヤ様ったら……」

顔を赤くしながらチラリとレイスを振り返るフレイに、朔耶は『やっぱ”お私事”するつもりだったんかい！』等と内心ツッコミを入れつつ、宮廷魔術士長の執務室を後にした。

『どっち？』

シタノカイニ　オリタヨウダ

神社の精霊はレティレスティアが執務室の扉の前に立った時点で存在に気付いていたが、彼女から迷いの気配を感じたので朔耶に知らせる事無く、その動きを観察していた。

朔耶がレティレスティアの立ち去る気配を敏感に感じ取ったのは、観察していた神社の精霊と重なっている事が原因なのか、朔耶自身の能力なのかは分からない。

一つ下の階に下りてきた朔耶は、無数に並ぶ客間のドアを見渡した。この階には朔耶もお世話になった事のある宿泊用の客間が、迷路のような通路を挟んで立ち並ぶ、少し他の階とは雰囲気の違った造りになっている。

神社の精霊からレティレスティアの様子を聞いていた朔耶は、交感を繋ぐ前に一度直接会って話をしようとレティレスティアの痕跡を追う。普段からあまり使われる事の無いフロアは空気に人の気配が無く、それ故にレティレスティアの香水の香りがハッキリと残っていた。

「こ～こ～か～」
「きゃあああ！」

人目を忍んで客間の一室に籠もり、一人ションボリしていたレティレスティアは、イキナリ低い声を響かせて部屋に飛び込んで来た影に飛び上がって驚いた。思わずベッドの端まで後退ると枕を構えて迎撃態勢を取る。

「あはははははっ　レティ驚きすぎ」
「さ、サクヤ……　脅かさないで下さい」
朔耶は部屋に備え付けの机から椅子を引いて腰掛けると、ベッドにペタン座りしているレティレスティアと向かい合う。
「それで、どうしたの？」
「……」
レティレスティアは暫らく俯いていたが、やがてポツポツとその胸のうちを語り始めた。朔耶と初めて出会った時からずっと、自分は助けて貰ってばかりで、朔耶が困っている時や国の大事にも役に立てた事が無い自分に疑問を感じていると、自身の無力さを嘆く。
「うーん、別にそんな事ないと思うけどなぁ」
「でも、私は今まで何も……」
「レティは初めて会った時からあたしの事もよく助けてくれてるし、国の為にも働いてるじゃん」
「え？　私が、サクヤを……？」
朔耶はレティレスティアが本気で分かっていないようだったので、出会った時からの事を一つ一つあげて説明していく。
まず初めて会った時、レティレスティアによる『疎通の加護』と『精霊石の指輪』のお蔭で、朔耶は此方の世界の人々と意思疎通が出来る。これがなければ後のアマガ村での生活や、王都への旅路でもかなりの困難を強いられていただろう。
帝国の特殊部隊（精鋭騎士団だった）から逃れる際には、『風の加護』が大いに役立った。イーリスの誤解による一撃は『風の戒め』が行使されていなければ、心臓を貫かれて即死していた可能性が高

い。

その時の事を思い出してゾッとしたのか、レティレスティアは少し青褪めて首を竦めた。

勅令を出した後、毎日神殿に通って水鏡の間での報告を確かめていたお蔭で、アンバッスによる勅令内容の確認に居合わせ、直接話を通した事で朔耶の待遇が改善された。

朔耶が王都に着いた日、仕来りに添った挨拶の段取りをすっ飛ばしたレティレスティアの行動が、朔耶に対する各貴族の安易な干渉を大幅に思い止まらせる効果を生んだ。

コースティン家の晩餐会では交感によって朔耶の緊張を緩和し、ジャバール家に対する予備知識などでアウサレスの誘惑に対する予防線を張れた。

エルディネイア誘拐事件の時は、朔耶との交感で逸早く情報の伝達を行い、近衛の派遣やレイス達の城内活動を支援するなど、事件の概要に関する情報共有を極めて迅速に行い、事件の解決に大きく貢献している。

朔耶が帝国に拉致された時も、交感によって朔耶の状態に関する情報（精霊術の目覚め）を伝えたり、ショッキングな事件で気持ちが参っている時に精神的な心の支えとなっていた。

サムズ動乱の際には、やはり交感による情報伝達でクルストスへの早急な支援物資を手配したり、傭兵団の内情に即したエバンス攻略電撃作戦の実行によってカースティア攻略戦を終結に導くなど。

「ほらね、いっぱい助けて貰ってるでしょ？」
「……そうでしょうか？　サクヤの働きに比べれば、私のした事なんて……」
「あたしのは『ちょっと』派手だから目立ってるだけだよ。実際、レティが居なかったらかなり困ってた事とか多いよ？」
「サクヤ……」

朔耶はここで交感を繋ぐと、その言葉に嘘偽り無く決して同情心によるモノではない事を伝えた。レティレスティアからも不安の気持ちが晴れていき、安堵が広がっていく感情が伝わって来る。

「ありがとうサクヤ、私……これからも自分の出来る事を考えてみます」
「うんうん、前向き前向き。その調子でイーリスとの関係も進展させようねー」
「ま、前向きに善処します……」

少し元気を取り戻したレティレスティアをからかったりしつつ、朔耶は工房に向かうため客間を後にした。

城の出入り口を出た所で、朔耶は何か話し込んでいるイーリスとフューリを見つけた。イーリスは難しそうな顔をしており、フューリの表情も冴えない様子だ。朔耶が通り掛かった事に気付いたフューリが顔を上げる。

「あ……サクヤ様」
「二人とも難しい顔してるね、何か困り事？」

「ええまあ、先程の事で彼女達に確認しておきたい事がありまして」
「ふーん……　あ、四階の客間にレティがいるよ？　イーリス行ってあげたら？」

朔耶がレティレスティアの事を話して迎えに行くよう促すと、イーリスは朔耶の狙いを察して頷き、城内へと消えていった。
何処か思い詰めた様子のフューリに、朔耶は『こっちもか』等と思いながら冴えない表情の理由を訊ねる。

「……そうですね、サクヤ様にならお話しても」

フューリは神殿の事情について詳しい内容を語った。王宮区画に建つ王宮神殿には聖騎士団が常駐している。聖騎士団の中でもフューリ達のように精霊術を使う者で編成されたエリート集団でもある『精霊騎士団』。

神殿に所属する者で精霊術は使えないが戦闘を行える者や、準騎士以下の戦士達で編成される『神官戦士隊』、さらに戦闘力は無くとも神殿の兵として所属する『神官兵』。

そして主に神殿の業務を取り仕切る『精霊神官』が詰めているのだが、その精霊神官達に今回の査問会を起こした黒幕である重鎮四家の息が掛かっており、寄付金集めの貢献度等から神殿内では強い発言力を持っている。

賄賂と甘言で誑かされた者が上層を占める神殿の内情は、重鎮四家含む門閥貴族の意向が濃く反映されるようになり、神官兵や神官戦士隊は門閥家の私兵のように扱われている現状だという。彼等の中にも素性の問題や金銭面から重鎮派に付く者もいた。

聖騎士団に所属するには才能と実力を兼ね備えてなくてはならない為、特にその傾向が強いフューリ達『精霊騎士団』はそういった工作に惑わされる事も無かったが、重鎮達は神殿が自分達の勢力下にある事をより強く印象付ける意味で、王宮神殿の幹部に指令を出した。

今回の査問の席で重鎮達を警護し、サクヤと相対する事で聖騎士団、つまりは神殿側が王室よりも重鎮寄りである事を示す。王権も強く介入出来ない精霊神殿において、その神殿側が重鎮達の支持を示したとなれば、フレグンス領内での重鎮派の影響力は一気に広がる。

フューリ達はその選択を迫られていた。神殿上層が重鎮派に占められているので、逆らえば色々と行動に制限が課せられる。場合によっては団員の総入れ替え等という強硬手段も取られかねない状況にあったという。

現状は思わぬ展開により重鎮四家が遣り込められた事で神殿内の重鎮派も困惑しているらしく、フューリ達の命令無視に関しては今の所何も言ってくる気配がないそうだ。

「しかし、彼等もこの先、必ず何か行動を起こすでしょう。それを思うと……」

身内の恥を晒すようで、イーリス団長には話し辛かったらしい。近衛騎士団が王室直属の騎士団である事も関係している。

「ふーむ、成る程ねぇ。　勘に引っ掛かってたのってコレだったか……」

ふんふんふんと何やら呟きながら考え事に没頭する朔耶。ブツブツモードに入った朔耶はぶつぶつ言いながら問題と現状を整理すると、以前兄に教わったやり方で考えてみる。『どうすれば良いか』ではなく、『どうなれば良いか』。

「発言力……影響力……寄付金……重鎮派……ん？　寄付金で発言力アップ？」

重鎮派が如何にして神殿に自らの影響力を浸透させていったのか、それを考えれば答えは単純に出た。精霊神殿は元々王権とも距離を置いている独立した信仰組織である。

フレグンスの王族が精霊術に長けた一族である事と、王室からの寄付金で領内各地に神殿を建てた事から、精霊神殿はフレグンス王家と親密な関係にあった。然すれば、王の権威あってこその王国貴族の権力など、あまり重要ではない。

「結局お金かぁ」

なんだかなぁと思いつつも、それも一つの真理なのだろうと納得した朔耶は、神殿から重鎮派の影響力を掃う策を一つ思いついた。それが実行可能かどうかを確かめる為、朔耶はアルサレナに交感を試みる。

『アルサレナさーん』

――……サクヤ？　私に繋ぐなんて珍しい、どうしました？――

朔耶は神殿の窮状を掻い摘んで話すと、思いついた解決策を示して必要な情報について訊ねてみた。朔耶が求めた情報は、例の重鎮一家辺りの総財産。彼等の財力如何で、この策が使えるか否かが決

まる。

結果、重鎮一家の財産はサクヤの工房資金の約三十・五倍。パル金貨に換算して凡そ”十五万三千七十九枚”という金額が弾き出された。其処から三割を引き抜き、四家を合わせれば約十八万三千枚前後になる。

この金額は一年で支払おうとした場合、毎日五百枚前後収める事になり、幾ら門閥家でも無理があった。

『幾らくらいなら大丈夫なんですか？』

――そうですね、無駄な浪費を抑えるならば一日に百五十枚が限度、といった所でしょうか――

『えーと……』

朔耶はポケットから電卓を取り出してポチポチと叩き始める。フューリが朔耶の出した『謎の物体』をなんだろうという様子で覗き込んでいる。

『ふーむ、多少の不満も抑えられる程度は余裕を残して一日百三十枚前後、四年払いかな～』

――計算が速いですね、流石です――

『ズルしました、褒めないで下さい』

宮廷魔術士長を選ぶ『選定の儀』も大体四年周期くらいだと思い出した朔耶は、良い機会なので重鎮に課した人材育成の期限を四年に設定しておけば、最長でも彼等は四年後には引退する事になると提案した。罰金も四年で支払うよう求める事にする。

――中々面白い案ですね――

『それでですね～、アルサレナさんにお願いが』

朔耶が考えた策とは、重鎮四家から巻き上げた罰金を一旦神殿に預けて、そこから必要な分を随時引き出すようにする。神殿を銀行に見立てるのだ。預けたお金は神殿も必要があれば使う事が出来る。

神殿に幾ら入り、何時誰が何の目的で幾ら使ったかを後でキチンと領収書として朔耶に提出する。その辺りの管理をしっかり果たせて、信頼出来る公正な人間を神殿経理に就かせる為の人材固めに、アルサレナに協力を請う。

――資金の共有、という所ですか……新しい試みですね。　分かりました、早速手配しましょう――

重鎮派の影響力を削ぐための資金に、その重鎮達からの罰金を当てる辺り、やり方がえげつないとアルサレナは高く評価した。朔耶は微妙に喜んで良いのか迷った。

フューリ団長と共に王宮神殿を訪れた朔耶は、神殿食堂で昼食をご馳走になりながら自らの方針を語り、昼過ぎから訪れたアルサレナ選考の経理担当者と神殿の神官幹部も交えて概要を話し合い、詳細を詰めていった。

「そ、それでは門閥家の方々からサクヤ様への送金は全て神殿預かりになると？　それも比較的自由に使える」

「神殿運営の必要経費として、ならね。あたしの方からも少し頼みごとするかもしれないけど」

「えぇえぇ、それは勿論、構いませんとも。サクヤ様直々の指示でしたらば」

精霊神官の幹部は早々に朔耶の流れに付いた。その表情からは何処か晴々している雰囲気を感じなくもない。

『見限りが早いというか、もしかしたら結構嫌々従ってたのかもしれないね』

タイキョクヲミスエテ　ヤムオエズ　トイウジョウモ　ヨクアルコトダ

この策により、神殿には朔耶宛てに毎日百枚以上の金貨が四年間入り続ける事になり、そのお金は朔耶の許可の下、神殿が運営資金として利用出来る。朔耶は最高の寄付者になると同時に、名実共に精霊神殿の力の象徴として称えられる事になった。

この日の一連の出来事によって王宮神殿の重鎮派は発言力、影響力を失い、重鎮派だった神官達も貴族達から距離を取る態度を見せるようになった。ここに精霊神殿サクヤ派勢力が生まれる事になる。

「すっかり夜になっちゃったよ、今日はもう工房で作業するのやーめた」

朔耶は欠伸をしながら伸びをすると、客間を借りに城内へと戻っていった。

63話：対策の影響

翌朝、城の客間で目覚めた朔耶は、軽い朝食を用意して貰いに厨房のある階に下りてきた。厨房の朝は早く、まだ薄暗いうちから料理人達が働いていたので、直ぐにパンと薄肉が用意される。

厨房の料理人達は、王家に所縁のある偉人がこんな賄いモノのような食事でいいのかと途惑っていたが、朔耶は『いいのいいの』と軽く手を振り礼を言うと、袋詰めにして貰った朝食を持って自分の工房へと向かった。

「さーて、昨日考えてた分をやっときましょうかねー」

朔耶は昨晩寝る前にこれからの事や、神殿との係わり方と資金の使い方について考えていた。一度兄や弟達にも相談した方が良いと思いつつも、先ずは自分なりにやっておきたい事があったので、それを進めてみる。

サクヤ式送風機の部品を発注している馴染みの工房が開くまでの間、朔耶は魔力石ランプの部品を作っていた。既に数え切れない程作った部品なだけに、効率よく複数の石を並べて一遍に仕上げていく。

「そろそろ石の加工機械くらい出来るかな？」

今度ティルファでその辺りの事を調べてみようと思いつつ、作業の合間に朝食を摂る。行儀が悪いが、退屈な流れ作業には”ながら作業”が眠気対策にも有効なのだ。

サイキンノ　ワカイモノハ……

『何、お年寄りみたいなこと言ってんのよ……』

開放区の各工房が稼働を始める頃、朔耶は荷物持ちに衛兵を連れて馴染みの工房を訪れた。もうすっかり衛兵を使う事にも慣れた朔耶だったが、相変わらず”命令”ではなく”お願い”口調だ。衛兵達はソレを朔耶の慎ましさと捉えて好印象を持っていた。

部品を受け取り、自分の工房に戻って来た朔耶は一人でせっせと箱詰めを行う。朔耶の工房は朔耶が活動を思い至った時に稼働する為、常時工房に勤めるような従業員を雇っていない。

街灯設置事業のような長期間に及ぶ作業が続く時は臨時に作業員を雇っていたのだが、朔耶は今回の神殿絡みで進めようと思っている計画が上手く行った場合に備えて、住み込みの職人や作業員の雇用も検討していた。

「サクヤ様はいらっしゃいますかな?」

送風機キットの箱詰めが一段落する頃、工房を訪ねて来る者がいた。朔耶に店の棚を貸しているモラントン家のサーバンスだ。彼は作業台の上に山積みとなった送風機キットの箱詰めを見ると、嬉々として売り上げの事を報告する。

「いやあ、それはもう、飛ぶように売れてしまって！　次回入荷はまだかとせっつかれている次第でして」
「そっかぁ、結構受けたみたいだね」

客層はティルファから掘り出し物目当てに訪れている研究者が偶々見つけて衝動買いし、その仲間が口コミでやって来ては買っていくというパターンだったが、銀貨八枚は決して安くは無い為、三人で資金を出し合って一つ購入、といった具合らしい。

他には研究者肌の息子を持つ貴族が土産にと買っていく場合もあるそうだ。初回販売分の二十個は瞬く間に売れてしまったと、サーバンスは興奮気味に語った。

何せ僅か数日で元手無しの取り分銅貨八百枚もの儲けだ。美味し過ぎると眼が語っている。ちなみに朔耶の儲けは銅貨三千六百枚と少し、金貨換算だと約十二枚になる。

朔耶は作業台上の送風機キットの箱詰めを見つめながら待ち切れなさそうにソワソワしているサーバンスに苦笑すると、次の出荷分として持っていく許可を出した。

「おなか空いた」

サーバンスが従者と共に送風機キットを運び出していった後、昼頃まで魔力石ランプの部品作りをしていた朔耶は今日の作業を終了させて昼食を摂りに工房を後にした。途中、馴染みの工房で送風機の部品も発注しておく。

一般区に下りた朔耶は、以前ルティレイフィアと食事をしたカフェテリア風の店で計画案を纏めながら昼食を済ませ、考えの纏まった神殿絡みの計画を実行に移すため王宮神殿へと向かう。

「これはこれは、ようこそ御出で下さいました、サクヤ様！」

王宮区まで一っ飛びして来た朔耶は、神殿に入るなりすっ飛んできた昨日の精霊神官幹部に出迎えられた。朔耶が経理の者を交えて打ち合わせしたい話がある事を伝えると、直ぐに神殿の一室が会議室として用意される。

朔耶が考えた計画とは。朔耶に入る重鎮四家からの送金、所謂”サクヤの神殿預かり資金”を各地に点在する神殿に広げ、神殿を中心に街へ貢献する為の活動資金として利用する計画。

フレグンス領内に建つ精霊神殿のうち、組織的な活動を行える人員を持つ神殿は、王都以外ではクリューゲルのカースティアとサムズのエバンスにある二箇所。

これらの神殿に数日おきの間隔で一定額の資金を送り、それを使って街の発展などに貢献させる。

神殿が独自にフレグンス領の街を発展させようとするような規模の活動を行う事になるが、その資金の出所と指示は”王室特別査察官”である朔耶によるモノなので、王室の権威が傷つく事も無い。

また、神殿に対する王権の介入は控えられている為、精霊神殿の象徴として称えられている朔耶が神殿に指示を出し、神殿側がそれに応じる事は、”神殿の意向”なので、朔耶は行動の一つ一つに王

室から許可を得る必要が無く、比較的自由に動く事が出来る。

「なるほど、しかしこの計画を実行するとなると、現地での資金運営を管理する者をまた選定しなくてはなりませんね」

「特に、サムズでは汚職が懸念されますなぁ」

「あ、サムズの方は推したい人がいるから大丈夫」

カースティアもガリウス達がいるから大丈夫だろうと、朔耶は資金の流用についてはあまり心配していなかった。サムズの人材については王国騎士団に人事の申請をする必要がある。これに関しては、朔耶はここぞとばかりに『コネ』を使う事にした。

「うむ、許可しよう」

「ありがとうございま～す」

「……少しは考えてから発言なさって下さい」

コネ全開で『王の間』にて直接人事の申請を行う朔耶に、二つ返事で許可を出すカイゼル王。特に反対する理由も無いがアッサリし過ぎだとアルサレナ王妃がツッコミを入れている。

「それで、『信頼の証』本証もあげたいんですけど」

「かまわん、許可しよう」

「あ・な・た」

「いや、別に無理に考える必要はないではないか。サクヤが信頼する相手で且つ、先の動乱でも活躍した者と聞くぞ？」

朔耶はレアなロイヤル夫婦漫才を堪能しながらアンバッスの紋章を記帳に探した。地方貴族の記帳の中に、ポツンと残る紋章が一つ。回りの紋章には全て横線が引かれている。これは戦死などでその紋章を継ぐ血筋が途絶えた事を意味していた。

『この辺りのページの紋章って、殆ど横線が入ってる……』

レキセンノ　ツワモノトハ　コドクナ　ソンザイデモ　アル

「アンバッスさん……」

熊の横顔と左右に並ぶ剣、それに花で構成された紋章は、アンバッスのイメージにぴったりだと感じさせるも、朔耶は周囲の線を引かれた紋章の中で、一つだけ取り残されたようなアンバッスのシンプルな紋章に寂しさを感じて、和む気持ちにはなれなかった。

関係各所への連絡は神殿の『水鏡』を使って行い、辺境騎士団人事の配置換えも各神殿の連絡網によって迅速に行われた。その間も、朔耶は特に気に掛けていた事柄に関して優先的に動くよう指示を出し、各神殿への送金について王宮神殿で話し合いを重ねる。

「あ、もう夕方……あたし帰らなきゃ」

「お疲れ様でした。後は我々にお任せ下さい」

「必ずサクヤ様のご意向に沿いますよ」

伝えるべき内容は殆ど伝え終えているので、後は彼等の働きに期待して良い結果が出るよう祈るだけだ。朔耶は頷いて王宮神殿を後

にした。

「お？」

ふと見ると、街灯が点され始めた城の庭園を並んで歩くレティレスティアとイーリスの姿。二人とも穏かな雰囲気で何かを話しているようだった。

『よっしゃよっしゃ、いいよいいよー』

サクヤヨ……　ソノシュクシカタハ　ドウカト　オモウ

中年のおっさんオーラに似た空気を纏う朔耶に、神社の精霊はある筈も無い我が身の額に手を当てる気分で、朔耶と共に元の世界へと帰還した。

「たっだいまー」

何時ものように自宅庭に帰還した朔耶は、縁側から電気の点いている家内に上がった。居間にいた弟と拓朗が朔耶の帰宅を迎え、兄が二階から駆け下りてくる。

「お帰り、朔姉」

「朔耶お帰りー」

「マイシスター！　写真プリーズ！」

ほらよ、と審判の間で撮った決定的瞬間の衝撃写真を渡す朔耶。それは椅子を破壊された貴族達が一斉に尻から落ちて転がった時の写真で、全員が綺麗に揃って足を天井に向けて床に寝そべっているというシュールな光景だった。壇上の王と王妃が普通にしているので余計に奇妙だ。

「……なんの儀式だこれは」
「実はねー――」

貴族達の床上シンクロナイズ写真で素に戻った兄に、朔耶は査問会の事を説明するのだった。

「そんな事があったのか……」
「そういう時はちゃんと俺達に相談しろよ」
「う……だって直ぐ始まっちゃったんだもん」

一人で考えるなと行動の軽率を窘める弟に気圧されながら、朔耶は途中で居なくなる訳にはいかなかったと、状況が帰還を許さなかった事を説明した。ちなみに拓朗は夕飯の時間だったので帰宅している。（帰らないと母親（みよさん）が泣く）

「その後の計画もだよ、信仰の力って本当はすげえ厄介なんだぞ？」
「そうなの？」
「人を簡単に纏め易いけどな、反面、人を簡単に争わせ易いんだ」

信仰心は時に、善良で気弱な人間だった者を無慈悲な殺戮者に仕立て上げる。信仰が日々の生活をより良く過ごす為の心得となっている場合はまだ良い。心の拠り所となった場合は特に危険だと弟は語る。

「人間の罪の意識に対する究極の言い訳なんだ、良心さえ欺く程のな」

「うーん、でも神殿の人達にも向こうの街の人達にも、そんなガチガチの信仰心みたいなのは感じなかったけどなぁ」
「まあ、変な戒律とか異教徒に排他主義みたいな政策はとって無いみたいだから、そこはまだ安心だけど」

今後は朔耶の計画の効果次第で、神殿に属する者とそうでない者との間に何らかの軋轢が起きる可能性もあると指摘する弟。

「フレグンスの宗教や民族対立に対する政策って、ある種平等感覚で進められてただろ？」
「え、どうなんだろう？　あたしはよくわかんないんだけど」
「朔姉から聞いた話から分析すると、フレグンスが謂わば国教にしてる精霊神殿もソレほど力を持ってた訳じゃなかったろ？」

領地の各首都に建てられた精霊神殿も、特に大きな活動を行うでもなく、王都と遠方の領地とを繋ぐ情報伝達の役割が大きかった。朔耶の計画によって活発化した神殿の影響力が広まれば、精霊神殿以外の土着の信仰を持つ各地の領民に不安や不満が生まれる事にもなるかもしれない。

「どうしても優越感持ちたがる奴ってのはいるからな」
「ううー……でもぉ」
「まあまあ、そこまで心配する事はないだろう」

弟の理屈責めにタジタジしている朔耶を庇うように兄が横槍を入れてきた。資金を得た神殿の活動で勢力の差こそ明確になるであろうものの、元々フレグンスの領地では国教である精霊神殿が信仰対象として最も力を持っていた筈なのだ。

「コレまで神殿側とそれ以外の信者に、信仰上の理由でのトラブル

ってのが無かったんなら問題無いんじゃないか？」

精霊神殿以外の土着信仰を排除するような動きさえ無ければ、今後も両者は対立する理由がない。朔耶が進めようとした計画は街の発展に貢献する事であり、信者を増やす事ではないのだからと兄は反論してみせた。

「寧ろ街が発展して人々の暮らしが楽になれば、信仰に縋る程の窮状に陥る人間も減るだろうしな」

豊かな暮らしと、ささやかな信仰は、人々の心を寛容にする。宗教的な対立や民族的な対立に関しては特に気を使っているというフレグンスの統治方針なら、大丈夫だろうと持論を展開する兄。

「……」
「……」
「ん？　どうした？」

朔耶と弟はポカンと呆けた表情で兄を見上げていた。

「偽物だーー！」
「お兄ちゃんを何処へやった！」
「なにぃ！」

途端に兄弟姉妹でギャーギャーと大騒ぎを始める。これが、三人で何かを議論した時の結論法。だれも気まずくならないように、気に病まないようにと編み出された『騒いで流す察し法』である。

「兄ちゃんはな！　兄ちゃんはな！　兄ちゃんなんだぞーー！」

「うぁ……古（ふる）」

「あ、あたし夕飯の前にお風呂入ってこよっと」

これが、兄の恥ずかしいやっちまった体質が現われた『外して滑る察し法』である。

「ヒドイ……」

次の週末までの間、朔耶は夢の中で精霊の視点を使ってフレグンス各地の状況を見て回った。カースティアの釣り船観光は順調に客も増えている様子で、ティルファのドマック・ボルトン造船所では二号艇、三号艇の完成も近付いている。

優先的に働き掛けるよう指示しておいたカースティアの孤児院に対する援助も問題なく行われているようだ。銀貨一枚あればアマレストを含めた孤児院の子達を三日は食べさせられるのだ。

毎日金貨一枚の支援なら服を買ったり机や椅子、ベッドなどの購入も出来るだろう。

さらにカースティアでは教師を募って神殿が経営する学校も開かせた。此方は開校まで四日程掛かったが、街の住人はほぼ無料で授業が受けられる。教師の給料は十分な額が払われるので、ティルフ

ァから学者が自身の売り込みに来るほどだ。

サムズのクルストスでは動乱以降、止まっていた水道事業の工事が再開された。近くエバンスでも水道事業の工事が行われる事になっている。二つの街は同じ川沿いの街で環境も似ている為、クルストスでの作業経験がそのままエバンスで使える。

水道橋の建設には少々区画整理も必要だったが、神殿出資の仮設区画に一時住民を預かる形で水道事業計画は問題なく進んでいた。なにせ先の動乱では建物が軒並み破壊されていたので、どのみち多くの家に建て替えの必要があったのだ。

エバンスにも学校の建設が進められ、次いでカースティアも含めて街灯設置事業の準備も進められていた。

動乱後の混乱が治まった後、サムズでは一般の民達が『これでフレグンスから見限られるのでは無いか』と不安を抱えていたのだが、そこへ神殿から怒涛の勢いで街への発展事業と開発援助である。

街の人々は安堵と共にフレグンスへの帰属意識を深めた。特に、神殿のサクヤ派に対する信仰的な忠誠心を強めていった。

後は王都からクルストスまでの街道整備。此方はまだ手を付けられていないが、朔耶は弟と拓朗が作っている魔力石エンジン搭載車を走らせる下地に、長い街道を石畳で繋ぐ計画を上げていた。その街道にも何れは街灯を、と考えている。

街道全てに石畳を敷くという構想を聞かされた精霊神官と経理官は、あまりに壮大な発想に唖然としたものだった。

そうして週末がやって来る。

「三連休か～。向こうで特に何も無かったら、祝日は家でノンビリ過ごそうかな」

薄暗い自宅庭に出た朔耶は、何時かの赤い光沢のあるジャケットを羽織っている。此方の月も十一月に入り、気温も涼しくなって来たのでポケットも深くて向こうにも馴染み深いこのジャケットを着ていく事にしたのだ。

『それじゃあ、サムズのエバンスに跳べる？』

ヤッテミヨウ

ふっと景色が切り替わり、さらに視界が暗くなって一瞬の浮遊感にバランスが崩れる。覚えのあるその感覚に、あっと思った時はもう身体が宙を泳いでいた。べちっと、やけに弾力のある感触の上に落下する。

「あいったぁ……　また墜落かい」

スマヌ　ドウモモクヒョウチテンガ　ブレタヨウダ

今度は何処に落ちたんだと身体を起そうとして手を踏ん張り、そこでやっと自分の落下を受け止めたやけに弾力のある物体の正体に気付いた。モジャモジャの毛の奥に幾筋もの傷痕が走り、その奥にある鍛え上げられた胸筋が生命のサイクルである呼吸運動を営む。

「あ、アンバッスさん……」

「……お前は、本当に突拍子がないな」

自室で寝ている所に突然降って来られたアンバッスは、寝起きの呆れ顔で自分の上に覆いかぶさっている朔耶を見詰めた。現状を理解した朔耶は慌てて飛び退くと、アンバッスのベッドから降りた。

上半身裸のアンバッスは身体を起すと、やれやれといった具合に欠伸をしながら窓の外を確かめる。そしてまだ日も昇っていない事を確認すると、『せめて太陽が昇るまでは寝かせろよ』とぶつぶつ言いながら脇腹をボリボリ掻いていた。

「で、どうした？」

「え？　ああ、えっとコレ！」

朔耶は予め作製して自分の世界に持ち帰っていた紋章入りライターをポケットから出した。アンバッスはそれを受け取ると、『ふん……』と何時もの呟きを漏らす。

「本証か。　それにしてもサクヤ、お前だろう、俺をエバンスに移動させたのは」

「う、うん……、神殿の資金の流用とか監視しておいて欲しかったしね」

サムズ方面で信頼出来る人が他に思い浮かばなかったから等と説明しながら、朔耶は先程から別の事に気を取られていて、それを顔に出すまいと必死だった。

アンバッスの身体に触れた感触、体温、体臭、無数の傷痕等からつい、思い出してしまった二ヶ月前の出来事。夜明け前、クルストスの街角で心肺停止状態のアンバッスに施した精霊の癒しと救急蘇生処置の組み合わせ。

『……あ、あれは人口呼吸なのよ』

血の味がしたアンバッスの無骨な唇の感触――

『だからっ！　人口呼吸なんだってばっ！』

此処で急に部屋を出るのも不自然だと思って留まっているが、どうしても顔が熱くなってくる事が止められず焦り始める朔耶。

部屋が暗くて助かったと思いつつも、まともにアンバッスの顔を見られない。そんな何処か様子のおかしい朔耶に気付いたアンバッスは、壁際でそわそわしている目線の定まらない朔耶の顔を覗き込む。

「っ！」

「どうした？　具合でも悪いのか？」

アンバッスはこういう時、普段のぶっきら棒な喋り方ではなく相手を気遣う優しい声色で囁くので、今のテンパってしまっている朔耶としては非常に困るのだった。

「んななっ　何でもない！　そ、それじゃね」

「お、おい」

朔耶は頭の中で数瞬の会議の後、戦術的撤退を選んで速やかにアンバッスの自室から退出した。

『あーもーびっくりした……アンバッスさん、一度死んでフラグブレイカー体質が引っ繰り返ったんじゃないかしら』

アルジドノハ　ウブデアルナ

『やかましわっ　よくもやってくれたわね！』
ユルセ　ワザトデハナイ

朔耶が神社の精霊と口論しながら辺境騎士団本部宿舎の廊下を去った後、亡霊のような足取りでその場を立ち去る若い騎士の姿があった。彼は偶々明け方前の廊下を歩いていて、アンバッスの部屋から顔を赤らめた朔耶が出て来る所を目撃してしまったのだ。

「やっぱ抜け駆けだったんだ……やっぱ抜け駆けだったんだ……やっぱ抜け駆けだったんだ……やっぱ――」

部屋で騎士の装備に着替えながら謎の悪寒を感じて首を傾げるアンバッスなのであった。

64話：エバンスの翼【前】

辺境騎士団本部を出た朔耶は、エバンスの精霊神殿を様子見に訪れた。早朝から数人の熱心な信者がお祈りに来ている様子が窺える。お年寄りから小さな子供まで様々な人がいるようだ。朔耶は礼拝堂の隅っこの席に座って堂内を観察した。

精霊神官を含めてまだ朔耶に気付いている者はいない。ふと足元を見ると、丸められた紙くずが転がっていた。拾い上げて中を開くと、どうやら只の書き損じた書類らしい。礼拝堂の床は埃とゴミで結構散らかっている。

『こういう所からちゃんとやらないとねー』

神社の精霊から同意の意思を感じつつ、朔耶は紙くずを広げて伸ばし、何となく手慰みに折鶴などを折ってみたりするのだった。

「おねえちゃん、それなーに？」

朔耶が紙を折っている様子を、前の椅子の背凭れから顔を出して興味津々に見つめていた六歳くらいの女の子。折りあがった鶴を見てとうとう我慢できなくなり、声を掛けて来たらしい。

「折鶴っていう、紙で作った鳥だよ」

「へ～」

じ～～と、女の子の目は折鶴に釘付けだ。朔耶が苦笑しながら差し出すと『いいの？』と顔を上げる。『いいよ』と頷いて返すと、女の子は嬉しそうに鶴を受け取った。そして『えへへぇ』と微笑みながら大事そうにスカートのポケットに仕舞った。

早朝の礼拝を済ませた人達が神殿を後にする頃、朔耶と女の子のやり取りを見ていた精霊神官が、朔耶の外見的特徴から”サクヤ様御本人”ではないかと確かめにやって来る。

「あの、もしや貴方様は……」
「あ、ども。王室特別査察官の朔耶です」
「おおっ　やはり！　ようこそいらっしゃいました」

暫らく神官と話をして発展事業の状況や街の様子について情報を仕入れる。やはり治安の維持という面にまだまだ課題が残されると神官は語った。動乱前はサムズの自警団と辺境騎士団が共同で治安維持に努めて居たが、自警団と騎士団で揉め事があったり、犯罪組織との癒着が問題になったりと、今よりも殺伐とした空気があった。

自警団が解散した今は辺境騎士団のみで街の巡回などに当たっているが、それなりに規模の大きい街だけあって、中々手が回らない部分も多い。辺境騎士団の活動範囲に善良な民が集中し、その外側は無法地帯という状況が続いている。

「そっか、これからだね。地道に街を発展させていけば、無法を働く人より普通の住民が増えていって良くなるかも」
「なるほど、確かにそれはいい得てますな」

「じゃあ先ずはこの礼拝堂の掃除から始めてね」

人々の心を癒し教え導く場所がゴミだらけ埃だらけでは話にならないと、朔耶に軽く叱責された神官は、思わず恥ずかしさで顔を真っ赤にして『直ぐ片付けます』と人手を集めに走るのだった。

神殿を出た朔耶はエバンスの工房事情を調べようと、職人通りに向かう。市場と比べると少々物々しい雰囲気でもあり、寂れている雰囲気でもあるエバンスの職人通り。ここに並ぶ工房は小規模から大きくても中規模程度のモノしかない。

元々工業が盛んでは無いエバンスでは工房の需要も低く、傭兵向けに安物の武具を作って日銭を稼いでいた。

しかし、自警団が解散されて傭兵達が居なくなるとさらに需要は減り、人通りも少ない職人通りはすっかり寂れてしまっていた。軒先に並ぶ売れ残りの武具には埃が被っている。朔耶はその内の一軒を覗き込んだ。

「あんた、神殿の者かい？」

「うん、一応関係者かな」

作業台の前で簡易椅子に腰掛けてぼーっと通りを眺めていた工房主らしき男が声を掛けてきた。朔耶の返答を聞いた男は値踏みするように朔耶をねめつけると、ふっと鼻息を吐いて言った。

「ここいらにゃあ、あんた等みたいな御人の興味を引くようなモノはないよ」

買い物なら市場に行きなと街の中心を指し示すが、朔耶は買い物に来た訳ではない事を伝える。

「水道橋が出来ても井戸とかの需要って大事だと思うのよね」
「んん？　そりゃ、そうだろうなぁ」
「そこで手押しポンプの出番なわけよ」
「？」

工房の主はこの貴族風の少女の意図を計りかねていた。買い物をするでも無く、冷やかしでも無く、まさかお喋りをしに来た訳でもあるまいにと訝しんだ。

「ねえ、ポンプ作ってみない？　結構売れると思うよ？」
「ポンプってぇと……」

寂れてはいても工房の主、職人として新しい道具や機械類についての情報収集は怠らない。彼はクルストス近郊の集落にある水道橋の見物に向かうティルファから来た研究者達の話の中に、井戸の水を簡単に汲み上げる装置があった事を思い出した。

「そりゃまあ、確かに売れるだろうが、そんな簡単に作れる物でもねぇからなぁ」
「作り方教えてあげる」

ポカンとなる工房主。アレは王都フレグンスのみならず、今やオルドリア大陸中で知られる高名なサクヤ式の考案者が発明した装置だと聞いている。そこいらの弱小工房職人が手を出せるような代物ではない筈だ。

何を言い出すんだという目で朔耶を見上げ、次いでその姿をよくよく観察してハッとなる。黒髪黒瞳に子供のような容姿。フレグンスが国家機密として情報を封鎖している為、謎に包まれているサクヤ式考案者だが、僅かに流出した情報では――

「まさか……」

「あたしはフレグンス王室特別査察官の朔耶、巷(ちまた)で噂のサクヤ式考案者でーす。一応内緒ね？」

手押しポンプの構造はソレほど複雑ではない。仕掛けさえ理解すれば材料と道具を集めて割と簡単に作る事が出来る。朔耶が図に描いて仕組みを説明していると、何時の間にか周囲の工房からも職人達が集まって来て講義に耳を傾けていた。

職人通りの寂れた工房群に活性化を狙って喝を入れてきた朔耶は、昼食を市場通りに面する一般食堂で摂っていた。多少、店内で目立っていたが、貴族用の店は格調高過ぎて入る気になれないし、辺境騎士団本部にはアンバッスがいる。朝の事もあってか、何となく気まずいのだ。

『この辺りの住人は普通に活気あるよね』

シカシ　コノマチニハ　ソコラカシコカラ　アクイトゼツボウ　ウエルサケビヲ　カンジル

神社の精霊は職人通りから此処へ来る間も、複数の悪意が朔耶に向けられていた事を話す。

朔耶がアマガ村から王都までの旅をした時も、騎士団本部に居て

さえアンバッスとレイスが交代で見張りを行わなければならない程のデンジャラスな環境だったのだ。今のエバンスは神殿で聞いたとおり、相当に治安状況が悪いようだった。

昼食を食べ終え、精算を済ませて店を出る。朔耶の一連の行動を、通りの影から見張っている者がいた。如何にもお金を持っていそうな身形の少女に、店の主人が随分と吹っ掛けた値段を請求したのだが、サラッと払っていった朔耶を見てほくそ笑む見張る者。

次は何処へ行こうかと街の通りを歩いていた朔耶は、水道橋建設工事の様子でも見に行こうと、川のある方角に向かって路地を曲がった。二つの人影が直ぐその後を追って路地に入っていく。

「ちょっとまちな」
「？」

呼び止められて朔耶が振り返ると、少年と青年の中間くらいの歳に見える二人組みの若い男がナイフを向けていた。ちょっと路地を曲がった途端に強盗発生という治安の悪さを実感させられた朔耶は、思わず驚きに目を丸くした。

二人組みはそんな朔耶の反応を、恐怖で凍りついたと解釈し、計画の成功を確信した。二人組みが朔耶に近付こうとした瞬間、何処からともなく飛んで来た白い物体が二人組みの顔面に命中する。途端、砂埃が舞った。飛んで来たのは砂が詰められた布袋だった。

「こっちだ」
「え？」

塀の上から飛び降りて来た人影が朔耶の手を取ると、声を掛けて

走り出す。

「あ、まて！」

「ちくしょう、またジャックか！」

二人組みから『ジャック』と呼ばれた赤毛の少年に手を引かれて、朔耶は狭い路地を右へ左へと駆け抜ける。ジャック少年の赤毛の尻尾髪が地面を蹴るたび靡くように揺れている。

朔耶は追ってくる二人組みと、自分の手を引いて走る少年に其々視線を向けると、静かに意識の糸を伸ばし始めた。そのまま暫らく走っている内、諦めたのか二人組みの追ってくる気配が消えた。

「もう少し先に良い隠れ家があるんだ、そこでやり過ごそう」

入り組んだ路地を抜けると、表通りとはまるで雰囲気の違う通りに出た。辺りに建ち並ぶ褪せた色の壁と、所々屋根の崩れた建物群は、寂れているというよりも何処か古い街と感じさせる。ここはエバンスの旧市街に当る一角だった。

井戸が遠く、川からも離れているので次第に人が住まなくなった区画である。元々この付近には複数の井戸があったのだが、長い年月を経て大部分が枯れてしまっていた。エバンスの街で最も大きなスラム、サムズ最大の無法地帯でもある。

黙って大人しく付いて来る朔耶の手を引いてジャックが連れて来たのは、元は貴族が住んでいた屋敷の廃屋だった。造りがしっかりした建物なので古くなって手入れがされていなくとも崩れる事無く、荒れ果てた敷地内に佇んでいる。

門は拉げており、屋敷の扉は半分傾いてもう半分が無くなっていた。其処から出入りしているらしい。ジャックが先に入り、中から促されて朔耶が屋敷内に入ると、以外に小奇麗な内装で出迎えられた。

「驚いたろ？　外はボロボロだけどさ、中は結構綺麗に使ってるのさ」

そう言ってジャックが二階に向かって指笛を鳴らす。なんだろうと様子を窺っていた朔耶の前に、ジャックと同年代くらいの少年が三人程、階段の手摺りに乗って滑り降りてきた。

「へえ！　貴族の娘か？」
「上手くやったなぁジャック！」
「まあな」

彼等の会話に首を傾げて見せる朔耶。ジャックを正面にして降りてきた三人が両側から朔耶を取り囲み、背後の出入り口から先程の二人組みがニヤニヤ顔で現れた。種明かしをするようなゼスチャーでぱっと両手を広げて見せるジャック。

「まあ、こういう事だから、有り金ぜんぶ置いてってくれよ。そしたら無事に戻してやるからさ」

徒党を組んでスラムに生きる子供達の犯罪集団。所謂ストリートギャングというヤツだ。彼等は早くから両親を亡くし、或いは捨てられて孤児となった者達である。

この街にも孤児院は存在するが、カースティアの孤児院とは比べ

物にならない収容所のような所で、劣悪な環境に押し込められてロクに食事も与えられず、虐待が日常的に行われる様な施設だった。

ソコから逃げ出した子供達がスラムに集まって犯罪組織の一員となり、こうして余所者を襲ったり、表通りで盗みを働いたりして日々の稼ぎを得ている。

ジャックのグループは推定年齢六歳から十六歳で構成される小粒の八人集団だ。朔耶を取り囲んでいる彼等はジャックと同年の十四歳から十六歳、まだ仕事には参加出来ない六歳と八歳の子は留守番やアジトの見張り役である。

その見張り役である六歳と八歳の子が二階の渡り廊下からジャック達に警告を発した。

「だべっくのてしたがきたよ！」

ほぼ同時に、壊れた扉から現われる二人の男。こちらはジャック達のような少年ではなく、立派な成人男性のようだ。尤も、立派なのは身体の成長だけで、その見た目と、恐らくは中身もチンピラそのものといった風体だった。

「だべっくじゃねえ、ダンベック様だ」

「いょうジャック、景気はどうだ？」

「……警告すんのおせーよ」

ジャックは若干眉を顰めて小さく舌打ちした。朔耶に気付いたチンピラ二人はジロジロと下卑たニヤケ顔を浮かべて眺め始める。

彼等はこのスラム一帯を取り仕切る中心的組織の、末端に属する構成員だ。ジャック達のような子供だけで構成された組織は大抵、

親組織となる犯罪集団の元締めと繋がっている。

その下部組織として稼ぎの何割かを親組織に納める事で、ジャック達はスラムでの活動が許され、親組織から他グループとの抗争等で支援を受ける事が出来るのだ。

「中々珍しい毛色の見付けたなぁおい」
「結構良い値がつくんじゃねーかぁ？」
「……俺等は人買いとか、やんねーつってるだろ」
「ああ、分かってるさぁ。　俺達に任せとけよ、ちゃーんと分け前はやるからよ」

ジャックが仏頂面になるのを余所に、チンピラ二人は朔耶の買い手を何処にしようかと相談を始めた。親組織に属する彼等の決定に逆らう事は出来ない為、ジャック達にはそれ以上文句を言う事は許されない。

朔耶に向き直ったジャックは、バツが悪そうに表情を曇らせながら少し声を落として言った。

「聞いての通りだ、身体を奪う気はなかったんだが……仕方ない、悪いけど諦めてくれ」

『運が良ければ直ぐ家の者にでも買い戻されるさ』と、慰めにもならない慰めを送る。

「おい、部屋借りるぞ」

チンピラ二人は朔耶を適当な部屋へと引っぱっていった。彼等曰く、商品管理は良い取り引きのコツなのだそうだ。

此処へ連れ込まれた時と同様、やはり大人しく引っぱっていかれ

る黒髪の少女は、屋敷の一室に消える直前、ちらりとジャックを振り返った。珍しい黒い瞳が哀しそうに伏せられる。

「……ちっ　胸糞悪りぃ」

例えようも無い罪悪感に苛立ちを募らせたジャックは、悪態を吐いて壁を蹴った。『路地の途中で脅しときゃよかった』と後悔しながら屋敷の扉へと向かう。

「ど、どこ行くんだ？　ジャック」

親組織の構成員に面と向かって文句を言えるのは、このグループの中ではジャックぐらいのモノで、他の少年達は黙ってじっとしている事しか出来ない。

ジャックを含めグループの仲間は皆、孤児院から逃げ出してきた経緯を持つが、ジャックは孤児院に居た時から虐待を働く院長に歯向かう気概を持っていた。

孤児院を最初に脱走し、仲間が脱走する手引きをしたのもジャックである。故に、グループのリーダーをやっていた。

「終わるまで外にいるんだよ、お前等も嫌な事思い出したく無かったら一緒に来い」

孤児院で経験した虐待は少年達の心にトラウマとして刻まれている。少女の泣き叫ぶ声など好んで聞きたくは無いと、ジャックが屋敷を出ようとしたその時――

「へいたいがいっぱいきたよ！」

その警告とほぼ同時に屋敷の窓が蹴破られ、辺境騎士団の甲冑に身を包んだ騎士達が飛び込んで来た。慌てて仲間の元に駆け寄ったジャックは、硬直している皆を逃がす為に扉へ誘導しようとして振り返る。瞬間、半分しか無い扉が吹き飛んだ。

二振りの長剣を腰溜めに構え、古傷だらけの武張った顔を険しくした熊のような体躯の騎士がのっそり現われる。その騎士の鋭い眼光がジャック達を捉えると、少年等は足が竦んで動けなくなった。騎士が屋敷全体に響くような音量で声を張り上げる。

「サクヤァーー！　どこだぁーー！」
「はーい、ここでーす」

屋敷内の緊迫した空気を思いっきり無視するような、のほほんとした声が答える。みると、朔耶が先程引っぱり込まれた部屋の前からヒラヒラと手を振っていた。

朔耶はここへ来るまでの間、神殿の精霊神官に交感を繋いで事の詳細を知らせておいたのだ。場所もリアルタイムで情報を送っていたので、屋敷の外観情報から特定出来た。

最初の路地でジャックが現われた時から、朔耶は意識の糸で表面意識を読み取って彼等の企みを大体把握していたのだ。

「その子達やこの人達から聞き出せば、スラムの犯罪組織も壊滅できるね」

部屋の中ではチンピラ二人が電撃で気絶していた。

チンピラ構成員の二人が取調べを受ける為に連れて行かれた後、朔耶はジャック達と向き合っていた。この場にはアンバッスと彼の部下数人が残っている。

「へへっ……　騙してたつもりが騙されてたって訳か」
「うーん、そういうつもりは無かったんだけど」

自嘲気味に笑いながらも警戒するように朔耶の事を窺うジャックと、彼の背に隠れるようにして固まっているグループの少年達。その様子を見た朔耶は、彼等に更生を呼びかける。

「へっ　まっとうに生きられるならそうしてるさ、俺等みたいなガキだけで生きて行けるほど世の中甘く出来てねーのさ」
「大丈夫だよ、この街にだって孤児院あるんでしょ？　優先的に援助するようにしてるから、そこに入れば――」
「やめとけよ！　あんな糞みたいな所、金使うだけ無駄だぜ」

朔耶が孤児院に入るよう諭そうとすると、少年達は顔を強張らせ、ジャックがすかさずその提案に噛み付いた。彼等の反応をみて怪訝に思った朔耶は孤児院の事を詳しく聞き出し、そして絶句した。収容された孤児達は皆、日常的に虐待を受けていたという。

「アンバッスさん……」
「まあ、十分考えられる事だ」

訴えかけるような瞳を向けてくる朔耶に、アンバッスは頷いて答える。強盗や暴漢の犯罪が多いエバンスにおいては、閉鎖的な孤児院内の出来事など目立たなかった為、今まで見過ごされて来たのだ。

脱走した子供達が騎士団本部に訴え出るという事も無かった。これまでの騎士団は自警団と共同で活動していたし、孤児院から逃げ出した子供を自警団の傭兵が保護という名目で捕まえていた例もある。

朔耶は孤児院施設を視察して現院長の更迭を行う事を決意した。元々個人経営ではなくサムズ資本で設立された施設なので、フレグンス高官の国家権力を行使できる。　建物の状態如何では撤去建て替えも行う考えでいた。

夕方になり、二人のチンピラ構成員の取調べで明らかになったスラムを牛耳る中心的組織のボス、ダンベックの所在が明らかになると、アジトを急襲しに辺境騎士団の一個中隊が出動していった。

「さて、あたし達は孤児院の方へ行くわよ」
「ほんとに、スラム潰す気なのか……」

数十人の騎士達が完全武装でスラムに向かう様を呆然と見送るジャック達は、今まで暗澹（あんたん）としていたエバンスの街が大きく変わり始めている事を実感していた。

薄汚れた高い塀に囲まれた建物。窓は嵌め殺しで鉄格子まで付いている。重厚な門は侵入者を拒むように閉じられていた。
孤児院と呼ぶには些か物々しい雰囲気の施設。アンバッスを含む数人の騎士と少年達を連れ立ってやって来た朔耶は、ジャック達を

門の外に待たせて中に入ってみる事にした。　力尽くで。

ゴガアアアン　という凄まじい轟音を響かせて鉄の扉を雷撃で吹き飛ばす朔耶に、ジャック達が顔を引き攣らせた。同行の騎士達も同じく頬を引き攣らせると、思わず隊長のアンバッスに視線を向ける。

片眉を上げ、あんま気にするなと言わんばかりの飄々とした表情を返された騎士達は、数日前に突然クルストスから赴任してきた上司、田舎者騎士だと思っていたアンバッス中隊長に心底、尊敬の念を抱いたのだった。

一方、門を吹き飛ばされた孤児院の院長は、数人の少年達と騎士の姿を見て『告発されたか』と慌てたが、騎士が数人しかいない事に気付くと、用心棒を十人ほど引き連れて施設の入り口に立ちはだかった。

「ちょっとちょっと、困りますねぇこんな乱暴な事をされちゃあ。うちは孤児達を預かる施設ですよ？」

朔耶達の前に現われた院長はでっぷりと肥えている、という事もなく、どちらかと言えば痩せぎすでヒョロっとしており、神経質そうな印象を感じさせる背の高い初老の男だった。朔耶が代表で用件を告げる。

「フレグンス王室特別査察官の朔耶です、この孤児院で虐待が行われていると聞いて視察にきました」

院長は子供にしか見えない朔耶の口上に怪訝な表情を浮かべたが、

”王室特別査察官のサクヤ”と言えば、最近街の発展開発事業に出資している神殿の出資者である事に思い至り、援助を引き出すチャンスとばかりに満面の笑みで応対を始めた。

施設の中を見せるよう要求する朔耶に対し、院長は今は何かと散らかっているのでまた後日にでもと言いながら朔耶に何かを握らせる。開いて見ると、それは金貨だった。

「これは？」

「いやいや、今回はあまり持ち合わせもありませんで、次回はそれなりの御持て成しが出来るかと」

揉み手の院長に『これはダメだ』と見切りを付けた朔耶は、振り返ってアンバッスに金貨を渡す。

「アンバッスさん、贈賄の現行犯で拘束してあげて。これ、証拠品」

「うむ」

「！っ　な、何をおっしゃいますやら！　ええいっ放せ！　お前達何をやってる！　私を助けんか！」

カカカアァアアン

成り行きを傍観していた用心棒達は、院長の要請に短剣を抜こうとした瞬間、一瞬の閃光と乾いた音を響かせた電撃に意識を飛ばされ、崩れ落ちた。

用心棒の動きに警戒していた騎士達はまたも唖然としてアンバッス隊長に視線を向けるが、いいから仕事しろと言わんばかりに顔を

顰める隊長の動じなさっぷりに、自然と気持ちが落ち着いていった。
クルストスやカースティアの噂に聞く『フレグンスの戦女神』という存在を実感しながら、気絶している用心棒を拘束していく。

施設の中は酷い状態だった。殆どの子供が栄養失調に陥っており、不衛生な環境で病気を患っている子供も多い。
小さい子供はベッドも無い部屋に八人程が押し込められていて、成長するに従って相部屋する人数が少なく設定されているようだが、同じ規模の部屋に五人から押し込められていた子達もいれば、一人で個室を使っている子もいる。

個室の子供は比較的小奇麗な格好をしており、食事状況も他の子達と比べると幾分マシなようだった。一つ一つ部屋を回っては動ける子供達を施設の外に出し、神殿の仮設区画に一時受け入れしようという方向で話を進める。

病気で動けない子供には朔耶が精霊の癒しを使って回復させた。それでも手足が弱り、一人では歩行も困難な子供達には神殿から応援を呼んで運んで貰う。外に出られた子供達は院長の姿を見て怯えたが、拘束されている事が分かると安堵の表情を見せた。

夕暮れの西日が差す個室の一つを覗き込んだ朔耶は、誰もいない部屋の様子を見渡してふと、床に落ちているモノが目に付いた。

「これって……」

朔耶はそれを拾って施設の外に出ると、門の所で不貞腐れている

院長に訊ねる。

「コレを持ってた子は？」

無人だった個室の番号とその子の特徴を上げて問い質すも、院長は知らぬ存ぜぬで通し、元々あの部屋は空き部屋だったと語ったが、生活臭の残るあの部屋に人が住んでいた事は間違いない。

部屋に落ちていたのは書き損じの書類で作られた折鶴。朝、神殿の礼拝堂で朔耶が女の子にプレゼントしたモノだった。

「売られたのさ」

白を切り通そうとする院長に、朔耶は意図して隠そうとする相手にはあまり効果は望めなくとも、表面意識を読んで手掛かりを掴もうかと検討していた所に、横合いからジャックが口を出してきた。院長が青褪める。

朝、神殿の礼拝に行かせるのは売りに出す合図だという。礼拝堂には買い手がいて、そこで商品を見定めるのだとジャックは説明した。取引先はキトの闇業者。

「施設（ここ）にいなくて朝神殿で見たんなら、売られたんだ」

フレグンスでは奴隷制度を禁じ、人身売買は厳罰の対象と定めている。だがキトでは何でも商品として扱われる。川を渡った先はキトの領地なので、商談はそこで成立すればフレグンスの法には触れ無いと、開き直った院長は主張した。

「その金でこいつ等を養ってるんだ！　コレまでずっとそうやって

来た事だっ　何が悪い！」
「……少し黙れ」

喚き散らす院長にアンバッスは一言威嚇して黙らせると、先程から黙って俯いている朔耶の様子を窺った。夕日も沈み、辺りは一気に夜の帳が訪れる。朔耶の言う女の子の足取りを追う手立ては無い。
やはりショックを受けているのだろうと、アンバッスが気遣いの声を掛けようとした時、朔耶はバッと顔を上げて呟いた。

「見付けた……　あの子、交感能力があったんだ」

ジャックの話を聞いてから、神社の精霊の補佐を受けつつ意識の糸を全開にして街周辺を探っていた朔耶は、小さな糸を見つけてそれに触れた。それはハッキリとした意識ではなかったが、確かにあの女の子の意識だったのだ。

相手の交感能力が低すぎる為、会話は不可能だったが、女の子の感情や独り言の類をボンヤリと掴む事は出来た。位置は既に川を渡った先を徒歩で移動中。

朔耶の身体が魔力のオーラに包まれ、背中から巨大な漆黒の翼が噴出した。凄まじい風が巻き起こり、吹き飛ばされそうになったジャックが慌てて門にしがみ付く。　蒼く光る朔耶の瞳に一睨みされて腰を抜かす院長。

「アンバッスさん、あとお願いね」
「おう、気をつけて行ってこい」

漆黒の翼がエバンスの夜空に舞った。

65話：エバンスの翼【後】

大きな荷物を背負った商人風の男を中心に前後を軽く武装した四人が固め、丈の長い草を掻き分けながら暗い湿地帯の草原を進む。彼等はキトの闇業者と取り引きをする奴隷商人の一行であった。扱うモノがモノだけに、迂闊に地元の傭兵を雇う訳にもいかない為、自分達で防衛手段の武装をして闇に紛れるように行動する。

「にしても、やり難くなったもんだ」
「まったくだな、ちょっと前までは川さえ越えちまえば馬車でさっさと運べたのによ」
「何でもフレグンスの王都みてぇに街灯まで設置する計画があるらしいぞ」
「げぇー、余計な事してくれるぜ……」

動乱以後、混乱が一段落したかと思えば神殿出資の発展開発事業で突然活気付き始めたエバンスの街。
特に川沿いには水道事業で作業小屋などが建ち並び、日中は朝から夕方まで人々が往来して、夕方以降も工事現場の見物に訪れる者がうろつく為、川越えは夜まで待たねばならなくなった。
街が発展して民の生活水準が向上すれば、素材の入手も難しくなる。サムズには適度に貧困で居てくれないと困るのだ。

「未開地から運ぶのは手間だしなぁ」
「ああ、向こうは向こうでフレグンスの紅獅子が目ぇ光らせてやが

るしよ」

人身売買の素材を集める場合、サムズでは人買い、未開地では主に人狩りで集められる。人買いで手に入れる素材は状態がよく、品質も一定基準のモノが安定して供給されていた。今後はサムズでの人買いは厳しくなりそうなので、未開地からの入手に切り替える事を検討しなくてはならない。

未開地での人狩りは、向こうの人狩り組織に金を払って近隣の村や集落から適当に狩って来て貰う為、素材の品質が安定しない上に、身体が欠損していたり死に掛けていたりと、博打的な要素が高い。キトとの距離も遠く、行路には危険も多い。

それでも、当りを引けば一度で多額の報酬を得る事が出来る。危険と手間に見合うだけの価値はあった。

彼等が今回の取り引き相手の金払いの良さと、購入頻度、求められる品質について雑談を始めた時、荷物を運ぶ男の背中で大きな袋がもぞもぞと動いた。

「あれー鳥さん何処にいったのかな」

袋の中でスカートのポケットに入れておいた折鶴を探す女の子は、袋の口からひょこっと顔を出した。男が背負っているのは人を乗せて運べるように改造した籠で、ここに購入した子供を乗せて上から布袋を被せる事でカモフラージュしているのだ。商人の男は大人しくしているようにと、女の子に注意する。

「はーい、ねえねえお菓子いっぱいもらえるかなー？」

適当に相槌を打つ男。慣れている者ならさっさと黙らせる所だが、

彼自身はこの商売に手を出してまだ日が浅い為、こういう場合にどう対処して良いのか分からないのだ。護衛役の男達は新入りのそんな様子に、鼻白むとヒソヒソと囁きあう。

「まあ器量も悪くないし、あれだけ元気なら三日くらいは持つだろうさ」

「あそこの伯爵様は特に消費が激しいからなぁ、こっちは儲かっていいが、素材見つけるにも一苦労だ」

そうして街道に停めてある仲間の馬車まで後少し、という地点で、彼等の頭上から漆黒の翼が舞い降りた。予想だにしていなかった場所で思いもよらない空からの突然の襲撃に浮き足立つ商人達。

「う、うわっ　なんだ！」

「こんな所で魔物か！？」

慌てて武器を構えようとした四人は、漆黒の翼から放たれた雷撃に弾き飛ばされ、白煙を上げながら草原に転がった。荷物を背負っている男は、その存在から放たれる圧倒的な威圧感に恐怖して硬直する。

その存在は紫色に帯電する翼を威嚇するように広げながらゆっくり近付いて来ると、男に荷物を降ろして離れるよう言い放つ。男はガクガクと頷きながら背負っていた籠を下ろし、籠から離れた瞬間、雷撃で弾き飛ばされて草叢に倒れこんだ。

静まり返った周囲に意識の糸を伸ばして伏兵が居ないかをザッと

確認した朔耶は、翼を収めて大きな荷物に近付いた。もぞもぞ動く袋口を開けると、礼拝堂で会った女の子がキョトンとした瞳を向けてくる。

「あ、お姉ちゃんだー」
「……よかった、無事で」

怪我も無く、元気そうな様子の女の子に、朔耶はホッと胸を撫で下ろした。カモフラージュの布を取り払い、女の子を籠に縛り付けているロープから開放する。

「さあ、街へ帰ろうね」

そう言って女の子と手を繋ぐ朔耶。しかし、女の子は小首を傾げて自分はキトに行くのだと告げた。

「院長先生がね、キトに行けば美味しいモノいっぱい食べられるって、キレイな服も買ってもらえるんだって」

養子に貰われたと言われているらしく、女の子は自身が売られた事など何も分かっていなかった。女の子はお菓子や服を買って貰ったら孤児院の皆にも分けてあげるのだと屈託の無い笑顔で話す。朔耶は居た堪れなくなって女の子を抱き締めた。

「お姉ちゃん、どうしたの？」
「……ううん、何でもない。　キトに行かなくても美味しいモノ一杯食べられるように話してあげるから、帰ろうね」
「え～、キレイな服は？」
「キレイな服もね」

朔耶は女の子を抱き上げると、そのまま魔力のオーラで身体を包み、漆黒の翼を広げる。

『いけそう？』

コノクライデアレバ　モンダイナイ

余り重い物体を一緒に運ぼうとすると魔力の放出量がトンデモ無い事になり、離着陸の時に地面を吹き飛ばしてしまったり、朔耶の精神力にも影響を及ぼす。が、小さな女の子一人分くらいであれば大きなリュックを背負っている時とそう変わりは無い。

「うわぁっ　すごい！」

「あんまり動いちゃダメよ？」

女の子を抱えたまま、朔耶はエバンスの街へ向かって星の瞬く夜空へと舞い上がった。この時、二体の強力な精霊の力に間近で触れた事で、女の子の交感能力も刺激されていたのだが、それはまた別のお話である。

「……行ったか」

草原に転がっている護衛役だった商人の一人が空を見上げ、光の軌跡を残しながら飛び去る朔耶の姿を確認すると、すぐさま身体を起して自分の荷物を拾い集めた。『まさかフレグンスの戦女神に攻撃を受けるとはな』と独り言を呟く。

他の仲間はまだ気絶しているようだ。雷撃を受けた部分は革鎧が

焦げ付き、火傷でヒリヒリするが今は気にしていられない。治療も後回しにした男は、街道に馬車を停めて待っているであろう仲間の元を目指して走り出した。

彼は正当な取り引きを妨害されたとキトに報告して朔耶に報復が行くよう画策を考えていた。奴隷市はキトでも闇業者と称される裏家業の者が取り仕切ってはいるが、それは扱う商品に配慮した便宜上の定めた呼び名であって、キトでは奴隷の売買も普通に商売の一つとして罷り通っている。

キトの最高指導者が誰であるかなど商人達にとっては興味の無い話だが、キトの運営方針には賛同する者が多く、信用一筋の堅実な商売が出来る事から皆、キトに公布される指導者の指示には従うのだ。

隠れて取り引きをしているとはいえ、キトの領内で成立した取り引きは正当な物、それを邪魔されたと告発すればキトの何処にあるのか分からない政府からフレグンスへ正式な抗議が行く。

フレグンスから正式な謝罪が無ければ、公布一つでキトの商人はフレグンスとの交易を停止するだろう。

オルドリア大陸でキトの商人からソッポを向かれる事がどれ程の損失に繋がるかは、各国がキトから輸入している素材や衣料品の量を考えれば一目瞭然である。

しかし、王宮高官による正当な取り引きへの妨害があった事をフレグンスが認めた場合、国策で禁じている人身売買を認める事にも繋がる。サムズとの関係も考えればそれは出来ない筈。

そうなると取れる手段は一つ、高官個人の独断による行いだった

として罷免ないし更迭にて処断し、それを持ってキトからの抗議に応える事になるだろう。

「よし、これで完璧だ。　ひへへ……キトの商人を甘く見るなよ……」

草叢を掻き分け、他の仲間はまだ追ってこないのかと少し気にしながら湿地帯を抜ける小川の近くに出た瞬間、彼の世界は盛大に回った。ぬかるんだ地面が迫り、顔面から落ちていく。

『くそぉっ　余所見してたせいで転んだのか、くそっ顔を打ったじゃないか』

転んだ事に内心で悪態を付きながら、彼は身体を起そうとしたが、どうしても上手く動けなかった。

『早く立って走らないと、早く、ええいそんなに派手に転んだのか、まだ視界が回ってるぞ』

ごろりごろりと、彼はぬかるんだ軽い斜面で顔に泥と草を巻きつけながら小川に向かって転がっていく。

『いかん目の前が暗くなってきた、やけに冷え込むな、変だなぁ、早く立たなくては……』

ようやく動きが止まったものの、彼は身体を動かす事が出来なかった。彼の視界の先では穏かな流れの小川が水面に反射する僅かな星明りを揺らしている。彼が転がってきた斜面の上には、彼の身体がうつ伏せに倒れ、赤い小川を作っていた。

「他はどうだ？」
「始末して来ました、馬車にいた二人を含めて全部で七人だったようです」

小川の近くで死体を片付けている武装した傭兵らしき男の下に、同じく武装した五人の部下らしき者が報告に来る。彼等が装備している武具は無名の鍛冶職人が作った安物だが、全員が同じスタイルに纏められている。

彼等は奴隷商人達の仲間から聞き出した情報でサムズの民が密売されている事を知り、商人達の合流する地点にいた馬車を襲って待ち伏せしていたのだが、空から舞い下りる朔耶の姿を見てこの付近を調べに来ていたのだ。
奴隷商人達が蹴散らされた後の、朔耶と女の子のやり取りも目撃していた。

その時点で彼等の存在を神社の精霊は感知していたが、特に害意は認められず、寧ろ友好的でありながらも朔耶には知られたく無さそうな感情を感じたので、精霊は朔耶に報告しなかったのだ。

「そうか」

部下の報告に頷くと、小川の向こう岸に集まっている別働隊に視線を向けた。奪った馬車は長旅にも耐えられるよう補強され、商人の馬車から重厚な傭兵団の馬車へと変貌を遂げている。

「ヴィンス団長、出発の準備は整いました！」

馬車を確保した別働隊からの報告を受け、ヴィンスは部下と連れ

立って小川を渡る。クルストスで放置された後、彼等は傭兵団となってサムズとフレグンスを外から観察して来た。そして自分達の選択ミスを認めざるを得ない現実を目の当たりにしたのだ。

これからサムズは発展して豊かになり、人々の暮らしも良くなるだろう。しかし、裏切りを働いたヴィンス達はその事業に堂々と参加する事は出来ない。

「（ならば）　我々は我々に出来る事をするまでだ」

サムズの発展でキトの奴隷商人達は未開地に狙いをシフトさせた。未開地には未だ多く出没する魔物の被害が絶えず、サムズよりも貧しい小国や村々、集落が点在している。魔物退治は傭兵家業の儲け仕事でもあるが、貧しい土地故に報酬も期待できず、稼ぎにならないのでフリーの傭兵が売り込みに遠征する事は殆どない。

そんな未開地で兵を募り、奴隷狩りや魔物の脅威から住人達を守る為に剣を振るう『フレグンスの紅獅子』ことフレグンス第二王女ルティレイフィア。彼女を援護する為にヴィンス達は未開地へ赴く。

「自ら汚してしまった騎士の誇りだが、せめて騎士であった事の本懐を遂げ、死んでいった者達への詫びとしよう」

弱き民達を守り、人々を救う為に剣を振るう。危険な未開地でフレグンスの姫君がそれを行っているのならば、我等が馳せ参じて微力ながらその偉業の御手伝いに尽力しよう。それが、動乱後の混乱を彷徨ったヴィンス達の出した答えだった。

サムズを迂回し、クリューゲルの西端バーリッカムを経由して未開地を目指す。

ヴィンス傭兵騎士団の一行はキトの領地から夜の街道に馬車を走らせ、静かにこの地を出発するのだった。

エバンスの神殿前では炊き出しが行われており、孤児院の子供達や街の浮浪者までが集まって、振舞われる暖かいシチュー鍋に多くの人々が群がっていた。其処へ現れた黒い翼の天使にどよめきが起きる。

夜空に溶け込みそうな程の漆黒の翼を広げて光のオーラを纏い、小さな女の子を抱いて舞い降りて来る朔耶に人々は騒然となりながら目を瞠り、精霊神官は『精霊の使者よ……』と呟きながら恍惚の表情でその姿に見惚れていた。

この時の様子を繊細に描き出して有名になり、後にサムズ出身の画伯としてオルドリア大陸中にその名を知らしめるに至る画家の浮浪者がいたりするのだが、これもまた別の話である。

朔耶は神殿前に降りてから『しまった』と内心バツが悪そうに反省した。この姿で民衆の前に降り立てば、騒ぎになるのは分かっていた事だ。一刻も早く女の子を皆の所へ帰したい気持ちに焦り、うっかり考え無しに神殿前まで直行してしまったのだ。

地面に下ろされた女の子は神殿前に集まっている人々の中に孤児院の友達を見つけると、その輪に混じって空を飛んだ事を興奮気味

に話している。

「少々派手だったな」

「えへへ、うっかり失念してました」

アンバッスは『やっちまったぜ』と苦笑しながら頭を掻いている朔耶の目が赤い事に気付いたが、特に言及する事はしなかった。

朔耶は未だ恍惚としている神官にデコピンを食らわせて正気に戻すと、神殿出資で孤児院の大改装を行い、その後の経営も神殿主導で行う構想を持ち掛けた。信仰や教義とは別としながら、人道的見地によって行う孤児の保護と育成。

精霊神官達はそれは良い考えですと全面的に支持を表明し、早速明日からでも取り掛かる事を告げた。

以前ならば、何を行うにしても資金的な問題がまず大きな壁となり、工夫だけではどうにもならない事が多過ぎる停滞感に改革提唱者の求心力が失われて潰れてしまう事が多かった。しかし、今ならば豊富な活動資金が問題の半分以上を解決してくれる。

水道事業の工事により、作業員の雇用が増えてエバンスの街は活気付き始めている。それでも職にあぶれている人は多く、人員の確保には困らない。大量の作業員を雇って孤児院を改装し、快適な施設にして子供達を健全に育てて行く事は、今後の街の発展にも大きく貢献する事になるだろう。

「とりあえず、全ては明日からね」

朔耶はそう言って神官達との協議を一旦打ち切ると、ふとシチュー鍋の回りに群がっている民衆の中にジャック達の姿を見つけて徐に歩み寄る。朔耶が精霊神官達と話し込むのを見て、その存在に恐

々としながらもシチューにあり付こうと再び鍋に群がっていた民衆達は、朔耶が近付いて来た事で慌てて脇に下がっていく。
ジャックはリーダーとしての気概で威風堂々と踏み止まっていたが、仲間の子供達は及び腰で今にも逃げ出しそうだ。

「こらっ　なに踏ん反りかえってんのよ」
「あいてっ！」

とりあえずペチッっとオデコに一発入れておくと、朔耶はジャック達も孤児院に戻る事を勧めた。改装時に施設の不備や必要なモノを指示して欲しいと依頼する。ジャックは少し怪訝な表情になると、探るような雰囲気で問い質す。

「……俺ら、罰しなくていいのかよ」
「ああ、そう言えばそうだったわね」

思い出したようにポンと手を打つ朔耶に、ジャック達はあからさまにうろたえた。思わず『薮蛇だったか』と引き攣るジャックに、朔耶は笑って答える。

「じゃあ、罰として他のジャック達みたいな子達を助けてあげてね」
「え？」

ジャック達のようなストリートギャングは他にも幾つか存在し、騎士団がスラムの壊滅に動いた今日、街に逃げ込んで来ているグループがいるとの報告が入っている。彼等に投降を呼びかけ、孤児院に復帰させる役をジャック達にやらせるのだ。

朔耶の提案により、ジャックは孤児院内に設立する組織『エバンス子供会』で会長を任せられる事になった。

「マジかよ……」

翌日――

早朝から神殿前では作業員募集の報に大勢の職を求める人々が集まっていた。辺境騎士団本部の宿舎に泊まった朔耶は、まず神殿に顔を出して作業員の集まり具合を窺い、次いで孤児院施設の状態を調べに訪れる。

少数の見張りを残して無人となった院内を歩き、部屋の数や規模を調べて回ると、その足で職人通りに向かった。通りに並ぶ工房群に椅子や机、ベッド、窓枠、といった日用品を大量に発注すると、作業を指揮する為に神殿へ取って返す。

騎士団から派遣された者が指揮する水道橋工事の方はある程度の土木作業経験がある者が優遇されるので、そちらの募集枠から漏れた人達がこちらの作業員募集に乗り、総勢八十人近い作業員が集まっていた。

「え～、おはよう御座います。あたしは今回の作業を指揮する王室特別査察官の朔耶です。予定では今日と明日に亘って孤児院の大改装を行う予定です。あ、予定って二回言っちゃった……。　それじゃあ皆さん、今日一日宜しくお願いしまーす」

朔耶に作業開始前の挨拶を向けられ、戸惑いながらも応える作業員達。こんな風に現場を指揮する者が作業員に『宜しくお願いする』等という行為は、この世界の仕事場では余り例が無い。笑いも取りつつの朔耶の挨拶は、概ね好意的に受け止められた。

孤児院へ向かう途中、朔耶は大勢の作業員達に混じって歩いているジャックの姿を見つけた。

「おはよ、ジャック。　今日は内装の指示とかお願いね」

「ああ……」

少し戸惑った様子で朔耶の挨拶に応えるジャック。どうも朔耶という人物の在り方を、まだ掴みきれていないようだ。

現場に到着すると、先ずは資材を運び込む者と足場を作る者、中を掃除する者とに分かれて其々グループを形成し、一斉に動き出した。院内から運び出された汚れたシーツや壊れた日用品は全て敷地内の端に集め、後で選り分けて要らない物は処分する。

院内の壁や床を掃除しつつ、嵌め殺しの窓は全て取り外して空気の入れ替えも同時に行う。孤児院としては石造りの立派な建物なので、外観や内装をしっかり整えれば非常に住み心地の良い環境が期待できる。

嘗ては子供達を逃がさない為に設けられた高い塀も、綺麗に汚れを落とされて子供達を外敵から守る防壁に生まれ変わるのだ。

運びこまれた資材で足場が組まれると、外壁の掃除と鉄格子の除

去に取り掛かった。その間、院内の傷んでいる箇所や問題のある箇所をジャックが指摘して回り、修繕ないし改善処置が施されていく。

昼食時、朔耶が休憩がてら職人通りの様子を見に行くと、各工房ともフル稼働で働いていた。何れの工房も余り大きい建物では無い為、出来上がった椅子やテーブルが通りにはみ出して工房の前に並べられている。

雨でも降ったら大変だと、朔耶は昼からの作業が始まり次第、手勢を連れて出来上がった分を引き取りに来た。孤児院の大部屋は既に清掃が済んでいるので、先ずは其処に設置するベッドから運び込む。

次いで、直ぐに設置可能な食堂等に置くテーブルや椅子を運んでいく。昨日作り方を教えた手押しポンプも、しっかりした物が完成したなら買い取って敷地内の井戸に設置する趣を伝えておいた。

窓や扉は現場に出張してきた工房の職人達が枠を合わせて製作する。作業は順調に進み、灰色だった外壁と塀は染料で白に塗り替えられていった。そして入り口の門の部分に面した塀の壁には――

「え、ちょっとこれって……」

巨大な漆黒の翼が門を挟んで両側に伸びるように描かれていた。

「なかなか良い趣向でしょう。ほら、あそこで外壁に動物を描いてる男が描いたのですよ」

現場の補佐として付いて来ていた神官がニコニコと指し示した先

では、施設の外壁に馬やら犬やら竜やらを描いている浮浪者の様な装いの男。立ち振る舞いや筆使いが何だか画家っぽい。

「まあ、いいけど……」

今後ここを訪れる子供達がコレを見たら怖がるのではないか等と、朔耶は何処か釈然としない気持ちで入り口の塀の壁に描かれた巨大な黒い翼を眺めた。ちなみに門を閉じると翼の中心になる門の扉には子供を抱いた朔耶の姿が描かれる事になっているのだが、この時の朔耶は知る由も無かったので止める事も出来なかったのであった。

（ずっと後になって発見し、悶絶する破目になった）

夕方になる頃には施設内の清掃に窓や扉の設置も終わり、ベッドや椅子、テーブルも孤児院全体で三分の一部屋分程は整っていた。残りは家具工房職人さん達の頑張り次第である。

「皆さんお疲れ様ー、お給金を支払いますので並んで下さーい」

篝火の焚かれる神殿前に集合した作業員達は、朔耶の案内に従って列を作り、順番に給金を受け取っていく。

報酬を受け取った人々は皆、満足そうに帰っていった。朔耶は明日の作業は少人数で十分なので、次は別の人材募集について考えていた。『孤児達の世話をしてくれる人大募集』である。

「お姉ーちゃん！」

「ん？」

不意に聞き覚えのある元気な声に呼ばれて朔耶が振り返ると、そこには友達を連れた例の女の子が紙の束を持って立っていた。もじもじしている友達との会話で、女の子の名前は『チューリー』だと分かった。

「どうしたの？」

「あのね？　鳥さんの作りかた教えてほしいの」

そう言って紙の束を差し出すチューリー、よく見るとその紙束は騎士団本部に置いてある書類用の紙だった。書き損じの紙ではなく新品である。朔耶がこの紙束はどうしたのかと訊ねると――

「あのねー、お顔に一杯傷があるおじちゃんがくれたの」

「アンバッスさんか」

あまりの分かり易さに思わず笑みが零れる。

朔耶は夜までの僅かな時間、彼女達と礼拝堂の机で折り紙を折って過ごしたのだった。

66話：暗雲あれど平穏な一日

「あー……、今日は祝日だったっけ」

文化の日だったかなーと呟きながら、朔耶はベッドから起き出すと顔を洗ってジャケットを羽織る。

昨夜も辺境騎士団本部の宿舎に泊まった朔耶は、コンパクトの鏡で身嗜みを整えて部屋を出た。今日の孤児院施設での作業は殆ど椅子やテーブルを運び込むだけなので、雇う作業員の数を控えめにして子供達にも手伝って貰う計画だ。

「おはよ、アンバッスさん」

「おう」

朔耶が食堂に入ると、入れ替わりに朝食を終えたアンバッスが出て行く所だったので挨拶を交わす。今日はスラムの建物を撤去する作業の下見に行くらしい。

「旧市街ってどうなるの？」

「一応更地にしてから水道橋を通した上で新たに街を広げていく方向で動いてるな」

解体作業に瓦礫の撤去作業、それが終われば水道橋建設作業、さらには民家等の建築作業と雇用が続くので、暫らくサムズは好景気に恵まれそうだとアンバッスは話した。何れも神殿からの出資あっ

てのモノだが。

「戦女神なんて呼ばれているが、俺からすればサクヤは豊穣の女神だな」

「そ、そうかな」

さらっとそんな事を言いながら仕事に向かうアンバッスの背中を見送りながら、朔耶は『やっぱフラグブレイカー体質反転してる？』と内心呟くのだった。その内『上（かみ）さんが出来た』とか聞くかもしれない。

朝食を終えて朔耶が神殿にやって来ると、既に大勢の作業員希望者が集まっていたが、今日は少人数しか雇わないので二十人程を選んで後は解散して貰う。

選考から漏れた人々は残念そうに肩を落としていたが、旧市街の解体と撤去の仕事で近い内に募集が掛かるだろうという話を朔耶から聞くと、確かにあの区域を更地にするなら大勢の人手が要るだろうと皆、期待に胸を膨らませて街中へ散っていった。

作業員を引き連れて職人通りの工房群を訪ねた朔耶達一行は、工房前に並べられているテーブルや椅子を引き取って孤児院施設へと運ぶ作業を開始した。昨日の夜晩くまで仕事をしていたらしく、発注した分の数は殆ど揃っている。

孤児院施設の敷地内に運びこんだ椅子やテーブルは子供達が院内へと運び込む。子供達の指揮にはジャックが任されていた。荷物運びに参加させられない小さい子供達は敷地の隅の方で大人しく遊ば

せている。

ただ、その遊びの内容に若干問題があって、ジャックは頭を悩ませていた。遊び組みの子供達は昨日、朔耶から教わった紙鉄砲をパンパン鳴らして遊んでいるので、気が散って仕方ないのだ。音が煩わしいのではなく、興味を惹かれて仕方がないという。

ちなみに紙鉄砲の折り方をマスターしているのは朔耶に直接教わったチューリーとその友達の二人だけなので、二人は皆の紙鉄砲を折るのに大忙しな様子だった。お蔭でコレまでの孤児院内にあった扱いの違いによる軋轢などは、今のところ見られない。

そうして、昼前には全ての運搬作業が終了した。後は孤児達の面倒を見てくれる院長や世話係を雇う事で本格的な孤児院の運営が始められる。

神殿前に戻った朔耶は作業員達に給金を支払って今日の作業の終了を告げると、神殿の神官達と孤児院の従業員を雇う相談を始めた。信仰と教義の問題を考えて、神殿からの人材派遣はやめておくよう指示をだす。

神官達もフレグンスの政策に従って民族や宗派による対立を避ける事に腐心して来た経緯があったので、その辺りについては理解を示し、皆が納得済であった。

「それじゃあ、後は任せるね」

朔耶は後の事を神官達に託すと、昼食を摂りに一度自宅へと帰還する事にした。

『ふう、今回はアンバッスさんにライター渡してちょっと街を見るつもりだったのに、色々あったね』
サクヤニトッテモ　ヨイケイケンデ　アッタナ

「ただいまー、昼ご飯あるー？」

自宅に帰って来た朔耶はとりあえずお風呂にも入りたいなとキッチンを通り抜けてお風呂場に向かうと、シャワーを浴びようと服を脱いだ。二階の部屋からいそいそと下りて来た兄が脱衣所の扉越しに声を掛ける。

「飯食うのか風呂入るのかどっちだ」
「シャワー上がったら食べるー」

自宅でノンビリ過ごしていた兄は、バタバタと騒がしい朔耶の返答を受けて昼食のチャーハンをレンジで温めた。こういう所で点数を稼いで異世界美女の写真ゲット率を上げるのだ。ちなみに弟は拓朗と今日も工場で作業をしている。

兄がコーヒーを飲んでいる所にシャワーを浴び終えてバスタオル一枚で出てきた朔耶は、チャーハンを口に運びながらエバンスでの出来事を掻い摘んで話した。

朔耶は大胆且つサバサバした性格で豪胆に思われ勝ちだが、実際は立ち直りが早いだけで、周りから思われているような物事に動じない性格という訳ではない。エバンスでの経験は、やはり家族の誰

かに聞いて貰わないと気が滅入る部分があるのだ。

内容が内容だけに、その幼女の写真プリーズというネタは自重する兄。

「まあ、その国その時代の価値観があるからな。奴隷制度を禁止してる辺り、フレグンスの王様は中々進歩的なのかもな」

後ろに文化人と付くと途端に胡散臭くなりそうな呼称だが、王政帝政の文化圏で身分制度を形骸化に導く政策を行ったり、人身売買に対する厳罰をセットにした奴隷制の禁止など、文明開化の兆候が見られると兄は評した。

「帝国の方はどうなんだ？」

「どうなんだろう……？　あんまりそれっぽい人は見なかったように思うけど」

キトの闇業者とやらが人身売買を商売として成り立たせるには、それなりの需要となる客が必要な訳だが、労働力として買うなら相応の土地を持つ者であると考えられるし、愛玩用としても奴隷を買える程の財力を持つ者となれば、一介の商人や中流以下の貴族とは考え難い。

フレグンスでは奴隷を持つ事を禁じられているし、ティルファも最高指導者であるブラハミルトの人柄から朔耶が感じた限りでは、人権を尊重していそうな国である。少なくとも、朔耶がティルファを訪れた時、奴隷（それ）らしい人は見掛けなかった。

帝国は歴代皇帝の遊戯室の一部を閉鎖したバルティアの性格上、奴隷の買い付けに良い顔をするとは思えない、が、しかし――

「うーん、帝都はお城の一部しか見てないからなぁ」

帝都の城は城下街を丸ごと城内に組み込んでしまったような巨大な城塞都市と化しているので、帝国貴族達の住む一角を含めて朔耶も全貌は把握していない。前皇帝（エィディアス）ならば人体実験に使う等として購入していてもおかしくないのだ。

「その流れで今も普通に奴隷を買っている帝国貴族がいても、おかしくはないと」

「かなぁ……、まあフレグンスでも屋敷の中に居たら分からないし」

意識の糸レーダーを使えば隠されている人間を探知する事も出来るが、奴隷の人達が普段どんな意識を持って過ごしているのかが分からないので、目標となる思考が定まらない。

「ふむ……、奴隷の売買を無くしたいなら、まずは国のトップにそれを了承してもらう事だな。フレグンスは既に対応済みだからティルファと帝国で同じ様に禁止令を出して貰えばいい。キトのトップは、分からないんだったな？」

「うん、キトは何処に政府があるか分からないんだってさ。……でも、聞いて貰えるかな？」

「大丈夫なんじゃないか？　帝国の皇帝は朔耶にゾッコン、ティルファの指導者は常識人なんだろ？」

「ゾッコンて……バルは、まぁそんな感じだけどねー。　ブラハミルトさんは話の通じそうな人だし」

兄と話して少し気持ちが軽くなった朔耶は、その方法で行ってみようかと頷いた。

「ところでマイシスターよ」

「ん？」
「そのバスタオルは何故に落ちないのだ」
「精霊術使ってるもん」

朔耶の身体に軽く巻いてあるダケのバスタオルは、朔耶が両手でチャーハンを食べて麦茶を飲んでと結構動いているにも拘らず、服のようにぴったり張り付いてハラリとも崩れない。
ぴったり過ぎて身体のラインがクッキリ出ているのだが、ソコには気付いていないようだ。

「オゥ！　シット！」
「なんで横文字……？」

『精霊の風』を神社の精霊に微調整して貰う事で、身体を薄い空気の膜で包むような使い方が出来る。これで物を宙に浮かせたりするのは難しいが、タオルを身体にくっ付けるぐらいなら割と簡単に出来るのだ。逆に多少の雨などを弾く事にも使える。

朔耶は食べ終えた昼食の皿を流しに浸けると、『残念でした～ホレホレー』等と言いながら何処かの腰蓑（こしみの）を着けた変態親父のような踊りを披露しつつ、キッチンを出ていった。

「……いや～堪能した」

身体にぴったり張り付いて胸や腰のラインがクッキリ出ている姿での”ふしぎな踊り”は、兄に中々の眼福を味合わせたのであった。
兄のＭＰが１００回復した。

部屋でラフな服に着替えた朔耶は、夕方まだ時間があるので工房の様子を見に行こうと庭に出る。

「なんだ、今日はまた行くのか？」
「うん。もう直ぐ忙しくなりそうだから、今の内に部品の量産とかしておきたいからね」
「写真もよろー」
「はいはい」

兄と適当な会話を交しつつ、朔耶は王都に向けて転移した。景色が切り替わり、沢山の綺麗な花が咲く花壇が視界に入る。どうやら城の庭園に出たようだ。

「庭園か～」
テイレモヨク　ユキトドイテ　イルナ

暫し花々を観賞して庭園を後にした朔耶は、漆黒の翼を広げると、工房に向かって空へと舞い上がった。
王宮区画から上流区を飛び越え、開放区へと移動する途中、王都大学院の校庭で模擬戦の大規模戦をやっているのが見えたので、そっちに興味を惹かれた朔耶は大学院の門の前に降り立った。門番が思わず仰け反る。

「模擬戦の見学にきました～」
「よ、ようこそ御出で下さいました！」
「丁度、今さっき始まった所ですよ」

顔パスで通して貰った朔耶は早速、大規模戦の見学に校庭へと向かう。ワーワーという声援と気勢の籠もった掛け声が響いてくる雰

囲気は、何処かスポーツの試合中に訪れる競技場の通路を感じさせた。このワクワク感が心地良い。

応援席のような設備は無いので、見学者は模擬戦エリアの外側で立ち見か、木に登ったり校舎の上階の窓から観戦している。

今日の大規模戦は団体戦での上位六チームの内、さらに上位ニチームが敵味方に別れ、残りの四チームを其々指揮下に入れた形で行われる。約二十人対二十人、総勢四十人からなる対抗戦である。

団体戦や個人戦に比べると怪我人の出る率も高く、人数も多いので治癒の使える教師や生徒が控え、緊急時に備えていた。

「おー凄い凄い」

陣形を組んで向かい合う両陣営、突撃と迎撃、風や水の攻撃魔術が飛び交う校庭の訓練場は、模擬戦とはいえ合戦場さながらの迫力があった。双方、大将となる指揮官の傍にはシンボルの旗が掲げられており、これが倒されると負けになる。

「あ、ルディだ」

青い旗の傍に立つ青軍陣営の指揮官はエルディネイアが担当していた。旗を掲げているのはドーソンで、エルディネイアの周囲は彼女のチームメンバーで固められている。

一方の緑の旗を掲げる緑軍陣営では、以前、朔耶が模擬戦の見学に来てドーソンに抜刀術を教えた時の団体戦で、エルディネイアのチームと戦っていた騎士スタイルの生徒が指揮を執っていた。

「あーあの人か～、ルディ押されてるなぁ」

ヘイノ　ウンヨウニ　カタヨリガ　ミラレルナ

『分かるの？』
タショウハ　ナ

神社の精霊が指摘した通り、エルディネイアの指揮には部隊の使い方に偏りが見られた。
例によって魔術士嫌いと突貫体質な性格が災いしているらしく、剣士の突撃による波状攻撃を繰り返して味方魔術士の援護を効果的に使えず、相手に与えるダメージを上回る損害を出している。

「あーあー、らしいと言えばらしいんだけど……」

派手な突撃戦法は観客を沸かせる。がしかし、目に見えてエルディネイア軍はその数を減らしていった。結局そのままの勢いで模擬戦は進み、前半戦を終了してインターバルに入った時には、エルディネイア軍は前衛の半数を失っていた。

緑の騎士軍の方は突撃の勢いを魔術士の一斉射で削ぎつつ、盾持ちと槍使いで満遍なく合わせていく戦法で僅かな損害しか受けていないようだ。

「前衛が足りませんわ、このままじゃ攻撃力が足りなくて旗を落とすのは難しいですわね」
「やっぱり突撃で貫通ってのは無理だと思うよ？」

一気呵成に攻めて相手の守りを打ち抜き、旗を狙い撃ちにする作戦を上げていたエルディネイアは戦力不足を訴え、ドーソンが作戦の遂行に異議を唱える。チームメンバー達もやはり無理があったの

ではと否定的な意見を口にした。

「相手は守りに定評のあるアイツだからな」

「そうですわねぇ～、彼の守りはぁ固いですしぃー」

作戦の修正変更を考えねばと膝を付き合わせて意見を出し合っている所に、どう見ても学院の生徒ではない黒髪の少女がてくてく陣地内を歩いてくる。エルディネイアチームの指揮下に入っている他のチームの青軍生徒達は、首を傾げてその姿を目で追った。

「苦労してるみたいだね、一応激励に来たよ」

「やあ！　サクヤじゃないか、久し振りだねぇ」

指揮官チームであるエルディネイアのチームメンバーが集まっている所にやって来た朔耶が声を掛けると、ドーソンが真っ先に反応した。ここに居るチームメンバーは一応、朔耶とは面識がある。あるが故に、緊張して固まってしまっているのだが。

エルディネイアは朔耶の姿を見て一瞬目を丸くしたが、直ぐにすまし顔に戻ると『越権行為じゃありませんの？』と、朔耶が試合中の陣地内をうろつく事に非難を向ける。

「いいのよ、権力は使う為にあるんだから」

「……はぁ」

つい最近、その権力を使った者を叩き潰しておいてそれかと、エルディネイアは溜め息を吐いた。

尤も、それを突っ込んでみたら『エライ人は責任取る為に居るのよ』と返されてエルディネイアは何も言えなくなった。どうやら異

世界の賢者の言葉は此方のモノより遥かに進んでおり、用法もやたら洗練されているようだ、と。

そんなやり取りをしつつ、朔耶はエルディネイアの指揮する青軍の状況を見回して魔術士が多く残っている事に言及した。

「折角飛び道具の使える魔術士が居るんだから、もっと上手く使えば良いのに」

「戦士の戦いに魔術で血路を開くなんて、そんな野暮な事は出来ませんわ」

やはり魔術嫌いに拘っての偏った部隊運用だったのかと、朔耶は内心苦笑しつつも、指揮官が自分の好き嫌いに拘って戦い方を限定してしまっては勝てるモノも勝てないのではと思い、忠告する。実戦であれば兵士は犬死にだ。

「そんなの戦場じゃあ通用しないよ？」

その言葉にカチンと来たらしいエルディネイアは、キッと睨むような視線を朔耶に向けて言い放つ。

「まるで戦場に立った事があるような言い方ですわね」

「あるけどね、ちょっとだけ」

ハッとなるエルディネイア。目の前で困ったように笑いながら頬を掻いてる少女は『フレグンスの戦女神』だったという事を、今更ながら思い出す。サクヤが戦場に現われたという話は、先のサムズ動乱の際に様々な方面から散々聞かされていた。

「し、失言でしたわ……」

バツが悪そうに眼を逸らすエルディネイア。何となく気まずい空気が漂い、先程から緊張して固まっているメンバー達は更なる緊張で胃が痛くなる想いに肩を強張らせている。そんな雰囲気を軽く無視して朔耶に話しかける空気を読まない半熟貴族なドーソン。

「サクヤは如何すればいいと思うんだい？」

「えーとねー」

ガリガリと地面に小枝で図形を描き始めた朔耶に、エルディネイアは興味を惹かれて覗き込む。他のチームメンバー達も『なんだなんだ』と集まって来た。朔耶は扇形の陣形を描き、其々の配置と役割について説明する。

「それじゃあ、頑張ってね～ルディ。ドーソンもね～」

後半戦が始まる合図のベルが鳴り、朔耶は観客の群れへと戻っていった。エルディネイア達は朔耶が提案した作戦以上の策を思いつく事が出来なかったので、他に良い手が無いのならばと朔耶の策に乗ってみる事にした。

即座に部隊編成を行って扇陣形を取ると、前面に盾を持った前衛、直ぐ後ろに支援魔術を使う魔術士が付き、さらに小回りの利く剣士が傍に付く。三人一組のユニットがズラリと並び、その後ろに攻撃魔術の魔術士がやはり三人一組で控えている。

後半戦開始の合図と共に、エルディネイア軍はジリジリと固まって前進を始めた。緑軍の攻撃魔術が一斉射を行うと、盾持ちの前衛

が盾を構えて踏ん張り、支援魔術で攻撃魔術を中和、ダメージを最小限に抑えながら再び前進。

前半戦の時とはまるで動きの違う守りに徹しながら距離を詰めて来る地味な戦法に、緑軍の指揮官は若干戸惑いを見せるも、守りを中心にした総力戦ならば一日の長がある。次の一斉射が行えるまで前衛が魔術士を守り、突撃に備えて槍と盾を構えた。

そうして二回目の緑軍攻撃魔術による一斉射を防いだエルディネイア軍は、十分に距離を詰められた事を頃合として『三段撃ち』の態勢に入った。

前衛の壁役と壁役の隙間から攻撃魔術を撃ち出すと、直ぐ隣の壁役の背後に隠れる。入れ替わり、控えていた二人目の魔術士による攻撃魔術の斉射。一発目が着弾する前に二発目を撃ち出し、更に控えていた三人目が二発目が着弾する前に三発目を撃ち出す。

その三発目が着弾する前に、魔力を整え終えた一人目が斉射。これを魔術士の精神力が尽きるまで延々と繰り返すのだ。

一発二発なら耐えられても三発四発と続けば流石に耐え切れず、攻撃魔術を中和しようとした支援魔術士諸共に前衛が倒され始めた緑軍は、堪らず部隊を二つに分けて左右から取り囲むように前進する。

「敵が動きましてよ！　皆さん作戦通りに！」

エルディネイアの号令の元、扇陣形が真ん中から二つに割れて左右から迫る緑軍部隊へと其々攻撃魔術の連続発射が行われる。緑軍は青軍の前衛が少ない事を念頭に、多少の被害は省みず一気に押し潰そうと突撃を敢行した。

前半戦で魔術士の力が温存されていたからこその、怒涛の攻撃魔術連射戦法ならば、その前半戦で抑えに抑えて保った前衛の、数の有利を持って押し込んでいく。

ほぼ絶え間なく撃ち出される攻撃魔術を掻い潜り、緑軍の突撃前衛が青軍の壁役に到達しようとしたその時、二つに割れた扇陣形の真ん中から飛び出した青軍の剣士部隊が緑軍後方の魔術士部隊に襲い掛かった。

魔術士が近接戦闘職に接近された場合、魔法障壁や精霊術の防御結界のような防御手段を持たない者は成す術も無く打ち倒されてしまう。学生にそのような高等な術を扱える者はいない。

接近戦用の攻撃魔術を使う者もいるが、それはあくまでも補助的なモノなので、懐に飛び込まれた時点で負けである。

殆ど奇襲のような青軍剣士部隊の攻撃に次々と倒されていく緑軍の魔術士達。青軍の壁役は支援魔術士と守り守られる形で只管背後の魔術士部隊に緑軍の前衛突撃が届かないよう盾で防ぎ、緑軍前衛は何とか突破しようと数で押す。阿鼻叫喚の乱戦となった。

「旗はっ？」
「右側だ！」

乱戦の中、敵軍の掲げる旗を見つけたエルディネイアはソレを打ち倒すべく突進していく。ドーソンも旗持ちとして指揮官の傍にいなくてはならないので後に続いた。観客の生徒からどよめきが上がる。

対抗戦で両軍の旗がこれ程接近し合うような事は先ず起きない。

大抵は片方の軍が相手の戦術に敗れて先鋒に討ち取られる場合が殆どで、団体戦に見るチームリーダー同士の一騎打ちというような指揮官の一騎打ちなど、かなり珍しいケースだ。

「中々刺激的な事をやってくれるじゃないかネイア！」
「残念ですけど、私のアイデアじゃありませんわっ！」

青軍の指揮官エルディネイアと緑軍の指揮官が模擬剣を打ち合わせる。しかし、やはり突きを主体にしたエルディネイアの細剣では、オーソドックスな剣と盾を操る騎士スタイル相手に攻撃面でも防御面でも競り負けてしまう。

主に突き攻撃を警戒していれば良い緑軍指揮官に対して、エルディネイアは相手のほぼ全ての攻撃が致命的となる為、細剣で受け止める事が出来ない以上、避けるか軌道を逸らせて捌くかしなくてはならない。その分、運動量も増えて体力の消費も激くなる。

『く……っ　仕方ありませんわ』

エルディネイアは不本意に思いながらも、勝つためには仕方なしとして朔耶に教わった秘策を使う決意をした。乱戦と一騎打ちでのエルディネイアの激しい動きで誰も気付いていないが、彼女の細剣の鞘には柄が生えている。

長剣の振り下ろしを躱して右に飛び、相手に左手の盾を翳（かざ）させる。そこへ一歩踏み出して突き込むと、相手は盾で逸らしながら右手の長剣による一撃を狙って身体を半身ほど引き、力を溜める動作を見せた。

『ここですわ！』

通常ならばここで反撃を避ける為に左右か背後にステップで身を躱す所だが、エルディネイアは細剣を左手に持ち替えると、右手も添えて両手で相手の一撃を受けに行った。完全に力が乗り切る前に受け止めてしまえば細剣の刀身でもなんとか止められる。

ガコッという硬質な木製武器である模擬剣独特の鈍い音を立てて細剣と長剣が交差した。意外そうに眼を瞠る緑軍の指揮官。

この体勢では一撃を入れる為に剣を引けば即座に刺し込まれてしまう為、どちらも引く事が出来ない状態。所謂、鍔迫り合いが始まる。両手で細剣を支えるエルディネイアに対し、緑軍指揮官は右手一本で長剣を押し込んでいる。

ギリギリと力の圧力によって刀身が震え、長剣を押し退けようと踏ん張るエルディネイアに、緑軍指揮官も下手に盾を使った牽制を行えないほど右腕に体重を乗せて踏ん張っている。『片腕で拮抗するなら、このまま押し潰してしまえる』彼はそう判断した。

勝負に出た緑軍指揮官が盾を捨てた。観客から『おおっ！』と、どよめきが上がる。両手で長剣を掴んだ緑軍指揮官は、そのまま一気にエルディネイアを押し潰しに掛かった。

これは決まったなと、観客の誰もが思ったその時、エルディネイアは左手一本で剣を支えると、自ら膝を付く事で一瞬、鍔迫り合いによる力の拮抗から逃れる。その僅かな瞬間に、腰の鞘から細剣を抜いた。驚愕に眼を瞠る緑軍指揮官。

なんの事はない、エルディネイアは抜き身の細剣を持ったまま腰の鞘にも細剣を装備していただけだ。一瞬の動揺で硬直した緑軍指揮官は、エルディネイアの左手の細剣による長剣と両手封じから逃

れるのが遅れた。

しまった！　と思った時にはもう、がら空きの腹部に強烈な一撃を突き込まれていた。

「ぐ……　やられたな……」

「や、やりましたわっ！」

緑軍の指揮官が討ち取られた事で模擬戦終了の合図が響く。歓声に湧き立つ訓練場の生徒達。模擬戦終了時点で全体の状況を見れば、やはりエルディネイア率いる青軍の方が被害が大きかった。課題を残しつつも勝ったので良しと喜び合うチームのメンバー達。

「驚きましたわ～～、凄いですわ～～」

「細剣の二刀流なんて初めてみたよ……」

口々に褒め称えるメンバー達に応えながら、エルディネイアは朔耶の姿を探して観客達の人混みに視線を彷徨わせる。

「あ」

朔耶の黒髪は目立つ。エルディネイアが観客達の塊りの端っこの方に一人でポツンと立っている朔耶を見つけると、朔耶はニコニコ顔でひらひら手を振って門の方へと去っていった。

何となく寂しい気持ちになったエルディネイアは、今度はキチンとお礼を言おうと心に決めた。

「うーん、いいもん見れたぁ」

白熱した模擬戦を間近で見られて満足気分の朔耶は、もう夕方になってしまっていたが予定通り工房に寄って行く事にした。

工房に着くと、門番をしている衛兵が珍しく近況の報告を行った。それによると、四日ほど前から度々サーバンスの従者が訪ねて来ては『次の出荷分はまだか』と問い合わせをしているという。

「あー、送風機売れてるんだぁ」

これまでで四十個出荷しているので、あと六十個程出荷して百個限定生産品とかで止めておいたほうが面白いか等と考えている朔耶に、衛兵からもう一つお知らせがあった。

「サクヤ様の邸宅が完成したとの報をお伝えするよう、レイス殿から言い付かっております」

「あ、出来たんだ？　そう言えば下見もしてなかったなぁ……」

朔耶は頭を掻きつつ、今度見に行こうと来週の予定に『こっちの自宅訪問』を入れておく。その後は一旦馴染みの工房に出向いてパーツを受け取り、暗くなるまで自分の工房で送風機キットの箱詰めを行ってキッチリ六十個積み上げた。

「サクヤ様はいらっしゃいますかな？」

「いらっしゃい、百個限定生産の残り六十個出来てるよー」

タイミングよく現われたサーバンスの従者に限定生産品にする事を伝えると、一気に三倍の出荷量と限定品指定発言で二重に驚きながらも、従者は送風機キットを馬車に積み込んで一般区の店舗に運

んで行った。

『勝手に値段つり上げたりするかもしれないけど、ちょっとくらいなら大目にみましょうかね』

アマイゾ　サクヤ

『甘いかな？』

ソコハ　オオメニミルノデハナク　ツギノコウショウヲ　ユウリニハコブ　ザイリョウトスルノダ

「……」

やけに手馴れを感じさせる神社の精霊でなのであった。

67話：外交使節？

「いしょっと……」

週末、何時ものように薄暗い早朝から自宅の庭に出た朔耶は、大きめのリュックを背負い直した。今回は王都の自宅訪問で向こうに置いておきたい物やエルディネイアへのお土産があるので普段より少し荷物が多い。

「いってきまーす」

「おーう、気ぃ付けて行って来ーい」

欠伸混じりの兄に見送られながら、朔耶は王都へと転移した。景色が変わり、この前降り立った城の庭園が眼前に広がる。王都への転移場所も固定され始めたようだ。

「さてさて、それじゃあ自分の家でも見に行きましょうかね」

呟いた朔耶は城門に向かって歩き出した。正確な場所が分からないので何時もの如く一っ飛びという訳にはいかず、城詰めの衛兵に声を掛けて屋敷まで送って貰う。珍しく馬車を使う朔耶に、衛兵は張り切って案内を務めた。後で仲間に自慢する気満々だった。

開放区の住宅街とも言える小ぢんまりとした沢山の屋敷が立ち並

ぶ一角に、サクヤ邸は建っていた。周囲の建物より明らかに大きく、貴族街に建つ小規模な屋敷並はある。

「……結構でかいわね」

「サクヤ様の名声を考えれば、ささやか過ぎるくらいですよ」

屋敷の入り口には門の前と扉の所に警備の衛兵が二人ずつ立っており、馬車から降りる朔耶の姿を認めると、衛兵の一人が扉脇の小窓のような所に何か声を掛ける仕草をした。

「それでは、自分はこれで失礼します」

「うん、ご苦労様。ありがとねー」

敬礼して去っていく城の衛兵と馬車にひらひらと手を振って見送った朔耶は、屋敷を振り返って見上げる。二階建てで鉄柵の塀に囲まれた庭付きの屋敷。二階部分の外壁にはぐるりとテラスが付いていて、中々見晴らしが良さそうだった。

屋敷の入り口まで歩くと、衛兵が扉を開けてくれたので礼を言って中に入る。

「お帰りなさいませ」

初老の執事が深々とお辞儀で出迎える。左側にメイド長らしき年輩の女性一人に若い女性三人のメイドが並び、右側には料理人らしき風体の男性と若い下男二人が並ぶ。彼等も執事の挨拶に倣うようにお辞儀で出迎えた。

表の衛兵四人を含めて十二人が、このサクヤ邸に常駐する管理スタッフという事になる。

屋敷の中は入って直ぐ赤絨毯の広い空間が奥まで続いていて、両

側の壁の真ん中辺りに二階へと続く階段が見える。二階の廊下は一階の柱に支えられており、真ん中の広間は天井まで吹き抜けになっている。その天井からは巨大なシャンデリア風の照明が下がっていた。

一階奥の突き当たりが使用人達の部屋になっていて、奥の右側が厨房、左側は湯浴み場となっており、サクヤ邸の湯浴み場は朔耶の要望に合わせて日本風の入浴が出来るお風呂場になっている。

手前の右側に応接間、反対側は開けたサロンになっていた。二階には客間にも寝室にも使える部屋が六部屋並んでいる。

「なんか、御免ね？　急にこんな朝早くから来ちゃって」

朔耶はちょろっと屋敷の様子を見ておく為に立ち寄ったダケのつもりでいたので、朝早くから使用人達に出迎えの挨拶をさせてしまった事を詫びた。すると驚いたように目を丸くする使用人の面々。

予め朔耶の人柄を聞かされていたとはいえ、実際に自分達のような仕える身の者に気を使って労う言葉を掛ける貴人は、そうは居ない。彼等は朔耶に対して衛兵や騎士達から聞いていた『恐縮させられて困る人』を実感するのだった。

一通り屋敷の部屋を見て回り、使用人達の自己紹介等を聞いて屋敷の住み心地と雰囲気を掴んだ朔耶は、泳げそうな程広い風呂場に今回持ってきたシャンプーやリンス、ボディソープ等を置いていく。

「こっちで入るのが楽しみだな～」

何時訪れても快適に過ごせるよう屋敷を管理する使用人達に宜し

くお願いすると、朔耶は屋敷を後にした。

陽が昇り始めて明るくなってきた王都の空を舞って自分の工房に降り立った朔耶は、暫らく魔力石ランプの部品作りで時間を潰し、頃合を見計らって城に飛んだ。

城の地下にある湯浴み場にやって来た朔耶は、レティレスティアとアルサレナのお清めを手伝った城の侍女達と挨拶を交して外して貰うと、じゃぶじゃぶと一人で清めを行って儀式用の衣を纏い、地下神殿に下りる。

「やっぱエロイな、この服……」

透けて見える胸元等を気にしつつ儀式の間に下りて来た朔耶は、祈りの儀式に集中している母娘を見つけて歩み寄った。六体もの精霊を使役しているアルサレナが精霊からの警告で顔を上げる。

「あら、珍しい」
「おはよーございまーす」

アルサレナは朔耶が祈りの儀式に訪れた事に驚いたような表情を見せて迎えた。レティレスティアは深い交感状態に入っているので朔耶の訪問に気付いていない。

朔耶が態々この時間にこの場所へやって来たのは、アルサレナに相談したい事があったからだ。

基本的に王族以外立ち入り禁止の此処ならば、他の誰かに聞かれる心配も無い。優秀な帝国密偵が近くまで下りて来た例はあったようだが、今はアルサレナがソレに対処する意味で使役する精霊を見張りに付かせている。

「奴隷制禁止令の発令要請、ですか」

朔耶の相談とは、各国にフレグンスの大使として出向く事でフレグンスの進める奴隷制の禁止政策を採って貰い、国として公式に奴隷制禁止令の発令をして貰う事だった。案は兎も角、それがこの世界で何処まで現実的なのかを訪ねる。

「そうですね、戦乱の時代以前だったならば絵空事と一笑に付されるモノだったでしょうけど、フレグンスと同盟を組む今ならば」

「行っちゃってもいいですかね？」

アルサレナは朔耶の提案に肯定的だった。先に王妃様からＯＫを出して貰えば王様も気兼ねなく許可を出せるというモノ、という打算的心情もあったのか無かったのか、地下神殿を出た朔耶は着替えを済ませると早速カイゼル王に許可申請を直訴しに行った。

所定の手続きを経ず、行き成り国王に許可を貰いに伺うという行為は朔耶だからこそ許される。

こういう所でも仕来たりを重んじるフレグンス旧家の門閥家衆からはあまり良い顔をされないのだが、先の査問会の一件以来、これも時代の流れかと諦観を感じさせつつ理解を示す者も出始めていた。

カイゼル王の親書を受け取って王の間を退出した朔耶は、今日明日中にもティルファと帝国を巡ろうかと予定を練りながら各官僚の執務室が並ぶ階に下りてくる。そこでフレイを伴ったレイスに出会った。

「おはよー、今から仕事？」

「おはようございますサクヤ、王の間で何かありましたか？」

さり気無く朔耶の行動に探りを入れて来るレイスに苦笑しつつ、朔耶はこれからティルファと帝国に向かう事を話す。

「そういえば、先日ティルファから報が届いていましたよ」

「釣り船の二号艇と三号艇が完成したそうです」

「え”っ　マジで？」

そりゃ大変だと、朔耶は予定の練り直しを図る。ティルファにはまた四頭立ての貨物竜籠を持って行かなくてならない。その後カースティアに船を運んで進水させるのだが、二艇も往復で運ぶとなれば二日丸々使っても間に合いそうに無い。

「うーん、どうしよう……バルに竜籠借りようか。勝手に持ち出したら不味いよね」

バルティアなら『問題無い』とか言いそうだったが、朔耶が如何したものかと悩んでいると、地下神殿から戻って来たアルサレナが廊下で話し込む三人に声を掛けた。そして事情を聞いたアルサレナは、城の者を一人連れて行くと良いと助言する。

「何でも一人で進める事はありません、手順が確立されているのなら他の者に任せれば良いのです」

ティルファでの積み込みやカースティアでの積み降ろしと釣り船事業の人員確保が出来ているのなら、運搬その他の細々した部分は人を使う事で後々そういった作業の補佐も出来る人間を増やせば良いという。朔耶自身が以前、イーリスに進言し、査問会でも示した内容を挙げて指摘した。

尤も、これには朔耶が殆ど主導で行っている事業に城の人間を参加させる事で、それらの事業にフレグンス王国も関わっている事を示す意味合いもある。

「ああそっか、その手があったんだった」

ポンと手を打って納得する朔耶。自分で言っといてその発想に至らなかったよーと笑って頭を掻く朔耶に、フレイは和んで微笑み返した。レイスはアルサレナの意図も読んでいたので控えめに微笑む。

「お金は出せないし口も出さないけど人は出してくれるんだね、助かるよ」

レイスの微笑が凍り付き、アルサレナは満足そうに頷いた。フレイは突然降って湧いた奇妙な空気に戸惑い、キョトンとしている。ふっふっふという低い笑い声が聞えてきそうな雰囲気で視線を交わす朔耶とアルサレナ。

「娘に比べると頼もしい限りですね、サクヤ」
「ちょっとばかし健(したた)かなだけですよー」

ともあれ、朔耶に”事業成功の手柄は独り占めしたい！”というような名誉欲はないので、カースティア観光事業の監督は城の人間に引継ぎで任せる事に決まった。人材の選出をアルサレナに任せた朔耶は、工房に飛んで船外機他必要な備品を用意した。

今回、朔耶に同行する者には竜籠を扱えて相応の地位に就いている若い官僚、宰相の補佐をしていた者の中から一番体力のありそう

な若者が選ばれた。既に辞令は受け取っており、準備が整い次第ティルファに飛び立つ。

朔耶は同行する若い官僚とティルファまでは一緒に行って作業の引継ぎ等を現場のドマック達にも告げておく。その後はブラハミルトに会って親書を渡し、奴隷制禁止令の公式発令を持ちかける予定だ。

「お昼からティルファに飛ぶから、宜しくね」

「はい！　こちらこそ宜しくお願いします。　サクヤ様の事業を手伝える事、光栄に思います」

恐縮しきりな若い官僚に初々しさを感じつつ気さくに接してリラックスさせると、朔耶はちょっと私用があると言って準備を整えている竜籠の厩舎から王都の空へと飛び立つ。厩舎から顔を出して此方を伺っていた竜達が魔力の奔流を感じて顔を引っ込めた。

「みんな揃ってるかな～」

朔耶は王宮区から開放区の王都大学院の門前まで飛んで来ると、やはり顔パスで学院内に入っていく。城の敷地内には平気で着地している割りに、何となく学校の敷地には学生意識的に無断で入り辛かったりするのだった。

大学院校舎の各塔が繋がる中央塔の一階は広々としたサロンになっており、授業が始まるまでの時間、多くの学院生達で賑わっている。朔耶は学院生に混じって一階のサロンに入ると、エルディネイ

アかドーソンの姿を探した。

ちらちらと朔耶に視線を向けている者がいる中、朔耶の事を知っている生徒は憧憬の眼差しや畏怖の眼差しを向け、朔耶の事を知らない者は好奇の視線を向けている。

そうして暫らくサロンを見渡していた朔耶は丸いテーブルが並んでいる一角で、集まっているグループの中にエルディネイアとドーソンの姿を見つけた。二人の周囲にはエルディネイアのチームメンバーの姿が見える。

「やほールディ&ドーソン」

「へ、変な呼び方は止めて下さらない？」

「やあ、サクヤじゃないか。学院で会うなんて珍しいね」

彼等の近くまで歩み寄った朔耶が声を掛けると、例によってメンバー達は緊張した様子で静かになり、エルディネイアとドーソンは何時も通りの様子で迎える。朔耶は空いていた席に勝手に座ると、リュックを膝に置いて中をごそごそやり始める。

「今日は皆にお土産持ってきたよ」

「お土産？」

”みんなに”という部分で『気を使って席を外そうか』と腰を浮かし掛けていたメンバー達の動きを封じると、朔耶はリュックから取り出したパネルをテーブルの上に並べた。プリントアウトしたデジタルカメラの画像を厚紙で補強したモノだ。

「え、これって……」

「すごい……こんなに精巧な絵は見た事が無い……」

「まあ～、私の姿が描かれてますわ～」

それは先週の大規模戦の様子を撮影したモノで、主にエルディネイアとドーソンを中心に固定メンバーが写っているシーンを切り集めて纏めた写真だった。朝、兄が欠伸をしていたのは今週の間、仕事が終わった後晩くまでこの作業をしていた為だったりする。

「ほら、これなんてイイ感じ」

そう言って指したパネル写真には、細剣を構えて走るエルディネイアと青軍旗を持って追走するドーソンの姿が躍動感一杯に映っている。最新型デジタルカメラの様々な機能のお陰でプロ並の一枚である。

「おおーなんだか格好いいねぇ」

ドーソンも気に入ったようだ、エルディネイアは写真を見るのは初めてではないが、自分の戦っている姿をこれほど客観的に見たのは初めての事だった。

少し上気した表情でメンバー達や自分の写真パネルに魅入っていたが、ふと顔を上げて朔耶を見ると、おずおずと切り出す。

「あの……サクヤ」
「うん？」
「……あ、ありがとう」
「うん！」

恥ずかしそうに礼を口にするエルディネイアに、にこーっと笑みを返す朔耶。公爵家令嬢としての振る舞いに相応しい礼儀上の謝意ならば完璧にこなして見せるエルディネイアだったが、素直な気持

ちで感謝の意を述べる事には慣れていないのだ。
珍しいエルディネイアの赤面顔にメンバー達が驚きともいえる興味深そうな表情を浮かべていた。

そこへ、突然サロンに響く野太い声。下品では無いが、高貴さを感じるかと問えば『只のおっさんだろう』という答えが返ってきそう風体の男性が、サロンの出入り口付近で生徒を指差して注意を与えていた。

「あの人って？」
「あー、礼節指導の教員だよ」
「へ～、生活指導の先生みたいな人もいるんだぁ？」
「家（うち）のお稽古の師匠よりも口喧しい教員ですわ。私も何度スカートが短い等と注意された事か……」

礼節指導をしている教員にうんざりした顔で視線を向けるエルディネイア。確かに彼女の格好は朔耶の世界の”今時の女子高生”並にスカートが短い。細剣を使うエルディネイアは、スカートが長いと動き辛いから短くしているのだと言う。
ルティレイフィアのようにパンツかズボン姿にしないのかと朔耶が問うと、『それだと優雅さが足りない』のだそうだ。

「ルディらしいね～。　さて、そろそろあたし行くね」
「これからティルファに？」
「うん、その後直ぐ帝国行きだよ」
「凄いね、まるで外交使節だ」

エルディネイアチームのメンバー達ともようやく笑顔を伴った挨拶が交わせるまで打ち解け合った朔耶は、今度皆を此方の自宅に誘って遊ぶのも良いかな等と思いながらテーブルの席を立つと、サロ

ンの出入り口に向かおうとした。

「こら貴様！　噂の戦女神に憧れるのは良いが、髪を染めてまで姿を真似るのは違うだろう！」

「あ、すんません本人です」

どもどもと頭を下げる朔耶。

「のふぉっ！？」

英雄の真似事をする困った生徒に注意しようと思ったら本人だった事に思わず変な声を漏らして固まる礼節指導員。他にも朔耶に好奇の視線を向けていた生徒が同じ様に目を瞠って固まっていた。所謂”コスプレ”の類だと思っていた者もいたようだ。

「こ、こ、これはこれは戦女神殿。お噂は兼ね兼ね……今日はまた学院にいらしたとは知らず、宜しければ生徒達にお話を――」

「あー、ごめん急いでるんでっ　それじゃ！」

シドロモドロになりながらも、学院の生徒達に戦女神の有難いお言葉を賜ろうと演説のお願いをしようとした教員をスパッと振り切ってサロンを出て行く朔耶。

例え特に用事が無くても演説なんてトンでもないとばかりにさっさと逃げ出す戦女神なのであった。

「わ、私は何か粗相をしてしまったのだろうか……」

オロオロと周囲を見渡す礼節指導教員。そのうろたえっぷりを堪能したエルディネイアは、内心の大笑いをおくびにも出さずに『彼女はこれから大切な任務があるのですわ』と言って窘めるのだった。

「さあ、出発しよう！」

厩舎に戻って来た朔耶は途中で買って来た庶民のパン料理を手に、荷物を積み終えた竜籠に乗り込む。

二艇分の船外機と備品を積んだ四頭立ての貨物竜籠がティルファに向けて飛び立った。

68話：朔耶の外交

昼下がり――

ティルファに到着した朔耶は貨物竜籠から積荷を降ろす作業が行われている間、ドマック達に業務引き継ぎの官僚を紹介した。今後、船の引き取りとカースティアへの運搬はこの若い官僚に行って貰い、新たな船の発注は朔耶が直接行う事になる。

「なんじゃ、お前さんも忙しい身になったもんじゃな」

「それほどでも無いんだけどね、あたしの身体は一つしかないのよ」

朔耶は此方で活動できる期間が決まっている為、急いでやっておきたい事が重なると一人ではどうにもならないと話す。

「……増えたり出来んのか？」

「……あたしを何だと思ってんのよ」

後の作業を若い官僚とドマック造船所の作業員達に任せた朔耶は、ブラハミルトに会うため中央研究塔に向かう事にした。中央研究塔は湖の中程に建っているので、通常は船に乗って塔と岸辺とを行き来する。

湖岸の桟橋に船を係留している研究者や衛士達は、朔耶が中央研

究塔に向かうらしいと聞いて是非、自分の船で渡って貰おうと何時でも出航できるよう船の準備を整えていた。

しかし朔耶は、そんな彼等の『是非うちの船で！』という期待の眼差しに気付かず漆黒の翼を広げると、湖の中程まで一っ飛びに飛んで行くのだった。ソレはそれで彼等の好奇心を十分に満たす光景であったりする。

塔の入り口前に降りようか天辺のテラスに降りようかと逡巡していた朔耶は、塔のテラスに現われたブラハミルトの手招きでテラスに降りる事にした。目的の人物に直接会える方が面倒が少なくて楽だ。

「こんにちは、ブラハミルトさん」
「やあ、精霊女神殿。今日は私に何か用事があるそうですね」

一番高い塔のテラスに降りた朔耶は、そのまま屋内に招かれる。ここは塔の五階、中央研究塔所長の宿舎としてブラハミルトの私室になっていた。

私室というだけあって色々な触媒の標本や何かの機械の見本等の私物が壁際に飾られ、並べられた本棚に大量の重厚そうな本が納まっている。部屋の真ん中に研究用の広い台が備え付けられている様は、何処かの工房のようにも感じられる。

朔耶が勧められた向かい合わせのソファーに腰掛けると、ブラハミルトも正面に座って寛ぐ。そのタイミングで自然に入って来たメイドさんがお茶を出して退室していく。

「それで、私に話とは」
「まずはコレどうぞ」

朔耶はリュックからカイゼル王の親書を出して渡す。ブラハミルトは頷いてそれを受け取った。

「で、本題なんですけど……ティルファって奴隷とかいます？」
「ふむ、奴隷ですか」

ブラハミルトは顎に手を当てて考える。元々ティルファに住む民の殆どは何らかの職人だったり自分の研究に没頭する研究者だったり常に新しい物を作り出す発明家だったりする。

例えば、建築に資材を運ぶならば”効率の良い運搬における魔術の使い方”だとか、”物を運べる便利な機械”だとかを使って自分の研究をアピールしたがるので、労働力としての奴隷を持つ理由が無く、其々の分野で専門の職人達が『俺が俺が』と競い会う為、（それで街の外観は凄い事になっているのだが）奴隷が居ても使い所が無い。

嘗て人体実験の材料として奴隷を買っていたような研究グループもいたが、戦乱の時代以後、ブラハミルトの前の代からそういった”魔族化”した研究者は沙汰されてきた。その為、ティルファにはソレと分かる姿で奴隷を見掛ける事は無い。

フレグンスが政策として採る奴隷制禁止令の導入をし、禁止令を公式に発令して欲しいと要請する朔耶に、ブラハミルトは政務者の顔になって訊ねる。

「その要請を受け入れたとして、我々にどんなメリットがありま

か？」

「んー、人権意識の進んだ国として認識されるとか？」

「それは魅力的ですねぇ。　しかし、今現在でもティルファは思想的にも技術的にも一歩先を行く国と見られていますが」

ブラハミルトは軽く笑みを返しながら言外にそれだけでは政策の一つとして公布するに至らない事を告げる。朔耶はティルファという国の在り方、ティルファに纏わる話を思い出し、効果的な取り引きを思い描く。

「ティルファの人達って研究成果とか秘匿せずに、何か見つけたら直ぐ発表するんですよね」

「ええ、発見解明し、創り伝えるのがティルファの在り方ですから」

「ブラハミルトさんもそう？」

「当然ですよ。尤も私は最近、此れといって研究を進められる物が無いのですが」

魔術の研究は既に何年も前から飽和状態。新たな研究対象であるサクヤ式や魔力石の研究も盛んだが、ブラハミルトを含めて皆行き詰まっている感があるという。朔耶は頷くとリュックから数点、道具と削った魔力石を取り出した。

「まず、これは前々からあげようと思ってたライターです」

「ほぅ……、これが例の」

手渡されたライターを興味深そうにしげしげ眺めるブラハミルト。やはり触媒型魔術士として仕組みや構造が気になる。朔耶はそんなブラハミルトに手応えを感じながら、テーブルの上にもう一つライターを置いた。

「こっちは研究用のライター」

中の構造が分かるよう半分に開かれたライターには、木枠の中に細かく削り出された魔力石の部品が精密に組み込まれている。

どの部分がどういう形に削り出され、それがどんな効果を生むのかを朔耶が簡単に説明すると、ブラハミルトは直ぐにそれを理解した。

「これは中々に興味深い……。しかし、宜しいのですか？　これはフレグンスで信頼の証として使われている筈ですが」

「大丈夫です、どうせあたしにしか作れませんから」

量産されれば悪用される可能性もある事を指摘するブラハミルトに、朔耶は笑って答える。

「……ふむ」

「って言えば皆奮起しますかね？」

ニヤリと、朔耶に悪戯っぽい笑みを向けられたブラハミルトは一瞬目を丸くすると、面白そうに微笑み返した。

「成る程。中々に面白い方ですね、貴女は」

「どうも」

朔耶は更に加工した魔力石の塊りと、特定の形に削り出された石を並べる。ブラハミルトは加工された魔力石の塊りを手にとって観察した。

「これは？」

「その塊りは反発力ユニットです」
「！っ　これが……」
「んで、このバラバラなのがユニットの部品ですね」

つまり、この形に加工したものを作る事が出来れば、サクヤ式機械船の推進器のような機械を作ることが出来る。サクヤ式の中核とも言えるモノが二つも提示された事に驚きを隠せないブラハミルト。

ティルファの研究者にこれを教えるという事は、世界中にサクヤ式の構造を公表する事になるのだ。ブラハミルトは朔耶がそこまでして奴隷制禁止令の公式発令を要請する事の意義を問う。

「目先の我侭です」
「……クックック。　成る程、分かりました」

ひょいっと肩を竦めて答えた朔耶に、ブラハミルトは思わずポカンとなった後、笑いを堪えながら頷いた。

『この少女は自分達と同類だ』ブラハミルトはそんな事を思いながら、ティルファの最高指導者である中央研究塔所長としての威厳を保てるよう何とか姿勢を正すと、政務者の顔に戻って答える。

「私の一存では決められませんので、議会で審議した上で答えを出しましょう。まあ、既に答えは出ているようなモノですが」
「宜しくお願いします」

朔耶もフレグンスの大使としてそれっぽく真面目な表情を作りながら頭を下げた。

実の所、ブラハミルトは最近エバンスで起きた朔耶絡みの出来事

の一端を知っていた。

敢えて話題にせず朔耶の出方を窺っていたのは、研究者としての好奇心や空想家な部分とは別に、政務者としてリアリストな一面も持つブラハミルトの朔耶に対する”試し”であった。

奴隷制禁止令の要請理由に奴隷として売られた孤児達の事を挙げて情に訴えるやり方を執ったならば、禁止令の発令によって不利益を被る側の立場を訴え、路頭に迷う事にもなる奴隷達の様々な諸問題を投げ掛けて反応を見るつもりだった。

だが朔耶は、それらの話題を一切挙げず自身の行動理由を『そうしたいと思ったからそうする』という”目先の我侭”だと言ってのけた。ブラハミルトは其処に深く共感した。

会談が終わった頃にはすっかり日も暮れており、今夜は泊まっていくようにと朔耶に部屋を用意したブラハミルトは、朔耶が退室した私室で反発力ユニットを構成する部品を観察する。

非常に細かく削り出された溝や線状の突起部分が重なって一つの形に納まるよう作られている。これを一つ作るのにどれ程の手間と時間を要するだろうかと考え、正確且つ繊細に石を削りだす技術を思い描く。ライターの部品は更に細かい。

「なるほど……、強ち奮起させる為だけの意味でも無いわけか」

ブラハミルトは朔耶の言った『どうせあたしにしか作れない』は、実質本当の事らしいと実感するのだった。

用意して貰った部屋で一息ついた朔耶は、一旦荷物を置いて塔を出ると、釣り船運搬作業の様子を見にドマック造船所へと飛ぶ。既に二号艇、三号艇の航行実験は完了しており、後は随時カースティアへ運ぶだけとなっていた。

「おう、エライさんとの話は済んだのか？」

「一応ね」

竜籠への二号艇積み込みを指揮するドマックは、横で作業を見守る朔耶に声を掛けた。短くそれに返答する朔耶。

作業は一号艇を運んだ時と同様にクレーンで持ち上げて積み込むのだが、クレーンは一ヶ月前に見たモノより大型で、大勢の人が引いていたロープはドラムに巻きつけて少人数で引き上げられるよう改良された新型だった。

「運んで下ろして、また戻ってきて……五日くらい掛かりそう？」

「そうじゃな、急いでも四日は掛かるじゃろう」

篝火が焚かれている湖の畔で、竜籠に積み込まれた釣り船二号艇をしっかり固定していく。今夜晩くに出発する予定なので、若い官僚は遠距離飛行に備えてドマック造船所の客間で睡眠中なのだそうだ。

後の事は任せておけと頼もしく笑うドマックに、朔耶は『宜しくね』と頷いて塔の部屋と戻って行った。

『ふう、裏技が使えたら楽なんだけどねー』
イズレハ　ソレモ　カノウトナルガ……アマリススメラレヌ

塔の食堂で夕食を頂いて部屋に戻った朔耶は、薄着になってリラックスしながらベッドに転がると、軽く愚痴をこぼした。朔耶の言葉の意味を理解している神社の精霊は、便利だからと力に頼って横着するモノではないとそれを諫める。

『世界移動による荷物運び』朔耶の言う裏技とは、カースティアで釣り船一号艇を進水させる際、照明係として此方に喚んだ兄と車の事を指す。

元の世界で何処か人目に付かない開けた場所へ移動し、そこから此方の世界に渡る。そうして運びたいモノと一緒に元の世界に帰還、そこからまた此方に転移。これで時間と距離を大いに短縮できるのだ。

但し、人や動物など生命体として生きた存在を運ぶ事は出来ない。肉体、精神、魂からなる生命体の密度は非常に濃く複雑であり、『個としての存在』の状態を完全維持出来なくては、転移によって肉体から離れた精神が迷子になる危険が高い。

元の世界から神社の精霊が身体に入った状態で、此方の世界の遍在（神社の精霊の）に転移するだけならば、精霊が肉体と精神を包み込む事で『個としての存在』の状態を保護しつつ世界を移動させる事が出来る。

だが此方の世界にいる間、神社の精霊は元の世界の『個としての存在』の中に入った状態で此方の世界の遍在と重なっているので、此方の世界の生命体の肉体と精神を包み込んで『個としての存在』

の状態を保護する事が出来ない。

結果、肉体はそのまま運べるが、肉体から開放された精神が何処かへ行ってしまう場合がある。以前、フレグンスの精霊が示した方法は、レティレスティアの精神を交感で朔耶としっかり繋ぎ合わせて置く事で、転移中の剥離を防ぐという方法だった。

しかしこの方法だとレティレスティアの精神が肉体から開放された一瞬、深く繋がっている朔耶の精神と混ざってしまうのだ。

『もう一体、こっちで黒ちゃんクラスの精霊を使役すれば、人も運べるかな?』

フカノウデハナイガ　ゼッタイハナイ　ジコガオキテカラデハ　トリカエシガツカヌ

『うーん、それもそうだね』

ナニゴトモ　ケンジツガ　イチバンデアル

お説教されてしまった朔耶は『はーい、ごめんなさーい』と子供っぽく謝ると、明日に備えてシーツに潜り込んだ。

この日の深夜、釣り船二号艇を載せた貨物竜籠がカースティアに向けて飛び立った。

翌朝――

「おはよー」

「おう、よく眠れたか?」

朝からドマック造船所を訪ねた朔耶は、作業着姿のドマックに迎えられた。造船所の脇には幌を被せた三号艇がカースティアに運ばれるのを待っており、作業場では次の船の準備に取り掛かっている。所謂、屋形船である。

「屋形船はどれくらいで出来そう？」

「そうじゃのう……。こっちはこっちで内装に時間が掛かりそうじゃしなぁ」

王女と近衛騎士、もしくはお姫様と不良騎士の”二人の夜を演出する”屋形船。内装の妥協は許されないのだ。

船の型自体は釣り船のような特殊な造りでは無い為、それほど掛からないだろうと三十日程が目安と示された。

「さーて、それじゃあ　あたし行くね」

「帝国か？　山もそろそろ寒くなって来とるじゃろうから、身体に気ぃつけてな」

「はーい」

子供っぽい返事にうむうむと目尻を下げるドマック。朔耶もこうすれば喜ぶと分かってやっているようである。

とととっと湖の近くまで移動した朔耶は、振り返って手を振ると漆黒の翼を広げて空へ舞い上がった。

約三時間程で帝都クラティシカ上空に到着した朔耶は、城の裏手に回って竜籠発着場に降り立った。その際、城の下層外壁に以前朔

耶が設置した小さな風車が回っているのを確認出来たが、他の場所にも幾つか新しい風車が増えていた。

朔耶が降りて来るのを見た発着場に詰めている衛兵が数人、慌てて駆け寄ると整列して出迎える。演奏が始まりそうだったので恥ずかしくなった朔耶は、そそくさと城内に駆け込み『お構いなく～』と発着場を立ち去るのだった。

久し振りの帝都城内。一つ上の階に上がった朔耶は皇帝の執務室に向かう。

途中、廊下で擦れ違う騎士や衛兵、帝国官僚達が敬礼とお辞儀で朔耶に道を開けていく。どうにも帝国内での朔耶の立場は、フレグンス内でのソレよりも優遇されているようだ。

「おっはよーバル」
「うむ。……！　さ、サクヤ！？」
「あら、サクヤちゃん」
「ヴィヴィアンさんも一緒だったんだね」

執務室ではバルティアが大量の書類と格闘中だった。以前のように決められた書類にサインだけしていくという退屈な作業ではなく、キチンと内容を吟味した上で判断しなくてはならない為、朔耶が執務室に現われた事に一瞬反応が遅れたらしい。

朔耶が親書を取り出して差し出すと、アネットがそれを受け取り、中を確認してからバルティアへと渡す。

「今日はフレグンスの大使として来たと？」
「うん、一応そういう事になってるんだけどね」

朔耶との会談を優先したバルティアは執務室のソファーで朔耶と向き合い、そこへリーファがお茶を持ってくる。リーファとシーファの姉妹は、今や皇帝付きの給仕として侍女をやっている。

「久し振り～リーファ」
「お久しぶりです、サクヤ様」

リーファが退室すると、朔耶は早速本題に入った。

「奴隷制禁止令の公式発令か」
「うん、どうかな？　……ダメ？」

朔耶の上目遣いでおねだり攻撃。

「無論、余は構わ――」
「陛下陛下っ」

速攻で許可を出しかけたバルティアの脇を突付き、ズルズルとソファーから執務室の壁際に引っぱって行くアネット。こういう所で地が出てしまうのがアネットらしさでもあり、それを許すバルティアにも懐の深さが窺い知れる。

「そこでアッサリ許可しちゃダメじゃないですか」（ひそひそ）
「なぜだ、特に問題はあるまい」（ひそひそ）

帝国には数多くの道場が開かれ、連日力を求める戦士や魔術士達が修練に明け暮れる。
力ある者は認められ、認められた者は大手の傭兵団にスカウトされたり、自ら団を立ち上げたり、何処かの用心棒として雇われたり

と、兎角戦いと鍛錬の場を求めて自分の力で活躍出来る事を誇りとする者達で賑わっている。

帝国軍に属する者もまた修行の虫だったりする者が多い傾向にあり、ティルファの研究者達とはまた別の方向で『俺が俺が』な性質の人間が集まっているのだ。そんな彼等にとって労働力に奴隷を使うなど、折角の鍛錬の場を放棄するも同然の行為である。

態々奴隷を使って荷物を運ばせるより、自分で運んだ方が身体も鍛えられて効率も良いじゃないか、という考えなのだ。

エイディアス帝による人体実験の材料として多く買われていた事もあるようだが、例の発掘品の研究で、発掘品との融合まで進んだ時期からそれも無くなっている。

帝国内に存在すると思われる奴隷の数は、多くて五百人にも満たないだろうとバルティアは予測していた。

サムズの動乱以後、無駄な兵力や地下での研究と装置の維持に資金を喰われなくなって帝国内の財政も負担が軽くなり、バルティアが帝国を掌握して数ヶ月、僅かながら発展の兆しも見えている。奴隷制禁止令を出した所で、特に問題は無い。

「そうじゃなくて、こういう時こそ取り引きと駆引きを使ってサクヤちゃんをモノにするチャンスでしょうに」（ひそひそひそ）

「！っ　そうか、その手があった」（ひそひそ）

要請を受け入れる事に問題は無くとも、公式な発令によって多少の混乱はどうしても起きてしまう。それならば、相応の見返りとして朔耶に色々と要求すれば……と囁くアネットに、バルティアの眼が妖しく光る。

密談を終えてソファーに戻って来た二人を訝しそうに見上げる朔耶。アネットは『何でもないわよーほほほほほー』てなノリでニヤニヤしているし、バルティアはバルティアで纏っている空気がなんだか妖しい。

アネットは以前、朔耶がバルティアにスクーターをプレゼントした時の、朔耶の反応に突破口を見出していた。あの時のような状態を作り出せば、後は逃げ出せない内に一気に畳み掛ける事で落とせるタイプだと朔耶の事を分析している。

今までアネットが観察してきた限りでは、バルティアに対する情も少なからず持っている事を垣間見られたので、とにかく勢いで押す速攻性が大事だとアドバイスを出しておく。”朔耶は行動する男に惹かれる傾向がある”と読んでいた。

「うむ、まあその要請は受けられない事もない」
「ほんと？　それじゃあ」
「だがしかし、帝国内にも少なからず奴隷を所有している者は居る。その者達はこれまで正当な権利として所有して来たのだ」

彼等からそれらを取り上げる事になる分、混乱も起きると説明するバルティアに、朔耶もそれには納得して頷く。

「従ってだな、禁止令の発令を行うには相応の理由が必要となるのだ」
「理由って、同盟の強化とかじゃ駄目なの？」
「いや、それでは帝国が一方的にフレグンスの政策を受け入れる事になるからな、強国としての帝国の威信にも関わるのだ」
「あ～……メンツってやつね」

成る程ねと理解を示す朔耶に、バルティアは上手く話が進んでいる事を内心でほくそ笑む。

後はこのまま無理の無い理屈で此方の要求を付き付け、イニシアティブを掴めば一気に勢いで押す。ここは皇帝の執務室、周囲の警備と人払いは完璧だ。アネットは空気を読んで事に至れば気付かない内に退室するだろう。

「そこでだ、要請を受け入れる条件として、サクヤには暫らく余の元に仕えて貰おうと思う」

「……ほへ？」

「余に仕える者の願いを聞き入れた、とするならば、フレグンスの政策を取り入れたとしても帝国の威信に傷は付かぬ」

「なにそれ、あたしに人身御供になれってての？」

バルティアはニヤリと笑みを浮かべると、するりとソファーを移動して朔耶の隣に腰を下ろす。思わず距離を取ろうとした朔耶の肩に手を回して逃亡を防ぎながら耳元に囁いた。ビクリと朔耶の肩が反応する。

「言ったであろう、余は必ずお前を手に入れると。別に無理難題を要求するつもりはない、ただ何時も傍に居てくれれば良い」

「……」

アネットは大人しく座ったまま俯いている朔耶の様子をみて、これはイケそうかなと退室のタイミングを計っていた。朔耶のようなウブっぽい少女の弱みに付け込むやり方には少々気が引けるモノの、心身共にやたらとガードの固い相手だ。

『多少の強引さは必要なのよね』

心の中でごめんねーと平謝りしていたアネットは、朔耶の様子を窺いながら返答を待つ。そうして待つこと暫らく、顔を上げた朔耶が口を開いた。

「他に方法はないのでしょうか？　私にはフレグンスでやらなくてはならない事が沢山あるのです」

「……え？」

「どうかなさいましたか？　皇帝陛下」

「いや、あの……さ、サクヤ？」

一瞬『何事？』とアネットは朔耶の豹変に驚いたが、直ぐにその意図する事に気付いてバルティアの様子を窺った。うろたえている。

「な、なんだ、急にどうしたというのだ？」

「皇帝陛下こそお顔の色が優れませんわ」

「皇帝陛下はよせっ」

「では、バルティア陛下とお呼びしましょうか？」

バルティアは『話が違う！』という表情をアネットに向ける。向けられたアネットは朔耶に視線を移し、ニヤッと笑われて天を仰ぎたくなった。この反撃は予想していなかった。

しかもバルティアにはかなり効果的だ。元々傀儡として皇帝の座に祭り上げられ、何年もの間、暗殺の恐怖と偽りの敬意に晒されて来たのだ。バルティアは親しかった人物が急に自分を皇帝として敬う姿勢になる事への忌避感も持っていた。

「待てサクヤ、悪かったから、ソレを止めろ」

「まあ、何をおっしゃいますやら……バルティア陛下に何ら落ち度などありはしませんのに」

「いやもう、本当にソレは止めてくれ」
「私が陛下にお仕えするという事は、こういう事ですわ。バルティア皇帝陛下？」

とうとう泣きが入ってしまったバルティアに、アネットは駄目だこりゃと頭を抱えた。アネットには予測の範囲外の事だが、バルティアにアネットという心強い味方が付いているのと同様に、朔耶には神社の精霊という心強い味方が付いているのだ。

「それじゃあ発令の事、宜しくね？　バル」
「おお……余をバルと呼んでくれるか」

バルティアが精神的ダメージから回復するまで、暫しの時間が必要なのであった。

69話：誇りと忠誠【前】（前書き）

今回ちょーっと趣向が変わります。

69話：誇りと忠誠【前】

帝国領内に発令された奴隷制禁止令は、発令から二十日間の猶予以って効力を持つと触れが出され、現在奴隷を所有している者は猶予期間の間に奴隷達の処遇を迫られる事となった。

以後、奴隷の所持及び売買を行った者は厳罰に処せられる。数日を置いて、帝国に続きティルファでも奴隷制禁止令の発令が公布された。

朔耶との会談でバルティアに泣きが入った後、焚き付けたアネットが間に入って交渉する事で、偏りの無い公平な条件を持って奴隷制禁止令の政策が帝国内に採用された。

キックボードや筒型モーター搭載スクーター等、帝国にはフレグンスやティルファにも公開されていないサクヤ式の技術を使った乗り物がある。

これらは皇帝に対して朔耶から個人的に贈られている事で、朔耶と帝国には他の二国とは違った独自の関係が築かれていると、各国の一部有識者からは見られている。

そこを利用し、奴隷制禁止令の受け入れと引き換えに、帝国内にのみ贈られる道具なり乗り物なりを新たに用意する事で、内外に対等でありながら優遇的なニュアンスを滲ませた政治的取り引きがあ

った事を知らしめるのだ。

丁度、朔耶にはこの取り引きに使えそうな手札があった。元の世界で近々完成しそうな『四石筒モーターエンジン』である。弟の先見の才に驚かされつつ、朔耶はアネットの提案に同意したのだった。

発令が公布されて数日、朔耶が自分の世界で学生生活を送っている間、帝都では複数の帝国貴族や豪商達が、城外の屋敷で囲っていた奴隷達を正式な使用人として雇用したり、路銀を持たせて街へ解放したりと対処していった。

そんな中、帝都の城外に屋敷を構える帝国貴族の中で最も多くの奴隷を囲っていた伯爵家では、静かになった屋敷の自室で当主が頭を抱えて座り込んでいた。

酒に溺れる程悲観してはいないが、この現状は彼を失意のどん底に叩き落すに十分であった。

フエルト・バルト・コースティン伯爵。かつてフレグンスの魔術士系門閥貴族として巨大な派閥を築き、その裏で帝国の協力者として暗躍していた、現在帝国貴族として籍を置く亡命貴族である。

戦乱の時代以後、帝国によるフレグンス内紛工作の協力者且つ先鋒として活動し、帝国に忠誠を誓う者としての証に賜った発掘品を使って宮廷魔術士長の座を勝ち取ってからは、それなりに由緒のあったコースティン家を一大派閥の頂点にまで押し上げた。

彼はフレグンスで魔術士系門閥貴族として台頭する以前から、仕来りに縛られたフレグンスの古い貴族体質を嫌っていた。

辺境の地で反乱分子狩りをしていた時も、再三『フレグンス貴族として崇高で在れ』と、当時の宮廷魔術士長であったアクレイア家当主ルィバンス伯に窘められていたが、彼にしてみれば敵国の人間は敵でしかなかった。

部下を使って反乱を煽るような流言を撒き、武装決起した集団を片端から討伐して回る。

流言でアッサリ決起するような者達は、結局は何れ歯向かって来る連中なのだから、下手に力を付ける前に叩いておく事が正しい戦後処理だと考えていたのだ。

やがて反乱を起こす集団もなりを潜めて辺境の統治が安定してくると、王都では派閥の諍いで足の引っ張り合いや巧名ある者を自陣へ引き込もうとする貴族間の駆引きが活発化し、加盟を断ればやっかみに晒される。

ルィバンス伯に度々窘められていた事を引き合いに出し、『不仲を取り持とうではないか』等と持ちかけてアクレイア家の派閥に誘う貴族が居た。

巧名あるコースティン家を派閥に加えさせる事で、ルィバンス伯からの覚えを良くして派閥内での発言力を高めようと考えたらしい。

戦乱の時代からアクレイア家と所縁のあるその貴族は、フエルト卿が宮廷魔術士長となって出来た派閥に幹部待遇で誘えば、あっさり寝返った。

アクレイア家の派閥に属してその恩恵に与っていた多くの貴族家が、大した工作を施さずとも『コースティン家の台頭、アクレイア家の斜陽』と見るや次々派閥に加わっていった。

フエルト卿の討伐法を非難し、ルィバンス伯の言に同調していた彼等が、だ。

フエルト卿はその頃から思っていた。『誇りに集(たか)るこの国は滅ぶ』と。だからこそ、力ある者が認められ、実力主義と謳われる帝国貴族になる事をより強く想うようになったのだ。

そんな折、王家の威光も翳りを見せ始めていよいよフレグンスの内部崩壊と帝国の取り込みが始まるかと思われた矢先、突如現われた異世界からの来訪者。

レティレスティア王女の拉致が朔耶の介入で失敗に終わってからフエルト卿の歯車が狂い始めた。

「何処まで私の邪魔をしようというのだ……」

帝国密偵からの要請を受け、朔耶の拉致に協力して帝国に亡命したまでは良かった。しかし、帝国民がこれほど忠義に拘る民族であった事は想定外だった。

到着初日の朔耶によって引き起こされた混乱は兎も角として、帝国に忠誠を誓い、帝国の為に尽力し、フレグンスで立場ある身分を棄てての亡命である。歓迎はされど冷遇されるとは思っても見なかったのだ。

主君と主義思想を違えての決別による亡命ではなく、一方的な主君への裏切りを働いた謀反者として、帝国内でのフエルト卿に向けられる視線は非常に冷やかなモノだった。

与えられた屋敷には、任務として遣わされた執事とメイド長、料

理人と警備の衛兵六人（三人交代制）の九人が就いた。それ以外の人員は使用人として個々に雇う事になっているのだが、誰もコースティン家の雇用には応じなかった。

伯爵家の屋敷ともなると、清掃や庭の手入れ、痛んだ箇所のチェックと修理、料理人の補佐に食材や日用品の買出し、買い付け等々、少なくとも常時ニ十人は必要な規模となる。

しかし使用人候補が募集に応じない為、常に人手不足に悩まされた。

そこでフエルト卿は苦肉の策として、キトから買い付けた奴隷を使用人として使う事にした。

なるべく使えそうな人材をと大枚を叩いて買った十一人の奴隷達に、使用人としてメイド服を着せ、下男服を着せ、貴族の屋敷で働く者としての振る舞いを執事とメイド長に教育させて、ようやく様になってきたかと思っていた矢先に、奴隷制禁止令である。

奴隷達の殆どは未開地から人狩りによって攫われてきた者だったので、皆帰郷出来るならそうしたいと訴えた。身売りしたサムズ出身者も居たが、近頃のサムズの改革や発展ぶりを聞き、彼等もやはり故郷に帰りたいと話していた。

無理に留め置く事は出来ない為、路銀を渡して解放となる。そうして奴隷達を送り出したのが二日前。屋敷の中はガランとして人の気配が無く、まるで廃墟のように静まり返っているのである。

頭を抱えて座り込んだまま、これまでの事を振り返っていたフエルト卿は、誰に向けるでもなく呟く。

「……何がいけなかったのだ……」

その時、コンコンと自室の扉がノックされると、舌足らずな口調のノンビリした声が廊下から響いた。

「だんなサマー、おちゃをお持ちしましたー」

返事を待たずに扉を開いて入って来たのはメイド服を纏った十五～六歳の娘。髪質の硬そうな金髪の三つ編みを肩に掛け、意外に安定感のあるしっかりとした足取りでお茶を運んで来る様は、中々手馴れている事を感じさせる。

「だんなサマー？　なんでそんなトコ座ってるんですか？」

「……お前か」

重く溜め息を吐いたフエルト卿は、のっそり立ち上がると椅子に腰掛けた。このメイドの名はリリー。現在、この屋敷にたった一人だけ残った元奴隷の使用人である。

他の奴隷達が其々の故郷へと帰って行く中、彼女は自分には帰る場所がないからと言って屋敷に留まり、そのまま雇用された。

「今日はしずかですねー」

「……態と言っているのかそれは」

カップを口に運びつつ顔を顰めるフエルト卿。このメイドが皮肉や冗談で言っているのでは無い事は、キトで買い付けてから今日まで彼女の言動を見てきた事でよく分かっている。何処か抜けているのだ。

それが生まれ付きによるモノなのか、身の上に起きた出来事の経験からそうなってしまったのかは分からない。何せ購入して最初に放った言葉が『今度のごしゅじんサマはいつ死にますか？』だった。

ある日、魔物の集団に村が襲われた。目の前で両親を魔物に喰われ、村を逃げ出した先で人狩りに攫われた。未開地から攫われて来た奴隷達にはよくある話だった。村から人を燻り出す為に、魔物を使う人狩り達も少なくない。

最初の主人は幼い少女ばかりを好んで買っては、自らの欲望の捌け口に使う老紳士だったが、リリーにハマってしまい、昼夜を問わず彼女を求め続けた。

老いた身体に負担が過ぎたのか、数日後のある晩、老紳士は情事の最中に逝ってしまった。所謂、腹上死というやつである。リリーは老紳士の妻であった若い婦人に売り飛ばされて、再び闇市へ。

二人目の主人はキトの豪商だったが、買われて数日後、その豪商は自分の息子の顔をした”何者か”に暗殺されて、財産は奴隷共々親族で分けられた。この時も情事の最中だった。

豪商親族の姉による強固な主張により、余ったリリーは三度闇市へ。

短い期間に二度も主人が死ぬという曰く付きの奴隷となってしまったリリーは、通常の値段では売れない為、格安で売られていた所を、粗方買い終えて帰途に付いていたフエルト卿がそれと知らずに、余った資金で『ついでに』と買ったのだ。

「今日のご予定は？」
「何もない」
「そーですかぁ」

亡命を果たした当初のフエルト卿は積極的に他の帝国貴族の元へ出向き、人脈作りに精を出していたのだが、どの家からも冷やかな視線を向けられるばかりで、会う事すら拒否する家もあった。

使用人を雇えず奴隷を使うようになると、蔑視の中に嘲りの視線も混じるようになり、流石にそんな彼等に頭を下げてまで交流を持とうは思わなくなったのだ。

あの眼はフレグンス貴族の派閥争いの中で散々見てきた『嫌な眼』だ、と。

何かの役職に就くでもなく、する事が無くなったフエルト卿は日がな一日屋敷の自室に閉じ籠もるようになった。

普段は魔術の本を読むなり魔力を高める瞑想をするなりしていたフエルト卿だが、今までの事を振り返って気持ちが落ち込むと、何もする気が起きない。

偶には怠惰に過ごすかと、お茶を口にしながらベッドにボンヤリ視線を向ける。

「あ、しますか？」

「ぶふっ」

いそいそとメイド服に手を掛けて脱ぎ始めるリリーを、フエルト卿は噴出したお茶で咽ながら止めた。

「止めんかっ　私は娼婦を買った覚えは無い」

「だんなサマ、勃たないんですか？」

「ちがうわっ！」

こんなやり取りも今に始まった事ではない。リリーは愛玩用として売買されて来たので、そういうモノだと思っている。だがフエル

ト卿は使用人として使う為に彼、彼女等を買ったのであり、断じて自分の享楽の為に買ったのでは無いと常々語っていた。

一度フエルト卿の従者がリリーに手を出し掛けたが、『だんなサマに許可をもらわないとー』と困っている所を他のメイド達がフエルト卿に知らせて、従者がフエルト卿に張り倒されていた。

そんな事もあってか、他の奴隷達もこの屋敷を出る事には随分悩んだようであったが、やはり望郷の念の方が勝ったのだ。

「あ、そういえば料理人さんから言伝です」

「それが元々の用事か……、なんだ？」

「はいー、たべものがもう無いので買出しが必要だそうです」

「何っ！　……いや、そうか。　路銀と共に持たせたのだったな」

フエルト卿は二日前に送り出した元奴隷の使用人達に路銀と食料を持たせた事を思い出した。

五日分の食料を十人分である。食糧庫が空になっていてもおかしくはない。使用人がいなくなったのだから、買出しを行う者がいなければ補充も出来ない。

衛兵は屋敷の警備以外で働くつもりは無い様だし、屋敷の管理に忙しい老齢の執事やメイド長に行かせる訳にも行かない。料理人は補佐がいないので厨房の整理に忙しい。

フレグンスから連れてきた従者は庭の手入れを一人で行っている為、手が空かない。

「当主自ら食糧の買出しに行かねばならんとは……」

ますます重くなる身体を億劫そうに起して出かける準備を始めるフエルト卿に、ささっとコートを用意するリリー。帰りは荷車で運

ばせるので供はいらないのだが、伯爵が一人で市場に買い付けに行くというのも様にならないので連れて行く事にする。

「お出掛けで御座いますか」
「街へ食糧の買出しだ」
「それは……」
「留守を任せる」

玄関で執事と短く言葉を交わすと、フエルト卿はリリーを伴って屋敷を出た。お辞儀で送り出す執事は、内心複雑な想いを抱いていた。執事とメイド長、彼等は任務で遣わされた使用人且つ監視人である。

他国、ましてや当時敵対国であったフレグンスの中枢に近い位置に居た亡命貴族をそのまま受け入れる筈も無く、フエルト卿の行動は逐一帝国の上層へと報告されている。

フレグンスでの経歴と謀反者である事を念頭に、どんな人でなしかと思って監視を続けていたが、少し策士の空気を纏った何処にでもいる普通の貴族にしか見えなかった。
使用人達への対応も決して居丈高ではなく、高貴な者たらんとする姿勢も窺える。

『そろそろ雇用制限を解いて貰う進言を出すべきか……』

執事は年輪を重ねた皺の多い穏やかな表情の裏で、元密偵隊長の冷徹な分析力を持って次の報告で上層に挙げる内容を纏めた。

「走るなリリー」
「だってー、こんなに積もってますよー」

何故雪が積もっている事が走る理由になるのだと、フエルト卿は溜め息を吐きながら街の市場へと歩いていた。城塞都市とも言える帝都の城は、相応の抱えた人口を賄う為、常に大量の食糧を備蓄している。

それらの食糧は竜籠で麓の街から一気に城へと運ばれるのだが、一般民や城外の屋敷に住む貴族達は一つ坂を下りた先にある帝都の下街市場に麓から運び込まれたモノを買う。

この辺りは坂が急なので馬車は使えない。代わりに乗用犬など山道に強い動物を荷物運びに使ったりもするが、大抵は人力の荷車で運ぶ方が手っ取り早く、確実だ。

市場に着くと早速、彼方此方回って買い付けを始め、新鮮な肉や野菜を市場で雇った運搬人の荷車に積み込んでいく。一度に運べる量では一週間も持てば良い方だが、日に何度も寒い坂道を往復する気にはなれない。

「どうせ、する事も無いのだしな……」

フエルト卿は週一で買出しに来るのも良いかと考えた。そうしてふと辺りを見渡すと、リリーの姿が見えない。

「旦那、旦那。お連れの使用人の嬢ちゃん、さっきそこの路地に入って行きやしたぜ？」

またか、とフエルト卿は頭（かぶり）を振って路地に向かう。リリーは街などに降りてくると、時折こうして居なくなる時がある。大抵は犬や猫を追い掛けて行く内に迷子になるのだ。

「リリー、何処にいる」

「だ、だんなサマっ　来ちゃダメで……んんっ！」

路地に付いた足跡を追って角を曲がろうとした所で、切羽詰ったようなリリーの声が響く。フエルト卿は何事かと角を曲がり、路地の先で数人の男に押さえつけられているリリーの姿を見つけた。

「何をしている！」

「ちっ　……おい」

男の一人が合図を送ると、リリーの足を押さえつけていたズングリした男が腰紐に提げていた手斧を振り翳し、そのままフエルト卿を目掛けて投げ付けた。咄嗟に壁際に躱すフエルト卿。更に別の男が短剣を片手に突進してくる。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」

フエルト卿が翳す掌から撃ち出された風の塊りが短剣の男を弾き飛ばす。『魔術士か！』と一瞬怯んだ男達に対し、フエルト卿は更に詠唱を始める。

「――風は集い雪は舞う雪塵の壁となりて――」

風に巻き上げられた雪が吹雪のように空中に舞い、路地の空間を覆う。

「――風は集い我が身を運ぶ衣となりて――風は集い彼の者を纏う兜となりて――」

連続した詠唱でフエルト卿は風の衣を纏って身を軽くすると、吹雪の壁に途惑っている男達に向かってその吹雪を生き物のように纏わり付かせた。これは眠りの香との組み合わせで朔耶を拉致した時に使った術である。

ちなみに学院でエルディネイアを誘拐した従者は此処まで繊細なコントロールが出来ない為、風の膜で大まかに包み込んだ結果、香の効き目が薄くなって予定より早く目覚めさせてしまったのだ。

顔面を吹雪に覆われて右往左往する男達に、フエルト卿は幾分軽くなった身体で素早く肉薄すると、至近距離から風の塊りを撃ち出してリリーの救出に邪魔な者を弾き飛ばした。

吹雪の目眩まし効果が切れる前にリリーを助け起こして直ぐにその場から距離を取る。相手の油断で逆不意を突けたものの、魔術士一人で数人を相手取るには無理がある。

急いで路地を飛び出し、付近の者に知らせようとしたフエルト卿は、下街の入り口方面から押し寄せる武装した集団を見て目を瞠る。アレは帝国領に出没する山賊だ。

「ばかな！　帝都城の膝元だぞ！？」

城を見上げる直ぐ近場の街を襲撃するなど有り得ないと思いつつも、フエルト卿はリリーを連れて近くの宿に駆け込んだ。恐らく市場から手持ちで持てるだけ略奪した後は直ぐに立ち去る筈だと予測する。

城に近いこの街は、近い故に襲撃など起こり得ないと考えられ、他の街と比べて警備が薄く物資は豊富だ。

「確かに獲物は多いだろうが……連中、逃げ切れると思っているのか？」

フエルト卿と同じように建物の中に避難した街の住人や、宿の客達が不安そうにホールの一角に身を寄せ合っている。彼等の輪に加わりながら、フエルト卿はリリーの状態を確かめた。

「怪我は無いな」

「はいー……」

「？　どうした、何処か痛むのか？」

「いえ、ありがとうです。だんなサマ」

何時もと様子が違うなと思ったフエルト卿だったが、このような非常事態ともなれば普段と違っていても別段おかしくはないかと思いなおす。よくよく考えてみれば、ついさっき路地裏で襲われたばかりなのだ。

「そういえば、さっきの連中……　山賊共の仲間だったのか？」

あれ程の数の集団が街を目指して移動すれば、誰かが気付いても良い筈だ。予め街に潜んで襲撃のタイミングを計っていたのかもしれない。フエルト卿はそう結論付けた。

その時、宿の扉が激しく叩かれ、一塊になっている避難民達から小さくざわめきが上がった。逃げ遅れた民か、はたまた山賊かと息を殺して観察する。扉付近まで確かめに行こうとする者はいない。

ダンッダンッと激しく叩かれて軋みを上げる扉の中央部分に、斧の刃らしき銀色の金属が生えた。どうやら山賊だったらしい。避難民達から恐怖の悲鳴があがった。

フエルト卿は宿内の人々を見渡して声を掛ける。

「この中で戦える者はいるか」

70話：誇りと忠誠【後】（前書き）

ちょっとグロっぽい描写があるかも。

70話：誇りと忠誠【後】

「お頭、早くズラから無くていいんですかい？」
「まだ早い、逃げるのは城の衛兵が見えてからだ」

オドオドと落ち着かない様子の手下に余裕タップリの笑みで返した山賊の頭領は、坂の上に立たせた見張りに視線を向けた。
数日前から潜ませていた手下数人が襲撃直前に街の魔術士に見つかって一戦やらかすという不手際があったが、概ね順調に進んでいる。

計画通り事が運べば、当分は仕事をしなくても食っていける筈。
冬の間は塒（ねぐら）でノンビリ過ごせそうだ。
恐らくこれでもうこの先、此処（このまち）を襲撃するのは無理だろう。油断しきっている帝都城の膝元からごっそり獲物を頂く、最初で最後の大博打なのだ。

食糧を有りっ丈ソリ付きの荷車に積み込んで先に撤退させると、次に必要なのは金目の物と若い女。とりあえず押し入った民家には老人か子供しか見つからないので、宿を標的にした。

「気を付けろよ、魔術士が潜んでるかもしれねぇぞ！」

片足を引き摺りながら仲間に警戒を促す路地に潜んでいた男。至近距離から攻撃魔術を撃ち込まれた仲間は棄てて来た。もう二度と

肩を並べて仕事をする事は無いだろう。

「何人やられた？」

「……三人っす」

坂の上に視線を向けたまま問いかける頭領に、足を引き摺った男は消沈気味に答える。『そうか』と答えた頭領はちらりと男を見ると労うように言った。

「その足じゃ山を滑り降りるのも難しいな」

「だ、大丈夫すよ……片足でも」

「いや、無理だな。――風は集い一刃の斬撃となりて――」

「待ってくれ！　た、助け――」

ヒュンッと空気を切る音がして、男の身体が二つに分かれた。市場通りの雪道が真っ赤に染まる。

「まあ、ゆっくり休め。俺の手下に役立たずは必要ねぇからな」

手下だったモノにそう声を掛けると、山賊頭領は坂の上に視線を戻した。

宿の中にいた避難民の中で、フエルト卿の呼びかけに応えたのは五人だった。

この街に住む若い剣士志望の青年と、元帝国軍人の老人、偶々宿に泊まっていた三人の冒険者グループ。フエルト卿を入れると六人、これが味方の全戦力だ。

「帝都城から兵が出て来るまで粘ればなんとかなる、奴等の侵入を阻止すればよい」

フエルト卿が宿へ避難する前に見た山賊の集団は、横並びで五人分程の幅がある山道一杯に二列と数人は見えた。路地に潜んでいた者が他にも居たとして、大凡二十人規模の集団だと推定する。

さらに外から聞えてくる彼等の話し声から、四台か五台の荷車がこの場から引き上げている事を聞き取れた。一台に付き二人が就いたとして約十人前後が残っていると考えられる。

「君達は二人一組で裏口や窓などの侵入されそうな場所を塞いでくれ、私ともう一人は正面の扉を塞ぐ」

三人の冒険者と青年にそう指示したフエルト卿は、老人と共に戸棚やソファーを扉の前に移動させてバリケードを築き始める。冒険者達と青年は一組が二階に向かい、もう一組は一階の裏口へと急いだ。

バリケードを築く間も、山賊達の斧によって宿の扉が打ち崩されていく。扉の真ん中に開いた腕一本通りそうな程の穴から宿の中を覗き込む山賊の顔に、避難民達が悲鳴を上げる。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」

詠唱を行いながら穴を塞ぐように掌を翳したフエルト卿は、覗き込んでいた山賊の顔面に風の塊りを叩き付けた。

扉の向こうからはもんどり打って転げまわっている山賊の悲鳴が聞える。仕留める事は出来なかったようだが、戦闘不能には出来た

だろうと、フエルト卿は淡々とした分析を行いながらバリケードを築く作業を続けた。

「ふむ……奴等の挑発にならんかのう？」

「結果は同じですよ、御老人。敵は倒さねば」

老人の懸念に対し、自ら実践して来た持論を挙げて答えるフエルト卿。老人は『ふむ』と呟くと、特に何か言うでもなく机や椅子を積み上げて行き、やがて扉の穴も見えなくなった。

「斥候と一戦やらかした魔術士か……」

顔を抑えてのたうち回る手下を静かにさせた山賊頭領は、見張りの見張りを他の者に任せると宿の制圧に乗り出した。残った手下十人のうち五人を裏手に回し、三人を二階へと差し向ける。

残り二人は荷車に破城槌（はじょうつい）代わりの木材を固定して扉から距離を取った場所で配置に就かせた。

「魔術士が二階か裏手に回ったら突入だ。てめぇら、しくじるんじゃねえぞ？」

裏口を蹴破ろうとする音に、冒険者組が避難民から手伝いを募ってバリケードの補強に向かった。物を運んで積む位ならばと戦う術を持たない住民も彼等に従う。

二階からの侵入に備えて部屋の見回りを行う青年と冒険者組みは、壁に取り付くようなを音を聞いてその部屋の窓に注意を払う。テラス等といった洒落た足場の無い安宿な為、二階から侵入するには直接窓の縁に捉まって身体を滑り込まさなくてはならない。

部屋のベッドを立て掛ける等して窓を塞いではいるが、強引に突破できなくは無い為、侵入しようとしている所を発見して撃退するのが一番安全で確実だ。

声を潜めて身を寄せ合う避難民達は、裏口を叩く音や、時折壁から聞こえる何かがぶつかる音に耳を欹てる。

「正面は静かになったのう」

「裏口は陽動かもしれませんな、私は上を見てきます」

「だんなサマ……」

「リリー、お前は避難民達の所に居なさい」

そう言ってフエルト卿が二階へ上がる階段に足を掛けた時、二階の一室から争うような物音が響いた。急いで駆け上がったフエルト卿が扉の開いている部屋に飛び込むと、丁度冒険者と青年が窓から山賊を叩き落した所だった。

「こっちは大丈夫です」

「何人か上から来てますよ」

「分かった」

廊下に出たフエルト卿は然程多くない部屋を見て回る。一番奥の部屋を覗いた時、立て掛けられたベッドが内側に倒されて窓から半分身を捩じ込んでいる山賊と目が合った。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」
「うぇっ！　ちょっとま――　ぎゃあああ」

風の塊りに弾き飛ばされた山賊は、放物線を描いて落ちていった。ベッドのバリケードを組み直したフエルト卿は山賊が落としていった手斧を拾うと、一階へと戻って老人に持たせる。

「おう、気が利くのう。やはり得物が無いとしっくり来んかったわい」

中々の手錬を感じさせる身のこなしで斧を構える老人。例え正面から戦えなくとも、威圧効果は十分にありそうだ。その時、正面扉のバリケードを何かが突き抜けていった。

二階の窓から侵入しようとしていた手下が吹き飛ばされたのを見て、山賊頭領は宿の扉に向かって掌を翳した。荷車を構える手下がタイミングを計るように腰を落とす。

「――風は集い一刃の斬撃となりて――」

風の刃が撃ち出され、バンッと音を立てて扉が割れる。荷車の手下が飛び出し掛けて、あれ？　と途惑いながら蹈鞴（たたら）を踏んだ後、恐る恐る頭領の顔を窺う。

期待していた効果を得られず、舌打ちした山賊頭領はもう一度じっくり魔力を錬ってから詠唱を行った。

「――風は集い一刃の斬撃となりて――」

今度は上手く行ったようだ。錬りこまれた魔力によって発現した風の刃が、扉の向こうのバリケードをも貫通する。が、荷車の手下が出遅れた。

山賊頭領が早く行けと顎で示すと、手下は慌てて破城槌仕様の荷車を押して扉に突貫を掛けた。

「来るぞ！　相手にも魔術士がいるようだ！」

「そのようじゃな、山賊の癖に生意気じゃのう！」

強度を失ったバリケードを突き破って荷車が飛び込んで来る。フエルト卿と老人は扉を正面に左右に分かれると、荷車に取り付いている山賊を一人ずつ仕留めに掛かった。

バリケードの突破で砕片（さいへん）に塗（まみ）れて顔を俯かせていた山賊は、役目を果たすと同時に倒れた。

「くっ　誰か応援に来てくれぇ！」

「不味い！　入り込まれた！」

「下へ行かせるなっ　ここで食い止めるんだ！」

裏口の方から助けを求める声が響く。二階でも戦闘が始まったようだ。

「行ってください」

フエルト卿は老人に裏口の応援に行くよう要請し、老人は頷いて

宿の奥へと向かった。
二階で二人倒し、正面で三人、裏口には四人から五人いると見積もって現在二階に侵入しているのが何人かは分からないが、最初の推測通り十人前後が残っていたとすれば、多くて後一人か二人が正面から来ると予測する。

もっと多く残っていたらとは考えない。フエルト卿は城の衛兵はまだかと焦れる思いで二階と裏口の戦況を窺いながら魔力を錬りつつ、風通しの良くなった正面入り口に注意を払った。

それは全くの偶然。吹き込む冷気に僅かな違和感を感じ、戦いの場に身を置いていた頃の研ぎ澄まされた感性が呼び覚まされていたからこその、無意識に放った風の塊り。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」

違和感に向かって撃ち出された風の塊りは、冷気を裂いて進む風の刃を撃ち抜き、フエルト卿の身体を分断する筈だった風の刃は卿の肩を僅かに切り裂くに止まった。

「ちっ　躱しやがった」
「く……っ　帝国流の風刃魔術か」

肩口から血を流すフエルト卿の姿にリリーが悲鳴を上げる。

「だんなサマ！」
「来るなリリー！」

山賊頭領はリリーとその後ろに固まっている避難民達を見て、口

の両端を釣り上げるように笑う。

「おっほぅ！　居るじゃねえの。　コイツは早いとこ片付けて持って帰らねぇとな」

そろそろ城の衛兵が出て来そうだと警戒する山賊頭領が掌を翳して詠唱に入る。すかさずフエルト卿も応戦の詠唱に入った。

「――風は集い一刃の斬撃となりて――」

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」

詠唱速度は殆ど互角。威力も互角で互いに打ち消しあう。しかし、威力が抑えられて強風をぶつけるだけになるフエルト卿の『風の塊り』に対し、山賊頭領の『風の刃』はその性質上、当れば皮膚を裂く程度の威力が残る。

徐々に追い詰められていくフエルト卿は、撃ち合う度に増える切り傷の痛みを無視して打開策を見出そうと知恵を絞る。

『このままではジリ貧だ……何か手段を講じなくては』

魔力を錬りつつ何か良い手は無いかと頭をフル回転させていたフエルト卿の視界の端に、裏口から侵入した山賊の一人が防衛網を突破して避難民達に襲い掛かろうとする光景が映った。

山賊の直ぐ後ろを老人が追っているが、このタイミングでは人質を取られるのが先になる。

フエルト卿は咄嗟にそちらの山賊に向かって風の塊りを放った。横合いからの攻撃で壁に叩きつけられた山賊は、背後からの老人の斧でトドメを刺された。

「だんなサマ！」
「っ！」

ドンッと突き飛ばされたフエルト卿の服の袖を掠めて風の刃が通り抜ける。カウンターに背中をぶつけながら顔を上げたフエルト卿の視線の先で、赤い血飛沫が舞った。

「リリーッ！」

フエルト卿の無事を確かめて安心したような表情を浮かべながら、ゆっくりと崩れ落ちていくリリー。帝国仕様のメイド服が深い斬撃を受けた腹部から赤く染まってゆく。

「ぁあ？　糞っ！　勿体ねぇな」

悪態を吐きながら舌打ちする山賊頭領は掌をフエルト卿に向けると、次の詠唱に入ろうとした。フエルト卿はリリーの傍に駆け寄りたい衝動を抑え込みながら、素早く詠唱を始める。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」

撃ち出された風の塊りは山賊頭領から大きく外れて天井の板を砕いた。

「はっはぁ！　何処狙ってやがる――風は集い一刃と斬撃となりて――」
「――風は集い彼の者を纏う兜となりて――」

フエルト卿は目眩ましにも使った術で崩れた天井の破片を風に巻き込むと、それを山賊頭領の頭に巻きつけながら床を転がって風の

刃を避ける。
　距離が近い為、避け切れ無かった部分が切り裂かれて血飛沫が上がった。その切り裂かれた傷も無視して術のコントロールを行い、木片を巻き込んだ風の帯を山賊頭領の顔面に摺りつけた。

「ぶあっ！　ぎゃああ！」

　木片が顔中に突き刺さり、目潰しを喰らった山賊頭領は顔を覆いながら逃げ出そうとした。
　ここで逃がす訳にはいかないと、フエルト卿は傷ついた身体を引き摺って詠唱を行おうとしたが、流石に魔力の限界だったらしく力が上手く纏まらない。

『早く、早く奴を倒さねば！』

　何でも良いから何か得物をと手を彷徨わせ、触れたモノを適当に掴んで駆け出したフエルト卿は、駆け寄った勢いのまま山賊頭領を殴りつけた。

「があぁ！」

　フエルト卿が掴んだのはカウンターの上に置いてあった花瓶だった。ガシャンッと陶器の割れる音が響き、頭を殴られた山賊頭領は血が滲む顔を片手で覆ったまま腕を振り回す。

「糞っ糞！　野郎っ　畜生ぉ！」

　ふら付きながらも出鱈目に腕を振り回す山賊頭領の足を掴んで引き倒そうとしたフエルト卿は、そのまま蹴り飛ばされて尻餅を付いたが、転倒させる事は出来た。

すぐさま飛び掛かって馬乗りになると、山賊頭領の顔面に掌を押し当てる。

「――風は集い――風は集い――風は集い――」

魔術の使い過ぎによる疲労と集中力不足で安定しない術は、攻撃魔術として完成しないが、風を集める事で山賊頭領の肺の空気まで吸い上げる。

呼吸を遮られた山賊頭領は必死にフエルト卿を振り払おうとするが、マウントポジションを取られているので簡単には逃げ出せない。山賊頭領の振り回した棍棒のような腕がフエルト卿の顎を捉える。

「がっ」

「カヒュッ　ヒュウ――」

ぐら付いたフエルト卿の詠唱が止まると、空気を求めて笛の音のような呼吸音を響かせる山賊頭領。視界が歪みそうな程揺れる意識に歯を食い縛って耐えたフエルト卿は、握りこんだ左手を振り下ろした。

それはパンチ等ではなく拳骨。握った拳をただ叩き付ける行為。ゴシャッと山賊頭領の鼻が潰れ、大量の鼻血が気管に流れ込む。フエルト卿は血塗れになった山賊頭領の顔面を両手で押さえ込むと、再び呼吸を奪う詠唱を始める。

「――風は集い――」

山賊頭領が手を引き剥がそうと掻く。それを上から抑えつけるフエルト卿は、呪詛のように詠唱を繰り返した。

「――集い集い集い集い集い――」

バタバタともがき苦しむ山賊頭領は、もはやマトモな抵抗が出来ず腕や脚が痙攣を始める。

「――荒れ狂う渦となりて――」

パンッという何かが破裂するようなくぐもった音が響いて山賊頭領の身体が跳ねる。そして二、三度ビクリと震えたあと、動かなくなった。ゆらりと立ち上がったフエルト卿は床に倒れ付すリリーの傍に歩み寄った。

「リリー……」

「……だ……な……サ……マ……」

「……医者を……」

傷を治さねば、とフエルト卿は二階や裏口の山賊を片付けて集まって来た仲間に訴える。

しかし、皆は静かに眼を伏せた。丁度その時、城から駆けつけた衛兵が山賊の見張り役や、頭領が倒されたのを見て宿の周囲から逃げ出す山賊の残りを制圧し始めた。

避難民に混じっていた運搬人の男が、満身創痍のフエルト卿を気遣う。

「旦那、アンタの怪我も酷い」

「私はまだ動ける」

リリーの身体を抱え上げたフエルト卿は、医者を求めてふらふらと宿の外に出た。

『そうだ、城へ行けば病院が……精霊神官が居る筈だ』

敵を殺す魔術と陰謀術ばかり磨いてきたフエルト卿は、人を救う術を身に付けなかった事を悔やみながら、帝都城への道を進む。腕に抱いているリリーはぐったりしたまま、生命活動を示す呼吸をしていなかった。

「リリー……、息をしろリリー！」

何か、途轍もない喪失感がフエルト卿の心を押し潰す。彼にとって、こんな感情は初めての事だった。

徐々に温もりが失われ、冷たくなっていくリリーの体温を感じながら、フエルト卿はただ呆然と城を目指した。そして、不意に顔を上げる。

漆黒の翼が、帝都城に降りて行くのが見えた。

『サクヤ殿……　そうだ、彼女なら』

強力な精霊の癒しを行使してどんな傷であっても瞬く間に治癒し、サムズの動乱では死者をも蘇えらせたと聞いた。リリーを抱いて坂を駆け上がろうとするフエルト卿は、足がもつれて転びそうになりながらも雪道の坂に踏み出そうとする。

「旦那っ　乗ってくだせえ！」

ソリ付きの荷車を押して来た運搬人が横に付ける。フエルト卿が素早く乗り込むと、運搬人は全力で坂の雪道を押し上げ始めた。

昨日、帝都の城に魔力石エンジンを持ってきた朔耶は、昼頃からティルファに飛んで石を削る機械の図案（弟案）をブラハミルトに提出し、一泊してから今日の朝方ティルファを出発。今し方、帝都の城に到着した所である。

これから城の職人達と話し合って魔力石エンジンを組み込む『馬なし馬車』の製作に取り掛かろうかという所だった。流石に城の中では造れない為、中庭添いに並ぶ大型機械用の工房を見に下りて来た時、俄かに城門の付近が騒がしくなった。

「何かあったの？」
「ああ、下街に山賊が出たらしい」
「山賊！　こんなお城の近くで？」

警護の衛兵を引き連れてバルティアと並び歩く朔耶は、この辺りはそんなに治安が悪いのかと驚いた。
そうではなく、城の膝元にある街が襲撃されるなど誰も予想しておらず、その油断を突かれたと説明する衛兵達に、成る程ねと納得する朔耶。そこに、朔耶の名を叫ぶ声が響いた。

「サクヤ殿ーー！」

中庭にいる皆が声の主を振り返り、眼にした光景。彼方此方切り刻まれてボロボロの貴族服を纏い、自らも傷だらけの身体を引き摺りながら、血濡れの少女を抱いたフエルト卿がヨタヨタと駆けて来る。

「サクヤ殿！　この子を、この子を助けてくれ！　頼む」

鬼気迫る勢いで懇願するフエルト卿と、血濡れでぐったりしているメイド服の少女に、朔耶は一瞬眼を瞠って固まった。警護の衛兵達はフエルト卿が皇帝陛下と朔耶に近付く事を阻止しようと隊列を組んで壁になる。

「コースティン殿！　陛下の御前であらせられ――」

「邪魔よ！　どいて！」

フエルト卿を諫めようとした衛兵を押し退けて飛び出す朔耶に、慌てて道を開ける衛兵達。一体何事かと、中庭の騒ぎを聞きつけた城の住人達が、窓から顔を出して様子を窺う。

「この子、もう息が……」

「頼む。サクヤ殿は死者をも蘇えらせると聞いた。この子を、リリーを助けてやってくれ」

雪の残る中庭の湿った地面に額を擦りつけて懇願するフエルト卿の姿に、朔耶は戸惑いを覚えながらもメイド服の少女に癒しの光を送り込みながら状態を確かめた。

『まだ死んでからそんなに経ってないよね？』

ウム　アノソセイホウデアレバ　マニアウカモシレヌ

人の死には早々慣れるモノではない。震える気持ちを奮い立たせて、朔耶はフエルト卿に言葉を掛ける。

「あたしは死んだ人を生き返らせたりは出来ない」

顔を上げたフエルト卿は絶望に色を失くしていた。

「だけど、まだ身体は温かいし、直ぐに処置をすれば間に合うかもしれない」

朔耶は精霊の癒しと心臓マッサージ、人工呼吸の組み合わせによる心肺蘇生法を説明する。朔耶が精霊の癒しと心臓マッサージを担当するので、フエルト卿に人工呼吸を任せた。

「強く吹き込んじゃダメよ？　ゆっくりね」

そうして、バルティア皇帝、警護の衛兵、大勢の帝国民達が見守る中、リリーの蘇生処置が行われる。

「一、ニ、三、四……」

癒しの光で腹部の傷も修復しながら心臓マッサージを行い、そっと二度息を吹き込む人工呼吸を繰り返す。何度目かの心臓マッサージと人工呼吸が行われた瞬間、癒しの光がリリーの身体を包み込んだ。

「よしっ　息さえ吹き返せばコッチのもんよ！」

精霊の癒しの出力を上げ、眩しい程の光が朔耶を中心に広がっていく。その範囲内に居たフエルト卿の傷も見る見る癒され、湿った黒土に埋もれていた枯れた芝生が瑞々しい青に染まる。

「こふ……っ　はれ？　だんなサマ……？」

「リリー！」

おぉ……と周囲からどよめきが上がる。”死んだ少女が生き返った”、”皇帝の黒后は死者復活の儀式を修得している”等々の声が囁かれたが、これらの噂は後に『朔耶の国の医療技術である』と訂正され、帝国内の医療現場や衛生兵達にも伝授されていった。

一仕事終えたぜーと朔耶が立ち上がって伸びをする。リリーを抱擁していたフエルト卿は、そんな朔耶になんと言えば良いのかと声を詰まらせた。

先ずは謝罪からか、それとも感謝からかと逡巡しているフエルト卿に、朔耶は苦笑しながら言葉を向ける。

「ひげ」

「髭……？」

「伸びてるよ」

顎を擦って見せる朔耶につられて、自分の顎を擦ってみるフエルト卿。確かに無精髭が伸びていた。朔耶はくすっと笑って踵を返すと、手や服にべっとりと付いた血を洗い流す為、城内へ向かう。

「有り難うサクヤ殿。すまなかった」

フエルト卿は感謝と謝罪の言葉を述べると、深く礼を取った。後姿のまま、ヒラヒラと手を振って見せる朔耶なのであった。

「だんなサマ、もう一人で歩けますよ？」

「そうか」

リリーを抱えたまま自分の屋敷に向かっていたフエルト卿は、少し気恥ずかしさを感じながら腕から降ろした。じっとフエルト卿を見上げたリリーは、指先でそっと無精髭の顎を撫でる。次いで、自分の唇をなぞった。

「むん？」

「……えへへ」

首を傾げるフエルト卿に、リリーは微笑んで見せる。

「だんなサマ、お腹空きましたねー」

「……ああ、食糧の買出しをやり直さねば」

そう言えばそうだったと、フエルト卿は眉間に皺を寄せる。とりあえず一度戻って着替えて来なくてはならない。それよりも、下街市場の食糧が根こそぎ山賊共に略奪されていた場合、暫らく屋敷では料理を作れない。

「偶には城の食堂にでも行くか」

「あそこ美味しいですよねー」

ほんの数刻前まで瀕死の状態にあったとは思えないノホホンとしたリリーの在り方に、フエルト卿は自然と笑みが零れた。

「お帰りなさいませ」

普段と変わりない執事の出迎え。フエルト卿とリリーの有り様に

も全く動じた様子を見せず、ボロボロになったコートを預かる。

「うむ、食糧の買出しは次の機会にする。服を用意してくれ、城の食堂で食事を摂る」

「畏まりました」

フエルト卿とメイドのリリーが屋敷の中に消え、執事によって玄関の扉が閉じられる。

この事件以後、フエルト卿は真に帝国貴族として民に受け入れられる事となるのであった。

71話：商人国家キト

朝の騒ぎの後、夕方まで中庭沿いの工房で『馬なし馬車』改め『サクヤ式自動四輪』の製作を進めていた朔耶は、バルティアに一言挨拶を入れてから帰ろうかと、城の階段を上っていた。ちなみにスクーターは『サクヤ式自動二輪』と呼ぶ事になる。

昼過ぎまで作業に参加していたバルティアは、側近服姿のアネットに『お昼までは大目に見たけどこれ以上はダメ』と言って引き摺って行かれたので、皇帝の執務室で拗ねている所だろう。

「バルー？　いるー？」

「おおっ！　サクヤよ、自動四輪の出来具合はどうなった？」

溜まった書類を片付ける手は休めず、バルティアは何時アレに乗れるのかとワクワクした様子を隠せないでいた。朔耶はそんなバルティアの子供っぽい所に苦笑しながらまだ車台を組んでいる段階だと返す。

「魔力石エンジン積むのはもっと先。　しっかりした造りにしないと、直ぐ壊れちゃうわよ？」

「うむ、いやはや……どうにも気が急いでしまってな」

「も～～昨日からずっとこの調子なのよ～～サクヤちゃん、陛下のお相手してあげてよ～～」

「ヴィヴィアンさん、どさくさに紛れて別の事狙ってるでしょ……」

バルティアに余計な事を吹き込むな～と抗議する朔耶をほほほっと笑って躱すアネット。帝国の紋章がデカデカと壁に掲げられ、先程まで厳格な空気が支配していた皇帝の執務室はすっかり若者の雑談場と化している。サボりたくなるバルティアであった。

帝都城の三階にある士官食堂。朔耶のお気に入りでもあるこの食堂は、城に勤める官僚や士官クラスの軍人達もよく家族連れで訪れる。それなりに賑やかであり、余り堅苦しくない程度の上品さも醸し出している。

夕食を食べてから帰る事にした朔耶は、食堂の一角に見知った姿を見つけた。魔術士風貴族服の紳士とメイド服姿の少女が、テーブルの端で向かい合わせに座って食事を摂っている。

何となく『同席しようかな～』と迷った朔耶だったが、不意にメイド服の少女と目が合った。

「あ、光の人」

「ん？」

「その通り名は新しいわね」

思わず吹き出しそうになりながら、朔耶はフエルト卿達と同席する事に決めた。少し緊張気味な様子を見せるフエルト卿の隣に座ると、メイド服少女の様子を窺う。

「リリーだっけ？　身体はもう何とも無さそうだね」

「はいー、元気一杯でお腹空いてますよ」

その返答にやっぱり吹き出しそうになる朔耶。リリーはキョトンと首を傾げ、フエルト卿は眉間の皺を指でぐりぐりしていた。

「闇市かぁ……」

「うむ。キトでは扱われる商品に制限が無い。健全な人身売買業者もあれば、犯罪組織そのモノと言える闇業者も混在している」

リリーをキトで買い取ったという話をフエルト卿から聞いた朔耶は、キトの実態について色々と訊ね、奴隷業者と闇業者について詳しく聞かせて貰っていた。健全な業者は自身を売る身売り奴隷の要望に合う主人を見つけて、そこに売り込んでくれる。

当然、奴隷となる身売り側に支払われる報酬は無いが、要望には最大限応える事で業者としての信頼を得ている。フエルト卿が使用人代わりに購入した奴隷の中にも、サムズ出身の身売り奴隷が数名いた。

ちなみに、健全な業者の奴隷は割高だが値段が安定していて、犯罪組織そのモノな闇業者は素材によって値段も乱高下する。

「商売として成り立っちゃうから、闇業者が蔓延っちゃうのよねー……」

「キトの政府は商売のルールさえ守っていれば、一切の規制を設けないようですからな」

朔耶は唸りながら腕を組んで天井を眺めた。以前、傭兵団の陣地にヨールテスが現われた時に、『銀月の牙』パーシバル傭兵団のブ

ラット団長が言っていた言葉を思い出す。『――結構何でも有りの国だからな、あそこは』

「何でもありか～……、キトの政府って何処にあるの？」

「それは情報屋ですら分かりかねるでしょう。一部の闇業者と繋がりがあるとも言われてますが、真偽は定かではありませんな」

「ふ～～む」

キトの政府を探ろうとしたモノは例外なく消される、という噂も実しやかに囁かれているらしい。

ヨールテスのような人物が関わっているのなら、そういう事もあるのかもしれないと半分は納得する朔耶。しかし、何故秘密にする必要があるのか、そこが引っ掛かる。

「久々に来ました、精霊の勘に引っ掛かり」

「？」

「気にしないで、独り言よ」

朔耶は有意義な話を聞けたよと礼を言って会話を切り上げると、冷め掛けた夕食をせかせか平らげて食堂を後にした。

既に食べ終えていたリリーは、フエルト卿とサクヤの会話を聞いている内に夢の世界に旅立っていたので、フエルト卿が負ぶって帰る羽目になったという。

「ただいまー」

フエルト卿からキトの詳しい話を聞けた朔耶は、キトについての対策を考えながら自宅の庭に帰還した。

朔耶の働き掛けにより、元々奴隷制を禁じていたフレグンスに続いて、ティルファ、グラントゥルモスといった列強四国のうちの三国までが奴隷の売買を禁止した。

しかし、奴隷売買の中心的存在であり、列強国の一国に数えられているキトが変わらなければ、サムズの孤児達や未開地から攫われて来たリリー達のように、人買いや人狩りの犠牲になる者は後を絶たない。

身売りをする人達は生活に困窮し、自らの自由と引き換えに衣食住の保障を得る事を選択した人達だ。

身売り人の引き受け業者には人材派遣などのシステムで代用が利くので、真っ当？　な商売をして来た者が奴隷制禁止によって被る不利益は少なく抑えられる筈。そういった変革を齎(もたら)せる為には、キトの政府と話を付ける必要がある。

「これはタカ君やお兄ちゃんにも相談した方がいいよね」

お風呂から上った朔耶は兄と弟を居間に呼ぶと、キトの問題について相談した。

「それは難しいな」

「キトの政府か……、前の和平会談での事はどうなったんだ？」

和平会談にキトの代表として参加していたヨールテスの行いについては各国ともに抗議は出している。だが、キトの政府の所在が分からないので、どうにもならないらしい。

キトの政府宛てに手紙を出せば返答があるので届いてはいるようだが、誰が何時どの段階で何処に届けているのかは全くの謎。また、各国共にキトとの流通が滞って困るのは自分達なので、キトに対して何らかの制裁処置をとる事も適わない。

「ふーむ、一番影響力が無いように見えて実は、オルドリア大陸を牛耳ってるのってキトじゃないのか？」

「言えてるね、多分キトの政府って『商人国家』を隠れ蓑にしたマフィアみたいな組織だと思う」

キトに属する商人はキトの政府に保護されていて、各国を巡る行商も道中安全。キトに属しない商人、他の国のお抱え商人達は盗賊にも襲われやすい。という環境を作り上げれば、実体を持たない政府の下に商人達を牛耳る事が出来る。

大陸中の商人達を牛耳る事は、大陸の流通を牛耳る事になる。何れの国も食糧などの輸入はキトとの交易に頼っている部分が多いので、キトとの関係を拗らせて物資が滞る事は国難規模の被害を生みかねない。

「相当昔から練られてたのかもな、戦乱の時代に予め商人の囲い込みとかをやって下地を作ってさ」

平和な時代に入ると各国とも人口の増加で足りなくなる物資をキトの商人が用意するというやり方で、他国の生産量が上がらないように自給率をコントロールする。

足りないモノはキトから輸入すれば事足りる、キトはどんな時でも相手を選ばず商売をするだけの国。そういう印象を周りに与え続け、事実、そういう関係を築き上げてきた。

「で、気が付くと、どの国も首根っこ抑えられてたって訳か」

「大体、一国だけに商人が集中してるって状況事態が不自然なんだよ、そうなるように誰かが仕組んで維持しなきゃ有り得ない」

どうにも話がきな臭くなって来たので、朔耶は一旦キトの裏事情については話題を置く。

「でもそうすると、キトの支配者が諸悪の根源っぽいよね」

「ヨールテスって奴はサムズの反乱の首謀者と繋がってたり、朔姉の居た傭兵団を嗾けに来たりしたんだろ?」

「和平会談からの動きを考えると、そうなるわな」

ヨールテスがキトの支配者とどの程度の繋がりを持つのか、或いはキトの政府という組織の中でどの位置に居るのか、何れにしてもキトを支配する組織は真っ当な国家の政府とは考え難い。

「フレグンスの大使として出向いても意味がないだろうな」

「となれば、単独潜入か……」

キトの支配者がどんな組織であろうと、その存在と所在が明らかになれば各国にも動きようがある。実体が掴めないモノには手の出しようも無いが、目標が定まれば対応策も編み出せるというモノだ。

「潜入て……　朔姉、大丈夫なのか?」

「そんな危ない事までしなくてもいいんじゃないか?」

「大丈夫、あたし向こうじゃ無敵だから」

兄も弟も、流石にそんな危険を冒してまで向こうの世界の改革に関わらなくてもいいのではないかと、キトの政府暴きには難色を示したが、朔耶は『それじゃあティルファと帝国に奴隷制禁止令を出して貰った意味が無い』と言って譲らなかった。

「自分で始めた事なのに、ここでやめたら途中で放り出す事になるでしょ？　それは無責任だよ」

結局、説得された兄と弟は朔耶の無敵っぷりを確認した上で、キトへの潜入捜査を許可した。そうと決まったならば、兄弟として朔耶に危険が及ばないよう全力で協力し、色々と作戦を考える。

「フレグンス高官という立場に問題は無いか？」
「政府の所在を探りに行くだけだから問題なし」
「向こうの親しい人間にも知らせない方がいい」

そうして先ず、正体は隠して行く事が前提となる。朔耶の黒髪はカツラで金髪に、服はアマガ村のデイジーに貰った服を着て現地人に成り済ます。

平日の夕方に一度世界を渡り、魔力石の補充と共に資金の調達もしておく事で、向こうの人間に朔耶の行動を気取られないよう工作する。商人の街に行くのだから資金は多い方が良いとの判断だ。

「うおっ　なんだソレ」
「あ、拓ちゃん」

朔耶が変装のチェックをしている所に、新しい道具のアイデアを持って訪ねて来た拓朗は、金髪で村娘なコスプレの朔耶に驚いて声を上げた。『どう？』とその場でクルッと回って見せる朔耶。

「んー……　んん？　それは不味いんじゃないか？」
「え、なに？　どれ？」
「それ、指輪」
「あ」

レティレスティアに貰った精霊石の指輪。かなり高価なモノであり、誰が見てもソレと見分けられる事はアマガ村でクィスやデイジーとの会話から理解出来た。

一介の村娘が持っていては不自然なモノである。しかし言葉の問題がある為、今はまだこれを外す事は出来ない。拓朗のアドバイスにより、指貫の手袋をして指輪を隠す事にした。ちなみに手袋は使い古しの軍手だ。

「おおぅ、なんかそれっぽい」
「しっかし……朔耶がスパイねぇ」

事情を聞いた拓朗が心配そうに呟いた。

そして週末――

「くれぐれも気をつけてな」
「本当に無理はすんなよ？」

「うん、大丈夫だから。　そんじゃ行って来ます」

今回はやはり心配だったらしい兄と弟が、態々庭まで見送りに来た。朔耶はそんな二人を安心させるように軽く笑って印の円に入り、オルドリア大陸へと転移した。

『サムズのエバンスに――』
ウム

景色が切り替わり、朔耶はエバンスの神殿近くに立っていた。街灯の無い街の夜は本当に真っ暗だ。通りの交差点にポツポツと篝火が焚かれているが、少し建物の影に入れば忽ち闇に包まれる。

しかし今はこの暗闇は都合が良い。人目に付かないうちに街を出てキトに向かう為、朔耶は漆黒の翼を広げると建物の影から一気に空へ舞い上がった。

エバンスからキトまでが一番距離が近いとされている。それでも飛ばしに飛ばして三時間近く掛かる程の距離があった。

途中、そこそこ大きな中継地点となる街道沿いの街を見下ろしながら、朔耶はキトの街の近くまで飛ぶと、街から少し離れた雑木林に着陸した。この辺りは平野のようだ。

街の入り口では商人達が通行書のようなモノを門番に提示している。正面から入る事を諦めた朔耶は、何処か別の入り口は無いかと遠回りに街の周囲を移動し始めた。

『もっと暗い内に来とくんだった』
ジョウホウガ　フソクデアッタガ　オンミツコウドウユエ　シカタアルマイ

ぐるりと街の反対側に回りこむと、しっかり整備された川沿いの人気の無い船着場から階段が伸びているのを見つけた。街を中心に川の上流と下流には、其々水門（といっても水を塞き止めるわけではない）が設置されてあり、船の往来を管理しているようだ。

川幅は十メートル程で流れはそこそこといった具合。朔耶は意識の糸を伸ばして近くに人が居ない事を確認すると、一気に川を飛び越えた。船着場の階段を上って周囲の様子を確かめる。特に見張りも居なかったので足早にこの場を離れた。

「潜入成功～」

建物の影から影へ、路地から路地へと意識の糸レーダーで人目を避けつつ街の中心部を目指し、沢山の人で賑わう通りに出られた朔耶は、大勢の人込みの流れに紛れ込む。

朔耶が侵入した船着場は高級住宅の並ぶ一角だったらしく、王都の貴族街のような静けさに包まれていたが、市街地の中心部はまるでお祭りのように賑やかだった。

人でごった返すキトの街を見て回る。キチンとした一戸建ての店もあれば馬車とテントを積み重ねたような店もある。朔耶はとりあえずフエルト卿に聞いた闇市にいってみる事にした。

闇市の場所を露店の商人や街角でボーっと立っている人に訊ねながら入り組んだキトの街を歩いて行く。

一戸建ての店は建つにも消えるにも長い日数を掛けて街の一部となるが、馬車やテントを組み合わせた簡易店舗は直ぐに建ったり消

えたりするので街の形、店舗の配置や通りの道筋が頻繁に変わってしまうらしい。

その為、キトの街の中心部は正確な地図が無いのだ。案内板にも大まかなエリアの説明しか示されていない。自由に店を出して良い所、金持ちが豪邸を建てている所、店を出すのに許可が必要な所と、本当にアバウトである。

道を尋ねながら闇市を目指す朔耶はついでに闇業者もいるのかを訊ねてみたが、何れも『さてねぇ』という反応だった。

やがて目的の場所に辿り着いた。朔耶が想像していたような暗いイメージの場所ではなく、他の露店が並ぶ通りと見た目はそれほど変わりない。ただ、賑やかさは無く、人々の会話もボソボソと小声でやり取りをしている。

他の通りで見るような商品を広げている露店の姿は無い。殆どの店が簡易店舗か一戸建ての店で、どの店も外からは中の様子が分からない造りになっている。屋敷のような大きな店もあるが、小さな窓のカーテンは全て閉じられていた。

暗いイメージでは無いが、何処か陰鬱とした怪しげなイメージ。妙な緊迫感というか、通りを行く人々が皆、油断なく気を張って居るような緊張感を感じさせる。闇市はそんな雰囲気を漂わせる通りだった。

『なーんか肩こりそうな感じ』

ミナガ　ミナニ　ケイカイシテイルナ

『うん、それに……』

朔耶は自分の格好を気にする。村娘の変装は完璧だが、それが返って場違いな空気を感じさせる。

もっとデンジャラスな格好にすれば良かったかと、ヘビメタ系の衣装でシャウトしている自分の姿を想像して神社の精霊から『なんじゃそれは』という念を受け取っていた朔耶は、正面の店から出て来た傭兵らしき男に目を丸くした。

「ブラットさん？」

「あん？」

不意に名前を呼ばれたブラットは、目の前でポカンとした顔を向ける村娘に怪訝な表情を見せた。何処から迷い込んだのか、こんな場所で買い物をするような少女には見えない。

「何処かで会ったか？」

「え、えと……」

ブラットは顔をよく見ようと近付き、一瞬鼻をひくっとさせて目を瞠る。そうしてじっくり朔耶の瞳を覗き込むと、小さく囁くような声で訊ねた。

「……ツヅキか？」

「う、うん」

朔耶も小さく囁くように答える。ブラットは朔耶に近付いた時、その身体から香るシャンプーや石鹸の匂いでこの村娘が朔耶だと気付き、黒い瞳を見て確信したのだ。

ブラットの認識では、朔耶は『フレグンスの特殊精鋭精霊術部隊

サクヤのメンバーで素人のエリート学生、名はツヅキ』となっている。そんな”ツヅキ”が変装してキトの闇市を歩いている。しかも変装が場違いだ。

何かの任務で訪れているのだろうが、”力”はあってもやはり素人。以前、傭兵団のテントに降ってきた時のように、今回は現在進行形でドジっているのだろうとブラットは判断した。

「何を探りに来たのか知らんが、その変装は不味いだろう」

「あ、やっぱり？　あたしもそう感じてたトコ」

てへへ……と苦笑気味に笑って舌を出す朔耶に、ブラットはほんの一瞬だけ視線を周囲に向けて回りの気配を感じ取る。そして、やっぱりなと顔には出さずに内心で舌打ちした。

「お前、闇ギルドの監視者に眼付けられてんぞ」

「闇ギルド？」

71話：商人国家キト（後書き）

次回はちょっとエロいです。

72話：銀月の牙　再び

「闇ギルドってのはキトを支配してる連中の総称だ。ここの裏の連中はヤバイから、あんま関わらない方がいいぞ」
「支配って事は、キトの政府ってこと？」
「さあな、キトの支配者の実体ってやつを探ろうとした奴は大抵消されるからな」

この街では話題にするのも止めておけと忠告するブラット。

「とにかく場所を移った方がいい、ここへは真っ直ぐ来たのか？」
「うん、道訊きながら……」
「オイオイ……」

只の村娘風の少女が闇市を探している事や、闇業者を話題にした事に違和感を感じての監視だろうと分析したブラットは、頭を掻きながら『何処の世界に探り入れる場所の道を訊ね歩く諜報員がいるんだ』と溜め息を吐いた。自分を指しながら『ここ』とは言えない朔耶であった。

「仕事する場所の下調べくらいしておけよ……」
「だぁって、こんな雰囲気の場所だとは思わなかったんだもん」

朔耶はフエルト卿から闇市の話を聞いた時、割と普通に話すので闇市の雰囲気が独特であるという所まで考えが及ばなかった。実の

所、フエルト卿はサクヤに対して『世間の裏事情にも詳しいのだろう』という思い込みで普通に話していた部分がある。

フレグンスに居た頃から数々の裏工作を破綻させ、帝国密偵の動きを封じる策を講じたり、晩餐会では並み居る貴公子達を手玉に取る姿を目にしていたし、帝都城の前で打ち解けるまでにも、朔耶の噂は情報として入ってきていた。

重鎮四家の陰謀を逆手にとって致命的な強撃で退けた上に四家の財産を毟り取り、その資金で精霊神殿を自身の派閥で固めて完全に傘下に治め、フレグンス国内でも急速に影響力、発言力を高めてアルサレナ王妃に警戒心を抱かせる策略家。

サムズのエバンスでは最大規模のスラムを支配していた犯罪組織を謀(はかりごと)によって一日で壊滅させたとも聞いた。

という、多分に誤解の混じっている認識で朔耶の在り方を捉えていた為である。フエルト卿にとって、朔耶は”一般人”では無い。闇市の詳しい雰囲気など『語るまでも無い事』だったのだ。

ブラットは朔耶を連れ歩きながら闇市を出て街の南側、宿が立ち並ぶ盛り場方面に向かう。ちなみに闇市はキトの街の西側にあり、朔耶が侵入した高給住宅の並ぶ船着場は北側である。

朔耶は自身が襲われても平気だが、監視が付いてると動き辛いし、存在がバレるのは厄介だと考え込む。ブラットは背後から適度な距離を置いて監視者が付いて来ているのを気にしていた。

「まだ付いて来てやがるな……」

「あたし怪しかったかなー」

「そりゃそうだろう、普通お前みたいな娘が闇市に行くって時点で違和感があり過ぎる」

身売り業者となら兎も角、一人で道を訊きながら目指していれば、怪しんでくれと言っているようなモノだと頭を振るブラット。

「それじゃあ、あたしと話してるブラットさんも疑われるね？」

「……お前、俺に声掛けたのはそれが狙いか」

「べっつにぃ、偶々だよ」

「こいつは……」

誤魔化すの協力してねとウィンクする朔耶に、どのみち誤魔化さなくては自分もヤバイので協力せざるを得ないブラットだった。

「そういえば、ブラットさんは何で闇市に居たの？　まさか……」

「あん？　何を想像してるか知らんが、俺が居たのは武具店だ。偶に掘り出し物があるんだよ」

出所の言えないキャリゴル（星三つクラス）以上の名剣や名工の作った武具が格安で売られている事があるという。また、キトにはオールグレン（星四つクラス）の工房があるので、装飾に失敗した疵物などが回ってくる事もあるらしい。

「ふーん、何か良い物あった？」

「無かった。店でたらお前に会った」

「あはは……」

このまま話ながら歩いていても監視の尾行は外れそうに無い。ブラットは朔耶が闇市まで歩いた経路を詳しく聞き出すと、それだけ真っ直ぐに目指したのなら『自分を探しに来た村娘』で誤魔化せる

かと考える。

「……そういや闇業者の事も訊ねたつったな」

「うん、ついでだったんだけど……」

「田舎から出てきた村娘が知り合いの傭兵を探しに闇市へ……ダメか、只の村娘が闇業者の事を訊く訳ないな」

闇業者の絡む人買いや人狩りに被害を受けた村から来た、などの設定にすると、素人ながら明らかに探りに来たという図式になってしまうので誤魔化しにならない。闇市に人を探しに来て、尚且つ闇業者が居るのかをついでに訊いてもおかしくない存在。

「ツヅキの見掛けなら絶賛売出し中の新人春売りって所でなんとかなるか」

「春？」

春売り同士でも縄張り意識はあるようだが、春売りに街の境界線というモノは殆ど存在しない。彼女等は裏にも表にも客を求め、求められる存在なのだ。

多額の報酬を得る闇業者の関係者ともなれば、相応に金払いも良い。街に来ているのなら一丁稼ぐかと気合の入る春売りが居ても、何らおかしくはない。

ブラットはその趣で誤魔化す事を伝えると、戸惑う朔耶をキトの春売り通りまで連れて来て路地の影で抱き寄せた。朔耶の耳元に口を寄せながら上衣の首袖を掴んで少し乱暴に広げると、朔耶の細い肩口が露わになる。

「ひえっ」

「し……っ　感じてる振りでもしろ」
「無理！」

真っ赤になりながら服の胸元を押さえて、これ以上ずり落ちないように抵抗する朔耶。

「ち、まだ居やがるな」

ブラットの髪の隙間から見える通りの向こうに眼を凝らしながら、朔耶は神社の精霊に問い掛ける。

『どう？』
ウム　タシカニ　コチラヲウカガッテイルヨウダ　モウヒトリ　トオリノハンタイガワニモ　イルゾ

「もう一人、反対側にいるっぽい？」
「……ああ、いるな」

ブラットは自分よりも先に監視の気配を察知した朔耶に、流石は”サクヤ”だと感心を見せる。しかし、二人に増えたという事はそれだけ相手に警戒されているという事だ。新しく増えた監視者が、ごく普通の通行人を装って距離を詰めて来た。

『まずいな』と舌打ちするブラット。ただのイチャ付いている春売りと客に見せかけて、情報交換等をしている何処かの組織ないし国家の密偵である可能性を探りに動いたのだろうとブラットは推察した。

「仕方ない……　いいかツヅキ、これは振りだからな？　電撃は勘弁しろよ？」

「え？　なにするの？」

ブラットは予め断りを入れると、オドオドしている朔耶の両手を頭上で交差させて壁に押し付け、上衣のブラウスを捲り上げて手を差し入れる。脇腹の辺りを擦られてゾクリと身を震わせる朔耶。

「ちょっとーっ　何処までやる気よ！」
「安心しろ、子供に手ぇ出すつもりはない」
「子供て、あたし十八だっつーのに」

朔耶はいくら信頼できる相手に『振り』だと言われても、実際に男の無骨な手に身体を弄られて平気で居られる程肝は据わっていないし、心も冷めていない。身を捩りながら照れ隠しでうっかり自爆発言をしてしまう。

「……手、出していいのか？」
「ダメ！　絶対！」

ヒソヒソ声でギャーギャー言い（主に朔耶が）合っている間にも、更に距離を詰めてくる監視者。ブラットは耳元でしか聞えない声で警告を発する。

「これ以上の会話は不味い」
「！」
「安心しろ、本気で手ぇ出したりはしない。お前はただじっとしていればいい」

そっと背中を撫でられてビクンッと身体を反らせた朔耶は、思わず声を漏らす。

「ひゃうっ」

触れ方が先程までのような、ただ乱暴に撫で回すだけの手捌きとはまるで違う。優しく掬い上げるように撫でる繊細な指先での愛撫。そのまま首筋や鎖骨にキスを落とされ、その都度ピクリピクリと朔耶の身体が反応する。

「ひ……あっ　やぁ……」

嬌声を聞いてようやく警戒を解いたらしい監視者は、ごく普通の通行人のように自然な動作で姿を消した。只の待ち合わせか、男を捜していたダケだったかと判断したようだ。通りの向こうにいた監視者もそれに合わせて姿を消す。

「やれやれ、やっといったか」

監視者の気配が消えて一息つくブラット。腕の拘束を解かれた朔耶の方は息も絶え絶えに、真っ赤になった顔を伏せて眼に涙を浮かべながらモソモソと乱れた服を整える。鼻を啜る音がブラットの胸をチクッと刺した。

「ううー　穢されたー」
「んな大袈裟さな……」

ひんひんと泣き真似をする朔耶に、『よしよし、よく頑張ったな』等と苦笑しつつ頭を撫でてやりながらも、少し罪悪感が湧いたブラットは、とりあえずキトを探りたいなら手当たり次第に聞いて回るのは危険だと、アドバイスを出した。

ようやく落ち着いた朔耶は、目尻の涙を指で拭き取りながらブラ

ットを頼る。

「そういうのに詳しいなら、手伝ってくれない？」

「それは仕事の依頼か？」

こういう仕事も受けるのかを問う朔耶に、内容次第だと答えるブラット。報酬の金額については、ブラットもかなり危険な仕事だと分かるのでちょっと吹っ掛けた。

大きい組織を探るようなヤバそうな仕事なら相場はパル金貨百枚前後という所だが、キトが相手なら三百は欲しい所だと提示する。『銀月の牙』は二十余人で構成されているので、一人頭金貨約十五枚程の計算になる。中々に法外な値段だ。

「じゃ、三百で宜しく」

「マジか！」

ブラットは思わず声を上げた。正直な気持ち、あまり請け負いたく無い仕事だったのだが、只断ったのでは尻込みしたと思われる。それでは癪なので法外な金額を吹っ掛けて躱すつもりだったのだ。

まさかの即決に唖然としていたブラットは、朔耶から二千枚くらいまでなら出せてたと聞いて愕然とした。朔耶の工房資金は常時金貨五千枚以上はあるのだ。事業の成功で今も増え続けている。

請けちまったモノは仕方ないと思考を切り替えたブラットは、まずは仲間と合流すると言って銀月の牙団の宿泊する酒場宿に向かっ

た。そうしてやって来たのは南通りに建ち並ぶ宿群の中の一軒。

出入り口まで酔っ払いがはみ出している酒場宿では、一階が酒場で二階が宿となっている。一般の街客や商人達はもっと静かな普通の宿や酒場を利用するので、こういう場所にいるのは専ら傭兵達や賞金稼ぎが殆どだ。偶に盗賊団等も混じっている。

昼間からこの有り様かと、荒くれ飲んだくれの有象無象達を呆れた様子で呆然と見つめていた朔耶は、ブラットに腕を引かれて顔を見上げた。酔っ払い達の間を抜けるので、ちゃんとくっ付いておかないと引っぱって行かれるぞと抱き寄せられる。

「ちょ、ちょっとっ」
「離れるなよ」

まるで戦場に赴く兵士のような勢いで、酔っ払いの群れに突入するブラットと朔耶。目指すは店の奥、カウンターの隣にある二階へと繋がる階段だ。移動中、朔耶の腕を取ろうとする酔っ払いが多数。その都度、ブラットが振り払う。

「これは俺んだ」
「だーれが”俺”のよ」
「いいから合わせてろって、こいつらの中にも客を見張ってる連中が混じってるからな」

朔耶は不本意だったが、これでスムーズに進むならと黙っておく。キトは一見して自由奔放な混沌とした街に見えるが、混沌としている中にキトを支配している者の眼が常に光っている。

だからこそ、コレほど混沌としていながら、商人達は統制の取れ

た商売をし、取り引きが行われる。ひとたび政府から公布があれば、一日で全てのキト商人にそれが伝わり、直ちに実行に移される。

自由な見かけに反して、常時監視統制された国。見えない支配者による独裁国なのだ。

「ふぃ～、酔っ払いの相手は疲れるな」
「……まあ、確かにね」

酔っ払いの海を抜け、やっとの思いで階段に辿り着いて二階に上がって来たブラットはウンザリしたように言った。
朔耶はバーリッカムの春売り通りで出会った『酔っ払いブラット』の事を思い出して、疲れたように返す。何故だかブラットからはセクハラを受け捲っているような気がした。

「あれ？　団長～、剣買いに行ったのに女買って来たんすかー？」
「依頼人だ、全員集めろ」

冗談めかしてからかうように声を掛けてきた団員にブラットが言い放つと、姿勢を正した団員によって直ちに招集が掛けられた。奥の部屋に集まった銀月の牙団は、部屋の周囲に見張りも立てて仕事の内容を話し合う。

「キトを探るだって？」
「何だってまた、んなヤバイ仕事を……」
「団長～、仕事は選びましょうよ」

ブラットから大まかな内容を聞いた団員達の反応は、やはり危険

な仕事に対して否定的であった。

「ああ、ヤバイ仕事だってのは分かってる。だから今回は志願制だ、得手不得手もあるからな」

参加する者だけで行い、しない者は一旦キトの街からは退避させておく。

もし参加組みが失敗した場合、銀月の牙は解散となり、残った団員は其々何処かの団に入るか、新たに団を立ち上げるかする事になる。団の存続をも賭けたブラットの説明に、団員達は元より朔耶も驚いた。

「ね、ねえ……そこまで覚悟決めないと出来ない事なら、無理には依頼しないよ？」

「一度請けると言った以上撤回する気はない。……つーかお前、自分がどんだけヤバイ仕事してるか自覚なかったのか？」

う……と言葉に詰まる朔耶に、ブラットは溜め息を吐きながら額に手を当てた。一体どんな命令を受けて任務に就いたんだと、ブラットは”サクヤ”がそれに答える筈もないと思いつつも訊ねる。

「いや～皆には内緒で、ほぼ個人的に……？」

「独断専行かよ！」

ブラットは思わずツッコミながらも、そういえば自分達の陣地に降って来た時も独自に動いていたようだったなと思い出す。

「お前の力が半端無いのは分かるが、相手は他の列強国を出し抜くような組織だぞ？　それこそ強力な術者だっている」

「あ～、その辺りはあたし無敵なんで大丈夫なんだけどー……」

自分の行動による危険に巻き込まない為に、なるべく一般人には関わらないように気をつけていると答える朔耶。ブラットは朔耶の頬っぺたを掴んで左右に引っぱった。

「そーじゃないだろ」
「ひゃひひゅんのよ」

ブラットの手から逃れた朔耶は両頬を押さえながら涙目で睨み上げる。

「国の支援も受けずに国に挑むなと言っているんだ。お前一人の力でどうにかなるような相手じゃないのは分かるだろう」
「キトの政府の実体が分かれば他の国も動けるじゃない、最初から国ぐるみで動いたらバレちゃうし」
「それを一人で暴こうって考えが無茶なんだ、素人でもそのくらいは理解しろ」
「だから、手伝って？　って言ったじゃん……」

唇を尖がらせて拗ねて見せる朔耶に、ブラットは『情報無しで単独潜入後、協力者と戦力の現地調達』という或る意味”超エリート諜報員”のような働きに『これがツヅキの能力なのか？』と、カースティアでの出来事も踏まえて朔耶の特異性を考えた。

単身で渦中に放り込めば、忽ち事態を解決に導く。それを見越して”ツヅキ”の祖国も”他のサクヤ”達もツヅキを自由に行動させる。精霊術の才に長ける学生の素人だが、こういった特異能力の為に危険な任務に使われる。

『個人的な独断専行』の言も、任務の極秘性、重要性を考えれば、

そう答えて誤魔化すのは理解出来る。つまりはそういう事だ。と、ブラットの中の『間違いだらけの朔耶像』が更に補強されていった。

「……たく、さっきは愛撫されて泣いてた癖に」

「そ、それは関係ないでしょ！」

急に真剣な表情で何か考え始めたかと思えば、行き成り先程の痴態を口走るブラットに、朔耶は顔を赤らめながら抗議する。

「とまあ、依頼人はこんな感じだが……報酬金額は金貨三百枚だ」

「三百だって！」

「そいつは凄え！」

色めき立つ団員達。腕を組んで考え込む者や、何か思案顔で頷いている者、反応は様々だが破格の報酬は魅力的だったらしい。

仕事の詳しい内容を促す声が聞かれ、それに反対する者は居なかった。話を始める前に参加する者と棄権する者を募ったが、全員が参加の意思を表明する。

「よし、じゃあツヅキ」

「へ？」

「へ、じゃないだろ。必要な情報や期限を説明してくれ」

「あ、そっか」

朔耶はキトの政府の所在、即ちキトを支配する組織のアジト発見を第一に、期限は今日を入れて三日と伝えた。早速、活動方針について相談を始める銀月の牙団員達。

「確かに、だらだら長引かせると感づかれる危険が高いな」

「となると、監視者の尾行とか隠し通路を見つけ出す探索が中心に

なるか」

「闇市周辺を張って人の出入りを監視するか？」

団員達の話を聞きながら、朔耶は自身の探査能力について少し説明を加えた。怪しい場所を見つければ其処に行って隠し通路や隠し部屋が無いか、周辺を探ることが出来る事を話す。

もし、アジトに通じる地下通路などがあれば、地上に居ながらにしてそれを辿って行く事が出来る。大まかな位置が分かれば意識の糸レーダーで探り出す事が出来る為、危険な潜入までは必要ない。

「ほほー、流石エリート精霊術士だな」

「それなら活動範囲も広げられる、予めそれらしい場所に目星を付けて、昼間の内に回れる所は回って貰おう」

そうして、キトの政府を探る仕事は主に施設の特定を中心とし、怪しい人物がいても遠くからの尾行に止めておく事、会話の盗聴やソレらしい場所への潜入はしない事で方針が纏まった。

「あ、それともう一つ。　一番大事なこと」

朔耶の言葉に、皆が注目する。

「みんな絶対死なない事」

人差し指を立てて『いいわね？』と念を押す朔耶。団員達は顔を見合わせると、大らかな気持ちで笑ってみせた。何故か皆から頭を撫でられて困惑する朔耶なのであった。

「あたし変なこと言った？」

「いいや、そんな事はないぞ」

ブラットも笑いを堪えながら朔耶の頭をナデナデした。

73話：キトに棲む闇

昼過ぎから早速、銀月の牙団は行動を開始する。本拠の見張りと伝令に団員三人を残し、三人一組のグループを中心に少し離れてもう一人付いて行くという『一部隊四人態勢』で街を回って怪しい場所の目星を付ける。

昼組と夜組の半数ずつに別れ、昼組が日暮れまで街を回って本拠に戻ると、入れ代わり夜組が街に繰り出す。ブラットと朔耶は戻って来た部隊から怪しい場所の情報を聞いて其処に向かい、朔耶の意識の糸レーダーで周辺を探っていくのだ。

「夜組は今のうちに横になって英気を養っておいてくれ、ツヅキは俺と買い物に行くぞ」
「買い物？」
「その格好のままじゃ彼方此方連れ歩くのに都合が悪い、”らしい”格好にしないとな」
「……えっちな格好させる気じゃないでしょうね」

片眉を上げて首を傾げたブラットは『いいから行くぞ』と大部屋から廊下に出た。しぶしぶ付き従う朔耶だった。

昼組の二部隊八人が街の東側と西側を探っている間、朔耶はブラットに連れられて中央市場の衣類屋を回っていた。色々な街服が飾

られ、小物や装飾品等と一緒に売られている。

「こんな感じでどうだ」

「ん～、こっちの方が可愛い気がする」

「可愛くしてどうする、春売りって設定なんだからもっと扇情的な服を選べよ」

「うわ……、やっぱりエロい格好させる気だ……」

そんなやり取りをしながら店を回り、何着か購入して酒場宿に戻る。銀月の牙団はこの酒場宿に団員用の大部屋と団長用の小部屋を借りているので、朔耶は小部屋で服を着替えて街の探索に出る下準備を整えた。

ゆったりした白いキャミソールワンピース風の街服だが背中が結構深く開いていて、胸元も刺繍の隙間から肌が透けて見える。セットになっている刺繍入りの手袋は中指にワッカを嵌めるタイプのモノだ。

「さむい」

「コレでも羽織ってろ」

ブラットは銀月の牙団が使う薄茶色のマントを朔耶に被せた。これはコレで結構イケるかもと、朔耶はあまり映りの良くない姿見の前で細かい身嗜みも整えると、蝶を模ったブローチでマントの前を閉じる。

ちなみにこのブローチは露店のお姉さんに勧められてブラットが買ったモノだ。

「これからどうするの？」

「取り合えず、夕暮れになって昼組の部隊が戻ったら情報を聞く。

後は虱潰しだな」
「それまでは？」
「ノンビリ過ごすさ」

そう言ってベッドに座ったブラットはひょいっと腕を引いて朔耶を自分の膝の上に乗せると、突然の事に固まっている朔耶の顎を軽く持ち上げ、驚きで見開かれた黒い瞳を覗き込む。

「予行演習でもしとくか？」
「なんのよっ！」

我に返り、カッと赤くなった朔耶はブラットの腕を振り払って両手で思い切り突き飛ばしながら膝から飛び降りる。突き飛ばされたブラットはそのままベッドにごろんと転がって横になった。

「昼の部隊が戻ったら起こしてくれ」
「こんにゃろ……ムカつく～～」

シーツを被って手をヒラヒラさせながら眠りに付くブラット。朔耶は何か報復をしたかったが、迂闊に近付くとセクハラが待っているので、ワナワナと拳を握り締めるしかなかった。

デンゲキデモ　クラワセレバ　イイノデハナイカ？
『それじゃ何か負けた気分になるのよ！』
ナンギナ……

夕刻――

ＪーＰＯＰを歌って安眠妨害という、朔耶の『異世界の知識を利用したささやかな報復（いやがらせ）』が失敗に終わる頃、昼組の部隊八人が宿に戻って来た。

「あーあー、団長はツヅキの子守唄で安眠っすかー」

「……子守唄ちがう」

「団長ー、仕事してくださいよー」

「ああ、戻ったか。ふあぁ……変わった唄だったが中々良かったぞツヅキ」

昼組の部隊から怪しげな場所の情報を聞き、不機嫌で疲れ気味な朔耶はブラットと連れ立って夜の帳が下り始めたキトの街中へと繰り出した。夜組も少し遅れて別エリアの探索に出かける。

ちなみに、一階に広がる酔っ払いの海を朔耶は一人で突破した。最初に通った時と同じように、抱き寄せて進もうとしたブラットの腕をヒラリと躱すと、出入り口に向かってズンズン突き進み、手を出して来る酔っ払いは容赦なく蹴飛ばしていった。

それが返って『男に腹を立てて宿を出て行く春売りの娘』と周りの眼には映り、ブラットは『お気に入りの春売り娘を怒らせて慌てて尻を追いかけて行く男』という、よくある自然な人物像を浮かび上がらせ、其々の関係を当て嵌められた。

奇しくもそれは、酔っ払いの中に混じっている監視者の眼を完全に欺く結果となった。

「ツヅキ！　待てって、一人で行くな」

「ふんだ」

朔耶を捕まえたブラットは隣に並ぶと、先ずは最初のポイントへと向かう。

「まったく、お前といるとヤバイ仕事してるって事も忘れちまうよ」
「あ……ごめん」

危険な仕事をしている自覚が無いと叱られた事を思い出して小さくなる朔耶。精霊の力を割りと自由に扱えるようになってから、自身の危険に対する認識が甘くなっている事を反省する。自分は平気でも、回りの人間にとってはかなり危険な仕事なのだ。

「ははははっ　そういう所も本当に面白いな」
「むう」

からかわれているのか励まされてるのか判断が付かないと、朔耶は唸ってみせた。

人通りの少ない路地や、建物の形状の関係で通りから死角になっている場所等、昼組がチェックした場所を回って意識の糸で周辺を探る朔耶。比較的狭い範囲なら歩きながらでも調べられる朔耶だったが、広範囲を調べる時は多少集中する必要がある。

そういう場合は、壁に凭れて集中している朔耶の正面にブラットが立つ事で周囲の視線を遮り、傍目には愛を囁いている恋人同士のように見せ掛けられる。

何箇所か回って幾つか地下室を見付けたが、何れもキトを支配する組織とは関係がなさそうだった。只の地下倉庫だったり、個人が所有する地下カジノだったり、埋められた古い地下牢跡だったりと

いった具合だ。
結局この日は収穫無しで終わり、後は夜組の探索に任せて明日の朝まで就寝である。

「だいぶ眠そうだな」
「んー……流石にちょっと疲れたかも」

意識の糸を使った探索はそれなりに精神力を消耗する。朔耶は朝から一日中飛び回ったり歌ったり歩き回ったりと活発に動いたので、精神的にも肉体的にも疲れが溜まっていた。

酒場宿に戻って来ると昼下がりから入り浸っていた酔っ払いがヒューヒューと口笛を鳴らす。『逃げた女をちゃんと捕まえて帰って来た色男』を囃し立てているのだ。ブラットは都合が良いので適当に応えながら朔耶を連れて二階へ上がった。

「あ～眠い」
「飯はどうする？」
「家で食べる」
「……家？」

小部屋に入った朔耶は、何か目印になるモノは無いかと部屋の中を物色し始めた。
セクハラ魔人のブラットと一つ屋根の下で眠る気にはなれないので、一旦帰還して明日また此方に来るという方針をとる。その為には、この部屋に転移できるように目印を付ける必要があった。

サクヤヨ　ブラットドノガ　サクヤノイチブヲ　モッテイルゾ　ソレヲツカウトヨイ
『へ？　あたしの一部？』

扉の横に凭れて朔耶の様子を見守っていたブラットは、不意に自分の方へと向き直る朔耶に、肩眉を上げて『どうした?』という表情を向けた。

「ねえ、何かあたしの一部持ってない?」
「ツヅキの一部……?」

ブラットは一体何の事かと首を傾げたが、ふと胸元に仕舞ってある御守りの事を思い出した。徐にシャツの内ポケットから取り出して見せる。

「これの事か?」
「何これ?」
「お前の髪の毛」
「……なんで持ってんのよ、そんなモン」

御守りだというブラットに、朔耶は気恥ずかしく思いながらも髪の一本くらいなら良いかと、その御守りを目印にする事にした。

布に巻かれた一本の黒髪に魔力を込める。朔耶は傭兵団陣地に居た時にでも抜け落ちたモノだろうと思っていたが、正確な入手法を知ればまた対応が変わっていたかもしれない。

「これどうすんだ?」
「普通に持っててていいよ、目印にするダケだから」

仄かに発光する御守りをしげしげと見つめながら訊ねるブラットに、朔耶は端的に答えて帰還の準備を整える。

「それじゃ、また明日」

「あん？　そりゃどういう――」

言い終える前に朔耶の姿が忽然と消え失せた。思わず身を引くブラット。

「転移術かよ！　危ねえなっ」

精霊術の中でも高等な術である転移術の危険性はよく知られている。朔耶の帰還転移には周囲を巻き込むような危険は無いのだが、朔耶の事情を正確に認識していないブラットには知る由もない。

『ツヅキの転移術に巻き込まれてバラバラにされてはタマラン』と、ブラットは恐々としながら転移の目印にするという御守りをベッドから離れたテーブルの上に置いた。

「ただーいまー」

夜遅く自宅の庭に帰還した朔耶は、お風呂を沸かしながら食事の準備を始める。

ご飯を炊きつつ冷蔵庫を開けるとサンドイッチがあったので、コレで済ませてしまえとフルーツジュースのパックと共にテーブルで平らげた。そこへ、水を飲みに降りて来た兄が朔耶の姿を見つける。

「ありゃ？　帰ってたのか朔耶……って、俺のサンドウィーッチ！」

「あ、これお兄ちゃんのだったの？　ご馳走様～」
「ヒドイ……。ところで、随分エキサイティングな格好してるな、背中の開き具合がなんとも……」
「……それ、言葉の用法違ってると思う」

指で四角形を作って覗き込みながらエキサイティングしている兄にジト目を返す朔耶。兄の明日のお弁当を食べてしまったので、後でオニギリでも作ってあげようと思いつつ、お風呂に向かうのだった。

「ふわわわぁ」
「オニギリ～オニギリ～、俺の弁当はレボリューション～。眠いなら無理せず寝ろよ？」
「んー、これ作ったら寝るー」

風呂から上がった朔耶にキトでの話を聞きながらコーヒーを飲んでいる兄。やはり事前情報は大事だなと相槌を打ちつつ以前、朔耶から聞いた事のある夢内異世界旅行で探れないのかと問う。

「ん～、見ようと思って見られるならその手もあるんだけどね～」

必ずしも意図的に狙って見られる訳ではないので、それほど便利には使えないと朔耶は説明した。そんな話をしている内に、具は無いが塩と海苔で作ったオニギリが米五合分程出来上がる。

「……ちょっと、作り過ぎちゃったかな？」
「流石にこの量は食えんぞ」

テニスボール大のオニギリを六つほど弁当用に包みながら、大皿に山盛り積まれたオニギリを眺める兄。朔耶は眠気を堪えて話しながら作る内に、炊飯器のご飯が有るだけ作ってしまったのだ。

「もう！　ちゃんと止めてよ」
「俺か！　俺のせいなのか！」

結局、作り過ぎた分は明日の朝、傭兵団の皆さんにでも持って行ってあげようという事になった。

翌朝――

食卓に家族分のオニギリを残し、軽い荷物を持って庭に出た朔耶は昨日魔力を籠めておいた自分の髪の毛を目印に、オルドリア大陸のキトの街へと転移した。景色が切り替わり、酒場宿の小部屋の中に降り立つ。

『よしよし、普通に出られたわね』
ソウソウ　ナンドモ　シッパイハ　セヌ

サムズに転移してアンバッスの胸の上に落ちた時のように、ブラットの胸の上に落ちるような事があれば膝を立ててやろう等と考えていた朔耶は、一先ず胸を撫で下ろす。

就寝中に訳も無くダイビングニードロップを喰らうという理不尽から危うく難を逃れたブラットは、突然部屋に出現した人の気配で

目が覚めた。直ぐにそれが朔耶（ツヅキ）だと分かり、半分起こし掛けた身体をベッドに横たえる。

「湯浴みまで済ませて来たのか？　相変わらず美味そうな匂いさせてるな」

「寝起きからセクハラ発言かいっ！」

朔耶はオニギリを三つ程出して一緒に持ってきた紙皿に乗せると、テーブルに置いて扉に向かった。

「なんだそれ？」

「オニギリ、穀物を煮て固めたモノよ」

団員達にも分けてあげる為、小部屋から廊下に出て隣の大部屋へと向かう朔耶。背後で閉じる扉の向こうから『うめぇ！』と響くブラットの声に、朔耶はクスリと笑みをこぼした。

朔耶が大部屋にやって来ると、既に昼組が食事も兼ねて街の探索に出発していた。夜通し歩き回っていた夜組が報告と就寝までに食事を済ませようとしていたので、丁度良かったとオニギリを差し入れる。

「うおおっ　こりゃうめぇ！」

「昼組の奴等、運が無かったなっ」

団員達は何時かのカレーのように、物凄い勢いで平らげていった。あの時と違うのは、皆が朔耶に対して警戒心ではなく仲間意識を持っている事だった。

夜組の彼等から怪しげな場所を聞き、朔耶とブラットは昨日と同じ様に連れ立って街へ繰り出す。一階の酔っ払い達は流石に朝っぱらから騒いでる者は無く、酔い潰れた客は酒場の掃除を始めた主人に店の隅へとうっちゃられていた。

「うーん、なんか彼方此方から美味しそうな匂いが……」
「料理の仕込みだろう、朝まで働いてる連中はこれから飯食って寝る訳だ。その後、朝から働く奴が仕事前に飯を食う」

朝の陽射しが差し込む少し肌寒い空気の中、朔耶はブラットと暫しノンビリした雰囲気でキトの街を歩く。

夜組の部隊が目星を付けたのは、夜間に近付くと監視者が現われ易い場所。主に西側の闇市付近にそういう場所が何箇所かあるようだ。昼間でもそういった場所へあからさまに近付く事は憚られるので、少し離れた所からの探索になる。

「この辺でいいかな」
「少し距離があるが……こんな所からでも探れるのか？」
「うん、でもちょっと集中が必要だけど」
「そうか……じゃあ、始めるとするか」

ブラットは壁際で俯いて集中を始める朔耶の正面に立ち、両手を壁に付いて『語り合い』を演出する。昨日も何度か監視者らしき者の気配が近くを通る事があったが、特に此方へ関心を向ける様子は無かった。

今日もこの調子で上手く行くだろうと、気楽に構えるブラット。不自然にならないよう、時折、偽の金髪を撫でたりする。何時もいい匂いがする朔耶の綺麗な肌に見惚れるブラットは、偽の金髪を撫でながら『黒髪が見たいな』等と思うのだった。

「……（いかんな）」

相手は国家機密レベルの特殊部隊員、あまり入れ込むのは良くないと、ブラットは朔耶の白い肌から目を逸らした。

「中々見つからないね～」

「そう簡単に探り出せるなら、帝国辺りでとっくに知れ渡ってるさ」

太陽が真上に来る頃、朔耶とブラットは通りに面した飲食店で昼食を摂っていた。この後は一旦酒場宿に引き上げ、昼組が戻って来る夕暮れまで休憩に入る。

そろそろ出ようかと席を立ったその時、辺りが俄かに騒がしくなった。闇業者の馬車隊。人々の噂。黒塗りの金属板で補強された大型武装車両。物々しい車列が、西側に向かって通りを通過する。闇市が賑わいそうだと話す声が其処彼処から囁かれる。

「あれって……」

「闇業者の馬車隊だ」

朔耶が意識の糸で探ると、閉じた馬車の中に何人か押し込められている事を確認できた。その人達からは恐怖や絶望、不安の感情が強く感じ取れる。何処からか奴隷として、攫われて来た人達だと分かった。

「チャンスだな」

静かに囁いたブラットは闇市に向かう事を朔耶に告げようとして、ふと気付く。微かに揺れる黒い瞳が、射抜くような視線で闇業者の車列に向けられている。その様子に焦りの色を見たブラットは、朔耶の手を握りながら忠告した。

「全てを救おうなんて考えるな」

「……お兄ちゃんと、同じ事いうのね」

朔耶はそう言って微笑を返した。

闇市での奴隷売買は夕暮れから始まるので、朔耶とブラットはそれまでに闇業者の動きを追う事にした。攫われてきた人々と闇業者、どちらかに意識の糸を向けて動きを監視する。

「闇業者がキトの政府と通じてるなら誰か一人とっ捕まえて吐かせるって手もあるんだがな」

「うーん……、そういえば何で闇業者はキトの政府と繋がってるって言われてるの？」

朔耶の疑問に、ブラットは闇業者の馬車隊を指して説明する。彼等の馬車は傭兵団でも資金の豊富な大手が使うような大型武装車両だ。一台で金貨数百枚はくだらないと謂われている。

馬車隊を護衛する者も装備はオールグレン（星四つクラス）で纏められており、しかも雇われ兵ではなく専属である。私設軍とも呼べる程の護衛部隊と超高級大型武装車両を所有する、正体不明の奴

隷商人。

「まあ、商人一個人が持つにはちょっとでか過ぎるな。奴隷の売買だけで賄えるような規模じゃない」

「そっか……、それで背後にそれなりの組織がいるって考えると……」

馬車隊の車列は闇市の一角にある大きな屋敷の裏で停まり、そこで奴隷たちが降ろされて屋敷の中へと消えて行く。その後、馬車隊は屋敷の私有地らしい広場に建つ厩舎前に停車。乗っていた護衛や使用人達が降りて行った。

「あのお屋敷、調べてみようかな」

「かなり距離があるぞ？　あれだけ開けた場所だと下手に近付けないし……怪しいっちゃあ怪しいが」

「大丈夫、建物の影からでも調べられるし」

屋敷からは死角となる路地に入り、其処から意識の糸を伸ばして屋敷を探る事にした朔耶は、おいでおいでーとカモフラージュ役のブラットに手招きする。

傍から見ると男を路地に誘う春売り娘そのものな姿に、『本人は分かってやってるのだろうか』と苦笑しながら、ブラットは朔耶の後に続いて路地に入った。

「さあ、やるわよー」

「……分かってないんだろうなぁ」

「うん？」

「何でもない」

屋敷全体を輪切りにするように意識の糸で一閃。帝都城で幽閉されていたシーファを捜索した時や、エバンスで売られそうになった孤児のチューリーを探した時に比べれば規模も容易い。

奴隷たちは地下ではなく一階の奥の部屋に集められているようだった。同じく一階の幾つかの部屋に護衛隊らしき存在を確認し、二階には数人の商人。三階から一階までを使用人が行き来している様子も把握出来た。

屋敷の地下に向けて意識の糸を伸ばしてみたが、倉庫や地下牢っぽい施設は在るモノの、居住空間を感じられるような地下空間は見つからなかった。

『うーん、別に地下にあるって訳じゃないのかなぁ』

ソシキヲ　トウカツスル　チュウスウトイウモノハ　ジョウホウノデンタツガ　ジンソクデナクテハ　ナラナイ

『つまり一箇所に集中してなきゃダメなのよね？』

人が近付くと監視者が現われ易い場所にあり、国の中枢機関として使えるだけの規模を持つ施設。

この屋敷の大きさは、それだけの人員が働くに十分な広さがある。しかし、屋敷内に確認出来る人間は決して多くない。今日入った奴隷たちと護衛隊と商人が居なければ、ガラガラだ。

『むう～、ここじゃ無いのかなぁ』

シヨウニンノ　シコウヲ　ヨンデミヨ

『使用人の？』

ヤシキニ　セイツウスル　シヨウニンデアレバ　ナニカ　ジュウヨ

ウナバショヲ　イシキスルカモ　シレヌ

神社の精霊のアドバイスに成る程と頷いた朔耶は、屋敷の中を行き来する使用人に意識の糸を絡めて、表面意識から情報を読み取ろうと試みた。

――……て、次は売り物の餌用意しなきゃ――

――料は美味しいけど、やってらんないわぁ――

――うも地下に降りる時の浮遊感には慣れないな――

――貨二百と銀貨六枚……もうすぐ自由になれるかな――

仕事の段取りや愚痴やらの思考を幾つか読み取れた中に一つ、奇妙なキーワードが含まれていた。『地下に降りる時の浮遊感』という思考を持った使用人を意識の糸で追って見る。

三階から一階に下り、厨房で台車に食事を積んで廊下を移動。向かう先は護衛隊の部屋がある方向だったが、どの部屋にも寄らず真っ直ぐ進み、廊下の突き当たりにある空き部屋に入った。

『あ……』

そこで何か操作をしたかと思うと、床が地面に向かって移動を始めた。最初に屋敷の地下を探った時は気付かなかったが、その部屋の床下にはエレベーターシャフトの様な縦穴が地下深くまで続いていたのだ。

使用人を地下へと運ぶ昇降機は徐々に速度を上げながら、かなりの勢いで降りていく。相当に深い所まで降りた辺りで速度が緩やかになり、やがて終点に到着する。

『ううう……これ以上は無理かも……』
シコウヲ　ヨメ

意識の糸が外れる直前に使用人の思考を読み取り、地下施設の概要を極一部だが掴む事が出来た。彼が運んでいた食事は、地上では監視者の指揮を取っている人物で、地下施設では三番目くらいの偉い人に用意されたモノだった。
使用人が廊下の先に地下施設で一番偉い人と二番目に偉い人を見つけて緊張した所で、意識の糸が外れた。

「うむ？」
「どうかされましたか？」

廊下の奥、地上と繋がる地下施設唯一の出入り口（一般兵には）から此方に向かって台車を押してくる使用人を見て、ヨールテスは首を傾げる。キルトは一応、警戒態勢を取りながらその使用人を見たが、特に変わった様子は見られない。

「君は、何時もの食事係かね？」
「は、はい。そうですが」
「……ふむ」
「あの、何か……？」

施設で『一番偉い人』にじぃーっと観察されるような視線を向けられ、内心生きた心地のしない使用人はオドオドしながら、目の前に立つ奇抜な髭を蓄えた人物を見上げた。ヨールテス・デリガン・ブローフリ伯爵。

彼は二百年以上も昔から存在し、約五十年程前に当時キトの街を支配していた旧闇ギルドを壊滅させ、現闇ギルドの支配者として君臨したと謂われる『魔族』である。

「ふむ、気のせいだったようだ。行きたまへ」
「は、はい」

カラコロと台車を押して行く使用人を見送り、ヨールテスは髭を弄る。精霊術の糸が見えた気がしたのだが、どうも神経質になっているようだと弄った髭を伸ばしながら自嘲した。

それと言うのも、『フレグンスの戦女神』がフレグンス領の貧しい街々を片っ端から援助して発展に導いたり、列強国に働き掛けては次々と奴隷制禁止令を発令させるという、近頃活発な動きを見せている事にある。

列強四国のうち三国まで奴隷制禁止令が導入されたとなれば、次はキトに狙いを定めて来るであろう事は容易に予想できる。

この世界の摂理を丸っきり無視したような力を振るう異界の魔術士が、あの出鱈目な伸長距離(しんちょう)を誇る精霊術の意識の糸でこの街を探りに来ているかもしれないのだ。

「まあ、ここが割れる事は無いだろうが……そろそろ一度本拠に戻った方が良いかもしれんな」
「向こうに帰るのは久し振りですね」
「うむ、長旅になる。しっかり魔力を蓄えておくように」
「畏まりました」

一般人が目にすれば背中と腰にゾクリと来るような妖艶な笑みを

浮かべたキルトは、使用人が乗って来た昇降機で地上の屋敷へと向かう。キルトを護衛隊の所へ向かわせたヨールテスは、もう一度昇降機脇の天井を見上げてから自室に戻るのだった。

「ツヅキ、おいツヅキ！　大丈夫か」
「ん……あれ？」

朔耶は路地でぐんにゃりした身体をブラットに抱きかかえられていた。限界まで意識の糸による追跡と表面意識の読み取りを行った為、糸が外れると同時に反動で軽く失神してしまったのだ。

「あ～くらくらする、けど大丈夫」
「本当に大丈夫か？　急に倒れるから焦ったぞ」

しっかり自分の足で立った朔耶はニ、三度頭を振ると深呼吸をして体調を整えた。昔齧った武術の呼吸法だ。それを見たブラットが『ほぅ？』と声を漏らす。

「よしっ　頭スッキリ」
「体術もやるのか……。それで、何か分かったか？」
「ヨールテスが居た」
「……何？」

屋敷のかなり地下深くに結構大きな施設があり、キトの街を見張る監視者を指揮している者が居る。その指揮者は地下施設で三番目に偉い人。一番目と二番目に偉い人がヨールテスとキルトである。という所までは掴めたという朔耶。

「……おい、それって」
「うん、見つけたかも。キトの政府の所在と、支配者」

73話：キトに棲む闇（後書き）

蝶を象ったブローチを売ってたお姉さんは、以前クルストスで露店してました＾＾。

74話：サクヤの暗躍？

闇業者が所有すると思わしき屋敷の地下に見つけた施設。

キトの街に暗躍する監視者達。彼等を指揮する者が潜む司令部の地下施設、というダケならば、まだキトの政府との関連は繋ぎきれない。しかし、其処にヨールテスが居たとなれば話は変わってくる。彼はキトの代表として和平会談に出席していたのだ。

その彼がキトを監視する者の施設に居て、尚且つ最高責任者の地位にいるとなれば、彼は間違いなくキトの関係者であり、ヨールテスがキトの代表として和平会談に送り出されたのは、キトの政府の意思であったという事だ。

地下施設が政府の本拠地なのかどうかまでは分からないが、キトの政府施設である事はほぼ間違いない。朔耶はそう結論付けた。

「よし、それなら長居は無用だ。とっとと撤収した方がいいな」

「そうだね……、後でもう一度詳しく調べてから報告する事にするよ」

「……そうか」

朔耶の『報告』する相手とは、フレグンスの王室関係者と帝国のバルティア達、ティルファのブラハミルト等の事を指しているのだが、ブラットは”サクヤ部隊”の上司に報告するのだろうなぁと納得していた。

路地を出た朔耶とブラットはそのまま闇市を後にして酒場宿に戻ると、大部屋で休んでいた夜組を叩き起こして撤収する事を告げる。伝令にも昼組を呼び戻すよう伝えて街へ走らせた。

夕暮、銀月の牙団が撤収準備を進める中、朔耶はブラットと連れ立ってもう一度、屋敷の概要を確かめる為に闇市へ向かう。

闇市通りの出入り口付近では、開けた場所に数台の貴族用馬車が停まっていた。闇市では奴隷売買用のステージが開かれており、如何にも金持ちそうな格好をした豪商や貴族風の紳士等が、従者を引き連れてステージ前の広場に屯している。

そんなステージ広場の脇を抜けて屋敷を探れる路地に入った朔耶は、ブラットを壁役に早速意識の糸を伸ばし、屋敷の部屋の位置、昇降機の位置などの把握に務めた。

奴隷達が集められていた部屋は無人になっていた。恐らくは先程通り抜けたステージ広場の近くに建つ倉庫にでも移送されたのだろうと考えられる。

護衛隊の部屋の付近で妙な気配に触れ、部屋の中に居る護衛兵士の表面思考を読んだ朔耶は慌てて糸を引っ込めた。

『……』

サクヤニハ　マダハヤイ　コウイデアッタナ

気を取り直して昇降機の部屋から地下へとエレベーターシャフトを辿り、意識の糸を伸ばしていく。そうして地下施設の辺りまで探って位置を確認した所で、探索を切り上げて集中を解いた。

「どうした？　顔が真っ赤だぞ？」
「何でもない」

後は撤収するだけだと路地を出た朔耶は、ブラットと酒場宿に戻る道すがら奴隷売買の様子を目にする事になった。通りが見物人で溢れ返って前に進めないので見る羽目になったのだが、客はキトの豪商や貴族が殆どで、あまり売れていない様子だった。

売れ行きが芳しくない業者の進行役は、声を張り上げて売り込みを掛けている。

実は、キトの豪商や貴族達には一つの懸念があった。以前から奴隷制を認めていなかったフレグンスに続いて、帝国やティルファが立て続けに奴隷制の禁止を発令した事に関連し、キトでも何れそうなるのでは無いかという懸念。

折角買っても直ぐに手放す事になりかねないとの危惧が、買い控えを引き起こしていたのだ。

「未開地アーサリム産でココまで健康な素材はそうは無いよー！一体金貨百二十枚からでどうだー！」

身売り業者の奴隷ならば値段はほぼ安定して金貨二百十五枚前後で取り引きされるが、闇業者の奴隷はピンきりで、投売りの金貨八十枚から高値では金貨三百枚にもなる。ちなみに、パル金貨百二十枚なら日本円にして約五百六十万円である。

鎖で繋がれた年端も行かない子や熟年の女性が、大勢の人の前で裸に剥かれて値段の交渉で横を向かされたり後ろを向かされたり、口を開いて歯の並びを確かめられたりという光景が展開していく。

朔耶も映画等でこういうシーンを観たことはあったが、実際に人が商品として扱われている様を目の当たりにするのはショックだった。知らず握り締めた手が小刻みに震える。

「暴れたら不味いかな？」

「やめとけ、アイツ等は『正当な商売』をしてるんだ」

「……うん」

更に値段が下がる様子を耳にしながら、王都に戻れば今売りに出されている奴隷達を全員購入出来るだけの資金は直ぐにでも用意出来ると考えた朔耶は、直ぐにその思考を振り払った。そんなやり方では何の解決にもならないと思い直す。

元よりこういう場での取り引きは即金払いなので、どの道彼女達を買うことなど出来ないのだ。こんな事を悔しがるのは傲慢な考えだと思いながらも、朔耶は後ろ髪を引かれるような気持ちを残してこの場を立ち去った。

酒場宿の前には既に出発準備を整え終えた銀月の牙団の団員達の姿。パーシバル傭兵団の印が入った傭兵団仕様の幌馬車が、宿の隣に横付けされている。

「さあ、ズラかるか」

「うん」

夕暮れ過ぎ、銀月の牙団はキトの街を出る。朔耶は街に不法侵入しているので、幌馬車に乗せて貰って奥に身を隠していた。

『レティ～』

――もぐ……サクヤ？　此方に来ているのですか？――
『うん、ちょっとキトの事探ってたんだけどね』
――キトを……？　そうでしたか――

朔耶は一旦、レティレスティアに連絡を入れてキトの政府の所在を掴んだ事を報告する。この後、ティルファと帝国にも報告に行くので、カイゼル王やアルサレナ王妃にも伝えておいて欲しいと頼んだ。食事中だったようなので手短に伝える。

――分かりました、伝えておきますわ――
『宜しくね～』
――この事で少し騒がしくなるかもしれません。気をつけて下さいね、サクヤ――

キトの政府の明確な所在が明らかになり、ヨールテスが其処の施設の最高責任者であると分かった以上、各国は先の和平会談での所業について、キトの政府にヨールテスの責任を問う事が出来る。
それは、施設が特定された事によって物理的な行動を起こすという選択も視野に入った、という事だ。

『戦争みたいになるかも……』
カクゴハ　デキテイルノデ　アロウ？
『まさか自分の行動がこんな風に引き金になるとは思わなかったケドね』
キトト　カッコクノ　カンケイモ　イママデ　イロイロ　アッタデアロウ　カラナ

コレまで自分から首を突っ込んで行った事も多かったとはいえ、どちらかと言えば事件に巻き込まれる形で様々な問題や出来事に関わって来た朔耶である。今回のように自ら国家間レベルの『事』を

起こすのは初めての経験だった。

　此方の世界に深く関わっていく決心をした時に、何時かこういう事も起きるのではという覚悟はしていたモノの、朔耶の気持ちに不安は尽きない。

「ここでいいのか？」
「うん」

　街から離れた街道脇で馬車を降りた朔耶は、取り合えず報酬に手持ちの金貨百枚を渡して、残りはフレグンスまで取りに来て欲しいとブラットに告げた。ここからだと二週間ほどの道程になる。

「次の行き先はフレグンスかぁ」
「王都にゃあ久しく行ってなかったな」

　団員達は暫しの休暇になりそうだと談笑し合った。朔耶は馬車から一歩二歩と離れ、帰還の体勢に入る。

「ツヅキ」
「ん？」
「……またな」
「うん！」

　ブラットと短く別れの言葉を交わし、朔耶は銀月の牙団が見守る中、自分の世界へと帰還した。

「ほほー転移術か、鮮やかなもんだ」
「他のサクヤもツヅキみたいな子なんすかね？」
「どうだかなぁ、クルストスに現われた奴はかなりオッカナイ奴だったらしいぞ？」
「だが全員黒髪だって話だな、街で黒髪の女を見かけたら気いつけねえとな」

わいわいと、朔耶が居た余韻で雑談を続ける団員達。ブラットは何気無く御守りを仕舞ってある胸元に手を当てる。次は何時、何処で彼女に会えるのか。そんな感傷にも似た感情を覚え、そんな自分に少し驚く。

「さあ、次はフレグンスだ！　残りの報酬を貰いに行くぞ」

ブラットの鼓舞に応える団員達。銀月の牙団の馬車は、一路フレグンスを目指して夜の街道を進んで行くのであった。

「さあ、次はティルファね」

一方の朔耶は別れの感傷など欠片も感じている暇も無いほどに慌しく、自宅の庭に帰還して直ぐティルファに向けて転移する。時間と距離を大いに短縮する裏技発動である。

「……唐突な方ですな。中々興味深い転移術をお使いになるようだ」
「こ、こんばんわー」

転移した先は、中央研究塔にある五階の一室。ブラハミルトの私室だった。研究室でもある私室で反発力ユニットの研究をしていたブラハミルトは、突然部屋に現われた朔耶に驚きながらも、普段のペースを崩す事無く応対して見せた。

朔耶とブラハミルトは、以前交渉し合ったソファーで向かい合う。

「なるほど、ようやくあの髭オヤジに借りを返せそうですね」

キトの政府とヨールテスの事を聞いたブラハミルトは、そう言って目を細める。これから帝国に行くという朔耶に、後日ティルファ、フレグンス、グラントゥルモスの三国で極秘会議を行う事を提案した。

「わかりました、伝えておきますね」

用件を済ませた朔耶は挨拶もそこそこにテラスに出ると、元の世界へと帰還する。通常の転移術に見られる空間の揺らぎも無く消え去る朔耶に、ブラハミルトは『もしやこれが世界移動なのか？』と目の前でさらりと行われた非常に稀な現象に関心を持った。

「まったく……、研究対象としても観察対象としても興味の尽きない方だ……」

ブラハミルトはテーブルに残された口の付けられていないお茶を飲み干し、反発力ユニットの研究に戻るのだった。

「おお、帰ったのか朔耶」
「ごめん、急いでるから」

自宅の庭に帰還した朔耶は、ビールを持って居間に向かっていた縁側の父にそう言うと、今度は帝都城に向けて転移した。
最近あまり娘に構って貰えなくなった父は、ちょっと寂しそうに背中を丸める。そしてふと、下の息子と仙蔵（拓朗の父）の倅（せがれ）の事を思い出す。この頃二人でよく朔耶の為に工場の機械を使って色々作っているようである。

「俺も何か作ってやろうかな……」

町工場に勤める都築家の、大黒柱が動き出す。主に娘の関心を惹く為に。

帝都城の地下に転移した朔耶は、マメなバルティアによって用意されたランタンの明かりに迎えられる。そのお蔭で、転移直後に襲って来た嘔吐感に少し足元がふら付くも、バランスを崩して倒れる事態にはならずに済んだ。

「う、なんか気持ち悪くなってきた」
テンイヨイ　カモ　シレヌ
「ナニそれ、そんなのあるの？」
コウモヒンパンニ　セカイヲワタレバ　セイシントニクタイニ　シヨウジタズレガ　オオキクナル

転移はほぼ一瞬の事だが、その一瞬には肉体と精神が一度離れている。その為、離れた精神がしっかり肉体に馴染む前に再び離れる事を繰り返せば、普段の定着した位置から徐々にズレてしまうのだという。

それはヤバいわと、朔耶は裏技の乱用はなるべく控えるよう気をつける事にした。

執務の終わったバルティアは中庭沿いの工房で職人達に混じってサクヤ式自動四輪の製作に勤しんでいた。

「やっぱりここにいたか」

「うぉ？！　サクヤではないか！」

朔耶は予想通りの場所で予想通りの事をしているバルティアを見つけて苦笑すると、とりあえず執務室まで引っ張っていく事にした。扇情的な格好の朔耶に、ちょっと眼つきが危ないバルティアだったが、朔耶は転移酔いでそれ所ではなかった。

人払いをした皇帝の執務室でアネットも交えてキトの事を話し、ブラハミルトの提案もそのまま伝える。

「凄いわね～、キトの組織を探り出すなんて」

「ふっ　奴等に和平会談での借りを返す時が来たか」

「なんか大事（おおごと）になりそうだけど、基本は奴隷制禁止令の受け入れ要求の方を推すの、宜しくね」

「任せておけ、奴等は受け入れる事になるだろう。　……それはそうとサクヤ、さっきから顔色が優れないようだが？」

細かい事は三国の極秘会議で詰めて行く事になるだろうと話し合った所で、バルティアが朔耶の体調を気にする。

「ちょっと転移酔いでね、嘔吐感が抜けないのよ……」
「無理せず休め、部屋を用意させる。　アネット」
「ハイハイ、準備させておきますねー」

皇帝の執務室より一つ下の階。帝都城の五階に並ぶ客間の一室を用意された朔耶は、お言葉に甘えて泊まって行く事にした。ベッドで横になりながらレティレスティアに交感を繋ぐ。

「なんか、この城からレティに繋ぐのって久し振りな感じ」

『レティー、起きてるー？』
――さ、サクヤ？　はい、起きてますよ――

何やら慌て気味な気配をレティレスティアから感じ取った朔耶だったが、伝わって来る感情の中に『イーリス』のイメージを感じたので『お邪魔だったかな～～？』等と思いながら、ブラハミルトが提案した極秘会議の事を伝えた。

『バルにはもう伝えてあるから、日程とかは上の人達で決めちゃってって感じで』
――そうでしたか……。分かりました、直ぐに伝えておきますね――
『なんかお邪魔しちゃって御免ね～、アルサレナさんに直接繋いだほうが良かったっぽいけど、ここからだと難しくて』
――い、いいえ！　そんな事はないです！　私、サクヤと繋がることが出来て嬉しいですからっ――

久し振りに席一つ分距離を取りたくなる様な事を口走るレティレスティアに、朔耶は返って懐かしさで和んだ。

『やっぱりレティは可愛いね』
――そ、そんなこと……もぅ、サクヤったら――

レティレスティアとイーリスの関係進展を推し進めながら、自分で思いっきりブレーキを掛けさせている事に気付かない、転移酔い中でグダグダな朔耶なのであった。

交感を終えて部屋のランプの明かりを落とし、シーツの中に潜り込む。

「じゃ、バルが来たら宜しくね」
ウム

朔耶は絶対安心防犯警備を神社の精霊に頼んで眠りについた。約三時間後、部屋から強風に叩き出されたバルティアが、部屋の前でアネットと『精霊の防壁を如何に突破するか』で相談している姿が見受けられた。

「あー、そりゃもう無理ですね。力ずくって選択はこれで不可能になりました、と」
「むう……唯一の攻略法であった勢いで押すのも、アレでは……」
「駄目でしょうねぇ……」
「何とか気を惹けないモノか……」

あーでもないこーでもないと、難しい戦局を乗り越える戦略を練る皇帝陛下とその補佐官の姿に、巡回中に通りかかった城内警備の衛兵達は『流石はグラントゥルモスの皇帝陛下』と、日夜戦略戦術の研磨に励む姿に感動するのだった。

翌日――

極秘会議の日程と方法についての話し合いが三国間で持たれた。フレグンスは王宮神殿、帝国は帝都神殿、ティルファは中央研究塔から、其々水鏡を利用しての遠隔会議となる。

情報は一切漏らさず、出来る限り内密に、兎に角迅速に、キトに対する三国間の足並みを揃えた政策を話し合う。本格的な会議は明日以降となるので、朔耶は今日一日帝国の中庭工房で自動四輪の製作に付き合って過ごす事にした。

既に城の中庭には気の早いバルティアによって自動四輪用の走行コースまで作られている。出力を上げれば自動二輪でも中庭のオフロードコースを走れそうなので、ちょっとしたレースが出来るかもしれない。

賞金を設ける等してレーサーを育成すれば、ギャンブル場にもなりそうだ。朔耶がそんな構想を工房の職人達と話ながら自動四輪の製作を進めている所に、様子を見に来たバルティアがアイデアを聞きつけて随分と乗り気になっていた。自分で走る気満々である。

「ティルファに技術指導をしたと聞いた。サクヤが作る程の物は無理でも、競技に使える程度のモノは出来るかもしれん」

帝国領の麓にある街辺りに競技場を造り、そこをバーリッカムやカースティアのような観光地となる街にしようと考えるバルティア。

位置的にもティルファに近いので、部品や車体の納入に都合が良い。

ようやく内政も整いつつある『バルティア皇帝の帝国』も決して懐事情が良い訳ではないので、景気対策の一環としても使えると話すバルティアに、朔耶は『やっぱりちゃんと国の事も考えているんだなぁ』と感心してみせた。

この日、朔耶は帝都城の中庭工房で自動四輪の車台に魔力石エンジンを搭載する所まで作業を進めた後、夕方頃には帝都城市場で補充用の魔力石を袋で買って帰宅の途についた。

「試運転はどうせバルが乗り倒すだろうから、来週には完成してるだろうなぁ」

そして来週、朔耶の来訪に合わせてキトの政府に対する三国の行動が開始される。

「あんまり、戦闘とかにならないといいけど……」

７４話：サクヤの暗躍？（後書き）

パル金貨一枚＝約４６５００円前後です。

75話：キト制圧作戦

週末までの間、朔耶は学校が終わるとオルドリア大陸へ転移して極秘会議の状況を確認していた。今回の事は此方の動きをキトに悟られてはいけないので、会議の事を知る者は本当に信頼できる極少数に限られる。そうして対キト政策が練り上げられて行った。

「朔耶ちゃん、最近わたし等に何か隠してない？」
「えっ！」

学校での昼休み。何時ものように三人でお弁当を並べて突付き合っていた所、実穂からそんな言葉を投げ掛けられて朔耶は驚く。

「朔ちゃ～ん、その反応はＹＥＳサーだよ？」
「いや、サーは無いと思うけど……」
「……やっぱり、わたし等には言えないこと？」
「え、え～～と……」

珍しく口籠もる朔耶に、実穂と藍香は心配そうな表情を向けた。朔耶も向こうの世界の事なだけに、どう説明したモノかと困った表情を返す。良いモノの例えが浮かばないのだ。

「うーーん、なんて言ったら良いんだろう？」
「それって凄く言い難い事？」

「まさか……！　とうとう朔ちゃんにも誰か気になる男とか出来て、でも今までそんな経験無かったからどうしたらいいかわか……もぐもぐ」

何時もの発作を起こした藍香の口にカニカマボコを突っ込んで黙らせた実穂は、声を潜めながら確認するように一言。

「オルドリアのこと？」

「っ！」

なんで！？　という表情で固まる朔耶に、実穂はそのキーワードについては決して詳しい内容を知っている訳ではないと断りを入れる。『オルドリア』が何を指すのか、特定の場所なのか、団体や組織なのか、誰か個人を指すのか、実穂は全く知らない。

ただ、独自に朔耶の事を調べている内に、偶々耳にした朔耶に近しい人物の会話に出てきた固有名詞だったのだ。

「ごめんね。わたし、どうしても最近の朔耶ちゃんの事が気になって」

実穂は朔耶の周辺を嗅ぎ回るような真似をした事について謝った。そして困った顔をしている朔耶に、どうしても自分達が立ち入ってはイケナイ事なのかを問う。

「ううーん……イケナイというか何というか……。　実穂と藍とは一般人の日常を壊したくないというか」

「え、なにソレ！　朔ちゃん裏の住人になっちゃったの？　マジで、それってどんな、え？　でもちょっとヤバくない？　イヤでも最近の朔ちゃ……もぐもぐ」

藍香の二度目の発作を一口プチハンバーグで鎮めた実穂は、それじゃあ一つだけと人差し指を立てる。こういう可愛い系のポーズは見掛けポヤっとしている実穂がやると本当に似合うなぁ等という感想を懐きつつ、朔耶は頷いた。

「朔耶ちゃん、またわたし等の前から急に居なくなったりしない？」

ある日突然、朔耶が消えてしまったのが半年前。約束のキャンプ場で待てど暮らせど現われず。連絡も付かず、街に降りて朔耶の家に電話を入れて、週末が過ぎ、平常通りに学校が始まっても朔耶は姿を見せなかった。

その後、失踪者として大捜索が行われ、夏に入り、何の手掛かりも得られないまま捜索の打ち切りと捜査の規模縮小が告げられ。居なくなった時と同様、ある日突然、帰って来た。

朔耶の失踪中、実穂と藍香は二人で居る事も多かったが、遊びに行く事は一度も無かった。特に藍香は、自分がキャンプに誘った事が原因かと一時期酷く落ち込んでいた。実質、実穂が支えになっていたのだ。

「……そっかぁ。二人にも随分心配掛けてたんだよね、ごめんね？藍」

「えっ！　いや、あたしはホラッ　朔ちゃんが無事ならモウマンタイだし！」

ぶんぶんと両手を振って顔を赤らめる藍香は、実穂に話題の転換を図れと合図を送るも軽く流された。

「んー、確かに二人にも隠してる事はあるけど……いつか教えられ

る時期が来たら教えてあげる」

最近の朔耶が時折見せる、落ち着いた深みのある笑み。やけに大人っぽい雰囲気を纏った笑みを二人に向けながら言う。

「もう勝手に居なくなったりはしないから、そこは安心して？」

「朔ちゃんっ！」

「朔耶ちゃん……」

実穂と藍香は分かったと頷いた。昼休みの教室で机を合わせてお弁当を広げながら、何故か手を取り合い見詰め合っている朔耶達に、クラスメイトは微妙～な視線を送っていたという。

サムズの国境を越えて川を二つ渡り、クリューゲルの南部をさらに南下しながら未開地アーサリムを目指す大型装甲車両の車列。その内の一台の車室で魔力の摂取ついでにキルトと戯れるヨールテスは、ここ最近の計画遂行率を分析していた。

ヨールテスの所属する勢力とエイディアス帝の勢力は裏の二大勢力として鎬（しのぎ）を削り合いながらも、同じ魔族という点において同胞と認め、協力関係にあった。

エイディアス帝が討たれた事によって裏の勢力に対抗馬が居なくなり、表の勢力でも中枢の人材を失った帝国勢に脅威は無く、フレグンスも貴族間の疑心で内政に不安があり、ティルファは最高指導

者が居なければ纏まらない国だ。

帝国の時間稼ぎと生き残り策と見られる和平会談を利用して表舞台に上がったヨールテスは、この機にオルドリア大陸の覇権奪取を一気に進めようと考えた。奇しくも皇帝と最高指導者と王妃、王女を手中に収める事が出来、万に一つの失敗もあり得ない筈だった。

「やはり、鍵はあの異世界の娘」

当初の予定ではサムズの反乱でクリューゲル全域を戦場にし、クリューゲルの独立派も煽り立てて一帯を紛争地域と化す。

フレグンス領の半分以上、オルドリア大陸の三分の一の地域を紛争地帯に設定し、キトは戦火の及ばない安全な位置からサムズ、クリューゲル、フレグンスに其々物資の売り込みを掛ける。

ティルファに武器を開発させて帝国の資金で竜籠を使い、キトの武器商人や物資を運ばせる。彼方此方で奴隷の需要も増えるし、その時の為のノウハウは闇業者を中心に食い詰めた商人を教育していた。

帝国、ティルファにキトの兵を置き、フレグンスの貴族と契約を結んで王都以外はキトの兵で防衛。

各紛争地帯に傭兵を送り込んで邪魔になる紛争は平定。最終的にはサムズとクリューゲルの間で適度に紛争を起こしながら武器や食糧を輸出。そうして支配域を安定させつつ儲けた資金は未開地の本拠地に送る。

魔力の補給無しで体内呪文の効果を維持できる、完璧な魔族となる研究を完成させる。筈であった。

「全て、あの娘に潰されたわけか……」
「ひ……っ　あ……っ　ヨールテスさまぁ……！」

何時か捕獲して実験に使ってやろう等と考えながら、ヨールテスは力を入れ過ぎて失神させたキルトをベッドに横たえた。

週末――

「気ぃつけてな、後悔の無いようにすりゃあいい」
「朔姉はあくまでも一般人だって事、忘れるなよ？」
「必要ないだろうけど、一応持ってけよ」

今回、大事になりそうだと大体の事情を聞いている兄と弟、それに拓朗が早朝の見送りに集まった。拓朗は孝文（おとうと）と作ったエレメントブレードの量産型を二本差し出す。頷いて受け取った朔耶はそれを腰に装着しながら庭の印の中に入る。

「じゃ、行って来ます」

何時もより少しだけ緊張感を纏った気持ちで、朔耶はオルドリア大陸へと転移した。

「……もうみんな、準備出来てるっぽいね」

サムズのエバンス、精霊神殿の前に降り立った朔耶は、まだ早朝の暗闇に包まれている街の辺境騎士団本部付近が、篝火によって明るく照らし出されているのを見て呟いた。

三国会議で決まった対キト政策、極秘計画（プロジェクト）。まず三国其々からキトに対して、奴隷制禁止令の発令を促す親書を同時に送る。

それと並行して、和平会談でのヨールテスの行いに対するキト政府への抗議と、ヨールテスの身柄引き渡しを求める。その裏で、三国が足並みを揃えて少数精鋭の兵を送り込み、合図を持ってキトの地下施設を制圧する計画だ。

朔耶が辺境騎士団本部にやって来ると、本部前には二頭立ての竜籠が準備されており、甲冑にマント姿という正装の装備で整えた騎士達が整列していた。今回、朔耶はフレグンス大使として此処にいる騎士達を護衛にキトの街へと乗り込む事になる。

整列する騎士達の隣に、同じ様に並んでいる二頭の竜が、朔耶に気付いて顔を摺り寄せて来る。朔耶は竜達の鼻頭を撫でてやりながら、この護衛騎士団を率いるアンバッスに声を掛けた。

「やっぱり正装するとオジサマっぽい貫禄でるね、アンバッスさん」

「オジサマは余計だ。何時ぞやの晩餐会でも似た様な事を言っていたな」

二人の会話で出発前の緊張した空気が少し和んだ。今日、計画通りキトを支配する組織、実質キトの政府と思われる組織を制圧する事が出来れば、このオルドリア大陸で列強四国の支配を受けている

地域全域に大きな影響を及ぼす事になる。

大多数の国や街々はキトの商人によって物流を抑えられているので、キトを支配する事はそのまま自国の国力増強に繋がり、他国の命綱を握る事をも意味する。

但しそれは、コレまでのキトと同様に商人達を完全に掌握する事が前提となるのだが、今回の計画で三国が連合を組むのは、その辺りの問題が関係していた。抜け駆け防止の意味もある。

「よし、では出撃するぞ！　全員籠に乗り込めー！」

アンバッスの号令に従って正装の辺境騎士団総勢十名が竜籠に乗り込み、朔耶もアンバッスの隣に乗り込んだ。二頭の竜と繋がれた竜籠は、風を巻き起こして羽ばたく竜と共にゆっくり上昇を始める。

「今日は宜しくね」
「キュー！」
「キョー！」

この後に待ち受ける戦いの気配を感じ取ってか普段よりも力強く朔耶の声に応えた竜達は、朝陽の射し始めた空に舞い上がると、一路キトを目指して飛び立った。

「ヨールテス様？　キトから連絡が入っています」

キルトの胸元から取り出された発掘品の伝送具を受け取り、内容を確認するヨールテスは浮かび上がった文字を見て鼻を鳴らす。

フレグンス、ティルファ、グラントゥルモスの三国から出されたキトの政府に対する要求。ヨールテスは、いつも通り適当にあしらっておけと、メッセージを返送した。

「たとえ武力を持って街を制圧したとしても、キトの体制は何も変わらん。　無駄な事だ」

街を支配する中枢を抑えない限り、キトの商人はキトの組織が操れるのだ。それなりの戦力も置いてあるし、各国の上層にはキトの息が掛かっている者もいる。直ぐに撤退する事になるだろう。

ヨールテスはそう判断すると、伝送具をキルトに返してベッドで横になった。未開地までの道程は長い。ノンビリ身体を休めながら、次の計画を練る事に集中した。

普段は監視者達の指揮をしているキトの監視官は、三国への対応を任され、三国代表のフレグンス大使としてキトの街を訪れた朔耶と騎士団について情報を集めていた。部下の報告によれば、エバンスから差し向けられた辺境騎士団の精鋭であるらしい。

フレグンス王室特別査察官である”サクヤ大使”は、キト政府の施設にて関係者への会見を求めているという。要求が受け入れられない場合は強硬突入も辞さない構えのようだ。

「敵の規模は」
「ハッ　フレグンス大使を含め騎士十名であります」
「ふむ、騎士は兎も角として……アレは『フレグンスの戦女神』だな？」
「そのようであります。商人達に確認を取らせました」

監視官はキトの私設軍でもある警備兵部隊の隊長から話を聞き、フレグンスの戦女神が居るからこその少数部隊かと考えた。それも王都の騎士団からではなく、辺境騎士団を使っている辺り、最初から戦女神の力をアテにしているのだろうと判断する。

失っても惜しくない人選で送り込み、一応正装させる事で大使一行である事を取り繕っている。戦闘になれば騎士団は無視するか、捕虜にして盾に使うかと考えを巡らせる。

「いや……、下手に取り込む必要は無いな」

上の屋敷には何らキトの政府を示す手掛かりとなるようなモノは置いていない。闇業者繋がりの噂に当りを付けて屋敷の制圧に乗り出してきた場合を想定し、街中の警備兵を屋敷に集結させて迎え撃つ。

「屋敷に繋がる通りに暗殺者を配置しておけ、上手くすればここで戦女神を討ち取れるぞ。街に居る傭兵も片っ端から雇い込め」

屋敷の周囲はキトの警備兵で固め、其処へ至るまでの通りには暗殺部隊と日雇いの傭兵を配置する。チンピラ風情から傭兵、暗殺者と、ピンきりの敵質で攻め続ければ、相手を心理的にも揺さぶる事が出来る。

屋敷に辿り着く頃には戦女神一人になっているであろうが、これは最初から『前提』として折込済み。後は如何に戦女神を退けるかに懸かる。戦女神自身は死者を出さないという話なので、此方の戦力は時間と共に回復する。

「延々と攻撃を続けていれば、何れは限界が来るだろう。ヨールテス様の話では、眠りの香等の搦め手が通用するらしいからな」

寧ろ闇市通りに配置した暗殺部隊が討ち取るかもしれないと、監視官は口の端を持ち上げた。フレグンス大使一行が闇市通りへ移動を始めたとの知らせが入ったのは、警備兵部隊の配置が完了して直ぐの事だった。

南通りの正門前でキト側からの『要求には応じられない』という回答を聞き、キト制圧部隊となったフレグンス大使一行は西通りにある闇市通りと、その先にある屋敷を目指して進軍を開始した。

中央通り周辺では露店や簡易店舗の商人達が、戦闘に巻き込まれないよう街からの退避を始めている。その人込みの間から襲い掛かってくる傭兵や街のゴロツキ達。

キトの地下施設から発せられた命令は街中に散らばった監視者や工作員によって実行され、街の彼方此方でフリーの傭兵やゴロツキが雇われては、仕事を遂行しにやって来るのだ。

朔耶達が果たして置かなくてはならない建て前の行動は、三国代

表のフレグンス大使としてキトの政府との交渉を試みる事。三国の代表としてキト側から要求を拒否される事。キト側からの敵対行為を確認する事、である。

「あっさり条件が揃ったな」
「だね……、それじゃあ合図だすね？」
「ああ、派手に頼む……と、――つぇあっ！」

ギィィンという金属音を立てて、安物の剣が弾き飛ばされる。呑気に背中を見せて話していた朔耶に斬りかかった傭兵は、剣を弾き上げられて体勢を崩した所にアンバッスの一撃を貰って派手に転倒した。

「ふん……騎士に挑むなら、もう少し腕を上げて良い武器を持て」

斬るには値しないとして、拳で応じたアンバッスは、ぶっ倒れている若い傭兵にそう諭す。辛うじて意識のあった傭兵はそこで気絶した。朔耶は肩を竦めながら漆黒の翼を広げると、空へ舞い上がって光を放つ。

『眩しいくらいにヨロシク』
マカセテオケ

朔耶を見上げていた人々が思わず眼を瞑るほどの眩しい閃光が辺り一帯を照らし出す。その光は街から遠く離れた場所で空中待機していた仲間への合図となった。

帝国の紋章を付けた竜籠が北方面から、ティルファの紋章を付けた竜籠が北東方面から、フレグンスの紋章を付けた竜籠が東方面から其々キトの街に向けて降下を開始する。

黒塗りに金のラインが走る帝国の竜籠が三台、バルティア皇帝自ら率いる精鋭騎士団十二名、ガルブレック側近代理兼密偵隊長率いる強襲密偵部隊九名、帝国魔術団十二名。

白と緑のセパレートなティルファの竜籠が一台、ブラハミルト研究塔所長率いるティルファ魔術団十四名。

白地に青いラインが入ったフレグンスの竜籠が二台、王都からは宮廷魔術士長のレイスと魔術士長補佐のフレイ、それにフューリ団長率いる精霊神殿の聖騎士団十二名、クリューゲルからはガリウス率いる派遣騎士団十名。

三国連合精鋭中隊の竜籠六台が、中央通りの開けた空間に強硬着陸した。離れた場所で大使一行の騒ぎを見物をしていた街の野次馬達が、只の乱闘騒ぎでは済まない規模になった事で慌てて避難を始める。

「待たせたなサクヤ！　余の精鋭部隊、好きに使うが良い」
「我々は一足先に屋敷の偵察に行ってまいります。では後ほど」

バルティアが精鋭部隊と帝国魔術団を連れて朔耶の傍にやって来た。ガルブレックは挨拶もそこそこに、闇市通りへ部下と共に消えて行く。

「ウチは主に仕掛けを弄る触媒型で構成してきました。使い所は例の屋敷に突入してからが出番ですよ」

ブラハミルトは戦闘の前面には出ず、屋敷に仕掛けられている罠の解除や、地下施設に降りてからの行動を示唆した。

「フレイがどうしてもと言うので、連れて来てしまいましたよ」
「お手伝いに来ました、サクヤ様」

事務仕事で実戦から遠退き、戦いの勘が鈍らないようにと今回の作戦に志願したレイスは、苦笑いを浮かべながらフレイの連合中隊参加を告げ、フレイは今度こそ朔耶の力になるのだと力強く宣言する。

「怪我人の治癒は我々に任せて下さい、サクヤ様の御手を煩わせる事は無いでしょう」

フューリは特に精霊術の腕に覚えのある部下を選んでの参加だ。朔耶に貰った回転ヘッドメイスもしっかり装備している。

「俺達は街の制圧に動くから先に行くぜ、上手くやれよ」

ガリウスは何時もの口調で、何時もより鋭い気配を発しながら、部下を連れて闇市通りの路地へと散らばっていった。

朔耶を入れて総勢八十名の三国連合精鋭中隊は、地上に降りて来た朔耶を中心に闇市通りへと進攻を開始した。

76話：空腹と新たなる諸問題

カカァァアン――

正面から固まって突入を仕掛けてくる相手は朔耶の電撃で一網打尽。建物の影や屋根から奇襲を仕掛けようとする者は帝国魔術団から攻撃魔術の洗礼を浴びる。

先行したガルブレック率いる強襲密偵部隊が予め敵の潜んでいる場所に印を付けてあるので、キトの警備兵や暗殺者による奇襲の殆どは逆に狙い撃ちを受けて撃退されていった。

また、路地に潜むキト側の諜報員をガリウスの部隊が片っ端から打ち倒して行く事で、地下施設にあるキトの司令部まで情報が届かないようにしていた。

精鋭騎士団と辺境騎士団が左右を固めてその内側に帝国魔術団が控え、殿(しんがり)を聖騎士団が勤める。隊の中心部に守られる形でティルファの魔術団とブラミルト、それにバルティアが一塊となり、正面には朔耶がレイス、フレイと並ぶ。

「――水よ風よ集いて凍て付く刃となり――」

「――炎よ翔けよ劫火よ猛よ――」

取り溢しはレイスとフレイが確実に仕留めて行く。電撃で昏倒した者はそのまま捨て置き、氷や炎で怪我を負った者には応急処置を施し、無力化した上で道の端に除けて放置していく。皆、なるべく犠牲を出さない朔耶の方針を酌んでくれていた。

「にしても……フレイの攻撃魔術って威力とか派手だね」

「これでも抑えている方なんですよ？」

本気で撃てば相手を炭化させてしまうという。これだけ控えめに抑えられるのも、それだけ状況に余裕があるからだった。

キトの監視官は、敵の増援を確認したという報告を最後に途絶えた、地上の諜報員との連絡を急がせていた。

竜籠数台による強硬着陸という話なので、少なく見積もっても五十人近く、二個小隊以上は投入されているかもしれないと予測をつけた。上の屋敷に集めた警備兵は約三百名、一個大隊に匹敵する。

「ふーむ……諜報員との連絡が途絶えたのは気になるが、ヨールテス様の指示を仰ぐ程の事ではないな」

折角留守を任されているのだ。つまらない用事で何度も呼び出して無能者と思われては、今後の昇進にも響く。監視官はそう考え、屋敷に上がって直接警備兵の指揮を取る事にした。現状把握は現場で行った方が早い。

「万が一屋敷に侵入される事があっても、昇降機の穴を閉じておけば地下施設が見つかる心配は無いだろう」

数人の部下を連れて昇降機で屋敷に上がった監視官は、部屋の仕掛けを作動させて地下施設に通じる縦穴を閉鎖すると、屋敷の庭と正門が見渡せる二階のテラスに向かった。

屋敷の庭や、門の前に整然と並ぶ警備兵たち。闇市通りを抜けた先にあるこの屋敷の周囲は、身を隠せる場所も無い開けた場所になっている。二階のテラスに出た監視官は屋敷前の広場を挟んだ闇市通りの出入り口に視線を向けて様子を窺った。

通りの奥からは剣戟の音や攻撃魔術のモノらしき爆発音。大勢の雄叫びが混じる戦闘音が響いて来る。

「ふむ、雇い込んだ傭兵共は上手くやっているようだな。此方からも攻めてみるか」

部下を伝令に使い、門前の警備兵から一個中隊を闇市通りに差し向ける。命令を受けた中隊は二十人編成の小隊三つに分かれると、其々隊列を組んで正方形の陣形を敷きながら通りの入り口へと前進を始めた。

最前列の小隊が敵を発見したらしく、武器を構えて迎撃態勢に入るのを確認した次の瞬間――

カカカアアァアン――

連続する乾いた音と共に閃光に包まれた小隊の兵達は、その場で一斉に昏倒した。後に続いていた残りの二個小隊は思わず通りの入り口から距離を取ろうと下がり始めるが、突然足元が縫い付けられたように動かなくなった。

何時の間にか石畳が凍り付いており、ブーツの底が張り付いてし

まっている。混乱する兵達。其処へ人一人分飲み込んでしまえるような大きさの火球が、次々に飛んで来ては兵達を貫くように焼いていく。

フレイの火球魔術は、撃ち出した火球が対象に当れば燃え移ってそこで終わりという従来のモノとは違い、凝縮されている魔力の大きさと持続時間の長さによって、単発型でありながら直線距離で長範囲に効果を及ぼせるのが特徴である。

手加減して放たれた火球は警備兵の集団に瞬間的な火傷を負わせながら、屋敷の門前まで飛んでそこに居た兵達を慌てさせた。

どうやらかなり強力な術者が揃っているようだと、監視官は動揺する兵達を落ち着かせるよう部下を伝令に指示を出す。やがて通りの出入り口から続々と飛び出して来る騎士の姿を見た監視官は、困惑と疑問の声を上げた。

「あれは……、帝国の精鋭騎士団ではないか！　フレグンスの増援というのは帝国軍なのか」

「監視官！　ティルファの魔術団らしき姿も見えます！」

「今、先行させた部隊の兵を治癒しているのは……精霊神殿の聖騎士団のようです」

電撃で小隊丸ごと一網打尽。凍結で足止めをして、火傷で攻撃力を奪い、辺境騎士団と精鋭騎士団が叩き伏せて無力化する。それを聖騎士団が命に別状は無いと言える程度まで治療して回復させる。容赦なく、それでいて慈悲深い進撃だった。

「あの屋敷ですか」

「うん、……うわー、何かいっぱいるね」

ブラハミルトの問いに答えた朔耶は、屋敷の門前に並ぶ大軍に息を吐いた。

「門の向こうに百、門前に二百という所ですが、先程の中隊を仕留めたので百五十前後でしょう」

「ぅわっ　びっくりした！」

イキナリ背後に現れて敵戦力の解説をするガルブレックに、驚いた朔耶は思わず飛び退いた。ちょっと嬉しそうなガルブレック。戦力の報告を聞いたアンバッスは如何攻めるべきか、精鋭騎士団長やレイス達にも意見を求める。

「流石に正面から戦えば、此方も甚大な被害は免れますまい」

「戦闘に向かないティルファ魔術団の方々を下げ、通りの出口を陣地に削ってみますか？」

「長期戦は不利でしょう。制圧に時間を掛け過ぎると、連中に情報を処分する猶予を与えてしまう」

全面的な総力戦は避けるべきだと主張する精鋭騎士団長の言に、レイスが腰を据えた攻略法を提案するも、相手の情報を抑えるという目的を達成する為には速攻が望ましいとブラハミルトが異議を立てる。

例え勝利出来たとしても、余り時間を掛ければ相手が敗北必至と悟った時点で屋敷や地下施設のあらゆる情報を隠蔽する工作に動く事が考えられる。施設を抑えられても、キトの支配者に関する組織の情報が手に入らなくては意味が無い。

「ふん……聖騎士団とサクヤの治癒もある事だし、少々無茶でも突っ込んでみるか」
「ちょっと待って」

全軍突撃を考えていたアンバッスに待ったを掛けた朔耶は、神社の精霊と相談しつつ条件と前提を確かめる。

「三国連合の意義はもう達成されてるよね？」
「うむ、ここまで我が帝国の騎士団とフレグンスの騎士団を見せ付けながらの進攻だったからな」
「我々も屋敷の制圧後から動くので十分参加の意義は果たせますよ」

バルティアとブラハミルトが肯定を返す。三国が揃って協力し合い、キトを制圧したという客観的な『見栄え』の事実も必要な条件だった。三国はあくまでも対等であり、何れの国も何れかの国に対する追従では無いという前提。
それが達成されたのであれば、ここから先は無理に危険な道を行く事は無い。

「あたしが出るよ」

三国連合中隊と睨み合いを続けていた屋敷の門前を護る警備兵達がざわめいた。テラスから戦況を窺っていた監視官も身を乗り出してその光景に眼を見張る。

「あ、あれが……、フレグンスの戦女神か」

赤い光沢のあるコートを纏った小柄な黒髪の少女の背から、その体躯の三倍はありそうな漆黒の翼が生えている。よく見れば、翼の先は陽炎のように揺らめいている事が分かる。

噂でしか聞いた事がなかった存在の、噂通りの姿を目の当たりにした警備兵達は一様に動揺の色を見せた。監視官も内心は畏怖と動揺に揺れていたが、指揮官である自分が兵達の前でそれを表に出す訳には行かないと、平静を装う。

その少女は、警備兵と対峙する連合軍の部隊から単身で中央の開けた場所まで歩み出ると、それ程大きな声でも無いのに一帯によく響く声で警備兵達に投降を呼びかけた。警備兵達の動揺に比例して、ざわめきも更に大きくなる。

「監視官……！　このままでは、動揺した兵達が投降に応じてしまうのでは？」

「分かっている、此方の魔術士を出せ。例の作戦だ」

監視官の指令を受けて、部下が屋敷内に待機させていた魔術士部隊に出動を要請した。眠りの香と風の魔術で無力化する戦法。

混戦乱戦の状態では味方も巻き込んでしまい、睨み合いの状態で正面から使っても相手に魔術士がいた場合は逆利用されてしまう危険もあって、大規模な戦闘では中々使い所の難しい組み合わせの術だが、幸いにも今の状態であれば目標は孤立している。

「ざっと見た所、戦力差は３：１という所か。戦女神さえ封じてしまえば数で押せる」

眠りの香が戦女神を包み込めば、全軍で一斉攻撃に出るよう指令を出して魔術士達の詠唱を見守る監視官。門の内側ギリギリの場所

から目標に狙いを付けると、眠りの香から吸い上げた煙を帯状の風に纏め、空中を滑る白蛇の様に狙った獲物に差し向けた。

『何か白いのがいっぱい飛んできた！』
ワズカナドクセイ　スッタモノヲ　コンスイサセル　ケムリノヨウダ
『ああっ　あれか！　って煙は防げる？』
オシカエスコトハ　ゾウサモナイガ

数が多過ぎるので下手に吹き飛ばしても残った煙に辺り一帯を覆われる可能性が高いという。広範囲に広がった煙をまた風の魔術で運ばれて再利用されればキリが無い。

一番良いのは纏めて蒸発させる事だという精霊に『じゃあそれで宜しく』と軽食のメニューを選ぶが如く宜しくお願いする朔耶。大量の眠りの香が朔耶を包み込んだ瞬間、あらゆる攻撃から朔耶を護る魔法障壁を更に強化して漆黒の翼を消した。

基本的にこの翼は、魔法障壁で浮かせた身体を移動させる際に必要な風を起こす為のモノなので、飛ぶ時以外は威嚇効果くらいにしか使い道がない。雷を纏わせるのも只の演出である。一応、魔力の塊りで出来ているので使い勝手が良いのだ。

「サクヤ様！」
「待て、フレイ」

朔耶が眠りの香に包まれ、漆黒の翼が消えた事で慌てたフレイが飛び出し掛けるのをレイスが止める。

フレイは以前、朔耶が帝国に連れ去られた時の事を強く印象に持っていたので焦っていたが、レイスはカースティアからの情報で眠っている朔耶に夜這いを掛けようとした騎士が追い返されたという話を聞いていたので、冷静に成り行きを見守った。

実際に追い返された経験があるバルティアや、カースティアの話にある騎士本人たち当事者は、同様の理由で大丈夫であるという確信を持って朔耶がどう出るのかを見守る。

ブラハミルトは朔耶が煙に包まれる直前に翼が消え、魔法障壁の出力が上がった事を魔術士として魔力で感じ取っていたので、また何をやらかしてくれる気なのかと興味深そうに観察していた。

「よしっ　やったぞ！」
「全軍突撃！」

眠りの香が大きな煙玉となって朔耶を包み隠し、漆黒の翼が消えた事から作戦の成功を確信した監視官がテラスから叫ぶ。その声に押されるように、門前の警備兵が前進を始めようとしたその時――

ゴオオオオオオオォオゥ

「うわぁ！」
「火がっ　火柱が！」

突然、突風を巻き起こしながら轟音と共に赤い塔が出現した。それは巨大な炎の竜巻だった。尋常ではない熱量によって眠りの香は一瞬で蒸発し、辺り一帯を熱風が襲う。が、香の蒸発を終えた炎の竜巻は周囲に熱の余韻を残してすぐさま消滅した。

危うく焼身自殺しかけたキトの警備兵達は、炎の竜巻が消えた場所に何事も無かったかの様に立つ黒髪の少女が再び漆黒の翼を広げるのを見て、恐怖から戦意喪失に陥る者が続出した。

「か、監視官……！」

「っ！　も、もう一度だ！　もう一度魔術士達に眠りの香を使わせろ！」

「そ、それが……」

我に返った監視官が再攻撃の指示を出すが、魔術士達は戦闘の放棄を主張していると部下からの報告が届いた。監視官はテラスから身を乗り出して庭にいる魔術士達に叫ぶ。

「貴様等どういうつもりだ！　契約を守れ！」

「あ～悪いがのう、わしらは人間相手の契約しかしとらんからのう」

「あんなモンとやりあうくらいなら、ポルモーンで魔物の相手でもしとるほうがマシじゃい。わしゃ降りる、報酬もいらん」

魔術士達はそう言ってゾロゾロと帰り支度を始めた。傭兵や商人達と違い、魔術士が世間から変わり者とか扱い難いとか言われる所以でもある。彼等は自分の力を見誤らない。徹底して現実主義的であったりもする。

だからこそ、彼らがお手上げだと評すならば、その信憑性は極めて高いのである。監視官はこんな局面での契約破棄に歯噛みしながらも、『フレグンスの戦女神』はそれだけ強大な相手だという事を再認識した。甘く見過ぎていた自分に悪態を吐く。

「……くそ、仕方がない。こうなったら、ヨールテス様に指示を仰

ぐしか――」

監視官は無能者のレッテルを貼られる覚悟でヨールテスに連絡を取ろうかと考えたその時、門の外を護る兵達が大騒ぎを始めた事でそちらに視線を引かれ、ソレを目にした事を後悔した。

漆黒の翼に稲妻を纏った戦女神が、両手に二対の光の剣を輝かせながら真っ直ぐ門に向かって走って来る。正面に居た兵達は竦みあがり、片っ端から武器を棄てて後方に控える連合軍に投降を始め、門から距離のある位置にいた兵達は何処かへ逃げ出した。

庭に配置していた兵達も屋敷の裏門から逃げようと一斉に退いて行く。指揮は完全に崩壊した。

「立ちはだかる者は斬ります！　死にたくなければ投降なさい、投降が嫌なら逃げなさい！　追撃はしません！」

そんな事を叫びながら朔耶は両手のエレメントブレードを無為に構え、漆黒の翼から派手に放電現象を起こしながらズンズン門を目指して進んでいく。

朔耶にはこの量産型エレメントブレードで人を斬りつけるつもりなど毛頭無かったが、向かって来られる兵達にとっては堪ったモノではない。只でさえ威圧感のある放電付き漆黒の翼に加えて先程の炎の竜巻、さらには光で出来た剣である。

「これは……なんというか」

「サクヤ様……」

「くく……相変わらず面白いモノを見せてくれる」
「なるほど……これ程だったとは……」

朔耶が真っ直ぐ進むだけで、進路上の兵達は蜘蛛の子を散らすが如く次々と道を開けていく。まるで誇張と賛辞の麗句に飾り立てられた英雄譚の一幕でも観ているような光景だった。

皆、改めてこの世界における朔耶という存在の異常さを思い知らされる気分になる。それは、朔耶に対する親しみで忘れていた畏怖の念すら呼び起こしてしまいそうな程に。

連合軍の騎士達は投降兵を無力化する作業を行いつつ、屋敷の門に向かって突き進む朔耶の姿を目で追う。

遂に門の前に辿り着いた朔耶は、ガッチリ閉じられている重厚な門に向かって駆け込みながら両手のエレメントブレードを高く構えると、身体を回転させるようにして一閃。二対の光の刃で斬りつけた。

厚い門の表面に火花が飛び散り、閃光が明滅する。緊張の一瞬と静けさ。門には変化は見られない。誰かがゴクリと喉を鳴らす。全軍が見守る中、光の剣を収めた朔耶が振り返り、苦笑しながら一言。

「あはっ　やっぱ斬れなかったよー」

耐性のない者が一斉にズッコケた。

「という訳で、とりゃーー！」

照れ隠しで気合一閃、漆黒の翼から放たれた無数の雷撃が屋敷の

門を吹き飛ばす。

「初めからそうしろよ……」

「いや～、シリアスに耐えられなかったというか、ノリでやっちゃったって感じ？　てへっ」

そんなアンバッスとの掛け合いに、朔耶に近しい者達の心の中に湧き上がり掛けていた畏怖は、何処かにすっ飛んで行った。

「さて、ここからは我々の出番ですね」

ティルファ魔術団を率いるブラハミルトが屋敷内の仕掛けや罠を探知、解除する為に扉の前に集まって来た。既に密偵部隊が二階の窓から屋内に侵入、ガリウス小隊が扉から先行して屋敷の制圧に動いている。

「屋敷の制圧は帝国密偵部隊とガリウス小隊に任せる。サクヤ、地下施設への案内を頼む」

「はーい」

屋敷の周囲を辺境騎士団と精鋭騎士団、帝国魔術団で固めて捕虜の監視も行い、聖騎士団は負傷者の治癒と並行して捕虜の尋問も担当する。屋敷の制圧は順調に進み、地下施設に逃げ込もうとしていた監視官と部下は密偵部隊に拘束されていた。

昇降機の部屋の仕掛けはブラハミルト達が解析して閉じた縦穴を開き、密偵部隊やガリウス小隊と共にティルファ魔術団をギュウギ

ユウ詰めにして地下へと降りていった。定員オーバーになる事は無いようだ。

「あ～、何かお腹空いてきた」
「サクヤ、まだ気を抜くな」

アンバッスはそう言いつつも、この場にはもう危険は無いと感じていた。この現場で最大の脅威は『お腹空いた』とか言いながら今ココに居てお腹を擦っている少女なのだから。

「ちょっと厨房見てくるね」
「……炙り肉があったら持ってきてくれ」

朔耶はニコーと笑って屋敷の厨房へと向かった。

「おや、此処にいましたか」
「サクヤ様……、どうかしましたか？」

アンバッスから朔耶は厨房に向かったと聞いてやって来たレイスとフレイは、調理台に向かって何やら難しい顔をしている朔耶を見つけて声を掛けた。

「レイス、フレイ……。　これ、何に見える？」

そう言って朔耶が指したのは、調理台の上に乗る調理器。こういう屋敷の厨房になら魔術式の調理器があっても珍しくない。しかし、

そこにあったのはサクヤ式魔力石コンロだった。レイスの目が細められる。

「……フレグンスにキトとの内通者がいる、という所でしょうか」
「まあ、帝国の事があったんだから居てもおかしくは無いと思うけどね」

魔力石コンロは一部の者にしか売っていない。ここにあるのは貴族向け且つ安い方の魔力石コンロだった。特定の目処は付く。

「奴隷とかも見つかったりして」
「あり得ますね。しかし、ようやく内政も落ち着いて来たと思っていた矢先ですから……」
「多分、内密に処理する事になると思います」
「……そっか」

生肉を適当に炙ってアンバッスに届けた朔耶は、地下施設に降りてみる事にした。結構な勢いで降りていく為、あの使用人が思っていた浮遊感に下腹部がきゅーとなる。昇降機を降りると、通路にガリウスが居た。

「よう」
「ガリウス……血だらけじゃないの、ちゃんと拭かないと」
「ああ、俺のじゃねえから心配すんな」
「怖いから拭けつってんのよっ」

地下施設の通路は狭くて細くて薄暗い。幽霊の類が苦手な朔耶と

しては、血の臭気を漂わせながら歩き回られるのはちょっと怖いのだ。地下を粗方調べ終えたガリウスは、そんな朔耶に肩を震わせて笑いを堪えながら上の屋敷へと上がって行く。
あからさまにからかえば電撃が来る事は学習したらしい。朔耶は顔を赤らめて唇を尖らせながらそれを見送るのだった。

「くそー、ガリウスめー」

朔耶はぶちぶち言いながら廊下を進み、一番エライ人の部屋にやって来た。ブラット達とキトを探ったあの時、此処にはヨールテスが居たようだが、捕虜になった監視官の話では、今は街を離れているらしい。
何処に行ったのかまでは口を割るつもりは無いそうだが、地下施設を調べれば何か掴めるだろうとブラハミルトが言っていた。

「あ、ブラハミルトさん見っけ」
「ああ、サクヤ殿か……」
「何してるの？」

ブラハミルトは平らで厚みのある箱を調べているようだった。聞けばこの中に何か重要な書類が入っているらしい事が分かったのだが、中々に厳重な鍵で、開錠出来なくて困っているらしい。

「ふーむ、どれどれ……」

朔耶は箱に触れると、意識の糸を差込みながらお願いしてみた。

『開いて？』

――ガチャ

「……」
「開いたよ？」
「……え、ええ……助かりましたよ」

複雑な表情になったブラハミルトは、『開錠には結構自信があったのだが……』とか『いや、そもそも比べる事が間違いなのだ』など、自問自答らしき呟きを発しながら箱の中の書類を取り出して目を通す。

「……ふっ　ははは」

そしてピタリとある一点を見つめて誰かの名前らしき言葉を呟くと、俄かに笑い始める。それは自嘲のような失笑のような笑い方だった。簡素な椅子にドサリと腰を下ろすと、テーブルの上にその書類を置いた。

「ブラハミルトさん……？」

心配そうに声を掛けた朔耶に、ブラハミルトは書類の一点を指差す。其処には先程彼が呟いた名前が記されている。

「私の側近だ。和平会談にも参加していたし、あの時竜籠にも乗っていた」

屋敷に戻って来た朔耶は、二階のテラスに立つバルティアを見つけた。キトの街並みに目を向けてはいるが、視線はずっと遠くを見

ていた。何か考え事をしているようだ。

「バル」

「サクヤか」

「何か難しい顔してるね」

「うむ……キトの問題は思っていたより根が深い」

帝国にもキトと内通していた者が居た事が分かっている。元々優秀な密偵部隊を持つ帝国は、そんな事態も想定していたので特に問題はないらしい。バルティアが考えていたのは先程の重要書類で明らかになった情報。

先ず、ヨールテス達魔族の本拠地が未開地にある事が分かった。そして、其処には精霊石の鉱山がある事も記されていたのだ。希少石の中でも最も価値の高い精霊石の鉱山があるとなれば、その土地を領土にする事は莫大な利益を得る事になる。

「これは揉める事になるぞ」

77話：未開地に吹く風（前書き）

今回もちょっとエロイ描写があります。

77話：未開地に吹く風

キトの中央通り広場。出発準備を整えている竜籠の前で、周囲に野次馬の姿をチラホラ見ながら言葉を交わす朔耶とアンバッス。

「アンバッスさんは暫らくキトに残るの？」

「ああ、正式に街を統治する者が決まるまで駐留する事になる」

屋敷と地下施設、街中にある他の政府関連施設も大体の調査が済み、キトの街にはフレグンス騎士団と帝国密偵部隊、それにティルファ魔術団が残って当面の統治を行う。

バルティアは政務の殆どを、アネットと側近のダンクルに任せているので早く戻らねばならず、精鋭騎士団と共に帝国へ発った。ブラハミルトも魔族と繋がりがあると見られる人物を調べなくてはならない為、既に帰国の途についている。

ガリウスの部隊はアンバッスの指揮下に入って居残り組み。フューリ達聖騎士団はガリウスの隊が乗ってきた竜籠で一旦、エバンスに移動して一日休んだのち王都へ。朔耶はレイス、フレイと共にアンバッス達と乗ってきた竜籠で王都に帰る事になる。

これは今回の作戦で長距離を飛んで来た竜達の、体力を考えての振り分けだった。一応、竜の体力も朔耶の精霊の癒しで回復させる事が出来るものの、あまり無理はさせない方が良いと判断した。

二頭立て竜籠で乗員三名なら速度も出せる。キトから王都フレグンスまでは約九時間、到着は深夜になる見通しだ。竜籠の操舵をレイスに任せ、朔耶はフレイと籠の隅で丸くなって仮眠を取る。

「うーん、フレイの身体あったかい……」
「サクヤ様……」

帰国の道中、レイスはそんな二人に微笑ましさを懐くべきか嫉妬を懐くべきか、少し悩んだ。

「なんとも悩ましいですね」
「キュ」

レイスの呟きに竜が答えた。

フレグンスに到着したのは深夜。朔耶の腕時計は二時過ぎを指している。二人を起こしたレイスは、とりあえず城の客間で休ませる事にすると、自分は報告書を纏めに執務室へ急ぐ。

今回の事はキトの今後や地下施設の書類に記されていた人物の処断も含めて、素早い政治的判断が望まれる。特に未開地アーサリムの精霊石鉱山については出来る限り迅速な調査が必要だ。

三種類の要点を抑えた書類を作製し終えた所で、レイスも疲労の限界に達し、執務室のソファーで仮眠を取るのだった。

早朝――

王の間ではカイゼル王、アルサレナ王妃、レティレスティア第一王女の他、宰相と数人の国政に携わる側近官僚が集まり、レイス宮廷魔術士長の提出した書類を前に唸ったり互いに囁きあったりして難しい顔をしている。

この場には朔耶とフレイ、イーリス近衛騎士団長も同席していた。ちなみに皆に配られた書類は朔耶が裏技でコピーしてきたモノだ。やたら手触りの良い上質な紙にも興味を惹かれる所だったが、書類の内容はそれ以上に深刻なモノであった。

キトの今後については三国共同統治で話が纏まっていた。元々キトを統治していた組織の実態を知らされずに働いていた政府関係者も多く、彼等を起用する事でこれまで通り、商人達とは円滑な取り引きが行われる事になるだろうと推測されている。

魔族の組織については、これは三国共通の敵性脅威勢力と見做して対処するので、見つかった書類の記載を元に関係者の処分を行い、早急な浄化と人事の再編で建て直しを計る。

問題の鉱山に関しては何よりもまず未開地の情報が求められる。今後の展望としては、アーサリムを領地に組み込んでいく方向で動くとしても、ルティレイフィア姫の活動があるので、多少有利に事を運べるだろうという見方がされていた。

「あの子は複雑な顔をするでしょうけどね」

アルサレナの言葉には、母親としての気持ちと王妃としての立場

的な責任が入り混じった心情が含まれていた。

大陸南東部に広がる未開地は位置的にもフレグンスが有利だが、帝国には竜籠がある。三国で取り分の交渉にも入るであろうが、実質、朔耶の存在もあるので帝国とティルファの二国はフレグンスに遠慮せざるを得ない。

ティルファはキト制圧の協力と研究支援の意味でも精霊石の三国共同採掘を提案してくると予想される。どんな形であれ採掘権の要求はあるだろう。

帝国とは交渉前に鉱山を自国領土に組み込む工作合戦も起こり得る。帝国の場合、その機動力と軍事力を持って自力で領土に組み入れる可能性もあるのだ。竜籠の持つ輸送力という優位性は高い。

「やはり先に交渉の席を設けて牽制しておく方が良いかもしれませぬな」

「協力して採掘するなら運搬や採掘技術も考慮して取り分は4：4：2という所か」

フレグンスが四、帝国が四、ティルファがニという割合である。利益の計算と経済効果を謳うカイゼル王や側近達に、それまで議論の内容を黙って聞いていた朔耶が一言、呟きを口にする。

「”取らぬ狸の皮算用”ね」

「サクヤ様？」

朔耶の呟きの意味が分からず小首を傾げるフレイに、朔耶は『狸』に当る動物が分からなかったので、『獲らぬ獲物の皮算用』と此方

風に言い換えて説明する。『まだ捕まえても居ない獲物の皮を売る事を考えること』

「手に入るかどうかも分からないモノを当てにして計画を立てる事の喩えだよ」

得られる物の予測だけで盛り上がり掛けていた議論を一言で修正する朔耶の、相変わらず的確で洗練された『サクヤ』の国の痛烈な賢者の言葉に、感嘆を持ちつつもバツが悪そうなカイゼル王や側近達。珍しくアルサレナも自省するような表情を浮かべる。

「本当に、娘とは大違いですね」

「母様……ひどいです」

思わぬとばっちりを受けたレティレスティアが拗ねた。

会議は二国とも情報のやり取りで連携しつつ、ルティレイフィアとも連絡を取って未開地の情報を集める所から始めようという事で一応の結論を見た。そう遠くない内に、未開地へ向けての出兵が発表されるだろう。

王の間を出て執務室の並ぶ階の廊下を歩きながら、朔耶は並び歩くレイスに話しかける。

「レイスはまだこれから仕事？」

「ええ、人事処分の書類を纏めなくてはいけませんから」

「あー……そっか」

「あの、レイスさま」

フレイが湯浴みに行って来たいと訴えると、朔耶も昨夜はお風呂に入っていなかった事を思い出した。折角なので自分の屋敷のお風呂に入ろうとフレイを誘う朔耶。書類の纏めは一人で出来るので、今日は昼からの出勤で構わないとレイスは許可を出した。

「よーし、それじゃあお風呂入りに行こー！　シャンプーとかボディーソープも置いてあるからね」

「それはサクヤ様の国の湯浴み道具でしたね」

「うん、なんかコッチの男共は石鹸の匂いとかシャンプーの匂いとかに弱いっぽいから、レイスもメロメロになっちゃうかもよ」

「えっ！　そ、そう……なんですか？」

さっと頬を染めるフレイがちらりとレイスの様子を窺う。朔耶もニヤリとレイスの様子を窺う。レイスは溜め息を吐きながら、執務室に籠もる前に食堂で食事を摂って置くことにするのだった。

「お帰りなさいませ、サクヤ様。　ようこそいらっしゃいました、フィレイヤ様」

フレイを連れて自分の屋敷にやって来た朔耶は、早速お風呂の準備と食事の用意を頼んだ。使用人達は屋敷の主たる朔耶が訪ねて来て以来、実に二十二日ぶりの帰宅と初来客を張り切って迎えた。

「空気がちょっと寒いかな」

「温めましょうか？」

軽く食事を済ませて、朔耶とフレイは湯が張られた広いお風呂場にやって来た。広さゆえに肌寒さを感じた朔耶だったが、フレイが攻撃魔術の形になる前段階で発現させた火属性の魔術で、風呂場の空気を快適な温度まで上昇させた。

「便利だねーそれ」

「ふふ、乾燥にも使えるんですよ」

プチ銭湯と言える程の広い造りにした日本式のお風呂場で、朔耶の世界から持ち込まれた湯椅子や洗面器を見て感嘆するフレイ。浴槽も腰まで浸かれる深い造りになっている。また、身体を洗うためのスポンジの手触りにも驚いていた。

「凄いですねー……、サクヤ様の美しい肌や髪の秘訣が此処に！」

「いやいや、そんな大層なもんじゃないけど……、それよかフレイの方が凄いというか」

朔耶は『フレイは脱ぐと凄かった』という感想を先ず持った。以前にもバーリッカムの温泉で見た事はあったのだが、ああいう場所では皆薄い湯浴み着を纏うので、ここまでハッキリくっきり目にするのは初めてだ。

精霊の視点でも何度か見た事はあったものの、シチュエーションが過激すぎるのでじっくり観察した事はなかった。

取り合えず朔耶は、フレイにシャンプーの使い方を教えたり、ボディソープを付けたスポンジで洗いっこをするなどして、暫しゆったりした入浴の時間を楽しんだ。

「ふう……　湯浴み着も無しでお湯に浸かるなんて、不思議な感じですね」
「あたしのトコじゃこれが普通なんだけどねー。……それにしても」
広い浴槽で縁に背を預けながら手足を伸ばしてお湯に浸かる心地良さを満喫しつつ、朔耶はフレイの豊満なバストに目をやる。
「でかい」
「え？」
朔耶は徐（おもむろ）にむにむにと揉み挙げた。
「ふーむ……レイスはこれを毎日好きにしてるのか」
「えっ？　えっ？　ええ～っ！？」
むにむにむにむに
「フレイって確か、あたしと一つしか歳違わなかったよね……。クラスにもこのサイズは居なかったよなぁ」
「あ、あ、あのっ　さ、サクヤ様……っ　……んんっ」
湯船の熱さにノボせたのとは明らかに違う理由で紅潮していくフレイ。朔耶は心地良い手触りと重みと温かさを堪能しながら、『何故これで型崩れもしないのか』とか『張りの良さは外人補正か』とか呟きながら、その柔らかさを愉しんでいたのだが――
サクヤヨ
『ん？　なーに？』
スゥイッチ　トヤラガ　ハイッタノデハ　ナイカ？

『スイッチ？』

何の事かと考えていた朔耶は、ふいに視線を感じて顔を上げる。フレイが潤んだ瞳に熱い吐息の混じった浅い息遣いで、じぃっと見つめていた。なんだか眼つきが危ない。

フラグガ　タッテオルゾ

『……もっと早く教えてね』

少しずつ覚え始めた横文字と、少しずつ覚えてしまった兄語？で警告を発する神社の精霊に、朔耶は発令が遅いと抗議した。

「……サクヤさま」

「ちょっとまった！　ストップ、ストップ！」

ずずいっとにじり寄って来るフレイを押し止めようとした朔耶はそのままフレイの胸を押し上げて余計に刺激してしまう。フレイは朔耶のその手を取ると、そっと両手で握って愛しそうに指に舌を這わせ始めた。

「ぎゃーーっ　指舐めとかエロ過ぎる！」

「んん……　はぁ……　サクヤさまぁ」

これはイカンと焦った朔耶は、風呂場の隅にある水桶に意識の糸を伸ばして水を操ると、フレイの顔を目掛けて浴びせ掛けた。

「精霊ビーム！」

「ひゃんっ！」

文字通り『冷水』を浴びせられて正気に返ったフレイは、最初キ

ョトンとした表情を向けていたが、やがて顔をみるみる紅潮させると、湯船から飛び出すように逃げ出そうとした。咄嗟に腕を掴んで引きとめる朔耶。

「は、放して下さい！」
「待ってってば、落ち着いてフレイ」
「後生ですから！　後生ですから！」
「恥ずかしいのはあたしも一緒だってばっ　そもそもの原因はあたしなんだから！」

二人して真っ赤になりながらお風呂場で騒ぐこと暫らく。ようやくフレイを落ち着かせた朔耶は、二人揃って湯冷めしてしまったので、もう少し温まり直してからお風呂をあがった。

「フレイをそんな身体にしたレイスが悪い！」
「さ、サクヤ様……それは」

そんな結論を力説してレイスに責任を擦り付ける朔耶。今日の事は二人だけの秘密という事で収め、フレイもそれには同意した。

アルジドノハ　ソノキニナレバ　ダンジョコンゴウノ　ハアレム
デモ　ツクレソウデアルナ
『いらないわよ、んなハイブリッドハーレム』

オルドリア大陸南東部、アーサリム地方の入り口の街、『ササ』。

最もフレグンス領に近く、唯一街道が通る街でもある。この街では、この土地周辺の部族が集まって軍となり、中立地帯として最も勢力の強い部族の族長が街を治めている。

彼等は絶対的な中立を謳い、あらゆる勢力に肩入れしない。その為、街中では一切の諍いを禁じ、例えアーサリムの他の街から狩られて来た奴隷が連れ込まれようと関知せず、それを取り返そうと動く者にも交渉以外は認めない。

未開地の奥から度々奴隷商人を追ってはこの街まで来る事もあるルティレイフィアも、ここでは手出し出来ないので傭兵の補充をしたり、商人の馬車がフレグンス領を通る時に臨検する等して誘拐された者を連れ戻す事もあるが、その例は多くない。

形の崩れた石造りの建物に看板が括りつけられた古い酒場。見てくれは潰れ掛けの店だが客足は多く、造りも壁の厚みがちょっとした砦並もある丈夫な酒場だ。

馴染みの酒場に立ち寄ったルティレイフィアは、店に入るなり部族衣装を纏ったガタイの良い大男から声を掛けられる。

「また揉め事を起こしにきたのか？」

「ふっ　今日は兵を募りに来ただけだ」

入り口から少し奥まった位置にあるテーブルの大男にそう返すと、ルティレイフィアはカウンターに着いた。もそっとした髭の店主が注文を取りに来る。何時もの地酒を注文して銅貨を置くと、直ぐに注文の品が出て来た。そのまま店主と話をする。

「使えそうな傭兵はいるか」

「……特に」
「向こうの情勢はどうなってる」
「……キトが落ちた」

『ほう？』と、ルティレイフィアは目を細める。更に銅貨を三枚置く。店主はそれを音も無く拾うと、情報の続きを話した。三国連合軍によるキトの街の制圧。事実上、キトの政府は解体されて三国共同統治となる。

「列強四国が三国になった訳か……。他に台頭する国があればまだ四国だが」

そう言ってちらりと、奥のテーブルの大男に視線を向けるルティレイフィア。男はその視線を受け流して干し肉を捻ったツマミを齧りながら椀型のカップから酒を喉に流し込む。

「族長が昼間から飲んだくれていて良いのか？」
「要らん世話だ」

先程の意趣返しをしたルティレイフィアは軽く笑うと、酒場を出ようと席を立つ。其処へ新たな客が団体でやって来た。

酒場の客達は初見の相手に対しては警戒を見せる。ルティレイフィアは色々な意味ですっかり馴染みの顔になっていたが、傭兵、商人、一般人（滅多に居ないが）問わず、知らない顔にはしっかり目を通しておく。

安物の武具で身を固めた傭兵団らしき集団。腕は立ちそうだが、魔物の多いこの地域でやって行けるような装備とは思えない。かといって、それが分からない程の素人にも見えない。何ともアンバランスな雰囲気を纏った集団だった。

その集団のリーダーらしき男が酒場の中を一通り見渡す。何人か人相の悪い客がガン付けを試みたが、睨み返す男の眼光の鋭さに格上を感じて、皆視線を外した。

やがて男はカウンターの前に立つルティレイフィアに視線を向けると、一瞬ピタリと動きを止める。そうして真っ直ぐ彼女に向かって歩き出した。男の仲間もその後ろに続いた。

客達はヒソヒソと『また紅獅子の揉め事か？』とか『今日は族長がいるから決闘は無いだろう』等と囁き合い、族長と呼ばれる奥のテーブルの大男、『ブレブラバント・アッサム』は、何かあれば直ぐに動ける体勢を取りつつ成り行きを見守った。

「失礼。フレグンス第二王女、ルティレイフィア様とお見受けする」
「はて、わたしは此処では一介の傭兵に過ぎぬのでな」

ルティレイフィアは油断無く男を見詰めながら、惚けた返答で肯定する。すると男は片膝を付いて騎士の礼を取り、背後の集団も一斉にそれに倣う。その動作にはフレグンス騎士団を彷彿させる統制感が滲んでいた。

「御初に御眼に掛かります。当方、元サムズ駐在辺境騎士団クルストス支部アンバッス中隊所属、ヴィンス・フロッソと申します」
「サムズのクルストス支部……だと？」

サムズの動乱でクルストス支部では大勢の寝返りが出た為、かなりの犠牲が出たと聞いた。最終的にはサクヤの奇跡の力によって双方の被害が抑えられたが、寝返りによって五十名以上の騎士が討ち死にしている。

ヒュッと微かな風の音を立てて、ヴィンスの首筋に”シュベルコーの剣”の先が当てられた。何時剣が抜かれたのか、誰の目にも捉えられない程の神速に割って入る間も無かったブレブラバントは、紅獅子の実力に計り知れないモノを感じながら警告を発した。

「おい、街の中での揉め事は許さんぞ」

「……少し黙っていろブラバント、この男に訊かねばならない事がある」

「名を略すなっ　オレはブレブラバントだ！」

ブレブラバントの抗議を無視して、ルティレイフィアはヴィンスと名乗った男に質問をぶつけた。

「元騎士と言ったな？　何故騎士を辞めたのだ」

「離反を致しました」

ピクリと、ルティレイフィアの頬が引き攣り、シュベルコーの銘が入った剣を引き絞るように構えた。ルティレイフィアの突きは竜の鱗を砕くほどの威力があるのだ。このまま一突きにすれば、ヴィンスを一瞬で葬る事が出来る。

「何故、わたしの前に現われた？」

「一つは償いの為。もう一つは借りを返す為」

「借り？」

「サクヤ殿に助けられ、自らの過ちを見せ付けられました」

ヴィンスは騎士団を離反して放逐されてから、傭兵として自分の眼で見て来た事を話した。

エバンスでの出来事や、朔耶の活動とその功績についても語る。

其処にはルティレイフィアも知らなかった多くの事実が含まれていた。ちゃっかり酒場の主人も耳を傾けているが、そこは見逃す。

「我等一同、ルティレイフィア様の剣となりたく参上した次第であります」

ルティレイフィアは少し考え、剣を納めると、ヴィンスの口上に出て来た名前を思い起こした。『アンバッス中隊所属――』その騎士の名前には聞き覚えがあった。

「お前達を鍛えたのは、アンバッスという騎士か？」

「ハッ　全員が隊長に鍛えられております」

「いいだろう。叩上げの元騎士の力、見せて貰おう」

「ハッ　存分に御使い下さい」

ヴィンス傭兵騎士団は、ササの街の傭兵酒場でルティレイフィアの配下に加えられたのだった。

78話：アーサリム

キトが制圧されてから七日目、王都の下街である一般区に”銀月の牙”パーシバル傭兵団の馬車が到着した。

朔耶の滞在中に彼等が尋ねて来た場合は工房へ案内するよう、予め王都の衛兵達に話が通されていたので、ブラット達は衛兵に案内されて開放区にある朔耶の工房までやって来た。

「団長、ツヅキはここに住んでるんですかねー？」

「サクヤ部隊の本部とか」

「そんな訳はないだろう。しかし、サクヤ式か……やはりサクヤ部隊とサクヤ式には、何か関連があったのか？」

工房で作業をしていた朔耶は、衛兵からパーシバル傭兵団の来訪を告げられると、作業の手を止めて彼等を迎えに外へ出た。

「やほーブラットさん、元気だった？」

「それなりにな。……ここは、サクヤ式の工房か？」

「うん、今ランプの部品作ってたとこ。報酬の残りは直ぐ用意するから、中でお茶でもどうぞ～」

朔耶は今日も朝から此方（オルドリア）へと転移して来た後、一人で工房に籠もっていた。工房の中はゴツイのが二十人程度入っても手狭になる事は無い。二十人分のお茶を用意した朔耶は、工房でブラット達を待たせて報酬の金貨を取りに城まで飛んだ。

「おっはよーレイス。ブラットさん達が来たから、例の報酬の金貨、頂戴」
「ああ……おはよう御座います。　例の彼等ですか……ええーと、フレイ」
「はい。　どうぞサクヤ様、重いですよ？」
「うおっ　重！　……それはそうと、なんかレイス疲れてない？」

ズッシリと重い金貨の詰まった袋を、どっこらせーと気合で担いだ朔耶はレイスからお疲れ気味な雰囲気を感じ取って訊ねた。
キトの統治に派遣する人事の選定や未開地鉱山の調査に同行させる人材の調整など、ここ暫らく激務に忙殺されているようだ。心なしか頬が痩けているように見える。フレイはとても元気だったが。

「フレイはなんかテカテカしてるね」
「はいっ　サクヤ様の湯浴み道具、洗髪液や湯浴み用洗剤のお陰です！」

サラサラの赤毛に艶々の肌。満ち足りた表情のフレイ。何か察しなくてはいけない気がした朔耶は、それじゃあまたねとレイスの執務室を後にした。今度、父の栄養剤でも差し入れてあげようか等と考える朔耶だった。

「おっまたせー。　残りの報酬、金貨二百枚でーす」

おおーと、団員達がテーブルの上にどすんと置かれた金貨の袋に寄って来た。朔耶は負荷の掛かった肩と首を回しながら作業台に放

置してある作り掛けだった部品を一旦仕上げた。それを見たブラットが声を掛ける。

「そいつは、魔力石の加工品か？」

「そうだよー？」

「もしかして、サクヤ式ってのはお前たちが作ってたのか」

「うん？　あたし達っていうか、あたしが作ったのが殆どかなー」

元々コッチの活動がメインだという朔耶に、ブラットは怪訝な表情を浮かべて考え込んだ。

ブラットの認識を新たに更新するならば、朔耶は――『フレグンスの特殊精鋭精霊術部隊サクヤのメンバーで素人のエリート学生、名はツヅキ、王室所縁の身でありながら自身の持つ特異能力故に、危険な任務を単独で任されるサクヤ式の考案者』となる。

流石に色々と無理が出て来た人物像に違和感を感じたブラットは、聞いても無駄と思いつつも朔耶に『ツヅキという一人の少女』の人物像について、自分の把握している認識を語って確かめた。一瞬の揺らぎも見逃さないよう、その黒い瞳を見詰めながら。

朔耶は爆笑した。

テーブルの端に突っ伏して自らが長く懐いてきた勘違いにヘコんでいるブラットを余所に、朔耶は団員達から未開地について話を聞きだしていた。

未開地アーサリムには魔物が多く出没する。アーサリムの入り口

となる街、『ササ』の近辺で見る事は滅多に無いが、アーサリム地方の中部に広がる『ポルモーン渓谷』では野良魔獣と人狩りが放った魔物がウヨウヨしている。

ポルモーン渓谷には、クルストス規模の小さな街を中心に村や集落が点在しており、危険な地域でありながら其処に住む人々は、先祖代々暮らしてきた土地を離れようとはしないのだそうだ。

ちなみに、『魔獣』とは普通の動物が何らかの原因によって怪物に変貌したモノで、大抵は凶暴だが偶に大人しいモノも居る。『魔物』は元から怪物として在ったとしか思えないような異形の生物を指す。

中には魔術を使う魔物も確認されており、知性を持つ分、魔獣より厄介な存在だ。魔物や魔獣を討伐すると稀に『魔力の結晶』が拾えるので、腕に覚えのある者が一攫千金を狙って討伐に赴いたりする事もあるらしい。

「魔力の結晶？」

「ああ、希少性なら精霊石とどっこいの高値で売れる石さ」

どのような過程で魔物の体内に精製されるのかは知られていないが、純粋な魔力の塊りなので魔術の触媒に使っても魔力石のように力の方向性が乱れる事も無く、触媒として非常に相性が良いので、かなりの高値で直ぐに買い手が付く。

ただし、魔物の討伐には相当な危険を伴う上に、苦労して討伐を成し遂げた所で必ずしも結晶が手に入る訳でも無く、安全を考慮して大所帯で行けば確実に赤字。少数精鋭でも儲かるかどうか微妙なので、アーサリム地方は傭兵団にもあまり人気が無い。

「ふーん。それじゃあ、結晶狙いで魔物の討伐とかやってる人達って……」
「ああいう連中はそれこそ化け物みたいな奴等だよ」
「まあ、ツヅキ程じゃないけどな」
「ちょっ！　なにソレ、失敬な！」

工房内に笑い声が響く。団員達とそんな話を続けながら、朔耶は少し突っ込んだ質問を投げ掛けてみた。近く、三国から未開地へ出兵する動きがある事を話し、ポルモーン渓谷より更に奥には何があるのかを問う。

「ポルモーンより奥になると、スンカ山の麓にアーレクラワって街があるな」
「あの辺りはやべぇ、特にスンカ山は魔物と魔獣の巣窟だからな」
「ああ、あの街もよく持ち堪えてるもんだよ」

ポルモーン渓谷を抜けた先には『スンカ山』という大きな山があり、その麓に『アーレクラワ』という街があるが、その一帯はスンカ山から湧いてくる魔物や魔獣が跋扈しており、危険度はポルモーン渓谷の比ではないそうだ。

スンカ山は、キトの地下施設の書類に記されていた精霊石鉱山である。朔耶は鉱山の事は伏せつつ、アーレクラワの街とスンカ山についてもう少し詳しく聞き出そうと試みたが、復活したブラットが話の輪に入って来て待ったを掛ける。

「情報は俺達にとっても商売道具だからな、これ以上はタダで教える訳にはいかないぞ？」
「ぶー、ブラットさんのケチー」

「団長のケチー」
「おいコラっ　お前ら懐柔されてんじゃない！　むざむざ飯の種を棄てる奴があるか」

どうやら団員達は破格の報酬を得た事で随分と口が軽くなっているようだった。

「ったく……、これもツヅキの能力（ちから）なのか？」
「なによそれ？」

結局、それ以上の目ぼしい情報は引き出せなかったが、朔耶もキト制圧の話を聞かせたりして適当な時間を過ごした。その後、パーシバル傭兵団は一般区で宿を取ると言って朔耶の工房を後にした。

ブラット達を見送った朔耶は、彼等から得た情報を昼食がてら知らせておこうと城に向かう。今日の昼食はレティレスティアに御呼ばれしているのだ。

「あ、アルサレナさん」
「まあサクヤ。　窓から出入りするなんて……クスッ」

何時ものようにテラスの窓から廊下に入った所でアルサレナと鉢合わせてしまい、てっきり『はしたない』等と言って叱られるかと身構えていた朔耶は『クスッ……ってなにー！』と逆にうろたえた。

「私も昔よくやっていたのですよ。尤も、一階か二階の窓からですが」

「さいですか……」

丁度いいやと朔耶はアルサレナに未開地アーサリムについて得た情報を報告する。アルサレナも帰国したルティレイフィアからよく話を聞いていたので、ポルモーン渓谷やその奥の危険地帯の事は知っていた。

「精霊石の鉱山であるスンカ山の攻略には、アーレクラワに兵を敷ける事が前提になりますね」

「でも魔物の巣窟って言ってましたよ？　採掘なんて出来るのかなぁ」

アルサレナは魔族組織の本拠地がスンカ山付近だという事が分かっているので、何か魔物除けのような手段があるのだろうと推測していた。彼等の資金源はキトの収益だけでなく、鉱山から採れる精霊石だと見ている。

「人狩りの組織が魔物を使っているという事は、魔物を使役するような方法があるのでしょう」

「……それって、人狩り組織も闇業者と同じで魔族組織と繋がりがあるって事ですよね？」

「そう考えた方が自然ですね」

何れにしても、アーサリムに兵を送るならば、魔物対策として相応の装備や慣れない土地故に案内人が必要になるとアルサレナは溜め息を吐いた。優秀な騎士や必要な装備は直ぐに揃える事も出来るが、土地に詳しい案内人の確保は難しい。

ルティレイフィアを呼び戻して案内人も兼ねながら、派遣する騎士団の指揮を執らせようかという案も挙がっているという。しかし、

娘（ルティレイフィア）はそれに応じないだろうとアルサレナは読んでいた。

「もしかして、ルティって頑固者？」

「ええ、頑固ですとも。そもそもあの子が未開地を飛び回っているのは、私やゼルへの当て付けのようなモノですからね」

『父上母上が王国を維持する為に動けぬと言うなら、わたしが王族たる在り方を知らしめるべく民の為に剣を振るいましょう』

そう言って王都を飛び出したルティレイフィアは、お忍びで領内各地を旅しては彼方此方で盗賊団などの犯罪組織を潰して回ったりしている内に未開地へ踏み入り、その地に住む人々の窮状を見て少しでも彼等に安全な暮らしをと奮闘を始めて今に至っている。

何度かルティレイフィアからアーサリムをフレグンス領に組み入れる提案がなされた事もあったが、得るモノも無く、出資が増えるだけだという理由から聞き入れられる事は無かった。

ルティレイフィアも其処には理解を示していたが、納得はしていない様子だったという。今更、鉱山が見つかったから領土に組み入れるので指揮を執れと言われて素直に頷く娘ではないと、母親（アルサレナ）は語った。

「他にも理由はあるのですけどね。まったく、あの子の身勝手さはジャバールの次男に唆（そそのか）されたモノと思っていますよ」

「あははは……」

アルサレナの愚痴に付き合いつつ、朔耶はポムッと思いついた。腕のいい案内役に心当たりがある。それも今、物凄く身近な場所に居る。朔耶はアルサレナに、彼等（ブラット）の事を話した。

「精鋭の傭兵団、ですか」
「うん、信頼出来る人達ですよ。　団長はエロイ人だけど」
本人が聞けば両手と膝を付いて項垂れそうな紹介をする朔耶だった。

「まずは、お前たちの装備からどうにかしなくてはならんな」
「申し訳ありません……」
ササの街の露天商が集まる広場にて、頭の後ろで結んだ赤み掛かった金髪を揺らして颯爽と歩く『紅獅子』の異名で知られる美貌の傭兵剣士の後ろを、若干覇気の無い様子で俯き加減にゾロゾロと付いて歩く体格の良い男達が八人。

ルティレイフィアの配下となったヴィンス達だったが、装備の貧弱さも含む諸問題でポルモーン渓谷方面まではとても連れて行けないと、武具を整える為にやって来たのだ。

ここ数日、ササの街周辺を回って魔獣との戦闘を経験したヴィンス達は、その苛烈な戦いに疲弊しており、装備も既にボロボロで破棄寸前という有り様である。仕えるべき主に面倒を掛けてばかりという醜態に、ちょっと落ち込み気味なヴィンス達だった。

馬車を改造した簡易店舗の武具屋で、キャリゴル以下だがそれなりに良いモノを一人当たり数点揃えさせる。剣にせよ鎧にせよ、こ

の地でキャリゴル以下を使うなら良い物でも予備を含めて最低三セットは必要になる。

装備一式を三セット八人分ともなれば、在庫も開けての大放出で武具屋にとっては大売り上げになるのだが、この辺境も辺境である未開地の街でそれ程の資金を持ち歩けるような者が居るのかと、武具屋の店主は懐疑的な視線をこの客人集団に向けた。

「うん？　代金の心配をしているのか？　それなら心配するな」

ルティレイフィアは商人のこういった対応にも慣れたモノで、懐の袋から一粒の鉱石を取り出して店主に見せる。

「それは……　！っ　魔力の結晶！」

「此れを代金として渡そう、換金は其方でやって貰えるか？　十分な値段になると思うが」

「も、勿論でさぁ！　ウチの一番マシな武具を全部出してもお釣りが来るってモンですぜっ」

魔力の結晶に目の色を変えた武具屋の店主は、馬車の奥に仕舞ってあった商品を片っ端からカウンターに並べ、ヴィンス達はそれを受け取って装備を整えていく。予備はオマケで付けてくれたベルト付きの旅袋に入れて担ぐ事になる。

「しかし、宜しかったのですか？　あのような高価な物を」

「魔力の結晶の事か？　アレならまだ幾つか手元にあるからな、気にするな」

ルティレイフィアの返答に驚くヴィンス。魔力の結晶が魔物や魔

獣の討伐によって採取される事は多少なりとも知っている。一つ手に入れるだけでも相当数の討伐をこなさなくてはならないと謂われる魔力の結晶を、彼女はまだ幾つも持っているという。

ヴィンス達の表情から彼等の心情を読み取ったルティレイフィアは、少し笑みをこぼしながら呆れてみせた。

「お前たち、わたしを侮っているな？　これでも単独でアーサリムを旅して来た身だぞ？」

ルティレイフィアが兵を募るのは主にアーレクラワまで遠征する場合や、ポルモーン渓谷に点在する村々の警備を依頼する場合等で、普段は大抵一人で行動している。

それだけの実力を備えており、ルティレイフィア自身、一人の方が動き易いと思っていた。

「わたしの剣になりたいのなら、その程度の実力は身につけて貰うぞ」

「ハッ　精進致します！」

ヴィンス達を引き連れて今夜の宿を取りに街の中心部に来たルティレイフィアは、そこでブレブラバントの率いる街の巡回兵と鉢合わせた。あからさまに嫌な顔をするブレブラバントをヴィンスが睨み付けた事で、双方の間に不穏な空気が漂う。

「意外に血の気の多い奴だな、わたし達の敵は彼等ではないぞ？」

「ハッ　……申し訳ありません」

苦笑しながら諭すルティレイフィアに、恐縮するヴィンス。そのやり取りを見たブレブラバントが鼻で笑った。

「ふっ　随分と青いのを連れているな、紅獅子の国は人手不足なのか？」

「お前も族長の自覚があるなら、無闇に挑発を向けるモノではないぞ？　ブラ」

「名を略すな！　オレはブレブラバントだっ　つか、ブラってなんだ！　変な略し方するな！」

彼等の部族では名がその者を現すとし、バランス良く長く、難しい名前ほど立派であるとされている。長くて難しい名前を呼ばれる事は、それがそのまま尊称となり、名前が略されるのは半人前扱いに当るのだ。

ちなみにルティレイフィアはその事を分かっていて略している。ブレブラバントの実父であった今は亡き前族長の、凄まじい蛮族戦士ぶりを知っているので、彼に比べれば息子のブレブラバントは図体は兎も角、まだまだ未熟と捉えていた。

肩を怒らせてノシノシ巡回路を歩いて行くブレブラバントの後を、カラフルな部族衣装である戦衣を纏った巡回兵が笑いを堪えて肩を震わせながら付いて行く。それを見送ったルティレイフィアは、ヴィンス達に向き直ると、真面目な表情になって忠告した。

「いいか、ここは彼等の『国』だ。それを忘れるな」

ササは規模からして小さな街だが、ここは旅人の拠点として街になったに過ぎない。街周辺の土地には、特定の部族だけが集まった集落が幾つも存在する。それら多くの部族を一つに纏め上げている

のが、ブレブラバントが族長をしている部族である。

「わたし達の祖国から見れば蛮族でも、彼等はこの土地を治める謂わば王族のような立場にある。それなりの敬意は持て」

未開地を知らないヴィンス達に少しずつ此方の常識を教育していくルティレイフィア。彼女はササのような安定した街をポルモーンやその先のアーレクラワにも築かせ、アーサリム地方に祖国のような列強国と同規模の国を建たせようと目論んでいた。

嘗てはフレグンスの領土に組み込む事で、この地域の安定を図ろうと父王(カイゼル)達に提案をした事もあったが、アーサリムに住む人々の事を知ってゆくに従い『ここは彼等の土地である』との認識を深め、彼らが力を合わせて国家を営む事を望むようになった。

そんなルティレイフィアの元に、王都(フレグンス)からアーサリムへ向けての出兵の報が届いたのは、この日から五日後の事だった。

78話：アーサリム（後書き）

ゼルはアルサレナがプライベートでカイゼルを呼ぶ時の愛称です。

79話：ササの部族会議

放課後、冬休みを前に浮き立つクラスメイト達の姿をボンヤリと眺めていた朔耶は、藍香に声を掛けられて振り向いた。

「朔ちゃん、冬休みの予定どうする？」

「冬休みかー……」

パーシバル傭兵団が王都に訪ねて来た翌日も工房で部品作りに勤しみ、城でレティレスティアと昼食を共にし、キトの統治と精霊石鉱山の事で忙しい官僚達を尻目に静かな時間を過ごした朔耶は、此方の世界に戻って来た後、改めて未開地の事を考えていた。

『全ての列強国に奴隷制禁止令の発令を実現』という自ら起こした行動が、キトの制圧作戦から更に、アーサリムへの出兵という事態にまで発展した事を、割と重く受け止めているのだ。

事の切っ掛けが自分にあるだけに、朔耶はこの平和な時間の中で、クラスメイト達のように浮かれる気分にはなれなかった。

「もう来週末には休みに入るしさ、今から何処に行くか決めとかないと！」

「何処か行くのは決定事項かいっ　……んー、でもあたし用事があるかも」

「朔耶ちゃん……例のアレ？」

この前の昼休みに少し話した『オルドリア』に関係する事なのかを控えめに問う実穂に、朔耶は頷いて肯定した。詳細は話せないが、少々問題が発生している事を伝える。

「まあ、あたしが悩んでどうこう出来る問題でもないんだけどねー」
「朔ちゃん、相談出来る所まではあたし等にも相談してよ？」
「わたし達は朔耶ちゃんの味方だからね？」
「藍……、実穂……。うん、ありがと」

教室の端で、何時ぞやの昼休み時のように三人で手を重ね合って見詰め合う朔耶達だったが、浮き立っているクラスメイト達も皆似た様な事をやっていたので、今回は特に注目を浴びる事はなかった。

兄と弟、それに拓朗にも相談した朔耶は、皆から揃って『気にするな』と言われている。其々の国の方針なのだから、朔耶が動いた事で偶々色々と見つかったモノの中に鉱山の情報があったというだけの事。

例えそれで三国が揉めたとしても、それは三国の問題であって朔耶が気にする事ではない、と。

「大体、魔族の本拠地ってのが見つかってなきゃ、もっと酷い事になってたかもしれないんだろ？」
「鉱山の権利を手に入れる決定を下したのは各国のトップだからな、国ってのは利益を求めて揉めるモンなんだよ」
「朔耶が動いた事でキトと魔族の関係が明るみになった訳だ、寧ろいい方向に進んでるじゃないか」
「そうなのかなぁ」

『満場一致で気にするな』と言う皆の言葉を受け入れ、朔耶は気持ちを切り替える事にした。

「まあ、俺が前に言った『人々を導く女神にもなれれば、世界を破滅させる悪魔にもなれる』ってのが印象に残ってたから、そこまで気に病んだのかもな」

「なんだ、お兄ちゃんのせいか」

「ちょっ！　切り替え早っ」

都築家の居間で、コタツで向かい合ってミカンを食べながらオルドリアの今後について話し合う朔耶達。未開地の魔物について話題が及ぶと、拓朗が『遂に武器を開発する時が来た！』と拳を振り上げて力説する。　コタツに入ったままで。

「武器ねぇ」

「要は、特定の人間にしか使えないシステムにすれば良いんだよ」

武器の動力部分を分離、支給制にして武器（ぶき）だけ手に入れても使えない仕様にした上で、特定の集団にだけ持たせるようにすれば、武器の拡散や犯罪利用は防げる筈だと拓朗は主張した。

実は以前から『武器開発の解禁』を狙って考えていた理屈である。

『兵器開発』では無い所に自重の跡が見られた。

「『精鋭』で通るプロの傭兵がヤバイって言うくらい危ない所なんだろ？」

「防具より武器の方が作り易いからなぁ。味方の生存率を上げるって意味でならいいかもな」

今回は弟の孝文も拓朗の意見には肯定的だった。本当は危険な事

には関わるなと言いたい弟だったが、どうせ聞きゃしないのだからと、少しでも安全を図れるようにとの考えだ。朔耶の周囲の人間を護る事で、朔耶が傷つかない様にするという打算もある。

「でも、どんなモノ作る気なの？」

「最初は銃にしようと思ってたんだけど、ちゃんと使える武器で生産性とか使用制限を考えるなら近接武器の方がいいかなって」

朔耶からキト制圧の話を聞いた拓朗は、魔術士の数と力を考慮して前衛の壁役に攻撃力を持たせた方が相性も良いと考えた。

その場合、小回りが利いて混乱した状況でも同士討ちなどの事故を減らせるモノが望ましい。以前考案していた圧縮反発力によるレールガンでは大型過ぎて持ち運びも使い勝手も悪いのだ。

「ＥＢ（エレメントブレード）は瞬間的な攻撃力が無いから牽制や鎮圧用に使うとして、前に朔耶が作ったって言う篭手を参考にしようと思う」

「アンバッスさんの拳骨かぁ」

そのネーミングはどうなんだ？　と、居間が微妙な沈黙に包まれた。空気を変えるように兄が話題を振る。

「そういや最近、親父も工場の仕事が終わった後で何かやってるな」

「ああ、なんか得たいの知れないモノ作ってるみたいだ」

「お父さんが？　へぇ～」

「小父さん、なに作ってるんだろうな？」

居間のコタツ会議は籠のミカンが無くなるまで続くのだった。

「来週から冬休みか……」

すっかり冷え込むようになったこの時期、薄暗い早朝から霜が降りる庭に出た朔耶は、とりあえず王都を目指して転移した。弟と拓朗による武器の開発はまだ始まったばかりなので、今日はレイスへのお土産以外は手ぶらだ。

王都からアーサリムへ向けての出兵がなされて二日目。工房にやって来た朔耶は、衛兵から『ティルファより屋形船完成の報が届いている』と聞いて城に急いだ。

今日は屋形船用の備品を持って事業を引継いだ若い官僚と共に、ティルファへ船の引き取りに向かおうと考えていたのだが――

「え、使えない？」

「ええ、アーサリムに兵と物資を運ぶので、暫らくは……」

今現在、二頭立ての竜籠が先発隊としてサムズ経由でアーサリムに向かっている。残りの四頭も二頭立て竜籠にて物資と兵の輸送にフル稼働で使われる為、カースティアへの屋形船運搬は状況が落ち着くまで延期になった。

「そっかぁ……それじゃあ仕方ないよね」

遠方への出兵で城中がピリピリとした緊張感と、忙しそうな空気に包まれている。申し訳無さそうにしている引継ぎの若い官僚を労った朔耶は、単独でティルファに飛んで暫らく船を運べない事をド

マックに伝えに行く事にした。

「……レイスにコレだけ渡して行こっと」

宮廷魔術士長の執務室にやって来た朔耶は、扉をノックしてノックして、もう一度ノックして待つこと暫らく。こそっと顔を出したフレイが入室を促してから執務室に入った。何となくフレイから拗ねたような気配を感じるが、朔耶は気にしない。

「おはよーレイス」

「やあ……おはよう御座います」

なんだか『助かった』というような表情(かお)をしているレイスを、見なかった事にした朔耶はポシェットから荷物を取り出す。

「今日はレイスにお土産もってきたよ」

「ほう……なんでしょう？」

此方の世界には無い色鮮やかなラベルの付いた小瓶が執務机の上に並べられると、疲れた様子だったレイスが興味を引かれる表情を見せた。朔耶は服用上の注意を教えながらレイスに栄養ドリンクをプレゼントするのだった。そして徐にフレイを振り返る。

「いや～、まさかフレイにこれをいう事になるとは」

「な、なんでしょう？」

ぽんぽんと肩に手を置き、朔耶は以前レイスに投げ掛けた台詞をフレイに贈った。

「程々にしておかないと、レイスが倒れちゃうよ？」

「はうあう～」

フレイに自重を促して王都を飛び立った朔耶は、昼前にはティルファに到着。そのままドマックの造船所を訪ねると、船の引き取りが暫らく先になる事を説明する。

「未開地か、うちでも似たような状況じゃわい」

ティルファの竜は二頭しか居ないので、二頭立て用の竜籠が予備を含めて二台しかない。その竜籠も最近はキトとの往復によく使われている。今の段階ではまだ、ティルファが直接アーサリムに関わる様子は無さそうだ。

だが、いづれ何らかの形で関わって行く事になるだろうと、ドマックは髭を掻きながら中央研究塔に遠い目を向けた。ドマックと屋形船の中で軽くお茶など飲みながら船の出来栄えを確かめた朔耶は、保管と管理を頼んで今度は帝国へと翼を向けた。

夕方頃には帝都上空に到着し、そのまま城の竜籠発着場に降り立った朔耶は、普段と様子の違う発着場の雰囲気を訝しんだ。

作業をしている人が多い割りに、何故だか閑散としている。そうして、やけに視界が広く感じるのは、何時もなら発着場の壁際に沢

山並んでいる竜籠が殆ど見当たらないからだと気付いた。

「ねえ、竜籠は？」

「ハッ　予定していた竜籠は昼までに全て出発済みであります！」

近くにいた衛兵に聞くとそんな答えがキビキビ返ってきた。朔耶は以前の経験からバルティアに自分が来訪しても衛兵たちが大騒ぎしないようにと取り計らって貰っていたので、多少質問と返答にズレはあったもののスムーズ対話が交された。

帝国でもキトとの往復とアーサリム地方への兵や物資の輸送に竜籠はフル稼働状態。朔耶は『帝国も出兵が決まったのかー』と、微妙な心境を表情に表す。夕闇の迫る帝国領の山脈を一度振り返った朔耶は、城内から中庭工房へと移動した。

「バ～ル～」

「おおっ　……サクヤではないか」

中庭工房で随分と形になってきたサクヤ式自動四輪を弄っているバルティアに声を掛けた朔耶は、その反応に何時と比べて遠慮が混じっている事を感じ取った。朔耶は何となく『らしくない』と思ってしまう。

「何よ、元気ないわね」

「む？　そうか？　余は何時も通りのつもりだが……」

「何時もならここらで、がばーっと抱き締めに来たりするじゃない」

「余はそこまでがっついては無かったと思うが、……サクヤがそう望むのであれば！」

がばーっと抱き締めに来たバルティアをひらりと躱して、自動四輪の出来栄えを確かめる朔耶。前のめりにすっ転ぶ漢(おとこ)バルティア。朔耶は『お約束、お約束』等と呟きながら、古い映画に出て来るクラシックカーの様なデザインに関心を示す。

「では、これもお約束か？」

瞬間復活したバルティアが背後から朔耶を抱き締める。しっかりと両腕を回して捕まえると、よく手入れされた滑らかな黒髪に顔を埋めるようにして首筋の体温を唇で感じ取り、同時に電撃に備えて身構えた。

「……」

「……？」

電撃なり肘打ちなりが来ると構えていたバルティアは、朔耶から反応が無い事を訝しむ。思わず不安になって手を離すと、その細い肩を掴んで振り向かせた。じっと朔耶の顔を覗き込もうとして――

「ほらね？　何時もの反応が無いと不安になるでしょ？」

カアアァン

身構えて無い所に不意打ちで時間差の電撃が来た。

「……この扱いは、何気に酷くは無いか？」

「お約束、お約束」

帝都城中庭の訓練場に敷いた走行コースを、サクヤ式自動四輪に乗って軽くドライブする。

出せる速度は自転車の立ち漕ぎ程度だが、それでも一般の馬車並み。パワーに特化させてある四石筒魔力石モーターエンジンは、朔耶とバルティアを乗せた自動四輪の車体を土のコース上でもしっかりとした足回りで走らせていた。

「やっぱりサスペンションが無いと振動が酷いね、これじゃあ直ぐにガタが来そう」

「バネは取り寄せている最中なのでな、工房に届き次第組み込むつもりだ」

夜の訓練場コースをぐるりと回り、中庭工房の前に自動四輪を停めたバルティアは、ハンドルを握ってコースの先を見詰めたまま、何かを決意するように言葉を紡いだ。

「……フレグンスと衝突するような事にはならんだろう」

「うん？」

帝国の懐事情は相変わらず良いとは言えず、アーサリムの鉱山は一部でも確保したい。その為、今回バルティアが決定した出兵はそこそこ大規模なモノとなっている。例え飛び地の領土になっても、精霊石鉱山の確保を絶対条件にしてあるという。

バルティアの立場からすれば、朔耶は異世界出身のフレグンス人である。

アーサリムと領土を接するフレグンスが動いている所へ事前交渉も通告も無く鉱山確保に介入するのだから、最初に同盟を持ち掛けた側としては、裏切り行為のような後ろめたさがあるのだ。この辺

り、まだ皇帝として政(まつりごと)を担うには若さが目立つ。
国益を考える上で、外交の誠実さが必ずしも良い結果ばかりを齎せる訳ではない。

「なーんだ、そんなコト気にしてたのかぁ」
「そんな事と言える程、軽い問題では無いと思うのだが……」
「大丈夫だよ、カイゼルさん達も帝国とは半々で採掘になるだろうって考えてたから。それに――」

自動四輪を降りながら、朔耶は笑って言った。
「帝国(コッチ)に居る時のあたしは只の朔耶だよ」

この前のように大使として来る時は親書でも用意するよと、冗談めかしたウインクで優しい笑みを向ける朔耶。ふわりと舞う艶のある黒髪に、バルティアは堪らなくなった。もう一度捕まえようと懲りずに一歩踏み出した所で、密偵が報告にやって来た。

「……アーサリムの報告か、聞こう」
「ハッ　しかし……」

フレグンス高官の存在を気にする密偵に、朔耶は席を外そうとするが、バルティアが引き止めた。

「構わぬ、話せ」
「ハッ　では――」

密偵の報告はアーサリムのササに滞在しているフレグンス第二王女ルティレイフィアに、不穏な動きが見られるとの内容だった。

ササの街に建てられた大集会場。大型テントを補強したような造りだが、五十人近く収容できる部族会議の場でもある。ササの街周辺の土地一帯には、約八十の部族が散らばって各集落を形成している。

その多くは四人～八人の家族単位で一つの部族を名乗っている場合も多く、数ある部族の中でも多数勢力として大勢の部族民を持つ部族が二十程。それら多種多様な部族を束ねている部族が、ブレブラバントを族長に持つ『ブブ族』である。

前族長でブレブラバントの父、『バンガラバンダ・アッサム』が、それまで互いに多少のイザコザを持ちつつ吸収、分離、合併を繰り返しながら共存していたアーサリム西部一帯の部族を纏め上げたのだ。

「やはり余所者はこの地に入れぬ方が良かったのだ！」
「何を今更……。そんな話は五十年も前に語り尽くされている」
「左様。今はこの問題を如何するかを話し合う時じゃ」

彼等は大きな問題が持ち上がると、ササの大集会場に三十の族長が集まって部族会議を開く。発言権を持つのはブブ族の族長を大族長として他九部族の族長達。腰嵩程の円柱に布袋を乗せた椅子が並び、族長達は其処に胡坐で座る。

残りのうちの十部族はそれぞれの部族の後ろ盾として野次係り。

更に残りの十部族は会議で決まった事を自分の部族や各関係部族（家族単位で分離して”部族”を名乗っている相手）に伝える為に参加を許されている。彼等は地べたに布を敷いて座っている。

「大体その女は、その国の王の娘だと聞くぞ」
「だから何じゃ？　我等が話し合わねばならない事は、その者の齎した知らせに対すべき方法じゃ」
「侵略者の言う事など信用できんと言うておるのだ！」
「止めんかっ！　大勢の兵が向かって来ておるのは事実だ！　もはや信用するしないの話ではない！」

会議は紛糾していた。円陣を描くように座る彼等の中心に、ブブ族の族長ブレブラバントが座り。向かい合う形で客人として呼ばれているルティレイフィアが立っている。

ルティレイフィアは祖国からアーサリムへの出兵を聞いた後、直ぐにフレグンス領内で情報を集め、アーサリム奥地の鉱山を目的に帝国も乗り出してくる事を突き止めた。

その土地の攻略や制圧を目的に派兵される王国騎士団は精鋭ぞろいだ。魔獣や魔物相手には慣れない分、多少梃子摺るであろうが、対人戦闘においてアーサリムの部族戦士では先ず、太刀打ち出来ない。

ササの街に戻ったルティレイフィアはブレブラバントにその趣を伝えると、代表部族を集めてアーサリムの国家を主張する事で、フレグンスや帝国と国交を開き、鉱山の採掘権を挙げて同盟交渉をするよう勧めた。

上手くすれば、フレグンスと帝国の戦力を借りてポルモーンから

アーレクラワ、スンカ山まで、アーサリム地方に棲む魔獣、魔物の類を一掃する事が出来ると考えた。しかし――

『彼等はまだ、国としての体裁を保てるまでは成熟していなかったか……』

部族会議の中で、各族長達は部族単位での視点でモノを見、考え、発言していた。部族の掟、部族の誇り、そういったモノを前面に出しての対応策は、その場限りの対処案。戦って追い返せば良いという意見が広まっていく。

「貴殿等に忠告しておくが、今回の出兵は斥候も兼ねた少数の先発隊だ。例え追い払えても、次は遠征軍本隊が来るぞ？」

先発隊と一度刃を交えてしまえば、次は討伐目的で編成された騎士団が派遣される。『制圧』ではなく『討伐』だ。

そうなれば、アーサリムが部族国家として建つ事は絶望的になる。フレグンスと帝国にそれぞれの領土として分割統治されるだろうと、ルティレイフィアは族長達に説いた。

「黙れ！　お主に発言は許可されておらん」

「じゃが、この者の言う事も一理あるぞ？」

「そもそも女が戦いに口出しするような国の戦士が、どれ程のモノだというのだ？」

「ふっ　掟だけでは国は立ち行かないぞ」

侮りの発言を口にした族長に、鋭い視線を籠めた笑みを向けながら諭すような口調で答えるルティレイフィア。それを挑発と取った族長が『我等を愚弄するか！』と円柱台から立ち上がる。

「各々方！　彼女はその国の王女である。客人として呼ばれているのだ、貴女も慎まれよ」

ブレブラバントが取り仕切ってルティレイフィアの忠告による紛糾は一旦収束したかのように見えた。だが、族長の一人が放った一言が会議の場に思わぬ波及を齎せる。

「王女が此方の手にあるなら、向こうは手出し出来ないのではないのか？」

族長達は皆、口では強気な発言をしていた者も含めて内心では不安に苛まれていた。北部からやってくる傭兵や商人達の持つ洗練された武器や防具、織物や陶器。立派な馬車など、自分達とは違う遥かに進んだ文明圏に住む人々。

そんな彼等が兵を率いてやって来る。ポルモーン方面で狩られた人々が北部へと連れ去られて行く姿を散々見てきているのだ。遂に自分達の番が来たのではないか？　そんな不安に押されるように対抗と交戦を口にしていた族長達は、安全策に飛びついた。

「そうだ！　その王女を捕らえて盾とすれば良いのだ！」

「バカな事を！　そんな事をすれば、怒り狂った連中に皆殺しにされるぞ！」

「だが、交渉は出来る筈だ！　我等に有利な交渉が出来るなら、或いは」

「うーむ……確かに時間稼ぎにはなる。相手は遠路遥々やって来るのだから、時間が経てば経つほど程オレ達が有利になるか？」

ルティレイフィアは頭を振る。陸路を延々何日も掛けての遠征な

らば兎も角、今は竜籠があるのだ。時間を掛ければ掛ける程戦力が整い、街を封鎖されて乾上らされてしまうだろう。
しかし、そんなルティレイフィアの説明も彼等には聞き入れる余裕も知識も無かった。

「貴女を王女として扱い、それなりの待遇は保障する」
「ブラバント……やはりお前は」
「紅獅子殿を拘束せよ、丁重にな」

ササの部族戦士達がルティレイフィアを拘束しようと動いたその時――

「うわっ　煙が！」
「何事だ！」

突然、大集会場に投げ込まれた香炉から煙が噴き出し、会場に充満して視界を覆う。混乱する場内に飛び込んで来たヴィンス傭兵騎士団は、同士討ちを恐れて右往左往している部族戦士達を蹴り倒してルティレイフィアの傍まで駆け寄った。

「ルティレイフィア様！　御無事でしたか」
「今のところはな」
「お手を失礼します」

そう言ってルティレイフィアの手を取ったヴィンスは、視界が利かない中、仲間の声の誘導に従って出口に向かう。

「出立準備は出来ております」
「そうか、ではポルモーン渓谷に向かう。覚悟を決めておけ」
「ハッ」

紅獅子と傭兵騎士団一行は混乱する大集会場脇から改造馬車で一気にササの街を脱出すると、危険地帯であるポルモーン渓谷方面へと出立した。

「こうなっては仕方が無い、少しでも双方の犠牲が僅かで済むよう精霊に祈ろう」

ようやく混乱の治まった大集会場では、迫り来る列強国の兵を迎撃すべく各族長達が其々の部族の中から部族戦士の精鋭を募り、同時にルティレイフィアの追跡隊も組織する。

「王女は此方側にいるのだ、精鋭の戦士達が侵略者共を迎え撃っている間に見つけ出せ！」

「ポルモーンの街にも使いの者を出そう。発見次第拘束してササに連行するように、くれぐれも丁重にだぞ」

興奮してか、大族長であるブレブラバントを差し置いて指示を出す好戦的な族長に鼻白み、それを諫める供の者に同情的な視線を向けながら、ブレブラバントは会議の前にルティレイフィアが言った方法が正しい気がしてならなかった。

「だが、もう動き出してしまった」

ブレブラバントは自分達の部族からも精鋭の戦士を募る為に、ブブ族の集落に向かってササの街を後にした。

８０話：大族長の選択

アーサリム地方に遠征するフレグンスの先発隊は、後続の物資を運ぶ竜籠を待ちながらエバンスで出発準備を整えていた。案内人役でもあるパーシバル傭兵団も、二頭立ての竜籠を丸々一台使用する。

竜籠三台で王国騎士団二十人、パーシバル傭兵団二十人、それに食糧などの物資を積み込み、アーサリムの入り口の街、ササを目指す予定だった。先ずはササに拠点を置いて逐次（ちくじ）兵と物資を送り込み、徐々に戦力を整えてから鉱山を目指す。

行く手を塞ぐであろう障害で問題となるのは魔獣や魔物の類である。他にも魔族組織の本拠地が鉱山付近にある以上、魔族の存在も脅威となる事が予想されていた。

今の時点で、アーサリムに住む地元部族が対フレグンスで戦いの準備を始めているなど、思いも寄らない事であった。フレグンスを始めとする北部の列強国にとって、アーサリム地方は未開地であり、そこを支配する『国』は存在しないのだ。

一方、帝国の遠征部隊もバーリ街道の第一中継地とバーリッカムの間にある中立地帯の宿場街に部隊を駐留させ、アーサリム地方までの中継地として竜を休ませていた。休憩が済み次第、ササの街に向けて出発する予定である。

四頭立ての大型貨物竜籠二台に物資を満載し、二頭立て竜籠四台に帝国騎士団三十人、魔術団二十人、密偵部隊十人、工兵や使用人達も含めて、総勢八十人の先行部隊。場合によっては直接鉱山まで飛んで陣地を築く事も視野に入れた編成だった。

ササの街を脱出したルティレイフィアとヴィンス傭兵騎士団一行は、ポルモーン渓谷の入り口に辿り着いていた。

「さて、此処からはお前達にとって初めての地となる訳だが、覚悟は出来ているな？」

「ハッ　我等一同、何処までもお供いたします」

ヴィンス達の返答にルティレイフィアは頷いて応える。

「よし、では行くぞ。先ずは比較的安全な場所にあるポルモーンの街を目指す。街に着いたら馬車を処分して直ぐに発つ」

ルティレイフィアは追っ手を振り切って暫らく身を隠す為に、ある場所を目指すとだけ説明して馬車を出発させた。この地を旅して数ある村落を回っている内に、身を隠して身体を休めるのに最適な場所を幾つか見つけてあるのだ。

「全員武器を構えて周囲の警戒を怠るな、馬車の速度は一定を保て、決して止まるなよ」

風と水に削られて出来た背の高い、自然の石柱が幾つも立ち並ぶ

迷宮のような渓谷を、傭兵団仕様の馬車が駆け抜けていく。ルティレイフィアも御者台から半身を乗り出し、周囲に危険が迫っていないか魔物の気配を警戒するのだった。

一晩帝都城に泊まった朔耶は昨夜、密偵の報告に聞いたルティレイフィアの事が気になり、未開地へ行って見る事にした。

オルドリア大陸北西部の端に位置している帝都クラティシカから、大陸南東部の端に位置するアーサリム地方まで飛んで行くには流石に距離があり過ぎるので、こういう時こそ裏技を使う時だと朔耶は一旦元の世界に戻った。

休日の自宅庭で、次に何処へ転移しようかと考えてブラットの御守りを思い出す。

「ブラットさん達、アーサリムに向かってたよね。近くに跳べる？」

ウム　ヤッテミヨウ

ブラットの御守りを追いかけて転移した朔耶は、ササに向けて移動中だった竜籠の近くに現われた。

「きゃあああああぁぁ」

そしていきなり墜落していく。高度六百メートル程の高さから約六メートル落下した所で魔力障壁を展開して空中静止、漆黒の翼を開いて竜籠の後を追う。竜籠からブラットが叫んで声を掛けた。

「ツヅキか！　何事かと思ったぞ！」
「あはは！　脅かしてごめーん、ちょっと失敗！」

三台の竜籠が三角形を描くように編隊を組んで飛行する中心に並び飛ぶ朔耶の姿に、騎士達や傭兵団員達はちょっとした大騒ぎになった。朔耶が飛行する姿をコレほど間近に見た者は、和平会談の日に襲撃された傭兵団以外では彼等が初めてだ。

但し、騒いでいるのは竜達がはしゃいで籠が揺れ捲り、空に慣れて無い者が悲鳴を上げているのが実状である。酔うからやめさせてくれという抗議と懇願に、朔耶は竜達に大人しく飛ぶようにと諭すのだった。

「めっ」
「ピ……」
「キュー……」

それから順調に飛行を続けて、昼頃にはサムズとクリューゲルを隔てる川を超えた先に、険しい岩山が連なるアーサリム地方が見え始めた。岩山の麓に細長く広がる森と、少し平地を開けて川が流れている。その間に、ササの街があった。

いきなり街の中に降りる訳にもいかないので、三台の竜籠は街道脇の開けた場所に着陸した。街道には他にも商隊らしき集団の馬車が数台、同じように脇に寄せられて停車している姿がチラホラと見られる。

未開地の街は意外に混んでいるのだろうかと、着陸前に竜籠に乗り込んでいた朔耶は籠を降りながら周囲を見渡した。

「なんだありゃ？」
「なんか封鎖してあるね」
「ここは何時もこうなのか？」
「いや、普段はもっとノンビリしてる。普通の田舎街みたいな所だぞ」

ササの街の入り口と思わしき場所には何故か木枠を組んだ物々しいバリケードのような壁が立てられていた。王都にある強化防壁の劣化版のような印象を受けるその壁の向こうから、此方の様子を窺っている人々の気配が読み取れる。

案内人であるパーシバル傭兵団の団員達が、普段とは違うササの様子に、何があったのかと近くの商人から話しを聞きに回っている。騎士団から数人の騎士がブラットと共に街のバリケードへと様子を見に近付いた。朔耶もちょこまか付いて行く。

一方、バリケードの内側。ササの街でフレグンス先発隊を迎撃する為に街から北部の商人達を追い出し、バリケードを築いて精鋭の戦士で固めていた地元部族の族長達は、竜を従えて空から現われた騎士達に怯えていた。

部族会議で紅獅子が忠告していた通りだったのだ。騎士達が装備している武具も、決して逆らってはイケないと言われている黒い馬車隊の護衛兵士達が身につけているような洗練されたモノである事は遠目にも理解出来た。

更に、彼等騎士達の中には人間の少女の姿をした、何か得体の知

れない存在が居る事を感じ取っていた。
部族の戦士達はその殆どが微弱ながら独自のスタイルで精霊術を使う交感能力を宿しているので、何となく、朔耶に高位の精霊という存在を感じられるのだ。

「我々はフレグンス王国の者だ！　この地を調査する為、ここに拠点を設けたい。街を開かれよ！」

先発隊騎士団隊長の口上は、各部族長達に事実上の降服勧告と受け止められた。ブレブラバントは考える。
ここで要求に従うならば、ブブ族は求心力を失い、これまで築き上げられて来た他部族間との繋がりも崩壊して、アーサリム西部の部族勢力も全て灰燼に帰してしまう。

偉大な父が築き上げたアーサリムの部族勢力を、受け継いだ息子である自分が潰えさせる訳にはいかない。勇猛さで信を得るブブ族の族長が、一戦も交えず退く等という選択は出来ないのだ。

ブレブラバントは覚悟を決めると、矢を放っての返答で攻撃の指示を出した。竜や得体の知れない存在は脅威だが、敵兵の数はそれ程多くは無い。勝てずとも引き分けくらいには持ち込める筈だと、愛用の鉄輪付き棍棒を握り締める。

「去れ！　我等の地を蹂躙せしめようとする侵略者め！」

その警告を合図に無数の矢が上空に向けて放たれた。地形的に直接射る事は出来ないので、落下地点を計算しての一斉射。二射三射と続けて射ち上げられた大量の矢がバリケードの前に居た騎士達に降り注ぐ。

行き成りの侵略者呼ばわりに困惑していた騎士達は、その威嚇先制に対応が遅れた。ザアっという雨の様な音を響かせて降って来る矢に身を低くして盾を構える。だがバリケードに近い場所でこの態勢を取るのは非常に危険な行為だ。

騎士達の予想通り、バリケードの一部が開いて部族衣装を纏った戦士達が突撃を狙っている。仲間の騎士や傭兵達はかなり後方にいるので援護は間に合いそうにない。

魔獣や魔物との戦闘を中心に考えていた騎士達にとって、これは想定外の攻撃だった。

「なっ！」

それはどちら側の人間による驚愕の叫びだったのか。降り注ぐ大量の矢が騎士達を飲み込もうとしたその時、突如発現したドーム状の光の壁が、矢を全て弾き返した。

更にタイミングを合わせて飛び出していた部族戦士達も、光の壁に阻まれて立ち往生している。低い体勢を取っていた騎士や剣で弾けるだけ弾こうと構えていたブラットが、思わず朔耶を振り返る。

「ねえ、なんか誤解があるんじゃないの？」

当の朔耶は、両手を軽く広げたポーズで魔法障壁のドームを維持しながら飄々と、双方に向かってそんな言葉を投げ掛けた。

『精霊の乙女』――朔耶はブレブラバント達ササに集う部族からそう呼ばれた。

フレグンスの騎士達と共に現われ、ブレブラバント達の放った矢を弾いて騎士達を護りはしたが、騎士達に反撃させる事も無く、部族戦士達に精霊の裁きを下す事も無く、双方話し合えという朔耶に、ブレブラバント達は公平な精霊の審判が示されたモノと受け取り、騎士達は王室特別査察官殿、もしくはフレグンスの戦女神殿に何か考えが御ありなのだろうと捉えた。

『また通り名が追加されたか！』などと内心で名前の数を数えている朔耶を間に挟んでの話し合いが持たれる事になり、部族代表のブレブラバントと、フレグンス代表の騎士団先発隊の隊長が、街のバリケード前に仮設されたテント内で向かい合う。

先発隊の隊長が、先ずは謂れの無い侵略者呼ばわりと、不躾な先制攻撃に対する謝罪と説明を求めた事に対し、ブレブラバントは咄嗟にルティレイフィアの示した策を使って反論した。

即ち、此処は我々の『領土』であり、他国の兵が無断で国内に入ろうとした事への当然の自衛であるという主張。

それを聞いた先発隊の騎士達は、未開地に多数の部族が暮らしている事は知っていたが、国家が形成されているとは初耳だと一様に顔を見合わせてざわめいた。同様に、部族側の族長達もブレブラバントの執った主張について囁きあう。

『あれは紅獅子の勧めた案では無いか？』

『もしや大族長はフレグンスと結託しているのではあるまいな……』

『しっ……　滅多な事を言うものではない』

『しかしな、何故今更あのような……』

ブレブラバントは族長達が反撥する事を予想しながらも、この交渉は自分達にとって最後のチャンスだと理解しており、アーサリムに国家が形成されている事をフレグンス側に認めさせようと、必死でルティレイフィアの示した策の概要を思い出す。

魔物や魔獣が跋扈していて国内の安全が確保しきれていないので明確な首都は決まっていないが、アーサリムは我々部族が集まって形成された国家であるとの主張。色々穴はあるが、建国間もない新国家であるとするならば何とか通じる内容だ。

先発隊の隊長は、それならば改めて国交を持った上で交渉をしたいと話し、魔族組織を追っている事も付け加える。もし、魔族組織がアーサリムの国に属してるならば、全面戦争になるとも付け加えた事で族長達がいきり立った。

「それはどういう意味か！」

「言葉通りである。貴殿等に魔族組織との繋がりがあると分かれば、我々は全力を持ってそれを征伐する」

族長達を始めブレブラバントも魔族組織については何となく見当が付いていた。決して逆らってはいけないと先代からも釘を刺されていた黒い馬車隊。ササの街が絶対中立を謳っているのは、彼等からの口添えもあっての事なのだ。

ササ近辺の集落からは人狩りをしないという取り決めによって同族同胞を護る。時折、資金も撒いて行くのでササを護る部族は餓える事も資金不足に苛まれる事も無い。その代わり、ポルモーン渓谷の周辺部族達は犠牲になっているが……。

『どうする……。打ち明けるべきか』

ブレブラバントは迷った。ここで打ち明けてフレグンスと手を組み、アーサリムを国家として建てて行く事が出来るのか、あの勇猛果敢な先代にさえも『逆らうな』と言わしめる魔族組織に、果たして対抗でき得るのか。

「大族長！　こやつ等の言う事に平伏すおつもりではあるまいな！」
「おい、やめんかっ　客人との会談中だぞ！」
「何が客人か！　大体、永きに亘って我々を支援してくれているヨーーー」

「黙れっ！」

ブレブラバントが一喝する。決して人前で口にしてはイケない名を口にしかけた族長を睨みつけ、大族長権限で他の族長達にも発言を禁じると、ブレブラバントは改めてフレグンス先発隊の隊長騎士と向かい合った。

国家の重鎮と呼ぶには余りにお粗末な醜態を晒した族長達に怒りと羞恥の念を懐きながらも、ブレブラバントは黒い馬車隊の事を話す決心をした。

子供の頃から気に入らなかったのだ。黒い馬車隊の彼等が人を道具のように扱う姿や、物を見るような眼の事が。

「貴方方の言う組織には心当たりがある。だが、危険な相手故、我等も長く手を出しあぐねている相手だ」

族長達がぎょっとした表情をブレブラバントに向ける。何を言い出すのだというような彼等の視線を無視して、ブレブラバントは更

に突っ込んだ内容を口にした。

「実の所、我々は先代、先々代も前からその連中との間に密約が交わされいるのだ」

「大族長！　それは……っ」

立ち上がって抗議しかけた族長にヴンッと唸らせた鉄輪付きの棍棒を向けて黙らせる。

「我々が国家を制定する上で最も厄介な存在がその連中であり、奴等を追い出せない限りこの国は安定しない」

北部の列強国を始めとする国々へ、アーサリム建国の報が出せなかった理由も其処にあると説明する。

そして、連中の排除に協力してくれるなら、スンカ山鉱山の採掘権を大幅に譲渡しても構わないという条件を出した。何れも、部族会議の前にルティレイフィアから個人的に示された策であった。

先発隊の隊長は、思い掛けず大きな話の展開に、流石に現場で判断をするには事と内容が重大すぎると返答を保留した。そこへ、それまで静かに座って話し合いを聞いていた朔耶が徐に告げる。

「フレグンスはアーサリム国家の魔族組織討伐に協力し、鉱山の採掘権を要求します」

「サ、サクヤ殿？」

「って、アルサレナさんからの伝言。　伝えたからね？」

朔耶は会談が始まった時からレティレスティアに交感を繋ぎ、彼女を介してアルサレナにリアルタイムで会談の様子を伝えていたのだ。

アルサレナは、アーサリムが国家を形成していると主張している話を聞いた時、それが娘の入れ知恵である事を直ぐに見抜いていた。以前から偶に帰国したルティレイフィアによく、アーサリムでの部族国家の実現の方策を聞かされていたのだから。

だが、それも良いと認めた。未開地を新たな領土として組み込むに際して、カイゼル王と宰相達も交えて話し合った結果、フレグンス一国でアーサリム地方を平定して治めるには、少々荷が重いという結論が出ていた。

アーサリム地方で国家が形成されて国交を結び、交易が出来るならその方が楽なのだ。更に鉱山の採掘権を独自に得られるとなれば、これはかなり美味しいのである。魔族組織の討伐と、魔獣や魔物の掃討に協力する事で、深い恩を売る事も出来る。

フレグンス側としては最善に近い交渉結果を得られた事になるのだが、納得出来ないのは各部族の族長達だった。幾ら大族長が決めた事とはいえ、自分達に相談も無く、余りに勝手に事を進め過ぎでは無いかと不満があがる。

この危険なアーサリムの地で、今まで高位部族としての地位で平穏に暮らせて来たのは、黒い馬車隊の力添えあっての事だと、彼等の庇護下から出る事を拒むような発言で詰め寄る族長達。

ブレブラバントは内心舌打ちしながら後で説明すると言って下がるように促した。族長達の抗議が騎士達の耳に入れば、折角対等な立場として纏まった取り決めも、侮りから足元を見られてしまう。

幸いな事に、騎士達は朔耶からアルサレナの伝言を受けてササの

街に支援拠点を築く為、竜籠の所に集まっていた。

「大族長！　今からでも遅くは無い、連中を急襲して追い返すんじゃ」

「たったアレだけの人数だ、奴等の武具も奪えば次の攻撃にも十分備えられる！」

「馬鹿な事を言うな、彼等とは対等な国家として付き合う事が決まったのだ」

「大族長の言う通りだ、決め事を此方から破るような卑怯な真似が出来るか」

「決め事というなら、奴等のいう魔族組織との決め事が先では無いか！」

「そんなモノは知らん！　オレ達は親父達から『連中には逆らうな』と言われていただけだ！」

戦っても勝てなかったか、或いは始めから何らかの目的による交渉によって取り決めがなされたのか。黒い馬車隊の組織はササの街に金を落としながら、ポルモーン方面から人々を攫っていく。

かなり昔にはこの辺りの部族とポルモーンの部族とが対立していた時期もあったらしい事から、もしかしたらその辺りの事情も関係しているのかも知れないと、ブレブラバントは考えた事があった。だが、どちらにしても気に入らないのである。

「要するに、今までのオレ達はポルモーンの部族を生贄に差し出して奴等の庇護下に置かれていたようなモノだろうが！」

そんな在り方の何が高位の部族か、何が部族の誇りかと、ブレブ

ラバントは子供の頃から疑問に思い、溜め込んでいた胸の内の不満をぶちまけた。そこを指摘されると、黙らざるを得ない交戦派の族長達。彼等も後ろめたさは感じていた。

ぶっちゃけた所、黒い馬車隊の組織と、北部の列強国であるフレグンス、どちらが怖いのかという話だったのだ。

「……本当に、フレグンスとの同盟を選んで大丈夫なのだろうな……？」

「分からんさ……だが、フレグンスには『精霊の乙女』がいる。あの娘の力を感じただろう？」

族長達は竜籠の傍で竜達と戯れている黒髪の小さな乙女に目を向けた。確かに彼女は強力な『精霊の護り』で矢を弾いて見せた、だが、先代の大族長ですら戦う事を避けた黒い馬車隊の組織を相手に、対抗出来るような存在なのかと疑心も残る。

そんな疑心暗鬼漂う彼等を、更なる混乱に陥れる出来事が起きた。

「なんだあれは！　何かくるぞ！」

「竜だ！　また竜が籠を運んでくるぞ！」

周囲を警戒していた部族戦士達が空を指して叫ぶ。それは帝国から飛来した遠征部隊の一団だった。

籠を運ぶ竜だけでもその数十六頭、空を覆わんばかりの威圧感。巨大な四頭立て大型貨物竜籠二台が、地響きを立てて着陸する。四台の二頭立て竜籠に乗って来た騎士団や魔術団、密偵部隊など、戦闘員は合わせて六十人にも及ぶ。

族長達は一斉に青褪めた。もし、フレグンスの先発隊と戦ってい

れば、次は彼等と遣り合う事になっていたのだ。しかも、フレグンスを含めて彼等は先行部隊であり、斥候に過ぎないのである。

完全に色を失った各部族の族長と部族戦士達は、大族長ブレブラバントの判断が正しかったと認めた。

同時に、ブレブラバントは重要な事を思い出して大慌てでこっそりと、部下にルティレイフィアの追跡隊を退かせるよう命令を出す。命令を受けた部下も真っ青になった。もし、これでルティレイフィアの身に何かあったなら自分達の破滅だ、と。

部下は大慌てで、やはりこっそりと街に戻って行き、精鋭の戦士を引き連れてポルモーン方面へと向かうのだった。

81話：其々の準備と活動

帝国の遠征部隊もアーサリムに国があるのならばと、フレグンスの先発隊に倣う形でブレブラバント達と交渉に入った。
フレグンス側はアルサレナから帝国とも協力体制で動いて構わないという方針を、既に朔耶を通じて受けていたので、ササの街の空いている場所に陣地を構築する作業に入っていた。

アーサリムの部族戦士達とは共闘する事で一先ず話が付いている。とりあえず、スンカ山のあるアーレクラワまで進軍する事を目的に準備が進められていった。

竜の厩舎が建てられ、竜籠の離発着場を作る為に街を拡張して整地が行なわれる。締め出されていた商人達も街の定位置に戻って商売を再開した。

俄かに活気付き始めたササの街の作業風景を眺めている朔耶の傍に、ぶらりとブラットがやって来る。

「やれやれ、のっけから矢の雨で歓迎された時はどうなるかと思ったが、上手く纏まったみたいだな」
「ほんとだねー、誤解が解けてよかったよ」
「やっぱツヅキの能力か」

何の事？　と首を傾げる朔耶に、ブラットは笑って朔耶の頭を撫

でた。

「何故ナデナデ？」

「なんとなくだ。ツヅキはいい子だな」

「うーん、ブラットさんはよく分からん……」

セクハラしたり子供扱いしたりで、行動が理解できないと朔耶は唸るのだった。

夕方まで街の様子を見て回った朔耶は、ギリギリまで作業の進み具合などを交感を通じてレティレスティアからアルサレナに伝えた後、自分の世界へと帰還した。

ポルモーン渓谷の入り口に近い場所にある街。渓谷に点在する集落から人々が集まり、商品を持ち寄っては物々交換が行われる市もある。この街にもササを護る部族の戦士が巡回しているので、人狩りから狙われる事は滅多に無い。

その為か、故郷の集落を離れて此処で暮らそうとする者も多かった。

ルティレイフィア達がササの街を脱出して二日目、ポルモーンの街で馬車を処分し、食糧や織物を買い込んで直ぐに街を出た一行は、渓谷の北側、アーサリム地方とクリューゲルの草原を隔てる岩山付近へとやって来た。

この辺りにはポルモーン渓谷の其処彼処に見られる自然の石柱が、生い茂る林の如く乱立している一帯で、とても馬車が通れるような

場所ではない。人の足でなら何とか進めるが、まるで狭い洞窟内を歩いているのかと錯覚する程に入り組んでいる。

「なるほど、こんな場所なら図体の大きい魔獣や魔物も近付きませんな」

「ふふ。この辺りはまだ通り道だ、目的地に着けば驚くぞ？」

先導するルティレイフィアの背を追いながら入り組んだ石柱地帯を行くヴィンス達は、突然目の前が開けた事で一瞬呆けたように立ち止まった。ゴツゴツとした岩が転がる黄土色の石柱群を抜けると、行き成り青々とした草原が広がっていたのだ。

薄っすらと霧が漂う緩い傾斜を描いた草原の丘の上に、一軒の小屋が見える。ここは石柱の乱立する一帯の中にぽっかりと出来た空間。渓谷の地形と自然が作り出した奇跡のような場所、まるで此処だけが違う世界に在るような隠れ里だった。

数歩先からルティレイフィアが、未だ呆けているヴィンス達に声を掛けて手招きする。

「いくぞ、お前たちに会わせておきたい人がいる」

慌てて後を付いて行くヴィンス達。ルティレイフィアは丘を登って小屋へと向かった。

「うん？　留守かな？」

小屋の扉をノックしたが反応が無い事に、ルティレイフィアは小首を傾げる。その時、小屋の前に居たルティレイフィア達に後方から声を掛ける者がいた。

「ひぇっひぇっひぇっ……こんな辺鄙な場所になにか用かえ？」

気配も無く唐突に現われた白髪の老婆に、咄嗟に身構えるヴィンス達。それを制したルティレイフィアは、老婆に片膝を付いて挨拶をした。思わず目を瞠るヴィンス達だったが、己が主が頭を垂れる御仁であるのかとそれに倣う。

「お久しぶりです、メリルー導師」

「ふぇっふぇっ……レイフィア嬢ちゃんかい。凛々しゅうなったのう」

うむうむと眼を細めて皺だらけの節榑立（ふしくれ）った手でルティレイフィアの頬を撫でる。老婆は数十年この隠れ里に一人で暮らしているメリルーという名の魔導師で、ルティレイフィアの魔術の師であった。

一年ほど前に迷い込んで来た手負いのルティレイフィアを助け、術の指南をしたのである。

「おぅおぅ、新鮮な肉もたんとあるのう。レイフィア嬢ちゃんはホンにええ弟子じゃなぁ」

「織物も持ってきました。暫らく厄介になります、これを……」

「ほぅほぅほぅ、それで……あの子達を鍛えたいのかぇ？」

差し出された魔力の結晶を受け取り、メリルー導師は小屋の隅っこで畏まっているヴィンス達に視線を向けた。

「はい、彼等に術を教えて頂きたい」

そもそもが規格外の存在である魔獣や魔物を、通常の戦士が個々の力だけで相手取るには限界がある。体力を維持する術、筋力を強化する術、攻撃や防御を補佐する術を自らの戦闘技術に取り入れてやっとまともに対抗できるのだ。

ルティレフィアはヴィンス達を消耗品（こま）にするつもりは無かった。

「そうかい、そうかい……ふむ、それじゃあ一人ずつ資質を見せて貰おうかねぇ」

ふぇっふぇっふぇっと笑いながら小屋の裏手に手招きするメリルー導師。魔術の事など殆ど知らないヴィンス達は、ルティレイフィアに促されて緊張気味な様子でメリルー導師に付き従って行った。

ヴィンス達を送り出したルティレイフィアは、久し振りに訪れたこの場所の変わらない風景を和む気分で見渡した。岩山と石柱の高い壁に囲まれたこの里を知る者は少ない。

里の周囲にはメリルー導師による結界で常にボンヤリとした霧が掛かっているので、空からでも簡単には見つけられない仕組みになっている。他にも何箇所かここと同じ様な場所が、ポルモーン渓谷には存在していた。

「ふむ……サクヤなら、あっさり此処を見つけるかもしれんな」

朔耶が漆黒の翼を広げて空を飛ぶ姿を思い出したルティレイフィアは、ふとそんな事を思うのだった。

スンカ山の中腹、精霊石鉱山の洞穴を刳り貫いて建てられたヨールテスの研究施設。その執務室にて、ヨールテスはオルドリア大陸の主要国に潜む密偵達から送られてきた資料を基に、対サクヤ戦略を練っていた。

『サクヤ』に対してはこれまで特に明確な敵対を示した訳でも、その方向で動いた訳でもなかった。

にも拘らず、気が付けば活動の本拠地であるアーサリムまで二大列強国を遠征させ、僅かな働きとその力の発現によって子飼いの地元部族達をも列強国と共闘させるにまで至らせて来たのだ。

ここまで来ればもう、『サクヤ』にちょっかいを出した者達の末路に見る薮蛇を嫌って、放置して置く訳には行かない。

地元部族達が予定通り交戦を始めていれば、調教済みの魔獣や魔物部隊を送り込んで列強国部隊を急襲する筈だったのだが、交戦で纏めるようにと指令を出しておいた族長の意見は、その他多数の族長意見に封殺されたようだ。

「キトに力を入れるあまり、此方の管理を怠ったのが原因か」

ヨールテスは三代以上続く部族や一族は子々孫々、誰が主人であるかを教育しておくべきだったと反省すると、書類を捲りながら情報に目を通して計画書に書き込み、『サクヤ』という存在を分析しながら攻略法を考えて行く。

「うーむ……これはもう、本人を直接どうこうするのは無理だな」

キトでの戦闘記録やカースティアからの報告を読む限り、意識を奪っても無力化は期待出来ない。寧ろ攻撃的になるらしく、返って危険であると判断を下す。

「となれば……搦め手、此方（オルドリア）での居場所を無くしてしまえばよい」

『サクヤ』の現われる周期を計算すると、現われてから二日ないし三日程こちらの世界に滞在した後、元の世界に還り、四日から五日は現われない。稀に現われる時もあるが、何れも夕刻以降に僅かな時間のみという限定的な滞在時間。

それならば、『サクヤ』が還った直後から行動を開始し、近しい者を順次始末していく事で此方の世界での身を寄せる場所を潰していく。そうして『サクヤ』が此方の世界に来なくなるように仕向ける計画を立案した。

「やるなら一人では対処不可能なほど大規模に動かさねばな」

独り言を呟きながらどのように動くかを思案していたヨールテスの執務机の端に、スッとお茶が置かれた。お茶を運んで来たキルトがヨールテスの計画書を覗き込む。

「近しい者の抹殺ですか。対象の復讐心を煽りはしませんか？」

「いや、あの娘の行動からしてそれは無いだろう」

朔耶の行動から内面を読み取っての心理作戦。ヨールテスは『サクヤが居なければこんな事にはならなかったのだ』という趣の精神攻撃も同時に行うと説明し、お茶を一口啜って計画書に修正を加えながら書き足していく。

「愚民は煽られ易いからな」
「なるほど……」

王都フレグンスへの直接攻撃。王宮区から上流区、貴族街の辺りまでは堅牢な造りの街なだけあって近付く事も容易ではない為、開放区から一般区に狙いを絞る。

特に、開放区にはサクヤ式工房とサクヤ邸があり、さらに度々サクヤが立ち寄る事もあるという王都大学院もある。予め襲撃用の魔物を王都に潜ませて置き、アーサリム地方から溢れた魔物が街を襲うという噂を流布して、其処に魔物を放つ。

「一般民共は恐怖と怒りの矛先を先ず、アーサリム遠征を決めた王族、貴族達に向けるだろう」

その後、『先の襲撃はサクヤ個人への報復である』との声明を出して再び襲撃させる。五体も居れば大損害を与えられるであろうと見越して、十体前後潜ませる手筈を考えた。余り多く用意しても、精霊神官に精霊の知らせで予知される危険もある。

そうして四日後ないし五日後、『サクヤ』が王都に現われた時、王都の開放区と一般区は無惨に破壊され、学院の友人知人にも多数の死傷者が出ており、工房と自宅も使用人ごと壊滅している。というシナリオだ。

「先日も王都に現われてティルファ、帝国と移動し、翌日ササの街に現われた後、異世界に還っている」
「二日の滞在ですね」
「そうだ。計算では次に現われるのは、恐らく四日後だろう」
「そして、二日或いは三日滞在して還る……」

ヨールテスは今から魔物の潜入部隊を編成して四日後のサクヤ来訪と、更にその三日後か四日後の襲撃活動に備えられるよう、竜籠を使う許可を出した。襲撃は朝、街が活動を始めてからだとの指示にキルトが確認を取る。

「対象が帰還直後の夜間を狙われるのでは？」

「いや、学院を狙うなら通いの生徒達が登校してからの方が中流以上の家系の者も狙えるだろう」

学院の寮に住んでいるのは平民や中流以下の貴族が殆どなので、『サクヤ』と友人関係を築くには本人がどうあれコネも身分も足りない。何より『フレグンスの戦女神』を畏怖して近付く事さえ躊躇していそうだと予測出来る。

「狙うならあの娘が特に気に掛けているらしいという情報のある、ブラフニール公爵家の令嬢辺りが良い」

身分の高い家系の者に多くの犠牲が出れば、貴族街から上の区画そのものに襲撃を掛けずとも十分な損害を及ぼせる。

一般区も寝静まっている民家を少数の魔物に一軒ずつ襲撃させるよりも、多く集まっている所に放り込んだ方が手っ取り早く混乱も招けて被害も出易いと説明され、キルトは納得して頷いた。

「では、派遣用の魔物を新たに生産致しますか？　潜伏させるなら人型が良いと思われますが」

「そうだな、飛行能力のある新種を二体と、後は格闘種で構わん。なるべく惨たらしく殺せるようにな」

キルトは礼をしてヨールテスの執務室を後にすると、魔物の生産

工場に向かった。

学校が終わった放課後、朔耶は兄の車で父の町工場に来ていた。弟と拓朗が開発している武器が一応の完成を見たと言うので、そのお披露目である。

「これだ」
「なにこれ、銃口？」

篭手を一回り大きくしたような、腕をすっぽり包み込む金属の箱。その先に短い円筒形の筒が突き出ており、三センチ口径の穴が空いている。近接武器を作るんじゃなかったのかと問う朔耶に、弟と拓朗はこの武器について説明した。

「こいつは朔姉が作った『寸勁の篭手』改め『衝撃の篭手』をバージョンアップしたモノさ」
「名付けて、『衝撃の篭手Ｔ２』だ」
「『アンバッスさんの拳骨Ｔ２』ね」

正式名称は正確に、などと言いながらその篭手を手に持ってみる朔耶。見た目ほど重くは無かったが、それでも結構ずっしりと来る。振り回す訳ではないので少々重くても問題は無さそうだ。

それ以前に、騎士達はこれよりもずっと重い武器を片手で振り回すので、この篭手なら素手に等しいかもしれない。

あんまりな正式名称に軽くへこんでいた弟と拓朗は、篭手の威力を見せると言って以前、回転ヘッドメイスの威力実験に使ったブロック塀に案内した。拓朗が篭手を装着し、スロットに魔力石カートリッジを差し込む。

「じゃ、行くぞ？」

軽く振りかぶってブロック塀にパンチを繰り出すように篭手の先をぶつけると、先端の筒部分が押し込まれて、中の機構が多重圧縮反発力を生み出し、ドコンという音と共に衝撃排出口から絞りに絞られた衝撃の塊りが打ち出された。

ブロック塀には衝撃が貫通した穴が空いていた。対象を吹き飛ばす効果を持つ朔耶の作った篭手と違って、こちらは貫通性を高めてあり、使用者への反動もスプリングを内蔵する事でかなり軽減させてある。

「すっごい威力……」
「これなら大型の怪物とかにも効果あるかと思ってな」
「ただ一つだけ欠点があるんだよなぁ」
「欠点？」

魔力石カートリッジ一つで二発しか撃てないという。

「う～ん。それって一撃離脱で使うなら十分じゃないの？」
「確実に仕留められるならそれでもいいけど、敵の数が多いとあんま効果ないんだよな」

予備も含めて篭手一つに付き魔力石カートリッジ五つを一セットで作ったとして、十発で打ち止め。使用する場面が限られるので意

外に使い勝手が悪いのだ。戦闘中にカートリッジの交換を行うのにも問題がある。

「生産コストを考えると費用対効果にも疑問が残る」

「でも使用制限って意味では本当に限られた人間にしか配布されない事になって、フィフティーじゃないか？」

何やら難しい事を言って腕組みしつつ考え込んでいる弟と拓朗を尻目に、朔耶は工場の作業場で何かやっている父の背中を見つけて其方に興味を惹かれた。以前、父も何か得たいの知れないモノを作っているらしいという話を聞いていた。

「お父さん、なに作ってるの？」

「おお、朔耶か」

作業台の上には四角い五センチ角程の小さな箱が幾つか組上げられていた。回りには細かく削られた魔力石の欠片が散らばり、此方で作られた魔力測定器も置いてある。

箱の表面は真ん中に穴があるだけでシンプルだが、蓋の開いてる箱を覗き込むと中身は結構ごちゃっとしていた。

「もう少し小型化出来そうなんだけどな、時間が無くてまだこんな感じだ」

そう言って父は別の作業台にその小箱を一つ、魔力測定器を向けながら並べて置いた。測定器は一石か二石を指している。更に小箱の回りに魔力石を並べていく。すると、測定器の針が三石四石と上がり始めた。

「え、これって……」

「魔力の集積装置を作ってみたんだ。魔力石ってのは魔力が空になっても、しばらく放っておくとまた溜まるだろう？」

魔力石の特性として、使い終えた魔力石は山や平原などに撒いておけば自然に魔力が溜まる。環境の良い場所の方が早く溜まり易いのは、そういう場所に精霊が多く集まるからだとも謂われている。

魔力集積装置は魔力石の特性の効果を、魔力石を加工する事で引き上げたモノだ。魔力石ライターの魔力を溜め置く部分と魔力を吸い上げる機構を弄り、全面に吸引口を取り付けて周囲から魔力を取り込んでタンク部分に溜める。

魔力の放出も自然放出ではなく魔力石ライターやランプと同じ構造で引き出される。無属性の石を使っているので純粋な魔力のみを引き出す事が出来るのだ。その先に属性付きの装置を繋げば、その装置のエネルギー源となる。

「これ凄い！　お父さん凄い！」
「そ、そうか？」

これは謂わば自然に充填される魔力のエネルギーパックだ。蓄電池ならぬ蓄魔池である。

全てのサクヤ式に内蔵可能で、サクヤ式の街灯やランプ等に内蔵すれば魔力石の取替えも不要になる為、街道に街灯を設置する構想も現実味を帯びてくる。組み合わせと仕掛け次第で永久機関も可能になるのだ。

「ホントに凄いよ、お父さんもっと作って！」
「よ、よしっ　任せろ！」

息子達が作る物に比べて些か地味かな～等と思っていた父は、娘の思わぬ好反応に張り切った。

珍しくはしゃいでいる朔耶の様子に、一体どんなモノを作ったのだと見に来た弟と拓朗も、これがあれば篭手の欠点もカバー出来て他の武器にも内蔵出来る上、魔力石モーターにも併用出来ると絶賛した。

父、感無量である。

「とりあえず週末までに作れるだけ作っておいてね」
「よぅーーし、父ちゃん頑張っちゃうぞー」
「ああ、俺達もカートリッジ部分に集積装置を組み込む方向で構造を練り直して量産するぞ」
「ＥＢのスロットも改良するから置いていってくれ、回転ヘッドメイスも出来れば回収よろしく」

この日、父の工場では夜中まで仕事外の作業に没頭する物造りの男達で熱気に溢れていたのだった。

「さあ、帰ろう。後でお父さん達迎えに来てあげてね」
「うーん、それはいいが、最近すっかり運転手しかしてない気がするぞ」

朔耶が工場にいる間、近くのスーパーで買出しをしていた兄はそんな風にボヤきながら愛車に帰宅の道を走らせた。

週末――

学校も明日からは遂に冬休みというこの日、朔耶はいつも通り実穂、藍香と並んで下校の道を歩いていた。

「それで朔ちゃん、クリスマスくらいは空いてるんでしょ？　空いてるよね？　空いてませんかーーーー！」

「なんでいきなり三段問い？　ん～クリスマスかぁ」

「年頃の女の子が三人集まってクリスマスパーティーっていうのも、さもしいよねー」

「みっちゃん……それは言っちゃダメ……」

朔耶はテンションの上がり下がりが激しい藍香の『あたしには朔ちゃんがいるからいいモン』という呟きを聞かなかった事にしながら、日程をぼんやりシミュレートする。

向こう（オルドリア）での活動は、アーサリムの問題が片付くまでカースティアの事業も街道整備も出来る事はあまり多くない。早く問題が片付くよう積極的に手助けした方が各国にとってもアーサリムにとっても良さそうだと判断した。

「うん、イブとクリスマスの二日なら空けとくよ」

「やたーー！　朔ちゃぁ～ん」

「いいの？　大事な予定とかない？」

「うん、大丈夫」

じゃれ付いてくる藍香をヒラリと躱して背後からスリーパーを決めながら、朔耶は気を使う実穂に微笑み掛けた。

「朔ちゃ～ん……もっと優しく……カッコは～と」

「……このまま締め落としてやろうかしら」

そんな調子で何時もより浮かれ気味に戯けながら分かれ道まで来た三人は『それじゃあ来週のクリスマスに』と言って其々の帰り道へと別れた。

「ただいま～」

帰宅した朔耶は鞄を部屋に置いて制服のまま居間にやって来ると、明日向こう（オルドリア）に持っていく荷物の整理を始める。今回は対魔物用の武器も持っていくので大荷物だ。

フレイやレティレスティアにもシャンプーの類を持っていく為、別のリュックに詰め込んでいく。効果の程はフレイで実証済みなので、屋形船作戦が遅れそうな代わりに麗しの香り作戦を挟む事にした。

帝国のアネット達の所にも、サクヤ式自動二輪に魔力集積装置を組み込むついでに持っていくつもりだ。

「先に量産型の篭手をササの街に持っていって、それから王都の方にも回ろうかな」

数日に分けて持っていく荷物を前に、朔耶はクリスマスの予定も話し合わなくてはと携帯を取りに部屋に戻るのだった。

82話：節穴発言？

冬休みに入った朔耶は、庭に積み上げられた大荷物を見て軽く息を吐いた。山積みされているのは『衝撃の篭手（アンバッスさげんこつ）T2』。今回ササの街に持って行く分である。

「三日で三十個生産とか、頑張り過ぎでしょ……」

朔耶は用意したミニリアカーに初期型の角ばった箱状の篭手と、量産型で流線形な筒状の篭手、計三十一個を積み込んだ。

後二十個ほど生産する予定だと言う弟と拓朗は、今日も朝から工場に出掛けている。物が物だけに重量的にも、変な所に出ると危ないので、朔耶は慎重に転移する場所を測る。

『ブラットさんの近くでも上に出ちゃダメよ？　イザって時は建物壊してでも障壁で包んで浮かしてね？』

ウム　マカセテオケ

朔耶はミニリヤカーのハンドルを持ち上げた体勢で、オルドリア大陸のアーサリム地方へ向けて転移した。

「わわっ」

「うお！　なんだなんだっ！」

転移するなり灰色の布がバサリと覆い被さり、ブラットの慌てる声が響く。どうやらパーシバル傭兵団の陣地、ブラット団長のテントの中に出たらしく、テントの端っこの布壁をミニリアカーの車輪が踏んでしまっていた。

それにより、テントを支えていた紐がリアカーの重さに耐えられず千切れたらしい。

「ツヅキ……」

「ご、ごめんなさい」

早朝から寝床の破壊で叩き起こされて憮然とするブラットに、朔耶はてへっと笑って誤魔化しつつ謝るのだった。

「ほう、これが対魔物用の武器なのか」

「まだどれだけ使えるか分からないんだけどね、一応フレグンス先発隊の人達用のだけど。……使ってみる？」

「くれるのか？」

「貸すだけよ」

拡散防止の為という朔耶の説明に首を傾げながら、ブラットは流線形の筒型篭手を一つ手に取って造りを確かめている。此方（オルドリア）には無い技術で組まれているので、裏返してみたり翳してみたりと、珍しそうにしていた。

そんなブラットと共にゴロゴロとミニリアカーを押してフレグンス先発隊の陣地へと向かう。このリアカーも此方のモノと比べると相当に良い造りをしているので、通りの商人達が鉄のフレームや特

に車輪の構造に興味を示していた。

支援拠点となるフレグンス先発隊の陣地と並んで、帝国の陣地も隣に建てられている。

傭兵団の陣地と同じく野営テントが並ぶキャンプ風の先発隊陣地と比べると、帝国の陣地は持ってきた機材で砦のような造りの建物を築いている。投入している兵力の差が実に明確に示されていた。

帝国、フレグンス、アーサリムが共同利用出来る訓練場も開かれており、帝国とフレグンスの騎士達が地元部族の戦士から魔獣や魔物に関する知識、戦う際の注意事項などレクチャーを受けている。案山子も異形を象ったモノが用意されていた。

其処へ、リヤカーを引いてきた朔耶が対魔物武器の配布を伝えると、フレグンス先発隊の騎士に混じって帝国の騎士やアーサリムの部族戦士達も皆物珍しそうに集まって来た。

「盾と併用する事になってるけど、かなり接近しなきゃいけないから素早い人の方がいいと思うよ」

「ほほう、篭手に仕掛けが施されていると？」

今までサクヤ式で武具の類と言えば、エバンスの騎士が持つ『魔法障壁の盾』の事くらいしか噂に広まっておらず、『寸勁（アンバッスさんけん）の篭手（エレメントブレード）』を知る者は少ない。ＥＢもあれがサクヤ式だと知っているのは一部の者だけだった。

「これで使っていいか？」

ブラットが異形の案山子の前で篭手を試そうとしていたので、朔

耶は使い方を皆にも分かり易く説明した。
　篭手の腕を入れる端の部分には魔力測定器の機構で作った魔力計が付いているので、魔力集積装置の魔力残量が一目で分かる。多少なりとも魔術を行使出来る者なら、自力で魔力を集めてやる事で、集積装置への蓄魔も早める事が出来るのだ。

「その針が右端にある時なら使える状態、真ん中より左だと威力が下がるから、回復するまで待つようにね」
「ふむふむ、この先端をぶつけりゃ良いんだな？」

　そう言って魔獣型の異形案山子の前で構えたブラットは、その懐に飛び込むように低い態勢で踏み込むと案山子の顎に篭手をカチ上げた。所謂アッパーカットである。

　ドコンッという音が響いて案山子の頭の一部が吹っ飛んだ。貫通した衝撃が頭部を象る装甲の上部分を跳ね上げたのだ。案山子の顎には穴が空いていた。

　打たれる為に作られた丈夫な案山子の装甲に一撃で穴を開ける篭手の威力を、撃ち放ったブラットは『こいつはすげえ』と実感していたが、貫通する衝撃は傍目には地味なので余り効果が無いように見える。

　大した威力ではないのかと、幾分がっかりした様子を見せる騎士達。朔耶本人の手前、あからさまな態度には出せないが、俄かに失望感を感じさせる雰囲気が騎士達の間に流れる。

　そんな中、部族戦士達に混じって対魔獣戦闘をレクチャーしていた大族長ブレブラバントは、『やはり精霊の乙女は敵を打ち倒す力よりも味方を護る力に秀でているようだ』と捉えた。

「なぁに、長くこの地で魔物共と戦って来た我々が付いている。硬くて丈夫な武器があれば大丈夫だ」

『精霊の乙女の加護を受けた武器』が期待外れだった事をフォローするように、ブレブラバントは愛用の鉄輪付き棍棒を一振りすると、身体の回転も加えながら弧を描かせて異形の案山子に叩きつけた。

ガコォンッという派手な打撃音と共に案山子の装甲が拉(ひしゃ)げる。単純且つ原始的な攻撃法だが、それだけに威力も迫力も十分だ。自慢げに胸を張るブレブラバントだったが、そんな彼にブラットが一言呟く。

「ふっ　所詮は蛮族か……」
「……なんだと？」

低い声で振り返ったブレブラバントがブラットを睨み付ける。他の部族戦士達も今のは何かの侮辱か？　と戸惑いつつも、大族長に追随するように視線を鋭くした。辺りに不穏な空気が漂う。それを口の端で笑いながら受け流すブラットは更に――

「つーか、帝国と王国の騎士様達もだ。揃いも揃ってあんたらの目は節穴か？」

急に矛先を向けられた騎士達は何の事かと顔を見合わせる者や、傭兵風情に挑発されたと憤る者など様々な反応を見せる中、朔耶は『なんで皆(みんな)に喧嘩売ってんのー！』とブラットの行動に困惑していた。

「いいか？　騎士様達はあんま知らないだろうが、魔獣は普通の奴でも大体この案山子くらいはデカイ」

そう言ってブラットは異形の案山子をぺしぺし叩きながら、先程吹っ飛んだ頭部の装甲を拾い上げる。革と厚布に丈夫な鉄糸が網目状に編み込まれ、伸ばした鉄板が重ね張られており、かなり丈夫で柔軟性にも優れた装甲だ。

「見ての通り、こいつは其処いらの甲冑よか余程丈夫な装甲に組まれてる」

「むん？　当然だ、魔獣や魔物を想定した案山子に使っているのだからな」

ブラットの言いたい事が解らず、ブレブラバントは眉間に皺を寄せながら訝しんだ。ブラットはその装甲を訓練場の打ち込み用の太い杭に括り付けると、魔獣との戦闘について話す。

「さっきのアンタの一撃だって、暴れ回る魔獣相手に簡単には決まらないだろう？」

少々の攻撃では剣で斬ろうと槍で突こうと大した傷を負わせられない魔獣を相手にする時は、仲間との連携で魔獣の動きを押さえつつ頭を狙って仕留めるのが常套になるのだが、それでも一撃で倒せる事など稀だ。

今し方ブレブラバントが見せたような一撃が入ったとしても、ダメージにこそなれど、それで倒せるほど甘い相手ではない。それこそ、岩を砕く程の強撃を叩き込んでその一発で頭を潰せるくらいでなくては、魔獣は倒せない。

「そんな事は知っている。それと今の貴様の発言とどう繋がる」
「こいつを一撃で砕くなり穿(うが)つなり出来るか？」

ブラットは杭の真ん中辺りに括り付けた案山子の装甲をコンコンと叩きながら問う。

「無理に決まっているだろう、魔術士の技でも簡単にはいくまい。……さっきから一体何が言いたいのだ？」
「ふっ　見てろ」

衝撃の篭手(アンバッスさげんこつ)Ｔ２を再び構えたブラットは、杭に括り付けられた装甲に殴り掛かった。ドコンッという衝撃排出音と共に杭が振動し、装甲を括り付けてある部分の丁度反対側からパッと煙のように木片が舞う。

「む？」

今、一瞬何が起きたのかと全員が目を凝らした。ブラットが杭を指差す。其処には多重圧縮反発力の衝撃波に撃ち抜かれて穴の空いた装甲と、諸共穿たれた打ち込み用の杭。舞った木片は衝撃波が杭を貫通した時のモノだった。

目を瞠ったブレブラバントは大股で杭に近寄ると、括り付けられた装甲を手に取り、確かに穴が空いている事を確かめた。信じられないといった表情でブラットの右手に装着された篭手に目を向ける。

「つまり、コイツは特別な力を持たない『普通の戦士』が、魔獣と一対一で遣り合う為の武器なんだ」

遣り合えるというダケで、実際に戦う時は従来通り人数を揃えて

連携しながらになるだろうという、補足も入れながらのブラットの『節穴発言』の説明に、騎士達は挑発は遺憾だが納得出来ると腑に落とした。

大した威力ではない所か、騎士の甲冑をも簡単に撃ち抜いてしまう程の力を持つ近接片手武器（両手に装備も可）。今まで見た事も聞いた事もない、途轍もなく強力な武器だったのだ。ブラットの実演を兼ねた篭手の説明に、朔耶が感心の声を上げた。

「すごーい」
「って、おいおいっ」

その凄い武器を持ってきた本人の感心っぷりにズッコケるブラット。朔耶も実際に戦闘経験のある人物から具体的な用法と効果が語られるまで、その実用性や威力に付いては実感がなかったのだから仕方がないのである。

ともあれ、武器の効果も実証されたという事で早速フレグンス先発隊の騎士達に配られる衝撃の篭手（アンバッスさんげんこつ）Ｔ２。傭兵団にもブラットに預けた分を含めて十個、今回の仕事が終わるまでは貸し出される。

羨ましそうな視線を向ける帝国遠征部隊の中で、帝国魔術団が特に興味深そうにしているのが朔耶から見て印象的だった。

『ティルファの人達だったらもっと食いついてきそうだよねー』

アヤツラ　コウキシンノ　カタマリデ　アルカラナ

量産型衝撃の篭手Ｔ２三十個を配布し終え、余った初期型をどうしようかと考えていた朔耶は、なんとなく指を咥えて見ているような雰囲気を醸し出しているブレブラバントに貸してあげようかと思

いつく。

「使ってみます？」

「えっ！　お、オレがですか？」

思わず敬語になりながら上擦った声を上げるブレブラバントは、余り物でよければと貸し出す朔耶に恐縮しつつ、初期型衝撃の篭手T2を受け取った。

角張ったデザインの初期型は、何となく特別製のように思えて内心で喜びの踊りを踊っていたブレブラバントであったが、朔耶の次の一言で凍り付く。

「そういえばルティがこっちに居る筈なんだけど、知りませんか？」

ポルモーン渓谷へ向かった追跡隊も、それを追った部下からも、ルティレイフィア達を見つけられなかったという報告が上がっている。ポルモーンの街で馬車を処分した事までは判明しているが、以降の足取りが全くの不明。

「さ、サクヤ殿は、紅獅子殿とは親しい間柄で？」

「ほんとに紅獅子って呼ばれてるんだ？　一緒にご飯食べたり、内緒話しあったりする仲ですよ」

ブレブラバントは『内緒話』を『機密事項』と捉えた。つまり、『非常に親しい関係』にあるという事だ。

ダラダラと汗を流しつつ、ブレブラバントは如何答えるべきかと悩んでいたのだが、その悩みはブラットがやって来た事でアッサリ終わりを告げる。

ブラット達は日頃の習慣で、街などに入れば先ず情報収集を行う。情報源は情報屋のような特別な商売をする相手から、一般の露店商人まで様々だ。

そして、これまで絶対中立を謳って特別大きなトラブルも無く過ごして来たブレブラバント達には、何かあった際に街の住人を含めて街で活動する外部の者も対象にした緘口令を敷くという発想が無かった。

「ルティレイフィア第二王女様ならポルモーン方面に逃走中だって聞いたぜ？」

「き、貴様っ何故それを！」

「あぁん？　其処彼処の連中から聞いた話なんだが……、もしかして秘密にしときたかったのか？」

「なにソレ？　……どういう事？」

朔耶の纏う空気が変わった事で、観念したブレブラバントは一連の騒ぎを白状した。朔耶は特に言葉に怒気を孕ませたり、嫌疑を掛けたりした訳ではなかったのだが、テンパっている者にとっては最悪の展開を想像してしまうモノなのだ。

「行くのか？」

「うん、後の事は宜しくね」

ルティレイフィア達を探しに行く事にした朔耶は、ポルモーン渓谷方面に向かう門の所に来ていた。ブラットから大凡（おおよそ）の地理を教えて貰うと、漆黒の翼を出して空へ舞い上がる。

初めてそれを目にしたササの街の住人や部族戦士達は皆一様に驚いて釘付けになり、ブレブラバントも飛び去っていく『精霊の乙女』の姿を大口を開けたまま呆然と見送るのだった。

「わー、本当に柱がいっぱいある」

テレビのドキュメント番組等で観た事があるような不思議な地形が眼下に広がる。

石柱の中には天辺に僅かながら草花が生えているモノもあった。航空写真を撮りながら飛び続けること暫らく、石柱が疎らになった辺りにササと同じ位の大きさの街が見えた。

鼠返しのような構造の高い塀に囲まれたポルモーンの街。ここから更に東へ向かって馬車で二日程の位置にアーレクラワの街があるという。遠くの景色は靄が掛かっていてよく見えなかった。

『うーん、何処から探そうか』
トリアエズ　ゼンイキヲ　ミワタシテ　ミルカ

神社の精霊と相談しながら、朔耶は地表が見えるギリギリまで高度を上げた。あまり高い所まで上昇すると、靄で石柱の頭しか見えなくなってしまうのだ。そうして街の周辺をグルリと見渡す。

『ねえ、あの岩山の辺りって所々開けてる場所があるね？』
ウム　ナカナカ　ソウカンデ　アルナ

森の中の一角を開拓したような開け方をした、石柱群の中にある

開けた一角。
　黄土色の地表が広がるアーサリムの土地の中で、其処だけ緑が広がっている光景は非常に特徴的だった。そんな不思議な地形の中に、朔耶は何となく不自然に感じる箇所を見つけた。
『アソコだけやけに靄が濃くない？　なんか流れてないような……』
　全体的にゆったりと流れている靄が見える中で、一箇所だけ流れが無くその場で漂っているような違和感を感じる光景。
『まさか魔族組織の基地があったりして……？』
イヤ　ソレハ　コウザンノチカク　ナノデアロウ？
『あ、そっか。この辺りからはまだ遠いんだよね』
シカシ　シゼンノナカニアル　フシゼンハ　ヒトノテニ　ヨルモノ　バアイモアル
　何が原因なのか一応調べておこうと、朔耶はその靄の掛かった場所へと飛んだ。
『もしかしたら、バーリッカムみたいに温泉が湧いてるのかも』
ヒトウトイウ　カノウセイカ
　メリルー導師の指導の下、ヴィンス達が魔術の修行をしている隠れ里。ルティレイフィアは一人離れた場所で剣を振るっていた。Ｅ（エレメン）Ｂ（トブレード）との連携技も鍛錬の内容に加えて置きたい所だが、この辺りでは

魔力石の入手が困難なので使用を控えている。

「レイフィアや」

「？　メリルー導師、如何なさいました？」

「何か強大な存在が結界を越えて来ておるようじゃ」

導師の珍しく真剣な様子に、ルティレイフィアは顔を強張らせた。

メリルー導師の結界は魔術と精霊術を組み合わせた、或る種紛いモノではあるが、不可侵の力はルティレイフィアの母、アルサレナの使う精霊の結界と遜色無い効果がある。

それを超えてくる存在として考えられるのは、楽観的に思うならば朔耶の存在が挙げられる。

だが、ササの街で拗れているであろうフレグンスの先発隊とブレブラバント達地元部族との衝突の事を考えると、朔耶が今の時期にこの辺りに現われるとは思い難い。

となれば、三国連合がキトの制圧によって得た情報にあるアーサリムに潜む魔族組織。スンカ山付近に在るという魔族組織の本拠地より飛来する『何か』が、この里の結界の存在に気付いて偵察に来たとも考えられる。

十数日前にアーレクラワからポルモーンへ戻る際、途中の集落で『空を飛ぶ魔物』の存在を耳にした事もあった。

魔物は魔物自身の纏う魔力により、軟な結界なら侵蝕する事で喰い破る力を持つ。強力な結界を喰い破る程の力を持つとなれば、相応に力の強い魔物である事が予想された。

「ヴィンス達の術は使えますか？」

「まだ無理じゃな。集中力を費やす分、返って危険じゃよ」

侵入者の正体を見極めるまで彼等と共に避難しておいた方が良さそうだと判断したルティレイフィアは、メリルー導師と連れ立ってヴィンス達の修行している場へと急いだ。

「むっ！　イカン、真上じゃ」

「っ！」

立ち止まって空を仰ぐメリルー導師に釣られてルティレイフィアも空を見上げた。其処に漆黒の翼を広げた黒髪の少女を認め、思わず緊張が解ける。ルティレイフィアの変化から危険な存在ではない事を感じ取ったメリルー導師も警戒を解いた。

「ふぇっふぇっふぇっ　あー驚いたわい……お友達かえ？」

「はい」

丘の上の小屋でテーブルを挟んで向かい合いながら、朔耶はルティレイフィアとお茶を飲みながら雑談に興じていた。

メリルー導師は暫らくホォホォと朔耶の『状態』を視て『本物の重なる者を見るとは長生きはするものじゃ』と感心するなど、精霊と重なっている事を一目で見抜いて朔耶を驚かせた。

「ふぇっふぇっ、……ゆっくりして行くとええ」

メリルー導師はそう言ってヴィンス達の指導に戻って行った。

ササの街での一連の出来事と顛末を聞いたルティレイフィアは、

朔耶が上手く取り成してくれたお陰で双方に無益な犠牲を出さずに済んだと感謝するのだった。

「あ、そうそう。ルティにあげたエレメントブレード、新型が出来たから回収して交換するよ」

「ほぅ、新型とな？」

朔耶は自分が作った試作ＥＢ（プロトエレメントブレード）を回収して魔力集積装置を内蔵した新型ＥＢ（ニューエレメントブレード）をプレゼントした。フル充填状態であれば従来のモノより持続時間が三倍以上、魔力計が付いているので魔力の残量も一目で分かる。

「魔力を集めれば自動的に力を充填出来るのか……相変わらず凄いモノを作るのだな」

「そのＥＢはもう殆どあたしの設計じゃないけどね」

兄弟と幼馴染と父親の共同開発だと聞き、ルティレイフィアは『朔耶は発明賢者の家系なのか』と改めて感心した。使い込まれた試作ＥＢは柄が木製なので強度に不安があったが、新型はステンレスとスチールを使っている。

滑らかで鏡のように磨かれたＥＢの柄に魅せられいるルティレイフィアに、朔耶は一つ思い出して話題に乗せた。

「あーそれと……アルサレナさん、嘆いてたよ？」

「う……」

以前からアーサリムに部族国家の建国を謳っていたルティレイフィアの構想と、フレグンスの現状の国力。

昔サムズを組み込んだ時の事を鑑みるに、無理にアーサリム地方をフレグンス領に組み込むよりも、未成熟な新興国家と早期に国交

を結び、僅かな出兵で美味しい鉱山の採掘権を手にする方が余程都合が良いという事でそのまま交渉を始めたが――

「魔族組織の本拠地を叩く時は攻撃隊に協力しなさい、だってさ」

「そ、そうか。まあ、それなら別に構わない」

オルドリア大陸中に暗躍している魔族の組織を潰す事になんら異存は無い。今現在、私兵を鍛えている最中なので、その時が来たら呼んでくれと、ルティレイフィアは乗り気だった。御小言を貰うより遥かにマシなのだそうだ。

「サクヤとも縁のある者達だそうだな、クルストスで騎士をやっていた」

「……ヴィンスさん達か～」

「会って行くか？」

「ん～～、ん？……止めとく」

神社の精霊が『まだ会わない方が良い』とアドバイスを出したので、朔耶はそれに従う事にした。精霊から何か隠し事の雰囲気を感じ取ったが、特に追求はしない。

朔耶自身、アンバッスの事があるので、彼等とどう接すれば良いのか分からないという気持ちもあるのだ。顔を合わせる時は、アンバッスと一緒に会う方が良いかもしれないと、朔耶はボンヤリ思う。

「……そうか」

ルティレイフィアもクルストス支部での事は聞いていたので、深く追求する事はしなかった。

83話：覆う影

昼過ぎくらいまで隠れ里の小屋でルティレイフィアと過ごしていた朔耶は、修行を終えたヴィンス達が戻ってくる前に隠れ里を発つ事にした。ササの街でミニリアカーの回収もして置かなければならない。

「それじゃあ、あの大きい人には大丈夫だからって言っとくね」
「ああ、宜しく頼む」

ブレブラバントを表す『大きい人』発言に軽く笑いをこぼしながら、ルティレイフィアは飛び去って行く朔耶を見送った。

夕刻前にササの街へと戻った朔耶は、訓練場で穴だらけになってしまった異形の案山子を補修しているブレブラバントに、ルティレイフィアの無事と『お前の判断を評価する』という伝言を伝えた。

「そうか……アイツは無事でしたか」
「居場所は言えないですけどね、元気にしてましたよー」

日が暮れ切る前には各陣地で夕食の支度が始まり、皆が訓練場を後にする。朔耶も帝国の陣地に預けていたミニリアカー（資材の運搬に貸し出していた）を回収すると、一旦自分の世界へと帰還した。

「たっだいま～」

夕食を自宅で摂った朔耶は、着替えやお風呂セットの詰まった荷物を持って庭に出る。今日はレティレスティア達にシャンプーセットをプレゼントした後、サクヤ邸で一泊して明日からまたティルファや帝国を回る予定なのだ。

『じゃ、王都によろしく』
ウム

王宮区画の庭園に転移した朔耶は、途端に締め付けられるような違和感を感じた。悪寒に近いそれは、悪い事が起きる前触れのようなイメージを思わせ、それを肯定するようにフレグンスの精霊が傍に現われて『悪い知らせ』を齎(もたら)せた。

ヤホーサクヤ
『ヤホーって、なんかすっかり挨拶の言葉になってるけど……。ねえ、この変な感じ何？』
オオキナアクイ　オオキナワザワイガ　コチラヲムイテイル

フレグンスの精霊は王都に迫る災いの気配について説明すると、王族を守護する為に城の方へと消えていった。

『王都を覆うような災害級の悪意かぁ……』
コノケハイ　サモンカイノトキトハ　クラベモノニナラヌ

朔耶自身に向けられた悪意が広範囲に王都を覆っているという。これはノンビリ異世界旅行をして過ごしている場合ではなさそうだ

と、朔耶は先ずレティレスティアに交感を繋いだ。

『レティ？』

――サクヤ！　王都に来ているのですか？――

『うん、……レティもこの気配、感じてるの？』

――はい、とても邪悪な気配が王都を狙っているような……酷く不吉な予感がします――

聞けば、精霊神殿の神官たちも交感能力の高い者は何かしら不安な気配を感じていると報告が上がっているらしい。街ではフレグンスの遠征によってアーサリムから溢れた魔物が王都を目指しているという噂が実しやかに囁かれているとか。

『王様たちは何て言ってるの？』

――王都の民に不安を与えないよう、皆には普段通りに振舞うようにと――

『うーん、……それダメな気がする』

――えっ！　だ、ダメですか！？――

朔耶は王都に厳戒態勢を布いた方が良いと提案した。フレグンスの精霊のお墨付きで何か悪い事が起こるらしいと伝えるよう促す。アーサリムの事でまた戦乱の日々が来るのではと不安になっている王都の民に、動揺を招きたく無いという王の判断。

それは朔耶にも理解出来るのだが、フレグンスの精霊の知らせがあった以上、何かが起きる事はほぼ確定事項なのだ。

『何か起きるって分かってるんだから、始めから備えておいた方がいいと思うのよね』

――分かりました。精霊の事もありますし、サクヤが言うならば間違いないのでしょう。そう伝えておきます――

『ん、宜しくねー。あたしもちょっと街を見回ってくるよ』
――気を付けて下さいね、サクヤ。イザとなったら元の世界へ避難して下さい――

交感を終えた朔耶は、取り合えずサクヤ邸に荷物を置きに行こうとして、庭園の向こうに見えている王宮神殿の前に聖騎士団が揃っている姿を見つけた。フューリ聖騎士団長からメイスの回収もやって置こうと、朔耶は王宮神殿へと向かう。

「フューリ～」
「あ、サクヤ様」

フューリ達も王都に漂う悪意の気配を感じているらしく、神殿側としてはどう対処しようかと模索している最中だという。

「何かあった時の為に街民の避難とか誘導の訓練ってのは？」
「なるほど……。明確に対応すべき悪意の正体が分からない時は、何らかの被害を被る恐れのある対象を保護すると」

見えざる災厄の正体をアレコレ推測して無駄に過ごすよりも、来るべき災厄から人々を護る準備を怠るなという朔耶の指摘（フューリの解釈）に感嘆する聖騎士団長。フューリは精霊神殿側にその方向で動くよう薦めると朔耶に告げた。

フューリから回転ヘッドメイスを回収した朔耶は、一気に重くなった荷物を魔法障壁で浮かしながら自分の屋敷であるサクヤ邸へと向かう途中、自分の工房の前を通り掛かって足を止めた。

『これって……』

ウム　ドウヤラココニ　アクイヲ　ムケラレテイルヨウダ

締め付けられるような悪意の圧力をこの一帯に感じる。工房前に立つ警備の衛兵は普段通りで、特に変わった様子は見られ無い。一応声を掛けて何か変わった事は無かったと訊ねてみるも、衛兵からは異常無しの返答が返ってきた。

朔耶は工房の警備を増やして貰うか、或いは外して貰うかしようと考えながら王都の自宅へと向かった。

「お帰りなさいませ、サクヤ様」

「ただいまー」

サクヤ邸に着いた時も一帯に工房と同じ様な圧迫感を感じとった朔耶は、手早く荷物を部屋に置き、回転ヘッドメイスを持って元の世界の自宅庭へと帰還した。精霊とも相談して何か具体的な対処をしなくてはと、弟達にも相談する為に帰還したのだ。

「お兄ちゃん！　工場まで車出して！」

「どうした、そんなに慌てて。　つーか、そのメイス持ったまま迫ってくるな！　マジ怖いからっ！」

『撲殺か！』と戸惑う兄を急かして車を走らせる間、朔耶は王都での出来事を大まかに説明した。何か良くない事が起きるのは確実である以上、此方の世界に戻っている間に向こうで何か起きやしないかと、朔耶は気持ちを焦らせる。

「ふーむ、朔姉に向けられてる悪意か」
「どうしたらいいと思う？」
「まあ、そう焦るなって。先ずは一つずつ片付けていこう」

回転ヘッドメイスの改修を行いながら、朔耶が持ってきた情報を分析する兄弟と幼馴染、それに父。特徴的な点を幾つかピックアップして議論する。

「朔耶の工房や屋敷が特に狙われてるって部分は、対処する方としては分かり易い」
「街の噂ってのも時期的に考えて不自然だよな」
「まあ、十中八九、意図的に流された噂だろう」
「しかもコレ、内容がヒントだらけじゃないか？」

アーサリムの部族との関係は拗れていない事。不安定ながらも建国されていたらしき部族国家との国交樹立。それにより、帝国やティルファとの鉱山の採掘権、領有権についても揉める理由が無くなった事。
魔物や魔獣は、アーサリムの入り口付近では殆ど見掛けない事。鉱山付近にあるという魔族組織の本拠地。

「……なんか、無茶苦茶分かり易いなオイ」
「え？　じゃあ、悪意の正体って……アーサリムの魔族組織？」
「それしか考えられないだろ？」
「穿った見方というか『そう思わせておいて実は……』って考えようと思ってもな～」

向こうの世界で朔耶個人に恨みを持っている可能性のある存在。

それでいて王都全域に災厄を持たせられそうな存在。更にアーサリムとも関係のありそうな存在。

アーサリムに関わる以前から朔耶に対して敵意を懐いていた場合は、もっと前から朔耶はそれを感じ取っていた筈。今の時期に突然それ程に強い悪意を感じ取るという事は、極最近向けられた悪意であると考えられる。

最近、朔耶が関わった出来事で、王都に災厄を齎せられる程の大きな力を持つ相手から恨みを買いそうな出来事といえば、キトの制圧とアーサリム遠征くらいしかない。その何れにも、主に損害を被る側として魔族組織が関わっているのだ。

「あ、ホントだ……無茶苦茶分かり易いわコレ」

「帝国の前皇帝絡みの線も考えてみたんだけどな、王都にそれだけの影響与えられるなら先ず帝都を何とかしてるだろうし」

「そのヨールテスって奴の事を考えると、どう考えても魔族組織の仕業って結論に行き着くよなぁ」

「まあ、悪意の正体は兎も角として、問題は何が起きて、それにどう対処するかだが……」

街に広まった不自然な噂の内容から考えれば自ずと答えは出る。

「魔獣とか魔物とかに街を襲撃させるかもってこと?」

「概ね、そんなトコだろうなぁ」

果たしてそんな事が可能なのかという疑問については、キトの制圧に活躍した竜籠の存在や、城の上階にテラスから易々と出入りする朔耶の行動が、可能である事を示していた。

空を飛ぶ行為自体にまだ馴染みが薄い世界。街の構造そのものに

対空防御という概念が殆ど無いのだ。

「確か、サムズの首都を電撃作戦で制圧したのも、帝国の竜籠を使った空挺部隊だったんだろ？」

「そっか……魔物の空輸かぁ」

籠で運べるのは人や荷物だけにあらず。魔族組織のような力のある規模の大きな組織なら、竜籠の一つや二つ持っていてもおかしくはない。空からの襲撃が予想されるとして対策を考える朔耶達だったが、対空砲火のような迎撃システムが有る訳も無く――

「結局その辺りは王都の警備を厳しくして敵の早期発見と、降下した所を狙うしかないだろうな」

「そういう意味じゃあ、朔姉の提案した厳戒態勢を布かせるのは適切な処置だったと思うよ」

とりあえず、朔耶が此方から出来る事として対魔物用武器である衝撃の篭手Ｔ２の生産予定数残り二十個を、王都を護る衛兵にも配布しようという事になり、今日出来上がっている分の十個を持って行く事にした。

「俺ら今日は徹夜で作業する事にするから、いいよな父ちゃん」

「……まあ、そういう事なら仕方ない。朔耶、危ないと思ったら絶対無茶せず還って来いよ？」

「うん、あたしは大丈夫」

徹夜で残りの衝撃の篭手Ｔ２と回転ヘッドメイスの改修を仕上げて、翌朝にでも朔耶に持って行かせる予定で作業を進める孝文（おとうと）と拓朗（おさなじみ）。父、重孝（しげたか）も娘の異世界の友人達の為に、息子達に混じって作業を手伝う。

朔耶からデジカメを受け取った重雄（あに）は、一旦帰宅して朔耶が撮影して来たアーサリム地方の航空写真をＰＣで纏める事にした。

工場の一角に朔耶の転移用スペースが用意され、今夜と明日はここから転移する。サクヤ邸に置いてある荷物を目標に、衝撃の篭手Ｔ２十個を工場の台車に乗せて、朔耶は王都のサクヤ邸の部屋へと転移した。

「う……」

転移直後、朔耶はぐらりと身体が傾ぐのを台車に捉まって辛うじて踏ん張った。

『転移酔い……？』

ソノヨウダ　キョウハモウ　ヤスンダホウガ　ヨイ

『……これ、配ってからね』

深呼吸をして気分を落ち着けた朔耶はゴロゴロと台車を押して部屋を出ると、衛兵を呼んで篭手の配布を手伝って貰う事にした。

特に悪意の気配が強い『サクヤ邸』と『サクヤ式工房』を護る衛兵に二つずつ、貴族街と開放区を繋ぐ門の門番、開放区と一般区を繋ぐ門の門番、一般区の門番に其々二つずつの配布。

精霊の補佐を受けながらレティレスティアと交感を繋ぎ、家族と相談して導き出した悪意の正体に関する推論も伝えて置く。

――サクヤ？　とても具合が悪そうですが……大丈夫ですか？――

『うん……あんまり大丈夫じゃないけど……大丈夫、一応皆に……伝えておいてね？』

――分かりました、ちゃんと伝えておきますから、無理せず休んで下さい、サクヤ――

『ん……おやすみ』

サクヤ邸の自室のベッドで横になりながら交感を繋いでいた朔耶は、交感を解くと同時に気を失うように眠りにつくのだった。

翌朝――

朝の陽射しがカーテンの隙間から差し込む。部分日焼けしそうだーなどと惚けた思考を巡らせつつ、朔耶の意識は浮上する。

「ふぁ～……」

メザメタカ　サクヤヨ

『ん、おはよ』

サクバンノヨウナ　ムリハ　アマリカンシンセヌ

『はーい、以後気をつけまーす』

一晩休んですっかり回復した朔耶は神社の精霊の御小言に子供っぽく返しながら活動を開始した。

「おはよー！」

早速、父の工場へと帰還した朔耶は徹夜明けの家族達に元気な挨拶を向ける。父はソファーで仮眠を取っていたが、孝文（おとうと）と拓朗（おさなじみ）は徹夜でナチュラルハイ状態になっているらしく、改修した回転ヘッドメイスに色々装飾をつけて遊んでいた。

「って、なにやってんのよソレ」
「おー朔姉、お帰りー」
「見た目も性能もゴージャスあーんどびゅーてぃふるメイスだぜー」

これぞ回転ヘッド等と言いながら頭をぐりんぐりんさせている拓朗に、朔耶はアイアンクローをプレゼントしながらやたら豪華に飾り付けられたメイスを受け取った。真鍮を加工した装飾が柄の部分に施されてあり、しっかり磨かれているので金色に輝いている。

「もー、こんな派手派手にしちゃって……」

持って還ってきた台車にメイスを乗せると、徹夜で組上げられた分の衝撃の篭手T2も積み込んでいく。

『俺たちも手伝いに行こうか？』等と持ちかける未だテンションの高い二人に、朔耶は『今回は遊び気分で行く訳にはいかない』と、クールダウンさせる為に一つ体験談を語って聞かせた。サムズ動乱の日、クルストスの街で見た光景。

「剣で顔の鼻から下をゴッソリ抉り取られて、大量の血をゴボゴボ言わせながら横たわってる人とか、頭が半分無くなって倒れた拍子に中身が散らばってる死体とか、首が折れ曲がってて横から骨が出てる人とか、向こうの戦場ってそんな光景が一杯で――」

「……すまん、悪かった。作った武器が成功してちょっと浮かれてた」
「ごめん朔姉……」

十分頭を冷やさせる効果があったようなので、朔耶は『分かればよろしい』と体験談を止めて転移のスペースに入った。生々しい話

だっただけに、今度は余計に心配させてしまったらしく、二人の不安そうな眼差しがチクチク刺さる。

「もう！　あたしは大丈夫だってば。ただ、拓ちゃん達が作った武器を使う向こうの人達は、普通の人間なのよ」

お腹が空けばご飯も食べるし、眠くなればベッドで休むし、普通に怪我もするし、死んでしまえば魔法で生き返ったりする事も無い。文化の違い以外は此方と殆ど変わらない、普通の人々が普通に暮らす世界なのだ。それは忘れないで欲しいと朔耶は告げた。

「朔姉……」
「朔耶……」
「そ、それじゃ、行って来ます！」

朝っぱらから神妙な空気になってしまった事を誤魔化すように、朔耶はオルドリア大陸の王都へと転移した。

「はぁ……お説教とか、あたしの柄じゃない」
イヤ　ナカナカ　リッパデアッタ

精霊に褒められてちょっと頬を赤らめた朔耶は、昨日に引き続いて篭手を満載した台車を押しながら部屋を出た。その刹那、お腹が食糧を要求するサインを鳴らしたので食事を先に済ませる事と相成るのであった。

「なによ、このオチは……」
ハラガ　ヘッテハ　イクサハ　デキヌモノダ

王都には昨日の朔耶の提案により、厳戒態勢が布かれている。食事を済ませた朔耶は、残りの篭手を何処から配ろうかと思案しながら、先ずはフューリにメイスを渡しに行こうと王宮区の神殿に向かった。

「フューリ～」
「あ、サクヤ様」

街民の避難誘導について訓練場で打ち合わせをしている聖騎士団と神官戦士達の所にやって来た朔耶は、昨日と同じような挨拶を交わしながら、豪華に改修された回転ヘッドメイスをフューリに返す。

質素で無骨なデザインだったメイスが、オールグレンの様な豪華な装飾を施されて返ってきた事に、目を丸くするフューリ。だが、以前のデザインが無骨過ぎた事もあり、装飾されたメイスはそれなりに豪華な聖騎士団の甲冑ともよく似合っていた。

「ああ、意外に違和感なかったね」
「あ、有難う御座います」

性能と使い方に関して、スイッチは以前と同じだが、魔力石の補給が無用になった事でより扱い易くなっている。武器としての面ばかり強調されていた旧デザインに比べると、式典のような席に装備しても祭儀用としてなんら過不足の無い出来栄えだった。

訓練場を後にした朔耶は、篭手の配布先を巡回の騎士達にしようと思いついて王宮区の兵舎に向かう。厳戒態勢が布かれた現状では、

普段の警備兵に加えて王国騎士団も街の巡回を担っている。

一般区と開放区を其々三個小隊ずつで警備兵達と巡回し、貴族街と上流区は四個小隊ずつ。王宮区は近衛が護る事になっている。悪意の気配は開放区から上の区画に入ると急速に薄まっていたので、朔耶は主に開放区と一般区を回る騎士達に篭手の配布を決めた。

そうして朔耶は王都中を飛び回り、悪意の気配の強い場所が他にもないかと歩き回るうちに、王都大学院にも工房やサクヤ邸と同規模の圧迫感を感じた事で、残った篭手を学院の衛兵に預けてレティレスティアに交感を繋いだ。

――それでは、学院も狙われていると？――

『うん、多分』

――分かりました、其方にも兵を回すよう伝えておきます――

『よろしくねー』

暫らく休校にした方が良いのでは？　との提案を挙げた朔耶だったが、大学院側の面子と子供を通わせている家や寮住まいをする生徒達の家々との関係もあり、現時点で簡単に休校を実施する訳にはいかないのだそうだ。

今の時点ではまだ朔耶達が推論した通りの事件が起きるという確証は無い。朔耶が伝えたフレグンスの精霊の知らせも具体的では無かった為、王都全域に厳戒態勢を布く事までは出来るが、それ以上の処置は王室の威厳にも関わってくる。

不安な気配を感じ取れているのは一部の者だけに、まだ何も起きていない現状、警戒も過ぎれば臆病と取られてしまうのだ。

「柵（しがらみ）シガラミかぁ」

ヒトノヨニアリテ　キッテモキレヌ　モノデモアル

昼食を一般区で済ませて夕方頃にサクヤ邸へ帰宅した朔耶は、使用人達を避難させておこうかと考えたが、彼等は『お屋敷を放り出して逃げる訳には参りません』と屋敷に残る事を主張したので、朔耶も条件付きでそれを了承した。

「みんな、イザとなったらお屋敷より自分の身を第一に考える事、いいわね？」

「サクヤ様……なんとお優しい」
「まこと慈悲深きお言葉……」
「こうなっては命に代えてもサクヤ様の屋敷を御守りせねば！」

逆効果だった。

夕食をサクヤ邸で済ませた朔耶は、この騒動が三日後に迫るクリスマスまでに終わらない可能性を考え、藍香と実穂の二人に話を通して置こうと一旦帰還する事にした。工場まで兄に迎えに来て貰い、自宅に着いてから二人に電話を入れる。

『はいはーい！　朔ちゃんの藍香でーーす！』
「テンション高いわね藍……。　あのね、実は――」

そうして二人に『もしかしたら予定が入るかもしれない』と詫びを入れ、その後お風呂に入り、自宅の庭から兄が作ったアーサリム地方の航空写真な地図を持ってサクヤ邸に転移したのは、夜も更けようかという頃だった。

「あら？　サクヤ様……？　てっきりお還りになられたのかと」
「うん、ちょっと用事が長引いちゃってね」

暫らくはこっちに居る事を伝えると、使用人の少女は困ったようにオロオロとし始めた。

「ああ、どうしましょう。先程サクヤ様の御在宅を訪ねて来られた方に、サクヤ様はお還りになられましたと伝えてしまって……」
「ありゃま。まあ、いいんじゃない？　明日も街中ウロウロする予定だから、用事があれば会った時にでも声かけてくるっしょ」

『誰だか知らないけど』と、朔耶は手をヒラヒラさせて気にしないようにと促した。

「フレグンスからの報告では、王都全域に厳戒態勢が布かれているそうです」
「ふむ……、流石に侮れぬは精霊の知らせか。して、首尾は？」
「はい。手筈通り、地下の遺跡跡（いせきあと）から開放区に潜入させてあります。竜と竜籠は先程帰還いたしました」
「よし、其方は取りあえずそれで良い、後は現場の判断に任せる。ポルモーンに侵攻中の部隊はどうなっている」

『王都襲撃作戦』は成功を確信出来る段階まで漕ぎ付けたので一旦思考から外し、ヨールテスは次の問題に取り掛かった。フレグンス、グラントゥルモス、アーサリム地元部族の連合部隊がササの街

に拠点を置いてポルモーン方面まで侵出して来ているのだ。

ポルモーンに拠点を置かれると、渓谷一帯を封鎖されてしまうので色々と動き難くなってしまう。アーレクラワの街は生かさず殺さず維持させる事で、良い素材を拾える人材発掘場でもあったのだが、ポルモーン渓谷は主に狩場であり、実験場でもある。

完璧な魔族の身体を得る為の研究材料は、常に確保されなければならない。

「うーむ……少々ポルモーンの街には人が集まり過ぎておるな。一度散らかしておくか」

「では、指揮特性を埋め込んだ統率種を投入しますか？」

「そうだな、良い機会だ。後の会戦に備えて実験を済ませておこう」

「分かりました」

キルトは礼をして執務室から出て行った。新種の魔物である統率種は、今まで魔物や魔獣を操っていた人狩り達に変わって、魔物自身が他の魔物や魔獣を従えて一個の部隊のように行動する事が出来る。文字通り魔物軍団の構築を可能とする種だ。

「育成に時間が掛かる人狩り共もそろそろ御祓箱だな」

椅子の背凭れに体重を預けながら一息付いたヨールテスはそんな独り言を呟きながら、先程思考から外した王都襲撃作戦の成否に思いを馳せた。ついさっき届いた報告では、戦女神は予定通り今日の夕刻に元の世界へと帰還したらしい。

作戦の決行は恐らく明日の朝になる。

「ふっふ……良い知らせというモノは幾つになっても待ち遠しいモノだ」

８４話：王都の長いようで短い一日【前】

早朝、王都の一般区郊外に散らばる廃墟の中に、ローブを纏った三人の人影があった。彼等は宿泊先の宿から人目を忍んでここに集い、今日実行される作戦について最終打ち合わせを行っている。

三人はアーサリムから魔族組織の要請で派遣された人狩りであった。

「開始は学院の授業が始まる頃でいいか？」

「いや、ガキ共が中央塔のサロンに集まっている時がいい、それを合図に工房と屋敷にも襲撃を掛ける」

「なら学院に予備も入れて格闘種二体と飛行種で行くか、合図に飛行種を使おう」

「そうすると街には格闘種一体と、合図に使った飛行種も回すか？」

王都に持ち込んで地下に隠してある魔物十体と予備一体のうち、今日と明日でほぼ半数ずつ、使い捨てに出来るので最初に命令を実行させれば、後は活動停止まで好きに暴れさせる予定で纏まった。

学院には地下の遺跡跡から侵入し、工房と屋敷には其々馬車を使って運ぶ。朝靄に陽射しが射し込みはじめる頃、打ち合わせを終えた三人は王都一般区の街並みに消えていった。

「おはよー」
「おはよう御座います、サクヤ様」

昨日にも増して悪意の圧迫感が増した事を感じながら目覚めた朔耶は、静かに朝食を摂りながら、ひしひしと伝わってくる予感に意識を集中させていた。

『なんか来そうな予感……』
ウム　ハカイト　トウソウノ　ケハイガ　チカイ

朔耶の普段とは違う、何処か張り詰めた様な雰囲気に呑まれてか、屋敷の中では使用人達も少し緊張気味な様子で奉公に励んでいた。屋敷を警備する衛兵も増員されており、篭手を与えられた者を中心に周囲の警戒に当たっている。

『レティ』
――サクヤ？　どうしました？――
『すっごく、なんか起きそうな予感がする』
――っ！　分かりました、今日は特に警戒するよう伝えます――

レティレスティアに連絡を取り、朔耶は空から王都の警戒に当たる事を告げると、屋敷の庭に出て空を見上げた。

学院に登校する為、ドーソンを伴って一階ホールに降りて来たエルディネイアは、玄関の所で従者と向かい合っている父ランバルト公の姿を見つけた。

「お父様？」

「ん？　おお、ネイア。ドーソン君も一緒かね」

「おはよう御座います、公爵様」

「何かあったのですか？」

ランバルト公の微妙な気配の違いに気付いたエルディネイアが訊ねると、城から『本日は特に警戒せよ』という内容の通達があったという。先日から続いている厳戒態勢により、ランバルト公は度々エルディネイアに自宅待機を勧めていた。

「精霊神官達が感じている災厄の気配がかなり強まっているそうだ。今日は学院を休んではどうか？」

「またその話ですの？　サクヤの言う事ですから信用はしますけど、お父様は少し過敏ですわ」

学院には日々訓練に励む生徒達や実力のある教師も多く在籍している。以前誘拐された時のような軽率な行動さえ取らなければ、少々の事が起きても危険は少ないと、エルディネイアは心配性な父を諫めた。

「例え魔物が現われようとも、返り討ちにしてみせますわ」

その気性と勇ましさが心配なのだがと、ランバルト公は上品で細い見た目とは裏腹に豪傑な中身を持つ最愛の娘に、溜め息を吐いて憂いた。そして傍らに立つ若者、娘の従者として最近は屋敷にも馴

染んで来た青年に眼を向ける。

ランバルト公はこのドーソンという青年が娘の想い人である事を知っている。どういった経緯で知り合ったのかまでは分からなかったが、随分と昔からの知り合いだったようだ。

通常であれば、フレグンスの由緒ある家格を持つ貴族の娘が平民の青年に恋慕するなど、あってはならない事だと叱責モノである。

それも公爵家ともなれば、場合によってはその相手を不敬罪辺りで処刑してしまい兼ねない事態になる所だが、身分や肩書きで相手を判断しない所は、ランバルト公がカイゼル王と親友である所以でもあった。

ブラフニール公爵家令嬢の婿候補として、ドーソンはそのエルディネイア個人に対する一途さにより、ランバルト公から一定の信頼を得ていた。勿論ただ一途であるというダケでは、公爵の”愛娘”の婿に迎える資格に届かない。

『この飄々とした青年は目的の為には手段を選ばないという選択を行える人間だ』と、ランバルト公は見抜いていた。そのドーソンを伴って学院に向かうエルディネイア達を乗せた馬車を、ランバルト公は目を細めて見送るのだった。

「フム……どうにも、戦場にいた頃のような予感を感じるな……」

学院に到着したエルディネイアは先ず中央塔のサロンでチームメイト達と顔を合わせるのが日課だ。今日も何時ものテーブルの席で、

仲間とのミーティングから学院での一日が始まる。　事件が起こったのは、そんな朝の一時（ひととき）だった。

階段付近にある倉庫から飛び出してきた職員が『怪物が出た』と大騒ぎを始め、何事かと倉庫の様子を見に行った他の職員も慌てて倉庫から出て来ると、出入り口の封鎖を始めた。衛兵を呼ぶよう叫んでいる所に、封鎖した倉庫の扉が内側から激しく叩かれる。

「なにかしら？」

「……あの倉庫って、例の通路に繋がる仕掛けのあった倉庫じゃないかなぁ」

倉庫の中には、人狩りに放たれた三体の魔物が蠢いていた。人狩り達にとっていきなりの誤算は、学院の地下通路に繋がる倉庫の仕掛けが封印されていた事だった。仕掛けが作動するか否かの確認までは取れていなかったのだ。

本来ならば、何も知らない生徒達がサロンで談笑している真っ只中に襲撃を行う予定だったのだが、仕掛けが作動しなかった為に格闘種二体による壁の破壊で倉庫に侵入する羽目になり、思いの外丈夫な壁の破壊に手間取っている所を職員に目撃されてしまった。

その為、奇襲は完全に失敗。学院側に迎撃態勢をとる間を与えた。一方、学院の職員達は先日から学院警備に派遣されている衛兵達を呼んで魔物に備えつつも、倉庫の扉は簡単に破壊されたので生徒達の避難までは間に合わなかった。

「魔物だーー！」

倉庫の中から飛び出して来た異形を目にした誰かが叫んだ。細長い体躯に骨と皮だけで出来ているような翼を持つその魔物は、サロンに集まっている人々の頭上を飛び越えて学院の外へと飛び出すと、王都中にまで響きそうな程の音量で奇声を上げた。

鳥とも獣とも付かない魔物の雄叫びに騒然としている所へ、身の丈二・五メートル程の人型をした魔物、格闘種二体が現われた。

「生徒達の避難を早く！」

「攻撃魔術を！」

「巡回中の騎士団を呼べっ！」

衛兵二人が先程飛び出していった空を飛ぶ魔物に警戒しながら騎士団の応援を呼びに走り、教師達は外にも魔物がいるという事で、戦う術を持たない一般職員や生徒達を学び塔の中へと避難させた。

そんな中、日頃から戦闘訓練を受けている一部の生徒達の中には、自主的に迎撃への参加を申し出る者もいた。

「君達は早く避難しなさい！」

「大丈夫ですっ　僕らも戦えます！」

「武器庫の真剣を使う許可を！」

魔術を使う生徒達は既に教師達に混じって攻撃魔術を放っていた。しかし、幾ら戦闘訓練を受けているとはいえ生徒達に実戦の経験は無く、ましてや相手は魔物である。

生徒をそんな危険にさらさせる訳にはいかない。とはいえ、大勢の生徒達を護るには人手不足である事も確かだった。教師達は逡巡の後、魔術による支援と他の生徒達が避難している塔の入り口を護る事を優先条件として迎撃への参加を許可した。

魔物の前に立たせる訳には行かないが、塔の防衛くらいまでなら任せられるという所で妥協。衛兵と教師達で騎士団が到着するまで魔物の足止めを行い、生徒達の所までは行かせないよう踏ん張る覚悟を決める。

二体の魔物が丸太の様な腕を一振りすると、槍で押さえ込もうとした衛兵達はあっさり蹴散らされた。朔耶から衝撃の篭手Ｔ２を渡されている衛兵も近付くに近づけず、またこの武器の性能を正確に理解していないので、中々魔物の懐に踏み込めずにいた。

「くそっ　とにかく生徒達の所へは行かせるな！」
「応援が来るまでなんとしても耐え抜け！」

学院から飛び出した魔物の奇声による合図で、他の場所に待機していた魔物も一斉に行動を開始した。サクヤ式工房とサクヤ邸の近くに停まっていた馬車から飛び出した格闘種は、予め命令されている建物を目指して突進していった。

一般区では市場付近で準備中の布を被せてあった露店のテントから飛び出した格闘種が、近くの露店の屋根を吹き飛ばし、開放区方面から飛来する異形を見て騒いでいた街民達は、突然市場に現われた怪物を見て一斉に逃げ出した。

ゴガアァンという鈍い音が響いて、サクヤ邸の門が拉げる。門

の外を護っていた衛兵は突進してきた魔物を槍で突いて迎え撃つも、突いた槍ごと弾き飛ばされて鉄柵に身体を打ちつけた。まさに撥ねられたと表現していい。

衛兵を撥ね飛ばした魔物はそのまま門に体当たりして、門を拉げさせたのだ。屋敷の敷地を警備していた衛兵達が直ちに集結すると、侵入してくる魔物に備えて防御陣形の隊列を組んだ。やがて門が破られ、敷地内を屋敷に向かって猛進する格闘種。

屋敷の扉を背に決死の覚悟で槍を構える衛兵達。そこへ、乾いた轟音と共に稲妻が閃いた。青白い雷撃が二発三発と連続して魔物の頭を直撃する。流石に効いたらしく、身体を傾がせた魔物は足をもつれさせて豪快に転倒した。

「今よ！　篭手持ってる人！」

上空から響く朔耶の呼びかけに、衝撃の篭手Ｔ２を渡されていた衛兵が弾かれたように飛び出して、のそのそと起き上がろうとしている魔物の頭を目掛けて殴りつけた。ドコンッドコンッという衝撃排出音が連続する。

魔物は起き上がろうとした体勢のまま顔から突っ伏して動かなくなった。篭手の衝撃波が頭部を貫通して、魔物を仕留めたのだ。

「や、やったのか……？」

「こんな……簡単に魔物を……」

仕留めた衛兵は頭部に穴の空いた魔物の死体を呆然と見詰め、自分達の右腕に装備された篭手に畏怖の視線を向けた。歴戦の腕を持つ騎士や魔術士達でも魔物や魔獣を相手取るのは大変だと聞き及び、それは周知の事実である。

にも拘らず、騎士団に所属出来る程の腕も無い一般兵の自分達が、いとも簡単に魔物を退けられたのだ。

二人の衛兵は、大物を仕留めたにも拘らず、興奮も昂揚も湧かなかった。心中に去来するのは只々、朔耶に対する畏怖の念『やはりあの方は、自分達とは根本的に違う存在なのだ』という想い。

そんな衛兵達が見上げた空を、漆黒の翼が軌跡を描いて飛び去って行った。

朔耶は屋敷前で魔物が倒された後、屋敷に掛かっていた悪意の圧迫感が急速に薄れて行くのを感じ、もうここに危険は無いと判断して工房へと急いでいた。あの圧迫感が魔物の襲撃地点を指していたのであれば、工房にも魔物が現われている筈だ、と。

『さっき聞えた鳴き声みたいなのも気になるよね』

ナニカノ　アイズデアッタノカモ　シレヌ

やがて工房上空に辿り着くと、そこには予想通りの光景。先程サクヤ邸に現われた魔物と同じ姿をした魔物が暴れていた。此方は巡回中だった騎士団が応援に駆けつけており、盾を構えて包囲しつつ全方位からチクチクと攻撃を繰り出していた。

通常の槍での攻撃は余り効果が出ていないようではあったが、時折隙を突いて接近しては篭手で一撃入れて離脱する方法で確実にダメージを与えている。魔物の身体からは夥しい量の体液が流れ出た跡があった。

使い捨ての駒として、有るだけの魔力を全て出し切っている魔物は、傷を負ってもその魔力で直ぐに身体を再生して修復してしまう。

従って、本来であればそう簡単に深い傷を負わせられる事など無いのだが、衝撃の篭手Ｔ２は一瞬で身体に穴を穿つ。

「いいぞ！　この調子で仕留めるんだ！」

「こっちの間合いに入れるなっ　篭手持ちは外から背後に回りこめ！」

ぐるりと魔物を取り囲んだ騎士団。その包囲陣の外側を、衝撃の篭手Ｔ２を持った衛兵が魔物の隙を窺って走り回る。

魔物が包囲陣の一角に攻撃を仕掛ければ、攻撃を受けた騎士達は槍と盾で魔物の気を惹きつけながら耐え、その隙に背後から駆け寄った衛兵が篭手で一撃入れて離脱。頭部には手が届かないので腕や背中、腰、脇腹等に攻撃が集中している。

しかし、それだけのダメージを受け続けているにも拘らず、魔物の攻撃も熾烈なものだった。騎士団の盾は一つして無事なモノは無く、もはや原型を留めていない盾としての効果を失った鉄屑（ガラクタ）が其処ら中に打ち棄てられている。

何人か戦闘から脱落した者が工房の塀の横まで運ばれ、そこで折り重なるように倒れていた。朔耶は包囲されている魔物の頭に六発ほど雷撃をぶつけると、倒れている騎士や衛兵の傍に降りて癒しの光で包み込む。

拉げた甲冑の一部が身体にめり込むなど、重傷を負っている者が殆どだが、幸いにも死者は出ていなかった。例え虫の息でも、生きてさえいれば強力な精霊の癒しで治癒する事が出来る。そうして朔耶が負傷者を全員回復させる頃、背後で歓声が上がった。

「やった！　魔物を仕留めたぞ！」

「凄い武器だぞこれは、流石はサクヤ様だ」
「サクヤ殿！　我等にも治癒をお願いします！」

此方の衛兵や騎士達はサクヤ邸の衛兵と違い、全員で協力しあって苦労しながら魔物を倒したからか、強力な武器に対する畏怖よりも魔物を仕留められた事に士気を上げている。
朔耶の能力と武器に頼り切った勝ち方では無かった事が、彼等の思考をポジティブな方向に働かせていた。

全員を精霊の癒しで治癒した朔耶は、この一帯からも悪意の圧迫感が消えて行くのを感じ、次の場所を目指して空へと舞い上がる。
丁度その視界の先に、一般区の建物ギリギリの高度を飛び回る異形の姿を見つけた。
時折、矢や氷塊が異形を目掛けて地上から射ち上げられているが、何れも躱されているようだ。

『あれって、魔物だよね？』
モウイッタイ　チカクニイルゾ

朔耶は一般区の市場を目指して飛んだ。

一般区の市場では、出動して来た聖騎士団によって負傷者の治癒と街民の避難誘導が行われていた。
多少の混乱はあったモノの、皆ここ最近の厳戒態勢と例の噂によってある程度の心構えが出来ていたせいか、避難は比較的スムーズに進んでいた。市場で暴れる格闘種の魔物は、聖騎士達が目眩ましの光弾を浴びせ続ける事で足止めしている。

上空を飛び回って時折風の刃を放ってくる飛行種には、攻撃魔術と弓で牽制。此方は巡回中だった騎士団二個小隊が駆けつけてくれたので、聖騎士団の負担はかなり軽減されていた。騎士団に同行していた魔術士が活躍している。

街民を強化防壁で囲んだ避難場所へ誘導し終えると、次は魔物の討伐に動く。一般区と開放区の区画門を護っている衛兵や巡回の騎士達の中で、朔耶から衝撃の篭手Ｔ２を借り受けている者が集まって急遽部隊を編成した。

「他に巡回中の騎士団は？」

「学院にも魔物が出ているらしく、半数が其方に向かうようです！」

「これ以上の増援は期待できないか……仕方が無い、聖騎士団と連携して我々だけでどうにかするぞ」

上空を飛び回る魔物対策に魔術士隊の援護も欲しい所であったが、彼等は近衛達と王宮区画や上流区の警備に回っている。現状は巡回の騎士団にレイス宮廷魔術士長が就けてくれた魔術士隊の二人で何とか牽制して凌いでいた。

地上にいる魔物は聖騎士団が放つ光弾の目眩ましが効いているので、空の魔物と連携されない内に倒してしまおうと、王国騎士団と衛兵の混合部隊を指揮する小隊長は考えた。

彼等の視線の先では、視界を奪われて盲滅法（めくらめっぽう）に腕を振り回し、辺りの建物や露店を破壊している魔物の姿があった。

混合部隊から援護を要請された聖騎士団は、フューリ団長が魔物

の足止めを行う為のメンバーを選抜していた。なるべく戦闘能力の高い者を選び、他は後方で避難した街民の警護と負傷者の治癒に回す。

一般区の神殿で待機し、騒ぎが起きてから直ぐに駆けつけたので避難も順調に進んだが、もし厳戒態勢を布いていなかったならば、街民にどれ程の犠牲が出ていたかと考えて、ぞっとするフューリ。

「二人、上空の魔物を牽制する魔術士隊を補佐しろ！　残りは私に続け」

選抜したメンバーを率いて混合部隊と合流するフューリは、市場で暴れる魔物を取り囲むように団員を配置し、常に魔物の眼を狙って光弾を放つよう指示を出した。そうして同じ様に周囲を取り囲んだ混合部隊が隙を見ては近付き、一撃離脱を繰り返すのだ。

魔物はぶつかる感触の無い光弾がどの方向から飛んで来るのか判らない事と、周囲の人の気配も多過ぎて攻撃対象が定まらず、只管自身の回りを攻撃していた。何かにぶつかればそれを攻撃、とにかく手当たり次第であった。

それだけ暴れ回っていてもまったく疲れた様子を見せない魔物に、このまま放って置いては市場が壊滅してしまうと此方から攻める決断した混合部隊長の指示により、衝撃の篭手Ｔ２を装備した衛兵と騎士達が背後からそっと近付いて行く。

そこへ、上空の魔物が奇声を上げた。それに反応するように、格闘種の魔物は背後に振り向いて腕を振り回しながらの突貫を敢行する。突然の事に反応しきれず次々と撥ね飛ばされる混合部隊の衛兵や騎士達。

混合部隊は撥ね飛ばされながらも何人かが篭手で反撃を試みた。その結果、魔物の片腕の拳を破壊、身体に幾つかの傷を負わせる事が出来た。身体の傷は直ぐに再生してしまったが、拳の骨の再生までは時間が掛かるらしく、魔物の攻撃範囲が半減した。

魔物の拳と正面から篭手で打ち合って砕いた騎士は腕を骨折してしまった為、直ちに後方へ下がって治癒を受ける羽目になった。

「むっ　いかん、奴等連携を始めたぞ！」

「魔術士は空の奴の足止めを！」

「ダメだ、動きが速過ぎて当たらんのだ」

上空の魔物は牽制役だった魔術士隊の氷塊と聖騎士の光弾をひらりひらりと躱しながら無視を決め込み、格闘種の頭上で旋回しつつ奇声で誘導、目眩ましの光弾を浴びせていた聖騎士団に風の刃を放って隊列を崩すと同時に格闘種を突進させる。

まともに体当たりを受けた数人が戦線から離脱した。フューリはとにかく目眩ましの光弾を切らさないよう放ち続けるよう指示を出すと、回転ヘッドメイスを構えてスイッチを入れた。

このメイス独特の駆動音に釣られた魔物が、自分の方へと向く瞬間を狙って光弾を放たせる。メイスの駆動音を目指して突進して来る魔物の体当たりを避け、すれ違い様に一撃、足元へ叩き込んだ。

巨大な鉄塊にでも叩き付けたかのように弾き返されたが、それなりに効果はあったらしく、魔物は片足を掬われたように転倒した。その隙を狙って篭手の一撃をくれてやろうと混合部隊が駆け寄るも、上空から降り注ぐ風の刃に阻止される。

「ちぃっ　ええい！　上の奴を何とかせねば――」

カアァァン

混合部隊の騎士が苦々しげに空見上げると、彼等を嘲笑うように旋回していた魔物がいきなり雷撃に打たれた。

「稲妻落としーー！」

カアァァン　カアァァン　カカアァァン

二発三発と雷撃が突き刺さり、空を舞っていた魔物は地上へと墜落する。帯電させた漆黒の翼を紫色に輝かせ、難敵だった飛行種の魔物を稲妻で叩き落してくれた『フレグンスの戦女神』の登場に、地上の騎士達が湧き立つ。

地面に叩きつけられた魔物は背中と翼部分から白煙を上げながら起き上がろうと蠢くも、気付いたフューリがメイスでトドメを刺した。残った格闘種も攻撃魔術と光弾、それに朔耶の雷撃で動きを封じ、混合部隊の一斉攻撃で仕留める事が出来た。

「市場は滅茶苦茶になってしまったが、人的被害は最小限に抑えられたな……」

まるで竜巻でも通り過ぎたかのような有り様となった市場の惨状を見渡しながら、フューリは街民に魔物の犠牲者が出なかった事を喜んだ。騎士団や衛兵の負傷者は、朔耶の強力な癒しによって重傷を負っていた者も一命を取り留めている。

手の施しようがない状態で即死した者も居て、朔耶は悲しげに俯いていたが、皆から『寧ろこの程度で済んだのは幸運だった』と慰められていた。その後すぐ、飛行種が学院から飛び出して来た事を聞いた朔耶は、学院に向かうと言って飛んで行った。

朔耶が飛んで行った方向を一度見遣ったフューリは、部下達に周囲の警戒と市場を片付ける準備を指示する。

「学院か……、生徒達が皆無事であれば良いが」

85話：王都の長いようで短い一日【中】

「撃て撃て！　とにかく魔術を撃ち続けるんだ、間を空けるな！」
「騎士団はまだか！」

学院では魔物との攻防が続いていた。人手が足りない為、護りに強い騎士スタイルの生徒とそのチームメイトが生徒側の中心となって二体の魔物の内の一体を引きうけ、教師達と衛兵がもう一体と対峙している。

しかし、どちらも牽制による足止めが精一杯。下手に近付くのは危険なので、距離を置いて近寄らせない方法を取っていた。
騎士スタイルの生徒は、以前エルディネイア達が使った魔術の三段打ちを利用して、間を空けず魔術を撃ち込み続ける事でどうにか魔物の足止めを行い、特に足元を凍らせる方法で厄介な突進攻撃を凌いでいた。
消極的な戦い方にエルディネイアは不満を口にするが、この方法が良いとドーソンが諫めていた。

「こんなやり方で倒せますの？」
「僕らの力で倒そうなんて考えない方がいいと思うよ？」
「んもうっ　貴方には少し気概が足りませんわっ！」

そんなやり取りをしつつ、エルディネイアやドーソン達のような近接戦闘タイプの生徒は、魔物の足元に水を撒く役を担っていた。

魔術士達が只管攻撃魔術の弾幕を撃ち続ける間、井戸から汲んで来た水をバケツリレーの要領で運び、魔物の足元に撒き続けてそれを魔術で凍らせる事で動きを封じるのだ。突進攻撃さえ封じる事が出来れば、まだ暫らくは持たせる事が出来る。

エルディネイアは口では文句を言いつつも、内心ではこの足止め方法を思いついたドーソンを称賛していた。当初、教師や衛兵、生徒達は魔物の突進を受ける度に負傷者が増え、魔物も突進攻撃に効果があると学習して頻繁に突進を繰り返すようになった。

テーブルや椅子等サロンの備品が次々と破壊されていき、遮蔽物が少なくなって魔物の巨体が動き回り易くなる事で、その効果は顕著に現われた。撥ね飛ばされた生徒や衛兵が仲間を巻き込んで隊列を崩し、それが更に大きな被害を生んだ。

一時は組織的な抵抗が出来なくなるほど混乱し、逃げ惑う生徒達を魔物が追い回すという状況にまで至った。

そんな時、倉庫から穀物袋を持ち出して来たドーソンが目前の獲物に夢中になっている魔物の顔面に叩きつけて中味をぶちまけ、暫らく目潰しになった所に、転がっていた水差しの水を魔物の足元に撒いて魔術で凍らせるよう指示を出した。

咄嗟に反応した教師によって瞬時に氷結した水差しの水は、ほんの一瞬とはいえ魔物の片足を床に縫い付けた事で魔物を転倒させたのだ。そこから直ぐに水系の魔術士と風系の魔術士が魔物の足元を徹底して凍らせる事で動きを封じ、現状に至っている。

ドーソンがこの足止め方法を思いついたのは、数日前に王都で発表されたキト制圧での戦闘の様子に、そういう方法で敵軍の足止めをする内容があったのを覚えていたからであった。レイスとフレイ

の事を朔耶繋がりでよく知っていた事も関係している。

「はぅ～～、くらくらしてきましたわ～～～」

「ルー、疲れたのなら無理せず休んだ方が良いですわ」

エルディネイアが率いるチームメンバーの中でも特に体力の無い支援魔術士のルーネルシアがバテ始めたので、休むよう促すエルディネイア。魔術士嫌いのエルディネイアもチームメンバーには気を許している。

中でも、この語尾の延びるおっとり系なお嬢様であるルーネルシアは学院で最初に出来た友人であり、色々と精神面で支えられていた事もあった。エルディネイアにとって一番付き合いの長い、親しい『親友』であったりもするのだ。

「そうさせてもらいますわ～～……」

彼女がよろよろと陣形の後方へと歩き出した時――

「やばいぞっ！」

「後ろの奴に気をつけろ！」

教師と衛兵達で足止めしていた魔物が、生徒達の足止めしている魔物の背後に転がり込み、二体が合流を果たした。闘争本能と残忍さで襲撃に選ばれた魔物にも、同じ手口の足止め方法を繰り返していればそれを破る手立てを思いつくだけの知性はある。

攻撃魔術による激しい攻撃に曝されながらも、それらが自分達にとって殆どダメージにならない事を理解した魔物は、先程のように

突進すれば獲物達の動きが乱れる事を判っていた。

とにかく獲物の中に飛び込んでしまえば良いという結論に至った魔物は、教師や生徒達が予想だにしなかった行動に出る。あろう事か味方の魔物を抱え上げると、そのまま生徒達の集団に目掛けて投げ付けたのだ。

思わず飛び退く生徒達。攻撃魔術の弾幕が弱まり、魔物を投げ付けた魔物も陣形が崩れた生徒達の集団へと突進を始めるが、魔術士の教師が必死に氷塊を撃ち込む事でその魔物の足を滑らせ、何とか転倒させる事が出来た。

投げ込まれた魔物は横向きにサロンの床へと落ちたが、そのまま反動で素早く起き上がると咆哮を上げながら獲物よ爪に掛かれとばかりに腕を薙いだ。何人か逃げ遅れた生徒が巻き込まれ、血飛沫を上げながら床に投げ出される。

致命傷には至らずともショックや深い傷を負った事で彼等は動けなくなった。救出に動こうとした生徒達を威嚇するように、爪から血を滴らせる魔物がゆっくり立ち上がる。魔物はようやく気分を昂揚させてくれる血液の良い匂いを嗅ぎ、興奮し始めた。

「ルー！　早くっ　早く立って逃げなさい！」

爪に付いた血を舐めとりながら迫る魔物。その一番近い所に倒れているルーネルシアは、エルディネイアの声に反応して僅かに顔を上げた。そうして身体を起そうとするも、右足の焼けるような激痛に呻いて崩れ落ちる。

彼女の右足は太腿がザックリと裂け、夥しい量の血が流れ出てい

た。深手を負い、動けなくなった事を悟ったルーネルシアは哀しげな微笑みを友人達に向ける。まるで此処でのお別れを詫びるような表情に、エルディネイアは全身の血を沸騰させた。

「諦めるなんて許しませんわっ！　皆さん援護を！」

エルディネイアはそう叫ぶと、細剣を構えて飛び出していった。止めようとしたドーソンの手が既(すんで)の所で届かず宙を掻く。散発的な攻撃魔術が援護として放たれる中、ドーソンはエルディネイアを追って駆け出しながらポケットの中の物を掴んだ。

援護の攻撃魔術に殆ど効果は無かったが、多少魔物の気を惹く事は出来た。僅かな間でも血溜まりに倒れるルーネルシアから狙いを逸らせる事が出来れば、救出のチャンスはある。エルディネイアは一気に距離を詰めると、気合いを籠めた一撃を繰り出す。

「やぁあああっ！」

魔物の喉元目掛けて突き出された細剣は、僅かに切っ先が刺さった所で固い皮膚に阻まれて止まってしまった。反動で身体が流れ、体勢を崩した所に伸びてきた魔物の大きな手が、エルディネイアの細い首を鷲掴みにする。

「っ……ぁぐ……かはっ」

そのまま首を握り潰そうとした魔物はエルディネイアの苦悶の声に残虐性が刺激されて昂り、じわじわ縊り殺す事に変更した。片手でエルディネイア宙吊りにした魔物は、足元に倒れ伏しているルーネルシアにも手を伸ばす。

生徒達から怒声や絶望の悲鳴が上がる中、躊躇無く魔物の正面に飛び込んだドーソンは、恐怖を軽口で誤魔化しながら、エルディネイアとチームメイトを救いたい気持ちを勇気に変換して、なけなしの『策』を打つ。

「やあ、両手に花だね魔物君」

中腰状態になっている為、丁度手が届く位置にある魔物の顔面目掛けてドーソンは両手に握った穀物の粉を叩き付けた。

先程、倉庫から持ち出した穀物袋をぶちまけた時に自身も大量に粉を浴びており、それが上着のポケットにも入り込んでいたのだが、ポケットを引っくり返している暇も無かったのでそのままになっていたモノを、咄嗟に目潰しに使ったのだ。

「グゴォオオォ！」

両手が塞がっていた魔物は両目に粉を擦り付けられ、まともに目潰しを喰らった為うっかり獲物を放してしまった。

ドーソンはすぐさま倒れているルーネルシアを抱え起こすと、尻餅を付いて咳き込んでいるエルディネイアを引き摺るように抱き寄せて離脱を図った。魔物が目に付いた粉を払おうと顔を覆って暴れている隙に、救出に動いてくれた生徒仲間が駆け寄る。

「彼女を頼む、早く治癒を！　エル、もう少しだから頑張って」

「ゴホッ……だ、だいじょうぶですわ……」

重症のルーネルシアを他の生徒達に任せると、ドーソンはエルディネイアに肩を貸しながら、陣形を組み直している生徒集団の方へと急いだ。その時、生徒の誰かが『危ない！』と叫ぶ。

同時に背後の気配を感じ取ったドーソンは、殆ど反射的にエルディネイアを突き飛ばした。次の瞬間、ドーソンは凄まじい衝撃を背中に受けて床に叩きつけられた。一瞬で身体中の力を気力ごと吹き飛ばすような威力に、ドーソンは咳き込みながら呟く。

「ゲホ……ッ　きついね、これは……」

「ドーソン！」

魔物の凶撃から危うく難を逃れたエルディネイアは、血を吐いて床に倒れ伏すドーソンに駆け寄ろうとした。しかし、目の回りを粉で白くした魔物が直ぐ近くに立っており、今近付けば間違いなく察知される。ドーソンはエルディネイアに逃げるよう促す。

「来るな、エル……にげるんだ……」

「嫌ですわっ！」

エルディネイアがドーソンに駆け寄ると、まだ視界が戻りきっていない魔物が大凡の位置に当たりを付けて腕を振るった。体勢を低くしてそれを躱すエルディネイア。

仲間の生徒達からも援護の魔術が飛ぶが、味方の位置が近いので弾幕のように撃ち捲る事は出来ない。

「さあっ　早く此処から逃げますわよ！」

助け起こそうとするエルディネイアだったが、ドーソンは割と長身で細身だが大柄な方だ。鍛えているとはいえ、華奢な身体付きのエルディネイアでは力が抜けきった状態の自分よりも大きい相手を抱え上げるには無理があった。

「動けそうにないんだ……エル、逃げてくれ」
「嫌ですわ！」
ならば引き摺ってでもとドーソンの服を掴んだエルディネイアは、踏ん張ろうとしてそのままペタリと座り込む。そこで初めて自身の足腰に力が入らない事に気付いた。先程首を絞められたダメージがまだ残っていたのだ。
「頼むよ……逃げてくれないかなぁ」
「嫌っ！」
とうとう、ドーソンに縋り付いてその場に蹲ってしまうエルディネイアに、ドーソンは此方を狙って振り上げられた魔物の腕を、エルディネイアの金髪越しに眺めながら、何時ものノンビリした口調で困ったように呟いた。
「……もう～、ほんとに君は頑固だなぁ」
「儂もそれで苦労しているよ」
石の壁をも砕く丸太のような魔物の腕が振り下ろされる直前、二人を庇うように飛び込んで来た人影がそう答えた。
魔物の腕が振り下ろされ、ズシィィンという重い衝突音がして床の一部が沈む。厚幅の大剣を背中に背負う体勢で魔物の攻撃を受け止めたのは、オレンジ色の重甲冑に身を包んだランバルト・クルツトフ・ブラフニール公爵その人であった。
嘗て『大剣のランバルト』と謳われ、フレグンスの双璧として『槍のカイゼル』と並び称された武人である。
「お、お父……様？」

「ネイア、伏せていなさい」

ランバルト公はそう言って身体中に力を漲らせると、床にめり込んだ足を一歩踏み出す。

「ぬうおおおお！」

魔物の一撃を受け止めた体勢から覇気の気合いで押し返したランバルト公は、身体を大きく振って身長ほどもある厚幅の大剣に遠心力を付けると、ブォオオッという風を薙ぐ音を響かせながら魔物の顎に叩き付けた。

その破壊力と衝撃に、脳を揺さぶられた魔物はよろけながら二歩三歩と後退る。其処へ一斉に飛び掛る王国騎士団の騎士達。

「騎士団が来たぞーー！」

「助かった……今の内に生徒達を安全な場所へ」

「負傷者の治癒を優先しよう」

もう一体の魔物と対峙していた教師と衛兵は、騎士団の到着で生徒達に下がるよう指示を出した。負傷した者を安全な場所で治癒する為に避難場所の塔へと移動させると、避難場所の入り口は教師と一部の生徒が護り、魔物の相手は騎士団と衛兵に任された。

ここまで魔物の足止めをする為に魔術を放ち続けていた為、教師も生徒も魔術士は皆疲労で倒れる寸前の状態であった

「魔物を包囲し、決して避難場所へ近付かせるな！　サクヤ殿から武器を預けられている衛兵は突撃の準備をしておけ！」

衝撃の篭手Ｔ２の性能ついて、アーサリムからの情報を得ていたランバルト公は上手く使えば魔物でも楽に倒せる筈だと睨んでいた。

学院までの道程で合流した騎士で、サクヤ式工房を護る衛兵の救援に出向いていた者達による証言もある。

「直ぐに味方の増援も来る！　皆気合いを入れて行け！」

一般区の市場から学院へと飛んで来た朔耶は、学院の前に門番の衛兵が一人も居ない事に気付いた。そして中央塔の方からは何時かの大規模戦のような大勢の人々の声。但し、模擬戦の時のような応援の歓声ではなく怒声や悲鳴が中心だ。

『急いで！』
コチラモ　ニタイオルゾ　チュウイセヨ

市場での戦いで二体の魔物を相手にした騎士や衛兵に死傷者が出た事により、朔耶は気持ちを焦らせる。
此処には多くの生徒達が居て、エルディネイア達のように戦闘訓練を受けている者もいるが、生徒や職員の半数は戦いとは無縁の人達なのだ。最悪の事態が頭を過ぎる。

「みんな、無事でいて」

朔耶は祈るように呟いて中央塔の入り口前に着地した。その瞬間、甲冑に身を包んだ騎士がぶっ飛んで来た。
咄嗟に漆黒の翼で包み込むようにして勢いを抑える黒の精霊とその指示を出した神社の精霊。飛んで来た若い騎士は朔耶の足元にそっと下ろされた。甲冑の前面が胸部から腹部全般に亘って拉げている。

まだ息はあったので、直ぐに精霊の癒しで治癒しつつ、朔耶は拉げた甲冑を剥がしに掛かった。

「ぐ……サ、サクヤ……殿」

「喋っちゃダメ。肺がやられてるみたいだけど、直ぐに治すからね」

騎士は安心したように身体の力を抜いて目を閉じた。治癒をしている間も、中央塔からは絶え間なく戦闘の音が聞こえて来る。その中に、朔耶にも聞き覚えのある声が騎士達を指揮していた。

「あれってランバルトさん……？」

治癒を済ませた朔耶は、魔物との激しい戦闘が続くサロンへと飛び込んでいった。

「足を狙えっ！　引き倒して頭を潰すんだ！　篭手を持つ者は正面に立つなっ　回りこめ！」

サロンの壁に埋め込まれたランプ等は既に殆どが戦闘によって破壊されており、薄暗く視界の悪い状態での戦闘は思いのほか困難を極めた。暗い中でも視界の利く魔物は自在に動き回り、騎士達は時折攻撃の間合いを測り損ねて強烈な一撃を貰ってしまう。

先程吹き飛ばされた騎士も、あと半歩下がれば甲冑を掠めて躱せる判断をしたのだが、薄暗い視界の錯覚によって距離を誤った。

二体の魔物が連携して動き始めた事も攻め難くしている。一体の背後に回り込もうとしても、もう一体がそれを警戒するので、篭手

を持つ衛兵も全く近づけずにいる。幾ら性能の良い武器を持っていても、それを扱う者に魔物と正面から遣りあえる程の腕は無い。

「ぐあっ！」

また一人、攻撃の軌道を読み違えた騎士が包囲陣から弾き出された。甲冑の背中からガリガリと火花を散らしながら床を滑って行く。直ぐにその穴を埋めようと動く騎士達だったが、それよりも先に連携する魔物が包囲網から飛び出した。

魔物の向かう先は教師と生徒が護る避難場所の入り口。

「いかんっ！　奴を止めろ！」

数人の騎士と衛兵が追いかけるが、魔物の方が足が早い。避難場所の入り口を護る教師と生徒は武器を構えて迎撃態勢を取る。魔術を使える者は疲労により避難所へと下がっているので、此処を護るのは近接戦闘タイプの者達ばかりだった。

「こうなったら、接近職の打たれ強さで耐えるしかないっ」

「後ろ向きですね、先生……」

騎士スタイルの生徒は教師にツッコミながら、盾を構えて足を踏ん張った。此処を突破されれば、悲惨な事態は避けられない。考えたくも無い仲間達を襲う死の想像を振り払い、迫り来る魔物を睨みつける。

「精霊よ――どうか我々に守りの加護を」

誰かが祈りを呟いた瞬間、魔物の横面に閃光が突き刺さった。その閃光が飛んで来た方向から、光を纏い、漆黒の翼より紫色に光る

軌跡を残しながら飛んで来る朔耶の姿。

「イ　ナ　ズ　マ――――」

突然振って湧いた巨大な力の気配に思わず足を止めて振り返る魔物。急接近した朔耶は、雷を纏わせた右の一撃を叩き込む。

「ひざかっくん！」

魔物の膝の裏に雷光のミドルキック。脱力しそうなネーミングだが威力は凄まじく、魔物は片膝を付いた。間髪を入れず、左のハイキックが魔物の顔面を捉え、小柄な少女が放った蹴りとは思えない程の威力は魔物を仰向けに転がした。

「今よ！　篭手使って！」

朔耶はすぐさま後を追って来ていた篭手を持つ衛兵に攻撃の指示を出す。追って来た勢いそのまま、フレグンスの戦女神がいるなら怖くないとばかりに魔物に飛び掛った衛兵は、衝撃の篭手Ｔ２で殴りつけた。

ドコンッドコンッと衝撃排出音が響き、衝撃波に頭を貫通された魔物は動かなくなった。衛兵達はアレほど苦労した魔物をアッサリ打ち倒す戦女神（さくや）の力と篭手の威力に感嘆する暇も無く、もう一体の魔物へと意識を向ける。

その時、薄暗いサロンがぼんやりした明かりに満たされた。朔耶が照明代わりに光の玉を大量に浮かべて視界の確保に動いたのだ。明かりを得た騎士達は動きが洗練され、魔物の攻撃を尽く紙一重で躱しては一撃返す余裕も生まれた。

ただ、どうしても決め手に掛ける為、篭手を持つ衛兵は直ぐに包囲に加わると魔物の隙を窺って走り回る。
朔耶は此処へ来るまでに培った魔物に有効な方法で彼等をサポートした。魔物の頭に雷撃を一発二発三発四発五発六発七発八発九発ほど撃ち込んだ所で魔物が倒れ、其処に駆け寄った衛兵が篭手の衝撃波を打ち込んで仕留める事が出来た。

「ふう、倒せたか……サクヤ殿が来てくれなければ危なかった」
「サクヤ殿は何処に？」

魔物の殲滅を確認した騎士達は座り込んで一息付くと、最後に強烈な雷の魔術を放った朔耶の姿を探す。朔耶は避難所に入って負傷者の治癒をしていた。

「よしっ　これでもう大丈夫」
「ありがとう御座います、サクヤ様……。凄いですわ～～もう傷痕すら残ってませんわ～～～」

最も重症だったルーネルシアを完治させ、避難所の負傷者を全員癒し終えた朔耶は他の場所を警戒する為に避難所を出ようとする。まだ何処かに魔物が現われているかも知れないので、王都を空から監視するのだ。

「お待ちなさいな、貴女も疲れてるのでしょう？　少し休んでお行きなさい」
「ルディ……。　でも他の場所も見てこないと、まだあんなのがいたら危ないし」
「そんなの、巡回の騎士団に任せておけば良いんですわっ　貴女、

顔色が悪いですわよ？」

エルディネイアはそう言って少し強引に朔耶を椅子に座らせた。他の生徒が直ぐに水を持ってきてくれる。朔耶は礼を言って受け取り、喉を潤すと、身体に染み渡るような感覚が気持ちを落ち着かせた。朔耶は自分が思っていた以上に疲れていた事を実感する。

「ありがとう、ルディ」

「そ、そんなの、こっちの台詞ですわっ　……ありがとうサクヤ、友達を助けてくれて」

顔を赤らめて口篭りながら礼を言うエルディネイア。まだ素直な感謝の気持ち等を口にする事には慣れないらしい。

「ルディって、時々可愛いね」

「っ！」

殺伐とした避難所の喧騒の中、エルディネイアの反応を見た朔耶は、普段とのギャップに和むのだった。

86話：王都の長いようで短い一日【後】

昼過ぎ。郊外の廃屋に集まった人狩りの三人は、王都に放った魔物が殆ど役目を果たさないまま撃退されてしまった事態に困惑していた。異世界に還った筈の戦女神も襲撃直後から現われるなど、事前に聞かされていた情報と展開が異なる。

「どうなってるんだっ　これじゃあ話が違う！」

「落ち着け、戦女神はきっと精霊の知らせを聞いてこっちに来ていたに違いない」

「しかしこれからどうする、残りの魔物も今すぐ出すか？」

明日の襲撃の分を出すか否かで揉め、また『先の襲撃はサクヤ個人への報復である』という声明を出すべきか否かでも揉める。今の状況で声明を出しても、王都の民が『サクヤ』に対して猜疑心や敵意を持つとは到底考えられない。

寧ろ街民にも学院の生徒にも犠牲を出さず、魔物を片っ端から撃退して回った事で『魔族組織恐れるに足りぬ』と、返って『フレグンスの戦女神』に対する信望を増やしてしまうだろう。

「とにかく、今は王都中が警戒している筈だ。戦女神もいるし、出しても直ぐ倒されては意味がない」

「……そうだな、ここは予定通り明日まで待つか」

「ヨールテス様には何て報告すりゃいいんだ？　ここまで順調に進

めた計画を実行段階で失敗しましたなんて言った日にゃあ……」
「衛兵共が使っていたあの武器の事もある、戦女神の滞在周期予測が外れた事も一緒に報告すりゃあ大丈夫だろう」

明日はもっと慎重に、時期と場所を選んで魔物を放つという方向で対応の趣旨を纏めると、三人は廃屋を後にした。

サクヤ邸に戻った朔耶は一先ず昼食を済ませてから城へと出向く。今の所、他にも魔物が出たという話は上がっていないが、未だ王都を覆う悪意の気配は消えていなかった。
昼のお務めを終えて執務室から出て来たレティレスティアが、テラスから城に入って来た朔耶を見つけて駆け寄る。

「サクヤ！」
「レティ、お城の方は何もなかった？」
「はい、貴族街から王宮区までは特に騒ぎは無かったそうです」

魔物が現われたサクヤ邸、サクヤ式工房、王都大学院、一般区市場にはレイス宮廷魔術士長率いる魔術士隊が調査に向かっており、精霊神殿は聖騎士団を街の警戒に当たらせ、街中に派遣された神官戦士達が街民から魔物の出現について話を聞いて回っている。

「てっきり空から来ると思ってたのに、学院なんて地下から出て来たんだってね」

封印されていた学院の地下通路と繋がる郊外の廃墟にも調査隊が向かっていると聞き、朔耶は王都から悪意の気配が消えないのはまだ潜伏中の魔物がいるのかも知れないと危惧する。

「魔物を王都に入り込ませるなんて……、一体どうやって」
「もしかしたら、学院の地下通路みたいなのが街の下にまだ沢山伸びてるのかも」

王都の内と外を繋ぐ隠し通路の存在を指摘する朔耶に、レティレスティアは土地の歴史に詳しい者から話を聞くよう調査隊に指示を出す事を考えた。王都の地下には巨大な遺跡の街らしき建造物が埋まっていると謂われている。

「あたしもそっちの方から探ってみるよ」
「無理はしないで下さいね、サクヤ。私は母様に今の話をしてきます」

レティレスティアと別れた朔耶は、調査隊が出向いている廃屋敷へと飛んだ。

「あ、サクヤ様」

屋敷の周辺には、調査に来ている魔術士隊が集まっていた。入り口付近にいたフレイが朔耶を見つけて声を掛ける。レイスは屋敷の中庭にある井戸とその奥の地下通路を調べていた。

「フレイ達も此処のこと調べてたんだ？　何か分かった？」
「いえ、まだ特には。　ただ、封印しておいた井戸の蓋が外されて

いたようです」
「そっかー、学院に出た魔物ってやっぱりここから入ったのかな」
「だと、思います」

その後、通路を調べ終えたレイスは残っていた足跡等から見て、学院に魔物を侵入させた者は少なくとも二人以上と断定した。
地下通路を廃屋敷側から学院に向けて歩いた人間の足跡は一人分。対して、学院側から廃屋敷に向かう足跡は二人分あったのだ。それも、増えた足跡は倉庫の中に居なければ付着しないような穀物の粉と埃が混じったモノだったという。

「学院の倉庫内に入る事の出来た者の仕業でしょう。協力者か、或いは搬入業者に雇われる形で入り込んだか……」

恐らくは倉庫の壁の仕掛けを動かして地下通路から魔物を引き入れる為に入り込んだのだろうと、レイスは推理した。搬入業者には別の隊が調査に当たっている。

「サクヤの屋敷と工房を襲撃した魔物は、近くに停まっていた馬車に隠されていたようですね」

ほぼ同じ頃に市場で魔物が隠されていたと思われる偽装露店の、店主らしき怪しい男の存在が明らかになっている事から、約三人から五人以上のグループが王都に魔物を引き入れて襲撃に使ったと睨んでいた。

「あたしも下りていい？」
「ええ、構いませんよ、大体調べ終わりましたから」

井戸の階段から地下通路に下りた朔耶は、以前ここを歩いた時に聞いた護衛役の言葉を思い出す。――僅かに円を描く角度が付いていますな、巨大な円形の通路なのかもしれません――彼らはそう言った。

『この通路はここから倉庫前までしかないけど、もしかしたら壁の向こうに通路の続きがあるのかも？』

サグッテ　ミルカ？

円形の建物なり施設が元々存在していた場所だった場合、同じ地層にその遺跡の他の部分もあるかもしれない。そう思い付いた朔耶は、通路に沿うように意識の糸を伸ばして地下の空間を探り始めた。

水の中を行くように地面の下を進む意識の糸。そこから伝わる感覚で通路のような空間があれば直ぐに分かる。突き当たりの壁の向こうは暫らく固い土と岩が続いていたが、ある程度進んだ所に幾つか大きな空間が連なっている事を確認出来た。

「サクヤ様？」

地下通路の壁に向かってじっと目を閉じたまま突っ立っている朔耶を怪訝に思ったのか、降りて来たフレイが心配そうに声を掛ける。壁の向こうにある空間を調べ終えた朔耶はゆっくり顔を上げて振り返った。

「みっけ」

「はい？」

数人の騎士と衛兵、それにレイスとフレイを含む魔術士隊が、とある工房跡地に集まっていた。朽ち掛けた作業台の下に隠されていた階段をランプで照らしながら、レイスが奥の様子を窺っている。

朔耶が見つけた空間は学院の地下通路と同じ遺跡の一部だったらしく、連なる空間の先に半分ほど埋もれている通路を発見した。その通路を地上から意識の糸で確認しつつ辿って行くうち、一般開放区の古い空き家となっているこの工房跡に行き着いたのだ。

「何人か出入りした跡がありますね」
「今は誰もいないみたい。　罠もないよ？」
「……本当に便利な能力ですねぇ」

此処に潜む者の気配を探る為、慎重に風の魔術で音を拾おうとしていたレイスは、あっさり索敵を済ませる朔耶に脱力した。衛兵を見張りに残して地下へと降りた朔耶達は、学院の地下通路とほぼ同じ構造をした長く細い通路を只管進んでいく。

学院の地下通路と違って此方の通路には等間隔に部屋らしき扉が並んでいた。殆どの部屋は土に埋まっており、何箇所かは扉の外まで土砂が崩れ出て通路を半分塞いでいる状態だったが、それらの土砂は通路の端に除けられ、しっかり踏み均された跡があった。

「もうちょっと先に小部屋があるんだけど……、そこに何か居るみたい」
「っ！　分かりました、騎士の皆さんは警戒をお願いします」

左手に盾、右手に衝撃の篭手Ｔ２を装備した騎士達が臨戦態勢に入る。常に通路の数メートル先を意識の糸レーダーで探りながら歩

いていた朔耶は、少し先にある部屋に意識が微弱な生き物の存在を確認していた。

『魔物かな？』

ケハイハ　ヨクニテイル　ダガ　トウソウノハドウヲ　カンジヌ

『イザって時はみんなを護れる？』

チカクニイレバ　モンダイナイ

朔耶は頷くと、騎士達の間から進み出て扉の前に立った。彼等が戸惑いの声を上げる前に強力な魔法障壁で自らの身体を包む。光のオーラに包まれた朔耶は、今此処にいるメンバーの中では最も防御力が高い。

その事をよく分かっている騎士達は、心中複雑なれど朔耶が最前列に立つ事に納得した。

「じゃ、開けてみるね？」

皆が身構えながら頷いた事を確認して、朔耶は小部屋の古い扉を押し開けた。騎士達より頭一つ分は小さい朔耶の背後からは部屋の中の様子をよく見通す事が出来る。朔耶自身が光を放って室内を照らし出しているので視界も良好。

入り口付近に置かれたテーブルの上に薄暗いランプが一つ、殆ど明かりにならない小さく揺れる火を灯している。そして部屋の奥には、ずらりと横たわる異形の姿があった。思わず息を呑む調査隊の魔術士と騎士達。

「うーわ、魔物がいっぱい寝てる……」

「……見たまんまですね」

引き攣った表情を浮かべながらも朔耶の感想に軽口を返すレイス。そのやり取りで固まっていた皆の緊張が解れた。ごつい体躯に巨躯な魔物が四体と、やけに細い印象を受ける羽付きの魔物が一体。床に並んで眠っているようだった。

「これは……恐らく飛行種一体に格闘種四体、今日王都を襲った魔物の編成とほぼ同じですね」

「とりあえず、起きて暴れ出さない内に処理しておきましょう」

篭手を持った騎士達が魔物の頭の方へと慎重に回り込み、頭部に狙いを付ける。眠っている無防備な魔物に対し、朔耶は何となく”可哀相”などという感情が湧いたが、慌ててそれを打ち消す。

『……そんな事想っていい相手じゃないんだよね』

イカナルソンザイニ　タイシテデアレ　セッショウヲ　ウレウノハヨイコトダ

その気持ちを否定する事は無いと、神社の精霊は朔耶が懐いた感情に肯定的な見解を示した。

薄暗い小部屋の奥で断続的な衝撃排出音が響く。同時に、朔耶は王都を覆っていた燻るような悪意の気配が急速に薄まっていくのを感じていた。それは悪意の体現者たる魔物が排除された事による、脅威の減少を表していた。

五体の魔物を”処理”した調査隊は、まだ先へと続いている通路を奥まで調べる為、数人の騎士と魔術士を残して小部屋を後にした。朔耶が先頭に立ち、意識の糸レーダーで周囲を探りながら歩く。

暫らく空き部屋や埋まった部屋の扉が並んでいたが、やがて通路

だけが長く続いた先に行き止まりの壁が見えてきた。

「あれ？　下りる階段がある」

「更に地下へと続く階段ですか……」

地下通路の行き止まりから更なる地下へと続く階段の出現に皆で顔を見合わせる。少し話し合って此処にも見張りを二人ほど立たせると、残りは慎重に階段を下りて行った。　下りた先には若干広くなった通路が真っ直ぐ遠くまで伸びている。

とんでもなく長い通路だった。進んでも進んでも延々と同じ景色が続き、まるで無限回廊の如く前を見ても後を振り返っても同じ通路が何処までも伸びている様は、調査隊員の心に『何らかの結界に囚われているのでは？』という不安感を湧き起こした。

朔耶が度々地上に意識の糸を延ばして現在位置を告げていなければ、途中で引き返す事になっていたかもしれない。

「今は一般区の下ですか……。成る程、確かに王都の勾配を考えれば開放区の地下二階は一般区だと地下一階に相当しますね」

「なんかこのまま行くと街の外に出ちゃいそうなんだけど」

この地下通路が王都の内と外を繋ぐ隠し通路である可能性が高まった事で、調査隊の面々から不安感が消え去った。何処までも続く地下通路に不気味さを感じていた彼らだったが、王都の外まで続いているのなら、この異様な長さにも納得出来るという訳だ。

人は自分に理解出来ないモノに対しては不安や恐怖を覚え易いが、一旦理解してしまえばソレらはアッサリ払拭される。

やがて一行は王都の最も外側に当たる一般区の外壁を越えて街の

外へと出た。移動用に乗り物が必要だと思えるほどの距離を歩き、地上で日が暮れ始めた頃にようやく出口らしき階段に到達した。

「長っ！　なにこの通路、長過ぎっ！」

「確かに、王都を一周できる程の距離がありましたね」

階段を上って地上に出ると、そこは王都の近くにある森に少し分け入った場所だった。木々に覆われ、苔の生す崩れた遺跡の残骸に出入り口があり、垂れ下がる蔦のカーテンと葉で巧妙に隠されていた。

「こんな場所があったとは……」

朔耶は辺り一帯を意識の糸で探り、魔物のような危険な存在が居ない事を確認すると一旦街へと戻る事にした。レイスは調査隊員達と周辺を散策した後、城に戻って報告するという。

「じゃあ、あたし先に帰るね」

「ええ、お疲れ様でした。僕等も調査が終わり次第、戻る事にします」

レイス達と別れた朔耶は、オレンジ色の夕暮に染まりながら影を伸ばす王都の街並みを眼下に、開放区の自宅上空まで飛んだ。

魔物に破壊されてまだ修繕が終わっていない仮設門の前に降り立つと、門番の衛兵がギョッとなって後退る。降りて来たのが朔耶だと分かると、衛兵達は敬礼で迎えた。朔耶は『ご苦労様～』と彼らに労いの言葉を掛けて屋敷の中へと入った。

「お帰りなさいませ、サクヤ様」

「ただいま～、今日は何か大変だったね。みんなご苦労様でした」

屋敷の中で待機していたとはいえ、魔物の襲撃などという非常事態に緊張していたであろうと、朔耶は使用人達に気遣いの言葉を掛けた。　ざわり……と、使用人達の間に奇妙な空気が流れた事に気付かず、朔耶は自分の部屋へと向かう。

『異世界からやって来たこの小さな御主人様は、外であの怖ろしい魔物と戦って来て尚、我々のような下々の者を気遣って下さる』てな調子で、感激した彼らは益々朔耶に傾倒して行くのだった。

『レティ～』

――サクヤ？　王都から急に邪悪な気配が消えた気がするのですが、何かありましたか？――

部屋に戻ってレティレスティアに交感を繋いだ朔耶は、早速今日あった出来事を報告した。途中で報告出来なかった事を詫びつつ、地下通路の小部屋に居た魔物の処理や、王都の外まで続いていた異様に長い抜け道の事などを話す。

『後でレイスから報告が行くと思うけど、あたしの方からも一応伝えとくね』

――そうでしたか……。本当に、ご苦労様でしたサクヤ――

王都を包んでいた悪意の気配は殆ど感じられず、もう大丈夫だろうと判断した朔耶は明日と明後日はこっちに居ない事を伝えた。明日は元の世界で言う所のクリスマスである。どうやら友人と過ごす約束は守れそうだと、朔耶は軽く息を吐いた。

――分かりました。篭手の回収と配布は此方でしておきますね？――
『うん、宜しくね～』

今回王都で配布した衝撃の篭手Ｔ２は、後日アーサリムに送り出す後発の部隊に配布されて一緒に運ばれる事になる。今後のアーサリムに派兵される部隊の規模や日程などを簡単に聞いて、朔耶は交感を終えた。

その後、使用人を呼んで精霊神殿の神官宛てに伝言を頼むと、朔耶は元の世界の自宅庭へと帰還した。伝言の内容は、今日の戦闘で亡くなった騎士や衛兵の家族に経済面で不安がある場合、それを支援する事と、半壊した市場の復興支援であった。

「はぁ～～、帰って来たって感じ……」
コンカイハ　トクニ　タイヘンデアッタナ

青く薄暗い自宅庭で、冬の空を見上げて溜め息を吐く朔耶。白い息がふわふわと舞って宙に霞む。

『ホントにね～、なんか凄く疲れたよ』
ヨク　ガンバッタナ

神社の精霊になでなでされているような感覚を覚え、朔耶は自宅の庭先で一人照れた。

87話：学生生活3

「それじゃあ、先に行ってるからね」
「おう、楽しんで来い」

昨日の夜、実穂と藍香に電話を掛けてクリスマスパーティーに出られる事を報告した朔耶は、二人との待ち合わせに街へと出掛けた。藍香の立てた遊び計画に若干修正を加え、朝から昼までは三人でウィンドウショッピングでもしながら街をぶらつく。

『ここんトコ立て込んでたから、今日はゆっくり羽伸ばそうっと』
ホントウニハネヲ　ノバスワケニハ　イカヌガナ
『……それ、おやじギャグ』
……

街はクリスマスムード真っ盛りという具合に飾り立てられ、朝から電光の装飾をチカチカさせている街路樹や、ちょっと草臥(くたび)れて黒ずんでいるサンタ衣装を着けたコンビニの店員さん等、毎年見られる光景が広がっている。半分正月が入っている所もあった。

「朔ちゃ～～ん」

既に待ち合わせ場所に来ていた藍香がぴょんぴょん跳ねながら手を振る。その隣で実穂も控えめに手を振っていた。心底楽しむ気満

々な藍香を見て何となく嬉しい気分になった朔耶は、少し小走りに駆け寄りながら二人に手を振り返した。

「きゃーーっ　朔ちゃん来たーー！」
「はいはい、藍はちょっと落ち着こうね」
「今日は楽しもうねー」

三人は揃ってデパートのショウウィンドウ巡りを楽しみ、冬物の服や飾りつけを見て回った。地下街では小物売り場でアレが可愛いコレは有り得ないと様々なキャラクター商品を評し合い、太陽をモチーフにしたおっさんキャラのヌイグルミにボールをぶつけて遊んだりと、楽しい時間は瞬く間に過ぎていった。

「そろそろお昼だね、店に行こっか？」

昼から夕方までは席を予約しておいた店で都築家の兄弟である重雄、孝文、それに拓朗の三人と合流して過ごす事になる。
朔耶との付き合いが長い実穂と藍香はこの三人とも多少の面識があり、うら若き少女が三人でクリスマスパーティーというのは『やっぱりさもしい』という事で、朔耶の提案した『彼らを加えた六人パーティー』を承諾した。

尤も、朔耶の兄弟だけならまだしも『幼馴染の男』という存在に藍香は少しゴネ気味だったが、夕方から実穂の家にお邪魔してお泊りするという計画で快諾した。

「あああ……朔ちゃんと一つ屋根の下でお泊り……その前にケーキ食べ放題……どっちも涎モノですなぁ」
「ケーキに涎垂らすのはいいけど、あたしに涎垂らすのはやめて」

「藍香ちゃん、お風呂では鼻血に気をつけてよー？　後、ちゃんと爪も切ってる？」
「なんの話をしてんのよ……」

何か暴走しそうで色々危ない気がする藍香や、何気に生々しい冗談を口にする実穂に軽くツッコミを入れる朔耶。地下街を通り抜け、広い車道を越えた先にある大きな駐車場が目印の店に向かって横断歩道を渡る。

『御座敷ケーキハウスむぃむぃ』とＰＯＰ書体で書かれた看板を掲げる建物が目的の店だ。ケーキハウスと御座敷レストランを合わせてみたという奇を衒ったのか一過性のブームに乗ってしまったのか良く分からないコンセプトだが、そこそこ人気の店である。

入り口脇にミニツリーや電光装飾で飾り付けられているクリスマス仕様の花壇を見ながら店内に入ると、右側にケーキのショウウィンドウがズラリと並んでカウンターと繋がっている。

左側にはテーブルと椅子が並ぶ洋風のフロアが広がり、奥が御座敷フロアとなっていて、高さ三十センチ程で二メートル四方の畳敷きの上に卓袱台（ちゃぶだい）のようなテーブルを乗せた御座敷自由席が九席ほど、間隔を空けて並んでいた。

その更に奥に予約制の御座敷席が三部屋、完全な個室となっている訳ではないが、衝立で仕切られていて自由席のモノより立派なテーブルが添えられている。自由席は何れも客で溢れ、通路を着物風メイド服姿のウェイトレスさんが歩き回っていた。

この店は客が自分で料理を運ぶ事も出来れば、ウェイトレスさんに注文を頼む事も出来るセミセルフ式を採用している。

「お兄さん達はまだ？」
「うん。工場からタカ君と拓ちゃん拾って来るだろうから、もう少し掛かるかも」
「先に食事済ませとく？　それともケーキ食べよっか？」

食事メニューとケーキメニューを見比べながら唇の下に人差し指を当ててどれにしようかと悩んでいる実穂に、とりあえず飲み物を注文している藍香。流石にケーキを昼食にするのはどうかと思った朔耶は、実穂の横からメニューを覗き込んで軽食を選ぶ。

ビールとチューハイも注文できるという事で藍香がチューハイを注文しようとしたが、朔耶に素気無く禁止令を出された。藍香の『第一次酔わせてごにょごにょ計画』は発動前に封じられたのだった。
第二次計画は用意されていない。

「そういえば朔ちゃん、冬休み中ずっと用事あるの？」
「うん、まあ。一応ね」
「藍香ちゃんはねぇ、朔耶ちゃんを知りたくて仕方ないんだってぇ」
「だから、言い方がエロいってば」

ケーキは皆が揃ってから食べようと後回しにして、軽い食事を昼食にしつつ朔耶達は楽しい一時（ひととき）を過ごしていた。そんな折、店内が俄かに騒がしくなる。

「んだよコラァ！　喋っただけだろうがっ　ああ？」
「あの、他のお客様の迷惑になりますので……」
「あ、私達もう出る所でしたから」

御座敷自由席の一席で酒盛りをしていたグループが隣の席の客に

ちょっかいを掛けたらしい。大学生風の若者四人組が隣の席でケーキを食べていた二人連れの女性に『一緒しないか』と声を掛けたが、無視された事で腹を立てた一人が絡んでいる。
と、パパラッチ実穂が素早く店員さんや客の話声から情報を集めて、騒ぎの原因や経緯を説明した。

「みっちゃん、相変わらずそういう行動ダケは素早いね」
「えへへぇ～」
「いや、今のは褒めてないような気がするのはあたしだけ？」

クリスマスからカリカリしてやぁねぇと、軽く噂しつつ自分達の雑談に戻っていく野次馬をしていた客達。憤慨する男に同意したり宥めたりしている彼の仲間の声も共々、店内の喧騒に紛れて人々の注目から逸れていった。
そうして朔耶達も一時(いっとき)の騒ぎから身内の話へと話題を戻すと、冬休み中の予定について朔耶にアプローチを仕掛ける藍香。

「ねぇねぇ朔ちゃあん、今度あたしの部屋にも泊まりにおいでよ～」
「藍がもうちょっと自重出来ればね」

落ち着きと女の色香を纏い始めたここ最近の朔耶の変化に何か危機感を覚えた藍香は、以前にも増して積極的なスキンシップを試みるようになっている。本人に自覚がなくとも気になる男が出来たのでは？　と勘繰っているらしい。

実際の所は、此方の世界の日常では中々経験する事の出来ない異世界での色々な出来事によって精神的に磨かれ、それが精霊との結びつきを強めて朔耶から放たれる気配が深まったお陰で、朔耶の纏う雰囲気に深みが増しているのだ。

自信に満ち溢れて心身ともに健康で穏かな状態にある事は、それだけでその人間の魅力を底上げする。仄かな憂いや迷いの表情を浮かべた場合も、人に与える印象は違ってくるものだ。

「ああ……卒業しても朔ちゃんの側に居たい」

「卒業かぁ……」

朔耶は一時期、高校を卒業したらフレグンスに就職しようかと考えていた頃もあったが、今は様々な事情からもっとしっかり将来を見据えて考えたほうが良いと、選択を保留している。

アーサリム遠征で滞るフレグンス領内の活性化事業や魔族組織の問題を考え、王都の襲撃事件を思い出して僅かに表情を曇らせる朔耶。それを敏感に感じ取った藍香が擦り寄って来た。

「朔ちゃん、今何考えてたの？」

「ん？　ちょっとね」

「ちょっと何かな～？　聞きたいなぁ」

さらっと流した朔耶だったが、藍香がズズイと顔を寄せてくる。そこでふと、違和感を感じた朔耶は藍香の顔をがっしと掴んで両手で顎を掬い上げるように頬を挟むと、徐に顔を近づけた。藍香は一瞬目を見開いて固まったが、やがてそっと目を閉じる。

とりあえず、そんな藍香に軽く頭突きを喰らわせてテーブル周りを調べた朔耶は、ジュースに混じってチューハイの缶が藍香の座布団の脇に置いてあるのを見つけた。半分程空けている缶を没収する。

「やっぱり！　なんかお酒の匂いしたと思ったらっ」

「あらら、藍香ちゃん何時の間に」

「朔ちゃん……オデコ痛い」

朔耶が涙目の藍香を弄って遊び、それを実穂が携帯で写真に撮るなど、女の子三人できゃいきゃいとじゃれている所に声を掛けて来る無粋者がいた。ビールの缶を片手にぶら下げ、褐色肌が目立つ如何にも『遊んでます！』といった風体の大学生っぽい男。

「君たち高校生？　俺ら○○大学なんだけど、一緒に遊ぼうぜ」
「お酒あるよ、ビール飲めるっしょ？」

先ほど女性客に絡んでいた四人組の内の三人だった。ちなみに一番酔っ払っているらしい男は、自分達の席でお摘みを齧りながらビールを呷りつつ、一人くだを巻いている。

「連れが来るので、結構です」
「わたし達、お酒飲みませんから……」

ニヤニヤに近いニコニコした表情を向けながら朔耶達の御座敷に上がり込もうとしている遊び人風の男三人を、やんわり押し返してお誘いの申し出を断った。だが三人も簡単には引き下がらず、強引に御座敷の縁に腰を下ろして食い下がる。

「ちょっと、困るんですけどっ」
「……」
「朔ちゃん……」

朔耶はキッパリとお断りを突き付けて若干語調を強めているが、実穂も藍香も怯えてしまっている。二人を庇って彼らの前に立ちはだかろうとする朔耶だったが、男三人が狭い縁に並んで座っているので間に立つ隙間が無かった。

「連れなんか居ないジャン」
「まあまあ、そう邪険にしなくても」
「折角のクリスマスなんだから、楽しく過ごそうよ、ね？」

遊び人風の男達は、一番気が強そうな朔耶を躱して後の二人を落とせば、その二人を庇って朔耶も落とせると考えた。そうして一番酔っていそうで狙い目と見たらしい藍香の肩に腕を回す。

「君可愛いね～、おでこ大丈夫？」
「っ！　いやっ」

いきなり見ず知らずの男に肩を抱かれた藍香は、驚きと恐怖で思わずその男を突き飛ばしていた。無理な体勢で狭い縁の端に腰を下ろしていたせいもあってか、バランスを崩した男はもんどり打つように背中から転げ落ちる。一瞬にして静まり返る店内。

「あ……」

「……てーな」
「ナニしてくれてんだ、お前」
「突き落とすこたぁねーんじゃね？」

怒気を孕ませた声で言いながら睨みつけて来る三人に、蒼白になって身を竦ませる藍香。

「ご、ごめんなさ――　痛っ！」
「今のはごめんじゃ済まんだろ、ぁあ？」

突き落とされた男は怒鳴りはしないものの激晃した様子で藍香の

髪の毛を掴んで引っぱった。
店内に客の悲鳴とざわめきが広がり、警察を呼んだ方がという声が囁かれる。先程の騒ぎに引き続いて駆けつけた店員は男の仲間二人に阻まれているうちに、一人くだを巻いていた酔っ払い男に絡まれ始めた。

ブスリ

「いってえええええ！」

藍香の髪の毛を掴み上げていた男が悲鳴をあげながらその手を離すと、激痛の走った手を押さえる。彼の手の甲には小さな点のような傷が三つ並び、ぷっくりと血の雫が浮き上がっていた。

「コイツ、刺しやがった！」

彼がそう叫んで信じられないモノを見るような目を向けた先では、朔耶が切っ先に血の付いたフォークをテーブルの端に置いて、店員さんに『これ、汚れたので取り換えてください』等と声を掛けていた。

「おい！　ざけてんじゃ――　べぶぶっ」

怒鳴りつけて朔耶に掴み掛かろうとした男は、鼻の下と上唇の間に裏拳を叩き込まれて妙な呻き声を残しながら鼻を押さえた。

「朔……ちゃん？」
「さ、朔耶ちゃん……（キレてる？）」
「……人がせっかく、友達と楽しんでる時に……」

ゆらりと立ち上がる朔耶。御座敷の上と下から睨み合いになる。

「調子こいてっと強姦すぞコラ」

「やっちゃおうか？」

「いいじゃん、コイツやっちゃおうぜ」

そんな下卑た脅し文句にも全く怯んだ様子を見せず、朔耶は三人組みを睨みつけている。実の所、朔耶自身は幾ら少しばかり鍛えているからと言っても、大の男を三人も相手に素手でどうこう出来るとは思っていなかった。

しかし、藍香を助ける為にフォークを突き刺したり、激昂する相手の人中に裏拳を叩き込んで出鼻を挫く等の過激な行動に出たのは、勝算があっての事である。朔耶は大きく息を吸い込むと、店の出入り口に向かって叫んだ。

「お兄ちゃん！　タカ君！　拓ちゃん！　助けてぇーーーー！」

なんだ？　と振り返ろうとした三人の内の一人が唐突に体勢を崩して倒れ、一人が身体をくの字に曲げて膝を付き、一人が横倒しになりながら派手に吹っ飛んだ。

「うおらあああ！　マイ・シィスゥタァーになんばしよっとかあぁ！」

「ありゃ、お兄ちゃん一人で片付いたか。　つーか、なんで訛ってんのよ……」

何処の方言だとツッコミつつも、兄に感謝する朔耶。実はフォーク攻撃を繰り出す前に兄の車が店の駐車場に入って来るのを見つけて、タイミングを図っていたのだ。　ちなみに、先程の兄のターン

での動きは次の通り。

朔耶達と合流する為に入店するも、店内の様子がおかしい事に気付いた兄、弟、拓朗は、奥の御座敷に仁王立ちしている朔耶と、対峙している三人組の男の姿を見つける。周囲の状況と客達の噂話から大まかなトラブルの内容を把握。

朔耶から救援要請。兄、Bダッシュ。
一人目、右のローキックを左足に叩き込む。
二人目、左の肘打ちを水月に刺し込む。
三人目、右の回し蹴りを左側頭部に浴びせる。

以上で兄のターン終了。兄の後ろでは何かマーシャルアーツっぽい構えを取っている弟と、三段式特殊警棒を伸ばした拓朗が控えていたが、出番はなかった。

その後、駆けつけた警官と少し事情を話し、その場で和解する事となった。四人組みがゴネなかった事と、店内の目撃者も多数で誰もが四人組に原因があると証言した事が速やかな和解の成立に繋がった。
重雄(あに)に伸された三人が反抗意欲諸共叩き潰されていたからでもある。

「さあ、それじゃあ皆揃(みんな)った事だし、ケーキ食べようケーキ」
「わ～～～～」
「異議なーーし」

それからは六人でテーブルを囲って大きいケーキを切り分けたり、ショートケーキの味比べをするなどして楽しんだ。

特に都築兄弟と拓朗からは朔耶の昔の話を聞き出せるとあって、当初ゴネ気味だった藍香もすっかり打ち解けており、実穂は実穂で、拓朗達が時折ポロッと零してしまうオルドリア関連の単語をしっかり回収していたりする。

楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

「そろそろ三時か、予約時間分いっぱいだ」
「えっ　もう？」
「早かったね～」
「朔耶は川岸さんトコに泊まるんだったな」

店を出た朔耶達は全員で兄の車に乗り込むと、一路実穂の実家である川岸家に向かった。朔耶達を川岸家に送り届けた後、都築兄弟と拓朗はそのまま帰宅する。

「何時来てもみっちゃんの家は大きいなぁ」
「慣れるとどうって事無いよー？」
「このセレブめっ」

実穂の家は結構広い敷地を持つ大邸宅である。地味にお金持ちの令嬢だったりするのだ。門から五十メートルほど進んだ先にある玄関前で停車し、朔耶達を降ろした兄は『ゆっくり楽しんで来い』と手を振ると、車をUターンさせて帰って行った。

「お兄さんも弟さんも鳥越くんも、みんな結構いい人だったね」
「まあね、何時も助けて貰ってるよ」
「ほうほう」

今日のお相手男性陣だった三人を評しながら邸宅に招かれる朔耶

と藍香。全開にすれば軽自動車くらいは通れそうな程の巨大な扉をくぐって中に入ると、実穂付きの御手伝いさんが出迎える。

「お帰りなさいませ、実穂お嬢様」

「ただいま、早苗。　昨日言ってたお友達を連れてきたから、お部屋の用意お願いねー」

「畏まりました」

ホテルのロビー並に広い玄関というだけでも萎縮してしまいそうな雰囲気に、専属の御手伝いさんとのやり取り。

庶民にとっては殆ど別世界の出来事である。普段見慣れた親友が別人の様に見えて、藍香は少々居心地悪そうにしていたが、朔耶は割と平然としていた。実穂は朔耶の以前とは違うそんな変化にもしっかり観察の目を向けていた。

『本当に、朔耶ちゃんに何があったんだろう……？』

その後は、広い浴場での洗いっこで朔耶に洗って貰う藍香がやたら緊張していたり、夕食は昼のケーキでお腹一杯だったのでコンソメスープを一皿だけ頂くつもりが、あまりの美味しさに三皿ほど御代わりして体重を気にする羽目になったりする三人。

そうして夜遅くまでテレビを見たりゲームをしたりと充実した時間を過ごした朔耶達は、お泊り用の大部屋に並べられた四床ものダブルベッドの上をゴロゴロと転がって遊び疲れた後、そのまま川の字になって眠るのだった。

「今日は、楽しかったね……」

「うん」

「朔ちゃあん……むにゃ」
「……藍はもう寝てるし」

お酒も入ってたからねーと笑い合う。

「朔耶ちゃん」
「うん？」
「……おやすみ」
「ん、オヤスミ」

実穂は当面の間、朔耶の色々な変化については観察のみに止めて置こうと決心した。

『いつか、わたし達にも話してくれるよね』

88話：思惑と思い遣り

「う～ん……暑苦しい……」

快適な温度に保たれている筈の部屋で、朔耶は寝苦しさを感じて目を覚ました。四床も合わせたダブルベッドの左上辺りでむくりと身体を起す。抱き枕にしがみ付くか如く、朔耶の身体にしがみ付いていた藍香がごろんと転がる。

「藍の仕業かい……」

パジャマの胸元を湿らせる涎の跡に溜め息を吐きながら、少し早い時間だったが起きる事にした。

「おはよう～、朔耶ちゃん早起きだねー」

「誰かさんのおかげでね」

既に服も着替え終えて、お泊り部屋のソファーでボンヤリしていた朔耶は、起き出して来た実穂と挨拶を交わす。そのうちに藍香も目を覚まして二度三度と寝返りを打った後、のそのそと起き上がる。

「……あ～～……朔ちゃんの胸の中で目覚めたかった……」

「寝起きからそれか」

降ろした髪をわしゃわしゃしながらぬぼ～とした表情でそんな事をのたまう藍香に、朔耶はお約束のツッコミを入れておいた。

「おはよーのちゅっちゅは？」

「ちゅんちゅんっ」

「いや、雀じゃなくて……」

「二人とも朝はパンでいいよねー、サラダもつけよっか？」

朝から元気な藍香の百合発言をボケて躱す朔耶に、マイペースで朝食のメニューを勧める実穂。そんなやり取りをしつつ、皆で身嗜みを整え終えると朝食を摂りに部屋を出た。　今日は三人で遊んで過ごす予定だ。

フレグンス城の独房から人狩り達の取調べを終えて出て来た騎士が、外で待機していたレイスに報告を入れる。どうやら襲撃を企てたのはヨールテスで間違い無く、しかも彼は魔族組織の頂点に立って組織を束ねている存在であるらしい事が明らかになった。

「謎の多かった魔族組織の全容が、これで見えてきましたね」

レイスは頷きながら報告書を纏めて対策を練る為に執務室へと上がっていく。人狩り達は昨日の夜、魔物の隠し場所にノコノコ現われた所を待ち構えていた騎士団に取り押さえられたのだ。

襲撃当日であった事もあり、翌日の襲撃に関する方針決定後は街

で怪しまれないよう静かに潜伏していた人狩り達だったが、情報収集を怠って騎士達の動きを見過ごした事が彼らの敗因である。

魔物の襲撃事件と人狩りについて、レイスの纏めた報告書を囲んで対策会議が開かれた。会議の席にはカイゼル王とアルサレナ王妃、イーリス近衛騎士団長に王国騎士団長、精霊神殿から精霊神官とフューリ聖騎士団長も同席している。

「精霊石、ですか」

「ええ、人狩り達はほぼ全員が魔族組織の関係者で、魔物を使う者はこの精霊石のネックレスで操っていたようです」

人狩り達が持っていた精霊石のネックレスには、魔物に『従うべき者』という認識を持たせる効果が付与されているという。もう一つ、魔物について分かった事があったのだが、その事はまだ伏せておくべきと判断したレイスは報告書に記さなかった。

「では、アーサリムにいる人狩り組織を討伐してそのネックレスを集めれば……」

「相手の対策次第ですが、そう直ぐには変わらないと思います。進軍はかなり楽になるでしょう」

「同じモノを作る事は出来ませんか？」

「精霊石のネックレスを解析してみない事には……。サクヤであれば、石に宿る精霊とも交感で交信出来そうですが」

精霊石には比較的力の強い精霊が宿り、その精霊に特定の力を発現し続けるよう求める事が出来れば、半永久的にその現象が発現され続ける。朔耶の持つ精霊石の指輪には、指輪に宿っている精霊が水の加護を永続させる効果を発現し続けているのだ。

石自体が希少であり、尚且つその石にそれなりの力を持つ精霊を宿らせ、更に特定の現象を発現させ続けるのは簡単な事ではない。

「人狩り討伐で集めた方が早そうですね」

「この事は、ティルファや帝国には？」

「……伝えましょう。今は同盟を強化しておく方が得策と言えます」

アルサレナは少し考えてから、『精霊石のネックレス』について情報の公開を指示した。この決断により、オルドリア大陸の各地で『人狩り狩り』が盛んになるのだった。

列強国による奴隷制禁止令と相俟って、需要の減った人狩り達が各街から放逐されると、魔物に対抗出来る『精霊石のネックレス』を狙った者達に行く先々で狩られていく。

奇しくも、ヨールテスが人狩りを御祓箱と見限った事と重なり、人狩りは急速にオルドリア大陸から姿を消していく事となった。

「さて、忘れ物も無しと」

今日一日、藍香と実穂の三人で遊び過ごした朔耶は夕方に帰宅すると、オルドリア大陸へ転移する準備を整えて庭に出た。

クリスマスパーティーの為に完全な決着を見ず帰還したが、向こうにはまだ王都を襲った襲撃犯が隠れているかもしれないのだ。夕闇に包まれる庭で気持ちを切り替えて気を引き締める。

「バタバタしてるな、もう行くのか？」

「うん。向こうの事件とか、まだ終わってないからね」

これからお風呂に入ろうとしている兄に見送られながら、朔耶は王都の自宅へと転移した。

「きゃっ」
「わっと」

サクヤ邸の自室に転移すると、メイドさんが部屋の掃除をしている所だった。朔耶の唐突な出現に驚いたメイドさんは、思わず悲鳴を上げてひっくり返ってしまう。幸い後ろはベッドだった為、床に身体を打ちつける事にはならなかった。

「あらら、大丈夫？」
「さ、サクヤ様？」
「脅かしちゃってごめんねー」

転んだベッドの上で身を縮めて目を丸くしているメイドさんを助け起こそうと、朔耶が手を伸ばしたその時、部屋の外に居た同僚のメイドさんが悲鳴を聞きつけて部屋に駆け込んできた。先日の襲撃騒ぎで皆、異変に対する警戒は怠っていないのだ。

「カリーナ！　どうし……サクヤ様……？　あ、し、失礼しましたっ！　ごゆっくりどうぞっ」
「まてい」

頬を赤らめながら部屋から退出しようとするメイドさんの腕を捕まえると、『藍香の呪いか！』等と内心で悪態を付きつつ、朔耶はメイドさんの誤解を解きに掛かった。どうやら王都でも『サクヤ同性嗜好説』が蔓延しているらしい。

「噂の出所を突き止める必要がありそうね……」

ふっふっふと哂いながら黒いオーラを漂わせて握り拳を震わせる朔耶の姿に、抱き合って怯えるメイドさん達であった。

メイドさんに留守中の話を聞きつつ、先日持って来てそのままになっていた荷物と今日持って来た分から城に持っていくモノを整理した朔耶は、城に出掛ける事を伝えてサクヤ邸を後にした。街灯に照らし出される王都の夜景を見下ろしながら城へと飛ぶ。

『犯人捕まってたんだねー』

クロマクハ　アノオトコデ　アッタカ

城に到着した朔耶は、そのままレティレスティアに交感を試みた。今の時間であれば夕方の祈りの儀式を終えて自由時間に入っている筈だと、当たりをつける。

『レティ～』

――サクヤ？　今、来たのですか？――

儀式を終えて湯浴みに向かう所だったというレティレスティアに、丁度良かったと便乗する事にした朔耶は、荷物からお風呂セット一式を持ち出して地下の湯浴み場に向かう。

「おまたせー」

「一緒に湯浴みをするのは久し振りですね、サクヤ」

持って来たシャンプーやボディーソープを使って泡だらけになりながら、レティレスティアからも襲撃事件の顛末を聞き出す。サク

ヤ邸のメイドさんに聞いた話よりも突っ込んだ内容で、事件の概要を知る事が出来た。

人狩りが魔族組織に属していて、精霊石で魔物を操っていたという部分などは、アーサリムの精霊石鉱山に魔族の本拠地がある事を納得させる内容だった。ヨールテスが魔族組織の頂点に位置する人物であった事には、若干の驚きを覚える朔耶。

「トップの人間が現場であれだけ活動してたって事は、魔族組織ってあんまり人いないのかな……」

朔耶の素朴な疑問に、レティレスティアも成る程と頷いて魔族組織の構成について考えた。『中間管理職がいないのでは？』という朔耶の言に納得する。謂わばキト政府がその位置にあったのではないかと推論を深めた。

「まあ、珍しい。レスティアが政(まつりごと)の話をしているなんて」

「あ、母様」

「アルサレナさん、こんばんわ」

政務を一段落させたアルサレナも湯浴みにやって来たので、王妃(アルサレナ)も交えて三人で魔族組織に関する話を続ける。魔族組織の構成については今し方の推論で間違っていないだろうと、キトの地下で見つかった資料内容を参考に付け加えた。

「アーサリムにある魔族組織の本拠地ですが、魔物や魔獣を魔族組織が故意に作り出している事も分かりました」

捕らえた人狩りから得た情報では、スンカ山に巣食う多くの魔物や魔獣は鉱山に人を寄せ付けないようにする為に放たれているモノ

であるらしい。本拠地に出入りする人狩り達は精霊石のネックレスの力で、それらの魔物から攻撃を受けないようになっている。

「サクヤの力を持って同じ道具を、とも考えたのですが、精霊石が圧倒的に足りません」

従って、精霊石のネックレスはアーサリムにいる人狩りから回収する方針で決めたのだという。この情報は各国にも公開されるので、オルドリア各地に点在しているであろう人狩り達は今後、精霊石のネックレスを狙う者達から常に狙われる事になるだろう。

「うーわー……、因果応報とはよく言ったもんだわ」

「インガオウホウ？」

言葉の意味を訊ねられて朔耶が答えると、アルサレナもレティレスティアも大いに納得していた。アルサレナは表情の奥に若干の翳りを感じさせたが、王族には色々あるのだろうと、朔耶は深く考えない事にしておいた。

アーサリムのササに集結しているフレグンス先発隊と道案内のパーシバル傭兵団、それに共闘する事が決まっている帝国遠征部隊に地元の部族戦士達は、それぞれポルモーン渓谷へと進軍を開始したらしい。フレグンスの後発隊も今日の夕方前に出発させた。

ポルモーンの街に到着すれば其処に拠点を築き、次はスンカ山の麓、アーレクラワの街まで進軍する事になる。

「少し長湯しちゃったね」

「湯浴みをしながら真剣な議論というのも、中々面白い試みでした」

「サクヤは何時も私達が思いも及ばない事を齎せてくれます」

地下の湯浴み場を後にした朔耶達は、夕食を摂りに王族の食堂へ向かう。しっかりシャンプーとボディソープも試した王妃と第一王女が戦女神と並んで和気藹々（わきあいあい）と廊下を歩いて来る様は、ほのぼのした雰囲気にも関わらず実に近寄り難い光景であった。

「おお、今日はサクヤも一緒か」
「お邪魔しますー」

豪華（ささやか）な夕食に招かれた朔耶は、食後のデザートがあるからと荷物の中からお土産の箱を取り出した。給仕さん達に頼んでお皿とフォークを用意して貰い、『御座敷ケーキハウスむぃむぃ』とプリントされている箱からショートケーキを取り出す。

レティレスティア達王族の親子のみならず、食堂に居る給仕や侍女達の目も釘付けになっている。仄かな甘い香りと色鮮やかに飾られた盛り付けは、まるで芸術品のような出来栄えだ。

晩餐会などで出されるフルーツの盛り合わせにも鮮やかなモノはあるが、ここまで細かい模様が描かれたモノはまず見られない。朔耶がお土産に持って来たショートケーキは、レティレスティアとアルサレナをとてもとても幸せな気分にした。

「王室出資でこの御菓子（ケーキ）と同等のモノを作らせましょう」
「賛成です、母様」
「あはは……。じゃあ今度、参考になる本を纏めたモノでも持ってくるよ」

オルドリア大陸でフレグンスがケーキ発祥の地となる歴史的瞬間

であった。

翌日――

サクヤ邸の皆にもお土産のケーキをご馳走して『サクヤ』への傾倒を信仰の領域まで深めた事に自覚の無い朔耶は、朝から荷物の整理をしてティルファと帝国に向かう準備を整えると、また数日留守にする事を伝えてサクヤ邸を後にした。

『さーて、先ずはティルファに一(ひと)っ飛(と)び宜しく』

ウム

光の軌跡を残しながら飛び去って行く朔耶の姿を、城に向かう馬車の窓から見送ったフレイは対面に座るレイスに訊ねる。

「あの事、伝えなくてよかったのですか？」

「ああ、まだ公表は控えた方がいいだろう」

人狩りの尋問から明らかになった事柄の中に、尋問した騎士にも口止めをして上層にも一部の人物にしか伝えていない内容がある。それは魔物の製造法。人間の体内に精霊石を埋め込んで肉体を変質させるというモノだった。

精霊石に宿らせた精霊に『変質』の効果を発現させ続け、埋め込まれた披検体に暫定的な洗脳効果として与え続ける。被検体には呪文を内外に刻んで変質のイメージをサポート。肉体諸共洗脳された状態にする。

そうして出来上がった存在には、命令を判別する知性のある魔物化したモノと、殆ど本能と欲望しか残っていない魔獣化したモノとに分けられ、魔獣は調教次第で使えなくも無いので下積みの人狩りに調教をやらせて人狩りの育成を兼ねる。

幾つかの魔物は人狩りのグループに払い下げられる事になる。魔物や魔獣は、元は人狩りに攫われた人間であったという事実。

動物が魔獣化した種類も存在しているが、それらは人を使う以前の実験で生まれた魔獣で、元は何代も前に作られたモノらしい。生殖能力を持つタイプが少数生き残っていて、そういった魔獣には大人しいモノが多く、あまり人里には現れない。

ちなみに、魔物の体内に生成される魔力の結晶は、役目を終えた精霊石が砕けて宿っていた精霊が魔力そのものに還元された時に出来る魔力の塊りである。肉体の変質が治まるタイミングで砕けて体内に残った結晶が、稀に拾われているモノだ。

「サクヤが知れば心を迷わせる元になる。今は知らせない方がいい」
「そうでしょうか？　サクヤ様は確かに人の死を忌避している所はありますが……」

割り切る所は割り切って前に進める人だと、フレイは朔耶の事を認識していた。一方、レイスは魔物が元々は被害者だったと知れば、朔耶は魔物と対峙した時に攻撃を躊躇してしまうだろうと考える。

この世界において何者にも侵し難い存在となっている朔耶だが、その朔耶の躊躇で味方の誰かが命を落とせば、他ならぬ朔耶自身が傷つくであろう事は目に見えている。そんな出来事が重なれば、何れ朔耶はこの世界を忌避するようになるかもしれない。

朔耶が此方の世界に現われなくなる事は、フレグンスにとっても大きな損失になる。事実を知ってショックを受けるにしても、現在進行形で悩み続けるより、事が全て済んでからならば、短い期間に皆で慰めて癒す事も出来る。

フレイにはレイスの判断が正しいのか間違っているのか分からなかった。ただ、少しだけ心の中に『それは違うのではないか』という想いと共に違和感を感じていたが、最愛の人の考えた事である。結局、朔耶には最後まで秘密にして置く事に同意した。

後日、その判断を大いに後悔する事になるとは、今の時点では知る由もなかった。

８８話：思惑と思い遣り（後書き）

ちょっと翳り入りますが、そんなに鬱な話にはならないです。

89話：武器解禁

ティルファ上空に到着した朔耶は、ドマック造船所に下りようか、中央研究塔に下りようかと迷ったが、研究塔のテラスから顔を出したブラハミルトがおいでおいでと手招きをしたので、研究塔に下りてブラハミルトの私室にお邪魔する事にした。

元々今日はブラハミルトに用事があって来たのだ。

「おはよーございます、ブラハミルトさん」

「おはよう精霊女神殿、王都では大変だったようですね」

襲撃事件の事を少し話題にしつつテーブルで向かい合ってお茶を頂く朔耶は、荷物からお土産を出してテーブルの上に置いた。面に穴の空いた四角い小さな箱。ブラハミルトはその箱に魔力が宿っている事を感じ取り、興味深そうに見詰める。

「これは、もしや……？」

「魔力集積装置です」

「っ！　やはり、そうでしたか！」

どうぞと促されて魔力集積装置を手に取ったブラハミルトは、穴から中の精密な構造を覗き込んでは唸っている。魔力の抽出と保持を使用者の任意で行える発掘品のような代物。人工的な魔術の触媒としても新たな可能性を秘めた道具である。

研究者魂が刺激され捲っているらしく、暫し装置の観察に勤しむブラハミルト。魔力集積装置の事はまだ一般的には知られていない筈なのにしっかり情報を得ている辺り、朔耶はティルファらしさを感じて苦笑する。

「ふーむ、素晴らしい……。ところでサクヤ殿、まさかとは想いますが……これを譲って頂けるなんていう事は――」
「お土産ですよ、研究用も含めて三個あげます」
「おおっ　貴女は実に素晴らしい方だ！」

なんとも分かり易い反応に思わず笑ってしまう朔耶だった。

「いやぁ、お恥ずかしい所をお見せしました」
「いえいえ」
「それで、今回はまたどのような？」

お土産は一先ず脇に置き、これだけのモノを進呈するには相応の見返りを求められるモノとして、ブラハミルトはフレグンスの王室特別査察官殿の要求を窺う。アーサリム関連の支援か、はたまた例のネックレスに関する事かと推測に思考を巡らせる。

「特に何も。そういえば魔力石の加工機械はどんな具合ですか？」
「え……？　あ、か、加工機械でしたら、出来はまずまずといった所でしょうか」

予想に反して何も要求が無かった事に面食らったブラハミルトは、少々どもりながらも魔力石の加工機械の出来栄えを伝えた。削り出し装置として大まかな形を整える所までは出来ているが、指先程の細かい加工はまだ無理だという。

「そうですか～。でも機械の発達って結構早いみたいだし、そのうち良い機械が出来ますよきっと」
「ええ、日々研究と改良を重ねてますから。……本当に、何も要求はないので？」
「だから、只のお土産ですってば。んー……気になるようだったら、また今度何かあった時にでも宜しくお願いしちゃうかも？」
「それは、勿論です。分かりました、ではこれは今後何かあった場合に備えての先行投資という事で」

律儀なのか融通が利かないのか良く分からないなぁと、内心でブラハミルトを評した朔耶は、話題を変えてティルファの湖に浮かぶ最近の機械船について話を向ける。先程上空から見た限り、奇抜な形の船は殆ど見当たらなくなっていた。

「貴女が見せた機械船の推進器、皆がアレを模倣してますよ。比較的まともな船が増えましたね」

スクリューの概念が齎されてからは、結構な速度で走れる機械船が増えたそうだ。サクヤ式送風機を推進器に使っていた機械船が風車部分をスクリューに取り換えた所、明らかに速度が増した事で皆がその機構を参考に導入を始めた。

今や殆どの機械船で採用され、動力部分の構造や規格も統一され始めているらしい。

「一人か二人乗りの手頃な小さい船が出来たら、カースティアの観光事業に使いたいんですけどね」
「御自分でお作りにならないので？」

ブラハミルトは朔耶が自身で作れば手っ取り早いのでは？　と、

態々ティルファで開発される事を待つ朔耶の行動に疑問を投げ掛けるが、朔耶が此方の世界の人間が自力で発展していく事を阻害したくないのだと答えると暫しポカンとした表情を見せて納得した。

「なんとも……、貴女の視点の高さには驚かされますよ」

「あたし一人で考えた訳じゃないですけどね、急激な発展は歪みを齎せるから気をつけた方が良いって話で」

智を扱う者として共感したのか、ブラハミルトはその考え方にうんうん頷いていた。新しい発明や発見などがあれば直ぐに各国へ向けて発表するティルファだが、ティルファの齎した技術で生活のバランスを崩してしまった村や集落の話もよく耳にしていたのだ。

材木の切り出しで生計を立てていた森近くの村では、それまで村人全員で大きな木を切り倒し、運搬し、加工して街で売る事でお金を稼いでいたのだが、木を切る機械や運搬する機械、加工する機械の登場により、それらの作業を少人数で行えるようなった。

結果、それまで村人全員で働いて、稼いだお金は全員の生活の為に使われていたのが、機械を導入した一部の者だけが独自に多く稼ぐようになり、村の中での生活に格差が生じ始めた。それが、村人の間に諍いを引き起こす事態にまで発展した、等の話だ。

「技術の進歩は、人々の暮らしと歩調を合わせて行くべきなのかもしれませんね」

昼前にブラハミルトの私室を後にした朔耶は、ドマック造船所に

顔だけ出して挨拶を済ませると、一路帝国へと飛んだ。此方の世界でも冬は空が高い。何時もより高高度を飛行する朔耶の飛んだ後には、飛行機雲が続いていた。

帝都上空に到着した朔耶は地上を見下ろしながら高度を下げていく。帝都城の竜籠発着場から飛び立って行く数頭の竜が見える。

『アーサリムに行くのかな？』
デアロウナ

アーサリムへ飛び立った竜籠と入れ違いに発着場へ下り立つと、気付いた衛兵達が慌てて整列をしに集まってくる。朔耶はそれよりも早く、そそくさと城の中へ避難した。

『もぉ～～大騒ぎしないでって言ってあるのに～～』
タチバアル　ミデアルユエ　イタシカタアルマイ

先日、アーサリム遠征の初日に訪れた時は、作業でバタバタしていた事もあってか整列も無かったので油断していたが、ノンビリ着陸すると整列＆演奏が待っている。下りる場所を変えようかと真剣に検討するのであった。

『まずは腹ごしらえからね』

とりあえず帝都城三階にあるお気に入りの士官食堂へ昼食を摂りに向かう。相変わらず廊下で擦れ違う帝国貴族や官僚達は皆、敬意を払い、端に寄っては道を空けてくれる。朔耶も彼らに対する振る舞いに慣れはしたモノの、根っこの気持ちは中々馴染めない。

『変装でもしてくれれば良かったかなぁ』
オノガタチバヲ　ジカクシ　ナレヨ
『立場ねぇ……』

朔耶が食堂の隅っこで昼食を摂っていると、同じテーブルに付く者が居た。帝都城の中では殆どの人が朔耶の事を知っている為、『皇帝の黒后』との同席に臨む者など滅多に居ない。場合によっては皇帝陛下に睨まれてしまうからだ。

「珍しいと思ったら、バルか……」
「ふふ、この城で余以外にサクヤと食事をする男は存在させん」

アネット経由の情報網で朔耶が城を訪れた事は直ぐにバルティアに伝わっていた。朔耶が食堂に居ると聞いたバルティアは、皇帝の食堂から態々料理持参で下りて来たのだ。

「皇帝が食堂でご飯食べてていいの？　他のお客さんが緊張するんじゃない？」
「お前がそれを言うか……」

何だかんだと掛け合いながら、朔耶はバルティアとの食事の時間を、割と楽しく過ごしたのだった。　昼食を済ませて食堂を後にした朔耶は、バルティアのサクヤ式自動二輪（スクーター）に魔力集積装置を組み込む為、城内の工房へとやってきた。

最近は自動四輪を乗り回す時間が多く、中庭工房と執務室の移動くらいにしか使っていないようだったが、音が結構大きいので夜中に廊下で乗り回さなくなった事は良い事だといえた。

「ほう、石の交換が必要ないのか……自動四輪の方には組み込めないのか？」
「出来なくもないけど、まだ装置自体の数が少ないから無理」

カートリッジタイプに纏めた魔力集積装置のバッテリーを組み込んで出力を確かめる。魔力計の位置が若干低い場所に付いているが、特に問題は無さそうだ。

「これでよしっ」
「ふむ……」
「ん？　どうしたの？」
「うむ、実はな」

愛車一号のグレードアップに喜び半分、抱えた問題に憂い半分といった様子で、バルティアは自動二輪に跨りながらアーサリム地方の様子と、帝国軍について。

ポルモーン渓谷方面には遠征部隊の帝国騎士団と魔術団、フレグンスの先発隊と傭兵団、それに地元の部族戦士達を交えた混合部隊で度々斥候を送っては、道中の安全確保を目的とした魔物や魔獣の討伐を行っているのだが、その戦果に少し問題があるらしい。

「兵の数と質では我が帝国軍が圧倒的に勝っているのだが、困った事に魔物を仕留めるのは決まってフレグンス勢なのだ」

物量と質に抜きん出ている帝国軍は魔物の動きを封じ込める所までは迅速に行うものの、討伐をなす為の攻撃に十分な効果を得られず、間誤(まご)ついている内にフレグンスの騎士や傭兵団によって仕留められてしまう。

「それって、上手く役割分担が出来てるんじゃないの？」
「結果だけをみれば問題ないように見えるがな、内容的には我が軍がフレグンスの御膳立てをしているようなモノだからな」

何が問題なのか分からないという朔耶に、バルティアは名誉や自尊心の問題である事を示唆した。幾ら勇猛果敢に挑んで有利な戦況に導いても『魔物討伐』という手柄部分は持っていかれてばかりなので、兵達の士気にも影響が出始めているという。

「協力して倒したんだから、皆で討ち取ったって事になるじゃん…」
「前線の兵達はそうは考えぬのだ。トドメを刺した者が討ち取ったと考える」

難儀ねぇと肩を竦める朔耶に、バルティアは折り入って依頼という形で頼み事を持ち掛けた。

「そこでだ、我が軍にもフレグンスの騎士達が使っているような有効な武器を作ってはくれまいか？」
「えぇ～～」

気が進まなそうにしている朔耶に、バルティアは皇帝として帝国軍兵士達の名誉と安全の為に頼むと頭を下げた。そこまで言われてしまうと、朔耶も無下には出来ない。アーサリムの問題が片付けば絶対に返却する事を条件に、何か考えてみると約束した。

既にポルモーン渓谷方面への本格的な進軍も始まっているので、新しい武器の構想を練るなら早いほうが良い。

「じゃあ、あたし一旦還るね。夜にまた来るかもしれないけど」

「余はいつでも歓迎するぞ、寧ろいつも傍にいてくれ」

マメな皇帝陛下に微笑を送りつつ、朔耶は元の世界へと帰還する。

『まーったく、隙あらば口説こうとするんだから』

コノミデハ　ナイノカ？

『別に、まだ恋愛とか考えてないだけ』

ケンゼンナノカ　フケンゼンナノカ　ハンダンシカネルナ

神社の精霊の溜め息を感じながら、朔耶は帝国向けに開発する武器の構想を思い描いた。

「あ、もしもし？　タカ君？」

『どうした？　朔姉』

今日も今日とて工場で作業をしているであろう弟と幼馴染に電話で連絡を付けた朔耶は、新しい武器の開発を依頼する。王都の襲撃事件で魔物を相手にするのは予想以上に大変だという事が分かったので、少し強めの武器を注文した。

『じゃあさ、拓君のアレ、解禁にしようか』

「うーん、そうだね……一丁だけ、期間と地域と目的限定で強力なのを」

事件の事を聞いていた弟や拓朗達も、今後アーサリムで多くの魔物と対峙する騎士達を思えば、接近する必要のある衝撃の篭手Ｔ２

だけでは心許無いと感じていた。その為、作るだけ作っておくかと以前没にした拓朗考案のレールガンを元に色々と研究していたのだ。

『基礎は出来てるから何とか今日、明日中には仕上げるよ』

「うん、ありがと。宜しくね」

帝国の依頼には『多重圧縮反発魔力伝導機砲』略して『魔導砲』を用意する事になった。

電話を切って一息吐いた朔耶は、そのまま庭に出て帝都城へと転移すると、用意する武器の概要が決まった事を伝えに皇帝の執務室へ向かう。途中、書類を抱えたアネットに会った。

「あら、サクヤちゃん」

「ヴィヴィアンさん、忙しそうだね」

アーサリム関連で優秀な密偵も多く出払っている為、その分の仕事も増えているらしい。送られてくる情報の取捨選択も、量が量だけに大変なのだという。『未開地』なだけあって、連日多くの新しい情報が次々挙がるのだ。

「最近ポルモーン方面で人が連れ去られたって情報が大量に入ってて〜、重複分とか数えるのがもうメンドーでメンドーで」

「大変だねー」

アネットに労いの言葉を掛けながら一緒に執務室へ向かった朔耶は、そこでバルティアの依頼に対する武器の話をしてその場で契約の書類を増やし、アネットの頬を引き攣らせたりして午後を過ごすのだった。

その夜、朔耶は借りた客間のベッドでゆっくり睡眠を取り、局地的な強風に煽られた皇帝陛下が深夜の城内で廊下に転がるという現象が何度か起きたが、特に騒ぎも無く一日は静かに過ぎていく。

「やはり無理か……流石はサクヤの精霊、まさに鉄壁だな」
「陛下もだんだん遠慮が無くなってきましたねぇ」

朔耶が宿泊する部屋への突入に何ら躊躇が無くなって来たバルティアは、此れはこれで楽しんでいるようでもあった。

翌日――

広い帝都城の下階層エリアをゆっくり散策して回ったり、病院で精霊の治癒を行ったり、古くなったランプを魔力石ランプに改良したりして過ごした朔耶は、魔導砲の開発状況を確かめに一旦帰還する。

「ただいまーって、あれ？　タカ君に拓ちゃん、帰ってたの？」
「お、やっと還って来たか」
「おかえり朔姉」

縁側に腰掛けてお茶など飲んでいた弟と拓朗が、庭に帰還した朔耶を出迎える。朔耶は二人が並んで座っている隣に、布で包まれた大きな物体を見つけた。見るからに『重火器』な形をしている。

「もしかして、ソレ？　ホントに一晩で作っちゃったんだ？」

「ああ、何とか間に合わせたよ」
「だけどまだ、試射が済んでないんだ」

威力が強すぎて工場のブロック塀では試せなかったらしい。突き抜けた弾が工場の壁や塀まで壊してしまいかねないという。

「そんなに強力なの？　大丈夫なんでしょうね……」

安全性を問う朔耶に、弟と拓朗はそれを試す為にも試射が出来る場所まで送って欲しいと頼んだ。この世界でこんなモノを試し撃ち出来る場所など近所には無い。即ち、異世界に連れて行ってくれと。

「なるべく広くて的になるモノがある場所がいい。あと、出来れば人手も欲しいな」
「殆ど大砲みたいな威力だから反動も重量も凄くてさ、正直一人で撃つのはキツイと思うんだ」

二人にそんな説明を受けた朔耶は一体どんなモノを作ったのかと呆れつつも、そういう事ならば依頼人にお披露目も兼ねて帝都城の中庭訓練場が良いかと考える。あそこであれば広さも十分、的になる物もある。

「まあ、そういう事なら……」
「よっしゃ！」
「じゃあ早速行こうっ　……よいしょっと」

ずっしりと重そうに包みを担ぐ弟と拓朗が庭に描かれた円に向かう。内側に反発力を纏う溝の付いた四本の突起を銃身とする、レール部分だけで８０センチもあり、本体部分は圧縮反発力を発生させる機構と魔力集積装置を複数搭載した魔導砲。

全長１３０センチ、全幅３０センチ、全高４０センチ、特殊な弾丸を使う単発式で弾丸込みの総重量は１８キロにも及ぶ。

「じゃ、行くわよ？」
「おっけ」
「いいぞ」

包みを担ぐ弟と拓朗の間に立った朔耶は、二人を連れて帝都城へと転移した。

90話：異界の咆哮と魔族の溜め息

帝都城――

夕刻の下階層は訓練を終えた兵士や一般住人達で賑わう。その喧騒も届かない場所、嘗てエイディアス帝が潜んでいた地下の間に出現した朔耶と弟、拓朗の三人は、取り合えず中庭を目指して昇降機で上の階へと上がる。

「すげぇな、これエレベーターじゃないか」
「古代魔法文明の遺跡なんだってさ」
「へーえ、確かに電気で動いてる訳でもなさそうだ」

もっとはしゃぐかと思われた二人は、意外に落ち着いた様子で帝都城の壁や床、施設等を観察していた。朔耶はざっと意識の糸で周囲を探り、この辺りを専門に見張っているらしい密偵が報告に上がっていくのを感じ取ると、二人に釘を刺しておく。

「二人とも、あたしの身内って事で通すからお客様扱いになるとは思うんだけど、くれぐれも羽目外さないでよ？」
「分かってるよ、ここじゃ俺たちは外国人だからな」
「幾ら朔耶の身内でも、それなりに警戒は向けられると思ってるよ」

試射を済ませば直ぐ帰るから心配するなと、二人は笑って答えた。

中庭に出るまでの間、『皇帝の黒后』と並び歩く見慣れない姿をした『黒髪の少年』二人に、廊下で擦れ違う人々は皆例外なく振り返るなり凝視するなりして足を止める。特に女性は二人の『少年』の容姿に釘付けとなった。

実年齢は一般的に『青年』な弟と拓朗なのだが、朔耶も含めて此方（オルドリア）の人々からは非常に若く見られる。加えて、小奇麗でお洒落の入った装いとエキゾチックな容姿は、然して特別美形という程で無くとも魅力的に映る。

多くの日本人にその自覚は無いが、世界的にもお洒落であるとされる装いを『極普通』と認識するまでに至っている日本人の感覚は、実は思いのほか洗練されている。自覚が無い故の自然体は正に『驕り無き身に付いたセンス』という認識を与えていた。

「なんか、エライ注目浴びてるな……」
「やっぱ格好とか変に感じるだろうしなぁ……」

当の二人は奇異の視線を向けられているモノと考えて居心地悪そうに朔耶の後を付いていく。その若干憂いを含んだ表情に、城の廊下を行く侍女さんやメイドさん他、御婦人方は母性本能やら何やら色々と刺激され捲ってついつい目で追ってしまうのだ。

そんな調子で中庭に出る頃には、知らせを聞いたバルティアが護衛の衛兵とアネットも伴ってバタバタと現れた。

「あ、来た来た」
「サクヤ！　その二人は何者だ」

態々朔耶に貰った革のコートを羽織って来る辺りに言外のアピールが窺える。概ね予想していた通りの行動を見せるバルティアに、朔耶は二人が自分の身内と家族のような友人であり、依頼の武器製作者である事を伝えた。

「例の篭手もこの二人が作ったんだよ？」

「なんと……そうであったか」

朔耶が依頼された武器の性能実験を行いたい趣を告げると、訓練場に重甲冑型の案山子を用意して貰える事になった。アーサリムでの魔物討伐ではサクヤ式を持つフレグンス先発隊に大きく水を開けられている帝国遠征部隊。

彼らの名誉挽回を賭けた対魔物用サクヤ式のお披露目が、中庭訓練場にて皇帝陛下の御前で行われる。噂を聞きつけた多くの人々が見物に集まる中、孝文（おとうと）と拓朗は『これ、失敗したらヤベェ』と少し緊張気味に、魔導砲の各部を点検し始めた。

「しかし、あれが本物の皇帝か……」

「朔姉に求婚しまくってるらしいけど」

案山子が設置される間、魔導砲の整備をしながら帝都城や中庭の訓練場施設、集まった人々を観察していた孝文と拓朗がヒソヒソと会話を交わす。特に今、朔耶と話している皇帝陛下と側近らしき妙齢の女性。

朔耶がヴィヴィアンと呼んでいる彼女はしきりに自分達の事を聞きだそうとしている事が、朔耶の受け答えから感じられた。

孝文や拓朗には此方（オルドリア）の人々が何を話しているのか分からない。聞

いた事もない言語で話すオルドリアの人々と日本語で普通に会話をしている朔耶の姿に、以前聞いた精霊術の『疎通の加護』が如何に有用な力であるかを実感する二人。

「言葉の壁が取り払われるだけで世界が変わるな」
「だね、それが原因の諍いも生むだろうけど、相互理解の方がずっと多いと思うよ」

『疎通の加護』は精霊術の中でも割と高等な類に入る術なので、元の世界で朔耶が使う事は難しい。しかし、目に見えて劇的な効果がある訳でもない一見地味な意思疎通という術一つでも、世界に多大な影響を与えられるような力を秘めている。
改めて、そんな魔法(ゆめ)が実在するこの世界(オルドリア)が『異世界』である事を認識する拓朗&孝文であった。

「……にしてもイケメンだな、あの皇帝」
「朔姉、こっちであんなのに囲まれて生活してたのか」

そりゃ学校のナンバーツー程度に告白された位じゃ怯みもしない訳だと、姉に恋慕した同学年にいるファンクラブ持ちなイケメン君の事を思い出し、孝文は少しだけ彼(にしざき)に同情を向けた。

「さて、準備はいい？」
「一応バッチリだ。手順だけど、一発目は俺達が撃つから、二発目をこっちの人間に撃たせるって事で」
「後、弾が七発しかないんだ。還ったら作る予定だけど」

それまでは此方で何とかしてくれと言って、孝文は魔導砲に使われる弾丸を朔耶に渡す。長さ二十センチ、直径四センチの円柱に四枚の羽が付いた特殊な弾丸。羽の幅は二センチで厚みは一センチ程。飛翔中のバランスを取る為のモノで無い事は明らかだ。

「うーん、帝国の工房で作れるかな」

円柱部分はともかく羽の部分は難しそうだと唸る朔耶に、拓朗は形と強度さえ再現出来ていれば少しくらい重くなっても使えるからと、弾丸のサイズが図解で描かれた紙を渡した。

隊列を組むように沢山並べられた案山子群から五メートルほど離れた場所に立ち、拓朗が構えた魔導砲を孝文が支える。実戦で使う場合は本体を構えて引き金を引く役、本体を支える役、弾丸の装填をする役の三人で運用という仕様に考えられている。

「とりあえず、当たればいいか」
「だな、あれだけ並んでればどれかに当たるだろうし」

いよいよ新型サクヤ式の試射が始まる。バルティアやアネットを始め、中庭に集まった多くの見物人達が固唾を呑んで見守る中、帝都に工房を持つ武器職人達は『皇帝の黒后』所縁の若い武器職人が作ったという武器に関して、あれやこれやと囁きあう。

どのような攻撃を行う武器なのか、形状から飛び道具である事は予測出来た。一部の傭兵団が使っている機械式ボウガンのような強力な射撃武器か、或いは、サクヤ式独特の魔術を撃ち出す触媒魔術を発展させたようなモノなのか。

「あの大きさなら短槍を撃ち出す大型弓を小型化したモノとも考え

られるが」
「いや、なにやら小さな筒のような物体を持っていたぞ、触媒型魔術を投射器に組み込んだモノかもしれん」

職人達の囁き合う声に耳を傾けていた人々は、弓系の武器か、触媒魔術を組み込んだ物体を投射して対象上で発現させるような特殊な武器かもしれないという考察に、黒髪の若い武器職人がその武器を腰撓(こしだ)めに構えている姿を見て納得した。
そして武器を構える二人が、此方(オルドリア)の人々には分からない言葉で何かを叫び、皇帝の黒后が通訳して皆に告げる。

「撃ちまーす」

ダガァアアアァン

凄まじい轟音が中庭訓練場全体に響き渡り、見物人達が一斉に身を竦ませる。同時に、重甲冑型の案山子が宙を舞った。二列に並んだ案山子の前列正面に置かれていた一体が半分に砕け、うしろの一体も巻き込みながら二つに千切れて吹っ飛んだのだ。

案山子二体を破壊した弾丸は、中庭訓練場に設置されている訓練施設の一部を巻き込んで二重防壁の内壁に突き刺さった。もっとも、案山子を吹っ飛ばした時点で弾丸も原型を止めておらず、壁に突き刺さるというよりも塊りがめり込んだといった具合だったが。

「あちゃ、やっぱ横並びだとイマイチだったか」
「縦に並べ直して貰ったほうがインパクト出せるかな」

ガシャガシャと転がる案山子の残骸を見ながら、拓朗と孝文は見た目パッとしなかった第一射に少し不満を持ちつつも、魔導砲に異

常が出ていない事を確かめて試射は成功したと朔耶に伝えた。朔耶も頷いてそれに応え、二人を労う。

一方、試射に立ち会ったバルティア皇帝を始めとする帝都の人々は、重甲冑型の案山子を一発で二体も吹き飛ばし、尚且つ後方の訓練施設を一部損壊させて防壁の内側まで届く威力に、声も出せない様子で固まっていた。

武器職人達の予想でも、弓系ならば案山子を貫くような強撃か、触媒魔術系ならば範囲型の攻撃魔術が発現するかと考えていた。

「さ、サクヤちゃん？　今のって……」

職業柄、逸早く立ち直ったアネットが今の『試射』に付いて訊ね、状況確認と把握に務める。朔耶は衝撃の篭手Ｔ２にも使われている機構を使って物体を超高速で撃ち出したのだと、大まかに魔導砲の仕様を説明した。

今のが魔術ではなく、魔力石を使った仕掛けによる威力だと知らされた人々は、改めて『サクヤ式』の出鱈目ぶりを思い知る。

「それじゃあ次、騎士の人」

予定通り第二射は帝国の騎士に撃たせる為、アーサリムで活動している部隊と同じ武装をして待機していた三人を呼び寄せて配置に就かせた。拓朗から渡される魔導砲を緊張気味に受け取る構え役。孝文は装填役に弾丸を渡す。

拓朗達の要望で案山子が縦向きに並べ直される中、朔耶の通訳で魔導砲の扱い方を帝国騎士の三人にレクチャーして行く。

「先ず上部の蓋を開けて――」

装填から発射までの手順は先ず、魔導砲本体の上部中央にあるカバーを開き、右側のレバーを引くと中のチャンバーが開くので、そこに弾丸を入れてレバーを戻せば装填完了。

カバーを閉める事で内部に圧縮反発力が発生し、引き金を引くと圧縮反発力のエネルギーが銃身方向へ流れて弾丸を押し出す構造になっている。その為、弾丸には装填状態から撃ち出されるまでの間、圧縮反発力の圧力に耐えられる強度が必要となる。

魔力集積装置のパック部分を外しておけば、装填状態でカバーを閉じていても圧縮反発力が発生しないので安全だ。

「次、撃ちまーす」

準備が整い、第二射を告げる朔耶の声に、見物人の皆は肩と腹に力を込めた。重甲冑型の案山子は縦一列に十四体並べてある。

ダガァアアアァン

耳を劈く轟音を鳴り響かせて魔力に包まれた専用弾が射出されると、十四体の案山子が一瞬で全て吹っ飛んだ。まるで箒でもってゴミを一掃いするかの如く勢いで。

近いモノから順にほぼ粉々、大破、中破、破損と次第に威力が下がっている事は当然ながらも、一番後ろに配置されていた案山子は前の列から飛んで来た案山子に押し潰されていた。

「……凄まじいな」

溜め息のように吐き出されたバルティアの呟きに、その場に居る部下や見物人達の皆が同意した。

「余の名において、タクロウとタカフミに褒賞を与える」

帝国に素晴らしい武器を貸与(たいよ)してくれた事に敬意を表して、拓朗と孝文には皇帝陛下から帝国金貨が其々五十枚づつ贈呈される事になった。思わぬ褒賞におっかなびっくり金貨の詰まった袋を受け取る二人。

「じゃあ、拓ちゃん達は先に戻すね」
「ああ、頼む」
「さっきも言ったけど、弾丸はこっちで作れるようなら作るよう頼むよ」

二人を元の世界へ還した朔耶は、魔導砲の弾丸を見物人の中にいる武器職人や、城内工房の鍛冶職人に見せて同じ物を作る事が出来ないか訊ねて回ったが、何れもやはり羽の部分が難しいという答えが返ってきた。

「うーん、やっぱり難しいかぁ」
「サクヤが作る事は出来ないのか？」
「出来なくはないけど、掛かりっきりになっちゃうし……」

流石に鉄の類になると簡単には削れない事に加えて、朔耶の加工技術は細かくともあまり精密に寸法を揃えている訳ではない為、こういった単純ながら寸分違わぬ造りをしたモノの製作には向かない。良くも悪くも職人未満の不揃いな手作り品なのだ。

「こういうのはティルファの職人さんなら何とかなるかも」
「ティルファか……」

朔耶の工房巡りに付き合っていたバルティアは、帝国が使う武器の弾丸をティルファが製造する事について考える。
しっかり距離を置いて付いて来ていたアネットにも相談し、特に問題は無いとしてその方向で進める事にした。布を巻いた魔導砲を肩からぶら下げ、夕闇に包まれる帝都城の竜籠発着場に上がった朔耶は、一路ティルファへと飛び立った。

『重い～～、これ着陸する時大丈夫？』
コノテイドデアレバ　マダモンダイナイ

深夜と呼ぶには少し早いが一般の人々は寝静まる夜半過ぎ、ティルファに到着した朔耶は、まだ明かりの付いている中央研究塔のテラスに着地した。私室で魔力集積装置の研究観察をしていたブラハミルトは、朔耶の突然の訪問に何事かと席を立つ。

「こんばんはーブラハミルトさん」
「こんばんは、サクヤ殿。こんな夜更けに私の部屋を訪ねていらっしゃるとは……ふふふ」
「うわっ　ブラハミルトさんに意外な一面が！」

挨拶で軽く冗談を交して和み合うと、朔耶は早速魔導砲の弾丸を取り出して見せた。
ブラハミルトは朔耶が担いできた大きな機械が気になったが『こ

れと同じモノを出来る限り再現して大量生産出来ないか』と持ち掛けられて、その物体を手に取った。片手サイズの何に使うのだかよく分からないモノ。

「この担いできた機械で撃ち出す矢とかみたいなモノですよ」

「ほう……帝国の」

朔耶に大まかな説明を聞いたブラハミルトは魔導砲の弾丸を具(つぶさ)に観察すると、ティルファにいる職人の手で再現が可能かどうか確かめる。

「確かに、ティルファの技術でなら可能ですね」

一度に沢山を作り出すのは難しいので大量生産は無理だが、一日に二、三個くらいまでなら現状の設備でも直ぐに取り掛かれるとの判断を下した。

「それじゃあ、お願いできますか？」

「ええ、承りましょう。これで魔力集積装置の譲与に対する借りも返せそうですしね」

ブラハミルトはそう言ってテーブルの上に置いてある研究中の魔力集積装置に視線を向ける。その実、内心では色々とティルファの国益を見据えた計算も行われていた。

キトの攻略に尽力した事だけでは今一つ弱かった精霊石鉱山の採掘権要求に関する主張の正当性に、帝国の武器に必要な弾丸を作る事で、間接的にもアーサリム攻略に協力したという理由を加える事が出来る。

「一石二鳥ですね」
「イッセキニチョウ、とは？」

意味を説明され、ユーモアも感じさせるような情景が浮かぶ賢者の言葉に感心する気持ち半分、その意味から察するに自身の内心で行われていた計算にも気付かれている事に気付いて恐々とする気持ちも半分なブラハミルトだった。

サンプルに弾丸を一つ、ブラハミルトに渡して一旦元の世界に帰還した朔耶は、そのままアーサリムの入り口、ササの街へと転移した。裏技発動である。

もう夜も遅い為、ササの街の住人は皆が寝静まっており、僅かに酒場の明かりが灯っている他はフレグンスと帝国の支援拠点である陣地に篝火が炊かれている程度の灯りしか無い。

朔耶はとりあえず帝国の陣地に赴き、入り口に立っている帝国騎士に部隊長さんは起きているかと訊ねるも、部隊長を始め遠征部隊の三分の二がフレグンスの先発隊と傭兵団、地元部族戦士との混合部隊を編成してポルモーン方面に進軍して行った後だった。

「恐らく今頃は渓谷の入り口付近で野営に入っているでしょう」
「そっかぁ、じゃあ今日中に追いかければ渓谷に入る前に合流出来るね」

伝令役として待機している帝国の密偵に、ティルファから弾丸を受け取って進軍している部隊まで届けるように伝えると、朔耶は魔

導砲と僅かな弾丸を届けに混合部隊を追ってポルモーン渓谷へと飛び立った。

「フレグンスと帝国、アーサリム部族の混合部隊がポルモーン渓谷の入り口で野営中だそうです」
「ふむ、遂に本格的な侵攻を始めたか。例の部隊は？」
「既に竜籠にて輸送中です。そろそろ渓谷入り口に到着する頃かと」
「そうか、よし……統率種による完全な魔物部隊。この実験部隊が何処まで使えるか、しっかり記録しておくようにな」

この所ポルモーン方面に放ってある魔物が列強国の斥候に次々と討伐されており、このままポルモーンに侵攻されて拠点を築かれると厄介な事になる。そんな訳で調整を急いでいた魔物軍団の実験部隊だが、どうにか間に合いそうだとヨールテスは一息吐いた。

侵攻中の部隊を渓谷入り口で叩いておけば、ササの街に残った戦力からみて増援が来るまで再侵攻は無いと判断した。向こうが戦力を整えている間、こちらも戦力を整える時間を稼げる。
先日までに大量の素材を確保しておいたので、後は速やかに魔物化して戦力に加え、部隊の編成を進めるだけである。

「識別ネックレスの無効化も進めねばならんし、問題は山積みだな……」

知らず、吐いた一息は溜め息となっていた。

91話：魔物

ポルモーン渓谷の入り口に野営の陣地を敷いた混合部隊は、歩哨が陣地の回りを巡回する中、各部隊長が集まって今後の展望を話し合っていた。ここまでは付近の魔物討伐が進んでいたので、馬車を使って比較的スムーズに移動出来た。

ここからポルモーンの街までは、順調に行けば渓谷を徘徊する魔物や魔獣との戦闘を考慮しても半日で到着出来る距離だ。

「夜明けと共に出れば、明日の昼には街に着くだろう」

「直ぐに拠点を確保して竜籠で資材と人員と輸送すれば、渓谷一帯は押さえられるな」

渓谷を押さえてしまえばアーレクラワ方面から流れてくると思われる魔物の流入拡散も抑えられ、安全な陸路が確保される事でササとポルモーンの流通を増やし、現状は竜籠に頼っている物資や人員の輸送も安定且つ迅速に行えるようになる。

戦女神（サクヤ）から賜った信じられないほど精巧な渓谷（こうくう）一帯の地図（しゃしん）を囲んで進軍ルートを相談する部隊長達。そこへ――

「襲撃だーーっ！」

巡回中の歩哨が警告を発した。

僅かな灯りを探して真っ暗な夜の大地を見下ろしながら、朔耶はアーサリム上空をササの街からポルモーン方面へと飛行していた。渓谷の外はそれ程入り組んだ地形ではないので、野営の篝火があれば直ぐに見つかる。

「見つけた！　って、なんか騒いでる？」

セントウヲ　オコナッテイルヨウダ　タタカイノケハイガ　オオキイ

それは大変だと、朔耶は飛行速度を上げて混合部隊の野営陣地に急ぐ。アーサリムでの魔物討伐は順調に行われていると聞いていたが、王都の襲撃事件で魔物と対峙するのは如何に大変かという事を学んでいるので楽観は出来ない。

「くそっ　離れるな！　固まって対処しろ！」

「部族戦士の支援魔術は後に回せ！　このままじゃあ接近出来んから無駄になる」

「攻撃魔術の牽制はまだかっ！」

「やっている！　敵が多過ぎるのだ！」

混合部隊は苦戦していた。今までのような単体による襲撃であれば、培った経験則から帝国魔術団による牽制、帝国騎士団による足止め、フレグンス騎士団とパーシバル傭兵団によるトドメで簡単に撃退出来ていたのだが、今回ばかりは勝手が違った。

「奴等、動きが統制されているぞ！」

「これだけの数の魔物を操るとなれば……、近くに人狩りが居る筈だ、探せっ」

「右側面からも四体来ます！」
「ちくしょう！　こいつ等何体いやがるんだっ」

これまでのような単体による遭遇戦ではなく、明らかに統制された動きを見せる集団化した魔物が、徒党を組んで野営陣地に襲撃をし掛けて来た。魔術団の牽制を翻弄するように、突進して来たかと思えば迎撃態勢が整う前に退き、別方向から仕掛けて来る。

バラバラに動いていても、三体四体と数が多ければ相応に苦労する相手が、軍隊のように統制された動きで攻めて来るのだ。更に、混乱した現状で確認出来ただけでもその数、十体以上。騎士達の間にも部隊が壊滅する前に撤退すべきかとの声が囁かれる。

「まずい！　包囲されているぞ」
「退路を絶たれたか……こいつ等やけに知恵が回ってないか？」

負傷者を中にして円陣を組んだ混合部隊と、その周囲を闇に紛れて包囲する魔物の集団が膠着状態に入ったその時、辺り一帯を眩しい光が照らし出した。騎士達が見上げた空には、直視出来ない程に眩しく光り輝く翼が広がっていた。

漆黒の翼を帯電で発光させて照明にする方法を覚えた黒の精霊によって、まるで昼間のような明るさで周囲を照らすと、文字通り光の翼を広げた朔耶が大きな荷物を担いで下りてくる。

状況が状況だっただけに、騎士達や部族戦士達の中には『サクヤ様が御光臨なされた……！』とか呟いては感極まっている者の姿も見受けられる。当の朔耶は『うわっまぶしっ』などと言いながら黒の精霊にもう少し光度を落とすよう頼んでいた。

「ツヅキ！」
「ブラットさん、帝国の部隊長は？」

円陣の中心に下りて負傷者を治癒した朔耶は、駆け寄って来たブラットに帝国遠征部隊の部隊長を訊ねた。『魔物の集団に包囲される』という異常事態に動揺する部下を鎮め、部隊行動を維持する為に各部隊長は円陣の中を奔走している。

「我々用のサクヤ式ですとっ？」
「うん。とりあえず使い方教えるから、三人ほど貸して？」

円陣を維持して魔物の接近に警戒する混合部隊の騎士達は、帝国遠征部隊の部隊長と朔耶の会話に耳を欹てる。

特に、サクヤ式を持つフレグンスの騎士や、その雇われ兵であるパーシバル傭兵団にまで美味しい所を持っていかれてばかりだった帝国の騎士達は、遂に自分達にも魔物を仕留める機会が与えられるのかと期待感を膨らませた。

しかし、齎（もたら）された武器が何やら変わった形をした大型の飛び道具らしき武器一つだけと分かると、やはり『皇帝の黒后』は『フレグンスの戦女神』なのかと、幾分残念そうな様子で肩を落とす。

三人の帝国騎士に魔導砲の扱い方を教えた朔耶は、先ずは弾丸の装填からやらせてみた。

「まだ引き金に指掛けちゃ駄目よ？」

一人が本体を抱え、一人がそれを支え、一人が上部のカバーを開いてレバーを引き、弾を込めてレバーを戻し、カバーを閉じる。中

で発生している圧縮反発力によって微かに振動する魔導砲本体。その時、円陣の外側に立つ騎士が叫んだ。

「魔物が陣形を組んだぞ！」

「突撃してくる気か……？」

九体の魔物が縦横三列の密集陣形を取ると、前列の魔物が腕で顔面を防御するような構えを取って体制を低くした。朔耶の光の翼で周囲が照らされていなければ気付けなかった魔物側の動きに、騎士達は騒然とする。

統制された動きをするばかりか、隊列と陣形を組んでの集団行動など、今までの魔物に対する常識が全く通用しない。

「チャンスよっ！　あれ狙って！」

騎士達のそんな戸惑いを余所に、朔耶は魔物の突撃体勢に備えていた騎士達を脇に退かせて射線を確保すると、魔導砲を預けた帝国騎士達を前に出させる。

「いい？　一発ずつしか撃てない上に、弾が四発しかないから、良く狙ってね？　あと、ちゃんと踏ん張らないと転ぶわよ？」

「ハッ！」

彼らは『もうこうなればヤルしか無い』と半ば自棄気味に、帝国にたった一つだけ与えられたサクヤ式の武器を構えた。言われた通りに、しっかり踏ん張りながら構えると、銃口を魔物の集団に向ける。

「来るぞ！」

突撃体勢を取っていた魔物の集団が密集陣形を維持したまま一斉に突進を仕掛けて来た。

「てーーっ！」

ダガァアアアァン

凄まじい轟音が響き渡り、思わず首を竦めた騎士達は、突撃してきた魔物の集団が赤茶けた飛沫と共に宙を舞う姿を目撃した。そして数メートル先に、ドチャドチャと水音の混じりの肉塊が叩きつけられる音が響いて、魔物だった物体が転がる。

魔物数体分の肉塊が散らばる光景のあまりの凄惨さに静まり返る一帯、その気配を悟ってか配慮した黒の精霊が翼の光度を落とし、それらは闇に覆われる。魔導砲の一撃を放った騎士達は、惚けている所に円柱形の物体を眼前に差し出されて我に返った。

「はい、次の弾」

そう言って弾丸を差し出す朔耶も、スプラッタを見て気分が悪くなったらしく、口元に手を当てて少し顔色が青い。そんな一時の静寂は魔物の咆哮で破られた。吹き飛ばされた集団の他にも、陣形を組み終えた集団が複数存在している。

再度、編成された魔物の集団が突進攻撃を仕掛けて来た事で、辺りは戦闘の喧騒に包まれ、死の気配に覆われていく。

この夜、混合部隊が遭遇した魔物の群れは、実に五十体もの魔物で編成される統率の取れた魔物の軍だった。

魔導砲の威力を目の当たりにし、魔物の数と動きにも戦慄した混合部隊の騎士達だったが、精霊の癒しや、光る翼で十分な視界を確保してサポートする朔耶の加護の元に落ち着きを取り戻すと、すぐに体勢を立て直して有効な戦法を編み出した。

統制された動きをするといっても、魔物達の行動はまだまだ戦術としては甘いレベルだったので、慣れてしまえば精神的な余裕も生まれる。帝国魔術団が魔術で牽制しつつ一箇所に集まるよう誘導。其処に魔導砲を撃ち込んでごっそり穿つ。

陣形を吹き飛ばされて孤立した魔物には、此れまで通り帝国騎士団が足止めの包囲で動きを抑え、部族戦士の精霊術モドキな支援魔術を受けて一時的に身体能力を強化されたフレグンスの騎士達とパーシバル傭兵団が篭手で突撃、各個撃破して行った。

その中で、後方に居た甲冑を身につけている角付きの魔物が倒されると、途端に動きがバラバラになる魔物の集団に、騎士達は『角付きの魔物が他の魔物達を指揮していたのではないか？』と推察する。

「また新種の魔物が現れたのかもしれません」
「確か、空を飛ぶのも今までは居なかったんだよね？」

朔耶は魔物を指揮する魔物によって集団行動をとる魔物が現れた、という情報をレティレスティアに伝えておく事にした。もう夜遅いので寝ているかもしれないと思いつつも、集団行動をとる魔物の脅威という情報は重要だと判断した。

『寝てた？　ごめんねー？』
――だ、だいじょうぶれす……ちゃんと、伝えますから――

混合部隊の各隊長達はここで野営を続けるより、新たな魔物の集団が現れない内にポルモーンの街まで強行軍で進んだ方が良いのではと、話し合いで結論を出した。これには朔耶の同行が必須条件なのだが――

「いいよ、一緒に行こっか」

朔耶も彼らをこのまま放って帰る訳にも行かないからと同行する事に同意した。魔導砲が弾切れで使えない為、先程のような魔物の集団に出くわせば部隊が全滅する恐れもあるのだ。

ティルファで作られる弾丸を密偵達が持って来てくれるまでは、一緒に行動した方が良さそうだと考えたのだった。

速やかに野営の陣地を掃った混合部隊は、深夜のポルモーン渓谷に馬車を走らせる。移動中は朔耶が少し高い所から光の翼で周囲を照らし、常に明るい中をほぼ全速力で移動。

道中魔物や魔獣と出くわす事も無く、小休止を挟みながら走り続けること約三時間半、一行が特徴的な防壁に囲まれたポルモーンの街に到着したのは、朔耶の腕時計が午前二時を指す頃だった。

街の住人達は列強国の軍隊が進軍して来ている事を知っていた為、深夜の開門要求にも関わらず直ぐに応じて馬車隊の街入りを許可した。特に混乱も無く、寧ろ歓迎ムードで門番達に出迎えられた混合部隊の騎士達は、皆一様にホッとした様子を見せている。

「無事に着いたね～」

「ええ、貴女のお陰ですよ、サクヤ殿」

ポルモーンの街はササの街と良く似た雰囲気で、形の崩れた外観を持つ建物が無秩序に点々としている。魔物除けの防壁がやけにしっかりと造られている分、奇妙な違和感を感じさせる街だった。

混合部隊は拠点施設を街の何処に築くべきかと、場所や規模による支援効果を推量する傍ら、とりあえず空いている場所に野営陣地の設置を始める。朔耶は最初に建てられた大型テントで休むよう進められ、お言葉に甘える事にした。

『ふぅ～～、濃い一日だったわ……』

ヨイ　ハタラキヲ　シタナ

簡易ベッドに潜り込んだ朔耶は直ぐに眠気を感じ、そのまま睡魔に身を任せる。

『そうだ……ルティにも……つたえないと……』

ウム　アスハ　カクレサトニ　ユクカ　ユックリ　ヤスムトヨイ

フレグンス先発隊のポルモーン渓谷到着により、アーレクラワ方面とその先にあるスンカ山、魔族組織本拠地へ進撃する時も近い。アルサレナからも指示されているルティレイフィアの参戦。明日は混合部隊との合流を促しに隠れ里に行く。

翌朝――

朔耶が泊まった大型テントの周囲には防壁のように騎士達が休むテントがぐるりと建てられていた。フレグンスの紋章入りに帝国の紋章入り、傭兵団の紋章入り、幾分質素だがアーサリム部族の紋章が入った縦長テント。

其々がキッチリ分けられる事無く入り乱れに建っている様は、混合部隊らしさと、彼らの互いへの信頼感が現れている。

簡単な軍の携帯食（えさ）で朝食を済ませた朔耶は、ポルモーンの街に拠点建設の足場を組む作業が行われる中、ルティレイフィア達のいるメリルー導師の隠れ里へと飛んだ。

霧状の結界を難なく越えると、丘の上の小屋から少し離れた場所に下りてルティレイフィアに交感を試みる。レティレスティアに比べれば僅かな交感力しか持たないルティレイフィアだったが、それでも意思疎通を行えるだけの能力はあった。

『ルティ？』

――サクヤカ？　チカクニ　キテイルノカ？――

『うん、小屋が見える所。イメージ送ってるけど、分かる？』

――ウム　ナントカツカメタ　スグニユク――

丁度、朝食を終えたばかりだったルティレイフィアは、腹ごなしの訓練を装って小屋を出ると、朔耶の待つ丘の麓の外れへとやって来た。ヴィンス達は今日もこれからメリルー導師の指導の下、強化系の支援魔術を磨く修行に赴く。

「おはよ、ルティ」

「ああ、おはようサクヤ。今日はどうしたのだ？」

朔耶はフレグンス、帝国、アーサリムの混合部隊がポルモーンに拠点を敷き始めた事を伝えた。

「そうか、いよいよわたし達も動く時が来たようだな」

その後、近くの岩を素手で削って即席のベンチを作る朔耶を見たルティレイフィアが思わず頬を引き攣らせたり、大きな石から椅子を削り出すのは査問会で思いついたと聞いて、フレグンスに巣食う悪癖体質な重鎮に憤るルティレイフィアを朔耶が宥めたりしながら、互いの近況を報告し合うように雑談混じりの会話に興じた。しっかりお茶も持ち出してきている。

人狩りの傾向と魔物の集団についての話題で、相手も魔物の使い方を進化させて来たのだろうと推測するルティレイフィアは、ノンビリ構えていると魔物の軍団が揃えられて、ポルモーンとアーレクラワ間で大規模な戦闘が起きる事を懸念する。

魔族組織の本拠地攻撃に際しては、相手の準備が整う前に仕掛けた方が良さそうだとの判断を示した。

「援軍も、もう直ぐ来るみたいだよ？」

「ふむ、本隊が進軍する間に斥候で一当てしておくのも良いな」

戦術や戦略の話になると、朔耶には殆ど分からないので相槌を打つばかりになってしまう。ルティレイフィアもそれを感じ取って配慮したのか、少し趣旨を転換して『魔物はどうして生まれるのか』という問いで話題を振った。

スンカ山からは多くの魔物が次々と沸いて出るが、基本的に魔物

には生殖機能が備わっていない事が分かっているという。

「以前わたしも調べたのだが、モノが退化しているのだ」

「ぶっ」

一部の魔獣は普通の動物達と同じ様に特定の時期に繁殖するが、魔物は定期的に山から現れる。

では如何にして生まれているのか。朔耶はバイオ技術のような試験管が並ぶ実験室で作られている光景を思い浮かべた。そこでふと、エイディアス帝の事を思い出す。人間を辞めていた第十三代皇帝。

ルティレイフィアはその皇帝も魔族に類する者だとし、魔族という存在について話した。自らの身体を変異させて特別な力を得たり、異質な存在となった人々。体内呪文によって老化を防ぐ事で二百年も生きている魔族の存在。

キトの制圧で見つかった資料とササの部族の話から、それがヨールテスの事らしいという所までは分かっている。

ルティレイフィアはさらに、その存在は体内呪文を維持する為に定期的な魔力摂取を必要としているらしい事と、それを克服した完璧な不死の魔族を目指しているらしい事も情報として得ていた。

それを聞いて益々エイディアス帝が浮かぶ朔耶。彼も完璧な『重なる者』になろうとして、自らを装置に繋いでいた。

「実はな、魔物はその実験過程で生まれたという話がある」

朔耶の脳裏に『人体実験』の言葉が浮かんだ。魔術で身体を変質させる実験。体内呪文は一つの成功例。だが完璧ではない。

「まさか……、アーサリムを徘徊する魔物は人体実験で怪物にされ

た人とか？」
「まあ、ありえなくも無いという程度の話だ。人狩りの存在、人狩りに襲われた村から攫われた人々……」

ルティレイフィアはよく人狩りの馬車隊を追っては、攫われた人々を取り戻しに動いていた。しかし、実際に北部へ売りに運ばれた人と攫われた人との人数が合わない事が多かった。が、単に死んだものとも考えられる。

『もし、魔物が攫われた人の成れの果てだったら……？』
「もしもの話であって、確証も無ければ実証も出来無いのだからな。それに魔物討伐の事でサクヤが気に病む事はないぞ？」

考え込んでいる朔耶を心配したルティレイフィアがそう補足を付けて気にするなと促すが、朔耶はもしそうであった場合、精霊の癒しで何とか出来るだろうかと考えていた。

「何やら深刻な話をしておるようじゃなぁ」
「！っ　メリルー導師」
「あ、おはよーございます」

何時の間にかお昼になっていた。ヴィンス達は休憩と昼食作りに入っている。

メリルー導師も交えながら魔物の正体について話を続けた朔耶達は、導師から『変質した者』について掻い摘んで説明を受ける。故意に変質させられている存在だった場合、本来の在るべき姿に戻す事は不可能ではないという。

「始めからああいう姿に生まれてる場合はどうにもならんだろうが

の、外的な要因は身体に回った毒や呪いと同じなんじゃよ」

元来、人の歴史の中には毒や呪いで動物や異形に姿を変えた者の話が、御伽噺なども通じて数多く語り継がれている。それらの物語に登場する異形となった人物の中には、元の姿に戻る者もいる。朔耶はメリルー導師から呪いの祓い方をちょいと教わった。

「今度魔物に会ったら試してみよう」

「ふぇっふぇっふぇっ……ほんのお呪い（まじな）なんじゃが、役に立つとええのぉ」

近い内にルティレイフィア達もポルモーンの混合部隊と合流する趣をレティレスティアに伝えた朔耶は、夕方前に一度元の世界に還る事にした。まだ昨夜の強行軍を含む濃厚な一日の疲れが残っていて、日本食とシャワー付きお風呂が無性に恋しい。

「ただいま～」

自宅の庭に立つと、帰って来たという実感で全身から力が抜けるように安堵に包まれる。この世界には魔物も魔族もいないのだ。向こうに比べれば安全で快適な暮らしを満喫出来る。ソレゆえの圧倒的な安心感。

オルドリアでは実質、その身を害せるモノ無き存在にある朔耶だが、心や精神まではそうもいかない。やはり緊張に気を張るとそれだけ疲れも溜まっていく。心の疲労は身体の疲労よりも深くて重い。心身ともに癒すべく、朔耶は自宅のお風呂場へと向かった。

「うおっ！　マイシスタァ、帰ってたのか」
「……こんな時にお約束はいらない」
お風呂場では、夜勤前にシャワーを浴びていた兄が身体から湯気を放ちながら髭を剃っていた。
朔耶は３０の精神ダメージを受けた。

92話：歯車の狂う時

『あ、夢内異世界旅行だ……』

入浴を済ませて夕食を摂る時点で既に船を漕いで半分寝ていた朔耶は、部屋に戻るなり早々にベッドに転がった。そうしてどのくらい眠っていたのか、気が付くとオルドリアの空に精霊の視点で浮かびながら瞬く星々を見上げていた。

このまま再び意識が眠りに就くまでボンヤリ漂っているのも良かったが、折角の便利な精霊の視点による夢内異世界旅行である。勿体無い精神で彼方此方回ってみようと、朔耶は何処へ行こうか考える。

『そういえば……ヨールテスの所にはいけるのかな？』

物は試しとばかりにヨールテスをイメージすると視界が切り替わり、何処か薄暗い洞窟のような場所に出た。天井や壁はゴツゴツとした岩肌が目立つが、床はキッチリ平面に整えられていて、よく見ると幾つか調度品らしきモノが並んでいる。

ここは岩を刳り貫いて造られた居住空間。魔族組織の本拠地であり、精霊石鉱山に造られた研究施設の一室。

部屋の奥には大きなテーブルがあり、朔耶は其処に見覚えのある人物を見つけた。特徴的な髭を持つ、見た目は初老の熟年貴族男性。

その実、齢二百歳を超える魔族、ヨールテス・デリガン・ブローフリ伯爵である。

『うーわ……、ホントに来れちゃったよ』

何となく周囲を見渡した朔耶は、こそ～と近付いて書類を読んでいるヨールテスの背後に回ると、書類の内容を覗き見る。

『竜籠の運用について、一頭立て籠の固定ベルト改良に伴う許容積載量と輸送の効率化に基づいた諸費用算出において餌代を含めた場合に掛かる――』

あまり有用な内容では無さそうだったので、朔耶は読むのを止めた。まずは此処が何処なのかを探ろうと、一旦空に上がって現在地を確かめる。

『岩山の中腹辺りか……ここがスンカ山なのかな？』

魔族組織の本拠地である研究施設は、殆どが岩を刳り貫いた中に造られている為、外からでは分かり難い構造になっている。居住区施設が二棟、研究施設が三棟の、ちょっとした街並みの規模を持つ。

二棟ある居住区施設のうち、ヨールテスが居た方の施設は内装に使われている調度品も高級品を感じさせるモノが多く、壁や天井の岩肌も目立たない程しっかりと装飾で整えられていた。そして何処か表情の乏しい人形のような雰囲気の使用人が行き来している。

もう一方の居住区施設は装飾や調度品の類も無く質素で、大部屋に並んだ簡素なベッドに何人かが横になって鼾を掻いている光景は、何処と無く『兵舎』を感じさせた。

幾つか比較的まともな個室もあり、其処には大部屋の人達よりも

身分の高そうな格好をした人が寝ている。

一室だけ少し広めでやけに大きなベッドが真ん中にでんっと置いてある部屋があったが、朔耶はこの部屋の雰囲気に覚えがあった。キトの中枢に繋がる屋敷を調べた時に、護衛隊の部屋で感じたモノだ。あの時感じ見たモノを思い出して思わず赤面する。

そそくさとその部屋を後にした朔耶は、研究棟の方へと移動した。三棟の研究施設は一階、地下一階、地下二階の位置に其々独立した形で存在している。一本の縦穴から枝分かれして部屋を持つ蟻の巣のような構造。

一階の施設は模様替えでも行っていたのか生活臭を残すも人気（ひとけ）は無く、荷物が散乱している状態だった。次は地下一階の施設をと調べに降りた朔耶は、其処で『ソレ』を見つけてしまった。

台の上に磔にされた人の腕や脚に管が繋がれ、内側から呪文らしき文字が浮かび上がっているのが見える。別の台では腕や脚が王都で見た魔物のそれとソックリな形に肥大化し、身体も脈動するように不自然な程波打っている状態の人が呻き声を上げている。

そんな彼らを観察しながら淡々と管の交換や何かを埋め込む作業を続けている研究者らしきローブ姿の人々。動悸が激しくなるのを感じ、このままでは精霊の視点から目覚めてしまう事を悟った朔耶は直ぐにこの場から離れた。

『……人間の魔物化……ルティの言ってた事が証明されちゃった……』

王都の地下で『処理』された魔物や、ポルモーン渓谷の入り口で

魔導砲に吹き飛ばされた魔物の事を思い出す。

『そうだ……この事、他の人にも伝えなきゃ』

メリルー導師に教わった呪い祓いが何処まで通用するかは分からないが、もし、魔物を人の姿に戻す事が出来たならば、かなりの戦闘を回避する事が出来るだろう。上手くすれば、敵（まもの）にされた人にも味方にも犠牲を出さずに済むかもしれない。

先ずは誰に伝えるべきかと考え、アルサレナを思い浮かべた事で景色が切り替わった。石造りの建物の中、絨毯の敷かれた広い廊下と大きな窓際に掛かった見覚えのあるカーテンとで、ここがフレグンス城の中だと分かる。

夜のフレグンス城内の廊下でレイスと向かい合うアルサレナの姿を認めた朔耶は『二人とも起きているなら丁度良い』と、一旦目覚めて転移する事を考える。その時、アルサレナと話すレイスの声が聞えた。

「サクヤは良くやってくれていますね」

『ん？　あたしの話題？』

朔耶は盗み聞きするようで気が咎めたが、ポルモーン渓谷に到着した部隊と今後の動向についての話題らしい事を聞き取り、気になってしばし耳を傾ける。今日の朝までその部隊と一緒に行動していたのだ。

「ですが、そろそろアーサリムから遠ざけた方がいいでしょう」

「ふむ……例の事ですか」

レイスの言葉と、それに対する何やら含んだアルサレナの応答に、朔耶は首を傾げて訝しむ。

「クリューゲルのカースティア観光事業を進めて貰うのが良いと思いますよ」

ポルモーン方面への陸路に安全が確保され次第、竜四頭を一時的に朔耶のカースティア観光事業に回してティルファに置いてある空輸待ちの船を運ばせようと提案するレイス。アルサレナもそれが妥当かと頷く。

「ルティレイフィア様も先発隊と近く合流する予定だそうですし、あの方も色々と情報の早い方ですからね」

「あの子の耳に、レイフィア経由で例の事が入るかもしれない、という事ですか」

『例の事？　ってなに……？』

一体何を話しているのだろうと、朔耶は益々二人の会話から耳を離せなくなった。同時に、何かざわざわとした嫌な予感が胸元に這い上がってくる。聞かない方が良い様に感じながら、聞かない訳には行かない気分だ。

「しかし、魔族組織本拠地への攻撃には、あの子の力も是非当てにしたい所だったのですが……」

「それは仕方有りませんよ。それでサクヤが此方の世界に来なくなれば、元も子もありませんから」

『……？』

幸い、フレグンスの先発隊も帝国の遠征部隊も朔耶から強力な武器を与えられているので、魔族の本拠地制圧もそう難しくは無いでしょうと、レイスはアルサレナの杞憂を掃った。

「サクヤには全て事が済んでから、それと無く知らせる方向で行きましょう」

「そうですね……、あの子には今後もフレグンスに居て貰わなくてはなりませんから」

「まあ、出来れば知らないままにしておきたい所でもありますけどね」

王都の地下で魔物を処理した時でさえ、朔耶はその魔物に哀れみの念を懐いていた節があったと、レイスはその時の事を話しながら含みに伏せていた『例の事』に関する言葉を口にした。

「魔物が元は人間だったなどと知れば、どれだけ嘆き哀しむことか」

『っ！　……なにソレ、どういう事？　レイスはあの事、知ってたの？』

地下の小部屋で眠る魔物が『処理』される場面や、ポルモーン渓谷の入り口で肉塊と化す魔物の姿が再び朔耶の脳裏を過ぎる。どの時点から知っていたのだろうかと疑問が巡り、朔耶の心にレイスに対する猜疑心が湧き上がる。

『――それでサクヤが此方の世界に来なくなれば、元も子もありませんから――』

『……あたしが、来なくなるかもしれないから黙ってたって事？』

会話の中に聞いたレイスの言葉が浮かび上がる。

『――そろそろアーサリムから遠ざけた方がいいでしょう――』

『――クリューゲルのカースティア観光事業を進めて貰うのが良いと思いますよ――』

朔耶は自分の意志で此方の世界に深く関わって行く事を決め、自ら街の発展事業や未開地遠征への手助けになる行動を取って来た事に対する自信が、急に疑わしく思えてきた。『自分はいい様に操られていたのではないか？』そんな疑念に心が揺れる。

直接危害となるような悪意であったり、衝突を起こすような事柄でも無い限り、神社の精霊は此方から訊ねなければ周囲の人間がどのような思惑を持って接して来ているかを態々知らせるような事はしない。

相手に悪意が無く、朔耶の行動や考えを妨げて衝突を起こすような事態を予測できる内容でない限り、相手の思惑による誘導に乗せられて活動したとしても、朔耶本人がそれに気付かず気持ちを充実させていれば、精霊としては何も問題は無いのだ。

朔耶は精霊のそんな在り方を理解しているが故に、レイスが魔物の秘密を隠そうとしている事や、その為に観光事業の続きを餌にして自分をアーサリムから遠ざけようと画策している、という考えを、やけに生々しく感じた。悪意無き嘘による誘導であると。

そして、それらの目的が『サクヤが此方（オルドリア）に来なくなる事を避ける』という理由であった事に、無性に苛立つ。

『……いや、落ち着けあたし。レイスも言ってたじゃん、それを知

ったらどれだけ嘆き哀しむことかって……』

自分の事を想っての魔物の秘密に関する情報隠蔽を、他の事と繋げて見てしまった為に悪い意味に捉えてしまったのかもしれない。朔耶は自身に言い聞かせるように思い直すと、魔族組織の本拠地施設について概要を伝えに行く為、精霊の視点から目覚めた。

「……とりあえず向こうに行かなくちゃ」
ココカラ　ユクノカ？

朔耶は自分の部屋から王都へと転移した。

「お疲れ様でした、レイスさま」
「態々迎えに来てくれたのか、すまないな」

フレグンス城を出た所で、迎えに来たフレイと合流したレイスは、並んで馬車の所まで歩いていく。そこへ唐突に現れた朔耶が声を掛けて来た。庭園の方から走って来たらしく、少し息を切らせている。

「サクヤ……？」
「サクヤさま、その格好は」

パジャマに裸足という格好に驚いたフレイが、周囲の空気を温め始める。冬真っ盛りである今の季節に、薄着のパジャマ姿はとても寒そうだ。朔耶は報告する事があったのに寝坊したので急いで来たと言って取り繕った。

「そうでしたか、ポルモーンの街に部隊が到着した知らせなら今日届きましたよ、サクヤのお陰で順調に進んでますね」
「そ、そう？　えーと、ルティの事なんだけどさ……」
「ルティレイフィア様が合流する話も聞いてます。サクヤが連絡を付けてくれたそうですね」
「う、うん……まあ」

何処と無く、朔耶の雰囲気にぎこちなさを感じ取ったフレイだったが、寝坊した事に慌てながら急いで報告に来てみれば、既に連絡が届いていた事で気勢を削がれた、という状態なのかもと解釈した。しかし、朔耶が口にした次の言葉にピクリと肩を震わせる。

「それでね？　ルティに聞いたんだけど……魔物って、実は攫われた人間だったらしいって話、知ってる？」

朔耶は緊張しながらこの質問を投げ掛けていた。相手を試す意味以外何物でもない質問。それも、普段なら絶対にやらない親しい相手の表面意識を読みながらという行為に、クラクラとするような自己嫌悪を覚えながら。

この時レイスは、苦しそうに言葉を紡ぐ朔耶を見て、自身の危惧していた事が当たってしまったと判断した。即ち朔耶が、自らの働きによって討伐された魔物が元は人間であったという話を知り、心を迷わせているのだと。

そして朔耶の台詞から『ルティレイフィアから聞いた』や『人間だったらしい話』という不確定な部分を汲み取り、未だ確信に至っていないモノと見てフォローに動いた。

「ああ、それは以前からアーサリム方面にあった噂ですよ。真偽は

定かではありませんし、よくある流言の類でしょう」

レイスは軽く、しかしキッパリと否定して見せる事で、後々罪の意識に囚われないように気持ちの配分を逸らせる画策をした。

『彼がそう言った』という意識を持たせ、『自分は考慮した、しかし彼が否定した』という事実を作り上げる。そうする事で、人を殺したかもしれないという現実から軽く逃避させて不安を軽減し、罪悪感を和らげるのだ。

例え噂が本当であったとしても、魔物として襲い掛かって来る以上、敵として打ち倒さねばならない相手であり、それはもう仕方の無い事なのだという意識を持たせる。この件に関する責任や非難が自分に向けられる事は無いと思わせられれば――

「所で、ポルモーンまで部隊が進んだお陰で竜の使用許可が下りるかもしれませんよ？　これでカースティアに船を運べますね」

後は適当な話題を振り、其方に意識を向けさせる事で不安の種から開放され、互いの憂慮は解消される。

レイス達は朔耶の来訪が止まる事を、朔耶は己が忌避する多くの犠牲者（まもの）に対する罪悪感を。実際、レイスのフォローは不安を抱える相手に配慮した優しい対処方法だった。だがそれは、猜疑心を持った朔耶には完全な裏目と出てしまう。

「そう……そんな風に、思ってたんだ」

「え？」

俯き加減で前髪に隠れ、表情の見えない朔耶が低い声で言う。

「あたしは、事実から目を逸らそうなんて思わない」
「サクヤ様……？」
「コッチに関わろうって決めた日に、覚悟だってして来た」

只ならぬ空気を纏い始めた朔耶に、フレイが心配そうに声を掛けるも、朔耶は独り言のように呟く。そしてキッと鋭い瞳をレイスに向けると、静かに、しかし怒気を帯びた強い口調で言い放つ。

「そんなにあたしが信用出来ないか」

思わず息を呑むレイスとフレイ。朔耶から敵意のような怒りの感情を向けられたのは、考えてみればこれが初めての事だった。濃厚な底の知れない魔力の気配を纏った朔耶の放つ重圧（プレッシャー）は想像以上に重い。

「便利に使われる事くらいなら別に良いと思ってたよ……。でも、嘘ついて騙されてまで良いように使われるのは許せない」

朔耶は魔族組織の施設で人間が魔物にされている事実を掴んでいた事、ルティレイフィアの師匠である魔導師に教わった呪（まじな）いで何とか出来ないかと考えていた事を打ち明け、問題そのモノを自分に隠蔽しようとしたレイスを批難した。

「あたしが”罪悪感を持たないように”なんて、そんなのただの逃避じゃない。あたしってそんな風に思われてたってコト？」
「いえ、それは……」

思考を読まれていた事に気付いて動揺したレイスが思わず口篭る。レイス達にとって自分はその程度の人間だったのかと不満をぶちまける朔耶に、ようやく状況を理解したフレイが慌ててレイスの弁護

に割って入った。

「待って下さいっ　レイスさまはサクヤ様の事を想って……！」

「あたしの事を想って……？」

『――それでサクヤが此方の世界に来なくなれば、元も子もありませんから――』先程アルサレナとの会話でレイスが口にした言葉が朔耶の頭の中に響く。フレイの言葉は朔耶の逆鱗に触れてしまった。

「ふざけんなぁあああ！」

猛烈な魔力の奔流が怒りの波動に乗って放射状に広がり、王宮区画内に設置されているサクヤ式ランプの街灯が影響を受けて一斉に火を吹き上げる。朔耶を中心に半径二百メートル余り、その範囲内の街灯が全て吹き飛んだ。

周囲の明かりが失われて辺りが夜の暗闇に包まれる中、魔力の大量放射によって生じた仄かな光を身体から立ち昇らせながら、朔耶は二人に背を向ける。　そして――

「もう、来ない」

そう言い残して、オルドリア大陸から姿を消した。

「……」

暫らく呆然とその場に立ち尽くしていたフレイは、ふと我に返ってレイスの方を振り返る。レイスは俯き加減に何事か考えていたが、

やがて顔を上げると一言呟いて城の入り口へと歩き出した。

「……僕のミスだな」

「レイスさま……」

「すまない、フレイは先に帰っていてくれ。　僕はアルサレナ様に報告して、対策を考えねば……」

街灯の明かりを失った暗い王宮区画の一角で、フレイは黙ってレイスの背中を見送る事しか出来なかった。

部屋に戻った朔耶は適当に足の裏に付いた土をウェットティッシュで拭き取ると、そのままベッドに潜り込んで眼を閉じた。神社の精霊は何も言って来ないが、落ち着かないので自分から声を掛ける。

ワレハ　サクヤニシエキサレシ　セイレイ　サクヤノハンダンニシタガウマデ

『……前は色々言ってたのに』

ムロン　サクヤノモクテキニ　ソウ　ジョゲンハオコナウ

あくまでも朔耶の目的に対する行動への助言を行うダケだと、神社の精霊は自らの在り方を示す。

コレマデモ　ソシテコレカラモ　ワレハ　サクヤヲミチビク　ヒトツノドウヒョウデアリ　ヒトツノドウヒョウニシカ　スギヌ

相談されれば助言も行うが、基本的に朔耶の判断を軸とする。何時でも何時までも何処までも、我は朔耶の味方であると語る神社の

精霊に、朔耶は少しだけ気持ちを癒された。そうして苛立ちが緩和された隙に、朔耶は再び眠りに就くのだった。

翌日――

朝から苛々している朔耶に、父や母がどうしたのかと不機嫌な理由を訊ねるも、朔耶は何でもない無いからと誤魔化した。家に居れば両親を始め兄や弟、拓朗達にも心配を掛けるであろうし、相談すれば的確なアドバイスでこの怒りを鎮めてくれるだろう。

『きっと納得出来る正論で宥められそうだけど、今は怒っていたい気分なのよ』

そう思った朔耶は、実穂に連絡を取って暫らく泊めて貰えるよう取り付けると、荷物を纏めて早々に家を出た。家族には『友人宅に泊まり掛けで遊びに行く』とだけ伝えておく。

年末で賑わう街角。朔耶が実穂との待ち合わせ場所にやって来ると、何故か藍香が出迎えた。

「朔ちゃーーん」
「藍……？」
「えへへー藍香ちゃんも呼んじゃった、いいよね？」

急遽三人で遊ぶ事になり、正月仕様直前の年末大安売りをしている店を冷やかして回る朔耶達は、お昼過ぎまで遊んで過ごし、夕方頃には実穂の大きな家にお邪魔した。例のお泊り部屋で三人、暫らく寝食を共にする。

「ああ……朔ちゃんと憧れの同居生活」
「わたしも居るから共同生活でしょー」
「あはは……」

藍香は相変わらず飛ばしているが、朔耶に普段のキレが無い事は藍香も実穂も直ぐに気付いていた。共に気になる所ではあったが、こういう時こそ無闇に踏み込んでは行けない事を二人は長い付き合いで理解している。

なので、二人は朔耶の『気晴らし』に付き合いながら、朔耶自身の歩み寄りを待つ事にした。以前、『実穂と藍とは一般人の日常を壊したくない』と言った朔耶が自分達に日常(それ)を求めているのならば、何処までも付き合ってやろうじゃないの（藍香談）と。

実穂と藍香。親友二人の気遣(きずか)いが分かる故に、朔耶は迷っていた。二人に話してどうにかなる問題でもない。しかし、このまま黙って自分の『拘り』に付き合わせるばかりでは申し訳ない気持ちになる。

気持ちを打ち明け、相談出来る相手から態と遠ざかって親友の所へ逃げ込んだのに、その二人にも距離を置いた付き合いで気を遣わせる事への心苦しさ。朔耶は『自分は何故ここに来たのだろう？』と自問自答する。

「朔耶ちゃん」

「うん？」
「話すと楽になる事もあるよ？」
「ちょ、ちょっとみっちゃんっ！」

実穂はそれだけ言ってニコっと微笑んだ。藍香は『あたしが一番言いたいのを我慢してたのにー！』と実穂の肩に齧り付いた。悲鳴を上げる実穂。二人のじゃれ合いを見て朔耶は思う。別に相談して何かをどうこうする必要はなかったのだと。

『そっか、ただ話すだけでも良かったんだ……』

誰かに話を聞いて欲しかったのだと気付く。兄や弟、拓朗達から遠ざかったのも、彼らに話せば『相談』に乗ってくれるから。何らかの答えを出そうとしてくれるから遠ざけた。何れは答えを求める事柄であったとしても、今はただ話をして吐き出したい。

この胸の内を聞いて貰いたかったのだと理解する。

「二人とも、今からあたしが話す事は絶対秘密ね？」
「え？」
「うん、いいよ」

朔耶は実穂と藍香に異世界の話、オルドリア大陸の事を打ち明けた。

「紅茶でいい？」
「うん、ありがと」
「お菓子お菓子～」

夜も更けようかという頃、長い長い異世界の話を終えた三人は四床のダブルベッドの上で紅茶を啜り、お菓子を頬張りながら朔耶の体験談の余韻に浸る。話の途中で精霊の力も使って見せた事が、二人の理解をよりスムーズにした。

「はぁ～～……朔ちゃんの秘密、いっぱい知っちゃった」

「だから、一々エロエロしく言うんじゃないっ」

「あはは～、そっかぁ……あの時の大遠投も実は精霊の力だったんだねー」

「まあ、アレは偶々というか油断してたというか」

二人に話した事で気持ちが楽になった朔耶は、普段の調子を取り戻していた。他愛無い話をして互いに軽く愚痴り合ったりする事の安心感、話を聞き合う事の大切さと温かさを実感する。

しかし、朔耶のレイス達に対する怒りの気持ちは晴れた訳ではなく、まだ心の奥で猜疑心と共に燻っている。その時の話を聞いた藍香は朔耶の気持ちに共感し、実穂は朔耶の心の状態について言及した。

兄や弟達のような理性的な分析ではなく、感覚的で直感的なモノ。魔族組織の施設でおぞましい光景を見た直後だった為、冷静でなかったのでは？　という素朴な疑問。

「うーん……そう、なのかなぁ」

「だってソレまでの朔耶ちゃんの話を聞いた限りじゃあ、普段の朔耶ちゃんはそれくらいでソコまで怒らないと思うなぁ」

「えーっ　だって朔ちゃん、騙されてトウバツとかさせられたようなもんなんでしょー？　そりゃ怒るっしょ」

朔耶はあの時の自分の状態と気持ちを考えてみる。魔物の正体を知り、ショックを受けつつもメリルー導師に教わった呪い祓いでどうにか出来るかもしれないという前向きでポジティブな気持ちを持ってアルサレナ達に知らせようとしたつもりだった。

上手くすれば、双方の犠牲を最小限に抑えた理想的な形で戦いを終わらせられるという期待感、半ば自分にしか出来ない事に対する義務感のような気持ちも懐いていた。それなりに自負もあったと思われる。

所が、城でアルサレナとレイスの会話を耳にし、自分に対する隠し事と画策を持ちかけているレイスに猜疑心を持ち、レイス自身の表面意識を読みながら隠し事に触れる質問をした結果、此方の気持ちを操ろうとするようなやり方で誤魔化された。

「……？」

そこまで考えて何故あれ程の怒りが湧いたのか、おぼろげながら理由が見えて来る。レイスは端から朔耶に対して『魔物の正体を知れば』戦いに尻込みすると決め付けていた。

『いや……違う。あたしの事を分析して、そういう人物像に思い描いていたダケ』

主観によるモノだが、相手にそう思わせる、感じさせる行動を自身が取っていなかったとは言い切れない。レイスの考察力には朔耶も一定の信頼を置いている。レイスは朔耶が『魔物の正体を知れば、魔物との戦いを忌避する』と思っていた。

なればこそ、説得して無理に戦わせるでも無く、戦わない事を気に病まないよう、予め戦いの場から遠ざけようとした。あの時のレイスの思考や行動は、そんな風にも解釈出来る。

「うーん……」

アーサリムでの朔耶の行動には期待してないような言動と画策。そこに国家として益の話が絡んで来たので、利益優先で考えてた癖に『貴女の為に』等と言われて『騙そうとしている』と思い、怒りが爆発した。『ふざけんな』と。

『何処かで、考えに掛け違いがあった……？』

アルジドノハ　イキオイデ　タタミカケラレルト　ナガサレヤスイトコロガ　ミウケラレル

神社の精霊に突っ込まれて『確かに』と、自分でも自覚している事を思う朔耶。帝国ではアネットが其処を見抜いて、バルティアに勢いで押し倒せとアドバイスしていた事もあった。

「朔ちゃん、また難しい顔してる」

「その人達のこと、やっぱり赦せない？」

「ん～、どうなんだろう……？　何か誤解してるような気もしてきた」

朔耶は自分が勢いに流される所がある事と、ショッキングな事実を見た直後にタイミング悪く隠し事の現場に遭遇するなど、立て続けに心を揺さぶるような事が起きたので、感情的になって疑心と怒りに流されたのかもしれないと自己分析をする。

「でもなぁ……」

何処か気持ちの燻る想いのまま、朔耶は実穂&藍香と共にお泊り部屋で夜を明かすのだった。

93話：歯車の返る時

魔族組織の本拠地施設――

ポルモーンを押さえられて後が無くなったヨールテスは起死回生の策を練っていた。

「魔物の実験部隊は壊滅か」

「はい、帝国の遠征部隊にサクヤ式の新兵器が確認されています」

実験部隊の襲撃は混合部隊に対して一定の効果は見られたものの、戦女神（サクヤ）の介入と新たなサクヤ式の武器によってあっさり壊滅させられたという報告内容から、魔物部隊の運用には戦術面に大きな課題が残ると分析した。

とにかく数を揃えなくてはならない所だが、アーレクラワまで侵攻されては素材の確保すら危うくなる。

「時間を稼がねばならん、なんとか列強国にいる間諜を使って攪乱できんものか……」

何か仕掛けようにも、帝国は密偵が優秀な為、あまり効果は期待出来ず、フレグンスに至っては戦女神（サクヤ）や精霊神官に『精霊の知らせ』で察知されてしまうので如何ともしがたい。先の魔物による王都襲撃作戦の失敗から、攪乱の類は無理かと思われた。

「その事ですが、昨夜フレグンスの間諜からこのような情報が届い

ています」

キルトから報告書を受け取り目を通す。そこには、フレグンスの宮廷魔術士長が何らかの粗相をして戦女神の怒りを買い、戦女神は王宮区画の一部を破壊したうえ、フレグンスに決別を告げたらしいという内容が書かれてあった。

「ふむ……この情報が此方側の間諜を燻り出す罠という事は？」

「時期的に見て可能性は低いかと。昨夜から今朝にかけて王宮上層ではかなり慌しい動きがあったとも追加情報にあります」

今はとにかく時間を稼ぎたいとするヨールテスは、この際使えそうなネタがあるなら積極的に利用しようと、この件に関する詳しい情報を集めるよう指示を出す。相手に問題が起きたならば、其処を突かない手は無い。

そうして夕刻までに集まった情報を総括すると、フレグンス側が魔物の正体について隠蔽した事が戦女神の怒りに触れ、戦女神はもう此方に来ないと告げて還ってしまった、という事らしい。ヨールテスは早速これらの情報を使った攪乱工作の計画を立て始めた。

戦女神の来訪と帰還の周期に変化があった事を掴みきれていなかった事が、王都襲撃計画の失敗に繋がったとも言える。その失敗を踏まえて、今回は情報の鮮度が高い内から計画を立て、実行に移す事にした。

本格的な攪乱効果が得られなくとも、少しでも時間稼ぎになれば良いと速攻で放った策は、意外にも大きな効果を齎（もたら）せた。ポルモーンに駐留する混合部隊を約三日間、足止めする程の混乱を引き起こ

したのだ。

僅か三日、されど三日である。ヨールテスはこの間に調整中だった魔物を仕上げ、新たに編成した魔物部隊をアーレクラワに展開し、戦術を教育する時間を得た。

「よし、流れは我々が掴んだぞ。この戦、勝機は此方にある」
「それでは、あの計画は中止なさいますか？」
「いや……戦女神が現れないとも限らん。念の為だ、進めておこう」
「……分かりました、準備しておきます」

スンカ山の本拠地施設に集結する魔物の軍団を眺めながら、ヨールテスは戦女神（サクヤ）対策の準備を指示するのだった。

大晦日――

昨日まで実穂の家に泊まっていた朔耶は、大晦日と正月くらいは家族と過ごすべきだろうと一旦帰宅していた。自分の我侭に付き合わせて実穂と藍香から年末に家族と過ごす時間を奪う訳にも行かないと今朝方帰宅したのだが、帰って来るなり母に呼び出された。

「これって、みよさんの振袖？」
「そーよー？　朔耶ちゃんならぁ～着られると思うのよ～～」
「明日はそれ着て初詣に行きなさいな」

拓朗の母、みよさんが若い頃に着ていたという振袖を持参して朔

耶に着付けを行う。簪まで用意してあった。

「あらっ！　あらあらまぁまぁ～～朔耶ちゃんたら、すっかり成長しちゃってまあ～、立派だわ～」

「え～、そんな事ないですよー」

上着を脱いでシャツ姿になった朔耶を見て、みよさんはその成長振りに感嘆する。朔耶の母共々感慨深げに娘の成長を喜び合っている所に、乱入してくる勇者がいた。

「話は聴かせて貰った、振袖を堪能する！」

「後でね～～」

スラッと襖を開けて入って来たカメラを掲げる重雄を天地投げで退室させる合気道有段者な　みよさん。都築家の長男は仄かに人妻の香りを感じながら畳の上を転がっていった。（ノリで）

「ほんっとに、変態な兄でゴメンナサイ」

「ううん～、重雄ちゃんも昔はバリバリの格闘硬派少年だったのに～、最近は面白い子になっちゃったわねぇ～」

この日の朔耶はそんな調子で家族との時間を過ごした。

元旦――

「明けまして、おめでとう御座いまーす」

「おめでとー」

「おめっとさーん」

午前零時、鳴り響く除夜の鐘を聞きながら新年を迎えた都築家は、早速初詣に出かけようと烏越家の家族と共に近所の神社へと向かう。朔耶は振袖姿、兄弟と拓朗は普段着にコートやジャケットを着込み、両親達も余所行きの格好だ。

通りには同じく深夜早朝から初詣に向かう近所の人々の姿があり、街灯の明かりの下をゾロゾロと移動する各家族の集団。毎年この界隈で繰り返される正月独特の光景が見られた。

多くの人で賑わう神社の境内を家族で固まって歩く中、朔耶は自身の気持ちの問題について神社の精霊と話し合っていた。心に燻る納得出来ないような不満の想い。その正体が分からなくては、レイス達と和解する事は難しいと感じていた。

カレラハ　サクヤノコトヲ　シンヨウシテイナイ　ワケデハナイ

和解したいという朔耶の気持ちを汲んだ神社の精霊の助言。レイス達が朔耶の力を利用したい事は事実でも、朔耶にいて欲しいという気持ちは『ただ利用したいから』というダケではない事は分かるだろう？　と問われて、朔耶は頷く。

『うん、それは分かる』

カレラハ　セイムニ　タズサワルモノデアリ　クニトコクミンヲセオウモノデアル

精霊の言わんとすることを理解した朔耶は、自分のした事が子供っぽく感じられて恥ずかしくなった。隠し事をされたことに腹を立て、自分のやるべき事を放り出して還って来てしまった。深く関わ

る覚悟をしていた割りには、余りに無責任な行動だ。

今の様な『精霊と重なる者』の力が無くとも、彼らは良くしてくれたであろうし、実際アマガ村から王都フレグンスまでの道中や、それ以降も親しく接してくれていた。王女の客人という立場にあったとはいえ、それならば他の貴族達にも言える事。

レイス達は重鎮四家のように身分や立場だけで見るような事は無く、常に『サクヤ自身』を見て向き合ってくれている。しかしながら、だからこそ納得出来ない部分。ソレならば何故、魔物の問題について一緒に考えようとしてくれなかったのか。

朔耶は自分が何に苛立ちを覚えていたのか、おぼろげながら見えているのに浮かんでは消える、掴みきれない答えと燻る想いに溜め息を吐く。初詣客の人込みの流れに押されながら、気が付くと御賽銭箱の近くまで来ていた。

「ほら、朔耶の分だ」
「あ、うん。ありがと」

父が差し出した五百円玉を受け取り、鈴を鳴らして投じる。何を願おうかと考えてふと、オルドリア大陸に早く平穏が訪れる事を思い浮かべ、やはり向こうの事も気になっているのだなぁと自覚する朔耶。

『あたし、どうしたいんだろう……？』

ジックリナヤミ　ユックリカンガエ　シンチョウニ　コタエヲ　ダストヨイ

「朔ちゃーん」
「あれ、藍と実穂も来てたんだ？」
「わぁー、朔耶ちゃんも振袖だぁ」

境内の入り口付近で写真を撮ったりしている人達を避け、脇の小道に入った所で実穂と藍香に遭遇した。藍香はほぼ普段どおりの格好だったが、実穂は振袖を着ていた。

「あ～～ん、朔ちゃんも振袖着てくるとはっ　なんであたしだけワンピースなのー？　あたしも着て来れば良かったーっ」
「はいはい、騒がない騒がない」
「藍香ちゃん、後で貸したげようか？」

新年の挨拶を交わして甘酒などを啜りつつ、姦(かしま)しく雑談に興じる朔耶達。孝文(おとうと)や拓朗達が輪に入りたそうにしているが、女の子が固まってお喋りしている空間には不思議な結界が張られているが如く、男共には近寄り難いものがある。

二人の視線に気付いた藍香が甘酒を持って『あんた等も飲め～』とか絡み始めた。ちょっと酔っ払っているのかもしれない。

「朔耶ちゃん、まだ悩んでる？」
「ん……悩ん、でる、かも」

藍香が暴走しないように見張りながら朔耶の隣に並んだ実穂が小さく訊ね、朔耶はそれに肯定を返した。『怒っている』ではなく『悩んでいる』。胸に燻るモヤモヤの正体がイマイチ分からず、気持ちが晴れないのだとこぼす。

「その人達のこと、好きなんでしょ？」
「……うん」

改めて意識すれば、確かにそうだなぁと朔耶はオルドリアにいる皆の事を思い浮かべた。レイスに対して不満の気持ちはあれど、決して嫌った訳ではない。初めて会った時からずっと気を許せない相手だったが、苦手な訳でも嫌いな訳でもない。

「ナニーー！　好きだとぉ！　誰っ　一体誰の事なのよ、朔ちゃんっ！　このあたしというモノがむぐぐぐぐ……」

中途半端に耳聡い藍香が騒ぎ始めたので取り合えずチョークスリーパーで黙らせる。そんな暴走藍香から、朔耶は一つ感じた事があった。会話の一部分だけを抽出して前後の意図を無視すれば、大抵の言葉は良い意味にも悪い意味にも曲げて解釈できる。

『そういう事、なのかな……』

その後、皆で近くのビルの屋上から初日の出を拝み、実穂、藍香たちと別れて帰宅した朔耶は、みよさんにお礼を言って振袖を返すと、徹夜の疲れを癒すべくベッドに潜り込んだ。

明けて翌日――

昨日一日ゆっくり休んだ朔耶は、兄を誘って海岸までドライブに来ていた。以前、家族では始めて兄に異世界での詳しい話を打ち明けた場所である。怒りの感情も落ち着き、家族の誰かに相談しよう

と思った朔耶が最初に思い浮かんだ相手はやはり兄だった。

「ふむ……この前から様子がおかしいと思ったら、そんな事になってたのか」

「お兄ちゃんは、どう思う？」

やっぱり言葉の意味や意図を取り違えた誤解なのかな？　と問う朔耶に、兄は腕を組んで真面目な顔になると静かに質問を返す。

「前に俺が言った事、覚えてるか？」

『自分が良いと思った事を選んで、その結果の責任を背負う覚悟を持てるかどうかだ』『その選択をした結果を背負わなくちゃならない』どんなに理不尽に思う事があっても、それが自分の選択によって齎された結果なら背負う覚悟を持たなければならない。

兄は改めてそう諭す。

「嘘つかれた事が、あたしの選択の結果だって言うの？」

「少なくとも、そのレイスって奴はお前に対して”そうした方が良い”と判断したんだ」

神にも悪魔にもなれる朔耶に対して、自分達の世界に来訪し続けて貰う為には、嘘をついてでも配慮しなくてはと判断した。そこが納得いかないと憤る朔耶に、兄はズバリと指摘する。

「要するに、お前のその怒りは”もっと自分を高く評価して欲しかった”って事だぞ？」

「んなっ！」

そんなつもりは無いと噛み付き掛けた朔耶は、兄の指摘と自分の

行動に符合を感じて動きを止める。同時にレイスの行動にも思い当たる節があった。何気無い言葉の一つ一つが積み重なり、それらが相手を判断する材料となる。

侮られたと思った事での反撥。『オルドリアを放り出して逃げ帰るように思われた』と思った事による反撥。それは『自分はそんなに弱くない！』という一つのプライドが生み出した反撥心だ。

しかし以前、査問会があった日にレイスから『今後は王都でも味方を増やす努力を怠らない方が良い』と言われた時に、『こっちになるべく来ないようにするって手もある』等と発言していた事を思い出す。

「あたし……」

「向こうの世界の人間も、朔耶の心はこっちの世界にあると感じてるだろうからな」

朔耶の事を『信用していない』なんて事は無くとも、『何時でも自分達を見限る事が出来る』と思われている部分があるのではないかと、兄は指摘する。オルドリアのモノに殆ど執着を見せない朔耶に、向こうの人間も不安なのだろうと。

「向こうで恋人でも出来りゃあ、また回りの見方も違って来るんだろうケドな」

「うーん……」

これからもずっとオルドリアに来訪し続けると明言している訳でもない為、いつ飽きられて来なくなるとも限らない。来なくなる理由を作らないように、来訪し続ける理由を維持する為に、戦いから遠ざけ、本人が楽しみにしている事を前面に押し出す。

そんな不安と思惑がレイス達の根底にあったのかもしれない。朔耶の来訪によって齎される利益については既に語るまでも無く、それらを期待され、求められている事は朔耶も理解している。勿論、それだけの付き合いではない気持ちも、しっかり感じていた。

朔耶は考え込んで想像する。もしもあの時、普段の自分らしい行動を取っていたならば――

『聞いてたわよー？　さっきのアルサレナさんとの話』
『おや……立ち聞きとは、余り感心しませんね』
『偶々よ、それよかヨールテスの本拠地見つけたの。人間が魔物にされてる所もバッチリ見ちゃった』

『それは……』
『言っとくけど、あたし途中で降りないからね？』
『しかし、良いのですか？』

『実は魔物にされた人を元に戻せるかもしれない方法を教わったのよ』
『ほう……？』

『確実って訳じゃないけど、やってみる価値はあると思うのよね』
『ですが、もし上手く行かなかったら？』
『そん時ゃそん時よ、心配しなくてもちゃんと土に還してあげるわ。そのぐらいの覚悟はしてるつもりよ』
『サクヤ様……』

一つ選択が違ったダケで、こんなにも容易にスムーズな展開が想像できる。

「あたし、間違えちゃったのかなぁ」
「一概にそうとも言えないぞ？」

衝突する事が『間違い』だと思うのは、それを『間違いだ』と思っている人間にとっての答えでしかないと兄は言う。

「何よそれ……、普通は衝突なんてしない方がいいじゃない」
「場合によっちゃ、衝突する事が相互理解の近道になる事もあるのさ」

そう言って拳を握って見せる兄に、朔耶は『ああ、成る程ね』と納得した。女の子から見て、男の子達の理解し難い感覚でもあり、ちょっと憧れたりする事でもある『拳で語り合う』というコミュニケーション法。

レイスと殴り合う訳にもいかないしなぁと、ちょっと想像して吹き出す朔耶。

「そうやって笑えるようになったんなら、まあ大丈夫だろ」
「あ……うん」

今日相談した事は弟や拓朗達にはまだ内緒にしておいて欲しいと頼み、兄も承諾した。一応、両親には話をしておく。

「タカ君に話したら絶対色々突っ込まれそうだし」
「理屈屋担当だからなぁ」

笑いながらハンドルを切る兄。この日は朔耶の気晴らしにと、車で彼方此方連れて行ってくれたのだった。

翌日――

「お兄ちゃんは？」
「朝から車で何処かに出掛けたみたいだぞ？」
「それより朔耶、魔導砲の弾、持って行かなくていいのか？」

居間で正月番組を観ている弟と、何故か上がり込んでいる拓朗が部屋の隅に放置されている箱を指す。正月前に作っておいた分の弾丸が詰め込まれた箱。朔耶は一瞬答えに窮したが、今は正月休みなのでそのうち持って行くと言って誤魔化した。

拓朗達も数日前から朔耶の様子がおかしい事は分かっていたので特に追求する事はしなかったが、互いに誤魔化したり気を使ったりしている事が分かるだけに、会話が途切れて沈黙が下りる。

何処と無く気まずい雰囲気の中、テレビから流れる観客の笑い声効果音が空々しく昼下がりの居間に響く。そんな重くなり掛けた空気を読む事無く、読むつもりも無く吹き飛ばす兄が、帰宅するなり居間に突入して来ると、戦利品を掲げながら吠えた。

「ミコミコーーーー！」

「……えーと？」
「遂に壊れたか……」
「つか、高々と掲げてるアレって」

昨日、シリアスの時間が長かったので反動が出ているのかもしれ

ない等と、心の中で呟く朔耶が見たモノは、兄が友人からせしめて来たという白衣（はくい）に緋袴（ひばかま）、コスプレ用の巫女装束だった。

「コレで勝つるっ　巫女萌え！　撮影で！　バッチリ！」
「落ち着け落ち着け」
「ミコォクゥール！」
「分かった分かった、着たげるからちょっと落ち着きなさいって」

衣装を受け取って部屋に上がる朔耶。昨日の相談では色んな事を気付かせて貰い、自分の気持ちの在り処について等、ゆっくり考える機会もくれた。なので偶にはサービスしてあげようとコスプレ巫女衣装に袖を通す。

「うおおおっ激写！　激写！　ＧＥ・ＫＩ・ＳＹＡＡＡＡ！」
「だから、ちょっと落ち着きなさいよ」

興奮している兄を宥めつつも、しっかりポーズをとったりしている朔耶に、弟は呆れながら反射板を翳し、拓朗は笑いながらライトを当てていた。こういう所で変に息が合う辺り、四人が仲の良い幼馴染であった事を感じさせる。

結局この日は夕方まで撮影会が行われた後、拓朗は夕飯の時間なので自宅に戻り、兄は父を迎えに車で工場へ。弟は兄の代わりに写真をＰＣに取り込んで編集する作業を仰せ付かったのだった。

そして朔耶は、明かりの点いてない薄暗い居間で一人、見る者の居ないテレビの明滅と音声を子守唄代わりに、ウトウトと居眠りをし始める。暖房の効いた暖かい空気に包まれるような感覚の中、朔耶の視界に夕闇の迫る草原が映し出された。

『あ……また夢内異世界旅行だ』

ずっとオルドリアの事を気に掛けていたせいだろうかと考えつつ、朔耶は辺りを見渡した。何処までも広がる草原が、遠く地平線まで続いている。朔耶の記憶では、クリューゲルのバーリッカムからカースティアまでの道中にこんな風景があった。

『永遠の草原』を歌って『退屈音頭』を踊った場所である。

『……』

北の空、王都フレグンスのある方角を眺めながら暫しの逡巡の後、朔耶は迷いつつも此方（オルドリア）の様子を見て回る事にした。一番気になっている王都は後回しに、何となく浮かんだアンバッスの所へと飛ぼうとイメージを深める。

景色が切り替わり、エバンスの街上空に移動した朔耶は眼下の光景に唖然となった。手に農具や武器等を持ち、何かが書かれた看板の様な板や布を掲げたエバンスの民衆が、徒党を組んで騎士団本部を取り囲んでいるのだ。

『なに、これ……？』

掲げられた看板や布に書かれた内容は『サクヤ様万歳、フレグンス討つべし』等の内容。民衆に混じって精霊神殿の神官達の姿が見受けられ、彼らが民衆を扇動しているようにも見える。一体何が起きているのかと、朔耶は状況の把握に街中を移動して回った。

騎士団本部の正面には盾を構えた騎士が民衆の侵入を阻止する為に隊列を組んで壁を作っており、指揮しているアンバッスは決して

攻撃をするなと指示を出している。

民衆側もサムズ最大の無法地帯であったエバンスのスラムを叩き潰した辺境騎士団の脅威は分かっているのか、無謀な行動に出て場を刺激する者が居なかったので、両者は睨み合いのまま膠着状態を続けていた。

精霊神殿では神官戦士達が戦いの準備を始めており、神殿内の壁にも民衆が掲げていた内容の張り紙が貼られている。どうやら精霊神殿のサクヤ派勢力が騒ぎの中心となって、人々を扇動している様子だった。

三人一組で行動している神官戦士部隊の一組が神殿内に入って来て、集まっている仲間の戦士や神官達に何事か話している。朔耶は彼らの話に耳を傾けて内容を拾ってみた。

「駄目だ、門前払いされたよ」
「院長はチューリー嬢を渡す気は無いと言っている」
「例の画家が居ただろう？　どうもアイツが色々吹き込んでいるらしい」
「かといって、サクヤ様の描かれた門に傷を付ける訳にはいかないからなぁ」

彼らは”サクヤ様”を称える勢力の象徴として、朔耶が救った交感能力を持つ孤児のチューリーを『”サクヤ様”を喚ぶ救世の童巫女(わらわみこ)』に添えようと考えていた。だが孤児院側は、今回の騒動は”サクヤ様”の真意に反するモノであるとしてチューリーの引渡しを拒否。

孤児院の門を硬く閉ざし、チューリーを匿っている。ジャック達も孤児院に籠もって成り行きを見守っていた。

様子を見に孤児院へと移動して来た朔耶は、門の内側にジャックの姿を見つけた。塀を越えてくる侵入者が居ないか、敷地内を仲間の子供達と共に巡回しているのだ。そのジャックの傍に、パンの入った籠を持って駆け寄る小さな人影。

「じゃっくー、パンだよー」

「チュリ、……お前は中に居ろって言っただろ」

「ちゅりじゃなくて、チューリー！」

そんなやり取りをしながら夕食の差し入れに齧りつくジャックとチューリー。

「って、お前も食うのかよっ！」

「いいじゃない、いっぱいあるんだから」

二人のやり取りに思わず笑みを零し、ここは大丈夫そうだと視点を空に上げた朔耶は、他の場所も気になって彼方此方飛び回る。そうして大凡（おおよそ）の騒ぎの原因を特定、把握する事が出来た。

先日の朔耶とレイスの衝突による顛末を利用して、何者かが騒ぎを仕組んだのである。『何者か』は言わずもがな、朔耶が怒って還った事を虚実を交えて流言し、サクヤ派勢力と民衆を扇動してフレグンス国内で反乱を起こさせたのだ。

朔耶の行った発展事業と神殿の影響力が強い場所で、特にその効果が高かった。

クリューゲルのカースティアではガリウス達が上手く立ち回って民衆が集団化しないように監視を強め、孤児院を預かるアマレストも”サクヤ”の名を笠に安易な暴力手段に出る事の無い様、神殿を

通じて民衆に訴えかけていた。
”サクヤ”の加護を深く受けている孤児院の娘の言葉は、魔族組織の間諜がばら撒いた流言よりも強く民衆の心を掴んでいた。

帝国は比較的落ち着いているものの、一部厳戒態勢が精霊神殿の周りに敷かれている。帝国はこういった策に対抗する密偵部隊が優秀なのだが、アーサリム遠征での人手不足が響き、察知が遅れて後手に回った。

しかし、この手の策略に精通して対処できる人材であるフエルト卿が積極的に動いて陰謀阻止に協力した結果、魔族組織の間諜による流言は直ちに封じ込められ、混乱が起きる前に首謀者を探し出して処断するに至った。
今は精霊神殿に詰める一部のサクヤ派信望者の中に、過激な行動を取る者が出ないかを監視するに止まっている。

一通りの場所を見て回り、ティルファやキトでは流言が行われていない事も確認した朔耶は、意を決して王都に飛んだ。
最初に見えたのは、その一角だけ切り取られたように暗い、街灯の明かりが欠けた王宮区画の夜景。次いで、貴族街に繋がる門前に詰め掛けて集まった民衆と、それに対処する衛兵や王国騎士団達。彼らからは困惑と迷いの表情が見て取れた。
精霊神殿はフューリ達聖騎士団が神官を始め神殿を護る兵達の暴走を抑えている為、王宮神殿の混乱は防げている。

朔耶が怒りをぶちまけて王都から姿を消した翌日、情報を得たヨールテスはその状況を利用すべく各国に潜ませてある間諜を使って風説の流布を行い、裏から朔耶の信望者達を煽った。

『フレグンスと帝国は精霊の使いであるサクヤを自分達の私欲に利用した為に精霊の怒りを買った』
『サクヤは今後光臨しない事を告げて精霊の世界に還った』
『オルドリア繁栄の約束は失われた』

等々、民衆や信望者が喜びそうな役所にサクヤを位置付け、『王帝権力と対峙して人々の暮らしを助ける庶民の味方』を演出する事で、恰も自分達の救世主たる象徴的存在が酷い扱いを受けたかのように錯覚させて反権力思想を煽る。

少しでも時間が稼げれば良いくらいの即興策だったのだが、国のTOPを含めて朔耶に対する所見がほぼ統一されている帝国と違い、フレグンスでは朔耶に罪悪感を持つ者と信望する者、そして疎ましく思っていた者達の思惑が入り乱れて混乱が起きたのだ。

フレグンスの惨状に自分の名の影響力を目の当たりした朔耶は、以前、神社の精霊に言われた事を思い出す。『自分の立場を自覚せよ』という精霊の言葉の意味を理解し、『覚悟は出来ていたつもりだったが自覚が足りなかった』と自身の認識の甘さを悟った。

『鎮めなきゃ……！』

強い意志を持って精霊の視点から離れ、夢から覚める。少し暖房が効き過ぎ始めた居間で目を覚ました朔耶は、直ぐに立ち上がって神社の精霊に呼びかけた。

『急いで向こうに行かなくちゃ！』
セグデナイ　オチツイテ　ジョウキョウヲ　ミサダメヨ

バタバタと居間を出て縁側を飛び越え、庭の円に入った朔耶は先ず何処から回ろうかと、少しだけ落ち着いた心で考える。一番混乱していたのはエバンスと王都だが、王都は精霊神官による扇動が抑えられていたので、まだ危険な雰囲気ではなかった。

『エバンスからに決定』

ウム　トコロデ　ソノカッコウノママ　ユクノカ？

朔耶の格好は白衣（はくい）に緋袴（ひばかま）、千早（ちはや）を羽織った巫女装束のままだ。だが格好など気にしていられないと、朔耶は転移を求める。

『そんなに身体動かす訳でもないし、大丈夫よ』

ワカッタ　ユクゾ

神社の精霊の何処か感慨深げな気配を感じながら、朔耶はエバンスの街へと転移した。

94話：インスタント神秘

「隊長、神殿の連中が動き出しました」
「神官戦士隊か……」

神官戦士隊は準騎士以下の位(くらい)を持つ信者で編成された精霊神殿が保有する戦闘部隊である。それなりに戦闘訓練も受けているので、並の傭兵程度の腕は持っていると見て良い。少なくとも、戦えば此処に集まっている民衆達よりは手強い相手だ。

「王都からは何と言ってきてる？」
「とにかく混乱を治めよと……、出来る限り手段は穏便にとも」
「ふん……出来りゃあそうするさ」

少しは落ち着いたかと思えばまたこの様かと、アンバッスは故郷の騒乱体質に鼻を鳴らした。騎士団本部前を埋め尽くす横断幕や看板を掲げた群集を見渡し、遠くの方で人垣が割れていくのを確認すると、隊列を組んで壁を作っている部隊に警戒の強化を促す。

群集の中を行進して来る神官戦士隊の列が騎士団本部前に近付くに連れて、静かに熱を帯び始める人々のざわめき。辺りには張り詰めたような緊張感が漂い始めた。

神官戦士達が掲げている旗にはフレグンスの紋章を裂く様に稲妻を纏った黒い翼が描かれてあり、『精霊の裁きを！』というキャッ

チフレーズが入っている。

アンバッスは長年の経験から、彼らは一定の距離まで近付いてから突撃を仕掛けるつもりである事を見抜いていた。

「穏便に、済ませられますかね？」

「まあ、無理だろう。ここまで来たら一戦やらかして収拾つけるしかあるまい」

「サクヤ様がいらっしゃれば……。　本当に、サクヤ様はフレグンスを見限ったんでしょうか？」

「さあな。　だが、サクヤがこの場に居たとしても穏便には済まんと思うぞ？」

あの強力な癒しの力で死者こそ出さないよう取り計らうであろうものの、派手な事にはなるだろうなと、アンバッスは想像する。

民衆が冷静な状態であれば、漆黒の翼を広げて姿を見せるだけで静かになりそうだが、今のように場の雰囲気に呑まれて一種のトランス状態に陥っている民衆が自分達の『象徴』を眼にすれば、一気に興奮状態に達して暴徒と化す可能性が高い。

「暴徒化した群集ってのは厄介だからな、理性が剥がれ落ちるから手段と目的が入れ替わってもそれに気付かない」

ここに居る人々は元々”サクヤ”に対するフレグンスの行いという噂の真偽を求める意味で集まり、それが明確に示されない事への不満から抗議へと変わり、何時の間にか真偽は有耶無耶のまま真相として扱われ、抗議行動は何故か制裁に変わろうとしている。

「民衆を斬りたくなければ神官戦士達を最初の突撃で叩きのめす必要がある。気合いを入れておけ」

「それはそれで遣りきれないですね……」

軽口を叩きながら特徴的な仕様の盾を構える若い騎士（サム・クリッツ）は、『サクヤ様に会いたいなぁ』と無い物強請（ものねだ）りの呟きを口にして星の瞬き始めた空を見上げ、そこに浮かぶ存在を見つけて視線が釘付けになった。

青白色（せいはくしょく）に輝く翼を広げて宙に浮かぶ、異国情緒溢れる幻想的な衣装を纏った黒髪の少女。何処か神聖な雰囲気を醸し出すその姿は、まさに精霊の使いと表現するに相応しい神々しさを放っていた。

「サ、サクヤ様だ……！」

「なに？」

若い騎士の叫びを聞いた者達が一斉にその視線を追って空を見上げ、そこに光り輝く御姿で現れた『精霊の使い』を見つけて集まっていた民衆や神官戦士達が歓声を上げた。

「気を散らすなっ　前方に注意せよ！」

同じく空を見上げていた騎士達にアンバッスの叱責が飛ぶ。朔耶が来たのは良い、が、ソレによって引き起こされる事態も念頭に置いて行動しなくてはならない。先程、若い騎士に教授した群集心理による暴徒化を懸念する。

そして、その不安は的中した。

「サクヤ様が御光臨なされたぞー！」

「我々の信仰をサクヤ様に御見せするのだ！」

群集の中で誰かが放った言葉が、人々の興奮に火をつけたのだ。

突撃を敢行する神官戦士隊に続くように、手に横断幕や看板等を掲げた民衆達も騎士団本部に向かって押し寄せる。

「仕方ない、全軍抜剣！」

「し、しかしっ　隊長……！」

朔耶の光臨に戸惑う騎士達は、この状況で民衆達と戦っても良いのだろうかと迷っていた。サクヤの名の下に集まった民衆達と戦うという事は、朔耶を敵に回す事になり、例の噂を認める事にも繋がる、と。

「迷うな！　心配せんでもサクヤは我々の敵ではない、寧ろ味方だ」

そう言って二本の長剣を手に前に出たアンバッスは、両手を大きく広げて上空の朔耶に手を振った。

エバンスの街上空に転移した朔耶は、騎士団本部前の通りを埋め尽くす群集とその中を進む神官戦士の部隊を見て、彼らを鎮めるにはどうすれば良いかと考えていた。その内に、地上にいる人々が此方を見上げて何か騒ぎ始める。

『あ、見つかっちゃった』

クロガ　メダツコトヲ　シテイルカラナ

黒の精霊は最近覚えた翼の発光を、朔耶から依頼されずとも自主的に行っていた。

通常、精霊術士と使役される精霊は、必要な時に適切な力を即座

に発現出来るよう予め状況に応じた行動を示し合わせておく事で、特定の状況下に入った時に精霊が判断して力を発現する場合がある。

朔耶の場合は朔耶と重なる神社の精霊が黒の精霊を一時的に使役している状態にあるので、朔耶と示しあわせをしていなくとも神社の精霊が自ら状況を判断して力の発現を行っているのだが、特殊な過程を得て自律性の高い存在となっている神社の精霊の影響を受けてか、黒の精霊は『好み』に似た自身の意思で力を発現させる傾向が出ていた。無論、朔耶が禁じれば勝手に動く事は無い。

『なんか騒いでるけど、解散するように言った方がいいのかな……？　演説とか』

チュウイセヨ　タタカイノケハイガ　ツヨマッテオル

戸惑っている朔耶に神社の精霊が警告を促し、ほぼ同時に群集の中から飛び出した神官戦士達が剣を振り翳しながら騎士団本部に向かって走り出した。その動きに呼応するように、横断幕や看板を掲げた民衆達も後に続き始める。

『えっ！　なに？』

ミナ　タタカイノケハイニ　ノマレテオル　コレヲシズメルコト

ヨウイデハナイ

『容易ではないって……そんな』

悠長な事を言っている場合では無いと続けようとして、朔耶は隊列を組む騎士達の前に二本の長剣を手にしたアンバッスの姿を見つけた。ふと、何時かのクルストスの街に見た光景が浮かぶ。そして先頭を行く神官戦士が翳していた剣を正面に向けたその時――

「ダメっ！」

朔耶は脳裏を過ぎる悪夢を振り払うように、迷いも戸惑いも一先ず捨て置いて行動に出た。『重なる者』としての能力を持って世界から過剰とも言える膨大な魔力を引き出し、それらを力に変換する。

神社の精霊が出力と運用を管理微調整する事で、余剰分を他に回しながら引き出された膨大な魔力を無駄なく諸現象へと導き、発現した巨大な稲妻が突撃を敢行する神官戦士達の正面に叩き込まれた。

本物の落雷と違って近くの人間を感電させる効果は無いが、轟音と共に炸裂した雷撃によって地面は大きく抉りとられる。閃光で眼が眩んだ神官戦士達を含む群集は、視界が戻って目にした光景に息を呑む。

青白色に輝く光の翼と、紫色に帯電する漆黒の翼を蝶を思わせる形状に展開させた朔耶が、群集の前に立ちはだかるように浮いていた。ちなみに新たな翼は余剰分の魔力を放出して発現させたモノだ。

「おお……サクヤ様だ」

「サクヤ様……」

興奮状態を継続しながらも、そのあまりに幻想的でこの世のものとは思えない姿を目の当たりして恍惚となった神官戦士達は、揃って片膝を付くと頭を垂れる。民衆もそれに倣い、通りを埋め尽くす群集が一斉に傅く壮観な光景が広がった。

一方、傅かれた朔耶は『ここからどうすりゃいいのよ?』と処置に困っていた。彼らが未だ興奮状態にある事は傍目にも分かる。何か決定的に目を覚まさせる切っ掛けが必要だと思われた。

『ど、どうしよ？　何言えばいいの？』
カレラニ　サクヤハフレグンスト　テキタイシテイナイコトヲ　ツタエレバヨイノデハ　ナイカ？
『……どうやって？』

演説も御神託も無理だと訴える朔耶に、神社の精霊は『自分らしく在れば良い』という便利な励ましでアドバイスを避けた。ここは自身で切り開くべき関門だと判断した為である。

朔耶は如何すべきか迷った挙句、兄の『拳で語り合う』を思い出し、行動で示すべく実力行使に出た。帯電する漆黒の翼からいきなり雷撃が放たれ、民衆が掲げていた看板を吹き飛ばす。

夜の闇を切り裂くように飛び交う稲妻と閃光の嵐に恐れおののく民衆達は、何か『精霊の使い』の怒りに触れるような粗相をしてしまったのかと動揺した。神官戦士達の旗も吹き飛ばされ、そこでようやく自分達の持つ象徴を称えるモノが原因だと理解する。

「も、もしや……我々はとんでも無い過ちを……？」
「やっぱりあの噂って、嘘だったんじゃないか？」

民衆に混じって扇動していた神官達は『精霊の使い』の怒りに触れる事を恐れ、慌てて神殿に駆け戻ると中に掲げている看板や横断幕等を処分して回った。

神殿勢力や民衆と激突しての暴動鎮圧という事態はギリギリの所で回避され、エバンスの騎士達も一先ず安堵する。

「やれやれ、なんとか治まったか」
「ですね、それにしても……」
若い騎士（サム・クリッツ）はその存在に視線を向ける。終始無言で稲妻を放ちながら大通りに張られた反乱を煽る看板や旗などを片っ端から『処理』して行く朔耶のむすっとした表情は、その幻想的な姿と相俟って非常に『怖い』印象を与えていた。

「サクヤ様、無茶苦茶怒ってませんか？」
「……違うな、アレは照れだ」

『精霊の使い』を演じる事に恥ずかしがっていると見抜くアンバッス。当の本人である朔耶は、看板や張り紙を処分する度に近くにいる街の人から膝を付いてお祈りを捧げられてしまうのだが、無視する訳にもいかず、無下に止めさせるのもなんだか忍びない。

お祈りが終わると窺うように見上げて来るので、適当に頷いてみたり微笑んでみたりして応じるものの、これが無性に恥ずかしい。コスプレ巫女な自分が大真面目に信仰の祈りを捧げられているという状況の、あまりのギャップに噴き出しそうになっていた。
それを堪えているが故のむっすり顔でなのである。

朔耶が大通りの看板やら張り紙やらを処理し終える頃には、集まっていた民衆が手分けして街中の張り紙や看板を片付けに動いていた。それらを確認してもう大丈夫そうだと判断した朔耶は騎士団本部前にやって来る。

「アンバッスさん」
「おう、よく来てくれたな」

世界は違えど神聖な存在を表す衣装には通ずるモノがあるようで、巫女衣装を纏った朔耶をアンバッスは眩しそうに目を細めて迎えた。他の騎士達はその神秘的な雰囲気に只々ぼーっと魅入られていた。

「それにしても、まるで聖女みたいな装いだな。民族衣装にも見えるが、それはお前の世界の神官服か何かか？」

「いや～、確かに神事（しんじ）関係の服なんだけど、ただのコスプレなのよね」

アンバッスと話しているうちに、近くに来ていた神官が『サクヤ様の神官服は”コスプレ”といふ』などとメモを取っていたので即刻訂正に入る朔耶。変な知識を植えつける訳にはいかないと、衣装に付いて説明をする。

「なるほど、巫女衣装ですか。するとやはり、サクヤ様は精霊の巫女様だったのですなっ」

「違うんだけど、もうそれでいいわ……」

如何あっても『精霊の御使い』として崇拝したがる精霊神官に、ちょっと投げ遣り気味になる朔耶だった。

騎士団本部内の食堂で一息付きながら、この騒動の大元について話をする朔耶とアンバッス。一連の詳しい事情を聞いて『レイスがやらかしたか』と笑うアンバッスに朔耶は『自分にも原因があった』と反省しつつ苦笑してみせる。

巫女衣装を纏った朔耶は魔力のオーラや翼こそ収めているが、その姿の醸し出す幻想的な雰囲気は只でさえ神秘的な印象を与えてい

る黒髪によってさらに効果が高まり、騎士団本部に詰める職員や騎士達は近寄りがたいモノを感じていた。

だが、あまりにも普通にアンバッスと話している『ごく普通の少女』な姿を見るうち、朔耶の持つ従来の親しみ易さも手伝って、何時しか皆の心から心理的な壁も取り払われていくのだった。

「今日はもう還るのか、王都にも行くのだろう？」
「うん、レイス達ともちゃんと話しておかないとね」

流石にこの格好で王都には行けないと、今回の騒動で信仰を向けられた事に懲りた朔耶は、着替えて落ち着いてから後日改めて王都に出向くと話す。”サクヤ崇拝”が過ぎるのも色々と問題がある。自分はあくまでも庶民なのだと、あまり説得力の無い主張をした。

エバンスでの騒動と顛末は直ちに王都に伝えられ、朔耶の行動が反フレグンス勢力を敵対勢力と見做した事で、フレグンスへの非難は鳴りを潜める。代わりに、キトから逃げ出した魔族組織の残党がフレグンスで混乱を起こすために画策したとの噂が広まった。

これらの噂はフレグンス王室からの依頼により、秘密裏に王都へ派遣された帝国の密偵によって広められたのだが、後に、サクヤと見解の相違によるトラブルがあったのは事実だが、それを利用した魔族組織の陰謀であったと、今回の騒動について王室から正式に発表がなされた。

カイゼル王は先日に起きた『魔物襲撃事件』の事も絡めてフレグ

ンスに対する魔族組織の工作が活発化している事を挙げ、『こういう時にこそ魔族の策略に惑わされる事のないように』と国民に結束を固める呼びかけを行い、それなりの効果を上げたのだった。

95話：進軍準備

エバンスの騒動が治まった日から一日置いての正月休み明け。学校から戻った朔耶は、レイス達との事を何時までも先延ばしにする訳にはいかないと、夕方の早い時間から王都に転移して城に出向いた。

朔耶が吹き飛ばしてしまった王宮区の街灯は、半分ほど修理も進んでいるようだ。

「……」

「……」

フレグンス城の二階にあるサロンのテーブルを挟み、向かい合っている二人。互いに無言で見詰め合っていたレイスと朔耶は、やがてどちらからとも無く笑い出してしまう。

「ちょ……ちょっとっ　笑ってどうすんのよ！」

「いや失礼……しかし、サクヤも笑ってますが」

「だって、しょーがないじゃん」

「ええ、仕方ありませんね」

妙な緊張感と気まずさと照れが入り混じり、場を支配していた厳正な雰囲気という均衡が崩れた時、人はその可笑(おか)しな空気を感じてお腹の内側から笑いが込み上げてしまう時がある。

「つーか、あたし等が真面目な顔して向かい合うって状況が変なのよっ」
「まあ確かに、僕達は何時もくだけた調子で接していましたからねぇ」
ぺしぺしとテーブルを叩く朔耶にレイスは苦笑しながら同意する。
そうして一区切り付いた所で、徐に切り出した。
「僕の判断で配慮したつもりが、サクヤを傷つけてしまった事をお詫びしますよ」
「ううん、配慮しなきゃいけないような印象持たせたのは……あたしにも非があったと思うし」
互いの非を赦し合う事で、またこれまで通り宜しくお願いし合う朔耶とレイス。二人が笑い出した時は何事かと固まっていたフレイも、ようやくホッとした表情を見せるのだった。
「お話は付いたようですね」
「サクヤ……良かった」
暫しの談笑を始める朔耶達の所へ、レティレスティアを伴ったアルサレナがやって来た。
レイスとの和解によって朔耶が此方での在り方と今後の来訪に責任を持つ覚悟をしている事が明確になったので、『これでサクヤにも国政関係の仕事を頼み易くなりました』等と強(したた)かな事を口にするアルサレナ。
「では、さっそく仕事を押し付けようと思うのですが」

「ちょっ　いきなりですか。あたし学校始まったから、また数日おきくらいにしか来れないんですけど」
「そうですね……破損した街灯は修理も進んでいるようですので、別の事を頼みましょうか」
「容赦ないですね、アルサレナさん……」

和やかな雰囲気の中、そんな冗談を言い合いながら近況について説明を交えつつ朔耶にこなして貰いたい事、朔耶でなければ出来ない事や、朔耶自身に纏わる事などを挙げて行く。

今回の騒ぎは意思の擦れ違いによる朔耶との不和を、魔族組織に付け込まれた形にで引き起こされたモノだが、精霊神殿のサクヤ派勢力が特に活発に動いて騒ぎを助長してしまった事も背景にある。

サクヤ派勢力に対するお咎めは見送る方針で収める代わりに、朔耶の方から彼らに自省を促しておいて欲しいとアルサレナは要請した。朔耶も『これはもう仕方が無いね』と了承した。

神殿側にとって、朔耶が単なる資金源や力の象徴でしかなかったのならば、此処までの事態には至らなかったであろうものの、朔耶は名実共に精霊の使いと言えるような在り方をしている。

経済力と精霊力の両方を兼ね備え、類稀なる発明で人々の生活を潤し、王族や皇帝とも親しく実権も権威も持っており、民に多くの施しを与えながらも民から徴発する事は無い。そんな朔耶に対する傾倒が、崇拝や信仰レベルになったとしても無理からぬ事。

だが、それだけの影響力を残してもし、戦いが原因で朔耶の来訪が止まるような事があれば、それを知った神殿側が反戦行動に出る

などして国が乱れる恐れもあったと、アルサレナは話す。

此方の世界で良かれと思うことを行いつつ適当に過ごしていたつもりが、随分と大層な事になってしまっている自身の立場に驚愕する思いを懐きつつ、本当に自覚が足りてなかったのだなぁと、朔耶は今更ながら改めて実感したのだった。

「実際、今回のように煽られれば暴発してしまう危うさもありますからね。その意味では、帝国に借りを作ってしまいました」

帝国は皇帝に権威も権力も一極集中させているが、フレグンスは王の権威の下に貴族達へ権力を分散させている。フレグンスの思想統制されていない内政状況による統治力の脆弱な面を浮き彫りにしてしまったと、レイスがアルサレナの話に補足を加える。

「あー、帝国の借りについてはあたしからバルにバシッとお礼言っとく」

「申し訳ありませんね、何だか催促したみたいで」

しれっとそんな事を言うレイスだが、皇帝の朔耶に対する懇意で借りをチャラにしようという画策が見え見えの『何時もの微笑』だった。今回の和解によって、そういった部分を繕う気も無くなったようだ。

尤も、朔耶には何時もアッサリ内面を見抜かれていたので元より変わりはなかったりする。

王妃と王女と戦女神と宮廷魔術士長とその補佐が揃って議論している様子は、和気藹々（わきあいあい）としていながらも中々に近

寄り難い雰囲気を漂わせ、通りかかった中堅貴族や侍女達が迂回していったりする中、フレイが身に付いた嗜みで皆にお茶を淹れる役をしていた。

騒動の処理に付いての話し合いを終え、話題はアーサリムの事に移る。現地の部隊は本国やサムズの混乱を受けてアーレクラワ方面への進軍を中止し、ポルモーンの街で待機中。その間、アーレクラワ付近に魔物の軍勢が現れた事などが確認されている。

近くアーレクラワへの進軍を開始するにあたって、帝国とも足並みを揃えつつ援軍を送る予定なのだそうだ。朔耶はメリルー導師に教わった呪い祓いの事を話し、一度アーサリムに向かう事にした。

「呪い祓いですか……。確かに、サクヤ程の力を使えるならば、或いは可能かもしれませんが……」

「やるだけやってみるよ、助けられる力があって助けられるなら助けるってのがあたしのモットーだし」

二度目に此方（オルドリア）へやって来た時の気持ちと決意は、今も朔耶の行動の軸となっている。

アーサリムへの援軍にはフューリ団長が聖騎士団を率いて向かう事になっており、途中エバンスで辺境騎士団の精鋭部隊とその指揮を一任されたアンバッス中隊長を拾って行く。竜籠で数日を掛けてポルモーンの街に駐留する先発隊の混合部隊と合流する予定だ。

聖騎士団を乗せた二頭立て竜籠が王宮区から夜空へと飛び立って行く姿を城の窓から見送った朔耶は、連絡や現状把握を兼ねて一足先にポルモーンへ向かう為、一旦帰還する。

数日間、心を悩ませていた問題が片付き、スッキリした気分で還

って来ると同時に朔耶のお腹が鳴った。

「先ずは腹ごしらえからね、お腹空いちゃった」

夕食を終えて直ぐに転移しようと準備を始めた朔耶は、居間のテーブルに箱を積み上げている母を見つけて声を掛けた。

「なにこれ？」

「羊羹」

お歳暮の中身が被り捲って賞味期限が近付いている羊羹が沢山余っているらしい。捨てるのも忍びないし、近所への御裾分けも同じモノを三回目ともなると少々気兼ねするのだそうだ。どれも賞味期限ぎりぎりのモノばかりなので余計に。

そういえば最近のオヤツはずっと羊羹だったなぁと思い出した朔耶は、折角なので持って行くと言って羊羹の処理を引き受けた。

「じゃあ、いってきまーす」

「休みじゃないんだし、もう夜も遅いから早く帰ってきなさいね？」

「はーい」

羊羹の箱と魔導砲の弾丸が納まった箱を持って、朔耶はオルドリア大陸へと転移した。都築家の居間では朔耶に魔法少女の格好をさせようとしてどつかれた兄が転がっていた。　衣装を持ったまま。

「わっと」
「うぉ！　……ツヅキか、相変わらず唐突に現れる奴だな」

ポルモーンに築かれた混合部隊の拠点内にあるパーシバル傭兵団の陣地に現れた朔耶。ブラットの持つ御守りを目印に転移している為、どうしても彼の近くに現れる事が多くなる。

ブラットは朔耶が現れる度にテントが壊されるので、今回も何処か壊れていないかとテントの端々を確認していた。

「もー、今日はおっきなモノ持って来てないから大丈夫よ」
「ああ……なんか本国の方で騒ぎがあったらしいが？」
「うん、ちょっとね。もう解決済みだから大丈夫だよ」

朔耶はあまり詳しくは語らなかったが、ブラットは『そうか』と言って納得した。解決したのなら根掘り葉掘り聴く必要もないと判断する。朔耶個人との付き合いと、雇われた傭兵であるという立場との区別は厳格に対処する事が信用第一に繋がるのだ。

混合部隊の支援拠点は篝火である程度の明かりを確保しているが、ポルモーンの街は点々とする建物の中から零れる明かりが僅かばかり見られるだけで、ササの街と同じく夜になれば結構暗い。

この辺りにも簡易的な街灯を立てようかと計画を練りつつ、朔耶はブラットを荷物持ちにして拠点の中央に出向いた。

帝国の工兵によって建てられた簡易宿舎は帝国の遠征部隊とフレグンスの先発隊が一部共同使用している。まだ彼方此方テントを材料にした張りぼて状態なのだが、後日竜籠で機材が届けばササの街に築いた拠点と同規模のモノが出来上がる予定だ。

「あれ？　なんか騒いでない？」
「ん？　ああ、またか……」

拠点の門前に人垣が出来ていて、街の住人らしき数人がササの街から混合部隊に同行してきた部族戦士と睨み合いながら何事か怒鳴りあっている。先祖がどうの、魔族がこうの、という内容が言葉の端々に聞き取れた。

事情を把握しているらしいブラットに朔耶が訊ねると、アーサリムの部族間に横たわる因縁らしいと教えてくれた。

ポルモーン渓谷の現地部族とササ方面に住む部族との関係は少々拗れた状態になっていて、この街に着いた翌日辺りから少数の喧嘩などがちょくちょく起きて怪我人が出る事もあったという。

「あまり突っ込んだ詳しい事情は分からんが、人狩りや魔族組織の事が関係してるらしくてな」

人狩りによる魔物の脅威に曝され続けていたポルモーン渓谷の部族達は、その影で人狩り達が落としていく金によって繁栄していたササ方面の部族に対して並々ならぬ恨みを持っているらしい。そこには逆恨みの類とも言い切れない込み入った事情があるようだ。

アーサリムが平和になって、共に仲良く出来るよう期待するしかない。朔耶はそんな風に思った。

帝国やフレグンスの騎士達はアーサリムの部族同士という身内での問題なだけに、余り口を出せる立場には無かったが、混合部隊の仲間として共に戦ってきた部族戦士達である。

トラブルが起きれば仲裁に入る事もあるが、諍いの内容が内容な

だけに、どちらかに肩入れすればアーサリムで内戦の火種となるような遺恨を残しかねないので、手を出しあぐねている様子が窺えた。

「ハイハイ、喧嘩しない。今は仲間同士でいがみ合ってる時じゃないでしょっ」

「！　これは、サクヤ様」

「サクヤ殿……」

掴み合いになり掛けた所で荷物持ちブラットを伴った朔耶が割って入る。騎士やササの部族戦士達は朔耶の登場に何処か安堵するような空気を感じさせたが、絡んでいたポルモーンの部族は『なんだこの子供は』といった怪訝な表情を向ける。

しかし、彼らの中の一人が八日前の夜、混合部隊到着の日に空を飛んでくる朔耶の姿を目撃しており、慌てて『精霊の乙女』である事を仲間に耳打ちすると、威嚇するような視線を向けていた他の者達は一斉に顔色を変えた。

「皆で食べよう」

殺伐とした現地に羊羹をご馳走する朔耶。なにやら茶色の水っぽい固体、見た目は油を固めたような蝋のような謎の物体を渡され、『食え』と言われて戸惑うポルモーンとササの部族達に、帝国とフレグンスの騎士達。

だがブラットは『朔耶（ツヅキ）の持って来た食い物は美味い』と知っているのでひょいパクと口に放り込み咀嚼する。朔耶もひょいパクと一個口にする。様子を窺う部族戦士と騎士達。ブラットは生まれて初めて食べる羊羹の瑞々しい甘さに戦慄した。

「うめぇ！　なんだこれっ　貴族の菓子か？　こんな甘い物初めて食ったぜ！」

その反応を見て顔を見合わせた部族や騎士達は、徐に羊羹を口に含んだ。ひょいパク。　一時（いっとき）の平和が訪れた。

拠点の仮設会議室で混合部隊の現状と今後の活動予定などを大まかに話し合い、不足している物資のリストや脱落者を本国に輸送する手配など細かい部分も詰めていく。

魔導砲の弾丸も今回朔耶が持って来た二十発に、ティルファからも使える弾が五発程届いている。乱射するタイプの武器ではないので、弾数はこれで問題ない。取り合えず、フレグンス、帝国共に本国からの援軍待ちである。

「援軍は三日後くらいには到着しそうだって話だよ」
「では、直ぐに進軍の準備を始めておきましょう」
「ツヅキも来るのか？」
「次にあたしが来られるのは五日後くらいかなー」

朔耶は『直ぐに追いつくよ』と言ってアーレクラワ進撃に参加する事を告げた。そして魔物に呪い祓いを施す事も告げる。

「……なるほど、魔物にそのような秘密が……」
「ごめんね？　今言う事じゃ無いと思うんだけど、知っておいて欲しかったから」
「いや、前から噂で言われてた事だしな……」

「元に戻せるかどうか分からないけど、やれるだけやって見たいの」

駄目だった場合は即座に殲滅するという事で、互いに行動を確認し合う。ブラットは対魔物戦について語る朔耶の瞳の奥に、成長と覚悟を見て取った。ふっと笑みを湛えて朔耶の頭に手を伸ばし、なでなでなでなで……。

「？　何故なでなで？」

「いや、ツヅキはいい子だな」

『フレグンスの戦女神』の、或いは『皇帝の黒后』の、はたまた『精霊の乙女』の頭を無遠慮に撫でるなど、何と畏れ多い事をと、騎士や部族戦士達は思わず目を剥くが、撫でられている本人が好きにさせているので憤りながらも文句の言えない彼らだった。

「……ほんとにブラットさんは時々ワケわからんわ……」

96話：アーサリム解放軍

羊羹を馳走したサクヤが帰還した日から三日後、ポルモーンの街にフレグンスと帝国の援軍を乗せた竜籠が続々と到着する。時期を同じくしてルティレイフィア達も混合部隊と合流し、即日アーレクラワ方面への進軍に向けて作戦が練られた。

「ふん……少しは成長したか？」

「……隊長」

その作戦会議の席で再開したアンバッスとヴィンスは暫しの懐旧に浸る。

理想と挫折の果てにフレグンス第二王女の私兵となったヴィンス傭兵騎士団長。無名の地方貴族出身でありながら実績を認められて辺境騎士団精鋭部隊の指揮官に抜擢されたアンバッス中隊長。

嘗て道を違えた二人の騎士は、再び同じ目標に向かって肩を並べあう。

「サクヤは来ていないのか？」

「ええ、予定では明後日にまた此方に来ると言ってましたが」

会議室を見渡しながら訊ねたルティレイフィアは、騎士達からの返答に『そうか』と返して席に着いた。部隊は既にある程度編成されているので、進軍ルートの確認と対魔物の軍勢戦についての話し

合いが中心となる。

「では明日の朝、夜明けと共にアーレクラワ方面に向けて進軍を開始するという事で」

「到着したばかりの部隊には酷(こく)かもしれんが、相手の戦力が整いきる前に潰さねば、消耗戦を強いられ兼ねないからな」

今現在でポルモーンの街にはフレグンス、帝国の軍関係者以外にも傭兵団や地元部族の戦士部隊を含めて三百人近い戦力が集まっている。食糧の調達など、戦力の維持費だけでもかなりの費用が掛かってしまうのでノンビリ構えている訳にはいかない。

会議は早急に進軍を開始する方向で決まり、アーレクラワ攻略に参加する兵達は明日に備えて早めに休ませる事となった。

そうして翌日――

アーサリムに集う全軍の呼称を『アーサリム解放軍』に統一、戦力の膨れ上がった混合部隊は『魔族討伐大隊』としてアーレクラワ方面へ進軍を開始した。魔族討伐大隊の内訳は次の通りとなっている。

帝国騎士団：２５　＋援軍３０
帝国魔術団：２６　＋援軍２０
帝国騎士団魔導砲分隊：４
帝国密偵部隊：５
帝国工兵部隊：１０

フレグンス騎士団：１５
パーシバル傭兵団：２０

精霊神殿フューリ聖騎士団：１０
アンバッス精鋭部隊：１０
ルティレイフィア遊撃隊：９

アーサリム部族戦士：１０　＋援軍１０

従軍使用人：１６（帝国から）

数の多い帝国騎士団が中心となり、戦闘の苦手な部隊やアーサリムでの戦闘経験の無い者を部隊の内側に配置、土地勘と機動力のあるルティレイフィア遊撃隊やササの部族戦士、パーシバル傭兵団等が少し先行しつつ周囲の索敵と探索を行いながら進んでいく。
アンバッス精鋭部隊は朔耶がいない間、全軍の癒し手を引き受ける事になるフューリ聖騎士団を守る役割を担っていた。

「んじゃ、いってきまーす！」
「おうー頑張ってこい」
「無理するなよー」

魔族討伐大隊が進軍を開始してさらに翌日、朝からオルドリア大陸へと転移した朔耶は、進軍中の部隊がアーレクラワ方面の入り口付近で陣地の構築作業をしている所に現れた。流石にブラットも慣れたらしく『今日は手土産無しか？』等と軽口で迎える。

「あーオニギリでも作ってきてあげればよかったかな？　でも凄い

人数……」
「ああ、お前が言った通りあれから三日後に援軍が来てな。すっかり大所帯だ」

『ヨウカン食いてぇ』とか言っているブラットに苦笑しつつ飴玉をあげた朔耶は、指揮官の集まっている場所へと足を運ぶ。途中、周囲から『戦女神だ』とか『黒后殿』とか『精霊の乙女』とか囁きあう声と共に、期待と羨望の眼差しをひしひしと感じていた。

『なんか凄い期待されてるなぁ』
ウム　サクヤナラバ　ミナノキタイニ　コタエラレルデアロウ
『フォローよろしくね』
ムロン　ワレラガ　ゼンリョクデ　ホサシヨウ

「おお、来たかサクヤ」
「おはよ、ルティ」

指揮官の集まるテントには、この場で最も身分の高いルティレイフィアを上座に、帝国騎士団の指揮官とフレグンス騎士団の指揮官、フューリ団長にアンバッス中隊長が顔を揃えていた。つつつっとアンバッスの傍に寄った朔耶はヒソヒソ声で話しかける。

「ね、ヴィンスさん達にはもう会った？」
「会った。お前も顔を見せておくか？」

戦女神（サクヤ）と顔を寄せ合い、内緒話をする辺境騎士団精鋭部隊の熟年（アン）隊長（バッス）はアーサリム解放軍の中でも最年長にあたる。

それ故か、他の騎士達が軒並み緊張する相手でもある朔耶と親しげに話す様はやたらと貫禄があり、魔族討伐大隊に属する指揮官の中では一番下っ端クラスとなる中隊長ながら、一見すると一番偉い人に見えてしまっていた。

「さて、サクヤも来た事だし例の段取りについて話を纏めておこう」

それはさて置き、気にせず会議を進めるルティレイフィア。此方も在る意味、人の上に立つ者としての貫禄十分だった。

進軍ルート等の予定は決まっているので、此処からは朔耶を交えて戦闘時の方針を予め決めておく。対魔物戦術として、先ず朔耶が呪い祓いを行う事になるのだが、その効果の有る無しによっても後の戦術を変えていく必要がある。

「もし、魔物を元の人間に戻すことが出来た場合、被害者を街へ輸送する事も考えねばならん」

「それに付いては竜籠を使うのが一番良いでしょう」

「サクヤはこの事で何か意見はあるか？」

「んー……特に無い、んだけど、気になる事が一つダケ」

『魔物って服着てないよね？』という朔耶の素朴な疑問は、戦女神の『気になる事』について真剣に聞き入ろうとしていた場の空気を一瞬停止させたが、言われて見れば確かに、魔物が元の人間に戻った場合は素っ裸になる事に気が付いた。

ルティレイフィアは大勢の人間が全裸で竜籠にギュウギュウ詰めになって運ばれる所を想像して吹き出しそうになった。

「あー……そうだな、確かに、それは問題だな、うん」

「えーと、それでしたら……、前もってマントなりシーツなり身を

包むモノを用意しておきましょう」
「う……ごめんね、変なコト言って……」

肩をプルプル震わせているルティレイフィアに『変なコト言って怒らせちゃったかな～？』と焦る朔耶だった。

構築した陣地に戦力の三分の一を残し、アーレクラワの街があるアーサリム東部へと向かう魔族討伐大隊一行は、出発して直ぐ魔族の斥候部隊らしき小隊規模の魔物の集団と出くわした。甲冑を着けた角付きの存在も確認する。

「半包囲陣形！　非戦闘員を後方に下げろ」
「魔導砲はまだ出すな、撃つ時は角付きを最初に狙え。　全軍戦闘態勢のまま待機！」
「サクヤ！」
「うんっ」

すっかり青白色に輝くのがデフォルトになった翼を出して空に舞い上がった朔耶は、魔物小隊の頭上まで飛ぶと呪い祓いを行うべく癒しの光を投射した。精霊の癒しに特定思念の排除という概念を加える。

対象の中心に在る色に触れ、その色を覆う他の色を排除するイメージで肉体を変質させている『思念』と、その思念を定着させている『体内呪文』を浄化する事で、肉体の変質を解くという方法。

ただ祓うだけでは対象の身体にも相当な負荷が掛かってしまうが、

強力な精霊の癒しとセットで行う事で回復も同時に行う。以前、バルティアの毒を浄化した時と同じく、通常であれば複数の癒し手を必要とするような朔耶（かさなるもの）ならではの方法である。

効果は直ぐに現れた。呪い祓いの光を浴びた魔物は一斉に苦しみ始めると、手足を痙攣させるようにバタバタと地面をのた打ち回る者や、身を捩って光から逃れようとする者が多数。中には泡を吹いて倒れる者も居た。

やがて魔物の身体から煙のように特定の魔力が吹き出し、排出される事でみるみる人間の姿を取り戻して行く。

魔物の咆哮は人間の悲鳴へと変わり、十五体居た魔物の内、八人が完全な人間の姿に戻った。しかし、三人は身体の一部が魔物の姿のまま戻らず、四体の魔物が姿に変化を見せないまま気絶するという結果に至った。

『元に戻らない人は？』

アレイジョウノ　ヘンカハ　カンジラレヌ

完全に人の姿に戻った者の介抱を聖騎士団に任せ、朔耶は身体の一部が魔物のままになっている者に光を送り続けたが、それ以上の変化は見られなかった。戻る者と戻らない者の原因や理由は分からない。

変化の無い者は魔物として弱らせる事は出来ても、姿を人に戻す事は出来なかった。

「……あ……あぁ……」

「！っ　あの人、意識があるっ」

片足と腕が肩口まで魔物の姿をした男性が、苦悶の声を漏らしな

がら震える腕を持ち上げる。朔耶は『危険だ』と止めようとしたルティレイフィアを『平気だから』と躱して男性に駆け寄ると、異形の腕を取って声を掛けた。

「大丈夫ですか？　声、聞こえてる？」

「あ……ぅ……」

男性を励ましながら癒しの光と呪い祓いの光を送り込むが、やはり効果は無い。メリルー導師にもっと詳しく聞いておけば良かったと思いつつ、朔耶は光を送り続ける。しかし――

「ぁ……あ……ぢ……が……と……ぅ……」

半分異形の男性は辛うじてそれだけ告げると、そのまま息を引き取った。

「……」

「サクヤ……？」

朔耶は男性の異形の腕を下ろし、息を吐きつつ暫し黙祷すると、ルティレイフィアに向き直ってメリルー導師の所に行ってくる事を告げる。ルティレイフィアも呪い祓いに効果がある事が実証されたので、導師から更なる助言を貰う事に賛成した。

「ポルモーンで竜籠をこっちに寄越すよう言っとくね」

「わかった、後の事は任せてくれ」

呪い祓いの効果が無かった魔物を処理する篭手の音が響く中、聖騎士団に介抱される魔物からの生還者に一度視線を向けた朔耶は、

青白色の翼を広げてポルモーンの街へと飛び立った。

ポルモーン渓谷と隣接するアーレクラワ西部で全滅した斥候部隊の情報など、前線の様子は偵察用の『眼』と『声』を持つ魔物によって直ちに魔族組織本拠地の『耳』へと届けられる。上がってきた報告を聞いたヨールテスは僅かに眉を顰めて呟いた。

「呪い祓い……メリルーの入れ知恵か？」

どの道、あの娘でなければ然程の効果も得られなかったであろうが、これはまた厄介な事だと対策を錬り始めるヨールテス。呪い祓いに対抗する術は比較的容易ではあるが、使い所を間違えると忽ち戦力を失う事になり兼ねない。

「少し編成を見直す必要があるな……。　キルト！」
「ここに」
「麓に配置した部隊を一旦戻せ、編成の配分を変える」
「直ちに」

研究室からキルトが退室するのを見届けたヨールテスは自身の身体に対戦女神用の体内呪文を刻む作業に戻る。万が一本拠地まで攻め入られた場合、最も脅威となるのは戦女神であり、戦女神さえ封じてしまえば人間の軍隊など魔物の軍勢でどうとでも出来る。

フレグンス兵と傭兵の使う近接武器や帝国兵の使う新兵器などの

サクヤ式は確かに強力だが、空からの攻撃も交えて翻弄すれば十分対処出来る範囲内の脅威に過ぎない。

格闘種系に比べて調整に時間が掛かる故に、飛行種の部隊配備が遅れてはいるが、それが整えば攻勢に出られる。唯一の問題が、戦女神の存在だった。

「攪乱の策は思いの外上手く行ったが、やはり戦女神が出て来ない等という希望的観測はあてにならなかったな」

ヨールテスは自分の身体に施している秘策により、戦女神との直接対決で決着を付ける事に現実味が増した事を実感していた。

「ふむ、それはもう無理じゃな」

メリルー導師を訪ねて隠れ里に降り立った朔耶は、小高い丘の上に建つ小屋で導師と向かい合っていた。魔物に対する呪い祓いの効果について詳しい経緯を話し、助言を求める朔耶に、メリルー導師はふむふむと唸って結論と理由を述べる。

「元に戻らん者はもう人の部分が残っておらんからじゃろう」

魔物にされてから比較的早い時期であれば、まだ変質した肉体が自然治癒的に元に戻ろうとしている為、不安定な状態にあり、変質を維持させている『原因』を排除する事で元の姿に戻す事も可能になっている。

しかし、十数日以上も経過すると変質した状態で安定してしまうので、変質の『原因』となっていた要素を排除しても肉体は戻るべき姿を失っており、もう元には戻れない。

「え、それじゃあ……魔物の姿をしてるけど中身は人間に戻ってるなんて事は？」

「無いとも言い切れん。じゃが、魔物の身体では人として生きられぬよ」

どの道、体内呪文を浄化した時点で魔物の生命源も断たれているので、魔物として野に生きる事も出来ない。そこは割り切って処分してやるのが人としての情けだろうと、メリルー導師は締め括った。

「なんだか遣り切れない部分もあるけど、そこは仕方ないかぁ……」

「ふぇっふぇっふぇっ　……彼らが人を手に掛け、罪を重ねる前に終わらせてやるのだと考えればええ」

「それは、する側の傲慢だとおもう」

脅威の無くなった魔物を処分するという意味において、精神面で少しでも罪悪感を減らしてやろうと免罪符になりうる一つの考え方を示したメリルー導師の言葉を即座に否定してみせる朔耶に、導師は思わず目を丸くした。

「ふぉっふぉっふぉっ　こりゃあ失礼したねぇ、嬢ちゃんは儂が思ってたよりずっと大人じゃったかねぇ」

「あ、ごめんなさい……」

咄嗟に反応してしまったとは言え、導師の心遣いを無下に否定するなど失礼な事をしてしまったと、朔耶は恐縮するのだった。

夕刻、ポルモーン渓谷とアーレクラワを結ぶ通り道の陣地に移動した朔耶は、討伐大隊の凡その現在位置を聞いてその方角へと飛ぶ。被害者運搬用に竜籠を常に一台、近くに飛ばす事となったので一緒に飛んで行く事になった。

最近考案された一頭立ての特殊な竜籠だが、よく見るとその竜は口元の鱗が一部欠けていた。寝惚けて噛み付く癖のある竜だ。

「あれっ　君が来てたのかぁ」
「ピー」
「向こうにはルティが居るよ～？」
「ピ～……」

口を火傷した時の事を覚えているらしく、ルティレイフィアの名を出すと恐々とした様子を見せる竜。意外に表現力豊かな竜と共にアーレクラワの空を翔け、討伐大隊の野営地に到着したのは、陽も沈んで辺りが闇に覆われる頃だった。

「戻ったか、サクヤ」
「あ、ルティ」
「ピッ」

籠を外した竜はそそくさと野営地に設けられた簡易厩舎の中へ入って行った。何故だかコソコソしているような雰囲気の竜と、それを苦笑して見送る朔耶に、ルティレイフィアは首を傾げていた。

「メリルー導師はなんと？」
「ルティに宜しくって」

「いや、呪い祓いの効果についてだ」

結果を訊ねるルティレイフィアに軽くボケてみたら素で返された朔耶は、肩を竦めながら報告する。

「うん、……どうしようも無いってさ」

「そうか……」

今後、朔耶が部隊に居る時の戦闘では先ず魔物部隊に対して呪い祓いを掛け、効果の無い者はそのまま退治する。また、時間の経過と共に呪い祓いで魔物化を解ける者も少なくなるという事で、なるべく進軍を急いだ方が良いという方向で意見も纏まった。

「順調に行けば明日はアーレクラワの街に着くと思う。そこから先が、本当の戦いになるだろう」

「魔族組織の本拠地かぁ」

交代で歩哨に立つ騎士達が野営地周辺を巡回して夜襲に備える中、今日はゆっくり休んでくれというルティレイフィアのお言葉に甘えて、朔耶はフレグンス騎士団のテントで休むのだった。

『なんかあったら宜しくねー』

ウム　ユックリ　ヤスムガヨイ

97話：アーレクラワでの戦闘

夜襲も無く一晩明け、早朝から野営の陣地を払った討伐大隊は予定通りアーレクラワの街を目指して出発した。見張り役を乗せた竜籠が上空から本隊と周囲を見下ろし、近付く敵影がないか警戒している。

朔耶は本隊の少し高い所を飛行しながら全軍に『風の加護』を掛けて機動力の底上げを行い、進軍速度を速めていた。

「それにしても……複数、広範囲に風の加護を使うなんて、サクヤ様の力は本当に人の領域を超えている」

部隊の後方を行く聖騎士団のフューリ団長が、青白色に輝く翼を見上げて呟いた。その言葉に頷く団員達。彼女等を守る役目を担っている為、近くを並走していた精鋭部隊のアンバッスもその呟きを耳にし、何となく上空の朔耶を見上げる。

視線に気付いたのか、朔耶は自分を見上げているアンバッス達の方をちらりと見やると、ひらひらっと手を振って微笑んだ。そんな子供っぽい仕草にアンバッスは今朝方の出発前、竜籠の竜に『ピーちゃん』などと名付けていた朔耶の姿を思い出して笑みを零す。

「ふっ……。確かに人智を超えている部分はあるがな、中身は普通の……ちょっと変わった年頃の少女に過ぎん」

過度の期待は本人の負担になると、さり気に朔耶を労わるような事を口にするアンバッス中隊長に、フューリ団長も頷いた。

「遠方にアーレクラワの街確認！　街近辺に魔物部隊多数展開中！」
「部隊数凡そ十二！　何れも小隊規模の模様！」

竜籠から見張り役が警戒を発した。砦のような外観を見せるアーレクラワの街周辺に、魔物の大部隊が展開されている。街が攻撃を受けていたり、街から魔物部隊に対して何らかの動きを見せる様子は無い。

少し高度を上げて報告の魔物部隊を確認した朔耶は、先行する遊撃隊を追ってルティレイフィアの傍へ下りていった。

「サクヤか、少し数が多いようだが……やれるか？」
「流石にいっぺんには無理だけど、光を当てながら飛び回ればなんとか」

対処し切れない時は呪い祓いを待たずに討伐するというルティレイフィアに、朔耶も味方の安全を考えれば仕方が無いと理解を示す。実際、街周辺の平地に展開している魔物部隊はここまで進軍してきた討伐大隊よりも若干数が多い。

今までは少数の魔物に対し、特別な武器を持って大人数で挑むという数の優位で何とか順調に戦いを進めて来たが、同数以上の戦力を持つ魔物部隊と戦うのは初めての経験だ。一撃で多数を粉砕出来る魔導砲の使い所が鍵となる。

「ねえルティ、街の方は大丈夫なのかな？」
「ああ、あそこなら問題ない。良くも悪くも自分達で凌げる連中ばかりだからな」

アーレクラワの街は堅牢な要塞のような造りになっていて、街に住む者も腕に覚えのある流れ者ばかりが集まっている。住人に仲間意識はあまり無く、皆が皆、其々単独行動かグループ単位での行動が常（つね）だという。

物資などは外から持ち込まれたモノ（持ち寄るのではなく持ち込む）が消費されて、無くなればまた外から持ち込むといった具合で商売も盛んとは言えない。

実力者揃いなのだが自身の力にしか興味が無く、日々過酷な環境で生き延びる事や己を鍛える事、そうして得られる力にこそ意識を向けており、金や名声にも大して興味を示さない。そんな少々偏屈した連中が集まった街なのだとルティレイフィアは話す。

「彼らの一握りにでも力を借りられれば、人狩りの被害も大分軽減出来たのだが……」

この地を駆け回っていた頃にも色々あったと、ルティレイフィアは目を細めてそう遠くない昔に思いを馳せる。

「ふーん……そんなに強い人達が居るなら、手伝ってくれないかなぁ」
「あそこの連中がか？　ふーむ……」
「難しい？」
「修行馬鹿の究極のような連中ばかりだからなぁ」

魔物との戦闘で連中の興味を引ければ勝手に出て来る事もありうるが、あまり期待はしない方が良いとルティレイフィアは肩を竦めた。そんなやり取りをしている間に、討伐大隊は魔物部隊が展開するアーレクラワの街周辺に広がる平地へと差し掛かった。

「全軍停止！　降車して隊列を整えよ！」

魔物部隊とはまだ十分に距離がある地点で先行していたルティレイフィアの遊撃隊やパーシバル傭兵団、部族戦士部隊も本隊と合流し、移動用の馬車を後方に下げて臨戦態勢を整えて行く。朔耶も光の翼を広げて再び空に上がった。

『これって、やっぱり混戦になったら元に戻った人とか運べないよね……』

ウム　ウマク　タチマワラナクテハ　ミカタニモコンランヲ　マネクデアロウ

一つの魔物部隊に呪い祓いを掛けている最中に他の部隊がそこへ雪崩れ込めば、被害者の回収どころではない。かといって、呪い祓いをしている間その場所を防衛するような動きをすれば包囲されてしまう。

こちらには非戦闘員も随行しているのだから、本隊が包囲されるような事になれば彼らが危険に曝される。

『ああジレンマ……』

ノロイバライト　アシヲ　ユウコウニ　ツカエバヨイ

機動力と呪い祓いの効果で魔物部隊全軍の動きを鈍らせて味方を有利に導いて行けば良いと、神社の精霊はアドバイスを出した。事ここに至って朔耶は、兄やブラットの言う『全てを救おうなんて考

えるな』という言葉の意味を、心に重く感じていた。

「敵の配置と動きは？」

「前衛の正面に三部隊、左右に二部隊を確認。残りは後方に控えているようです」

特に動く様子は無いという密偵部隊からの報告に、ルティレイフィアを始め各隊の指揮官は敵の狙いと攻略法を話し合う。魔族側にはアーサリム解放軍の勢力がアーレクラワの街に入る事を阻止しようとする狙いがあるのでは？　という意見に皆が同意した。

「とすれば、ここを奴等の防衛線と捉えるべきか」

「アーレクラワに我々の拠点を築けば、連中をスンカ山に封じ込める事が出来る」

山岳地帯の多いアーサリムにおいて、アーレクラワの開けた平地は地形的にも大部隊を配置するのに向いている。此処を攻略すれば、後々魔族組織の本拠地を攻撃する為に本国から更なる増援を呼ぶという選択肢もあり得る。

先ずは眼前で待ち構えている魔物の大部隊を如何に攻めようかと考えている所に、緊急の報告が入った。

「敵軍に動きあり！　前衛七部隊が前進中！」

「……向こうから動くのか？」

「何か狙いがあるのかも知れん、慎重に対処しよう」

討伐大隊は魔物部隊の動きに注意しつつ、非戦闘員を乗せた移動用の馬車を更に後方へ下げ、聖騎士団と護衛の精鋭部隊をこの場に

残してゆっくりと前進を始める。
帝国魔術団と魔導砲分隊を囲むように陣形を組んだ帝国騎士団を中心に、左右をフレグンス騎士団とルティレイフィア遊撃隊、パーシバル傭兵団と部族戦士部隊で固めて、本隊上空には朔耶が青白色の翼を広げていた。

『ねえ、あれって』
ウム　テキガタモ　タイサクヲ　ネッタヨウダ

魔物の輪郭がはっきり視認出来る距離まで近付いた時、前衛の魔物が頭に兜のようなモノを被っているのが分かった。不揃いで不恰好な兜からは歪な棘々が放射状に伸びており、明らかに衝撃の篭手T2から頭部を守る為の処置だと分かる。

見た目は爆発コントのようなユーモラスな頭だが、その歪(いびつ)な棘が邪魔になり、対象に先端を当てて押し込む事で発動する篭手の機構が使えない。

「ブラットさん！　あれじゃあ篭手使えないよっ！」
「ああっ　向こうも考えたようだな！　まあ、何とかするさっ」

他の部位にも効かない訳では無いので動きを止める事くらいは出来ると返すブラット。その時、神社の精霊が警告を発して魔法障壁の出力を上げた。

チュウイセヨ　ツブテガ　ヒライシテオル
『つぶて？』

朔耶が復唱すると同時に障壁に当たって砕ける石の塊り。無数の石飛礫(いしつぶて)が前衛魔物部隊の後方から飛んで来るのが見えた。後方に配

置された魔物部隊が投石による攻撃を始めたのだ。

材料はその辺りの岩を砕いて出来るので、ほぼ無限に精製される。魔物の強靭な腕力によって絶え間なく飛来する石飛礫は、その大きさも子供の頭程もあり、直撃すれば甲冑を着ていても只では済まない。

騎士達は盾を掲げて魔術士や甲冑を持たない部族戦士達を守ろうとするが、腕や脚に飛礫を受けて骨折する者も出た。

「！っ」

「これは……サクヤ殿」

突然、石飛礫の雨が止み、騎士達が空を見上げると、巨大な翼を覆うように広げて皆を護る朔耶の姿。魔法障壁を本隊上空に展開して石飛礫を防いでいるのだが、これにより朔耶は自由に動けなくなった。魔物部隊の前衛は一定の距離を置いて待機している。

「サクヤの動きを封じる策か……、ここからでは魔術も届かないな」

「今、魔導砲を準備させている。分隊っ　前へ！」

負傷者が後方の聖騎士団の所へ運ばれて行く中、帝国の魔導砲分隊が本隊正面に出て魔物部隊前衛の中央に銃口を向ける。

「テェーーっ！」

ガアアアァン

轟音と共に魔導砲から撃ち出された弾丸は魔物部隊前衛の最前列に立つ魔物に直撃し、その巨体を後方に吹き飛ばした。だが、魔物達は間隔を空けて疎らに立っている為、巻き込めたのはその一体だ

けで、吹き飛ばされた魔物は暫らく経つと何事も無かったかのように起き上がり隊列に戻る。
異常な耐久性と生命力を持つ魔物は、少々身体に穴をあけた程度では仕留められない。

「駄目か……、此処からでは距離が有り過ぎる」
「その武器は密集した相手を吹き飛ばす使い方をするモノなのだろう？」

仮に、魔物の弱点でもある頭部に命中させて遠距離から仕留める事が出来たとしても、現時点で魔導砲の弾丸は二十四発しか残っていないので、戦況には殆ど影響を与えられない。此処に展開している魔物部隊の総数は約百八十体前後と見られている。
統率種のみを狙い撃ち出来ればその限りでは無いが、そんな芸当は非現実的で想定するだけ無意味だ。

魔導砲の効果を期待できる距離まで詰める事も考えられたが、石飛礫の脅威から身を守りながらの接近となれば朔耶の魔法障壁による守護の範囲内に納まるよう密集陣形で動く事になる。しかし、それでは魔物部隊の前衛に包囲されてしまうのだ。

魔物はこの石飛礫の雨の中でも平気で動き回る事が出来る。その為、接近戦になっても石飛礫の飛来が止む事は無く、朔耶は味方を石飛礫から護る為に魔法障壁を張り続けなくてはならないので、呪い祓いや癒しの光による援護も出来ない。

衝撃の篭手Ｔ２による一撃必殺攻撃は魔物が棘兜を装備した事によって封じられ、一体倒すのも容易では無くなった。そんな状況で一斉に攻撃を仕掛けられれば、魔導砲で一部隊を吹き飛ばしている間に味方が壊滅してしまい兼ねないのだ。

「いかんな、これは……。　一度退いて作戦を練った方がいいか」
「しかし、ここで退いては士気に関わりますぞ」

一時撤退を視野に入れるルティレイフィアに、帝国の指揮官はどうにか踏み止まって現状を打開する策を求めた。
魔導砲を賜った事でようやく帝国勢にも手柄を立てられるという期待感があった分、ここで退いては折角持ち直した士気がまた下がってしまうという危惧もある。
ルティレイフィアは彼等の言い分も理解出来たが、現状では朔耶に負担を掛けるばかりで有効な打つ手が無いと説得する。

「戦いはこの一戦で終わりではないのだ。功を焦って部下を危険に曝す事は無い」

ブラットや部族戦士達もルティレイフィアに同調し、討伐大隊は一時撤退の方針で動こうとしたその時、彼等は声を掛けようと見上げた上空にいる朔耶の、更に上空を飛び越えていく影を見た。

「竜籠……だと？　まずいっ！」

魔物を乗せた竜籠が後方の聖騎士団や非戦闘員の部隊を狙っている事に気付いたルティレイフィアは、急いで本隊を下げつつ傭兵部隊を援護に向かわせるよう指示を出す。

部族戦士から身体強化の術を受けたブラット達パーシバル傭兵団は、後方部隊の援護に向かうべく本隊から緊急離脱して行く。その動きに呼応するように、魔物部隊の前衛から左右の部隊が前進を始めた。

「く、まずいな……。このまま止まれば包囲されるし、奴等を引き連れて下がれば後方部隊を巻き込んでしまうぞ」
「突出してくる部隊を魔術団と魔導砲で牽制しつつ下がりましょう、飛礫の範囲から出られればサクヤ殿の御力で……」
「相手が投石器のような設置物ならその方法も取れたのだがな」

見れば後方から石飛礫を投げてくる魔物部隊も前進しながら投石を行っている。魔物の持つ力を有効に使った、統制された魔物ならではの攻撃法という戦術に対人戦の常識は通用しない。

ゆっくりと距離を詰めてくる魔物部隊を前に、ルティレイフィアは全力で撤退すれば何とか凌げるかと算段する。
その場合は全軍の壊走も招きかねないので慎重に判断を行わなくてはならないが、それ以前に、傭兵団が援護に向かった後方の部隊に被害が出ていた場合、その損傷如何によっては撤退もままならなくなる。単純に魔物の方が足が速い。

「機動力、防御力、攻撃力、それに攻撃範囲。統率と戦術を得た魔物の脅威を甘く見ていたな。慢心していたか……」

石飛礫を防ぎながら地上の様子を見守っていた朔耶は、素人ながらに戦況が芳しくない事を感じていた。

『ねえ、なんかやばくない？』
ショウブハ　トキノウンデモ　アルカラナ

これでは魔物化の被害者救済どころか、この戦いに勝利出来るのかすら怪しい。実際の状況は無事に脱出できるか否かという瀬戸際まで来ているのだが、上空から味方の様子を窺っている朔耶には戦

況が膠着しているように見えた。

『この投石がなんとかなればなぁ』

コウモ　タエマナイノデハ　イッシュンタリトモ　ショウヘキヲトクコトハ　デキヌ

何か攻撃を行う為に障壁を解けば、途端に豪雨のような投石に曝される。朔耶は無事でも味方が甚大な被害を被る事は必至だ。少しづつ前進を始めている魔物部隊の動きや、先程の竜籠も気になる。

朔耶はどうすれば良いかと考えているうちに、ふと兄の『如何なれば良いか、から考える』を思い出し、どうなれば良いのかを考えた。先ず投石が止む事、そして魔物部隊の動きを呪い祓いで止められる事。そうなる為に必要なポイントを探る。

『やっぱ投石が問題か……突風で押し返せないかな？』

タイショウガ　チイサク　ハンイガ　ヒロスギル

『じゃあ障壁で蓋するみたいに後ろの部隊の上まで行って防ぐとか』

ソノバカラ　ウゴカヌアイテデアレバ　ユウコウダッタヤモ　シレヌ

次々と思いつくままアイデアを挙げるが、何れも効果に疑問があったり、方法に問題があって却下されてしまう。唸りながら前方に視線を向けた時、砦のようなアーレクラワの街が朔耶の目に止まった。

『そうだ！　街の人が手伝ってくれれば』

ルティレイフィアの話によれば、アーレクラワの街には相当に実力ある者が多く集まっているらしい。

偏屈者ばかりとの事だが、それならばこそ、危険を顧みず手伝っ

てくれる物好きも居る筈だと推測する。色々と実例が身近に居るだけに、偏屈者に理解がある朔耶だった。

「思いついたら即実行！」

精霊に声を飛ばして貰うよう補佐を受け、朔耶はアーレクラワの街に向けて助けを求めた。捻りも含みも無い純粋な救援要請が、アーレクラワの街中に響く。

『外で魔物の大軍と戦ってます、危ないので助けて下さい』

その声はアーレクラワの街から辺り一帯に響き渡り、じりじりと後退中だった討伐大隊本隊にまで届いた。今正に全軍撤退の指示を出そうかとタイミングを計っていたルティレイフィアは、思わず上空の朔耶を見上げる。

「サクヤ！　なんだ今のは！」

「あ、聞こえた？　ちょっと街の人に助けを求めてみました、てへっ」

「いや……、てへっじゃないだろう」

確かにアーレクラワに居る戦士達が参戦してくれれば心強い所ではあるものの、交渉もへったくれも無い直球な救援要請はどうかと思うと呆れ半分、今ので撤退指示が出し難くなったと焦り半分のルティレイフィアだったが、街の門が開くのを見て目を瞠った。

武装した乗用犬に跨るアーレクラワの戦士達十数人が開かれた門から飛び出し、投石を行っていた魔物の後方部隊を急襲したのだ。

魔物の間を走り回って翻弄しながら鎖で編まれた丈夫な網を打ち、搦めて動きを封じ込める。

「彼等が、動いた？」

「ルティ！　あたしちょっと行ってくるからっ！」

投石が止んだ事で自由に動けるようになった朔耶は、急いで味方後方部隊の救援に向かう事にした。

フューリ達聖騎士団にも魔物との戦闘経験はあるし、ブラットの傭兵団やアンバッス率いる精鋭部隊がいるとはいえ、先程の竜籠には少なくとも六体近くの魔物が乗っていた。

王都の襲撃事件では完全武装の騎士達が包囲していてさえ、二体の魔物に連係されると突破されてしまう事があった。統率された魔物が六体、篭手も封じられている状態ではかなり厳しい。非戦闘員の乗る馬車が襲われれば、それこそ一溜まりも無い。

非戦闘員の乗る馬車の周囲では、従軍使用人と聖騎士団が前線から運ばれて来た怪我人の治癒に当たっており、彼女等を守る精鋭部隊と援護に駆けつけて来たパーシバル傭兵団が、其々臨戦態勢を維持した状態で上空の攻防を見上げていた。

魔物を乗せた魔族側の竜籠は、フレグンス側の竜籠を引く竜の妨害にあって着陸出来ないでいた。口元の少し欠けた鱗が特徴的な若い竜が、魔物を運んで来た竜達の進路を塞ぐように飛び回り、竜籠の降下を防いでいる。

「竜の空中戦なんて初めて見たぜ」
「まあ、昔のような竜騎兵も前大戦以降は見なくなったからな」

只でさえ育成に時間が掛かる上に数も少ない竜は、更に調教や訓練が難しくなる騎兵として使うよりも、運搬用の足として使う方が有益であるとされてからは、戦闘に使われる事は殆ど無い。

そうして或る意味、飼いならされた竜籠の竜達にも野生の獰猛さは無く、後方部隊の上空で繰り広げられる竜同士の戦闘も、鋭い牙や爪を使って噛み付いたり引っ掻いたりというような肉弾戦は見られず、体当たりしたり、相手の揚力を乱して飛行を阻害する程度のものだった。それでも巨大な体躯の竜が咆哮を上げながら激突する姿は凄まじい迫力があった。

「ギュオオオオオオ！」（翻訳：どけ小僧っ　邪魔すんな！）
「グォオオオオッ！」（翻訳：降りらんねーだろーが！）
「シャアアアアア！」（翻訳：こっちくんなっ　持って帰れ！）

「ピーちゃん！」
「シャアア……ピ？」

そこへ飛び込んで来る青白色の翼を広げた『精霊と重なる者』。魔族側の竜達は先程『なんだか途轍もない力を持った存在』の頭上を飛び越える時に感じた畏怖に鱗を逆立てる。激しく揺れ捲っている籠の中で、統率されている魔物達は大人しく座っていた。

魔族側の竜籠を足止めをした竜（ピーちゃん）にいい子いい子と鼻の上を擦ってやりながら、朔耶は竜籠の魔物に呪い祓いを掛けた。大人しく座っていた魔物達は呪い祓いの光にもがき始めると、やがて籠の中で重

なり合うように倒れた。

「……全然元に戻らない」

ジョウタイノ　アンテイシタモノバカリ　アツメラレタノカモ　シレヌ

今回、色々と対策が施されていた事を考えれば、それもあり得るかと頷く朔耶。取り合えず、籠を地上に下ろしてブラット達に魔物の処理をお願いした。朔耶の心情を考慮するブラット達は、淡々と処理を進めていく。

魔族側の竜達は籠が空になると、仕事は終わったとばかりに飛び去ろうとしたが、今後の事も考えれば鹵獲して置いた方が良いという事で、朔耶はその竜達に意識の糸を絡めて足止めする。

「ギュオーギュオー」

「グゥルルルル」

『ここに居て』

「ギュ……」

「グゥ……」

本能で逆らってはイケナイと悟らせる程の魔力を放出しながら威嚇する朔耶に、竜達は快く留まる事を受け入れた。以前、カンタクルとカースティア間の上空でサムズの竜籠を分捕った時と同じ方法だが、此方の対策は練られていなかったようだ。

「よしっ　じゃあ次は急いで本隊の援護に回らなきゃ」

前線ではアーレクラワからの援軍（あらて）に対応すべく二手に別れた魔物部隊が攻撃態勢に入った事で、討伐大隊も迎撃態勢に移行した。パーシバル傭兵団が抜けた穴はルティレイフィア遊撃隊と部族戦士の部隊が帝国騎士団の一部にも身体強化の術を施す事で補う。

魔物部隊は前衛中央の三部隊をそのままに、後方アーレクラワの部隊に右翼の二部隊を、前方の討伐大隊へ左翼の二部隊を差し向けて攻撃を開始。アーレクラワの部隊は乗用犬の機動力で縦横無尽に走り回って魔物部隊を翻弄し続けた。

「敵中央部隊の動きに注意せよ！　サクヤが戻り次第、我々も打って出る！」

約三十体の魔物部隊を迎え撃つべく、身体強化の術を受けた帝国騎士団を壁役に、魔術団も足止めの氷結魔術を準備する。そこへ、後方部隊の救援に向かっていた朔耶が戻って来た。

「ルティ！」
「戻ったかサクヤ。今、魔物部隊が此方に向かっている所だ」

魔導砲を警戒してか、疎らに間隔を空けて隊列を崩した状態で突撃してくる魔物部隊。統率種を倒さなくては、魔術で牽制して一所に誘導、密集させる事は難しいだろう。

「やれるか？」
「大丈夫、行って来る！」

取り囲むように広がって押し寄せる魔物の群に、低空飛行で翼を輝かせて突進していく朔耶。その後を追走する討伐大隊。先頭の魔

物が呪い祓いの届く範囲内に入るタイミングで光を投射する。途端、体勢を崩してバタバタと倒れる魔物達。

二十体程が呪い祓いの光に倒れた所で、魔物部隊の中央本隊はスンカ山方面へと撤退を始めた。アーレクラワの部隊に翻弄されていた部隊も、本隊に合流してゾロゾロと移動を始める。

鎖の網に搦め捕られた魔物は暫らくジタバタしていたが、飛んで来た朔耶の呪い祓いで鎮められた。その魔物達の中にも人間の姿に戻った者は居ない。

『……やっぱり戻らないね。もう皆、一定期間過ぎちゃったのかな……？』

カモ　シレヌ　イタシカタ　アルマイ

こうして、アーレクラワでの戦闘は魔物部隊の撤退によって昼過ぎに終了した。アーレクラワの街から救援に駆けつけてくれた戦士達は、撤退していく魔物部隊に勝ち鬨をあげると、さっさと街へ戻ってしまった。

「まったく、連中は相変わらずだな。礼を言う間さえ与えんとは」

「あはは……。取り合えず、あたしからお礼言っとくよ」

朔耶は精霊の補佐でアーレクラワの街中に声を飛ばして貰い、顔も名前も分からない戦士達にお礼の言葉を送った。

『ありがとー、助かったよ』

「……救援要請の時もそうだが、その趣も潤色も無い対し方はどうかと思うのだが……」
「そう？　ああいう人達には下手に気取ったり飾ったりしない方がいいと思うよ？」
「そ、そうなのか？」

『誘い方が間違っていたのだろうか……？』等と呟いて昔の事で悩み始めるルティレイフィアを本隊に追いついて来た馬車に乗せ、アーサリム解放軍、魔族討伐大隊はアーレクラワの街へと入った。

98話：決戦前夜

堅牢な要塞を思わせるアーレクラワの街。この街も防壁はやたらと立派な造りになっているが、建物はササやポルモーンと同じく、あまり外観に拘らないような、逆に拘っているような、形の崩れた石造りの低い建物が雑然と並んでいる。

街に入った討伐大隊は街を管理する代表者と話しながら適当に開けた場所を確保すると、そこを陣地にして荷物を運び込む。

「ところで、サクヤは何時まで滞在出来るのだ？　元の世界での務めがあると聞いているが」

「務めっていうか、学校がね」

アーサリム解放軍の拠点が築かれる中、朔耶は明日までは一日中此方に居られると話す。明日以降の数日間は、夕方からならば来訪も可能だ。ルティレイフィアは朔耶の滞在可能期間も考慮して進軍作戦を練っていった。

援軍を呼び寄せ、腰を据えて攻略するという手もあるが、やはり本国から遠く離れた辺境の地で大勢の兵達を養いながら長期間の作戦行動を続けるのは無理があると判断した。

今は帝国兵や地元の部族戦士達とも上手く連係出来ているが、大軍を運用するとなれば命令系統の面にも問題が出て来る。

現状、討伐大隊の中では身分的に最上位の王族であるルティレイ

フィアが自然に全軍の指揮を執っている形になってはいるが、これも正式に就任している訳ではない。

今日の戦闘でも撤退すべきかという判断の折、帝国の指揮官と意見を違えた際に説得と多数決という手法で方針が決められた。一刻を争う戦場にあって、指揮を執る者の指令が絶対的な権威を持たないのは或る意味危険だ。

『アーサリム国』の魔族組織討伐に『協力』するという形で『帝国と連係』している以上、フレグンスと帝国のどちらかが突出した戦力を持って魔族組織を制圧する事も、後々アーサリムでの資源採掘権交渉に響いて来る為、望ましくない。

そういった意味でも、現状の討伐大隊内での戦力はルティレイフィアを総指揮官としている事を含めて理想的なバランスだった。

「この戦力で行くなら、やはり速攻か」

魔族組織側のサクヤ式対策や朔耶の動きを封じる戦術は中々に侮れない。今回はその斜め上を行ったともいえる朔耶の行動で予想外のアーレクラワ部隊参戦により、朔耶封じを破られた魔族軍は撤退に追い込まれた訳だが。

「……サクヤ式が有効なのは兎も角として、サクヤ自身が一番有効なのか……？」

朔耶の精霊の力というよりも、朔耶自身の行動や発想がアーレクラワ部隊の参戦を呼び、勝利を招き寄せた。朔耶の在り方こそが、朔耶最大の武器なのかもしれないと、ルティレイフィアは鹵獲した竜と戯れている小柄な黒髪の少女を見詰める。

「じゃあねー、あんたはギューくん、そっちはグゥーちゃんね」

「ギュ……？」
「グゥ……」
込み入った思考で難しい事を考えながら向けられた視線の先では、朔耶がとても簡単な生き方を披露していた。

対戦女神用体内呪文の最終調整を行いながらアーレクラワでの戦闘結果報告を聞いていたヨールテスは、テーブルの上に魔力の結晶を置くと、徐に手を翳して結晶から魔力を吸い取り、体内呪文の具合を確かめる。
「うむ、悪くない。　……アーレクラワから援軍が出たのは予想外だったな」
「はい、更に今回の戦闘では竜籠を一台、竜二頭を鹵獲されてしまいましたが……」
「なあに、竜籠の一台や二台では輸送量もしれている。例の作戦準備を進めておけ、奴等は直ぐに動くぞ」
「畏まりました」

研究室を出ようとしたキルトは扉の前で立ち止まると、少し逡巡するようにヨールテスを振り返る。ヨールテスは魔力の結晶から吸い取った魔力を循環させて放出する動作のテストを繰り返していたが、キルトの視線に気付くと軽く笑みを零して手招きする。
実験用の台座から降りたヨールテスは、嬉しそうに駆け寄って来たキルトを抱きとめた。

「そういえば、暫らく摂取もしていなかったな」
「はい……」
期待の眼差しで潤んだ瞳を向けて来るキルトの首筋に齧り付き、ヨールテスは暫らくぶりの食事を楽しむのだった。

「ここにいたのか、サクヤ」
「ルティ」
アーレクラワの街を囲む防壁の上に座り込み、スンカ山方面の夜空を眺めていた朔耶はルティレイフィアに声を掛けられて振り返る。街の夜景は、アーサリム解放軍の陣地周辺だけが拠点構築作業の篝火でやけに明るい。

「明日にもスンカ山麓に向けて出発する事になった、街からも義勇軍が出るそうだ」
「そう……」
ここからスンカ山までは馬車で一日ほど掛かる距離だが、朔耶の『広範囲風の加護』を使えば半日で到着出来るだろうと、ルティレイフィアは予測する。

「途中で今日撤退した魔物部隊に遭遇するかもしれないがな」
「……それって、何処かで隠れてやり過ごして、部隊が麓に付いた

ら後ろから急襲して来たりとかは？」

何気無く口にした朔耶だったが、ルティレイフィアは中々に鋭い視点だと感心した。既に戦術をとって来る相手だと認識しているので警戒するに越したことは無いと頷く。

「ねえ、ルティ……呪い祓いで人間に戻れる魔物って、もう居ないのかな？」

「ふむ……その事か。……これは、わたし個人の推測に過ぎんのだが……」

「いいよ、ルティの推測って魔物の事でも当たってたし」

あくまでも推測に過ぎないがと前置きするルティレイフィアに、朔耶は続きを促した。

ルティレイフィアの話によると、フレグンスの先発隊や帝国の遠征部隊がササの街に入って暫らくした頃に、ポルモーンで大規模な人攫いがあったという。時期的にみて、魔族組織側が戦力を補強する為に急遽、攫って行ったのでは無いかと考えられる。

朔耶は帝都の城でバルティアに武器の開発を頼まれた時、アネットがそれらしい内容を口にしていた事を思い出した。

「先日の戦闘で呪い祓いにより人間に戻った者が、やはり当時ポルモーンから攫われた者であった事も分かっている」

彼が攫われてから魔物にされるまでの期間、それらを考慮すると、まだこの先出て来るであろう魔物の中には、呪い祓いで元の姿に戻れる者も居る筈だと、ルティレイフィアは自分の推測による結論を述べる。

今回の戦闘で一体も元に戻らなかったのは偶々か、或いは精霊の

言うように何らかの対策として故意に安定したモノが集められたのかは分からない。状態の安定した魔物なら、呪い祓いの効果によって戦闘不能になる事は無いと踏んだのかもしれない。

「人間に戻って救出された者から、魔族組織の本拠地について情報が漏れる事を恐れたのかもしれんしな」

「うーん、なるほどー」

朔耶はルティレイフィアの推測と示された可能性の数々に、腕組みしながら納得した。

翌朝――

アークラワ義勇軍部隊を加えたアーサリム解放軍魔族討伐大隊は、スンカ山の麓に向けて出発した。街には怪我人の他、拠点を構築する工兵と数人の騎士や連絡係りの密偵を残している。

帝国騎士団、帝国魔術団、フレグンス騎士団、ルティレイフィア遊撃隊、パーシバル傭兵団、アーサリム部族戦士、フューリ聖騎士団、アンバッス精鋭部隊は其々馬車に乗り込み、従軍使用人達は竜籠で移動。

十台の馬車と二台の竜籠は、乗用犬を駆るアーレクラワ部隊に道中を先導して貰う事になっていた。

「風の加護、行きまーす」

空に上がった朔耶が地上を行く全軍を対象にした広範囲の風の加護を行い、機動力を底上げする。これにより、通常馬車で一日掛かる距離を半日で走破する。平地が続くアーレクラワの地形も、この高速移動作戦において有利に働いた。

見張り役を乗せた一頭立て竜籠（ピーちゃん）が先行しながら、主に討伐大隊の進路上に伏兵が居ないか警戒する中、朔耶は周辺を大きく旋回して何処かに魔物部隊が隠れていないか探って回った。

『いないね』

フモトニ　ツイテイルノヤモ　シレヌ

昨日の撤退から夜通し移動を続けていた場合、スンカ山の麓に着いていてもおかしくない。魔物部隊ならそれくらいやりそうだと、朔耶は見通しの良いアーレクラワの平地を遠くまで眺める。

地平線の先には、薄っすらと霞みかかったスンカ山の全景が見えていた。

「痕跡からして今朝あたりに付けられた足跡だろう、この規模ならアーレクラワから撤退した部隊かもしれん」

昼過ぎにスンカ山の麓に到着した討伐大隊は、さっそく陣地の構築に入った。その際、周囲を探索していた部隊が麓を少し入った辺りに残る無数の魔物の足跡を発見したのだ。

アーレクラワの平地は岩の混じった非常に硬い地面で出来ている。馬車等が何度も同じ場所を通る事で少しずつその痕跡が残るのだが、

スンカ山の麓に近付くにつれて人狩りの馬車によるモノと思われる車輪痕が次第に増えていった。

麓から中腹層に向かう道は或る程度整地されていて、周辺に広がる未整地の平地よりも若干地質が柔らかく、痕跡も残り易い。古い車輪痕に混じった新しい魔物の大きな足跡はよく目立っていた。

陣地が構築されている間、朔耶は大きく空へ上昇すると、麓から魔族の本拠地がある中腹までの道程を見下ろした。山道らしく多少の曲がりくねった感はあるが、大して険しい勾配(こうばい)でもなく結構広々とした道が長く続いている。

恐らくは頻繁に出入りしていた人狩りの大型馬車に合わせて、道幅も広めに整地してあるのだろうとブラット達が話していた。明日からは麓に構築した陣地を拠点に、中腹にある魔族組織の本拠地を目指すことになる。

精霊の視点で見た魔族組織の施設が中腹の岩陰にちらりと見えているが、魔族組織の問題もこのスンカ山に絡む精霊石鉱山の事も、国家の利権に関わる問題なので、ここからは特に慎重に行動しなくてはならない。

ちょっと偵察に近付いてみようかと思う朔耶だったが、施設の前に立つ人影を見つけて凝視する。

『あれって……、ヨールテス！』

チュウイセヨ　コチラニ　キヅイテオルゾ

互いに表情も分からない程の遠い距離から暫らく見詰め合い、やがてヨールテスは施設の中へ戻って行った。

『なんだろう？　変なプレッシャー感じたんだけど……』
センセンフコクノ　ツモリダッタノヤモ　シレヌ

この日は夕刻まで此方の世界に残り、陣地に集まる討伐大隊の仲間に精霊の癒しを施し捲ったり、拠点構築用の機材にも風の加護を使って運び易くする事で作業を助けたりと、やれるダケの事をして帰還する朔耶だった。

翌日、学校の昼休み――

何時も通り席をくっ付けてお弁当を広げる実穂と藍香は、向こう（オルドリア）の事が気になって朝から落ち着かない様子の朔耶に、『早退するという手もあるよ』と勧める。

だが、朔耶は『此方の世界で普通の学生をやる事も、向こうで戦う事と同じくらい大事なコト』だと考える。きちんと学校に通う事も、両親と約束した異世界渡りの条件でもあった。これはケジメである。

朔耶は実穂と藍香にこの前の問題は片付いた事を話し、今はアーサリムの奥地で戦いが進行中である事も話しておいた。お弁当を囲んで顔を付き合わせながらヒソヒソ声でオルドリアの現状について

大まかに説明する。

よしんば人に聞かれても、昼休みの教室でクラスメイトの女子がファンタジーな言葉を口にしていたとして、小説やゲームの話でもしているのだろうと気にも留められないであろうが、そういう話題に興味を持つ子が居たりすると色々面倒な事にもなり兼ねない。

「魔物にされた人を元に戻せるのは、朔耶ちゃんだけなの？」

「今の所はね、呪い祓いも普通はそこまで効果は出ないんだってさ」

自分が此方に居る間に戦闘が起きて、大勢の助けられたかもしれない魔物化の被害者達が魔物として処理されてしまう事を考えると、やはり気になってしまうのだと溜め息を吐く朔耶に、藍香がウィンナーを齧りながらポツリと一言呟いた。

「朔ちゃんが幾ら無敵でも、全部思い通りにいく訳じゃないんだね……」

学校を終えて帰宅した朔耶は着替えもそこそこに庭の円に入ると、アーサリムのアーレクラワ地方スンカ山の麓付近へと転移した。昨日の夕方頃、柵と柱が何本か立っている程度だった陣地には、それっぽい建物が出来ていて拠点らしくなっていた。

竜の厩舎と乗用犬の厩舎も用意され、其々の寝座（ねぐら）から頭を出して係りの人に餌肉を貰っている光景は、ここが戦場の最前線である事を忘れてしまうほど長閑（のどか）な雰囲気を醸し出している。

「アンバッスさん発見」
「ん？　サクヤか、来るのは数日先じゃなかったのか？」
「夕方からなら毎日来られるよ？　朝から居られるのはまた四日後からだけどね」

制服姿の朔耶を見て『王都の学院生のようだ』と感想を述べるアンバッスに、『学生やってますから』などと答える朔耶。最前線の陣地にて現在の戦況を訊ねる異世界の『学生』に、アンバッスは苦笑しながら昨日からの状況を掻い摘んで報告する。

それによると、今のところ魔族組織側に目立った動きは無く、襲撃して来る気配も無いのは戦力を纏めているのではないかとの事。ちょくちょく偵察らしき飛行種が上空に現れるという。

「山道での戦いは、恐らく総力戦になるだろうな」

日が暮れて真っ暗な山肌を見せるスンカ山の中腹に、幾つもの篝火が揺れている。
アンバッスはそれを見上げながら、魔族組織側も戦いの準備に余念が無いのだろうと語った。朔耶はそんなアンバッスの傍らで同じように篝火を見上げながら、昨日、上空から見たヨールテスの姿を思い出していた。

「……」

99話：最終決戦へ

朔耶がヤキモキした気持ちで学校に通っている間、スンカ山の麓に集結するアーサリム解放軍魔族討伐大隊は、魔族組織との決戦に向けて最終的な部隊編成も終え、いよいよ出発の時を迎えていた。

「サクヤ殿は今日も夕方から来訪されるのでしょうか？」

「そう聞いている。が、サクヤに頼ってばかりではいられんぞ」

部下の質問に答えるルティレイフィアは、先日の戦闘で魔族組織側が講じて来たサクヤ式対策や、朔耶の動きを封じる策に対抗する手立てを早急に確立すべきだと説く。『魔族の討伐隊』が朔耶の足枷になっているようでは話にならない。

「今回は山道の狭い地形が有利に働くかもしれんな……」

スンカ山の標高は約三千メートル、中腹まで徒歩で登った場合、朝方出発して昼前には着ける程度の行程だ。馬車を使えばもっと早いのだが、魔物部隊の襲撃に備えながらの進軍となるので、アーレクラワ部隊の乗用犬と竜籠以外の乗り物は基本的に使えない。

乗用犬を駆るアーレクラワ部隊を斥候として先行させると、竜籠には帝国魔術団を乗せ、鹵獲した竜籠も使って上空からの支援をさせる。拠点となる陣地にはフューリ聖騎士団と従軍使用人、帝国の

工兵や密偵の他、護衛にアンバッス精鋭部隊を残して行く。
彼等は本隊の戦闘が開始されてから状況に応じて動く事になる。

「よし、行くか。　出撃だっ　全軍前進！」

ルティレイフィアの号令の元、討伐大隊はスンカ山の中腹にある魔族組織の本拠地施設を目指して進軍を開始した。

「麓の部隊が動き出しました」
「来たか、戦女神の姿は？」
「昨日の夕方以降、確認出来ていません」
「ふむ……また来訪の周期が変わったのかもしれんな」

一部研究員と使用人達を山の北側から竜籠で退避させるよう指示を出したヨールテスは、予定通り敵軍を本拠地施設に続く道の中間辺りで迎え撃つ準備に入った。戦女神が居る場合に出す部隊を通常部隊の後方に置いて、直ぐに入れ替えが出来るよう配置する。

前回の戦いでは広い平地に一体毎の隙間をあけて疎らに配置する事で魔導砲の脅威を軽減出来たが、今回はその手が使えない。迂闊に正面で固まると一網打尽にされてしまう為、機動力を生かした攪乱と遠距離からの投石による攻撃が中心となる。

「さて……、では一当てやるとしよう」

アーサリム解放軍の戦術方針と戦女神来訪の有無を確かめに、ヨールテスは斥候部隊を出撃させた。本拠地施設前では凡そ百五十体

の魔物で編成された迎撃部隊本隊と、対戦女神用特殊攻撃部隊百十体がずらりと整列して出撃の時を待っている。
統率種によって統制される魔物達は一切の無駄な動きをせず、まるで人形のように静かに佇んでいた。

互いの斥候が軽く牽制を交えつつ戦力の探り合いをしながら距離を縮めていった討伐大隊と魔物部隊は、太陽が真上に差し掛かる頃に標高８００メートルの地点で遭遇、遂に本隊同士の戦闘が開始された。

討伐大隊は部族戦士から身体強化の術を受けた帝国騎士団が魔導砲分隊を守りつつ前進、その間上空から帝国魔術団による支援を行い、地上ではアーレクラワ部隊が魔物部隊を攪乱して魔導砲分隊が有効射程内まで迫れるよう援護する。

魔物部隊は討伐大隊を確認すると遠距離からの投石攻撃を始めた。討伐大隊の主力となる帝国騎士団は、部族戦士の身体強化の術と魔導砲の火力、上空からの魔術支援によって攻撃力と防御力を底上げしながら魔物部隊との正面決戦に挑む。

しかし、魔物部隊は接近戦を避けて少しづつ後退しながら投石による攻撃を続けていた。時折小隊を出しては討伐大隊の背後に回り込ませようと仕掛けてくるも、パーシバル傭兵団とルティレイフィア遊撃隊が機動力にモノを言わせて撃退している。

ちなみにルティレイフィアは討伐大隊の本隊とするフレグンス騎士団の中で全軍の指揮を執っているので、遊撃隊はヴィンスが指揮

を執り、ヴィンス傭兵騎士団のメンバーに部族戦士を二人程加えた体制で動いていた。

投石攻撃は遮蔽物の多さと身軽さ、相手部隊との距離の近さによってアーレクラワでの戦闘時のような状態にはならなかったが、放物線を描いて飛んでくる飛礫は割りと簡単に躱せるものの、正面から直接投げ付けられる飛礫は一撃で帝国騎士の盾を破損させる。

その為、上空からの魔術による支援は主に魔物部隊の前列にいる魔物が飛礫を投げられない様、投石体勢に入った魔物に集中攻撃を浴びせるという内容になっていた。

「魔物部隊後方より敵、竜籠接近！」
「後方に注意！　降下してくるぞ！」

「飛行種の飛来確認！　何か持っているようです」
「！っ　あれは火炎樽だっ　近寄らせるな、撃ち落とせ！」

魔族組織（ヨールテス）側は竜籠を使って魔物部隊を討伐大隊の背後に降下させたり、飛行種を使って火炎魔術を発現させる触媒を詰めた樽で爆撃する等、多彩な戦力を持つ討伐大隊を多彩な戦術を駆使する事で翻弄する。

強行着陸した竜籠には遊撃隊のヴィンス達から身体強化の術を受けたパーシバル傭兵団が急行し、卓越した篭手捌きで乗っている魔物の動きを止めると、次いで籠を壊す事で相手の持ち札を潰していく。

あと何台保有しているのかは分からないが、着実に損害としてダメージになって行く筈である。籠を壊されてバランスが悪くなり、

飛び難くなった竜達が迷惑そうに一吠えして飛び去って行った。基本的に竜籠の竜は戦闘には参加しない。

火炎樽の直撃を受けた騎士が爆風で岩に叩きつけられ、炎に巻かれた者が転げまわり、魔術に撃墜された飛行種が抱えていた火炎樽諸共吹き飛び、火達磨になって墜落していく。山道の戦いは互いに一進一退の攻防が続いていた。

「負傷者が増えている、聖騎士団に出動要請を出せ！」
「帝国騎士団から報告！　魔導砲の弾数、残り僅か！」
「空撃ちが目立つ、牽制での使用を控えるように伝えろ！　ティルファからの補充はまだか帝国の密偵にも確認をとれ！」

戦闘開始から約五時間、空が暗くなり始めた頃、拮抗していた両軍の戦いは突然魔族組織側が崩れ始めた事で大きな転機を迎えた。朔耶の登場である。呪い祓いの光によって最前列の魔物が次々と戦闘不能になると、後続の魔物達は撤退を始めた。

「サクヤ殿が光臨なされたぞ！」
「負傷者復帰の準備を！」

魔物部隊の撤退に合わせて討伐大隊も崩れた戦列を立て直し、負傷して下がった者の復帰に備えて部隊の編成を整える。朔耶の来訪を期待して重傷者も拠点に戻さず現場で凌がせていたので、朔耶には早急な精霊の癒しが求められた。

「良く来てくれたサクヤ！　早々ですまんが大至急、負傷者の癒しを頼む！」

「わかった！」

死屍累々の戦闘現場に怯む間もなく、ルティレイフィアに指示を貰った朔耶はフューリ聖騎士団とアンバッス精鋭部隊が護る負傷者を集めた一角に飛ぶと、精霊の癒しを行った。強力な癒しの光が、傷ついた戦士達を癒して行く。

その光景にようやく一息吐けそうだと緊張を解した討伐大隊の兵士達は、見張り役が発した警告に凍りついた。

「撤退中の魔物部隊後方から新たな魔物部隊接近中！」

「なんだとっ！」

先程まで戦っていた魔物部隊と同規模の部隊が向かっていると聞き、流石に動揺を隠せないルティレイフィアは一頭立て竜籠を呼んで空に上がり、上空からその姿を確認した。

ルティレイフィアの視線の先で、長時間の戦闘による疲労の為か、若干動きにも鈍りが見受けられる撤退中の魔物部隊と、入れ違いに現れた新たな魔物部隊が丁度擦れ違った所だった。

見れば、新たな魔物部隊は篭手封じの棘兜を装備しておらず、統率種の姿も二体ほどしか確認出来ない。統率種が少ない事で統制が取れていないのか、全体の動きも乱れがちで、辛うじて纏まった行動をしているといった雰囲気だった。

負傷者を癒し終えた朔耶は光の翼を出して空に上がると、竜籠のルティレイフィアに並ぶ。ちなみに今日も制服姿である。

「新手？」

「ああ、だが動きもバラバラで装備も施されていない。時間稼ぎの捨て駒かもしれん」

それでも無傷の魔物部隊は今まで通しで戦闘を続けて来た討伐大隊にとって十分に脅威である。投石や飛行種への迎撃行動で多少の傷を負っている竜（ピーちゃん）に癒しの光を与えていた朔耶は、とりあえず新たな魔物部隊に向かって飛んだ。

突撃というよりも雪崩れ込むといった具合で討伐大隊に向かって突進してくる魔物部隊の、正面上空から呪い祓いの光を放つ朔耶。光を浴びた魔物は突進の勢いそのまま暫らく走り続けたが、やがてバタバタと倒れていく。そして――

「！っ　人間に戻った！」

倒れた魔物達は次々と人間の姿に戻っていく。この魔物部隊は状態の安定していない比較的新しい魔物ばかりで構成されていた。

人間に戻った人々が後から後から押し寄せる後続の魔物に踏み潰されないよう、朔耶は魔物部隊の頭上を部隊後方へと飛びながら呪い祓いの光を浴びせていった。聖騎士団や他の部隊の手の空いている者達も、人間に戻った生還者の介抱と救出に動く。

「……これは、どういう事だ」

ルティレイフィアは救出される大勢の生還者達に戸惑いを覚えつつも、彼等を街へ輸送する為に拠点から馬車を呼ぶよう指示を出した。だが、直ぐにこの事態が敵の策である事を悟る。

新手の魔物部隊の魔物は一人残らず呪い祓いの光で人間に戻った。

その数百十人。ヨールテスの作戦は、元に戻った者を抱えさせる事で戦力の分散と足止めを狙ったのだ。
多くの生還者をアーレクラワの街へ運ばなくてはならなくなったアーサリム解放軍は、狙い通り足止めを喰らってしまう。

随行する使用人達も含めて御者役と介抱役、最低限の護衛を入れると全軍の半数近い人員が割かれてしまう上に、十台の馬車全てを使っても一度では運びきれるかどうかという人数。

このまま足止め状態で夜を迎えれば、夜目の利く魔物部隊は有利になる。暗闇の中、遠距離から投石攻撃をされれば、アーレクラワ戦の二の舞である。

一旦麓の拠点まで退き、複数回に分けて運ぼうという意見も出たが、拠点が襲撃を受ければそれこそ一溜まりも無い。火炎樽の攻撃による火災も然る事ながら、大勢の生還者を抱えた状態で包囲されて兵糧攻めにされれば、三日と持たずに自壊してしまうだろう。
よって、拠点への撤退は却下。しかし、生還者を抱えたままでは満足に戦えない。

「……生還者さえ居――」

呟きかけたヴィンスにブラットが鋭い視線を向けた瞬間、ドオォン！　という何かを叩くような大きな音が響いた。
刻一刻と夜の闇が近付く中、大量の生還者の存在で身動きの取れない事に焦りを募らせた彼（ヴィンス）は、うっかり『口にしてはイケナイ事』を呟き掛けるも、それを遮るような音が鳴り響いた事でヴィンスの呟きは最後まで紡がれる事無く掻き消された。
全員が音のした方に注意を向けると、アンバッスが馬車の木枠に叩き付けた拳を再度握って、鼓舞するかのように訴えかける。

「敵の策ならば迅速に手を打って対処すべきだろう、とにかく少しでも多くの生還者を一刻も早く街へ移送する事が先決だ」

『生還者の存在が自軍を窮地に立たせている』というような事を口にすれば、即ちそれを招いた朔耶の糾弾と取られ、そのつもりが無くとも、朔耶が味方を窮地に立たせたかのような意味合いになる。それは朔耶の進める生還者救出の否定にも繋がってしまう。

ポルモーンの民である彼等を見捨てる事は絶対に出来ない。例え全員を救う事が出来なくとも、彼等を救おうとした事実が必要であった。今でさえササとポルモーン、二つの地方に住む部族の間には根深い対立がある状態なのだ。

この上ササの部族戦士と『共闘』している討伐大隊がポルモーンの民である彼等(せいかんしゃ)を見捨てた場合、アーサリムの内情においてササ方面の部族と、ポルモーン方面の部族との確執が決定的になってしまい、確実に内戦の火種となる。

更にはフレグンスの王族であるルティレイフィアの私兵として、腹心的な立場に在る者がポルモーンの民を邪魔にするような発言を行う事も問題だ。ヴィンスは危ういところで失言を止めてくれたアンバッスに感謝しつつ、自身の未熟を恥じた。

しかしながら、討伐大隊は絶対に捨て置けない生還者を抱え、進軍は難しくこの場に留まるのは時間の経過と共に危険が増し、一時撤退する事も簡単にはいかない切迫した状況にあった。

「現状で運べる人数は？」

「ハッ　同行する人員を一台に付き三人まで削った場合凡そ八十人、

竜籠も使えばなんとか全員運べそうですが……」

「今竜籠を本隊から外す事は出来ん……」

護衛に乗用犬を使えるアーレクラワの部隊をつけるとして、残った生還者を拠点に一時収容した場合、拠点の防衛と管理にも人員を割く事になるので、戦闘に参加出来る兵力は三分の二程度にまで減ってしまう。

現状でギリギリの戦いだったのだ。敵を攪乱出来るアーレクラワ部隊と基本兵力を欠いた状態で、魔物部隊相手に何処まで戦えるか怪しい。オマケに馬車を全て使うという事は、本隊の撤退手段も無くなるという事だ。

「どうにもイカンな……サクヤ？」

してやられた事に口惜しくも手詰まりを感じていたルティレイフィアは、先程から何事か考え込んでいる朔耶に声を掛ける。唇に指を当てながら一人頷いていた朔耶は、考え事をしている人間独特の鋭い視線を上げると、ルティレイフィアに一つ提案を出した。

「とりあえず、みんな一度拠点まで下りて？　あたしはちょっと行ってくる」

『何処へ？』と訊ねるルティレイフィアに、朔耶は『直ぐ戻るから』と言って姿を消した。

この切迫した状況の中で、朔耶が突然消え失せてしまった事に動揺する者もいたが、ルティレイフィアは『戦女神に策あり』と皆を励まして全軍に拠点までの撤退命令を出すのだった。

「頼むぞ、サクヤ……」

「お兄ちゃん！　いる？」

庭に帰還するなり家の中に飛び込み、自分の部屋まで走りながら叫ぶ朔耶。何事かと部屋から顔を出した兄を捕まえると、携帯を持って友人の番号に電話を掛ける。兄には車の用意をするよう頼んで玄関に向かわせ、自分も呼び出し音を聞きながら後を追う。

『もしもしー？　朔耶ちゃん？』

「あ、実穂？　大至急お願いがあるんだけどっ！　今からそっち行ってもいい？　イイよね？　いいに決めたっ」

珍しく慌てている朔耶の剣幕に驚きつつ、微妙に藍香分が入っている事に苦笑しつつ、実穂は朔耶のお願いを訊ねる。

『いいけど、どうしたのぉ？』

「実穂の家のバス貸してっ！」

川岸家（みほのいえ）まで兄の車に揺られながら、朔耶は大方の事情を話して実穂に協力を頼んだ。先日、朔耶に異世界（オルドリア）の事を打ち明けられてから、一月も経たない内にオルドリア関係の事で協力を要請された実穂は『流石は朔耶ちゃん』と朔耶の即行と発想の柔軟性に感嘆した。

『いいよぉ、任せといてー。こっちで準備しておくから、ガレージの人払いもしとくね？』

「うん、それでよろしく。運転手はうちのお兄ちゃん連れて行くから」

ちなみに、此処まで兄に詳しい経緯の説明と意思の確認は無い。
朔耶と実穂の会話から状況を推察した兄は、通話を終えて一息吐きながらシートに凭れる朔耶に現場の詳しい情報を求めた。兄は更に柔軟な発想を持ってこの状況と向かい合う。

「なるほどな、その時点で相手の思惑通りと言うわけか」
「何かいい案ある？　あんま期待してないけど」

また『自分を信じろ！』的アドバイスなら聞き流そうと想いつつ、朔耶は兄の言葉に耳を傾けた。

「馬車の準備は整ったのか？」
「ハッ　ですが……生還者の体調が安定しないようでして、聖騎士団が総出で治癒に回っていますが……」
「ふむ……、一台に付き一人の聖騎士では捌き切れんか」
「サクヤ様がいらっしゃれば……」

その時、陣地内の一角からざわめきが上がった。振り返ったルティレイフィアはそこに朔耶の姿を見つけた。山道で消えた時と同じく唐突に現れた朔耶は、手に何か丸い円盤状の物体を持っていた。

朔耶はキョロキョロと辺りを見渡して開けた場所へ移動すると、手招きして呼び寄せたブラットに円盤状の物体から伸びる紐のような物の先端を持たせて後ろ歩きに下がって行く。

円盤状の物体から伸びる平らな紐を地面に置き、ブラットから何

かを受け取ってその場に置くと、枯れ枝を拾って地面にガリガリと線を引き始める。長方形の大きな線を引き終えた朔耶は、一体何だろうと集まって来た討伐大隊の騎士や戦士達に警告を発した。

「みんなこの線の中に入っちゃ駄目よ？　命に関わるからね」
「サクヤ、一体何が始まるのだ？」
「あ、ルティもこの線からこっちに入る人が居ないように見張ってて」

朔耶はそう言って再び唐突に姿を消した。そして――

「うわあああああ！」
「なんだ、これは……っ！」

朔耶が決して入るなと指示した地面の大きな長方形が描かれた場所に、巨大な物体が現れた。その物体は聞いた事も無いような低い奇妙な唸り声を上げており、微妙に振動している事から生き物のようにも感じられた。

「か、怪物か！」
「いや、窓があるぞ……大型の竜籠か何かか？」
「見ろ！　車輪がついてるぞ」
「……俺、聞いた事がある。サクヤ様がカンタクルに車輪をつけた鉄の怪物に乗って現れたって話……」

明るい光を放つ窓が沢山並ぶ鉄の巨体、その胴体の先端部にある扉の様な部分がシューッという音と共に折りたたまれて開かれる。そこから降りて来る朔耶の姿をみて、どうやらこれは巨大な生き物を使った乗り物らしいと、皆は認識した。

「これなら七十人くらい乗せて運べるよ」

三菱フソウ、エアロスターSと呼ばれる大型路線バスである。実穂の邸宅で自家用バスとして使われているモノを借りて来たのだ。運転席には澄ました顔の兄が制帽を被って座っていた。

「飛行種の再配備にはまだ掛かりそうか？」
「はい、調整にもう少し時間が必要です」
「うむ……今なら地上部隊だけでも十分かもしれんな、今の内に奴等の拠点を包囲して置くか」

アーサリム解放軍が生還者と共に麓の拠点まで撤退した報を受け、ヨールテスは今夜中に拠点を攻撃して殲滅するつもりだったのだが、飛行種のダメージが思いの外大きかった為に火炎樽による攻撃が行えず断念。

とりあえずは、逃げられないように包囲を固める戦術に切り替えた。相手の援軍が到着する前に潰しておきたい。そこへ、人形の様に無機質な雰囲気を持った使用人が、無表情のまま緊急の報告を上げに来た。

「報告致します。アーサリム解放軍の部隊が最終防衛網を突破し、本施設への侵入路入り口に到達しました」
「！っ　なんだと！　奴等は撤退した筈では無かったのか！」

ヨールテスがこれほど声を荒げて動揺する姿は、ここ数十年見る事が無かったなと、キルトは普段の表情を崩す事無く事態の成り行きを見守った。意識の調整を施されている使用人達は、淡々と報告を終えると自分の仕事に戻って行くのだった。

「あった！　ここが入り口だよ」
「よしっ　突入するぞ！　皆覚悟は良いなっ」

大型バスを召喚した朔耶は生還者と介抱役、馬車の御者や護衛を含め、聖騎士団と精鋭部隊、帝国騎士団と魔術団の一部、帝国工兵や従軍使用人達を其々バスと五台の馬車に分乗させると、道中の先導をアーレクラワ部隊に任せて街へと送り出した。

拠点陣地に残ったルティレイフィアは討伐大隊の残存戦力である自らの遊撃隊とフレグンス騎士団、帝国騎士団と魔術団の一部、アーサリム部族戦士、パーシバル傭兵団で構成される『強襲突撃中隊』を編成。

残りの馬車と竜籠を使い、朔耶の『広範囲風の加護』の力でスンカ山の中腹層まで一気に駆け登ると、魔族組織の本拠地施設を強襲した。途中、山道を塞いでいたバリケード等は全て朔耶と魔導砲と竜籠の魔術団が吹き飛ばした。
部隊編成以外は兄のアイデアを朔耶が伝えたモノだったりする。

「よもやあのまま進軍して来るとは……」

この段階で本拠地侵入を喫してしまう事は、ヨールテスにとって余りにも予想外の事態だった。

解放軍は生還者を守りながらの戦闘は困難を極めるであろうが、生還者をそのまま放置しておく事は様々な事情からも出来ない筈。街に送る場合は、全ての輸送力を使ってどうにか運べるという数だ。

現地に戦力を置いたまま生還者を乗せた馬車が街へ向かう場合。馬車の護衛が少なければ襲撃して回収した生還者を再利用。護衛が多ければ現地に残った戦力はかなり割かれている筈なので、じっくり包囲して殲滅出来る。

生還者と共に拠点に立て篭もったなら、拠点ごと飛行種による空からの攻撃で一網打尽となる。筈だったのだ。

「……また戦女神（サクヤ）かっ！」

苛立たしげに椅子から立ち上がったヨールテスは、キルトに施設内での迎撃を命じた。

「奴等の本隊を此方に引き付けろ、儂は戦女神を下の階に誘き寄せて挑む」

「畏まりました。ヨールテス様……お気を付けて」

「うむ。しくじるなよ、キルト」

ヨールテスは体内呪文の調子を確かめつつ、腕や顔の一部に仄かな光を放つ呪文を浮かび上がらせながら地下一階の研究棟を後にした。キルトは施設内防衛用の魔物部隊と意識統制された使用人達を指揮下に組み込むと、解放軍が侵入した居住施設へと向かう。

キルトは遠い昔、自分の飼い主だった闇ギルドがヨールテスに滅ぼされた時の事を思い出していた。

「……滅ぶ時は、何時もこんな感じ」

１００話：終焉

大勢の生還者を乗せたアーサリム解放軍の馬車隊と大型路線バスが、街を目指してアーレクラワの大地を疾走する。

街灯などの明かりも無い夜の荒野は比喩無しに真っ暗だ。今夜は少し欠けている程度の月明かりがあって多少の視界は確保できるものの、この暗闇の中を疾走するなど、本来なら危険極まりない行為である。

通常ならばランタンなどの明かりを持って地面を照らしつつ、岩や穴などの障害に気を付けながら人が歩く程のゆっくりした速度で進む所だが、バスに標準装備されている強力なヘッドライトの光は進路の遥か先まで照らし出し、地表の状態を浮かび上がらせる。

お陰で馬車隊は昼間と同じ感覚で速度を落とさず走る事が出来た。最初の内は得体の知れない巨大な車両に怯えていた馬達も、バスの傍にいれば安全であると悟ったらしく、安定して落ち着いた走りを見せている。

全長十メートルを超える巨体に七十人もの人間を乗せて馬よりも早く地上を行く異世界の乗用生物。並走する馬車の乗員や、先導するアーレクラワ部隊、バスに乗っている者達もそんな認識であった。

「朔耶は上手くやってるかな」

「エイ？　ミツィミィノツィラトゥンツィニモツィトカツィノツィ

？」

「いやいや、独り言なんで御気になさらずに」

「エイカァラゥ……？」

運転席に座る重雄（あに）は、隣でポールにしがみ付くようにして座っている豪華なデザインの鎧を纏った金髪碧眼の女性騎士、朔耶に貰った写真で顔は知っていたフューリ聖騎士団長と、通じない言葉のやり取りをした。

困ったような表情を見せるフューリに、重雄（あに）は彼女から『真面目な人』という印象を受け、それが故に気苦労が絶えなさそうな雰囲気を感じた。今も此方の独り言に対して、何かを読み取ろうと一生懸命な様子が窺える。

「し　げ　お」

「スィギィオ？」

重雄（あに）が軽く微笑みながら自身を指して名前を告げると、フューリはそれを復唱する。次いで、フューリを指しながら彼女の名を口にすると、フューリは眼をぱちくりさせて少し驚いた表情を見せた。

フューリと重雄のやり取りは車内の緊張を解し、同乗する生還者や使用人達の間にも穏かな空気が生まれる。疎通の加護も通訳も無しで言葉を交わした、これが異世界人（オルドリア）と日本人の初めての『会話』であった。

「帝国騎士団は魔導砲分隊と共にこの場で待機、居住区の制圧には傭兵団と部族戦士達で当たってくれ。残りはわたしと来い」

魔族組織の本拠地施設内部、入り口付近に当たる開けた空間に出た強襲突撃中隊は、昼間交戦した魔物部隊の迎撃に備えて帝国勢をこの場に待機させると、ルティレイフィアは遊撃隊とフレグンス騎士団を率いて研究施設棟の制圧に向かう。

其々の研究施設棟へ向かう通路は朔耶が夢内異世界旅行で見た限り、中央の通路一本だけなので一棟ずつ制圧して行けば良い。

「！っ　ヨールテス！」

「えっ？」

その中央通路の奥に現れた人影を見て、ルティレイフィアが思わず叫ぶ。その声につられて朔耶も其方に視線を向けると、腕や顔の一部に光る呪文を浮かび上がらせながら猛然と突進して来るヨールテスの姿。

ヨールテスに対してあまり前に出て戦うような印象を持っていなかった朔耶は、意外に感じながらも何か嫌な予感がしたので咄嗟に魔法障壁の出力を上げて護りを固めた。次の瞬間、引っぱられるような感覚と、凄まじい衝撃波が通路を揺らす。

『なに、今のっ！』

ショウヘキニ　ドウキボノショウヘキヲ　ブツケタノダ

同規模の障壁をぶつけて来たという事は、それだけの障壁を生み出せる力を持っているという事である。今の一撃で、朔耶は衝撃の殆どが軽減されてダメージは無かったが、ルティレイフィア達は五

メートルほど後方に弾き飛ばされていた。

障壁をぶつけた勢いを利用して通路の奥に着地したヨールテスが再び突進体勢に入る。朔耶は電撃を浴びせようと意識の糸を伸ばしたが、ヨールテスはニヤリと口の端を上げて哂うと、伸びて来た糸を掴み取るような仕草で自らの手に絡めた。

『！っ』

アヤツ　イトガ　ミエテオル

朔耶が電撃を放つ。するとヨールテスも電撃を放って対抗し、朔耶とヨールテスが対峙する空間に力の拮抗による巨大な雷球が生まれた。膨れ上がった雷球が通路の床や壁に触れた瞬間、爆発するように四散する。

「なんて奴だ……サクヤと同等の力を持っているというのか」

朔耶の魔法障壁に護られ、危うく四散した雷球の破片に焦がされる所だったルティレイフィアは、驚愕の面持ちで二百年の時を生きて来た魔族ヨールテス・デリガン・ブローフリ伯爵を見た。

そこへ、通路沿いにある各部屋の扉が一斉に開いて飛び出して来る武装した使用人達。朔耶が其方に気を取られた隙に、ヨールテスは通路の奥から下の階へと姿を消す。直ぐに臨戦態勢を整えたルティレイフィアは、朔耶にヨールテスを追うよう指示を出した。

「ルティ！」

「奴を追ってくれサクヤ！　口惜しいが我々では歯が立たん」

逡巡の後、頷いた朔耶はルティレイフィア達と対峙する武装使用

人の集団に意識の糸を伸ばし、少しでも数を減らしておこうと電撃を放とうとして気付く。彼女達からは統率種に統制されている魔物とよく似た波動を感じる。

『この人達、操られてる？』

イシキニ　フシゼンナ　ナガレガアル

朔耶は威力控えめの電撃で今確認出来る分の使用人達を気絶させると、ルティレイフィアに彼女達の状態を訴えた。

「分かった、なるべく死者は出さないようにしよう」

「ごめんねっ　無理言って」

『気にするな』と、ルティレイフィア贈られる信頼の微笑みを受け止めながら、朔耶はヨールルテスを追って施設の地下へと降りて行った。それを見送り、表情を引き締めたルティレイフィアはシュベルコーの剣を納めると、ＥＢ（エレメントブレード）を手に取る。

「あの……ルティレイフィア様、ソレをお使いになるのですか？」

「ああ、心配するな。サクヤとの約束だからな、この光の剣は殺生を控えながら相手を制圧する事も出来るのだ」

ルティレイフィアはそう言って、新たに現れた武装使用人の集団に突進すると、駆け抜けながら高速の剣捌きで薙ぎ払った。メイド服を僅かに焦がしてバタバタと倒れ伏す武装使用人達。全員気絶している。

ＥＢは出力を落として一瞬だけ斬り付ける事で、朔耶の電撃と同じ様な効果が得られるのだ。

「使用人達は全てわたしが引き受ける、お前達はアレの相手をしろ」

ヴォンッとＥＢの光刃を一振りして指し示した廊下の向こうに、施設内仕様なのか少し小柄な体躯の魔物が数体現れた。率いているのはキルトだ。施設の外でも戦闘が始まったらしく、帝国騎士達の雄叫びと魔導砲の発射音が響く。

「サクヤが必ずヨールテスを討ち取ってくれる！　それまで持ち堪えるのだ！」

ルティレイフィアの号令の元、魔族組織の本拠地施設でアーサリム解放軍の最後の戦いが始まった。

「ここって……？」

「儂の専用研究室だよ、戦女神」

ガランとした空間の真ん中に立つヨールテスは朔耶の呟きに答えると、身体中に呪文を浮かび上がらせながら突進して行く。朔耶は魔法障壁で防御を固めつつ、青白色の翼の下に出した漆黒の翼から雷撃を放って迎え撃った。

呪文の光を残像に残しながら並行移動で雷撃を躱したヨールテスは、先程と同じ様に魔法障壁をぶつけると、そのまま背後に回り込んで更にもう一撃放つ。全身を魔法障壁に覆われている朔耶はダメージこそ無いものの、その連撃に壁際まで撥ね飛ばされた。

「っこの！」
「ふふん、どうした戦女神。自慢の雷撃も当たらねば意味が無いぞ？」

朔耶は半分めり込んだ壁を背に雷撃を放ちつつ、意識の糸も伸ばして攻撃を試みるが、ヨールテスは瞬間移動染みた軌道で尽くこれを躱すと、再接近して障壁を武器にした攻撃を繰り出す。意識の糸を絡めての電撃も効果が見られない。

『どうすりゃいいのよ、これ』
ミョウダナ　チカラノナガレニ　フシゼンナゲンショウガ　ミラレル

ヨールテスに絡めた意識の糸から感じ取れる力の流れに不審な点があると訴える神社の精霊に、朔耶は解析を任せるので黒の精霊に戦闘のサポートを切り替えるよう要請する。多少、力の発現が不安定になっても怪我さえしなきゃいいと。

クロハ　タタカイニハ　ナレテオラヌ　サクヤノイシデ　コウドウセヨ
『分かった、いくよクロちゃん！』

魔法障壁は神社の精霊がヨールテスの力の流れを解析しながら張り続けるので、朔耶は黒の精霊と連係して戦闘に対処する。

漆黒の翼が震えて突風を巻き起こし、作り出された無数の風の塊りが撃ち放たれると、ヨールテスは掌に障壁を集中させて当たりそうなモノだけ弾き返す。そしてその体勢のまま歩いて距離を詰めて来た。

「つまらん攻撃だ、まるで素人だな」

嘲るような口調で挑発するヨールテスに、朔耶は胸を張って答える。

「だってあたし素人だもん」

背中にどーんっという文字を幻視させそうな勢いで堂々と告げられ、ヨールテスは訝しむように朔耶を観察する。ヨールテスも相手の言葉の真偽を見抜く能力は高い水準で備えている。

朔耶がこれまで関わった出来事の数々を思い起こし、ちょっと（実際はかなりだが）力を得たくらいで素人があそこまで出来るモノなのかと考えると、素人だからこそ、と納得出来る部分も多々あった。本当に素人だったのかと慌てるヨールテス。

『しまった、挑発する材料が無い』

怒らせてどんどん攻撃させる手筈だったのだが、先程から様子を窺うような威力を抑えた朔耶の攻撃に、自分から打って出る事の出来ないヨールテスはそれらを捌きつつどうしたモノかと頭を悩ませた。あまり時間も掛けられない。

二百年もの永い時を生きたヨールテスの身体は、魔力の循環消化による維持に限界が来ていた。だからこそ完全体を目指し、組織を護れる強力な軍団を作ろうとした。体内呪文による身体の強化にはリスクも伴う。

対戦女神（たいサクヤ）用の体内呪文はまだ不安定で問題が残っているが、相手の放つ魔力をダイレクトに吸収変換する事で、瞬間的に自分の力として利用できる効果を持つ。

朔耶が強力な攻撃を行う為に大きな魔力を纏えば、その魔力を拝借して迎撃に利用する事で一方的に消耗させる事が出来る。そうして魔力を使い果たした所を仕留めるという算段なのである。朔耶には存分に魔力を纏って貰わなくては困るのだ。

如何に怒らせて魔力を引き出させようかと知恵を絞っていたヨールテスは、朔耶の活動について集めた情報の中に、サムズ動乱の折、カースティアの大図書館で起きた些細な出来事について思い出した。

「ふむ……」

雷撃を躱し、絡められた意識の糸から電撃が発現される前に魔力を吸収して障壁に変換する事で攻撃の中和を行いながら、些か低俗で下品だが効果が望めるならばと、ヨールテスは思いついた挑発を試みた。

「ところで、戦女神はまだ処女であられるのかな？」

「っな！」

イキナリ何を言い出すんだと動揺する朔耶に、ヨールテスは成る程と、素人には素人ならではの攻め所があった事にほくそえんだ。見た目通りの子供（ウブ）な部分があるのなら、そこを突付いてやれば簡単に感情を揺さぶる事が出来る。

「ふっふっふ……貴女を捕らえた暁には是非、貴女の○○を○○して○○○の○○なども満遍なく○○して見るのも面白い」

「っ……こ、こ、このっ変態髭おやじーーーー！！」

カァッと顔を紅潮させた朔耶は右手に稲妻を纏いながら飛び出して行く。通常ならば、貞操の危機を覚える相手には近寄らせないよ

う遠距離からの攻撃を乱射しそうなモノだが、自分から張り倒しに行こうとする辺り、朔耶が朔耶たる所以でもある。

オチツケサクヤ　フシゼンナ　チカラノナガレガ　ワカッタゾ
『とりあえず一発ぶん殴ってから聞くっ！』
イマ　キケ

空振りした稲妻ビンタが青白い光の軌跡を描き、緑色に光る呪文の残像と交差する。朔耶の魔力を吸収変換して発現させた魔法障壁をぶつけようとしたヨールテスは、あらぬ方向から飛んで来た雷撃を躱す為にその障壁を翳して距離を取った。

魔力を吸収出来るといっても、既に雷や風の塊りのように術として発現済みの現象化したモノを受ければ、現象を構築している魔力を吸収変換する事で多少の威力軽減は出来るものの、相応のダメージを負ってしまうのだ。

神社の精霊が戦闘のサポートに戻った事で隙の無くなった朔耶は、距離を取ったヨールテスを半身に構えて見据えながら仕切り直しとばかりに神社の精霊からの報告に耳を傾ける。

『で、不自然な力の流れって？』
ウム　アヤツノチカラ　コチラノマリョクヲ　リヨウシテオル
『どういうこと？』
コチラガ　オオキナチカラヲ　マトエバ　アヤツハ　ソレヲミズカラノ　チカラトシテ　トリコム

意識の糸による攻撃に効果が無いのは、意識の糸から発現しようとした電撃の素となる魔力を、発現前に吸収変換する事で中和しているのだと、神社の精霊は解析結果を告げた。意識の糸を使った直

接攻撃は無効化され、相手に魔力を与えてしまう。

ここまでの攻防でヨールテスは雷撃や風の塊り、稲妻ビンタ等は躱しているので、それらの攻撃は当たれば効果は望める。

接近戦での魔法障壁による攻撃も、朔耶を守る障壁から吸い取った魔力を吸収変換して攻撃に転化しているようなので、接近させないようにすべきだと神社の精霊はアドバイスを出した。

『でも、当たんないじゃん』

続け様に雷撃を放つ朔耶だったが、ヨールテスはやはり瞬間移動のような動きで右へ左へと躱して行く。そうして、攻撃が途切れた合間に下卑た挑発を行い、朔耶の羞恥を刺激するのだ。

「今から楽しみですなぁ……やはり最初は○○を存分に○って、貴女の○○をじっくり○○したい所ですな」

「やっかましぃ！　一々露骨なのよアンタっ！」

閃光と轟音が響き、一際巨大な稲妻が落雷となって研究室の床に突き刺さった。大技の後には隙が出来る。ヨールテスはこの機を逃さず急接近すると、朔耶の魔法障壁から吸収した魔力で同規模の障壁を発現させた。

それをぶつけようと振り翳したヨールテスに、朔耶は更に出力を上げた障壁で押し返す。

「む？」

「真っ向勝負よ！　この世界（あたし）の力、利用できるもんなら利用してみなさい！」

「ほう！　儂の力の仕掛けに気付いたか！」

出力の上がった障壁に対抗する為、ヨールテスも更に吸収変換で障壁の出力を上げる。朔耶が魔法障壁の発現に使う魔力を増やせば増やす程、ヨールテスもそれを吸収変換して障壁を強化する。両者の間で反撥し合う障壁の圧力がどんどん増していった。

「それにしても、世界とは大きく出たモノだな！」

「事実だし！」

出力を増していく魔法障壁と、それを発現させる大量の魔力。障壁の圧し合う力でこの研究室のみならず施設全体が揺れ始める。

ヨールテスは魔法障壁を挟んで対峙する小柄な少女の不敵な笑みに狡猾な笑みを返しながら、一体この少女は何処まで魔力の放出量を増やせるのかと、知らず畏怖を覚え始めていた。

『擬似的に精霊と重なっていたエイディアス帝でも、此処までは制御出来なかった筈……。この娘、本当に精霊の使いなのか？』

朔耶に関して集めた資料の中には『その身に精霊を宿す者』等と言う、嘗てエイディアス帝が目指していた『重なる者』を体現しているかのような情報もある。エイディアス帝の提唱する理論では、精霊と重なる事で世界から直接力を引き出せるという事だった。

エイディアス帝の死後、サムズに亡命して動乱の指揮を執っていた元側近から、朔耶とエイディアス帝との関わりについて詳しい話を聞いて置かなかった事が悔やまれる。ヨールテスがそこまで考えた時だった――

『ぐ……身体が軋む……呪文が限界か』

ヨールテスの全身に刻まれた対戦女神用体内呪文による魔力の吸

収変換機能が許容限界を迎え、呪文の光が激しく明滅を繰り返す。この対戦女神用体内呪文の問題は、ヨールテスに元から刻まれている古い体内呪文にまで影響を及ぼしてしまう事だった。

「く……そろそろ限界ではないのかね？　戦女神！」
「まだまだこれからよ！　うりゃーーっ！」

ゴォッと吹き抜ける突風の如く勢いで原液レベルの濃厚で且つ透明感のある巨大な魔力の奔流がヨールテスを襲った。

「ぐ……っ　ガハ……ァ」
「っ！」

パァーンというガラスが砕けるような音が響いて緑色に輝く光の粒が宙を舞う。ヨールテスの全身に刻まれた呪文が弾け飛んだ。

魔族組織本拠地施設前の広場や地下一階の研究施設棟内で行われていた戦闘は、魔族側が突然戦闘不能に陥った事で唐突に終わりを告げた。施設全体を揺るがしていた圧倒的な魔力の膨張が不意に収まり、同時に魔物達が一斉に動きを止めたのだ。

「なんだ……何が起きた？」
「外の様子を見てきます！」

武装使用人達を一人残らず気絶させて施設防衛用の魔物と戦って

いたルティレイフィアは、突然バッタリ倒れて動かなくなった魔物に一瞬呆けるも、ヴィンス達が素早く状況確認に走った。
フレグンス騎士団も倒れた魔物にトドメを刺しておくべきかと指示を貰いに集まってくる。

「やったのか？　サクヤ……」

肩で息をしながら呼吸を整えるルティレイフィアは、朔耶を想いながら何処とも無く視線を彷徨わせた。騎士達が慌しく動き始める研究施設棟。先程まで激しい戦闘のあったこの部屋から、そっと抜け出す人影が居た事に気付いた者はいなかった。

壁や床に亀裂が入り、彼方此方砕けた研究室の隅に倒れ伏すヨールテス。そーっと近付いていく朔耶も無茶な魔力放出を行った為、結構息が上がっていた。お下品な挑発で気力が上昇していなければ、精神力の疲労で気を失っていたかもしれない。

マッタク　ムチャヲスル
『ごめん』

神社の精霊の御小言に短く謝った朔耶は、倒れ伏しているヨールテスがもそもそと動き始めた事で警戒体勢を取る。

「うう……」

ふらふらしながら半身を起こしたヨールテスは、周囲をボンヤリ見渡すと、呆けたような口調で呟いた。

「あれ？　まっくらだ……」

訝しむ朔耶。

「何もみえないよ、おねえちゃん……ルートねえちゃん」

オロオロと両手を宙に彷徨わせるヨールテスの姿に、朔耶は薄ら寒いものを感じて後退った。

『え、……なに？　演技？』

タイコウダ

『退行？』

モハヤ　アヤツカラハ　ムクナルハドウシカ　カンジラレヌ

恐らくは魔力過多な戦闘による精神的な強い負荷と、体内呪文が消し飛んだショックではないかと神社の精霊は分析する。呪文を刻んだ時から人とは違う存在になったと考えた場合、呪文が消えた事で呪文を刻む前後まで精神が退行したとも推測出来る。

「父さん、母さん……」

不安げに視点の定まらない瞳をキョロキョロさせているヨールテス。変な髭を伸ばした壮年の男性である外見は変わらずとも、その姿は小さな子供そのものだった。

こんな状態になった『敵』を前に、どうすれば良いのかと戸惑う朔耶は、背後の物音に振り返る。

「あ……」

崩れかけた研究室の入り口に、キルトが立っていた。

「ヨールテス……さま？」

フラフラと歩き出したキルトは警戒する朔耶の隣を素通りすると、真っ直ぐヨールテスの所に向かい、傍に崩れ落ちるように座り込む。そうしてヨールテスの頬に触れた。

「だれ？　ルートねえちゃん？」

「……ルッテン」

ん？　と首を傾げる朔耶を余所に、ルッテンと呼ばれたヨールテスは不安げだった表情をぱっと輝かせてキルトの手を握り締めると、捲くし立てるように身体の異常を訴えかけた。

「ねえちゃん！　たいへんだよ、目がみえないんだ……耳もへんだし、たいないじゅもんがおかしくなったのかも」

「……大丈夫よルッテン。　今は休みなさい、疲れてるでしょう？」

「うん……、さっきからすごく眠いんだ」

キルトはそんなヨールテスをそっと抱き締めると、安心させるように囁きかける。やがてヨールテスは、キルトの腕の中で眠るように息を引き取った。古の魔族として凡そ二百年間に渡りオルドリアの闇に在り続けたヨールテスの、長い長い人生が幕を閉じた。

「最後くらい……キリと呼んで欲しかったわ」

寂しげに呟いたキルトの、それは遠い昔に封印した本当の名前だった。

ヨールテスが死んで触媒としての体内呪文が消えたキルトは急速に老化が進む。瑞々しい肌はみるみる色を失い、美しい金髪は萎びていく。透き通るようだった翠眼は灰色に濁り、身体中が朽ちていく。

「女の情けよ……見ないで」

朔耶は踵を返して背を向ける。無言で立ち去る朔耶の背後で、ばさりと倒れる衣擦れの音がした。

１００話：終焉（後書き）

次はエピローグになります。

エピローグ

魔族組織の本拠地施設強襲から数日、魔族組織壊滅の報と、アーサリム部族国家の正式な建国宣言がフレグンス、帝国、ティルファによる同国との国交樹立及び同盟宣言の下、オルドリア中に伝えられた。

フレグンス先発隊、帝国遠征部隊が其々本国に引き上げ、入れ替わりに外交使節団と鉱山の採掘業者がアーサリムを訪れる。地理的に近いサムズ経由での交流が生み出す人々の流れは、サムズ経済の発展にも貢献する。

また、サムズと隣接するキトの領地は、国境を交える帝国とティルファから、アーサリムまでを結ぶ商人達の物資運搬路として活気を取り戻し始めていた。

裏の勢力が全て無くなったわけではないが、闇の二大勢力として暗躍していたエイディアス帝、ヨールテス伯の魔族組織が一掃されたオルドリア大陸は、表立って目に見える変化は無くとも、各国に燻る紛争の気配も消え、明るい時代の兆しを感じさせていた。

「ティルファにも、嘗ては封印された黒歴史と言える時代がありましてね」

屋形船の引き取りと魔力石の加工技術関係でティルファを訪れていた朔耶は、アーサリムでの出来事についてブラハミルトに詳しい話を聞かせていた中で、ヨールテスが彼の最期に側近のキルトから『ルッテン』と呼ばれた事に触れた。

それを聞いたブラハミルトは、僅かながら思い当たる節があると、ティルファの葬り去られた歴史を語ってくれた。

発明家ルッテンについては実は色々な諸説があり、魔族では無いかという考察や幾つかのそれを示す逸話があったのだ。ルッテンの活躍した時代、キトは一部の大富豪とも言える貴族に支配された街で、今の様な自由に商売が行える街ではなかったそうだ。

その時代のティルファは閉鎖的で排他的な雰囲気を持つ研究者の街、と言えばまだ魔術士らしい偏屈者集団程度に聞こえは良いが、実体は魔族化した者を『人に非ず』と非道な実験に使う蛮行が繰り返される狂気の街だった。ほんの百年程前の話だという。

「禁断の書庫という代々受け継がれる研究棟所長しか入れない資料室が地下深くにあるのですが……」

ブラハミルトはそこで古い手配書の中にルッテンの名を見た事があるのだと語った。手配書自体も百年以上前のモノで、辛うじて内容が読み取れたそれは、発行されてから三十年は経っていたモノらしい。

「不謹慎な事を言いますが、生きた歴史の証人として色々話を伺ってみたかった気もしますね」

「二百年、ですもんねー……」

一つの時代の大きな何かが終わった事を実感しながら、朔耶とブ

ラハミルトはそんな話をしみじみと語り合った。

「五十年くらい昔じゃったかのぉ、仲間に誘われた事があってなぁ」

隠れ里ではメリルー導師が、報告と挨拶にやって来たルティレイフィアに昔話を聞かせていた。

『お前のその歪な力、我等に相応しいと思わんか』

『ほっときなっ　アンタに言われたかないよ』

当時二十代の若い魔術士だったメリルーは、亡き師匠から受け継いだ異端扱いされる精霊術と魔術を組み合わせた術を磨く為、各地を放浪しては傭兵染みた仕事を請け負っていた。そんな折、見た目若きキトの支配者、ヨールテスにスカウトされた事がある。

気が変わったら何時でも来いと、若さと寿命を報酬（えさ）にするヨールテスの言葉には、何度か気持ちが揺らいだが、彼が未開地で行っていた所業を知っていた為、仲間になる事はなかった。

「導師にそんな過去が……」

「ふぇっふぇっ……まあ、あの頃は割といい男じゃったがのぉ。そうか……アイツも逝きおったか」

ここの結界も必要なくなるなと、霞む空を見上げたメリルー導師の後姿が、少しだけ寂しげに見えるルティレイフィアだった。

邪気払いに撒かれた大豆を時々踏んづけてしまう季節。朔耶は今日も朝から荷物を片手に、自宅庭の円に入る。

「じゃあ、行ってきまーす」
「おー、気ぃつけて行ってこーい」

帝国の魔導砲を始め、フレグンス騎士団やパーシバル傭兵団に配布した衝撃の篭手Ｔ２も全て回収、解体して取り出した魔力集積装置を王都の街灯に組み込む作業が進む中、朔耶はケーキの作り方を纏めた資料を持って城の庭園へと転移する。

ちなみに、アーサリムの大族長ブレブラバントに貸し与えていた初期型衝撃の篭手Ｔ２は、魔力石を詰め替えるカートリッジタイプに改修した上でフレグンスとの友好の印として贈られた。

「やほー料理長さん、持って来たよ～」
「おおうサクヤ様、これにあの御菓子（ケーキ）の作り方がっ」

写真付きで手順が書かれた資料を受け取り、さっそくオルドリアで用意出来る材料を使ってのケーキ制作に臨む宮廷料理人達。生地の具合や焼き加減などは数をこなして此方（こちら）の素材にあった作り方を見つけるしかない。

『むふふ～、こっちでケーキ食べ放題になるかも』
フトルゾ

『う、運動するもん……』

精霊の力でカロリーをゼロに出来ないか等と密かに考える朔耶に、そんな事に神秘を使うなと御小言を与える神社の精霊。しかし、実現すれば多くの女性信者を増やしてしまう事は間違いなかった。

近く、発展著しい街の視察訪問という名目で、レティレスティアがカースティアの観光事業を見学に訪れる事になっている。護衛にイーリス近衛騎士団長も同行するので、朔耶も『愛の屋形船作戦』決行に向けて水面下で動いていた。

実際の所は、本人を含む城の誰もが朔耶の計画を知っており、アルサレナ王妃もレティレスティアとイーリスの関係進展に使える余興として全面的に支援している状態にあったりする。

その為、当事者の二人も視察訪問の話題が出る度に意識した様子を見せていた。城内では時折、宮廷魔術士長と話し込んでいる近衛騎士団長の姿や、宮廷魔術士長補佐と内緒話をしている第一王女の姿が見受けられるのだった。

「さーて、明日はちょっとバルの所に顔出しに行こうかな」
「そう言えば、帝国の麓の街では自動四輪の競技場が造られているとか」
「うん、ティルファでも結構走れる機械車が出来たってんで、バルが早く競争したいらしくてね」
「ティルファも最近は凄い発明を発表していますね」

レティレスティアとフレイを誘って城のサロンでお茶を楽しんで

いた朔耶は、競技場に関係する用事で出向くのだと答える。
ブラハミルトに譲与した数々の魔力石加工に関する研究資料によって、ティルファはサクヤ式の性能とまでは行かなくとも、魔力石を加工した画期的な発明品を次々と完成させて発表していた。

サクヤ式送風機を元にした冷暖房機や、機械船の推進器研究から造り出されたティルファ式魔力石原動機によってサクヤ式自動四輪のようなティルファ式機械車の開発も進められていったのだ。

「そこそこスピード出るようになって来てるし、事故とか起こさなきゃいいんだけどねーアイツ」
「うふふっ　サクヤ様、バルティア皇帝の事を話す時って、なんだか楽しそうですね」

『んなこたぁーない』と手をひらひらさせる朔耶。少し前までは、その名を聞く度に頬を硬直させていたフレイの帝国に対する蟠り(わだかま)も、朔耶からバルティアやアネットの『笑える話』を聞かされる内に少しづつ解されていった。
レティレスティアもイーリスとの関係を意識する事で、朔耶に対する独占欲は以前より落ち着きを見せていた。

「あたしさ」
「はい？」
「あたし、卒業したら――――」

カップを受け皿に戻し、窓の外に広がる王都の街並みを眺めながら、朔耶は昨日家族と話し合って決めた事を告げる。朔耶の決意を告げられたフレイは目を丸くし、レティレスティアは優しい微笑みを贈るのだった。

フレグンス城の庭園では、春の花が芽吹こうとしていた。

おわり

エバンスのささやかな日々（前書き）

後日談的なお話。

エバンスのささやかな日々

サムズ最大のスラムであったエバンスの旧市街地では建物の撤去作業が始められる事に伴い、近隣の集落やクルストスからも連日多くの人々が出稼ぎに訪れていた。

アーサリムとの交易で帝国やティルファ、キト方面に向かう商人達が必ず通る事になる要所の街という事もあり、エバンスの街は嘗て無いほどの賑わいを見せている。

旧市街地へ向けて水道橋が建設されていく中、作業効率を高める方法として、人材の輸送にティルファ式機械車が試験的に導入されている。そして資材の運搬には竜籠が使われていた。

フレグンスはオルドリア大陸で帝国に次ぐ二番目に多くの竜を保有している。

三国同盟で帝国から譲渡された二頭とサムズ動乱の折に朔耶が反乱軍から分捕った四頭に加え、先のアーサリムにおける魔族組織討伐の戦いで鹵獲した二頭の計八頭である。

この内の四頭はカースティアを経由して直接、王都とアーサリムのスンカ山精霊石鉱山を往復しており、残りの四頭がエバンスに資材を運ぶ役割を担っていた。

辺境騎士団本部脇に仮設されていた竜の仮厩舎も、日を追うごと

に立派な造りのモノに改築されて行き、それなりの佇まいを備えた正式な厩舎になったのは最近の事だ。

その厩舎で餌肉をもっしゃもっしゃと食べている四頭の竜にそろーっと近付いていく小さな影。

環境が改善され、街の治安も回復傾向にあって外でも比較的自由に遊べるようになった孤児院の子供達は、サムズ界隈では未だ珍しい本物の巨体な竜に興味津々であり、厩舎にどれだけ近づけるかという遊びを楽しんでいた。

気配に気付いた竜がくるりと顔を向けると、子供達はきゃーっと逃げ出す。丸くなって眠っている竜の鱗に触ろうと近寄り、むくっと顔を上げる竜にわーっと逃げ出す子供達。そんな遊びだ。

竜達も子供達が遊んでいる事を理解しており、数日も経つ頃には『寝た振り』をしたり、『気付かない振り』等のフェイントを使って遊び相手をするようになっていた。

厩舎の裏からこそーっと竜の様子を伺おうと顔を覗かせる子供達と同じ様に、厩舎の中からそろーっと首を出して覗き込んでいた子供達と顔が鉢合わせになり――

「わーっ！」
「キョー！」

両者揃ってびっくりしたりする。そんな光景が世話係のおじさんや騎士達を和ませていた。

「ジャックー、お昼だよー」

旧市街の解体撤去作業に参加しているジャックの所に、チューリーが昼食の入ったカゴを持ってやって来た。

精霊神殿に仕えている者は以前起きたサクヤ派絡みの騒動でチューリーの事情と立場を少なからず知っているが、他の一般人には然程詳しい者もおらず、作業をする労働者達からは普通に孤児院の子供として見られている。

瓦礫を除けて開けた場所で各々が食事を摂り、或いは街まで食べに出掛けている者も居る中、旧市街地再建事業の資材置き場に竜籠が着陸した。

「あっ、ピーちゃんたちだ！」

ジャックに昼食のカゴを渡すと、チューリーは竜籠の所へ駆けて行く。

朔耶が竜達と戯れている姿を最初はおっかなびっくり、興味津々に様子をみていたチューリーだったが、交感能力を持つ彼女は竜達と薄っすらとだが意思疎通が出来るので、直ぐに懐いた。

どちらがどちらにというでもなく、チューリーと竜達は仲良しであった。

大きな竜とじゃれ合って楽しそうにしている少女の姿は、見慣れれば微笑ましい光景であった。だが、竜の鼻の上に乗れる程ちまっこいチューリーはそのままパクッとやられそうで、傍から見ているジャックは落ち着かない。

「ピ？」

「ん？」

と、此方（こちら）を向いた竜とチューリーからさっと目を逸らすジャック。

やがて昼からの作業が始まり、ジャックは作業に赴き、竜達は厩舎に飛んで、チューリーも孤児院へ戻る。

「またねーー、ピーちゃん、キョーちゃん、キューちゃん、キュルくん」

「ピ」
「キョー」
「キュー」
「キュル」

貨物竜籠と共に飛び去る竜達に手を振って見送ったチューリーは、空になった昼食のカゴを拾うと作業に向かうジャックに向き直って声を掛けた。

「じゃーね、ジャック」
「竜の後かよ……」
「ん？　なあに？」
「なんでもね」

んん？　と首を傾げたチューリーだったが、ジャックの聞こえない独り言は何時もの事なので流す事にしたらしく、ひらひらっと誰かによく似た雰囲気で手を振って孤児院へと帰っていった。

その小さな背中を見送り、ジャックはふっと溜め息を吐く。

「竜（とかげ）に嫉妬してるようじゃなぁ……」

歳不相応な自嘲を浮かべながら、解体作業現場（おとこのしごとば）に向かうジャックなのであった。

エバンスのささやかな日々（後書き）

以上、ジャックとチューリーと竜達のお話でした。

其々の進む道

午前中の授業を終えてサロンに集まり、昼食を摂りながら談笑する学院生達。エルディネイアとチームメンバー達のグループもその喧騒の中にいた。そして、そんな彼等と何時も行動を共にしている朔耶の姿もあった。

「そう言えばさー、修学旅行とか臨海学校とか学生キャンプとかないの？」

「なんですの？　それは」

不意に聞きなれない言葉を並べる朔耶に、エルディネイアはスープを口に運ぶ手を止めて言葉の意味を質問する。

周囲の学院生達も各々のグループで雑談を交しているように見えるが、その実、エルディネイア達の居るテーブルに意識を向けていた。彼等がちらちらと視線向ける先には、王都大学院の制服に身を包んだ異世界からの留学生。

高校を卒業した朔耶が王都大学院に入学してから十数日、当初の騒ぎに比べれば皆馴染んできた感があるとはいえ、フレグンスの戦女神は未だ院生達にとって注目の的なのである。

朔耶から修学旅行や臨海学校、学生キャンプという学校行事の概要を聞いたエルディネイア達は、面白そうではあるが、貴族が大半

を占めるこの大学院でそういった活動を行うのは難しいのではないかとの考えを示した。

「家の者が許可しないんじゃないかな」

「王都の外に遊びに行かせるなど言語道断みたいな感じでね」

「ん～でもさぁ、将来騎士団に入る子とかもいる訳だし」

野営などのサバイバル知識や連帯行動の経験を得る意味で、王都の北東にある湖の辺りへ学院の課外授業としてキャンプに行くのはどうかと持ちかける朔耶。以前、サクヤ式推進器の試運転をした場所である。

「面白そうだね、学院にその行事の実行を働きかけるなら協力するよ。いいよね？　エル」

「私は、別に構いませんわ」

ドーソンは割と乗り気で、エルディネイアも何か思うところがあるのか、彼の提案に同意する。他のメンバー達も特に反対する理由は無く、彼等は何れも自分の両親を説得する所から始める事になった。

「じゃあ、あたしは反対派の先生とか家のご両親を説得して回るって事で」

「な、なんかもうその時点で恒例行事化が決定しちゃってる気がするなぁ」

「……同感ですわ」

こうして、王都大学院に新たな学校行事の追加を認めて貰う活動

が始まった。朔耶とエルディネイア達のグループが中心になって学院生達から署名を集め、学院長に行事案と共に提出する。
　賛成する院生は意外に多く、彼等も自分達の両親の説得に掛かり、駄目だった場合は朔耶の出番という訳だ。

「まーた朔姉はそうやって騒ぎを起こす」
「騒ぎて……」
「学生キャンプかぁ、俺も昔はよく山に籠って修行に明け暮れたもんだ」
「それ、キャンプ違う」

　大学院に入ってからは王都のサクヤ邸と、実家である都築家での生活を半々の割合で過ごしている朔耶は、大学院の行事追加関係で兄弟に相談する為、都築家に戻っていた。
　ちなみに、拓朗は地元の大学へ進学する予定だったのだが、何を思ったか自衛隊に入隊してしまった。二年間は帰って来ないらしく、みよさんが泣いて大変だった事は朔耶の記憶に新しい。

「まあ取り敢えずは、キャンプ場の周辺を調べて安全の確保をしておく事だな」

　何かあれば問題だし、今後もこういったイベントを行うつもりなら、学院側の規則や、学院に子供を預けている側との契約条項も整備しておいた方が良いとアドバイスを出す弟。

「規約に同意するしないってやつ？」
「そんなトコかな。責任の所在とか、問題を起こした生徒に対する

処置への理解を求める内容とかな」
「うぇ～すっごい面倒……レイスに任せちゃおうかな」

それは『押し付ける』の間違いでは無いか？　というツッコミを軽くスルーした朔耶は、必要事項をメモ帳に纏めていった。そんな調子で、朔耶は充実した楽しい日々を送っているのだった。

――其のニ――

家族と夕食を済ませた朔耶は、メモ帳とお土産を持って王都の自宅であるサクヤ邸に帰って来た。

「お帰りなさいませ、サクヤ様」
「ただいま～」

「おかえり～朔ちゃん！」
「ただいま、藍」

サクヤ邸の使用人に混じって、一人デザインの違うメイド服を纏った藍香の出迎えに応える朔耶。藍香は朔耶が卒業後、此方の大学院（オルドリア）に通うと聞いて驚き、三日三晩悩み抜いて『自分も付いて行く』という答えを出した。

当然、朔耶を始め都築兄弟や拓朗達、実穂にも反対されたが決意は揺るがなかった。いつぞやの早朝など、都築家に押しかけて転移

しようとする朔耶にしがみ付き――

『本当に好きな相手の為なら性別なんて関係ない！　世界の壁だって越えてやるわ！』

と、のたまって自身の本気を示した。

『これ、男がやったらシャレにならんよなぁ』という兄の冷静なツッコミによって、凍り付いていた庭先の時(とき)が動き出し、朔耶に『危ない事すんな』と滅茶苦茶怒られた藍香だったが、めげなかった。

擦った揉んだの末、『藍の気持ちはよく分かった』と朔耶が藍香の決意を受け止める事で落ち着き、王都のサクヤ邸に住み込みでサクヤ式工房の助手として働く事になった。

あくまでも『気持ちと決意を受け止める』であって、受け入れた訳ではない。日頃から自分はノーマルだと主張(アピール)している朔耶である。やはり恋愛をするなら、ちゃんと異性と愛し合いたいと思っているのだ。

「みっちゃんとこに送る分、上がってるよ」

「そっか、ご苦労さま。今度持って行かないとね」

藍香の行動に触発されてか、実穂は卒業後進学せずに自宅で家事手伝いをしながら、オルドリアとの個人交易を始めていた。規模は非常に小さく、実穂の両親も娘が何処と交易しているのかよく分かっていない。

しかし、かなり質の良い宝石や貴金属などを取り扱っており、頻繁に取引相手である友人との商談に出向いている様子から、友人をつてに何処か資源はあれど国際的に知られていないような、中東辺

りの小さな国と専属的にやっているのではと思われていた。実穂は完全極秘にしているのだが、娘に後継者の器を感じた父親も黙認している。

「はい、これお土産。みんなで食べてね」
「おおうっ　むぃむぃのケーキだぁ！」
「ええっ　あのケーキですかっ！」

きゃーっと集まってくる使用人達と、何故か取り分けを仕切っている藍香。王都での、サクヤ邸での藍香は朔耶の親友で異世界出身の工房助手という立場にある。

朔耶と藍香が工房で話し合いを始めると、元世界の知識と固有名詞を使ってアイデアの出し合いをするので、王都の職人達は会話の内容に付いて行けない事が多かった。

ティルファの職人でも辛うじて概要が理解出来るような気がするかもしれない、という程度だ。

『携帯の中継アンテナみたいなシステムは無理なのかな？　距離関係ないなら基地局一つだけで行けるかも』
『水鏡をテレビみたいにするとか？　魔力と電波って性質が違うっぽいし、ラジオで試してみよっか？』

こんな会話をされては、サクヤ式の技術を盗み（学習的な意味で）に来たティルファの学者術士達もお手上げである。実際の所は、二人にそっち系の専門知識がある訳でも無く、単に雰囲気で話しているダケに過ぎない。

藍香を此方（オルドリア）で其れなりに一目置かれる存在に仕立て上げる為の、孝文（おとうと）の策だったりする。

「そういえば藍、御両親に手紙書いた？」
「うん、書いてあるよ」

そう言って取り出した消印入りの封筒を朔耶に渡す。藍香の両親には『実穂の家の会社に就職して寮生活で海外に勤めている』という事にしている。毎月の仕送りや手紙を運ぶのは朔耶の役目であった。

サクヤ邸の使用人達は、そんな二人の親密なやりとりを見ながら『やはりサクヤ様には同性嗜好の傾向が……』などと日々疑惑を深めていたりする。

それと言うのも、藍香の指に光る精霊石の指輪が誤解を深める原因にもなっていた。

スンカ山で採掘された精霊石を加工した物で、藍香を王都に連れてきた日に朔耶が通訳の為に送ったのだが、この指輪を作った職人は朔耶が付けているレティレスティアに貰った指輪を作った職人でもあったのだ。

御揃いの指輪を貰った藍香が頬を染めながら左手の指に填め、『薬指に嵌めるのやめいっ』と朔耶に突っ込まれるのを『ファッションよファッション』と躱す一幕がサクヤ邸の大広間で繰り広げられた。

朔耶の雰囲気も普段と違っていた為、傍から見ていると恋人同士のじゃれ合いにしか見えなかったそうな。

「え、あたしもキャンプ行っていいの？」
「うん、藍は慣れてるし詳しいでしょ？」

引率の教師と騎士の中にも十分な知識と経験を持つ者は居る。藍香を連れて行くのは朔耶なりの配慮である。

王都に来てからの藍香はサクヤ邸と工房を行き来する毎日で、何処かに遊びに行く機会もなかった。実際、現代人の藍香が遊べるような娯楽施設的な場所も、本来お堅い国柄の王都にはこれと言って無いのが実情だ。

偶の休日には元世界に戻って遊びに行く事もあるが、海外に勤めている事になっている手前、あまり頻繁に戻る事は出来ない。朔耶としては、此方（オルドリア）の生活でもちゃんと羽を伸ばせるよう息抜きをさせてあげたい。

「あ～～んもうっ　優しいっ　嬉しいっ　だから朔ちゃん好き！」

「だーーから、抱きつくんじゃないっ」

頬擦りを狙う藍香をちぇいちぇいとチョップで撃退して部屋に戻る朔耶。このような親密なじゃれ合いを使用人達の前で披露するから、誤解が増幅されるのだという事には気付いていないらしい。藍香の指輪がキラリと光る。

斯（か）くして、王都の夜は今日も平和に更けていく。

朔耶の大学院生生活は概ねこんな調子で過ぎていくのであった。

其々の進む道（後書き）

大学院の話だった筈なのに、普通の本編後日談にそれてしまいました。

クルストスの残照

「また君か……身体は大丈夫なのか？」
「丈夫だけがアタシの取り得だかんね」

その若い騎士とは、払いを渋る客と揉める度に顔を合わせていた。

「髪を切ったのかい？　君の性格に似合ってるね」
「どういう意味だいそりゃあ」

喧嘩の仲裁や罪人の捜索で走り回っていたアイツ。偶に保護される時もあった。

「飲みすぎだ、暫らく頭を冷やしていろ」
「うっせーよ！　ちくしょーっ」

アタシみたいな汚れた女に、真っ当な生活が出来るなんて思わなかった。

「ほら、もっと落ち着いてゆっくり食えって」
「うっへー、食える時に腹一杯食っとくんだよっ」

幸せを掴めるなんて考えた事もなかった。

「――だよ、もう君は春売りなんてしなくてもいいんだ、僕と暮ら

そう」

熱っぽく語る彼の話の半分も理解出来ていなかったけど――

「――たら、きっとサムズは発展する筈だ。一緒にエバンスに行こう、小さいけど僕の家があるんだ」

彼と添い遂げる事が出来るのだと、それだけは分かった。

「サーナ、君を愛すると誓う」

「……デリック……」

初めて客以外の男を感じ、愛し合う事の悦びを知った。

「デリック……本当にアタシでいいの？」

彼は微笑んでる。だけど、何も言ってくれないのは不安だ。だからキスを強請ろうと顔を寄せる。全ての不安を拭い去ってくれる、あの甘い甘い優しいキスを。ちょっと硬めの唇を――

無い――唇が無い。彼の、少し髭を纏った顎も、引き締まった頬も、赤黒く抉れた生肉の奥から、生臭い深紅の液体が流れて出て、彼の甲冑を黒く染めていく。思考が凍り付く。心がバラバラに弾け飛ぶ。

「……！」

悲鳴にならない叫びをあげて目を覚ますと、見慣れたボロ小屋の布が張られた低い天井。破れた隙間から外の光が射し込んでいる。ゆっくり息を吐き、汗で湿った肌着を開(はだ)けながら首筋に張り付く髪

を指で梳かした。

「……もうちょっと待ってよ……すぐ行くからさ」

そう呟いて身体を起したサーナは、最近クルストスに出来た精霊神殿の近くに密集している掘っ建て小屋の一つから這い出した。

神殿が出資する生活支援によって以前のように仕事をしなくても食べて行けるようになったのは彼の言った通りだが、一緒に暮らそうと言った彼はもう居ない。

「ほんと……、すぐにでも行きたくなっちまうよ」

寝床の下に隠してある彼の形見は、今日は置いていく事にした。

陽射しも日に日に強くなる今日この頃、サーナは川原に咲き始めた野花を摘んで街から少し外れた場所にある丘へと向かう。

此処には先の大戦から最近までの戦いで殉職した大勢の騎士達が眠っていた。サムズ出身者が殆どで、稀に王都の貴族だった者も混じっているらしいが、サーナには割とどうでもいい事だった。

元春売りの自分が花など似合わないなと自嘲しつつも、彼の墓前に添える野花を紐代わりの髪で縛って花束を作る。

飾り気の無い墓標が並ぶ丘の墓地を訪れ、デリックが眠る場所へと足を運ぶと、そこには珍しく先客が居た。同僚の騎士だろうか、ずんぐりした体躯で武張った顔付きの中年男性が、墓前に一輪の花を添えていた。

よく見ると、周囲の墓前にも同じ様に花が添えられている。この一帯の墓は全て同じ時期に埋葬されたモノなので、やはり同僚か、見た目の年齢から考えて上官に当たる人なのかもしれない。その傷だらけの顔に気難しそうな印象を覚え、サーナは迷った。

騎士の墓前に春売りが来る事を快く思わないかもしれない。だが、自分は恋人に会う為に来たのだ。誰に憚る必要があろうかと、気持ちを奮い立たせたサーナは、添い遂げる筈だった男、デリック・ノースと刻まれた墓標に近付いていった。

「こんにちは、騎士さん」

「ああ」

挨拶をしてみたら随分とぶっきら棒な返事が返って来た。だが邪険にするような気配は感じなかったので、ホッとしながら髪で纏めた花束を添える。使い込まれた甲冑を微かに鳴らし、中年の騎士はサーナの花束を見て目を細めた。

自分の髪を巻いた花を相手に贈るのは、貴方と結ばれる事を望むという意味合いがある。主にサムズの一地方で見られる風習だ。

「君は……」

「ねえ、騎士さん。……デリックは、なんで死んじまったのかね？」

「……」

「アイツはさ、国の事とか、アタシ等みたいな下民の事とか考えて、毎日頑張ってたんだ」

多くの騎士が同士討ちで死んだと聞いた。あの日、彼が死んでいた場所にも、同じ辺境騎士団の遺体しかなかった。彼以外の騎士達とも多少の面識があったし、よく彼との仲を冷やかされたりもした。

主に彼が、だったが。
みんな気のいい人達だったと、サーナは独白のように言葉を紡ぐ。
「なんで……、みんな死んじまったのかねぇ」
「理想を追ったからだ」
サーナは特に返答を期待していた訳ではなかった。ただ、自分の疑問を彼（デリック）と同じ騎士に聞いて欲しかったのだ。意外にも、この無愛想な中年の騎士はサーナの問い掛けに答えてくれた。
それならば、もう一つ知りたい事、あの時から最も知りたいと思っている事にも答えてくれるかもしれない、そう思ったサーナは、墓前に捧げた花束を撫でながら、その問いを口にする。
「デリックは、誰に殺られたんだろうね……」
「俺が斬った」
ザアッと丘を吹き抜ける風が草花を薙いで往く。散らされた白い花びらが空へと運ばれていく中、サーナは一瞬何を言われたのか理解できず、ポカンとした表情でその騎士を見上げた。
傷だらけの武張った顔に難しい表情を浮かべたその中年騎士は、静かにサーナを見下ろしている。ようやくサーナの脳が今しがた与えられた答えの内容を認識し、その言葉の意味を理解した。彼女の口から擦れるような響きで問いがこぼれる。
「ど……うし……て……？」
「離反したからだ」

その瞬間、サーナは殆ど無意識に腰の帯裏に手を伸ばした。だが、その手が目的のモノを掴む事は無かった。何時も其処に差してある形見の品は、今日は寝床の穴に置いて来た事を思い出す。

『どうして今日に限って！』

例の悪夢を見た後だけに、墓参りにナイフは無粋だと考えて持って来なかった。その事を悔やみつつ、武器になる石を探して地べたを掻き毟るように手を彷徨わせる。自身の非力さは分かっているので、素手ではどうにもならない。

そんな殺意に満ちたサーナの目が、騎士の腰に下がる長剣を捉える。飛びつく様にその長剣を掴んで引き抜いた彼女は、斬り掛かろうとして尻餅をついた。重過ぎてサーナの細腕では持ち上がらないのだ。

「畜生！　殺してやるっ！」

それでも鍔（ガード）部分を掴んで強引に持ち上げたサーナは、剣の切っ先を向けて体当たりを敢行した。が、簡単に躱され、擦れ違いざまにあっさりと、抵抗する間も無く剣をもぎ取られてしまった。

あまりに歴然とした力の差。無力感に打ちひしがれて座り込んだサーナは、剣を握って目の前に立つ騎士をボンヤリ見上げる。

『殺される……？　それもいいかも』

デリックを斬ったという騎士に殺されたなら、彼の元に行けるかもしれない。サーナはそんな期待を懐いてその時を待った。

「……そんな顔をするな。　お前を斬るつもりは無い」

アンバッスは、目の前で座り込みながら死を望む暗い笑みを浮かべた女にそう言い放つと、剣を鞘に納めた。

あの動乱の夜に死んだ騎士達は、その家族や友人達にも深くて複雑な影を落としていた。離反して討たれた者と、離反者に討たれた者とでは当然その後の処置も違ってくる。

離反者の家族は家督を失った上に不名誉な裏切り者を出した家として周囲から誹りを受け、多額の罰金も課せられて、最悪一家が路頭に迷う事にもなりかねない程の損害を被った。本来であれば、この場所に埋葬される事も憚られるのだ。

『彼等に離反を決意させた原因は彼等だけにあらず』と、アンバッスが酌量を訴える書状を添えた事でギリギリの名誉だけは守られた。尤も、彼が朔耶絡みで王室と繋がりを持っていなければ、聞き入れられる事はなかったと言える程の、異例の処置だった。

「俺は暫らくここの支部にいる」

それだけ言うと、アンバッスはサーナに背を向けて墓地を後にした。サーナは呆然としたまま、去って行くアンバッスの背を見詰めていたが、やがてのろのろと立ち上がる。

「支部……騎士団の支部」

そこに行けば、デリックの仇が居る。一度墓標を振り返ったサーナは、幽鬼のような足取りで丘を下って行くのだった。

翌日、辺境騎士団クルストス支部――

「騒がしいな、どうした」

「あ、中隊長殿……」

朝、アンバッスが宿舎から顔を出すと、支部内がやけに騒がしかったので近くに居た若い騎士に何事かと声を掛ける。

その騎士の話では、刃物を持った女が早朝から支部の前に立っているのだが、話し掛けても反応が無く、只立ち続けている女に、一体どうしたのかと少し騒ぎになっているらしい。

以前なら、騎士団の支部前でそんな怪しげな行動を取れば即刻牢に放り込まれている所だが、クルストスもすっかり平和になったモノだとアンバッスは鼻を鳴らす。そして訓練場を空けて置くように言うと支部の外へと向かった。

「っ！」

「よう」

遠巻きに様子を見ている数人の若い騎士達。彼等の間からアンバッスが現われると、サーナは握り締めた形見のナイフを構えようとした。それを手で制したアンバッスは、此処では不味いのでついて来いと言って支部の中に戻っていく。

サーナにはアンバッスの意図は掴めなかったが、とにかく仇を追

うしかないと、周囲から向けられる訝しげな視線を無視して何度か世話になった事もある辺境騎士団クルストス支部へと足を踏み入れた。

アンバッスの背中を追って廊下を暫らく進み、やがて中庭のような場所に出た。

「ここは訓練場だ。実戦形式の訓練も行われる」

「……」

整地された正方形の空間。打ち込み用の杭などが端の方に並んでいる。反対側には宿舎と本館を結ぶ屋根付きの渡り廊下も見える。アンバッスは模擬戦用の刃を潰した剣を手に取ると、訓練所の真ん中に立った。

「ここで何が起きても、それは事故だ」

「……そうかい」

短く答えたサーナは、まだ構えていないアンバッスに向かって突進して行った。割と鋭く突き出されたナイフは、掠りもせずに空を切る。薙ぎ、斬り、突き、偶に癖の悪い足が跳ね上がるが、アンバッスはそれらを全て体捌きで躱した。

サーナの息が上がってきた頃、繰り出したナイフは腕が伸びきって静止した瞬間、なんと刃の部分を掴んで奪い取られた。

「ふん……騎士のナイフか。　部下の遺品だ、返して貰おう」

「なっ！」

最愛の男の形見を取り上げられたサーナは激昂して掴み掛かった。が、やはり触れる事も叶わず躱されてしまう。

「ふざけんなっ！　返せっ　返せっ　返せっ！　返してよおっ！」
「これは騎士の証だ、お前が持っていて良い物ではない」

くるりと背を向けて歩き去るアンバッスに追い縋ろうとするサーナだったが、何故か前に進めない。気がつくと、その場に倒れ込んで訓練場の地面を這いずっていた。気力は精神の昂揚で闘争心が保たれていたが、身体はとっくに疲労の限界に来ていたのだ。

「ちくしょう……」

身体の限界を知った事で急激に気力が消耗して行き、意識も遠くなる。サーナは頬に涙の筋を残して、そのまま気を失った。

目が覚めると、微妙に見覚えのある天井がサーナの視界に飛び込んで来た。久し振りにたっぷり眠れたような気分。
次いで見覚えのある天井が、初めて彼の部屋にこっそり泊まった時の記憶だと思い出す。あの時は『バレたら厳罰モノだ』と彼はオドオドしていた。特に何をするでもなく、一晩中コソコソとお話をしていたダケだったが、凄く楽しかった事を覚えている。

「ナイフ！」

意識が覚醒した瞬間、ガバッと身体を起すサーナ。その勢いで掛けられていたシーツが床に落ちるが、気にしている暇は無い。形見のナイフを取り返さねばと、宿舎の部屋を飛び出した。

何となく其処に居るような気がして、サーナは昨日の訓練場に走る。すると、そこには昨日と同じようにアンバッスが立っていた。訓練場の壁際にある武器棚から手頃な短剣を引き抜いたサーナは、やはり昨日と同じく突進して行った。

「ゲホゲホッ　はぁっ　はぁっ　はぁっ」

昼前頃、サーナは訓練場の地面に突っ伏して荒い息を吐いていた。結局一度も、当てる事さえ出来なかった。

体捌きのみではなく剣で弾いて躱される事もあったが、サーナは一度もアンバッスに打たれていない。にも関わらず地面に突っ伏している事に、彼女は悔し涙を浮かべる。

「今日は食えるだけ食って明日はゆっくり休め、どうせ動けんだろうからな」

アンバッスはそう言い放つと、訓練場を後にした。追い掛けたくても身体がいう事を聞かないし、息も苦しい。

結局、サーナは暫らく此処を動くことが出来なかった。ようやく回復して支部内をうろついていると、他の騎士から食堂に行って飯食って寝ろと注意された。アンバッスが色々手を回しているらしい。

『なんのつもりだか知らないケド……絶対殺してやる……デリックの形見も取り返してやる！』

翌日、サーナは全身筋肉痛で丸一日動けなかった。

「ち、ちくしょー……」

支部内訓練場で繰り広げられるサーナとアンバッスの対決は、翌日、翌々日と続いて行き、始めは半日もすれば体力が尽きて倒れていたサーナだったが、一週間が過ぎる頃には反撃を喰らって倒されるようになっていた。

武器も片手剣くらいまでなら扱えるようになっており、時折激しく打ち合っている光景が見られる。

「っ……！」

ギンッと何度目かの硬質な音を響かせて剣が打ち合わされた瞬間、苦悶の表情を浮かべて握っていた剣を取り落とすサーナ。

手の甲を押さえながら痛みの原因を気にしていると、大きい武骨な手が伸びてきてサーナの手を反す。サーナの掌には無数の潰れた血豆痕と、擦り切れて剥けた皮が散らばっていた。

何故か恥ずかしい気持ちに駆られたサーナは手を振り解いて引っ込めようとしたが、アンバッスの手はビクともしなかった。

「おい！　サクヤのアレを持ってきてくれ」

「え！　アレ使うんですか？」

「その為の道具だろう、必要な時に使わんでどうする」

いいのかなぁという様子で若い騎士が持って来たのは、手首ほどの太さがある黒い円筒形の物体。

表面にはサクヤ式である事を示すサクヤ印が入っている。その筒

の蓋を開けると、ボンヤリと白い光が灯っていた。アンバッスが筒の光をサーナの掌に向けて照射させると、サーナの傷が見る見る回復していった。

「な、なんだいコレ……」

「『快治癒点灯』だそうだ、サクヤと助手のアイカと言ったか……が作った治癒道具なんだとさ」

精霊石と魔力集積装置を組み込んだ携帯型治癒機。まだ一般には出回っておらず、非常に高価な道具として各騎士団本部や支部に配給されているも、勿体無くて中々使えないとされているサクヤ式だ。サーナの掌からは傷らしい傷が殆ど消えた。

「今日はもう休め、明日また相手してやる」

そう言って、アンバッスは訓練場を後にする。以前なら体力に余裕がある段階で背中を見せれば即攻撃を仕掛け、返り討ちにあっては強制的に休ませられていたのだが、何となく今日は従う事にするサーナだった。

その夜、喉が乾いたので水を飲みに部屋を出たサーナは、酒盛りをしている騎士達の雑談が聞こえて来たので、水道橋から運ばれる新鮮な水に口を付けながら耳を欹てる。この頃は自分の噂もあまり聞かなくなった。

「でもいいのかなー、アンバッス隊長殿は」

「エバンスの中隊長ともなると、仕事が出来る部下も多いんじゃないの？」

「でもなぁ、こっちの滞在理由がアレだろう？　もう何日目だ？」

元々数日でエバンスに戻る筈だったアンバッスは、予定を変更して未だクルストス支部に身を置いている。その理由が、サーナの相手である事は周知の事実となっていた。自分の命を狙う女に付き合って剣を合わせているのだ。

サーナは自分が此処にいる理由を思い出した。別に忘れていた訳では無かったが、最近は以前のような殺意を懐いてない事は自分でも分かる。だが、理由は思い出せても、あの業火のような怒りと殺意は湧いてこない。絆(ほだ)されたかと不安になる。

やがて騎士達の話は、あの動乱の夜について話題が移った。サーナの肩に緊張が走る。あの夜の事は時折悪夢として見てしまう。

「でもさ、隊長殿も内心複雑だろうね」
「だよなー、あの人の部下の殆どが死んだんだよなー」
「同僚とかもな、それに……あの人も実は一度死んでるらしい」

急襲を受けた支部に応援の騎士を向かわせる為、一人で二十人もの離反騎士と戦って討ち死にしたが、その直後、舞い降りたフレグンスの戦女神によって蘇えったらしいという逸話。その戦女神が使ったという蘇生術も、帝国から伝わってきている。

「ああ、俺もそれ聞いた事がある。帝国じゃあ死んだ少女を生き返らせたそうだな」

騎士達の話は帝国での戦女神の逸話に移って行った。サーナは彼等の話を聞いて、一つ分かった事があった。デリックは祖国の為に仲間を裏切り、味方を殺そうとした。アンバッスは祖国の為に剣を振るい『敵』を斬った。どちらも同じ祖国だ。

「デリック……あんた、結構そそっかしい所あったもんね」

ポロリと、一粒涙を零し、サーナは部屋へ戻っていった。最愛だった男の死に様を知る事が出来た。死んだ理由を知る事が出来た。彼が目指した理想を知る事が出来た。

今夜夢であったら、唇が無くなる前に『馬鹿な事するな』と叱ってやろう、そして甘えてやろう。それから、お別れしよう。サーナはそんな風に思うのだった。

「俺は明日、エバンスに戻らねばならん」

「え……」

今日も訓練場に座り込み、打たれた肩を擦りながら息を整えていたサーナは、アンバッスの言葉にポカンとした表情を向けた。

『明日エバンス帰る』それでは明後日から自分はどうすれば良いのか、何をすれば良いのか分からない。何時の間にか、アンバッスと剣を打ち合う毎日を生き甲斐にしていた。生きる目的にしていたとも言えるだろう。

「……そんな顔をするな。　明日が最後のチャンスだ、今日は良く寝ておけ」

「？」

「デリックのナイフを取り返したいなら、な」

「っ！」

翳りを帯びて不安げに揺れていたサーナの瞳に強い輝きが戻る。

デリックの事は、サーナの中で既に決着が付いていた。しかし、彼を愛した事、彼の形見を持っていたい気持ちはしっかり心に懐いている。

「明日が、最後のチャンス……」

そう呟き、サーナは内から湧き出す想いに闘志を燃やした。

翌日――

訓練場には大勢の騎士が顔を見せていた。普段とは違う雰囲気に一瞬訝しむも、人の視線には慣れているサーナは、何時も通り武器棚から片手剣と盾を持って訓練場の中央に歩み出る。其処には何時通り、長剣を持ったアンバッスが待っていた。

両者が構えた所で手合わせが始まる。盾で剣の軌道を隠しながら接近したサーナは、脇を閉めた小さい動作で斬りつける剣をギリギリまで盾で隠し、最も剣速の上がる所で打ち放った。しかしこれは体捌きで簡単に躱される。

盾側に躱すか、剣側に躱すかを見極め、剣側に躱したアンバッスに牽制を掛けながら一歩下がりつつ盾を翳す準備、もう半歩下がった所で薙ぎ払いながら翳した盾ごとぶつかって行くように突貫を仕掛ける。

突貫中は盾の後ろに突きの構えで剣を水平にし、ここから袈裟斬りや横薙ぎに変化出来るよう余裕を持たせる。

が、アンバッスの豪剣は盾ごと持っていくような強烈な逆袈裟でサーナの突貫を押し返すと、更に叩き落とすような斬り下ろしで盾の上部を打ち付ける。

そのまま体勢を崩される前に盾を放棄して避けたサーナは、構えていた突きを足元へ放った。アンバッスの剣がそれを払う。払われた勢いのまま上に跳ね上がったサーナの剣は、後ろに下がりながら牽制の薙ぎで正面を通過。

左肩まで移動した剣の柄を両手で握ったサーナは、振り上げた剣で渾身の一撃を叩き降ろした。呼応するように、アンバッスの剣が迎え撃ちに斬り上がる。バキィンという強烈な金属音が響き、サーナの剣は空高く舞い上がった。

『ああ……負けちゃった、やっぱ駄目かぁ』

「ふん……まあ、合格だな」

何処か心地良い敗北の余韻に浸っていたサーナは、アンバッスのそんな言葉に首を傾げた。見ると、アンバッスの模擬長剣は半ばから圧し折れていた。サーナの全身のバネを使った渾身の一撃は、丈夫な模擬剣を折る程の威力を叩き出したのだ。

アンバッスは懐から上質な布に包まれたナイフを取り出すと、フレグンス王室の印が入った書簡と共に両手で掲げるように持ち上げた。そしてサーナに跪くように言う。サーナは言われるがまま膝を付いた。

「前例の無い事なんでな、まだ正式な手続きは踏めない。だが、俺の名において騎士を名乗る事を許す」

「へ？」

アンバッスは数日前から王都に手続きを要請して新たな騎士を現地で選定し、王国騎士の証を与える許可を申請していた。三日程仇討ちの相手をしてやった所でサーナに素質がある事を見抜き、少々スパルタ方式だがここまで剣を仕込んでいたのだ。

「このナイフは騎士の証として与えられるモノだ。受け取るか？ノース家に与えられた騎士の証を」

「えと……謹んで、御受けします？」

サーナは嘗てデリック・ノースが賜った騎士の証を受け取り、デリックの戦死で途絶えたノースの名を受け継いだ。

「歓迎するぜ、サーナ！」
「今日から俺たちは仲間だなっ」
「アイツの分まで頑張れよー」

訓練場に整列していた騎士達がヒューヒューと囃し立てたり、拍手を贈ったりしてサーナの入団を歓迎した。

元春売りの女騎士、サーナ・ノース。後に『女帝騎士』と謳われるカリスマ騎士が誕生した瞬間だった。

ちなみに、エバンスに戻ったアンバッスは遊びに来ていた朔耶に『最近フラグ立て過ぎじゃない？』とからかわれていた。

「何の事だ？」

「自覚無しですか……」

クルストスの残照（後書き）

アンバッスと春売り娘の話～から始まったんですが、こんな感じに纏まりました。

ポルモーンの遺影（前書き）

ちょっとエロいかも。

ポルモーンの遺影

ゴトゴトと車体を揺らしながら、それなりに整地された街道を走るティルファ式機械車。ササの街からアーレクラワの街を結ぶ定期便、車内には八人程の乗客が膝を付き合わせる形で座席に座っている。

地元の部族達がこの一帯を移動する時は馬車か乗用犬を使うので、乗り合い機械車を利用するのはもっぱら観光や商人達だった。

車窓から自然の石柱が並ぶポルモーン渓谷の不思議な景観を眺めつつ、フエルト卿は隣でぼーっとしているリリーに声を掛けた。危険な魔獣も駆逐されて安全が確保されたポルモーン渓谷は、アーサリムの観光地として連日多くの人々が訪れる。

「もう直ぐポルモーンに着く、そこからは手配した馬車に乗り換えるぞ」

「はいー」

山賊襲撃事件で帝国貴族達にも受け入れられ、魔族組織（ヨールテス）による精霊神殿サクヤ派勢力扇動工作事件では帝国に多大な貢献を果たして信頼も得たフエルト卿だったが、その後もこれと言った要職に就く事もなく、日々静かに暮らす毎日を送っていた。

朔耶を始めアーサリムで活躍する若者達の噂を聞くに付け、自分が出張る時代は終わったと感じたらしく、ある種、野心の気持ちが

薄れたような隠居生活に入っており、本人もその穏かな環境を気に入っている。

そんな平穏が続いていたある日、フエルト卿の下に各地から故郷に辿り着けて元気に暮らしてるという元奴隷使用人達からの手紙が届いた。それを読んだフエルト卿はリリーにも里帰りをさせてやろうと思ったのだ。

リリーは『もう帰るところはないからと』乗り気でなかったのだが、フエルト卿は『ポルモーン渓谷はもう安全なのだから、一度故郷に戻ってみてはどうか』と帰郷を進めた。

「一度、お前の故郷を見ておきたいのだ」
「だんなサマ、その口説き文句を使うには、少しお年を召しすぎてるのでは？」
「……私はまだ三十七なのだが」
「二十年くらいおそいですか？」

そんな調子の答えが返って来て、柄にもない事を言うものでは無かったかと溜め息を吐くフエルト卿だったが――

「でも……嬉しいです」

ふんわり微笑むリリーは帰郷する事を承諾した。そんな訳で今、フエルト卿達はアーサリムのポルモーン渓谷を訪れている。

ポルモーンの街から少し離れた平地に、かつてリリーが住んでい

たプックという集落があった。人狩りの放った魔物に襲撃されて壊滅した筈の集落は、当時よりも少し立派な比較的新しい建物が並ぶ村となって再建されていた。

「……ひとが、戻ってます」

「復興したのだろう、環境の整った場所には人が集まるものだ」

馬車が村に入ると、村人達が遠目に様子を窺っている姿が見受けられる。宿らしき建物の前で馬車を停め、宿泊が可能か御者の付き人が訊ねに行く。リリーは窓にベタっと手をつけて夕焼け色に染まるプック村の風景を見渡していた。

「あ……っ」

通りを眺めていたリリーは何かに気付いたように声を漏らすと、馬車を飛び出して駆け出した。外出時、リリーの突飛な行動は何時もの事な為、フエルト卿はやれやれといった表情で馬車を降りると、慣れた様子で後を追う。

「リオ！　セリム！」

「え……リリー？　あなた、リリーよね？」

「うん、あたしだよーっ　みんな無事だったんだねー！」

「リリーも無事だったのね！　ケールとカリナもこの前帰って来たんだよ」

集落に住んでいた頃の幼馴染達。人狩りに攫われた後、この二人は魔族組織の施設で使用人をやらされていたらしい。一緒にキトで売られたケールとカリナの二人も無事に帰って来たと聞き、本当に良かったと嬉し涙を浮かべるリリー。

再会を喜び合い、昔を懐かしむ彼女達を邪魔するのも無粋かと思ったフエルト卿は、少し離れた場所から様子を見守っていた。

「ねえ、リリー……あんたのその格好って、それに……あそこにいる貴族みたいな人」

「あの人は、わたしの働いてるお屋敷のだんなサマ、本好きで魔術士なひとなの」

ちなみに、フエルト卿が毎日本を読んでいるのは他にする事がないからであって、別に特別本好きという訳ではない。

キトでフエルト卿に買われてから帝国のお屋敷で使用人として働いている事、フエルト卿が今回の帰郷を勧めてくれた事などを嬉しそうに話すリリーに対し、リオは眉を顰めると吐き捨てるような溜め息を吐いた。

「あんた……ちょっとお馬鹿な子だとは思ってたけど、そこまでとは思わなかったよ」

「リオ、よしなよ……」

「え……？」

急に機嫌が悪くなった幼馴染のリオに、キョトンとした表情を向けるリリー。セリムがリオを宥めようとしているが、リリーの不思議そうな表情が気に入らなかったのか、リオはさらに悪態を浴びせ掛けた。

「まさか自分の飼い主と帰省するなんて思わなかった、この前帰って来た二人がどんな思いをしながら故郷を目指していたか」

しかも貴族の馬車で乗り付けてくるなんて、あたし達への当て付

けかと、リオは感情を昂らせる。

魔族組織の施設で使用人として使われていた二人は、他の使用人達とも同じく洗脳状態にされてたが、その間の記憶は残っている。彼女達の仕事は普通のお屋敷などで働く使用人の業務と内容は似たモノだったが、清掃業務には研究施設で破棄された魔物の実験体や、変異に失敗して肉塊となった死体の片付けなども含まれており、他にも護衛隊員や、人狩りが居た頃には彼等の世話もさせられていたのだ。それらの経験の記憶は、彼女達の心に深い傷と影を残していた。

リリーと一緒にキトで売られた二人は、それぞれキトとエバンスの貴族に買われていたのだが、奴隷制禁止令が出たあと大した路銀も持たされずに放り出された為、春売りをしながら旅を続けて何とか故郷に辿り着いたのだ。

貴族の元で幸せそうにしているリリーを見たリオは『自分達は酷い目にあって来たのに、どうしてこの子だけ……』という嫉妬から、リリーに辛辣な言葉を投げ付ける。

「あんた、早く『お屋敷』とやらに帰れば？」

彼女はそう言って踵を返すと去っていく。セリムが慌てて後を追いかけようとして一度振り返り、呆然としているリリーに何か声を掛けようとしたが、結局何も言わずに行ってしまった。

途中から様子がおかしくなった彼女達の、一連のやり取りを見ていたフエルト卿が、立ち尽くすリリーの傍にやって来る。

「どうしたのだ？　急に険悪な雰囲気になっていたようだが……」

「……だんなサマ」

リリーは『なんでもないです』と答えて微笑んだ。

「そんな無理矢理な笑みを浮かべられてもな」

乙女心など分からずとも、感情を押さえ込んでいる事ぐらいは簡単に見抜けるフェルト卿は、詳しく聞き出すべきか、そっとしておくべきかと迷う。プライベートな問題になるだけに、何処まで踏み込んで良いのか判断しきれなかった。

そうこうしている内に宿の部屋が取れたと付き人が知らせに来たので、フェルト卿はリリーを連れて宿に向かう。

「リリー、私に出来る事ならなんでも言いなさい」

「はい……」

明日はリリーの実家があった場所を尋ねる予定だったが、こんなに哀しげな気配を纏うリリーを見るのは初めてだという事に気付いたフェルト卿は、今回の帰郷は間違いだったのではないかと、少し後悔を感じていた。

その夜――

寝酒を嗜んでいたフェルト卿の部屋を、寝着姿のリリーが訊ねてきた。珍しい事もあるものだと思いつつも、夕方の事があったので何か相談事かと部屋に招き入れると、リリーはフェルト卿に身を預けて小さく懇願する。

「だいてください……」

「リリー、気持ちは嬉しいが落ち着きなさい」

故郷に戻って早々動揺するような出来事に合い、気持ちが昂(たかぶ)っているのだろうと諌めるフエルト卿。

「だいてください！」

「リリー」

「だいて……ください……」

「……」

軽く溜め息を吐き、フエルト卿はリリーの身体をそっと抱き締めた。腹部や両腕から伝わる温かさと柔らかさに、あの時の事を思い出す。この温もりが消えていく恐怖、あんなのは二度と御免だ、と。

ベッドに腰掛けた体勢でリリーを抱き締め、暫らくそのままじっとしていると、リリーは腕の中でもぞもぞと動いて、フエルト卿の身体を這い上がるようにしながら首筋に舌を這わせる。フエルト卿はリリーの肩を掴んで引き剥がした。

「やめなさい」

「どうして、何もしてくれませんか？」

「……」

「わたしが、汚れてるから、いやですか？」

しゅんとなって俯くリリーに、フエルト卿は締め付けられるようなもどかしい感情に襲われる。

「そうではない！」

「じゃあ、なぐさめてください」

「こんなやり方では駄目だ、何があったのか理由を話しなさい」

理論的に解決を図ろうと考えるフエルト卿と、刹那的に温もりを求めるリリー。両者の間には男性的な思考、女性的な感情、という気持ちの擦れ違いがあった。フエルト卿にとって、問題を一時の悦楽で忘れる事は逃避でしかない。

リリーにとっては、問題の解決を図る事よりも先ず今、心を支えてくれる温かい繋がりが必要なので求めているのだが、優先順位の初めに何を持ってくるのか、リリーとフエルト卿の性格の違い、価値観の違いが現われた形だった。

「……してくれないなら、ひとりでします」

「まてぃ」

思いも寄らない行動に出ようとしたリリーに、フエルト卿は思わずチョップして止めた。舌足らずな口調で見た目も人畜無害、のほほんとした印象は外面だけならアホの子にも見えるリリーだが、それ故なのか時々とんでもなく露骨で挑発的な誘惑を仕出かす。

「いたいです」

「あのなリリー、私はお前を大事にしたいのだ、そこは理解してくれ」

両手で頭を抑えて蹲るリリーに、何だか色々な力が抜けていく事を感じながら、フエルト卿は自身の気持ちを懇々と伝える。

「いま、叩きました」

「いや、それは……」

「したいです」

「……」

根負けしたように溜め息を吐いたフエルト卿は、リリーの顎をそっと持ち上げて唇を重ねた。まだ数えるほどしか味わった事のない果実の膨らみは、ふわりとした柔らい感触でフエルト卿を迎える。

「ん……たりないです」

「やれやれ……」

潤んだ瞳で見つめられ、尚も求めてくるリリーに対し、フエルト卿は『珍しく我侭を言っているのだから偶には応じてやるのも良いか』と自身を正当化しつつ、リリーの身体をひょいと抱え上げるとベッドに横たえた。

やがて、宿部屋の空間は切なげな唄に満たされていく――。

「だんなサマ、すこしは運動したほうがいいですよ?」

「……私は魔術士だ」

言い訳にならない言い訳を返すバテバテでお疲れ気味なフエルト卿の割と貧相な胸板に頬を乗せて甘えるリリーは、規則正しい心臓の音、少し早めの鼓動に耳を澄ましながら、暫しの余韻に浸っていた。

「それで、何があったのだ?」

「……もう、だんなサマはデリカシーがないですね」

少し不満気にぶーたれながら、リリーは幼馴染とのやり取りを掻い摘んで話す。事情を理解したフエルト卿は、自分の配慮不足だったかと反省した。しかし、リリーは首を振る。

「だんなサマは、わるくないですよ」

「しかしだな……」

「これはもう、仕方がないんですよ」

「……誤解を解こうとは思わないのか？　ちゃんと話をして説――」

問題の解決に向けて尚も話を続けようとするフエルト卿の唇を自分の唇で塞ぐリリー。

「リリー、私の話を――――だから話を――――」

唇を塞いでは離し、フエルト卿が話題を続けようとするとまた塞ぐ。ある意味、言って聞かない相手に対する実力行使である。

「分かった……もう何も言わん」

「……怒りましたか？」

馬乗り状態で顔を覗き込んでくる確信犯的なリリーの問い掛けに、フエルト卿はとりあえず捕まえて反撃してから横になった。

翌日――

リリーの実家があった場所を訪れた二人は、朽ち果てた廃墟の前で暫し辺りを見渡していた。リリーの家はこじんまりとした一軒家で、魔物に襲撃された時のまま一年近く放置されており、周囲も嵩高い雑草に覆われて荒れ果てた状態だった。

「――風は集い土は舞う砂塵の壁となりて――風は集い彼の者を纏う兜となりて――」

フエルト卿の連続した詠唱で周囲の雑草がザアッとほぼ根こそぎ毟り取られると、近くの巨木に纏わりつく。

「べんりですねー、お掃除につかえそうです」

「そこまで調節は効かんよ、屋内で使えば絨毯が剥がれてしまう」

試した事はあるらしい。

天井と壁の崩れた廃屋の中に入っていくリリーにフエルト卿も続く。床が黒く汚れているのは血の跡だと見抜くフエルト卿。玄関を入って直ぐ、隣の部屋の出入り口付近でリリーがしゃがみ込む。その部分の床も黒い染みが広がっていた。

「……おかあさん、おとうさん」

「……」

リリーの足元には変色した白骨が散らばっている。半分砕けている頭部らしき骨の塊と、比較的原型を留めている頭蓋骨が並んで転がっていた。魔物の気配による影響なのか動物等によって遺体が持ち去られる事もなかったらしく、ほぼ全身の骨が残っていた。

「近くに、墓地はあるのかね？」
「……はい、集落のきょうどう墓地があります」

少し鼻を鳴らしながらリリーは答えた。家の中は遺体こそ触れられる事無く朽ちたようだったが、他の部分、戸棚や引き出しは全て開かれ、家財道具で壊れていない物は殆ど持ち去られているようだ。人狩りの仕業ではなく、恐らく盗賊の仕業だろう。

遺品になるような物も無いので、リリーの両親の骨だけ集めて二つの袋に納めると、廃屋は宿で貰ってきた油を撒いて燃やし、浄化する。瞬く間に炎に包まれた廃屋は、細い黒煙となってアーサリムの空へと昇って行った。

共同墓地にやって来ると、リリーの案内で埋葬場所に向かう。この集落では予め埋葬場所が決められていたらしく、リリーの両親を埋葬する場所が、並び立つ墓石の間にきちんと空けられていた。墓石はこの辺りに転がる石を積む。

遺骨を埋葬する為に穴を掘ろうと手を翳したフエルト卿は、何となく魔術を使って掘るべきではないような気がして、自分の手で掘り始めた。埋葬場所に選ばれる場所だけに、土はそれほど硬くない。リリーも石ころや草の根を分けて埋葬を手伝う。

「ふう、こんなものか……。リリー、遺骨を」
「はい」

遺骨の入った袋を穴の底に並べると、土を被せて埋めていく。手頃な石を持って来てどっこいしょと置けば、お墓の完成だ。これか

らは時折、墓参りにこの地を訪れる事を勧めようとして、フエルト卿は昨晩の話を思い出す。

『どうにかならんモノか……』

その後、手を洗おうと村の井戸までやって来たフエルト卿とリリーは、こんな場所にもサクヤ式ポンプが設置されている事に驚きつつ墓場の土を洗い落とし、とりあえず宿に戻ろうかと考えている所へ、水汲みにやって来た昨日の二人組と鉢合わせした。

「あ……」
「っ……」

フエルト卿と並び歩くリリーを見た二人は、思わず立ち止まって驚いたような表情を向けてくる。また心無い視線でも浴びせられてはイカンと、フエルト卿はリリーを庇うように二人との間に立った。

実戦派魔術士であるフエルト卿は、痩せぎすな見た目の割りに、意識すればそれなりの威圧感を放つ事も出来る。フエルト卿という壁に阻まれてリリーの視界から外されたリオとセリムは、戸惑う様子を見せながらもその場から立ち去ろうとしなかった。

何やらこちらを窺いながらもじもじと相談している二人の様子に『水を汲みに来たのではないのか?』と疑問に思うフエルト卿。

「あ、あの……」

そのうち、リオが意を決してフエルト卿に声を掛けた。

「何かね?」

「ひ……っ」

別に威圧した訳ではなかったのだが、眉間に皺を寄せた不機嫌な普段顔で応対されたリオは首を竦めた。何時ぞやの王都フレグンスで晩餐会などやっていた頃のような作り笑顔でなら、怖がらせる事もなかったかもしれない。

「だんなサマ、だめですよ？」

「……私は普通に返事をしただけだぞ」

「あ、あの！　ごめんなさいリリー、あたし……」

「ケールとカリナから聞いたの……」

ケールとカリナはリリーが売られた先とその顛末を知っていた。リリーは決してリオが思っていたような幸運などではなかった事、何度も売られたり死に掛けたり、帝国領では一度本当に死んだらしいという話まで聞かされ、リオは激しく後悔した。

「あ、あたし知らなくて……それで」

「そっかあー、リオ達もたいへんだったんだよね」

「ごめんね、ごめんね」

「もういいよー、リオ達と仲直りできて良かったよ」

縋るようにして涙ながらに謝るリオと、彼女の背中を撫でて宥めているリリー。その光景を見ながら、フェルト卿は自身がリリーに感じている安らぎは『まさか彼女の母性に惹かれているのではあるまいな』と、少し心配になったりする。

自分が悩むまでも無く問題が解決したのは良しとして、リリーの事を一人の女性としてきちんと愛せているのか、小さな悩みが出来

てしまうフエルト卿なのであった。

「だんなサマ、きょうの夕食にお友達を呼んでもいいですか？」
「ああ、構わない。宿の食堂はそこそこ広かったからな、一部を貸し切りにして貰うか」

友人達と喜び合うリリーの姿を眺めながら、フエルト卿はこの村に別荘を建てるのもよいかと考える。

『まあ、時間はたっぷりあるのだ』

政争や派閥争いから離れて一年近く、凡そ青春時代を闘争に明け暮れて過ごしてきた。これからの隠居生活で遅い青春を謳歌してみるのも良い。フエルト卿はそんな風に思いながら、のどかなプック村の風景に目を細めた。

「だんなサマー！」
「ああ、いま行く」

『ご主人様』を置いて先に行ってしまう『使用人』に苦笑しつつ、フエルト卿は通りの先から手を振るリリーの元へと踏み出した。

ポルモーンの遺影（後書き）

以上、フエルト卿とリリーの後日談でした。

王都の昼下がり

「え？　お兄様でしたの？」
「そだよ？　話してなかったっけ？」
「初耳だったと思うけどねぇ」

大学院の課外授業として、王都から少し離れた場所にある湖の畔で毎年院生達の合同キャンプを行うという年間行事化計画が進められて行く。そんな平穏な日々が続く中、サクヤ邸には夏休みなどで休暇を取っている朔耶の家族が滞在していた。

父や母はあまり外出せず屋敷でノンビリ過ごしているのだが、弟と兄は積極的に街へ出かけては観光を楽しんでいる。弟が主に馬車の中から一般開放区や貴族街の景色を楽しんでいるのに対して、兄は自分の足で歩き回り、下街の方にもよく出向いていた。
可愛いファンタジー世界の住人な女の子を見つけてはＧＥ・ＫＩ・ＳＹＡし捲っているようだ。

外見的特徴からして朔耶の関係者らしい若い男性の姿がここの所よく学院生達にも目撃されており、街で朔耶と親しげに話している様子から、実は『サクヤが異世界から連れて来た恋人では無いか』などと噂されていた。

「ブーッ」
「きゃあ！」

朔耶はお茶を噴いた。

「もう！　サクヤったら、お下品ですわよっ」

「ご、ごめ……あんまりにもショッキングな話だったから、つい」

咽せながら詫びる朔耶のテーブル回りでは、『戦女神（サクヤ）のお清め』を受けた菓子にあり付こうと、片付けを手伝う振りをして寄ってきた院生達の争奪戦が繰り広げられ始めた。

精霊神殿のお墨付きで事実上の生ける伝説と化している朔耶の加護に少しでも触れたいとする信心のなせる行いであり、決して特異な性癖による動機では無い、とは言い切れない者もいるが、ともあれ朔耶の学院生生活は何時もこんな感じで賑やかだった。

朔耶達が学院のサロンできゃーきゃーと大騒ぎしている頃、王都の一般区にある市場では重雄（あに）がデジタルカメラ片手に被写体漁りをしながら歩いていた。

所構わず誰彼構わず激写し捲るという暴走は初日に戦女神な妹からお灸を据えられたので、今は比較的落ち着いている。ぶらぶらと街を散策する重雄は、露店市場を抜けた所で偶々下街まで買い物に来ていた聖騎士団長、フューリと再会した。

「あ……」

「おおう、お久しぶりぃ！　私服姿もびゅーちふるっ」

何時もの豪華な甲冑姿ではなく、シンプルな街服を着流しているフューリは、近衛騎士団長とも互角にやりあえるような女傑とは思えないほど穏かな雰囲気を纏っている。

「貴方とこうして話すのは初めてですね」

フューリは妙なテンションの重雄に変わった人だなーという印象を持ったが、異世界の人間だからコレが普通なのだろうと、朔耶が聞いたら全力で修正しそうな納得の仕方をしていた。

「今日は観光ですか？」

「そんなところです」

二人並んで歩きながら軽く雑談を交すうち、朔耶が大学院で学院生キャンプを計画しているという話題が持ち上がった。フューリも聞いた事はあるらしく、神殿からも指導員を出すとか出さないとかいう話があった事を明かす。

「いつもお騒がせして申し訳ない」

「いえいえ、サクヤ様は何時も私達に素晴らしい恩恵を与えて下さってます」

「ふーむ、すっかり神格化されとるな」

フューリに限らず、屋敷の使用人や時々訪ねて来る偉い人達の朔耶に対する接し方に、重雄は今更ながら朔耶のオルドリアにおける立場というモノを実感した。自身も朔耶の神格化（それ）に加担していたのだが。家に帰れば、朔耶は何時もの朔耶だ。

自分の中で妹を別人のように感じる、という事は今の所無い。重雄はその事に少し安堵するのだった。

夕方から聖騎士団の任務で街の見回りをする事になっているフュ

ーリは、区画門の前で重雄と別れた。『うほっ　いい被写体！』とか言いながら街娘を激写していた重雄は、『ではまた』とフューリに手を振り、カメラを構えて去っていく。

『そういえば、弟君は帝国に貸与された魔導砲の製作に携わっていたとか……』

父君はそれらサクヤ式の心臓部ともいえる魔力集積装置の開発者。

『兄殿（シゲオ）は異世界の乗り物を使いこなす御者として素晴らしい腕を持っておられるようだし』

つくづく『サクヤ様の家系は賢者の家系なのだな』と感嘆するフューリは、重雄の事を異世界の御者だと思っていた。

夕方、デジタルカメラのメモリー交換に帰ってきた重雄は、朔耶の学院での話を聞いて萌えていた。孝文（おとうと）は工房で藍香と小物作りをやっているらしく、今から馬車で迎えにいく事になっている朔耶は、夕飯も向こうで済ませるかもしれないと、何故か厨房で指揮をとる母に話している。

「俺も途中まで同乗プリーズ」

「まだ撮影しに行くの？」

夜の王都の下街を激写するのだと重雄は拳を握って見せた。　主

に春売り通りの辺りを。

「今度バーリッカムに連れてってくれよー、温泉あるんだろ？」
「温泉～？　春売りさんが目的なんじゃないの～？」

「勿論だ！」

胸を張る兄。
兄を張る朔耶。

サクヤ邸の玄関先でどつき漫才をやっている兄妹に『俺も行きたい』とは言えない父が聴こえない振りをしながら、高級なソファーに身を沈めてフレグンス産のワインを嗜んでいた。

「あんま羽目外さないでよ？」
「分かってるって、兄を信用しなさい」
「お兄ちゃんだから信用できないんだけど……」

区画門前で馬車を降りた重雄は門を潜って一般区へ、朔耶は自分の工房へと馬車を走らせた。
重雄の護衛に関しては王都内なら治安も良いし、朔耶の身内の者に失礼を働こうとする輩はまずいないので必要ないと、本人からも申請してある。お陰で重雄は気軽に下街の通りを行く事が出来る。

王都全域に街灯が設置されてからは、少しずつ夜出歩く住人も多くなり、夜間に営業する店も以前に比べて随分と増えていた。

その分トラブルも増える。単純に夜間営業の準酒場が増えたので、客同士の諍いの場も増えたという事もあるが、今までなら『酒場といえばここ』と決まっていた店が老舗の古い店となり、彼方此方に出来た新しい店を梯子する酔っ払い客が拡散している状態。

複数の箇所で同時に喧嘩騒ぎなどが発生すると、鎮圧に向かう衛兵が足りなくなったりする事態も起こり始めていた。

そういった事情に対応する為、トラブルを起こしそうな者を事前に牽制する意味で聖騎士団が下街の巡回をしていたりする。豪華な甲冑姿の聖騎士団が集団で歩けば、その姿だけでも一般民には威圧効果があるのだ。

以前ならエリートである彼女達が通常任務で夜の下街を巡回する等という仕事を請け負う事などあり得なかったのだが、これも閉鎖的だったフレグンスの体質が改善されて行く良い傾向だとして、改革派からは肯定的に思われていた。

とある酒場通りに差し掛かった時、騒ぎが起きている事を聞いて駆けつけるフューリ達。

「む、あれか……少し人数が多いな」

「傭兵崩れ、ですかね……？」

隣接する酒場で戦功を語っていた傭兵崩れのグループ同士が口論となり、殴り合いの喧嘩に発展。店の前で暴れている。

ぐでぐでに酩酊しているならまだしも、動きが鈍らない程度の中途半端な酔っ払い方をしている上に、傭兵稼業をしていた人間なの

で腕っ節も強く、周りの一般人には手が付けられない。
野次馬を退避させ、双方に割って入るフューリ聖騎士団。それなりにしっかりした実力を持つ彼女達だが、団員が綺麗所で編成されている為か、こういった手合いには見た目から侮られてしまう事もよくあった。

「なんだ、ねーちゃん達！　相手してくれるってのかー？」
「げひゃげひゃっ」

「女はすっこんでろ！」
「聖騎士団なんざ、神殿でお祈りでもしてりゃいいんだよ」

傭兵崩れ達は其々下卑た言葉でからかったり、罵倒を浴びせたりと挑発を始めた。
王都に住む者や馴染み深い者、また信心深い者達なら、精霊神殿に仕える聖騎士達に悪態を吐くような事は決してしないのだが、彼等は偶々王都に立ち寄った余所者で、所謂無頼漢でもある。

「貴様、我等を愚弄するか！」
「やめんか、挑発に乗るな」

憤る部下を諫めたフューリは、騒ぎを収めるよう呼びかけた。

「お前たちとにかく解散しろ、喧嘩なら街の外でやれ」

「けっ　お高く止まりやがってよお」
「フレグンスの騎士なんざ、戦女神がいなきゃへっぽこ揃いの癖になぁ」

挑発に煽られた聖騎士達が、ニヤニヤ顔を向ける傭兵崩れを睨み

つけている。だが、そんな部下達を宥めて、まったく挑発に乗らないフューリは冷静に鎮圧を指揮する。それが気に入らなかったのか、傭兵崩れ達は酒の勢いも手伝ってあらぬ暴挙に出た。

「へへ……」
「っ！　な、なにを！」

突然、傭兵崩れの一人が聖騎士団員の背後から組み付くと、羽交い絞めにして自由を奪う。

「貴様、何をしている！」
「うわっ　こら！　放せ！」

彼等は次々と他の聖騎士団員にも飛び付き、組み伏せていく。喧嘩をしていた双方の傭兵崩れ同士が聖騎士団に襲い掛かった。

回転ヘッドメイスに手を掛けたフューリには、三人ほどが飛び掛かる。一人は躱し、腕を掴んできた一人を振り払い、メイスを手に取った所で、足にタックルしてきた相手に転倒させられ、そのまま三人に組み敷かれた。

「お、お前たち……何をしているか分かっているのか！」
「へっへっ　聖騎士様は戦闘力がねぇってのは本当みてぇだな」

実際は傭兵崩れとはいえ、酔っ払いの一般民相手に武力制圧を仕掛ける事を躊躇った為、その隙を突かれた格好だ。武器を持っていない相手にメイスを振り翳す事は躊躇われるし、騎士としてのプライドもある。エリートの甘さでもあった。

「うはっ　何処のエロゲシチュだこれ、ＧＥＫＩＳＹＡ！」

その時、へんな叫びが聞こえて閃光が走った。組み敷かれているフューリ達にフラッシュが瞬く。

一瞬、戦女神の放つ『死の閃光』の事が頭に浮かんで動きを止めた傭兵崩れ達は、奇妙な服装をした男がピカピカ光る板を持ってうはうは言っている姿に怪訝な表情を浮かべる。

「なんだ？　ありゃ」

『シゲオ殿……？』

カメラを持った重雄はおもむろに被写体群へと歩み寄ると、近くで押し倒されてる聖騎士の上に覆い被さる男の腹を蹴り上げた。

「てめぇ！」

コノヤローと憤りも露わに立ち上がる男だったが、一歩踏み出した所で腹を押さえてよろけると、膝をついて吐いた。その顔面を横に蹴り抜かれて、男は嘔吐物を撒き散らしながら地面を転がった。容赦ない攻撃に色めき立つ傭兵崩れ達。

「このガキィー！」
「んだぁこらぁ！」

蹴られた男の仲間や手の空いてる傭兵崩れが重雄に襲いかかる。

「やめろ！　その方はサクヤ様の――！」

『サクヤ様の御家族にもしもの事があっては！』と焦るフューリは、三人に組み敷かれたまま叫んだ。しかし、彼女は思わぬ展開に

目を瞠る事となった。

「まさに、俺ヒーロー！」

という謎の雄叫びをあげながらジャンプして回転しつつ左右に蹴りを放つという、某最後の戦いのマーシャルアーツ使いぽい器用な攻撃を見せて、飛び込んで来た傭兵崩れ二人を文字通り蹴散らした重雄は、助け起こした聖騎士にカメラを預けると――

「スーーーーーー」

徒手空拳で武術の心得があるっぽい構えをとった。

「カアアアアア――――」

フューリ達が見た事の無い、異世界の体術らしき隙の無い構え。無造作に殴りかかってきた一人の顎を掌でかち上げ、上体が仰け反った瞬間、相手のベルトを引っこ抜くように掴み上げて背中から落とす。と同時に踏みつけ攻撃。しかも二発。

一発は腹の辺り、もう一発は太腿を削るように踏み落とす。一瞬動きの止まった一人に低い姿勢で突っ込んで右の裏拳で脇の下辺りの急所を一撃、続けて左フックを脇腹に打ち込み、右肘を鳩尾に打ち下ろす、そして左のアッパーカットで仕留める。

その体勢からクルッと半身に振り返って最初の構えに戻った。

「かかってきんしゃい！」

某ハンガーを回す報われない刑事のような怒声で傭兵崩れ達を威嚇する。傭兵崩れ達は重雄の威嚇に挑発され、こんな若者（ガキ）に舐めら

れて堪るかと、組み敷いていた聖騎士を放り出して其方を攻撃目標に定めるという痛恨のミスを犯した。

解放された聖騎士達が一斉に反撃に出る。無礼を働かれた羞恥と怒りで、躊躇の無くなった彼女達は、遠慮なく傭兵崩れ達を叩きのめした。

彼女達が鬱憤を晴らしている間、重雄は片っ端からローキックで傭兵崩れの動きを止めて回るサポートに徹していたので、迅速に制圧する事が出来たのだった。

連行される間、ほぼ全員が左足を引き摺る羽目になった傭兵崩れ達は『フレグンスの女を怒らせてはいけない』という教訓を得た。

翌日、一般開放区――

「お、こんちゃー」
「あ……シゲオ殿」

喧嘩の仲裁に入った聖騎士団員が襲われる等という不埒な事件が起きた事で、当面は夜の見回りから外される事になったフューリ達は、昼の一般開放区を巡回する任務に就いていた。

「昨夜は助かりました」
「いや～いいもん撮らせてもらいました」
「は？」
「いや、こっちの話」

昨夜の騒ぎの後、フューリから『貴方の事を御者だと思ってた』という話を聞いた重雄は、朔耶にその事を話して笑いを取っていた。朔耶には『確かに運転手ばっかりやってたもんねー』と非常にウケていたとか。

二人はそんな話をしながら、一般開放区の遊歩道を並び歩く。フューリは恥ずかしながら、武器を使う事を躊躇って不覚を取ったのだと昨日の失態について打ち明けた。

遠回しに素手の格闘術を教えて欲しいなぁなんて意味が込められているのだが、それに気付くには含みの難易度が高すぎた。

「普通の軍隊なら素手での格闘術も訓練内容にありますが、私達は精霊術の訓練に比重が偏るので……」

「得手不得手はありますもんねー」

「大体がこの甲冑を着けての活動なので、使い所の無い徒手空拳の訓練はあまり重要視されないので……」

「適材適所っていいますもんねー」

「これからは任務の質も変わってくるので、今までのようにもいかないのですが……」

「時代は移ろい行くもんだからねー」

「ですが、指導出来る人材が居ないので困っているのです」

「人手不足は何処も深刻だねー」

「……」

駄目だ。この人は遠回しでは駄目だ、と悟ったフューリは、思い切ってストレートに頼んでみる事にした。

「よろしければ、あなたの格闘術を是非指導して貰えませんか？」

「ん～、俺も人に指導出来るほど修めてないんだけどなぁ」

そう言ってスッと真剣な表情になった重雄に思わず怯むフューリ。先程までの緩い空気とはまるで違う、張り詰めたような緊張感が漂う。これが武人の纏う気配なのかと、フューリは重雄の何処か遠くを見つめるような深い瞳を覗き見た。

当の重雄は内心で『フラグ回収でありますか！』とか『スーパー師弟フラグ発生！』とか騒いでいた。何がスーパーなのかは不明である。これは単に、信仰レベルでカリスマ戦女神な朔耶の家族である事に加え、ＧＥＫＩＳＹＡとか騒いでいる普段とのギャップがあり過ぎて、その落差をフューリが重雄の放つ重圧（プレッシャー）と誤認しているという面もあった。

「あ、あの、御迷惑なら無理にとは」

「いや、迷惑って事はないんだけど……」

複数を指導するのは苦手だから、個人指導ならＯＫという重雄。フューリに反対する理由は無かった。

「じゃあフューリさんを御指名で」

「え？　私を、御指名ですか」

「御指名です」

「あ……えっと、よろしくお願いします」

日本の夏と比べると避暑地のように穏やかで快適なフレグンスの夏。一般開放区のオープンカフェでは時折、一緒にお茶を楽しんでいる聖騎士団長と異世界から来た若者の姿が見掛けられるようになったとか。

「お兄ちゃんが三次元に復帰した！」
「いや、でも異世界（ファンタジー）だからなぁ……」

何気に酷い祝し方をする妹と弟たちなのであった。

王都の昼下がり（後書き）

ちょっと練り込みが足りなかった感じですが、兄とフューリな後日談でした。

ジャバール家の晩餐会（前書き）

ちとドタバタした内容になってます。

ジャバール家の晩餐会

「……」
「……」

豪華な装飾が散りばめられた厚みのあるカーテンが、大きな窓から差し込む陽射しをスポットライトのように細く調節する。そんな光が幾重にも連なり、よく手入れされた絨毯敷きの廊下にて対峙する兄弟を照らし出す。

「何をしに来た。また問題でも起こしたのか？」
「別に。オヤジ殿が戻れって五月蝿ぇから、顔出しに来たダケだよ」

王国精鋭騎士団の仕官服をキッチリ着こなし、ジャバール家に奉仕する中流以下貴族家の娘達数人を引き連れているアウサレスに対し、王国派遣騎士団の部隊長服を適当に着流したガリウスは斜めに構えて飄々と答える。

二人とも表立ってそれを口にする事は無いが、ジャバール家の嫡男として期待され、才能にも恵まれた兄アウサレスにガリウスはコンプレックスを懐いており、アウサレスは門閥家の跡取りという重圧も受けず、好き勝手に過ごしている弟ガリウスを疎ましく思っていた。

アウサレスが引き連れている中流以下貴族家の娘達は、ソリの合

わない二人の対立には不干渉を貫き、なるべく静かに控えている。門閥ジャバール家の直系である子息二人、兄弟のどちらとも彼女達にとっては覚えを良くしておきたい相手なのだ。

ジャバール家の当主リベリオス伯爵は、そろそろ次男にも結婚相手をと、今回ガリウスを王都に呼び寄せた。素行に色々と問題もあるが、リベリオスは内心ではガリウスの事をきちんと理解しており、その行動力などを認めている。

朔耶がガリウスの縁の下的に地味な活動を評価していた事もあって評判も回復気味。戦女神と親しいという事実は、コレまでの悪評を払拭して余りある。

今夜の晩餐会には王族が出席する予定になっているので、普段以上に多くの家の令嬢達が集まる事になるだろう。同じ門閥家の令嬢を、とまでは要求しないが、中流貴族家程度で構わないので質の高いお嬢さんでも見初めてくれれば良い。

そんな風に考えていたリベリオスだったが――

「旦那様！　アウサレス様とガリウス様が廊下で決闘を！」

「……っ　ええい、またか！」

顔を合わせれば喧嘩を始める兄弟の仲の悪さにはホトホト手を焼かされていた。隠居した以前のメイド長は手慣れた対応をしてくれたモノだが、今飛び込んで来た新しいメイド長はジャバール家の派手な兄弟喧嘩に免疫が無い。

リベリオスはやれやれと頭を振って溜め息を吐きながら、壁に飾ってあるカイゼル王より賜った黒鉄杖を手に取ると、私室を飛び出

して行く。
　昔は一振りで兄弟の剣を打ち払えたものだが、最近は二人の腕が上がったのか自身が衰えたのか、簡単には鎮められなくなった。

「アウサレス！　ガリウス！　屋敷内で剣を使うなと、何時になったら覚える気だっ！」

「げっ　おやじ！」
「父上っ　しかし……！」

　長窓が内側から吹き飛び、割れたガラスが庭園へ飛び散る。千切れたカーテンに足を取られた取巻きの令嬢達がきゃあきゃあと大騒ぎして逃げ惑う。ぶっちゃけ、兄弟喧嘩の剣戟による被害よりも、リベリオスが黒鉄杖を振るった被害の方が大きかった。

　夕刻、ジャバール家の敷地内には沢山の馬車が並び、豪華な衣装を身に纏った紳士淑女達が晩餐会場のホールへと消えて行く。ジャバール家で行われる晩餐会は参加する令嬢の数が異常に多い為、実質、貴公子達のお相手探しの場と化す。

「いいかお前達、今日はレティレスティア様がおいでになる日なのだからな、くれぐれも騒ぎを起こすんじゃないぞ」

　門閥ジャバール家当主として王族をお迎えする準備に忙しいリベリオスはそう言って兄弟に釘を刺すと、会場入りを始めた交流の深い各家当主達との挨拶回りに出向いて行く。

「なんでまたレスティア姫が参加するような日に呼び出したんだよ……」

「ガリウス、軽々しく姫様の名を略称で口にするな」

「ああん？　オメーだって部屋に居る時は呼び捨てにしてるらしいじゃんかよ、よこーえんしゅーだとか言って」

「っ！　き、貴様……」

当主から厳重に釘を刺された矢先、会場の隅で険悪な空気を醸し出しては睨み合うジャバール家の兄弟。

決闘でも始めかねない二人の様子に、参加者の若い貴公子や令嬢達は恐々としていたが、ガリウスが王都にいた頃からの昔馴染みな参加者達は、ジャバール家の晩餐会ではよく目にしていた光景であった為『ああ、懐かしいな』といった雰囲気だった。

「ああ……言った傍からあの二人は……」

「はっはっは、貴殿も苦労しているようだな」

旧知の伯爵に宥められつつ、アウサレスとガリウスの仲の悪さに頭を痛める思いのリベリオスは、とりあえず収拾を図らねばと一歩踏み出した所で、会場入りする王族の名が告げられてそちらに意識を向けた。そして目を丸くする。

「レティレスティア第一王女様、並びに、ルティレイフィア第二王女様、並びに、サクヤ様、ご入場！」

会場にどよめきが起きた。

『サクヤ様がご一緒なされているぞ』
『ルティレイフィア様まで……』
『なんとお珍しい』

招待を受けたレティレスティアとそれにくっついて来た朔耶が、偶々城に帰っていたルティレイフィアをほぼ強引に参加させたのだ。ルティレイフィアが晩餐会に出席する事は滅多に無く、とても珍しい。

第一王女、第二王女、戦女神の揃い踏みに、当主のみならず会場中が驚きと興奮を隠せない様子だった。

「あ、これも美味しそう～」
「サクヤ、ほっぺにクリームが」

令嬢の多いジャバール家の晩餐会では、出される料理にも女性向けのモノが多く、ダイエットという概念があまり普及していないこの世界において、体形を崩す事無く沢山食べられるデザートの研究なども割と進んでいた。

朔耶がレティレスティアにくっ付いてきた理由も、実はこの辺りにあったりする。

そこだけ他と空気が違っている王女様御一行なテーブルにて、ケーキに齧り付いている朔耶の隣でお茶を飲みつつ、時々朔耶の頬からクリームを駆逐しているレティレスティアと、その隣でそわそわと何処か落ち着かない様子のルティレイフィア。

「ルティ、甘いもの苦手なの？」
「いや、そういう訳ではないのだが……」
そこへ、頃合を見計らってジャバール家の子息兄弟が挨拶に訪れた。

「ご機嫌麗しゅうレティレスティア様。ルティレイフィア様も凛々しくなられましたね。お久しぶりです、サクヤ殿」
「こんばんは、アウサレス様。ご活躍は聞いておりますわ」
「女性に凛々しいはどうかと思うが、ふふっ　貴公は良く心得ているな」
「アウサレスさん、お久しぶりー」

控え目な麗句を持って第一王女から順にキッチリした挨拶を向けるアウサレスの隣で、ガリウスはそういった儀礼を無視して行き成り朔耶に声を掛けていた。

「よう、相変わらず派手に食ってんな」
「派手ってなによ」

食いしん坊みたいに言われて唇を尖らせる朔耶。もちろん食べる手は止めない。アウサレスが無礼を諫めるようにガリウスを肘で突付こうとしたが、その気配を読んでするりと朔耶の隣に移動したガリウスは、馴れ馴れしくも親しげに肩へ手を回す。

アウサレスは嘗てコースティン家の晩餐会で朔耶に振られた過去がある。以前からその話を酒の肴にしていたガリウスは、朔耶と親しげにして見せる事で、兄への当て付けにしているのだ。

子供っぽい嫌がらせだが、二人の確執は子供の頃からの事なので、時々こういう大人気ない行動に出る事もある。

ガリウスの意図が分かるので『この愚弟が！』と内心の憤りに頬を引き攣らせるアウサレス。肩を抱いた手を朔耶にぐぎぎぎ……と抓られて『いでで！』と内心の冷や汗で頬を引き攣らせるガリウス。

コメカミに井形を付けながら満面の笑みで手の甲を抓んで捻り上げている朔耶の隣で、ルティレイフィアが少しつまらなそうな顔をした。何となく腹いせに朔耶のケーキの切れ端を強奪したりしている。分かり易く言えば、嫉妬である。

「よいしょ」
「え？　レティ？」
「なんだ、なんだ？」

ガリウスが痛みに耐えかねて朔耶の肩に回した腕を放した所へ、両者の隙間に身を押し込むようにしながら、強引に割って入るレティレスティア。第一王女の思いも寄らない行動に、周囲の人々も何事かと目を丸くする。

「サクヤとは和解されたようですが……私、まだ貴方がサクヤになさった事を赦してはいませんのよ？」

そう言ってニッコリ微笑むレティレスティア。笑顔で『サクヤから離れろ』という合図（プレッシャー）を発している。

『こわっ　レティこわっ』
『あ、姉上のこういう覇気はあなどれんな……』

『やべぇっ　この笑顔はやべぇ！』
『王族の心証を害しおってっ　やはり愚弟（ガリウス）は疫病神だ！』
引き際を心得た優秀な騎士であるガリウス小隊長は、早々に撤退していった。

その後は特に大きな騒ぎもなく、晩餐会は夜の部へと移って行く。
ジャバール家のパーティーホールは壁際のカーテンが厚く何重にも掛けられてあり、厚布で仕切られた個室のような場所が多数設けられている。
昼の部から令嬢漁りをしていた貴公子達は気に入ったお相手が見つかれば、こっそりとカーテンの陰に誘い愛を囁くなど密会場所として活用されている為、そこはかとなく妖しげな雰囲気が醸し出されていた。

偶に愛し合う事に夢中になっている過激な先客がいたりして刺激的なハプニングが起きたりもするが、日々情熱的なイベントを求める令嬢達にはそこが割と人気だったりもする。

「ここにいたのか」

会場の喧騒から離れ、外の空気を吸いにテラスへとやって来たル

ティレイフィアは、手摺りを背にぼけ～としているガリウスを見つけて声を掛けた。カーテン群のある壁際と違い、こちらは会場を見渡せる健全な休憩場所だ。

先程の朔耶達とのやりとりでリラックス出来ていたルティレイフィアは、自然に声を掛ける事が出来た。

「ん？　ああ、姫さんか」

「ご挨拶な奴だな、王族への敬意を忘れているぞ」

腕組みをしてジロリと睨んで見せるルティレイフィアだったが、ガリウスは軽い調子で肩を竦める。

「今更だろ？」

「ふっ　違いない」

何時もの軽薄な笑みに、凛とした笑みが返される。こうして顔を合わせるのは久し振りではあったが、ガリウスが王都にいた頃は何かと因縁めいた付き合いの長かった二人は、互いに当時のような親しみの気持ちを懐いていた。

「しかし、お前が晩餐会に居るとは思わなかったぞ」

「おやじ殿が五月蝿く言うもんでな……そういう姫さんもうちの晩餐会に顔出すなんて、珍しくねーかい？」

「わたしはサクヤに引っ張って来られたのだ」

「はっはっはっ　サクヤの仕業だったのか」

半ば強引に連れて来られたとバツが悪そうにいうルティレイフィアに、そりゃ逆らえないなと笑うガリウス。テラスで和やかに談笑する二人の様子を、リベリオス伯爵が『おお？』という少し驚きと

期待の籠った表情で会場の奥から窺っていた。
その視線を感じ取ったルティレイフィアは、晩餐会の話を聞いた時から気になっていた話題を口にする。

「さっき耳にしたのだが……お前もそろそろ身を固めるそうだな」
「俺はまだまだそんなつもりないんだけどな」

昔の思い出に浸っている所から急に現実へ引き戻されたように、和やかな雰囲気は少し余所余所しい空気が混じり込む。胸中の苛立ちを吐き出すように、ガリウスは溜め息交じりの悪態をついた。

「糞兄貴（アウサレス）の野郎がとっとと相手（おんな）決めねえから、俺にとばっちりが来てんだよ」
「実の兄弟をそんな風に言うものではないぞ？　アウサレス殿も中々に有能な人物だそうではないか」

アウサレスを擁護するルティレイフィアの言葉に、ガリウスは思わず目を丸くしながら凛々しき第二王女様に向き直った。

「おまっ　まさか、姫さんもアイツのがいいのか？」
「いや、そういう訳ではないのだが……」

根が割と几帳面で真面目な所があるルティレイフィアは、立場上あからさまに兄弟のどちらかを贔屓にするような発言は憚られるとして複雑な気持ちに言いよどむ。
モゴモゴと言葉尻を濁すその態度を『肯定』と解釈したガリウスは、何だか面白くない気持ちに駆られた。顔を合わせれば剣を合わせろと挑まれるような関係だが、付き合いは自分の方が長いし一応親しみの気持ちもある。

『あの性悪兄貴はいつもこうやって外面の良さと思わせぶりな口先で他人の関係に踏み込んできやがる』と、ガリウスは内心で罵倒する。昔から自分と親しくなった娘達がアウサレスに口説かれては夢だけ見させられて捨てられる様を見て来たのだ。

流石に王族が相手では何時ものようには行かないであろう事は理解しているが、なぜか胸糞の悪さは何時も以上だった。

「やれやれ、世界中を飛び回ってるっつー割に世間知らずは相変わらずか」

「……なんだと？」

「ま、腕っ節や見た目ダケは立派になったとは思うがねぇ」

突然、二人の間に流れていた空気が険悪なモノに変わる。普段なら侮りや挑発を向けられて簡単に激昂するようなルティレイフィアでは無いのだが、相手がガリウスとなると少し事情が違ってくる。

「ふん……兄に劣る弟という事実を指摘されて腹いせにわたしを愚弄するか、大した世慣れだな」

「……ぁあ？」

「まあ、八つ当たりで癒されるプライドなら安くて便利そうだが」

色々聞き捨てならない言葉をセットにした冷笑を向けられてカチンと来るガリウス。

「上に立つ奴の目が曇ってると下っ端は苦労するよなぁ！」

「ああ、身勝手な部下を持つ上司はさぞかし苦労している事だろうさ！」

売り言葉に買い言葉、突然テラスで始まった第二王女とジャバール家次男との口論、というより口喧嘩と呼んだ方がしっくり来るような激しい言葉の応酬に、会場中が何事かと注目する。　リベリオス伯爵は隅っこで頭を抱えていた。

「人を見る目がねえのはあの時からずっとだな、痛い目みる前にちったぁその節穴養ったらどうだ」

「無垢な子供の軽率な行為を今更引き合いに出すか？　第一、アレは貴様が仕組んだことだろうが」

言い争いの内容は初めて二人が出会う切っ掛けとなった『ルティレイフィアの御忍び騒ぎ』の事に触れ、その後の『貧民窟（スラム）組織掃討作戦』に繋がる顛末をポロッと口に出してしまっているが、二人は気付いていない。

当時の騒ぎを知っている者達は『あれの事か！』と、事件の裏に隠された意外な真実に目を瞠る。

「先程からやけにわたしの人を見る眼を詰るが、わたしがアウサレス殿に相応しくないとでも言いたいのか？」

「はぁっ？　なんでそうなる、あいつの本性すら見抜けねえようじゃ先が思いやられるつってんじゃねーか」

話題にされているアウサレスはとばっちりを避けて姿を消していた。カーテン群の何処かから騒ぎの様子を窺っているのかもしれない。

募る苛立ちを隠し切れないガリウスに対し、ルティレイフィアは彼の言動に少しづつ冷静さを取り戻す。何故急にこんな状況になったのか、何が原因で言い争いに発展したのか。

互いの言葉を振り返り、起点を見つけたルティレイフィアは少し引っ掛け言葉で弄してみた。

「そうは言うがな、わたしも相応の相手を選ばねばならん身なのだ。わたしの相手が務まる年頃の男はそうそう居まい？」

「へっ　糞兄貴（あんなの）にするくらいなら、俺にでもしとけ」

「……分かった、そうしよう」

「……へ？」

見事に引っ掛かるガリウス。

貴公から言った事だからな、と言質を取った事を強調するルティレイフィア。顔を赤らめながら、ちょっと目を逸らした仕草が可愛らしい。そんな彼女に、ガリウスは呆然とした表情を向ける。

何が起きたのか理解しきれず、ポカンとしている所へ朔耶がおめでとうコールを浴びせた。

「やったじゃんルティ、ずっと片想いだったのがようやく報われたねっ」

「まあっ　そうだったの？　ルティ」

「さ、サクヤ！　姉上も、その事は……っ」

「え……マジで……？」

同じく、何が起きたのかと固まっていた会場中がそのやり取りで再起動を果たし『ルティレイフィア様とジャバール家の次男が婚約か！』と一斉に驚きの声を上げる。リベリオス伯爵は『やりおった……』と呟いて壁を背にずるずると座り込んだという。

「まさかとは思うが……サクヤよ、これを見越してわたしを誘ったのではあるまいな？」
「偶然、偶然」

怪しいものだと目を細めながらも、ルティレイフィアは未だ実感の伴わないガリウスとの婚約に、内面から湧き出し始めている喜びを隠せない様子だった。

ガリウスは複雑な表情のアウサレスの隣でジャバール家当主リベリオス伯爵と母ペネオラ婦人に『よくやった』と、いいこいいこ（頭なでなで）をされて逃げたそうにしている。

その後、城の方でも降って沸いたような『第二王女様ご婚約の報』に上や下への騒ぎが起き、アルサレナの一喝が入るまでバタバタしていたそうな。カイゼル王が一番うろたえていた事は、王室の体裁を考えて極秘事項とされた。

この件を理由にしてガリウスが王都の騎士団へ呼び戻されるような事はなかったが、彼はカースティアに駐在する派遣騎士団の責任者に就任する事になり、小隊長から副団長へと一気に昇進した。

カースティアの湖では時折、屋形船にて休暇を楽しむジャバール家次男と第二王女様の姿が見られるようになったとか。

「なーんか、勢いでエライ立場やらエライ嫁さん押し付けられちまった……」

「ふふ、速攻がわたしの得意戦法だからな」

絶対誰かの陰謀だと冗談めかした嘆きをもらすガリウス副団長に、ルティレイフィアは気を害した様子も無く、寧ろ楽しそうに戦利品を独り占め出来たなどと応酬する。

「ほんと、随分変ったもんだ」
「変わりもするさ、もうあの頃とは違う」

「はぁ……。　なあ、キスしていいか？」
「い、いきなりだな……。　好きにするといい、わたしはお前の婚約者だ」

初めて剣を合わせた場所で、初めて唇を重ねる二人。

「流石は隊長」
「僕には真似出来ないなぁ」
「まあ、奴らしい」

元ガリウス小隊のメンバーも含め、周りで訓練に励む騎士達が非常に微妙～～な表情で、二人を祝福していたという。

ジャバール家の晩餐会（後書き）

こんな感じで、ルティレイフィアとガリウスのお話でした。

この日、朔耶は機械車競技場を建設する事業で帝国からアドバイザーを迎えたいというフレグンス側の要望を届けに、帝都城を訪れていた。王都フレグンスから帝都クラティシカまでは距離があるので、世界渡りの裏ワザを使って何時もの地下に現われる。

「あれ？　バル」

「サクヤではないか、申し合わせていた訳でもないのにこうして出会えるとは」

実に運命を感じる――などと言いながら、自然に腰へと回してくるバルティアの手を水平移動で躱す朔耶。するとバルティアも水平移動でついて来るので、二人して壁際までカサカサカサっと移動する。

「何をやってるんですか陛下、サクヤちゃんも」

「あ、ヴィヴィアンさん丁度よかったよ」

溜め息交じりで半目を向けているアネットに、朔耶はこれから書類を持っていく所だったとフレグンスの公式書簡を差し出した。

「手間が省けたわ、それじゃコレで」

「まてまて、もう帰るのか？　もう少しゆっくりして行けばよかろう」

「だってぇ～、バルに襲われるしぃ～、早く帰んないとぉ～」
「……仕官食堂で出す新しいケーキの試食会があるのだが」
朔耶は今日一日、帝都城でゆっくり過ごす事にした。

「で、地下に何かあるの？」
「うむ。実は今、帝国魔術団の研究者達が先帝の遺産を調査していてな」
第十三代皇帝（エイディアス）の残した発掘品と精霊術に関する研究資料を纏めているらしい。発掘品の装置と一体化して骨と皮だけになりながら、擬似的に精霊と重なる事で永遠の命と無限の魔力を得ようと魔族化したエイディアス帝。
人間を辞めてしまっていたおぞましい姿と、その哀れな老人を自ら手に掛けた時の事を思い出して、朔耶は若干眉を潜める。

「なんでまた今頃になって……」
「余が帝国の全てを取り仕切るようになってから先帝の研究室は閉鎖されたままになっていたのだ」
オルドリア大陸中を巻き込んだ魔族組織との闘争が終わって一年近く経つが、帝国の情勢も懐事情やら領内の治安やらと最近になるまで色々と細かい問題を抱えていた。
ようやく一段落ついて国内の安定を取り戻し、これまで放置されていた先帝の遺産に手を付ける事となったのだという。

「忌まわしい研究遺産だが、資料としての価値は高いだろう」
「ふーん」

使えそうな研究資料を選り分け、今後の帝国発展の為に活かす。適当に相槌を打つ朔耶の肩に、懲りもせず腕を回そうとしてひょいと避けられるバルティア。

――スッ　ひょいっ　――ススッ　ひょいっ　――ススッ

「あーもうっ　鬱陶しいわね！　このくっつき虫！」
「良いではないか、偶には肩くらい抱かせろ」

強引に回された腕に身を捩りながらバルティアの頬っぺたをぎゅうぎゅう押してひっぺがそうとしている朔耶。二人のじゃれ合いに肩を竦めたアネットが冷やかしの言葉を掛ける。

「サクヤちゃんも最近は丸くなったわね～」
「ん？　そう？」

「だって以前なら陛下相手でも容赦なく電撃で追い払ってたじゃない？」
「あ～……まあ、あの頃はまだお子様だったというか、若さゆえの認めたくない過ちなのよ」

まだまだ自分の立場というモノをしっかり自覚してなかった故の軽率な行動だったと、若干某赤い人のような言葉で御茶を濁す。そんな朔耶に、アネットは『そういう事にしておきましょうか～』とニヤニヤ顔を返した。

埃っぽい研究資料室に数人の帝国魔術団研究員とティルファの学者が集まり、それぞれ明かりを持ちながら机や戸棚の前で作業を行なっている。中央に積まれた厚手の本には、先帝が書き残した発掘品と精霊術に関する実験リストや研究結果が綴られているらしい。

「精霊と重なる条件に関する考察を記す？」

「”重なる者”への考察資料か……精霊と重なる事が出来れば、サクヤの世界に行く事も可能になるかもしれんな」

その呟きに、朔耶はフレグンスの王族を守護する精霊の契約問題でレティレスティアの自宅訪問がお流れになった時の事を思い出した。世界を移動する際に朔耶とレティレスティアの意識が混ざらないようにする方法を探して、アルサレナ王妃が色々調べたようだが、結局有益な情報は得られなかったと聞いている。

フレグンスの精霊と王族の契約問題は朔耶が元世界で神社にいた精霊と契約する事で解決し、世界渡りが危険を伴うなら無理にそれを行なう必要も無いと、レティレスティアの自宅訪問は無期限延期と考えていた朔耶だったが――

「これ、アルサレナさんに見せたら何か分かるかな……」

「一応これは帝国の機密資料なのだがな」

「……だめ？」

おねだり。

「まったくもぉ～、陛下はもうぉ～、ほんとにもぉ～」
「いや、つい……すまぬ」

結局、資料の一部をフレグンスに持ち帰る許可を得られた朔耶。
勿論タダではなく、アルサレナの解析によって資料から新しい技術なり発見があれば、帝国にもその情報が渡される条件での貸し出しだ。帝国からも共同研究の為の研究員を送る事になる。

「でも魔術とかならともかく、精霊術の事ならフレグンスで調べた方がいいと思うよ？」
「そりゃ分かるけどね、ただ先帝が使ってた発掘品の情報も混じってるから……あの王妃様だと色々応用しそうなのよねぇ」

この頃は使役している精霊の力が強くなった為か、六体を一度に扱う事はあまり無いというアルサレナ王妃だが、エイディアス帝の”重なる者研究”に関する考察資料で画期的な精霊術や使役法などでも編み出されたりすれば、国力にも大きく差が付いてしまう。

「ただでさえサクヤちゃんの存在が大きいのに、フレグンスの力があまり大きくなり過ぎると色々困っちゃうのよね、帝国としては」
「え、どうして？　今は別に戦争してる訳でもないし、何処もみんな友好的なんでしょ？」

「今はな。カイゼル王のような人格者がフレグンスを治めている内は良い。だが、野心的な王を迎えた時が問題だ」
「んー、好戦的なフレグンス王国ってのもちょっと想像つかない気もするけど……」

精霊は人の価値観からなる善悪に左右される事無く、使役者、契

約者、交感で求める者に力を貸し与える。あのフレグンスの精霊も、守護の対象である王族が戦を望み、力を求めれば、それがどんな道であろうと力を貸すのだ。

「将来の事も視野に入れるとね、強敵になるかもしれない相手の力は削いでおきたい訳なのよ」

「国家に真の友情は無いって訳ね……なんか寂しいね」

朔耶はエイディアス帝の考察資料をパラパラと手慰みに捲りながら、小さく溜め息を吐いた。

フレグンスに戻って帝国からの機械車競技場建設アドバイザー派遣に関する書類を担当者に渡した朔耶は、交感で連絡を入れておいたアルサレナを訪ねて帝都城の地下研究施設から借り受けてきたエイディアス帝の考察資料を渡した。

「なるほど……これは中々に価値のある資料ですね。条件付とは言え、よく貸し出しの許可を得られたものです」

「だいぶ渋られたんですけどね、バルに強請(ねだ)り倒してどうにか」

てへっと笑う朔耶に、アルサレナは少しばかり複雑な表情を見せると徐に口を開く。

「サクヤ、以前から考えていたのですが、貴女はバルティア帝と今後どのようなお付き合いをするつもりでいるのですか？」

「え、バルとですか？」

「貴女はこのオルドリアで国境、民族に縛られない、まるで精霊が確固たる意思を持って存在しているかのような在り方をしています」

しかし、曲がりなりにもフレグンスの高官という立場を持ち、国教である精霊神殿の象徴でもある。今は友好的な関係にあるフレグンス王国とグラントゥルモス帝国だが、両国の間には少なく無い対立の歴史もあるのだ。

「”皇帝の黒后”の名は、今も帝国内で罷り通っているのでしょう？」

「あ～あれは、まあ一応……はい。――やっぱりマズイですか？」

「問題ではありますね」

「あぅ……」

とはいえ、結局の所は朔耶の態度次第なのだとアルサレナは表情を緩めた。帝国側は、というよりもバルティア皇帝は朔耶を后に迎えたいという思惑から、現在も”皇帝の黒后”の名を使わせているのであろう事は推察出来る。

皇帝の個人的な恋慕以外の部分でも、朔耶を帝国に迎えた場合の国益を見据えて通り名を定着させているのだろう。

「貴女もそろそろ結婚を考えて良い年頃ですからね。もしこちらで相手を選ぶのなら、帝国の面目を潰さないよう配慮しなくては」

「結婚はともかくとして……、確かに”皇帝の黒后”で通ってたのに他の人とくっ付いたらバルが振られたみたいになりますもんね」

バルティアはゴネそうだが、やはりこの通り名は早い内に修正し

ておいた方がいいかもしれないと、朔耶は心のメモ帳に書き加えた。

サクヤ邸に戻る途中、珍しく城内を歩いて移動していた朔耶は以前に泊まった事もある宿泊用の客間が並ぶ階でふと足を止める。

普段は人の気配も無く、迷路のような通路が奥へと続いているのだが、何となく人の通ったような空気の揺らぎを感じた朔耶がそちらへと踏み出すと、何時ぞやに感じた事のある香水の香りが残っていた。

『あ、これレティの香水だ』

重鎮四家の画策した査問会が行なわれた日、客間の一室に籠って落ち込んでいる様子だったレティレスティアと色々話をした。

こんな人目を忍ぶような場所に来ているという事は、またあの時のように何か一人で気持ちを抱え込んでは落ち込んだりしているのではなかろうかと、朔耶は香水の香りを追って通路を進む。

意識の糸レーダーを使うとレティレスティアには感付かれてしまうので、くんかくんかと香水の残り香を辿っていくと――

『うほっ！』

サクヤヨ　ソノハンノウハ　フジョシトシテ　ドウカトオモウゾ

明かり控え目な魔術式ランプが照らす薄暗い通路の角を曲がった先には、金の刺繍が煌めく純白のドレス姿でフワフワの金髪を微かに揺らすレティレスティアと、その婚約者である近衛騎士団長イーリスとのラブラブ空間が広がっていた。

華奢な腰に回されたイーリスの腕が抱え上げるようにレティレスティアを捕まえ、彼女の頬に掛かる金髪を愛しそうに撫で梳かす指は同時に、深い接吻から逃さないよう細い顎先を絡めとる。

こういう場所でのそういった行為に慣れていない事を感じさせるレティレスティアの如何にも恥ずかしそうでいて切なげな、背徳感も混じった表情は普段の天然清楚なお姫様な印象が濃い分、非常に艶かしく妖しげだ。中々に濃厚なラブシーンなのだが、しかし――

『うーん、例の二人で見慣れちゃったのかなぁ』

宮廷魔術士長とその補佐官に比べたら初々しいものだと、割と落ち着いて社会見学態勢に入る朔耶。

ヨゴレタナ　アルジヨ
『ひどっ』

長い接吻からようやく開放され、そのまま首筋に吸い付いてくるイーリスの愛撫に甘い甘い吐息で応えながら、レティレスティアは竦めた肩越しに通路の先へ視線をやり、ビシリと硬直する。

レティレスティアの身体が急に緊張を孕んだ事で異変を感じ取り、周囲に警戒の視線を向けたイーリスも同じく固まる。

「あ、見つかっちゃった」

「ささささサクヤっ　い、いい何時から其処に!?」

「イーリスが首に吸い付くちょっと前くらい？」

「きゃあああああああ――」

宥め賺してようやく落ち着かせたレティレスティアを伴い、この階の四隅に設けられているサロンで一息つく朔耶。イーリスは仕事に逃げた。先程まで顔を真っ赤にして涙目でうーうー唸っていた第一王女様は、まだ若干恥ずかしそうにしながらお茶に口をつけている。

「お邪魔しちゃってごめんねー」

「い、いえ……あのような場所で不埒な行為をしていたのがイケなかったんです」

カップを受け皿に戻してふぅっと息を吐き、気を取り直したレティレスティアは話題の転換を図る。

「そういえば、最近よくサクヤを城内で見掛けると侍女たちが話してしましたが」

「うん、仕事の関係でね」

この頃は王室関係の仕事もちょくちょくアルサレナから依頼（押し付け）されているらしい朔耶を気遣うレティレスティア。便利に使われている事への気遣いだが、便利なんだから使わなきゃと朔耶は笑って返す。

「結構楽しんでやってるから問題ないよ」

なにせ通常なら三日や四日は掛かる距離を僅かな時間で移動できる裏ワザを持っているのだ。急ぎの公式文書なども直ぐに届けられるので、数日掛かりそうな案件が一日で済ませられたりする。

処理が早ければ、それだけ多くの仕事を捌けるという強大なアドバンテージ。朔耶が動く事で得られる国益は計り知れない。

「サクヤ……でも、無理はしないで下さいね？」

「だいじょぶだいじょぶ、明日からはお休みにも入るし」

お茶を飲み終えた朔耶はこれから暫らく休暇に入り、家族や元世界の友人達と過ごしたりすると言う趣を告げてフレグンス城を後にした。わざわざ近衛のいる訓練場に顔を出してイーリスにニヤリ笑いを送って行くという遊び心も忘れずに。

「さっきのサクヤ様、何か用事でもあったのかなぁ」

「団長？　どうしました？」

「……なんでもない」

朔耶が元世界の長い連休に合わせて家族をフレグンスのサクヤ邸に招いたり、藍香を実家に帰省させたりと文字通り世界を飛び回っている頃。アルサレナは久しく感じていなかった胸躍るような心境を抑えつつ、娘レティレスティアの元へと向かっていた。

「これなら、あの子を安全にサクヤの世界へ送る事が出来る」

エイディアス帝の考察資料を調べていたアルサレナは、擬似的に精霊と重なる為に使われた装置の研究項目を読むうち、この技術を

応用して精神と肉体の保護を強化する事で、朔耶と共に世界を渡る際に生じるとされる精神融合を防ぐ方法を見出した。

「レティレスティア様、アルサレナ様がお越しになられました」

部屋で高等な精霊術の予習をしていたレティレスティアは、侍女からアルサレナ王妃の来訪を告げられ、何事だろうかと席を立つ。

「レスティア、今から神殿に参ります。直ぐに支度をなさい」

「母様？　一体どうなさったのです？」

夕刻の祈りの儀式まではまだ、かなり間がある筈だ。戸惑った様子を見せるレティレスティアに微笑みを返したアルサレナは、自らの使役する精霊六体のうち二体を近くに呼び寄せて告げた。

「この子達をあなたに託します」

「母様の精霊を、ですか？」

「この子達を連れてサクヤと共に世界を渡り、再びこの世に戻るとき、あなたはサクヤと同等の力を得られるかもしれません」

「私が……？」

既に精霊術士としての成長期は過ぎて能力も安定しているアルサレナだが、使役する六体の精霊は今後も力を付け続ける。

元々いずれは自身の手にも余る事になるであろう精霊との契約をただ解約するよりも、朔耶との交感で飛躍的に能力を成長させていたレティレスティアに継がせるつもりでいたのだ。

今回エイディアス帝の研究考察資料から見出した方法は、精霊との契約を引き継がせる良い機会となった。

アルサレナは一度は諦めながらも、未練を残していた娘をフレグンスの王族史上最高の精霊術士にする事への希望が開けた事に意識が向いており、レティレスティアはこれまでに起きた数々の事件や出来事の中で、自身の力不足が朔耶に多大な負担を強いて来たという想いに囚われていたが故に、朔耶の力になれるかもしれない事への期待感で夢中になるあまり視野が狭まっていた。

「あなたに精霊の契約を引き継ぐ儀式と、世界を渡る際に精霊と重なる方法を伝授します。さあ、神殿へ急ぎますよ」

「はい、母様」

今尚（いまなお）、古い因習に囚われる傾向を持つフレグンスにおいて、王族という尊い身分にある者が戦女神（サクヤ）のような規格外の強い力を持つ、その事が国内にどのような影響を及ぼすか、この時はアルサレナもレティレスティアも考えが至らなかったのだ。

アルサレナの使役していた精霊がレティレスティア（レティレスティア）に引き継がれ、朔耶が第一王女様の都築家訪問の依頼を受けたのは、元世界で連休も明けようかという週の終わり前日の事であった。

戦女神と精霊姫【中編】

フレグンス城の地下にある精霊神殿にて、世界を渡る準備を整えたレティレスティアはこれから帰還する朔耶と交感を繋いだ。精神と肉体が離れる転移の一瞬、朔耶の精神と混ざらないようアルサレナから受け継いだ二体の精霊による二重の保護。

間に精霊を挟んだ状態で精霊越しにしっかり交感で繋がって世界を渡る。精霊の保護がきちんと効いているかを確かめたアルサレナが満足そうに頷いた。

「これなら大丈夫そうですね。サクヤ、レスティアを宜しくお願いしますね」

「分かりました。うちって一般庶民だから、あんまり御もて成し出来ないかもしれないケド……」

「私は朔耶の生家にお邪魔できるだけでも満足です」

少し緊張気味に両手を胸元で重ねるレティレスティアは精霊の保護による膜に包まれて仄かに発光している。

レティレスティアの精神と肉体を保護する精霊ごと朔耶に連れられて世界を渡り、戻る時は朔耶の世界にいるこの精霊の遍在を保護膜の中に入れて戻ってくる事で、朔耶のような重なり方ではないが二体の精霊と半分ずつ重なった状態に安定させる事が出来るという。

精霊との繋がりを契約によって結ばれる意識の糸よりも、より自然に、より深く、より近く、直接繋がっているような状態にする。

エイディアス帝が発掘品を使って行なっていた擬似的な重なり方を、精霊との交感能力と朔耶の世界渡りを持って昇華させる形だ。

城の地下神殿から朔耶の自宅庭へ。流石に儀式用の服では行けないので、なるべく質素な装飾品も外したワンピース風ドレスに身を包むレティレスティアを連れて、朔耶は世界を渡る。

『あたし達の世界へ――』
ココロエタ

世界の移動はほんの一瞬。庭の地面に描かれた円の中に現われる朔耶とレティレスティア。ふわりと金色の髪が靡いて精霊の保護膜が解除される。アルサレナの理論通り、二人の精神は混ざる事無く精霊によって保護され、無事に世界を渡ることが出来た。

「ここが、サクヤの世界……」
「うん、あたしん家の庭ね。とりあえず中に入ろ？」

朔耶は周囲の建物や空を珍しそうに見上げているレティレスティアの手を取り、我が家へと誘(いざな)った。

「うおおお！　よくぞいらっしゃったレティレスティア姫様ぁー！」
「ひゃあっ」

家に入った途端、半分野獣と化した兄が廊下を猛進して来た。が、あらかじめ予測していた朔耶は狙いを定め――

「ちぇい」

「ぐあああああ！　目がああああ！　目がああああ！」

「とりあえず、お父さんとお母さんが戻るまであたしの部屋で休んでて貰うね？」

「え、ええと……お兄様は大丈夫なんですか？」

廊下で某三分間待つ大佐のように顔面を押さえてのたうちまわっている兄を踏んずけながら自室に案内しようとする朔耶に、レティレスティアは大粒の汗など浮かべるのだった。

「まずはこっちで過ごすに当たっての注意事項をおさらいね」

「はい」

元々が精霊術士としての能力も高く、使役している二体の精霊共々こちらの世界に渡ってきているレティレスティアは、オルドリアに居た時と殆ど変わらず精霊術を行使できる。

「目立たないモノなら大丈夫だと思うけど、緊急時とか止むを得ない場合を除いてなるべく使用を控える事」

「分かりました」

「って言っても、レティ普段からあんまり目立つような術使ってな

いよね？」
「うふふっ　そういえばそうですわね」

風の加護や戒めの風、精霊の結界などであればそれほど目立たない為、身を護る術として使える。精霊の癒しなど、光りを放つような術はＮＧだ。言葉に関しては疎通の加護をレティレスティア自身に使ってあるので問題ない。
やたら美人な外国人があまりに流暢な日本語を話すという面で少し目を引くかもしれないが。

その後、買い物から帰宅した都築家の両親と休暇で家に戻っていた拓朗も交えて皆でレティレスティアを歓迎した。
レティレスティアの滞在はこちらの休みに合わせて一泊二日程度。遠出はできないが近場でも町を案内して異世界旅行を楽しんで貰おうという事になった。とりあえず、お昼には藍香や実穂たちとも合流して町へ繰り出そうかと話し合う。

「あんまり連れまわすのもナンだから、みんなでむぃむぃにでも行こうか？」
「そうだな、前に朔姉たちと遊んだ時は結構いい感じだったし」
「お座敷の予約、今から取れるか？」
「実穂に電話してくる」

居間に集まって皆でわいわいと計画を立てる。上座の座布団にちょこんと座るレティレスティアは都築家の温かい雰囲気に緊張も解け、天井で白く輝くリング状の照明や家の中に置かれている電化製品など、サクヤ式の原型ともいえる機械類を珍しそうに観察していた。

出掛ける前に一旦部屋へと戻った朔耶はレティレスティアに着せる服を見繕う。なるべく質素なドレスを選んで来たとはいえ、やはり王族が身に纏うドレスなだけあって、醸し出す高級感が半端ではない。只でさえロイヤルなオーラに包まれた容姿なのだ。

「流石にそのドレス姿だと浮いちゃうからね――……コレなんてどう？」

「サクヤの服を着られるなんて、なんだかドキドキしてしまいます」

ドレス以外の服に袖を通してラフな装いに身を包む事も、侍女達に囲まれず友人と二人っきりで着替えを行なう事も、何もかもが初めての経験であるレティレスティアは、今まで感じたことのない開放感に心地良さを覚えるのだった。

昼頃、兄のランドクルーザーにて御座敷ケーキハウスむぃむぃへと向かう。メンバーは朔耶、レティレスティア、孝文（おとうと）、拓朗の五人。実穂と藍香は一足先に店へ向かっている。御座敷席の予約は実穂がとってくれたようだ。

ケーキハウスに向かう間、レティレスティアは車の中から見える町の景色にフレグンス城よりも大きい巨大防壁（集合住宅）の群れや、大量の人々を乗せて信じられない速度で走る長い乗り物などを見て言葉を失っていた。

何より、道行く人々の殆どが朔耶と同じく黒い髪に瞳を持つ事に自身の異質さを覚え、朔耶が王室の庇護下でフレグンス国内に在っても尚感じていたであろう心細さ、疎外感とはまた違う何か孤独な寂しさのようなモノを実感する。

『サクヤは、ずっとこんな気持ちを感じながら過ごしていたのかしら……』

世界を自由に渡れるようになる以前からいつも明るく振舞い、時に自分を励ましてくれた朔耶を想い、レティレスティアは気持ちを引き締める。向こうへ戻るときは母から教わった手順どおり、しっかり精霊と重なるようにしなければと。

しかし数分後、引き締めていた気持ちはあっさりと緩められた。カウンター脇のショーウインドーを飾るズラリと並んだ色とりどりのショートケーキに、恍惚の表情を浮かべるレティレスティア。

王女様のとろけるような微笑にあてられた客達が店員も巻き込んで息を呑むやら赤面するやら。

「うーむ、さすが本物のお姫様」

「だ、大丈夫かな？　また前みたいな乱暴な人とかに目付けられたり……」

「だいじょぶ、だいじょぶ」

一種異様な雰囲気に包まれた店内に藍香が不安げな表情を向けるも、今日は強力な護衛もいるので心配無いと言って安心させる朔耶。変態だが強さは折り紙つきの兄に、まだ入隊して一年ほどだが自衛隊で訓練を受けている拓朗が居るのだ。

ついでに言うなら、レティレスティアは精霊術を行使出来るので、このメンバーの中では最も強力な存在だったりする。

若干周囲の視線を集めつつ奥の御座敷席に移動した一行は、早速ケーキと飲み物に軽い食事を注文して一息付いた。朔耶達が団欒を

始めた事で店内の客達も自然と元の雑談に戻り、今し方目撃したやたら麗しい外国人の女性をこっそり話題にしてみたりしているようだ。

「閉店まで予約してあるからねー、たっぷり遊べるよ」
「おーさすがお嬢様、太っ腹！」

「あんま食べ過ぎると本当に太っ腹になるぞ」

不用意な発言をした孝文が藍香の凶器攻撃に曝されているのを尻目に、朔耶は実穂とレティレスティアに後の予定を確かめた。

「今日はレティ連れて実穂の家に顔出しに行くんだっけ？」
「うん、何時も質のいい宝石取り扱わせて貰ってるからね。最近うちの両親が是非取引先の人に挨拶したいって」

こちらからフレグンスまで出向く事は朔耶に連れて行って貰えば出来なくも無いが、異世界と交易している事を両親に明かすのはまだ時期尚早だと考える実穂は、レティレスティアがこちらの世界に来ているこの機会に両親と会って貰う事で、後々の事業拡大もスムーズに行なえるよう下地を作って置きたいのだと語る。

「ごめんねー？　こっちの我侭に付き合わせちゃって……」
「いいえ、ミホとの交易で得られる装飾品はとても質が良いと皆に評判ですし、今後も良い関係を築く為の力になれるのですから」

実穂の両親にはプチ交易相手国の姫が御忍びで日本に来ている事にして、疎通の加護無しで少し挨拶を交わす予定だ。

楽しい時間はあっという間に過ぎる。閉店まではまだ時間があったが既に日は落ち、ケーキと食事とお喋りを堪能した朔耶達一行は街灯とネオンに彩られた夜の町並みが映える頃に店を出た。

「えーと、じゃあレティは実穂ん家の車で行って貰うとして、あたしも通訳で一緒に行こうかな？」

「じゃあシゲ君も一緒に行ってくれ、俺はシゲ君の車で美村さんを家まで送って、その足で朔耶と姫さん迎えにいくから」

「おけ」

ひょいと車のキーを拓朗に投げ渡した兄は、朔耶から異論が出る前にいそいそと川岸家のリムジンに乗り込む。しょうがないなぁという表情でレティレスティアを伴って後に続く朔耶。

姫君を目で追っていた孝文は背負っている酔い潰れた藍香を兄のランドクルーザーに後ろ向きでどっこいしょと乗せて後部座席に寝かせると、落ちないようにシートベルトをつけて自分は助手席に乗り込んだ。

リムジンを先頭に駐車場を出た二台は暫らく一緒に走ると、やがてそれぞれのルートに分かれて行く。

「うーん快適、快適」

「こんな自動車もあるのですね、まるで王宮にある大型馬車のよう」

ランドクルーザーの後部座席に比べると広さも内装も乗り心地もまるで違うリムジンの中で寛ぐ朔耶と、相変わらず色んな事に感心しているレティレスティア。兄は兄でそんな二人の被写体をＧＥＫＩＳＹＡする作業に没頭している。

短い期間ながら、レティレスティアの為に異世界旅行の思い出アルバムを作るつもりらしい。

「お兄ちゃん、実穂の家では自重してよ？」

「まかせとけ！　ばっちり良い絵を撮ってやるぜっ」

「自重しろと言ってるのに……」

「あはは、いいよ朔耶ちゃん。わたしから話通しておくから」

そんなこんなで川岸家の屋敷を訪れた朔耶達は実穂の両親と二十分程の会談？　を行い、レティレスティアの気品溢れる立ち振る舞いや高貴な者の持つ独特のオーラに感じ入った実穂の父親は、今後とも娘を宜しくと何処やの国の姫君に頭を下げるのだった。

その後、藍香を実家に送って川岸家まで迎えに来た拓朗の運転で帰宅した朔耶達は、都築家の居間で少し談笑してお開きとなった。拓朗は自宅に戻り、兄は弟と部屋に籠って写真画像の編集。朔耶とレティレスティアは一緒にお風呂に入るなどして過ごした。

立場上、一人で着脱ぎする事に慣れていないレティレスティアの着替えは朔耶が手伝う事になるのだが、何故か頬を染めながら目線を逸らす王女様の服を脱がしていく事に妙な倒錯感を覚え、若干緊張してみたりする。

「な、なんだか……サクヤに脱がされていると思うと、不思議な気持ちになります」

「口に出して言わない」

そういう事は胸に仕舞っておくようにと、朔耶はレティレスティアの意外に豊満な胸をぽよんと一押ししてバスルームにいざなう。

二人して照れながら温めのシャワーを浴びて身体を洗ったり、順番に浴槽に浸かって今日一日の疲れをほぐした。ちょっとボディーソープで身体を使って洗いっこ等という兄が狂喜乱舞しそうな情景を想像して胸に仕舞ったのは内緒である。

「本物のシャワーというのはとても気持ちの良いものなのですね」

「向こうにも騎士団の兵舎とかには簡易式のを設置してるんだけど、今度王宮用のとか本格的に作ってみよっか？」

「そうですね、普段の生活を潤す設備を増やすのも良いと思います。私は情報の伝達設備にも興味がありますが」

空調や照明に改めて感嘆するレティレスティアは、特にテレビやラジオといった媒体が一般民にもたらす影響力に有用性を感じ、水鏡の簡易版を作る事が出来れば色々便利に使えるのではと考えた。

「おー、なんかアルサレナさんに発想が似てきたね」

「えっ？　そ、そうでしょうか。私の考えなんて、母様に比べたらまだまだ未熟で……」

そんな話をしながら髪を乾かして洗面所を後にする二人。朔耶の自室に戻る途中、兄の部屋の前を通ると中からああでも無いこうでも無いと兄弟でパソコンに向かって編集作業をしている声が聞こえて来た。

「うーん、徹夜でもする気かもしれない。流石だわ」

「まあ……シャシンを扱うには、大変な作業を伴うのですね」

「いやいや、アレはただの趣味だから」

レティレスティアの天然にちゃうちゃうとツッコミを入れつつ、部屋に戻って就寝の準備を整える。

朔耶は最初、お泊りのお約束でレティレスティアをベッドに寝かせて自分は床に布団を敷いて寝るつもりだったのだが、そんな事はさせられないと遠慮して聞かない王女様の押しに負けて同じベッドで一緒に寝る事になった。

二人で使うには少々狭い普通の市販ベッドなのだが、空調も効いているので暑苦しくはならないだろうと身体をくっつけて横になる。小さい頃はこんな風にルティレイフィアとよく一緒に寝ていたのだと、レティレスティアは嬉しそうに微笑んだ。

明かりの消えた部屋で暫らくぼしょぼしょと乙女のお喋りを交わし合い、やがて返事の代わりに寝息が聞こえ始める。

「寝ちゃったか……やっぱり疲れてたのかもね。――それにしても……」

人形のように調った顔立ちに、無垢というか無防備な寝顔。フワフワにウェーブした金髪は梳くと引っ掛かりも無くサラサラと指の隙間を流れ落ちる。城で大切に育てられた王族の身体は柔らかいし、いい匂いするしで、やばい世界に目覚めてしまいそうだわと焦る。

どうにかしてしまいそうで、どうにかなりそうだ等という某親友の気持ちが少し分かった気がする朔耶なのであった。

――翌早朝。

「お世話になりました」
「大したお構いも出来なくて、ごめんなさいね」
「いいえ、とても楽しかったです」
「また来る機会があれば、今度は観光地巡りでもさせてあげたいな」

軽い朝食を終えて都築夫妻と挨拶を交わし、ドレスに着替えて朔耶と共に庭へ出たレティレスティアは使役している精霊の状態を確認すると、こちらの世界に遍在する精霊を呼び寄せて保護膜の中に招き入れた。そうして地面に描かれた円に入る。

「サクヤは、何時もここからオルドリアに渡っているのですね」
「うん、なんの変哲もないただの庭なんだけどね」

世界を渡るという奇跡が神殿も祭壇も無いごく普通の庭先で行なわれている事実を、レティレスティアは何故だかとても面白く感じた。それが朔耶という存在の『在り方』を示しているようで、朔耶の立ち振る舞いやモノの見方が少し分かったような気がした。

「お兄ちゃんの思い出アルバムは間に合わなかったみたいだけど、完成したらまた持っていくね。って事で、向こうの世界へ――」
ココロエタ

精霊の保護膜で仄かに光を纏うレティレスティアと交感で繋がり、朔耶はオルドリア大陸へと転移した。

「ここは……」
「お城の庭園。あたしがこっちに来る時は大抵ここに出てるよ」
色とりどりの花が咲き乱れた花壇の並ぶフレグンス城の庭園に現われた朔耶とレティレスティア。周囲を見渡し、馴染みの城壁を見つけて成る程と納得する。
「精霊の状態はどう？　ちゃんと重なれた？」
「あ、そうですね……ちょっと待って下さい、今調べてみます」
精霊との繋がりを確かめたレティレスティアは遍在の精霊を通じてこちらの精霊と繋がる擬似的な重なり方が出来ている事を確認した。精霊の声は朔耶が神社の精霊と話す時に感じている程はっきりとは聞こえないが、意思疎通は出来る。
レティレスティアの意思に添って使役している精霊の力が発現されるようになった。
「精霊との繋がりが、まるで一体感のような……なんだか深い交感状態でいるみたいな感じです」
「ふーむ、上手くいったって事かな。ねね、ちょっと飛べるか試してみない？」
朔耶のアドバイスを受けて精霊術を行使するレティレスティア。同じ術でも使われる魔力量が通常の使役状態とは比べ物にならない。
しかし、そこそこ強力な魔法障壁で身体を包む所までは出来たものの、そのまま宙に浮かぶには至らなかった。

色々と試して使い方に慣れ、やがて魔法障壁で包まれたレティレスティアの身体を中心にして放射状に伸びる魔力の羽が出現した。

「おおー、浮いた浮いた」
「う、浮きましたわ！」

身体から噴出するような荒々しい朔耶の飛行形態と違い、洗練された術と魔力運用でシャープな印象を受ける細長いオレンジ色の羽が六枚、レティレスティアの周囲に浮かび上がっている。

レティレスティアの羽が身体の内側からではなく外に出ているのは、半分重なりながら繋がった精霊が傍に居る状態だからだ。
精霊と完全に重なっている朔耶は魔力の羽も身体の内側から噴出するように出ているが、レティレスティアは使役している精霊の遍在と重なりつつ、オルドリア側にいる精霊は身体の外に在るので、こういう形になったらしい。

殆ど精霊側がコントロールしてくれるという限りなくフルに近いセミオート状態な朔耶に比べると、レティレスティアの場合は力の行使以外はある程度自分でコントロールしなくてはならないので、中々思うがままにという訳にもいかないようだ。

朔耶に手を引かれながら徐々に高度を上げて行き、城を超える高さまで昇って周囲の景色を見渡す。

「わあ……」

王都の街並みを眼下に並び浮かぶ二人。朔耶が普段見ている光景を目にする事が出来て、レティレスティアは深く感激していた。それじゃあ少し飛行してみようと、やはり朔耶に手を引かれながら王

宮区画から貴族街の上空までゆっくりと移動する。

初めは不安定でともすれば風に流されそうになっていたレティレスティアだったが、コツを掴んでからは木の葉が風に舞うが如くスイスイと飛べるまでに上達していた。

朔耶が魔法障壁だけで宙に浮いているのに対して、レティレスティアは風の加護も使って身体を浮かせている。

移動した時に惰性で流されてしまうので、六枚の羽は推進用の風を細かく調節する飛行時のバランス制御も兼ねているのだ。その為、あまり機敏な動きは出来ないのだが、”風の加護”と”精霊の風”を駆使して自由に舞う姿はまさに精霊の姫君と言えた。

「流石レティ、術の扱いが凄く上手だってあたしの精霊が褒めてるよ」

「うふふ、ありがとう御座います。空を飛ぶのって、こんなに気持ちの良いモノなのですね」

上流区の閑静な通りを高級馬車が駆けて行く。一般開放区では工房の煙突から煙が昇り始め、下街に見える露店や大衆食堂の周囲では店開きを始める者や、朝食を食べにきた一般民達が集まって賑わいを見せている。

「下に人が居る時は姿勢を少し斜めにするかしないと、スカートの中見えちゃうよ？」

「えっ！　え、ええと……こうですか？」

街の上を飛ぶ時の注意事項などを教えつつ、慌ててドレスのスカートを抑えるレティレスティアに和んだ朔耶は、藍香を迎えに行くので一旦向こうに戻ると告げて地上へと下りて行く。

「それじゃあまた午後にでも、レティの力でどんな事が出来るのか色々試してみようね」
「はい。また飛び方やサクヤの使う精霊の治癒の事を教えて下さい」
城の庭園で別れ、朔耶は元の世界へ帰還し、レティレスティアは再度空中に舞い上がると、朔耶が何時もやっているように城の上階にあるテラスへ着地した。実は前から一度やってみたかったのだ。
小鳥になった気分でドレスの裾を直しつつ城内に歩み出そうとしてふと顔を上げると、そこにアルサレナが立っていた。
「か、母様……っ」
はしたない所を見られてしまったと慌てるレティレスティアを、アルサレナはそっと抱き締める。
「おかえりなさい、レスティア」
「あ……た、ただいま戻りました――母様？」
自分を抱き締めてくれる母の様子に何か違和感を覚えたレティレスティアが問うように呼び掛けると、アルサレナはそっと身を離してレティレスティアの金瞳を真っ直ぐに見つめた。そしてこれからの事に覚悟を促しつつ謝罪を向ける。
今後、レティレスティアと朔耶の二人には多大な苦労を強いる事になるかもしれないと。
「私はあなたを最高の精霊術士にする事を思うばかり、無思慮な判断を犯してしまいました」
「あの、母様……それは一体どういう意味なのでしょう？」

戸惑うように小首を傾げたレティレスティアは、カイゼル王に指摘されたというアルサレナの説明を聞いて少し表情を曇らせる。

「ゼルに叱られてしまいましたわ」

「父様が……」

例え本人達が望んでいなくとも、国内に大きな力を持つ者が二つと存在すれば必ずどちらかに肩入れする者達で派閥が形成され、そこに対立が生み出されてしまう。

由緒ある王族であるレティレスティアが朔耶と同等の力を得る事は、伝統と格式、仕来りを重んじる旧来の保守派勢力と、彼等を発展の足枷だと断ずる改革派勢力とで国内を二分させかねない事態を孕んでいるのだ。

朔耶がこの世界に現われて約一年と半年。オルドリアの平和とフレグンスの発展に大きく貢献している朔耶だが、以前、査問会での糾弾を企てた重鎮四家のように、戦女神（サクヤ）の存在を快く思っていない勢力はまだまだ少なく無いというのが実情だ。

「これまで燻っていた彼等の不満に火を付ける事になるかもしれません」

朔耶との対立を煽られないよう十分用心するようにと説くアルサレナに、レティレスティアは深く頷いて気を引き締める。自分が朔耶と対立するなど考えられない事ではあるが、本人の意思とは無関係にそういう事態を仕組まれる事は十分にあり得るのだ。

戦女神と精霊姫【後編】

朔耶の世界に渡る事でレティレスティアは擬似的に精霊と重なる者になれた。

帝国には一応、世界渡りを安全に行なえる方法が情報として送られる。どの道この方法による精霊との擬似的な重なり方は、二体以上の強い精霊と契約している事に加えて朔耶の協力が必須なので、帝国側がアルサレナの発見した応用技術に気付いてもあまり問題はない。

第一王女（レティレスティア）が朔耶と同等の力を得たという話は瞬く間に広まり、これでフレグンスは更に安泰だと喜びの声が上がる一方で、表向きは歓迎と祝福の意を示しつつ精霊神殿の中ではサクヤ派勢力の一部で自分達の優位性が崩れるのでは等と懸念する声も囁かれていた。

それに呼応するように、王宮内や貴族達の間でも色々と動きが見られ始める。

単純にフレグンスは二大守護神に護られると喜ぶ者とは別に、朔耶の功績は認めるものの、力を得ただけの庶民が王室と親しく関わる事を好ましくないと思っていた勢力は、精霊姫（レティレスティア）を持ち上げて戦女神（サクヤ）を追いやるチャンスと考えた。

元々重鎮四家系列の派閥に属していた彼等は、今や影響力を低下させて失脚したも同然の四家から距離を置きつつも、その本懐とする所は四家の重鎮達とあまり変わりはない。

戦女神に対抗できる存在が、フレグンス貴族として敬う事になんら問題のない由緒ある血統の王族であり、精霊術の才気溢れる若き姫君であった事も、彼等に行動を決意させる要素の一つとなっていた。

「やはり精霊神殿の一派を躍らせるのが一番か」

以前、魔族組織（ヨールテス）に仕掛けられた策略で騒乱を起こした事に負い目を持つサクヤ派勢力を煽って精霊神殿と王宮が対立するように仕向ける。戦女神（サクヤ）と精霊姫（レティレスティア）の軋轢を演出し、逸早く姫側に付く事を表明してみせる事で戦女神対精霊姫の構図を明確化するのだ。

そしてレティレスティア姫を推す自分達が問題の解決に向けて動く事で、方針や意見を纏める際の主導権を握る。

「姫様を推しての主張ならば、近衛騎士団を初め多くの味方も期待できよう。日和見連中も公式に問えば賛同するしかあるまい」

「しかし……姫様は戦女神贔屓でべったりだと聞く。イーリス殿との関係にも戦女神が介入して仲を取り持ったとか」

「あの二人を対立に向かわせる事など、容易ではないぞ」

「なあに、姫様と戦女神を争わせる必要はありません。周りが騒げばよいのです」

本人達が友好的に振舞って見せようとも、双方の支持者を激しく対立させる事で二人が反目し合っているような状況にしてしまう。

騒ぎが大きくなればなるほど王も擁護しきれなくなり、収拾をつける為に何らかの処置をとらざるを得なくなるだろう。その処置内容に介入するのだ。朔耶を王室から遠ざけ、それなりに優遇された立場を与えつつ一介の工房職人として扱うよう進言する。

「街に降りた戦女神には今後も有事の際の即戦力、抑止力としてフ

レグンスに貢献して頂きます。そのまま留まるもよし、元の世界とやらに帰還するもよし」

「そして混乱の収拾に尽力した我々は、精霊姫を支持する一派として宮廷内での地位を得る訳か」

「帝国の皇帝が戦女神に御執心であるという話も聞くが、もし帝国に亡命するような事があれば厄介だぞ」

「姫様と戦女神の仲を考えるならソレはありえまい。よしんば亡命したとしても、フレグンスの障害となるような事にはならんさ」

まずはその状況を生み出す為に周囲から埋めていく方法として、レティレスティア姫をフレグンスの守り神に頂こうとする勢力と、今まで通り朔耶を守護神にしておきたい勢力との間に諍いを起こさせ、そこから戦女神派と精霊姫派の対立を王宮内に波及させていく。

「神殿のサクヤ派勢力だけでなく民衆や学院生も焚きつければ、後々纏め易くなるだろう」

「民衆が暴動など起こして収拾が付かなくなるような事にはならないか？」

「問題ありません、これは心理的な計略なのですよ」

要は戦女神（サクヤ）が王宮から放逐された際、朔耶の支持者層に”今回の騒ぎに参加した”という罪悪感を持たせられれば、朔耶に同情の念を懐いた彼等から向けられるであろう不満や怒りも軽減されるという狙いだ。悪いのは騒いだお前達だという矛先逸らしの策でもある。

発端は小さく、誰にも悟られないように、間接的な方法で精霊神殿のサクヤ派勢力と王宮内の第一王女派にとある”噂”を流すのだ。

「では、学院の方にはうちが出資している施設の指導員が何人かいるので、そちらから手を回します」

「精霊神殿にはまだ例の重鎮四家方達と繋がりを持つ者が少なからずいる、彼等にも話を通しておこう」

――そんな密談が上流区の何処かで交わされて数日が経過した頃。

フレグンス国内で実しやかに囁かれる戦女神と精霊姫の不仲説は、王宮の内外問わず精霊神殿や大学院、一般区の酒場などでも話題に上がり、自分は戦女神派だとか、やはりフレグンス国民であるからには精霊姫を推すなどという議論が聞かれるようになっていた。

「その噂を流したのは誰だぁ！」

「いやあ、結構あちこちで耳にするけどね」

学院のサロンで某和服を着た美食家のような雄叫びを上げながらドーソンを締め上げる朔耶。勿論じゃれあいの冗談だが、最近になって急速に広まっている朔耶とレティレスティアに関する噂は冗談で済まされない内容だ。

曰く、アルサレナ王妃とレティレスティア姫の策略で戦女神の力の秘密が暴かれた。戦女神の力の秘密を知った王女はその力を得て戦女神に勝るとも劣らない力を得た。

曰く、戦女神は自分を脅かす存在となったレティレスティア姫を警戒している。人気の無い廊下で激しく言い争っている二人の姿が侍女に目撃されたらしい。

等々――。

「アリエーン！」

「誰かの名前かい？」

この頃すっかり誘いボケが上手くなったドーソンの額にチョップなど打ち込みつつ、エルディネイア達とお茶のテーブルを囲んでお菓子を齧っている朔耶は、一体何処からそんな根も葉もない噂が出ているのかと訝しむ。

”精霊の知らせ”の様な悪意を探知する能力は今回あまり発揮されていない。というのも、朔耶は普段からある程度は自分に向けられる悪意の霧を感じているので、余程強い害意でも無い限り特別それらを察知したり特定したりするまでには至らないのだ。

それはつまり、今回の噂を流している存在が朔耶に対して懐いている悪意や害意は、普段から朔耶が有象無象より向けられているモノと大差ない程度のモノだという事でもある。

「でも、確かに最近の噂は少し不自然ですわね」

学院には当主が王宮に勤めているという家系の子供達もそれなりに通っている。だが、王宮に関する話題は普段からそう頻繁に交わされている訳ではない。

この頃は王宮内の話でも特に例の噂に関する部分ばかりが目立って多過ぎる気がすると、エルディネイアは違和感を指摘した。

「学院で誰かが故意に流してるって事？」

「悪い噂なんて、大抵そういうものでしょう？」

城で働く使用人や衛兵見習いのような末端の人たちの間にまで周知されており、朔耶が時々顔を出している厨房でも仕込みをしながら話していた若い料理人が『悪し様な言葉を吐きながら料理を作るな！』と料理長さんに叱られていた事もある。

何が目的なのかしらねーと口調は軽く、しかし複雑な表情で眉を顰める朔耶。

「ちょっと前にレティとアルサレナさんからも周囲が騒がしくなるかもしれないとは言われてたケド……あ、ボタン取れ掛けてる」

斜め隣に座るドーソンの制服を弄って遊んでいた朔耶は何故か持っているソーイングセットをポシェットから取り出してボタンを繕い始めた。――エルディネイア嬢の眼つきがジト目になった。

「単純に考えれば、あなたとレスティア様の仲が悪くなって得をする人の仕業という所なのでしょうけど」

「あたしとレティの仲が良いと困る人って、どんな人？」

「僕がエルや君と親しくしてる事を快く思わないような類の人なんじゃないかなぁ」

そう言ってちらりとサロンの一角に流し目な視線をやるドーソン。その仕草は中々様になっており、彼は貴族モドキから本当の貴族へとクラスチェンジをなしえたようだ。――今のところ仕草だけだが。

朔耶はチクチクとボタンを繕いながらドーソンの向けた視線の先に貴公子のグループを見つけ、軽く意識の糸で表面の思考を読み取って納得する。感じ取れた内容は何れも肥大化した自尊心による嫉妬や侮りなど悪態ばかり。

自分達を差し置いて公爵家令嬢と懇意な間柄にあるドーソンへの敵意。しかし彼を認めたブラフニール家を敬う気持ちで揺れるジレンマ。

――下賤な輩が！　一体どうやってランバルト公に取り入ったのだ

！　是非詳しく知りたいぞっ　しかし平民に教えを請うなど……っ――

――何故あんな田舎者がネイア様やサクヤ様と……輪に入りたい……入りたいが此方から出向くなぞ名家の名折れ……っ――

――もしや、あの冴えない風貌が女性の母性本能を擽るとか……ワザとか？　ワザとなのか？　いやしかし、アレを真似るのは……――

「……ああ、なんとなく分かった気がする」

人の思考など気軽に読んで良いものでは無いなと、意識の糸の使い方を改める方向で密かに反省しつつ滅入った気分をお茶で流した朔耶は、王都に広められたレティレスティアとの噂も動機は案外単純なモノなのかもしれないと思い始めた。

その時、別の一角から男性の言い争う声が響き、談笑にさざめいていたサロンが一瞬静まる。

「なんだと！　お前はあの魔物に襲撃された日の恩を忘れたのか！」

「それとこれとは話が別だろう！　お前こそ祖国への忠誠をどう考えてるんだ！」

「おいよせよ、本人がいる前で……」

胸倉の掴み合いになっていた二人の院生は、彼等を宥めに入った友人の言葉にハッとなって振り返り、朔耶と目が合うとバツが悪そうに視線を逸らした。サロン内はざわざわヒソヒソと暫らく探り合うようなざわめきに包まれる。

「これは、思ったより深刻かもしれないわね」

「一度レスティア様と不仲説を否定する表明でもなさった方が良い

のではなくて？」
「うーん、それで治まるならこんな状態にまでなら無いとも思うのよねー。返って疑心を煽っちゃうかも」

精霊姫派と戦女神派とで先程のような諍いや対立が起きたりして学院でも問題になっているらしく、このままでは王都のみならず、各地の精霊神殿や周辺国にまで飛び火するかもしれない。
以前、魔族組織（ヨールテス）に扇動されてサクヤ派勢力が引き起こした暴動の事が思い起こされる。

「レイスは仕事が忙しそうだし、ただの噂でイーリス達は動かせないし、王国騎士団は御前試合の準備中だし、ルディは焼餅だし、フューリ達は管轄外だし。あたしが何とかしなくちゃね……」
「今さり気無く関係無い事を混ぜましたわね？」

ジト目で睨むエルディネイアの視線を明後日の方向へ受け流し、これは家族にも相談してみようかなと最後のお菓子を口に放り込む朔耶なのであった。

朔耶が都築家にて兄と弟に非常召集など掛けている頃、王都上流区のとある屋敷の一室で密談を交わす者達がいた。

「噂は順調に広まっているようだが……具体的な効果が出ているのか今一つはっきりせぬな」
「姫様や戦女神がなんら動きを見せないから、周りの者も事態を見

守る事しか出来ないのではないか？」

「大丈夫ですよ、皆様方のお耳には入らないでしょうが、下々の間では精霊姫派と戦女神派で度々揉め事が起きていますから」

「昨日など学院の生徒が戦女神のいる前で言い争うような事があったようですな」

不仲説流布の効果を疑問視する門閥家の面々に、表面上は一見して何事も無く過ごしている戦女神も内心穏やかではいられまいと、作戦が順調である事をアピールする派閥組の貴族達は次の段階を示した。

外野の対立が十分に深まった辺りで、近衛騎士団長（イーリス）と朔耶の不義、所謂スキャンダルをでっちあげる。

「それは……姫様への侮辱になりはしないか？」

「ははっ　何を今更」

「む？」

「戦女神との不仲説だけでは双方のお心を僅かばかり痛めるだけに留まりますれば――この際、多少の不敬は覚悟して頂きたい」

ここからはレティレスティア姫と戦女神が互いに疑心を懐く方向へ工作をシフトさせて行く。

方法自体は今までと同じく、二人が言い争っていたとか、反目し合っているらしいといった噂を城内や城下の噂好きな者達に流すやり方だが、内容を二人の不和からより過激なモノにするのだ。

『姫様が戦女神の事をこう言っていた』や、『戦女神が姫様の事をああ言っていた』等という相手に陰口を向け合っているような内容。

「うーむ……」

「王室の伝統と威厳を守る為とはいえ、姫様の名誉を傷つけるような内容は……」

「何を仰います、このままでは過ぎた改革派共が掲げる”開かれた王室”などという妄言が罷り通ってしまいますぞ」

「それに、不義の疑いが掛けられるのはあくまで戦女神と近衛騎士団長です。姫様には何の落ち度も無いと我々がフォローすればいい」

あまり気乗りがしないらしく、あからさまに眉を顰める者も居たが、明確に反対する者は居ない。フレグンス王室の在り方を正常化する為ならばと、この計画は即日実行される事になった。

深夜、静まり返った城内を移動する夜勤の使用人達が通路を歩いていると、何処からか兵士のモノらしき話し声が聞こえてくる。

「おい、さっき防壁の陰で抱き合ってたのって近衛騎士団長とサクヤ様じゃなかったか？」

「お前もそう見えたか？　俺もまさかとは思ったんだが」

「最近の姫様とサクヤ様の不仲って、もしかしてあれが原因かな」

「かもな。やっぱりただの噂じゃなかったんだ」

やがて二人組みの話し声は遠ざかり、今のやりとりを耳にした使用人達は顔を見合わせるとヒソヒソと声を潜める。こうして噂話が偶々通り掛かった侍女や衛兵達の耳に入っては、彼等の口から仲間内へと広まっていく。

王室に近い場所で働く侍女達も噂を耳にしており、彼女達から謂れの無い同情的な視線を向けられるなど、レティレスティアの周囲にもそれら噂による影響が見られ始めた。

根も葉もない噂に惑わされてはならないと上役から注意を受けても『ええ、ええ、分かっていますとも。私たちは姫様のお味方ですから』といった感じでまるで効果がない。

「さて、噂を流している者達の狙いはなんだろうな？」

「大方サクヤとレスティアを対立させ、どちらかに肩入れして自身を売り込もうという魂胆なのでしょう」

王の間でレティレスティアも交えて最近の憂いごとを話し合うカイゼル王とアルサレナ王妃。

奇妙な噂が流れ始めた最初の頃こそ強い警戒心を持って城内や王都に住む貴族達の動向に眼を光らせていたアルサレナだったが、サクヤ自身からも大した悪意によるモノでは無いらしいと聞かされた事もあり、この頃は頭痛の種の一つくらいにまで問題が格下げされている。

さらに以前、朔耶に査問会を謀ってエライ目にあった重鎮四家の内の一家から、かつて自分達の派閥に属していた若い貴族グループの中に最近怪しげな動きを見せている一派が居るという内容の書状が届いていた。

「ふむ。国家転覆を狙った国内外勢力の工作という可能性は？」

「そんな大層な陰謀が秘められていたのでしたら、精霊の知らせで告げられていますよ」

それでも困った問題である事には変わりなく――――

「私、サクヤの手助けが出来ると思ったのに……せっかく力を得られてもこんな……」

「はあ……。この子はこの子でサクヤに入れ込んでしまっているし」

「ははは、イーリスとの仲にも問題がないのだから、構わんではないか」

「まあそれはともかく、如何にして収拾をつけるかですが――」

事態の収拾にカイゼル王が介入すれば大事と捉えられ、少なからず噂に有りもしない信憑性を与えてしまう。

やはり根も葉もない与太話が一人歩きしただけの些細な問題として処理するのが理想的なのだが、如何せん噂の浸透具合が平民、貴族を問わずあらゆる層まで満遍なく広まっている為、これを一掃するには何らかの処置が必要だった。

また今回の場合、戦女神派を表明した者はレティレスティアに敵対すると宣言したも同然である事が厄介な要素となっており、戦女神派、精霊姫派として対立した者達の心に互いへの遺恨を残さないよう配慮しなければ、将来的に思わぬ火種ともなり兼ねない。

「少し前なら反逆罪になる所だったな」

「今でもそれを訴えている官僚がいますよ……レスティア？」

「あ、母様、少し待って下さい。今サクヤから交感が」

朔耶との交感状態に入ったレティレスティアは暫らく沈黙した後、困惑するような表情を浮かべ、やがて驚きの表情から不安の表情と色を変え、最後に緊張を帯びた表情に落ち着いた。

娘の百面相を眺める国王夫妻は、朔耶がまた何か突拍子も無い事でも思いついたのだろうかと、カイゼル王は面白そうに、アルサレナ王妃は興味深そうにレティレスティアの報告を待った。

フレグンス城の庭園に設けられた茶会の席にて向かい合う戦女神と精霊姫。今日のお茶会はレティレスティア第一王女の提案により、以前から予定されていたものだ。噂の渦中にある二人が顔を合わせるという事で、この日は城入りしている貴族の数もやけに多い。

会話もなく、視線を合わせる事もなく、ただ静かにお茶を嗜みながら向かい合う二人の間にはどこかピリピリとした緊張感が漂い、世話を仰せ付かった侍女達は興味半分怖さ半分といった様子で黙々と仕事に励んでいる。

そんな普段の二人とは明らかに空気の違った奇妙なお茶会を、城に集う多くの人々がテラスや柱の陰から観察していた。朔耶とレティレスティアの不和を画策したグループもその中に混じっており、彼等は声を潜めながらこの茶会について意見を述べ合う。

「貴殿はどう見る？」

「さて……態々人目につく場所で会う意図は如何なるものか」

「対立する双方の支持者を治める為に、不仲説を否定して見せる心算なのでは？」

「それにしては、和やかとは程遠い雰囲気に感じるが……互いの陰口に関する噂のどれかに心当たりでもあったとか」

人目を避けて会えばまた噂の元となるので、敢えて公に会う事を選択したのかもしれない。等々、色んな憶測を交えながら二人の様子を眺めている。彼等は知らなかった。朔耶とレティレスティアの間で行なわれる交感が如何なる性質を持つものかを。

直接会わずとも明瞭に会話を交わし、嘘偽り無い気持ちを伝え合うことが出来る、心を繋ぐ疎通の能力。噂や悪評など、外部の情報による干渉で二人を欺く事など、実質的に不可能なのだ。

周りからの密かな注目を横目に、朔耶とレティレスティアは先程から交感でこれから行なう事の段取りを話し合っていた。

『だいぶん集まってるみたいだね、そろそろかな？』

――私、上手くやれるでしょうか……？――

『大丈夫、大丈夫。ちゃんと練習した通りにやればオッケーだよ、それっぽく見えればいいんだから』

――が、がんばります――

戦女神派、精霊姫派、両者の対立を狙う者、憂う者、様々な思惑が絡み合う中、お茶会の様子を窺っていた貴族達の間に無言のざわめきが広がる。

暫らく席を外すように言われたらしい侍女達がテーブルの傍から離れて行き、建物の出入り口付近まで下がると同僚の侍女や様子を

窺っていた貴族達から色々と質問を投げ掛けられていたのだが――

――

「それは、どういう意味ですか！」

「言ったとおりだよ、理解出来なかった？」

テーブルを挟んで向かい合っていた朔耶とレティレスティアは何事か言葉を交わしたかと思うと、突然レティレスティアが立ち上がって強い語調で問い質し、朔耶はそれを挑発的に受け流す。

只事ではない様子で睨み合いを始める二人。やがて空間から染み出すように形成されたオレンジ色に輝く六枚の羽がレティレスティアの周囲に発現し、呼応するように朔耶が漆黒の翼を纏った事で周囲は騒然となった。

両者の間に巻き起こった魔力の奔流による圧力で椅子やテーブル、日除けの傘などが吹き散らされる。

「一体、どうされたのだ……！」

「お、御止めしなければ……誰かアルサレナ様に連絡を！」

城詰めの衛兵が慌てて知らせに走り、近くで控えていた近衛騎士が二人に駆け寄ろうとしたその時、レティレスティアの翳した手の先に光の粒が集まり始め、やがて発現した直径六十センチ近い光弾が朔耶に向かって放たれた。

朔耶は飛んできた光弾に片眉を顰めると、片手でバシッと叩いて空の彼方へと弾き飛ばす。結構な威力の籠められた魔力の塊なので、城の壁などに当てないよう上手く精霊が弾く角度を調整してくれた。段取りと違う行動に戸惑いの表情を見せるレティレスティア。

『レティ～？　そんなんじゃ駄目だってば、もっとおっきいのじゃないと』
――で、でも……――

危ないからと躊躇しているレティレスティアの感情を読み取り、朔耶は顔に出さないよう苦笑する。今回のお茶会と二人の対峙は、数日前から準備を進めて示し合わせておいた演出である。
対立している支持者双方の目を覚まさせる為、朔耶とレティレスティアで一芝居打つという計画。

”戦女神と精霊姫が争えばどんな事になるのか”

とりあえず、朔耶達が全力全開で暴れても大丈夫な場所の選定を行い、機械車競技場を作る為に古い建物を取り壊して整地する予定だった旧市街地を戦いの舞台として確保。騎士団から手の空いている者を使って立ち入り禁止にさせている。
庭園でのお茶会で言い争いから揉める演出を経て、好きにぶっ壊しても良い旧市街地に場所を移し、激突してみせるシナリオ。

後々の都合を考え、レティレスティアが先に手を出したという形で城の敷地から旧市街地へ向けて移動する為、朔耶に向けて最初の一撃を放つ所までは予定通りだったのだが、レティレスティアの性格が災いしてあまり大きな攻撃が出せないでいる状態だ。
先程の光弾でも並みの魔術士では作りだせない程の十分に強力なモノだったのだが、朔耶を吹き飛ばすには全く足りない。

一連の行動は傍からすれば、挑発を受けて激昂したレティレステ

ィア姫の物凄い攻撃を戦女神（サクヤ）が軽々弾き飛ばし、攻撃を弾かれたレティレスティア姫が驚いているような構図に見えた。

『大丈夫だから、ドーンと撃たないと――口喧嘩のお芝居でレティがイーリスとあーんな事やこーんな事してたって口走っちゃうぞ～』

――え、えええ！　だ、駄目ですっ　そんなの駄目です！――

交感で伝わって来る朔耶がこれまでに目撃した社会見学情報に、顔を真っ赤にするレティレスティア。これも、傍目からは朔耶に余裕の表情を返されたレティレスティアが怒りで顔を赤くしたように見えたりする。

二人の秘密

そうして先程より力強く振り翳されたレティレスティアの両手の先に、直径二メートルはありそうな特大光弾が現われた。

複数人の魔術士が協力して練り上げる攻城戦用の大魔術にも匹敵するような、膨大な魔力が凝縮されているソレを、レティレスティアは少し躊躇しながらも『どんと来なさい』と構える朔耶に向けて撃ち放った。

巨大な光弾を受けた朔耶は城壁を越えて空高く吹っ飛んでいく。実際は魔法障壁で光弾を削り過ぎてしまわないよう気をつけながら自分で飛んでいるのだが、その光景に侍女達からは悲鳴が上がり、貴族達は慌てて退避を始め、衛兵や近衛騎士は応援を呼びに城内を駆け回る。

庭園の近くでお茶会の様子を窺っていた事情を知らない人々は右へ左への大騒ぎとなった。そんな中で、朔耶とレティレスティアの支持者による対立を煽っていたグループは、これを好機と捉える者と、行き過ぎた事態と考える者とに意見が割れていた。

「これはいい、ここまで決定的な衝突、最早隠蔽は不可能だ。王も動かざるを得ないだろう」

「馬鹿な事を！　両者が争うような事態には至らない筈では無かったのか！」

「よもやこのような事になろうとは……」

「何を仰います、今の状況こそ我々が介入（付け入る）する絶好の機会ではありませんか」

戦女神（サクヤ）が精霊姫（レティレスティア）に怪我でも負わせようものなら、それこそ弾劾を訴えるに十分な理由となる。

両者の争いを間近で目撃した者として全力で姫君の弁護に回りつつ戦女神派の不満を押さえ込んで見せれば、他の精霊姫派や王室周辺の者達にも自分達の存在を印象付ける事が出来る。派閥組の若い貴族達は野心の光を灯した不敵な笑みを眼に含めながらそう語った。

「王からの覚えも良くなるというモノですよ」

「そう考えれば、いっそ姫様にはここで戦女神を排除して頂けると有難いですな」

「貴公等は……っ　王に取り入る事しか考えていないのか！」

「姫様に故殺を期待するなど、なんたる不敬なっ」

ここへ来て、フレグンスの伝統を尊び、王室への忠義、貴族としての誇りを軸に動いていた門閥家の面々と、重鎮四家の中でも富と権力に重点を置く家の傘下にあった派閥組との間に、大きな価値観の隔たりがある事が浮き彫りになった。

派閥組の貴族達は彼等の領袖である重鎮四家と今は距離を置いているとはいえ、やはり彼等の傘下にある者としての姿勢は変わらな

い。

「ここまで共に策略を巡らせて来たのですから、今更降りる事など出来ませんよ」

「姫様と戦女神がこうなった以上、我々ももっと踏み込んだ行動を取らなければ」

「……どうするつもりだ。査問会の二の舞でも演じるつもりか」

「はは、まさか。我々はあくまでも”精霊姫の支持者”でしかないのですよ、する事は決まっています」

皮肉をさらりと受け流した派閥組の若い貴族はそう言って含み笑いを見せると、レティレスティアが朔耶を追って飛んで行った方向に視線を向けながら今後の活動計画を語る。

「今まで通り姫様を支持し続けるのですよ、皆様方にはその地位と人脈を存分に振るって頂きます。一人の日和見も赦さぬよう」

「傘下の貴族家や宮廷内にも戦女神派は居るだろう、アクレイア家と繋がりのある者も少なく無い」

「その者達にはこのように問うてやれば良いのです、”貴殿等は誰に忠誠を誓っているのか？”とね。王への忠誠が試される、良い機会だとは思いませんか？」

消極的なようでいて効果は高く、表立って動ける程度に正当性を主張できる支持活動。

偽りの噂をばら撒いていた頃は迂闊に触れられない話題だったが、戦女神と精霊姫の衝突がここまで明確に示された今なら、王宮で重要な役職に就く門閥家の者から朔耶とレティレスティアの不和と衝突の事実を元に、どちらを支持しているのかを訊ねられても不自然

ではない。

「城に勤める者の殆どが精霊姫派を表明すれば、どうなりますかな？」

「ううむ……」

傘下の貴族だけでなく、中流以下の有象無象を含む弱小貴族達、名家と繋がりが欲しい覚えを良くしたい家の者達もこぞって精霊姫派を表明するようになるだろう。戦女神派は神殿勢力や一般庶民で占められるようになり、双方の支持者層は完全に貴族と平民に分けられる。

「そこまで事が進めば……後はお分かりになりますね？」

「……果たしてそう上手く行くものなのか」

腕組みをして唸りながら渋面を見せる門閥家の御仁達を尻目に、派閥組の若い貴族達は城内へと足を向けた。

この周辺でお茶会の観察をしていた他の人々は、既に皆それぞれ高い場所へと移動している。城壁を越えて飛んで行った戦女神と精霊姫がどうなったのか。二人の戦いを見物に行こうと、彼等も上階のテラスへ移動を始めるのだった。

「んん？」

旧市街地のとある半壊した建物に光弾を抱えたまま後ろ向きに飛

んできて突っ込んだ朔耶は、瓦礫の中から身体を起こしかけてハタと動きを止める。追って来たレティレスティアは朔耶が空に上がって来ないのを心配して慌てたように下りてきた。

「サクヤ！　何処か怪我でも」

「あー違う違う、今何か黒い霧が深まった感じがしたような気がしてね」

「黒い霧……以前サクヤが言っていた人の悪意ですか？」

「うん、薄っすらした霧の流れみたいなのは前から幾つか感じてたんだけど、その内の一本がちょっと濃くなった感じ？」

なんじゃろな？　と腕組みをしながら小首を傾げる朔耶。霧の発生源は殆どが城に集中している事から、恐らくはお茶会の様子を見に来ていた人達の中に悪意の中心となる人物がいるのであろう事が推測できる。

「うーん、あたし達がやり合うのを見て何か良からぬ事でも考えたとか……」

庭園のお茶会を見物できる場所周辺にはレイスが”仕掛け”を施してあるらしいので、後で宮廷魔術士長の執務室に顔を出す事にした朔耶は瓦礫の中から立ち上がる。そろそろ城壁や高い建物の上から旧市街地の様子を見物しようとする人々も集まった頃だ。

「レティ、派手に行こう」

「は、はい！」

お茶会の席で挑発を受けた精霊姫（レティレスティア）が戦女神（サクヤ）に攻撃魔術を撃ち放った。というセンセーショナルな噂は瞬く間に王都中へと広がり、城に勤める者達は勿論の事、上流区や貴族街で一報を受けた貴族達も自宅や交流のある貴族宅の高い場所から旧市街地の様子に注目した。

一般区の住民も下街では比較的背の高い建物である神殿に詰め掛ける者や、家の屋根に登ったりする者、わざわざ一般開放区に上がって旧市街地を見渡せる場所に陣取る者達もいた。

これほど迅速に情報が伝わった裏には朔耶とレティレスティアの不仲説を広めた者達が動いていたという事もあり、正確な経緯などは独自の情報網を持つ上流区や貴族街に住む人々くらいにしか把握されていない。

一般区に伝わる頃には『戦女神と精霊姫が決闘を始めたらしい！』というような内容になっていた。尤も、これは情報を広めた側が朔耶とレティレスティアの対立という構図をより強調する意図を持って故意に出来事の一部を省いたり付け足したりした結果ではあるが。

「貴族街の偉いさん方は頭抱えてるみたいだぜ、お姫様に付くって言やあ神殿にそっぽ向かれるし、戦女神様に付くって言やあ反逆罪だ」

「はっはっは、同じ貴族様でも金貨食って生きてるような上流区の連中なら、神殿の援助なんか必要ないんだろうけどな」

フレグンスの事実上の守護者でもある朔耶と、フレグンスの由緒正しき王族であるレティレスティアのどちらに付くのかという、大多数の貴族達にとっては今後の身の振り方にも係わる割と深刻な問題だが、一般民にとっては少々お祭り気分の混じった戦女神と精霊

姫の対決。

基本的に街中での決闘など、王国に属する騎士や魔術士が私闘に応じる事は一応、禁じられている。しかし、決闘未満喧嘩以上な訳ありの諍いはこの平和な王都でも珍しくはない。炎弾や氷塊が飛び交う魔術士同士の派手な喧嘩も、学院生辺りによく見られた。

「最強の魔術士と最高の精霊術士の対決かぁ～、お前どっちが勝つと思う？」

「不謹慎な奴だなぁ……、まあ俺は戦女神様派なんだけどな」

「この頃は学院生も候補生もお行儀のいい大人しいのばっかだから、これはちょっと期待しちまうよな」

ちなみに、ここ王都で近年最も多くの私闘をやらかしたのは当時騎士団候補生だった魔術士見習いである。数年前に辺境騎士団送りになったが最近王都に返り咲き、選定の儀を経て宮廷魔術士長に就いている。

「まあどっちが勝ったとしても、また酒場辺りで戦女神派と精霊姫派が揉めるんだろうなぁ」

「お！　見ろよっ　飛び出して来たぞ！」

「すげえなぁ、本当に二人とも飛んでるぜ」

「あの黒い羽の方がサクヤ様で、橙色の羽みたいなのがお姫様か」

フレグンスの二大守護神による希少な空中戦に沸き立つ見物人達。貴族街や上流区、城壁の上などから様子を眺めていた貴族達も、紫と橙に輝く光の軌跡を絡み合わせながら空中を飛び回る戦女神と精霊姫の闘いに、神秘的な美しさを感じて感嘆の溜め息をもらす。

が、二人の激突はそんな生易しいモノではなかった。数秒の後、

彼等の安穏とした表情は凍り付く事となった。

「よーし、そろそろ行くよレティ。魔法障壁を全開にしておいて」

「分かりました。お任せします、サクヤ」

レティレスティアと絡み合うように錐揉みしながら空中高く舞い上がった朔耶は、自分の魔法障壁も使ってレティレスティアを保護しながら地上に向けて真っ逆さまに降下して行く。

そうしてありったけの魔力を注ぎ込んだ障壁を地面に叩き付けた。これは魔族組織（ヨールテス）との戦いで覚えた技だ。

ドーンという重い衝突音が響き渡り、抉られた地面に巨大なクレーターが形成されると、落下地点を中心に広がった衝撃派が付近の建物を薙ぎ倒した。

もうもうと立ち込める土煙の中から大きな塊が転がるように飛び出し、がらがらと崩れながら跳ねるそれは縦長の窓や小さなテラスの付いた古い屋敷の一部だった。凡そ六メートル四方はありそうな二階部分の一室。

屋根や壁部分に空いた穴から朽ちて色褪せた内装が垣間見え、その部屋に残されていたらしき家具の乱舞している様子が窺える。

「……な、なんだ……今の」

「家の一部、だったよな……？」

「おい、見ろよあれっ　すげえ大穴があいてるぜ！」

未だ土煙で遮られたクレーターの中心部分にふわりと揺らめく漆黒の翼が見えた瞬間、眼も眩む閃光と共に大気を振るわせる雷鳴が轟き、天を衝く勢いで発現した巨大な稲妻柱が大剣の如く弧を描いて旧市街地に並ぶ半壊した建物群に振り下ろされた。

その弾けた先からオレンジ色に発光する六枚の羽が空へと舞い上がると、特大の光弾を雨のように撃ち降らせる。

光弾の雨を掻い潜って地表スレスレを蛇行しながら高速飛行する漆黒の翼は、進路上の障害物を次々と巻き込んでは撥ね飛ばし、根元から切り砕かれた家屋はまるで鎌を使って草でも刈っているかのように宙を舞って崩壊しながら落ちて行く。

発現した竜巻が周囲を瓦礫に変えながらそれらを巻き込み、同じタイミングで発現した火柱と衝突すると、炎に巻かれて焼けた瓦礫が火の玉となって降り注いでは辺りを焦がす。放たれた光弾が建物群を貫き、稲妻柱が崩れた建物ごと光弾を薙ぎ払う。

戦女神と精霊姫の戦闘によって瞬く間に破壊されていく旧市街地の街並み。爆発の衝撃音は城の上階にある窓をもガタガタと鳴らす。二人の衝突は文字通り王都全域を揺るがした。

「あれは、もう……人間（ヒト）の戦いではない――」

城壁から旧市街地の様子を眺めていた貴族グループの誰かがそんな呟きを口にする。周囲の者達は皆同意の沈黙で答えるのだった。

結局、旧市街地を瓦礫の山に変えた戦女神と精霊姫の闘いは、王国騎士団の精鋭部隊に近衛騎士団、それに宮廷魔術士隊の精鋭も率いたアルサレナ王妃が二人の仲裁に現われた事で治められた。

争いの原因は例の噂に端を発した誤解による痴話喧嘩の類であったとする王室発表は、双方の支持者その他を大いに脱力させたそうな。

その夜、王の間にて――

「いやあー暴れた暴れた」
「こういう事を言ってはいけないのかもしれませんが……、ちょっと楽しかったです」

朔耶とレティレスティア、アルサレナの三人が集まり、今回の騒動について話し合う。カイゼル王は会議に出ていて今はいない。

「二人とも、本当に大暴れしましたね」

取り壊し予定だった建物は全て粉々に吹っ飛ばしてくれたので、建物の解体に職人を雇わなくても済む分、費用が浮いたと財務の者から喜びの報告が上がっているらしい。瓦礫の撤去には適当に労働者を募っている。

「噂を広めてた犯人って、もう特定できました？」
「宮廷魔術士長（レイス）から聞いたのですか？　一応、目星は付けておいた者達でしたが」

何時ぞやの査問会で返り討ちにあった重鎮四家の中でも、とりわけ罰金の支払いを一番ごねていた家の派閥に属する若いグループが主犯格である所までは突き止めたという。

尤も、彼等に目星を付けていたのは事前にその重鎮四家の内の一家から、最近怪しい動きをしている者達がいるようだという内容の書状が届けられていた事もあったからだとアルサレナは語った。

「それって、うちは関係ないですよーって意味なんですかね……？」

「どうでしょうね。彼等も一枚岩というわけではありませんから」

レイスの仕掛けた音を届ける術によって派閥組の会話は筒抜けだったらしく、今後どう動くのかも概ね把握出来ている。騒ぎの元凶である彼等と、その配下も含めて根こそぎ一網打尽にする為、今しばらくは泳がせておくのだそうだ。

「でも、派手な事になった割りには、その人たちがした事って噂を流しただけなんですよねー」

「ふふ……それで済ませておけるほど、私は優しい人間ではありませんよ？」

大した罪にはならないのではなかろうかと疑問に思う朔耶に、アルサレナは薄っすらと笑みを浮かべながら彼等が重大な過ちを犯している事を告げる。

朔耶とレティレスティアは双方の支持者に二人が争うとどうなるかを教えた。

「私も、彼等には誰に喧嘩を売ったのかを教えて差し上げるつもりです」

「そ、そうですか……」

なんとなく、『紅獅子（ルティ）はお母さん似なんだなぁ』等と考えてしまう朔耶なのであった。

その後、例の一派はレイス達が予測した通り、先の戦女神と精霊姫の衝突を話題に『貴殿等は今後どちらに付くつもりか？』という趣の訪いをもって、王宮に勤める人間を一介の衛兵から官僚に至るまで精霊姫派で占めるよう工作の働きかけを始めた。

しかし、彼等の思惑とは裏腹に誰しもが二人の対立を厭い、どちらか片方を支持する事に反対した。戦女神と精霊姫の関係は良好に保たなければならない。争わせてはならない。国が滅んでしまう。等々――

皆は口々にそう訴え、逆に身分ある者が精霊姫派だ戦女神派だ等と軽々しく発言するのは如何なものかと、諫められる始末。

「不甲斐無い！　どいつもこいつも平穏平和と、腑抜け揃いも甚だしいっ」

「平穏たる事は良い国の証であろう、誰しも平和を求めるのは当然の事。貴公は一体何と戦っておるのだ？」

「……っ！　貴方方はこれで良いのですか！　戦女神は相も変わらず我が物顔で城に出入りし、申請も通さず王と謁見しているのですぞ！」

派閥組の若い貴族は門閥家の御仁達から距離をとろうしている気配を感じ、王室の権威が蔑ろにされていると強調して気を引こうとするも、戦女神と精霊姫の衝撃的な激突があった日に露見した互いの認識や価値観の違いによる溝は深く、埋められることは

なかった。

旧市街地の整地作業が進む王都の昼下がり。大学院のサロンには何時ものようにエルディネイアのチームメイト達が集うテーブルで一緒に寛いでいる戦女神の姿。

あれだけ世間を騒がせた精霊姫との噂も、この頃はさっぱり聞かなくなっていた。広めていた元凶とその手足がいなくなったのだから、当然といえば当然ではある。

「それで、結局その方たちの処分はどうなりましたの？」

「さあ～？」

「さあ～って……気になりませんの？　御自分の事でしょうに」

「んーだって大事にはなったけど、そんなに気にするような人達じゃないし」

彼等の放つ悪意の度合いも薄く、あれだけの騒ぎになりはしたものの彼等がした事と言えば基本的に噂を広めただけで、偶々当たった感が否めない。噂に振り回されて騒いだ人達はその人達自身の責任でもあるのだ。

「まあ、アルサレナさんは自分とレティの事を出しにされたのが腹に据え兼ねたみたいで、誰に喧嘩売ったのか教えてやるって怖い笑い方してたけど」

「お、王妃様がそんな……？」

国民が知らない王妃様のダーティーな一面など暴露したりしつつ、朔耶は今日もオルドリアの日常を謳歌する。

ちなみに、最近エバンスの騎士団本部に水道事業の新しい教習生が王都より派遣されて来たらしく、毎日ガタイの良い土木作業員の日雇い労働者に混じって血とか汗とか涙とか愚痴とか流しているらしい。

「よう兄ちゃん達！　ひょろいのに今日も頑張るなぁ！」

「せ、背中を叩くなっ　やりたくてやっているのではない……！」

「うう……名家の家督たるこの私が、何故こんな……」

現場監督に戦女神や精霊姫とも親しいと噂の強面な騎士がいるので、サボる事も出来ない若者二人なのであった。

氷の騎士【外伝】

長い大戦とその後の混乱を経て国家滅亡の危機を脱し、フレグンス王国の衛生国として平定されたサムズ国。首都エバンスの南方に位置する小さな街クルストスでは、フレグンスから派遣された辺境騎士団が街の防衛や治安維持全般を担っている。

その辺境騎士団が活動拠点として使っている古い屋敷を改装した仮設支部にて、食堂と兼用されている広い玄関ホールでは外回りの巡回から帰って来た騎士達が今度新しく配属される新人について噂を飛ばしあっていた。

「王都から来るんだって？　こんな僻地に珍しいな」
「なんでもかなりの問題児らしいぞ、色々噂を聞く」

王都では禁じられている私闘を幾度となく行い、同じ騎士団候補生や先輩騎士達を叩きのめすなど、その被害者は数十人に及ぶといわれ、半ば懲罰的にこの辺境騎士団支部への配属が決められたらしい――等々。

「確か今日だっけか？」
「ああ、そろそろ着任の挨拶に来るんじゃないか」

彼等がそんな話をしていた時、支部の入り口に上流階級の間でよく使われている旅行用の立派な荷物袋を肩に背負った若者が現われ

た。

歳の頃は十七、八といったところか、整った顔立ちに少々細い印象を受ける青髪の青年。だが眼つきは鋭く、抜き身のナイフが如く尖った雰囲気を醸し出している。

彼が件の新任騎士ではないかとホールに居る騎士達が囁きあう空気の中、受付に向かおうと歩き出したその青年に対して、血気盛んな若い騎士グループが値踏むような視線を浴びせながら耳に届く声で噂話の掛け合いを始めた。

「どんな無頼漢か暴れ馬が来るのかと思ってたら、意外にひょろい優男じゃねーか？」

「そりゃそうだろう、なんたって魔術士系名家のお坊ちゃんだって話だからな」

「名家つってもアレだろ？　もうすっかり落ちぶれたって噂のアクレイア――」

その瞬間、無数の氷弾が若い騎士達を襲った。甲冑にめり込むほどの威力で氷の粒をぶつけられ、椅子からもんどり打って転げ落ちる若い騎士達。何事かと剣に手を掛ける者やそれを止める者、気にせず食事を続けている者などで騒然となる辺境騎士団仮設支部の玄関前ホール。

フレグンスの魔術士系名家筆頭アクレイア家の嫡男。様々な逸話と共に王都からやって来た新任騎士は、お坊ちゃんの優男どころか、挑発を向けてきた騎士にいきなり氷粒の散弾をお見舞いする過激な暴れん坊だった。

数日前――

王都の一般解放区に佇む古い廃墟。その敷地内で脇腹を押さえて倒れているガッチリとした体格の若者。土と枯れ草に塗れた制服は騎士団候補生のものだ。すぐ傍には、同じく候補生の制服を纏った優男風の若者が、苦しげに呻く彼をじっと見下ろしていた。

「お、おのれ……騎士の決闘に……魔術を使うなど」

「決闘？　これは只の私闘だろう」

倒れている候補生の抗議を戯言と切り捨ててさっさと立ち去ろうとする優男風な候補生だったが――

「く……っ　堕ちた門閥家が……何時までもアクレイアの威光が通用すると思うなよ！」

――吐き出されたその言葉に足を止める。

「……今の言葉、我がアクレイア家に対する侮辱と判断する。では決闘だ」

「な！　ま……っ　ちょっとまて！」

名誉を掲げて決闘を宣言したレイスは突き出した手の先に氷塊を発現させると、倒れている候補生に容赦なくぶつけた。

「またやらかしたそうだな」

「何時もの事でしょう？」

王国騎士団の訓練施設にて指導官室に呼ばれたレイスは、もはや恒例となった私闘翌日のお説教を受けていた。騎士団候補生達の間では割と人気で、評判の良い美人指導官が詰めるこの部屋にもすっかり通い慣れた感がある。

相も変わらずなレイスに、指導官は溜め息を付きながら一枚の公式書類をテーブルの上に置いた。

「上から辞令が届いている。お前の配属先が決まった」

「サムズ国のクルストス……？　辺境騎士団送りですか」

「お前と、お前が伸した家の者達の双方に配慮した結果だ」

王都に正規配属された後も今のような調子でトラブルを起こされてはたまらんという上の判断もあったのだろう。

「向こうの情勢はそれなりに安定しているが、治安は決して良いとはいえん」

「ノンビリ左遷観光と言うわけにも行きませんね。尤も、腕を磨けるのなら何処でも構いませんが」

「揉め事は起こすなよ、王都とは違う」

言外にアクレイア家の名による威光は通用しない事を含めるが、レイスにとってはそれこそ望む所。本物の実力を体得し、それを磨ける環境に身を置く事は、武勲で支えられてきたアクレイア家を継ぐ者として家の再興にも繋がる大事な要素でもあると考えていた。

「サムズの傭兵は質が低いと聞いてますが？」

「……自重しろ」

やれやれと頭を振って辞令書を掲げた指導官は、正式な配属命令としてそれを読み上げた。

「レイス・チル・アクレイア候補生、貴殿を正規王国騎士と認め、辺境騎士団サムズ方面、クルストス支部への配属を申し渡す」

「了解しました。明朝一番に辺境騎士団サムズ方面クルストス支部へと出立します」

「明後日の便でいい。あの娘との時間もとってやれ」

「……」

――こうして、レイスは王都を出発した。

そして今日。配属初日の挨拶でいきなりこの状況である。

「貴様！　何の真似だっ」

「喧嘩を売ってきたのは其方だろう」

色めき立つ地元の騎士達とレイスの睨み合い。そこへ、騒ぎを聞きつけた支部長が眉間に皺を寄せながら奥の部屋から現われた。

「何を騒いでいるか」

「支部長……こいつが、いきなり魔術をぶっ放しやがったんです！」

「挑発を受けましたので、応じてやったまでです。御気になさらずに」

しれっと返すレイスの反抗的な態度に、支部長は益々眉間の皺を濃くする。没落中とはいえフレグンスでも有数の名家であるアクレイア家の者。予め王都の訓練施設に勤めている知り合いから聞いてはいたが、中々に手を焼きそうな相手だ。

部隊編入を考えた支部長はホールにいる騎士の面々を見渡し――

「アンバッス、お前が面倒を見ろ」

「……了解」

空になった容器に鳥肉の骨を放り込みながら、熊の様な体躯に古傷だらけの武張った顔をした古参風な騎士が支部長からの御指名に頷いて応えた。これが、『レイス・チル・アクレイア』と『アンバッス・クルト』という実に対照的な二人の騎士の、最初の出会いであった。

「あなたが僕の上司ですか」

「アンバッスだ、小隊長をやっている。といっても、部下はお前一人という事になるがな」

「新設部隊ですか？」

「いや、うちは隊だけは揃ってるんだがな、隊員が居ない状態なんだ」

クルストス支部では人手不足を補う為に隊長以下の一般騎士を特定の部隊に所属させず、必要に応じて隊長クラスの騎士がその都度頭数を揃えて任務に当たるといった運営法がとられていた。今回レイスは例外的にアンバッス小隊の所属となる。

「騎士は長いのですか？」
「短くは無いな、お前くらいの頃からやっている」
「そうですか……」
アンバッスの答えに、レイスは淡々としながらも何処か失望を感じさせる雰囲気で会話を打ち切った。無能には無能なりの使い道がある、自分が居なければ立場を維持できない程の功績を上げ、傀儡として足場固めに利用すればいい。内心でそんな謀を巡らせるレイス。
年齢的にみても前大戦中から騎士団に所属していたであろう古株の騎士なのに、未だ小隊長というアンバッスを、レイスは見下していた。

翌日から街の治安維持活動に就く事となったレイスは、アンバッスに連れられて巡回へ出掛ける。初任務での最初の相手は物乞い達だった。支部を出るとまず表通りにたむろする物乞いの集団がわらわらと寄って来る。
「お恵みを……」
「余裕があればな」
ボロを纏った彼等の懇願をひらりと躱して行くアンバッス。これはもう挨拶みたいなもので、騎士団支部前では恒例となった光景である。王都でも一部地域ではこのような光景が見られるのだが、レイスにとっては初めて出会う類の”人種”であった。
クルストスの現状に関しては父ルィバンスからも予備知識として

聞いていたレイスは、こういう場合の立ち振る舞い方を思い出し、アンバッスに習って素通りしようと歩き出す。が、一歩踏み出す前に小柄な影が倒れ込んで来たので思わず支える。

「あ……ご、ごめんなさい騎士様……」

「……」

まだ幼さを残すあどけない表情の少女。磨けば光りそうな器量を窺わせる歳若い乙女がよれたボロを纏い、どうかお恵みをと足元に擦り寄る姿が哀れみを誘う。

ふと、王都に残してきた恋人の事を思い出す。彼女も家に来た当時はこんな風にオドオドとした表情で自分を見上げていたものだ。何となく感傷を覚えてしまい、レイスは小銭を取り出そうとするが――

「やめておけ」

アンバッスによって止められた。しかしそれは、レイスにではなく少女に向けられた言葉だった。

「見かけほど大人しい奴じゃないぞ」

「ありゃ、そうなのかい？　アンタがそう言うならヤバそうだ」

そう言って扇情的な妖しい笑みを浮かべると、首を竦めて見せつつそそくさと立ち去る物乞いの少女。あまりの変り身にあっけにとられるレイスを残し、数瞬前まで不憫な少女だった妙齢の女は裏路地へと消えていった。

「アレはこの辺りじゃ結構やり手の春売りでな、童顔で若く見えるがお前より年上だ」

今の時期になると新任の騎士を狙ってよく現われるのだという。ハマると尻の毛まで毟られると一部で恐れられており、実際何人か騎士にも犠牲者が出ているそうな。

彼女に貢ぎ始めた騎士は急に貧乏臭くなるので分かるらしいが、名誉を気にして言い出せないまま配属が変わったりした者もいたそうだ。相手次第では放っておく場合もあると笑うアンバッスに、この人も真っ当な騎士では無いなとレイスは息を吐く。

「王都の宮廷や晩餐会に現われる雌狐達に勝るとも劣らない化かしぶりだ……」

「はっはっ　野生の雌狐は逞しいからな、気をつける事だ」

最初の巡回先はその春売り達が集う裏通り、何処の街にもある通称『春売り通り』である。ここでも新任の騎士にアピールを向けてくる春売りの娘達。辺境騎士団の関係者は些細な事で殴らないし払いも誠実なので、彼女達にとって良いお得意さんでもあるのだ。

胸元の大きく開いた服を纏い、艶のある紅をひいた唇で誘惑の笑みを振り撒き、夜の街角を舞う妖精たち。今は朝だが。

レイスはアクレイア家を再興させる事に心血を注いでいるので、女遊びに興じている暇は無い。王都を発つ前日に、最愛の人と契りを交わしたばかりという事もあってか、彼女達の誘惑にも動じず靡く事はなかった。

「なんだい、つれないお兄さんだねぇ」

「もしかして……このお兄さん――男じゃないと勃たないとか」

「ああっ　なるほど！」
「そうよねぇ～、このくらいの歳で女に興味が無いなんて、他に考えられないわよねぇ～」

若くて小奇麗な温室育ち風にも見えるレイスは男色を疑われて咽る。春売り達は騎士団の人事傾向など内部情報にもある程度精通しており、普通はこんな辺鄙な勤務地に育ちの良さそうな貴族の子息が配属される事はないので、何か訳ありだろうという推測はしていたらしい。

「……愚弄する気なら女といえど容赦はしない」

鋭い眼つきで冷気を纏うレイス。春売りたちはキャーキャーと黄色い声を上げながらそこ等の路地へと消えて行く。そこへ、この一帯で春売り達を仕切っている婆さんに最近変わった事はないかと情報収集のコミュニケーションを図っていたアンバッスが戻って来た。

「余裕の無い奴だな、春売りの戯言くらい聞き流せ」
「……」

流石に大人気なかったという自覚があるのか、レイスは黙って視線を逸らす。だが、アクレイアの名は決して軽くはないのだという気持ちから反撥心も懐(いだ)いていた。

「ほれ、次行くぞ」

憮然とした様子のレイスを促し、アンバッスは次の巡回先へと足を向けた。

次に向かったのは繁華街に近い酒場通り。酒場とは名ばかりのような掘っ立て小屋がならぶ一角にて、余所の街から到着したばかりらしい商隊風の集団や、朝から飲んだくれている地元民など、まばらな客達を避けながら奥に見えるカウンターへと近付く。

「ここで情報を聞く時はまず安酒を注文するんだ」

レイスに情報屋（ここ）の使い方を教えながらカウンターに肘を乗せて地酒を注文するアンバッス。

巡回中にノンビリ酒かと呆れるレイスは、一体どんな代物（ぶつ）が出てくるのやらと胡散臭そうにツギハギだらけの小屋内を見渡した。この酒場モドキの店主は情報屋のような事をしているそうだが、情報収集に託けて飲んでいるだけでは無いのかと疑う。

もそっとした髭の店主と何時もの短いやり取りをしたアンバッスは、幾つか示された情報のうちエバンスの貧民街から抗争に破れた一味が流れ込んで来ているという話に銅貨を数枚並べて詳しい内容を聞き始めた。

と、その時、通りに面する席に座っていた客の一人が荷物を引っ手繰られた。バタバタと足音を響かせて慌しく走り去って行く人影と、引っ手繰られた拍子に椅子から転げ落ちる男性客の姿。

「商売道具が……っ　ああ！　騎士さん捕まえてくれよぉ」

咄嗟に人影を追って走り出すレイス。

「おい、レイス待て！」

制止の声を無視したレイスは『動きの鈍いヤツだ』とアンバッスを一瞥して店の外へと出た。アンバッスの居るカウンターでは、情報屋の店主が先程の引っ手繰りは例の一味の者だと明かした所だった。

家か瓦礫か分からない廃材の山が並ぶ入り組んだ路地を右へ左へと駆け抜ける。逃げる男の背中を睨むレイスは、男がただ闇雲に逃げているのでは無い事に気付いた。振り切ろうする素振りは見られるが、角の曲がり方や後方確認の仕方に何か余裕のようなモノを感じるのだ。

やがて開けた場所に出たレイスを待っていたのは、ナイフや棍棒で武装した二十人近い集団だった。

「あれ？　さっきの新任さんじゃないか」

集団の頭（かしら）らしき男がはべらせている女達の中に、支部前の通りで会った童顔の春売りがいた。

「なんだアンリ、お前の知り合いか？」

「いんや、違うけど……彼は止めといた方がいいと思うよ？」

この街で一番手を出しちゃいけない騎士の部下だからという彼女の言に、それなら寧ろ好都合だと集団の頭は自分の得物を手に取る。彼等はエバンスの貧民街を中心に手広く活動していた元大手の窃盗

団で、貧民街の支配権を巡る抗争に敗れて落ち延びてきた集団であった。

組織の再建を模索する彼等は、現在エバンスの貧民街を牛耳るダンベック一味に巻き返しを図ろうと、クルストスで弱小組織を吸収しての勢力拡大を狙っている。その一環として、まずは自分達の知名度を上げるべく箔付けに街の治安を護る騎士殺しを目論んでいた。

狙うなら何時何処でどんな相手が良いか、この街の裏表に詳しい春売りに自警団の有無や騎士の巡回路に関する情報を聞き出していた所へ、軍資金稼ぎに出ていた部下が騎士を一人釣って来た形だ。

「……お前」

「あー、あたしゃ違うからね。この一味とは客と春売りの関係でしかないから」

レイスに訝しむ視線を向けられたアンリはそう言ってパタパタと手を振った。そんな彼女をぐいと引き寄せ、頬にキスなど落としながらニヤリ笑いを浮かべて見せた一味の頭は、得物の大鉈を振り翳しながら手下達に声を張り上げる。

「よーし、てめぇら旗揚げだ！　まずはコイツを血祭りにあげてこの街の糞共を俺たちの前に跪かせるぞ！」

武装した窃盗団構成員の集団は気勢を上げて鼓舞に応えると、憐れな生け贄となった若い騎士に向かって一斉に襲い掛かった。

レイスを追って瓦礫の迷路にやって来たアンバッスは、この一帯で暮らす住人達の誘導に従って奥へ奥へと足を進めていた。
廃材の家から腕だけだして方向を指し示す彼等とは普段から特に会話を交わす事もなく、顔を合わせる事さえ滅多に無いが、この街で生まれ育ったアンバッスにとっては皆昔馴染みの者達だったりするのだ。
彼等も余所者に自分達の住処を荒らされたくはないらしく、非常に協力的であった。

そうして例の一味がアジトにしている開けた場所へ辿り着くと、氷で靴底を地面に縫い付けられていた窃盗団構成員の一人が、撃ち込まれた氷塊によって吹き飛ばされてきた。
既に彼等の半数ほどが所々凍結している地面の上に転がっており、先程の男を吹き飛ばしたレイスは氷塊の冷気を纏いながらアンバッスを振り返る。

「……意外に早かったですね」
「派手にやったな」

ちらりとリーダー格の男に視線をやるアンバッス。彼の腕に絡めとられていた春売りは『うわっ　やばっ』と慌てた様子で男の腕を擦りぬけると、一目散に逃げ出した。焦る窃盗団の頭。

「く、くそっ　こいつ騎士じゃねえのかよ！」

剣を一切使わず矢鱈強力な魔術ばかり放ってくる騎士など、詐欺にあった気分だと内心で悪態を吐きつつも、窃盗団の頭はあの春売りが言　っていた古株の騎士が現われた事でこれはチャンスだと自分に言い聞かせるように思考を巡らせた。

ここで出し惜しみせずに『一番手を出してはいけない』と言われている騎士諸共始末する事が出来れば、自分達の名声は一気に轟き、この街での地盤固めもスムーズに行なえるのではないか。

「のっけから用心棒を使う羽目になるとは……だが始めが肝心だ。おい、アンタの出番だ！」

呼ばれて掘っ立て小屋から出て来たのは煤けたローブ姿の男だった。彼はフリーの傭兵染みた仕事を生業としており、この窃盗団に高値で雇われた用心棒である。

「フレグンスの騎士が相手か……？　何かと縁があるものだ」

腕もそれなりに確かで、少し前まではこの地域の平定に来ていたフレグンスの王国騎士団や貴族令嬢の護衛に雇われたりもしていた。

「老兵に青二才、といった所か。ふむ、貴様……騎士の格好をしているが、魔術士だな？」

「隊長、応援を呼びに戻って下さい。ここにいては危険です」

「ん？　うちにそんな人手は余ってないぞ？」

ローブ姿の男を無視してアンバッスにここから離れるよう進言したレイスは、肩を竦めてみせるアンバッスの返答に内心で舌打ちした。

窃盗団の用心棒などやっている魔術士とゴロツキ集団程度を相手に遅れをとるつもりは無いのだが、足手纏いを守りながらとなれば色々と動きが制限されてしまう。

レイスに無視されたローブの男はぎりっと眼を細めると、ようや

く凍結した地面から靴底を引っぺがした窃盗団構成員に指示を出した。

「青いのは私がやる、お前達は老兵をやれ」

レイスと対峙する用心棒の魔術士。剣を抜きながらレイスの隣に並ぶアンバッス。武装した窃盗団構成員達が二人を取り囲む。

「まだそこまで歳は食ってないんだがな」

「隊長、下がっていてください」

「新任の部下一人に押し付けるわけにイカンだろう。こいつらはエバンスから流れてきた一味らしいぞ」

「……戦えるんですか？」

前方で構える魔術士から視線は逸らさず訪うレイスに、アンバッスはふっと自嘲気味に笑って答える。

「それしか出来ん」

瞬間、身を翻すように地を蹴り、右斜め後方に立つ窃盗団構成員に向かって一気に間合いを詰めると一閃、そのままレイスの左斜め後方へと突進を開始した。

思いの外素早いアンバッスの動きに面食らいながらも、レイスは凍結の拘束術を前方に向かって放つ。地を這い広がる氷の波に、また足を縫い付けられてはたまらんと慌てて距離をとる窃盗団構成員達。

結果、用心棒の魔術士とレイスは魔術戦闘を行なうに適度な距離を保って一対一で向かう合う形となった。

「――風は集い荒れ狂う渦となりて――」
「――風よ水よ集いて凍て付く刃となり――」

風の塊と氷の塊がぶつかり合い弾ける。つむじ風に吹き散らされた水蒸気の向こうに互いの姿を確認し、油断なく翳した手の先に魔力を籠めながら次の一手を狙い定める。仕掛けるタイミングは読み合いと心理戦の応酬になるのが魔術戦闘の定石でもある。

「帝国流……いや、ティルファ式の複合術か。なるほど、それなりに才はあるようだが、それだけで剣と両立出来るほど魔術は甘いものではないぞ」

そんな講釈を持って余裕を見せようとする用心棒の魔術士に、挑発の笑みを返すレイス。視界の端でまた一人、窃盗団構成員がアンバッスによって倒された。

「ゴロツキ風情が魔術を語るとは笑わせる」
「図に乗るな若造。世の広さというモノを教えてやろう」

用心棒の魔術士が魔力を練り始めた。レイスも応戦の構えで詠唱を開始。次の一手も攻撃魔術のぶつけ合いに決まったようだ。

「――風は集い荒れ狂う渦は斬撃の刃となりて――」
「――風よ水よ集いて凍て付く刃となり――」

用心棒の魔術士が放った風刃塊は氷塊を砕いて突き進み、レイスの纏う騎士の甲冑に僅かな傷をつけた。

「ふはは……！　どうだ？　帝国流の風刃魔術を風塊魔術に織り込

んだ我が独自の術の威力は」
「……くだらん。三流術士が考えそうな事だ」

心底つまらなそうに言い放つレイスに、ビキビキとコメカミを震わせる用心棒の魔術士。どうやら沸点は低いようだと見て取ったレイスは、そこを攻めるべく相手が自信を持っているらしい独自の融合魔術の欠点を指摘した。

「帝国流の風刃魔術の真髄は詠唱の短さと、相打ちになっても斬撃が届く洗練された風刃の精製にある」

その要となる特徴を潰してまで他の術と掛け合わせても詠唱時間と魔力の無駄だと看破する。

「ちっ……流石はフレグンスの貴族か、口だけは鍛えられているようだ。しかし、弁が立つだけでは我が術を打ち破ること叶わぬぞ！」

再び詠唱に入る用心棒の魔術士に、レイスも氷塊を発現させた。それなりの実力を持つ用心棒の魔術士によって丹念に練り込まれた魔力が、はっきりと視認できる程の風塊とその周りに発現する風刃を白く浮かび上がらせる。

そうして放たれた先程のモノより一回りは大きい風刃塊に対し、レイスは氷塊を自身の正面に浮かせたまま魔力を籠め続ける事で盾として使った。攻撃魔術を魔法障壁のように扱う中々に高度な術である。

氷塊の盾に激突した風刃塊は暫らくガリガリと表面を削っていたが穿つには至らず、やがて魔力が尽きて四散した。

「な……っ　砕けないだと！」
「それが三流（おまえ）の限界だ」

レイスは氷塊を構成している魔力を制御して塊を四分割すると、それぞれを鋭い氷柱に変形させた。
この術は構成と制御に大きな隙が出来るので、通常は一対一の戦闘で使えるような術では無いのだが、今は相手が呆けているので敢えて強力且つインパクトのある魅せ技を使う事にしたのだ。

「そして、これが現実だ」

四本の氷柱が白い軌跡を引きながら飛んで行き、用心棒の魔術士を掘っ立て小屋の壁に縫い付けた。もしここに某黒髪の少女がいたなら、まるでミサイルのようだと評していたであろう。

「お、ちゃんと生け捕りにしたな。感心感心」
「隊長……」

そこでハタと我に返るレイス。見渡せば累々と横たわるゴロツキ達の姿。よく考えてみると、周りには十数人の武装した窃盗団構成員がいたのだ。魔術士との戦闘に集中していた為、意識の外に置いていたが、何時詠唱に邪魔が入ってもおかしくない状況だった。
にもかかわらず戦闘中に一度も妨害される事なく、最後に魅せ技を使ったのも安心して戦いに集中出来ていたからだという事に気付く。

「そういえば、支部前で会った春売りが居ましたが――」
「あいつか、後で話を聞きに行かにゃならんな」

この街で一番手を出してはいけない騎士。彼女はアンバッスの事

をそう言っていた。その事について訊ねようかと迷うレイスに、アンバッスはこの窃盗団達の連行に応援を読んで来ると言って歩き出す。

「人手不足じゃなかったんですか？」

「ああ、使える奴は不足していてな」

そういって無骨な笑みを向ける熟年の騎士。お前は使える奴だと言われた気がして、レイスは何だかこそばゆい気分になった。それが久しく感じていなかった認められる事への喜びという実感であった事に気付いたのは、随分後になってからだ。

その後、様々な任務や生活を通じてレイスの凍て付いた心は絆されて行く事になる――

「へぇ～、昔のレイスってそんな感じだったんだぁ」

宮廷魔術士長の執務室にて、フレイの淹れてくれるお茶を飲みながら来客用テーブルで寛ぐ朔耶は、対面に座る正装のアンバッスから昔話など聞いては相槌を打っていた。執務机では居心地悪そうにしているレイスが業務に没頭しようと努力を続けている。

今回、王都で開催される騎士団対抗の御前試合に向けてフレグンスの各騎士団から代表が集っており、辺境騎士団からもエバンスと

クルストスよりそれぞれ選ばれた騎士が王都入りしている。
アンバッスは彼等の隊長として、特に王都に不慣れなクルストス代表の騎士を補佐する目的で出向いて来ていた。

「まあ、サクヤに会う頃には多少丸くなった感はあったがな」
「確かに、思い出してみたら何か初めてガリウス達に会った時みたいな態度だったよね」
「王女の勅令が関わる事件だって事で任務に入れ込んでいたのは見え見えだったしな」
「今から思うとアレって何気に不自然だったよね～」

レイスの朔耶に対する態度に辟易した様子を見せていたアンバッスの事を思い出しては、当時の事を語り合う戦女神と熟年騎士。カタンと音を立ててレイスがテーブルの席につく。仕事に逃げるのは諦めたようだ。苦笑するフレイがすぐさまお茶を用意した。

「仕事はいいのか？」
「隊長が帰ったら取り掛かりますよ」
「あ、今でもアンバッスさんのこと”隊長”って呼ぶんだ？」

面白そうに指摘する朔耶に、レイスはお茶を口にしながら『もう定着してますからね』と言って肩を竦めた。

「そういえばヴィンスさん達も隊長って呼んでたし、アンバッスさんの部下だった人にとってアンバッスさんはずっと隊長なんだね」
「ふん……」

「あ、照れた」
「照れましたね」

先程までの仕返しとばかりに朔耶の突っ込みに同調するレイス。
ソッポを向いて顔を顰めるアンバッス。アマガ村から王都まで旅した頃のような和やかな時間が過ぎていく。

結局、宮廷魔術士長が通常業務に戻れたのは、クルストス代表の騎士が一般区で迷子になった挙句、酒場の傭兵崩れと喧嘩騒ぎを起こしているという知らせを聞いたアンバッスが飛び出して行く夕刻頃であった。

「なんか大変そう。アンバッスさんって問題児ばかり抱えてるよね」
「……それは、僕も含まれているのでしょうね？」

当然。と頷く容赦無い朔耶なのであった。

氷の騎士【外伝】（後書き）

以上、レイスとアンバッスの昔話でした。

王都の御前試合

フレグンス城の庭園で行なわれる騎士団対抗の御前試合。名目上は同じフレグンス王国に仕える騎士達の、交流の一環という形で各騎士団から選出された代表者が武を競い合う。その実、地方に所属する優秀な無名の騎士を王都に取り立てる為の舞台でもあった。

基本的に試合は王国騎士団、王国派遣騎士団、王国辺境騎士団の三大騎士団で行なわれるが、団体戦など一対一で戦う勝ち抜き戦ルールの試合には近衛騎士団や聖騎士団からも参加する。

この日ばかりは特別に城の庭園が開放され、人数制限はあれど一般区に住む人々にも観戦が許されるのだ。ほぼ先着順である為、貴族街への区画門には前日から徹夜組が列を作っていたり、彼等を相手に商売を行なう者などで毎回お祭り騒ぎとなっていた。

「サクヤ」

大学院生に用意されている観覧席へ向かおうとしていた朔耶は、ふいに名前を呼ばれて振り返る。

「あ、レティ……じゃなくてルティ？　――って、ルティがドレス着てる！」

「そこまで驚く事はないだろう。観衆の前で父上や母上、姉上達と

並ぶのだ、わたしも王女らしい格好をせねばならなくてな」

そう言って面倒そうにスカートの裾を抓んでは肩を竦めるルティレイフィア。彼女の耳元でキラリと揺れる深い青色の宝石がついたイヤリングは、実穂とのプチ交易によって世界を渡ってきた品で、ガリウスからのプレゼントだったりする。

レティレスティアと色違いの御揃いドレスで髪もアップにしているせいか、まるで別人のように見えた。

「うーむ、美人さんだ。これはガリウスも一発でメロメロになるね、惚れ直すこと請け合い！」

「そ、そうか……？」

王女様モードなドレス姿の紅獅子（ルティレイフィア）は、少し照れながらはにかんだ表情を見せるのだった。

城のテラスや城壁の上、庭園周りに設置された観覧席にも大勢の見物人がひしめき合い、各騎士団からそれぞれ選ばれた代表者達が整列する試合会場。カイゼル王によって御前試合の開催が宣言されると、観客の歓声と騎士達の気勢が王都の空にこだました。

「朔ちゃん朔ちゃん、こんなの回って来たよ？　これってトトカルチョ？　当たったら賞金でるの？」

「没収」

「あーーんっ　なんでーー！」

「まーったく、誰よ王室主催の御前試合に賭博札とか持ち込んでるのは」

藍香から各騎士団の名前が記された賭け札を取り上げ、ぱっと席を立った朔耶が周りの院生達を見渡すと、何人かあからさまに視線を逸らせたり俯いたり明後日の方を向く者がいた。

「じぃ～～～……」

戦女神の黒い瞳にじぃ～っと見つめられた不良院生達が賭博札の自首提出をしている間、庭園の試合場では最初の種目となる団体戦の舞台が整えられていく。

「いつもそのくらい真面目なら、学院の空気も引き締まりますのにね」

「締めるべき所で締めてれば普段は緩々でいいのよ、疲れるから」

「朔ちゃん、ネイアちゃん、そろそろ始まるよ？」

エルディネイア嬢から飛んでくる何時もの皮肉を軽く受け流しながら、朔耶は藍香の隣に腰を下ろした。

各騎士団の代表者から選ばれた五人がチームを組み、対戦相手のチームと一対一で順番に戦って先に五人全て敗れた方が負けとなる勝ち抜き形式の団体戦。この試合には聖騎士団と近衛騎士団も参加する。

一戦目は辺境騎士団と聖騎士団が対戦。二戦目は王国騎士団と派遣騎士団。一戦目の勝者と二戦目の敗者、二戦目の勝者と近衛騎士団がそれぞれ対戦する事になっており、主に王国騎士団と派遣騎士団の優遇された対戦内容となっていた。

「あ、ガリウスだ。団体戦には出ないみたいだね」
「レイフィア様とご婚約なさった方ですわね。以前はあまり良いお噂を聞かなかったようですけど……」

「むむっ　朔ちゃんを襲った輩か、敗北の呪いを送ってやろう」
「やめなさい……藍も一応あたしの精霊と重なってるんだから」

フルフェイスな騎士の鉄兜を小脇に抱えたガリウスが団体戦に出る騎士達に何やら指示を出している。
元ガリウス小隊のメンバーも揃っており、彼等のうち童顔子犬騎士なフランと、ぽっちゃり癒し系騎士のスラントが団体戦に出場するようだ。この二人は鉄兜を被っていても体格で見分けがついた。
フランは少しバランスが悪そうだ。
ガリウスの隣で鉄兜を肩に引っ掛けているクール系の面長騎士なクランドルは、団体戦の後に行なわれる集団戦に出るらしい。

やがて第一戦目である辺境騎士団と聖騎士団の試合が始まり、武具の打ち合う音が響き渡った。聖騎士団チームには団長のフューリも参加している。試合順や対戦相手からして辺境騎士団は前座的な扱いであり、観衆の関心はもっぱら聖騎士団の綺麗所に集まっていた。

「おお！　辺境騎士団の先鋒が勝ったぞ？」
「珍しいな、毎回三人目くらいまでは聖騎士団の一人目が勝ち抜いてたのに」
「今回はサムズの動乱とかで色々あったからさ、王都から優秀な騎士が向こうに行ってるんじゃないか？」

一般席や学院生席、貴族達の利用する天幕席からも意外の声が上

がり、自分達の試合に備えて舞台の脇に控えている騎士達からも注目を向けられる辺境騎士団の若い騎士。先鋒を務めるその騎士はクルストス支部で実力を買われて代表に抜擢された地元出身の新人騎士である。

盾と片手剣を使うオーソドックスなスタイルだが、中々に繊細で且つアグレッシブな動きを見せるのが特徴的だ。

初戦を勝利で飾って一旦チームメンバーのもとに戻って来た若きホープに、辺境騎士団の代表を引率しているアンバッスが助言を与える。

「サーナ、緒戦からあまり自分の技を見せ過ぎるなよ。直ぐに対処されるぞ」

「そう言われても隊長、彼女達けっこう強いですよー？」

最初から全開で行かなければあの硬い護りは破れないと、サーナは少し曲がってしまった模擬剣を取り換えて手をぶらぶらさせる。

盾の使い方では相手に一日の長があるのだから、何とか護りに付かせないようメイスを振るう腕の方へと回り込み、連撃に持ち込む戦法で押し勝ったのだ。鉄兜の隙間に手拭いを入れて汗を拭きつつ、次の相手にはどう攻めようかと呼吸を整えるサーナ。

「あ～あ、隊長も出ればいいのに」

「歳を考えろ」

この御前試合はフレグンスのこれからを担う若い力が集まり、武を競い合いながら自身の有能さをアピールする為の舞台でもある。自分のような老兵が出張っても場違いなだけだと言って笑うアンバッスに、サーナは納得し兼ねるという表情で溜め息を吐いた。

その後、辺境騎士団と聖騎士団の試合はサーナが聖騎士団チームの副将に敗れてから辺境騎士団チームの四連敗。
何とか辺境騎士団チームの大将が聖騎士団チームの副将を破るも、大将戦となって舞台に上がった聖騎士団長フューリの前に手も足も出せず、辺境騎士団チームの逆転負けとなった。これにより、辺境騎士団は御前試合での団体戦連続最下位記録を更新した。

「あーあー、アンバッスさんのチーム負けちゃったかぁ。サーナさん頑張ったんだけどなぁ」
「大逆転劇で観客が沸いてるね」
「サクヤはあの聖騎士団チームを三人抜きした騎士の事、ご存知ですの？」
「そんなに親しい訳じゃないけどね、アンバッスさんの直弟子みたいな位置にいる人かな」

最初は復讐か何かでアンバッスの命を狙っていたらしいという話に、いったいどんな経緯を辿って今のような立派な騎士にまでなったのかと興味を示したエルディネイア嬢は、サーナが実は女であるという事を教えられ、ますます関心を持ったようだ。
ドーソンが『うわちゃー』という表情を浮かべていた。

第二戦目、王国騎士団と派遣騎士団の試合は先鋒戦から一進一退の攻防が続く白熱した試合となった。
派遣騎士団チームの先鋒は小柄な体躯に身長程もある大剣を扱うフラン・テイル・カルウットが務め、彼は相手の出端を挫かんと先鋒に精鋭部隊の副隊長を起用してきた王国騎士団チームの思惑を見事に粉砕した。
流石に精鋭部隊の副隊長相手には力及ばず敗退したフランだった

が、彼が予想以上の健闘を見せた事で大いに相手を消耗させて次に繋げる事が出来たのだ。先鋒で一気に中堅まで抜くつもりだった王国騎士団チームは、逆に出端を挫かれてしまった。

「フラン君、へとへとになってるなぁ」
「すっごい動き回ってたもんね、あの子」
「な、なんだか女の子みたいに見えますわね」

舞台脇で鉄兜を脱いで座り込んでいるフランに朔耶が労いの声援を送る。キョロキョロと周囲を見渡したフランは、学院生席に朔耶の姿を見つけると、はじける笑顔で立ち上がってぶんぶん手を振った。まだまだ元気が余っていそうだ。

が、朔耶の近くに座っている他の女子院生達に手を振り返されて動きがぎこちなくなった。はじける笑顔の誤爆が起きたらしい。

「朔ちゃん、手振ってあげないの？」
「ん～、面白いから放置で」

「き、君は時々残酷だねぇ」

たらりと額に汗するドーソンに、エルディネイア嬢と藍香もこっそり同意するのだった。

団体戦は午前中に終わり、昼の休憩を挟んだ午後は集団戦が行なわれる。試合に出る騎士達や見物する観衆達も、それぞれ食事をと

りに騎士団施設へ向かうなり街へ下りるなどして一時的に閑散とした庭園では、集団戦に備えて団体戦用の舞台を撤去する作業が進められていた。
朔耶達も学院のサロンで昼食にしようと、皆でブラフニール家の馬車に乗って移動を始めている。

城の敷地内にある騎士団の施設。辺境騎士団に与えられた控え室にて、団体戦で負傷した騎士の具合を診ていたアンバッスは、この怪我で集団戦に出場するのは無理だと告げた。

「今無理をすれば筋を痛めるからな、今回はここまでだ」
「……そうですか」

「隊長、戦女神に頼めばこれくらいの怪我、直ぐに治せるんじゃないですか？」
「サーナ……ちゃんと規定内容くらい把握しておけ。この試合中にサクヤの治癒を受けるのは反則行為にあたる」

朔耶の使う精霊の治癒は怪我も疲労も『そんなモノはなかった』というレベルで癒される為、確かに万全の態勢で戦えるようにはなるものの、個人の力量、実力の程を正確に測る事が難しくなってしまう。
一つの戦いの最初から最後まで、体力の配分、体調管理、負傷の仕方とその処理、勝負の仕掛け所や引き際、それらを総括して優秀な働きの出来る騎士が見出されるのだ。故に、御前試合中に戦女神級の治癒を受ける事は反則と見做される。

「でも、このままじゃ集団戦も最下位になっちゃいますよー」

只でさえ他の騎士団は代表達のレベルも高く、人材も豊富なので団体戦に出る騎士と集団戦に出る騎士が別々に控えていたりするのに対して、人材に乏しい辺境騎士団は集団戦も同じ代表者で戦う。団体戦での疲労に加えて頭数まで欠いた状態では勝ち目など遠退くばかり。

これでは体の良い引き立て役ではないかとサーナは不満を口にする。

「お前、他所の騎士団に勝つ気でいたのか……」

「あったり前じゃないですか！　聞けばアタシら辺境騎士団って王国最弱騎士団だとか左遷騎士団だとか言われてるそうじゃないですか！」

「左遷はともかく最弱って事はなかったんだがなぁ、昔は最前線部隊だった訳で――」

「昔の事はいいんですっ　問題は今ですよ！　アタシが入団した最初の御前試合くらいは総合最下位から抜け出さねば！」

辺境騎士団仕様な男物の甲冑に身を包んで拳を振り上げ主張するサーナ。ようするに自分が勝ちたいダケなんだなというアンバッスの指摘に、サーナは勿論ですと満面の笑みで胸を張った。

「だからね？　隊長――――」

元春売り仕込みの甘えるような笑顔を浮かべ、瞳の奥に獲物を狙うような光を携えたサーナは、一つの提案を持ち掛けた。

試合場の庭園に各騎士団の代表者達が整列を始める頃、観覧席にも食事で席を外していた人々が戻り、辺りは試合前の緊張感や期待を孕んだ喧騒に包まれている。

集団戦は各騎士団からの代表者五名ずつが出場して定められた範囲内で一斉に戦う。一応、所属による敵味方の区別は無く個人戦扱いだが、騎士団毎に纏まって行動するのが定石となっていた。従って、三大騎士団による三つ巴の対抗戦が繰り広げられる事になるのだ。

この試合に出場する騎士達が整列した状態から中央に集まり、王国騎士団、派遣騎士団、辺境騎士団の並びで立ち位置を入れ替えながら全員で円陣を組むと、庭園の戦闘区域ぎりぎりまで広がって配置につく。隣の騎士との距離は凡そ二十メートル。

庭園を一望出来る城のテラスに設けられた王族の観覧席、その壇上に長布付きの槍を持ったカイゼル王が現われた。高く掲げられた槍が円陣の中央に向かって投げ込まれると、観客達のざわめきは歓声に変わる。

長い布をはためかせながら放物線を描いて飛んだ槍が地面に突き立ち、それを合図に試合が開始された。

まずは味方と合流すべく騎士達は一斉に走り出す。事前に決めておいた相手と試合場のほぼ中央付近を目指す者もいれば、狙い目と定めた相手を攻撃に向かう者、最初の位置から動かず全体の動きを観察する者など、一人一人に様々な動きが見られる。

「うわー凄い！　けどっ　朔ちゃん、何処見たらいいのか分かんない！」

「とりあえず応援したい人を見つけて、その人を追ってみるのは？」

「私は先程の団体戦で活躍した辺境騎士団の騎士が気になりますわ」
「僕は元ガリウス小隊の二人かな、さっそく合流したみたいだよ」

ドーソンが指し示した一角では、ガリウスとクランドルが互いの背中を預け合いながら王国騎士団と斬り結んでいる。

片手剣と盾を使う基本に忠実ながら実戦慣れして崩したスタイルのガリウス。元ガリウス小隊の中ではナンバー2の実力者だった長剣を扱うクランドル。今回の集団戦でガリウスが最も警戒する相手は、王国騎士団の代表にいる実兄アウサレスだ。

試合開始直後からガリウスとクランドルの二人が派手に動く事で、王国騎士団と辺境騎士団の注意を引きつけて彼等の態勢が整えられるのを僅かにでも遅らせると、その隙に派遣騎士団の代表残り三人を無事に合流させるという序盤の作戦はほぼ狙い通り進むと思われた。

だが、この御前試合には誰も予想していなかった台風の目ともいえる辺境騎士団の代表、サーナの存在という誤算があった。殆どの騎士が仲間と合流する事を第一に考えて動いている中、サーナは定石を無視して手近な相手に仕掛けていったのだ。

しかも一度斬りかかって相手と対峙したかと思いきや、そのまま最後まで戦わずに次の相手へと標的を変える。それは正規の訓練を受けて来た騎士達にとって、意図の読めない出鱈目な行動に思えた。

サーナの不可思議な動きにより、ガリウスの狙いであった派遣騎士団メンバーの逸早い合流は失敗。もとより王国騎士団も辺境騎士団もほぼバラバラの状態で個別に遊撃戦を行なう混沌とした状態が出来上がってしまった。

仲間との連係を活かして護りを固めながらの対峙であれば、互いに決定打が出せず削り合いとなって戦いも長引き、指揮を執る者の

戦術や戦略の腕も験されるようになるのだが、ここまで乱戦となると個人の資質がモノを言う。臨機応変な対処力による無言の連係。

思わぬ突貫戦法にペースを乱された王国騎士団、派遣騎士団の騎士達だったが、相手の狙いが分かれば対処も難しくは無い。

牽制の一撃、隙あらば討ち取り確定の一太刀を浴びせようかという勢いで仕掛けて来たサーナがそのまま脇を走り去った後、彼女に意識を向けていると別方向から襲ってくる辺境騎士団の代表騎士。そういう作戦かと理解した後は、個々の実力差でもって巻き返しが図られる。

「ちっ　クランドル！　お前は向こうの援護に回れ、おっさんの動きに気をつけろ！」

「一人で大丈夫か？」

「ああ、糞兄貴は俺がやる！」

王国騎士団は残り四名、派遣騎士団が残り三名、辺境騎士団も残り三名という所で、ガリウスは実兄アウサレスと対峙する。一番の強敵を引き受けておく事で、残った仲間の生存率を上げるのだ。

全員がバラバラに戦っている現状、只でさえ手強い王国騎士団にアウサレスの指揮が加われば手が付けられなくなる。ならば、今の状況を有効利用しない手は無い。

「愚か者が、下らん策など弄するから足元を掬われるのだ」

「ぁあ？　てめぇこそ余裕ぶっこいてっとシメるぞこら！」

「ええいチンピラか貴様はっ　品性の欠片も無い愚弟が！」

「うっせえ性悪糞兄貴！　来やがれ、一騎打ちだ！」

罵声と剣戟によるぶつかり合い。アウサレスとガリウスの激しい応酬には他の騎士達もうかつに割り込めない。ジャバール兄弟の派手な一騎打ちは観衆を大いに沸かせた。

王族の観覧席には、ルティレイフィア第二王女様が身を乗り出しながら自身の婚約者とその実兄との戦いぶりを見守る姿が見受けられる。想い人の身を案じている健気な御姫様、と周囲の目には映っていたが、紅獅子（ルティレイフィア）の内心はそんな乙女チックなモノではなく――

『ああっ　そこで下がってどうする！　蹴りを入れろ蹴りを！　片手が空いているだろうがっ　盾でぶん殴ってしまえ！』

――と、いった具合に熱い声援が送られている。声に出さない程度の自重はしているようだが、後ろでアルサレナが溜め息を吐いていた。

最初、特に目立っていたのは攻守の連係を駆使して見事な立ち回りを演じていた派遣騎士団のガリウス、クランドルの二人と、片っ端から攻撃を仕掛けては放置して駆け抜ける事で戦場を引っ掻き回していた辺境騎士団のサーナだった。

とある騎士が注目を集め始めたのは、試合開始直後の混乱を過ぎて暫らく経った頃。ジャバール兄弟の一騎打ちが始まった辺り――

「おい、またあの騎士が一人仕留めたぞ」

「うおっ　何時の間に！」

「次は向こうで一騎打ちしてる騎士のどっちかを狙うか？」

その騎士は他の騎士達が装備しているような雄々しい装飾のついた顔全体を覆うタイプの鉄兜（フルフェイス）ではなく、地味な帽子型兜を装備していた。前大戦の頃に大量生産されて下級騎士達に配布された一世代前の規定装備品である。

派手な動きは一切見せず、常に味方の影や敵方の死角からこっそり近付いては、戦闘中を狙ったり、誰かを倒して油断している相手を確実に倒していく。観衆の間では卑怯ではないのかとか、いやアレこそ熟達した騎士の動きだろうなどの批評が飛び交っている。

特徴的なずんぐりした体躯に、独特の低い構え。何より帽子型兜の中から覗く古傷だらけの武張った顔。

「どうみてもアンバッスさんです、本当にありがとうございました」

「サクヤ？　急になんですの？」

「いや、ちょっと言ってみただけ」

朔耶は時々よくわからない事を口走る。が、異世界の習慣なのだろうと気にしない事にするエルディネイア。派手に駆け回るサーナの動きを追っていた彼女も、アンバッスの老獪な立ち回りには自身の持つ騎士たる者への理想像と相反するモノはあれど、興味を惹かれていた。

「おや？　元ガリウス小隊の彼が仕掛けるみたいだよ」

辺境騎士団の騎士を一人倒し、勝ち鬨を上げた直後にアンバッスの急襲によって倒される派遣騎士団の騎士。そこへ、仲間の援護に駆けつけていたクランドルが猛然と突進する。

彼は以前、カースティアの高級宿にて朔耶がらみの事件でアンバッスに一撃ＫＯを貰った事がある。自分達に非があったとはいえ、

あの時は油断していたからだと彼なりに想う所のあったクランドルは密かに雪辱の機会を願っていた。
今回、王都の御前試合という最高の舞台でようやくそのチャンスが巡ってきた形だ。

「派遣騎士団、元ガリウス小隊所属、クランドル・スティーム！」
「辺境騎士団、エバンス本部所属中隊長、アンバッス・クルトだ」

クランドルの名乗りに応じたアンバッスは、その突進を盾と体捌きで受け流した。

「あの時の借りを返させてもらう」
「……それだけか？　ふん……若いの、ひとつ大事なことを忘れているようだな」

アンバッスの言葉を侮りと取ったのか、眼光を鋭くしたクランドルは得意の長剣を烈火の如く勢いで振るっては攻め立てた。中々に苛烈なクランドルの剣戟を、防御の構えに入ってじっくりと捌いていくアンバッス。観衆達はこちらでも一騎打ちが始まったかと沸き立つ。

「うーむ、あの熟練騎士、防御するだけで手一杯って感じだな」
「混戦での立ち回りは上手かったけど、流石に正面から一対一ならあんなもんなんじゃないか？」

我知り顔で評しあう観覧席の一般大衆達は集団戦も佳境に入った事を悟り、現在まで勝ち残っている各騎士達に注目する。
ジャバール兄弟の一騎打ちが展開されている周囲でアウサレスを援護しようと隙を窺っていた王国騎士団の一人が、サーナに奇襲を受けて倒された事で、王国騎士団、派遣騎士団、辺境騎士団は共に

残り二名となっていた。

そして、激しい打ち合いを続けていたジャバール兄弟の一騎打ちにも遂に決着の時が来る。王国騎士団の中でも王都の精鋭団幹部を務めるアウサレスは、やはりガリウスがコンプレックスを懐(いだ)くだけの才能を持つ。

ほんの僅かな動作と間合いが、二人の戦いの勝敗を分けた。アウサレスの剣を盾で受け流し、防御手段を封じた体勢から斬り込もうと踏み込んだガリウスの足先がちょんと軽く押し返される。激しい攻防の中で正確に甲冑の爪先を爪先に合わせてくるアウサレスの間合い取り。

「！っ」

結果、ガリウスの踏み込み距離が半歩短くなり、渾身の一撃は空を斬った。相手の振るう剣の軌道をコントロールして紙一重の回避を見せたアウサレスが、ガリウスに討ち取り確定の一撃を叩き込む。非常に繊細かつ正確で力強いアウサレスの剣術がそこにあった。

「やられてしまったか……やはりガリウスにはわたしが魔術の手解きをしてやらねばならんか」

息を吐き、少し肩を落として王族の観覧席に背を預けたルティレイフィアは、自らの修める精霊術と魔術を織り込んだ剣術、当時まだ未開地だった頃のアーサリム地方で鍛えた技を、ガリウスにも仕込んでやろうかと腕組みをしてぶつぶつと呟く。

「レイフィア、腕組みまでは眼を瞑りますが、ドレスで足を組むのはお止めなさい」
「！」
アルサレナの叱責にハッとなり、慌てて姿勢を正すルティレイフィア。隣でレティレスティアが笑いを堪えていた。

ガリウスとアウサレスの一騎打ち（兄弟喧嘩）に一段落がついた頃、クランドルとアンバッスの戦いにも決着が訪れた。
「な、ばかな……！」
「だから言ったろう、大事な事を忘れていると」
派遣騎士団最後の一人となったクランドルは、きっちりと防御を固めたアンバッスを攻めあぐねている所へ背後から仕掛けて来たサーナによって討ち取られてしまった。
勝負に水をさされた形で納得が行かず、憤懣（ふんまん）やるかたないといった表情のクランドルに、アンバッスが先程の言葉の意味を教える。
「ちゃんと事前に一騎打ちを申し込んで置かんからそうなる」
「っ……」
集団戦で横槍が入るのは当たり前の事。一騎打ちを申し込まれれば、受けない訳にはいかないのがフレグンスの騎士なのだが、クランドルは名乗り上げはしたものの正式に一騎打ちを申し込んでいた訳ではないのだ。雪辱の機会に目を奪われて冷静さを失っていた。

「……確かに、俺が青かったようだ」
「ふん……暇があればエバンスの本部訓練所にこい、剣の相手ぐらいはしてやる」

討ち取られた事を認めたクランドルは観覧席の近くで待機している仲間の元へと歩き去った。試合場に残ったのは王国騎士団のアウサレスに辺境騎士団のサーナとアンバッス。この時点で、辺境騎士団の騎士が集団戦の優勝候補に残るという初の快挙を成し遂げていた。

「やったあ！　最下位脱出！　という訳で、あの色男仕留めてきます！」
「あ、こらっ　サーナ待て」

勢いに乗るサーナはアンバッスの静止を聞かずアウサレスに挑み掛かった。しょうがない奴だと後を追うアンバッスは、サーナと対峙するアウサレスの背後を狙おうとするも、サーナの攻撃を往なしながら彼女を軸にして円を描くように移動するアウサレスは隙を見せない。

そうこうしている内にアウサレスの間合いの妙に絡めとられたサーナは、健闘及ばずあっさり敗北した。
しかし、ここまで試合を引っ掻き回して勝ち残った強かさと意外性に加え、万年最下位だった辺境騎士団を優勝争いにまで引っ張り上げた牽引力などが称えられて、試合場を退くサーナに観覧席から疎らな拍手が送られた。

これで自分の全ての試合を終えたと、鉄兜を脱いで一息吐いた彼女の姿に会場がどよめく。素顔を晒した事で初めてサーナが女性で

あったと知った観衆が沸き上がった。疎らだった拍手が声援付きの大きなモノに変わったのはご愛嬌か。
なんとも現金な反応に、サーナは肩を竦めて鼻を鳴らした。

御前試合の締め括りを飾る舞台に勝ち残った騎士は、老獪とも言える熟練騎士アンバッスと、才気溢れる若き誂し騎士アウサレス。
試合場の庭園に最終決戦を告げる荘厳な吹奏が響き渡る。

「うーむ、流石アンバッスさん。最後まで勝ち残っちゃったよ」

「うわ～なんかドキドキしてきたっ　朔ちゃんはやっぱりあのおじさん応援するの？」
「おじさんて……まあおじさんだけど。アウサレスさんとアンバッスさんなら、やっぱりアンバッスさんを応援するかな」

「でも、結果は見えているかもしれませんわね……」

朔耶と藍香の会話に、エルディネイアが溜め息混じりでそんな事を言った。そうして試合会場を取り囲むように並ぶ観覧席を見渡す。多くの観衆を含む会場全体の雰囲気からは、既に最終決戦の決着は付いているといった空気が感じられた。

ここは時期王国騎士団の団長を謳われるアウサレスが締めて終わりだろうという予想。
辺境騎士団の、それも中隊長でしかない古い騎士が勝っても華がないだろうし、戦い方を見ていた限りアウサレスに勝てるとも思えない。最後まで勝ち残ったのは集団戦で上手く立ち回った結果だろ

う。それこそ熟練騎士の本領といった所であろう、と。

「一対一では勝負は見えていると思うが、中々面白い対決になったな」

「うむ、今回の御前試合は本当に意外性があって面白かった」

「最後も綺麗に纏まりそうですな」

そんな観衆達の意見や会話が、貴族席や一般大衆席を問わず其処彼処から聞かれる。既に自分達の試合を終えて最終決戦の行方を見守っている各騎士団の騎士達にも、大半が同じような考えや結論に至っているであろう様子が窺えた。

試合場の中央で剣を掲げて向き合い、一騎打ちに挑もうとする二人の騎士。装備の外観からして古い騎士と新しい騎士が対峙する印象的な構図に、会場のざわめきが静まっていく。

「隊長が本気でやれば、あんな優男に負けないのに……」

アウサレスが華麗に勝つ所が期待される。そういった周囲の空気を察すれば、アンバッスはそれを受け入れるだろう事が分かるサーナは悔しげに呟いた。すると、それを聞いた周りの騎士達が苦笑しながら宥めに入る。

「おいおいサーナ、幾らなんでもそりゃ無茶だって。アンバッス隊長が意外に強いってのは俺たちも知ってるけどさ」

「ジャバール家のアウサレス様だぜ？　王都の精鋭団幹部とか、俺たちとは次元が違い過ぎるってもんだ」

「……あーあー、すっかり負け犬根性が染み付いちゃってさ。あん

た達は知らないだけだよっ　アタシャ知ってんだ、隊長は――――」

サーナの剣幕に戸惑う騎士達の間で少しギスギスした雰囲気が漂い始めた時、そんな周囲の空気を軽くぶち破るように響き渡る少女の声。

「アンバッスさーん、頑張ってー」

ええ？　と振り向く件の騎士アンバッスと対峙する騎士アウサレスに、見物組の騎士や観衆達。

「手抜いたら駄目だよ？　ちゃんと本気でやってね」

「お前は……」

にっこり笑顔を乗せて念をおす朔耶に、アンバッスは驚き顔から何時もの顰め面を披露した。戦女神のピンポイントな応援にざわめく試合会場。観衆達の間からは『個人的な知り合いらしい』とか、『サクヤ様はお優しい』等の声が囁かれている。

「サクヤ殿には随分と買われているようですね」

「……どうなんでしょうかね、懐かれてはいるようですが」

皮肉を込めた、しかし嫌味を感じさせない苦笑混じりなアウサレスの問い掛けを、無難に答えて躱しながら肩を竦めて見せるアンバッス。アウサレスとしても、自分の実力には自信があった。ガリウスとの戦いでも決して慢心しない慎重さも持っている。

ここは朔耶に良いところを見せたい。というか、幸運にも例の護送任務で親しくなったのであろう熟年騎士（アンバッス）にちょっと嫉妬もある。

あのアクレイア家の嫡男も護送任務で朔耶と親しくなっていたからこその、何時ぞやの晩餐会でのアレと考えるなら、護送組への雪辱を果たして置きたいという意趣返し的な色気も出てくる。

『これも巡り合わせか、この騎士はアクレイア家嫡男の元上司だという話でもあるしな……』

そんな胸中の思惑を表面には一切出さず、アウサレスは心の奥底でふつふつと闘志を燃やしはじめるのだった。

一方、戦女神殿に『本気』をご所望されたアンバッスは溜め息を吐いて振り返ると、期待の眼差しを向けている部下に呼び掛ける。

「サーナ、剣を貸せ」
「はいっ　隊長」

呼ばれたサーナは嬉しそうに駆け寄り、喜んで自分の剣を預けた。

会場がざわめく。

アンバッス独特の低く構えた態勢に、二本の長剣。騎士の二刀流は珍しい。

「あ、あれは……？」
「アンバッスさんの本気スタイル。あたしもちょっとしか見たことないけどね」

食い入るように見つめるエルディネイアの問いに答えながら、席

に座りなおす朔耶。何時ぞやの模擬戦で朔耶にアドバイスを受けたエルディネイア自身も、細剣の二刀流という珍しいスタイルを確立させようとしているだけに、アンバッスの二刀流には興味津々のようだ。

「その御老体に長剣二本は些かきついのではありませんか？」

そんな言葉を投げ掛けて余裕を繕うアウサレスは、内心、先程までの何処か飄々としていた雰囲気が消えて明らかに纏う空気が違ってきているアンバッスに警戒の念を向けていた。

「まあ、若い頃のようにはいきませんが……門閥家の御子息に戦場の剣をお見せ致しましょう」

覇気。一歩踏み出す動作をしただけのアンバッスに気圧されるアウサレス。僅かに後退った自分の足を信じられない思いで踏ん張らせて軸足に体重を預ける。一気に緊張感が高まる試合会場。

「あれが……、あの騎士の本気なのか？」

困惑する観衆や騎士団関係者達がいる一方で、懐かしそうに眼を細めているのはカイゼル王やランバルト公、ルィバンス伯らを始めとする前大戦時代に戦場を駆け抜けていた猛者たちだった。

「ああ、そういえばいたなぁ」

時々地方の戦場で見掛けていた良い働きをする無名の騎士。二本の長剣を振るう独特の戦闘スタイルからも印象に残っていたのだが、結局召し上げる機会がなかった。売り込みにも来ないし、特に噂も聞かなかったので何処かの戦場で果てたものと思っていたのだ。

「そうか……以前サクヤが信頼の証を与えたいと言っていた騎士が、彼だったのか」

カイゼル王は庭園の試合場に見つけた久しい姿に頬を緩める。是非とも王都の騎士団候補生指導官にでも顧問待遇で呼び寄せたい所だが、辞退されるだろうなぁと、彼の部下達に視線をやった。

「辺境騎士団の予算、少し色をつけてやれるよう財務に声を掛けておくか」

「あなた？　あまり贔屓にすると返って立場を悪くしますよ？」

「分かっているさ」

ちょっとだけ、ちょっとだけと悪戯っぽい笑みを向けるフレグンス国王に、アルサレナ王妃は呆れ半分微笑ましさ半分といった様子で溜め息を吐くのだった。

じりっと、芝生にめり込む足先を這わせて僅かな間合いを見計らう。長剣を正面で水平に構えたアウサレスに対し、片方の剣を無為に、もう片方の剣を真っ直ぐ相手に向けた態勢で徐々に距離を詰めていくアンバッス。互いに相手の出方を窺う膠着した時間。

アウサレスはアンバッスの構えに間合いを読み切れず、安全策を

とって受けの態勢から護りに入っている。まずは攻撃を見てみなければ、どういった性質の剣術なのかを見切れない。どの間合いからどんな軌道を描いて仕掛けて来るのか、一度眼にすれば対処は可能だ。

『交互、同時、囮に誘い、如何なる剣戟も両腕から振るわれる剣である以上、その軌道も間合いとタイミングによって特定の位置に定まる。さあ、戦場の剣とやらを見せて貰おうか』

スッと、誘いの一歩を横に踏み出すアウサレス。アンバッスとの距離は約二歩半といった所で、傍から見れば突き出した剣先を触れ合わせられる程に近く感じるが、有効な攻撃を繰り出せる間合いにはまだ十分に間があった。

いきなり踏み込まれても難なく対処できるであろう絶妙な距離。無理に仕掛ければ、仕掛けた側に致命的な隙が出来るぎりぎりの間合い。ここからどのように詰めていくかで、その後の攻撃傾向を予測する事が出来る。

有効範囲外から一気に踏み込んでくる一撃必殺型か、懐に飛び込んでからの読み合いと手数で勝負する攻略型か。或いはその両方を兼ね備えている万能型か。

『扱う模擬剣は通常の長剣、片手で振るうには少々重い筈……』

通常の片手剣に比べると長剣はその長さ故に素早い切り返しも難しい。アンバッスの剣術に小回りは効かないと睨んだアウサレスは、両方の剣を同時に振るえないよう円を描くように回り込み始めた。その動きを突き出した剣先で追うアンバッス。

回り込む速度を徐々に上げながら更に間合いが詰められて行き、やがて攻撃の間合いを測るかのように剣を突き出しているアンバッ

スを真横の位置に捉えながらアウサレスが仕掛けた。この方向と角度からなら、もう片方の剣は完全にアンバッスの身体の向こうにある。

『迎撃に振るえるは左手の剣一本のみ、その低い態勢からでは後退も間に合うまい』

真横からの急襲ではなく回り込みながらの斬り込みなので、最初の一撃は防げても二撃目、三撃目と背後の死角から迫る攻撃を左手一本で捌き切る事など到底不可能であろう。独特の低い態勢は緊急時の回避性にも疑問が残る。

その姿勢を維持したまま応戦しようとすれば、旋回が間に合わず完全に背後を取られるか、身体が開いて構えとしての機能が破綻する。

「貰った！」

「狙いは悪くない」

結論から言えば、アウサレスがアンバッスの剣術には小回りが効かない事を想定した時点で勝敗が決まっていた。

「――が、正直過ぎだ」

「なっ！」

アンバッスが突き出している左手の剣を左側に見ながら背後へと斬り込んで来たアウサレスに対し、アンバッスは自ら背中を向けつつ踏み出していた左足を軸にして身体を反転させると、引き込んだ右足をそのまま地面へ蹴り付けるように踏み込ませて態勢を完全に

入れ替える。
弧を描いて斬り上がった右手の剣がアウサレスの剣を弾き上げ、がら空きとなった胴に左手の剣が叩き込まれた。

剣を剣として槍のように使うアンバッスの剣術は、全方位からの攻撃に対応する戦場の剣。死角を狙って回り込みながら斬り込んで来るなど、アンバッスからすれば足場が定まっていない分誘い込み易く、寧ろ隙だらけであった。

この日、王都で行なわれた御前試合の結末は、まるで御伽噺にある英雄物語のような展開だったとして人々の記憶に強く焼き付いた。
万年最下位を独走していた辺境騎士団のほぼ無名であった老騎士が、王国騎士団のエリート精鋭を破って優勝を飾るというまさかの大番狂わせに、試合会場を埋め尽くす観衆は大いに沸いたのだった。

後日、エバンスの辺境騎士団本部に戻ったアンバッス大隊長は、王都から騎士団候補生の指導官に誘われたり、公爵家から専属の剣術師範を持ち掛けられるなどしては、辞退の手紙を書く事に忙しい日々を送っていた。

「あ、帝国からも剣術指南役のお誘いがある。どれも高待遇なのに全部断っちゃうの？」
「俺は田舎の小さな街を護りながら静かに余生を過ごす暮らしがしたいんだ。まったく、次から次へと……」

「でもでも、これってアンバッスさんがようやく認められたって事だよね～」
「誰かさんのお陰でなっ」
この煩わしい事態はお前のせいだとばかりに、朔耶の黒髪をわしゃわしゃと混ぜ返すアンバッス。
「ちょっ！　もぉ～っ　さっき梳いたばっかりなのにー！」
「ふん……」
頬を膨らませながら手櫛で髪を直している戦女神と、戦女神にそんな事が出来る熟年騎士とのじゃれ合いを、騎士団本部に詰める周囲の騎士達は羨望の眼差しで見詰めていたそうな。

王都の御前試合（後書き）

おしまい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3543e/

異界の魔術士

2011年9月28日17時56分発行